まんじ

No.123

2012.2.1

まんじ第百二十三号　目次

明治維新とハプスブルグ家……新井　宏…4
誠忠の茶園（十）……太田精一…13
「日本太古史」について（その三）……三戸岡道夫…22
関東管領始末記⑤　落日燃ゆ……千坂精一…36
懐郷記（続）……忠内正之…47
わが愛誦歌（十四）　短歌　三十首……曽根竣作…55
短　歌　行雲流水（三十三）「出羽三山」補遺……石黒修身…65
俳　句　梨の実……勝山道子…70
漢　詩　潮騒録（六七）《漢詩の流れ56・清その五》……鯨游海…72
信濃旅日記……田寺怜葦…76
目耕録（その六）……山本鎭雄…90
二八に帰るすべもなし（七）……伊治哲…98
イドと超自我の谷間で（三）―ある女の不思議な生涯―……鍋屋次郎…103
身代り（後篇）……堀内永人…116

ばあちゃんの脱走　いじめの系譜……幸山周平…123
美春という名前……亜木陽一…131
渡り鳥……吉田忠雄…136
歴史的景観の保存について（I）……漆原直子…138
―旧日光街道・越谷宿の場合―
（司馬雑感二十八）「播磨灘物語」をゆく……山田嘉久…145
性と化粧（三）　坊主の坊主頭（二）……鈴木守…158
陰翳の美学（その八）……外山知…164
口紅（その五）……池原作莉…182
山本勉訳
透明な時間（七）……宅見勝弘…209
ノンキャリで首が長持ちする方法　八重洲通・等々力編・
追伸　―サウダージーより―　その六……中山喬央…218
日本近代文学点描　その七……松下壽男…230
編集後記……松下壽男…231
表　紙……編集子…233
田寺怜葦

明治維新とハプスブルク家

新井　宏

ヨーロッパの美貌を代表するのは、ルイ十五世の愛妾ポンパドゥール侯爵夫人と皇妃エリザベートであろう。

その美貌と知性と才能によって、フランス宮廷に大サロンを形成し、十八世紀のヨーロッパの政治を動かしたポンパドゥール侯爵夫人は、女性の円熟した魅力をその肖像画によってあますところなく伝えている。

一方、ハプスブルク家フランツ・ヨーゼフ一世の皇妃エリザベートは、あまりにも美しく、かえって暖か味に欠け、憂いに包まれた印象を与える。彼女の満たされなかった生涯を暗示しているかのようである。

先日、森実与子さんのご著書『エリザベート・美と旅に生きた彷徨の皇妃』を読んでいて、ちょっとびっくりした。一八七三年（明治六年）六月八日のシェーンブルン宮殿における岩倉遣欧使節団の晩餐会で、岩倉具視がエリザベートの隣に座ったというのである。皇族でも首相でもない岩倉に対しては大サービスである。しかし、久米邦武の『米欧回覧実記』には当日のパレードや謁見については伝えるが、晩餐会の様子は記さない。

もっとも、この年のウィーン万博には「文明国日本」を世界に訴えるため、分不相応な費用をかけて参加し、米国が二つしか獲得できなかった栄誉賞を五つも得ていたのであるから大サービスの素地はあったのかも知れない。

そう言えば二十年ほど前に『オーストリア外交官の明治維新』という本を読んだ記憶がある。あまり知られていないようであるが、明治維新を理解するには絶対に推奨できる書である。

著者ヒューブナー男爵は華麗な外交官生活を終えて、世界周遊に出て一八七一年（明治四年）夏に来日し二ヶ月半ほど滞在している。若い頃はメッテルニヒの腹心で、皇帝フランツ・ヨーゼフ一世の側近、クリミヤ戦争を終結するパリ条約ではオーストリア全権として署名しており、警察大臣も務めた引退外交官である。その頃までの幕末維新期の日本で活躍した英国パークスらの外交官に比べたら超大物であり、文人歴史家としても大著『シクストゥス五世伝』を残している。

この辺で、オーストリアと明治維新の歴史について関連つけておくのも悪くない。そんな気持ちで、調べはじめてみたところ、かなり手応えがある。

明治維新の始まった頃のハプスブルク家は、イタリア統一戦争によりイタリアから追放され、一八六六年に起きた普墺戦争でプロイセンに大敗し、ドイツ盟主の地位をプロイセンに譲り渡し、ベネチヤ地方もイタリアに譲り渡さざるを得なくなっていた。

その結果として、ハプスブルク家は、ドナウ川流域の支配に専念することになり、一八六七年に「オーストリア皇帝」と「ハンガリー国王」を政治的に統合し、軍事・外交および財政を共有する「オーストリア・ハンガリー二重帝国」を作っている。

この年、日本では王政復古の大号令が出され、明治維新が始まる。

皇妃エリザベートこと「シシー」は、姑ゾフィー大公妃との不和などがあって、心身症を患い、公務を避けてウイーンを離れることが多く「彷徨の皇妃」と言われていた。それゆえ、ブタペストに滞在することも多く、マリア・テレジアに似て、ハンガリーの風土や文化を愛するようになり、恵まれた語学の才によって、ハンガリー語にも通じ、反ハプスブルク的なハンガリー人（マジャール人）の心さえつかむほどハンガリーでは人気があった。

オーストリア・ハンガリー帝国の成立に際しても、衰退するハプスブルク家から離脱しようとするハンガリーをくい止めるために奔走し、帝国内にとどまらせた功績者はエリザベートであった。ブタペストには彼女の名をつけたエリザベート橋がある。

岩倉具視が会った頃のエリザベートは、姑ゾフィー大公妃が亡くなった翌年で、ウイーン万博を訪れる各国元首級を迎える公務も、ある程度こなしていた。各国の使節は、万博はそこそこにして、美貌のエリザベートに会うことを楽しみにしていたという。三十五歳、冷たさの中にも、美しさに円熟味を増していた。

もはや昔日の強盛を誇るハプスブルク家ではなかったが、それでも外交面や文化面でウイーンはヨーロッパの中心地であった。そのハプスブルク家が明治維新に全く登場しないはずがない。そんな想いでヒューブナーの『オーストリア外交官の明治維新』を再読する。

ヒューブナーが、引退を機に日本に滞在したのは一八

七一年(明治四年)の七月末から十月初である。それは、ちょうど廃藩置県が断行された時期であった。

引退はしていたが、大物外交官であった経歴から、英国公使館は休暇で不在のパークス公使に代わり、代理公使アダムスらがつきっきりで世話をしている。

まずは、天皇拝謁のために、沢宣嘉(のぶよし)外務卿に会うが、数日後に岩倉具視がその後を継ぐことになり、その後は、岩倉具視にしばしば会っている。その際、折からの「廃藩置県」について突っ込んだ議論をしているし、後の岩倉遣米欧使節団の構想についても話し合っている。また、西郷隆盛や大久保利通、三条実美、そして徳川慶喜にも会っている。

九月十六日、外国民間人としては初めて天皇に拝謁するが、その際にも、太政大臣三条実美以下、岩倉具視、木戸孝允、大隈重信、板垣退助らの政府高官が同席している。いわば、明治維新の主要人物には全員会っているわけである。

ヒューブナーが目にした廃藩置県は、封建組織を一挙に解体する大胆果敢な政策であり、その急進性ゆえに「茫然自失」の内に日本人に受け入れられ、ヨーロッパ人たちも「喝采」を送ったのだと分析している。「茫然自失」であったのは、起死回生の手段として、やむなく改革を断行した当事者さえ同様であったと後世の歴史家たちも言っている。

このように、ヒューブナーの日本観察は、その後の歴史進展を知る我々にとって、的確であり新鮮である。しかも、うれしいのは、随所に見られる文明評論的な日本賛美である。箱根や富士山を訪れ、京都では御所や伏見城を、そして長崎を経て出国するまで、目に映った日常を述べるばかりでなく、建築・彫刻・絵画を論じ、貿易統計に触れるかと思うと、四十七士の物語を詳しく紹介したりしている。

ヒューブナーは宝塚ミュージカル「エリザベート」に敵役で登場しているようであるが、ブリデッキ・ハーマンの『エリザベート』には、彼の日記がたびたび引用されている。そこに見るヒューブナーは、皇帝側近だった経歴によってか、エリザベートに批判的で、ゾフィー大公妃の死に際しては、皮肉を込めて「宮廷の伝統を尊重し、その大切さを理解している皇帝家の成員にとっては、(ゾフィーの死は)皇室にとって大きな損失である」と書いている。この時、ヒューブナーは世界一周から帰国したばかりであるが、肩書きが男爵から伯爵となっている。

ところで、ヒューブナーが来日する前の一八六九年(明治二年)末に、実は、日本はオーストリア・ハンガリー帝国と「不平等条約」を結んでいる。安政五カ国通商条約に便乗された条約であるが、ここで日本側は大変なミス

を犯した。これを主導したのが英国の駐日公使ハリー・パークスである。

パークスは安政五カ国条約で不明確であった規定を整備するためオーストリアに力を貸したのである。しかしそれはもちろんオーストリア・ハンガリー帝国のためではなかった。

この条約は、外国人裁判権、治外法権、極めて低い関税に関する規定を有し、オーストリア・ハンガリー帝国にとっては非常に有利、日本にとって最悪な「修好通商航海条約」であった。その上、それまで日本と条約を締結していた他の全ての列強は、「最恵国約款」に基づき、同じ特権を自動的に手に入れることができたのである。そのため、日本の不平等条約改定問題は、その後、形式的にはこの「修好通商航海条約」の改定に向けられることになる。

当時、「東洋」はオーストリア・ハンガリー帝国にとって抗う事のできない魔力を持つ言葉であった。英・仏・米の強請によってはじまった東洋との交易はスエズ運河の開通によって頂点に達していた。オーストリア・ハンガリー帝国も、経費の安い輸送航路の利用で、この大きな市場への参入を期待していた。

エリザベートをして岩倉具視をもてなしたのも、ウイーン万博の他に、そのような背景も影響したのかも知れない。そしてそこには旧知のヒューブナーの役割もあったのではなかろうか。

次に、オーストリアが登場するのは伊藤博文のスキャンダルである。

歴代首相の中でも、もっとも派手に女性と遊んだ人物はだれかと問われれば文句なしに伊藤博文となるが、このスキャンダルはさすがに彼の政治生命にも影響を及ぼすものであった。

時は鹿鳴館時代の一八八七年(明治二十年)四月、英国公使主催によって、伊藤首相官邸で始まった仮面舞踏会が終わってから一週間位たった頃、東亜新聞は伊藤博文が岩倉具視の娘である戸田氏共(うじたか)伯爵の夫人極子(きわこ)とその晩に何かあったと云うスキャンダルを大々的に報道したのである。場所と時間まで示したかなり詳細な報道を見て、政敵ばかりでなくキリスト教系女学生まで怒りを爆発させた。しかも、戸田伯爵夫妻はその直後、伊藤博文の推薦によりオーストリア公使に抜擢されウイーンに赴任するのである。伊藤博文は当時四十七歳、伯爵夫人は濃艶な姿を誇る三十歳であった。

事実、鹿鳴館時代を代表する戸田極子は、陸奥宗光の夫人亮子と共に、清楚でかつ艶やかで愛くるしく美しい。岩倉具視の娘にしては、側室・まきの方がよほど美しかったのであろう。

一八七〇年（明治三年）、僅か十四歳で旧大垣藩十万石の藩主の戸田氏共に嫁ぐが、夫は欧米に五年間の留学に出てしまい、婚家に置き去られ、舅姑の許で、琴、華道、茶道等の稽古に勤しんでいた。

戸田氏共は、鳥羽・伏見の戦いで旧幕府軍の先鋒として参加したが、この後、家老の小原鉄心の説得を受け、兵を率いて上京帰順し、急転直下、岩倉具視の長男具定の指揮下に入り、東山道鎮撫軍の主力として宇都宮・会津の戦いに参加している。そのため、明治維新の樹立に際して、大垣藩は長州藩・薩摩藩・土佐藩に続いて多くの賞典禄三万石を得ている。

岩倉具視の娘を迎えたのも海外留学に出たのも、そんな背景があったからである。

米国では鉱山学を学び、帰国してからは工部省鉱山局に勤めていたが、一八八二年（明治十五年）に憲法調査のため渡欧する伊藤博文に随行して、外交官への道を進む。

一八八三年（明治十六年）、英国の若き建築家コンドルの設計に成った鹿鳴館では、外国からの賓客や外交官を接待するために、伊藤博文の夫人梅子の指揮により、華族や高官の夫人たちが、洋風を装い、洋酒洋食を饗し、舞踏会を催し、にわか仕立の社交界を形成していた。極子はその美貌と教養から瞬く間に社交界の華となる。

仮面舞踏会の衣装は、伊藤博文がヴェネチヤの貴族、外相の井上馨が三河万歳、山田顕義が吉備真備、渋沢栄一が弁慶、山県有朋が奇兵隊軍監、戸田夫妻は太田道灌と山吹を手向ける賤の娘の衣装であったという。かなり珍奇で涙ぐましい努力であったにちがいない。

スキャンダルの事実関係については諸説あるが、この事件報道の直後、夫の戸田氏共がオーストリア公使の西園寺公望の後任として勅任官二等に昇進したことを根拠に挙げている者もいる。しかし、西園寺公望も戸田氏共も伊藤博文が期待する人材であり、人事的には異例とは言えない。

また、国会図書館には、事件に関する密偵の三島警視総監あての報告が残っているが、これも「噂の集成」の域を出ない。伊藤博文や井上馨の長州閥を追い落としのため、薩派の仕組んだ情報戦であったと見る者が多い。事実、この事件の直後に、黒田清隆内閣が成立している。

しかし、林真理子が『ミカドの淑女（おんな）』で描いたように、伊藤博文は明治の紫式部・華族学校校長「妖婦下田歌子」とも関係があった。開けっ広げにプロの女性とばかり遊んでいたわけではない。

あるいはと思わせるのは、三十年ほど前に出版された極子の孫・徳川元子の著『遠いうた』に、次のようにあるからである。

……好色の名の高かった伊藤博文は、三十歳という女盛りの美しい祖母に目をつけて、仮装舞踏会が

催されたある晩、祖母を一室に誘い、狼藉に及ぼうとしたのでした。祖母は驚いて開いていた窓から飛び降り、はだしのまま庭を駆け抜けて、辻待ちの人力車で逃げ帰ったそうです。この話は醜聞として有名になり、祖母はその生涯大迷惑を蒙りました。

……（千円札の博文の肖像を見る時）、祖母の語った事の真相を信じているだけに、ひとには語れぬ感慨が湧いてきます。

ちなみに、元子の曾祖父の岩倉具視は「五百円札」であった。田安家の徳川伯爵夫人としては、くだけた表現であり、これが極子からの直接の聞き書きであったことを伺わせる。煙のもとはあったのかも知れない。

そして想うのは、使節団副使として、岩倉とともに晩餐会に出席した伊藤博文は、ヨーロッパの美貌・エリザベートをどのように見たのであろうかということだ。

さて、ウイーンに赴任した戸田極子である。当時の公使館は、あまり豊かでは無かったようで、客の饗応の費用に、花瓶などの装飾品を売って間に合わせたこともあるという。四人の子供を連れての赴任であった。

以下は、主としてインターネット「それは音楽より始まった」(http://mydisc.cocolog-nifty.com/) からの引用である。

昭和六十年頃のことであるが、ウィーン楽友協会が所蔵するブラームスの遺品の中に一冊の本が発見された。それはハインリッヒ・フォン・ボクレットによる『日本の民族音楽』で、日本の民謡をピアノ用に編曲した楽譜集である。表紙に「ウィーン駐在日本帝国公使戸田伯爵に謹んで献呈」と印刷されている。

注目すべきことは、この発見された楽譜にブラームス自身が鉛筆で書き込んだメロディーやハーモニーの訂正箇所が多数見られることである。それはブラームスがこの楽譜を、原曲の音と照らし合わせながら、加筆修正を行ったことを示している。

この楽譜集を出版したボクレットは、当時、ピアノ教師としてウイーンの上流階級の間でよく知られた音楽家だった。彼はオーストリア公使の戸田伯爵家子女の教師をしていたといわれるが、そこで彼は日本の伝統音楽に出会うことになったのである。

極子は、幼いころから山田流箏曲をたしなみ、その腕前は折り紙つきであったと伝えられている。極子の演奏する箏の音色を、ボクレットが採譜したことは想像に難くない。「宮様」「ひとつとや」「春雨」「六段」「みだれ」の五曲からなり、出版当時「ウィーン新音楽時報」の書評欄で、絶賛されたという。

よく知られているように、ブラームスは、『ハンガリー舞曲集』や『ドイツ民謡集』などを作って、生涯にわ

たって民族音楽に強い興味を示していた。だから、この『日本の民族音楽』にも強い興味を抱いたものと思われる。

ブラームスが極子の「六段」などを聴いたのは、楽譜集が出版された一八八八年（明治二十一年）から、戸田伯爵夫妻が帰国する一八九〇年（明治二十三年）七月までの間になるが、その頃、ブラームスは晩年になって再び作曲に意欲をもちはじめていた。

ところで「六段」は、昨年六月の「題名のない音楽会」で紹介されたところによると、グレゴリオ聖歌「クレド」に良く似ているという。日本伝統音楽には珍しく純楽器的な演奏で、「主題と五つの変奏曲」とでもよぶべき形式で構成され、十六世紀スペイン風に呼べば「六つのディフェレンシアス」すなわち「六段」である。この「六段」のヨーロッパへの里帰りをブラームスはどのように聴いたのであろうか。

ブラームスと一緒に撮影した戸田夫妻の写真がベルリン国立公文書館に現存している。

そのような関係であろうか、戸田公使はヨハン・シュトラウスを音楽学校の先生として日本に招聘する計画を立てたという。しかし、この計画は成就せず、ブルックナーの弟子ルドルフ・ディットリッヒが招聘され、日本における西洋音楽育成の基礎を築いた。

戸田氏共は後に式部長官を勤める。

ちょうど、戸田夫妻がウイーン公使として滞在していた一八八九年（明治二十二年）、オーストリア皇太子ルドルフがマイヤーリングで情死する事件が起きた。プレイボーイの面を持つルドルフであったが、リベラルな知性が王権神授説に固まる父フランツ・ヨーゼフ皇帝と合わなかったことに遠因があった。それは母エリザベートのウイーン宮廷に向けた批判精神を受け継ぐものでもあったが、ハプスブルク家は後継者を失ってしまった。

そのため、皇帝フランツ・ヨーゼフ一世は弟カール・ルートヴィヒの三人の息子から後継者を選ばざるを得なくなった。しかし、ひとりは平民の娘と結婚していたため除外され、もうひとりは漁色が過ぎて性病にかかり、結局、長男のフランツ・フェルディナンドを皇位継承者として認定した。

しかし、フランツ・フェルディナンドにもチェコ平民の恋人ゾフィー・ホクテがいることが判明し、ウイーン宮廷は二人の結婚に大反対したが、フェルディナンドは、若くもなく美人でもなく、背も高すぎ痩せていたホクテとの愛を貫き通した。結局、皇帝はホクテに皇族としての特権をすべて放棄させた上でやっと結婚を認めた。

このフェルディナンド皇太子が、後にサラエボの町でセルビア民族主義者により暗殺され、オーストリアがセルビアに宣戦布告、第一次世界大戦を引き起こすことになる。

さて、この新たな皇太子フェルディナンドは、一八九三年（明治二十六年）に日本に来て『オーストリア皇太子の日本日記』を残している。

この頃、日本は鹿鳴館時代に始まった不平等条約改定交渉の山場にさしかかっていた。しかも、形式的とはいえ、オーストリア・ハンガリー帝国との修好通商条約こそ、日本が最初に改正を熱望したものであった。そのため、日本政府としては、皇太子の迎入れを絶好の機会と捉え、涙ぐましいほどの努力をしている。それは、その二年前のロシア皇太子襲撃事件（大津事件）の再発は、国としての致命傷となる事情もあった。

フェルディナンドとしては、「お忍び旅行」を希望していたが、日本側にはそれを受け入れる用意がなかった。ただ、岐阜では長良川の鵜飼いをわざわざ見物している。大垣藩主であったウイーンの戸田公使に聴いていたのかも知れない。

フェルディナンド皇太子は、絶頂期を過ぎて崩壊に向かう歴史で現れる人物の典型であった。意志が強く、狷介なところがあり、繊細で尊大でありながら、一方で弱者へのいたわりの目を持ち、趣味に没頭するなど、旧体制の皇帝から疎まれる要素を持っていた。

彼の日本日記は、ヒューフナーに劣らず、鋭い観察に満ちている。大阪の砲兵工廠では、最新鋭の機械により、山砲から要塞砲までが短時間の内に加工され、弾丸も大量生産されている様子を自身の目で確認し、きわめて短時日に日本がヨーロッパ式兵器製造に習熟している事実に驚いている。この砲兵工廠ではボルトガル向けの山砲まで作っていた。

またフェルディナンド皇太子は、好んで観兵式に臨み、日本の近代化がいずれヨーロッパ諸国に脅威になることを予測している。それは翌年の日清戦争から、義和団の乱、日露戦争と続く歴史によって証明される。

横浜では大シーボルトの次男、小シーボルト（フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト）が皇太子の案内をしている。小シーボルトは、この時、オーストリア・ハンガリー帝国の横浜領事代理を務めていた。モースと共に大森貝塚の発掘を手がけたり、外交官の地位の関係で欧州からの王族の日本観光に随行し資料蒐集に関わったりしたことが後のジャポニズムブームの起点にもなったという。

彼は大シーボルトの学術面の才能をよく引き継いでいた。蒐集癖のあるフェルディナンド皇太子にとっては、最高のパートナーであったが、残念ながら横浜には望む物品がなかった。

サラエボに消えたフェルディナンド皇太子は、来日中に蒐集した一万八千点の美術品を持ち帰り、ウイーン民

族学博物館の日本部門を開設している。

ついでながら、この時、オーストリア・ハンガリー帝国の駐日代理大使はボヘミアとハンガリーに跨る広大な領地をもつ伯爵クーデンホーフであった。彼はその前年に来日し、牛込納戸町の公使館近くに住む美少女の青山みつ（光子）を見初め、あっという間に結婚している。これが正式な記録に残る日本の国際結婚の初めであった。

この正式結婚も「日本がもはや野蛮国」ではないことを国際社会に示す良い例となり、不平等条約改定に大きく寄与した。光子は皇帝フランツ・ヨーゼフ一世に拝謁する初めての日本人女性になるが、七人の子供をもうけ夫の死後、膨大な資産を受け継ぐ。

フェルディナンド皇太子来日の翌年、日本は陸奥宗光によって英国を不平等条約改定のテーブルにつかせることに成功し、日清戦争に勝って国際社会に踊りでる。

ここで明治維新が終わる。

誠忠の茶園（十）

太田精一

景昭は、牧之原開墾に生涯を捧げた組頭たちを自宅に招き、これまでの労をねぎらった。いずれも日焼けし、その顔の皺の一つ一つに苦闘の歴史が刻まれている。

酒を酌み交わし懐旧談に耽っている。景昭は、その傍らに、この席に招くことの出来なかった同志たちの幻影を見た。

（刀を鍬に代え入植した土地を去らなければならなかった同志たちは、さぞ無念であったろう。荷美館のような事件がなければもう少し救済の手を差し伸べることが出来たかもしれない）

景昭は、開墾組頭としての役目を十分果たすことが出来たのか、内心忸怩たるものがあった。

招いた客の中に落合正中がいた。

景昭は、落合の顔を見て、荷美館の経理を落合のような人物に任せれば不祥事は、起きなかっただろうと思った。

十七．茶園に託した幕臣の夢

（一）ねぎらいの宴

高重の死は、牧之原開墾士族たちに大きな衝撃を与えた。とはいえ頭の中條景昭は健在で、茶の生産も軌道に乗り、「牧之原茶」は、全国的にも知られるようになった。

その牧之原も紅葉の季節を迎えていた。富士に懸かる雪の冠が、山裾広く降りている。青空を突き抜ける冠雪の富士は、毅然として孤高を貫いている。

明治二十七年の晩秋、高重の死から二年半が過ぎていた。維新による一連の改革が進み、文明開化、富国強兵のスローガンのもとに、社会が大きく変貌し、軍備が強化された。その動きに呼応するかのようにナショナリズムが台頭。東洋の覇権を巡り、日清間で熾烈な戦いが繰り広げられていた。

落合は、武士としての誇りを失わず、ひたすら開墾に励み、その誠実な生き方は、入植者たちの信望を集めていた。

「落合殿、苟美館事件では、大変世話になった。そこもとのような清廉な士がいたからこそ明治政府も金を出したと思う」

「いえ、それは違います。中條さん、大草さんの書面を見て、勝さん、山岡さんが、大久保さんに窮状を誠心誠意訴えたからです」

「あの頃は、西南戦争も終わったばかりだった。旧士族の反乱は新政府にとっても命取りになる。帰農した旧幕臣たちが、牧之原で成功したとなれば、士族の殖産振興を促すことが出来、不平不満も収まると、うまい具合に、勝さん、山岡さんが大久保利通を説得してくれたからであろう」

落合正中は、弘化三年（一八四六）江戸小石川竹原町の旗本の家に生まれた。長兄が早世したので、家督を相続。小普請、講武所奉行支配、精鋭隊、新番組と、常に景昭と行動を共にし、開墾方伍長として二十四歳の時に牧之原に入植している。

幼少の頃から剣、槍、弓、柔、馬、の武術を学び、成人後山岡鉄舟の知己を得て攘夷十七人組の一人として活躍している。

入植後、土地が割り当てられると直ぐ仮小屋を建て、そこに住み、開墾に従事した。ほんの少しの家財道具を持ち込んだだけの清貧洗うような生活であった。

「何もそこまでしなくともよいのに。まるで野戦に出ているようだ」と評する同志たちも少なくなかったという。

「牧之原の開墾者たちは、経営、経理の知識が乏しく窮状を呈している。折角土地を下賜されながら主君に合わせる顔がない」

落合は、開墾が思うように進まないことを嘆くのであった。

苟美館事件の後始末のため、政府に資金援助を求めて上京した際も、旅費は、自費負担している。

「落合殿、そこもとには、これからもずっと牧之原に留まって、この地の発展のために尽くし貰いたい」

「はい。そのつもりです。茶園の経営も何とか目途が立って参りましたので、このまま続けます」

落合は、景昭の他界後も二十年以上牧之原で茶業に専念し、大正六年二月、七十二歳で牧之原の土となった。彼は、近隣の農民からも「牧之原聖人」と崇められた。

翌七年の牧之原開拓入植五十周年記念に、落合正中の徳を讃える落合正中頌彰碑が建立されている。

景昭は、落合の脇に座っている小田信樹に視線を移し、声をかけた。

「ところで小田殿、新政府の仕事を終え、この牧之原に帰って来てくれたことは、喜ばしい限りだ。これからもよろしく頼むよ」

「はい。中條頭取には、何かとご迷惑ばかりお掛けしていますが、開墾の傍ら近所の子供たちに学問を教えています。これからは、百姓といえども学問は大切だと思いますので」

「それは良いことだ。この地の子供たちも学問を身に付け、牧之原だけに留まらず、広く国の役に立つ人物に育ってくれること願っている」

景昭は、共に入植した同志の子弟の中から、牧之原はもとより日本の国を託すことの出来る人物の輩出を期待していた。

信樹の父小田彰信は、幕府きっての開明派で、数々の要職を歴任している。彰信は、幕府勘定組頭、大坂具足奉行、外国奉行支配組頭、を歴任した。蘭学を修め、勝海舟と共に安政二年、オランダから初めて日本に渡来した電信機などの実験もしたという。幕府は、彰信の能力を高く評価し、オランダ文翻訳の新組頭とし、後に御書物奉行の要職に付け、オランダ語辞典の編纂も行わせている。

また、彰信は二宮尊徳とも交流があり、幕府財政改革にも強い関心を示していた。

信樹は、父の感化を受け育った。が、活躍の場が与えられる前に、幕府は瓦解してしまった。明治元年七月、江戸城御留守居番となり、公用人として江戸城明け渡しの残務整理に当り、その後静岡藩で、廃藩置県の事務処理を担当した。そのため、金谷開墾の入植第一陣には加わっていない。

信樹が入植したのは、明治四年のことであった。やや遅れて入植したため、当初の開墾用地割当を受けなかった。彼は、瓜ヶ沢（島田市吹木）に仮住まいし、明治四年四月、関口隆吉の住む月岡村（現菊川市月岡）の近く横地村（現菊川市横地）に住居を移している。その頃に、関口隆吉の開墾地の一部を譲り受けた。

小田信樹は、茶園も拓いたが、教育に特に熱心で、自宅付近に「菜園義塾」という私塾を設け、近隣の農家の子弟を集め、修身や算法を教えた。

その後、明治十一年（一八七八）内務省からの要請により、土地、屋敷をそのままにして出仕。農商務省、鳥取県、島根県、福島県参事などを歴任、明治二十七年、再び横地に戻り地域の発展に尽くした。

その後、小田信樹は、昵懇（じっこん）の間柄であった渋沢栄一に請われ、北海道十勝開墾会社の経営に参画し、耕地三千町歩の土地開発に当っている。

明治四十三年五月、信樹は、東京の病院で永眠した。享年六十七歳。遺体は、遺言により、彼のかつて住んでいた横地の近く常泉寺に葬られた。

牧之原は、信樹にとって片時も忘れることの出来ない故郷であったに違いない。

(二) 品質を高める牧之原茶

牧之原開墾幕臣の中には、精鋭隊士でなかった者もいた。だが、中條景昭は、精鋭隊士でなくても、発足当初から牧之原開墾に加わり、苦楽を共にした同志たちをこの宴に招き、ねぎらった。

その中の一人に森盛鐙(もりもりのぶみ)がいた。彼は、静岡藩が、金谷開墾方を設置し、入植者を募った時から参加している。一町六反余の開墾地を割り当てられ、入植した。

森家は、俸禄百五十俵の旗本で、実父は、栄十郎という小十人組の武士であった。幕末の動乱期に、嫡男盛照が、朝臣となったため、弟の盛鐙が、静岡藩に出仕し、二人扶持を与えられた。

盛鐙は、慶応二年の長州征伐に十八歳で志願参戦した。その殊勝な心掛けを愛でた十四代将軍家茂は、盛鐙に木杯を下賜した。実直で、誠実な人柄は、開墾方同志からも信頼されていた。

明治二年十二月、静岡藩が、幸浦に塩田開発を計画、松岡萬(つもる)が、その責任者に指名された。その塩田開発には、開墾方士族三十一人に加え、新門辰五郎など江戸の火消町人など七十数人が参加している。

この開発に、盛鐙も参加した。だが、事業は失敗し、明治三年の末に解散した。

それ以来、盛鐙は、牧之原牛渕原の開墾地に戻り、開墾に専念して来た。

「森殿、そこもとは精鋭隊の一員でないのに何故、この牧之原開墾事業に参加し、他の入植者も羨むほどの成果を上げることができたのかね」

「それは、武士の時代がすでに終わったと思ったからです。長州征伐に参加した時、長州の奇兵隊に散々な目にあいました。百姓風情が生意気に、と思いましたが、あの火力と団結力には、かないません。武士は、一人一人個々の戦いには、優れていますが、集団となるとまとまりがない。百姓は、それとは逆です。しかも隊列を組んで、鉄砲を撃ちかけてくるので、接近戦になる前に倒されてしまい、刀を有効に使うことも出来ませんでした。長州との戦いで弱いものでも団結すれば想像以上の強さを発揮することを知りました」

「そうか。それで、かつて幕臣であった者同士が、お互いに助け合って開墾作業行うこの牧之原に入植する気になったのだな」

「そうです。だが、それだけではありません。これからの時代は、物を生み出す仕事が大切かと考えたからです。たとえ今貧しくとも田畑を耕し、作物を育てれば、やがて実りをもたらし、その作物を口にすることも、金に替えることも出来ます。自分の手で豊かな生活の道を切り開くことが出来ると考えたからです」

「良い考えをお持ちのようだ。聞くところによると、そこもとの茶園は、素晴らしい出来栄えで、どんどん土地も増えているというではないか。どのようにして増やしているのだね」

「それは、付近の百姓衆の手を借りることです。自分たちだけでは、どんなに一所懸命開墾しても、たかが知れています。付近の百姓衆で手の空いた人を雇って開墾して貰うことにしたのです」

「だが、それだけでは、なかなか開墾は、進まないと思うがのう」

景昭は、自分の開墾地と比較してみた。

「はい。これまでのやり方に加えて、共同作業の方法を取り入れてみました。たとえば十人の百姓を雇った場合、十人が共同で作業すれば、一日百坪の開墾を行うことは可能です。一人当たりにすれば一日十坪の開墾です。共同作業は、能率の上がるもので、一人で行えば、五坪ほどしか開墾出来ませんが、共同で行うと作業能率も向上し、十坪の開墾も可能となります」

「なるほど。そうした方法で開墾地を広げることが出来たのか。しかし、百姓だけに任せておくわけには行くまい。日当で雇われていると思えば、つい怠けぐせが出て来よう」

「はい。その通りです。ですから私は、自ら鍬を振るって、彼等とともに働きました。そして、開墾した土地には、開墾に最も功績のあった人の名を地名として付けることにしたのです。ただ、私の与えられた土地が、開墾しやすい土地であったことも幸いしたようです」

「牧之原の開墾を道半ばで去って行った旧幕臣たちの多い中で、よく耐えてこのような立派な茶園を仕上げた。その功績はまことに大きい。これからもこの土地の発展のために尽くして頂きたい」

盛鐙は、景昭の言葉に思わず目頭が熱くなった。精鋭隊の仲間でもないのに、分け隔てなく接してくれる景昭の懐の深さに感激したのである。

だが、これまでの過労が知らず知らずのうちに盛鐙の体を蝕んでいた。この景昭のねぎらいの言葉を受けた一年後に旅立った。

四十七歳の短い生涯であった。盛鐙は、その後半生を牧之原の開墾に捧げ、原野を日本一の茶園にした功労者の一人である。

盛鐙の子孫は、五代にわたって連綿と続いている。現在も三町歩近い茶園を経営しているという。

多くの入植士族が、離散した中で牧之原に残り、茶農家として成功している数少ない名家の一つである。

景昭は、盛鐙との話を、徳利を手に持ってじっと聞いている一人の若者がいることに気付いた。若者は、景昭

と盛鐙との会話が、途切れるのを待ちかねように景昭に近づいてきた。

内田忠正である。

「いつもお世話になっております。中條頭取、まず一献」

内田忠正は、景昭の差し出す盃に手に持った徳利を傾けた。

「どうかね内田殿。茶の品質向上の教育は進んでいるかね。牧之原の茶も早く日本一の品質だと認められるようになりたいものだ」

「はい。まだそこまではまいりませんが、優秀な製茶教師を招いてその技術を若者に習得させておりますので、そのうち最高級品として世に認められる品質の茶を生み出すことが出来るものと思います」

内田忠正は、金谷開墾方御雇伍長という資格で入植した。明治二年五月に、大沢原に一町七反あまりの土地の割当を受け、開墾を始めたのである。

彼は、明治六年に他の入植士族と共に製茶の輸出を試みた。しかし、製茶技術が未熟であったため、良品としての扱いを受けられなかった。そこで内田は、牧之原に製茶教師を招き、自宅で組合員の製茶品評会を行って、良品の育成に努めたのである。

また、明治二十二年には、榛原、小笠郡茶業組合と協業して製茶教師を招き、品質向上技術の教えを乞うている。さらに、再製事業にも手を染め、ここでもその技術を持つ人物を招き、その習得には、牧之原の近隣茶業者にも公開している。

内田は、景昭他界後も牧之原茶の品質向上に努力し、静岡県茶園品評会から表彰を受けた。

大正十四年八十八歳の高齢でこの世を去った。大沢原の墓に、妻の幸と共に眠っている。

開墾士族の中では、経営感覚に優れ、森盛鐙と共に牧之原の茶園の隆盛に貢献した人物の一人であった。

(二) 沃野に眠る

大草高重が、逝って四年目の冬を迎えた。静岡藩金谷原開墾方として旧幕臣たちが入植してすでに二十七年余りとなる。

茶園は、年々拡がり、生産量も増加、日本有数の茶処となった。「牧之原茶」の銘柄は、全国的にも知られるようになったのである。

荒地として放置されて来た牧之原台地は、入植者の血と汗によって沃野に変わりつつあった。

だが、入植した多くの同志が倒れ、離散し、最早開拓当初の歴史を語る者も少なくなった。その上、父祖の事業を継ぎ、牧之原に留まって茶業を営む子孫も年々減って来ている。

景昭は、じっと孤独をかみしめ、広い屋敷内を眺めていた。寒風が木々を揺らし、風花が舞い始めた。

(入植した朋輩たちやその子供たちは少なくなったが、茶園は立派に残った)

景昭は、旧幕臣たちが、血と汗によって開墾し、育て上げた茶園が、人手に渡って行く有様をつぶさに見て来た。

だが、茶園そのものは、大きく育っている。

(牧之原の茶園は、それがし幕臣たちが始めたが、それを近隣の百姓たちが引き継いで大きく育て、この地方を豊かな茶処にしてくれた。それで良かったのかもしれない。そんな中にあって、大草さんの子供たちは、彼の意志を継いで立派に茶園を経営している。羨ましい限りだ。わが中條家は、大草さんのようなわけには行かなかった。しかし、それがしは、大草さんとの誓いを守って、この牧之原に骨を埋めることにする)

景昭は、衰退する徳川家に忠誠を尽くし、武士としての誇りを貫き通した生涯を振り返った。

文政十年(一八二七)六月一九日、中條景昭は、旗本中條家の七代目市衛門の次子(庶子)として江戸六番町(現千代田区六番町)で産まれた。江戸文化が爛熟していた時期である。

実父市衛門は、中條家四代目の当主であった。市衛門は、先妻の子で嫡子の六三郎景寿に、家督を譲り、隠居した。だが、その景寿が、天保十一年(一八四〇)三月急死したため、その子の作一郎景忠が、家督を継いで六代目となった。景忠は、若干十二歳で、急遽元服し、中條家の当主となったのである。

しかし、景忠も病弱で、夭折してしまったため、叔父の金之助景昭が家督を継ぐことになった。景昭は、市衛門の次男で庶子であったため、中條家の家督には、縁の薄い存在であった。

事態が、変わったのは、弘化三年(一八四六)のことである。

景昭は、景忠の死によって、はからずも中條家の七代目の当主になったのである。二十一歳の血気盛んな青年期を迎え、武術に打ち込んでいた頃であった。

景昭は、幼少の頃から伊庭道場に入門、大内六左衛門のもとで剣技を学び、「心形刀流」の免許皆伝となった。同時に、師範に抜擢され、達人とまで言われた。また、柔術にも優れていた。

実母のます女は、直参旗本加藤光直の娘で、文政九年(一八二六)十八歳の時に、景昭の実父中條市衛門の後妻となっている。金之助景昭の他に四人の男子を設けている。そのうち二人は夭逝したが、景昭は、残る二人の弟と共に牧之原開墾に当った。

ペリー来航の翌々年安政二年(一八五五)四月、景昭は、講武所剣術世話係心得。万延元年(一八六〇)柔術世話係心得。文久元年(一八六一)幕府奥詰。同二年剣術教授師範方、同小納戸役。文久三年(一八六三)浪士取締。同五

年、新徴組支配を歴任したが、慶応二年には、お役御免、俸禄返上となった。

しかし、風雲急を告げた慶応四年正月には、御留守居支配組頭、同年（明治元年）九月には、新番組組頭となっている。徳川家が駿府に移った明治二年には、金谷原（牧之原）に入植した。

景昭の弟拾三郎は、母の実家加藤家を継ぎ、加藤光正と名乗り、実兄景昭の率いる精鋭隊の取締役として参加、その後も景昭と行動を共にし、牧之原に入植している。

また、末弟の鈕之助は、旗本幕府奥詰銃隊の山本小三郎の嗣子となり、名を七郎忠敬と改め、兄景昭と共に牧之原に入植している。

景昭が、牧之原に入植した時は、四十二歳。人生で最も充実した時期であった。景昭の嗣子克太郎は、父の剣法「心形刀流」を学び、後に山岡鉄舟の「一刀正法無刀流」を継承している。静岡に出た後、剣道師範として四国に赴任。茶園は継がなかった。

明治八年、景昭は、新政府から神奈川県令として任官することを要請されたが、固辞している。この要請は、山岡鉄舟が使者に立った。だが、景昭は、薩長出身者の跋扈する政府に興味はないとして断った。

景昭は、明治二十九年一月十九日、牧之原一番地の自宅で永眠した。享年七十歳。法名「常純院殿中穆号昭大居士」。

島田市阪本の地、福山種月院の裏山に葬られた。その裏山には、牧之原開墾に従事した中條家ゆかりの旧幕臣たちの墓が一箇所に集められている。

葬儀は、種月院で厳粛に行われた。盟友勝海舟が、自ら葬儀委員長を務めた。

海舟は、景昭を偲んで短歌を揮毫している。

「君が為　まめなるこころひとすじに　加辺り見なさで果てしますら雄」

墓石東面に刻まれたこの歌は、誠忠の志を後世に伝えている。

中條景昭は、明治という時代を通して、終生官途に就くことはなかった。ただひたすら牧之原開墾に半生を捧げたのである。髷も下ろさず、刀も差したまま、武士としての誇りを持ち続けて、自分の生き方を貫き通した。

「それがしは、この牧之原に骨を埋め、茶の肥やしになる」と広言してはばからなかった。

日清戦争は、日本の勝利で終結した。

下関条約を締結後、清国に植民地的野心を持つ露、仏、独の三国干渉によって、遼東半島を清国へ返還した政府の弱腰外交を非難する声が、巷に漲っていた。攘夷から武力を背景とした対外進出の積極化に、日本は大きく舵を切っていたのである。

幾多の旧幕臣たちの埋まっている牧之原は、日本が武士の時代から市民社会の時代へと移る過渡期の歴史を留めている。

緑の茶園は、その武士の血と汗の結晶として誕生し、変貌を遂げ発展して来たのである。

だが、広大な台地は、まだ開発の余地を残し、既設の空港と共に新時代を切り開く、第二、第三の中條景昭、大草高重の出現を待っている。

（完）

（お詫びと訂正）

１２２号の誠忠の茶園の記述内容に誤りがありましたので、謹んでお詫び訂正申し上げます。

３３ページ上段後ろから９行目「元治元年、今井は京都守護職の下に設置された京都見廻組に参加した。」を「元治元年、京都守護職の下に設置された京都見廻組に、三年後の慶応三年、今井は参加している」と。また、同３３ページ上段後ろから６行目「隊長は佐々木唯三郎。今井はこの佐々木とともに四人で、新撰組の前身浪士隊の隊長清河八郎を亡き者としている」を「隊長は佐々木唯三郎。佐々木は、速水又四郎などと共に新撰組の前身浪士隊の隊長清河八郎を亡き者としている」と訂正いたします。

さらに、３４ページ上段７行目「明治二十九年」とありますが「明治三十九年」同８行目「坂本村二五〇番地」を「坂本村二六〇番地」と改めさせて頂きます。

訂正箇所が多く大変ご迷惑をお掛けしました。謹んでお詫び申し上げます。

「日本太古史」について（その三）

三戸岡道夫

木村鷹太郎の「日本太古史」は上下二巻、総ページ一七二六ページに及ぶ、巨大にして偉大な奇本であるので、簡単にその内容を説明することは到底不可能である。しかしその要点をダイジェストすれば、およそ次のようになるのではないかと思われる。

第一章　日本の神話、言語、文字

（一）日本神話は、ギリシャ、ラテン、エジプト、ユダヤの神話の系統に属する。

日本神話は、ギリシャ、ラテン、エジプト、ユダヤの神話の系統に属する。

たとえば、伊邪那岐尊（いざなぎのみこと）はギリシャ神話のゼウスであり、その黄泉（よみ）（あの世）行きの神話は、オルフェウスおよびオデュッセウスの黄泉（よみ）行きと同じである。

須佐之男尊（すさのおのみこと）はギリシャ神話では、ペルセウスとして伝わっている。ペルセウスとは、ペルシャの名前と同じであり、須佐之男尊は古代ペルシャの首府であったスサの名前である。神の名前が、国の名前になったのである。

須佐之男尊とペルセウスとは同一神であるが、それが別々の神話になったのである。その大蛇を斬る神話も、女子を救う神話も、宝剣を得る神話も同じで、両神話は元は同一の神話なのである。さらに須佐之男尊には、ペルセウスに加えて、ヘラクレス神話も合体していると思われる。

同様にして、天照大御神（あまてらすおおみかみ）はギリシャ神話の女神アテナである。大国主神（おおくにぬしのかみ）は、聖書のヨセフに、ダビデ、ヨナタン、サムソンなどの神話を混合したものである。

日本武尊（やまとたけるのみこと）はギリシャ神話のアポロンである。

（二）言語の比較研究

日本語は主としてギリシャ語の系統であり、それにラテン語、チュトン語（ゲルマン語）が混っている。

日本太古史には、日本語とギリシャ語、ラテン語、英語、ドイツ語の対照表が十ページにわたって記載されているが、そのうち英語の部分を若干記してみると、次のようである。

イウベ（夕）＝イヴ
カゴ（籠）＝カゲ（ケージ）
キミ（君）＝キング
クダ（管）＝グッタ（側溝）
シオ（塩）＝シオ
ソロリ（徐々）＝スローリイ
ダメ（不良）＝ダメージ
ドロ（泥）＝ドロス
ナンボ（何程）＝ナンバー
ホネ（骨）＝ボネ（ボーン）
ミ（身）＝ミィ
ユリ（百合）＝リリー

日本神話の名前も、ギリシャ語、ラテン語に由来する。

古事記の冒頭の「神世七代。天に七組の神々が生まれる部分」は、聖書の「創世記」、および「ヨハネ福音書」の、天地創造の物語と同一である。これは古事記があきらかに、ユダヤ教やキリスト教の先在的材料であったことを示している。

ただ、古事記では七組の神々が生まれ、創世記では六日間で世界が創造され、一日合わないが、これはユダヤ教のまちがいである。

○国常立神（クニノトコタチ）＝ヘルメス＝光明の神＝創世第一日（光あれ）
○豊雲野神（トヨクモ）＝雲、交通の神
○宇比智迩神（ウヒヂニ）、須比智迩神（スヒヂニ）＝天上・天下の水＝創世第二日
○角材神（ツノグヒ）、活材神（イクグヒ）＝生産、妊娠、種子の神＝創世第三日＝植物の発生
○意富斗能地神（オホトノヂ）、大斗乃弁神（オホトノベ）＝年、自生の神＝創世第四日＝年の創造
○淤母陀流神（オモダル）、阿夜橿木神（アヤカシキ）＝水、樹木、天上の神＝創世第五日＝動物の発生
○伊邪那岐神（イザナギ）、伊邪那美神（イザナミ）＝男女＝創世第六日＝アダム、イブの創造

以上のように、日本語のすべては主としてギリシャ、ローマ語であり、決して、南洋、アイヌ、蒙古、朝鮮などに、日本語の語源を求めるべきではないのである。

日本人のような優秀な民族は、もしこれを他と比較するとすれば、古来世界において最も優秀な民族であり、また優秀な文明の創始者であった民族に比較するのが当然である。したがって、ギリシャ、エジプトなどの古代民族や、世界文明の創始者と比較するのが、もっとも妥

当なのである。

（三）日本文字（カタカナとアルハベット）

神代文字は、日本に漢字が伝わる以前に使われていたとされている、日本固有の古代文字である。しかし学問的には、その実在性は否定されている。しかし実は神代文字は存在したのであって、それはヘブライ文字、ギリシャ文字、フェニキア文字などのことである。

カタカナはこれら神代文字から出来たものであって、漢字から出来たというのは、旧派無学者派の説である。逆にカタカナから出来た漢字は多いし、中国語の中には、日本語の発音をもって組み立てたものも多い。

（四）日本太古史の地理的研究

古事記や日本書紀に書かれている歴史、地理は、極東にある現在の島国日本の歴史、地理ではない。それは日本人の祖先が日本列島に来る以前の、全アフリカからヨーロッパ、トルコ、アラビア、インド、チベット、中国にいたる、古代世界の全部を含んだ、歴史、地理なのである。

現在の島国日本は、その後、いずれかの時代において、それら大世界を島国に、縮密して移写したものである。

たとえば古事記の、

（天地初発の時、高天原に成りませる神は…、次に国稚く、浮脂の如くにして、海月なす漂えるときに、葦芽の如く萌騰がれるもの……）

という一節には、小アジアの地名が読みこまれている。

初発は、ヒット人国（ヒッタイト、前十九～十三世紀頃、アジアにあった国）であり、高天原は、アーメニヤ（アルメニア）であり、浮脂は、パフラゴニア（小アジアの黒海沿岸の古代地名）であり、

海月なすは、カッパドキア（小アジア東部高原地帯の古代地名）（くらげの如き、の意味）であり、

漂えるは、ポントス（小アジアの黒海沿岸の古代地名）（漂うの意味）であり、

萌騰がれるは、モエシ人国で、地図にはミシとある（バルカン半島にあったローマ帝国の属州であったモエシアのことか？）。

イザナギとイザナミの夫婦神が、次々と自分たちの子供である日本の島々や神々を産む、国生み、神生み、に出てくる地名は、中央アジア以西、地中海沿岸の都市である。たとえば、

○水蛭子（イザナギとイザナミの間に最初に生まれた流産児）は、エジプトの別名である、ヘリコンである。

○淡島（阿波地方？）は、アフリカである。アフラは泡である。

○淡路の穂之狭別（淡路島）は、ホヒニシヤ（フェニキア）である。

○伊予の二名島（四国）は、イオニアである。

○筑紫（九州）は、デュクシである。西方、月の意味で、ギリシャである。

○大倭、豊秋津島（本州）は、イタリア、ギリシア、ドナウ河一帯である。古代はヤワンといった。語源はヤマである。

○姫島（大分県の姫島か？）は、サルジニア島である。別名のイベリは姫の意味である。

○知訶島（長崎県五島列島）は、コルシカ島である。鹿島である。

第二章　天孫降臨と天業恢弘

（一）天孫降臨の準備―出雲

イザナギ、イザナミの神は、三人の子供を産み、その三人の子供は、それぞれ領地を与えられた。

天照大御神は天（アジア）を、

月読命は夜の世界（ヨーロッパ）を、

須佐之男尊は海原（地中海）とアフリカ、

以上である。

しかし須佐之男尊は自分の国を捨てて、母イザナミの国である、東方へと行った。その子孫の大国主命は、出雲を領地とした。

出雲とは、アジアとアフリカの中間の地帯で、エドムである（死海とアカバ湾の間にあった古代王国である）。

大国主命は旧約聖書の、ヨセフ、およびダビデである。しかし大国主命の活動範囲はエドムだけでなく、中央アジアやチベット、インドなどにも及んでいる。

（二）天孫降臨（アルメニヤよりギリシャおよびアフリカへ）

天照大御神はアルメニアに住んでいた。

その子供の忍穂耳命は、ギリシャ語でオシオ・オムニミ（神聖・祝福）を意味する。また、忍穂耳命は、釈迦牟尼と同一人物である。釈迦はラテン語でサカ（神聖）、ムニはムニミが訛ったもので、同一の名前だからである。

忍穂耳命の子供である彦番能邇々芸命が、アルメニアから南下して、ギリシャのテッサリア、フチホ地方のオートリ山に来た。フチホは高千穂である。

これが天孫降臨である。

彦番能邇々芸命は、降臨の地から、東北の鹿葦津姫（別名を木之花咲耶姫）の国に行った。この旅のルート

は、使徒パウロの伝道旅行のルートと同じである。つまり、パウロの話は、この神話の改作なのである。彦番能邇々芸命は木之花咲耶姫と結婚して、カルタゴに移り住んだ。

その子供の彦火々出見尊（山幸彦）は、カルタゴで生まれた。

さらにその子供の鵜葺草葺不合命は、ギリシア語でウ・ガヤ・フォーキス（天地支持者）を意味する。すなわちギリシャ神話の、アトラスである。

鵜葺草葺不合命はモロッコを支配した。モロッコにはアトラス山脈があるから、アトラスの国であることがわかる。

また鵜葺草葺不合命は、中国の神話の庖犧氏（伏犧ともいう。中国の伝説上の皇帝）とも、同一人物である。中国史もまた、極東だけの中国の歴史ではなく、西方の歴史を東洋へ持ってきたものである。

（三）神武天皇の世界統一

鵜葺草葺不合命の子供の神武天皇は、アフリカの西の果て、ヒスペリアに住んだ。現在のセネガルである。

セネガルのセネは「正」、ガルはギリシャ語のガラ（乳、養う）である。したがって神武天皇の勅語の文中にある「正を養う」は、この国のことを指している。

神武天皇は世界統一を志し、世界平和運動を推進した。

したがって現在島国の日本には、神武天皇の遺跡はないのである。神武天皇は世界的大天皇であって、その史蹟は世界的舞台だったからである。そしてこの世界的大舞台において、全世界の徳光的統一、人類平和の日本の国是が、定まるのであった。

（四）神武東征より崇神天皇に至る

神武天皇はアフリカを出発し、地中海を航海して、マルタ島に到着し、案内人の珍彦と出会った。

マルタ海の周辺を、ギリシャ神話では渦（カリプラ）の海とよび、古事記ではそれを甲斐弁羅（カイベラ）神といっている。（カリプラとはカリュブデイスのことで、ギリシャ神話で、シチリア島のメッシナ海峡に棲む、渦の魔物のことである）。

それから神武天皇は北ギリシアの西方、アカル・ナニヤに着いた。ここが難波である。

神武天皇はそこからギリシアに上陸し、その地で日本を建国した。

ドーリス国、すなわち「剣奉献国」では、高倉下の剣を神武天皇に奉献する者がいた。高倉下はヘラクレス族の別名である。

また神武天皇の宮、橿原宮は、テッサリアのクランノ

ンである。

神武天皇の東征は、ギリシア史上「ヘラクレス神族の帰国」、あるいはトリヤン（ドーリス）民族の帰国とよばれるものである。これは前十二～十一世紀に、ヘラクレスの子孫を自称する北方のドーリス人が、ギリシャに侵入した事件である。これによってミケーネ文明を滅亡させた。

（五）羅馬建国者稲氷命、およびピラミッド王・三毛入野命

神武天皇には三人の兄がいた。そのうちの五瀬命は東征中に戦死したが、稲氷命はイタリアの王となり、三毛入野命はエジプトの王となった。

イナヒは新羅の先祖であるが、新羅はイタリア南部の地名シラキのことである。

ヨーロッパの伝説では、イナヒ（トロイ戦争の勇者）が、ローマ帝国の建設者となっている。

ウェルギリウスの「イナヒ伝」には、イナヒ王のイウレ彦が登場するが、これは磐余彦（神武天皇の別名）のことである。

エジプト王となった三毛入野命は、ギザの三代ピラミッドのうち、最小のピラミッドを建設した。

第三章　天教の世界宣伝（一）

（一）崇神天皇の大教世界宣伝

崇神天皇（第十代）の名は御間城入彦である。万物生成の神である。また文明、教化、友愛、平和の神、酒神バッカスである。

崇神天皇は世界各地を王化するために、世界各地に宣教師を派遣した。晩年には、ギリシアからアラビアに移っている。

御間城入彦の間城は、ギリシア語でマキ（栄え）の意味であり、これはメッカの語源でもある。

また、当時日本の属国であった任那は、マケドニアである。マケドニアとはマキ・ドネー（マキの名を負う国）を意味し、ミマナはバッカスの別名ミマロナに由来する。アレクサンドロス大王がアテナ（アマテラス）を祭ったのは、彼が日本人の子孫だったからである。

崇神天皇の皇子の豊城命のトヨキは、ギリシア語で剣を意味するトウキである。彼の領地は後に、ツルキ（トルコ）人の国となった。また、ツルキの国、ツルキスタン（トルキスタン）（中央アジア）を作った。

古代にはトルキスタンを、スキティア（スキタイ、南ロシア）と呼んだが、これは鍬の国の意味で、その妹の豊鍬入姫命に由来するのである。

（二）天文学者ヒパコ及びアリシタルコスが、日本へ来る

垂仁天皇（第十一代）は都をエジプトに移した。

この時代に、天日矛という人物が来たが、これは天文学者のヒパコである（ヒッパルコス、紀元前二世紀）。

天日矛の持ってきたという宝玉は、星座図である。また、これより前に、宇斯岐、阿利叱智、干岐という人物が来たが、これもやはり天文学者のアリシタルコスである（アリスタルコス。紀元前三世紀。地動説を唱えた）。

（三）狭穂姫と本牟知別王―西王母とマホメット

垂仁天皇の皇后である狭穂姫は、聖書のシヴァの女王であり、サハラ砂漠の語源であり、中国神話の西王母である。

そして桃太郎として知られる、その子供の本牟知別王は、マホメットである（ムハンマド、五七〇年頃）。

さらに、この王の伝説はイギリスに伝わって、シェイクスピアの「ハムレット」になった。「ハムレット」には、この他に「道成寺」なども混っており、材料も地理も、みな東洋にあるのである。さらに、バイロンの「海賊」の主人公も同一人物である。

（四）皇化のアジア発展（日本武尊）

景行天皇（第十二代）は、日向の日代宮に移ったが、これはエジプトのヘリオポリスである（エジプトの古代都市オンのギリシア名である）。

景行天皇の皇子の日本武尊は、アジア全土を正服した。碓氷峠は、アッシリアのザクロ山であり、この峠から東が「あずま」である。

またチベットは、日高見国と呼ばれた。

膽吹山はカラコルム山脈である。

日本武尊はアポロンである。アポロンの別名はタケルという。どちらも琴や弓矢の神である。アポロンの妃や皇子の名は、ヤマトタケルと同じである。

また日本武尊はインド神話のインドラでもある。インドラは、ギリシア語のアンドラ、すなわち「男子」である。日本武尊は実に、男子の中の男子、なのである。

（五）日本武尊と釈迦とマホメット

日本武尊は東征に行くとき、景行天皇から、

「巧言をもって暴神を調え、武を振って姦鬼をはらえ」

と告げられた。つまり日本武尊は、言葉（巧言）の神であり、同時に武器を持つ神である。

釈迦の本名であるゴータマ・シッダールタの、「ゴータマ」は「言葉」であり、シッダールタはギリシャ語で「斧鉞を持つ者」を意味する。

マホメットは「コーランの経典を信ぜよ。しからざれば剣を受けよ」と言った。

イエスも「言葉はすなわち神である」と言い、「自分は地に泰平をもたらすのではなく、刃をもたらすためにきた」と言った。

後醍醐天皇は、左手に法華経を持ち、右手に剣を持って、崩御した。

したがって、釈迦も、マホメットも、イエスも、後醍醐天皇も、みな日本武尊と同一人物なのである。

第四章　天教の世界宣伝（二）

（一）神功皇后の西征はイタリア征伐

成務天皇（第十三代）は、影面（かげとも＝金剛＝コンゴ）、背面（そとも＝スーダン）などの、地名を定めた。

仲哀天皇（第十四代）は南国巡狩をしたが、これはアラビア海岸の巡狩のことである。

また熊襲を攻めようとして穴門に行ったが、穴門はアカバ湾のアラナである。熊襲はギリシア南部のことである。

仲哀天皇の没後、その皇后である神功皇后が新羅を攻めたが、これは前述したようにイタリアのことである。

日本書紀の文飾の多い部分は、必ず地理的偶意を含んでおり、この辺りの記述には、イタリアの地名が多く折り込められている。たとえば、

「素旆をあげて自ら服い素組し面縛し図籍を封じて王船の前に降りて叩頭す」

という文章では、

「素旆」「素組」はタスカン（トスカナ）、日本語で栲布の白きというのが、たくづぬはスタカンである。

「面縛白服」はラティウム（ラテン）、自ら服するの意味である。

「王船」はヴェネツィア、船のことである。

「叩頭」はアンパニア。頭を地面につけるおじぎのことである。

また三韓はイタリア北部のガリア、すわなちガラである（三韓とは朝鮮半島南部にあった、馬韓、弁韓、辰韓のこと。後の百済、新羅、加羅のこと）。ガリアは三つに分割される。また当時の新羅王は、宇流助・富利知干というが、これはローマ王タークイン五世ルシオ・フリシカのことである。

（二）応神天皇および七曜の意義

神功皇后の子の応神天皇（第十五代）は、文武の神であり、北欧神話の武神オーディンであり、またギリシア

神話の文神カドモスのことである（カドモスはフェニキアの王子で、エウロペの兄。ギリシアに渡って大蛇を殺し、テーバイを建設した）。

応神天皇の都である軽島の明の宮は、南エジプトのチバ（テーベ）にある、カルナック神殿と、クソール（明の宮）神殿である。チバは豊明という意味である。

ギリシア史では、ホイニシア（フェニキア）人カドモスが、エジプトのチバを見て、ギリシアにチバ（テーベ、テーバイ）を建設したという。これは古事記の「ちばのかづぬを見れば」という記述と同じである。

ギリシア神話によれば、カドモスが大蛇を殺したとき、アテナが言葉を伝え、大蛇の歯を地に撒くことを命じた。すると土の中から槍の穂先が出、次に甲冑をつけた兵士が出てきた。カドモスは彼等を使って、テーベを建設した。

ところで「言葉」はギリシア語でロゴス、つまり「論語」である。そして「槍の穂先」はセンチメン、すなわち「千字文」である。

また、カドモスは王仁と同一人物である。ホヒニシアの語幹「ポエニ」が、ベニ→ヴェニ→ワニ、と変化した。また、「ポエニ」も「わに」も、紅の意味である。

七曜の名前は、日本の神々と天皇を記念したものである。すなわち、

日曜日―天照大御神＝アテナの日。太陽の日であるから。

月曜日―月読の神の日。

火曜日―大物王の神＝リゼウスの日。

水曜日―応神天皇＝オーディンの日。

木曜日―豊浦の神・仲哀天皇＝トール（北欧神話）の日。

金曜日―神功皇后＝フリゲ、別名ジンゴー（北欧神話）の日。

土曜日―須佐之男尊＝サトウルヌス＝ペセルセウスの日。須佐之男尊は土壌木材の神だからである。

（三）仁徳天皇の難波―スエズ運河開掘の率先

仁徳天皇（十六代）の都である難波は、スエズである。難波の語源は「ナナツ」、すなわち「七つ」で、若者という意味である。スエズは七つの地である。また、スエズは摂津と同じである。私（木村鷹太郎）は内閣図書館で、仁徳天皇時代の難波の地図を見つけたが、これは大阪の地形とはまったく違い、ギリシアのアカル・ナニヤの地形と一致した。

仁徳天皇はスエズ運河を開削した。仁徳天皇には聖帝という別名がある。エジプトでスエズ運河を初めて作った王は、セイテイ一世である。ギリシアのセイトス王も、また同一人物である。また、これは英語のセージ（聖人）の語源である。

エジプト史には、セイテイ一世がユダヤ人を使って、

コロコヂル（クロコダイル、ワニ）の池を掘ったとある。これは仁徳天皇が秦人を使って、丸迩の池を掘ったという記述と、似ている。

第五章　世界統一の神天照大御神

（一）ヤソ紀元は、天照大御神のエチオピア伊勢鎮座の紀元なり

天照大御神は、世界を統一した大神である。

垂仁天皇の二十五年に、天照大御神は伊勢に鎮座されたが、これはエチオピアである。

この伊勢鎮座の年は、キリスト紀元前五年である。

この鎮座は、御鏡を鎮座したものである。

この鏡は平面鏡ではなく、鼎、壺、酒杯と同一のものである。というのは、天皇の位を「日高」というが、これはギリシア語でピダカで、酒壺という意味である。皇太子を「ひつぎのみこ」といい、立皇太子の儀式では壺切りの御剣を伝えるが、「ひつぎのみこ」は、ギリシア語でピトイギ、「壺切り」という意味である。

イエスは、ギリシャ神話の酒神バッカスの変形である。イエスの経典には何度となく、ぶどうや酒が出てくることから、それが知れる。

また、エホバ（別名ヤハウェ）はゼウスの変形で、またバッカスと同一神である。バッカスの別名は、ヨウホイというからである。私（木村鷹太郎）の郷里の宇和島の盆踊りでは「ヨウホイ、ヨウホイ、ヨウイヤナー」という歌が歌われるが、これはバッカスを歌っているのである。

ヨーロッパの教会では、菊花紋章のあるキリスト像を見かけるが、菊花は学名をクリス・アンセムといい、キリスト花を意味するのである。

また、バムビノというキリスト像があり、医療の神秘力があるというが、これはバンブー（竹）、すなわち藪である。日本語の藪医者は、本来「藪は医者である」を意味したものである。ヤブの語源は、ギリシア語のヤマイ（病を直す）である。また、イエスは「癒す」の意味である。

ペルシアのスサからは十六弁の菊花紋章のある遺物が出土し、またペルシアの王室（当時のカージヤール朝）は、十六弁の菊花を紋章とした。

ギリシア神話のアスクレピオス（医術の神）は、古事記の垂仁記に登場する、豊・朝倉・曙立王である。アスクラは朝倉で、ピオスは豊を意味する。また、この神のエピダウロス神殿の破風の紋章は、十二弁の菊花である。

エジプトのサクカラから出土した女神像の左胸には、十六弁の菊花紋章があった。

これらはすべて日本と関係するものである。

したがって、日本がスベラ御国（神の国、天皇の国）であるのは当然であり、日本が神国を自称するのは至当である。またイエスが「神の国を求めよ」というのは、日本教を宣伝していたのであり、この「神の国」というのは、神国日本なのである。

ヨハネ黙示録には、日本国に関する世界帝国の予言がある。

「彼の口より利剣出づ、これをもって諸国の民を撃つ、かつ鉄のつえをもって、列国の民をつかさどらん。彼が衣と服に記せる名あり、曰く、諸王の王」

ダニエル書にも、日本帝国に関する予言がある。

（二）世界統一、人類平和の理想は、日本に起原す

天照大御神（アテナ）は日光の神だけでなく、農工、知識、善美、尚武、護国、世界統一、平和の神である。武神であるから、アマゾン、つまり天国守護とも称した。天照はギリシア語でアマ・テロスで、完全円満全権統治を意味する。

ヤマトはギリシア語では、ヤマトス（イアマトス）で、治療救済の意味である。だからヤマトは救世国である。キリスト教の救済思想は、このヤマトに由来するものである。

ユダヤの建国は、日代の宮（ヘリオポリスの祭祀オサルシフ）、景行天皇の恩恵によるものである。景行天皇の本名は忍代別命、すなわちオサルシフである。またエジプトのオシリス神でもある。

釈迦は天照大御神の子の、正勝・吾勝・勝速日・天忍穂耳と同一である。釈迦の伝記にあるマガダ国は、エジプトの纏向（別明ゴゼン）である。鷲の山はシナイ半島の山で、アララ仙人の山はアララット山である。また、釈迦入滅の地はアフリカ南部である。仏教の本地はアルメニアとエジプトである。

マホメットは、崇神天皇、垂仁天皇、本牟知別王と同一である。現在アラビアに伝わっているマホメットの伝記は、不完全なもので、間違いが多い。

日本は世界に冠たるスベラ御国であり、天皇はすなわちスベラ尊である。天皇こそが世界を統一し、全世界の帝王たるべきである。

その他の諸国の諸君主は、ことごとく天皇の国造りである。諸国の君主のうち、王はみなプリンス、つまり日本語の「みこ」で、侯爵、伯爵は、デューク、ズコ、コン・ヅコ、つまり国造（古代の地方官）のことである。

イギリスは、スカンジナビアの海賊であるノルマンディ侯の建国したものである。蜂須賀小六の後裔が、現在の侯爵である。

ドイツはホーエンツォレルン侯家で、国造家である。

ロシアはスカンジナビア人のルーリックの建国になるものである。

オーストラリアも侯国である。

アメリカは平民国である。

中国清朝は満州人が建国したが、今は滅亡した（辛亥革命）。

一方、アビシニア（エチオピア帝国）の王は、「王の王」と呼ばれ、ソロモン王とシバ女王の末裔といわれる。ソロモンは、大国主命の子である建御名方命（たけみなかたのみこと）、シバ女王は狭穂姫である。したがって日本皇室の傍系である。

また、トルコ（オスマン＝トルコ帝国）の王は、万世一系を名乗る崇神天皇の王子の、豊城命の子孫であり、やはり皇室の傍系である。

以上のように世界の諸王国の系図を調べてきたけれども、日本の系図に及ぶものはなく、日本帝国は全世界において、開闢以来、万世一系のスベラ尊を戴くスベラ御国なのである。したがって全世界の帝王たる資格があると、いうべきである。

このようにして世界統一、人類平和の理想は、世界統一の神たる天照大御神が建て給えた、太古の日本に起源し、日本帝国はこの理想を実行してきたスベラ尊の国である。また将来、この大理想を宣言し、その宣言の中心である権利と義務、すなわち資格を有することは、日月を見るよりも明らかである。

日本民族たる者は、常にこのことを念頭に置いておかなくてはならない。

（三）日本諸国名の意義

天智、持統、天武天皇の時代には、日本の中心はインド、チベットにあった。

奈良時代から南北朝時代までの日本史の地理的舞台も、また海外である。

源平時代と南北朝時代は、実は同じ時代で、光厳法皇（北朝初代天皇）の行脚は、ビルマからインド、セイロン（スリランカ）一帯におよび、その年代は中国史の宋末、元初の頃である。

日本書紀から太平記にいたる間に描かれている地域は、エジプトのギザのピラミッドから、アフリカ南端に至り、アルバート湖やヴィクトリア湖のくわしい地誌がある。また、マダカスカル島とユニオン島は、鬼界島である。

そして木村鷹太郎は、

「それでは、日本は何時の頃から、現在の東洋の島国に国家的活動を始めたのかという点は、まだ私が十分に解き明かすことができないでいる。しかし、意外に新し

いのではないかと思われるのである」

と言っているのである。が、とにかく木村鷹太郎は、

「要するに、世界は全部、日本のものである」

と言いたいのであった。

木村鷹太郎は日本太古史で、日本の旧国名は世界各地の国名を転写したものであるとして、世界各地の地名と、日本の旧国名を精細に比較しているが、その中の若干の例を記すと次の如くである。

山城―アルメニアの別名、アマゾン国のことである。アマゾンは「アマ」と「ゾン」を一緒にしたもので、アマはヤマ（山）、ゾンはギリシア語で、園生であり、城を意味する。また、キリスト教でいうエデンの園もここにある。

加賀（石川県南部）―コンゴである。コンゴはギリシア語でカンガであり、焦熱、堅固を意味する。したがって灼熱地獄はここである。コンゴ河はガンジス河であり、インドの恒河はこの名前を移したものである。

淡路―ホヒニシア（フェニキア）である。古事記によれば、淡路は別名を穂之狭別といい、これはホヒニシアがちぢまったものである。ホヒニシア人はアフロディテを崇拝する国で、アフロディテがアホヂ、アハヂと変化した。またアフロディテは海の泡（淡）から生まれた神である。

伊豆―マレー半島である。地形が似ている。マレーとは、ラテン語でマラ、これは直立するものを意味し、これをギリシア語でイズという。

安房（千葉県南部）―アフガニスタンである。アフガニスタンはアフリカ植民国の意味である。正しくは「アフガン人の国」である。アフリカの語源はアフラ、すなわち泡であるから、安房である。

美濃（岐阜県南部）―アルメニアの東、古代アリアナ国のことである。ギリシア神話のアリアドネ女神の国である。その父に、ミノスという神がいるが、父子一体である。だからアリアナ国はミノである。

第六章　結論

日本は皇御国（皇国）と自称する。

スペラとは、ラテン語でスペラ、至上至貴の国を意味する。しかし現在の日本は小国で、スペラとは言い難い。また、旧派史学では、日本文明は、最期は朝鮮、後に中国、インド、最後に欧米から、文明を学んだという。またこれではスペラとはいい難い。

さらに、アッシリア、バビロニア、エジプトは、数千年～数万年にわたって建国されたといわれるが、二千五百数十年の歴史しかない日本は、またもやスペラとは言い難い。

旧派史家の言う、神武紀元（紀元前六百六十年を神武天皇の即位とする説）にしたがえば、日本は現存する最古の国になるから、スペラと言えないこともないが、国はただ古ければいいというものではない。

世界のさまざまな国が、自国を美称するのは自由である。それは自画自賛で、主観的なものだからである。日本のスペラ御国というものも、そういうものである。

しかし日本民族の心底には、日本は皇国である、日本は至上至貴の国である、という信仰が厳として存在し、この気位だけは、何をもってしても圧伏させることが出来ないのである。この気位がなぜ極東の小島である日本の国民の心底に存在するのか。旧史家の研究は、この信仰的事実と矛盾するのである。

この信仰は厳然とした事実である。まちがっているのは、旧史家の歴史家の方である。

私は「新史学」、あるいは「日本学」というものを提唱する。この「新史学」こそ、日本民族のスペラ信仰と合一し、その起源を説明できるものである。そして私のその研究の結果は、次の如くである。

一、日本祖先の神々は、世界人類の、少くとも文明人種の祖先である。

二、日本太古の版図は、世界的に大であった。

三、日本の中心、すなわち皇室は、世界最古の皇室であり、アススリヤ（アッシリア）、バニロニア、及びエジプトよりも古代である。

四、日本民族は太古の文明を形成し、それによって後世世界の文明の基礎となった。

五、とくにわが皇室は世界救済を目的とし、日本民族はヤマト、すなわち救済を意味する高尚な目的を持っている。

六、西方文明の率先者である古代ギリシアも、ローマも、エジプトも、みな、わが皇室の国である。

七、現在の日本民族の中心は、西洋すなわち地中海方面から東漸して来たのである。

私（木村鷹太郎）の方法論は、

比較的神話によって日本神史の系統を明らかにし、

比較言語によって日本語源を知り、

国典地理を厳密に研究し、

日本の太古史と西洋諸国の太古史との交渉の有無を見極め、

日本の太古が世界に残る太古史にどのように記録されているか、それを明らかにすることにより、客観的で堅固な基礎を作り、その堅固な基礎の上に大々的世界的神国日本のありしを発見せんとするものである。

以上

関東管領始末記⑤

落日燃ゆ

千坂精一

一

足利高氏は論功行賞で最高の恩賞に与かりながら、思惑はずれで素直に謝意を表する心境にはなれなかった。

高氏と新田義貞が寝返ったことで倒幕を早めたとして朝廷側の武将楠木正成、名和長年、赤松則村らより厚く遇されたことや、鎌倉幕府の本拠を倒した義貞より出先機関の六波羅を葬った高氏のほうが叙位も恩賞も上位だったことは、新田が足利の末の一族と認めたことの証しで納得がいくのだが、高氏の野望はほかにあったのだ。

高氏は源氏再興を希って北條執權家打倒に蹶起したのだから、武家集団の頂点に立つ征夷大将軍に任じられなければ所期の目的を達成できなかったのである。

ところが高氏の希むその征夷大将軍は、すでに帝の皇子大塔宮護良親王に与えられてしまっていた。

護良親王は十歳のころ比叡山の大塔に預けられて天台座主尊雲法親王となっていたが、父帝が隠岐島へ流されたのを知ると還俗して護良とあらため吉野で挙兵した。

だが、幕府軍に敗れて高野山へ逃れはしたが、そこで諸国に令旨を発して兵をあつめ捲土重来を期していた。

そのあいだに高氏と義貞が謀叛して幕府を倒した。

帰京した後醍醐帝は護良親王が諸国の兵を集めて合戦準備をしているという噂をきいて愕き、使者を送って、

「天下はすでに鎮まれり。すみやかに出家にもどって叡山座主に専念せよ」

そう諭した。

だが、護良親王は聴き入れず、

「足利高氏はたったいちどの戦功で武士たちの上に立ち

権勢を握ろうとしております。早く討たねば北條高時より悪逆で強大な敵になりかねませぬ。そんな危険を放置しておいて出家に戻ってしまってはいったい誰が朝廷をまもりましょうや」

そう主張して、頑として引き下がらなかった。

後醍醐帝はやむなく征夷大将軍を与えたが、高氏討伐は根拠のない推理にすぎず大義名分なしとして退けた。

こうして後醍醐帝は、護良親王に押し切られて征夷大将軍を与えたようになってはいるが、じつのところ天皇親政を志すくらいの帝なのだから武家の棟梁も朝廷が握ろうと考えていたとしてもおかしくはない。

高氏は護良親王の征夷大将軍が不満であったが、もう一人護良親王を心よく思っていない人物がいた。

後醍醐帝の寵妃（側室）で三位の局といわれる阿野廉子である。

父は藤原北家三條流の四位右中將阿野公廉。

廉子は才気煥発な美少女に生育したので、藤原北家西園寺流の左大臣洞院公賢の養女になり、十八歳で中宮西園寺禧子の上臈に召し出された。

二十歳のとき寵妃に召され、後醍醐帝とのあいだに三人の皇子と二人の皇女を儲けた。

恒長、成長、義良親王と祥子、惟子内親王である。

廉子は、その美貌と才器が禍を招いてしだいに独占欲が強くなり、横暴な振る舞いが目立っていった。

元弘の変で後醍醐帝が隠岐へ配流されたとき、廉子はただ一人敢然として従った気丈な才女であった。

このとき、尊長親王が土佐（高知県）、宗良親王が讃岐（香川県）に配流されたのだが、廉子の三人の皇子はいずれも十歳以下であったために流罪を免れた。

廉子は帝に献身的に尽くしてきていたので、後継者はわが子のなかから選んでくれるものと信じていた。

それが年長とはいえ護良親王が重用されたのである。

生母は北畠師親の女親子で、親房の叔母にあたる。

護良親王が高氏を憎んでいるのには理由があった。

それは、高氏が六波羅を打倒したあと護良親王に仕える殿法印良忠の配下が商家の土蔵を破って財宝を奪うという事件が起こったので捕縛して六條河原で斬首すると、

「大塔宮の侯人、殿法印良忠が手の者ども、在々所々において昼強盗をいたすあひだ、誅するところなり」

そう書いた高札を立てた。

憤懣遣るかたない良忠は、護良親王に讒訴した。

「われを失脚させようとする高氏の陰謀ではないのか」

疑心暗鬼を生じた護良親王は、高氏の抹殺を謀った。

ことあるごとに高氏を憎み、讒言を繰り返した。

高氏は、護良親王との対立は避けられないと覚悟した。

もはや斃すか倒されるかであった。

護良親王のほうも高氏追討に立ち上がるべく、内密の

うちに諸国へ令旨を遣わして、兵を集めはじめた。
これを知った高氏は令旨を手に入れると、阿野廉子を動かして後醍醐帝に、
「大塔宮は帝位を奪い奉るために諸国の兵を集めております。その証拠もはっきりいたしております」
そう奏聞すると、確かな証しとして令旨を差し出した。
帝の信頼を一身に集めている寵妃阿野廉子の口添えもあって、高氏の奏聞を信用した後醍醐帝は、
「大塔宮を流罪に処すべし」
そう激怒すると、清涼殿での集会に事寄せて護良親王を呼び出した。
なにも知らぬ護良親王が前駆二人、供侍十余人の微行で参内したところを、殿内の鈴の間あたりに待ち受けていた結城親光と名和長年が捕えて馬場殿に押し籠めた。
閉じ込められた護良親王は弁明を許されなかった。
そして、決定は覆えることなく鎌倉に遠流された。
護良親王の身柄を預かったのは高氏の弟直義で、二階堂の谷に土蔵造りの牢屋をつくって親王を閉じ籠めた。
付き添いは南御方という女官一人だけであった。
後醍醐帝は〈流刑〉としただけでここまでの処置を考えていたわけではなかったであろうが、直義は兄高氏の含むところに同調してきびしく取り扱ったのであろう。

一一

護良親王を鎌倉に幽閉することに成功した高氏は、当面の競争相手を失脚させたことで溜飲を下げたのであるが、じつはほかにもうひとつ気懸かりなことがあった。
ほかでもない北條一族滅亡のことである。
鎌倉はおなじ源氏の新田義貞が倒したことなので、北條高時以下一族を全滅させたと伝え聞いても果たしてそうか疑心暗鬼で、なにを聞いても隔靴掻痒の感があった。
さいわい弟直義が、護良親王から剥奪して阿野廉子の第二皇子成長親王に与えられた征夷大将軍の執政として鎌倉に下向していたのであらためて探索させたところ、
高氏の妻登子の兄でこのとき十六代執權であった赤橋守時は洲崎千代塚の合戦に敗れて建長寺山門近くの本陣に引き揚げて自刃。
大佛貞直は極楽寺坂口で新田義貞の弟脇屋義助軍に突撃を敢行して戦死。
金澤貞將は化粧坂口で討死。
鹽田國時、俊時父子は手傷を負って鎌倉の自邸までもどり自刃。
得宗高時は葛西ヶ谷の東勝寺に籠もっていたが、敗走してきた内管領長崎高重らと最後の一献を汲み交わしたあとそれぞれ切腹して果てた。その数二百八十三人。
こうして北條一族はほとんど死歿したのであるが、肝

腎の得宗家の血を引く二人の生死が不明であった。
高時の遺児萬壽丸と亀壽丸、それに弟泰家である。
泰家は新田義貞軍との小手指ヶ原、久米川の戦いに金澤貞將、北條貞國両軍の援軍として参戦し、義貞軍をいちどは堀兼に敗退させたが、江戸、豊島、葛西、河越らの諸将が加わった新田の大軍に敗れて府中を明け渡し、敗兵をまとめて鎌倉へ退却したはずであったが、鎌倉で討ち死に、自害した一族のなかにいなかった。
泰家は逸早く戦火を潜って逃亡していたのである。
また高時の遺児は、弟泰家が鎌倉危うしのときに嫡男萬壽丸を生母の兄五大院宗繁に、二男亀壽丸は諏訪盛高（のち入道照雲頼重）に託して鎌倉を脱出させていた。
ところが五大院宗繁は、鎌倉を征圧した新田義貞の、
「北條残党を匿った者は誅殺、密告者には恩賞を与える」
の布令に逃げ場を失い、恐れ戦いて萬壽丸を新田の本営に差し出したので、憐れにも斬首されてしまった。
いっぽう高時の弟泰家は無事に京へ逃れて刑部少輔時興と名告りを変えて潜伏していたが、身の危険を払拭できず庇護を求めて權大納言西園寺公宗を頼り、のちの金閣寺の場所にあった山荘北山殿に匿われた。
このころ、信濃國で北條家再興の烽火が上がった。
信濃國は北條氏の守護国で、その広大な所領からあがる収穫高からみても強力な基盤であったにちがいない。
長野新幹線上田駅で上田電鉄に乗り換えて終着駅の別所温泉は古くから知られた温泉境であるが、むかし独鈷山、夫神岳、女神岳に囲まれたこのへん一帯を信濃國小縣郡鹽田荘といい、この鹽田平に鹽田城があった。
守護になったのは二代執權北條義時の三男極樂寺重時で、その四男義政が建治三年（一二七七）この地に移り弘法山麓の鹽田城（上田市前山）に居を構えた。
以後、國時、俊時と三代つづき、近くにある曹洞宗寶珠山龍光院は國時開基の鹽田北條氏菩提寺である。
信濃國は長いあいだ北條氏支配の下にあったから、
「北條家再興」
をこころざす与党の国人たちが多くいた。
北條高時が新田義貞に斃された二年後には奥信濃常岩牧（飯山市常盤）で常岩氏の挙兵があったが、朝廷の守護方市川助房によって鎮圧されたし、府中松本（松本市）での反乱は元弘の乱の恩賞で甲斐國（山梨県）から入った小笠原氏と村上氏によって鎮圧された。
そのほか地方でも、遠く九州豊前の規久高政、豊後の糸田貞孝、伊豫の赤橋重時、紀伊の佐々目僧上、越後の小泉、大河、陸奥の曽我らが決起したし、武藏の本間、澁谷などは鎌倉を襲ったが奪回するにはいたらなかった。
いずれも、
「北條家再興」
の目的はおなじくしていたものの、中心になる人物が

いなかったので相互の連携がとれず、各個ばらばらの蹶起になってしまって統制がとれぬまま線香花火で終わってしまっていてもはや頽勢挽回は不可能状態であった。

そのころ北條泰家を匿っていた西園寺公宗が動いた。

西園寺家は代々朝廷の関東申次職に補任されていたので幕府に好意的であり、北條執權家最屓であったところから、公宗は泰家の意を体して先代高時残党首魁の密謀に荷担し、信濃の北條時行（亀壽丸）、越中の名越時兼と連繋して諸国に散在している北條与党と糾合し、二組で一斉蜂起して京、鎌倉の同時奪取を企てた。

すなわち、公宗が橋本俊季、日野氏光らと持明院統の後伏見法皇を奉じて後醍醐帝を倒そうと謀った。

刑部少輔時興と改名している北條泰家を京側の大将にいただき、信濃の諏訪一族や滋野一族に担がれている北條時行と東西で呼応して起とうとしていたのである。

公宗はまず山荘北山殿に後醍醐帝の臨幸を仰いで暗殺する手筈をととのえた。

この陰謀を知った公宗の弟公重は、西園寺家の破滅を恐れて密訴したのでことは露顕してしまい、公宗、日野資名、氏光、三善文衡らは捕えられて流罪になった。

泰家は逃亡したのだが、捕えられて誅殺された。

その後の西園寺家は、公重が密訴の功績を認められて家督を許されたので、危ういところで断絶を免れた。

いっぽう信濃のほうでは、京で蹶起が失敗したからといって鉾を納めるわけにはいかず、建武二年（一三三五）七月十四日に北條時行を担いだ諏訪神党一族を中心にした信濃武士団が後見諏訪頼重指揮のもとに蹶起した。

主力の諏訪頼重、保科彌三郎、四宮左衛門太郎の軍が船山郡青沼（千曲市）の守護所を急襲して守護小笠原貞宗率いる村上、市河隊らと激戦になり九日間攻防が繰り返されたが、守護軍が川中島南部に釘づけになり府中が手薄になったところへ時行、頼重の本隊が攻め入って國司の首級を揚げ、東信濃を経て上野へ攻め込んだ。

この北條軍の勢いに各地の豪族たちが続々と馳せ参じたので、すすむほどに大軍になっていった。

武藏を南下した北條軍は、女影原（日高市）で澁川刑部義季軍と岩松兵部經家軍を破り、小手指原（所沢市）で小山下野守秀朝軍を破ると、井出の澤（町田市）で迎え撃つ高氏の弟直義軍とも押し気味に戦った。

形勢不利と見た直義は、必死の阻止を命じておいてそぎ鎌倉へ馳せ戻ると、征夷大将軍成良親王を奉じていったん三河へ退いて頽勢を挽回することにした。

翌二十三日、成良親王とともに鎌倉を出立した直義は、山内まできたところで迷いを払って意を決した。

それは、大塔宮護良親王についてのことであった。

慌ただしく出立してきたので二階堂の土牢に押し籠めたまま放置してきたが、鎌倉へ攻め込んだ時行がそれを知って救出すれば大事にいたってしまう虞があった。

大塔宮は時行の父高時を斃した朝廷軍の征夷大将軍だったから八つ裂きにしてもおさまらぬ仇敵であったが、兄高氏に対してはおなじ怨みを抱く者同士であった。

（時行が大塔宮と手を結べばどうなる）

そんな危険人物を生かしてはおけなかった。

（大塔宮を弑し奉ろう）

そう決断すると、一行のなかから近臣の淵邊伊賀守義博を選んで呼び出した。

「われらは無勢であるためいったん鎌倉を立ち退くが、美濃、尾張、三河、遠江の軍勢を集めて取って返せば、北條の残党などは瞬く間に討滅できる。それよりも当家にとって窮極の敵は兵部卿親王（大塔宮）なり。宮を死刑にする勅許はないが餓死を待つよりは弑し奉ろうと思う。其方は急ぎ薬師堂谷へ馳せ戻って宮を弑せよ」

そう命じられた淵邊は、主従七騎で急ぎ引き返した。

暗い土牢のなかにいる大塔宮は昼夜の区別もつかず燈を挑げて読経していたが、淵邊が迎えに参上した旨を申し出て輿を据えるのを見ると、すべてを察して、

「其方はわれを殺めにまいったな。よし、心得たり」

そういうより早く淵邊の太刀を奪おうとして走り寄るところを淵邊が太刀を取り直し宮の膝の辺りを強かに打ち据えた。半年あまりの牢生活で足が弱っていた宮は、心は逸れど躰が動かずその場に倒れてしまった。

淵邊はすかさず宮の胸の上に乗りかかり、腰の刀を抜いて首を掻き切ろうとしたが、宮は首を竦めて刃先に喰らいつき刀を奪いとろうとした。

淵邊は奪われまいと渾身の力を振り絞って引っ張り合っているうちに、鋒が一寸余り折れてしまった。

淵邊は刀を投げ捨て、脇差を抜いて宮の胸許を二度ばかり刺し、弱ったところを髪を掴んで首を掻き切った。

牢を出て明るいところで確かめると、まだ喰い千切った刀の鋒を口に咥えていてその眼は爛々と輝いていた。

二

その二日後に北條時行は鎌倉へ攻め入り、占拠した。

鎌倉を逃れた直義は兄高氏に救援の急使を送ると、領国三河の矢矧で新手を呼集して軍団の再編を図った。

高氏から報告を受けた後醍醐帝は時行追討を命じた。

高氏はこの機を逃さじと、出陣の条件として、

「征夷大将軍をお命じいただき、関東八箇国の管領権をお与え下さいますようお願い申し上げます」

それは依頼というより要求であった。

征夷大将軍は武士の棟梁の地位に欠くことのできない肩書であり、関東八箇国は頼朝が知行した〈関東御分国〉でどちらも源氏の再興に不可欠の条件であった。

後醍醐帝は、天皇親政の確立に征夷大将軍は手放せぬところから、北條時行を見事追討して東国を平定してからのことと一日延ばしにして征東将軍という東国地方平

定に限るなんとも曖昧な肩書を与えて有耶無耶にした。
不満顔の高氏に、帝はさらに諱の尊治の一字を与えて〈尊氏〉と名告らせることでその矛先を躱した。
直義救援を急く新尊氏は、憤懣遣る方ない思いのまま勅命を待たずに五百騎を率いて京を進発してしまった。
この双方の齟齬がやがて決定的な対立に発展してゆくことになる。
近江（滋賀県）をすぎたころ、尊氏の軍勢は京極道誉など諸将の参陣もあって四千余騎に増えていた。
さらに、三河の矢矧に到着して直義の動員した軍勢と合流したときは、その数三万騎に膨れ上がっていた。
鎌倉を目指す足利軍は、途中濱名湖付近、佐夜の中山、興津付近、箱根山中、相模川原、片瀬、七里ヶ濱、鎌倉七口などで北條残党軍と合戦したが、いずれも衆寡敵せずでことごとく連勝して八月十九日鎌倉に突入した。
たった一日の合戦で北條残党軍は脆くも敗れ去った。
このとき、北條時行を担いだ諏訪頼重、時継以下四十三人は雪の下の勝長壽院で自害したのだが、時行を無事に落ち延びさせるために一緒に自害したと見せかけようとして全員顔の皮を剥いで誰彼の見分けがつかぬようにしてあったというのだが、真偽のほどは定かではない。
その勝長壽院はすでに廃寺になっていて跡形もないが、古地図でみると、杉本寺の下を通っている金澤街道を滑川沿いに鎌倉駅のほうへ戻った左側にある大御堂橋を渡り、文覚上人屋敷跡をすぎて釈迦堂ケ谷と葛西ケ谷のあいだを奥へすすんだあたりの大御堂ケ谷にあった。
頼朝が父義朝の供養に建立したという源氏の氏寺で、その後實朝や政子も葬られたそうだが、いつごろ廃寺になったのかは不明で、現在は礎石があるだけである。
結局北條時行の鎌倉占領は建武二年（一三三五）七月二十五日から八月十九日の二十日余りだったのでこれを〈二十日先代の乱〉または〈中先代の乱〉といわれているが、それは北條執権時代と足利幕府の中間にあったというところからそういわれるようになったようである。

四

北條時行が戦場を離脱して逃亡したことなど知らぬ尊氏は、とにかく北條の残党を殲滅したことで意気揚々と鎌倉入りすると、諸将を集めてその労を犒い、あらためて後醍醐帝から征夷大将軍を拝命したことを告げた。
まだ正式には任命されたわけではないのだから自称なのであるが、出陣のおりに願い出たとき後醍醐帝は、
「北條時行を見事追討して東国を平定してからのこと」
そう先延ばしにして尊氏の要求を躱したのを捉えて、
「帝がそう約束された」
ことと言質を取って勝手に任命されたと解釈した。
また、征東将軍として関東八箇国の支配を与えられたのだから差配は勝手と承知して、さきの倒幕に協力した

論功行賞が公家や寺社に厚く不公平だったことから、このたびは時行追討に戦功のあった武士たちに恩賞として領地の椀飯振舞をしたので尊氏の人気は上昇した。
だが、そのなかに新田一族の拝領地があったのだ。
これが足利尊氏と新田義貞の紛争の火種になった。
尊氏が若宮大路の旧幕府跡地に館を築いたことから、高師直、上杉憲房らの諸将もこれを倣って周辺に居を構えたので、さながら鎌倉幕府復活の様相を呈した。
征夷大将軍気取りの尊氏は、斯波家長を奥州總大将に任ずると阿野廉子が産んだ第二皇子義良親王（のちの九十七代後村上帝）を奉じて多賀国府（多賀城市）にいる後醍醐帝側近の公家北畠親房の嫡男顯家を牽制させた。
こうした尊氏の所行を苦々しく思っていた義貞が堪忍袋の緒を切ったのは、後醍醐帝から拝領した上野守護職を尊氏が上杉憲房に与えてしまったことである。新田荘の所在を知らぬはずのない尊氏の挑発であった。
義貞の訴えに後醍醐帝は勅使中院具光を遣わして、
「将士の論功行賞は綸旨をもっておこなう。其方は早々に帰洛いたし逐一報告するよう」
命じた。
帝はこのとき、無断で北條残党討伐に向かった罪を不問にするばかりか、乱を平定した軍功を賞して尊氏を、
「従二位参議に昇任する」
ことを伝えさせた。
大胆で行動的な尊氏はすぐに上洛する気になった。
それを制止したのは弟直義で、軽率な行動を諫めた。
「このたびの恩賞がなく不満を抱いているに違いない義貞や公家たちの屯しているなかへ態々出向いて行くのは飛んで火に入る夏の虫も同然、愚かなことであります」
直義の考えは正鵠を得ていたのだが、鷹揚な尊氏は、
（勅命によって出陣した征討軍の凱旋将軍が北條の残党ならともかく、朝廷方に討たれるはずはあるまい）
そう高を括っていたのだが、直義に諄々と諭されて素直な尊氏はそこまでいうならと上洛を思い止まった。
新田義貞が帝に訴えたことを知った直義は、ただちに、
（関八州の支配者に叛く新田義貞こそ逆賊である）
そう後醍醐帝に奏上しておいて、恩賞を与えた諸将に、
「新田義貞討伐」
の檄を飛ばした。
それを知った義貞は、
（尊氏は帝に謀叛を企てて、諸国に檄を飛ばしている）
旨を奏上した。
義貞は、尊氏の敵対を帝への謀叛に擦り替えたのだ。
尊氏の軍勢集めは事実だから弁解の余地はなかった。
さらに尊氏側に不利なことが起こった。
大塔宮が殺害されるまでずっと側に仕えていた南御方という女房が帰洛して帝に一部始終を奏上したのだ。
足利尊氏は、

●勝手に征夷大将軍になりすましている。
●新田義貞に与えた領国を勝手に没収した。
●大塔宮を勝手に殺害した。
●帰洛の命に服さず鎌倉に居坐っている。

これだけ並べ立てられればもはや弁解の余地はない。

後醍醐帝も、尊氏か義貞か採沢に迷ったであろう。

おなじ源氏の血を引く名門であるから、どちらをとっても武家を束ねる棟梁に据えるにはふさわしかった。

だが、鎌倉に居坐って動かぬ尊氏の目的は幕府復活を狙っているやも知れず、親政には危険な存在であった。

遠謀深慮のすえ後醍醐帝は尊氏を捨て義貞を採った。

後醍醐帝は尊氏・直義を反逆者と断定し、義貞に第一子尊良親王を奉じて尊氏を追討するよう命じた。

この時点で尊氏は、朝敵になってしまったのである。

五

新田義貞率いる五千の軍団が鎌倉を目指して発向したのは建武二年（一三三五）十一月十九日であった。

早馬の報らせを受けた鎌倉では、後醍醐帝から『新田義貞討伐』の綸旨が届くのを待ち侘びて出陣準備をしていたので、直義をはじめ仁木、細川、高、上杉の重臣たちがただちに尊氏のまえに集まり、それぞれが、

「われら一族を滅ぼさんとして義貞を大将にした軍勢がすでに東海、東山道を下ってきております。敵に難所を越えられては勝目がありません。急ぎ矢矧、薩埵山のあたりにご出陣なされて防戦なされますように」

尊氏を急かせた。

尊氏はしばし無言であったがややあって口を開くと、

「われ武士の家に生まれ、源氏の流れを汲んではいるが、わが足利家は承久以後北條氏に仕えて家を汚し名をはずかしむる恨みをしのんできた。それがこのたび征夷大将軍になる望みを達し、廃れた家を興し従二位に昇進したのはわが手柄によるとはいえ、ひとえに君恩によるものだ。その恩を忘れるのは人たる者のさぜるところなり。いま帝がお怒りになっておられるのは大塔宮を亡き者にいたしたこと、無断で軍勢催促の御教書を下した二点による。だがこれはいずれも尊氏自身の仕業ではない。ことの仔細をお話し申し上げれば事実無根のこの噂は消えてお怒りも鎮まることであろう。其方たちは勝手にするがいい。われは帝に敵対いたさぬ。もし恭順いたしても帝のお赦しがなければ剃髪して墨染の衣を纏い不忠の行いのなかった証拠を子孫に残すべし」

不機嫌にそう言い捨てると、部屋の背後の襖をぴしゃりと閉めて中に籠もってしまった。

思いがけない尊氏の態度に直義らは唖然としたがそうするわけにもゆかず、ともかく直義が軍勢を率いて三河の矢矧まですすんだがここで対戦して敗れ、その後鷺坂（磐田市）や手越河原（静岡市）でも敗れてしまった。

鎌倉へ退却してきた直義は、すぐさま尊氏の館へ報告に行ったが門が固く閉ざされていて静まり返っていた。

「誰かある」

直義が門を叩きながらそう叫びつづけていると、やがて奥から須賀左衛門という武士が出てきて、

「将軍は矢矧の敗報を聞こし召されて建長寺にお入りなされました。出家いたすと仰せなされるのでお側役のかたがたがお留め申し上げておられるところでございまする。すでに御元結はお切りになられましたが、いまだ法体にはなられておられませんそうです」

直義は駭き、すぐさま高、上杉、畠山らを呼集した。

「将軍がそのような気弱をなされては士気が阻喪するばかりだ」

困り果てて鳩首凝議をつづけたが名案は出なかった。

思案のすえに一計を案じた上杉重能が、

「たとえ出家して法体にならせ給い恭順の意を表わそうとも帝は決してお赦しにならないとでも聞こし召されれば、あるいはお考えなおされるやも知れませぬ。贋綸旨を二、三通書いてご覧に入れたらいかがでござろう」

敗軍の大将直義は兄を追い込んだ責任を感じて困り果てていたので、否応なく重能の思案に飛びついた。

「よかろう。とにかくそれでやってみようではないか」

みなみな直義に同意したので、重能は能筆の者に命じて他の綸旨の書体を真似て書かせた。その贋綸旨は、

足利宰相尊氏、左馬頭直義以下一類等、武威を誇り朝憲を軽んずるあひだ、征伐せらるるところなり。かの輩たとひ隠遁の身たりといへども、刑罰を寛すべからず、深くかの在所を尋ね、不日に誅戮せしむべし。戦功あるにおいては、抽賞せらるべし。さればこれ綸旨かくの如し。これをつまびらかにするに状を以てす。

建武二年十一月二十三日　右中弁光守

武田一族中

小笠原一族中

とし、おなじ文章を名字だけ変えて十通余り書いた。

それを直義が急ぎ建長寺へ持参して尊氏と対面すると、

「当家勅勘のことは義貞が言上したことであるから義貞が討手として差し向けられたわけで、彼らはわが一門がたとい遁世降参しても誅殺すると決めていて帝もご同意なされたとのこと、わが一門は到底逃れ切れませぬ。先日矢矧、手越の合戦で討ち取った敵兵が身につけていた守袋に入っていた綸旨にそう書かれているのです。ご覧下さい。所詮勅勘を逃れられぬ当家でござればなにとぞ御出家を思い止まられて一族の滅亡をお救い下さい」

そう涙ながらに言い終えると、贋綸旨を差し出した。

綸旨を読んだ尊氏は、まさか直義らの謀りとは気づか

ず顔面蒼白になり、膺綸旨を持つ手許が震えた。
素直でお人好しの尊氏は、法体になって恭順すれば帝が赦してくれるものと安易に考えていたのだった。
容易ならざる事態であることを思い知った尊氏は、
「一門の浮沈に関わることなればやむなし。われもそなたらとともに戦い、義貞もろとも死を覚悟いたすぞ」
そう決意すると、袈裟を脱ぎ捨てて錦の鎧直垂に着替えて、新田義貞との決戦の臍を固めた。
これ以後尊氏は真骨頂を発揮する事になってゆく。
なおこのとき足利方の武士たちがみな髻を短くする一束切にしたのは追い詰められて決死の覚悟を表わしたわけではなく、元結を切ってしまっている尊氏のすがたを目立たぬようにしようとする配慮からであった。（了）

懐郷記（続）

忠内正之

「血煙り荒神山」余話

喧嘩の舞台となった、荒神山観音寺の建立はたいへん古く、奈良平安時代といわれている。眞言宗御室仁和寺派の寺で、その後総本山がたびたび変わり、最後は高野山の末寺となった。（「荒」神山は「高」神山が正しいが、通りの良い「荒」神山を使う）
この寺が最も栄えたのは江戸時代に入ってからである。徳川三代将軍家光の乳母で「権勢並ぶものなし」と言われた春日局がいた。この春日局の異母弟である順海上人が、お伊勢詣りの途中で眼を患い失明して苦しんだ。そこでこの観音寺に参詣して平癒の祈願をしたところ忽ち開眼した、との評判により霊験あらたかな寺として江戸でも有名になった。
これを知った春日局は、荒神山観音寺に信心帰依し上京のつど自らたびたび参詣に訪れた。
彼女は己れの育てた乳のみ子が三代将軍家光となり祈願が成就したので、その報恩の証として、この寺に立派な釣鐘を寄進した。今もこの鐘は存在しているという。
こうして春日局の信仰を得て以来、徳川幕府の祈祷寺のような寺となり、寺領も増えて大層羽振りの良い寺となった。
更に寺社奉行直轄の格式の高い寺になり、藩の町方や目明しなど不浄役人が出入りできない、治外法権の寺となった。
江戸幕府も元禄以降になると財政が苦しくなり、寺に多額の祈祷料を払えなくなった。そこでこの寺で賭博を開くことを許した。それは祭礼の三日間だけ禁制の賭博を境内で開くことが公認されたのである。
この賭博を仕切ったのが博徒であり、盛大な時には、日銭千両が動いたといわれる。博徒らにとって、莫大な収入源となった。そこで荒神山観音寺の賭場を取り仕切

る権利を巡って、桑名の安濃徳と神戸の長吉が争ったのが喧嘩の発端となったのである。

ついで乍ら博打のあがり金のことを「寺銭」というがこれがこの言葉の由来らしい。

この喧嘩のあと、清水次郎長は仁吉の敵討ちと称して、約五百名の手勢と大量の武器を携えて慶応二年五月、伊勢へ乗り込んだ。そこで大騒動になるところ、流石に神戸藩、藤堂藩の役人や、目明し等が軍隊迄動員して取抑えにかゝるという報せが入ったので、次郎長側は一旦ひいて後に平和裡に伊勢を傘下に入れた。

一方安濃徳側は逃げ出し、之を追っていた神戸の長吉も神戸藩の町方に追われて逃げてしまい、ついに双方共、国を売ってしまったので、だれも荒神山観音寺にはいなくなった。

国を売った安濃徳は四国へ、また神戸の長吉はこの時下総へ逃げたという。いずれも明治七、八年頃こっそり帰ってきて、間もなく相次いで畳の上で死んだといわれている。

明治政府は博徒を厳しく取り締まったので彼等は自分たちの博打うちの前歴をひた隠しにしていたため彼等の言い分は後世に全く伝わっていない。

荒神山観音寺はこの喧嘩のため、祭礼は禁止になり、賭博は廃止になったので収入はすかり途絶えてしまった。やがて明治になり廃仏毀釈の方針が打ち出されたことによりすっかりさびれてしまった。

大政達が荒神山観音寺の喧嘩のあと清水へ帰り、清水次郎長の前に出て、事の次第を報告した時傍に控えていた講釈師がこの話を記録した。この記録が後になって世に出て今日、荒神山の喧嘩話として有名になった。

この世に出るきっかけとなったのが、明治十二年、山本五郎こと天田愚庵が書いた「東海遊侠伝」である。

山岡鉄太郎は、鉄舟と号して幕末に活躍した幕府の高官で清水次郎長と懇意にしていた。この鉄舟の同輩で幕府の高官に天田久太夫という侍が居たが京都で官軍との戦で戦死した。一子五郎はこの戦のドサクサで母や妹とも生き別れになり孤児になってしまった。鉄舟はひきとって面倒を見ていたが、後難を恐れて清水次郎長に預け疎開させた。

書物は読める、字は書ける、弁は立つ、算盤は出来る、腕は立つ、と鉄舟の本格的な教育を受けていたので次郎長はすっかりこの五郎少年にほれこんでしまった。

次郎長は、自分の子供に恵まれなかったのでこの五郎少年を自分の後継ぎに決めて養子縁組を結んだ。天田五郎改め山本五郎となった。

次郎長の養子となった山本五郎は、養父次郎長の話を

聞いたり、子分達の話を聞いたり、また講釈師達の書き残した記録を整理して次郎長の一代記ともいうべき本を書き上げた。これが世にいう有名な「東海遊侠伝」で明治十七年の書である。

山本五郎が、この「東海遊侠伝」を書くには大きな動機があった。養父の清水次郎長が明治政府の出した賭博犯の処分の規則にふれ、清水の刑務所に留置されて裁判にかけられた。

判決は、禁固七年、罰金四百円と大変重く静岡の監獄へ収容されてしまった。山本五郎はなんとか養父を減刑してほしいと、山岡鉄舟に頼み込んだ。

この頃明治政府は、百姓一揆等世情不安を煽っているのは博徒であるという理由づけで主だった親分衆を次々と検挙していたのであった。

鉄舟は、すでに明治政府の高官に昇進して明治天皇の侍従を務めていた。鉄舟は次郎長を減刑するための方策を山本五郎に教えた。

「明治政府に次郎長減刑の嘆願書を出し、それに添付する書類として次郎長の人物を説明する一代記を提出しなさい」と。

山岡鉄舟の指導によるこの減刑の嘆願書は見事に功を奏し、次郎長は減刑になり一年半の服役で釈放となった。

山本五郎が減刑嘆願のために書いた、この次郎長の一代記は「東海遊侠伝」という本になった。

山本五郎は後に次郎長との養子縁組を解消して、天田愚庵と名乗り禅宗の僧となって佛教の復興に貢献したという。明治三十八年、五十歳でこの世を去った。

「東海遊侠伝」の原本は、県立静岡図書館に保管されているという。

この東海遊侠伝は十五章に分かれており、このなかの第十三章に、「荒神山の喧嘩」と題して、荒神山の争いの話が載っている。

原本のさわりの場面を記す。

『既にして仁吉銃丸を蒙り、踞下して二敵に当る。大政遥かにその急を望み、走ってこれを援けんとす。石あり、つまづき倒れる。門之助これを見、駑馬奔馬の如し双手大刀を戴き、直ちに大政を望んで来たる。大政身を起こすに暇なし、伏してその槍を挙げもってこれを待つ。この時遅くかの時早し、白刃まさに下らんとする時、槍鋒既に門之助の心下を縦す。甲堅くして入らず、撲地仰倒、両脚天に朝す。大政即ち槍をもって大いに刺して、股間よりこれを脇肋の上に貫く。間之助高叫一声、空をつかんで絶す』としている。『吾れ清水の大政なり、安濃徳の用人棒角井門之助を打ち取ったりと大音声で呼ばわれば、安濃徳側は総くずれとなり列を乱して敗送せり』

筆者の山本五郎は実際に見たわけでなく、大政らの次郎長への報告を記したものを見ただけで、あとは想像で

書き上げたものであるが見事な筆さばきである。

以来この話にはそれぞれの尾ひれがついて、今日映画や芝居で見る「血煙り荒神山」となって人口に膾炙するところとなった。

「東海遊侠伝」を文語体に改め、読み易くすると共に、物語りに面白いフィクションを加えて勝手に作り直した本が「講談清水次郎長伝」で作者は二代目神田伯山である。

荒神山の喧嘩話も神田伯山により面白い筆が加えられた。これが仁吉の恋女房おきくの話である。講談によると、

荒神山の賭場の争いが起きた時、おきくは十九才、吉良の仁吉は二十八才、二人は新婚3ヶ月、人も羨む双思双愛の夫婦であった。

そこへ神戸の長吉が、荒神山の賭場を安濃徳に横取りされたので、これを取り返したいと吉良の仁吉のところへ頼みに来た。この神戸の長吉と吉良の仁吉との間には、渡世人の世界でいう盃の上での義兄弟の契りが結ばれていた。義によって助太刀を組むことになったが、仁吉の恋女房おきくは、事もあろうに喧嘩相手の安濃徳の妹である。仁吉は人情からすれば、当然おきくの兄である安濃徳の味方をすべきである。ここで仁吉は義理と人情の板挟みになって苦しんだ。そこで仁吉は義理に身を徹して、恋女房には心を鬼にして泣く泣く三下り半を渡して離縁し、神戸の長吉の味方をして荒神山へ出掛けたのである。

このあたりが映画や芝居では紅涙を絞る名場面であり、仁吉が義理と人情の男として名高い理由はこのおきくに由来する。しかしこのおきくの話は、神田伯山の作り話といわれる。実際の仁吉の女房は、鳴海（名古屋市郊外）にあった一膳飯屋の飯盛り女を力ずくで女房同然にしていたとの説が有力である。

それでは話がブチこわしになるので、女房おきくの存在は通説通りが定着している。

戦前のことであるが、松竹の大谷社長から「おきくの銅像を建立したい」という話が吉良町に持ち込まれた。町長や町会議員が相談した結果「おきくは実在の人物ではなく、架空の人物だ。そんな人物の銅像を建てても仕方がない」と言って断ってしまったという。地元では「作るなら仁吉の銅像を」と申し入れしたが、「仁吉は博徒だから駄目」ということで、結局おきくの銅像の話は流れてしまった。どうしておきくが良くて、仁吉は駄目なのか？　それはその当時の時代背景があったからと思われる。ちょうど日中戦争が始まり、出征兵士を「万歳、万歳」で送り出す頃であり、愛する夫が戦場へ出征するのを送り出す健気な妻と、このおきくのイメージが一致するので、貞女の鏡として顕彰したかったのであろう。建てておけば今は町おこしの一環となったものと残念だ。

日中戦争が泥沼に入りかけた昭和十五年、美ち奴が歌う「吉良の仁吉」という歌があっという間に一世を風靡した。新妻となったものの夫が赤紙により、戦争にかり出されそのまま帰らず、戦争未亡人となった女性が後を絶たなかった。

「嫁と呼ばれてまだ三月、ほんにはかない夢の跡……」と歌詞の内容がこの当時の若い女性にピッタリだったのである。吉良の仁吉と恋女房おきくの別れを歌にしたものである。

「街道名物数あれど、三河音頭に笛、太鼓、ちょいと太田の仁吉どん、後姿の粋なこと」この作詩は、広沢虎造の浪曲「次郎長伝」を書き下ろした萩原四朗である。作曲は柳屋金語楼の弟山下五郎であった。虎造の浪曲の節回しを巧みに取り入れた浪曲調の歌謡曲であった。

歌手は繊細な美しい声の「美ち奴」である。哀感を込めて歌う「仁吉の歌」は大ヒットとなり、レコードは百五十万枚を売り上げた。軍国時代にありながら随分多くの人に愛唱された。

筆者も少年期によく歌った記憶がある。この歌は「あゝそれなのに」と共に美ち奴の代表作となった。当時の女性歌手小唄勝太郎、市丸と同じく彼女も浅草の鶯芸者の出身であった。

吉良の仁吉の墓がある源徳寺の境内には大きな御影石の碑に金文字で「義理と人情」と刻んである。吉良の仁吉のことを語る時、義理と人情の代名詞として有名となった。

尾崎士郎作「人生劇場」の歌詞の中に

「俺も生きたや仁吉のように、義理と人情のこの世界」

とある。

この歌は早稲田大学の第二校歌とまで言われる程歌われる様になった。更に吉良の土地柄が義理人情に厚いところと評価されるに至った。

ドラマの仕立ては史実を超えてしまうものらしい。名君吉良上野介は歌舞伎の筋書きによりすっかり悪人にされてしまった。吉良の仁吉も講釈師や浪曲師によって実像よりずっと上の人気者となってしまった。時代背景の影響は否定できないとしても、ロマンと勧善懲悪を求める庶民の心延えの結果とすれば、当然と考えなければならないのであろう。

この原稿のため机に向っていると、家人が問う。何故あなたは「やくざ者」にこだわるのかと。その答は次に述べる通り二つの理由にある。一点は愛着する故郷の物語りの主人公であること。更にもう一点は、当時のやくざ者は今の暴力団と違って、仁侠の志をもっていたから

共感を呼ぶのである。

仁侠の志とは、強きを挫き、弱きを助け、そして義に徹する志である。多少ハメを外しても大きくはブレない。今のやくざは、六億円強奪事件に関与する等アウトローの人間ばかりである。

世情の移り替りと共に任侠道も地に墜ちたものである。過ぎ去った良き時代を今更の如く心から懐かしむものである。

清水次郎長の女房三代目おてふ(蝶)は西尾藩士の娘であった

清水次郎長（本名山本長五郎（一八二〇―一八九三）は、生涯に四人の女性と結婚している。そのため実情を知らないで、次郎長は女性関係にきわめてルーズだったと、悪口をいう人もいるらしいが、しかし実際はまったく正反対で、三代目おてふを迎えるまでは、博奕打ち生活をしていたためもあるが、不運な結婚生活を余儀なくされていたのである。

最初の結婚は、次郎長がまだ米屋の商売にはげんでいる時代で、彼が十八歳の時であった。しかし相手の女性については今のところ何も解っていない。彼女とは四年あまり一緒に暮らしたが、次郎長が初めて国を売り、旅に出る時離別した。

初代おてふは、江尻大熊（次郎長の兄弟分）の義妹である。次郎長が彼女と結婚したのは二十八歳の時であった。この結婚生活は、およそ十一年ほど続いたが、おてふは役人に追われる身となった次郎長とともに旅に出て、安政5年大晦日、名古屋の侠客巾下の長兵衛のもとで客死した。このあたりの苦労話が講釈師の好個のネタとなって喧伝されている。

二代目おてふと結婚したのはいつ頃のことかわからない。また彼女の身元についても、静岡在の農家の娘とか、玄人上りとか諸説があってはっきりしない。彼女は明治二年次郎長の留守宅で暴徒に殺された。

三代目おてふは、三州西尾の藩士の家に生まれた。しっかり者だった。彼女は大正五年八十一歳で歿したが、晩年の次郎長の活躍は、彼女の力に負うところが大きかったといわれている。（この項「人間清水次郎長」戸田書店版より）

次郎長の三代目の女房が、西尾藩士の娘だったと知って早速興味が湧いて色々と調べてみた結果概略次の様に判明した。

清水次郎長は寺津間之助と親交を結んでいたが、西尾の治助（博徒で西三河一帯の香具師を取締る親分）とも仲良く付き合っていた。治助は次郎長より一歳年長である。次郎長は三河へ来ると寺津間之助の家と、この西尾

の治助の家に草鞋を脱いでいた。

明治三年、次郎長五十三歳の時である。西尾の治助の家に来て治助に女房の世話をたのみ込んだ。次郎長はその前年の明治二年に前妻二代目おてふを亡くしてこの時やもめだった。治助が世話をしようとした女性は西尾藩士江崎丹次の娘であった。彼女はこの時三十二歳で先夫との間に女の子をひとりもうけていた。

西尾の治助の家と、江崎丹次の家は共に西尾市葵町にあった。江崎丹次は四石二人扶持の西尾藩士、目付役であった。その前年、西尾藩の藩籍奉還により、失業して暮らし向きが苦しい状態にあった。西尾の治助は江崎丹次の娘が美人で気だてが良く、学問を修め、西尾藩の御殿女中に上っていた立派な女性であると知っていた。その彼女が長州征伐で戦死した夫と死別し、子供を連れて江崎家へ戻ってきたのを可哀そうにと見兼ねていた。次郎長が後妻を探していると聞いたので、この丹次の娘を後妻にどうかと思い付き、ひき合わせようと、彼女を呼び次郎長にお茶を接待するという口実で両者の見合いをさせた。

次郎長は、この女性を一目見て気に入った。次郎長の意を受けて、治助は江崎家を訪れ、父親の丹治に会って、娘さんを是非次郎長の女房に欲しいと申し入れた。江崎丹次と次郎長は初対面であった。次郎長が博徒の親分ということで丹次と娘は少しためらった。治助は「次郎長親分は大した人物です。人柄の程は私が保証するから」と奨めた。丹次の妻、江崎たきは、夫に従順な妻であったが、この時ばかりは反対をした。

「娘は、武家の嫁として恥ずかしくないたしなみを身につけさせました。たとえ出戻りしたと言っても博徒の女房にとはあまりに情けない。さぞ暮らしやしきたりに苦労することでしょう。それに清水はあまりにも遠うございます。なんとか手近な所へ住まわせて、孫の面倒も見てやりたいと思います」

丹次は深くうなずきながら妻や娘に言い聞かせた。

「この時勢のかわり様じゃ。徳川将軍様から天朝様の世の中に変った。昨年我等のご主君松平和泉守乗秩公も廃絶され、藩士も無くなってしまった。これから先、我が江崎家もどの様な苦しい生活となるのか不安でならない。娘や孫は可愛いが、手許においてこれから先どんな辛い目に合わせることか心配で夜も眠れない位である。それならいっそ請われるままに清水へ嫁にやったらどうか。次郎長どのについては治助親分が、あの様におっしゃって下さるから間違いあるまい。」

妻と娘は、丹次の言葉に逆らうことは出来なかった。

連れ子のあることを承知で「我が子同様に可愛がるから」との申し入れで不安も薄れた。常日頃から丹次は、この治助親分の人柄を信用していたので治助の太鼓判に安心して娘を嫁にやることを承諾した。治助は目出たい

と喜んで両人の祝言の仲人を務めた。

こうして江崎丹次の娘は次郎長の女房三代目おてふ(蝶)となった。江崎丹次はこの時失業中で嫁入り支度が出来なかった。替わりに先祖から伝わる懐剣を一振り授け、江崎家の形見として渡した。おてふはこの懐剣を西尾の唯一の思い出として大切に扱い、終生身近に置いていたという。現在、清水の次郎長の生家にこの懐剣が保存されている。

次郎長は清水の箕輪に新居を建て、おてふと暮らしを始めた。

西尾治助の言葉通り、次郎長は立派な人物であった。

次郎長、おてふの新居から東の方向に美しい富士山が見える。おてふは毎朝、我が子と共にこの富士を拝んだ。そして西を向き、西の空も拝んだ。その西の空の方向には懐かしい西尾がある。「父上、母上お達者ですか、私と娘は幸せに暮らしております。ご安心下さい」と毎朝心の中で西尾の両親に話しかけた。おてふは終生西尾のことを口に出すことはなかった。

しかし心の中では誇りに思い、支えにしていた。おてふは清水へ嫁してから後一度も西尾へは里帰りしていない。

清水へ嫁してからのおてふは、大変なしっかり者で一家を切り盛りして次郎長を援けたという。おてふの連れ子は、成長後嫁にいって鈴与倉庫の発展に貢献し、今日隆盛の基を築いたといわれる。

なお、吉良の仁吉には実姉おいちがいた。おいちとおてふは互いに天保六年の生まれ、偶然の一致である。二人は共に同時代西尾藩の御殿女中に上がっていたとのことである。

終

参考資料

実録荒神山　味岡源吾　㈱アジオカ
吉良の人物史　吉良町
吉良の歴史　吉良町
人生劇場のふるさと　鈴木悦道　㈲エフェー出版
新版吉良上野介　鈴木悦道　中日新聞
駿河遊侠伝　子母沢寛　文芸春秋
他

わが愛誦歌（十四）

――昭和から平成へ――

曽根竣作

○ハイパントあげ走り行く吾の前青きジャージーの敵いるばかり　佐々木幸綱

『群黎』（昭・45）所収。ラグビーの実戦経験のうたである。ハイパントは、ラグビーの戦法の一つであり、アップ&アンダー作戦で使われるキックのことで、蹴ったあとフォワードがボールを追いかけ、敵がボールをキャッチした直後、強烈なタックルを見舞う攻撃の一つである。

作者は、ラグビーの選手だったようである。この歌の外に

●ジャージーの汗滲むボール横抱きに吾駆けぬけよ吾の男よ

が同じ頃に発表されている。短歌にエネルギーを回復しようと疾走したのが佐々木幸綱の歌の出発である。敗北の抒情になりがちな短歌を、エネルギッシュに行動する歌にする。

現在、「心の花」の主宰をつとめるが、スポーツや、肉体を大いに歌い、また飲食や酒の歌を豪快にうたい「男うた」と言われる所以である。筆者も、その昔ラグビーをかじったことがあるが、残念乍ら鈍足のため常に補欠に甘んじなければならない状況であった。偶に出して貰うような事があっても、一試合でボールに触れたのが二・三回と言う体たらくであった。

それはさておき、作者の著名歌として今でも忘れ難いうたに〈竹に降る雨むらぎもの心冴えてながく勇気を思いいしなり〉がある。「むらぎもの」は「心」にかかる枕ことば。

「竹に降る雨」は竹も雨も垂直のイメージであり、ひと

り心屈しながら、ながく勇気と卑怯と自らの為すべき行為を思っている男がいる。猪突猛進が勇気なのではない。立てないと思い悩んだ果てに、それでも最後にエイッと立ち上がるのが勇気なのだと詠う。

佐々木信綱の孫として、歌を作るのが当然であるかのような環境にいながら、本格的に作歌を始めたのは二〇歳の時である。それ以来一貫して骨太く肉体感覚に富んだスケールの大きな歌を作り続けている。

〈ゆく秋の川びんびんと冷え緊まる夕岸を行き鎭めがたきぞ〉〈一国の詩史の折れ目に打ち込まれ青ざめて立つ柱か俺は〉〈去りゆくは季節、朝雲、夢、女、雄ごころは死ぬまで旅のこころよ〉〈笑う写真一枚もなき啄木の写真を並べ貼る春の壁〉

○東京の虚をかかへて笑へるかわらへるか否　いンやわろたる　池田はるみ

『妣が国・大阪』（平・9）所収。大阪弁を駆使した柔らかな文体、「笑へるかわらへるか否」とたたみかけて「いンやわろたる」と大阪弁丸出しで切り返す。作者の活躍は、いままでの歌人と少し気配を異にしている。またこんなに話術を巧みに取り込んだ歌はめずらしく、短歌と言うより歌謡に近い。

池田はるみは、大阪生まれ、結婚してより東京での存在が長い。大阪の「実」にたいして東京の「虚」という図式を、池田は自己の体験として、またテーマとして打出してくる。そう言う感じは何となく分る。東京の「虚」をすでに内側に抱えて、笑えないが「わろたる」という掛け合いのような自問自答にさびしさと意地が感じられる。笑えない東京に違和感をもつ心情がわかるようである。

いま、騒がれている大阪「都」構想にその一端がうかがえると思うのは、うがち過ぎではなかろうか。

確かに、短歌の折り目正しさ、上品さを否定するかのようにアンチテーゼに持ち、俗語を大いに取り込む自在さ、巧みさは、技術というより芸というにふさわしい。第二歌集『妣が国・大阪』あたりから自在に関西弁を取り入れ、歌謡的な情感をかもすようになった。

〈つゆの夜やきつねうどんのよろしさは相合傘のよろしさに似て〉〈螢よどうすればいい　病む汝を取り戻すべくわれは点らむ〉〈大阪の女はころとにぎやかで哀しきときもころろと笑う〉〈愛しきやし風鈴売りが通るとき江戸がわたつてゆくやうな音〉

短歌史のなかで、大阪弁のニュアンスをこれほど生かした実例はない。ただむずかしいのは、大阪弁のおもしろさは、どこか作品をすべて同じような色合いに染めてしまうことがあることだ。

〈死ぬ母に死んだらあかんと言はなんだ氷雨が降ればしんしん思ふ〉。亡き母を偲んでいる一首である。

○わが内のかく鮮しき紅を喀けば凱歌のごとき木枯　滝沢　亘

『断腸歌集』（昭・41）所収。白秋の系譜である「多磨」「形成」に拠っていた作者はやがて、新伝統主義を追及する「日本抒情派」を創刊する。伝統的な立場を保ちながら、鋭利な直喩を多用するなど、冴えた表現力をもって、病者の絶望と不安、孤独の世界を印象鮮明にうたった。

掲出歌は、彼の病（肺結核）が重度の状況に至ったとき、直喩をきわだって生かした代表歌として知られている。僅か四十一歳の生涯を閉じることになるが、その歌は歯切れが良くそこにあらわれた絶望と孤独の鋭さと深さは、療養者の短歌の系譜において非常に現代的である。〈戦争も平和も厭ひ棲みなれて重症棟の秋はみじかし〉〈時雨ふる土の傾斜を見てゐたり不治のこころは騒然として〉

たまたま、今年の十一月十四日の読売歌壇のコラム欄を読んでいると、歌壇選者の一人である栗木京子氏が滝沢亘について触れている一文がある。それは次の歌の批評である。

●透明のケースの十の鶏卵の神の順序の十日のいのち

現代の歌人・滝沢亘の名歌として、名詞と助詞の「の」だけで組み立てられているという。七つの「の」がケースに並ぶ卵の丸みを連想させて、表記の上で臨場感たっぷりの歌であると評する。たしかにその通りである。栗木京子は、このコラムで歌を作る場合、余り細いことにこだわるな、実朝の「われて砕けて裂けて散るかも」と動詞を四つ重ねた豪快さと比べている、このように個性豊かな歌に挑戦すべきと述べているのである。

滝沢亘は、戦後の肺結核歌人の一典型であり、しばしば相良宏と並称される。特徴的なのは、不治者の立場に立って、怨恨を率直にのべたことである。〈われの死を待ちて喜ぶ者のうち確実に肉親の一人二人三人〉〈人類の滅びといへどすこし愉し不治者われらの平等を得む〉。ダンディで、少し気取っていて、せいいっぱいモダンで、およそ世の療養短歌とは別の世界を築いた知的でニヒルな歌人であった。

○ビルマ翡翠の連くびすぢに冷たしとおもふはいつも秋のこの頃　蒔田さくら子

『翡翠の連』（平・20）所収。洒落たうたである。何もむつかしいことは言っていない。翡翠の連は、ビルマ特産の首飾りのことである。その冷やりとつめたい感触が、もう秋だなあとしみじみと思わせると詠む。

蒔田さくら子は、名門・府立第三高女を卒業しており、作歌を始めたのは十七歳頃であり十年間の作品を収めた第一歌集『秋の椅子』はロマンチックでひたむきな相聞歌集であった。

その後、第二歌集まで十年、第三歌集までさらに十六年を費やしている。そして、早く出発したゆえのさまざまの試行錯誤の中から、〈何か足らぬ何か足らぬといくばくの迷ひに掬ふ一匙の塩〉など自己変革への希求を感じさせる歌を含む第三歌集『婚紙金泥』が生まれる。

この間、結社「短歌人」の発行人をつとめたようだが、加齢のために引退している。五十五年間携わってきた「短歌人」の運営から退いたことも感慨は深いものがあるであろう。

新歌集のあとがきに、「加齢により歌が出来なくなったことを数えるのでなく、何が出来るかを数えて生きたい」というように、生来の前向きな精神は変わっていない。

不思議なことに、長く老眼鏡を必要としていた視力が回復し、いまや眼鏡なしに針に糸が通せるようになったとも書いている。こういうことがあるから、女流歌人はおそろしいし、以って他山の石とすべきと感じ入っている次第である。

また次のように詠う。〈生きて遇ふ今年のさくら生き旧るはまた新しきものにあふこと〉。この一首が収録されている歌集のタイトル『海中林』は、海底に根付いた丈高い海藻類がゆらゆらと絶え間なく動いている藻場のことだという。作者は、その海中林のようなものが自分の中にもあり、矛盾や予期しない衝動や記憶の覚醒などを促すのではないか、と記している。「新しきもの」に会うのは偶然ではない。達観とも悲観とも遠い、みずからの窺い知れない海中林のようなものを内に抱えているからこそ会うのである。それがこの歌人にとって「生き旧る」ことにちがいないのであろう。〈いつもそこで狂ふレコードの瑕のごときを身に持てりけり〉。

○風を従へ板東太郎に真向へば塩のごとくに振りくる雪か　石川一成

『麦門冬』（昭・50）所収。集中、板東太郎とあるのは利根川の別称である。まんじ（一二一号）に掲載した玉井清弘の四国三郎が、吉野川のことを意味するのと同じである。別称と言うより、どちらかと言うと愛称と呼びたい。

石川一成は、昭和二十五年に「心の花」に入会している。「沈黙を詠う歌人である」と先の佐々木幸綱は書き、また、「存在への意志を基幹として、郷土・自然・血族等、人間が生きることにとって最も重たいものを歌いつづけて来た」と「心の花」の同僚達に批評されている。この二つの一成感は、見事に一成の歌の世界を言い得ている。

石川一成は、東京文理科大学漢文科を卒業し、神奈川教育センターを経て、中国四川省重慶で日本語教師二年、帰国後高校教諭を勤める。この間、藤沢市民短歌会の会

長をつとめ、筆者をはじめ多くのうたに志す者を、何くれとなく指導してくれた実績がある。好事魔多しというが、その石川一成が昭和五十年代の終り頃、部下の出版記念会の相談のあと、帰宅途中にトラックに軋かれる大事故があり、惜しくも一命を失うことになった。

〈家を継がざる長子にたゆし葬列の白き旗みなひるがへりゆく〉。「麦門冬」の中の一首である。千葉県佐原生まれの石川が、何故家を継がなかったのか、今は不明であるが、それだけに彼の中には故郷の板東太郎（利根川）が脈々と流動しており、彼は、憑かれたように村を村人を剛直に柔軟に凝視してうたった。〈酔ひて臥すおのが瞼に浮かびたり泥田のなかを這ひゆける叔母〉〈死なむとして見しことのある沼の面小さき乳牛の角うつしたり〉。酒を飲んでも「故郷」の叔母を思い、帰郷しては、少年の日に自死を願った沼辺に来てしまう自分への決着があった。

〈関東の夜明け此処より始まるとふるさとを庇ふ姿勢にねむる〉。彼の歌は、故郷と血縁への鎮魂であり、彼自身への鎮魂でもあり、何より現代とちがった骨太のおとこ歌を感ずる次第である。夭逝を悼む。

○後ろより誰か来て背にやはらかき掌を置くやうな春となりゐつ　稲葉京子

『宴』（平・14）所収。なんでもない春の光景が、柔らかなタッチで人肌を感じさせるものになっている。二句目の3・2・2の細かい息づかい、四句目の2・5のリズム、このことによって、結句が生かされているのであろう。短歌のもつ微妙な韻律の力学によって出来上がった一首である。

稲葉京子の歌は、なめらかな整調を持ち、短歌らしいといえば、その作品ほど、そんな言葉にふさわしいものはない。文語定型をはずさず、季節を歌い、家族を詠う。あるいは人生や、境涯を草木などに託して詠む。回想詠も可成り多く見られるが、いずれも甘やかで、美しい。

「らむ」「けり」「たり」といった助動詞を、稲葉は自在に駆使し、自分の情感を高めてゆく。また、近年、流行の口語調にこころを動かすこともないし、生々しい時代や社会の出来事を直接詠むことはしない。そういう対象は、決して歌いたいものではない。

破調や句割れ・句跨りもほとんどないのであろう。五七五七七からの逸脱にはすこぶる禁欲的なのである。そのなかでいかに作品世界をきづき上げるか、その一点に賭けているといっても過言ではあるまい。いきおい、作品が純粋短歌精神に拠っており、古典的な雰囲気を醸し出すのはそのせいである。

〈恢へがたし信じがたしとながらへて人は今年の花を浴びをり〉〈細枝まで花の重さを恢へゐる春のあはれを桜と呼ばむ〉〈遠く見てましろの桜近づきて一花一花の

うすくれないるや〉等さくらを歌った作品が多いのも特徴である。〈白き蝶ひったり翅を合わせたりかくてさだまる定型の律〉〈次々に子を発たせたるがらんどうの母のやうなる駅の夕焼〉〈どの雨をわれは思ふか一つ傘に音して降りし若き日の雨〉。子どもが独立し、近年の作品にただよう気配はさびしさである。そういう年齢にさしかかっているにちがいない。稲葉自身も感じていることだが、作者の抒情が、年齢とどのようなコラボレーションを作り出してゆくのか、これからのたのしみである。

参考文献
現代歌人二五〇人（牧羊社）
現代名歌鑑賞事典（桜楓社）
現代百人一首（朝日文芸文庫）
現代短歌の鑑賞事典（東京堂出版）
現代の歌人140（新書館）

祝出版

太平洋戦争
瀧澤　中著
日本文芸社　1,600円

日本は、なぜアメリカに敗れたのか

短歌　三十首

曽根竣作

はらりと白く

月の夜を体ふくらみて木菟（づく）ひとつ森の奥処に闇へいげいす
手触れなば紫紺沁みくる思ひする微風の池にあやめ立ち立つ
水平線に赤き落暉のしづみゆく天動説を信じたくなる
風を捲き特急すぐる黄線（きいせん）を鳩らならびて首のべありく
沼べりの夕日のなかを水馬（あめんぼう）疾（と）く走りたり水のおもて

さゐさゐと夾竹桃の紅さやぐ防風林のかの日を辿る

砂山に大き影おきばさらなるすがたうつして鳶の駈けゆく

いつせいに蜩のこゑぴたと止むもしやリーダーと掟あるらん

戦捷のうたげに見掛けぬ奴が居るあの激戦中どこに居たのか

清流に長く棲みゐて鰍の身はらりと白く箸にかからず

髀肉の嘆

白南風にたてがみ吹かれ汀駆く　むかし乗りたる葦毛の光り

いっさんに水際を走る一頭の葦毛にまたがり手綱をしぼりき

〝鐙上げ〟教官の声鋭くひびく馬上に脚を締めて追い掛く

ハッピーと小牝馬すらりとわが乗れる逞しさもはや過去のもの

すでにして髀肉の嘆をなげかへど乗馬の巧みここにかへらず

「乾く」とは滅びの兆し雨後の枝に蝸牛したすら滑りを保つ

兜町白き紙くづ吹きたまり不況ふきやうと夏陽にあへぐ

改札とふこの世の結界ふりむかず夏帽の友逝きていくとせ

「あの戦争(注)と日本人」とふ読み継げり棕櫚にざんざと白雨のしげし

惜し気なく三千の命ここに消ゆ戦艦「大和」は誰が指令ぞ

(注)「あの戦争と日本人」半藤一利著文芸春秋社刊

二十年まへ

影ながく曳きて静かな笛間を浮かぶ蝌蚪あり明日の変身

うす笑ふ「麗子」の像に妖気立ち大正ロマンのいっぱしを見る

舞ひ下りし鳩らあそべる踊り場に死臭ただよふ午後の空ビル

見下ろせばテール・ライトの連なりて衣帯あかあか坂下りゆく

煌々とコンビニの灯り浮き立ちてシャッター通りに寒風の吹く

あれはもう二十年まへ河骨の湿原に汝れのかんばせ揺れて

光り降る窓外黄葉かがよひて付録のごとき秋の夕ぐれ

流燈に小さきさかづき乗せてあり生前きっと飲んべゑたりしや

水澄める側溝に浮くすずむしよ昨夜鳴きてゐし美声の一つか

栗の花匂ふおそなつ女教師の羅のブラウスのまぶしかりし日

短歌

行雲流水（三十三）

石黒修身

近詠三十首

出羽三山

神無月卯歳御縁に詣でたる出羽三山は秋色迫る

庄内は懐深く三山を抱きて古き歴史を守る

芭蕉巡り茂吉崇ぜし出羽三山祖霊の峯は鎮もりてあり

祭神は月読命「月山」は祖霊まします慈悲の山とぞ

月山の八合目にて留まれり霧と風雨で頂も見えず

「森敦」山を敬い怖れたり「月山」を著し霊験を説く

「月山」は「すべての吹きの寄するところ」と「森」は言う存念はなに

「死者の行くあの世の山」か「月山」は月に還りし「森敦」偲ぶ

先導の山伏の吹く法螺の音が殷殷として羽黒の森へ

「湯殿山」裸足で熱き湯を渉り「他言無用」の誡(いましめ)を識る

鎌倉散策

「川端」の自死のことなど想いつつそよぐ風にも「山の音」聞かむ

「瑞泉寺」参道辿る道筋に媼の小舗と「平山邸」あり

奥津城は瑞泉寺にあり湘南を奔放に生きし「立原正秋」

文人の奥津城あまた鎮もれる瑞泉寺詣づ夫々の碑が

鎌倉に若き日のあり「吉井勇」流離の詩魂いまにし偲ぶ

若き日々瀟湘湖南の「勇師」は青春の抒情いくつか詠めり

チャリティの終りしホール出でしとき七里ヶ浜に夕暮迫る

鎌倉で詩歌の想を探らんと歌詠むわれは今日またあそぶ

国立モスクワ合唱団（23/10月オペラシティ）

大いなる合唱団は荘重に古きロシアの民謡唱う

合唱を聴けば瞼に曽遊の地「サンクト」「モスクワ」そして「ヴォルガ」が

民謡のルーツを尋(と)えば素朴なるスラブの民の魂の叫びが

重厚でそして哀調かの唄は果てなき荒野と素朴な抒情

年齢高き男女集いて若き日を回顧して聴くロシア民謡

日常他

故郷に無音の友を尋ぬれば既に亡き人惚けし人も

札幌で罷出でしは吾育ち遊びしあたり「円山、藻岩」

経済の停滞著るきこの国の「円」が買われる歪さは何

関税の障壁払うＴＰＰ功罪ありて国論割れる

「フクシマ」を励ます心温かく小さき国の王は語れり

生産(P)にまさる幸せ(H)国是としＧＮＨ高き国を羨しぶ

国民の心に響く数々の言の葉残し王は離日す

「出羽三山」補遺――三人の文人

二十三年十月山形県の出羽三山（月山・羽黒山・湯殿山）を巡る小旅行をした。

天候に恵まれず、特に月山は八合目で留まらざるを得なかったが、羽黒山、湯殿山は通常のコースを歩くことが出来た。

筆者の予てからの願望であった三山に係る詩歌と小説の舞台を目のあたりにすることが出来、僅か二日の行脚ではこの程度のものかと、それなりに満足している。

以下に三山に係る作品を残した三人の文人につき、思いつくまゝに簡記する。

一、芭蕉

芭蕉は、「おくの細道」の中で、「総じてこの山中の微細行者（身分の低い）の法式として他言することを禁ず。よつて筆をとどめてしるさず」とある。

句碑に

●語られぬ湯殿をぬらす袂かな

他に羽黒山を詠む一句

●涼しさやほの三明の羽黒山

二、斎藤茂吉

茂吉は、自らの郷里の風習に従い、少年期に三山に参り、昭和三年四十七才のときに再び三山に参拝し次のような和歌を詠んだ。

●わが父も母もいまさぬ頃よりぞ湯殿のやまに湯はわき給う

湯殿山の大鳥居の傍らに高さ三米を超す歌碑がある。

他に三首を挙げる。

●いつしかも月の光はさし居りてこの谷まよりたつ雲もなし

●羽黒山まうでて来ればくれないの杉のあぶら落つ石のたたみに

●みちのくの出羽のくにに三山はふるさとの山恋しくもあるか

三、森　敦（一九一二～一九八九）

昭和四十八年、六十一才で芥川賞受賞した作家で、受賞作品が「月山」である。

「すべての吹きの寄するところにこれ月山なり」をネガティブなモチーフとして、「死者の行くあの世の山」と月山を呼びこの小説は書かれている。

月山を霊験な修験者の山として描き、素朴で土俗的な雰囲気の中で、このモチーフを貫き物語を展開している。

森が長期にわたり滞在し、この小説の題材を得た「注連寺」には、「すべての吹きの…」の文学碑が残されている。

（完）

俳句

梨の実

勝山道子

元旦に又々米寿祝われて
あれこれと想いめぐるや年始め
松竹と梅配置よく床きまり
土佐みずき庭一隅を黄に染め
寒すゞめ己の影にとび立ちぬ
チュリップ咲いて女乙の立ちすがた
ベェネチヤも水ゆたかなり五月空
笠松のローマは静止夏休み
訪れた古都のトルコに地震とは
戦争と青春重なる夏しぐれ
幼な顔残した兵の敗戦忌
わが悔は戦争参加の終戦日
六十年(むとせ)なり稲城の郷の菊日和
収穫の梨実終り冬間近
写生した椿三輪あでやかに
一面に蕎麦の花咲く佐久の丘
車椅子押されて医院ドアぬくし
高速道すゝきなびいて後を追ひ
野梅咲く時期が待てるか老の暮
臘梅のすかしの花弁(かべん)あらためて
引揚の記録読みかえそゞろ寒
名も知らず手折りて歩けばホップなり
散歩道惜しげなく踏む草紅葉
盆棚に茄子足つけて歩むごと
秋風に何を語るやめじろかな。
ゆらゆらとたわむれるごとすゝきゆれ
満開の曼珠沙華咲く絵手紙に
夢多き友は逝きたり桐一葉
麦草の車は濃霧突き抜けて
秩父寺投句芽ぶきが選となる

潮騒錄（六七）

鯨游海

賀壬辰春　　平成廿四年元旦

誰觸逆鱗原子虹
不能制御萬方窮
亢龍雖暴自知悔
天網恢恢人智空

押韻・虹窮空

〈壬辰の春を賀す〉

誰か触れしか逆鱗に　原子の虹の
制御する能はず　万方窮まる
亢竜暴ると雖も　自ずから悔いを知る
天網は恢々たり　人智は空し

〔注　解〕

逆鱗＝竜の喉に逆さに生えた鱗。これに触れると竜は怒り人を殺すという（韓非子・説難）。逆＝ゲキは漢音、ギャクは呉音。逆鱗と逆旅の二語は漢音で訓む習慣。原子虹＝虹は太古、竜の一種と考えられた。ここでは虹の七色の光を「人類の夢と希望」を托した原子力発電と掛けた。

萬方＝凡ゆる手段。万策。

亢龍有悔＝易経・乾卦「天上に亢り詰めた竜は後悔する。頂点に立つと驕慢となり戒慎しないと下界に墜ち敗亡する運命に在る」という戒め。ここでは科学技術の粋を極めた筈の原発事故を指す。

自知悔＝一時は暴発した竜だが天に悔悛させられた。

天網恢恢＝老子「天網恢恢疎而不漏」。恢は広く大きい。天が張る網は広大で一見粗いが悪を見逃さない。

〔口語訳〕

一体誰が人類の夢と希望を托した原発の急所＝逆鱗に触れて竜を怒らせ暴発させてしまったのだろうか。

制御不能となり万策尽き、人々は恐怖に立ち竦んだ。

天上を窮めたと過信した竜は驕慢にも一時暴発の限りを尽くしたものの、遂に戈を収めつつある。

天が張る網は恢く、この暴発を見逃さず竜をして悔悛せしめる所となったが、一方人間は為す術がなかった。

☆賢しらに驕るを休めよ竜も人も
あくまで蒼き天仰ぎ見ん

木下龍太郎作詞「二宮金次郎」漢譯詞三首連作其一　　平成廿三年六月

粒粒苦辛遙異鄉
揮鍬漸穫掌中糧
銀波禾黍今如海
男體山頭金次郎

押韻・鄉糧郎

〈木下竜太郎作詞「二宮金次郎」の漢訳詞三首連作その一〉

粒々苦辛す　遥かなる異郷に
鍬を揮って漸やく穫たり　掌中の糧を
銀波の禾黍　今海の如し
男体山頭の　金次郎

〔注　解〕

粒粒苦辛＝こつこつと苦労し努力すること。米の一粒一粒は、農民の辛苦の結果である。李紳・憫農「粒粒皆辛苦」。平仄の関係で辛苦を転倒して用いた。なお粒は元来穀物の粒であるが、この重言の場合は流れ出る汗粒にも転用している。

禾黍＝稲ときび。史記・宋世家「麥秀漸漸兮禾黍油油」米などが盛んに生長しているさま。

〔原　詞〕

こぼれた籾の　一粒さえも
両手に余る　米になる
鍬を振るって　拓いた土地は
貧しく生きる　人のため
男体おろし　受けて立つ
情　二宮金次郎

又・其二　　平成廿三年六月

家乏無油闇憮然
自栽菜種點紅蓮
讀書爲衆琢磨己
生地相州酒水邊

押韻・然蓮邊

〈又・その二〉

家乏しく油なく　闇に憮然たり
自から菜種を栽え　紅蓮を吳せり
書を読み衆の為に　己を琢磨す
生地は相州　酒水の辺り

〔注　解〕

家乏無油＝晋書・孫康伝「家貧無油　嘗映雪讀書」。「蛍雪の功」の出典となった文章。平仄の関係で貧を乏に替え用いた。

憮然＝失望するさま。失意のようす。

紅蓮＝眞っ赤な炎の色の形容。蓮は蓮の花（仏）。

讀書＝漢語では「学問する」意で用いられる事が多い。

相州＝相模の国。金次郎は小田原市栢山村に誕生した。

酒水＝酒匂川の漢語表現。

〔原　詞〕

自分で蒔いた　菜種の灯火
本なら読める　暗くとも
今日の苦労は　明日のために
心を磨く　糠袋
弟たちの　親代わり
生まれ相模の　酒匂川

《漢詩の流れ56・清その五》袁枚

袁枚（一七一六～一七九七）、字は子才、号は簡斎、随園先生とも。進士。各地県令の後四十歳で官を辞し南京に随園を築いて隠栖した。江南文壇の重鎮として門弟多数。特に女弟子五十人を集めたとして有名。

詩風は感情をありのままに発露する性霊説を説え、王漁洋の神韻説、沈徳潜の格調説を批判した。

苔（こけ）

白日不到處　白日到らざる処
青春恰自來　青春　恰も自ずから来る
苔花如米小　苔花　米の如く小さきも
也學牡丹開　也た牡丹を学んで開く
（日の当らぬ所にも春はちゃんと訪れてくれる。苔の花は米粒ほどに小さいけれど、一人前に牡丹の花の真似をして咲いている）。

意有所得雜書數絶句（意に得る所有り数絶句雑書す）

莫說光陰去不還　説う莫れ　光陰は去って還らずと
少年情景在詩篇　少年の情景　詩篇に在り
燈痕酒影春宵夢　灯痕酒影　春宵の夢
一度諷吟一宛然　一たび諷吟すれば　一に宛然たり
（光陰は過ぎ去れば二度と還って来ないなどと言うものではない。若い頃の情景は詩に残っている。灯影も酒痕も春の夜の夢も一度詩を吟ずればそっくり眼前に浮ぶ）

又・其三

平成廿三年六月

金殿玉樓留不聞
朱門碑碣盡苔墳
借恩當返德當積
浄土人皆無一文

押韻・聞　墳　文

〈又・その三〉

金殿玉樓　留まるを聞かず
朱門の碑碣　尽く苔むす墳たり
借恩はまさに返すべし　徳はまさに積むべし
浄土は人皆　無一文

〔注　解〕

朱門＝金持ちや権門家の象徴。朱塗りの門が多かった。

碑碣＝碑は方形の、碣は円形の石碑。石に刻んだ銘文。

〔原　詞〕

金蔵建てて　残してみても
持っては行けぬ　あの世まで
借りた恩なら　お礼を添えて
世間に返し　徳を積む
生まれた時も　無一文

仏　二宮金次郎

信濃旅日記

田寺怜葦

平成二三年十月一二日～十四日

久しぶりの一人旅。
というよりも旅に出るのは何年ぶりだろう。
そろそろ一人旅でもしたいなと考え始めたころに
三月十一日の東日本大震災が起こった。
旅行気分などたちまちのうちに消え失せ、くり返し起こる余震に怯えた。
おまけに危惧していた福島原発の状況は悪化するばかり。
大地も人も傷つき、回復するまでには途方もない時間がかかるだろう。
八ヵ月経った今も、被災地の人々の生活はあてどなく不安定だし、
崩壊した原発はいまだに危険状態から脱することもできず、
不気味な放射性物質を垂れ流し続けている。
政治も経済も世界的に不穏だ。
思い上がった人間の価値観がガラガラと崩れ始めているような気がする。
とはいえ昨日と何も変わらない平和な日々を送る無力な自分は、
ちっぽけな保身とちっぽけな不満をかかえながら人生の川底を転がっている。
あるネットワーク・サイトで仲良くなった友人が、
ブログで御朱印帳なるものを紹介していた。
彼女の故郷でもある長野の善光寺と戸隠神社の御朱印と文字がすてきだった。
「そうだ、長野いこう」

横浜駅から湘南新宿ラインで大宮へ。
大宮からは長野新幹線「あさま」で長野駅まで一直線だ。
長野新幹線はトンネルが多く、山国に入っていく実感でワクワクする。
うす青い山並を遠くに眺めながら、軽井沢を過ぎると次が長野だ。
長野旅のファースト・ランチはもう決めてある。
長野鉄道の吉田駅というところにある「米夢食彩・こ町」の―北信濃御膳―。
お米にこだわりのある店らしく、この御膳には古代米を使っているらしい。
吉田駅から歩いて約3分、ありました「こ町」。
ロッジ風の建物で小さなテラス席もある。
お天気も良いので、迷わずテラス席へ。
建物の一部には精米所とか、おにぎり販売所とかもあり期待感が強まる。
おにぎりは十以上も種類があって楽しそうだが、ケースの中は空っぽ。
二時近いので、早くも売り切れなのか。
御膳を待ちながら、さわやかな秋の風を楽しんでいると、
淡い銀色の光が目の端を横切った。
見ると、美しくも愛らしい一匹の猫がすわっている。
急いでカメラをさがして猫に向ける。
触りたい衝動をおさえきれずに猫に近づくと、猫は逃げ出した。
しばらく追いかけまわしたが、とうとう垣根の向こうに消えてしまった。
「あのこ、まだ人慣れしてなくて触らせてくれないんですよ。
1ヶ月くらい前に迷い込んできたんです」
注文の御膳を運んできた女性が笑いながら言った。
「そうなんですか、きれいな猫ですね。名前は？」
「なかなか触らせてくれないからオスかメスかもわからないんですけど、
すずちゃんて呼んでます」
「すずちゃん！　かわいい名前」
すずちゃんは食事の間とうとう姿を現さなかった。
待望の北信濃御膳は美味しかったけれど、量が多くて残してしまった。

◇小さなお釜で炊きあ上げた古代米（合鴨農法の農家から仕入れ）
◇そば団子入り味噌汁（団子の数多し）
◇高野豆腐を巻いた玉子焼き十つけ合わせのふき味噌
◇きゅうりとイカの甘酢和え
◇メンチカツ三個十トンカツ二個（小ぶりだが味はいまいち）
◇漬物少々（やま芋の漬物が美味しい）
◇小さなおまんじゅう（食べられなかった）

食べきれないまま箸をおくと、リンゴを三切れほどのせた小皿が出た。
「長野じゃなくて青森のなんですけど、よかったらどうぞ」
せっかくの好意なので食べないわけにはいかない。
はち切れそうなお腹をもてあましていると、またすずちゃんが現れた。
やっぱり触ろうとすると逃げるが、しばらくするとまた近づいてくる。
この思わせぶりはきっと女のこにちがいないと確信。
代金一二八〇円を払いながら先ほどの女性に尋ねる。
「来るときに善光寺下って駅があったんですけど、
あそこから善光寺へ行けるんですか」
「はい、行けますよ。
少し登りで、一〇分くらい歩きますけど」
「そうですか、じゃあ行ってみます。ごちそうさまでした」
善光寺までの道は、ふくらんだお腹をへらすのにはちょうどいい距離だった。
家と植物が同じくらいの割合にあるのどかな道だ。
時々見かけるコスモスが可愛い。
ゆるやかな坂道の途中に世にもみごとなザクロの木があった。
生いしげる枝はきらめくような緑にあふれ、ここかしこに大きな赤橙色の実が重そうについている。ザクロの実も木もめったに見ることがないので、しばらくの間写真をとったりしてザクロの木を堪能する。
やがて道は善光寺の裏手駐車場あたりへと出た。
個人的好みでいうと善光寺は美しいお寺だと思う。
どっしりと力強く、静かでゆるぎない精神を感じさせてくれる。
信州の山々に囲まれた清浄な空気の中にこそふさわしいお寺だ。
特に屋根が美しいと思うのですが、残念なことにちょうど屋根の修復工事中でした…。
御朱印帳をいただき、印と文字をいれてもらう（有料）
境内を散策していると、鐘楼の鐘がいいタイミングで響き渡った。
魂まで浄化してくれるようないい音色だ。
本堂に入り、「お戒壇めぐり」の券を買う。
来る前にネット検索したところ、現代では経験できない真の闇が体験できるとのことだった。真の闇？　想像もできない。
まず、本堂の御本尊の前に座り、お焼香とお祈りをしてから地下入り口へ。
入口に、腰のあたりで右側の壁に手を置いて進むようにという説明書がある。
中は真っ暗で、手の平で感じる壁だけが唯一の道案内だ。
壁は磨き上げられた木の感触がする。

いっこうに目が闇になれるということがなく、すり足で数センチずつ進んで行くしかない。後ろにいる若い男女のグループがやかましい。
ひとりの女のこが「怖い、もどりたい」と半泣き状態で、男のこが一生懸命に励ましている。
壁面にぴたりとつけた手の平に気持ちを集中していると、所々に太い丸柱のような出っ張りが感じられる。
時間の観念が消え、闇は果てしないように思える。
もし壁から手を離してしまったらと考えるだけで怖ろしい。
しばらくして、手が金属のドアハンドルのようなものに触れた。
動かすとガチャガチャという金属音がする。
これが浄土への鍵という設定の物のようだ。
単調な闇の中で、手の平が感じた異質の感触が気持ちを勇気づけてくれる。
この金属のハンドルは人生の中での希望にあたるものではないだろうか。
希望がなくては人は前に進んで行けない。
それからしばらくすると闇が少し薄くなったような気がした。
闇はしだいに薄くなり、やがて物が識別できるようになると、光の向こうに出口の階段が見えた。
数分間だったのだろうが、果てしない闇に身を沈めて、やっと光の中に浮かび出てくることができたという気持ちがする。
これは本当に素晴らしい経験だ。
本来は僧侶の修行のための一過程らしいが、なんと頭の良いシステムだろう。
百万、千万の言葉の教えよりも、この数分間の体験が信仰の何たるかを実感させてくれる。何かにすがらなければ生きていくことが出来ない、人間というものの弱さを知らされる。
山門にある高村光雲作の仁王像は白くほこりが積もり、それが返って一層の立体感とリアル感を高めているように見えた。力強い傑作だ。
善光寺前の参道はとても美しくて気持ちが良い。
歴史のありそうな蕎麦屋も多く、できれば食べていきたいところだが、
重かったランチのせいで一向にお腹が空かない。
きれいな建物が並んでいる中に、とりわけ目を引く古いビルがあった。
現在は旅館になっている様子の建物で、アールデコ様式が素敵だ。
長野は冬季オリンピックがあったせいかお洒落で近代的な町になっている。
整然と整備された町並みを楽しみながらしばらく歩く。

長野駅まで歩けないこともないのだが、足が少し疲れてきたのでバスに乗ることにした。今夜の宿は長野駅東口のホテル・サンルートだ。

出発前からの睡眠不足で昨夜は眠れるかと思っていたのに、やはり興奮気味なのか熟睡できなかった。日ごろの夜型生活のつけがまわっている。

それでも旅に出ると不思議に早起きが苦にはならない。

ミニバイキングの朝食は美味しかった。

今日はいよいよ本命の戸隠だ。

駅前の7番バス停から1時間くらいで行けるらしい。

バス停前にある券売所で、往復と一部区間乗り降り自由という特別券を買う。

連休明けの空いている日程をえらんできたが、やはりそこそこの人数は並んでいる。「戸隠キャンプ場行き」というバスに乗車。

乗客が乗り、バスのドアが閉じると、運転手が案内のアナウンスを始めた。

とたん、車中に「ええっ！」というような、ため息とも感嘆とも知れぬ声が満ちた。運転手の声だ！　声だけじゃない、そのしゃべり方も、何とも個性的なのだ。張りのある、がらがらとしたような不思議な声としゃべり。

誰かに似ているような…そうだ、ドナルドじゃないか！

ドナルド・ダックそっくりだ。

車内の空気はがぜんウキウキしたものになった。

ドナルドがアナウンスするたびに、あちこちでくすくす笑いが起きる。

バスは市街地をぬけ、やがて山間部へ入っていく。

今日の予定は、まず戸隠神社の奥社まで行き、奥社へ続く壮大な杉の参道を歩く。それからまたバスで中社へもどり、そこにある「うずら家」という有名なお蕎麦屋さんでお昼をいただく予定だ。

「奥社前」は終点のひとつ手前のバス停になる。

戸隠は神社だけでなく、キャンプ場やゴルフ場などの施設も多いようだ。

標高が高くなり木々の紅葉が目立ちはじめると、あちこちに別荘や保養施設のような建物が見られるようになってきた。

軽井沢などに比べると、全体的に落ち着いてシブイ感じがするのは山が深いからかもしれない。いくつかの停留所を過ぎて―そのたびごとに乗客はドナルドのしゃべりに笑った―バスは奥社前に到着した。

降り際に運転手の名前を盗み見ると、（長峰正明）とある。

バスを降りて、わざとらしくなく振り返ってみるとフロントガラス越しに見えたその顔は！　まさしく笑いの神様だった。

長峰さん帰りも会えたらいいのに。

バスを降りると、そこはひんやりとした清らかな空気に

満ちていた。

ここから深い木々の中を辿る奥社までの約2キロの参道が始まる。

紅葉が始まった道の両側はまるで秋色の洪水のようだ。

あまりの清々しさと美しさに歩いては立ち止まり、止まってはまた歩く。

足早に過ぎていくには素晴らしすぎる道だ。

途中、林の奥のほうに7、8匹の猿の群れを見かけた。

子猿も数匹いて、低い枝から飛び降りたり、跳ねたり、のびのびと楽しそうだ。

赤い長屋門のような山門を過ぎると、パンフで見たとおりの巨大な杉並木がつづいている。

二本の杉が根元でひとつに合体しているもの、三本が合体したもの。

それぞれが樹齢一〇〇年以上は経っていそうだ。

長い杉並木を歩いて奥社に近づくと、道は登り勾配がきつくなり、あまり整備されているとはいえない石の階段に変わった。

誰もが息を切らせて寡黙になっていく。

果てしなく思えた階段を登りきると頂上の奥社だ！

道程が長かったぶんだけ感動も大きい。

神代の昔、天照大神が天の岩戸に隠れてしまわれた時に、その岩戸をこじ開けて二度とお隠れにならないようにと、大きな岩戸をほうり投げたら、この戸隠山まで飛んできたという伝説の神社なのだ。

そのとてつもない力もちの神様、天手力雄命（あめのたぢからおのみこと）がこの奥社に祀られている。しかし、ここにはそれ以前からの神様も祀られていた。その先住の神様が、九頭龍大神（くずりゅうおおかみ）だ。

九頭龍神は古来より雨乞いの神、虫歯の神、縁結びの神として信仰され、

心願成就の神徳高く、特別の信仰を集めているらしい。

両方の神様に参拝して九頭龍のお守りを買う。

もちろん御朱印もお願いした。

帰り道は下りになるので、急なランダム石段が怖そうだ。

やっと石段を降りて、杉並木にもどりほっとする。

秋色の落ち葉をひろいながら帰り道を楽しむ。

自然界がつくりだす色は途方もないバリエーションにあふれて、

画にも写真にも再現などできないと思ってしまう。

再びバスで中社へ。

中社参拝は後まわしにして、さっそく「うずら家」をさがす。

「うずら家」は中社のすぐ近くにあった。

あたりには何軒もの蕎麦屋があるが、やはり「うずら家」の前には十人余りの人が並んでいた。さっそくリストに名前を書き込み、店先の縁台に腰を下ろした。縁台のそばに大きなストーブがあるのにはちょっと驚いたが、し

ばらくして納得。まだ十月中旬とはいえやはり深山、体が冷え込んでくるのだ。
待っている間に店先に並べられている土産物を見る。
野沢菜、そばまんじゅう、そばセット、どれも美味しそうだ。
まとめて宅急便で送ることにした。

順番がきて案内されたのは二階の座敷席だった。
「椅子席が空いてませんので、お座敷席でもよろしいですか」と店員が恐縮して言う。「ええ、いいですよ」
この店はいくら混んでも相席はしないようだ。
この店のポリシーである「一期一会」の心が、店のサービスによく行き渡っているのが感じられる。
そんなに大きな造りではないが、なかなかお洒落で、居心地の良いインテリアだ。食事を終えたばかりの隣席のカップルが空っぽのざるをみつめていた。
「もっと食べたいね」
だいぶして、待望の天ざるがやってきた！
冷たい蕎麦がおすすめだという店員の言葉にしたがってみた。
見まわすとたいていの人がざるを食べているようだ。
おろし金に生わさびが添えられていて、わさびと大根おろしでいただく。
「ほんとにうまい！」
今まで食べた蕎麦の中で一番といえる。

きのこやエビ、さつまいもなどの天ぷらも衣がうすくて軽くて絶品だ。
夢中で完食した後で思った…「もっと食べたい」
この、「もう少し食べたい」というお腹状態が美味しい食事のキーポイントかもしれないと気づいた。さすがです「うずら家」さん。

中社は「天八意思兼命」（あめのやごころおもいかねのみこと）がご神体。
知恵の神様で、試験合格、商売繁盛、開運などのご利益がある。
人間お腹がいっぱいになると神経も緩慢になるようで、ここではふたつの失敗をしてしまった。
中社の建物内に入らなかったのだが（果たして入れたのか？）中社の中にはあの天才絵師、河鍋暁斉の龍の天井画があったのだ。
帰りのバスでパンフを読んでいて知った。―地団駄―
もうひとつはバス停のそばの排水溝にロットリングを落としてしまったこと。
来る前に友人にすすめられてネットで購入したものだ。
メモや小さなスケッチをするのにと、この旅のために買ったのだ。
シャーペンと黒赤のボールペン機能があるかっこいいものだ。

排水溝にはちゃんとコンクリートのふたがあるのに…よりによって数センチの小さな穴めがけてノートにはさんでおいた新品のペンは飛び込んで行った。
「あ～あ　なんでぇ～」
うらめし気に小さな穴をにらんでしゃがみ込んでいた。
「どうしたのぉ」
おばちゃん軍団が近づいてきた。
「何かおとしちゃったの？」
「…大事なペンをここに落として」
「あら大変！」
おばちゃんは次のおばちゃんに伝達する。
「大事なペンをこの中に落としちゃったんだって」
「そりゃあこまったわねぇ。深そうよね」
「流れもけっこう速そうじゃない」
「こりゃあ無理だわね、とれないわ」
おばちゃんたちは口々に言いたいことを言うと、何事もなかったようにぞろぞろと去って行った。何だったんだ…。
「あのペンはここに残りたかったんだ」と思うことにした。
帰りのバスはドナルドとは正反対の印象のうすい大人しげな運転手だった。

長野駅近くのドトールでお茶をしながらこれからのスケジュールを考える。
長野の市街をもう少し散策してみようとも考えたが、戸隠の感動が大きくてあまりその気にならない。まだ時間は少し早いが上田に移動することにした。
上田は新幹線ならひと駅だが、JRだと1時間近くかかりそうだ。

上田駅に着いた時にはもうすっかり夜になっていた。
長野駅界隈のにぎわいとはちがい、さびしげな町だった。
「目覚まし食堂&プラザホテル」を探す。
歩き始めてすぐに、プラザホテルという文字が古いビルの間に縦長に読めた。
入口は薄暗く、目覚まし食堂がありそうな奥の方は真っ暗で人影もない。
狭い階段のわきに小さなエレベーターが一台。
気がつくと左右の壁がガラスのショーウィンドウになっていて、ほこりをかぶったような画が何枚か飾られ「プラザ・ギャラリー」と書いてある。
「ほんとにここ？」
不安になり、ホテルの番号を押す。
「はいプラザホテルです」
「あの、今夜予約してる○○ですが。いま入口のところに来てるんですが…
　誰もいないようなので。ここでいいんでしょうかね」
「はいはい、いいんですよ。階段のとなりにあるエレベーターで2階へあがってきてください」

ほっとしたような、がっかりしたような気分で小さなエレベーターに乗る。
確かに2階はフロントだった。
昭和レトロの小さなフロント・カウンターで、
蝶ネクタイにベストといういでたちの中年の男性がこちらを見ている。
何だか宮沢賢治の世界に迷いこんだような錯覚におそわれる。
それでも彼の態度にはホテルマンとしての誇りがあふれていて、落城に仕える武士の風情さえただよわせている。
「あのぉ、目覚まし食堂というのは…」
「はい、一階にございます。ご朝食はそちらでおとりいただけます」
やっぱりあの真っ暗な所がそうなのか。

鍵をもらって5階の部屋へ入る。
造りは古く昭和そのものだが、それだけにシングルにしては余裕のある広さだ。
近代的で超セマの部屋よりはこちらのほうがいいかもしれない。
荷物を下ろして一服。
夕食まで友人達への絵手紙を書くことにした。
いちおう水彩道具は持ってきたものの、絵手紙のようなものは書いたことがなく、時間がかかることはなはだしい。
自己嫌悪と空腹に陥りながらもなんとか仕上げた。
食事をとりに夜の街に出る。
一人旅の難点は食事だ。気兼ねなく一人で食事が出来る店は意外と少ない。
上田駅周辺は店も少なく、なかなかこれという店が見つからない。
散々歩きまわって、結局「モリタ」という、どこの町にもありそうな中華料理店に入った。男性客ばかりの中に女の子の二人組が見えたのが決め手になった。
そうとう迷ってから「もやしそば」を注文。
まったく期待していなかったのだが、これが美味しい。
もやしそばとは名ばかりで、野菜やエビ、肉、もちろんもやしなど具だくさんのあんかけ風、味も良くて麺もモチモチ、みごとなプラス方向への裏切りだ。
代金六百円を払う時には感動さえした。
今夜も眠れないと困るので、コンビニでワインの小瓶を買って帰る。

連日七時半の起床がまったく苦にならない。
いくら疲れていても結局眠りつくのは三時くらいになってしまうのに、
眠りが深いということだろうか。
今日はこの三日間でいちばんの快晴のようだ。
塩田平を歩くにはサングラスが必要かもしれない。

チェックアウトの時に塩田町に行く別所線の時刻表をコピーしてもらった。
今日の目的「無言館」のある塩田平へは、上田から別所線というローカル線で三十分、塩田町という駅まで行く。
塩田町からは一時間に一本くらいの割合で無言館行きのシャトルバスが出ているらしい。
パンフで見ると信州の鎌倉を走るシャトルバスとある。
ホテルでもらった時刻表に合わせて別所線の改札へ向かう。
ところが発車時刻はぜんぜん違っていた。
確認してみるとホテルでもらった時刻表は五年も前のものだった。
やっぱり昭和レトロのホテルは時刻表までレトロだ。
別所線の駅員さんに尋ねると、次の列車で行くとシャトルバスの時間まで二時間近くも待たなければいけないようだ。
「塩田駅から無言館まで歩けますか」
「そうだね、歩けないことはないけど。
私なんかは時々散歩コースで歩きますけどね。
三〇分くらいはかかるかな」
「そうですか、じゃ歩いてみます」
しばらく待って別所線の小さな列車が入ってきた。
列車がホームに入ってから改札が始まる。
改札の時、先ほどの駅員さんが小さな紙切れをくれた。
「大変そうだったらここのタクシーに電話すればすぐに来てくれますよ」
「ありがとうございます」
小さな紙にはタクシー会社の名前と電話番号が印刷されている。
私のような旅行者が多いのだろう。
別所線は二両編成の小さな列車で、ワンマンカーになっている。
乗車の時は一番後ろのドアから乗り、降りる時には進行方向の一番前のドアからしか降りられない。
素晴らしい秋晴れだ。
数人の乗客を乗せて小さな列車がのどかに走る。
所々にリンゴ畑があり、きれいな赤い実をいっぱいに実らせている。
考えてみると、実をつけたリンゴの木を見るのは初めてのような気がする。
リンゴの実はもちろん美しいけど、木の形も素敵だ。
塩田町駅を降りると、田んぼや畑がどこまでも広がっていた。
所々に民家や工場風な建物がポツンポツンと見える。
塩田平は遠く見える山の方なのだろう。
しばらく迷ったが、とりあえず殺風景な道路を歩きだしてみた。
目を楽しませてくれるものもなく、陽ざしだけが容赦なく照りつけるので何分もしないうちに気力が失せてしま

った。
目の前に塩田病院という建物があったので、ここなら目印になると思いタクシーの番号を押す。
「塩田病院の前にいるんですが、無言館までお願いしたいんですけど」
「はいわかりました、すぐにうかがいます」
ケイタイを切るやいなや、すぐ後ろでクラクションが鳴った。
ふり返るとタクシーだ。「はやっ！」
「おどろいた～、とんでもなく早いですね」
「いやあ、今ちょうど病院にお客さん乗せてきたとこだったんですよ」
うんざりするように見えた道も、タクシーに乗ってしまえば五分だ。
塩田平は美しい場所だった。
なだらかな丘陵から見下ろす風景はまさしく「いにしえの大和」。
山なみに包まれたおだやかな平野には田園風景がひろがり、演出されたかのように所々、うす紫の煙が細く立ちのぼっている。
「無言館」は丘の中腹の静かな林の中にあった。
窓の少ないシンプルな白い建物は、ひっそりとした修道院のようだ。
全体の形から想定して、空から見れば緑の大地におかれた大きな白い十字架に見えるはずだ。
入り口前には黒い御影石で造られた大きなパレット型のモニュメントがあり、「記憶のパレット」と刻まれていた。
画学生たちの制作風景が石面の上部に印刷されていて、その下には何百という戦没学生たちの名前が刻まれている。
美術館入口は左右に素朴な木の扉があるだけで、装飾的なものは一切ない。
扉を入ると即ギャラリーになっていて、照明は極力抑えられている。
画の保護を目的とするだけではなく、来場者に静かさを要求しているのだろう。
壁に飾られた画の近くにはガラスケースがあり、それぞれに作者達の遺品が展示されている。戦地から両親や妻、恋人、恩師などに宛てられた手紙。
小さなスケッチノート、画筆、パレット、色あせた写真…。
中でも心に痛かったのは、事務的な死亡通知書だった。
芸術の創造という情熱に燃えながらも、それを捨てなければならなかった若い画家達の無念さが伝わってくる。
人は生まれてくる国や時代を選べない。
平和の中に生れ、平和の中で生きてきた自分には、そのありがたさがわかっていないのだと思った。
「無言館」を少し下ると「傷ついた画布のドーム」という建物がある。
ここも同じように戦没画学生の慰霊美術館だ。

ここには図書館も併設されていて、かなりの蔵書がある。
ジャンルは多岐にわたっているが、館主である窪島誠一郎氏が美術評論家のせいもあり、美術書は質の高いものが揃っているようだ。
たっぷりの時間があれば、一日中ここに居てみたい。
窪島氏は作家・水上勉氏の長男であり、その父子関係は相当にドラマチックなものだったらしい。
この美術館といい、それぞれの名称といい、彼のひとなりが思い描かれるような気がする。
図書室の奥には「七枚の皿」というレストランがあったので、ここでお昼をとることにした。メニューはありふれたパスタやグラタン、リゾットなど数種類しかない軽食堂といった感じだが、ガラス張りの店内は光にあふれていて、美しい里山風景が望める。
風情のある薪ストーブもあったりして別荘気分になれるインテリアだ。
カウンターのそばに立っているおばちゃんが一人でこのレストランを仕切っているらしい。客は私ひとりのせいか少々ダレ気味に見えないこともない。
期待しないで注文したミートソーススパだったが、これが美味しかった。
麺のゆで具合もいいし、ソースの味もなかなかで、つけ合わせのサラダは地元野菜のフレッシュさ満載。
十分に満足して塩野平の散策にでかけた。
眼下に広がる美しい田園風景に時々足を止めながら、ゆるやかな上り坂のバス通りを歩く。道ばたの草や花もとびぬけてきれいな気がする。
所々に人家があり丹精された美しい木や花が目を楽しませてくれる。
本気でここに住んでみたいと思ってしまった。
バス停をひと駅ほど行ったところに信濃デッサン館があった。
「無言館」はここの別館として建てられたものだ。
「信濃デッサン館」は「無言館」とは趣きが違う建物だが、これがまた素晴らしい。ヨーロッパの田舎にでもありそうな蔦のからんだ石造りだ。
門から奥まった所に見えるその平屋造りの姿は、これまた何ともドラマチック。
なぜかプルーストの「失われた時を求めて」が心にうかんだ。
一連の建造物のセンスの良さに、絵画作品の印象がうすくなってしまう。
「信濃デッサン館」の前は「前山寺」への参道になっていて、ここも素敵なのだ。広い参道には樹齢三百年以上の巨大なケヤキが数本ある。
みごとなケヤキに見惚れながら参道を歩いて行くと「前山寺」だ。
「前山寺」は平安時代初期に空海によって開かれた真言

宗の寺で、ここにある三重塔が国の重要文化財になっている。
この三重塔は未完の塔と言われ、欄干などが出来ていないのだが、それが返って非常に美しいフォルムを作り出している。
ここでも御朱印をいただく。代金は善光寺の半分でした！
どんな世界にも格付けはあるんですねぇ…。

前山寺まえのバス停付近にリンゴの出店が出ていて、そのあたりに猫が数匹うろうろしている。猫好きの私としては無視できずにさっそくちょっかいを出す。
髪をひっつめた小柄なおばちゃんがリンゴをむいて一切れ私に差し出した。
「甘いよぉ」
おばちゃんの気迫に負けて、否応なくリンゴをほおばる。
うん、たしかに甘い。
見れば素晴らしく大きな赤いリンゴが箱の中に並んでいる。
「すごくみごとなリンゴですね」
「だろう、スウィーティオ信州ての」
「へぇ、聞いたことないなぁ。東京方面では売ってないわね」
考えてみたら大したおみやげを買ってなかったので、このリンゴを宅配してもらうことにした。連休明けのウィークデーで観光客もほとんどいない。
おばちゃんは喜んだはずだが、ぶっきらぼうな表情は変えない。
「この猫おばさんが飼ってるの？」
「まあねぇ…みんなノラだよ。それがマルであっちのがシロ、向こうのがクロ、全部で一六匹いる」
「うわっ、そんなにいるの」
見れば、道路下の畑のあたりやバス停の付近、参道のケヤキのあたりにもいる居る。
「捨てるなら飼うなっていうんだよ、どいつもこいつも、まったくさぁ」
おばちゃんは本気で怒っている。
「なんでここに捨てるんだろう。おばさんが猫の面倒みてるの知ってるから？」
「そうだよ。まったく、ろくでもない奴ばっかりだ」
バスの時間にはまだ大分あるので付近を散策することにした。
どの道に入っても植物や花が生きいきとして美しい。
時間があればじっくりとスケッチしたくなる場所だ。
雑木林の中に朽ち果てた鳥居と小さなほこらがあった。
このあたりを歩いていると子供の頃の好奇心がよみがえる。
不便かもしれないけれど、こんな所で育つ子供は幸せだなと思う。

バス停に戻ると観光バスが一台止まっていた。
おばちゃんは商売に忙しそうだが、試食ばかりで売れてる気配はない。
少し陽がかげってきたような気がしていたら、雨がぽつりぽつり。
「雨が降ってきたみたい」
「あらあ、大変だ。片づけなきゃ」
おばちゃんはいら立ったように店の片づけを始めた。
「これ持ってきなよ」
おばちゃんが小ぶりの柿とリンゴ（スウィーティオではない）二個を手渡した。
「ああ、でも荷物になるから」
「このくらいリュックに入るだろ。帰ってから食べな」
「ありがとう」
塩田町駅行きのバスが来た。
小雨の中、片づけに余念がないおばちゃんと猫たちの姿が遠くなっていく。
「週末にはリンゴがいっぱい売れるといいね」
長野は本当に美しい所だった。
空にも山にも、木々にも花にも神仏の存在が感じられる場所。
いつかきっとまた訪れます。

目耕録（その六）

――山川菊栄著『わが住む村』を読む（岩波文庫、一九八三年）――

目耕：目で紙田を耕す。読書することを譬えて言う（世説新語）。

山本鎭雄

「母性保護論争」をめぐって

山川菊栄（旧姓森田、一時青山姓、一八九〇年～一九八〇年）は女子英学塾（現、津田塾大）を卒業し、社会主義の立場に立つ、大正・昭和期に活躍した女性解放思想家・運動家である。一九二〇年、夫の山川均が日本社会主義同盟の結成に加わり、菊栄は窮乏・無知・隷属からの女性解放を目指し、社会主義的な女性団体「赤瀾会」の結成に加わった。同会は社会主義の宣伝普及、女性の地位向上のために活動をした。ところが、官憲の弾圧や会員の大量の検挙、意見の相違からその翌年に解消し、「八日会」に改組された。

大正デモクラシーの上昇期に行われた与謝野晶子と平塚らいてうの「母性保護論争」（一九一六年―一八年）は、フェミニズムをめぐる日本で最初の論争であって、スエーデンの女性解放論者・エレン・ケイが主張した「母性保護」にたいして、女性の生き方と社会の関係、母親としての女性、働く女性の権利に関する白熱した議論である。

与謝野はケイの「母性偏重」を批判し、経済的・精神的に自立していない女性には、子どもを生む資格がないと主張した。それにたいして平塚は女性が子を産み、母になることは社会的存在になるために必要なことだと反論し、ケイの主張を擁護して母親にたいする国家の福祉政策を要求した。

母性保護と経済的独立

山川菊栄は、この論争にたいして与謝野の主張を「旧来の女権運動」、平塚を「新興の女権運動」と位置づけ、両者がそれぞれ強調した「婦人の経済的独立」と「母性の保護」を認めた。しかし菊栄はそれが希望通りに実現しても、「婦人問題の根本的解決ではなく、婦人を絶対的に現在の暴虐から救う道はないと考える点において、お二人の意見を異にするものである」として、社会主義の立場から異論を提起し、「いまいっそう研究的な批評的な立場からこれに対せられ、より高き、より徹底せる結論に達せられんことを希望する」と結んだ（「母性保護と経済的独立」、一九一八年）。

このように、山川菊栄は母権と女性労働という二項対立的な「母性保護論争」で両者の論点を整理し、鋭い論峰でそれらを克服する方策を明示した。そのため、論壇では女性評論家としての地位を確保し、相次いで雑誌・新聞に寄稿し、「女の立場から」評論・時評を精力的に展開した。しかも無産階級（労働者階級）の女性運動の理論家として華々しく活躍した。

それを可能にした背景は、国内外における社会運動の高揚である。国外におけるロシア十月革命によるソヴィエト政権の樹立（一九一七年）、国内における大正デモクラシーの高揚と全国各地に起こった米騒動である。

山川均とともに生活と思想をまもる

山川均（一八八〇年―一九五八年）は「無産階級運動の方向転換」（一九二二年）を発表し、社会運動に影響を与え、「山川イズム」として一世を風靡した。その後、福本和夫は「山川氏の方向転換の転換より始めざるべからず」（一九二五年）と批判を開始し、「山川イズム」は攻撃され、一時苦境に立たされた。その後の「日本資本主義論争」では日本の正統派マルクス主義の「講座派」に対抗して、雑誌『労農』を発刊し、その論客の一人として活躍し、一貫して「日本の非共産党マルクス主義者」（小山弘健・岸本英太郎）の道を歩んだ。

山川均はその理論と実践活動によって、たびたび検挙・入獄させられた。獄中ではフランス語など外国語を勉強し、社会主義運動のあり方について反省を重ねた。山川均は評論活動・実践活動のほか、自重して小規模な商業や農畜産業を経営したことがある。

山川均は、明治社会主義の「冬の時代」に義兄の林薬店の岡山支店を任されたり（一九〇四年―〇六年）、大逆事件で処刑された幸徳秋水に連座した（懲役二年）が、出獄して岡山県宇野築港で山川薬店を開業した（一九一〇年―一五年）。さらに鹿児島市内で山羊牧場を経営したが、経営はゆきずまった。社会主義者の堺利彦に請われ、八年ぶりに上京し、『新社会』の編集に参加した。

戦後、菊栄の回想によれば、夫は「原稿を生活の手段

としたくない、という望みでしたが、無資本で、病床でできる仕事はむつかしいので、不本意ながら原稿を書いて来たわけですから、それがむつかしくなったこの際、ほかに生業を求めようと思い立ちました」（山川菊栄著『おんな二代の記』、初版一九五六年）。

一九二六年初頭、山川夫妻は（息子・振作、菊栄の母・千世とともに）生活と思想をまもるため、鎌倉材木座（のちに稲村ヶ崎）の住宅地に転居し、ガラス窓のモダンな「文化住宅」を新築し、うずらの飼育を工夫した。三十六年、皇道派青年将校が配下の陸軍部隊を率いてクーデタを起こした二・二六事件後の春、山川夫妻は農村の鎌倉郡村岡村弥勒寺（現、藤沢市）の農地を借り、住宅と本格的なうずら飼育場三棟を新築し、湘南うずら園の看板を掲げた。

蘆溝橋事件を契機に日中全面戦争に突入し、南京占領の直後、治安維持法違反で山川均をはじめ、合法左翼の労農派など四百余名が一斉に検挙され、労農派系の政党や労働組合は結社禁止となった（第一次人民戦線事件、一九三七年）。その後、均は執筆停止となった。

「鳥屋の女房」

菊栄は検挙を免れたが、病弱のために文筆によって生活する他に生る道はなかった。第一次人民戦線事件以前から月刊誌『婦人公論』に「女性月評」と題してコラムを担当し、さらに『読売新聞』に「女の立場から」、「月曜婦人寸評」などと題して実名（のちに匿名）で月数回のコラムを担当した。

とくに、菊栄は一九三七年一月に創刊された女性月刊誌『新女苑』に「婦人の問題」と題して、常連の寄稿者となり（一九三九年九月から四〇年一一月まで連載）、それが機縁で日本民俗学の組織者の柳田國男と「主婦の歴史」をテーマに対談した。菊栄は柳田が監修した『女性叢書』のシリーズとして『武家の女性』とともに、これから検討する『わが住む村』（一九四三年）を出版した。

均はうずら一羽ごとに産卵率をカードに記録・整理し、湘南うずら園を合理的に経営しようとした。ところが、均が検挙・入獄したため、均に代わり、菊栄は「鳥屋の女房」となり、うずらの卵を三越デパートの料理屋に一円定食の食材として格安の値段で、毎日三百個を契約・販売した。それでは、およそ採算にあわない経営だったと言う。

菊栄は掛け取りの苦労、暴風雨の被害、飼料の入手難などによって、うずらの飼育を「私ひとりでやれる程度」に縮小した。うずらの飼料用の葉っぱの空き地に里芋、ジャガ芋、ごぼう、にんじんを作った。のちに、当時の野菜作りについて、「生まれてはじめて生きがいを感じたほど幸福でした」と回想している（山川菊栄著『おんな二代の記』）。

柳田國男の勧誘と支援

民俗学の創始者の柳田國男は、たとえば、「山川テーゼ」を痛烈に批判した「福本テーゼ」の信奉者で、後期東京帝大新人会出身で転向左翼の大間知篤三（一九〇〇―一九七〇）にたいして門戸を開いた。柳田は転向によって生じた傷を癒す、いわば「鹿の湯」として民俗学の研究を奨励した。大間知は柳田のもとで民俗学を研究し、足入れ婚や隠居分家の民俗を社会構造的に解明し、柳田民俗学の方法論を批判した。

柳田は戦時下に銃後を支える女性にたいして自覚を促し、生活革新の領域にたえず疑問をもち、ただ世間体に同調せず、女性の過去と現在、将来の行く方を見すえ、新生面を開拓しようと構想する「女性史学」の発展に切実に期待した。

柳田は山川菊栄に村岡村の民俗の研究と執筆を勧めた。菊栄はこの村に定住して七年目、そして柳田に勧誘されて三年目に『わが住む村』（岩波文庫、一九八二年）を出版した。菊栄はその出版について「情報局の出版許可を得ることが容易でなく、（柳田國男先生は）なんども足を運んで下さったそうです。（その印税収入の）おかげでちょっと息をつきました」と回想している（『おんな二代の記』括弧内、引用者）。

言論・思想の統制の中枢である内閣情報局は、札付きの女性社会主義者の菊栄の著書にたいしてなかなか出版を許可しなかった。柳田は情報局に出向き、出版の許可を得たのであろう。それ以外に、菊栄が出版した著作は出版社が倒産したため印税収入を得られなかったり、発禁処分となった。

菊栄の二冊の著作『武家の女性』と『わが住む村』は柳田の奔走で出版することが出来、しかも印税収入を得ることが出来、経済的にも追いつめられた生活から一息つくことが出来たのであろう。

幕末・維新の藤沢宿周辺

戦時下の情報局の検閲を意識し、巧妙にレトリックを駆使して執筆された体制批判の評論や時評とは異なり、『わが住む村』は、村岡村とその周辺の体験と観察、村人からの聞き書きと自ら収集した資料をもとに、平明かつ格調高い文体で歴史と民俗が著述されている。その観察や記述の基本的な視点はあくまでも女性社会主義者のそれであり、「常民」、つまり「無告の民」へのそれである。

江戸幕末から明治維新の東海道藤沢宿で住所不定の駕籠かきや荷運びの「雲助」、大名行列や幕府の役人の輸送に近在の農村から人馬を徴発する「助郷」・「加助郷」という幕府の制度が農民の多忙な畑仕事を犠牲にして、多大な負担を課したと記述している。

幕末のペリー艦隊の黒船来航は、江戸幕府開闢以来の大事件で、藤沢宿では幕府の役人、早馬、飛脚の往来が急増し、農民は助郷に駆り出され、畑仕事に大いに支障となった。左往右往する幕藩体制の支配者とは異なり、菊栄は「そのころの百姓といえばまるで深海に棲む魚のようなもので、どんな激しい嵐が海の上をさわがせていようとも、海の底のように静かな野良にいて、ただ米を作り、年貢を納めるという日々の営みに追われていました」（三九頁）と記述している。

村岡村の昔

菊栄は古代の相模の国（神奈川県の旧称）まで時代を遡及し、日本武尊が東征の途次、三浦半島の走水の海で、その后の弟橘比売命が海神の怒りをしずめようと自ら入水した時、

さねさし相模の小野に燃ゆる火の
火中に立ちて問ひし君はも

「さねさし」は相模にかかる枕詞　『古事記・中』

菊栄は、野原に燃えさかる炎のなかで、安否を尋ねた夫への別れの歌が、旧奥州街道から三浦半島への岐路の村岡村付近と推定し、「この辺りの土を尊の力強い足と橘媛の軽く弾力の足もとにふれた」と想像し（四四頁）、さらに媛は「上代女性の伸び伸びと、雄々しく健やかな姿を代表したもの」と記述している。

菊栄が住む村岡郷の草分けは桓武平氏の祖高望王の子の平良文で、村岡五郎と名乗った。良文の一族は関東地方一体に根を張った。西日本の旧勢力を圧倒し、東日本の武家の独立政権の鎌倉幕府は、関東地方の諸豪族の連合政府で、頼朝はその盟主だった。

菊栄は平安朝の脆弱な姫君たちと比較して、北条政子（源頼朝の妻）や松下禅尼（北条時氏の妻）に代表される関東武士の娘たちは、夫の没後、「指導的地位にある主婦としての伝統と訓練をもった」（五〇頁）と評価した。このように、菊栄は相模の民俗誌の執筆に際して、「女の立場」を重視したのである。

産業化と都市化の進展

菊栄はアジア・太平洋戦争の末期を意識して、江戸の幕藩体制下の村岡村とその周辺の村々の「武士と百姓」の兵農分離、村岡村の七つの部落の「鎮守さまと氏子」「行事と五人組」で歴史と民俗に言及した。

ところが、この村もまた産業化と都市化の影響を受け「年頃になると娘も青年も都会へ働きに出たり、帰らぬ者が多く、山から畑から若い元気のいい笑い声や、唄声が消えてゆきました。残った人々の中でも鍬を捨てて鞄をさげ、毎日勤めに出る者がふえてゆきました。時局は殊にこの勢いに拍車をかけて、今や土着戸数の二割未満が専業農家に留まり、他はみな兼業で、百姓は年寄と女

の内職のようになりました」（八五頁）と記述している。

しかも戦時期、若者や壮年者が出兵したり、国民徴用令により軍需産業へ労働力を動員した結果、百姓仕事は年寄が担当した。戦後の高度成長期には農家の兼業化が進行し、じいちゃんとばあちゃん、かあちゃんの「三チャン農業」が出現したが、この村岡村ではすでに戦時期にそのような農業経営が加速し、さらに村の年中行事、冠婚葬祭などの「純農村時代の生活」が加速度的に衰退した。

村岡村の衣食生活

菊栄の村岡村とその周辺の歴史と民俗の考察は、一年の農作業を中心に、年中行事、衣食住、家族、冠婚葬祭、教育、信仰、娯楽、慰安など、あらゆる面に及んでいる。例えば、食生活では大地主は米を常食したが、その奉公人や小作人は粟、麦、芋類を主として、わずかに玄米を混ぜる「別飯」を主食とした。自作農もまた同じくようにそれを主食とした。囲炉裏に火に掛けた黒い鍋で宵に煮た大根と里芋の味噌汁と、大根や菜っ葉類の漬物だった。

大正後期、農家は米を主食にするようになったが、優良米は売りに出し、屑米を食べた。二月の初午（旧暦で最初の午の日）、春秋のお彼岸、五月の菖蒲の節句などの「お日待ち」は白米が食べられた（「粟飯、麦飯」）。

ところが、食料不足の戦争末期には「お日待ち」は中止となった。このように、普段の仕事から解放された「晴れ」の年中行事は衰微した。

衣生活では、綿の栽培と刈り入れはともかく、糸を操り、機を織るのは娘、嫁、姑の仕事で、それを熟すことが「一人前の女の資格」だった。農繁期でも布を織り上げ、家族に正月のこざっぱりした春着を着せるために、夜鍋仕事をいとわなかった。日露戦争後、綿花が韓国、中国、インドから大量に輸入され、日本の紡績業が発展した。そのため村岡村でも綿畑や織機が消え、その後は狐も姿を消した（「綿畑と狐のゆくえ」）。

老女からの聞き書き―三代の娘―

すでに述べたように、本書は『女性叢書』の一書である。とくに山川菊栄は媼（老女）を相手に嫁や娘の時期の生活についてインタビューした。娘の時は下の子の子守をしたり、夕食の支度をしたり、畑仕事をして、「十七、八になれば女でも一人前の百姓」になった。十代で奉公に出て、言葉使い、行儀作法、裁縫などを仕込まれ、それが「嫁入の資格」となった。ところが、いざ結婚となれば、結納金や支度金が高騰し、さらに挙式・披露宴の資金不足のために、結婚難が憂慮された。

京浜地域の延長として湘南地域も工業化し、村岡村とその周辺の娘はサラリーウーマンとして離村し、農家の

嫁不足が深刻化したが、近年になって多少緩和した。菊栄は、農家の娘が農家の嫁になることが望ましいことであり、都市生活者の妻になることは「歪みだ」と言う。

さらに「農業における女性の役割がこれほど大きいものである以上、その技術的進歩のためにも、農民生活の改善のためにも、智的水準の高い女性が進んで農家の主婦となることはきわめて重要であります」（一四一頁）と述べている。

農業や農村も技術と生活の面で大きく変容したが、たしかに農家の娘が農業に生きがいを見いだし、農家の嫁になることは望ましい。しかし農家の娘に職業選択の自由を否定することは、理解し難い。しかも農業に励み、骨の髄まで生きがいにしてきた農家の老媼や若媼、さらに嫁は農業の重要な担い手に違いない。とりわけ、戦時期、労働力不足のために壮年の農家のあるじは他所へ日稼取りに出て、野良仕事は老爺や女（老媼、嫁、娘）に委ねることになった。

戦時下の農村社会

一九三七年十月、日中戦争の拡大とともに企画院が立案・調整した物資動員計画、さらにその後の「国家総動員法」が制定された。これらの戦時法規は大幅な権限を白紙で政府に与え、この法律にもとづき勅令によって国民徴用令、生活必需物資統制令、価格等統制令などが施行された。戦局の悪化に伴い、軍需会社法の施行によって統制経済は軍需生産、兵器生産に急速に傾斜した。

戦時期の農村では、一九三八年四月に農地調整法が公布され、自作農創設と小作人の権利が保護されるようになり、さらに主要食糧の増産のために耕地整理とともに河川の改修が計画された。ところが、農村青年の出兵、軍需工場への徴用によって農家労働力が不足しただけではなく、家畜の飼料が人間の食料となった。家畜の飼料不足が深刻化し、穀類を飼料とする豚・鶏の肥育が困難となり、鶏卵などの価格が急上昇した。食糧管理法によって政府は米、麦、芋類などの主要食糧を対象に供出と配給、価格などを統制した。

山川菊栄の終章「戦時下の農村」は、都市近郊農村のインタビューの記録として詳細を極めている。しかし、言論・出版統制を意識しているためか、その記述に雑駁な印象を免れない。ただ、菊栄の女への観察と記述はさすがに驚嘆にあたいする。日中全面戦争が開始すると、青年は出陣となり、あるいは軍需工場に徴用された。それにもかかわらず、依然として農業生産力を維持することが出来たのは、老人夫婦と若い主婦の労働力だった。

女への観察と記述

ちなみに、「近くの村で二町五反歩ばかり作っている自作農では非常な働き者の息子が応召となり、あとは老

人夫婦と若い主婦だけとなったので、これからは半分にしなければなるまいといっていたそうです。ところが、……へらしたのは、たった五反歩だけで、あとの二町歩はもとの通りやっていたので驚いたといいます」と記述している。さらに「純農村の主婦はもとより、地主や勤め人の家の、女学校出の主婦や娘も、鍬を持てば重い車も曳き、内外を駆けずり廻るようにして必死の働きをつづけています」と記述している（一九〇―九一頁）。

山川菊栄は戦時下で「もし日本の農業から女子労働をひきぬいたならば、農業は全く立ちゆかず、国民はたちまち餓えに脅かされることでしょう。いま私たちの口にはいる米も麦も野菜も、筒袖の破れ布子にはだしで鍬を振るい、重い車を曳く、あの多くは文字をも知らぬお婆さんや、いろいろの持病をおしている中年のおばあさんたちの手で作られたといっても過言ではない」と記述している（一九四頁）。このように、菊栄は柳田國男が提唱した「常民」、とくにその女性を観察し、自ら居住する藤沢市（旧村岡村）の優れた民俗誌を叙述したのである。だが、菊栄が書いた藤沢市の民俗は「今は昔」になった。

（二〇一一年十二月末　擱筆）

追記

戦後の高度成長期、農家の主要な働き手の父ちゃんは出稼ぎやサラリーマン化し、爺ちゃん・婆ちゃん・母ちゃんに支えられた「三ちゃん農業」と言われた。すでに戦時下もそのような農業経営だった。

今、私が野菜作りに通う山梨県の山狭村では、年金生活者の自給農家で、畑には婆ちゃんや嫁さんを見かけず、爺ちゃんだけがせっせと野良仕事に励む「一ちゃん」農業である。

もっとも、老夫婦で暮らし、爺ちゃんに先立たれた農家の場合、婆ちゃんがせっせと野良仕事に励む光景を見かける。このような場合、必要に迫られた「一ちゃん農業」と言えよう。畑で母ちゃんを見かけるのは、夕食の食材として菜っ葉を採りに来る場合であって、母ちゃんはかつてのように、もはや「三ちゃん農業」の一員ではない。若い母ちゃんはフルタイムか、パートタイムで働き、畑仕事で土に親しみ、土と対話することもおよそない。

今の爺ちゃん・婆ちゃんは子どもの頃、父や母の野良仕事を手伝わされ、若い頃も時間と体力が許せば、畑に出た。

子どもは「総合学習の時間」で学校菜園で嬉々としてさつま芋などを栽培しているが、爺ちゃんの畑で手伝っている光景は見かけたことはない。しかもその親は勤め仕事に多忙で、畑は雑草が生い茂っている。

二八に帰るすべもなし（七）

―愛する北国のひとに寄せて―

伊治哲

物珍しげに本棚を見まわしたあと勉強にとりかかったのだが、宿題そっちのけで、先生や友だちの話をペラペラ喋っての末、「アリガト」と言って部屋を出て行った。

またある時など、勉強を始めて十分とたたぬうちに、修平の膝にもたれかかったままスヤスヤと居眠りをはじめた。学校での運動・・部活にテニスをやっていると聞いた・・の疲れがでたのか、声をかけても、肩をゆすっても眠りこけたままであった。助けを呼ぶわけにもいかず、修平はそのままの姿勢でタエが目を醒ますのを待つほかなかった。足が痺れて身を処するのに困った記憶が残っている。

秋の夜であった。二階の物干し台に修平を誘い出して、北斗七星を数えたり、木星の明るい光りを探したりもした。修平は

「タエちゃん、大きくなったらなににになるの？」

雲

最初に「宿題を教えて・・・」と言ってきたのは、妹のタエの方だった。日曜日の宿題が分らないと言う。数学の問題であった。文科専攻の修平は自分が試されているようで一瞬身構えたが、設問の意味を教えたらすぐ分ったらしい。飲み込みの早い子だなと、タエの無邪気な顔に笑みを返した。

タエの方は、天真爛漫、無邪気そのもので、「うちは下宿屋じゃありません」と言い放った最初の出会いのことなどとっくに忘れているようであった。はっきりものをいうだけに、物怖じもしなかった。

勉強を尋ねてくるのはほとんど毎日であった。たいてい家族のいる居間の座敷で向かい合ったが、ある日突然修平の部屋に入り込んできた。

と、空を見上げながら聞いてみた。タエは即座に、「中原淳一のようなデザイナーになるの」と目を輝かせた。たわいない夢のような子どもの世界であった。

姉のチエは生来おとなしい、引っ込み思案の性格のようであった。修平にはなかなか近づこうとしなかった。

ひと月近くもたったある日の夕食のおり、寮歌が話題になった。チエが通う金城女学院では、今四高や美専の寮歌を歌うことが流行っているという。家族や親戚に四高生などがいる友だちは、ドラ声で歌う寮歌を聞かされて自然に覚えてしまい、友だち仲間で誇らしげに歌うのだが、チエにはさっぱり分らないという。

「ヨシ、それではボクが教えよう」

と修平は胸を張った。自信がもてるのは寮歌くらいしかなかったからだが、学制改革でいずれ忘れ去られていく寮歌だから、一人でも多くの若者に歌い継いでいきたいという、かすかな望みもあったのだ。修平は低い声で歌い始めた。

〝北の都に秋たけて　吾等二十の夢数ふ
男女の棲む国に　二八に帰るすべもなし〟

寮歌「北の都」の第一節である。

チエは、「そう、この歌、この歌よ」と盛んにうなずいた。ずいぶん男っぽい歌なのは分るけど、学校で習う音楽の歌詞、リズムとは全く違う世界だ。特に歌詞が分りにくい。まず、「二八に帰る」とはどういう意味？と質問してきた。

「チエちゃん、二八、十六というじゃない。十六歳のことだよ。ちょうどチエちゃんくらいの若い年頃のことをいうのだよ」

〈良寛の詩に「柳娘二八の歳・・・」というのがある。十六歳の娘の初々しい姿を歌った詩だ。ついこの間十六の歳を数えたばかりだのに、もう二十の夢を数えるようになった。青春のひとときほど移ろいやすいものはない・・・と、「北の都」は歌っているのだ〉

〈そして、七節に

〝藻の花ひらくうつし世に　潮の流れ渦をまく
名もなき道を行くなかれ　吾等が行く手星光る〟

と、男児一匹、未来に向かう夢と希望を北辰に託して歌っているのだよ〉

と少しむつかしく解説してみせた。

修平とチエとの寮歌談義を黙って聞いていたおばさんは、

「男の入って、いいわねえ。自分の信じる道をひたむきに走っていけるんだもの・・・」と、ひとりごとのように呟いた。修平もチエもおばさんの独り言の意味を図りかねていたのだが・・・。

その後も寮歌論議をくりかえした。チエが詞も曲も好きだといったのは、「水悠々と」と題する逍遥歌であった。

〝水悠々と流れゆく　花の野煙る夕闇暮れ
まどろむ床に夢さまし　纜ときて船やれば
踔厲の櫂さゆるかな・・〟

桜の綻びはじめた春の夕方、チエとタエを連れて、ほのかな霞に煙る犀川のほとりを、朴歯の下駄を鳴らしてそぞろ歩きながら、この「水悠々と」を繰り返し歌ったことを、チエもタエもいつまでも忘れなかったようだ。

こんな男っぽい寮歌のやりとりとは裏腹に、家族団欒の居間で目を奪ったのは、婦人雑誌や少女雑誌であった。そのころ創刊された「暮らしの手帖」や「婦人画報」「スタイル」など、修平には初めて覗く豊かな家庭の甘い世界であった。

その上、娘たちが愛読していた少女向け雑誌「ひまわり」を盗み見した時は、思わず息を飲んだほどであった。タエが憧れているというスタイル画家、中原淳一が書いたイラストであった。彩り豊かに描かれ、ちょっと憂いを含んだ大きな瞳の少女の表紙絵には、異邦人を思わせる魅力を感じ、なぜかいけないものでも見てしまったようなショックを隠せなかった。

少しずつ家族との生活に慣れて、おばさんとも姉妹たちとも、本当の家族のようになじんでいった。

そのころ、おばさんとひと悶着が起きた。昼弁当をめぐるいきちがいであった。当時、日常の食生活は、滅多にお目にかかれない米に替わって、麦、甘藷などの配給が多かった。そのほかに、外食券の支給を受けて食堂を利用する方法があった。寮生活時代の昼食は、香林坊から坂を下ったところの、ヤミ市場に接してノレンを掲げている外食券専門の片町食堂によく通った。昼食といっても、薄味の味噌汁の中に二つ三つ団子が浮かんだ〝すいとん〟で糊口を凌いでいたのである。四六時中空腹を抱えていたが、それももう慣れっこになっていた。

澤村の家族になってからは、朝夕十分な食事を与えられていたから、昼は寮生活の頃のように外食券をもらえればそれで十分だというのが、修平の希望であった。

おばさんは修平の希望を聞いてくれなかった。空腹では学校でしっかり勉強もできないと言って、大き目の弁当箱にご馳走をいっぱい詰め込んで修平にもたせてくれるのだ。

「舘！　お前、近ごろどこの婿殿に入り込んだのだ！」

修平が弁当箱を開けるのを狙って、気のおけない悪童たちがまわりに群がってきた。卵焼き、焼き魚、焼肉、果てはたくあんや梅干まで、箸で突っついてくるのだ。時には、申しわけていどに修平の食い扶持を残して、ほとんどが悪童の餌食に消えていった。

「あらっ、今日もきれいに平らげてくれたのね」

おばさんは、残り物のない空弁当箱を洗いながら、弱肉強食の世界を知る由もなく、大いに喜んでくれた。

修平は、学友の舌つづみを思い出しながら

「ご馳走さまでした。おいしかったです。ありがとうございました」

と、笑顔を返した。

誰も彼もが、食料不足に喘いでいたこの頃、学友とおばさんと修平とが、ささやかな満足を取り戻すことのできる昼弁当になった。

ある日の午後であったか、二、三の学友と、犀川大橋・仲間の間では〝オンケル橋〟と俗称していた・・を渡って、雨法院周辺の寺々を探索してみようと大和百貨店まえを通りかかったときであった。たまたま買い物帰りのおばさんに出くわした。

「あら、舘さん、お友だちとどちらへいらっしゃるの？」

修平は咄嗟のことに理由もなく慌てた。修平は友人を前に顔を赤らめながら、なんとか言いつくろおうとしたが、おばさんはそのひまも与えず、

「こんな機会、滅多にないから、近くでお茶でも飲んでいきましょうよ。お友だちもご一緒にね」

と言って、どんどん先を歩き始めた。行った先は、修平がよく出入りしている「ぽたん」という喫茶店であった。喫茶店のママとおばさんとは昔からの親しい友達であったらしい。〝天網恢恢疎にして漏らさず〟とはまさにこのことか。修平は思いがけない邂逅にこんどは真っ青になった。二人のお喋りをよそに、修平たちは這々の体で「ぽたん」をあとにしたが、友人たちは

「舘！　なんだ、君の慌てようは。赤くなったり、蒼くなったり・・。ようやく君の秘密の正体が分ってきたぞ。ご馳走いっぱいの昼弁当の謎もな」

「それにしても、あの二人のご婦人、綺麗だったなあ。俺たちより年上で、どこかの奥さまなんだろうけど、まれに見る美人だよ。舘、二人も美人と知り合うなんて、ちょっと贅沢すぎるぞ」

修平は、友人たちに散々やりこめられて、お寺めぐりもそぞろのうちに終ってしまった。もちろん、帰ってからおばさんからも、もう少し若い学生さんのお話を聞きたかったのに・・と口惜しまれた。

年の瀬を控えて、雪の金沢が戻ってきた。その年は寒さも格別に厳しかった。

そのせいか。修平は柄にもなく高熱を出して寝込んでしまった。風邪を惹いたのだ。

おばさんは、氷枕で頭を冷やしてくれた。卵をといた粥をつくって食欲を誘おうとしたり、なかなか手に入らないリンゴを味あわせてくれたりした。心配げに一生懸命看病してくれるおばさんの気持が修平の心にひしひし

と伝わってきた。二、三日して修平の熱が収まるまで、ほとんどつきっきりであった。

修平は母親にも劣らぬおばさんの温かい愛情を感じていた。

あとから思うと、おかしな話だが、修平はおばさんにほのかな恋慕の情を抱きはじめていたのではないかと気がついて、ハッとすることがある。おくびにもだせない、修平の胸深く閉じ込めたはじめての思慕であった。

このようにして、澤村家での一年余りは夢のように過ぎ去った。来年春には金沢を去る日がくる。

澤村の家族の温もりにどっぷりと浸かってしまって、この冬の帰省は正月も明けてからになってしまった。祖母や両親は澤村家での余りの厚遇に、いささか気がかりを感じていたようだ。父とはそろそろ大学進学の相談をしなければならなかったが、それもそこそこに、修平の心ははや金沢に飛んでいた。

祖母が

「旅立つのには今日は日柄が悪いから・・・」

と言って、さかんに引き止めようとするのを、修平は、悪いと思いつつも、袖を振り切るようにして北国(ほっこく)へと舞い戻っていった。

途中、北陸線を北に向かって走る汽車の窓からは、真っ白に雪をかぶった白山の峰が、冷たく修平を見下ろしているようであった。

帰省する度に、自分の生家が最近とみに暗い影を落としているように思えてきたのだ。それにひきかえ、金沢、というより澤村の家は、底抜けの明るさに満ちていた。その落差のあまりの大きさに、修平は戸惑っていたのだ。自分の生家であるにもかかわらず、意識して郷里を避け、故郷から逃げるように遠ざかろうとする修平に、白山がなにかを問いかけているようであった。

機関車が吐き出す、喘ぐような汽笛が、もう金沢に近いことを伝えていた。

つづく

イドと超自我の谷間で（三）

・・・ある女の不思議な生涯・・・

鍋屋次郎

その間アヤは、海保純が目を閉じたまま京子の話を聞き、時折「はい」「はい」と頷いている表情を見つめていた。

突然アヤは

「もしも京子お嬢様が怒っていたらどうしよう」

と言う不安に襲われた。

アヤの行動は、加賀家の財産が債権者その他に奪われることを避けるため、戸籍上生きている京子の名義にすることにより財産を守ろうと思って行ってきたのであるが、別荘等はアヤに保管管理は出来ないため、一旦京子の名義にした全財産を全てお金や金塊に変えて、今はアヤの管理下にある。また、その中の一部とはいえ、アヤの理美容学校の学資、その間の住居費・生活費に使ったから今のアヤがある。京子が

「アヤが勝手に使っていることは許せない。自分だけ生きて日本に帰って、加賀家の全財産を横取りして、好きなように生きることは許せない。得体のしれない現地人若者に輪姦されて、その上殺されて日本に帰ることが出来ない私の苦しみを考えてみよ。生きている人間の目は誤魔化せても、死んでいる私の目は誤魔化すことはできない」

と言わないだろうか。

ここまで不安が高まってきたとき、アヤは咄嗟にこの場所から逃げ出したくなった。

どれくらい時間が経過したであろうか、突然、海保純は座椅子の肘掛に凭れるように、体を左に崩した。

驚いたアヤは

「先生、大丈夫ですか」

と声をかけて腰を上げかけると
「大丈夫。このままにしておいて」
と言いながら暫くその姿勢のままにしていたが、やがて座布団に座り直した。しかしアヤは海保純の疲れ切った表情が気になった。
「小林さん、霊界とお話しをするのは大変疲れるの。落ち着くまで一寸待ってね」
と言って座ったままの姿勢で目を閉じた。

暫くして付け人がお茶と菓子を運んできた。付け人は海保純の疲れた様子を見て心配しながら引き下がっていった。やがて
「小林さん、お煎餅を食べながら聞いて頂戴。このお煎餅は、大磯の海岸沿いの旧街道で江戸時代から手焼きしているお店のお煎餅で、美味しいですよ」
と、海保純はアヤにもお煎餅を奨めながら自分も一枚を手にして食べ始めた。
「ところで加賀京子さん、すっごく寂しがっていますよ。誰も京子さんのことを思いだして、お線香をあげてくれる人もいないって訴えていました」
と言ってアヤを見ると、顔から血の気が引いているアヤを見て
「小林さん、どうしました？気分でも悪いの？これから京子さんが言っていることを私なりに理解しながら話さないと、何が何だか分からなくなってしまうから、私の質問にも答えてね」

アヤは海保純の「京子がすごく寂しがっている」との言葉に、「京子は私を恨んでいるのではないか」の不安が高まってきた。これから何を言われるのか、アヤの頭の中は不安で「真っ白」といった状態になっていた。

お煎餅を食べ終わった海保純が
「私、何が何だかわからないことは、京子さんが加賀家の全財産、それは物凄い大金らしいけど、その全てを貰女が持っている、と言っているのだけれど、それはどういうこと？それが分からないとこの先の京子さんが言っていることが理解できないの。教えてちょうだい」
この海保純の質問に、一瞬戸惑ったアヤは深呼吸をして自分を落ち着かせて、日本への帰国途上の出来事、全財産が現在アヤの管理下にあること、五代と松尾の来訪目的などの全てを話した。
それを聞いた海保純は
「そうなの、それで理解できたわ。でも貴女、その頃はまだ二十歳か二十一歳でしょ。よくやったわねえ。驚いた。その上、したたかな男二人を引き下がらせるとは、あー驚いた」
続けて

「だから京子さんは財産を全て貴女が管理していることを知っていたのね。その財産のことは、貴女がこの世を去るとき、元のお金程度は残して、大磯のエリザベスサンダースホームのような恵まれない人達を救済している施設に寄付するように。その間は貴女が有効に利用して結構です。父にお金を貸していたとか、いろいろな人が現れても、それは全部嘘だから騙されてはダメ」
アヤは瞬きも、呼吸もすることを忘れたような、一瞬すべてが止まったような表情で海保純を見つめていた。

一息ついた海保純は続けて
「加賀京子さんが言っていたことをまとめると、以上の通りね。先ほど貴女が話してくれたから私も理解できたわ」
「それから帰りに仏具屋さんに寄って、陶器のお線香立てとお線香を買って、竈の灰を入れて、毎朝お線香をあげて京子さんを供養することね。そのときコップ一杯の水をお線香立ての横に置くようにしてください。喉が渇いているとも言っていましたから」
海保純はここまで言ってアヤの状態の変化に気が付いた。どちらかといえば先ほどまで蒼白と言っていいほどのアヤの頬が上気して赤くなり、息づかいも激しく、両膝の上に置いている握りしめている拳が震えている。
「小林さん、どうしたの！　大丈夫！」
と言う海保純の声に隣室から付け人が
「先生、何かあったのですか」
と言って部屋に入ると同時に
「小林さん、大丈夫ですか」
とアヤの両肩に手を置いて、俯いているアヤの顔をのぞき込んだ。
アヤは顔を上げて
「先生！有り難う御座います」
と絶叫と言っていいほどの声を発してその場に泣き崩れた。

暫くしてアヤは姿勢を正し、海保純に向かって
「先生、一番気にしていた『私がお金を使わせて貰っていること』と『京子さんを見つけて、お父様に貸したお金を返して貰うんだと言って来ている人達』の両方が一度に解決したというか・・・京子お嬢様が私のことを恨まないどころかそんなに心配していてくれていた・・・そしてお金も使っていいと言ってくれた・・・。今の私の・・悩み続けていた一番大きな悩みを・・・京子お嬢様が全て許してくれた・・・そのお気持ちを思うと・・・私は・・・。」
となきじゃくりながら、嗚咽で言葉が続かない。
ようやく座り直したアヤは海保純を見つめて

「先生、京子お嬢様を供養するのにお位牌とか戒名とかは要るのでしょうか」
と聞くと
「真心が通じれば仏様は安心するの。位牌も戒名もいりません」
と答えて、アヤの落ち着いたのを見て
「貴女一人で良くここまでやったわね。京子さんのお父様が亡くなる前に教えてくれていなかったら出来なかったことよね。私たちが分からないところで、お父様の生きているときから今日まで一本の線がつながっていると思から、お父様にもお線香と水をあげて供養してね。今預かっているお金は、私も誰にも言わないから大切に管理しなさい」
「先生有り難う御座います」
と言って時計を見ると既に午後一時になろうとしていた。
「先生、もうこんな時間ですから失礼します」
と言って帰ろうとすると
「貴女のお母さんのことが残っているでしょ。お蕎麦を頼んであるから一緒に食べてそれからお母さんとお話ししましょ」
「でも、先生がお疲れになりますから」
と遠慮すると
「今日はその予定でいるから心配しないで」
と言って手洗いに立った

お蕎麦を食べて雑談をした後、海保純は再び霊界との交信を始めた。
目を閉じた海保純は何回か「はい」「はい」と頷いたあと目を開けて
「お母さんも寂しがっているから、お母さんの分もお線香をあげてね。お水も」
「お母さんは三月の東京大空襲で焼夷弾にやられた、と言っています。妹さんはこちらにいない、と言っているから、どこかに生きているのですね。会えるといいですね。貴女のことは小学校卒業と同時に他人の家に女中奉公に出して、満州にまで行かせて苦労をかけた。謝ってください、と言っていましたよ」
それを聞いたアヤは、目頭を押さえた。。
海保純は
「お母さんと京子さんの二人が貴女を守って応援してくれていることが分かって良かったわね。京子さんのお父様と京子さんと貴女のお母様には毎日朝夕お線香とお水を差し上げて感謝を忘れてはダメよ。そして預かったお金は大事に使うのよ。」
と言ってくれたとき、アヤは海保純の両膝に両手をおき、再び声を出して泣きじゃくった。

霊界との会話時の海保純の表情は真剣そのもので、アヤは霊界との会話を信じるとか信じないとかの段階ではなく、ストレートに全く疑いなく信じた。そして感謝した。
今日、海保純がアヤの全てを知り、この世でただ一人の理解者であり応援者になってくれたことと、母親と京子との連絡者にもなってくれたことも有難かった。

帰宅したアヤは、途中藤沢駅近くの仏具屋で購入した陶器の線香立てに竈の灰をいれて奥の部屋に持って行った。そこには軽井沢の別邸を売却するとき持ってきたというよりも、売却に携わった極東物産の担当者が
「お嬢様のお荷物は別にして、当社で後日お届けしましょう」
と言うことになって、京子になりすましているアヤには断ることはできず、詳しい地図を渡して、鏡台、総桐箪笥、ケース入り日本人形などが届けられた。
京子が使っていた総桐箪笥の中には京子の十着程度の和服と小物一式が入っていた。アヤが旭東銀行や旭東物産に着て行った和服小物も入っている。
アヤは今朝まではこの箪笥に近寄ることを何か後ろめたく感じ、この箪笥や鏡台の置いてある部屋に入ることもためらっていた。しかし、今は感謝の気持ちが一杯で、箪笥の上に白布を置き、その上に灰を入れたお線香立てに、買ってきたお線香を三本灯して、傍らに三つのコップに水を入れてその横に置き、両手を会わせて軽く頭を垂れ、母親と加賀大造、京子に感謝の挨拶をした。特に京子への感謝の時間は長かった。

その夜自宅の小さな庭から空を見上げると、月のない夜空に星が輝いていて、アヤにはその星のどこかから母と京子が見守ってくれているような気がした。

翌日夕方、「すずらん美容院」のお客も帰って掃除が終わったことを見定めたアヤは、帰り支度をしている牧洋子に
「先生、お時間がありましたら海保先生のことでご報告があるのですが」
のアヤの言葉に
「どんなこと？」
「実は昨日海保先生がご自宅に来るように、と仰いましたのでお伺いしました。それで私のために霊視をして下さいました。そのことで先生にご報告したいものですから」
と言うと、驚いた牧洋子は
「じゃ、小町通りのお蕎麦屋さんの二階がゆっくりお話し出来そうだから行きましょうか」
と言って二人で出掛けた。

向き合って座ると、牧洋子は
「貴女がお願いしたの？」
「いいえ、この前先生にお供して連れて行っていただいたとき、あの席上で海保先生の所に霊界からの囁きがあったそうです。そう言うときは霊界から海保先生に、初対面の人に伝えて欲しいと言う信号だそうです。それで昨日ご自宅に来るように言われました」
驚いた牧洋子は
「それでどうだったの？」
「はい。満州で行方が分からなかったお嬢様はお亡くなりになっていました。私がどのように生きてゆくか心配しているから、海保先生にその旨を伝えて欲しい、と言うことと、探していて分からない母も東京大空襲で焼夷弾に当たって亡くなっていました。母は私を小学校卒業と同時に女中奉公に出して苦労を掛けたお詫びをしたい、と言っていたそうです。それから妹は生きているそうです」
「そう。心配ごとが分かって良かったじゃない」
「はい。海保先生から毎日朝夕、京子お嬢様と母にお線香とお水をあげるように、と言われましたので、早速昨晩から実行しています」
アヤは牧洋子に対しては加賀家の財産のことは一切触れなかった。

牧洋子に海保純から招かれたことを報告した翌朝の新聞に、ニュヨークタイムス記事の転載形式で
「日本の霊能者海保純が、ニューヨークで六月に開催される世界霊能者会議に出席する前に、M工科大学の霊界研究グループとアメリカ軍の霊媒研究者が海保純と意見交換をすることとなった。この意見交換会には日本の海保純以外に世界的に有名な霊能者であるチベットの高僧チャン・ウコン師を招いている」
との記事に続いて
「なお、海保純は去る一月三十一日、東京H公会堂で開催した『人間と霊界との交流、霊を尊び霊に優しく』と題した講演の途中、全く予定外のことであったが、その場で一人の聴衆の祖父母の霊と会話し聞く人たちを驚かせた。来場者は収容人員二千人を超え、溢れた約千人が場外の野外スピーカーで講演を聞いていた」
と海保純を紹介していた。海保純がこのように世界的に有名な霊能者であったことを知らなかったアヤは驚いて、知らなかったとはいえ、過日は海保純を朝から独り占めにして良かったのだろうかと心配になっていた。

すずらん美容院の常連客の中でアヤを指名するお客が増え、牧洋子はアヤを従業員ではなく共同経営者のように処遇し、給与・賞与ともに一般従業員と比べ遙かに優遇していた。

美容院は相変わらず鎌倉文士夫人の社交場にもなっていた。
それから二年経過した十月の末、牧洋子が自宅のトイレで倒れているのを、夫の章輔が未明に発見した。そのときは呼吸もあったので救急車で病院に運んだが脳出血と診断され、医師の懸命な治療にも関わらず入院した日の夕刻亡くなった。

アヤはその日の夜、牧章輔と話し合い、予約客のこともあるので明日と明後日の営業を休み、三日後から営業を再開することとし、二日間の予約客に電話をいれて予約日を延期して貰った。

葬儀が終わって牧章輔は全従業員を集め、アヤを美容室責任者としてそのまま営業を続けることを全員に告げ、明日から職員はアヤのことを「先生」と呼ぶことも命じた。

牧洋子がいなくなっても、技術とサービスは全く替わらない「すずらん美容院」に安心した顧客は、以前と変わることなく足を運んでくれたので、経営は安定していた。

その後、牧章輔は毎週月曜日、美容院の営業が終了するのを見計らってやって来て、アヤから一週間分の営業日報と収支計算書と現金を受け取り、当面必要な小口現金を渡して帰って行った。

二カ月に一度くらいは営業状態を聞くと言って、アヤを誘って江の島のホテルで食事をしていたが、その時の章輔は日頃と異なり陽気でいかにも楽しそうにしていた。

ある日、五代と松尾が美容院を訪ねてきた。アヤは海保純から聞く前の自分を装わなければ、と自分に言い聞かせて、閉店後、いつもの藤沢駅近くの喫茶店に行った。見るからに憔悴しているように見えた五代は、力のない声で
「『加賀京子が相続した相続財産額から、加賀大造の債務の返還を求める返還請求訴訟は、被告人加賀京子の所在が分からないことと、債権存在証明が一方的な証明であること、この二つの理由から訴訟は受け付けられない』と地裁から連絡してきた。もう打つ手はない」
ここまで言って、アヤの顔を見ながら
「アヤさん、その後京子の動静は分かったか、もうそれだけが頼りだ」
と、溜息をついて松尾を見た。
「五代さん、相変わらずNHKラジオの『尋ね人』にだしているのですが、どこからも返事はありません」

のアヤの返事に松尾は
「アヤ、もしも何らかの手掛かりがあったらこちらに連絡してくれ。俺が所帯を持った住所だ」
と一枚のメモを渡された。

先ほどの五代の言葉で、旭東物産の契約書関係の押収もなければ、筆跡鑑定もない、と感じたアヤは、内心ホッとしていたが、そのような素振りは全く見せず
「松尾さん、承知しました」
と言って、メモに書かれた住所氏名を確認して持ってきたバッグにしまってから
「松尾さん、ご結婚おめでとうございます」
と言いながらニコッとした。

帰宅したアヤは、もうこれで五代たちからこの件での追求はないと思うと、気が楽になった。しかし、全てを隠している自分が、本当にこれでいいのか、という疑問は感じていた。

鎌倉の牧家菩提寺で牧洋子の一周忌法要が終わって、親族での江ノ島のホテルでの会食にアヤも招かれ、美容院は以前と変わらず多くのお客様に来て頂いている、とのアヤの挨拶に、章輔の叔母と名乗る老夫人は
「章輔さん、アヤさんに感謝しなければね」
と意味ありげの発言をした。

会食も終わって親戚一同をホテル玄関で見送った章輔は
「アヤさん、一寸あそこのラウンジでお茶でもどうですか」
とアヤを誘ってさっさと歩きだした。章輔の態度が、たまに一緒に食事するときの態度と違うな、と思いながら後をついていってテーブルに向かい合った。
「アヤさん、いつも美容院の経営を有り難う。洋子のやっていた時よりもお客様が多くなっているね。感謝します。来月からの貴女の給与を少しだけど上げさせて貰うよ」
と言ってアヤを見つめた。アヤは
「今でも十分戴いていますので、ご配慮には感謝しますが遠慮させて頂きます」
「まあ、そう言わないで受け取ってください」
と言ってから、コーヒーを口にした。
暫く沈黙が続いたあと
「アヤさん、僕と結婚してください。そして貴女にも美容院をあのまま続けて頂く、と言うのが僕の夢なのです。ご承知のように子どもはいません。僕は一人です。このことをいつ言おうかと思っていましたが、一周忌が終わる今日の日が来るのを待っていました」

と言って窓外の海を眺めた。海は黒く、海岸に寄せる波だけが白かった。
アヤはコーヒーカップを見つめたまま黙っていた。
章輔は続けて
「この半年くらい、毎週月曜日夕方お店に行くとき、毎回貴女をお店から誘い出したいと思って行ったのですが、まだお客様がいたり、店員の目が気になったりで、数多く誘うことはできなかったけど」
章輔がここまで言ったとき、アヤは
「牧さん、あまりにも突然のお話なので、頭の中が混乱して何も申し上げられません。ただ言えることは、私にはあまりにも身分不相応なお話で……」
しばし章輔はアヤを見つめていたが
「アヤさん、突然でごめん。僕の心からの願いなので考えて置いてください。身分不相応なんてありません。僕と一緒に人生を歩んでほしいのです」
ここまで言った後、章輔は、
「先ほど法事の席で叔母が『章輔さん、アヤさんに感謝しなければね』といった意味は、叔母からは『章輔さん、アヤさんを好きだったら早く申し込みなさい。いつまでもボヤボヤしていてはだめよ。美容院の経営だって洋子さんのときよりも賑やからしいじゃない。逃がしてはだめよ』とハッパをかけられていて、親戚中も僕たちが一緒になることを願っているから心配はしなくていいよ」
などとアヤに伝え、テーブルの上の小さなバッグに添えられていたアヤの両手の上に、軽く自分の両手を重ねた。
アヤは帰宅してから章輔のプロポーズを思い出しながら
「このまま妻の座も、美容院もそのまま洋子の後釜に座ったら、他人はなんと言だろうか。自分はそう言うのは嫌だ。私が断れば章輔は自分以外で洋子の後をやってくれる女性を探すだろう。そうなれば自分はすずらん美容院にはいられない。京子お嬢さんから預かった資産管理はあるし」
と、章輔には時期を見て断る気持を自分なりに確認した。

その後も美容院は相変わらず賑やかな日々が過ぎていった。アヤは章輔の言葉を忘れたように以前と変わらず仕事に熱中していた。
ある日、海保純から
「小林さん、元気？　今夜空いてない？　江ノ島のKホテルの三百六号室を取って待っているから来て欲しいの」
と電話が掛かってきた。
美容院が終わってからホテルの部屋をノックすると、
「どうぞ、開いてますよ」

の元気な声に
「お邪魔します」
と言いながら入っていった。
広い室内には、テーブルを挟んだ二脚の椅子と、アヤの目には豪華に映るベッドカバーが目に入った。
褒められるままに海保純と向き合って椅子に座った。
「早速聞くけどね」
と海保純が言った瞬間、咄嗟にアヤは牧章輔のことかと思った。しかし続く言葉は意外だった。
「貴女は鵠沼の別荘地にに一人で住んでいる三条孝子さんの美容を毎月二回、三条さんの自宅でなさっているんだってね。それも無料で」
アヤは「何だ、その話しか」と安心し
「どうして先生はご存知なのですか？」
と聞くと
「三条さんが貴女のことで聞きにきたのよ」
「え！私のこと？　なんなのですか？」
「貴女と三条さんと親しくなったきっかけはなんなの？」
「鵠沼の別荘地を散歩していたとき、三条さんから声を掛けられて立ち話をしているうちに、『腰が痛くて美容院に行けない。だからこんな髪になってしまって』と仰ったので『私、美容師ですからお宅に伺いましょうか』と言ったことから始まったのです」
「なるほど、そういうきっかけなのね。もう二年もやっているの？」
「先生、私は孤児みたいなもので、安心して会話ができる家族のような人を欲しかったのです。ものごころついたときは母と妹の三人暮らし。和裁の賃仕事で生計を立てていた母は夜中まで仕事で、私たちは甘えることは許されず、母の仕事の邪魔をしないで、甘えたいのを妹と二人でじっと我慢している生活だったのです。そして小学校六年が終わって直ぐに女中奉公と言っても下働きの下女といった生活。温かな家庭も母への甘えも知らず、小学校を出てからは他人の中で育ってきました。そんな私が三条さんとお話ししていると、家庭的な温かみと三条さんに母を感じて心が休まるのです。私の甘えかしら」
「三条さんも同じようなことを言っていたわ。それでね、しきりに貴女のことを知りたがっているから、『私は小林さんの氏素性は知らないけど、人間、氏より育ちって言うでしょう。人柄もいいし』といったの。そうしたら『先生もそうお思いですか』と言った後『実は貴女を三条家の養女にしたい』と言い出したの」
「三条家はね、京都の名門中の名門で、ご先祖様は当然天皇家。あの三条孝子さんの亡くなったご主人様はご本家から見ると御連枝の端の方らしく、一族の葬儀の時に顔を出す程度のお付き合いだったらしいの。あの三条孝子さんも京都の公卿の御嬢さんだったそうよ。貴女に一緒に暮らして欲しい、と言ってるわ。三条家の財産はそ

うは沢山ないけどすべて貴女に相続してほしい。そして、貴女が結婚を望むのであれば、自分の実家の公卿一族から養子を迎えることもできる、とも言っていたわ」
「先生、そのようなこと、一度に全部並べられても頭に入りません。いろいろな条件は別として、今のままの三条孝子さんの養女になるのか、ならないのか、そこから考えさせてください」
「そうねえ～。その方がいいかもしれないね。小林さん、貴女が直接返事する？」
「いえ、良く考えてから先生にご相談に上がりますので、その上で先生から返事をしてください。それから毎月髪のお手入れに同っていますのでそれはそのまま続けてもいいですね、三条さんがこのことを言い出せば『先生から同っていますが、私には身分不相応なお話で、良く考えたうえで海保先生からご返事させていただきます』と言わせてください」
と言った後、
「先生、ちょっと待ってください。三条さんは先生が私のことをご存知だと、どこで知ったのでしょうね」
とアヤが聞くと、海保純は
『そうなのよね。私も不思議だから三条さんに聞いてみたの。そうしたらね、「こういう人を養女にしたいと思っているけど、と私の意見を聞いてみたくてやって来た」というの。ところが私が小林さんを知っているので三条さんは喜ぶやら、驚くやら、ご機嫌で帰って行ったわ』

その後、アヤは海保純に時間があるかどうか聞いてから、牧章輔からの話を持ち出した。牧洋子の後釜に座るのは自分には出来ないので申し出を断りたい。断ると「すずらん美容院」を辞めざるを得ないから辞めたい、と自分の考えを話した。
暫く瞑目していた海保純は
「小林さん、貴女の行く手に明るさが見える。思い通りにすればいいわよ。だけど、鎌倉文士夫人たちがどのように動くかしら」
「私は鎌倉文士の奥様達にもすずらん美容院をこれからも利用していただくようにお願いします。そして私には美容師の道しかありませんので、どこかに新規開業するつもりです」

数日後、アヤは、牧章輔から
「今夜、江の島のKホテルで食事をしないか」
と誘われた。今日で三回目の誘いで、最初と二回目は仕事を口実に断ったが、今日の誘いには応じてKホテルへ行った。

テーブルについて章輔が口を開く前に
「この前の有難いお話は、私にはとてもお受けできません。私に洋子さんの後釜などできません。実力が違いすぎます。それでどうぞどなたかをお探しください。私は来月末をもってすずらん美容院を辞めさせていただきます」
と切り出した。
牧章輔はその言葉をじっと聞いていたが、やがて
「貴女の身の上に何か変化があるのですか。すずらん美容院を辞めても、貴女の実力では食べるには困らないでしょう。例えば貴女の上にご結婚の話でも出ているとか」
と言って、章輔はアヤを見つめた。
「いいえ、何もありませんが、ただ養女のお話が来ています。それもまだ決めたわけではありません。考えています」
沈黙の多い食事時間だったが、最後のコーヒーを飲み終わると、牧章輔は
「帰りましょう」
と言って立ち上がり、分かったとも、もう一度考えてくれ、とも何も言わずにレジを済ませてさっさと一人で帰って行った。
江の島から小田急の駅まで、橋を渡りながら見る海は、月の光で明るかった。江の島と、その北側に係留している何艘かの和船と、それに連なるようにマストだけになって浮かんでいる十数艘のヨットが、月の光の中で今まで見たことのない幻想的な景観を作り上げていた。美しかった。アヤは咄嗟にアヤのこれから始まる新たな人生を祝福してくれているように感じた。
帰宅したアヤは、すずらん美容院退職の方法、今まで自分を贔屓にしてくださったお客様への挨拶はどのようにしたらいいのかなどを考え始めたが良い案は浮かばない。
翌早朝目覚めたときに頭に閃いたことは、三条家へ養女に行くことは「小林アヤ」から新たな人間がそこに誕生することだった。本名は「三条アヤ」でも通称は「三条絢」にすれば世の中から「小林アヤ」はなくなることだった。そして、新たに「三条絢」でスタートするのも夢が始まるような気がしてきた。
アヤ自身、自分の心の内にある「小林アヤ」との決別欲求には、気が付いていなかった。
起きて、三つのコップの水を換え、お線香を灯して「今日も守ってください」と挨拶して庭に出て大きな背伸びをした。

アヤは、アヤ自身のあらたな出発を京子から祝福されているような、心の内には美容院退職の暗さはなく、むしろ新たに生きる喜びと希望を感じていた。
電話が鳴った。威勢の良い海保純の声が
「小林さん、貴女アメリカの本場のヘヤーファッションを見たいと言っていたわね。今、アメリカ大使館から電話で私は五月二十日から十日間アメリカに行くことになったの。飛行機はアメリカ軍の飛行機で。秘書を二人まで連れてきていいと言っているの。一人は娘の利子を秘書兼通訳として連れて行くけど、あと一人貴女を連れて行こうと思っているの。本場のファッションを見るのは楽しいしこれからの貴女のためになるんじゃない？飛行機代は軍用飛行機だからいらないんだって。つまり只で行けるの。どう？行く？名目は私の身辺秘書ということにして」
あまりにも突然降ってわいた話に、どのように答えていいのか分からず、受話器を握ったまま無言のアヤに
「ねー、小林さん、聴いてるの？」
の声が響いてきた。

続く

身代り（後篇）

堀内永人

火災現場は、町の公営施設「湯の国会館」の広場に隣接する仮設店舗で、大仁警察署青羽根警察官駐在所の真裏であった。放火犯の警察への挑戦である。

新たな連続放火魔の出現か。再び放火の恐怖が、平和な温泉郷を襲った。

弁護人の財箭は、公判の前に漣一に面会した。用件が済んだ後で、財箭が駐在所裏の放火事件の話をすると、漣一は、

「えっ、また・・・」

といったまま目を閉じ、両手を握り締めて、ぶるぶると、震え出した。そのとき財箭は、連一が、誰か人の名前を口にしたような気がした。

「漣一君、君、今なんと言った？」

と、財箭は問いただしたが、漣一は顔をこわばらせ、口をつぐんだままであった。財箭は話題を変えて、

四

二月中旬、財箭は漣一に面会した。

その時も漣一は、

「弟の秀二が、肩身の狭い思いをしていないか」

と、しきりに秀二のことを気にしていた。財箭は、

「大丈夫だよ。秀二君は優秀だから、きちっと勉強しているよ。大学受験も大丈夫だ」

と、漣一を慰めたが、実情は少し違っていた。

入試センター試験の結果も、予想をはるかに下回っていたし、大学受験も滑り止めの私学に合格しただけ。第一志望の大学は勿論、第二志望の大学も失敗した。そのため、秀才といわれた秀二の葛藤は激しかった。

第一回の公判が、平成六年四月四日と決った。

公判の五日前、三月二十日の夜半、天城温泉郷に不審火と思われる火災が、またまた発生した。

「漣一君、君の供述調書を読んだが、各事件について、放火した時の状況が、どうもはっきりしない。そのうえ供述内容が時々変わっている。裁判官には真実を話して本当のことを知ってもらう必要があるんだよ。だから隠していることがあったら、私に話してくれないか。それが君にとって不利になることなら別だがね」

と諭した。すると連一は、ようやく重い口を開き、

「今は何も言えません。しばらく考えさせて下さい」

と言ったまま、二度と口を開こうとしなかった。

財箭は、これ以上聞いても進展はないと判断して、面会を打ち切った。

五

いよいよ第一回の公判が静岡地方裁判所沼津支部（巖谷正雄裁判長）で開かれた。

被告人山田漣一は、二人の看守に伴われ、紺のスーツ、白いワイシャツ、ノーネクタイ、ゴム草履を履いて出廷した。

巖谷裁判長は開廷を宣した後、

「被告人は前に出なさい」

とうながし、続いて冒頭陳述に入った。証言台に立った漣一は、前かがみの姿勢で裁判長をじっと見ていた。

裁判長は、名前、生年月日などの人定質問を行い、続いて、公判担当検察官が起訴状を朗読した。罪状は刑法第一〇八条現住建造物等放火罪及び第一〇九条非現住建造物等放火罪である旨を述べた。次いで裁判長は、

「法廷で発言したことはすべて証拠になるから、自分に不利なこと、言いたくないことは答えなくてもよい」

と黙秘権（供述拒否権）のあること、意見があればいつでも発言してよいことを告げ、続いて、被告人山田漣一の罪状認否に入った。裁判長は、

「被告人は、今、検察官が読み上げた公訴事実に間違いないね」

と連一に訊ねた。傍聴席は、漣一がどのような陳述をするのかと、固唾をのんで見守っていた。

漣一は、しばらく黙っていたが、

「いずれの事件についても、今は言いたくないです。もう少し考えさせて下さい」

と意外にも大きな声で、はっきりと答えた。

弁護人の財箭は、漣一の言葉に驚いた。

裁判長は、左右の陪席裁判官と意見交換し、検察官と弁護人の意見を聞いたうえ、被告人の漣一に向かって、

「被告人はよく聞きなさい。弁護人は君の弁護について真剣に考えておられる。君も心を開いて素直な気持になり、小さなことでも何でも弁護人と相談しなさい」

と諭すように言い聞かせた。すると連一は、

「はい、先生とよく相談します」

と答えた。こうして第一回の公判は、三十分ほどで閉

廷し、被告人の罪状認否は第二回公判に持ち越された。次回公判は、十日後と決まった。

第一回公判の三日後、弁護人の財箭は漣一に面会し、両親や弟の気持ちを話したところ、漣一は、両手をわなわなとふるわせ、意を決したかのように、

「せ、先生！　お、おれは話します。全部話します」

と、声を絞り出すように話し出した。

おれは、今のお養父さんに、すごく感謝しているんです。おれの実の父親は鬼畜のような奴でした。大工でしたが、大酒呑みの博打好きで、仕事もしないで、競輪とパチンコばかりやっていました。車券を買う金がなくなると、母が日雇いで稼いだ僅かな労賃を取り上げて、車券を買っていました。それだけではありません。おれのミルク代にとっておいた百円、二百円の金まで競輪につぎ込んだのです。母が、

「漣一のミルク代だから、これは駄目です」

といって拒むと、母を殴ったり蹴ったりして、おれのミルク代まで奪っていきました。

おれは物心がつくようになってから、

「母さんをいじめないで・・・」

と泣きながら、父親の足にしがみつきました。すると父親は、

「邪魔だ。うるさい」

と、おれを蹴飛ばしました。父親の暴力で、母とおれはいつも生傷が絶えませんでした。着る物は勿論、食べる物もなく、空腹でおれは痩せこけていました。おれは父親の姿を見ると、また母をいじめるのか、また自分も蹴飛ばされるのかと、終始おどおどしていました。そんな毎日だったので、おれはだんだん無口で人嫌いになってしまいました。

母は、これ以上父親と一緒に生活していては、わが子の将来はないと思って離婚したのです。おれが四歳の時でした。

そして、母は、おれが六歳の時に、現在の養父と再婚したのです。幸いにして新しい父はとても優しい人で、おれを養子にして、実の子のように可愛がってくれました。やがて弟が生まれました。それが秀二です。弟が生まれても、お養父さんのおれに対する愛情は、少しも変わりませんでした。

弟はおれと違って明るい性格で、勉強はいつも一番でした。それにおれによくなついてくれました。おれも歳の離れた弟が、とても可愛かったのです。両親は弟に期待していました。おれにとっても自慢の弟でした。だから弟には、

（一流大学に入って出世してもらいたい。お養父さんとお母さんを喜ばせてもらいたい）

と思っておりました。そう思って、おれはいつも弟を応援していました。大恩あるお養父さんに恩返しするためにも、弟を救いたかったのです。

と漣一は、涙を流して話した。財箭は、

「そうだったのか、君の気持はわかった。それでどうしようとしたの」

と話の先をうながした。すると漣一は、

「はい、実は、おれは放火していません。本当です」

と意外なことを言い出した。

「えっ、なんだって、放火してないって？」

財箭は、唖然として、二の句が継げなかった。

心の奥に閉じ込めていた秘密を吐露して、いくらか気持ちが楽になったのか、漣一の顔に安堵の色が浮かんでいた。財箭は、

「なぜそれを早く言わなかったんだ。それでは犯人は誰だ。どうして自分が犯人だと嘘を言ったんだ」

財箭の声は、思わずうわずった。漣一は、

「今は、それだけしか言えません。次の裁判までに心の整理をしておきます。だから今日は、これ以上聞かないで下さい」

と言って一礼し、ゆっくり立ち上がった。

面会を終わった財箭は、その足で両親の山田藤吉夫妻に会って、ことの次第を説明した。そして、次回の公判で何があっても驚かないように念押しもした。

六

四月十四日、静岡地裁沼津支部で第二回公判が開かれた。四十席ある傍聴席は、報道陣で埋まっていた。

漣一の服装は前回と同じ紺のスーツ姿であるが、今日は顔を上げてしっかりした足取りで入廷してきた。

裁判長の巌谷正雄は、開廷を宣した後、証言台に立った被告人の漣一に訊ねた。

「被告人は、罪状認否について申し述べて下さい。公訴事実に違いがあるならば、『違う』と遠慮なく言いなさい。ではもう一度訊ねます。公訴事実は間違いないですか」

公判廷内は、漣一の発言を一語も聞き漏らすまいと、シーンと静まった。

肩で大きく息をしていた漣一は、頭を上げ、身を乗り出すようにして、

「裁判長さん、おれはやっていません。おれはひとつも火付けなんかしていません」

と、小声ではあるが、はっきりした口調で申し立てた。

「おぉー・・・」

傍聴席から、声にならないどよめきが湧き起った。すかさず裁判長は傍聴席に向かって、

「静粛に願います」

と、どよめきを制したが、その実、裁判長自身も驚いた。検察官も驚いた。裁判長は、
「被告人は罪状を認めないですね。では、どうして今まで事実と異なる供述をしたのですか」
と重ねて訊ねた。しかし漣一は、口を閉じたまま、それ以上、口を開こうとはしなかった。裁判長は、
「被告人はこの法廷で、はっきりと真実を述べなさい」
と重ねてうながしたところ、漣一は、両手で証言台を強く掴み、肩で大きく息をしていたが、遂に口を開こうとはしなかった。
たまりかねた弁護人の財前は、挙手をしてから、
「裁判長、私から被告人に問い質したいことがあります。ご許可願います」
と裁判長に発言の許可を求めた。裁判長は検察官席を見て、
「検察官、ご意見は・・・」
と検察官の意見を質したところ、検察官は、
「異議ありません」
と言葉短く答えた。裁判長は、
「弁護人の発言を許可します」
と弁護人の発言をうながした。弁護人の財前は、裁判長席に向かって一礼してから、被告人に向かって、
「漣一君、君は前回面会した時に、
(お養父さんに申し訳ないから)
と言ったので、面会後にご両親といろいろお話したところ、お養父さんは、
(漣一は一人で苦しんでいるようだ。なんとか救ってやりたい)
と君のことを大変心配しておられた。今日は君がどんなことを言っても、お父さんは許して下さるから、ありのままに話すことがご両親のためなのだ。勇気をもって話をしなさい」
と、諭すように話しかけると、
「ハイ」
と返事して漣一は、ゆっくり身体の向きを替え、傍聴席の両親に頭を下げたまま、歯を食いしばり、懸命に感情を抑えていた。ややあってから、小さな声で、
「お養父さん、許して下さい」
と謝った後、再び正面の裁判長席の方に向き直り、
「裁判長さん、やったのは、実は・・・」
と小声で人の名を言った。
裁判長には、漣一の言葉がよく聞き取れなかった。傍聴席にいた両親にも、漣一の声は聞こえなかった。傍聴席は一瞬ざわついたが、すぐに静まった。裁判長は、
「被告人は、もう少し大きな声で言いなさい」
とうながした。漣一は肩を震わせ、嗚咽をこらえていたが、やがて裁判長を見上げると、しっかりした声で、
「やったのは弟の秀二です」

その瞬間、法廷を強烈な衝撃が走ってどよめいた。
「優等生の秀二が放火犯とは・・・」
母親の梅子は、驚愕のあまり、傍聴席にへたりこんでしまった。養父の藤吉も呆然となった。
「傍聴席は静かにして下さい」
と制しつつも、裁判長自身も驚いた。
「被告人にもう一度訊ねるが、君は弟の身代りになったと言うことかね。もっと詳しく話しなさい」
と、詳細な事実関係を求めると、漣一は、ややうつむき加減の姿勢で、次のような事実を語り出した。

弟は、高校二年の夏頃から成績が下がり始めたようで、なにか焦っているようでした。最近は、持病の蓄膿症が再発して飽きっぽくなっていたようにも見えました。そのような状況のなかで、去年の六月の中間テストの成績が悪かったのか、いらいらしていました。そして、六月十五日の深夜に、
(山田荘の壁際に積んである時束に、火を付けた。赤い焔がぱぁーと燃え上がると、嫌なことを忘れる)
と言いました。
おれは消防団員でもあるし、これは大変なことになったと、心配でたまりませんでした。
その時、直ぐお養父さんに相談しようと思いましたが、弟に期待しているお養父さんが気の毒で、言い出せませんでした。幸い犯人が判らないので、それをいいことに、おれは黙っていました。
その後も次々と火事があり、困ったことになったと思いましたが、言い出すきっかけがなく、悩みました。十一月になり、ついに人の住んでいる家にまで放火するようになって、
(これ以上隠す事はできない)
と思いました。
その間には、消防団の仲間から、おれがタレントの『U君』に似ている、と犯人呼ばわれされて責められましたが、おれは黙って耐えていました。
その後、猫越川の火災の時、おれがガスボンベの設置場所を知っていたことと、おれの安全靴の足跡があったということで逮捕されました。
ガスボンベのことは、おれが消火に行く時、弟が教えてくれました。
弟は運転免許を取ってから、時々おれの車を運転していました。
安全靴はいつも通勤に使っている車に積んであるので、弟が履いたと思います。
おれが身代りになれば、弟も放火を止めるだろうと思って、罪をかぶりました。
養父や母を喜ばせるためにも、弟にはいい大学に入って欲しかったのです。

それで、おれが身代わりになりました。
先日、財箭先生から駐在所裏の火事のことを聞き、(また弟がやったのか)
と、びっくりしました。
これ以上弟が犯罪を重ねたら大変なことになると思い、二日間考えました。それで今日、本当のことを話すことにしました。
今まで嘘を言って済みませんでした。
お養父さん、お母さん許して下さい。

漣一は、身代りになったいきさつを一気に話した。
漣一の話を聞いた裁判長は、弁護人の財箭に向かって、
「弁護人、ご意見は・・・」
と弁護人の意見を求めた。財箭は、
「被告人は自分の気持を表面に出さない性格です。次回の公判で詳細を述べますが、被告人の生い立ち、特に幼年期には、言葉に言い表わせない悲惨なものがありました。
非道な実父に比べて、現養父の温かな愛情は、被告人の心を大きく動かし、日々その大恩に感謝しております。
被告人が事実と異なる供述をしたことは、その辺に深い事情があるように思われます。
被告人とよく話し合いたいので、次回公判まで少し時間をいただきたい」
と陳述した。裁判長は、
「検察官、ご意見がありますか、冒頭陳述しますか」
と、検察官に意見を求めると、
「裁判長、被告人が起訴事実を否認するという予想外の事態となりました。弁護人が被告人の心情をよく確かめたいというならば、それまで冒頭陳述を差し控えます」
と公判担当の検察官が意見を述べ、裁判長は第二回公判の閉廷を宣した。
こうして《天城の鬼火》と恐れられた連続放火事件は、意外な方向に展開していくのであった。

次の公判で検察官は、公訴を取消し、即日裁判長は公訴棄却を決定した。
漣一は釈放されたが、代わって弟の秀二が逮捕され、取調べが始まった。
秀二は、正源寺の隣家放火事件を否認した。さらに、猫越川民家放火事件も否認し、自分が民家に着いた時に不審な人影が去るのを見た。その後、すぐに燃え上がったと供述した。
天城湯ヶ島温泉郷に真の平和が訪れるのは、当分先になりそうである。

おわり

ばあちゃんの脱走

幸山周平

「ばあちゃんがおらんよ。じいちゃん」
紀彦は、もぬけの殻になった母の寝床を見て狼狽しながら父を起こした。
「ああん。いね？」
寝ぼけながら起きた父は、母の寝ていた掛け布団をめくると
「あれ、いね。ほんまじゃ」
と言った。
それから、二人で仙台のクルーズホテルの捜索が始まった。この仙台市の真ん中にある都市型のホテルは、両親の結婚式をした思い出のホテルである。そういえば、母は、その思い出のホテルだから泊まろうと言ったときも、「私は行かんし」と言っていた。お盆の夜を三人で心おきなく過ごそうと親孝行のつもりで老いた父と母を誘ったのである。それがである…
紀彦は、東京に家族をおいての、久しぶりの故郷への帰省である。郷里の仙台を離れて四十年になる。紀彦だけは毎年帰省するのであるが、家族は縁遠くなったという思いが強いのか、仙台へはなかなか一緒に帰省してくれなくなっていた。今年は、母の呆けが進んだような気がするので親孝行するなら今の内だぞと言う兄の助言を聞いた格好である。兄夫婦は、子供も他府県で就職し、陽気な年金暮らしをしながら両親を見てくれている。老夫婦の四人暮らしである。特に母に痴呆が出てからは、外出もままならなくなった兄嫁の心労は大変なものであったろうと想像された。だから、嫁孝行の兄がいつも付きっきりで両親の面倒を見ていることから解放しようという算段もあったのである。
あれほど外出を拒んでいた母ではあるが、いざホテルに着くとうきうきしていた。昔気質の父は、紀彦の知る限りにおいて、母を洒落た喫茶店やレストランに連れて行ったのを見たことも聞いたこともない。

だから、9階のバーに行ったときには、おそらく生まれて初めてのバーの体験であったことや、故郷の夜景の美しさに心を奪われたこともあってか、父に
「これを見られたのでいつ死んでもいいわ」
と、溜息混じりに呟いて、父と見合って笑っていた。
なにか嫌なことがあると、「年寄りだと思って馬鹿にしないで」と怒り、それが高じて喧嘩になると、「死んでやら」と、いつもみんなを困らせる母なのに、今日は別人のように楽しんでくれた。それなのに、急に今日に限ってこのようなことが起こってしまったのだ。父は、小さな声で
「刺激を与えるといかんの」と呻いた。
まず九階のバーに行ってみようと、エレベーターに乗り、九階で降りた。昨夜のなまめかしいライトは消え、真っ暗な闇だ。中にガラスが鈍く光り、不気味ですらあった。母の姿はなかった。時計は、午前3時半を指していた。窓ガラス越しに、往来を走り去るテールランプが見えた。もし、夜の町に迷い出たら、紀彦たちの手には負えない。警察に捜索を頼まねばならない。紀彦と父は黙りこくった。そして、再びエレベーターに乗った。
母に記憶の不確かさが現れたのは、四・五年前からである。幸い東日本大震災で被災はしなかったが、大きな揺れと止まらぬ余震、そして津波のニュースは母には応えたようだった。今では、時と、場所と、人が、分からなくなってしまった。家にいても「家に帰ろう、おじいちゃん」というのである。
紀彦を見ても、時々孫と間違える。そのくせ、電話で話すと、実に洒脱に会話を続けるのである。喫茶店で写真集を見つけると、この景色は昔とここが違うと寸評を入れる。昔話はお手のもので、洗濯物をきれいにたたみながら、子育てに奔走して大変だったことを語ってくれる。
今は、「ばあちゃん、ばあちゃん」と家族からいつも言われて、家族の中心に鎮座しているのである。
そのばあちゃんが、ホテルの部屋から脱走した。家に帰ろうとしたのに違いない。体力のある母は、国道を急ぎ足で歩いているかもしれない。元来、方向音痴だったので、とんでもない方に向かい、事故に遭ってなければよいが。ふと、紀彦は小学時代に風邪で寝込むと、足下で座ったまま団扇であおいでくれたことや、おでこに載せたタオルが熱くなると、洗面器の冷水で一晩中換えてくれたことなどを思い出した。高校生の頃は、成績の芳しくない紀彦を怒ることなく、ひたすら静かに送り出してくれた。観音様のような人だなと当時思ったのを思い出した。紀彦が女性を信じやすいのは、ここに原点がある。勿体ないという思いが突き上げたその時、ピンポンと音が鳴ってエレベーターは止まった。
一階フロントロビーに着いたのである。最初に声を上

げたのは、父だった。
「ばあちゃんがおら」
紀彦は、声の先に眼をやった。椅子がいくつも並んだ中に、ひとつ背の高いいすがあった。よく見ると、それは、母の背中だった。紀彦は驚かせないように前に回り込むと、にこやかに
「やあ」
と、声をかけた。
「どうしたんずや。私はフロントの人に家に電話してもらって迎えに来てくれるように頼んだらいいのか、迷っていたんだ」
と、母は言った。
父が三人でホテルに泊まっていることを説明すると、自分がホテルに泊まっていることを覚えておらず、驚いていた。母はやさしく促されるままに、部屋へと戻った。
部屋へ戻ると、紀彦と父に交互に
「ごめんなさい。ご迷惑かけました」
と、何度もお辞儀をして謝った。
これで、クルーズホテルの捜索は、終わった。しかし、それから後は、紀彦も父も満足に寝られなかった。
朝になった。昨夜の脱走のことを尋ねると、母は「何かあったの」といぶかった。
紀彦たち三人は、夕ご飯前に家に帰り着いた。縁側でスイカを食べながら、泊まったホテルの夜景はきれだったねというと、
「あい、だれがホテルに泊まったの?」
と、母は尋ねてきた。

いじめの系譜

幸山周平

その時電話が鳴りました。小学校からです。電話を受けたのは麻理の父親の茂夫でした。

「麻理さんからお聞きになっていると思いますが、教育相談で、お友達の珠希さんから虐められているという相談を受けました」

担任の鵜飼先生は言葉を選びながら慎重に話し始めました。いじめというのは親からクレームを受けやすい事例です。双方を怒らせないよう、音便に治めたいというのがありありです。

事の発端は、仲良しグループのリーダーの珠希が、おそろいの黄色い靴で登校しようと言ったのに、麻理が断ったことから、「アイツは仲間から出ようとする裏切り者だ」と言うことで、無視や、のけ者にされているとのことでした。既に二人とも学校で仲直りをしたので、お父さんもよろしくとのことでした。ただ、珠希さんのご家族は、三月一一日の東日本大震災で被災され、お父さんの実家のおじいさんを頼りに福島からこちらに転校してこられたので、その面での虐めはないかと調べましたが、そのようなことはなかったようです、とのことでした。

茂夫は、娘の麻理を呼ぶと、すっかり忘れていた自分のいじめの思い出を語ることにしました。

あれは、茂夫が小学二年生の時です。茂夫の兄は、かなり勉強のできない子でした。今ならさしずめ特支学級に入る子だったのですが、その当時にはまだ特殊学級なる制度がなかったので、普通学級に入っていました。やることなすことできが悪く、意地の悪い子からは、散々馬鹿にされ虐められていました。お人好しの兄は、笑って我慢していました。茂夫なら一日として学校には居れないと思ったのですが、雨の日も風の日も兄は学校に通いました。

茂夫のクラスに、若村という、勉強も運動もできて、

背の高い意地悪な子がいました。父が大会社の工場長だというのが自慢でした。父親の仕事がらみからか、永田というクラスで一番喧嘩の強い子を子分にして、いつも取り巻きの子と遊んでいました。茂夫もその子達と友達になり遊ぶようになりました。

やがて、おまえんちで遊ぼうということになりました。茂夫は内心恐れていたことが起こったなと思いました。茂夫の家は借家で、若村の家のように豪邸でもなく、手狭まです。五・六人の子が座る場所もありません。何より嫌だったのは、兄の存在です。兄を級友の目に晒したくなかったのです。若村にきっと虐められると思いました。もうこの子達と遊ぶのはまずいと思った茂夫は、おまえんちで遊ぼうといわれたときに、はっきりと「嫌だ」と断りました。

事件はその日に起こりました。兄と茂夫が家でのんびりと本を読んでいたときです。外で、誰かが茂夫の名前を呼びます。窓越しに見ると、若村です。何人か一緒です。「あがるぞお」という声がしたかと思うと、引き戸を開けようとする音がしました。茂夫は、その子を突き飛ばすと、「ダメ」と言いながら、引き戸を閉めました。茂夫は、開いていた窓という窓を閉めて回ると、外は静かでした。ほっとしていたら、突然あちこちで戸を叩く音と「でてこい」という声がしました。茂夫と兄は、顔を見合わせると、兄はもう大きな声で泣いていました。

やがて石が壁に当たる音がしてガラスの割れる音がしました。ガラスの割れる音がした方を見ると、母の内職のミシンに大きな石が当たって、転がりました。茂夫は、ほうきを持ってすごい形相で、わめきながら飛び出していきました。悪ガキどもは蜘蛛の子を散らすように逃げていきました。二度と戻ってこなかったので、ほっとしました。夜近くになって帰ってきた父も母も茂夫をなぜか叱りませんでした。

次の日学校へ行くと、若村は、永田をつれて茂夫の座っているところへやってきました。茂夫を挟むように座ると、輪ゴムで茂夫の左頬をペチペチと二回打ちました。そして、

「昨日のようにやって見ろよ」

と言いました。

茂夫が懸命に我慢して黙っていると、不思議なことに二人は静かに去っていきました。

今にして思えば、若村は、自分自身が怖かったのでしょう。今まで「力は正義、俺は正義だからいつも勝つ」と信じてきたのに、勝ちでも負けでもない不安定なところに立たされたのです。しかも、自分が正義なのは、「父が金持ちで偉い人だ。自分が貧乏人に負けるわけはない」という理由でありました。「貧乏で障害者が家族にいる茂夫に自分が負ける」という世界ほど、若村に怖いものはなかったのです。

次の時間は、体育です。相撲の時間でした。クラスで一番強いのは永田で、その次は吉田、三番目が若村です。運悪く茂夫の対戦相手は永田でした。永田は昨日のことがあるので、やる気に燃えていました。茂夫は、今まで永田との対戦で負けた経験から一つの秘策を考えていました。

茂夫は、永田と四つに組むと、永田の怒濤のような押しで、決まりかと思われました。茂夫は、俵近くだなというところで、右手を引いて体を回しました。永田の体の上に、茂夫の体がありました。茂夫のうっちゃりが決まりました。大きなどよめきで勝ちを確信しました。その後の永田のこれほど元気のない姿はありませんでした。

時間があるのでもう一度試合をやろうと、先生の話がありました。今度の組み合わせは、若村でした。なんと今日は運のない日だと思っていたら、直前になって若村と永田が入れ変わっていました。無理矢理、永田は変わらされたようです。今度こそは、やられると思って、茂夫は覚悟して土俵に上がりました。

「はっけよい、残った」の声で、取り組みは始まったのですが、四つに組んだ永田は、さっきのようには押してはきません。茂夫が、土俵の真ん中あたりで先程と同じように右に引くと、永田の左手が切れ、茂夫が左に回り込むと永田はまたもへなへなと崩れ落ちました。

「永田だめだなあ」

と言う若村の声や、みんなの歓声が起きました。しかし今度は茂夫は、勝ったと言うより、相手の自滅のような気がして、拍子抜けでした。

それ以降、茂夫は、若村達から虐められることはありませんでした。

しかし、兄は、相変わらず虐められていました。自分とは違う奴は、理解できないので怖いので叩け。自分が、虐める立場にいれば障害者でないという証明になるという、勝手な思いこみで虐めや差別を受けました。こういう子は、普通の人に比べて長生きしない例が多いのですが、兄も病気で早く他界してしまいました。

そんな話をしていると、そこへおじいちゃんがやってきました。「やっぱり、いじめには、やりかえさないといかんのかなあ」と言いました。

「おじいちゃんも虐められたことがあるの」

と、麻理が尋ねると、

「あった」

と話し始めました。それは、茂夫も初めて聞く話でした。

小学校一年の頃のおじいちゃんは、活発なワルの一人だったそうです。みんなが朝礼に出ているとき、教室に残った四・五人で、硯の中の筆に墨を付けては、壁や天

井を汚しまくったというのです。そんな子が小学二年生になると、虐められるようになりました。

昭和の初め頃は、貧富の差も激しく、庄屋のせがれの安吉は背も高く腕っ節も強く、勉強のできるガキ大将で、子分を何人もつれていました。一方、おじいちゃんは、クラス替えで友達がいなくなり、いつも一人で下校するようになっていました。そこを狙われたのです。

成績は、安吉を抑え、おじいちゃんがトップでありました。おじいちゃんの父親は、病気で早くに他界し、母一人でたくさんの子を育てている、貧乏な百姓でありました。親が、金持ちや、大百姓や、校長先生だと、子供はそれだけで威張っていた時代であります。安吉から見れば、力こそ正義。虐められれば子供達は、自分のお母ちゃんに言いつけてやるといった時代であります。先生達は、子供達が悪いことをすると、お巡りさんに言いつけるぞと、脅した時代であります。世間体がハバを利かし、あそこの子は体裁が悪いという評判が立つと、周りの近所とおつきあいができなくなりました。だから、「悪い評判が立たないよう良い子にしなさい」と、親も先生も注意したのであります。

おじいちゃんは虐められても、母親に訴えることができません。忙しい母を心配させられない母子家庭だったのです。安吉からすれば、ちびで、貧乏で、お人好しで、虐めても我慢しているおじいちゃんに、勉強で負けているのが我慢ならなかったようです。自分の正義の世界が、おじいちゃんによって冒涜されている。このままの状態が不安で怖かったのでしょう。子分に示しが付かないと思うのでした。

正義は勝つ。勝った者が正義なのです。だから、安吉は、おじいちゃんを狙いました。校門を出ると、おじいちゃんの首根っこを掴み、近くの倉庫へみんなで連れて行きました。中に入れ、針金でかんぬきを、ぐるぐると縛ります。おじいちゃんは、怖くて大きな声で泣き始めます。学校に聞こえて響くぐらいの声で泣いても誰も心配して出ては来てくれない時代です。泣いたのを合図に、悪ガキどもは針金を外して、蜘蛛の子を散らすように逃げていきます。

毎日これが続いたのです。おじいちゃんは、母親から「休んだらいかん、良い子にしろ」と言われていたので、学校は一度も休むことはありませんでした。

やがて、安吉達も、我慢ばかりして決まり切った反応しかしないおじいちゃんに、飽きたのか、虐めることを止めました。

おじいちゃんの話を聞き終えた麻理は、「家の人は虐められてばかりだね」と、溜息をつきました。

おじいちゃんは、「人間には、器量というものがある。人を虐めてる奴は、その性格が大人になっても成長していく。だけど、そんな奴は信用されないので、中成功し

かしないんだよ。大きな成功をする人物になるには、虐める自分を克服しないとダメだ」と笑いました。
天賦のもの、それは、知能・運動能力・器量（徳）そして努力する力だ。そのどれもがかけても大成功はない。自分の分相応に生き、幸せを掴もうと、おじいちゃんは言いました。小学生の麻理は、世間並みには成功者と言われている父と祖父を交互に見つめ、
「人生色々あらあね」
と、大きな声で笑いました。
梅雨明けを知らせる蝉が、鳴き始めました。

美春という名前

亜木陽一

僕の父は○○美春のお父さん○○大志（だいじ）という無名の作家の友人なのだ。
○○美春の父大志は作家だが、全くの無名で、○○美春は父からの二世作家という。
ところで、僕の父は一度だけ僕を連れて○○大志の家、東京の高級住宅街で有名な入縁上手（にゅうえんじょうず）に行ったことがある。
昔の事なのであまり良く覚えていないが、とにかく旧華族の邸宅のような威厳のある家だったと思う。
○○という表札だけが目に入った。
玄関を召使いと思われる老婆が開けて案内してくれた。
その時、
！！！
!!!!!
!!!!!!
？？？
??????
「中田（なかだ）さん、○○美春の『△△の秘密』というベストセラーの小説を読みましたか？」
二十五歳になって、職場も落ち着き、趣味の小説を書くことを始めて三年目、カルチャーセンターの文芸講座に入った。
カルチャーセンターでは、未発表の小説を集めて、同人誌のような文集を作っている。
そのサークルの編集長が、あの美貌の飯田桂子である。
僕のペンネームは、名字の中田を美春に変えて、名前の透はそのまま使って、美春透と言う。
第六感の強い飯田桂子がこれは何かありそうだと、色々突っ込んで尋ねてきた。
どうして今ブレイク中の作家○○美春と同じ名字を名乗っているの？
ペンネームの秘密をさぐってきた。
僕は答えた。

WA WA WA
?!?!?!
貴族みたい
理性的
大人っぽい
綺麗
魅力的
格好いい
頭が良さそう
垢抜けている
洗練されている
ズバ抜けたセンス
理想的
神秘的
インテリジェンス
見た瞬間、不思議なオーラが全身から発散してる！
クラクラ
ドキドキ
ワクワク
女の知性の魅力すべて‼
びっくりして何も言えない・・・!!!

当時中学一年生だった僕は見たこともない知性の空間というか、高級な、エッーこんなハイクラス・ハイセンスの女の子がいるのかと言う、感じたこともない、特別な雰囲気を見た、感じた。

高校生と言えば高校生で通る、大人の女の人と言えば大人の女の人でも通る、同じ中学一年生の〇〇大志氏の娘〇〇美春さんだった。

話一つするわけでもなく、風のように消えて、自分の部屋に入ってしまった。

「そこであなたは彼女に惹かれて、今でもずっと思い続けているってわけ？」

飯田桂子が僕を茶化した。

「冗談よしてくれ。俺、そんなに純じゃないよ。中学生の時だって、人並みに彼女や恋人はいたし、高校・大学時代にはいろんなタイプの女の子とつき合ったし、一通りの男女のお遊びだって経験して通過している。今では同い年（二十五歳）のカミさんだっている。そんなに孤独な人生じゃないよ。だいたい一人の女しか愛せない。しかも中学生の時、つき合ったわけでもなく、たった一回だけ出会った女の子に一生惹かれて、恋人を作る時に常にその女の子のことを引き合いに出して新しい恋を決めるなんて、ちょっと考えられない話じゃないか？」

「それなら、初恋の人は？じっくりトコトン徹底的に話してくれなければ、家に帰さないわよ」

飯田桂子が勝ち誇った様に尋ねてきた。

「それは小学六年生から中学生になる前に卒業してる。クラスで一番大人っぽくて綺麗な女の子に恋をしたらフラレてしまい、同じ様に背が高くて一番格好いいスポーツマンの男の子を狙ってフラレたクラス二番の美人と話が合った。とても可愛い子。フラレた者同士でしばらくつき合った。何ヵ月続いたかな。それが初恋かな。小学生最後の卒業式が終わった後のデート。二人は通学路から少し在る公園で会った。彼女は口紅をつけて来た。念入りにメイクして来た。俺のために化粧してくれた。グロスみたいな苺色の口紅。マスカラもアイシャドウもつけて、チークも決めて来た。でも小学生ではとても背伸びだ。大人がする甘くてキュートなメイク。服装だって洋画に出て来るモダンな外国人の少女のようだった。記念日に着て来る、勝負服。あんなに可愛いくてあどけなかった子が、こんなに色っぽくみえるのか、びっくりした。大人のまねをして、キスをしてみた。顔中が化粧品の香りでムンムンした。初めてキスをした時、世界がスローなテンポに変わって光が走ったけど、〇〇美春さんの時の知性の空間に驚いたほどではないと言うか、定石通りの体験だった。今思うとあの日の口紅の味は苦かったなァ。そんな二人も中学生になる前の春休み、お互い何となく別れてしまった。だけど、初恋の人への思いなんか何も引きずっていない。飯田さんに言われるまで、今ではスッカラカンに忘れていた。それからは多くの恋を経験したから、初めての女にあまりこだわらないよ。楽天的な性格なので」

そうか、そうか、飯田桂子がア然とした。

「初恋の人もしっかり客体化して、過去の思い出として封印されているのに。美春さんが初恋の人よりも衝撃が強くて忘れられないのかァ」

飯田桂子は少しあせっている。

「それじゃあ、どうして、あの女（〇〇美春）にはまってしまったの？どうして、どうして、〇〇美春さんを考えて、ペンネームでさえ美春透なんてロマンチストのようなペンネームつけたの？」

「いや、あの子（〇〇美春）の衝撃が大きすぎたんだ。とは言っても、恋愛や憧れでもなくて、まして大人になっても中学生しか愛せないロリコンとはもってのほかだよ。今までの話から言うと、美春さんとの関係って言うのは、何人・他の女の人を愛しても最後には必ず帰って来る生涯で一番大切なあの人、と言う永遠の純愛と言うわけではないんだ！」

「えっ？、そうしたら美春さんのと関係は何？」

意外な展開に飯田桂子ががく然とした。

「新しい愛の形かな、イメージ愛とか通行人愛とでも言うのかな！特別にプラトニックを強調するわけではないけど、特別な人・魅力のある人に出会って、自分の普通の恋愛とは関係なく、その人のイメージとか、何事もなくただ通行人として自分の人生・ドラマの中に登場してすれ違って消えて行く、ただそれだけなんだけど、人生

に多大な影響を与えてくれた人って言う感じなんだ。即ち恋愛の対象になる女とは違うんだけれど、美春さんに一度巡り逢っただけで、俺の人生は大きく変わってしまった。そうそう美春さんは通行人なんだけれど。例えば、街を歩いていて見たこともないくらいすごくオシャレな人を見かけてついスナップ写真を撮ってしまい、友人に自慢して、そのファッション・センスを参考にしてしまった、即ち生涯自分のファッション・ポリシーのお手本にさせてもらった、なんて言うカ・ン・ジ！それが中学時代の俺が中学時代の○○美春さんに感じたのは、そういうちょっと変わった感情なんだ」

「なるほど、ごめんね、ごめんね、透さんは今まで人生で何人もの女の人と恋愛してつき合うことがあっても、○○美春さんのあんなちょっとした事が忘れられず、結婚した今でも密かに思い続けているのかな？って誤解していたの。そうそう、○○美春さんとは一世一代の超少女趣味物語かなって」

飯田桂子はくすっと笑った。

「二十二歳になった時、おやじが亡くなって、人生を深く考えるようになって小説を書き始めた時、ふと○○美春さんのイメージが蘇って来て無名とはいえ、作家の娘さんの印象がとても強かったから、縁起をかついで美春透と名付けただけだよ」

「それで透さんは今の奥さんと結婚に踏み切って、やっと昔から身体の奥底で輝き続けていた○○美春さんのイメージを過去の思い出にできたのかァー」

飯田桂子は興に入って、少し興奮してる。

「そんなにオーバーに言わなくてもいいんだ。言うなれば、少年期から大切にしまっていて時々覗いてみた、美春さんにもらった知性の空間というのか、そんな宝石箱みたいな物体が消えて行ったら、そのエッセンスといえる、美春さんの精神の中で一番なもの、あの人の本質というのか、一番大切な空間が心の底に染み込んでしまったと言うんだ。と言っても今、俺が本当に愛しているのは、言うまでもなく、うちのカミさんだし、思い出深い青春時代には何人か特別の女の子もいたし、彼女達の事は今でも忘れられない、楽しく美しく甘酸っぱい思い出として心の中に秘められている。（昔の恋人をほどほどにしないと、今のカミさんは結構うるさいんだ。）そう、だから○○美春さんは別格の人なんだ。ただ一瞬の出会い、通行人としてすれ違っただけで、十二年間も俺の心に大きな影響を与えた女、人生観を大きく変えてしまう程のインパクトがあったんだ」

飯田桂子が何か意味あり気な目をしている。

「俺自身、今回のように『△△の秘密』がブレイクして日本中の有名作家になって初めて○○美春の作品を読んでみた。そうして初めてあの人の偉大さ、日本一とも言えるズバ抜けた知性の秘密が少しわかったような気がするよ。あの時（中学生の時）感じた知性の空間は、後に日本を代表する大作家の誕生を十二年前に予測させた。なるべくしてなった人に、会うべくして会ったというわけなんだ。俺だって君に○○美春との淡い秘話をすっかり話してしまって、すっきりしたというのか、本当に美しい春の訪れを感じたようだ、心の中の春、魂の春が来たんだなって」

「ただそれだけの出来事だったのか！ところで中田さん、いや美春さん、前作の『幻気分』はとても面白かったわよ。次作はどんなタイトル？」

「『巡り合わせ』」

「何か意味深ね。でもきょうの話で、美春という名前の秘密がやっとわかったわ」

飯田桂子が納得した。

祝出版

家康と凧狂いの右近

堀内永人著

静岡新聞社　1,200円

命を賭して嶺田用水を完成させた
遠州菊川の義人　中條右近太夫物語

渡り鳥

吉田忠雄

私は越谷市に住んでいます。健康維持のために近くの埼玉県民健康福祉村にかよい、1800メートルの周遊コースを歩いて一周しています。この施設には噴水の池と称する水辺があり、野鳥が生息しています。その中で一番数の多いのがユリカモメです。

わたしは少年時代から海洋冒険物語がすきで、海洋冒険小説や映画に親しんできました。これらのなかには脇役として海鳥が登場します。小説に書かれた難破漂流物語では海鳥ははなれ島での生活の食糧として扱われることが多いですが、私の場合は心を癒される身近な野鳥として存在します。

私は健康福祉村のジョギングコースの周遊の途中で噴水の池の水辺で一休みします。時にはポテトチップスなどを買って持っていき、水鳥に与えます。ユリカモメのほかに鳩やカラスも集まってきます。そのほか鴨も10羽ほどまとまって泳いでいます。ユリカモメは鴨と異なり集団では泳がず、思い思いに湖上を泳いでいます。鴨は私がユリカモメに餌をやってもあまり関心を持ちません。

ユリカモメは渡り鳥です。昨年6月の某日、気が付いたらいなくなっていました。いつ戻ってくるかと心待ちにしていましたら11月1日に帰ってきました。夏の間はカムチャッカ半島のコロニーで生活をし、夏は日本各地を越冬地として選ぶといわれています。

鴨も渡り鳥です。残念ながら今まであまり関心を持っていなかったのでいついなくなり、いつもどってくるのかわかりません。今年の夏はいつ飛び立つか、秋にはいつ飛来するか注意して観察しようと思います。

私が噴水の池の岸辺に立つと時々ユリカモメが一羽大きな羽を広げて飛んできます。エサの入ったビニール袋

を提げているのをみて飛んでくるのだと思います。その袋の中からエサを取り出して池に撒きますと、さらに多数のユリカモメが飛んできてギーギーと声を立てながら争ってエサをついばみます。そうすると、付近を飛んでいた鳩やカラスもやってきて地上に落ちたエサをついばみます。

エサを食べ終わるとユリカモメたちは岸辺の転落防止杭の上に並びます。これは実にかわいい情景です。岸辺に並んだ棒杭のうえに白いユリカモメが一列に隙間なく並んでいるのです。しばらくするとユリカモメたちは一斉に飛び立ち池の上に帰っていきます。

池の上のユリカモメを観察すると、見ている範囲ではエサを食べている気配は見えません。どこで腹を満たしているのかわかりません。ものの本によりますと、ユリカモメは早朝に飛び立って、海や河川の中流域に採食に出かけるということです。天気の良い日の早朝に、このことを確認に行きたいと思っています。

歴史的景観の保存について（I）

―旧日光街道・越谷宿の場合―

漆原直子

昭和の高度経済成長期以来、近年の再開発事業及び平成の市町村の大合併に伴い、各地のまち並みが大きく変貌している。現在、平成のバブル崩壊、リーマンショック、東日本大震災等で、景気が低迷し続けているとはいえ、道路は拡張増設され続け、まちのスクラップアンドビルドが進み、古い建造物は耐震性や防火性が劣るとして壊され、大規模な高層建築群やマンションが増えている。また、大型店舗が進出し、古いまち並みや個人商店が並ぶ商店街の活気が失われている。

まさに、埼玉県の東南部にある越谷市がその最中にある。越谷市は面積約60平方キロメートル、人口約33万人と、首都圏のベットタウンと化し（いわゆる埼玉都民の増加）、埼玉県下では第5位の人口を抱えている。一九五八年に越ヶ谷町より周辺の町村を吸収合併して越谷市となり、さらに平成二七年には中核市への移行を目指している。

越谷市は、江戸期に、日光街道の三番目の宿場町・越谷宿（日本橋を起点に、千住・草加・越ヶ谷・春日部・杉戸・幸手と続く）として栄え、今でも一部の地域にその面影を残している。しかし、旧日光街道沿いにあるかつて越谷宿を形成していた商店街は、車は増えているが人通りが減り、高齢化が進んで、シャッターが下りた空き店舗が増えている。古い家や蔵が取り壊され、駐車場等にされて、まるで歯の抜けた櫛のようである。

今、こうした状況に危機感をもち、歯止めをかけようとする人々がいて、日本各地で、古いまち並み、古い建物を保存、活用しようとする動きが起きている。埼玉県の教育委員会もすでに昭和四六年から、明治建築物緊急調査を行っており、明治～大正期の建造物を文化財としてとらえ、その保護のためのデータベースを作っている。ただ、当時調査した建築物も取り壊されて、現存している建物は数少なくなっている。埼玉県下で、古い家やまち並みの保存に力を入れている所は、川越市、行田市、幸手市、深谷市等がある。

川越市の場合、元々城下町で蔵作りのまち並みが有名であるが、以前は、〝蔵作り〟を隠すように看板を掲げたり、老朽化を理由に取り壊そうという流れがあったが、一度壊したものは、二度と元通りにはもどせないとして、一人の店主と市の建築課の職員が保存を呼び掛け、今では重要な町の観光資源となっている。

また、行田市は、さきたま古墳群と忍城を抱える城下町で、明治以降の近代化の中で足袋作りを地場産業として、全国のシェアの8割を占めていた時期もあった。忍城は、戦国時代一五世紀に成田氏が築城し、北条氏側であったため、石田三成による水攻めを受けた城である。水攻めは堤（石田堤といい、さきたま古墳群の一部を堤として利用した）が決壊したため失敗に終わった。その行田市も現在、不況や少子高齢化で、まちとしての活気が失われつつあり、120位ある蔵も、単なる物置以外の活用法が無く、お荷物でしかなかった。しかし、地元の一人の建築士と市の埋蔵文化財担当だった職員が、まちづくりのために蔵の活用を考えて、〝足袋蔵ネットワーク〟を立ち上げた。文化庁の後援も受けて、文化庁の様々なモデル事業を実施し、ボランティア活動も導入して、蔵や古い工場を保存して有効な活用を図っている。国の登録有形文化財となった建造物もある。埼玉県知事も視察に来られている。

幸手市は、旧日光街道沿いに幸手宿があった。『岸本家』という醤油醸造所兼住宅として江戸時代末期に建てられた一軒の古民家を登録有形文化財として申請し、認定されたことをきっかけに、市民の幸手宿の街並み保存活動への関心が高まっている。ちなみに、同じ旧日光街道沿いにある草加宿は、古い家並みはあまり無いのだが、芭蕉が『奥の細道』に〝草加〟を書き留めたということで、有名になっている。また、大正一五年に建てられた草加市立小学校が、埼玉県初の鉄筋コンクリート製の学校建築物であることから、草加市の歴史民俗資料館として利用されていたが、平成二〇年に登録有形文化財となった（草加市では初、埼玉県下では123番目であった。）埼玉県下で、博物館や郷土資料館のような施設をもたないのは、越谷市と松伏町だけであるという。

深谷市は、渋沢栄一の故郷であるが、平成二三年度の埼玉県の『歴史のみち広域景観形成プロジェクト』モデル地区の一つに指定された。このプロジェクトについては後述する。

私の伯母（父の姉）は、旧日光街道沿いの、江戸期よ

り続いている金物屋に嫁いで約50年が経つ。現在の建物は、明治期に二度の大火があって焼失し、明治末から大正期にかけて建てられている。京都と同じように、町家づくりをしており、間口で税金が決まるので、敷地は鰻の寝床のように奥に細長くなっている。敷地には、店舗の他、土蔵一つ、房州石の石蔵一つ、板蔵二つ、二階建の母屋（来客用の間）があり、さらに、小さな池のある庭と伏見稲荷がある。また、商品が金物関係で重量があるため、商品を運ぶためのトロッコレールが敷設されていたが、戦争中、金属不足のために国に供出させられて、以後無いままである。先々代は今から約30年前に亡くなり、長男、次男が病気等で幼い時に亡くなってしまったので、三男である伯父が跡を取った。先々代は明治生まれの頑固な人で、家人はずいぶん苦労したらしいが、対外的には堅実で商店会等の周辺からは信頼され、越ヶ谷町議、越谷市議を務め、越ヶ谷町会議長及び昭和三〇年代の市制発足後の三、四代越谷市議会議長も務めた。また、昭和五二年に勲五等瑞宝章を授与されている。昭和四十年代に浮上した商店街の再開発案、街道沿いの古い家並みを取り壊して新しく大規模な高層建築住宅兼店舗を構築する案に、猛反対したという。そのおかげか、今日まである程度の古い家並みが残ることができたのかもしれない。伯父は約20年前に急病死し、以後伯母が一人で店を切り盛りしてきた。親戚の手伝いもあったが、だんだん高齢化の波が押し寄せ、跡継ぎもいないため、存亡の危機に晒されている。店は越谷宿の歴史の一端を担い、特に奥の母屋は客人用に大事に管理されてきた。一階の座敷は客人専用で、家人は使えない部屋であった。私は子供の頃泊まりに行くと、その部屋で寝たが、部屋全体が薄暗いのと、周囲が静か過ぎること、床の間にはカバーをかぶせた三味線が置いてあり、それがどうしても人の姿に見えてしまって、こわい思いをしていた。

母屋は大正期に建てられ、座敷は書院造りで、床の間は欅の一枚板、床柱はタガヤサン（鉄刀木）、障子や襖の桟等には、黒檀や紫檀が使われている。桟は〃塵がえし〃と言って、埃がたまらないように斜めに削られている。また襖の引手は七宝焼きで、それ一つで当時で米俵一俵が買えたという。今では、京都の古美術商等で二個一組三～五万円前後で売られている。建築に当たっての当時の資材帳が見つかり、何をどのくらいいくらで買ったのか、また大工の仕事量、何人の大工が何日作業に当たっていたかが記録されている。

昨年、埼玉県立近代美術館の学芸員の方が、越谷市郷土研究会主催の講演会の講師に呼ばれた際、まち中を散策された。伯母の家にも立ち寄られ、奥の母屋を見て感心され、その時の感想を埼玉県住まいづくり協議会で発行しているニュースに紹介された。埼玉県立近代美術館では、年に数回、『近・現代建築探検ツアー』を開催し

ている。伯母も私も何とか存続、建築物だけでも残せないか、また、伯母の家だけでなく、越谷市の歴史を担ってきた越谷宿としての周辺のまち並みも残せないかと思い、越谷市の有志の方々と私の友人関係、伯母、私、で『旧日光街道・越谷宿を考える会』（準備段階）を平成二三年に立ち上げて、模索を開始した所である。有志の方々には、越谷市の無形文化財に指定されている木遣保存会の方、市議さん、郷土研究会の方、『日本民家再生協会』と『杉並たてもの応援団』に所属している友人がいる。伯母の家は、国の登録有形文化財への申請も視野に入れており、前記の埼玉県立近代美術館の学芸員の方にお話を伺いに行った時、申請可能な家かどうかお聞きした所、十分対象になり得るとのことであった。平成二三年一〇月に、『杉並たてもの応援団』の方々に、建物調査を依頼し、敷地と建物の計測、構造を調べて平面図と立面図を作成した。この団体は、杉並区を中心に、まちづくりの大切な要素である歴史的な建物を残すために、建築家等の専門家と市民による支援活動を行っている。申請するにはまだ調査が必要で、数カ月を要し、申請後も判定が下りるまで約1年はかかるという。越谷市には、登録有形文化財はまだ1件も無い。

登録有形文化財の登録基準は次のようになる。いわゆる、重要文化財とか指定文化財とは違い、近年の国土開発や都市計画の進展、生活様式の変化等により、社会的評価を受けるまもなく消滅の危機に晒されている多種多様かつ大量の近代等の文化財建造物を後世に幅広く継承していくために作られている。届出制と指導・助言等を基本とする緩やかな保護措置を講じるもので、従来の指定制度（重要なものを厳選し、許可制等の強い規制と手厚い保護を行うもの）を補完するものとされる。

登録有形文化財登録基準（文化庁HPより）

平成8年8月30日文部省告示第152号

改正　平成17年3月28日文部科学省告示第44号

建築物、土木構造物及びその他の工作物（重要文化財及び文化財保護法第182条第2項に規定する指定を地方公共団体が行っているものを除く。）のうち、原則として建設後50年を経過し、かつ、次の各号の一に該当するもの

(1)国土の歴史的景観に寄与しているもの

(2)造形の規範となっているもの

(3)再現することが容易でないもの

伯母の家の場合、蔵は明治期で母屋は大正期に建てられているので、築五〇年以上は経ていること（少なくとも80年以上は経過している）、また、(1)から(3)号のうちの(1)の歴史的景観、(3)の再現が容易でない、に当てはまるだろうとされる。

行政における〃まちづくり〃に関する担当部署が、国

レベルでは、文化庁と国土交通省の2系統があり、地方の自治体レベルでは、教育委員会と都市計画課等が担当部署となっている。

国土交通省系列では、次のような法律や事業がある。

・景観法
・地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律（愛称「歴史まちづくり法」）
・中心市街地活性化に関する法律
・地域木造住宅市場活性化推進事業
・建設業と地域の元気回復事業

文化庁では、

・歴史文化基本構想（文化財行政とまちづくり行政が連携し、市町村基本構想や都市計画、景観計画に反映させていくものである。）
・地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律（愛称「歴史まちづくり法」）
・文化財登録制度
・伝統的建造物群保存地区制度

等がある。どれをどのように活用するかは、行政や専門家への相談、他の自治体の先行事例の学習をしていかねばならない。

ここで、『旧日光街道・越谷宿を考える会』（準備段階）が発足した経緯を述べておきたい。

越谷市が平成二一年に景観行政団体になった事を受けて、翌二二年、越谷市都市計画課の主宰で、景観条例策定に当たり、（平成二四年に、市は景観条例を策定、施行する。）市民参加型の景観法のワークショップが開かれた。私は、この時ちょうど、先に述べた伯母の家の保存をどうするか考えていた所だったので参加した。コーディネーターは日本大学の講師の先生と学生が行った。越谷市の残したい景観にはどんなものが有るかを皆で挙げ、それぞれその場所の見学会等を行った。一番の特徴的な景観としては、市の中央を流れる元荒川の水辺の空間、地平線が見えるかと思われるような水田地帯、旧日光街道の古いまち並みが挙げられた。まち並みを残したいと思う人は少なくないが、市の観光マップには、古いまち並みが残されているということの紹介が無かった。市の文化財も神社、仏閣、建長元年（一二四九年）の市内最古の板碑や、動植物の天然記念物は紹介しているが、建築物は皆無に等しい。ワークショップは意見をまとめただけで終わったが、そこに越谷市郷土研究会の方が参加されていたのをきっかけに、お話を伺うことができ、会として以前より越谷宿の保存に高い関心を持ち、越谷宿に関する講演会を開催したり、その歴史を研究されてきたことを知った。会の活動は古く、46年続いているが、旧日光街道沿いの地元の人達との交流がなかなか難しく、40年以上住んでいても新参者と見られ、郷土研究会

の活動に関心を寄せる人はあまりいなかったそうである。私達との話がきっかけで、一気に距離が縮まったと、会の方が話していた。今後も話し会う場が必要だということになり、ちょうど市議さんで郷土研究会の会員方もいたので、有志で『旧日光街道・越谷宿を考える会』を立ちあげることにした。

今年は、越谷市は市民と事業者と行政の三者によるガバナンス（協治）として、行政主導型ではない施策を展開するという姿勢の下に、『まちづくり協調会』を発足させた。これは、『まちづくり支援センター』を作り、まちづくりにNPOなどの市民活動をどう生かしていくかを検討して行く場である。しかしそれは、自然環境の保全と〝新しいまち〟づくり、ニュータウンをイメージしている会であり、古い街並みにはあまり触れないので、私は歯がゆく思っていたが、その状況を憂えているのは私達だけではなかった。社団法人埼玉県建築士事務所協会所属の越谷市内の建築士さんで、埼玉県から先に述べた『歴史のみち広域景観形成プロジェクト』を委託されて、旧日光街道沿いの歴史的景観を調査していた。埼玉県都市整備部田園都市づくり課が担当部署となっていて、平成二二年度に県内61箇所の旧宿場町等における景観資源の調査に取り組み、道路等から見た外観の写真を撮り、約二千件の資源を抽出し、寺社や古い建築物、蔵等を中心に、石碑や石垣、路地、樹木、水路等、多様な景観資源の掘り起こしをしていた。旧日光街道も行い、その中に、伯母のお店の外観がピックアップされていた。しかし、この調査後のデータを今後どう生かすのか、現存するものをどう活用して、地域の活性を図るかが、埼玉県建築士事務所協会の課題になっていた。この度、まちづくり協調会に関する勉強会の場で、私達の会と同じ問題意識を持っている事が判明し、今後協力し合えないか検討していくことになった。埼玉県では、県のホームページを見ると『彩の国の景観・まちづくり』として、こうしたプロジェクトの他、専門家の派遣による景観に関する学習会等様々な事業を展開していた。

越谷市も行田市も明治期に大火を経験し、そのため火事に強いとされる蔵が多く建てられた。また、家と家との間には〝うだつ〟が作られ、隣に燃え広がるのを防ぐ構造にしていった。しかし、家の老朽化は防げず、伯母の家の近くに、同じ大正期に建てられた、伯母宅の母屋と建材も作りも良く似た家があったが、老朽化でつい最近取り壊されてしまった。ひさしの裏側に銅版を貼った、変わった作りの建物で、建築士が見るとこういう作りは初めて見たと言われ、驚くような代物であった。この後一カ月も経たないのに、もう一件、街道筋にあった古い旅館がやはり売却され取り壊されてしまった。経済的な事情があったかもしれないが、一度は泊まって中を見た

いと思っていた建物だったので、残念でならない。

一昨年末、私は長野県の別所温泉と上田の町を観光したが、上田は城下町で戦国時代の真田家で有名である。北国街道が通り、歴史の重みを感じられるが、やはり古いまち並みが消えようとして行く中、まち並みの保存活動を行った経緯を著した本がある。『北国街道上田宿柳町の歴史散歩』という本で、柳町自治会が発行している。その中の序文に、東山魁夷画伯が、「古い家の無い町は、人格の無い人と同じである」と語っていた、という行があり、私もまさにその通りだと思った。古い家やまち並みは、その地方の歴史を体現したものである。城や神社仏閣だけが歴史ではない。そこに生活している人々の存在が、過去形ではなく、現在進行形の生きた歴史である。実際住んでいる人達にとっては、色々と維持が大変であるという話も聞くが、そこを行政や市民団体等にサポートして欲しい所である。

越谷宿も今残されているまち並みは、越谷市の眼に見える歴史である。「〇〇跡」というだけでは、そこがどんな所だったのか、夢想するしかなくなる。現実に見えているものを保存しなければ、その地の歴史は失われたのも同然である。私はいずれ、旧日光街道の〝宿場町サミット〟のようなものを開催し、広域的にお互いの交流と街道の歴史の再確認とまちの活性化を図りたい。

今後、私達の取り組みがどう展開し、どこまで実現できるか、時々この場でも報告したいと思う。

【参考文献・サイト（HP）】

・『Smile通信　Vol.35』
　埼玉県住まいづくり協議会編集
　http://www.sahn.jp/smile/smile35/p4.pdf
・『埼玉県明治建造物緊急調査報告書
　―埼玉県明治建造物リスト―』
　埼玉県教育委員会・埼玉県文化財保護協会編集発行
・『近代埼玉の建築探訪』　朝日新聞さいたま総局編
・『埼玉・歴史の道50話』　埼玉新聞社編
・『北国街道上田宿　柳町の歴史散歩』
　柳町史編さん委員会　編集
・『近代化遺産探訪』　文　清水慶一・写真　清水
・『伝統的建造物群保存地区　歴史の町並み（平成22年度版）』　全国伝統的建造物群保存地区協議会
・文化庁及び国土交通省　HP
・埼玉県庁及び埼玉県立近代美術館　HP
・越谷市役所及び越谷市まちづくり協議会　HP
・NPO法人　越谷市郷土研究会　HP
・NPO法人　ぎょうだ足袋蔵ネットワーク　HP
・特定非常利活動法人　日本民家再生協会　HP
・杉並たてもの応援団　HP

（司馬雑感　二十八）

「播磨灘物語」をゆく

山田嘉久

司馬遼太郎の長篇「播磨灘物語」の主人公は戦国の武将黒田官兵衛（一五四六―一六〇四）である。諱は孝高（よしたか）、号は如水。小寺姓を名乗ったこともある。

羽柴（豊臣）秀吉に仕え、中国征伐に従軍するが、敵方に拉致され幽閉される。解放後、軍師として活躍。秀吉の天下統一に多大の貢献をした。秀吉没後は徳川家康に接近、関ヶ原の戦いで子の長政と共に徳川側に属したが、一説には官兵衛は隙あらば天下を奪う心づもりであったという。

〈町角で別れたあとも余韻ののこる感じの存在である。友人にもつなら、こういう男を持ちたい〉（あとがき）とあるように、官兵衛は非常に魅力的な人物として描かれている。秀吉に、自分が死んだら、天下は「――くあんが」とる、また「もしも、あの男に百万石を呉れてやればどうなる。天下を取られてしまう」と考えられている程の才将、これが司馬の描く黒田官兵衛である。

司馬の他の戦国もの「新史太閤記」「国盗り物語」でも官兵衛は同様の人物として描かれている。

また同じ「あとがき」には、司馬の先祖が実は英賀城に籠城して官兵衛らに一蹴されたであろう武士の一人であること、四〇歳前後の頃に姫路郊外の英賀付近を訪ねた折、この作品のヒントが浮かんだことも示されている。

司馬にとって自らの出自にも繋がる「播磨」にこだわりがあったとも読みとれる。

そんな「播磨灘物語」を今年秋に歩いた。訪問順は異なるが、年代順に纏めた。

一　備前福岡にて

【黒田家系図】

黒田宗清 - - 高政―重隆―職隆―孝高（官兵衛）
　　―長政

黒田氏の祖宗清は、賤ケ岳山麓の近江国伊香郡黒田村の出身とされるが、定かではない。

宗清五世の孫黒田高政は、永正五年（一五〇八）、京

都船岡山の戦い（細川家の内紛）に抜け駆けをして将軍の怒りを買い、この年、生まれた子重隆と共に備前福岡に追放されたことになっている。

この地は後世、官兵衛の長男長政が筑前五十二万石に封ぜられた時に、父祖を偲んで、その地を「福岡」と名付けたとされる由緒ある地名だが、私は「全県地図（岡山県）」で「備前福岡」を探すには苦労した。全く見当たらないからである。それもそのはず「平成の大合併」により「瀬戸内市」と味気ない名称に変わっていた。同行のS氏の助言により、岡山から赤穂線に乗り込み、途中の鄙びた駅JR「長船」で下車したが、全くの寒村。黒田時代に「福岡千軒」といわれ、山陽道随一の繁栄を誇っていた面影は全くなかった。

黒田高政は大永三年（一五二三）、この地で亡くなったが、その翌年には重隆には嫡子職隆（もとたか）（官兵衛の父）が誕生している。

市内にある妙興寺には高政と重隆（官兵衛の曽祖父と祖父）の墓が並んでいたが、朽ち果てて識別は出来なかった。

なお近くに宇喜多興家（直家の父）の墓碑もあった。興家は天正三年（一五三四）、父能家が暗殺されたとき、子の直家を連れ、この辺りで放浪の人生を送ったという。抵抗もせず、城を明け渡し逃亡したことを受け、興家は暗愚であると後世評されたが、宇喜多氏の家名、幼い直家を守るため敢えて暗愚を装ったというのが、地元の評価であった。

なお嫡子直家は秀吉の中国攻めに際して、当初は毛利家に味方したが、その後、秀吉の調略により信長に臣従することになる。彼は出雲の尼子経久、安芸の毛利元就と共に中国地方の三大謀将と称される一方、斉藤道三や松永久秀と並ぶ悪人とされている。しかし備前国を統一して岡山城を中心とした城下町を作ったことにより、後の岡山発展の礎を築いたことも事実であろう。なお、彼は天正九年（一五八一）病死したので、後述の秀吉の備中高松城攻めに協力したのは子の秀家である。後に秀吉政権下では五大老にまで出世した。

長船は「備前刀」の産地として有名らしく、市内には立派な「備前長船刀剣博物館」があったので、列車の時間待ちに見学した。

二　播州龍野にて

重隆は大永五年（一五二五）、家族を連れ播州龍野に移住したとされるが、重隆の二男高友が此処で生まれた以外、黒田家の記録は龍野には残っていない。

町の中心にある龍野城は十六世紀初めに赤松村秀によって築かれたといわれる。その後四代続いた豊臣大名、更に関ヶ原以降は池田輝政（龍野城は城代）、脇坂安政と目まぐるしく変わったが、脇坂家は明治まで十代も続

いた。司馬は短編「貂の皮」でウダツの上がらない脇坂家が却って明治まで長持ちさせたことを指摘している。

龍野城址には本丸御殿や多聞櫓などが復元されていたが、司馬は「街道をゆく（播州揖保川、室津みち）」でも此処を訪ねている。

現在の龍野（たつの市）は哲学者三木清、童謡「赤とんぼ」で知られる三木露風、そして一高寮歌「嗚呼、玉杯に花受けて」作詞家矢野勘治などを育てた文化の町として知られているが、「播磨の小京都」といわれるだけに、しっとりした落ち着いた町だった。

高台にある宿に泊って、存分に「哲学の小径」などを散策した。街の風情は前夜泊まった倉敷の町と同様のものを感じた。前夜は同行のS氏の勧めで倉敷川に面する四百年続く老舗の旅館に泊まったが、夜遅くと翌早朝と二回、倉敷川周辺を散策したばかりだった。

三　姫路にて

1　御着城と姫路城

その後、重隆は姫路城主の小寺政隆に仕えることになる。しかし政隆はその後、御着に築城移居したので、重隆も常に御着で政務をとっていたが、程なく小寺氏は重隆の力量を認め、家老に登用して姫路城主とした。

重隆はその後、家老職を嫡男職隆に譲った。その頃、職隆に嫡男官兵衛孝高が誕生している。享録十五年（一五四六）。したがって官兵衛は姫路城内で生まれたことになる。その朝、一面の雪景色だったと伝えられている。

勿論、当時の姫路城は現在のような「世界遺産」第一号になるような豪壮な城ではない。姫路城は元弘三年（一三三三）、赤松則村（円心）が姫山に縄張りしたのに始まるといわれるが、官兵衛が生まれた頃には、その赤松氏の一族で西播磨最大の領主だった小寺氏の本城（御着城）の出城に過ぎなかった。

なおその後、秀吉が官兵衛の勧めでこの城に入り大改修を開始、天正八年（一五八〇）に三重の本格的な天守閣も持つ城を作り上げた。

〈秀吉は「ともかくも、播州者の肝をうばうような城を築くことだ」と、思った。〉（「播磨灘物語」より。以下引用は断りない限り、すべて同書）

さらに関ヶ原後、池田輝政が五重七層の連立式天守を完成させ、日本を代表する名城となった。しかし現在は「平成の大修理」が五年がかりで進められており、天守閣の雄姿を見ることはできなかった。

私が姫路城を見学するのは、今回が二度目。四十年前、職場旅行で行ったのが最初だが、前日に播州赤穂の宿で夜ふかしの麻雀に耽ったため睡眠不足。広大な城内を歩くのに閉口したことを思い出した。

今回は、姫路城を観る前に、東隣にある兵庫県立歴史博物館を見学した。丹下健三の設計による建物は姫路城

の華麗な構成美を生かした現代建築だそうで、姫路城を始め日本の城閣に関する資料が多く展示されていた。

小寺氏の出城に過ぎなかった姫路城が豪壮な城に変身したのに対して、肝心の本城（御着城）は天正七年（一五七九）、秀吉の攻撃を受けてあえなく落城、廃城となった。今では城壁を残すのみ。近くに御着城をイメージした市役所出張所がご愛嬌だった。

成人した官兵衛は家督を継ぐまで、この城で政職の近習として仕えた。

隣接して黒田家廟所があった。官兵衛の祖父重隆と父職隆夫人明石氏（官兵衛の母）の墓が並んでいた。

本丸跡に小寺大明神がある。毎年四月二十九日には全国の小寺家、黒田家の子孫が集まって祖先慰霊の大祭が行われるという。

また、姫路城の北方にある広峯神社にも足を延ばした。重隆が小寺氏に仕える前に、この神社の御師（おし）が配る神符と共に黒田家秘伝の目薬を売って財をなしたという。

神社の隣には御師屋敷跡も観ることができた。

永禄十年（一五六七）、父職隆が隠居して新婚の官兵衛が小寺政職の家老に就いた。いよいよ官兵衛が表舞台に登場することとなる。

2　秀吉の播磨攻め

織田信長が挙兵上洛したのは永禄十一年（一五六八）。丁度この年、官兵衛に長男が誕生している。後の黒田長政（一五六八―一六二三）である。

この頃、小寺氏など播磨の大名たちは畿内で勢力を拡大する信長と山陽、山陰の大大名毛利輝元の二つの大勢力に挟まれることになった。天正三年（一五七五）、長篠の戦いで武田勝頼を破った信長の才能を高く評価した官兵衛は、いち早く主君政職に信長への臣従を薦めた。

官兵衛自身も秀吉の取次により岐阜城で信長に謁見を果たした。更に渋る主君小寺政職にも播磨の雄、赤松広秀、別所長治とともに揃って京で信長に謁見させることに成功させた。しかし政職は信長に人質を差し出すことを渋ったため、官兵衛は代わりに長男の松寿丸（後の黒田長政）を人質として信長の元に送っている。

一方、天正四年（一五七六）、亡命した将軍足利義昭を抱えた毛利氏は五千の兵を英賀に上陸させたが、官兵衛軍五百によって退却させられた。

そして信長は信貴山城の戦いで松永久秀を討伐した後に、秀吉に播磨に進駐させた。

ここで官兵衛は思わぬ行動に出る。居城である姫路城をそっくりそのまま秀吉に提供してしまうのである。

〈官兵衛はすでに織田家に賭けてしまっている。賭けてしまった以上は城を提供し、それによって秀吉の働きを十分にさせたいし、それに秀吉の信頼をかちとっておかねば今後仕事がしにくい。〉

〈かれは江戸時代の武士や文人よりもはるかに痛烈な

合理主義をもっていたといっていい〉（「街道をゆく」播州揖保川、室津のみち）

ところが天正六年（一五七八）、東播磨の大勢力である三木城主別所長治が、殆どの周辺豪族を引き込んで反旗を翻し、これに毛利氏が呼応した。海から宇喜多直家軍七千と雑賀の兵が攻め込んできたが、官兵衛が千の兵でこれを敗退させたが、秀吉は信長の指示により撤退を余儀なくされた。

更に織田勢にとって予期せぬ不幸な事件が起きた。

（三）荒木村重と三木長治の反乱

織田家の重臣で摂津国を任せていた荒木村重が信長に謀反を起こし、有岡城に籠城するのである。この時、主君の小寺政職も呼応しようとしたために、官兵衛は村重を翻意させるべく有岡城に乗り込んだが、逆に捕縛されてしまった。「播磨灘物語」では政職と村重が仕組んだ罠と解釈している。

一年後、有岡城は落城した結果、官兵衛は地下牢から家老の栗山善助によって救出される。

善助は幼いころから官兵衛に仕え、後の関ヶ原の役の際の官兵衛の九州席捲では直属軍団の筆頭として活躍した。官兵衛の没後も、福岡藩五十二万石の国老として長政の治世を助けている。なお「黒田騒動」の一方である栗山大善は彼の息子である。

現在でも姫路市内には栗山町という町名が残り、善助屋敷跡には、その旨を記した案内板が建っていた。

官兵衛は長期にわたって劣悪な環境の土牢に押し込められていたため、左脚に障害が残り、救出後も歩行や騎行がやや不自由となった。そのため以後は合戦の指揮も輿に乗って行うようになった。

舞台となった有岡城跡は、ＪＲ伊丹駅のすぐ目の前にあった。

伊丹台地の東縁を巧みに利用した平城であったというが、今は土塁を残すのみ。観光案内所の人にきくと街中の猪名野神社まで行ってみなさいという。「酒の街」で有名な市内を二キロほど歩いて、神社の神主さんの説明によると、此処が有岡城の北の砦だとのこと。ということは伊丹の町ぐるみを城塞化した惣構（そうがまえ）構造であることが分かる。境内には土塁跡や濠跡が残されており、往時を偲ぶ事が出来た。

当時、宣教師フロイスが村重の作ったこの城を見て、「甚だしく壮大にして見事な城」と感嘆したという。

この有岡城における官兵衛の悲惨な幽閉ぶりは「播磨灘物語」のクライマックスといっていいが、同じ時期、司馬が書いた戯曲「鬼灯（ほおずき）」も村重の叛乱が主題となっている。司馬の戯曲は極めて珍しいが（生涯に二、三本しか書いていない）、この戯曲にはなぜか官兵衛は登場しない。

なお、遠藤周作の「反逆」はキリスト教信者村重を描いた秀作である。「反逆」にも官兵衛は少し登場するが、著者は〈この獄中模様は司馬遼太郎氏の「播磨灘物語」に描かれているからそれをお読みになるとよい〉と書いている。

ところで信長は官兵衛が村重を説得すると称して、有岡城に入りながら城から出てこないのをみて、官兵衛自身も逆に反逆したとみた。そのため人質になっている嫡男松寿丸を殺せと命じる。

その窮地を救ったのが、竹中半兵衛（一五四四―七九）である。

半兵衛は官兵衛とともに秀吉を支えた参謀だが、この二人の天才軍師は「両兵衛」「二兵衛」といわれた。二人は一目見ただけで、お互いに似たもの同士であることを認識したという。

〈なるほど、似た者だ〉と、半兵衛が何よりも感じ入ったのは、官兵衛が自分の姫路城を清めて城下の武家屋敷ぐるみ、秀吉に提供してしまったことである〉

半兵衛は信長をあざむき、松寿丸を故郷の美濃に隠した。信長に事が露見すれば、半兵衛の命はない。このあたりの史実はどのような秀逸なドラマよりも面白い。

しかし半兵衛は天正七年、三十六歳の若さで播磨の陣中で病死する。

出獄後、これを知った官兵衛は人目も憚らず号泣したという。

半兵衛の墓は三木市の三木城跡近くにある。秀吉の三木城攻めの最中に死んだためである。臨終の際、秀吉に対して将来の「天下人」と予言し息を引き取ったと伝えられている。

秀吉も「お先まっくら」と遺体にとりすがったという。

我々は三木城跡の見学の後、豪雨に足元を気にしながら墓に詣でた。

さて、謀反の張本人村重はその後、数奇な人生を送った。

天正七年（一五七九）、有岡城陥落直前に彼は単身、有岡城を脱出、尼崎城に移ってしまった。これを知った信長は有岡城に残された彼の妻子はじめ荒木一族を皆殺しにする。しかし肝心の村重本人は更に花隈城に移り（花隈城の戦い）、最後は毛利氏に亡命するのである。

天正十年（一五八二）、信長が横死すると堺に居住。秀吉の天下では、大坂で茶人と復帰、利休の弟子七人衆の一人といわれた。そして秀吉のお伽衆にまでなるのである。

〈天下の信長を相手どって反乱を起こした男が頭を丸め、茶人姿で茶室に座っている。その心中まことに複雑だったであろう。〉

と遠藤周作も書いている。

三木城は室町末期、別所則治によって明応年間（一

四九二―一五〇三）に築かれたが、五代城主長治のとき、秀吉に攻められた。秀吉は三木城を取り囲むように三〇余の付城を築き、兵糧攻めにする。この戦いは、三木合戦といわれ、天正六年（一五七八）から一年十ケ月に及び、籠城の悲惨さから「三木の干殺し」として全国的に有名となっている。結局、長治一族の自害によって開城し、籠城した人々の命は助けられた。

近くの雲竜寺には長治と照子夫人の首塚があった。

秀吉は難攻の末、ようやく落とした三木城を拠点として、姫路城を官兵衛に還そうとするが、官兵衛はここでも「姫路城は播州統治の適地である」と進言している。また村重謀反の際、主君の小寺政職も同調して、信長から離反したため、信長の嫡子信忠によって討伐された。そのため官兵衛は始めて信長から播磨国山崎に一万石を与えられた。ようやく大名格になったわけである。

我々もその山崎城跡を見るべく、本竜野からのバス便を調べたが、二時間に一本のまことに不便なところ、しかも同行のS氏が城址のある山崎小学校に電話すると、現在、山崎藩陣屋門は改修中で見学不能とのことで諦めた。それならばと、逆に揖斐川を南下して播磨灘に面した室津行きを計画したが、この方面は更に不便、数少ないバスを途中で乗り継ぎしなければならず、日帰りは到底無理とわかったのでこちらも断念した。

山崎と室津は「播磨灘物語」を書いた司馬が、作品に出てくる播州の地で訪れていない場所で、その後も気にしていたらしく十年後に「街道をゆく（播州揖保川、室津みち）（一九七六）で改めて行った場所である。この紀行は〈山崎に行っていないことが絶えず気になっていた。〉という述懐から始まっている。

そして今まで訪ねなかった理由として〈タクシーの運転手に所要時間を聞いてみると、思ったよりも長い時間だったため、どうも体力に余裕がないと思い、やめた。〉となっている。それほどの僻地である。最寄りの本竜野から揖斐川を北上するよりも、却って遠くの大坂―神戸―姫路―山崎の中国縦貫道路が便利らしい。

司馬もこのコースから山崎入りをしている。

一方、室津は江戸時代には、参勤交代の西国大名のほとんどが海路で室津港に上陸して陸路を進んだため、日本最大級の宿場町となり「室津千軒」と呼ばれるほど栄えた。しかし参勤交代の制度も無くなった明治になると、鉄道、道路が内陸部に敷かれたため急速に衰退した。司馬は町にあるたった一軒の鄙びた旅館に泊っているが、それから更に四十年も経った現在、そんな僻地に泊る旅館が残っているだろうか。我々が断念する一因にもなった。しかし江戸時代、此処から上陸した朝鮮通信使をもてなした饗応料理が今でも名物となっていることを知っているS氏は食通だけに最後まで未練が残っているようだった。

さて、翌天正九年（一五八一）、秀吉は毛利の一族、吉川経家のたてこもる因幡国の鳥取城を兵糧攻めにして落城させたが、この作戦を秀吉に献策したのも官兵衛だった。

山崎から「因幡街道」を北上すれば鳥取に入るようだ。若いころの秀吉や官兵衛はこの街道を何度も往来したことになる。

（四）書写山円教寺

時代は多少さかのぼるが、秀吉が一年四月も陣を構えたという書写山円教寺にも触れてみたい。

〈「播州には、書写山円教寺があるのだ。」と、小寺藤兵衛はいった。（略）かれとしては書写山を守るためにもゆくゆく織田方に加担するようなことは、ゆめゆめすまいと思いはじめていた。「官兵衛、目が醒めたか」とひとこと念を押してみたかったのである。〉

それに反して主君の命令に背いて、織田方についた官兵衛も、この寺の存在にはさぞかし頭をなやましたことだろう。

なにしろ「西の叡山」といわれるだけに播州に割拠する土豪や大名にとって、円教寺は怒らせると怖い存在だった。ましてや信長の叡山焼き討ちのあった直後のことである。

標高三六三メートルの山上にある広大な寺域には、〈多くの堂塔伽藍や僧房があり、多数の僧が住み、山上ながらも一個の宗教都市をなしていた。〉

今では、此処は姫路城とともに、名所の目玉となっており山麓から山頂までケーブルカーで容易に登りことができる。我々も半日がかりで大講堂や食堂、本堂にあたる魔尼堂などを見て回った。

中でも境内にある「姫路城主本多家の墓所」には興味をひかれた。

五棟の堂が本多忠勝―忠政―政朝―政長―忠国の墓である。このうち三人（忠政、政朝、忠国）が姫路城主となっている。

忠勝は徳川四天王の一人で上総大多喜城主、政長は大和郡山城主だった。

堂のない五輪塔は忠政の子、忠刻（ただとき）の墓。忠刻は大坂落城後の千姫と結婚して姫路で暮らしたとされる。（前日、訪れた姫路文学館でも千姫の特別展が催されていた。）

忠国の墓のうしろには忠刻に殉死したという宮本三木之助（武蔵の養子）の小さな墓もあった。

（五）秀吉の高松城水攻めと中国大返し

〈秀吉は、妙なことを考えた。当初はかれ自身も、それが実現できるとは思わなかったであろう。この高松城を城ぐるみ水に侵してしまえるのではないか。ということである。〉

天正十年（一五八二）、秀吉は山陽を西進し、宇喜多家軍勢も率いて備中高松城を最前線に毛利軍と対峙した。毛利氏の武将清水宗治が守る備中高松城攻略に際し、秀吉は巨大な堤防を築いて水攻めにしたが、上手く水をせき止められなかった。これに対して、官兵衛は船に土嚢を積んで底に穴を開けて沈めるように献策して成功させた。

秀吉軍の「水攻め」により、備中高松城は湖面の浮城となった。

「水攻め」の戦法による戦いは世界でも五例しかない。しかも、その中で成功したのは、この備中高松城のみである。官兵衛の功績大というべきであろう。

かくて、高松城も、もはや落城も時間の問題と思われた。そのときは此処に信長を招く準備をしていた矢先、本能寺の変が起こるのである。翌日、光秀の毛利軍への密使を秀吉軍が拘束。密書で信長の死を知った秀吉軍は毛利軍に知られぬよう密使を暗殺して、これを秘匿し毛利方の外交官安国寺恵瓊を仲介役に和議を成立させた。城兵の命と引き換えに城主宗治は切腹した。

それを見届けた秀吉は直ちに主君の仇敵明智光秀と対決すべく、強行軍で近畿に引き返した。世にいう有名な「中国大返し」である。このとき官兵衛は最も難しいとされる殿軍を見事に果たした。

古代、この地方は吉備王国が栄えた豊かな地、現在ものどかな田園地帯が広がっていた。しかし秀吉が築いた堰堤が僅かに残るのみで、城の痕跡はなにも残っていなかった。

城跡には宗治自刃の碑、宗治の首塚、胴塚があり、堰堤跡は高松城水攻め史跡公園として整備されていた。それらを地元タクシーの運転手さんの親切な説明で要領良く回ったが、もし毛利軍が信長の死を知っていたら宗治の死も必要なかったし、その後の歴史がどう展開されたかを想った。

実は備中高松城を訪ねる際に、岡山駅から吉備線に乗るべきを間違って伯備線に乗ってしまった。なかなか備中高松駅に着かないので不審に思っていたが、着いたのは終点の備中高梁（たかはし）駅だった。此処には山城で有名な松山城がある。四国の愛媛県松山にあった松山城（伊予藩）との混同を避けるため、「備中松山城」と呼ばれている。城跡は国の史跡、天守閣は重要文化財となっている。

〈「あれが、松山城か」と、（継之助は）川むこうの山を見あげた。みるからに坂のけわしそうな山である。〉（「峠」より）

標高四八〇メートルの日本最高所にある天守閣が、城下町を見下ろして建っていた。その天守閣まで息を切らしながら登る。

城は、二条城の作事奉行であった名作庭家小堀遠州

（一五七九―一六四七）の手で改修された。小ぶりだが味のある二層の天守閣も、このときにつくられたもの。

遠州は町中にある頼久寺にも枯山水の庭園を作っている。遠州は政一とも称し、父の逝去後、松山城を預かり、備中の国政を司っていた時期である。

戦国時代の末期あたりから、城の役割が戦うための砦から、領国経営の拠点に変化してくる。そのため「山城」は徐々に廃され、新たに平地に城郭が築かれたが、この備中松山城だけは江戸時代を通じて「現役」だった。

それよりも興味深かったのは、前述の高松城が秀吉軍によって陥落させられたのに対して、逆に松山城は毛利勢が攻め落とした城であることだった。いかに秀吉、毛利両軍の力が拮抗していたことを示している。

町中にある武家屋敷を見学しているうちに、この地が幕末の代表的陽明学者山田方谷の地元であることに気がついた。彼が長く学頭を務めた藩校有終館跡もあったし、彼に関する資料の多い郷土資料館も見学した。当方が方谷に関心があると察した館長は熱心に方谷のことを語ってくれた。玄関脇には方谷の銅像もあった。

方谷は十万両の負債で破たん寸前の藩財政を立て直し、最終的には十万両の蓄財に成功するのである。方谷の行った新しい試みは、全国的にも注目を集め、各地から英才が方谷のもとを訪ねた。「峠」の河井継之助はその代表格。自信家の継之助が生涯で唯一、師と仰いだ人物である。

〈継之助の漫遊には、目当てがある。備中松山藩―板倉家五万石―の儒者で首相格である山田安五郎に会いたい。〉（「峠」より）

方谷の生まれた場所が伯備線の更の先、「方谷駅」付近だと聞いて、足を延ばそうとしたが時間的にむりなので割愛した。

（六）晩年の官兵衛

「播磨灘物語」は（上）（中）（下）の三冊に及ぶ長編だが、その最後は実質、秀吉と光秀の天下分け目の戦い―天王山の戦いにおける官兵衛の活躍で終わっている。

天下取りを目指す秀吉にとって、官兵衛のごとき「軍師」よりも石田光成を代表とする計数に明るい新官僚を必要とした時代に入ったことになる。官兵衛自身もそれを薄々感じたらしく、やがて如水と名乗り家督を長政に譲る。

それ以降の官兵衛については、司馬は最終章「如水」でほとんど駆け足で彼の晩年を描いているのに過ぎない。

尤も司馬は官兵衛に限らず、「功なり名を遂げた」英雄についての晩年はとんと興味が惹かないらしく、秀吉についても「新史太閤記」においては家康との戦い―小牧長久手の戦いで終わっている。その家康についても

「覇王の家」では全く同じ戦いまでである。

「箱根の坂」での北条早雲についても、早雲が箱根の坂を越えて小田原に達した場面で終わり、それ以降の早雲については全く書かれていない。ある目標に向かって邁進する漢の姿こそ、司馬にとっては「漢の美学」と映ずるのかもしれない。

天正十年、光秀を山城山崎に倒した秀吉は翌十一年に織田家の筆頭家老である柴田勝家を越前北ノ庄城で自刃させ、織田氏の跡目相続を完了させる。この年、官兵衛は播州一二郡のうち穴粟郡一つをもらった。今までの官兵衛の功績に比してあまりにも少ない報酬であったが、官兵衛の器才をもっともよく知る秀吉は官兵衛に勢力を付加することをひそかに怖れたといわれる。

秀吉の九州征伐では、官兵衛は既に秀吉軍の配下となっていた毛利軍の軍監を務めた。この結果、豊前十二万石が与えられ、官兵衛は初めて大名らしい大名となった。

その頃の話。秀吉は側近を集めて夜話をしたとき、自分の死後に天下を取るのは家康でも利家（前田）でもなく、官兵衛だといった。十二万石でなにができましょうという側近に、秀吉はいう。

〈あの者の凄みを、お前たちは知らない。おれはむかし彼と山野で起き伏した。俺だけが知っている〉（豊臣家の人々）

しかし官兵衛は新領主となって半年も経たないうちに秀吉に隠居を申し出る。まだ四三歳の若さである。驚いた秀吉は当初赦さなかったが、官兵衛は北ノ政所を通じて頼む。やむなく秀吉は折れたが、子の長政に家督を譲ることは認めるものの、官兵衛が隠居することは許さなかった。秀吉にすれば山崎合戦以降は官兵衛を疎んじながらも、この男を捨てる気は毛頭なかったわけである。彼が髪を降ろして正式に入道する（すなわち正式に如水と名乗る）のはそれから五年も経った後であった。

秀吉が死ぬと、如水はほどなく帰国した。子の長政には「徳川内府に天下をとらせよ」を命じながら、かれ自身は家康を応援しなかった。司馬は書く。

〈如水の生涯は、関ヶ原の前夜、二カ月ほどのあいだに凝縮されるのではないか〉と。

この間、九州にあった如水は、一旦緩急あらば、四国九州の兵を率いて、京に自らの「旗を立てる」心づもりであったらしく、家康が長政の右手を握って戦功を謝したという話を聞き、「すると、そらの左手は何をしていたのか」と反問して、息子を絶句させた。

関ヶ原の役直前、如水が吉川広家宛に送った書状などを見ると、彼が遠からず天下の覇権を巡って最後の大乱が起きるであろうことを予想していたことを窺い知ることができるが、この東西激突が、わずか一日で終了してしまったとは思ってもいなかった。と同時に如水の存在も了った。その四年後の慶長九年に死んだ。享年五八。

司馬は「播磨灘物語」を書いた一〇年後、如水の終焉の地を訪れている。「街道をゆく」（宇佐、中津のみち）である。此処でもほぼ同じことを書いている。

関ヶ原のあと、家康は長政に筑前福岡五二万石という大封をあたえたが、如水の働きは無視した。家康は如水の魂胆がどこにあったかを知っていたし、一方の如水も家康に見抜かれていること察していたというのである。

如水が作った中津城を訪れた司馬は、天守閣の存在に驚く。

現実的な戦略家であった如水は見てくれだけの天守閣などは作らなかった。それよりも来るべき戦いに備えて倹約、蓄財に重きをおいたであろうとは司馬の言。「かすかながら興ざめた」と歴史をないがしろにする姿勢を憂いているのだ。

（七）司馬遼太郎と播州

司馬遼太郎のルーツも官兵衛と同様、播州である。

〈戦国時代の姫路に英賀城というちっぽけなお城があって、織田信長に反旗をひるがえしました。やがて落城して、こもっていた侍たちも城を出た。私の先祖もその一人だったようです〉（司馬遼太郎全講演5より）

司馬の先祖は当初、三木姓を名乗っていたようだ。彼によると三木を名乗る八割は播州がルーツだという。その後、祖父の福田惣八さんの代まで、英賀城の城下にある広（現姫路市広畑区）に住んでいた。

その英賀城は姫路城から六キロほど南西の海側へ下ったところに土塁だけを残している。司馬遼太郎の文学碑も建っていた。

英賀城が陥落したのは一五七八年、秀吉が書写山に陣を張り、三木城を別所長治の自害をもって潰した直後のことである。英賀衆は強烈な一向宗の集団で、独自な自治都市を形成していた。しかし顕如から届けられた檄文に呼応できる戦力は既になかった。英賀城の陥落後、四ケ月後の大坂本願寺の放火をもって一世紀にわたって続いた中世本願寺ネットは終焉を迎えた。しかし秀吉の一向宗に対する処置は信長と異なり、懐柔に近いものがあった。秀吉は直ちに「英賀御堂」に入り、安堵の意向を表明したという。

「播磨灘物語」によって、この幻の都市は知られるようになったが、五木寛之も「百寺巡礼」で中世のフィレンツエに相当する自治都市が日本にも存在していたことを語っている。

興味深かったのは、幕末、新撰組によって占拠されていた西本願寺北集会所がその後、此処に移転されていることだった。その新撰組の刀傷の残る本堂で住職の講話を聞いた。

近くの広畑天満宮では「大坂　福田惣八」と書かれた玉垣を見ることができた。司馬も、その玉垣を始めてみた感激を、前述の講演でも語っている。惣八さんはこの頃、博打によって多少の金を得た時分だとエッセー「私の播州」にある。

また境内には司馬の父の「東大阪　福田是定」と書かれた新しい玉垣もあった。その脇にある司馬の文学碑と仲良く並んでいた。

姫路城の東方に「姫路文学館」がある。姫路ゆかりの文人―和辻哲郎、安倍知二、辻善之助、椎名麟三などの資料が展示されているほか、新しく出来た南館には特別に司馬遼太郎記念室が設けられていた。

私は今回の旅行では、まっさきにこの記念室を訪問した。「播磨灘物語」など多くの資料と生前の映像なども観る事が出来た。司馬遼太郎記念館と同様、安藤忠雄の設計による。前述の司馬の講演も北館で行われたもの。没後は毎年八月七日の生誕日に「司馬遼太郎メモリアル、デー」が開催されているという。

司馬遼太郎は好きな播磨をこう総括している。

別所長治、黒田如水、後藤又兵衛、黒田節のモデル母里太兵衛、宮本武蔵の名を挙げながら

〈極端にいえば、かれら播州人が、日本人の男性の理想像を作ってきたようなものであった。（略）播州には男の清潔さと潔癖さを育てるなにかがあったのだろうか〉（「播州人」から）

かくて、六日間に及ぶ私の「播磨灘物語」の旅は終った。

性と化粧（三）

鈴木守

第二節　歴史的にみた性と化粧（二）

四　ヨーロッパにおける性と化粧の文化

フランス小咄には、川柳の〝ばれ句〟や枕絵にみられるような情景が登場するであろうが、前出『メークアップの歴史、一九八六』やクセジュ文庫の『美容の歴史、一九六一』などヨーロッパの化粧史を著した書には、性と化粧に直接関係する話は出てこなかった。したがって、『ビーナスの誕生』を描いたポッティチェルリなどが活躍したルネッサンス期以降二〇世紀前半までの泰西名画を『美術全集』でみると、裸夫裸婦の姿が多数掲載されていたので、全裸の肢体から陰毛、腋毛の有無を調べてみた。

ポッティチェルリの『ビーナス』に見られるように、股間は裳裾や髪で隠された図柄もあったが、ミケランジェロの『楽園追放』の図におけるアダムとイブの股間には陰毛が省かれていたのを始め、目を通した絵画、彫刻では陰部無毛の裸形が多かった。しかし、二〇世紀に近付くに連れて陰部有毛の女性像が増加する傾向にあった。

古代ギリシャには、裸身の女性像は少なかったが、有名な『ミロのビーナス』や『円盤を投げる人』の彫像があった。前者は下半身を裳裾で隠していたが、後者では男根の上に陰毛が刻まれ、成人男性像の多くは陰毛が施されていた。

ところで、第一節で取り上げるのを忘れてしまったが、腋毛も陰毛同様に性と関係する毛髪であることに気付いた。現代の殆どの女性が腋毛を剃り落している。しかし、戦時中は若い女性でも腋毛を生やしていたので、わが国では腋窩脱毛の風習は戦後に始まったとみてよかろう。

泰西名画では、腕を上げている裸婦の多くは腋窩に毛が見られないが、腋毛が描かれていたのは唯一、マチスの『腕をあげているオダリスク』のみであった。そういえば、学生の頃、シルバーナ・マンガーノ主演の『苦い米』を観た。彼女の脇に毛がちらつき、野性的なエロを感じたことを思い出した。

五　エジプトにおける性と化粧の文化

『美術全集』によると、古代エジプト末期（前七〇〇頃）の女性立像、古王国時代（前二六五〇～前二一〇〇）のメンカウラー王妃座像、ならびに第一王朝期（前三〇〇〇頃）の女性立像には、シースルーの衣装の下に整ったデルタが透けて見えた。

文献的には、性との関係は不明だが、古代エジプトでは既に剃刀や毛抜きだけでなく、脱毛剤の使用が認められ、また、水浴や洗浄料の利用も記されていた。

六　原始社会における性と化粧の文化

原始社会の性の文化についても、『美術全集』収蔵の彫像を引用する。

最初にアフリカへ行く。ナイジェリアには、黒く塗った木彫りの母子像があり、腕に瘢痕が施され、また、男性の素焼き頭部像と青銅製少女頭部像には、顔全体あるいは額に縦長の線条が規則正しく並び、瘢痕化粧を思わせた。ギニアの木彫り立像には額中央から頭部にかけて傷痕が施され、男根は認められたが、陰毛はなかった。

ザイールの人体型太鼓には、眼、唇、陰茎に白い顔料が付着しており、タンガニカ地方には、乳房と女陰を印した女性像を飾った櫛があった。ネグロイドは呪術的な力を願って器物を人像や人面で飾っていたのである。

アフリカを離れると、ウクライナでは三体の女性土偶が出土し、二体は下腹部にデルタを認めたが、他の一体は無毛であった。インド・オリッサ州の原住民は、赭土を塗った壁に男女神像を穀粉で描き、男神には男根があり、女神の股間には赤く縁取られた女陰が施されていた。

ニュージランド・マオリ族の首飾りには、股間に刻みをつけた女体像で飾られ、南米コロンビアの神像のペニスは屹立し、ブラジルの女体を象った民芸品やベネズエラのインカ以前の女性土偶にも陰部に鮮明なスリットが刻まれていた。これらの証拠はモノクロ写真だったので彩色の様子は不明瞭だったが、陰部彩色の可能性を窺うことができた。

七　石器時代の性と化粧文化

先般、国立西洋美術館で催された古代ギリシャ展に、エーゲ海上のキクラデス諸島出土の『後期スペドス型女性像（前三〇世紀）』が展示されていた。この像は大理石製の副葬品であり、下腹部に陰門と逆三角形が施され、

もともとは色が施されていたという。

ギリシャ新石器時代の遺物がカイロネアやテッサリアに残されており、出土した女神像には玉門が刻まれていたが、下腹部の毛は見られなかった。

メソポタミア文明前エルオベイド文化（前五〇世紀）の女性立像二体があり、一体の肩、上膊、胸に入墨を思わせる色点を認め、他の女神像は肩と上膊に乱刺の痕と思われる瘤があり、二体とも下腹部には股間に向けてデルタ状に線条が数本刻まれていた。

エジプトにも新石器時代末期（前五〇世紀頃？）の女性立像が幾つかあり、下腹部には扇状の点刻あるいは柵状の線刻で現わされたデルタを見ることができた。

中石器時代の資料はみられなかったが、後期旧石器時代に入ると、巨乳の裸女像が三体認められた。一体は下腹部に何等修飾のないチェコの二万四千年前の粘土製ビーナスであり、次に、髪が巻毛で腹が膨らんでいる四万年前前後の頃のオーストリア『ビレンドルフの石のビーナス』には陰毛はなかったが、股間のスリットに赤い顔料が残っており、本来は全身が赤く彩られていたそうである。三体目はフランス・ローセル洞窟で発見された四万年前頃の『角杯を捧げる女』の板石レリーフであり、部分的に赤い顔料が残り、トライアングルが印されていたが、股間の刻みはなかった。

中期旧石器時代以前のネアンデルタール人や原人の性に関連する遺物は未見である。

（次号に続く）

坊主の坊主頭（二）

鈴木守

前号で日本の坊主頭について述べた。わが国に坊主頭が渡来してきたのは、恐らく、五三八年の仏教伝来に伴って百済の坊さんが持ち込んだに違いない。だから、坊主頭は日本で自生したとは思えないので、坊主頭を求めて海を渡ることにする。

三　東アジアの坊主頭

最初にお隣りの韓国を訪問することにしよう。韓国には新羅（七世紀）の遺跡慶州（キョンジュ）の石窟庵があり、そこには有髪の如来や菩薩の像が数多く見られたが、無髪の羅漢像もあった。羅漢は阿羅漢ともいう。われわれ年代の者にとって、〝アラカン〟といえば嵐寛十郎だが、小乗仏教では最高位に到達した修行者に与えられる称号だそうである。

布袋さん（一〇世紀）や三蔵法師（六〇二～六六四）、達磨さん（六〇〇前後）は日本でもよく知られている中国の坊さんである。見掛ける彼らの像は例外なく髪を剃っている。そのほか、中国の絵画彫刻には剃髪姿がしばしば登場するが、中でも南宋（一一二七～一二七九）の『普賢菩薩図』は珍しい作品であった。髪が有るはずの菩薩様は眉も髭も白く、あまつさえ頭は禿げ上がり、菩薩様の老化現象を描いていたのである。また、水滸伝には、色好みの坊主が「坊主頭を剃り、麝香と松の実を擦り込み、栴檀を匂わせ」と記載されているので、北宋末期（一一〇〇年代初期）には、松の実で、坊主頭をテカテカに磨き込んでいたのである。

中国の更に古い資料を見ていると、龍門石窟（四九四～五五九）や雲岡石窟（四六〇～四九四）には、有髪の如来や菩薩の彫像が数多（あまた）残されていた。坊主頭を探すと、龍門山門脇に無髪の羅漢が佇んでいた。

中国への仏教東伝は、後漢二代目の明帝の時（一〇～一六）だったので、前漢以前の時代には、中国にも坊主

の坊主頭は存在しなかった訳であるが、坊主頭のルーツを訪ねて西域へ赴くことにする。

西域入口の敦煌には、頭を丸めた九世紀前半の僧侶の姿が壁画や帛画に残されていた。西域北道を西に進み、七世紀末のキジルに至ると、ここには千仏洞などの壁画に仏が描かれていた。峡谷洞の『釈迦説法図』には頭を剃った数体が受講していたが、最大洞壁画に描かれた仏弟子最長老の『大迦葉図』は剃髪ではなく、毬栗頭だった。折角、西域まで足を運んだのだが、龍門や雲岡より古い資料は得られなかった。

四　南アジアの坊主頭

仏教発祥の地インドでは、仏教に変わってヒンズー教が幅を利かせているが、仏教はその周辺の地で信仰されており、東アジアは大乗仏教、南アジアは小乗仏教、チベットとモンゴルはラマ教が敷衍している。

南アジアの国々を訪れた際、アンコールワット前には、頭を丸めた修行僧が屯しており、バリ島やタイの寺院でも剃髪姿を見掛けた。映画『ビルマの竪琴』の僧侶も無髪だったし、ダライ・ラマも無髪である。かように、小乗仏教やラマ教でも大乗仏教と同様に僧侶は剃髪しているので、剃髪は仏教界共通の風俗といえる。

仏教の故地インド・ガンダーラ地方は二～四世紀頃の仏像の宝庫である。ここには、有髪の釈迦像が数多くあるが、『鹿野園釈迦説法図』や『涅槃図』、『納棺図』のレリーフには、髪を剃った比丘や仏弟子が浮き彫りされていた。『猿奉蜜図』には猿の頭まで剃毛されていた。したがって、坊主の坊主頭は仏教創宗の頃（前五〇〇前後）から始まっていたのである。しかし、モヘンジョダロ公衆浴場跡に剃刀が残されていたので、剃髪風習はインダス文明の時代（前二五〇〇～前二〇〇〇）まで遡るかも知れない。

ところで、一般にインド人は波状毛（縮れ毛）の人が多いにも拘わらず、如来像の頭髪は巻毛（アフロヘア）に象られている。生身の釈迦・ゴーダマシッダルタは巻毛だったのだろうか。紀元前後から後三世紀にかけてのインドは無仏像時代といわれており、ガンダーラ以前の資料がないので、シッダルタが巻毛か否か知る由もない。

五　古代オリエントの坊主頭

古代オリエント社会の頭髪化粧を調べると、メソポタミアには、初期王朝時代（前三〇〇〇頃）の剃髪した男性像が四体見られ、シュメール人は剃髪無髯だったといわれているので、古いメソポタミアの地に剃髪風習が定着していたのであろう。

古代エジプトにも剃髪した男性像や断髪の女性像が数多く認められた。古くはノモスの頃（前四〇世紀）のファラオの像は剃髪しており、ノモス以前、新石器時代晩

期の女性像も無髪だった。ほかに、剃刀や毛抜、脱毛剤の使用も見られるので、古代エジプトの剃髪断髪の風習は確定的である。

この風習成立の理由について、「古代エジプトには虱が多かったため、断髪したり髪や髭を剃って予防した」といわれている。事実、発掘した髪から虱の卵が検出されているので、この解釈には納得できる。更に、古代エジプトに剃髪断髪の風習が普及した経緯を推測すると、最高神官を兼ねていたファラオは祭壇上で頭が痒くなっても神前でボリボリ掻く訳にはいかなかった。そのため、虱対策として剃髪したに違いない。その後、神官や支配階級の人たちを経て、新王国の頃には庶民層にまで敷衍し、男性の剃髪と女性の断髪が化粧風習として成立したのであろう。

かように、エジプトにおける除毛断髪の風習は、虱防御対策として新石器時代晩期頃までに始まった可能性が高い。

考察と総括

虱予防のために始まった剃毛断髪の風習は、エジプトの新石器時代まで遡る可能性があり、メソポタミアでも、シュメール人の時代まで辿ることができた。この風習がシュメール人の手でインドに伝えられたと推論できるが、インドはエジプト同様に亜熱帯性気候である故、虱防御が必要であり、剃毛断髪が自生しても不思議ではない。

インドでは、インダス文明の頃から剃毛が行われたようだが、坊主の坊主頭発祥は仏教創始の時代である。その後、坊主の坊主頭は、後漢の時代に中国へ伝わり、朝鮮半島経由で大和王朝の時、日本にも伝播した。

日本では、坊主の坊主頭とは別に、平清盛のように禿頭になると、入道と称する似非坊主が誕生した。また、鎌倉時代の尼は断髪姿だったが、近世初期に至ると剃髪の尼が見られるようになった。一方、庶民の子供たちの毬栗頭は鎌倉初期には認められ、毬栗頭の子供も坊主と呼ぶようになった。

最後に一言付け加えると、ヒンズー教徒の沐浴は、「身体を清浄にして神に祈る」とされているが、所詮、酷暑や虱対策の沐浴が先行していたはずである。僧侶の剃髪発称について、仏教者の方々は「解脱の姿」などと宣われているが、そのような綺麗事ではなく、「釈迦説法聴講の際、虱に刺されるのを避けるために、剃髪した」というのが真実ではなかろうか。恐らく、後世の偉い坊様は弟子から問われ、まさか「虱対策」と答える訳にもいかず、「無髪にするは煩悩を捨て去る象徴であり、これ解脱の姿なり」と説いたのだろう。

（完）

陰翳の美学（その八）

外山知

第三章　美を構成する要素

八．作り作られるもの

1．美は人間的な作為か

およそ美は、作り、作られるものである。即ち作為によって、意図的に作られるものである。

作為と言う言葉が、適切でないものかも知れない。作品の製作意図、すなわち作意の方が妥当かも知れない。

作り作られる間柄となれば、意慾をともなう。その過程に美を美たらしめる相関作用が見られ、美的な知る作用の働きと、成果の過程が、色濃くたゞよう。

なお作用と反作用の、弁証法的な知の働きが、かもし出されることも必定といえる。

従って私達が美を知る作用と成果の過程において、かゝる論理をふまえることは、人為によって美的な構成を作り出す。同時に反作用的に作られる領域がはっきりと現れる。

自然美の映ゆる表象を、美と知る作用及び成果とすることも可能である。それに人為を加えることにより、加工の美意識も手伝って、より繊細な美をはっきりと現しえる。

これは芸術の意図するとこで、作家の意図と状況が、美の表象に大きく左右する。光と翳のコントラストもより鮮明に描かれ、芸術の所業を見ることが可能である。

また作家によっては、イメージを大切にし、印象派的手法を垣間見ることも出来る。洋の東西を問はず芸術品を作り、それによって作家も作られる関係が成立する。

また破格な要素を用いて美を分解する。これは本来もっている美への挑戦ともいえよう。

分解し再構成することによって、意識の具現化をはか

る前衛派の技法など、様々に美的な表現が具象化した跡を、見ることが出来る。

これは美術部門のみならず、他芸術についても等しく言えることで、視覚的な心理表現もあれば、聴覚表現、舞台芸術、時空間の表現もあろう。

あるいは心理描写を含む形而上的な、精神面もありえよう。私達の思惟表現は材質の如何を問わず、その現れ方も異なる。

表象表現については、一様な知識の中に位置ずけられる。もちろん私達が物事を知る働きの過程は相違するが、たどる到達点については一致する。

かく作り作られるものには、芸術もさることながら、人間自身も対社会に生きるに当たって、個は他者あっての個で、他者によって作り作られるものである。

個人としての自我は主体によって生きるが、客体化されることによってアイデンティティーを作る。

客観性は同時に主体性を作ることによって、客体の世界をたもちつゞける。その存在は常により優れた状態を目指す。

意識すると否とにかゝわらず、人間世界の育成に貢献するさまざまな側面をもつ。私達には少なからず愛する理法を知る。これは前述した美と相互に関係しあっている。

美は人生の永遠の課題であって、生れつきもった心情が美を求める。それは愛の精神作用でもあって、作り作られる関係において求められる。

もちろん美は一時の輝やきであるものも、やがて消え散ることによって愛は追憶となって、その美を追う事になる。一時の輝の残したものは偉大である。

精神作用が深ければ深い程、費え去った美の想像もまた大きく、その美以上のものを創造することになる。

永い過程から見れば、一時の輝きこそが永遠に残る。人間にしても肉体は滅び去っても、また次の新しい新芽を育くむ。生の論理のサイクルは、人性の美を創造する。

科学技術においても同様で、この作り作られる関係こそ、未来に向って行くダイナミックな作用でもあるだろう。

ある物を基点として次の高次のものへの飛躍は、考える葦の働きあってのことで、輝ける今のテクノに満足せず、果てしなく続く美の追求は愛であり、知であり、光る泉でもある。

人間代理のロボットも、作り作られる作用の中に生まれる。新テクノロジーは場合によっては、新しい欲求開発の手掛りをなす。

もちろん人間の意識はかゝる作用の中で新開発に迫まって行く。私達が想像もしてないロボット達によるトランペットの演奏も、またオーケストラ奏法も、作り作られる作用によって、可能な領域まで進化してきた。

人類の英知は、不可能であったものを可能な領域にまで、はっきりと現し示して来た。この実験結果の集約として、いま実用段階まで、科学水準をもたらしている。

しかし忘れてはならないことは、自然の驚異である。私達人類が如何に英知を尽くして望んでも、自然の恐怖の前には一つの小さな虫けら同様に、はかない物である。天変地異を揺り動かす巨大な地震や大津波の前には、なす術さえ知らない。自然破壊も、あるいは私達の地球汚染による温度変化も、一つの要因になっているかも知れない。

破壊行為は自から作り出した環境汚染によって、人的被害を作り出している。私の行為が、私をも他人へも大きな仕業となって、はねかえって来る。

それは私達として耐えられないことだ。これも作り作られる過程を思えば、負の論理をあえて肯定しなければならないとは、なんと情けないことか。

といって手をこまぬいてばかりはいれない。負の論理に少しでも貢献出来ることに、挑戦しなければならない。

大きく見れば私達が自然にいどむ過程に、自然からの反作用も考えて見なければならないことが、地球規模で起っている。

殺戮常な世の中を、平和共存の社会に作り変えて行くことも、人類の知と愛によって可能ではないか。

いま私達が願うのは、平和な地球である。この地球を汚染さすことは止めよう。人類生存のためにも、犠牲者を出してはならない。

貧富の差には愛はないのか。美は個人的な利害関心から一応解放され、より客観の社会的な平和共存を考える葦に立返る時と思う。

互いにちょっとしたボタンの押し違えによって、悲喜劇が起ってしまう。人類の損失をくいとめるのは私達の英知による。

もちろん宗教的、民族的に、異なる生活習慣に生きる者にとって、たやすくは出来ないかも知れない。

しかしこのまゝでは地球上のどこかで、一日に如何程の人的殺傷が繰り返えされ、被害が被害を呼んで拡大をくいとめることすら出来ない状況は、いたましい。

私達は最初に返って、作用と反作用の行動に負の論理を築くことだけは、如何にしても避けなければならない。微生物も、巨大な地球をも動かし得る存在なのかも知れない。

2．人間この未知なもの

人間の内的な存在の面に触れて来たが、およそ人間ほど未知なものはなかろうと思う。類希な存在として、地球草創期以来この方、不可思議なものとして生存してきた。

人類史上の発展過程は著しい物を宿し発達した。にもかゝわらず未知なものとして、今もって未定稿のまゝ、現世に生を保っている。

その知能、記憶力は抜群で、人間をメカニズムにさらし、解剖の糸口をたどって見ると、大脳の細胞構成をはじめ他臓器の細胞によって生きている。

したがって細胞の滅びる時をもって死滅とする。生成流転のサイクルの中に永続性を保ちながら、この世に生き貢献をくり返す。

文化を育くみ、それによって作られている。思えばはかない存在なるも、そのはかなさ故に意識すれば、途方もない巨大なエネルギーを育む。

極微な世界から巨大な宇宙をも征服しようとする。野望も夢ではなく成功途上にある。そんな計画性がどこに内在し潜むのか、人知を交よわす脳細胞の働きなのか。

この未知なものは医学の領域でも、つかみ得ない。はかなきが故に一時の輝は貴重な物として、私達に伝え残す遺産である。

すなわち文化遺産、人間国宝、重要文化財として、その希少価値は今後の世界を動かすにたる激しいものかも知れない。

一時きらめく光は無限の彼方へと、たゆみなく開拓されていくであろう。このはかない手先は未来を構成さすものかもしれない。

過去から現在、そして未来へと永続する。発展過程の構成に位置づけられ、変転きわまりない世界へと貢献する、未知なものである。

人間の脳内細胞は医学上、大脳半球を覆う新皮質と言う。すなわち前頭葉の前端部（前頭連合野）に思考、創造、意志を司かさどる領域がある。

この領域、情操も加味され、この分野がソフトウェアの部である。

後の運動のパターン、筋肉運動、皮膚感覚の頭頂葉、そして後頭葉で認識、理解、知覚を司どる領域と、視覚に分かれる。

さらに小脳に接近し脳幹、延髄、脊髄に近く側頭葉の内部の広がりで、外側溝の近くに聴覚認識部を扱う。これらを所謂、ハードウェアと分けて考察することが出来る。

電子頭脳という言葉を店頭で見かけ、賑わせて、もう久しくなる。もとは電子計算機そのものをハードウェアと呼んだ。

前頭前野以外の脳細胞のもつ各機能は、すべてこの領域である。能の中心溝を境に前方の運動発現器と、後方の情報処理器とで組立てられている。

このハードウェアの機能をよく働かせるのが、ソフトウェアすなわち前頭連合野で営まれる。

諸機能、思考、判断、推理、創造、意志、情操（喜び、

悲しみ、ねたみ、うらみ、嫉妬）競争意識、欲望（物欲、名誉欲、権力欲）などの一連の精神活動を呼び覚まし、指令を与えるプログラムである。

ハードウェアの機能を的確化させるシステムこの開発こそ、今日のＩＴ革命光フィバー、光学分野への、先駆的役割をになったことは確かである。

小テーマに人間、この未知なものと標題したのも実は、脳の潜在的な機能を働かせるエネルギー、テクノロジーである。

すなわち形而下学の分野に如何に作用したかは、いま思えば偉大な業績の連鎖であった。また未知を含んだ領域への意欲的な取り組が、功を奏して進展している。

これはかけがえのない未知なものが、如何ほど延び、かつ栄えるかはわからない。不思議な存在と言わざるを得ない。

大脳の前頭前野で、思考、創造、意志、情操を司どったソフトウェアが、ハードウェアに情報処理をさせる指令を下すプログラムによって、運動のパターンすなわち筋肉運動を誘発する。

手先を動かす機能まで、認識、理解、知覚をともなって、テクノロジーに対処して行く過程は、極めて敏速である。

私達が視覚、聴覚を通して、感ずる光、超音波に相対させられる感覚を、手先の機能に呼びさます視覚作用が、極微なものにも反能して、ミクロの世界に挑戦する力を与える。

思えば偉大な細胞組織である。この未知な人間は今後如何なる過程を閲するか。脳細胞が破壊されない限り、永続的にサイクルは繰り返されるであろう。

現在に生き、その場で過去と未来への相関の中で、新しいシステムを生み出して行くであろうのが、未知な人間であろうか。

それも平和な世界があったればこそ、永遠の時を彫むことが可能である。人の手先の器用さは、比類なき存在で、これぞ人類の英知に他ならない。

時は移り人は変れど、その示唆する意志力、判断力は、不思議に人脳として継続される。輝やける世界構築を瞬時も怠ることのないのは、この未知なものと言えよう。

昔から盛者必衰、寂滅為楽、などと言われる。たとえ人の世のはかなさは、悠久の時の流れからすれば、瞬時の存在かも知れない。

そのきらめきが、大宇宙探査の足跡をなすことすらある。この未知なもののなす所業、不思議さを他のせいにしきれない。

人間の存在は時あってそこに生き、そこに死滅する。その場の論理をいゝかげんにすべきではない。

その場所の論理を形而上的方向に、また形而下学に思惟する働きは、創造性へのステップとして、きらめきとすなわち作られる個人としての自我があって、個体の存在意識を知る。作り作られる関係は、単なる論理の遊びではない。

およそ物象にはこのような表裏の二相があって、はじめてその物象が成立するを見る。明暗においても、また同様な存在の価値を持つ。輝やける部分は非美あって真実を培かう。

古来から美庭園も、借景利用によってその規模をたもち、作りなしたものへの、非美の論理いや作られたものに対して、借景を作り添える。

それによって物のもつ雄大さも、さることながら一規模一新の感を呈する。最近の携帯電話の利用度は、想像を絶する感を持ち、至る所で、片手でメールの交換が、とり行なわれている。

思えば不思議なもので、人によって作りなされた携帯電話は、メール交換によって作られる。それによって自個の存在価値を保っている。

およそ携帯電話なしの生活は考えられない所まで来ている。利用面は単なる電波の通信だけでなく、カメラ、ＩＴ接続の効用も示めす。まさに作り作られる関係の先達となっている。

特に若者にとっては、生活の糧となっている。昨今の状況を見る時に、これ程までに普及するとは、誰が予想したであろうか。

解してよい。

さらに前述のＩＴ、コンピューター情報工学の分野に、また光通信技術の領域に、光フィーバーケーブルを伝送媒介するものとし、レーザーを搬送波として用いる通信方式、すなわち有線テレビや国際間通信などに、光通信を利用する。

さらに胃カメラなど人体内治療手術へのテクニックなど、驚嘆すべきテクニカル、応用面へと急速に進展する。

その過程にも、人間この未知なものを感ぜずにはいられない。

3．作り作られるもの　Ⅰ、人間

人間この未知なものは、はかなき一滴の露の如きものなるも、時あって光り輝やくことがある。

その瞬時のエネルギーは、人間のはかなさ故に、輝やく翳の存在に、こよなき美を感じる。作り作られるもの人間所業の論理の中に生きる。

個の人間が主体的なアイデンティティーを作りなす。それは同時に客体世界との相関において作られる。

よく主客合一の過程を、この論理で解し得る。作るものは作られるものあって完成を見る。人間はそれを作りなす。個の存在は、同時に非個人としての自我の面をもつ。

たしかにメールにしても長い文章表記は出来ない。日常生活に必要な要件はこなし得ると思う。携帯の便は計りしれない。スピード効果は抜群といってよい。

このように作り作られる関係は、人間周辺を一変させ、新たな段階へと歩を進展させている。

考えて見れば無線によって電波をとらえる仕組を、持ち運び出来る電話機で、単純さの中に多様な機能をもち、映像と音楽を楽しむ事が出来る。メールの交換も若者に愛用される。

さらにカメラ付き携帯を極めた3.2メガピクセル。そしてオートフォーカス機能搭載のニューモデルなど、多種な機能性を十分に使いこなす通信機能の拡大へと、まさに作り作られる物の代表的なものとして、広く活用されている。

さらによりコンパクトサイズな辞書機能まで収録され、いつどこでも利用出来る利点は、まさに文化通信伝達の機器として、生活必需品の一つになっている。

この文明機器も先達たちのテクニカルの積重ねが功を奏していることを思う時、一瞬のきらめきが偉大な母体となって響きあう。

これは人類の英知の存続に貴重な存在感をもつことになる。まさに作り作られる存在は、人間によって初めて可能な領域を占めるに至った。

人は自からを作りなすことによって、他から作られる可能性を秘めている。

作り作られる論理とは、そんな個体、客体のもつイメージが、人を主客合一の世界へとかり立てゝ行く。従って個体は客体あって、人間性を作りなして行く。

作り作られる関係とは、そんな個体同士の反作用による。すなわち個体、非個体の織なす二つの要素が一体となる時に、大きな存在を示す。

人間について、この論理は弁証法的止場が、構成する論理を築いて行く過程に、作り作られる知の働がなされる。

4．作り作られるもの　II、社会環境論

およそ人は個体の集合体として社会を形成する。個体すなわち自我同士の集合体が、一つの環境を生み出す。社会的なつながりの中で、個は社会を作ることによって、同時に社会によって個は作られる。作り作られる論理でもある。

すなわち社会環境の成立過程は、人間の集合体によって作られる論理である。従って、その根幹には環境論も、個々の自我の集合体によって作られる存在でもある。

こゝにも環境論を作るのは、主体的な人間である。その環境論の中に生かされるのは、他でもない個の論理である。

こゝに作り作られる環境の構造論が台頭する。大きな枠組みの中で組織、非組織の知識は、人間の立場で論理の構成を行う。

作り作られる論理は、大きく組織的になった環境論の中にあっても、非環境論の織りなす働きこそ、根幹においては同一である。

すなわち作り作られる環境は、社会性あっての構造要素といって過言ではなかろう。ただ規模の拡大化は、根本的には、主客の作り作られる関係にほかならない。

論点こそ変われ、本質的には、前述の人間を中心とした論攷と変化はない。たゞ客体の世界拡大化が、いくつもの主客を伴なって、小個体の現象の集合体として、環境論を作りなすこととも言える。

そのため種々の環境論こそあれ、究極における現象世界は、作り作られる構造の立論が潜在する。

様々な個物がいくつもの集合体を作り、一つに合せ締め括りながら、社会的な環境論を作って行く、と同時にその社会環境から作られる。

即ち人間は、自然及び社会環境の中に生き、自然に、また社会に、働きかける。同時に各環境によって作られる存在でもある。

人間は、社会から作られ、逆に人間が社会を作って行く。弁証法の正反合の構造、すなわち逆思惟の関係が成立する。

前述のように人間と環境の関係は、主観と客観の、すなわち見るものと考えるものに対し、客観とは見られたもの、考えられたものを、それとなく気づかせる。

したがって主観は意識とも解される。知るものは意識の作用である。それゆえ人間と環境との関係は、行動の関係で形成される。

自分の意志で行動すると捉えられる主体は、作る作用をもつと同時に、客観の世界で作られ形成される。すなわち表現作用でもある。

表現は内と外、主観的なものと客観的なものとの統一によって形成されて行く。作り作られる論理も、そんな所から発生してくる。

結局は相対的な関係の中に作り作られるものが、人間存在であることも、知る働きの過程において思惟されたことと思う。

5．科学の進歩と人間

テクノロジーの開発については、今更論ずるまでもない。人類の未知に挑む姿勢・積み重ねが、この結果を生むに至った。

人間代行をするロボットの開発に注目したい。

いま日本の産業界では人間代行の産業用ロボットが03年に三十五万台、世界全体八十万台の半分近くに迫って

いる。二位はドイツ、米国は十一万台である。

日本の工業界では、人間に変ってその代行を務めている。即ち工場での限られた場所で特定の目的に使用されている。

工場見学に行って、はからずも驚異の目を見張ったことも事実だった。それが今や家庭や街などで私達の生活の一翼を担う、ロボットの開発が期待されている。

もともと歩くロボットは人間の足裏の感覚を、例えばアシモも足にかかる力の強さや向きを感じさせる。センサーによって情報はすぐ頭脳まで届き、モーターを動かす。

計算が新しく働き、どんな地面でも計算の修正によって歩行が可能になる。

すなわちセンサーで得た情報を自分で計算し、調整を計ってバランスを保つ。センサーが感じとり、足首のモーターが動いて、爪先を少し持ち上げ、重心が後に戻ってバランス調整をなす。

逆に上半身が前に傾いた場合は、爪先を下げ、踏ん張り、姿勢を戻す。前進速度や歩幅の微調整、膝の曲げ伸ばしなど組み合わせ、転ばないよう上手に歩く。

重心とバランスのコントロールをする技術の利用で回れ右など、角度が急な方向転換も、立ち止まらずに出来る。

04年末には時速3キロで走れる、「次世代アシモ」も開発された。（朝日新聞特集12版参照）と、まさに人間代行の技術革新が相次いで発表された。

ホンダのアシモ、ソニーのQRIOキュリオは、歩いたり、走ったり、踊ったりする能力も整う。

トヨタのパートナー・ロボットは人間のような唇を持ち、トランペット演奏オーケストラ出演も、「愛・地球博」で披露された。

国の研究プロジェクトの下、開発されたHRPI2など、産業技術総合研究所で活用法など研究されている。（科学医療部富岡志穂）と紹介されている。

一口に歩くロボットといっても、頭脳となるコンピューターに「理想の歩き方」ホンダのアシモに例を辿れば、ソフトウェアーが組み込まれて、片脚に6個ずつモーターが取り付けられ、人間の足首、膝・股関節と同じような働きをしている。

さらに細かに見れば、股関節は前後、左右、水平回転と三方向に三つのモーターが足首には前後左右の二方向に動かす二つのモーターが、コンピュータソフトによって作動される。

技術革新が工業界にもたらすエネルギーは、左記の産業用ロボットに象徴されるよう偉大で、我国産業界の生産性の向上化の一翼を担っている。

ふり返って見るに鞴（ふいご）によって鉄の加工に始まった鍛冶屋職人から、産業革命を通して、いわゆる、ハードウェアからソフトウェア開発へ飛躍の一途をたどった。

テクノロジー開発に人類の英知がこめられ積重ねられた。その成果は現今から未来へと開発の一途をたどるであろうこと、驚嘆にあたいする思いである。

輝く二十一世紀に足を踏入れ十年、今後の飛躍十年、二十年いや五十年先のこの領域は如何にあるか、ロボット開発に論述しきた。

今視点をかえてIT、コンピュータの領域、特に医療の世界で画期的な画像診断に効果の高い癌の位置発見は、PET／CTの稼動によって、8ミリほどの小さな癌をとらえた症例報告があった。

山形済生会病院の渡辺医長、また独協医大病院の村上康二教授の資料提供による。更には静岡県立静岡癌センターで、05年5月中旬からPET／CT稼動と、全国医療機関で50台が稼動している。

PET（陽電子放射断層撮影）とCTコンピューター断層撮影）を組み合わせた、最新の画像診断器で、PETは癌細胞が血液から大量の葡萄糖を取り込む性質を利用する。

葡萄糖に放射性物質を混ぜた薬剤を静脈注射し、薬剤が発する放射線をとらえて、癌の活動場所を見る。

たゞ臓器など体内の形状が鮮明ではない。一方CTは体の正確な形状を映し出すが、腫瘍とその周囲の区別がつきにくい。

両者の弱点を補う形で誕生したのが、PET／CTである。一度に全身を撮影でき増殖する癌細胞の正確な位置を把握することが可能で、1センチ弱程度の癌まで発見が可能である。

また再発、転移の有無、癌治療の効果を見るのにも有効である。将来は今あるPET単独の画質が向上し、検査時間も短縮され患者の負担も少なくて済むようになる、と見られている。

静岡県立静岡癌センターで、今使用のPET単独の検査によっては、胸で発見出来たとか。葡萄糖の集積が肺にあるのか、肋骨か筋肉かの位置の判別が、難しいと言われている。

別に撮影したCTの画像と見比べるなどして診断もしている。

PET／CTになれば、撮影から数分後には重なった画像が自動的にモニターに映し出され、医師の負担も軽くなる。

画像診断科の古川敬芳部長は「PET検査では判断に悩む症例もある。CTと一つになれば、メリットは大きいと期待している。たゞPET／CTにも限界はある。早期の胃癌では数ミリのものまで見つかる。

内視鏡、乳癌では専門の乳房X線撮影（マンモグラフィー）や、超音波エコーの方が検査の精度は上回る。腫瘍がなくても葡萄糖が集まりやすい、膀胱や炎症位など

も苦手だ。

独協医大病院（栃木県壬生町）ＰＥＴセンター長の村上康二教授は「ほかの機器と組み合わせて正しく使うことが大切だ。」と指摘している。

ＰＥＴ／ＣＴで撮影した画像から、臓器や血管に癌の情報を盛り込んだ三次元画像を再現することも出来る。アルツハイマー病や統合失調症、心疾患などにも期待されている。（朝日新聞東京版12版、科学医療部）

たしかに驚異の画像診断、陽電子（ＰＥＴ）放射断層撮影とＣＴコンピューター断層撮影の組合わせ診断機器の威力は、ものすごい発見だ。

今後の手術計画の地図として画像診断の効果は高いと思う。医療科学の進展はテクノロジーの領域で、益々専門分野と相俟って最高のレベルまで達すると思う。

人間の生命の尊さを思う時、医療界の機器の進歩と、それを使いこなせる、優秀なドクターに期待を寄せつゝ、科学進歩と人間の論を閉じたいと思う。

6．美的形成は感覚的愛によるか。

科学技術の進歩について、人間の織なす領域が、かくも繊細にして偉大な分野の貢献に寄与しているか。改めて現代のメカニズムに脱帽せざるを得ない。

これも人間の英知の集積かと思うと、底知れない畏敬の念を起こさせるが、これがすべてではない。

エネルギッシュな態度を燃やして挑戦することが、人類貢献の一歩だと思う。千里の一歩は一歩の千里でもあることを忘れてはならない。

比較的形而下学的な分野と人間の融合に取り組んできた。今またパトス的な形而上学へと感覚的な心情にふれ得たいと思う。美的な形成過程には、様々な要因がある。

すなわち美的なものを受容する場合、外部から必要なものを取り入れ、未完成なものをより完全なものに作りなおして行く。

その過程には美的な感受性が、感覚、感情のおもむくまゝ対象の世界から、主情的にその要素となるような素材を、取捨選択していく行程、それは愛情と言える。

すなわち情熱的なものを心の中に感じ取る意識作用が必備となる。私達の心的な働きに愛の細やかさが、プラスされ変化する。

それは時によって美の形成に輝きを放ち、また時によっては非美を造形するかも知れない。無限の要素に取り囲まれた中にあって、造形意図を引き出す。その意識作用によることになろう。

およそ人は美的な感覚に酔しれ、時としては自己の本能意識から非美なるものを消そうとする、表面的な意識が表出するかも知れない。

本来は美の奥深い所に介入すればする程、そのような

浅薄な意識は費え去り、目的の美的な要素でなくてはならない。

非美の倫理、翳の倫理が不可欠なものとなってはだかる。人の感覚的な要因には、心に秘めた愛するものによって、美の価値意識を踏しめることとなろう。

すなわち感覚的な美は、愛から育くまれるものと思う。感覚、感性、感情の表象は、心にどのように現れようと、知覚の知る働きによって、その働きが変化する。すなわちある時には、平面的に、また時には表象的に、心の内奥に美化の働きとなって表れる。

たゞどのような形に現れようと、その美は愛を知る働きから出発するものだと思う。愛ありてこそ、その美的な価値意識は高められよう。

人の感ずる愛は美への直接的なもので、愛ありてこそ、その美はより密接的な感動も引き起すことになろう。

世の中で美は愛の象徴によって浮上する。感覚作用の内面に働くもの、それは愛であり美である。

たゞ意識の作用面では、美だけでなく非美もあろう。醜さありて美も存在する。内にあるもので、それを補って余りある場合には、問題にされない。

人間の感情も時によって快、不快もあろう。その谷間にあって織なす人間の綾は、細かく複雑に色どられる。

快的な美は不快な愛によって、あるいは破壊されそうに、悪魔の諸行を表面化する場合もあろう。

いや美は美であって、美を支える愛によって、その悪魔を滅却する働きを、意識の内に持つかも知れない。

ともあれ美的な形成の過程はギリシア語のErosとかAgapeが叫ばれ、理想的なものへの愛、自分を高め努力することによって、実現されるものである。

同じ愛の語でも後者はキリスト教的な神の愛で、こゝで使用したいのは前者のErosの的な世界にあって、理想的な美に向かって、自分を磨き努力する過程に、愛すなわち美の実現を見る。

これはまさに美的な形成過程における愛の知る働き、と言っても過言ではなかろう。

古代ギリシア世界においても、このような要素が介入していたことを思えば、今日の美の発見は数多くの知る働きの過程を調べることにある。

いま私達が過去の遺産に対処する時に、美は愛を、愛は美を、眼前に繰り広げる。また求めあう時に、真の美の再現を思わす。

こゝには陰翳の美学が浮上し、意識下の美ではなく、本来の美即愛が台頭する。美は愛を呼び、愛は美をかばい守る相対的な姿が、あらゆる芸術部門で発掘される。

人の多感な感情、情緒の中に、時には神技的かと思う、アイロニーを響かすこともあると思う。

やはり神の子である人によって、磨かれてこそ真価を発揮する。それを忘れてはならない。

人には感情の起伏もあるが、感覚的なときめきを感ずることも、美感覚を身をもって体験することもある。

その物についての善悪、美醜、新古の捉え方や、それに付随する価値の判断にも、対処させられる場合がある。

中でも感覚的なときめきを感ずる美醜の価値判断などは、日常生活にも多々顕現される。私達が芸術を愛する感覚のすべては、その物の中に入り込み、その立場になって自己の主体と響きあい、心の葛藤の状況が、感覚の表現となって蘇えってくる。

この心的な状況の作用は他の何ものでもなく、私、主体の論理のなす所である。即ち感覚のときめきが知る働きを作る。此らは形而上学の心理分野の働きで、人間の心象表現の領域が、極めて大きなものとして捉えられる。

前述に論攷したが、パトス（感情）的な心情で心理学、すなわち経験科学の領域と対応する。

情熱的な愛は美を育くみ、美的な形成の段階的環境と、豊かな感性に色どられた表現に、魅了され没入する。

そこに、このテーマが蘇がえってくると解してよい。例へば源氏物語絵巻の平安の恋、四季に重ねて、その国宝として残っている、末摘花、蓬生、関屋の巻々の色彩的な領域へ、X線を照射させ、剥脱した絵具の分析によって復元化をねらう。現代画家達の愛が、その根源に、孔雀石から緑青と白緑を発掘している。

そして使い分けを、登場人物の心の情景にかよわせている。

愛は美を育くみ、光源氏や彼を待つ女房達の気持ちに分けいっての作業は、繊細にして感情豊かな愛着が、復元作業に情熱を燃やす。

画家たちの辛苦、有機染料の使い分けは、巧の技として、その物にうち込む愛から湧き上ってくる。

繊細な美に心を交よわせる執着心が、千年の昔の思いを復元化させる。この美は愛であり、美である。

今後千年に向けて掛替えのないものになって行くことを期待しつゝ、文化財の保護に寄与したく思っている。

7．美的表現と心理主義

およそ美的な現象は、私達の感覚の働きによって知ることの出来る美的世界で、感覚作用の働きが感じられる。

より豊かな感情に支えられる美的なもの、また存在する卓越した表象をさしている。内的すなわち内面的な情緒の現われが、日常の起居動作、立居振舞におよんでいる。

茶道の心得やそれにともなう礼法、言葉遣い、端正な言動、打てば響く心内の居合いに、はては能、歌舞伎、空間芸術に至るまで、内面的な美に作用する。

それに対して外面的な美的な感性は、私達の感覚が捉え得る、すべてにおよぶ。自然界、人間世界から受ける

美的なもの、現象の世界をも含むすべてである。

たとえば野に咲ける一輪の花も、私達の感覚に映える現象の現れで、私達の視神経を通して映る。

私達の作り出した絵画、彫塑、工芸、書、更には聴覚部門で感じる音響のリズム、なお最近その音の感覚を色彩で現す視聴覚の分野、その上建築空間、金工造形、工学部門、医療機器など、外面的な美的な現象は、いずれも視聴覚に於いて捉えられる。

それらは私達の心理作用によって、感覚、知覚の知識を経て、美的感性へと集約されて行く。

美的な現象はパトス的な心情をともなった精神科学の領域で、心理作用とつらなる。従って人間心理を扱う心理主義も巾広い立場から観察し、実験することによって、心情をより的確にとらえる、知識作用がなされる。

美的現象は、美的な現象世界で人間が試みる、観察、実験におよぶ経験を経験する。いわゆる体験を通して、美的な世界観を構築する。

これは人間がその世界観に介入することによって、心情、情緒、さらに喜怒哀楽のパトス的な感覚世界を垣間見る美的なもの、また美しいと感じる意識が、人間心理の中で結びあう。

そして個々の心理作用を振幅させ、より広範な心理主義へと広がりを示す。私達人間は拡大化した心理主義の中で、経験を重ね美的な現象世界へと踏み入って行く。

したがって美的な現象が豊かになる過程に、私達人間の介入が、繊細であればある程、心理主義の担う影響も大きく、美的な現象の豊富さが拡大化される。

それゆえ、根源的には心理主義の果たす効果は、美的な現象と相関のかゝわりあいを持つ。

すなわち両者の作用、非作用の関係が、美的な世界観の構築に効験出来ると思う。

豊かで芸術性に富む美的な現象は、分野毎またその時代的な背景、流派によっても、作家の求むるもの、何を表現したいのか、その意図においても、異なる世界観によって、様々なアイデンティティーが試みられる。

パトス的な形而上学はもちろんのこと、今形而下学、自然科学の領域でも、美的な現象性が叫ばれる。

現実に人間の心情をわずらわせて、その本質に挑む過程が、実験心理主義によって、大きく取り上げられようとしている。

例えばバイオテクノロジーの光ファイバー植物工場など、植物栽培においても太陽と土のいらない栽培工房での、新しい生産過程から製造過程へと変化の妙を見せている。

蛍光燈とか、赤、青、緑の波長によって、レタス栽培も本格化し、路地物よりも栄養価も高い。

コスト価額は、光、電源使用の為に、やゝ高いが、固定化する。有機栽培の為、無農薬生産が出来、品質管理

も良質で、害虫など、病原体は心配ない。

路地物より柔らかく味もよいと、実験結果の発表もある。たゆまぬ研鑽のたまものとして、過大評価してよい。

これもまたバイオテクノロジーのものと、人間のたゆまざる実験、観察に挑む心理主義的な手法の繰返しによって、美意識向上に指する働きが、自然科学分野にもその花を咲き染めている。

すなわち美的現象の効果をもたらしていることを、省察することが出来る。

人知はテクノを応用して、不可能な世界に分け入って、可能な領域へと歩を展開しつゝある。イチゴ、トマトの栽培にもいどむ実験が試みられている。

植物の製造領域での効果は、未知に挑む過程として成果と期待は大きい。

多岐にまたがる美的な現象も、人間の心情介入によって感覚美を増大し、心理主義的な手法によって実験と観察を繰返し経験する。

そこに美の存在も確実に、普遍的なものになって行く。

美的な現象の翳に人間の心象表現、すなわち見たり聞いたりした事が基になり、ある形を捉えて心の中に現われる。

心象風景もその一つで、心理主義の介在要因が美的な現象を増大させる切っかけになる。美的な現象がより深く光り輝き幾重にも重なりあう。こゝにも陰翳の美学が具象化される。

美の重層も多様化して、重層的な文化を育くむ。かくして美的現象が、心的作用をともなって具体的に表面化する。

作用、反作用の論理とも言ってよい。美的な現象は多様な現れをするが、それを捉える精神的な作用は、パトス的心情をともなって、感覚の働きで心理作用を誘発する。

実験心理学的な手法で、経験的に美的な現象を引出す、心的作用と解してよい。

人間の多感な感情の表現によって、作用と反作用を繰返し、或る時は時空間にこだまして時空間の芸術を生み、劇的な効果を高めたり、また或時はリズムの旋律を作り出し、音の世界を聴覚によって捉える働きをする。

様々なときめきこそ現象の世界に君臨する美的なものを、芸術として捉え知の働きをする。

すなわち感覚によって捉え経験することが出来る世界、これこそ、美的な現象と心理主義の相関といってよい。

8．美の創作と享受

作り作られるものの象徴である創作は、文字通り、新しいものを生みだすものとして、芸術のすべての分野に

言える。

書の方面でよく言われることであるが、「目習いと手習い」すなわち鑑賞することは、新しいものを生み出す手掛かりにもなる。そして手による創作に及ぶ。

これは芸術のすべての分野に言えることで、これなくして、美の創造はあり得ない。創作過程には人間性が如何に介入して行くか。

そのものの持つよさを味わったり、受け入れたりする享受は鑑賞の第一歩とも言えよう。鑑賞は同時に自分の精神生活を豊かにする。創作への掛橋であり、橋渡し的存在でもある。

美の創作は古来から、人間の英知の生み来たったもので、日常生活経験の中から育くみ、生成されて来たものと解してよい。

たゞよりよき自然の恵みを、自分の生活経験の中に取り入れて行く過程で、試行錯誤の連鎖が生んだものである。また改善策が意図的に積み重ねられる。

その過程には切磋琢磨の響きもあり、共存の歩みも新しいものへの、手掛りとして進展して来た。

その過程は尊い。或る面では血の滲む過程も経験され、創造への過程であったかも知れない。心血を注いでも、なお足りなさを感ずる。

禅の言葉に、吾唯足知を蹲（うずくまる）（茶道）に仰ぎ見る事によって、創造過程の厳しさを感知し、戒めとしたことも、伝言されている。

美の創作は美術作品の鑑賞から端を発して、鑑賞を通して誘発される。

ただ見る眺める観賞ではなく、自分の立場からそのよさを味わう。つまり目的意識をもって、はっきりした自覚に立って、場合によっては批判的に知を働かす。

従って鑑賞から部分的には創造性に及ぶ場合、もはや創作に及び得ることもまれではなかろう。

古来絵画にしても、工芸、彫塑、音楽、茶華道、能、狂言、文楽に至るまで、先ず鑑賞から模倣へ、さらに創作芸へと進む過程に、研讃、入魂の精神面が投入される。

作家の意図した物象が現象世界に顕現される。従って鑑賞は創作の母といっても過言ではない。そうした鑑賞力は、芸術のすべてに共通する、知る働きの過程で導入される。

初期に於いては、先ず形から身振、手振りが形を整え、精神作用に及ぶ。従って形も単なる模倣から離れて、精神的な物によって深みを持つ仕舞となる。

更に入魂作が整えば、やがてその道の師をめざすことになる。後は自己の創作を加えて、完成度の高い人間国宝の世界へと、奥義の練磨によってなされる。

これは芸道のどの分野についても言えることで、かゝる研讃過程において、人間の技巧であっても、時には神技の手法も見られ、自分でも驚嘆にうち戦うことすらあ

ると言う。

形而上的な作用が、形あるものから、形なきものへと移行する精神で言う、いわゆる、感情移入の世界であろうか。これは単純には話えない過程で、至難の錬磨が存在する。

赤貧洗うが如き辛苦の道でもあろう。風雪に堪えて花を咲き染めるこの道は、芸道すべてに言える。

これこそ美への創造であり、創作と解して過言ではなかろう。

この道は諸行無常、盛者必衰の理法として、永遠の時を刻む中にあって、人はそこに生き、そこに死す追憶の彼方へ、流れ去って行く。

これは行く川の流れに似て、生きとし生ける者の定めでもある。人は限られた時間の中にあって、限られた生を充実すべく、日々是好日を夢見て、生存に魂を吹きこむ。

そこに芸道も芽生えるであろう。もともと享は「うける」の意を持ち、そのものの持つよさを味わったり、受け入れたりして、自分の精神生活を豊かにする。

まさに芸術作品などを楽しみ味わう。前記鑑賞は創作の母であると論攷して来たが、根源はこゝにあると言ってよい。

およそ美学を享受するには、先ず美学史を垣間見る必要がある。美学史上に顕現する芸術品は、作品を生み出す時代背景、流派、主義もあるだろう。

その作品が生まれるべくして生れ来た、根幹こそ、作者のすべてである。作者がそこに生きそれを愛し来たった、環境的な要因を私たちは享受し、未来継承に竣すること自体が、美の創造であり、創作享受でもある。

それぞれの時代に調和のとれた作品は、感動共感を呼び、更に飛躍を継承されて行く。

美の創作要因は享受すなわち鑑賞にある。鑑賞こそ創作への布石でもある。

ある名画が育つ環境は、その名画の持つ独自な味い、勿論名画を生しめる要因、時代的背景、環境要因にある。

その時代をときめく流派、彩色の素材に生かされた精神作用と作者、作家とのかゝわり、これらがすべて生成の素材をかもし出す。

名画の意図的な方向付けがなされる。

すなわち作家の主体性が色濃く図布に彫み込まれ、形となって現われた時に、名画の誕生を見る。

それは環境的な要因もさることながら、本人のアイデンティティーによらしめる所が多い。

叫び、驚嘆、激昂、激情を画布にぶつけ、情熱をたたきつける。

激越(げきえつ)した調子は、本人の意図をはるかに超越した感覚が、彩色に現われる。

やがておだやかな乳白色をたゞよわす、繊細さが蘇ってくる過程には、温和な気持ちが画布を彩る。

感情の起伏は人の持つ性情で、それを上手に画布にまとめえたところに、美の極致を感ずる。このような境地こそ私本来の開花と見てよい。

美を美たらしめる人の感性は、勿論本人の美的な意識によるものであるが、対象世界の織る他者の綾も、広く美意識を感ぜさせる。

表現効果、即ち感動をよぶ自他合一の境地があって、初めて尊大さを感ずることが出来る。

こうして鑑賞の織りなす美は、創作へと段階的に創造性を加味して、高まって行く。

これは一枚の絵画部門だけでなく、あらゆる芸術の分野に適合するものといってよい。

形象の世界から、積重ねの美的世界へと止揚する。

これは弁証法的な世界とも言える。ジャンルは違っても、芸術の美、創作は、変りなく享受されて行く。

（つづく）

口紅（その五）

池莉　原作
山本勉　訳

〈登場人物〉
趙家の人々
・趙耀根（小説の主人公、江暁歌と結婚）
・趙耀虎（趙耀根の弟）
・趙耀珍（趙耀根の妹）
・趙耀根の母親
江家の人々
・江暁歌（小説の主人公、趙耀根と結婚）
・江暁鴎（江暁歌の弟）
・江暁暢（江暁歌の妹）
・沈鳳宜（江暁歌の母親）
・江暁歌の父親
・田曼（江暁歌の実母）
趙耀根と江暁歌の友人
・寧岸
趙耀根の会社の同僚
・張喜
趙耀根の会社の上司
・李主任
・張書紀
江暁歌の会社の同僚
・羅桂香
趙耀根と江暁歌の娘
・嘉児

第七章　出獄

（一）

江暁歌は自分で、大きな赤い公印が捺された証書を送り届け、その足で職場に行くと、休暇を取り、丸二日間家で寝込んだ。彼女の身体に起こった震えは、この二日休んだお陰でだんだんと収まり、力の抜けきった身体もシャンとして元に戻ってきた。

江暁歌は、姑の不平と、皿や茶碗を壊す音の中で、横になって二日間過ごしてきた。

食事の時、江暁歌は趙耀珍に頼んで食事を部屋に運んでもらって食べた。

彼女は、趙耀珍に感謝していたが、トゲのある浜菱（注11）の実のベットに横たわっているような気持ちは変わらなかった。

（注11ハマビシ科の一年草。茎は地上をはい、長さ約1メートル。葉は羽状複葉。夏、葉の付け根に黄色い5弁花が1個ずつ咲く。実は堅く、とげがある。）

彼女は、依然として、ベットに横たわっていたが、やりきれない思いをだんだんと自己消化していく方法を学んだ。姑の不平は聞かぬふりをし、できるだけ自分を良い状態に保つように心がけた。

この二日で、彼女の食事の量は驚くほど増えた。食べられるものは、何でも口の中に入れた。彼女は突如、自分が大食漢に変貌したので、何だか決まり悪さと滑稽さを覚えた。彼女は、姑の前でも平然と食べたいときに食べ、寝たいときに寝た。

寧岸は、例によってみんなと落ち合い、情報交換をして対策を練り、趙耀根の母親を慰めることも忘れなかった。勿論、寧岸は、江暁歌の部屋を訪ねることを忘れるはずがなく、これは毎日の必修科目になっていた。

江暁歌は、自分の妹と義妹が二人とも、風貌颯爽とし才気に溢れた寧岸に、好意を抱いていることを見抜いていた。江暁歌は、彼女達に代わって間を取り持ちたかった。しかし、妹に味方すべきなのか、それとも義妹の肩を持つべきなのか、決めることができなかった。

江暁暢は実の妹だったし、趙耀珍は自分のことを気遣ってくれるし、どちらの肩を持つこともできなかった。彼女も、寧岸のために何かできるかもしれないと思った。自分のことだけを考えてはいけない。趙耀根のために、寧岸自身の結婚のことをないがしろにしてはいけないと思った。

江暁歌は、心底寧岸と話をしたかった。江暁歌は、寧岸がどっちの妹が好きかと考えていたが、寧岸は、実は江暁歌と話をしたかったのだ。

寧岸は、

「耀根の職場の証明書は、君が公安局に届けに行ったのか」

と尋ねた。

寧岸の真剣な様子を見ると、江暁歌はうなずくより他なかった。彼女は、このことを誰にも話したくなかった。しかし、寧岸が聞いてきたからには、答えないわけにはいかなかった。

「公安局は、証明書を受け取った後で、態度をはっきりさせました。耀根は、ごろつきと殴り合いをしたので

はなく、防衛が度を超したに過ぎないのです」
「良かった！」
江暁歌は、
「耀根は望みが持てるわ」
と答えた。
「君は、どうやってこの資料を手に入れたんだ」
「簡単だわ。何度か足を運んで、何度もお願いしたのよ。あの人達、私が妊婦なのを見て、同情心が働いたのかしら」
「本当にそんなに簡単に資料をもらえたのか」
寧岸は、明らかに疑問を抱いて訊いた。
「彼らは、本当に一遍に良心が目覚めたのか？李主任は好色って言うじゃないか？」
江暁歌は、平然と寧岸を見つめた。寧岸はすこしばつが悪くなり、顔を真っ赤にして視線をそらせた。江暁歌は、寧岸が何を訊いているのかわかっていたので、彼に尋ねた。
「寧岸、それはどういう意味なの？」
寧岸は暫くためらっていたが、本当のことをありのままに言おうと決心した。
「僕が張書記から聞いたところによれば、君が計略を使って李主任を担いで、彼に無理矢理署名捺印させたという噂が、倉庫の従業員の間で取り沙汰されているが、これは本当なのか？」
「あなたは、どう思っているの」
「僕は何とも言えないよ。でも、火のないところに煙は立たないって言うからね」
「彼らが言いたければ、言わせておけばいいわ。私はただ、良心に恥じることがないことを、あなたに伝えられればそれでいいの」
江暁歌の平然とした眼光は、寧岸の心の疑念を取り除いていった。しかし、寧岸は、江暁歌に言い聞かせた。
「一連の件は、必ずしも耀根に話さなければならないことでもない」
江暁歌は、悲しそうに笑った。
彼女は、既に良心に恥じることがないことを話していたので、これ以上言い訳をしたくなかった。

（二）

どんな不孝な暮らしの中にも、幸せな人がいる。それは、趙耀珍だ。江暁暢が寧岸に媚びているのを目にしていたが、趙耀根のことで、寧岸は、毎日と言っていいほど趙家に来ていた。
趙耀珍が、寧岸に接触する機会が多くなってきた。しかし、趙耀珍は、寧岸に媚びることができなかった。趙耀珍は、寧岸に水を注ぎ、椅子を差し出し、彼に沢山ご飯を食べさせ、あとは崇拝して彼を見ているだけだった。

趙耀珍は、江暁暢のように色っぽい眼差しであちこち見回して、鶯や燕のさえずりのようなまねをすることはできなかった。
趙耀珍は本当に歯痒かった。
寧岸は職場で謄写版を借りて、江暁歌が書いた申立書を印刷した。趙耀珍は、大喜びで彼の手助けをした。彼らは、話をしながら楽しそうに印刷をした。趙耀珍が寧岸とデートをしたいと思い始めると、口数が少なくなってしまった。趙耀珍の笑顔は、緊張のあまり歪んでしまった。彼女は寧岸を見ていると、太陽に向かい合っているようで、目を少しも開けていられなかった。寧岸は彼女の表情の変化に全く気がつかず、印刷作業に没頭するだけだった。
趙耀珍は我慢できなくなって、
「寧岸兄さん」
と声を掛けた。寧岸は、
「何か用？」
と言って顔を上げた。
趙耀珍は、一生懸命自分を落ち着かせ、掌を広げて、しわくちゃになってしまった二枚の芝居の切符を出して言った。
「寧岸兄さん、寧岸兄さんは、兄のために随分と骨を折ってくれました。私は御礼を言いたいの。寧岸兄さんはお芝居が好き？」
「勿論好きだよ」
趙耀珍は、寧岸の言葉を聞いて、思いがけない答えに大喜びした。
「よかったわ。明日の夕方、人民劇場よ。7時開演なの。一緒に観に行かない？」
寧岸は笑って頭を横に振った。
「残念だけど、時間がないんだ。僕は、ある人と、君の兄さんのことで話をする約束があるんだ」
「時間を変更できないの？」
「だめだよ。芝居を見るかどうかなんて、どうでもいいんだ。君の兄さんのことが大事なんだ」
趙耀珍は失望して、何も言わずに二枚の切符を思いっきり握りしめた。
江暁歌は、彼らの話を一部始終聞いていて、寧岸が自分の妹を選んだと思った。
江暁暢は、泡菜（注12）の缶詰をダイニングテーブルの上に置いた。

（注12四川省特産の漬物の一種。キャベツ・ピーマン・ニンジン・インゲンマメなどを、水に塩・酒・山椒を加えて煮立たせて冷ました漬け汁に10日ぐらい漬けた酸味のある漬物。中国式ピクルス。）

「さあ来て、四川泡菜よ。みんなで食べましょうよ」
父親は、
「泡菜、何処から持ってきたんだ。残しておいて、暁

歌に届けてやろう。たぶん、暁歌は、泡菜を食べたがっているよ」

「美味しいものを見ると、直ぐに姉さんのために残しておいてあげたいんだから。お父さん達って、本当にえこひいきね。本当は、これは元々、寧岸先生が姉さんにプレゼントしたものよ。私のところで差し留めたのよ」

「なぜ、留め置いたんだ？」

「なぜって、寧岸は、結婚もしていないのよ。妊婦のためを思って泡菜を届けるなんて、行き過ぎなんじゃないかしら」

父親は、

「寧岸は、わりと細かいところまで行き届く人なんだ。彼は誰に対してもこうなんだ」

江暁鴎は、

「そうだよ。寧岸は、暁暢姉さんにも気を遣っているよ」

と言った。

「私に対して気を遣うのは良いとしても、姉さんに気を遣いすぎるのは変だわ。私は姉さんのために心配しているのよ」

沈鳳宜は、

「暁歌はみんなを心配させるのね。夫は監獄に入っているし、自分は身ごもっているし、嫁ぎ先はあんな家だし、私は暁歌が耐えきれないんじゃないかって心配だわ」

と言った。江暁暢は、

「姉さんは何が辛いって言うのよ。暁鴎は、朝から晩まで姉さんのところに行っているじゃないの。それに寧岸先生だっているわ。私達の家から姉さんと兄さんの新居まで、今では趙家まで、姉さんの行くところに寧岸は何処にでもついて行っているわ。姉さんが結婚していないんなら、寧岸が行こうが行くまいがとやかく言うことはないわ。でも、今はもう結婚しているのよ。自分の生活だってあるし、責任だってあるのよ。それなのに、寧岸は朝から晩まで姉さんのところに行って、これってどういうことかしら！姉さんに下心を抱いていることは、誰の目にも明らかよ。それに姉さんの態度だって曖昧だわ。普段とっても真面目で、冗談や浮ついたことを好まないのに、寧岸を見ていると目を細めて笑っているわ」

と言った。

父親は江暁暢の話を聞いてあっけにとられた。

「暁暢、馬鹿なこと言うんじゃない」

沈鳳宜は、

「私にはわかっていたのよ。実際、寧岸は暁歌に気持ちを寄せていたわ。でも、暁歌は趙耀根のことを思っていたのよ。寧岸は知識人の家庭（注13）だし、二人が幸せになればと思い身を引いたのよ。だからこのような結果になったのよ」

（注13中華人民共和国で一九六〇年代後半から一九七〇年代前半まで続いた文化大革命は、封建的文化、資本主義文化を批判し、新しく社会主義文化を創生しようという名目で行われた改革運動であったが、共産党指導部に煽動された暴力的な大衆運動によって、当初は事業家などの資本家層が、さらに学者、医師、弁護士などの知識人等が弾圧の対象となった。その後、弾圧の対象は中国共産党員にもおよび、多くの人材や文化財などが甚大な被害を受けた。）

江暁暢は、

「どう、私はデタラメ言ってないでしょう。お父さん、私は提案するわ。お父さんが姉さんのところに行って、しっかり話し合ってよ。そして、姉さんが世間体に少しは注意を払うようにさせてよ。万が一、何か起こったらどうするの？私達江家は、恥をさらすわけにはいかないし」

と得意げに言った。江暁鴎は、

「姉さんのような人を好きになる男がいたって不思議はないよ。でも、姉さんは、絶対に耀根兄さんだけを好きなんだ。二人の気持ちは強くて、誰も間に入り込むことはできないよ。それに寧岸と兄さんは、小さい頃からの友人なんだ。寧岸は、兄さんと姉さんが結婚できるようにするために、どれほど心を砕いたのかわからないよ。今、兄さんは災難に遭っている。寧岸は手助けこそすれ、兄さんを陥れるようなことはしないよ。寧岸は、絶対に背後で小細工をするような人じゃないよ」

と言った。江暁暢は、

「暁鴎、はっきりと名指ししないで、人を誹謗中傷するのね。いったい、誰のことを言っているの？」

と言った。

「こんな風にした奴さ」

江暁暢は反撃したかったが、反撃の言葉が見つからず怒りに震えた。

江暁鴎は、

「寧岸のような人は、生まれつきやさしくて、女の子を助けるのが好きなんだ。寧岸が、一言二言話をすると、その子は、彼が自分のことを気に入っていると勘違いして、一日中放心状態になって、焼き餅を焼いて当たり散らし、言い掛かりをつけて一杯食わすに決まっているんだ」

とわざと言った。

江暁暢は、怒って突然ご飯茶碗をテーブルにたたきつけると、立ち上がってまっしぐらに自分の部屋に行き、ドアをバタンと閉めた。

沈鳳は、

「暁鴎、言い過ぎだわ。いつも、暁暢と口論になるんだから」

と不愉快そうに言った。

江暁鴎は、母親の前でむきになって、

「僕がいったいどうしたって言うんだ。僕は姉さんを

からかったのさ。姉さんも寧岸と親密になりたかったら、正々堂々と彼と関係を作ってしまえばいいのさ。何故、暁歌姉さんにとばっちりを浴びせるんだ」

と言った。

父親が口を挟んで仲を取り持った。

「わかった。わかった。もう言うな。これしきのこと、ちょっと気をつければいいことじゃないか。暁歌は、姑と暮らさなければならないんだ。あの姑が陰口をたたかないように、後でお父さんが暁歌と会って話をすればいいことじゃないか」

沈鳳宜は、

「お父さんは趙家に行かない方がいいわ。私達が、趙家に機嫌を取ることなんかないんだから」

父親は、

「わかっているさ」

と答えた。

（三）

江暁鴎は寧岸を誘った。彼らは、長江のほとりに暫く座っていたが、江暁鴎は、東に向かって滔々と流れていく長江の水をただぼんやり見ているだけで、ずっと黙ったままだった。

一艘の長いはしけが、長江の流れに沿って下っていく。船上の水夫は、つるべを長江に投げ入れて水をくみ上げ、甲板をきれいに洗っている。長江の風は、かずかに水夫達の歌声を送り届けてきた。寧岸は思わずため息をついた。

寧岸は、

「暁鴎、僕は、君達長江の船乗りを、本当に羨ましく思うよ。広々として果てしない長江の上に広がる空、何ものにもとらわれない水鳥のように自由だったらなんと素晴らしいことか」

と言った。江暁鴎は、

「何が自由なんだ。一日中船の上でポカンとして、朝から晩まで繰り返し見ているのは、水夫の面構えだし、息が詰まってしまうよ。僕が、寧岸のように知識があったなら、君と仕事を交換したいよ。ひどく無学な労働者は値打ちがないし、今もてはやされているのは知識分子だよ。今どれだけの女の子が寧岸に夢中か考えてもご覧よ」

「女の子？いったい何処にいるんだ」

「趙耀珍に江暁暢、みんな、寧岸に色目を使っているじゃないか。僕はできるだけ早く、寧岸にピッタリの人が見つかることを望んでいるよ。彼女たちに無い物ねだりをさせちゃダメだよ。結局彼女たちを傷つけてしまうことになるよ」

寧岸は首を横に振って、

「できるだけ早く？そんなの無理さ。ある人は、一生涯、あちこち探し求めても、最愛の人を探すことができるとは限らないよ。どうしてそんなに早く探すことができるもんか。さて本題に入ろう。君は僕を誘い出して、いったい何が言いたいんだい」

江暁鴎は、

「趙耀根兄貴が、監獄から出てきたら、僕は船に乗らなければならないんだ。僕は四川に行くんだ。行ったら一、二ヶ月は帰って来られないんだ。僕が出かけたら、寧岸に、引き続いて耀根兄貴と姉さんの世話を頼みたいんだ」

と答えた。

「勿論だとも」

「実際、・・・・」

彼は、言わなければならない話をどうしても、切り出さなければならなかったので、ためらわずに言った。

「僕は、寧岸に少し気をつけてもらいたいことがあるんだ。僕の姉さんとは、適当に付き合ってもらいたいんだ。他人に陰口をたたかれたくないからね」

「ああ、わかったよ」

寧岸は、

「本当のことを言うよ。暁鴎、僕はわきまえて江暁歌と付き合っているよ。当時、趙耀根が、恋人宣言したことをよくわかっているんだ。でも、僕と暁歌は親友なんだ。僕は心底彼女を助けたいと思っている。それに耀根も僕のことをわかっていてくれる。だからむやみに心配しないでくれ」

と誇らしげに顔を上げて言った。

「寧岸の気持ちがよくわかったよ。もうよけいなことは言わないよ。ついでに、上の姉さんと下の姉さんは、性格も全く違うことを伝えておくよ。寧岸は、下の姉さんにはっきりした態度を示すべきだよ」

寧岸は身体をかがめて石を拾い、長江に向かって投げ入れた。寧岸は感慨深く答えた。

「暁鴎、君はまだ若いよ。人を愛することがどんなに苦しいことなのかわからないのさ。勿論、僕はできる限り、上手く対処するよ。これまで、理性を失ったことはないから大丈夫さ。それに、これからもないと思う」

（四）

みんな、寒風吹きすさぶ中、粘り強く二時間余り待っていると、坊主頭の趙耀根が、ついに留置場の鉄の扉の中から出てきた。最初彼は、外の世界を眺めてポカンとしていたが、みんなの歓喜の声が、趙耀根の意識をはっきりさせた。趙耀根は興奮して、大空に向かって大声で叫んだ。

「俺は、とうとう、出てきたぞ」

趙耀根はみんなと抱き合った。寧岸、暁鴎、耀虎、張喜、みんな男涙を流した。寧岸は、江暁歌を趙耀根の前に押し出した。趙耀根は、新婚まもなくして別れた妻と、ついに向かい合った。趙耀根は、興奮して言葉も出なかった。しばらくして、やっと腹から絞り出して一言言った。

「苦労かけたな」

趙耀根は、江暁歌が、彼のために用意した帽子と真新しい服を断り、古い綿入れの上着を着て、剃ってむき出しになった青みがかった頭のまま、みんなと一緒に歩きだした。彼は道行く人の彼を見る物珍しげな眼差しを気にも留めず、たった今監獄から釈放されたことにもいっこうにお構いなしだった。彼はただ、仲の良い兄弟達に囲まれて、傍若無人に大通りを歩く感覚を満喫していた。

趙耀根が家の玄関をまたぐと、趙耀根の母親は、趙耀虎に一万発の爆竹を鳴らさせ、彼とこの家のために清払いをした。趙耀根は玄関をくぐると、爆竹の煙が立ち籠める中に跪き、

「お母さん、ただ今、帰りました」

と大声で言った。母親は、

「随分と痩せちまったね。骨と皮ばかりじゃないか」

と顔中に涙を浮かべて言った。

この様子を見ていて、みんな悲しみがどっとこみ上げてきた。

母親は、もう既に祝宴をしつらえていて、みんなはぐるりとテーブルを取り囲んで、趙耀根のために祝宴を開いた。正月を迎えるための魚や肉料理は、みんなのために振る舞われたが、趙耀根には、大きなどんぶりに入ったベーコンと大豆をとろ火で煮込んだ料理が出された。母親は、趙耀根には沢山食べることをさせなかった。監獄から出てきたばかりの趙耀根には、この料理が一番合っていたし、身体に栄養をつけ、肉体を傷つけない料理だったからだ。

祝宴は盛り上がり、酒が入ってくると、みんなの興味は大いに高まり、自ずと趙耀根のことになった。

趙耀虎は、

「兄さん、監獄の中のことを話してくれよ」

と言った。江暁鴎も、

「話をしてよ。監獄の中は危険がいっぱいかい」

と言った。江暁歌が、

「そんな不愉快なこと言わないでよ」

と彼らの言葉を制して言った。

趙耀根は、

「何の不愉快なことがあるものか。勿論、楽しいこともないけどね。君達にはわからないよ。君達のようなまっとうな世界の人間には、監獄の世界のことなんかわからないのさ。要するに、僕は辛抱して過ごしてきたんだ。

とにかく、監獄から出てきたんだ。僕は、牢屋の中で、数人の友達と仲良くなった。今ではヤクザでも誰とでも僕は通じ合えるんだ」

と言った。寧岸は、

「耀根、言葉に気をつけたほうがいいよ。あの連中と友達になるのは、絶対に慎重にすべきだ」

と言った。趙耀根は、

「今僕は、世の中のことはなんでもお見通しさ」

と寧岸の忠告を歯牙にもかけないで言った。江暁歌は、

「耀根」

とひと声掛けて、寧岸への言葉遣いを穏やかにするように言った。趙耀根は、

「大丈夫さ。俺たちは、鉄のように固い友情で結ばれた兄弟さ」

と寧岸の背中を叩いて言った。寧岸は、

「そうだよ。そうなんだ」

と答えた。

趙耀根がいない間、寧岸はみんなの心の拠り所で、寧岸を頼っていた。趙耀根は、そんなこととは知らず、寧岸と話を交わしたが、江暁歌が注意を与えたとき、何か意識したようで、彼は賢く話題を変えた。

趙耀根は、

「寧岸、我が兄弟よ。一杯注がせてくれ。母親と耀珍が教えてくれたんだ。この数ヶ月、君が僕に代わって、あちこち駆け回り、暁歌と僕の家族の世話をしてくれたそうじゃないか。僕は将来必ず、この恩に何十倍にして報いたいと思っている」

とグラスを持ち上げて言った。寧岸も、

「兄弟の間で、報いるとか報いないとか言うのは水くさいよ。僕は当然のことをしたまでだ」

とグラスを上げて言った。

趙耀根は、今度は江暁鴎に向かってグラスを上げた。

「暁鴎」

江暁鴎は、呼ばれて慌てて立ち上がった。

「耀根兄貴、僕が兄さんに一杯注がなくれはなりません。耀根兄貴、この監獄に、元はと言えば僕が入らなければならなかったのです」

趙耀根は、

「俺たちは兄弟じゃないか。誰が監獄に入ろうと一緒じゃないか。それに、当時お前は殴り合いのケンカをしたが、それも僕のためだったじゃないか。今は一切が過ぎ去ったんだ。お前は何もこの事件がなかったと思えば、それでいいんだ。絶対に気にするなよ」

と笑って言った。江暁鴎が、

「耀根兄貴、今度何かあったら、火の中水の中、万死も辞さない覚悟だよ」

と答えた。母親は、

「暁鴎、お前達江家の中で、一番お前が可愛いよ。お

前と乾杯して耀根への御礼を言いたいよ」
とグラスを持ち上げて言った。
江暁鴎は、感情が高まってきて、続けざまに三杯も飲み干したので、首や顔が真っ赤になった。
最後に趙耀根は、江暁歌を前にしてこう言った。
「今僕は、僕の愛する妻に酒を注ぎたい。彼女は、世界中で最も勇敢で、最も強靱で、そして最も素晴らしい妻だ」
江暁歌は少し恥ずかしかったが、とても幸せな気持ちになった。
みんな、彼のために熱烈に拍手を送り、その拍手は長い間止むことはなかった。
趙耀根と江暁歌は、祝宴の後で、自分たちの部屋に入った。趙耀根は、江暁歌をきつく抱きしめた。江暁歌は、夢中になり、彼の腕の中で陶酔していった。彼女は、趙耀根の荒い息づかいの中に溺れていたが、突然お腹の赤ちゃんが自分のお腹を蹴ったのがわかり、慌てて趙耀根の重たい身体を押しのけた。
「子供を押さえつけないで、つぶれちゃうわ」
趙耀根は手を伸ばして、妻のお腹をなぜた。
「僕が監獄の正門を出てくるときに、君のお腹が膨らんでいるのがわかったよ。その時、僕は君のお腹をさすってあげたかったが、恥ずかしかったんだ。監獄に入ったときは、花婿になったばかりだったのに、出てきたら父親になるなんて思っても見なかったよ。僕は、生まれてくる子供は、まるまると太った男の子だと思うな」
「でも、私は女の子が好きよ」
「今、生まれてくる子供に呼びかけるんだ。やっぱり生まれてくるなら男の子だ。子供が生まれたら肩車をするんだ。おーい、早く生まれてこいよ」
「あなたも男尊女卑の考えを持っているなんて、思ってもみなかったわ。もし女の子だったらどうするのよ」
「僕が、男尊女卑じゃなくて、母親が男の子をほしがっているのさ。僕の母親が後家を通すのは、容易じゃなかったらしいよ。母親は早く子供を抱きたいんだ。父親に早く知らせてやりたいんじゃないのかなあ。女の子じゃダメなんだ。僕は男の子がほしいんだ」
「そんなことわからないわ。誰が自然現象を左右できるって言うの。誰もできやしないわ。万一女の子だったらどうするのよ」
「僕は、もちろん嬉しいさ。僕の子供だからね。もし、女の子ならもう一人産むことを考えよう」
「わかったわ。でも、国は計画出産をすすめているのよ。私に産めと言っても、もう産めないわ。私達の青春は過ぎ去っているのよ。若いうちに沢山勉強したいわ。大学に進学することが私の夢よ。今、社会人大学、専門大学、それに放送大学もあるわ。どの大学も盛況よ。私は、子供が生まれたら大学に進学するつもりよ」

二人の考え方は、夫婦といえども少し違っていた。
趙耀根は、妻と話をしたかったが、この半年あまり味わっていなかった甘い夜を失いたくもなかった。彼はあやふやに答えるより仕方がなかったのだ。
江暁歌は、二人の間に何故だかよそよそしい感覚を覚えた。彼女は決して認めたくなかったが、それは実際に二人の間に存在していた。彼女が夫を見たとき、彼に少し変化があるのに気づいていた。彼は無頓着で荒っぽい口調に変わっていた。
勿論、こんなことはたいしたことではなかったし、監獄の中に長くいれば、そうなってしまっても何ら不思議ではなかった。しかし、江暁歌を心配させたのは、彼の瞳に光る陰険で、残酷な深い恨みの空気が揺れ動いていることだった。江暁歌は深い憂慮を抱いた。
趙耀根は、その場の雰囲気を察知して、話題を変えた。
「僕の母親が、君を迎えに来るなんて思ってもみなかったよ。それに一番良い部屋を君のための空けてくれたんだ。結婚当初は、家を借りていたので、君に済まないことをしたと思っていたんだ。でも僕は、趙家の長男だから、僕の妻を趙家に住まわせることは当然の義務なんだ。でも大丈夫だよ。君がやっと趙家に入ってくれたから、部屋は狭いけど、他の所に住むことを思えば、よっぽどいいさ」
「あなたって、なんて封建的なの」
「封建的さ。君が何と言おうと、君が我が家に嫁いで年寄りに孝行し、弟や妹の面倒をみて、僕の良き妻になってくれさえすれば、君に感謝するよ」
江暁歌は、
「何故、家に囲っておきたいの。みんなに、あなたが良き夫であることがわからないじゃないの」
半ば冗談半分に言った。
「君は間違っているよ。世の中のことで目の前で繰り広げられていることは、大半が嘘なんだ。裏取引があるんだ。今回、初めて監獄にぶち込まれたけど、これは悪いことでもあったが、僕にとっては有益でもあったよ。大学に入学して、社会勉強したようなもんさ。僕は昔に比べて大人になったよ」
憂慮がまた一つ心の中にこみ上げてきた。彼女は、腹を割って夫と話をしたかった。だが、それはまた雲をつかむような話でもあった。それに、夫婦は一緒になったばかりだから、今話をするのは適切でないと思った。江暁歌は、言いたい話をぐっと飲み込んだ。
趙耀根は、少しも妻の気持ちを理解しようとせず、ずばずばと思っていることを言った。
「僕たちの職場の李主任は、僕に一番嫉妬していたんだ。君はどうやって彼を納得させたんだ」
「何が何でも食い下がれば、最後は勝利するのよって、私の職場の羅桂香が私に妙案を授けてくれたの」

「彼奴は悪い癖があり、とても好色なんだ。まさか君に変な真似をしなかっただろな」

趙耀根はなりふり構わず、江暁歌の腹を探ろうとして聞いた。

「そんなことないわ。彼がどうして、変なことをする勇気があるかしら」

「もし何かあっても、僕は君をせめられないよ。でも、君が出勤した後で、つまらない奴らに笑われないように、本当のことを教えてくれ」

江暁歌は、

「そんこと言うのはやめて」

とうつむいてぽつりと言った。

江暁歌がうつむいているのを見て趙耀根はかえって笑い出した。

「李主任のような奴が、どうして、僕をつるし上げるチャンスを見逃すもんか。彼が見逃すことが出来たら、お天道様が西から上るようなものさ」

「李主任だって、世間に真相を覆い隠すことなんかできっこないわ。それに、張喜達の証言もあるもの。とにかく、あなたが監獄から出てきたんだから、私達の勝利よ」

趙耀根の心の中は、釈然としなかった。しかし、江暁歌の顔色が尋常でないのを見ると、これ以上言えなかった。彼は寝返りを打つと、直ぐにいびきをかき出した。

江暁歌は、ずっと目を開けたまま趙耀根の隣で横になっていた。自分の傍らで、いびきをかいてぐっすりと眠っているよく知っている男を見ていると、なんだかちっとも眠れなくなってしまい、かえって目がさえてしまった。彼女は、ありとあらゆる辛苦をなめ尽くし、あらゆる手段を弄して、自分の夫をやっとの思いで監獄から救い出した。なのに、これもつかの間の喜びに過ぎなかった。彼女の心は重苦しくなり始め、安堵感もなくなり、いずれまた、災難がふりかかってくる予感がした。

第八章　疑念

（一）

趙耀根は、かつて助けてもらった各方面の友人を宴席に招き、舅や姑にはプレゼントを持って訪ねた。家で数日ゆっくり休養を取って、趙耀根は出勤した。本来は無罪釈放で、職場に戻ってきたのだから、全てがこれまでどおりうまくいくと思っていたが、中国共産主義青年団委員会書記の肩書きは、とっくに他人の手に渡っていた。

電動カートも運転させてもらえなくて、彼には一本の金テコが与えられ、肉体労働の輸送隊に配属された。島流しも同然であった。

張書記と李主任は、その上、彼が監獄に入っていたことを、会議のたびに取り上げ、彼を監視するように促した。一度監獄にぶち込まれると、君の政治生命は絶たれると、彼の牢屋の仲間が、かつて言ったことがあったが、案の定その通りであった。

一人の人間が、最も大切な政治生命を失ってしまった。よしんば、生きていたとしても、生きる屍に等しかった。

趙耀根の絶望と悲憤は頂点に達した。

彼は、大きな包みを肩に担いで、よろよろと渡り板を歩いていた。頭を下げると、足下に濁った長江の水が見え、頭からいきなり飛び込んで死んでしまいたい気持ちになった。

とはいうものの、勿論、彼は飛び込まなかった。彼はそんなに愚かではなかった。彼は一生懸命生きて、自分を磨いて、チャンスの到来を待たなければいけないと思った。彼は未だ若い。彼のこの一生にチャンスが巡って来ないとは思わなかった。

彼は、職場で起こったことを家族に隠した。

彼は、努力して自分の心理状態をコントロールし、歯を食いしばってこの卑しい仕事を持ちこたえていた。

江暁歌は、最初から夫の異常に気付いていた。夫は以前のように元気ではなく、枕を並べると、直ぐにいびきをかいて、ぐっすり眠ってしまった。彼は、腰がだるくても背中が痛くても、何事もなかったかのように装った。

ある日、うっかりして何処かにあたってしまって、痛さで顔をゆがめてしまったこともあった。彼は、日焼けして真っ黒い墨のようだった。彼の飯の量も極端に増え、いくら食べても満腹にならなかったが、人に感づかれてはいけないと思い、沢山食べる勇気もなかった。

彼の屈託のない笑顔は、明らかに装ったもので、彼の苦しみと重苦しさはとても深刻だった。これは、何気ない彼の仕草から読み取ることが出来た。

江暁歌は、自分が知り得たことを心の奥深くにしまい込み、人に彼のことを聞くでもなく、夫の秘密が誰にも知られていないと夫に思わせたかった。彼女にできることは、人一倍のやさしさで夫を慰め、満足できる生活をしてもらいたいと思うことだった。

江暁歌は、毎夜、夫が腹を割って本当のことを打ち明けてくれることを望んでいた。彼女は、話をしてやることが、彼の心をリラックスさせることだと思っていた。しかし、趙耀根は話をしようとしなかった。趙耀根は、これ以上家族を巻き添えにしたくなかったし、自分のことで、妻を不安にさせたくなかったのだ。彼はむしろ沈黙して、自分一人の苦悩をしまい込んだ方が良かった。

彼は、ともかく立ち直る日が来ることを信じていた。趙耀根とはこんな男だった。江暁歌は、夫婦の生活はバラバラになっていると思った。

彼女の心は、いつも乱れていて、どうしたらよいかわ

からなかった。

（二）

趙耀根は、過酷な肉体労働の合間に、長江のほとりの係留船に腰掛けて、長江の流れる水を見ながら考え事をしていた。運搬工の同僚達は、係留船の甲板に寝そべって、顔を麦わら帽子で覆って居眠りをしていた。彼らは、あっちへ寝そべり、こっちへ転がりながら、居眠っていた。まるで運を天に任せて、どんな境遇でも生きていけるようであり、その姿は、趙耀根に深い刺激を与えた。趙耀根は、もう自分が生きていく道は、この道しかないのかと考えた。

答えは言うまでもなく、この道しかなかった。今の社会体制がそうさせている。この道を無理矢理離れたならば、給料や福利等一切の生活の保障は絶たれてしまうだろう。そして、社会の層となり、最低限度の社会的地位すら失ってしまうにちがいなかった。

「畜生め」

ある集まりで、かつての牢屋の仲間は、傲慢な言葉遣いで言い放った。

「俺が、もしこの地位に甘んじているなら、何をするかって？無一文で、捨て身になり良い生活を手に入れるんだ」

もう一人が、

「そうだ、そうだ、職場に戻って、みんなにいじめられていったいどうするんだ。今、深圳と呼ばれるところには、市の中心部に開拓された場所がある。俺の友人は、みんなそこに行ったんだ。中には、万元戸（注14）になった奴もいる」

と言った。

（注14中国の年収一万元（約15万円）以上の農民や個人商工業経営者などの大金持ちをさした言葉。1980年ころの全国の平均年収は400元あまりであったため，万元戸はかなりの高額所得者であった。経済発展の著しい中国ではすでに現在では一万元の年収はあたりまえになっている。）

趙耀根は、

「万元戸、それは億万長者の事じゃないのか？」

とびっくりして言った。

「そうさ。珍しくないよ。俺には、出も悪くてとんだ目に遭った奴がいるが、この二～三年捨て身になって商売をして、三洋のテープレコーダーとデジタル時計を売買して、首に金のネックレスをかけていたよ。ほら、これは彼がくれた腕時計だ」

趙耀根は感心して、

「どうやら時代は、大きなうねりが起こっているらしい」

と呟いた。

寧岸は、趙耀根と一緒にこの話を聞いていたが、各地を渡り歩いた趙耀根の友人を別に気にも留めなかった。

「耀根、上っ面だけを簡単に信用しちゃいけないよ。国家が行っている政策から、何処まではずれたことが出来るって言うんだ。ちょっと手綱をゆるめると、闇取引をする人がいるが、国家は容赦なく取り締まるよ。これが歴史の教訓さ」

「勿論、歴史の教訓に学ぶ必要があるし、考えてみる価値がある」

「僕は、世の中が如何に発展しようとも、社会の価値基準は、変えることができないと思うんだ。例えば、あらゆるものが品質が悪く、勉強することが崇高であると言うことが、随分と批判されたことがあったけど、今では、誰もが大学受験を目指して、勉強しているじゃないか」

「勉強することは素晴らしいよ。でも、金持ちになることも素晴らしいさ。今国家は、金持ちになることを呼びかけ始めたよ。『お金儲けが出来ますように』という映画が今上映されているよ。金持ちになるには、先手必勝さ」

『金持ち』、この二文字はとても刺激的で、よく味わってみる必要があった。趙耀根は、この二文字を味わいながら、一時ポカンとした。

酒宴が終わりに近づき、みんながいなくなった後で、趙耀根と寧岸は、暫く話をした。趙耀根は、深圳について少し調べてみたいと寧岸に言った。

「深圳だって！君は、もしや南進の潮流（注15）を追いかけたいんじゃないのかい」

（注15鄧小平が1992年1月から2月にかけて武漢、深圳、珠海、上海などを視察し、重要な声明を発表した一連の行動を南巡講話と言う。これが、改革開放を加速させ、市場経済化を本格化させたと言われている。）

「なぜダメなんだ」

寧岸は、

「僕は、君によく考えることを勧めるよ。倉庫の仕事は、どんなに悪くても食いっぱぐれのない仕事で、全ての面において保証がある。それに、江暁歌（こうぎょうか）もうすぐ子供が生まれるじゃないか。どちらが大切は自分で考えてみたらどうなんだ」

「僕は、正真正銘のプロレタリアートだ。僕が打ち壊したいのは、束縛だけさ。手に入れたいのは金満の世界だ」

「君は、根っからの理想主義者だ。これは金儲けをするときの大きな障害になるよ」

趙耀根は、良いとも悪いとも言わずに、寧岸に笑って見せた。趙耀根は、理想主義者が金儲けをすることができき、大金持ちになることができることを、自分のやったことで証明したかった。

（二）

張喜（趙耀根の会社の同僚）は、

「張書記と李主任は、全くひどすぎます。みんな、彼らのやったことが納得できなくて、会社に押しかけて彼らを訴えるつもりです。彼らは、あなたに不公平です。中国共産主義青年団委員会書記を担当させないのは、仕方がないかもしれませんが、あなたに、長期にわたって運搬工をさせるなんてひどすぎます」

と言った。趙耀根は、

「たいしたことないさ。運搬工の仕事は、とても気に入っているんだ。給料はいいし、食糧の配給切符は沢山くれるし、毎日たらふく食べて、やたらと気を遣うこともないからね。淡々と日が過ぎていくんだ」

張喜は、

「だから、みんな、あなたに頭が下がるんです。あなたは、毎日へとへとになって働き、弱音も吐きません。さすが趙耀根さんです」

と言った。

趙耀根は、たった今、船倉の黒鉛を降ろしたばかりだったので、犬のように疲れ切っていて、全身真っ黒で、人の体をなしてはいなかったが、張喜のお世辞を聞くと、やはり嬉しかった。恥を忍んで、頑張って運搬工として仕事を続けてきたのは、気骨があり信念を曲げない性格を証明するためでなかったのか。大衆はちゃんと見ているものだ。彼らはきちんと白黒をはっきりさせる目を持っている。

趙耀根には、ずっと気に掛かって、どうしても忘れられない事があったので、張喜に聞いてみた。

「二人の上司は、俺を恨んでいたのに、なぜ、お前の口述書に署名捺印をしたんだろうか」

「そうなんです」

張喜は、このことを曖昧にしたくて、

「あなたの品行がよかったという噂を聞くと、『趙耀根の栄光は、既に過去のもので、公職に留まることが出来れば御の字だ』と、李主任は遠慮しないで、ずけずけと言っていました」

と言った。

「李主任は、いったい何故署名捺印をしたのだろうか。僕に教えてくれないか」

張喜は、

「多分、奥さんがこっぴどく李主任をとっちめたんでしょう」

と仕方なく言った。趙耀根は、

「どうやって、とっちめたんだ」

と張喜の襟元を掴んで言った。張喜は、

「私は知りません。本当に知らないんです。聞いた話じゃ、江暁歌さんはすごかったそうです。彼に署名捺印

させるために、李主任の一物は、もう少しで使い物にならなくなったそうです。僕は、あなたに代わって追跡調査をしたことがあります。誰もこのことが真実であると証明できません、江暁歌さんのような人は、こんなことはできないと思います」

と少しどもりながら答えた。

趙耀根は、腹が立って張喜を地面に叩きつけたが、彼を引っ張り起こして、

「すまない」

とひとこと言った。

張喜は、叩きつけられて痛かったが、自分の痛みもさほど気にも留めないで、懸命に釈明して、

「今言ったのは、デタラメです。あなたはまともに受けてはいけません」

と言った。

趙耀根の目は真っ赤だった、しかし、語気はいつものように落ち着いていた。

「何でもないよ。俺はどうして、あんなデマを信用したんだろう」

張喜の帰った後で、趙耀根は一人、長江のほとりで暫く座っていた。同僚達はとっくに帰っていて、黄昏時の長江の川面は薄く霧が立ちこめて、ぼんやりしてきた。黒鉛を担いだ趙耀根は、アフリカ人のように真っ黒で、目と歯だけが白く残っているだけだった。

彼は立ち上がると廃棄された係留船に上がって素っ裸になり、船縁に立って前に向かって跳び上がり、真っ直ぐ長江に飛び込んだ。夕暮れの長江は波静かで、鏡のようであった。しばらくして、趙耀根はやっと長江から出てきて、長江の川面に仰向けになって目を閉じ、流れに任せて、下流に流れて行った・・・。

こうしたのは、毛主席が、長江で思う存分泳いだドキュメンタリー映画が影響していた。暫く泳いで、彼は身体をひっくり返して、腕を揺り動かし、流れに逆らって泳いでいき、係留船に戻ってきた。

趙耀根の肌は、冷たい長江の水で真っ赤になったが、体中から熱気が立ち上がっていた。

趙耀根は、係留船の上で、彼の真っ黒な身体を、ちょっとした汚れも見逃さないでゴシゴシ石けんをつけて綿密に洗った。そして、全身白い泡だらけになると、彼は、もう一度長江に飛び込んだ。彼が水面に上がってきたときには、黒鉛はだいたい洗い流されていて、元の彼に戻っていた。彼はショルダーバックの中から清潔な服を取りだして着た。趙耀根は家に帰ると、母親と妻の前で、これまでと同様に、一方では仕事をしながら、中国共産主義青年団の幹部のように振る舞っていた。

（四）

「寧岸、僕はとっても大切な用件があるんだ。必ず、正直にありのままを答えてほしいんだ」

「僕も、君に尋ねたい大切な用件がある」

「寧岸、君の用件は後回しにしよう。暁歌が、僕の職場の李主任を説得させたのかどうか、僕は聞きたいんだ」

寧岸は、

「良いとも、でも、このことは君はとっくに知っているじゃないか」

趙耀根は、

「問題は、彼女がどのようにして説得させたかにかかっているんだ。李主任は、彼女に、もう少しで、一物を使い物にならなくさせられるところだったって言うじゃないか」

「これはデタラメだよ。耀根、暁歌は、君のために、とっても苦しい目に遭っているんだ。君は、彼女を侮辱することなんて出来ないはずだ」

「これは全く別問題だ。僕が聞いているのは、李主任をどのようにして説得させたか教えてほしいと言っているだけなんだ」

「別に、特別なことをしたんじゃないと思うよ。しばしば、彼らのところに出向いていって、書類に署名捺印してくれるように頼んだんだ」

「君は、本当に何かデマを耳にしていないか」

「聞いてないよ」

「寧岸、君は、僕の真の親友だ。君が僕をだます筈などないよな」

寧岸は、

「僕は君をだましてなんかいないよ。僕も、暁歌は李主任に強姦されていないことを固く信じるよ。暁歌はしっかりしている。僕はずっと、暁歌に君のことを相談していたんだ。ほとんど毎日君の家に行っていたから、僕は彼女のことをわかっている。僕は固く約束するよ。それに、君たち夫婦はとっても仲が良いじゃないか。君は何故自分で彼女に聞かないんだい。彼女と私心を挟まないで、誠実に話をしたらどうなんだ」

「僕は、彼女に聞いたことがあるけど、特に問題なかったよ。でも僕は、どうみても尋常じゃなかったと思うんだ」

「耀根、全ては過ぎ去ったことさ。暁歌にもうすぐ子供が生まれるんだ。血圧が高くて、ひどく足もむくんでいるんだ。君は、誠心誠意彼女の面倒を見なければならないのに、あれこれと妄想をたくましくして、どうしようっていうんだ」

「もし、暁歌が本当にあんなことをしでかしたなら・・・僕は人に会わせる顔がないよ」

「自分が人に会わせる顔がないなんていつまでも考えてちゃダメだ。もっと暁歌のことを考えろよ。絶対に彼女を傷つけるべきじゃないよ」

趙耀根は、

「僕が、彼女を傷つける筈がないじゃないか。でも、このことをはっきりさせないと僕の心はずっと落ち着かないままだ」

寧岸は、

「わかったよ。もうやめよう。今度は、僕が君に尋ねる番だ。君は、どうして益々黒くなり、痩せていくんだ。いつもとっても疲れた様子に見えるけど、君はほんとうに、倉庫の職場に戻ったのか」

「勿論さ」

「数日前に、君が失ったのは束縛だけだと話をしてくれたのを覚えているけど、僕は少し変だなあと思ったんだ。その時はさほど気にしていなかったけど、後に、僕が職場に君を訪ねたことがあったが、張喜は、君は会社に会議に出かけたと言ってたよ。でも、なぜだか張喜の話には、ウソがあると思うんだ。君は、本当のことを話してくれ。彼らは君をつるし上げているんじゃないのか。君は、肉体労働や便所掃除をして、島流しに遭っているんじゃないのか」

「何処まで考えているんだ。誰が僕をつるし上げる勇気があるんだ。そんな勇気がある奴はいないよ」

「耀根、僕は一貫して、君の気迫に敬服している。でも、どんなことが起こっても、我慢しちゃいけない。僕にはちょっとした考えがあるんだ」

「僕には、みんなが僕を助けようとしてくれることがよくわかるんだ。でも僕は大丈夫だ。立ち直るには暫く時間が必要なんだ」

寧岸は、疑念を抱いて、趙耀根を見ていたが、結局のところ、本当の話をいうのはやめようと思っていた。

（五）

江暁歌は、お産を間近に控えていた。

趙家と江家の家族は、みんな産室の入口で待っていて、みんなで新しい生命の誕生を迎えた。彼らの中で、一番気を揉んでいたのは、言うまでもなく趙耀根の母親だった。この母親だけが、とりわけ趙家の跡取りの孫を待ち望んでいた。彼女は根気よく産室の磨りガラスを見つめて、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と、口の中で絶えず唱えていた。彼女の眼中には誰もいなかった。親戚同士のことにも口を挟みたくなかった。ただ、産室から伝えられる知らせを待ち望んでいた。

看護婦が、

「名字が江の江暁歌さん、生まれましたよ」

といった。

趙家の母親は、

「どちらが生まれたんですか」
と即座に訊いた。
「女の子です」
趙耀根の母親は、
「女の子ですって」
とがっかりして言った。彼女はぶつぶつ独り言を言った。
「どうして、女の子であるものか」
趙耀根は、母親の失態のために恥をかくと思い、話題をそらすことを考えるしかなかった。
「お母さん、おめでとう。おばあちゃんになったね」
母親は彼の言葉に取り合わずに、
「私は、とっくに言ったじゃないか。男の子を産めない女なんだ」
と言った。沈鳳宜は我慢できなくて、
「まったく話にならないわ」
と冷ややかに言った。
趙家の母親は、沈鳳宜の言葉を全く意に介さず、魂が抜けたように、ぷいっと身体の向きを変えて出て行ってしまった。
ちょうどその時、江暁歌が分娩室から出てきた。彼女は、真っ白な移動式ベットの上に、顔面蒼白で疲れ切って横たわっていた。
彼女は、
「私、女の子を授かったわ」
と趙耀根に言った。
趙耀根は、にこにこして彼女の手を握りしめ、
「ご苦労様。きっとこの子はお母さんに似てきれいだよ」
と言った。
江暁歌の父親は、心をこめて娘のそばにかがむと、そっと娘にささやいた。
「暁歌、おめでとう。お母さんになったんだよ」
江暁歌の父親は、振り返って、娘婿のがっちりした肩をたたいて、
「おめでとう。君の責任は一層重くなったな」
と言った。
趙耀根は、頭をかきながら、幸せそうに大きな声で笑って、江暁歌の両親に約束した。
「お父さん、お母さん、安心してください。僕は、絶対に彼女達を幸せにして見せますから」
江暁歌は父親と目が合うと、趙耀根の約束を信じていることを伝えた。
親戚や友人が駆けつけてきた。寧岸、江暁鴎、趙耀珍、趙耀虎、張喜、羅桂香、それに、倉庫の同僚や新たに付き合いだした運搬工がいた。
彼らは、病室に押し合いへし合いどっと入っていき、食べ物や玩具を持ってきて、笑ったり、話したりして、

代わる代わる赤ちゃんを抱いた。
趙耀根は、相変わらず他人の受けがよく、彼の娘を見に来る人は、病室がひっくり返らんばかりの勢いだった。
入院中に知り合いになった世話をしてもらう人がいない傍らの友人は、とても羨ましそうだった。
江暁鴎は、小さな姪をあやして話しかけた。
「もしもし、僕は、君のおじさんだよ。きれいなお嬢ちゃん、お名前は何て言うの」
趙耀根は、
「娘は、嘉児と言うんだ」
と答えた。
寧岸は、
「良い名前だ。両親の限りない希望と祝福がこの二文字に込められている。耀根、暁歌、この名前は、書いてみると美しいし、読んでみても心地よい。よく君達は、この名前を考えついたね」
と言った。
江暁暢（江暁歌の妹）が、丁度病室に入ってきた。
彼女の視線は、先ず寧岸に向けられ、口だけが姉に対して動いていた。
「これは、お母さんに頼まれて、私が小桃園に出かけて買ってきたチキンスープよ」
趙耀根は笑って言った。
「有り難う、江暁暢、有り難う、お母さん」
「お礼なんていいの。私の姉さんだから、当然よ。姉さんは女の子を産んだので、無視されないように祈るわ」
「そんなことさせないよ。僕は女の子がほしかったんだから」
「そうなの？」
江暁暢は義兄を見て、
「言ってることと、思ってることが裏腹じゃダメよ。後で何かあったら承知しないわよ」
とあざ笑って言った。江暁歌は、
「暁暢、口から出任せ言わないで」
と言った。
「出任せですって。みんなの気持ちははっきりしているのよ。義兄さん、あなた、帰ったら、あなたが事件を起こした日のことをお母さんに聞いてみたら。あなたのお母さんは、私の姉さんをどれだけいじめたと思っているのかわかって！」
と言った。寧岸は、
「暁暢、今、こんな話をする時じゃないだろう」
と言った。
「じゃ、何時だったらいいのよ。あなた方は、人に恨まれるのが怖いんだわ。ひどい目に遭っているのは、私の姉の方だわ」
「暁暢、安心してくれ。僕がいるよ。全ては良くなるはずさ。僕が自分で暁歌にスープを飲ませるよ」

趙耀珍（趙耀根の妹）は、
「私がスープを飲ませるわ。私がやるってば」
と言った。江暁暢が、
「あなたは不器用だわ。やめときなさいよ」
と言った。
趙耀珍は、えらく憤慨したが、何を言ってよいのやらわからなかった。
張喜が趙耀珍に味方した。
「おい、江暁暢、こんなにびしびし言っちゃいけないよ」
寧岸は、
「みんな、聞いてほしい。どんな状況であっても、ここでケンカをする場合じゃないよ。ここは病室だ。妊婦が安静に休む場所じゃないか。これ以上言った人が悪いんだぞ」
と言った。
寧岸が口を開くと、江暁暢は、おとなしくなり、もう何も言わなかった。

（六）

趙家で、玄関に入ってきた江暁暢と出て行こうとした趙耀珍が鉢合わせをした。
江暁暢は、江暁歌が退院した後で、両親を代表して姉さんを見舞いたかったので、趙家の玄関に出入りすることが多くなっていった。趙耀珍と出くわすと、二人のライバルは口論になった。
趙耀珍は、
「あなたは、何でまた来たのよ」
と冷ややかに言った。江暁暢も物怖じしないで、
「どうして、来ちゃいけないの。私が自分の姪に会いに来たのに、ダメだって言い張るの」
と言い返して、手に持っていた手提げ袋を見せて、趙耀珍を脇へ追いやって意気盛んに入って行った。江暁歌は、
「嘉児、ほら、おばさんが来てくれたわ。いらっしゃい」
と笑って言った。
江暁暢は、寧岸もここにいるのがわかり、直ぐ鈴の鳴るような笑い声を爆発させた。
「寧岸もここに来てたの、偶然ね」
趙耀珍は、江暁暢の寧岸に対する媚態が目障りで、いきり立った。
暁暢は、嘉児に大袈裟に手を伸ばして、
「おいで、おばちゃんが抱っこしてあげるわ」
と言った。趙耀根は彼女を遮って、
「待て、待て、お前が抱けるか」
と言った。

「安心してってば！嘉児、あなたはお母さんよりずっときれいよ」
趙耀根は、
「娘は、勿論俺似だよ」
「面の皮がとっても厚いわね。嘉児、義兄に似てもにつかないわ。あなたはとってもきれいで上品で、おとなしくて、それに気質もあるわ」
寧岸は、笑ってからかいながら、
「そうだ、そうだ、江暁暢の言うとおりだ。はじめは、耀根と暁歌が恋愛中、みんなは腑に落ちなかったんだ。ピンとしている一本の生け花を、なぜ、牛糞にいけるのかってみんなが言っていたよ」
と言った。趙耀根は、
「それは、嫉妬さ。男が才人、女が美人の似合いのカップルを見て、嫌になって言ったんだ」
と笑いながら言った。
突然趙家の母親が入って来るなり、子供を抱きかかえると、
「嘉児を連れいくよ。牛乳を飲ませるんだ」
と言った。
「お母さん、私が飲ませるわ」
「私が、この子を毒殺するわけがないでしょう。お前達を少しでも助けようとすると、お前達は、ダメだと言うし、子供を殺してしまうのではないかと心配しているようだ。それにお前達を助けないでいると、私のことを男尊女卑だの、嘉児を嫌っているなどと言うし、私にどうしろって言うんだい」
「そんなこと言えるわけありません」
「言ったのを聞いたんじゃなくて、そういうそぶりが見えるんだよ」
趙耀根は、仕方なく二人の間に入った。
「わかったよ。暁歌、お母さんに飲ませてもらおうよ」
「ダメよ。お母さんは、いつも哺乳瓶を消毒しないんだから」
母親は、
「耀根、お前の嫁が何て言ったか聞いたかい。私は、あんた達三人の子供を育てたんだ。みんな牛より丈夫だよ。暁歌はわざと意地悪しているんだ。女の子を産んで、逆に私に謝らせようとしているんだ」
と怒鳴った。
江暁歌は、急に腹が立ったが、姑といざこざを起こしたくなかったので、耐えきれずに涙を流した。
江暁暢は、大声を出して言った。
「趙耀根、あなたは、お母さんを監視しなさいよ。全く話になりゃしないわ」
趙耀珍は、
「デタラメ言うのはやめて」
と、江暁暢を指さした。

江暁暢は、すかさず、趙耀珍にビンタを食らわしたが、趙耀珍も激しく飛びかかり、江暁暢に突っかかっていった。

趙家の母親も、江暁暢に飛びかかっていった。

「私の家に来て、娘にビンタを食らわすなんて、まったく、こんなことあったもんじゃないよ」

寧岸は、大急ぎでケンカをやめるように仲裁に入った。小さな部屋は一時騒然となった。

趙耀根は、

「趙耀珍、お前は出て行くんだ」

と怒鳴った。

趙耀珍は、後ずさりしながらも反駁した。

「なぜなの、彼女は私の家に殴り込みに来たのよ」

趙耀根は、憤慨して江暁歌に言った。

「お前は、子供をお母さんに預けろ。お母さんが、哺乳瓶を消毒していないのなら、お母さんも容赦しない。寧岸、君は、江暁歌を家に送って行ってくれ。みんなは、僕のために出て行ってほしい。僕を一人にさせてくれないか」

江暁歌は、

「私も出て行くの」

と尋ねた。

「そうだ。出て行け、出て行けよ」

江暁歌はびっくりした。彼女はくるりと背を向けると外に出て行ったが、寧岸に引き留められた。

(七)

寧岸と江暁暢（江暁歌の妹）は、長江沿岸の広い道に沿って、歩きながら話をした。寧岸と肩を並べて歩くことが出来、江暁暢はとても満足そうで、幸せを感じていた。彼女は、精一杯、小鳥のように甘えた様子をつくろった。

彼女は、甘い声で寧岸に聞いた。

「たった今、何故姉さんを引き留めたの。何故姉さんを出て行かせなかったの」

「力で、力に対抗してはダメだ。どうしても取りなし役が必要なんだ」

「あなたは、いつでも人のために取りなし役を買って出ているわ。これまで自分のために考えたことなんてないじゃない。ほんとうに生きている雷鋒（注16）だわ」

（注16雷鋒は、中華人民解放軍における模範兵士とされる人物。1962年8月15日、遼寧省撫順で殉職。電柱を輸送中のトラックを立て直す作業中、頭を強く打ち死亡した。22歳であった。死後、毛沢東などの共産党指導者の言葉を引用した日記が発見され、彼は軍人の思想的モデルとして大きく取り上げられた。1963年3月5日に毛沢東によって、雷鋒同志に学ぼう運動が始まった。このスローガンは文化大革命中、各種新聞や学校教科書で盛んに用いられ、彼は模範兵士として偶像に祭り上げられた。）

寧岸は、

「僕は、趙耀根が帰ってきた後、全てが昔のように戻ったと思ったんだ。でも、どうも状況は違っていた。彼は、数人の監獄仲間の影響を受けたのが大きすぎたんだ。本は読まないし、勉強はしない。一日中金儲けのことしか考えていないんだ。金儲けなんて、無駄なことだと説得すら出来ないんだ。彼の母親は、嘉児が女の子なので、暁歌にいい顔なんてできっこないし、ああ神様、現実はなんと厳しいんだろう。江暁歌は、これからどうして暮らしていけばいいんだろうか」

とため息をついて言った。

「あなたは、江暁歌のことを片時も忘れられないのね」

「君は、江暁歌のことを気にかけないのかい。彼女は君の姉さんじゃないか」

「そうよ。彼女は私の姉さんよ。でもあなたの姉さんじゃないわ。彼女は結婚して子供も産んだのよ。それなのに、あなたはなぜ、姉さんのことをいつも気にしているのよ」

江暁暢の言ったことは、寧岸の心に突き刺さった。彼は黙り込むよりほか仕方なかった。寧岸は、勿論、江暁暢が自分に好意を持っていることを知っていた。彼女は確かに顔は姉さんに似ていたが、気勢が激しくて、一日中ペチャクチャと喋りまくり、話し方が辛辣で、時に本当に耐えられないことがあった。寧岸はこのため彼女をずっと遠ざけてきた。

江暁暢は、

「寧岸、あなたは、私がなぜ、突然堪えきれずに、趙耀珍にビンタを食らわせたか当ててみてよ」

と言った。

「彼女は、あなたに対して話し方が荒っぽいわ。これだけじゃないわ。彼女はいつも夢中になってあなたを見ているわ」

「そうかい、僕には、どうもわからないなあ」

「やめてよ、あなたのような聡明な人が、どうしてわからないことがあるもんですか。それに、彼女に対してあやふやな態度を取るべきではないわ」

「何言っているのかわからないなあ。僕は、趙耀珍が成長してきた姿を見てきたけど、兄さんそっくりだ。彼女は一途な娘だ。僕は、彼女に特別な感情があるわけじゃないよ」

「でもあの娘は、一途でも年頃よ。あなたに夢中よ。彼女に関心がないなら、彼女に諦めさせてよ。彼女に早くボーイフレンドを見つけてもらわなくちゃ困るわ。張喜は、彼女とお似合いよ。彼女にとってもお似合いよ。でも、彼女はあなたに夢中よ。あなたが彼女とのゴタゴタを解消できないんなら、これからも彼女に追いかけ回

されるのよ。気をつけてね」
「そんなに、情況が悪くなっているのか」
「もうとっくよ」
「それじゃ、どうすればいいんだ」
「それじゃ、解決方法を教えてあげるわ。趙耀珍にあなたの彼女を紹介してあげるのよ」
「僕の彼女？いったいどこにいるんだい？」
「私達、もうこれ以上、鬼ごっこはやめましょうよ」
寧岸は、江暁暢の大胆な行動に呆然として、一瞬言葉を失った。
江暁暢は、澄んだ眼を向けながら、
「私って、醜い女でしょう？」
と言った。
「そんなことないよ」
江暁暢は、甘えて彼の腕につかまる仕草をした。
「私、歩けないわ。いいでしょう？」
寧岸は思わず自分の腕を伸ばした。

（つづく）

社　告（内規）

☆同人参加へのお誘い

私達は広く同士の参加を歓迎致します。

「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行しております。

同人は同人費として月額二、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆維持会会員へのお誘い

本誌愛読者のうち、一部有志の方々が、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数ヶ月分をまとめて前納して頂いております。

季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行い、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティーへのご案内などを差し上げ交流を行っております。

＊同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。

郵便振替口座　〇〇二七〇―〇―六四五九二

加入者名　まんじ

透明な時間（七）

宅見勝弘

【前号までのあらすじ】

東西銀行赤坂支店の金庫室の中で竹森は目がさめた。竹森は誰かに殴られ、気を失っていたのであった。隣に熊本支店長の死体が横たわっていた。

犯行現場の金庫室は、格子扉がシリンダー錠で、耐火扉がダイアル錠とシリンダー錠で、通用口が数字錠とシリンダー錠で鍵がかかっていた、五つの鍵による三重の密室であった。しかも、三つのシリンダー錠の鍵は死体の手に握られていた。沢木雅子・草津史郎・鹿田係長が支店の通用口の鍵を開けて、支店に入った。鳥居副支店長をふくむ四人が金庫室の鍵を開け、支店長の死体と竹森を見つけた。

東西銀行は、草食系の東城銀行と肉食系の西都銀行が合併してできた銀行である。熊本支店長は西都の出身で、もと東城の赤坂支店にきていた。熊本支店長にかわってから、支店の営業成績がのびていたが、職場の雰囲気がわるくなっていた。

五（続き）

熊本支店長は営業の成績が良くない部下にむかって「辞めろ」とののしった。最も悪い行員には「死ね」とどなった。

声をあらげた支店長は顔も真っ赤にさせたので、その姿は赤鬼にたとえられた。営業会議のある月曜日の朝は、赤坂支店の行員の顔はひきつっていた。

海外留学からの帰国者が赤坂支店に転勤してきた。彼は銀行にすべての費用を負担してもらって、二年間アメリカの経営大学院に留学していたのである。

もともと東城銀行では、銀行の派遣した海外留学生の受け入れ支店が十店ほど決まっていて、赤坂支店はその一つであった。

年間五名ほどの留学生の内の一年おきに一人が赤坂支

店にきている。他にも海外店からの転勤も多いので、海外の経験者は十名ほどが支店にいた。

「また留学あがりを受け入れるから、その分は戦力のあたま数に入らないな」などと支店でもあきらめている。もともと赤坂支店は特殊な仕事が多いので、支店全体のノルマは少なかった。支店全体の成績の足を引っ張る人間がいても気にされなかった。

むしろ、留学生は将来の役員候補として、はれ物にさわるような扱いをしていた。留学生は赤坂支店を『リハビリ支店』とからかって呼んでいた。当人もリハビリで赤坂支店に来た感じであった。

「帰国後は支店で営業すると、アメリカの先生に言ったら、人材のむだ使いだと笑われましたよ」

支店にきたときのあいさつも偉そうな感じであった。そのような態度の本人に対して、いきなり熊本支店長がきびしい洗礼を与えた。

「俺は大阪の三流私大の出だ。有名大学を出て、アメリカの大学院を出ているからって、俺をなめるなよ。使えない奴は、くびにするから覚悟していろ」

生意気といわれた彼も熊本支店長のおどしに負けてしまったようであった。翌日から出勤しなくなり、そのまま辞表を送って退職した。

二年間かけて銀行がすべての学費を払った銀行員を一日で退職に追い込んだ。しかし、支店長が人事上のペナルティを受けたわけでなかった。このことがあってから、支店長の独裁がより強くなっていった。

熊本支店長は言葉づかいが荒いだけでなく、差別的な表現や女性を見くだす発言をすることも多かった。

取引先係に事務をそつなくこなすが、営業成績が伸びていない男性行員がいた。「お前の仕事は女の仕事だ」といつもの調子でののしった。その場に男性と同じ総合職の女性行員や事務職の雅子も居あわせていた。

しかし、その時は支店長の分が悪かった。いつもおとなしい雅子が横から「女の仕事とは、どういう意味ですか」と支店長に食ってかかったからである。

「すまん。口がすべった」さすがの支店長もこのときは珍しく謝った。

もともと熊本支店長のいた西都銀行では、女性はすべてというほど事務職としての採用であった。東城銀行では三十年も前から女性の総合職を採用しており、女性支店長も何人か誕生していた。

合併したときのマネージャー職の女性は、東城銀行が五百名ほどいたが、西都銀行は五十名ほどだけであった。

女性の積極的な採用が東城銀行の男性・女性行員の性格にも影響していた。草食系といわれる東城でも、女性は男性よりも仕事や恋愛に積極的な肉食系が多かったのである。

銀行員同士の結婚をした先輩たちを竹森は五組ほど知っている。その五組とも女性が男性を獲物として捕らえたという印象を竹森は持っていた。

熊本支店長は営業能力がすぐれていたが、文章を書くことを苦手としていた。取引先と交渉した内容を案件として文章にするのに苦労していたのである。副支店長や融資課長に命じていたが、気に食わないと何回も書き直させていた。

竹森は交渉ごとが上手くなかったが、会議の議事録をまとめるなどが得意だった。そのことが支店長の目にとまった。熊本支店長は交渉内容を竹森に話して、稟議書を書けと命令するようになった。

支店長の話を聞いて、その日のうちに竹森は稟議書を作った。その後、交渉後に支店で話をするのが面倒なのか、熊本支店長が取引先に竹森を連れて行くようになった。

竹森は一言も発せず支店長の隣に座って、書記係をつとめている。その場で融資条件が決まっているので、支店にもどって、稟議書を清書するだけである。

支店長権限で決裁できるものは、それで稟議書はできあがる。支店長と竹森とがすでに印鑑を押した稟議書を、あとで副支店長、竹森の上司の半谷融資課長、取引先課長、取引先係の順番で印鑑を押すのである。

稟議書は本来であれば、取引先係から取引先課長、融資係、融資課長、副支店長、支店長の流れで印鑑を押す規則になっている。前任の守屋支店長のときはチェックが厳しかったので、平均でも十回は途中で戻され、書き直していた。

合併前に東城銀行ではすでに電子稟議は導入されていた。コンピュータ上であるから、規則の通りにしか決裁できない仕組みである。

しかし、東城の支店に西都出身の支店長がいるときは、電子稟議でなく、以前の紙の稟議書が認められていたのである。

金額が大きい案件などで本部の承認がいる稟議書も交渉の日に竹森が書いた。そのまま支店長が帰りがけに本部に寄って、担当審査役に説明する。説明するというよりも一方的に大声で話して、最後に問題ないだろと言質を取って帰るらしかった。

審査役よりは支店長の方が職位はいくつも上である。しかも、他の店舗の支店長が直に審査部に来ることは少ない。それだけで審査役は恐縮して、赤坂支店の案件を優先して見た。問題ない案件であれば、当日には決裁させていた。

前支店長と比べても他の銀行と比べても、とびぬけて結論を出すのが速くて、取引先からは信頼を得ていた。竹森自身も熊本支店長の仕事の速さには感心していた。

守屋前支店長は取引先と交渉しても必ず持ち帰って検討するとしていた。しかし、熊本支店長はすべてその場で判断し、先方へ伝えていた。

先方の申し込みを断る場合も、その場で告げていた。後になって本部が承認しないのでと断ったり、条件変更を持ち出すようなことは一度もなかった。

竹森は熊本支店長との関係が良いので、安心していた。もし、取引先課に竹森がいたなら、営業会議で公開処刑されるのは、竹森の立場であった。熊本支店長が来る前に、竹森は成績が悪くて、取引先課から融資課に係替えなったのである。

取引先係で落ちこぼれた竹森が、支店長にどなられず、二人で多く一緒に仕事をしていた。

竹森自身は支店長に特に気に入られているという自覚はなかった。支店長は竹森を評価して連れ回しているではないと思っていた。支店長がさげすむ「女の仕事」として、竹森を指名したにすぎないと考えていた。

取引先の決算書で相手の嘘を見ぬいて、竹森が指摘したことがあった。すると、支店長は「お前は黙ってろ」とどなって、竹森の顔を拳で殴った。竹森は鼻血を出したが、いつもの支店長を知っていたので、何もなかったかのように平然と対応していた。

二人の様子を見て、取引先の方が動転したようだった。それまで相手の有利に交渉が進んでいたが、形勢がかわり東西銀行の言い分が通る形でまとまった。

単なるICレコーダとして扱われていると竹森は悟っていた。そのことは仕事とわりきって気にしなかった。現実に人事評価としても高くないし、ボーナスでも取引先課の同期の半分であったが、不満はなかった。

稟議書について支店長の指示は、単純で明快であった。本部稟議のばあい業種によって担当の審査役も違うし、部長以上の決裁もあるが、相手にあわせて書き方を変えさえた。

「この審査役は判断材料がないと言って、どうせ読みもしない証拠資料を要求する。あらかじめ大量の資料を添付して、眼くらましておけ」

「部長案件は見た目だけきれいにしておけ。汚いと後まわしにされる。左右の余白が同じか定規で測るらしい」

「これは常務が見る。常務は誤字脱字と『てにをは』しか指摘しないから、それだけ気を付けろ」

たくさんの稟議書を書くことになったが、そのことは竹森の負担にはならなかった。

支店長は事前に準備しないで取引先を訪問しても、すぐに相手の実権者や問題点をつかみ取った。取引先との詳細な条件は竹森がつめることになるが、それも支店長が的確に指示をした。

「社長は二代目お坊ちゃんでアホだ。社長は適当におだてるだけで、実力者の専務と話をつめろ」

「この会社は社長派と会長派で派閥闘争している。そのうち会長はこけるから、放っておけ」

「銀行取引を経理一人にまかせっきりだ。経理係の五百

万の融資金利を0・5下げて、会社の五億円の融資金利を0・5上げろ」

実際に熊本支店長の読みは当たり、何度も竹森を感心させた。

「こうやって相手の金玉をにぎるんだ」

下品な表現ではあったが、取引先にせよ本部の審査役にせよ相手の急所をつかむ技術はすぐれていることを竹森も認めていた。

しかし、相手の弱みをついたり、公私混同をさせたりするような手法に竹森はこころよくは思わなかった。

赤坂支店の融資を急激にのばしている熊本支店長は、本部からも評価されていた。

竹森にとっては仕事そのものよりも人間関係に嫌気を感じることの方が多くなってきた。

赤坂支店の行員は独裁者の支店長に対して、直接に不満を言うことができない。その分の不満の先は竹森に向けられるようになった。

特に直接の上司になる半谷課長は嫌悪感を顔に出していた。

「お前ばかり将軍に気に入られやがって」

半谷課長から嫉妬のまじった非難を受けること多くなった。融資課長だけでなく取引先課の行員からも嫌味を言われるようになり、竹森はしだいに支店の中で孤立していった。

六

葬式をおえた竹森が独身寮にもどると、二人組の刑事が待っていた。事情聴取は入院中にされなかったが、退院後すぐに応じることになっていた。

刑事が病室まで事情聴取に訪れていた。しかし、「国家権力の横暴だ」「けが人の人権侵害だ」と雅子が強引に追い返したのであった。

指紋だけ取られたが、何も話すことなく刑事は帰っていった。竹森の両親も心配して病院に来ていたが、母親は雅子に感心していた。

「強い子ねえ。結婚したら相手は尻にしかれるわね」

まだ雅子のことを両親に伝えていなかったし、そのときは何度か一緒に食事をしただけの関係であった。病室には雅子の他にも女性行員がいたので、母親は竹森が雅子と親しくしていると気付かなかった。

独身寮の面談室をかりて、竹森は二人を案内した。竹森と同世代くらいの刑事が和加と、年配の刑事が及川と名乗り、警察手帳を見せた。警察手帳といわれるが身分証であり手帳でないことを竹森は初めて知った。

二人の刑事にきかれるままに、竹森は事件当時の情況について一通り説明した。しかし、事件の核心のところで記憶を失っており、説明できないもどかしさを感じていた。

「このメモに見覚えがありますか」

及川刑事がビニール袋に入ったメモ用紙を竹森に見せた。メモ用紙は無数のしわが有り、丸められた跡が見られた。

及川刑事は指でつるす様にして、竹森に見せた。

「いいえ。初めて見ます。支店長が書いたようですが」

用紙には殴り書きで文字と数字が書かれていた。数字の9をPのように書く独特のくせ字なので、支店長の筆跡であることが竹森にすぐにわかった。

「支店長のズボンのポケットに丸めて入っていました。これが何を意味するか分かりますか」

左上に『西都』、中央上に『持井』と書かれ、間に右むき矢印と95の数字と書かれていた。同じように『持井』から右上の『下山』までの矢印と85の数字がある。下山の下に『永田』と書かれ、『持井』と『下山』から矢印が伸びて、両方に5が付けられていた。

右下から『四葉』から中央下『持井』に左むき矢印で200とあり、『持井』から左下の『西都』に矢印で95とある。

「持井建設に対する東西銀行の融資とその返済のお金の流れを表しています。単位は百万円で、95は九千五百万円のことです」

持井建設の稟議書を取りに金庫室に入って、被害にあったのである。持井建設に融資した金額が九千五百万円であった。

熊本支店長の案件は九千万円から一億円以下の融資金額が多いので、九千五百万円というのは、いかにも支店長らしい、いびつな金額である。

熊本支店長は東西銀行と言わず、西都銀行と呼んでいた。合併して東西銀行になっているのに、東城側の支店長になっているのに、わざと言っていた。

まるで西都銀行が東城銀行を吸収したかのような印象を与えた。その言い方は西都流の仕事をしろ、との圧力と東城側の銀行員は感じていた。実際に要領のよい取引先係の中には方向転換する者もいた。

「矢印は金の流れを意味するのですね。実際の取引はメモの通りなのですか」

和加刑事がメモを指さして、質問した。

「いいえ。少し違います。このメモでは、下請け企業の下山工事に対する支払いが八千五百万円となっていますが、おかしいです。振込みを確認していますので、実際には九千五百万円です」

東西銀行では建設業に対する融資金の使いみちは厳しく調べていた。健全な資金として使われたかの確認する資料を必ずそえている。給与の支払いや経費の支払いなどの運転資金の名目では融資しなかった。

建設業者に対する資金の使いみちの確認が甘いことを財務省に指摘された。それを東西銀行が過剰に反応していたので、使いみちの確認の通達が出されていた。

今回の案件も下山工事に対する振込が九千五百万円であることを確認している。実際に振込の依頼書を竹森が預かって、赤坂支店で手続をした。稟議書には依頼書の写しがつづられており、依頼書には銀行が手続した結果も印字されていた。

「四葉不動産からは二億円で受注しています。200という数字は正しいと思います」

返済の原資として四葉不動産からの振込予定が二億円あることを発注書で確認している。

(もしメモが事実であれば、実際は九千五百万円がいつわりで、下山から持井に一千万円を戻したかもしれない)

下山工事は持井建設の子会社ではないが、かなり親しい下請けで持井建設と同じく破産を申し立てていた。下山工事は持井建設から頼まれれば、差額の振込くらいする関係である。

この案件は下請けへの支払い資金として融資したものである。持井建設が四葉不動産から二億円の受注をうけて、半分を下請けの下山工事に回す。下山工事は決算内容が悪く、銀行から借り入れできないので、持井建設が先払いしている。

業界大手の四葉不動産から入金があるので、とりっぱぐれのない確実な案件だ、と支店長から言われたが、竹森は疑問に思っていた。

四葉不動産から持井建設へは、工事の進捗の状況にしたがって四千万円、六千万円、一億円を支払うことになっている。その支払の条件にあわせて三回の分割で返済させた方がよいと竹森は意見を出した。

竹森の意見は支店長に当然のように却下され、四葉不動産の最終の支払日にまとめて返済となった。

持井建設は今回の受注とは別のプロジェクトで資金繰りが不足して、不渡りを出したのである。別のプロジェクトにも下山工事も関係していて、四葉不動産の仕事で先払したのでなく、実際にはこの別プロジェクトの未払金であった。

いくら下山工事は借り入れできないといえ、持井建設自体も先払いする余裕がないのに不自然であった。その点を追及してなかったことは、竹森も反省していた。

四葉不動産のプロジェクトも未完成なので、四葉不動産から破産した持井建設に振込される可能性は少ない。工事の進捗に応じた分が見込まれるかもしれないが、あまり期待できない。

持井建設に対する融資は担保が無いので、全額が貸倒となる。回収できるのは、破産の配当だけである。三ヶ月前に別の建設会社の破産で配当があったが、五パーセント弱であった。同じくらいの配当とすると、約九千万円の損失が発生することになる。

「永田も下山工事のような下請けか孫請けですか」

和加刑事が質問を続けた。

「金額が少ないですし、下山からも同額の矢印がありま す。資材を買った先か、運賃などの経費を払った会社か もしれません」

竹森は答えたが、そのような話は支店長から聞いてい なかった。持井建設の買掛金の相手に永田で始まる名前 の仕入先はなかったように思った。もっとも売掛金の先 は不良債権でないか注意して見るが、買掛金の先まで気 をつけて見ることはない。

融資した金額が九千五百万円なので、下山工事への支 払い九千五百万円を確認したら、それ以外の支払いの確 認をする必要はない。

それが実際に八千五百万円であると気付けば、竹森も 差額の支払い相手を調べていた。建設業者への融資金の 使いみちは竹森自身も注意している。

持井建設から下山工事への支払いが実際に八千五百万 円だったとしたら、わざわざ九千五百万円を振込みして 他の銀行で一千万円を戻していることになる。

そのような工作をしたなら、熊本支店長も知った上で のことに違いなかった。

実際の下請け金額に八千五百万円と、永田に経費を五 百万支払ったなら、その合計の九千万円で融資すれば、 何も問題はない。永田への振込を確認するだけで良いし、 小切手払いなら永田の領収書の写しでもあれば良い。

危ない工作までして九千五百万円にする理由が竹森に は分からなかった。

できるだけ一億円近い金額にしたいという支店長の気 持ちは納得できる。実際に、熊本支店長は取引先の必要 とする金額以を上回って貸し付ける。先日も一億円の借 入の申込に対して五億円を貸し付けたばかりである。

しかし、多く貸し付けるのは、建設業者と不動産業者 この二つ以外に限られている。建設業者への融資に対す る財務省の指摘や本部からの通達は支店長みずからが承 知していることである。

いつもルールを無視する熊本支店長でもこの規則をは みだすことはないと竹森は思った。支店長が資金の流れ を知った上で持井建設に指示していたとすると、見つか ったら地位を失ってしまう。そこまでの危険をおかす意 味が全くないように思えた。

竹森は考えるほど、案件の不自然さが増していった。

「持井建設は破産していますので、銀行から社長に確か めることもできません。破産管財人に問い合わせてみま しょうか」

竹森自身も知りたい事実であった。

「いいえ。特に調べる必要はありません。我々はメモの 内容よりもメモ自体が重要と考えています」

及川刑事が言った言葉の意味が竹森はわからなかった。

（取引内容よりも紙切れの方が大事なのか）

「最後にもう一度確認しますが、メモを見ていませんか」

和加刑事が同じ質問を繰り返した。

「そのメモは見たことがありません。犯人に殴られて、 事件前後の記憶をなくしていますが」

竹森はふたたび否定した。

「実は、あなたの指紋がメモから見つかりました。メモ 用紙の上に右手人差指と中指の指紋が、その裏側に親指 の指紋が残っていました。ちょうど私が持っているよう に触ったのです」

両刑事は病院から追い返されたが、竹森の指紋だけは 採って帰った。

指紋があるのなら、竹森が既にメモを見ていたことは 間違いなさそうであった。竹森が持っていたメモを支店 長が丸めてポケットに入れたことになる。しかも、メモ はもともと支店長の手帳から切り取ったものである。

和加刑事の言葉に竹森は反論しようとしたが、及川刑 事が手を振ってさえぎった。

「もし、記憶が戻られたら、教えて下さい」

竹森は否定したことで、自分が容疑者に見られたよう な気がした。

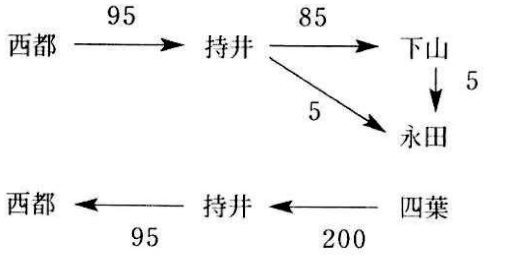
（自分に不都合な事実について記憶を失ったふりをして いる、と刑事は考えているのでないか）

刑事のそっけない対応で竹森はかえって不安になった。

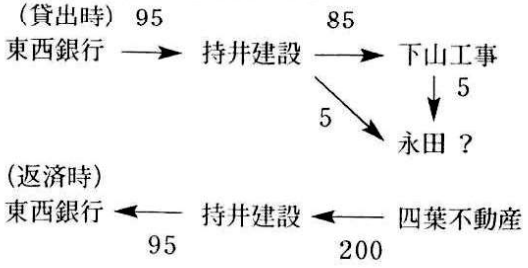
「また改めてお話をうかがいます」

二人の刑事は竹森のもとから立ち去った。

＜支店長メモ＞



＜竹森の補足＞ 単位：百万円



【お断り】連載の途中ですが、今回から漢字を一割ほど減らしています。原稿を作成したあと、その作業をいたしました。作業前「罵倒した」→後「ののしった」、「掏摸して」→「からかって」、「逸脱する」→「はみだす」などのほか表現をすべて変えました。

「草食系東城銀行肉食系西都銀行合併誕生東西銀行旧東城銀行赤坂支店地下一階金庫室格子扉閉錠耐火扉閉錠支店通用口閉錠二室三扉五重密室内旧西都銀行出身支店長殺人事件発生」等著者自身性格的文体上漢字表現連続油断発生傾向有りましたが、ひらがなをできるだけおおくするようにして、かきなおしいたしました。

ノンキャリで首が長持ちする方法

八重洲通・等々力編

中山喬央（たかひろ）

八重洲通支店

「おっしゃる通りでございます」

君は何時もこの言葉を使うね。とF支店長にいわれながら仕事がはじまった。昭和四六年十月着任したこの店は、昭和二六年九月に新設され、その後東京駅八重洲中央口真向かいに建設された大阪建物ビルに移転して、業績急上昇中の花形店舗であった。

行員数は、温厚なF支店長の許、五十有余人がおり、役席、男子行員、女子行員、技術行員、庶務行員何れもが各自の考えを持って、自分の職務についての役割を自覚している個性派集団で、皆がこの店に勤めていることを誇りに感じていた。このように行員全員がそれぞれの目標を定めているので、それがスムースに実現できるよう、本部とか顧客に対し、店の代表者として交渉をすることが次長の職務であると考え、F支店長がそれを認めてくださって勤務がスタートした。

このF支店長には赴任直後、大変御世話になったことがある。

それは自分の生涯の住居を定めるよう勧奨してくださったことである。

「当店の取引先には、鹿島建設関係会社の東亜不動産、東京建物、日生住宅という大変信用できる不動産・建築関係の業者があるから、若し首都圏に永住しようと考えているのだったら、直ぐに捜しなさい。借り入れが必要な場合には、何時でも判を押してあげますよ。」

それから間もなく人事部厚生課からも、住居用土地を斡旋する旨、通達がきた。家内と相談して、故郷がこちらは浜松、家内は関西なので湘南方面で希望を出したところ、直ぐに三件の紹介があり、二回目に訪問した茅ヶ崎の土地を、富士山が良く見えて、家内が気に入ったので購入した。

時期は列島改造論寸前の昭和四七年二月のことである。

話を本題に戻す。取引先は大企業が圧倒的なウエイトを占め、組織には組織で対抗しなければならなかった。

しかし大企業は何れも複数の取引銀行を持っており、先方の財務担当者は、当然の事ながら適正な金利で、自社の事業計画に基づく資金調達をするのが職務であるから、取引金融機関で自分と同格の交渉相手の中から、信頼できる人物を選び出し、絶えず変化する金融情勢を逸早くキャッチするように努めていた。その為、ニーズに応えうる優秀な行員と相談に乗ってくれる金融機関の体質を絶えず物色し、そのレベルを有している先かどうかを判断していた。それが結果として対応出来ている集団だったから、他行との戦いに打ち勝ち業績が向上していたのである。

その一方で、どんな優秀な行員であっても、事務行員なら、先方の交渉相手は担当課員が主で課長どまり、それが代理になると課長が主となり部長が出てくることもあるようになる。ところが次長が行くと、計数交渉の銀行側最高責任者として対応してくれ、先方は部長が主となり、時には役員まで顔を出す事が有る。しかしお互い不文律があって、役員同席の許では、会話はゴルフとか、其の他世間話のみで交渉数字は一切持ち出さない。また支店長が先方に出向いた場合も同様で、数字の交渉は一切して頂かず、後から次長が行って、計数の特別上積をお願いするといった次第である。

この折衝をどのように展開していくかということについては、京橋支店で支店長席・貸付係として同レベルの企業群を担当した経験があったことが、どれだけ役に立ったか分らない。

その一方で、この店でも女子行員には随分助けられた。また内部役席にもベテランの方がいて、事務体制も整っていたから、本部の検査成績も上位であった。

自分が皆の役に立てたことがあっただろうかと反省してみると、何と一番苦手の外国為替で、これは運がよかっただけであるが、偶然超優良企業の財務責任者が旧制中学の一年先輩で、随分可愛がっていただき、期末になり、外為の目標が未達になりそうだと外為担当役席から報告があった時はお願いして、優良案件を回してもらって目標を達成し、喜びを分かち合ったことがある。また出身高校同級生が、地銀の東京支店次長とか、外国為替担当役席で、ここからも乙銀から甲銀にまわすものをいただいたりした。

この店では一年十ヶ月勤務し、その間、三人の支店長にお仕えすることとなった。最初のF支店長に続き二番目のY支店長の時代、事務面でのトラブルが発生した。

これは報告を受けるや直ちにY支店長のお許しをいた

だき、担当役席にも話をして次長専管事項として任せていただいた。その結果先方との直接折衝で、本部の了解をいただいた範囲内の賠償金で話し合いがまとまった。しかしY支店長と担当役席も監督者責任を問われることとなり大変申し訳ないとY支店長にお詫びしたところ、この監督責任の注意状は勲章のようなものだよと笑っていらっしゃった。しかし直接担当した事務行員にはお咎めが無くてほっとし、監督者のみが責任を取るという形で終った。結果として、店の雰囲気が暗くなることはなかった。

その後Y支店長との会話の中で、内部事務を正確に処理することの大変さが良く話題にのぼるようになって行くのである。

その一方で店の旅行の際、係り別隠し芸大会をやろうという案が出され実行された。

宴会場は大変な盛り上がりを見せ、何時の間にか部屋の周りから廊下にいたるまで、仲居さんを始め、他の宴席の方々も集まってきた。なかでも「ちあきなおみ」の「喝采」を女装して歌ったN代理には度肝を抜かれた。同氏は退職後、猛勉強して大阪歴史博物館の学芸員となり展示品の説明をしたり、飛鳥の里を案内して万葉集の歌を紹介する文化人となり、『文芸会報』の常連の寄稿者としても、我々を何時も楽しませてくれている。

この店で特に思い出す事が一つある。それは赴任直後に高卒新入行員のI君から次の様に言われたことである。

「優秀な学卒が綺羅星の如くいて圧倒された。とても俺のような地方出身の高卒は芽の出ることはないと思っていたが、何とナンバー2の貴方が地方出身の高卒だということを知った。貴方がこれからどういう生き様をするかずっと見ていきますよ」

この言葉は効いた。その後、様々な事態に遭遇した時、良く思い出した。めろってしまう訳にはいかないのである。最近、八重洲通会があり、たまたま、その際は彼が出席せず、職場結婚した才色兼備の夫人が来ていたので、この事を話し、ご主人様によろしくと伝えた。

三番目にお仕えしたのは、やり手として評判の高かったT支店長である。

この時期も、皆が支店長の指示に従って、文字通りよく動き、業績は飛躍的向上を見せていたから本部よりの評価は一段と高まっていた。

このように八重洲通支店勤務の二十二ヶ月間は、行員全員が神輿の担ぎ手となって頑張ってくれたから、自分として特に企画立案したようなことは一つもない。それでも協和銀行を代表する三人の支店長が、有り難い事に連続して筆者を支店長に推薦して下さっていたのである。

その後、学歴・年齢・性別・職種を問わず、この店の仲間からは、様々な分野で活躍する人物が輩出した。

惜しくもF支店長は早逝されたが、Y支店長とT支店長の会は続いており、当時在籍した行員の大半が参加して、忌憚のない楽しい会話を交わすことの出来る集いとなっている。

等々力支店

高卒三十代の支店長として異例の抜擢を受け赴任したこの店の営業エリアは、大正中期に都市計画で開発された放射状街路を持つ高級住宅地として人口に膾炙されている田園調布を含む、尾山台・等々力・上野毛を中心とするものであった。

当時、都民税の一人平均納付額が、世田谷区は東京都平均の二倍であったが、営業エリアのそれは十倍に達し、銀行にとって極めて良質な個人顧客層が数多居住する地域であった。

店の預金構成比率に占める普通預金の割合は非常に高く、一口座当りの平均預金残高は、銀行平均の二倍という、収益力の極めて高い店であった。

当店は昭和三七年七月に新説開店された歴史の浅い店であったが、昭和三九年三月に現在地に新築移転し、先輩諸氏の努力により、すでに良質な顧客層を把握して、来店客数も増加、店勢が上昇傾向を辿っていた。

その一方で、当店のような銀行内でも稀な優良個人取引先を数多有する店舗は、個人口座に対する被仕向送金、所謂振込件数が多く、未だ口座番号を明記する銀行業界全体の取引慣行が確立する前であったから、日々それを間違いなく処理し、尚且つ優良顧客に対して、その入金結果を報告するという内部事務は負担が極めて重く、加えて来店客数も順調に増加してその対応にも忙殺されていたので、店内事務体制そのものが懸念事項となっていることは、偶然、本部検査が八重洲通支店の後、当店となったことがあり、検査役に命ぜられて同氏に提出する書類を当店まで持参した際にも漏れ承っていた。

そして赴任してから日ならずして、普通預金内部事務担当の女子行員から次のような報告を受けた。

「支店長さん。振込先の口座相違をしてしまったお客様からお叱りを受けました。そのお客様は、本件を新聞沙汰にするといってお帰りになりました。」

というものであった。

そのお得意様の氏名を見て驚いた。何と金融機関向けの業界紙で何時もお見かけする、銀行オンラインシステムの権威者として、鳴り響いている方である。即、手土産を持ってご自宅にお詫びに訪問した。

その際、同氏から聞いた都銀各行内部事務処理の現状

というのは空恐ろしいものであった。

先ず当店が振込先を間違えた原因は、珍しい苗字なのに、同姓の弁護士が近くにお住まいですね。電話帳で調べました。この方と間違えたのでしょうと正確に指摘され、更に他行の慄然とするコンピューター事務ミスの内状を教えてもらったのである。どうして普通起こりえないミスが、この方に限って発生しているのであろうかとさえ思いながら、以後お気付きの事がございましたら、何なりと筆者に直接お叱りくださいといって帰店した。

勿論本件は直ちに本部にも連絡したが、それからしばらくして新聞社からも記事にする裏付けの問い合わせがあり、事務に不慣れな新人が起こしたミスでお客様にご迷惑をおかけした事を深く反省し、これを教訓として以後再発しないよう尽力しております。という支店長としての回答をしたら、新聞記事には銀行名が記載されなかった。

この時考えたことに、代理の担当を変更する人事がある。外部を担当している人物は、事務部門の管理者としても極めて優れた能力を持っているように感じられたからである。しかし将来更に上級の管理職に進んでもらいたい人物に内部役席になってもらうということは、新任支店長は、彼と合わず左遷人事をしたと思われるのではないかと考え実行しなかった。

そこで指示したことは来店客の多い五十日（ごとうび）は支店長席の外訪活動を極力減らして窓口に出てもらい内部事務を支援してもらう事であった。

まだまだ銀行内で営業と事務は車の両輪であるといわれながらも、業績推進面での発言力が強く、それは都銀内でのシェア推移がマスコミでもそのまま評価されるという時代背景に因るものであったからである。

将来栄進してもらう為には、外部か貸付を担当してもらって一定の実績を挙げてもらう事が必要であった。事務態勢強化を図る為、一般営業店に事務面を担当する次長が置かれるようになったのは、それから暫くたった後のことである。

この店の在任期間は一年二ヶ月と短期間であったが、大変良い勉強をさせてもらった。

先ずお金と人間の関係についてである。人間は自分の能力、あるいは実力の範囲内の金でないと、金に自分の人生が振り回されてしまう。能力これは家族全体を含めてのことであるが、これが不足していると、金を持つということが不幸を招く事になるのである。

何を高卒無一文の奴が生意気な事を言うと御叱りを受けるかもしれないが、銀行員には、お得意様の家庭内の実情までよく分る。幾多の事例を知った上での考えである。

このお金と家族の幸せとの関係について現在このように考えている。

先ず絶対お金に左右されない方々である。

昔から田園調布から上野毛にかけての多摩川沿いの超高級住宅地にお住まいのファミリーである。某財閥系企業のオーナー筋の家庭では、奥様は銀行のサービス品である手拭で前掛けをご自分でお作りになり、超名門女子学園に在学中の姉妹のうち、妹さんのセーラー服は何時もお姉さんのお下がりで、ほころびは母が繕ってアイロンがけしたもので登校させていた。

しかし取引内容は凄いの一言に尽きるもので、それも確実に増加傾向を示す、本当に超優良顧客であった。

またこのようなクラスのお客様は、玄関にさりげなく大家の油絵・絵画が掲げられていたり、居間に案内されると文化功労章受章者級の人物による彫刻がおかれていたりするから、この店では支店長室の書棚のなかには『美術年鑑』があり、この方面の勉強もしなければならなかった。また日展審査員の彫刻家とか、或る分野で日本を代表する画家の親密お取引先もあった。

そして、このクラスのご自宅を訪問してお話させてもらう際役立ったのは、かって早稲田支店在任当時、小日向台町のお屋敷の奥様から厚遇を受けた体験であった。

次の有力個人取引先層は農家である。

農地改革で旧地主層は、貸付農地は一町歩を残して手放さざるを得なかったが、山林と地主保有地はそのまま残り、この土地の価格が、店の周辺で坪当たり七十万、八号環状線に面したところでは二〇〇万円に高騰していたのである。

しかし一方では様々な弊害を土地所有者もたらしていた。八号環状線に面しゴルフ練習場とかテニス練習場を経営している名門大学を卒業した某大地主と親しくなり、良く訪問したが、しみじみと次の様に言われたことがある。

「支店長さん。貴方の一生は、無からのスタートだから、プラスの人生ですよ。私の一生は親爺から受継いだものを、いかにして子供や孫に伝えるかということのマイナスを減らす戦いなんですよ。」と

事実当時は三代まともに相続すると、財産は全部税金で徴収され零になる計算であった。

その対策として、如何に合法的に節税できるかと言う事の相談にのり、必要に応じて事業についての融資を実行し、金利を経費として落とす。相続の際、銀行借り入れはその全額が相続財産から差引かれる一方で、土地の相続価格は路線価格で計算されるから、両者の間にはかなり差額が生じ相続税が減る利点がある。また所有不動産を手放した際はその代金を予入していただけるという、銀行にとって債権保全に全く心配の無い、大口取引先だったのである。

店舗周辺の地主さん達が毎月八日に集まる八日会とい

う夜の会合もあった。これは地元神社の祭礼とか様々な伝統的行事の役割分担を定めるという機能を持っていたが、その一方でお互いの生き様を反省しながら人生をまっとうしていこうと言う事についても、リーダーの方は意を配っておられた。

この会にはベテランの次長と担当代理、支店長席と一緒に参加し、全員にお酌をしてまわって、とにかく覚えてもらうように努めた。また支店長になると、出かけていった全ての会合で即席のスピーチを頼まれる場合があるので、指名されたら、何となく印象に残る話をしなければならない。様々なことはあったが、皆が良くフォローしてくれた御陰で、一番こちらが欲しい情報である土地売却のニュースが一段と的確に入ってくるようになっていった。

東京都に土地を売却した資金〇億円が富士銀行の自己宛小切手で支払われたものを全額獲得したことがある。これは担当支店長席の情報入手が早く、店を担当していたH常務にも、お客様の自宅まで行って頂いて交渉したのが決め手となり全額予入が実現し、喜んでいただいた。そしてこの預金が入金された際、個人預金の年間増加額が全店トップになったのである。

このように旧地主層も、金銭に溺れないように、お互いに戒めあっていたので、通夜の席で、物凄い兄弟喧嘩があったというような風聞は良く耳にしたが、大事に至る例は少なかったように思われる。

一番問題があったのが旧小作人階層である。

農地解放により約一町歩、三千坪の農地がただ同然で自分のものとなり、それが何十億という資産になったのだから夢のような話である。これで舞い上がらなければたいしたものであるが、弱い家族とみれば、甘言をもって近づき、資産を食いつぶそうとする、やからがまとわりつくものである。これについては、お客様自身の目が覚めてくれるのを待つのみであった。

その一方で企業筋のお取引先にも優良先があった。筆頭は大手光学器メーカーの下請けで確固たる技術力を有していた。

また店周にこんな面白い所がありますよといって、支店長席につれて行ってもらったT電機は、取引金融機関が関西系都銀の堀留支店で、最近本社を店の周辺に移してきた先であった。継続して納税している企業であり、社長の出身地新潟に工場を持ち、電機製品の部品を香港に輸出していた。会社の雰囲気から社長の厳しい経営方針が徹底していると感じたので、店周でもあり取引を開始したい先だと考え、その融資枠捻出で思いついたのが、多摩川の向こう岸にあった二部上場企業の割引枠圧縮であった。これは幸いにも先方から、生保よりの借り入れ保証をして欲しいとの申し入れがあり、その全額につき工場財団に抵当権設定のうえ実行するのと引き換えに応

じてもらった。

後日談である。本部転勤後、同社が突如会社更生法を申請した際、手形割引が皆無で融手を掴ませられることがなくて、審査部から誉められたとの担当代理より報告があった。これは怪我の功名である。

一方T電機との取引はその後順調に拡大していると風聞していたが、昭和五四年六月に当店は外国為替業務取り扱い店舗となっている。

次は事務トラブル発生と事後処理について説明する。

それは赴任後、半年位経過した冬の日の事だった。当座預金取引先のM電子の決済手形が交換で提示されたが残高が不足しているという報告があった。

実情を問いただした所、先方の経理責任者には連絡がついたが、出張中の社長には知らせが届いていないようだという事である。その手形を交換提示してきた先方金融機関の所在地を確認したところ、川向こう、すなわち多摩川の対岸にある金融機関である。

不渡り返還には二つの方法がある。一つは普通のやり方であるが、交換所系由の返還である。今一つは非常手段であるが、翌朝、定められた時間までに手形持出金融機関に店頭提示をして、不渡手形を返還するという方法である。

後者の方が、決済店に手形の有る時間が半日違うから、望みがある場合には非常手段として支店長の権限で出来る。

しかしこの時脳裏をよぎったのは、明日の朝、天気予報通り大雪になったら、多摩川の橋を渡るのにどのくらい時間がかかるのであろうか。またその任に当たってもらうのは、最も信頼する外部役席しかいないと思ったが、彼にも大変な負担を強いる事になると思い、通常の不渡り返還処理である、交換所経由の方法で取扱うよう、預金役席に指示した。

ところが交換所に持ち出す寸前になって、隣のD銀行K支店から不足金の融資に応じ、保証小切手で入金するから不渡り処分にしないでくれと言う連絡が入り、これで万事決着したとその時は思った。

所が翌々日、お得意様から帰った筆者に対し、ベテラン次長が「大事が発生いたしました」といって報告してくれた。事の次第を聞いてみると保証小切手の入金があり、預金役席は交換所に不渡りとして持ち出すよう袋に入れておいた手形は取り出したが、うっかりして添付書類の回収を忘れ、その為、第一回不渡り発生欄に、会社名と金融機関名が掲載されてしまったのである。

即、本部にも事情を報告し、交換所には金融機関取扱錯誤として本件の取り消しを依頼する文書を提出するのであるが、一旦公になった以上、これで事が収まるとは、とても思えなかった。次長のいう通り、まさに大事が発

生した、のである。

この時脳裏をよぎった事がある。

貸付係をしていた或る店で、本検査の真最中に、担当代理から週末の深夜、担保有価証券を知らないかと突然聞かれた事があった。その保管庫の鍵は担当代理を含む四人だけが自由に使用できたのである。検査も進行して、来週月曜日には担保物件の明細付き合せが行なわれるので、それに備えて準備しようとしたところ見当たらないというものであった。その事態は直ぐに把握できた。自分の担当外であったとしても、これは連帯責任問題である。

その時担当代理と担当者からの提案は次のようなものであった。先方企業の経理担当者と連絡をとった。念の為、密かに翌日会社に休日出勤して貰い、金庫を開けて確認して貰う。その時見つからなかったら即、支店長の自宅を訪問し報告しよう。だから明日もネクタイを締めて出勤してもらいたいという事である。家内には検査対策の休日出勤だと話をして、定刻に四人が集まり、担当代理と担当者が先方に訪問した。

現物有価証券は、先方の金庫内で見つかり、一件は落着した。勿論この件については、部外者には一切洩れていない。この担当者はその後、銀行員の真価が問われるMOF検において、名をとどろかすような人材に成長するのである。またそのような功績があったという話を聞いた時、我が事のように嬉しかった。

話を戻す。

本件が発生した際、筆者が最も意を配ったのは、どんな優秀な人物でも魔が指すことがあり、些細な事件で一人の人材を潰すことがあってはならないとするものであった。

話しは変るがこの店での銀行協会のお付き合いは、S田園調布、F自由ヶ丘、T九品仏、SA尾山台、D上野毛、M瀬田等の各店であった。

そのF自由ヶ丘の支店長から口惜しがられたことがある。

ある地元優良企業は、メインがF自由ヶ丘、サブが当店であった。ところが社長の後継者が、当店の普通預金の受付にいた女子行員を見初めてプロポーズし結婚したのである。主賓として招かれた両者は席が隣り合わせとなり、その時に先方が、取引銀行のランクが将来間違いなく入れ替わると思ったのである。見初められた女子行員は其の位品がよくしっかりした花形行員だった。

また彼女と共に並んで定期預金の受付をしていた女子行員は、行内の会合で見初められ、支店長夫人となる。彼女の結婚式にも本部に異動した後であったがよばれ、喜んで出席した。

協会で特に親しくさせてもらったのは、年齢が相似

何れも初めての支店長勤務をしている両隣のD上野毛とSA尾山台の支店長で、紳士的なお付き合いをさせていただいた。

M電子からは、事件発生後〇百万の融資申込みを受けた。東芝に製品を納入するので、その原材料調達資金の面倒をみてもらいたいという名目であった。そこで当行九州地区某支店長に全ての事情を話し、該地にある東芝工場を訪問の上、部品購入部門責任者に面談しての実情調査を依頼した。

同支店長も大変な事になりましたね、と事態を正確に把握され、即先方に訪問して裏付けをとってくれた。東芝としては、今後も製品納入先として付き合って行きたい先だとのことであった。

そこで今度は本部を訪問、最近支店担当になった某役員を訪ね、支店長専決の範囲内であるが、融資を実行したいと話を通した。

融資を実行し、東芝よりの送金が当店に振り込まれるようになり、事態は好転したかに見えた。

しかし余程資金繰りに窮していたのであろう。今度は担保を差し入れするから〇千万円の設備資金の授信をして欲しいとの申し出があった。しかしその担保物件を調査したところ、全く不適格のものであったから、担当代理、次長にも了解をとって断った。というのはトラブル発生ということになれば、当然この場合、支店長に一番重い罰則が課せられるが、彼等も監督責任・当事者責任を問われるのは必須と考えたからである。

この事件と相呼応するかのように、受け付けが変ったばかりの普通預金において事故が発生する。

それは後で考えてみれば仕組まれたものであった。というのは不渡り処理事務ミスというのは、それだけで支店長人事を揺るがす重大なものであり、更に事務ミスで本部から譴責を受けるようなことがあれば、減点主義の銀行人事政策の下では支店長はとてもその座を保つことは出来ないとされており、それを熟知していた裏社会の人物が、150,000円程度の金額なら、支店長は本部に報告せずに内々ポケットマネーで処理すると考えていたのではないかというものである。

当該入金伝票に書かれた筆跡、通常より一日決済確認がずれ込む地区の小切手入金、そして通常小切手の決済時間後、間髪を入れず銀行のオンラインシステムにより全額引き出した手口、最後は不渡り小切手が返還されてきた時来店した先方の一言である。

「支店長、これを表沙汰になさったのですか」

「貴方何を言うのですか。当り前ですよ。銀行は貴方に対して、法的に即返還する様訴えることが出来ますよ。直ちに全額この場で返していただきたい」と言った。

その気迫に負けてか先方は一万円だけ支払いをし、後

は分割払いにさせていただきたいと直ぐに分割払いの書類を作成差し出したのである。ところが約束の日時に訪問しても言を左右にして支払おうとしない。

最後には別の所に行って交渉して欲しいという。そちらに訪問したら、これはもう眼つきの違う裏社会集団である。とても残る十四万円の回収は困難であると考え報告、損失計上して責任をとった。

これから二年ぐらい経過した頃であったろうか、同様手口にひっかかり、内々の処理をした某行支店長が脅迫され、便宜扱いを強要されて多額の損失を銀行が計上せざるを得なくなったとの新聞記事がでた。

この時、彼等の真の狙いが良く理解できた。

しかし、この重なる不祥事の責任は銀行として誰かに取らせなければならない。それを支店長の責任として処理することは、外部に対して最も適切なものである。

審査担当役員と面談した際、筆者が事務部門の人材評価問題などを発言し、これは経営批判だ、とんでも無い奴だということで激怒され、二階級特落ちという事態を招いた。

しかしM電子への融資は全額返済され、筆者の判断が間違っていなかったことが立証できた。この時逸速く担当部門の責任者から連絡があった。

先方が貴方には、大変申し訳ないことをしたと言っていました。トラブルがこんな形で解決することは本当に珍しいことです。とても喜んでいます。というものだった。

これは色々な意味で嬉しい連絡だった。

先ずM電子の経営が軌道に乗った事が感じられた。またかって銀行協会でお付き合いしたD銀行K支店長の面影が蘇った。

K支店長、貴方が急場を救う緊急融資を決断して倒産寸前の当社を救ったから、私も首をかけて専決融資を採択したのですよ。トラブルが全て解消されるような形で事件が解決できたのは、貴方がM電子の将来性を見極め設備資金等を授信をする際、社長を諭されたからではないでしょうか。いずれにしても良い企業を育て上げる事は銀行支店長冥利につきますね。

この人事のあと、知らない複数の方々からも、実に的確な内部情報連絡が深夜あるようになり、様々な動きが手にとるように分るようになっていった。

またこれにより、次の年からの昇給はワンランク回復することとなる。

人事異動のさい、本部に呼び出され他の異動のあった支店長と共に、I頭取から直接辞令を交付された。

その際I頭取は、筆者が辞令を受け取る為部屋に入るやいなや、何故この男を左遷させるのか不本意である、と二度にわたり同席されたS取締役人事部長に向って発言された。

思い当たる節は、岐阜でお供をした時の数々の出来事のみである。

この事は筆者自身にとっては大変な励ましとなったが、その一方で、本件のような重大事故発生時には、公器としての銀行の社会的立場を考えれば、当然甘受すべき人事だと考えながらI頭取の発言を嬉しく聞いたのである。

ここで等々力支店行員の後日談を述べる。

赴任当時三十数名の在籍行員で、まさに育ち盛りの若手行員が大半を占めていた。冒頭に述べた如く、風通しは極めてよく、全行員が何事でも良く報告をしてくれた。そのため、不渡り事故発生後の店内の空気も暗くならず、かえって業績は向上した。

来店客数は一段と増加し、リーダー的女子行員の結婚退職もあったが、その穴を皆が協力して支えてくれた。

本来なら自分が皆を引き上げなければならないのであるが、それが出来ない事は良く分っていたので、後任支店長には、この件の責任は全て自分でとるから、頑張っている行員の評価を下げないで欲しいと引継ぎをした。

それから四年後ベテラン次長は本部の課長となり、更に四年後には首都圏の支店長に栄進した。

外部役席は十二年後、漸く都内有力店舗の事務次長となり、不渡り事務を担当した預金代理も、降格されることはなく、十二年後に本人の人柄に最もふさわしい仕事と考えられる人事部総務課の主任調査役となった。

またこの当時の新入行員からは支店長も出ている。

すべては各自の努力の結果である。

更に在任中も本部に異動した後も、庶務行員のお嬢さんの結婚式を含めて、数多の行員の結婚式にお招きをいただいた。これには若手の行員からアフターフアイブの付き合いをして欲しいと頼まれ、酔いつぶれて独身寮に担ぎ込まれたようなことがあったからかもしれない。

この二階級特落ちという人事は題名「ノンキャリで首が長持ちする方法」実現にとって、最高のプラス要因となった。何故ならばこの人事によって、筆者の存在が行内、特に支店長全員に知れわたり、これが業務渉外部、渉外役として支店長の理解と協力を得ながら任務を遂行して行く上での、計り知れない力となったのである。

正に「禍福は糾える縄の如し」である。

追伸 ―サウダージ― より その六

松下壽男

あなたの立場

二つの文化のはざまにも
あなたの立場はきちんと在って
異国と接する水際に
いとも軽やかに立っていた

私には立場も泳ぐ力もありゃしない
交流の波間で揉まれるままに
まぶしいあなたに助けを求めた
頼れるものはあなただけ

あなたの机に積まれた辞書は頑丈そうな防波堤
私の机にさりげなく置かれた資料は
海原で投げかけられたブイのよう

でも、あなたがこだわりだした立場とは
人生の荒波から自分自身を守るための
ちっぽけな砦だったのかもしれません

日本近代文学点描 その七

松下壽男

中条百合子（後の宮本百合子）の自叙伝小説「伸子」は、アメリカ合衆国を舞台にして始まります。第一次世界大戦と大恐慌とに挟まれたバブル景気の絶頂時代、（現代産業）装飾美術様式＝アール・デコの摩天楼が雨後の筍のように建設されていたニューヨーク。しかし多感な文学青年等は、喪失感や閉塞感にさいなまれ、ロスト・ジェネレーションと呼ばれる世代を形成していたのです。彼等や大衆が好んだ流行音楽が、ブルース・フィーリング（感傷）を孕んだ黒人音楽だったことから、ジャズ・エイジとも呼ばれているその時代は、丁度日本の大正デモクラシーの時代と重なります。

ピエト・モンドリアンが少し遅れて描いた抽象画「ブロードウェイ・ブギウギ」に象徴されるその時代を、若い伸子すなわち作者の百合子は、コンテンポラリーなコスモポリタンとして瑞々しく生きています。その正真のインターナショナルな主人公の姿は、夏目漱石や森鴎外とは時代を画した、日本の文化の新しい姿を表現してい

異国ごろとロスト・ジェネレーション

♡伸子等は、十月近くまで湖畔に居た。
都會へ歸ると、彼等は、自分達の結婚を知人の間に通知した。彼女にとつて記憶すべき其日は、秋の細雨が市街を濡らして居た。彼等は晩餐に、ブロウドウエイの或料理店へ行つた。彼等は言葉寡に、食卓の上の飾電燈の輝を見守つて居た。すると、伸子のすぐ背後の仕切（ボックス）りの向こう側で、無遠慮な男の日本語がはつきり聞こえた。
「おい、佐々伸子が結婚したつてさ」
別の嗄れた聲が應えた。
「へえ、……一體どんな奴だい」
「狷くしやんさ。―佃とか何とか云ふ亜米利加ごろとくつついたのさ！」
―伸子は、高く酒を啜る音を聞いた。

ます。しかも、その文化の担い手は、女性なのです。

私は、そのような新しい文学すなわち文化の自覚は、女性だからこそできたのだと考えます。それは、自らの才能を国策や国益に生かす必要がなかったからであり、それゆえに、恋愛と結婚そして男女の自立という人間の普遍的なテーマを、アメリカから日本へというグローバルな舞台で描き上げることができたのでしょう。

国策や国益から自由でインターナショナルな人道主義者中條百合子は、帰国後日本で自立ができない夫と離婚し、その顛末を「伸子」に著したあと、友人の湯浅芳子とソヴィエトへと旅立ちます。そして後に再婚する宮本顕治らのプロレタリア文学運動に加わることになるのです。

とはいえ、私は、開国後半世紀を経て日本文学上に自覚された「亜米利加ごろ」（一般化して「異国ごろ」）という文化現象に、一層興味をそそられるのです。

自伝的小説「伸子」は、アメリカ合衆国から日本に舞台を移すにつれて主人公・伸子と夫・佃の確執が表面化していきます。そして妻の口からお互いの自立を提議するまでになるのです。しかもそれは、二十五才の若妻から四十才の夫への提議なのです。彼は、私立大学に、恐らく非常勤講師として就職をしましたが、未だに大学で研究を続ける学生の身でもありました。一方、伸子は、渡米前の十八才で大学を中退し、作家生活に入っていたのでした。

友人には北満州地方の強い季節風による植物の奇形について熱心に研究をしている人物もいますが、佃は、古代ペルシャの死語を専攻していて、目的の一語句を二、四日かけて見つけたり見つけられなかったりという無気力な研究ぶりでした。国策とも国益ともおよそ無関係な研究。恐らく収入面でも、妻の方がより自立が可能だったことでしょう。彼は、彼女をベイビーと呼んで、いかにも献身的な愛情を示そうとします。しかし自らは研究にも学校の仕事にも身を入れようとはしないのです。しかも伸子が「學校は研究の云ひわけ、研究は學校の云ひわけ」となじるとおり言い訳ばかりして、結果的にはわがままな楽な道を選ぶのです。そして不都合の全ては彼女に対する献身的な愛の犠牲だと語るのでした。

百合子の結婚生活は、日本の日常の中で、異国に居てはわからない夫の偽善に一つ一つ気付いていく七年間でした。その叙述は、相互依存を求めない新しい女性の生き方を可能にした時代文化の自覚であり文学の成立でした。

と同時に私は、「異国ごろ」という、新しく普遍的な文化現象を体現した人物像を見事に表現し得た点にも注目をするのです。

佃のモデルは、日本には居られない事情があって渡米した人物でした。自文化も目標文化も見失った、志とは無縁な根無し草・・。彼もまたグローバル文明の産み落としたロスト・ジェネレーションなのでした。

編集後記

今年は竜の年である。人類が大蛇に角・翼・猛獣や猛鳥の頭を組み合わせて創造した竜は、水中・地中・天空に住み四足が普通であるが無足や多足もあり、頭も一つのものと多数のものとがある。

西洋ではドラゴンといわれ、これはギリシャ語のドラコーンに由来したもので、ギリシャではゴルゴン・ヒドラ・キマイラなどの怪物とされ、鋭い目で財宝を守るが、神や英雄に殺される。新約聖書では死と罪の象徴となり、ヨハネ黙示録の赤い竜は、神と支配権を争って殺される。竜退治は古代英雄・中世騎士最高の業績で、ペルセウス・マードック・ヘラクレス・アポロン・ジークフリート・聖ミカエル・聖ジョージ・ベオウルフ・アーサー王・トリスタン等が名を連ねている。竜の紋章は敵を畏怖させるため旗・盾・軍艦などに用いられた。

一方東洋では、蛇類崇拝の思想や信仰に起源し、梵語はナーガで、インドの竜王思想がヒンズー教・仏教と共に広く伝わり、東南アジアにも竜神伝説が各種残る。中国では戦国時代に始まり漢代になって諸々の工芸品に多く描かれるようになった四神（青竜・朱雀・白虎・玄武）によって人口に膾炙されるようになり、四霊の一つでもあるが、鱗虫の長として尊敬され、特に天子・君主の象徴とされている。これに対し日本では「たつ」（神出現の意）ともいい竜宮にいる海神の一族、雨乞いの水神として尊崇した。正に竜は多様な文化が存在する人類社会を象徴する存在である。

田寺怜葦さんからは「暗雲を昇り天珠をとる」という、混沌とした世界情勢の中でも救世主となりうる竜の表紙絵と共に、特別寄稿として旅情豊かな香を漂わせる「信濃旅日記」が寄せられた。北信濃御膳・うずら家さんの天ざる等の記事お楽しみください。

（T・N）

まんじ第123号

平成24年2月1日発行（非売）

発行人　三戸岡　道　夫（みとおか　みちお）
編集長　中　山　喬　央（なかやま　たかひろ）
事務局長　鍋　屋　次　郎（なべや　じろう）

（事務局）　〒223-0056　横浜市港北区新吉田東五丁目76-35　太田善朗方
TEL・FAX 045（544）5947
（郵便振替口座）　No.00270-0-64592　加入者名　ま　ん　じ
（印刷製本）　日東印刷株式会社
〒142-0054　東京都品川区西中延2-15-16

表紙の絵について
「暗雲を昇り天珠をとる」　　田寺怜葦画

まんじ

No.124

2012.5.1

まんじ第百二十四号　目次

徳川慶喜断章……三戸岡道夫……4
流人―深堀武士の討入―……太田精一……15
自由貿易協定の男・金宗壎……新井宏……27
関東管領始末記⑥　陽はまた昇る……千坂精一……37
「安城市」を発展させた「明治用水」の建設を先駆けた人たち……忠内正之……47
短歌　行雲流水（三十四）……石黒修身……51
歌舞伎の中の和歌―余聞……石黒修身……54
詠み継がれる短歌　韓国の歌人―母から娘へ……石黒修身……57
短歌　四十首……曽根竣作……60
漢詩　潮騒錄（六八）《漢詩の流れ57》……鯨游海……65
アフリカの彫刻に魅せられて……勝山道子……69
草取り……横山正義……79
詩　涅槃図　定年　指……石野茂子……84
日本三大七不思議……石野茂子……87

目耕録（その七）……山本鎭雄……93
二八に帰るすべもなし（八）……伊治哲……99
イドと超自我の谷間で（四）―ある女の数奇な生涯―……鍋屋次郎……106
歴史的景観の保存について（Ⅱ）……漆原直子……117
（司馬雑感二十九）湖西のみちから叡山へ……山田嘉久……122
性と化粧（四）……鈴木守……130
サルの歴史……鈴木守……136
陰翳の美学（その九）……外山知……139
口紅（その六）……池莉原作　山本勉訳……158
透明な時間（八）……宅見勝弘……176
ノンキャリで首が長持ちする方法　終末編……中山喬央……181
追伸　―サウダージーより―　その七……松下壽男……193
日本近代文学点描　その八……松下壽男……194
編集後記……編集子……197
表紙……田寺怜葦

徳川慶喜断章
（版籍奉還を中心にして）

三戸岡道夫

（一）

歴史に書かれた徳川慶喜の一生を簡単に記すと、水戸家から一橋家へ養子に入り、将軍後見役を勤めた後、十五代徳川幕府将軍となる。大政を奉還すると、ひたすら謹慎し、静岡において趣味三昧の生活を三十年間も送った、というのがその大要である。

しかし、これは慶喜の表面上の動きであって、実は水面下で日本の国運を牛耳る活動をつづけ、とくに静岡に移ってからの慶喜は、

（静岡から、新しい明治政府をリードし、コントロールした）

と、前回の「徳川慶喜の実像」では記したが、それでは静岡でどのような活動をしたのか、その内容の一部に触れてみたい。

慶喜が静岡へ移ったのは、慶応四年（一八六八）七月であった。江戸城の無血開城は慶応四年三月であったから、それからわずか四ヵ月後のことである。

したがって明治新政府といっても、その時にはまだ殆んど形が出来ていない時であった。明治新政府の指示によって慶喜があちこち移動したというよりも、慶喜の動きに合せて新政府が出来ていった、という方がいいのである。（駄足ながらつけ加えると、江戸城の無血開城といっても、官軍（薩長軍）が強く、幕軍が弱かったから無血開城になったのではなく、薩長軍が江戸へ入る前に、慶喜が自分の意思で江戸城から出て上野寛永寺に入ったので、無血開城となったのである）。

したがって明治新政府の内容は、慶喜の静岡滞在に並行して出来上っていった、といっていいのである。これを裏から見れば、慶喜のリード、サポートによって明治新政府は実現していったわけであり、もし慶喜の静岡からのコントロールがなければ、新政府は形だけは出来ても、実効は挙らず、したがって明治維新は成功しなかったと思われる。

すなわち慶喜一人の決断によって、あっという間に大政奉還されたのであるから、その時点において、幕府に代わる新しい政治体制が出来ているわけではなかったが、新政府の中心メンバーである西郷隆盛、大久保利通、木戸孝允、岩倉具視たちは、総力をあげて種々の政策を行った。その主要なものを挙げてみると、次のようなものである。

版籍奉還
廃藩置県
五ヵ条の御誓文
憲法制定
富国強兵（産業の発展と軍事改革）
教育の普及（教育勅語、学校の拡大）
……

その他数えればきりがないが、この中で最も重大で、基本で、かつ一番困難だったのは、版籍奉還であった。

版籍奉還とは、徳川幕府でいえば慶喜の大政奉還に当るものであり、各藩の藩主が、自分の藩の政権を奉還することである。

幕末の日本には、全国に約三百の藩があった。しかしそれらの藩がそう簡単に、政権を返還したであろうか。とても、そうとは思えない。

各藩の大名は、徳川幕府二百五十年の間、ずっと自分の領地を支配しつづけてきたのである。大藩もあれば、小藩もあるが、藩主はその藩のトップであり、最高権力者である。そして家臣や領民は、お家大事と、藩主を守りつづけている。大名によっては、徳川時代だけでなく、足利幕府時代や、鎌倉幕府時代からの家柄もある。

時代が変わり、徳川家が大政奉還したぐらいのことで、その伝統ある政権を返還する必要など、まったくないわけである。とりわけ外様大名などは、幕府設立当初から幕府への対立意識が根底にあるのであるから、幕府が大政奉還したぐらいで、「自分の藩も奉還を」などと、絶対思う筈がないのである。慶喜が大政奉還したのなら、逆に、

（その大政を自分に下賜されたい）

などと考えた大名も、いたかもれない。薩摩の島津久光などは、内心、そんな野望を持っていたのではなかろうか。

では幕末時点で、各地にどのような大名が、どのような石高でいたのか、ちょっと眺めてみよう。石高の高い順に並べてみる。

（藩名）	（城名）	（石高（万石））	（藩主名）
加賀藩	金沢城	一〇二・五	前田慶寧
薩摩藩	鹿児島城	七二・八	島津忠義
仙台藩	仙台城	六二・〇	伊達慶邦

尾張藩　名古屋城　六一・九
紀州藩　和歌山城　五五・五
熊本藩　熊本城　五四・〇
福岡藩　福岡城　四七・三
広島藩　広島城　四二・七
長州藩　萩　城　三六・九
肥前藩　佐賀城　三五・七
水戸藩　水戸城　三五・〇
津　藩　伊勢津城　三二・四
越前藩　福井城　三二・〇
鳥取藩　鳥取城　三二・〇
岡山藩　岡山城　三一・五
会津藩　若松城　二八・〇
徳島藩　徳島城　二五・七
土佐藩　高知城　二三・三
久留米藩　久留米城　二一・〇
久保田藩　出羽城　二〇・六
南部藩　盛岡城　二〇・〇
彦根藩　彦根城　二〇・〇
松江藩　松江城　一八・六
米沢藩　米沢城　一八・〇
庄内藩　鶴岡城　一七・〇
前橋藩　前橋城　一七・〇
郡山藩　大和郡山城　一五・一
徳川義宜
徳川茂承
細川韶邦
黒田長溥
浅野長訓
毛利敬親
鍋島直大
徳川慶篤
藤堂高猷
松平茂昭
池田慶徳
池田茂政
松平容保
蜂須賀斉裕
山内豊範
有馬磊咸
佐竹義堯
南部利剛
井伊直憲
松平安定
上杉斉憲
酒井忠篤
松平直克
柳沢保申
高田藩　越後高田城　一五・〇
姫路藩　姫路城　一五・〇
松山藩　伊予松山城　一五・〇
小倉藩　小倉城　一五・〇
高松藩　高松城　十二・〇
小田原藩　小田原城　十一・三
佐倉藩　佐倉城　十一・〇
福山藩　福山城　十一・〇
桑名藩　桑名城　十一・〇
柳河藩　柳河城　十一・〇
小浜藩　若狭小浜城　十・四
淀藩　山城淀城　十・二
二本松藩　二本松城　十・一
忍藩　武蔵忍城　十・〇
津軽藩　弘前城　十・〇
津山藩　津山城　十・〇
富山藩　富山城　十・〇
大聖寺藩　大聖寺城　十・〇
松代藩　信濃松代城　十・〇
新発田藩　越後新発田城　十・〇
大垣藩　大垣城　十・〇
宇和島藩　宇和島城　十・〇
中津藩　豊前中津城　十・〇
榊原政敬
酒井忠惇
松平定昭
小笠原忠幹
松平頼聡
大久保忠礼
堀田正倫
安倍正方
松平定敬
立花鑑寛
酒井忠氏
稲葉正邦
丹羽長国
松平忠誠
津軽承昭
松平廣倫
前田利同
前田利鬯
真田幸氏
溝口直正
戸田氏共
伊達宗徳
奥平昌服

以上、とりあえず十万石以上の大名を列挙してみたが、

五十藩、石高の合計は一二三六万石にのぼっている。

これらに、それ以下の大名を加えれば、大名の数は約三百、石高の合計は約二四〇〇万石にのぼった。これらの大名が日本全国に分布していたわけである。

これら大勢の大名たちが、徳川慶喜が大政奉還したくらいで、簡単に右へならえして、自国の藩政を奉還する筈がないのである。

この版籍奉還の音頭を取ったのが明治新政府なのであるが、明治新政府といっても、まだ出来たばかりで力はなかった。そして行政の中心人物が、西郷隆盛、大久保利通、木戸孝允、岩倉具視といったメンバーなどが、新政府の要職についているのであるが、出身はいずれも、薩摩長州の下級武士、又は下級公卿である。彼等がいくら、

（版籍奉還）

を各藩主にむかって叫んでも、各藩主が簡単にこれに従うはずはない。

たとえば、加賀藩の前田慶寧や、薩摩藩の島津忠義、仙台藩の伊達慶邦、尾張藩の徳川義宜、紀州藩の徳川茂承、熊本藩の細川韶邦、福岡藩の黒田長溥等々が、名前も顔も知らない西郷や大久保たちの言うことを、はいはいと聞いて、祖先伝来の牙城を素直に明け渡すであろうか。常識的に考えても、

「ノー」

である。

では、なぜ版籍奉還は全国的に、無事に、実現したのであろうか。

それは、それを動かす陰のリーダー、陰の実力者がいたからである。

それは誰なのか。

（二）

その陰のリーダーの名前を言う前に、では版籍奉還はどのような経過で実現していったのか、その要点を記してみよう。

年号が慶応から明治に更められ、江戸も東京と改称され、東京遷都も完了し、新政府の形もやや整ってくると、新政府は最大の大施策ともいうべき、諸大名の

（版籍奉還）

を考え始めた。版籍奉還とは、日本全国の全藩主に、領地・領民の支配権を、朝廷に差し出させることである。すなわち徳川慶喜の大政奉還の大名版である。

そのため大久保利通（薩摩出身）と木戸孝允（長州出身）は、土佐藩出身の参与板垣退助、肥前藩出身の参与大隈重信の同意を得て、四人がそれぞれの藩主に、版籍奉還を説得したのである。

そして明治二年正月二十日、薩摩、長州、土佐、肥前

の四藩主は連署して「版籍奉還」の表を、政府に提出した（版は版図で領地のこと、籍は戸籍で人民のことである）。

その上表は次のようになっていた。

ソモソモ臣等居ル所ハ天子の土、臣等牧スル所ハ即チ天子ノ民ナリ。安ンゾ私有スベケンヤ、今謹テ其版籍ヲ収メテ、之を上ル。願クハ朝廷其ノ宜シキニ処シ、其ノ与ウベキハコレヲ与エ、其ノ奪ウベキハコレヲ奪イ、凡ソ列藩ノ封土更ニ宜シク詔命ヲ下シ、コレヲ改メ定ムベシ

提出した文面は以上のようになっており、いったんは版籍を政府に取り上げられるが、改めて諸藩に与えられることを、四藩主は期待していたのである。あるいはこの四藩主などは、王政復古につくした功績により、従来よりも多くの封土が与えられることを、心ひそかに期待していたのかもしれない。

新政府は四藩主の忠誠を賞し、

「追ってなにぶんの沙汰をする」

と、とりあえず返事をした。

すると他の藩主たちも、はやく奉還を願い出て忠誠を示しておかないと、政府が「ソノ与ウベキハコレヲ与エ」の時に、不利になることを恐れ、続々と願いを出した。

中には、藩主の意向も聞かず、在京の重役の判断だけで出した藩も少くなかったという。また他藩の奉還願書を借りて、そのまま写して出した藩もあるという。

新政府はこれらの諸藩の動向を見定めた上で、明治二年（一八六九）六月十七日に、これまで奉還を願い出ていた諸藩主には、

「申し出通り奉還を認め」、

そして藩主をその藩の知事に任命し、その職を世襲とした。

藩知事を世襲にするについては、木戸孝允などが猛反対したが、大久保利通、岩倉具視が、

（世襲をみとめなければ諸藩が納得しない）

として、木戸孝允の考えを退けた。

奉還を願い出ていない藩は十四藩あったが、これらの藩に対しては、すみやかなる奉還を命じた。

そして最終的には、二七四の全藩主の奉還が、完了したのであった。

しかし奉還は藩主たちが期待していたようなものではなかった。新政府は「ソノ奪ウベキハコレヲ奪ッタ」が、「ソノ与ウベキハ与エナカッタ」のである。取りっぱなしだったのである（もちろん、新政府の狙いはそこにあったのであるが）。

その代わりに、藩主には新藩の知事としてその世襲をみとめ、これまでの藩主と同じような地位を認めることによって、藩主たちを満足させたのであった。

そして、それを追いかけるようにして、明治二年六月二十五日には、藩知事に対して、数ヵ条の「諸務変革」を命じた。

それによって、旧藩の実収高の十分の一を知事家禄と定め、藩知事個人の家計と、藩の財政をはっきり分離した。これによって藩主は制度上、たんなる一個の地方長官となった。

つづいて旧大名と公卿の名称も廃止され、彼等は一様に華族という名称になった。

また、旧藩士の平士以上の者は士族と称せられ、彼等の禄高も新たに定められ、藩財政から支給されることになった。すなわち士族は、これまでのように藩主から禄をいただくのではなく、藩という政治機構から俸給を受取るということになったのである。すなわち、これまでの藩主と家臣という主従関係は、ここで断ち切られたのである。

（三）

以上が版籍奉還の大要である。いろいろ問題はあっても、それを巧みに乗り越えて、明治維新の骨格が築かれたのである。

しかしちょっと不思議に思うことは、どの歴史書を見ても、明治維新で最も重要なこの版籍奉還が、あまりくわしく書かれていないことである。

どの歴史書、歴史小説を読んでも、版籍奉還の個所は、あまり書きたくない、

書きにくい、

深く触れたくない、

といった感じで書かれているような気がするのである。他の部分はくわしく書かれていても、この一番重要な部分は簡単なものが多い。

すると、（なにか書けない理由があるのではなかろうか）と、思わざるをえないのである。

一番問題なのは、版籍奉還について、藩主がどのように反応したのかという肝心な点が、ほとんど記されていないことである。記されているのは、多くの藩主が新政府の方針に従って版籍奉還を申し出、そうでない藩は版籍奉還を命令されて、一人も異議なくそれに従ったことである。

すなわち版籍奉還に対して、一人の藩主も異議を説えたり、反対したり、拒絶したりしなかったのである。こんな事が、本当にあったのであろうか。結果的には全藩から版籍は奉還されたのであるから、表面上、反対、拒絶はなかったわけであるが、その過程がどうであったのか、その説明がすっぽり抜けているのである。

三百あまりの諸大名が、全国各地に城を構えているの

である。その大手大名のリストは前掲したが、たとえば加賀百万石の前田侯、薩摩七十二万石の島津侯、仙台六十二万石の伊達侯、など、など…、権威と歴史のある諸大名が、それまで藩の下級役人で、名前さえも知られていなかった西郷隆盛や、大久保利通、木戸孝允などの命令に、意意諾諾と従ったとは考えられないのである。世が世であれば、そんなものは無視されて当然といえよう。

しかし、世の中は変った。しかし変ったといっても、まだ、西郷や大久保などの指示によって、全国の大名がいっせいに動くというところまでは、変っていないのである。

なぜ、各藩主は版籍奉還に反対しなかったか。

徳川慶喜は、

（日本を統一近代国家に作り代えるには、徳川政権は捨ててもいい）

という大志の下に、大政奉還したのであるが、各藩の藩主すべてが慶喜と同じような大志を持っていたとは思えない。

なぜ、藩主たちは反対しなかったのか。この「なぜ」に、どの歴史書も触れてないのである。それは、なぜであろうか。

同じような問題点はもう一つある。

版籍奉還のとき、各藩主たちはだまされたのである。

各藩主が版籍奉還を願い出たときの、藩主たちの気持の中には、

（いったん版籍を政府に取り上げられるが、改めて諸藩に与えられる）

という期待があったのである。

すなわち藩主たちの考えていたのは、現在の藩の再編成であり、消滅ではなかった。そして新政府の方も、それを認めるようなムードを意識的に作っていた。

しかし結果的にはそうではなく、版籍は取り上げられてしまったのである。藩主たちは新政府にだまされたのである。

では、なぜ藩主たちはだまされたことに抗議しなかったのか、不思議である。奉還取下げという運動が起きても、おかしくなかったのである。

しかしどの歴史書、歴史小説をみても、この点にはまったく触れておらず、スムーズに版籍奉還は完了したと書いてある。

もっとも、版籍奉還は無事に実現したのであるから、別に「無事でなかった」ということを、書く必要はないといえば、それまでである。

しかし版籍奉還が無事に完了したのには、そこに、

（無事に完了させる何かの力が働いていた）

と考えるのが、自然である。そうでなければ、世の中、そんなにうまく動く筈がない。

それは何の力だったのか。歴史書はそれに触れようとはしないのである。

では諸大名の中で、この版籍奉還に一番反対だったのは、誰であったろうか。それは薩摩藩の島津久光であったと思われる。関ヶ原の合戦以来、島津家は幕政に入って、日本の政治の桧舞台に立ちたいと思っていた。そして、その資格があり、実力があると思っていた。そして島津久光は幕末の激動期をチャンスに、自分が将軍になるのを狙っていた。版籍奉還など、とんでもないことである。

しかし久光自身が将軍になることは出来ないから、自分の推挙する慶喜を将軍にし、薩長土肥と慶喜を合せた五人で国政を担当し、実質的に久光が国政の主導権を握ろうと、諸施策を進めてきたのである。

その久光さえも、だまされたのである。だまされた久光は、

「残念、残念！」

とくやしがったが、どうしようもなかった。

島津久光でさえも、だまされたことに従わざるをえなかったのであり、それには何らかの事情があったのである。すなわち島津久光さえもそのようにさせる力が、動いていたのである。

島津久光をはじめとする諸藩主に版籍奉還させた陰の力、それは誰なのであろうか。

それは徳川慶喜だったのである。

慶喜は明治元年（一八六八）七月に静岡へ移り、翌年の明治二年六月に版籍奉還が行われたのであるから、静岡に移って最初の一年間、日本の統一近代国家建設の最も基礎となる版籍奉還を、陰でリードし、プッシュしていたのである。

もちろん、その証拠は残されていないし、また、資料も残ってはいない。だから、やっていないとも言えるし、逆に、証拠を残さないようにうまくやったとも言えよう。あるいは、証拠になるようなものは、後から焼却してしまったと考えることも出来る。

そしてよく考えてみると、その陰のリーダーは必ずしも慶喜でなくても、いいわけである。しかしそれは誰かと考えてみても、これだけの大事業を行える力を持った人間は、慶喜以外には見当らないのではあるまいか。

一般に静岡時代の慶喜は、あまたの趣味に明けくれた生活を三十年もつづけた、政治とは無関係の人生を送ったというのが一般の説であるが、それは隠れ蓑であって、本当の慶喜の力は、日本の統一近代国家建設のリードという、大事業に向けられていたのであった。

ではそのために、慶喜は具体的に何をやったのかというと、慶喜は主要な藩主に、

（版籍奉還の必要性）

を説いてまわったのである。

（日本を、西洋諸国と肩を並べる統一近代国家にするためには、日本全国を天皇の許に統一する必要がある。これまでのように、各大名が分散支配していたのでは駄目である。そのために、私はまっ先に大政奉還した。貴殿も私と同じように、統一国家建設のために、版籍を奉還すべきである）

と、主要藩主を説いてまわったのである。

その鋭い論法と、溢れるばかりの熱意に、強硬な藩主も次第に納得し、日本の統一近代国家建設という大局論に、心を動かしはじめたのである。

慶喜はそのために、ひそかに各藩を訪れ、藩主に会って説き伏せたこともあったであろうし、また江戸や京都で藩主に会ったり、また藩主が東海道を通ったとき、静岡へ寄ってもらって、話し合ったこともあるであろう。慶喜は水戸黄門のように、ひそかに諸国へ版籍奉還説得の行脚を行ったのである。

静岡時代の慶喜は趣味に忙しくて、人にはめったに会わないようにしていた。人が訪ねていって、慶喜がいなければ、どこかへ行っていることがわかってしまう。そこで人に会わないことにして、諸国行脚していることをカムフラージュしたのだと考えられる。

若干の個別の藩に光を当ててみると、薩摩の島津久光の場合はどんな工合であったであろうか。西郷隆盛や大久保利通が新政府の中心だといっても、島津久光から見れば、彼等は自分の下級家臣にすぎないのである。

しかも西郷隆盛は久光に嫌われており、久光の怒りに触れて二回も島流しにあっている。また大久保利通は久光に近ずくために、久光の趣味が囲碁であると聞いて囲碁を習い、その囲碁の場で久光の面識を得て、やっと認められた人間である。この二人がたとえ新政府のトップだといっても、そのような人間の命令によって久光が、島津七十二万石をすんなりと明け渡すとは考えられない。裏に慶喜からの説得があったればこそ、明け渡したのである。それも、

「だまされた。残念、残念！」

と言いながらである。

また徳川御三家（尾張徳川家六十一万石、紀州徳川家五十五万石、水戸徳川家三十五万石）は、どうであったであろうか。

当然、反対であったと思われる。御三家は大名中の大名といわれる存在であり、島津家などより一段と上位にある大名であったから、なおさら西郷隆盛や大久保利通、木戸孝允などチンピラの言うことなど、聞く筈がないのである（西郷や大久保、木戸などが、たとえ新政府の要人であっても、御三家からみればチンピラである）。

その御三家でも、それほど問題を起さずに版籍奉還に応じたのは、やはり慶喜の説得があったからであり、慶喜の説得がなければ、御三家中心の反対運動が起きたとしても、おかしくはなかったと思われる。

そればかりではなく、さらによく考えてみれば、御三家に対しては、慶喜は版籍奉還だけでなく、すでに大政奉還のときからひそかに相談し、大政奉還の次には版籍奉還がくることを説得し、納得させていたのではないかと思われる。

この徳川御三家の態度についても、歴史書はほとんど触れていない。よほど書きにくかったのであろう。

よく世の中で、

（何事もなかったから、うまくいった）

と言う。しかし、それは「何事もなかった」からではなく、

（何事もないように、事前にいろいろ手を打ち、対策を行ったから、うまくいった）

のである。そして、その事前の手は、限られた少数の関係者以外、絶対秘密なのである。だから表面上は何事もなかったのである。（何事もなかった）のではなく、（何事もないようにした）、だからうまくいったのである。

慶喜の版籍奉還は、まさにこの原則にドンピシャリ当てはまるのではなかろうか。

こうした慶喜の根まわしがあったればこそ、各藩主は版籍奉還に応じ、新政府はそれから二年後の明治四年に、廃藩置県を行うことが出来たのである。日本は天皇制の下に、名実ともに一元統一され、統一近代国家の基礎を築くのに成功したのである。

廃藩置県は、事前に版籍奉還という中味が出来ていたから、成功したのである。すなわち版籍が藩主の許を離れて朝廷のものとなり、藩は中味のない形だけのものになっていたので、藩を簡単に県に変えられたのである。

版籍奉還と廃藩置県とは、いわば中味と形の関係である。中味がすでに出来上っていたので、形も成功したのである。中味が出来ていれば、形を整えるのは容易である。

逆に中味が出来ておらず、形を変えることによって中味を変えようとすると、それは困難極まる。最近（平成）の政治を見ると、いろいろな制度論ばかりが紛糾し、制度（形）によって中味を変えようとしている。うまくいかない筈である。

明治維新は形よりも、中味作りに専念した。その真のリーダーが、徳川慶喜だったのである。

考えてみると、徳川慶喜は大政奉還を考える時から、平行して、各藩にもどのようにして版籍を奉還させるかを、考えていたのである。

徳川幕府だけが大政を奉還しても、全部の藩が版籍を奉還しなくては、天皇が統一する統一近代国家は出来な

いからである。

すなわち慶喜は大政奉還を、版籍奉還の先がけとしてやったのである。慶喜の大政奉還の真の狙いは、全国の大政奉還なのであった。

すなわち慶喜は大政奉還の時から、

大政奉還→版籍奉還→廃藩置県

のシナリオを描いていたのである。

そして自分がやるべき事は、自分がやり（大政奉還や、主要藩主への説得）、そうでないものは、側近の勝海舟とか、大名の代表としての四賢侯、それに尊皇志士の代表として、西郷隆盛、大久保利通、木戸孝允などとうまく連絡をとりながら、そのシナリオを実現していったのである。

全藩主に版籍奉還させるには、世論喚起とお手本が必要である。世論喚起は西郷や大久保などの新政府の要人にやらせ、ムードアップの出来たところで、お手本として薩長土肥の四藩主から版籍奉還の申出をさせた。

慶喜の演出の巧みさといえようか。

（終）

流人

——深堀武士の討入——

太田精一

夏の強い日差しが波間に照り映え、キラキラ輝いている。鳶がゆっくりと円を描き上空を舞っている。微風が、藪椿の葉をかすかに揺らしていた。

久賀島は、わずか三十八平方キロに満たない小島である。島民も五百人ほどで、隠れキリシタンが多い。

柴原羽右衛門は、金剛崎の岩に腰を下ろし、東に広がる海を眺めていた。

すると背後に人の気配を感じ、振り向いた。

流人としてこの島に流されて、三カ月が過ぎていた。訪れる人もまれで、このところ人影を見ていない。そのため、人の気配には敏感であった。

商人風の男が立っている。この島では見慣れない顔だ。

「何か御用でござるか。拙者は、柴原羽右衛門と申す。故あって流人となってこの島に流された。故郷を偲び、こうして海を眺めているところである。お見かけしたところ島のお方ではなさそうだが」

羽右衛門は、見慣れない人物に問いかけた。島役人にしては、威張ったところがない。

「実は、呉服や小間物の商いに島に渡ってきました。あちこちを歩くうちに、長崎で討入り騒動を起こしたお侍の一人が、この島でお過ごしと、伺いましたので、討入りにまつわるお話を、国元への土産にと思い、こうしておそばに上がった次第でございます。お話し下さいませんか」

島に来てから、流人として疎まれ、島民とも親しく話をすることのなかった羽右衛門が、言葉を交わすのは久

しぶりであった。その商人風の男の柔らかな物腰と誠実そうな態度は、羽右衛門の心の壁を次第に取り除いて行った。

（拙者は、この島で朽ち果てることになろう。武士の意地と誇りを懸けて戦ったあの討入りも、やがて世間から忘れ去られてしまうかも知れない。何故、深堀武士は、死を覚悟してまで騒動を起こしたのか。そのことを少しでも多くの人に分かってもらい、後世の人に伝えたい）

そう思った羽右衛門は、重い口を開き、事件の顛末を語った。

一・泥濘のいさかい

長崎には、めずらしく雪が積もった。元禄十三年（一七〇〇）十二月十九日、前夜来の雪が、薄化粧となって長崎の街をなまめかせていた。

佐賀鍋島の支藩深堀領主鍋島官左衛門家来深堀三右衛門と柴原武衛門の二人は、雪見かたがた同僚の喜多佐左衛門の結婚式の祝いの品を買うために、深堀から長崎に出た。

本博多町の八幡坂に差し掛かった時、二人の中間風の男と出くわした。いずれもしたたかに酩酊している。雪が解け、道はぬかるんでいた。

深堀三右衛門と柴原武右衛門は、足を取られまいと用心しながら坂を下り、上って来る酔漢を避けようと道の端に寄った。

その時、三右衛門の足が窪みにはまり、よろけるはずみに泥を撥ね、酔漢の一人の着物を汚してしまった。三右衛門は七十歳、武右衛門は六十歳の老人で、動作が鈍っている。

「やい待て。何の恨みがあって俺に泥をかけた」

酔漢の一人が、酒臭い息を吐きかけながら詰め寄って来た。

二人は、長崎西浜町の町年寄高木彦右衛門の使用人である。泥をかけられた男は、惣内と言って、飲むと人に絡みたくなる悪い癖があった。

「これはまったく粗相をいたした。何分にも年を取っていることゆえ、足元がおぼつかない。誠に申し訳ない。お詫びいたす」

三右衛門は、辞を低くして謝った。

「いや、このまま帰すわけにはいかない。俺の着物をどうしてくれる。このままでは、主人の高木彦右衛門様の前にも出られやしない。俺の着物に泥をかけるということは、主人の着物にかけたのと同じだ」

惣内は、高木彦右衛門の権威を嵩に着て喚き散らしたのである。

長崎で町年寄と言えば、町の行政を実質的に支配する行政官の役割を果している。町年寄は、有力な商人が選ばれ、当時七人いた。この制度は安土、桃山期の堺など、

町民自治の伝統を受け継いだものであった。

高木彦右衛門は、元禄元年（一六八八）四月、家を継いで町年寄となっていた。同十年十月には唐蘭商売元締、同十三年には、江戸で代物替会所頭取となっている。苗字帯刀を許され、切米八十俵を貰っている身分であった。浪人を抱え、使用人は百人にも及んでいる。使用人たちは、高木家の権勢を嵩に、長崎奉行支配下の役人を除いて、長崎にいる武士たちを軽く見ていた。

一方、深堀領主鍋島官左衛門は六千石。佐賀藩の代官として長崎御番に当っている。

深堀は、長崎港の入り口にある。入港の船が、深堀の前を通過する時には、敬意を表し、帆を下ろして通るのが通例となっていた。帆を下ろすことにより船の速度が鈍る。その間に、深堀から小舟を出し、積み荷の一部を入港税のように受け取っていたのである。高木家では、そのことを快く思っていなかった。そうした思いが、使用人に至るまであったのかもしれない。

だが、権勢を嵩に着る高木家の評判も、長崎の町人の間では良くなかった。

「これだけ謝っても許せぬとあれば、身共にも覚悟がある」

三右衛門は、武士の面目を潰され開き直った。

その言葉が、惣内の激昂をさらに煽ることになった。

大きな声で怒鳴る惣内の声を聞きつけた周りの人たちが集まり、人垣が出来た。

見かねた町衆の一人が飛び出し、居丈高に騒ぎ立てる惣内をなだめ、三右衛門と武右衛門の二人を五島町の鍋島御番、深堀屋敷に帰らせた。

惣内は、しぶしぶその場を立ち去った。だが、屋敷に帰っても怒りが収まらない。ことの顛末を仲間に語った。それを聞いた仲間は、日頃の深堀に対する鬱憤が爆発した。二十人ばかり徒党を組んで、深堀屋敷に押し掛けたのである。

「さっき俺に泥をかけ、恥をかかせた野郎を出せ。武士なら武士らしく出てこい」

そう言って屋敷内に押し入り、土足のまま部屋に上がりこんだ。

屋敷には、折悪しく三右衛門と武右衛門の二人と数人の使用人しかいなかった。二人は、刀を取って応戦しようとした。

ところが、武右衛門の抜き放った刀が、天井の梁に刺さり抜けない。彼は、刀を梁から抜こうと焦った。その隙をついて、数人が襲い掛かり、武右衛門は、押さえつけられてしまったのである。

三右衛門も庭に出るところを石につまずき転倒し、取り押さえられた。不覚にも、二人とも刀を奪われてしまったのだ。

「この刀は、貰って行く。悔しかったら取り返しに来い。だらしない腰抜け侍だ。ざまあ見ろ」

そう捨て台詞を残し、高木勢は立ち去った。

この知らせは、飛脚によって、すぐ深堀にもたらされた。深堀は、長崎半島西側、長崎の街から海沿いに、十二キロほどの距離にある。

「すわ一大事。たとえ町年寄とはいえ、町人の分際でけしからん。このまま引き下がっては、深堀武士の名折れである」

芝原、深堀、両家の親族、隣人たちが集まって談合し、高木屋敷を襲い、刀を取り返すことを誓いあった。

三右衛門の妻スギは、わずか十六歳の息子に、高木屋敷襲撃に参加するよう諭した。

「三右衛門殿は、年も年であり、転倒して手足も不自由であろう。その方、命を惜しむな。決して怯んではならぬ。必ず敵を倒すよう母は祈っている」

集まった親戚や、隣人たちは、これを聞いて一層結束を固めた。

十人ばかりの一団が、第一陣となって白装束に身を固め、長崎五島町の深堀屋敷に駆けつけた。次いで第二陣が、やはり白装束に白脚絆、顔も白い綿で包み、同屋敷に向かった。

寒風が、吹きすさび肌を刺す。暗い海に雪が舞っていた。

二、討入り

「これだけの恥辱を受けて黙って引き下がるわけにはいかない。支藩といえども、鍋島藩の葉隠士魂は持ち合わせている。命を捨てても武士の面目を貫こう」

深堀屋敷に集結した第一陣は、高木屋敷にすぐ討ち入ろうと主張した。

「まあ待て、高木屋敷に討入りすれば、全員死罪は免れまい。それだけでは済まぬ。御公儀のお考え次第では、深堀鍋島家お取潰しにもなりかねない。長崎奉行に訴え、張本人の二人を死罪にするようご裁可を仰げばよいのではないか」

家老たちは騒ぎが大きくなり、主家の取潰しにまで発展することを恐れた。

「それでは、深堀武士の面目は丸潰れとなり申す。屋敷を土足で踏みにじられた恥辱は、末代まで消えることはありませんぞ。深堀武士は、腑抜けだと世間から語り継がれてもよいと言われるのか」

親戚一同の討入りへの決意は固かった。

刀を奪われた深堀三右衛門と柴原武右衛門は、ことの重大さに責任を取るべく切腹の覚悟を決めている。だが、屈辱にまみれて死にたくはなかった。せめて高木邸に討入り、相手と刺し違えても無念を晴らそうとしたのである。

評議の結果、討入りと決まった。

三右衛門と武右衛門は、第一陣の十人と共に高木屋敷の門前に立った。

東の空が明るく陽が昇り始めている。

「われらは鍋島家の家来でござる。昨日、貴家高木家の家人衆が主人屋敷に大勢して踏込み、乱暴狼藉を働いた罪許しがたい。その連中をここに差し出し願おう」

「ただ今、主人留守中で帰り次第お知らせいたす。ひとまずお引き取り下され」

門番は、血相を変えた一団を見て怯え、門を開けようとしなかった。

痺れを切らした若い喜多佐左衛門が、塀を乗り越え門を開いた。

「無体な。何をなさる」

門番は、屋敷内から門を開けようとする佐左衛門に後ろから抱きついた。

佐左衛門は、肩に抱き着く門番を振り払い、突き離して、首筋から肩口にかけて切り下した。

「ギャー。深堀の侍たちが屋敷内に乱入しました。お出会い召され」

門番は、倒れながら大声で屋敷内の家人たちに呼びかけた。

それを聞いた高木家の家人たちは、眠い目を擦りながら、深堀勢を迎え撃った。だが、決死の覚悟で侵入した深堀勢にはかなわない。

そのうち第二陣も到着した。高木勢は、次第に切りたてられて、主人の高木彦右衛門の居間にまで後退した。

襖を蹴破った三右衛門の息子嘉右衛門が、高木彦右衛門に切り付け、左腕に深手を負わせた。逃げようとする彦右衛門を喜多佐左衛門が追い掛け、後ろから袈裟懸けに刀を浴びせた。

「ウワー」

彦右衛門は、血潮にまみれ、虚空をつかんで倒れ、こと切れた。

あちこちで行われていた戦闘も、主人の彦右衛門が討ち取られたと聞いて雇われ浪人たちは四散した。

彦右衛門は討ち果したものの、跡継ぎの彦八は、残っている。

深堀武士たちは、佐賀藩の長崎代官たる深堀屋敷を預かっていながら、その屋敷を土足で踏みにじられた責任を感じていた。その恥辱を晴らすためには、高木家の存続が許しがたかったのである。

屋敷内をくまなく探したが、彦八は見つからない。女中部屋に隠れていたことが、後になって分かった。

「御家中の方々のお力添えをいただき、拙者を辱めた惣内や乱暴者を退治した。その上、日頃町年寄の身分を嵩に着て専横の振る舞い目に余るものがあった高木彦右衛門を討ち果すことが出来申した。跡継ぎの彦八を取り逃

がしたことは、いささか心残りであるが、最早これまでと存ずる」

三右衛門は、感謝の涙を流しながら討入りを決行してくれた一同に謝辞を述べ切腹した。それを柴原武右衛門が介錯した。

武右衛門は、刀を収めるとその首を羽織に包み、その場を立ち去った。浜町の大橋まで来ると通り掛かりの人々に向かって大声を上げて叫んだ。

「鍋島支藩深堀の家臣柴原武右衛門、無礼きわまる高木家当主彦右衛門を討取った。町衆を騒がせ申し訳ない。よって拙者は、この場で腹を切る」

そう言い残して見事に切腹したのである。

討ち入った武士たちは、長崎の深堀屋敷に引き上げ、奉行所に事の顛末を届け出た。

長崎開港以来の大事件である。町中、この噂でもちきりであった。

長崎は、町人の町であるにもかかわらず高木彦右衛門が討たれたと聞いても同情を寄せる者は意外と少なかった。

「あげん中間を威張らせて放っておいた主人も悪か。主人も主人ばってん使用人も使用人たい」

高木家の専横は、目に余るものがあり、使用人の乱暴は町でも手を焼いていたのである。

届け出を受けた長崎奉行所は、蜂の巣をついたような大騒ぎとなった。江戸表に飛脚を立て、幕閣の判断を仰ぐことになったのである。

三、幕府の裁断

元禄十四年（一七〇一）三月二十一日、深堀武士たちへの裁断が下った。

深堀領主鍋島官左衛門にはお構いなし。討入り一番手のうち深堀三右衛門と柴原武右衛門は、すでに切腹しているのでそのまま。残る十人については切腹。討入り二番手の九人は、五島列島に流罪となった。

一方、高木家側は、高木彦右衛門が殺害された時、逃げ出した息子の彦八は、不届きであるとして家財、屋敷没収のうえ長崎五里四方外に追放となった。加えて、京都、大坂の在住を許さず、家名断絶。また、浪人を含む使用人八人が死罪となった。結局彦八は、天草に移り住み、そこで一生を終えたと伝えられている。

幕府裁定は、祖法に基づく喧嘩両成敗であった。

長崎の街では、深堀武士への同情が集まり、処分の決まる間、討ち入った十九人に対し、差し入れの品が後を絶たなかったという。

切腹は、裁断の下った同日の三月二十一日五島町の深堀屋敷で行われた。

柴原清右衛門、深堀庄左衛門、深堀嘉右衛門、荒木権内、喜多佐左衛門、高浜嘉左衛門、宇部宮五右衛門、平

与左衛門、宇都宮只之丞、高浜助右衛門の順で夕刻から夜にかけて実施された。同夜九つ（午前零時）過ぎ、十人の遺体は、深堀に運ばれ、丁重な葬儀が営まれた。

深堀三右衛門と柴原武右衛門は、騒動を引き起こした張本人であるという咎により家名断絶となった。残る十人の切腹した武士についての家名断絶は、免れている。

五島列島に流罪となった九人の深堀武士は、一つ島で暮らせるよう嘆願したが許されず、福江島、久賀島、宇久島と離れ離れに流されることになった。

翌三月二十二日、長崎湾は、凪いでいた。港を包み込む山々も春を迎え、新緑が目に染みる。青空に白い雲が漂っている。大勢の町人たちが遠島になる深堀武士を一目見ようと大波止の周りを取り巻いた。

船に乗ると、手鎖がはずされた。役人たちも見送る家族たちの思いに応え、咎人扱いにしなかったのである。

三月二十七日、五島列島最大の福江島に着いた。六日間にわたる船旅であった。五島家の家老白浜久太夫が出迎えた。大庄屋塩谷惣右衛門の家にひとまず落ち着き、翌日からそれぞれ定められた配所に送られた。

語り終えた羽右衛門の目に涙が浮かんでいた。

「まことに有難うございました。またお会いすることもないかと存じますが、このお話に、私も大変勇気づけられました」

商人風の男は、深々と頭を下げ、含みのある言葉を残し、島を出た。

その年の暮れの十二月十四日、幕府を震撼させた大事件が発生した。播州赤穂の浪士四十七人が、吉良上野介屋敷に討入り、見事主君の仇を討ったとの風聞が、この最果の小島、久賀島にも届いた。

「なんでも吉良屋敷の討入りには、深堀事件を参考にしたという御仁がいるそうだ。敵と味方の区別がはっきり分かるように火事装束に身を固め、合言葉を使っていた。また、討ち入った途端に弓の弦を切り払い、槍を捨てている。それに火災を防ぐため、部屋の火を消し、障子、襖を取り払った」

そうした噂がまことしやかに伝えられたのである。

柴原羽右衛門が、久賀島に流されて一年が過ぎた。

家族と離れ、知人もいない島での暮らしは、耐え難いほどの孤独感を羽右衛門の心に植え付けた。小屋に一人で、ぽつんと座っていて思い出すのは、故郷の妻や子のことばかりである。時折、独り言をつぶやいて、うつろな目で外を眺めている姿は、島民たちの哀れを誘い、同情を集めた。

「かわいそうに。いつも一人でいる。よか女子（おなご）でん世話せんば」

島民たちは、世話役に相談を持ちかけた。世話役は、

代官にそうした島民たちの声を伝え、妻を持つ許可を求めた。

咎人には妻を持つことは許されない。だが、深堀武士は、流人とはいえ犯罪者としての扱いではなかった。

領主五島大和守は、流人全員に妻帯を許した。近くに住む娘や後家がその対象となった。

流人といえども武士である。島民の中には、進んで娘や後家を娶わす者もいた。そのためか、妻帯する流人が、次第に増えて来た。

だが、羽右衛門にはその気はなかった。お仕着せのような妻を娶る気にはならなかったのだ。島には、故郷に残したような妻にふさわしい女子はいないと思い込んでもいた。

ところが、ふとしたことがきっかけに、しまという女子と知り合うことになったのである。

四、現地妻

しまは、この島で生まれた。実家は、半農半漁の島人で、隠れキリシタンである。彼女は、同じ島に住む漁師の若者と十八で結婚した。新婚生活を楽しむ間もなく、わずか一年で、夫は漁に出て帰らぬ人となってしまった。

実家に帰ったしまは、両親の手伝いをして五年が過ぎ、二十四となっていた。

「お前も連れ合いをなくしてから五年になる。どこでんよか人がいれば、嫁がせようと思っとったが、適当な若者ば見当らん。お前さえよかなら、あの流人の柴原様のところに嫁いだらどげんか」

実家は、今や兄夫婦の代になっている。出戻りのしまは、次第に自分の居場所が狭くなっていると感じていた。

(このままいつまでも実家に居座るわけにはいかん。ばってん柴原様がどんなお人かわからんば、嫁に行くわけにもいかん。敵討に力を貸してお咎めを受けたとば噂されていなさるが、どげんお人か一度見てみたか)

しまは、思い切って羽右衛門の小屋を訪ねることにした。

裏山の藪椿の茂る山道を登って行くと、頂上に出る少し手前に、わずかな平地があった。雑草に囲まれたその土地に、ぽつんと一軒の小屋がある。しまは、その小屋に近づき、土壁の崩れた隙間からそっと中を覗いた。

薄暗い部屋の中で、羽右衛門は、じっと目を閉じて座っていた。

「誰だ」

外に人の気配を感じた羽右衛門は、身構えた。髪は伸び、髭茫々で、頬はこけ、目だけが異様に光っていた。近寄り難い空気が部屋の中に漂っている。

しまは、一瞬たじろいで、土壁から目を離した。一呼吸おいてから勇気を出して話しかけた。

「あのう。こちらにお住いのお武家様が、何かとご不自由されているのではなかかと案じ、獲ってきた魚を届けよと、父が言いましたので、持ってまいりました」

「流人の身、お気遣いには及ばん。しかし、折角山道をお運びくだされたこと故、そのままお持ち帰り頂くのもかえってご迷惑なことであろう。何もお返しは出来ないが、有難く頂戴いたす。ただ、今後は、くれぐれも気遣いご無用と父上にお伝え頂きたい」

羽右衛門は、戸を開け表に出た。眩しそうに細めた目は、外から見た目と違って優しそうに、寂しげであった。

しまは、羽右衛門の薄汚れた体から滲み出る孤独な影を、自分の行く末と重ね合わせていた。

(こん人のために、何か出来ることをしてあげたか)

家族の中にあって、寂しさを感じていたしまは、愛情を注ぐ何かを求めていた。羽右衛門への同情と共感が、その対象となったのである。

しまは、時折、羽右衛門の小屋を訪れ、煮物や魚を届けることにした。

初めは迷惑そうにしていた羽右衛門も、次第に打ち解け、しまの来訪を心待ちにするようになった。

しまも、小屋に食べ物を届けるだけでなく、汚れ物の洗濯、部屋の掃除など家事を手伝ううちに、羽右衛門が見かけとは違って、情愛深く、心優しい一面を備えていることが分かって来た。単なる憐憫の対象から、男性としての羽右衛門を意識するようになり、それがやがて、恋心へと変わって行ったのである。

湿った強い風が南から吹き付ける八月の蒸し暑い夜、しまは、羽右衛門の夕食の支度をして帰りが遅くなった。

雨が激しく降り出して来た。雷の光が闇を切り裂くように走る。雷鳴が轟き小屋を揺すった。

「しま殿。今夜は、嵐になりそうだ。もし、よかったら泊まって行きなさい。親御さんから何か言われたら拙者が謝りに行く。どうしても帰るというなら、送り申そう」

羽右衛門の言葉を聞いてしまは、外の閃光が体の中を突き抜けるように感じた。次いで来る雷鳴が身を揺すり、デウスが、羽右衛門と共にこの小屋で一夜を明かすよう命じているように思った。

「はい。そうさせて頂きます」

か細い声で答えたしまは、薄い布団を取り出し、羽右衛門の床を作った。自分は、板敷の上に着物のまま横になり、羽右衛門の羽織を掛布団代わりにした。

閃光と激しい雷鳴に、しまは身を縮め、じっと耐えている。

そのけなげな姿を見て、羽右衛門は、たまらなく愛しさを覚えた。しまを布団の中に引き入れ、強く抱きしめた。

しまは、抱かれるままに身をゆだね、羽右衛門の愛撫に応えた。

昨夜の嵐は、まるでなかったように朝の光が差し込ん

で来た。二人は、その光に目をさまし、体を離した。だが、心はすでに強く結ばれ、離れがたいものとなっていた。

羽右衛門は、しまを妻にしたいと、両親に申し出た。両親に異存があるはずはない。しまも、羽右衛門の妻になることを望んでいるという。そのことを知って、両親は、心から喜んだ。羽右衛門は、早速島役人に妻を娶る許可を求め、日を経ずして裁可された。

羽右衛門は、しまを妻に娶り、夫婦仲睦まじく、二人の女の子にも恵まれた。島での幸せな暮らしに満足し、故郷のことはほとんど思い出さなくなっていたのである。

五．赦免

八年の歳月が流れた。宝永六年（一七〇九）将軍綱吉が没し、家宣が、六代将軍となった。元禄の世は、綱吉と共に終焉したのである。

さしも権勢を誇った柳沢吉保も失脚し、新井白石が登用され、幕政の大改革が行われた。

新将軍家宣の代になって、五島列島に配流された深堀武士たちもご赦免となった。

宝永六年（一七〇九）八月、長崎奉行及び五島大和守への達しが届き、同年九月、帰国のための船が用意された。

流人たちは、晴れて故郷の土が踏めると喜んだ。だが、島の妻子たちにとって、それは悲しい別離の知らせであった。

「羽右衛門様と一緒になって七年余り、二人の娘にも恵まれました。どげんしてもお国に帰りなさるとならしかたなか。お留めすることは出来ましぇん。ばってん、私たちを連れてってくんしゃい。今更別れるのは嫌ですけん」

「こらえてくれ。わしもここに留まることを考えた。しかし、故郷に残した親兄弟にも会いたい。会って、柴原家の行く末を見届けねばならぬ。お前たちを連れて帰りたいのは、やまやまなれども、ご法度によってそれはかなわぬ。この島に残した子供たちの成人を見届けるために、また引き返してくるから辛抱して待っていてくれ」

羽右衛門は、断腸の思いで島を離れる船に乗った。しまと二人の娘は、いつまでも岸辺を離れず泣き崩れ、船の見えなくなるまで見送った。

穏やかな日差しが秋の海を照らしている。船は、しま親子の思いを断ち切るように東の海に消えて行く。

九人の深堀武士たちは、一旦、福江島に集結した後、六日間の船旅を経て、長崎に着いた。

ほとんどあきらめかけていた夫や倅が戻って来たのである。出迎えた家族たちは、再会の喜びに肩を抱き合い泣き崩れた。

羽右衛門も出迎えた妻子と共に、深堀に帰った。深堀

では、親族が集まり、祝宴を開いて、羽右衛門の帰還を歓迎した。

だが、羽右衛門の心は、複雑に揺れ動いている。家族との再会を喜ぶ気持と久賀島に残した妻子への想いが、絡み合って手放しで祝膳を楽しむことが出来ない。注がれる盃に久賀島の妻や子供たちの顔が浮かび、これまでにない苦い酒となった。

羽右衛門は、酒が盃に注がれる度に、目を閉じて一気に飲み干し、心の痛みを断ち切るのであった。

秋風の立つ頃である。久賀島に一人の旅の僧が渡って来た。

柴原羽右衛門が赦免されてから、数年の歳月が流れている。僧は、黙々と雑草をかき分け山道を登って行く。その先には、かつて羽右衛門の住んでいた流人小屋がある。

僧は、雑草の中に、今にも朽ち果てそうに残っている小屋をひと回りして、しばらく様子をうかがっていた。

もはや住む人もないことを確かめた後、入口の前で手を合わせ、人家のある方に歩いて行った。

「ちとお尋ねします。あの流人小屋にいた人は、どうされましたか」

僧は、山裾の島民の家を見つけて訪ねてみた。

「はい。しばらく一人で住んでいました。一年ほどして、こん島の後家を嫁に貰い、子まで出来て、幸せに暮して

いなさった。ちょうど半年ほど前に、ご赦免となり、お国に帰られたとです」

「それはよかった。ご赦免になって国に帰られたか。してそのご内儀とお子さんは、どうされたのじゃ」

「そいが、女房子供は、島を出ることはならぬとのきついお達しで、泣く泣く島に残りました。今は、二人の子供と三人で、わずかばかりの土地を耕して暮らしとります。なんでもあんお方は、お国に奥様と子供がおありなさるとのことですけん、こん島に戻ってくることはなかですばい」

「左様であったか」

旅僧は、深くため息をつき頷いた。

僧は、かつてこの島を訪れ、柴原羽右衛門に、深堀武士討入りの様子を、根堀葉堀聞いたことのある商人風の男である。

男の名は、寺坂吉衛門と言い、赤穂浪士の一人であった。

足軽の身分であった吉衛門は、大石内蔵助の命を受け、討入り後、密かに吉良屋敷を抜け出した。彼は、諸国に散った義士たちの家族や親戚縁者を訪ね、討入りまでの一部始終を伝え、残った金を貧困にあえぐ遺族に配って歩いていたのである。

九年ほど諸国を経巡った後、吉衛門は、大石内蔵助との約束を果たし終えたことに満足していた。

（内蔵助様の命じられるままに志士たちの思いをそれぞれの家族に伝えた。この上は僧となって、残る人生を全うしたい）

そう考えた吉衛門は、諸国を行脚するうちに、ふと久賀島に流人となっていた柴原羽右衛門を思い出したのである。

（そうだ。柴原殿に一言お礼を言わねばなるまい。吉良屋敷討入りの成功は、あの御仁から、深堀武士の討入りの模様をこと細かく聞き、それが手本となったからじゃ。今頃どうしておられるか。配流の無聊をお慰めしよう）

そうした思いに駆られた吉衛門は、矢も盾もたまらず、再び久賀島の土を踏んだのである。

だが、すでに柴原羽右衛門は、ご赦免となり、国許に帰っていた。

吉衛門は、残されたしまと子供たちが哀れでならなかった。日々の暮らしにも困っている様子である。

女手一つで二人の子供を抱え、ひたすら夫との再会を夢見て懸命に生きている健気な姿を見ると吉衛門は、放っておけなかった。

（しばらくこの島に留まって残された家族を見守ってやりたい）

仏門に入ったせいであろうか、慈愛の心が湧いて来る。

それに吉衛門は、この島が気に入った。

あまりにも多くの死を見届けて来た彼には、世俗から遠く離れたこの島の自然の生活は、安らぎであったに違いない。

吉衛門は、島の恵剣寺という小さな寺の寺僧となり、住職が他界した後、その跡を継ぎ、同寺の住職として天寿を全うした。

しまと成人した二人の娘に看取られながらの穏やかな旅立ちであった。その顔は、すべての苦悩と煩悩を飲み込む慈愛にあふれ、優しい微笑みさえ浮かべていた。

しまは、二人の娘を嫁に出した後、廃墟となった流人小屋を時々訪れ、隠し持ったマリア観音像に、羽右衛門との再会を願っていた。そんなある日、強い夕立に遭い、小屋の朽ちた庇に身を寄せているうちに、心臓発作に見舞われ、人知れず天国に旅立った。

羽右衛門は、深堀に帰還して数年後、胸を病み他界した。病床にあって、しまとの約束を果たせなかったことを詫び、島に残した子供たちの行く末を案じての最後であった。

自由貿易協定の男・金宗壎

新井宏

韓国の外交官、金宗壎（キムジョンフン）、六十歳。五年半のマラソン交渉を経て、米国との自由貿易協定（ＦＴＡ）をまとめあげた男。

鋭い目つきと角張った風貌から日本のサムライとか西洋のグラディエーター（剣闘士）と称されているが、直裁的な語り口に加え、率直で気さくな性格によって、米国側首席代表のウェンディ・カトラー女史とは「戦友」の関係を築き上げ、今や韓国をして、米国および欧州連合の両経済圏と自由貿易協定を結ぶ唯一の国に成長させ、貿易面で日本に決定的な差をつけようとしている最大の功績者である。

いまになって日本が、交渉不利を承知しながら、あせって環太平洋経済協定（ＴＰＰ）交渉に参加せざるを得なくなったのも、ひとえに金宗壎が、韓国の世論、議会の猛反対を巧みにかわして、米韓自由貿易協定（ＦＴＡ）とそれに続く欧州連合とのＦＴＡ締結に成功したからである。

現代では、米国のような超大国はいざしらず、外交官が政治の表面で活躍することなど有り得ないばかりでなく、外交官が政治家に転身することさえ稀である。

明治維新の後、伊藤博文を初めとして、外交分野から、大隈重信、西園寺公望、原敬、加藤高明、広田弘毅、幣原喜重郎、芦田均、吉田茂らの総理大臣を輩出した日本でも、吉田茂の後は二十八代にわたって誰も外交官出身はいない。「会議は踊る」でナポレオン後のヨーロッパ世界を取り仕切ったオーストリアのメッテルニヒ、いやそれにも増して敗戦国でありながら、フランス領土を守りきったタレーランなどの時代は完全に終わっている。

しいて言うならば、現代は貿易関税交渉こそが外交官の主戦場である。しかし、官僚化した外交官のもとでは、その戦場も寂しいものであるが、金宗壎の軌跡を追いかけてみると、あたかも明治維新の外交官を彷彿させるものがある。

塩野七生は、ディプロマシを「外交」ではなく「外政」と訳すべきだと言っていたが、いまや「外交官」は政治からも疎外されつつあり、鳩山由紀夫のような外交音痴が総理大臣になる時代なのである。それだからこそ、金宗壎の活躍が目を惹く。

対米外交、対日外交で大きくつまずいた盧武鉉前大統領ではあったが、金宗壎を起用したのは大ヒットであった。今や、韓国で金宗壎の名を知らない者など誰もいない。交渉相手の米国側でさえ、彼の手腕を見込んで世界貿易機関(WTO)の次期事務総長に推薦する動きを見せている。

外交、すなわち、何を捨てて何を採るかの戦いおいて、絶対不可欠なのは交渉当事者間の信頼関係である。お互いに国内世論を背負って建前を前に出していては、一歩も進まない。敵は交渉相手ではなく、むしろ国内の政争である。弾は後ろから飛んでくる。

だから、敵を欺くよりも味方を欺くことに最大のエネルギーを費やさねばならない。核持込みの密約なくして、沖縄が返還されるはずはなかったし、対馬藩の宗家の国書偽造なくして、江戸幕府の日朝修好が回復されるはずが無かったのである。

戦争を継続できない財政事情を背負った小村寿太郎の敵はロシアではなく日本の世論であった。

その意味で、外交に最も適さない国家体制は民主主義である。民主主義は多かれ少なかれポピュリズムやナショナリズムと無縁ではあり得ない。交渉事を始める前に、ポピュリズムやナショナリズムに迎合して、譲歩し得ない国論を形成してしまっては、交渉とはなり得ない。

ドラッガーの言うように、戦争は外交の失敗以外の何物でもない。どんな理不尽な要求であっても、相手方だって戦争の負担は避けたいのだから、ぎりぎりまで粘って粘って取るべきものを取った上で不利を甘受するのが外交である。だからナショナリズムが批判する弱腰外交こそが強い外交なのである。声高に叫ぶより、国際的な連携のもとで、国力の全てを動員して相手を如何に圧迫できるかが肝要なのである。キャンキャン吠えるのは弱い犬である。

北方四島や竹島・尖閣列島の領土問題、韓国の従軍慰安婦問題や北朝鮮の拉致問題などは外交交渉の手札として極めて重要であっても、国富や国民生活と直結しているわけではない。それなのにポピュリズムやナショナリズムは、外交を縛りかねない。そこにポピュリズムに背を向けた真の外交官が求められる所以である。

対米協定交渉を決断した盧武鉉

先進国化に遅れてスタートした韓国では、いまや日本の三倍のスピードで急変貌を遂げ、一部の工業製品や情報技術化の面ばかりでなく、大学進学率、核家族化、少子化、離婚率や自殺率などの社会現象面でも日本を追い越している。いわばオーバーランである。

しかし、このような急変貌は、農業・漁業・畜産あるいは中小企業などを置き去りにしてしまったため、いわば韓国内に、先進国と後進国が同居している状況をもたらした。

その韓国が、早々と、米国および欧州連合、インドとの間に自由貿易協定(FTA)を締結して、もたついている日本を突き放そうとしている。

関税が撤廃されれば、日本が深刻な影響を受けるのは明らかで、日本の財界はあわてふためいて環太平洋経済協定(TPP)に参加しようとしている。東アジアのハブ(中継貿易拠点)の地位を韓国に奪われてしまえば、日本の優位な分野でさえも韓国経由となりかねない。

それにしても、日本よりもはるかに深刻な農業・漁業・畜産問題などを抱えた韓国が、国内の反対を抑え込み、協定にこぎ着けたのはなぜであろうか。それはひとえに、故盧武鉉大統領と自由貿易協定の男・金宗壎のおかげなのである。

韓国の後進国部分と学生層の支持を集めて二〇〇三年に大統領となった盧武鉉は、かなりエキセントリックな性格で、その政策が支持母体よりも更に左寄りであったため、韓国の経済発展を大きく阻害した。対米外交や対日外交はギクシャクし、優良企業の海外流出が続き、高学歴化した学生たちの就職先はなくなり、熱心な支持層であった若者さえ次々と盧武鉉を見限った。

その中で、盧武鉉のエキセントリックな本領が発揮されたのである。貿易振興なしには学生たちの要求に応えられないと、二〇〇四年にチリとの間に締結した自由貿易協定が成果を得ているのを見て、二〇〇六年になって米国との自由貿易協定(FTA)の交渉にゴーサインを出したのである。

交渉の成否は、農業・漁業・畜産分野の後進国部分の不満をいかに押さえ込むかである。この交渉を、もし先進国側を代表する保守政権が推進すれば、後進国側の猛烈な反対世論につぶされてしまうのが政治力学であり、野党を勢いづかせてしまう。ところが、これを後進国側革新政権の盧武鉉が推進すると、先進国側の保守党はこれを本格的な争点とすることはできない。はるかに抵抗が少なく済むのである。

そしてその成果を最大限享受したのが次の保守政権の李明博大統領である。酷評一辺倒であった盧武鉉大統領ではあるものの、彼は韓国の宿痾であった地域主義跋扈の解消や、検察、国税庁、国家情報院の権力乱用の劇的規制に成功し、対米自由貿易協定を推進した。それは、

彼のエキセントリックな本領なくしては有り得なかったことである。

自由貿易協定本交渉の開始

二〇〇六年二月に対米交渉入りを決めてから四ヶ月後の六月五日に、自由貿易協定(FTA)の本交渉がワシントンで始まった。米国側はウェンディ・カトラー女史率いる百七十八名、それに対して韓国側は二十三省庁から選ばれた百五十八名(後に二十七省庁二百五十名)の交渉団を送り込んだ。それを率いたのが金宗壎である。

金宗壎は慶北の大邱で一九五二年に生まれ、延世大経営学科を卒業して、七四年に第八回の外交官高等試験に合格、駐米大使館の経済参事官、国際機構の集まるジュネーブの公使、二〇〇〇年には外交通商部の通産交渉本部の地域通産局長、以降もサンフランシスコ総領事、APECの高位官吏会議長など通商関係畑を歩んだスペッシャリストである。

選任当初から性格が直裁的で模糊とした外交表現よりも直接話法で核心をつく人物として知られ、一面では盧武鉉に通ずるものを持っていた。

米国側は交渉当初から米財界による「例外のない完全解放」の要求を背にしていた。その一方で、ソウルでは、盧武鉉大統領の身内とも言うべきグループがFTA阻止国民運動本部を組織し、「盧政権を反民族・反民主・反民衆政権」と糾弾しはじめた。これが苦難なマラソン交渉の始まりであった。

カトラー女史が「なんの因果で通商交渉のようなしんどいことをしなければならないのか」と嘆くと、「答えをお教えしましょう。私たちは前世でローマの剣闘士だったのです。しかしローマの剣闘士は生きるか死ぬかで戦ったけれど、今は、あなたが生きて私が死んでも、逆にあなたが死んで私が生きていても困るのです」と答えたという。これがグラディエーター(剣闘士)の異名のはじまりであるが、交渉の本質を実に良く表した言葉である。

このようなやりとりの中で、米国側は韓国交渉団が非常にタフだという印象を持ちはじめた。カトラー女史も「実に良く内容に精通している。どうしてこれほど準備できたのか」と感嘆している。そこには、チリとのFTAはもちろんのこと、米国とカナダ、メキシコの間に結ばれたFTAに精通している金宗壎がいた。

しかし、その金宗壎でさえも、交渉の難しさを「刃を両手で受け止めるようで、力強く握れば手が切れてしまうし、緩く握れば取り逃がしてしまう」と表現している。

しかも、ソウルからは「FTAを原点から見直す」とか「次の政権に持ち越す」との怪情報が矢継ぎ早に入り、「死にものぐるいで交渉しても、後になって聴聞会に立たされるのがオチだ」という自嘲の雰囲気まで漂っていた。

盧武鉉の与党側でさえすっかり野党的になり、相次いで数万人規模のFTA反対集会を開き、ワシントンDCでも在米韓国人による大規模な反対デモが組織された。

交渉締結日が近づくとデモはますます激化し焼身自殺者まであらわれた。

米国側も一筋縄には行かない。十一月に行われた米国の中間選挙では、カナダ・メキシコ・米国間の北米自由貿易協定にさえ反対している民主党が下院の過半数を制した。ブッシュの共和党政権が独走することなどできない状況であった。

そのような悪環境の中でも、交渉期限である二〇〇七年三月末までになんとか成案を得て、六月に署名にこぎつけたのは、ひとえに金宗壎とカトラー女史の間の「連帯感」が作用したのは疑いない。

交渉の焦点となったのは米国側では自動車、韓国側では農畜産物であった。

ビッグ3の業績がさえず、自動車産業の衰退を防止し雇用を守ることが米国側の主要なテーマであった。数十万台の自動車を米国に売る韓国が米国車を数千台しか輸入しない現実は、とても許せるものではなかった。そこには、韓国の関税は八パーセントなのに、米国は二・五パーセントという不平等が確かに存在していた。しかし、これを相互撤廃しゼロにしたからと云って、問題が解決するわけでもなかった。米国車が韓国で売れないのは、関税障壁ばかりではなかったからである。そこに米国側の強硬姿勢と弱みがあった。

一方の韓国にとっては、コメの自由化は交渉のテーブルにのせることさえ最初から拒んでいた。その代わりに、牛肉、豚肉、オレンジ、リンゴなどの畜農産物では大幅に譲歩せざるをえないと覚悟していた。

ところが、韓国では、その敏感な機密交渉の内容が国会に報告される度にマスコミに筒抜けとなってしまっていた。

これにはカトラー女史も怒ったが、それでも「韓国の国益のために努力する金宗壎首席代表と交渉チームにとって非常によくない」との理解を示していた。韓国には情報流出する国会議員を処罰できる規定がなかった。

後ろから弾が飛んでくる中、最終的には「韓国が自動車・製薬分野で米国の要求を聞き入れる代わりに、米国がコメなど敏感農産品分野で韓国側に譲歩する案」でビッグディールが行われ、四月一日に締結され、六月三十日に調印された。

九次にわたるマラソン交渉であった。この協定は従来のいかなる多国間の協定と比較しても「高い水準」の協定であった。

自由貿易協定の再交渉

いわば双方の妥協につぐ妥協の上に成り立った協定であった。不満は双方にあった。

それは交渉締結から二ヶ月、調印も済まない五月になって、米国側から非公式に再交渉が打診されたことでも判る。米議会と行政府が新しく合意した「新通商政策」を反映しなければならないというのである。

韓国側は「話にならない」とし、「再交渉不可」の立場を繰り返したが、それは韓国側からも再交渉を要求する世論がもり上がっているのを牽制する必要からでもあった。

金宗壎は「韓国の国民は手続き上に瑕疵がある再交渉を決めた場合、屈辱と感じ、選挙を控えて、反米感情を刺激するおそれがある」と警告した。一語一句、句読点でさえ修正することは、微妙なバランスの上に成り立つ協定を廃案としてしまう危険性があった。

しかし「米国が要求する内容が両国にとって利益になる可能性があれば厳密に確認する」との柔軟さも付け加えていた。

結局、追加再交渉は本交渉調印を目前とした六月二十二日からソウルで、続いて二十五日から米国で行われた。しかしこの段階では、協定内容に変更を加えるよりも、付帯事項などで補う方向で、三十日の調印を何とか迎えた。

金宗壎は交渉の功によって、八月には外交通商部（外務省）の通商交渉本部長に昇進する。長官級のポジションである。

しかしまだまだ大きな関門が残っていた。両国の批准問題である。

韓国では、九月に国会へ批准案が上程されたが、大統領選挙を控えており、求心力を失った盧武鉉政権のもとでは、年を越えても審議は遅々として進まなかった。

韓国の大統領選挙では、保守派が割れて二名の候補を立てたけれど、それでも保守ハンナラ党の李明博が圧勝し、二〇〇八年二月には新政権が出帆した。閣僚級としては異例なことであるが、金宗壎はそのまま留任する。李明博大統領にとって、金宗壎は盧武鉉から引き継いだ最大の贈り物であった。

韓国の先進国部分すなわち経済界などは経済通の李明博に多大な期待を寄せていた。それは後進国部分の農畜産業や零細企業にとっての危惧でもあった。

その中で四月に国会議員の総選挙が迫り、農村票を意識するＦＴＡ反対論が渦巻いていた。

ここで、李明博大統領は大きくつまずく。

二〇〇八年四月十九日のブッシュ大統領との初会談の手土産として、狂牛病によって全面輸入禁止としていた牛肉輸入を、再開すると回答したのである。

これによって吹き荒れたのが韓国の有名な「蝋燭デモ」

である。五月に始まった牛肉輸入反対デモは、あっという間に教育問題、大運河構想、公企業民営化問題に飛び火し、李明博の支持率は二十五%まで暴落してしまった。盧武鉉の頃は、輸入反対論は畜産農家の保護が主点であったが、今度は食の安全がクローズアップされたのである。

そのため、韓国側が逆に米国との再交渉を求めざるを得なくなってしまった。

しかし国会に喚問された金宗壎は「世論の動向のために改めて交渉することなど有り得ない」し「国際基準を覆すほどの科学的説明や発見がない限り輸入禁止なども有り得ない」と、米国からの報復を甘受してでも、毅然とした態度でのぞむべきだと述べている。

窮地に陥った李明博は六月になって金宗壎を送り米通商代表部のシュワブ代表との交渉に当たらせる。李明博の輸入再開宣言を、協定自体は修正せずに、実質的に米国側に猶予を求めるという困難な交渉である。

ここでも金宗壎は強気であった。なんとか米国側から譲歩を引き出せなければ、自由貿易協定そのものが霧散してしまう。しかし米国側が、いったん勝ち取った成果を簡単に手放すわけがない。なかなか交渉のテーブルにつかない。そのため金宗壎は会談の席を蹴って空港に向う。演技であったかも知れない。

この行動には米国側も驚き、やっと実質的な交渉が始まり、結局「狂牛病が発生すれば輸入中断」「月齢三十ヶ月以上と三十ヶ月未満でも危険部位が入る牛肉は除く」という実質的な取り決めで、劇的な歩み寄りを見せ、自由貿易協定の成案に手を加えることなく当面の問題を回避した。

この年の十一月には米国の大統領選挙が迫っていた。もはや批准を早急に求める雰囲気ではなかった。

自由貿易協定再々交渉と批准

二年前の中間選挙で下院を制した米国の民主党は、大統領選挙でも勝ち、二〇〇九年一月に発足したオバマ政権は「米韓自由貿易協定（ＦＴＡ）は現在の内容では支持しないし、同協定には致命的な欠陥がある」と批判的な立場を明らかにした。これによって協定の批准問題は棚上げされてしまう。

しかし、多国間貿易協定による一律関税引き下げを目指すドーハ・ラウンドは行き詰まっており、各国は二国間の自由貿易協定で状況の打開を目指していた。

その中で、世界最大の経済大国である米国と世界第七位韓国の自由貿易協定帰趨は注目されていた。

その上、リーマンショックによって雇用問題に苦しむ民主党は、ますます保護主義に傾き、自動車と牛肉の自

由化に関する内容の大幅修正、金融や投資分野の非関税障壁の除去を要求し再交渉を要求していた。

しかし、オバマ政権は雇用創出を最優先政策に掲げていて、保護政策一本槍というわけにも行かない。

二〇一〇年一月に、五年間で輸出を倍増する新通商政策を発表し、その中で米韓自由貿易協定の修正と批准を、アジアでの通商政策のベースと位置づける。それまで消極的だったオバマ政権の政策が大きく変わったのである。

そのため、オバマ政権は協定の全面的な再々交渉を求めるが、韓国側から完全に拒否される。そのため米国側は再々交渉を自動車と牛肉の二つの問題に絞り込むが、金宗壎はいかなる交渉も拒否する姿勢を崩さなかった。

しかし状況は急変する。この年、二〇一〇年十一月二十三日に北朝鮮が延坪島を攻撃したのである。この事件の五日後、事務レベルでの再々交渉の日程が決まる。朝鮮半島の緊張が米韓交渉に大きな影響を与えたのは間違いない。

朝鮮半島の緊張の高まりによって、北朝鮮に対して両国の強固な同盟関係を誇示する必要があった。そのためにも、米韓自由貿易協定で対立するのは好ましいことではない。なんとしても妥協点を見いだす必要があった。もはや単なる経済問題を越え、両国の同盟関係を強化するという大きな課題が浮上してきたのである。

アメリカ側は自動車分野に絞って譲歩を迫った。牛肉問題は李明博政権にとって極めて深刻な問題であり、妥協する余地がなかった。そして十二月三日、合意にいたる。

交渉の合意点は、米国は五年間、現行の二・五パーセントの関税を維持し、輸入が急増した場合にセーフガード(輸入制限)を発動することができるとするものであった。最大の勝者はアメリカの自動車産業であった。

野党は「当初の協定文から点一つ変えない」と云っていた李明博政権が「国民を欺した」とか、「韓日併合以来最高の屈辱」だとか叫び「金宗壎の解任」を要求したが既に勝負はついていた。

それにしても、再々交渉は韓国に一方的に不利になるという当初の予想より、はるかに良いものとなっている。自動車では譲歩したものの、医薬品や牛肉市場の追加開放の圧力には耐えきった。何よりも、コメ開放について完全に逃げ切ったのであるから、日本から見れば羨ましいほどの成果である。

かくして、米国議会は二〇一一年十月十二日に批准手続きを終える。

一方の韓国側も批准に至るまでの道のりは平坦ではなかった。

二〇〇八年十月に国会に提出され、審議が進められていた米韓自由貿易協定(FTA)批准同意案は、後日多数の誤訳が見つかり、二〇一一年五月四日に一度撤回され、六月三日に再提出され、九月になってやっと外交通商統一委員会に付託される。

しかし、野党側の抵抗は激しく、投資家と国家の間の紛争解決手続を定めた条項が不平等だとして、米国との再々々交渉を要求する。

李明博政権は、二〇一二年一月一日の発効を目指して、速やかな批准同意案の可決を目指していたが、野党側は委員会室を強硬占拠するなど韓国特有の「国会風景」で対抗し国際的な嘲笑を買う。

こう着状態を打開するため、李明博大統領は十一月十五日、異例の国会訪問を行い、環太平洋経済協定(TPP)参加決定の日本に対する危機意識をむき出しにして野党側に協力を要請するが、野党側は応じない。

結局十一月二十二日、議長の職権により、批准同意案は直接本会議に上程され強行採決され、長い長い交渉は終わった。

しかし街頭ではいまだに米韓自由貿易協定を破棄するためのデモが続き、野党連合は四月の総選挙を睨んで、協定の発効を中止せよと叫んでいる。そのため米国は、わざわざこの協定が二国間の利害に全て符合していると擁護の立場を繰り返し明らかにし、早急に協定が発効されることを期待していると援護射撃をしている。

サムライ金宗壎

金宗壎は両国の自由貿易協定(FTA)批准を見て、十二月三十日に通商交渉本部長を辞任した。

二〇〇六年四月にFTA交渉首席代表となって以来、実に五年半以上にわたり交渉の主役であり続け、その間にも欧州連合、ペルー、インドとの自由貿易協定を結んで、自由貿易協定の僻地だった韓国を、いまや世界第一の通商協定国に仕立て上げた。隔世の感がある。

長官級の通商交渉本部長を四年半も務めたのも韓国では例がない。まさに自由貿易協定のサムライであった。

サムライとか剣闘士といわれ、官僚の枠をはみ出した行動で知られているので、既に「伝記」が出ていると思ったが見当たらない。だから、金宗壎の個人的な逸話については、多くを紹介できないのが残念である。

趣味は、パラグライディング、カイトボーディング、ウィンドサーフィン、ロッククライミング、スキンスキューバ、千三百CC大型バイクなどスリルあふれるスポーツ。特にパラグライディングでは四百回余りの経験を持ち、滞空記録も三、四時間と選手級の実力を持つ。

引退後は「可愛いい孫娘と過し、パラグライディングやロッククライミングを楽しみたいので、もっと忙しくな

る」と云っている。

対米交渉においても、政治家との折衝においても、激しい口論や瀬戸際戦術を辞さず、時には帰宅をあきらめ、ハンバーガーを頬張りながらマラソン交渉に臨み、毎日着替えを届けてくれる奥さんには一度も会わなかったなどのエピソードも伝わる。

北朝鮮が延坪島を攻撃した時に、自由貿易協定で後退するようなことがあれば「海兵隊に志願する」と啖呵を切り、国会では野党有力議員の鄭東泳が「お前は米国派遣の李完用(韓国併合時の売国奴の代名詞)か」と罵しると「何を！お前こそ盧武鉉政権で、韓米FTAは不可避、米国市場を広げていくのが国益と云っていたではないか」と切り返している。この勝負は攻める革新側の方がまるで大院君(鎖国堅持し外国を排斥した保守派)のような印象を持たれてしまい金宗壎の勝ちであった。

「責任の座にある時は自由を享受する自由はない」と云っていた金宗壎は、その頃から自然を楽しみながら暮らすことを夢見ていた。

しかし、保守党が金宗壎を次の選挙に担ぎ出そうとしているし、米国からは来年改選のWTO事務総長に推薦する動きもある。韓国の国民は期待しているかも知れないが、金宗壎の美学を活かす方が私の好みである。

いま、日本では環太平洋経済協定(TPP)が焦眉の政治課題である。

そのTPPで米国側の主役を務めるのは、アジアの専門家、金宗壎の戦友とも云うべきウェンディ・カトラー女史である。十代の息子を持つ。手強い相手である。

はたして日本側の首席代表役は誰が務めるのであろうか。まだ名前さえ見えてこない。

日本はポピュリストの政治家が跋扈する中、あるいは真の専門官僚が活躍する場を作れないかも知れない。

世界ではじめて「大使」の制度をつくった通商国家ベネチアは「戦争も平和も思いのままになるような強国ではない」ので、原則論に陥ることなく、相手の出方に柔軟に対応できる外交官がリーダーシップをとった。明治維新の日本のように。

環太平洋経済協定(TPP)参加十二国の中で、米国を除けば日本の存在感は極めて大きい。自由貿易協定に遅れをとったからと云って、実務交渉面では十分に出番があるはずである。

出でよ、日本の金宗壎。

(平成二十四年二月十八日)

(追) 平成二十四年三月十五日に米韓自由貿易協定は発効する。

関東管領始末記⑥
陽はまた昇る

千坂精一

一

尊氏が新田義貞と雌雄を決する英断を下したことによって直義の敗戦で沈滞していた雰囲気は一掃され、それまで足利か新田か去就に迷っていた関東の豪族たちは一斉に尊氏の許に馳せ参じたので、意気天を衝いた。

尊氏は、新田義貞の軍勢を箱根で阻止する策に出た。

義貞はおそらく軍勢を東海道と東山道に分けて西と北から鎌倉を包囲しようとしてくるにちがいないから、蘆ノ湖の南を通る箱根路に直義の軍勢を配置しておいて、みずから率いる本隊は蘆ノ湖の北を迂回する足柄道の竹之下(静岡県駿東郡小山町)に陣立てすることにした。

足柄道というのは奈良、平安時代の官道で足柄峠は駿河と相模の国境であるところから〝あずまの関門〟といわれ、竹之下から矢倉岳(八七〇メートル)の南麓を越えて矢倉澤から坂本(南足柄郡関本)にいたる道で、ほかに御殿場から乙女峠、仙石原を経て明神ヶ岳(一一六九・一メートル)を登り坂本に下る道もあった。

新田義貞の遠征軍が伊豆國府に到着したとの報を受けた尊氏は、直義以下諸将とともに鎌倉を発向した。

尊氏の思惑どおり、新田軍は二手に分かれて義貞の主力軍が箱根路の湯坂道へ、弟脇屋義助が公家侍や北面の武士たちを集めた混成軍で竹之下へ向かったという。

湯坂道は箱根峠、元箱根、蘆ノ湯を経て鷹ノ巣山、浅間山、湯坂山の尾根伝いに湯本へ下る急坂の多い難儀な道であったが、伊豆と相模を結ぶ最短距離であった。

尊氏は北叟笑んだ。義貞の主力軍が竹之下へくるとなれば雌雄を決する激戦を覚悟しなければならないが、脇屋義助の混成軍相手なら一挙に打ち破ってただちに義貞

本隊の背後にまわり挟撃できると踏んだのだ。
そうとは気づかぬ脇屋義助は、足柄峠を越えて関東入りする道程をたのしみながら悠然と竹之下へ現れた。
そこへ満を持した尊氏の足利軍本隊が襲いかかった。
たちまち打ち破られた脇屋軍は佐野原（裾野市）に撤退して主力軍と箱根で合流しようと図った。
いっぽう湯坂道を上ってきた義貞の主力軍は、さすがに精鋭ぞろいで直義率いる足利軍と戦端をひらくと終始押し気味にすすめ、やがて優劣の差が歴然としてきた。
そのとき、竹之下の敗報がとどいたのである。
義貞は尊氏の本隊が義助軍を追って箱根峠へ現れれば挟撃される危険を感じて撤退の余儀なきにいたった。
こうして天下分け目といわれた足利尊氏と朝廷軍を率いる新田義貞の激闘は大中黒（丸に一本線）が敗れ、二つ引両（丸に二本線）の旗標が箱根に翻翻と翻った。
後醍醐帝は義貞を選んだことを後悔されたであろう。
このとき、新田義貞と呼応して西と北から鎌倉を包囲しようとした奥洲の北畠顕家は、斯波家長に攪乱されて出発が遅れたために間に合わなかったのである。
新田義貞は箱根から撤退しながら無念の臍を噛んだ。
尊氏率いる本隊は当然小田原から湯坂道をくるにちがいないから、尊良親王の御身安泰を考えて弟脇屋義助の混成軍を竹之下へ迂回させたのが失敗の因であった。
義貞は尊氏にうらをかかれて躱されたのである。

このままでは京へ帰れぬ義貞は、尾張國で足利軍を食い止めるべく奥洲からくる北畠顕家軍の到着を待った。
だが、勝利した尊氏に呼応して諸将が叛旗を翻した。
筑紫の大友貞宗、近江國の佐々木道誉、朝廷側だった赤松圓心も尊氏側に寝返る雪崩現象が起こった。
京近辺にも不穏な動きが出てきたので、後醍醐帝は、
「急ぎ帰洛して防衛に当たるよう」
義貞に勅使を奔らせておいて比叡山に難を避けた。
緒戦の勝利で勢いに乗った足利軍は新田軍を追って京へ迫り、年が改った元旦に近江國勢多で直義と高師泰軍が名和長年、結城親光軍を破り、七日には山城國宇治で畠山高國軍が楠木正成軍を、さらに尊氏本隊が山城國山崎で義貞本隊を破って十一日に京へ進入した。
尊氏は後醍醐帝に拝謁して、新田義貞との合戦は朝廷に謀叛したわけではなく私怨に因るものであることを理解してもらおうと思ったのであるが、尊氏が京へ入ったとき帝はすでに神器を奉じて近江國東坂本（大津市）へ行幸されてしまっていた。つまり避難されたのである。
このことは後醍醐帝が尊氏を敵視した現れであり、尊氏は心ならずも朝敵にさせられてしまったのである。
尊氏は己む無く持明院統の皇子を皇位に就けようと図ったが、全員比叡山へ避難していて果たせなかった。
そうこうしているうちに義良親王を奉じて結城、伊達、南部の奥洲勢を率いた北畠顕家軍が東坂本の行在所に到着すると、足利軍在陣の大津三井寺（園城寺の通称）を標的にして攻略し、伽藍を焼払って気勢をあげた。
そしてその朝廷軍が雪崩を打って京へ攻め入ってきたので、足利軍とのあいだに壮烈な争奪戦が展開された。
尊氏本隊は正月二十七日に四條河原で義貞軍に敗れて丹波國篠村へ退いたが、この合戦で足利方は尊氏の伯父上杉憲房をはじめ二階堂道行、三浦貞連、曽我入道などの諸将、新田方は義貞の執事船田義昌などを亡くした。
尊氏は、鎌倉幕府北條執權家を捨てて後醍醐帝に荷担することを誓ったこの篠村八幡宮の社前でふたたび戦勝を祈願しながら、このたびの敗戦に思いを馳せた。
戦術の優劣ではなく朝敵となったのが敗因であった。
尊氏は、不本意な汚名の払拭をあれこれ思案した。
そして、思い至ったのは官軍になることであった。
官軍になるには皇族を奉戴しなければならない。
だが義貞と立場を替えるなど所詮絵空事にすぎない。
朝敵の汚名に拘る尊氏は、ついに一計を案じた。
（持明院殿〈光厳上皇〉の院宣をいただき、この戦いを持明院、大覺寺両統の闘争にすれば汚名は免れる）
たしかに後醍醐帝に廃された光厳上皇を擁立して対立させれば、この闘争は朝廷の内乱に擦り替えられる。
尊氏は北叟笑んで持明院統と親しい日野中納言縁故の稚児薬師丸（後の熊野山別當法橋道有）を呼び出して、
「都へもどり持明院殿の院宣をいただいてまいれ」
そう命ずると書状を託して日野資明の許に遣わした。
光厳上皇の院宣を信じて尊氏は態勢を整えると播磨國（兵庫県）へ進出したが、京から駆け付けてきた北畠・新田連合軍と打出濱（西宮市）や豊島河原で遭遇戦になり、いずれも敗れて摂津國湊川（神戸市）へ退いた。
ここで尊氏は大友貞宗の提言を受けて、いったん九州へ下り少貳、島津らを加えて再編成することにした。
直義は都落ちを反対したが、尊氏は翻意しなかった。
このときなぜか義貞は敗走の足利軍を追わなかった。
後醍醐帝から恩賞に下賜された天下一の美人と謳われた愛妃勾當内侍にのめり込んでいて、
「足利尊氏を追撃して息の根を止めよ」
そう急かす帝の度重なる命にも動こうとしなかった。
つまり勾當内侍から離れたくないという想いのほうが尊氏に決戦を挑む気魄よりも強かったということだ。
平家が西海落ちしたときは源氏軍がただちに追い討ちをかけたので立ち直る隙を与えず壊滅できたのだが、義貞は三月になってようやく腰を上げたものの追撃を阻止しようとする白籏城（兵庫県赤穂郡上郡町）の赤松圓心の抵抗に遭って五十日余りも停めさせられた。
このおくれが尊氏に立て直す機会を授けてしまった。
わざわざ尊氏に盛り返す余裕を与えてしまったのだ。
義貞ならずとも絶世の美人をあてがわれれば愛慾に溺れるのはあたりまえで、後醍醐帝は以前の倒幕の恩賞の

ときに尊氏のほうを厚遇したことの埋め合わせに此の上ない恩賞として自身寵愛の女性を与えたのだろう。

だが、ときが悪かった。

北畠顕家を奥洲の監視に返したことと、この義貞が尊氏を追撃しなかったことが後に禍根を残すことになる。

二

尊氏は九州へ向かう途中備前國三石（岡山県備前市三石）あたりで山陽各国の要所に与党の各将たちを配置することにして、後日反撃するときの備えを固めさせた。

そして、備後國鞆（広島県福山市鞆町）であとを追ってきた日野資明の弟三寶院賢俊から院宣を受け取った。

こうなればもはや尊氏は朝敵ではなくなったわけだ。

後醍醐帝にとって尊氏が朝敵なら、義貞も光厳上皇にとって朝敵であるから、汚名は相殺され双方対等になる。

つまり、これは天皇家の内部抗争なのである。

尊氏は院宣を振り翳すと同時に鎌倉幕府を滅亡させた後醍醐政権に召し上げられた武家たちの所領を返還するという『元弘没収地返付令』を散蒔いて檄を飛ばした。

そうしておいて尊氏は、新田軍の追撃もなく悠々と長門國赤間関（山口県下関市）から九州へ向かい、筑前國葦屋津の多々良濱（福岡市東区多々良）に着いた。

そこは玄界灘に面した博多湾に注ぐ多々良河口の浜で、鹿児島本線の箱崎、香椎間にあった海浜である。

鎌倉時代、蒙古襲来のときの古戦場として名高い。

その多々良濱に上陸したときの足利軍は、上杉、仁木、畠山、吉良、石塔の一族と高や武藏、相模の軍勢だけで、矢は射尽くし、馬や鎧は乗船のときに捨ててきていて、刀槍だけの僅か五百に満たぬ人数であった。

平家の先例にもまして尾羽打ち枯らした見窄らしい軍勢は再起不能の感があったが、尊氏は楽観視していた。

光厳上皇の院宣があるからには官軍であり、九州の豪族たちにもすでに檄を飛ばしたからほどなく馳せ参ずるであろうし、同行の大友貞宗とおなじ九州を代表する大豪族の少貳や島津などが与力することになっていた。

多々良濱に上陸してまもなく宗像神社（福岡県宗像市）大宮司の使者が迎えにきて館へ案内され休息した。

そこで尊氏はあらためて少貳貞經に使者を送り、頼みにしているとの助力を申し入れた。

貞經は人生意気に感じてすぐさま嫡男太郎頼尚に三百騎を添え、尊氏率いる足利軍団の迎えに向かった。

少貳が足利方に荷担したと伝え聞いた大覺寺統に属する肥後國菊池（熊本県菊池市）の菊池武敏が三千余騎を率いて出陣し、途中水城の渡し（福岡県太宰府市）で追いつかれ、殿にいた時籠豊前守ら百五十騎が討たれた。

少貳頼尚は兵力半減のまま足利軍に加わったが、勢いに乗じた菊池武敏に本拠有智山城（太宰府市内山）を襲われ、形勢不利とみた家臣たちのなかから謀叛人が出て

貞經が自害するという手痛い打撃を受けてしまった。

とって返した菊池勢は足利軍の駐屯する多々良濱めがけて迫ってきた。香椎宮（福岡市東区香椎）の本陣で四、五万とも窺われる菊池の大軍を目前にした尊氏は、

「この手勢をもってあの大軍に立ち向かうのは、蟻が大木を揺り動かし、蟷螂が突進する車を遮るようなものである。なまじっかな合戦をして名もない敵と討ち合うよりは、いっそこの場で腹を切ろう」

そう言って、切腹しようとした。

そばにいた弟直義が慌てて制止し、

「合戦の勝敗はかならずしも兵力の多寡では決まらぬ」

ことを中国の故事や源頼朝などいずれも少数で大軍に逆転勝利した例を引いて懇々と説得しておいて、

「われらには一騎当千の勇士が多く、優っております」

そう諫めて勝利を確信させ、自害を思い留らせた。

この菊池軍との対決は、九州を制覇できるか否かの分け目になる決戦と覚悟しなければならなかった。

初戦は尊氏を温存して直義が指揮を執ることにした。

直義が馬上で香椎宮の社殿前を通り過ぎようとしたとき、番の鴉が神木の杉の枝を咥えて兜の上へ落とした。

直義は下馬してその杉の枝をいただき、

「これこそ香椎宮が御守護下さる兆しにちがいない」

そう言って恭しく礼拝すると、その杉の枝をあらためて兜に差し、全軍にも同様にさせてそれを目印にした。

「よいか。香椎宮のご加護を戴く我等は向かうところ敵なしじゃ。当たるをさいわい薙ぎ倒し全滅させようぞ」

そう士気を鼓舞すると馬上の人となり、勇躍出陣した。

多々良濱で激突したこの合戦は、足利方が上杉憲藤、重行ほか青年武将たちを喪ったものの直義率いる軍団の決死の勢いに押された菊池軍が後退して形勢不利になると、松浦党や龍造寺党などが続々と足利方に寝返った。

菊池軍は膨れ上がった足利方を見て勢いを削がれ、戦意喪失するとやがて本拠の菊池へ引き揚げていった。

さらに足利方は一色範氏と仁木義長勢が多々良濱で阿蘇惟直を自害させ、秋月備前守をも太宰府で討ち取ってその勢いは留まるところを知らず、箱崎に本陣をおいた尊氏と太宰府に拠る直義の許へ豪族たちが集まってきて、九州勢の大半は足利方に与力する強大な軍団になった。

光厳上皇の院宣を受けて官軍に返り咲いた尊氏が、武家の棟梁となり『元弘没収地返付令』を発布して各地豪族の所領を安堵する約束をしたことが功を奏したのだ。

尊氏は京へ攻め上るに際して眼の届かぬ遠隔地九州の監視を重視して、同族の一色範氏と遠戚の仁木義長を残留させて九州武士団の統轄にあたらせることにした。

一色範氏はのちに室町幕府の九洲探題に任じられた。

尊氏は、かつての鎌倉幕府北條執權とおなじく、この九州支配に一門を起用して血縁による体制を布いた。

二

新田義貞が勾當内侍との別れを惜しんで三月末まで尊氏を逐う西国下向を延期しているあいだに、西国では『元弘没収地返付令』の効果が覿面に顕れて、丹波國では久下、長澤、荻野、波々伯部らが九州残留の仁木義長の兄頼章の高山寺城に立て籠もり、播磨國では赤松圓心が白籏城の備えを固めて新田軍を阻止しようとしていた。

また美作國（岡山県）では菅家、江見、弘戸などが奈義能山菩提寺に城を築き国中の所領を奪って領有した。

さらに備前國（岡山県）では田井、飽浦、内藤、頓宮、松田、福林寺などが石橋左衛門佑の許で甲斐河と三石に城を構えて陸路と海上双方を封鎖しようとしていたし、備中國（同県）では庄、眞壁、陶山、成合、新見、多地部らが勢山を遮断して鳥も通えぬほどの備えをした。

備後、安藝國（広島県）周防、長門國（山口県）はいうに及ばず、四国、九州までも悉く尊氏に味方せねば存続が危ぶまれるほどの形勢だったのでみな従い靡いた。

こうした各国での蜂起が京へ報じられたので、このうえ東国までもが敵方にまわってしまってはと不安になった後醍醐帝に鎮守府将軍を命ぜられた北畠顯家は義長親王を奉じて陸奥國多賀城（宮城県多賀城市）に赴いた。

建武三年、延元元年（一三三六）三月四日、新田義貞はようやく軍勢を率いて京を進発すると、六日に赤松圓心の支城坂本城（姫路市）を囲んで攻撃をかけた。

急報を受けた圓心は備前、播磨の軍勢を率いて白籏城を出ると、坂本へ押し寄せて新田軍と交戦した。

一歩も退かぬ圓心に新田勢は手古摺りもたついているあいだに、九州を平定した足利尊氏は四月三日に大船団をもって博多を出港し京攻めの東上の途についた。

二月二十日に長門國赤間関を出て筑前國博多湾内多々良濱へ到着してから四十日あまりのことであった。

赤間関から二手に分けて尊氏、高師直は海上を、少貳、大友の軍勢を率いた直義、高師泰は陸路をすすんだが、途中で沿道の豪族たちが続々と参加してきた。

尊氏の船団は五月一日安藝國嚴島（広島県廿日市市）に着き、五日に備後國鞆ノ津（同県福山市鞆町）に上陸すると周防、長門、安藝國の武士団が馳せ参じてきた。

十八日に直義率いる軍団が福山に到着して合流した。

足利軍の集結を知った新田義貞は、

「尊氏、直義が大軍を率いて東上してきたので要害の地でこれを防ぐべく兵庫まで退く」

旨の急使を立てて内裏に奏聞すると、兵を退いた。

新田義貞の報告に駭いた後醍醐帝は正成を呼び出し、

「急ぎ兵庫へ罷り下り義貞と合力して戦うよう」

仰せつけた。

正成は、足利軍と正攻法では勝ち目なしと判断して、

「尊氏が九州一円の兵力を率いて東上したとあっては、

定めてその数雲霞の如き大軍でござりましょう。合戦つづきで疲労困憊のわが方が小勢で新手の大軍と尋常に戦ったのでは敗北は必至でござりまする。ここはひとまず新田殿を都へ呼び戻し主上はふたたび比叡山にお移り下さい。正成も河内へ下って畿内の兵力を整え淀川尻を封鎖いたしましょう。このようにして新田殿と上洛した足利勢を挟み込み兵糧を費やさせれば、敵は疲れて戦力低下し、わが方は日を追って馳せ集まり多勢になりましょう。そのうえで新田殿は比叡山から正成は河内側から攻め寄せれば敵を一戦で滅ぼすことができまする。新田殿も多分そう考えておられるでしょうが、途中で一戦も交えずに退却しては腑甲斐ないと非難されるのを恥じて兵庫で防戦せんとしておられるように思われます。しかし合戦は中途はどうあれ最後の勝利が肝要でございます。よくよくお考えあって御決定下されますよう」

そう熱っぽく奏聞した。

正成は戦術にすぐれた武将であるから、敵情を探りその動向を知悉したうえで勝てる方策を練る。奇襲や遊撃戦法は正攻法では勝てないと判断したときに採るのだ。

大軍を撃退した赤坂城の防衛戦が広く知られている。

正成は後醍醐帝の許で倒幕戦をともにしたことから足利尊氏、新田義貞双方の采配の差をよく知っていた。

正成の奏上を聴取した公卿たちの総意は、

「いくさごとは武人の正成に任せるべきであろう」

に傾いたのだが、ひとり坊門清忠が異議を唱えた。

「正成のいうところももっともではありますが、勅命を受けて出陣した義貞がまだ一戦も交えないうちにわれらが都を棄て主上が二度までも比叡山に避難なされるというのでは、帝の尊厳もうしなわれ官軍の面目も失墜してしまいます。たとえ尊氏が筑紫勢を率いて東上してくるといっても、よもや昨年関東八箇国の軍勢を従えて攻め上ってきたとき以上のことはございますまい。そのおりの合戦にあっては初戦から敵が西国へ敗走するまで味方は小勢ながらつねに大敵を破っております。これは武略がすぐれているのではなくてひとえに主上の御運が天意に叶っているからです。されば敵を都へ引き入れず都の外で滅ぼすことも不可能なことではありません。正成は時を移さず兵庫へ下るべきであります」

そう奏上した坊門清忠の言い分に正成は肚を立てて、

（それでは勝てませぬ）

真底怒りが込み上げてきたが、帝や殿上人にいくさの駆け引きなど判ろうはずはないと諦めて、

「このうえは異議を申すに及ばず。御諚に従いまする」

そう断言して御所を下がると、さっそく五月十六日に千騎を率いて都を発向し、兵庫の義貞の許へ向かった。

正成は、たとえ義貞と連合しても正攻法では足利軍に勝てぬことを承知していた。

だから、京を出るときすでに死を覚悟していたのだ。

敗れて死ぬと判っている負けいくさに態々出てゆくのであるから、まさに死地に赴く死出の旅であった。

余談だが、太平洋戦争末期に飛行機で標的に体当たりする特別攻撃が繰り返されたが、そのなかで桜花特攻を指揮した神雷部隊飛行隊長野中五郎少佐が出撃時に作戦室から飛行場へ見送りにきた飛行長岩城邦廣少佐に、

「飛行長、湊川だよ」

そう淋しく笑って機上の人になったという話がある。

野中隊長は、楠木正成の心境を忖度したのであろう。

話を戻すが、正成はこれまで出陣のときはかならず十一歳の嫡男正行を連れていったが、このたびばかりは死出の旅に同行させるわけにはいかず桜井の宿（大阪府三島郡島本町桜井）まできたとき傍へ呼んで、

「獅子は子を産んで三日後にその子を数千丈の岩壁から突き落とすが、子には獅子の天性があるから教えずとも宙返りして生き延びるという。そなたはもう十歳を過ぎたのだから父の言葉を耳に留め教えに違うことなきようにいたせ。このたびの合戦は天下分け目であるから、今生でそなたの顔を見るのは最後と思う。わしが死んだら天下はかならず尊氏のものとなるだろう。しかし、そなたはいっときの命を惜しんで多年の忠節を失い降人となるようなことがあってはならぬぞ。一族郎党が一人でも生き残っている限り金剛千早のあたりに立て籠もり最後まで戦い抜け。それが亡き父への第一の孝行であるぞ」

そう言い含めると、帝から賜った菊造りの太刀を授けて、千騎のなかから三百騎を預けると河内へ帰した。

この『桜井の訣別』は戦前の小学校唱歌にあった。

四

楠木勢は二十四日播磨國兵庫に入り、湊川の西方會下山（現在神戸市兵庫区にある公園）に本陣をおいた。

右手は六甲山地が障壁になっているが、左手の打出濱は遠浅でどこからでも上陸可能な警戒地点であった。

正成は、休息もそこそこに和田岬（同市兵庫区和田崎町）小松原の新田義貞本陣に出向き到着の挨拶をした。

正成から兵庫へ下ってきた経緯を聴いた義貞は、

「楠木殿のお考えはもっともなれど、去年箱根で敗れて帰洛したときは逃げ帰ったと陰口を敲かれました。いまた備前、播磨から撤退したまま反撃もせずに帰洛いたさば面目まる潰れゆえ、たとえ不利であろうともこの地で一戦交えて挽回いたしたく、心中お察し下され」

そうまでいわれて正成は、慰めるより仕方なく、

「そのような卑屈になられることはござらぬ。貴殿は元弘のはじめに北條高時の猛威を打ち砕かれたし、この春には逆賊尊氏を九州へ追い落とされた。主上のご運が強かったとはいうもののこれはひとえに貴殿の武徳によるものではありませぬか。そのような貴殿を誰が侮れましょうや。自信をもって采配をお執り下さればよろしい」

死を決意している正成にはなんの拘りもなかった。

翌二十五日、両者のあいだで決戦の火蓋が切られた。

新田、楠木連合軍は義貞が本陣に一万余騎、弟脇屋義助が五千余騎で西宮付近の經島に、大館氏明が五千余騎で東北の燈爐堂の南の浜に、楠木正成が七百余騎で湊川の西會下山の麓にそれぞれ布陣していた。

このころの湊川の川筋は、會下山の東麓から現在の湊川神社の西を通って神戸港に流れ込んでいた。

明石東部の大藏谷沖に仮泊していた尊氏の船団が太鼓で〈乱声〉を打ち鳴らして二度鬨の声をあげると、それを合図に両軍一斉に鬨の声をあげた。

両軍の鬨の声は南は鳴門海峡、西は須磨の浦、東は神戸東部の生田の森あたりまで三百里四方に響き渡り、それを合図に須磨口まで攻め寄せていた一万の陸上部隊が大手、山の手、浜の手にわかれて東進し、直義本隊の先鋒隊と和田岬の新田義貞勢が衝突して白兵戦になった。

大藏谷沖に停泊している尊氏の軍船と義貞本陣の双方に錦の御旗が翻り、それは足利、新田の抗争というより光厳上皇と後醍醐帝の代理戦争の様相を呈していた。

直義軍についで細川定禪の四国勢水軍五百艘が新田軍の退路を絶つべく遙か東の生田川尻（JR三宮駅の東方）から上陸しようとしたので、義貞は上陸させまいと船を追って和田岬の主力軍を東へ移動させた。

このため、鵯越えから南下したところの會下山丘陵に布陣している楠木軍との連携がとれなくなり、新田、楠木両軍の距離が遠く離れていってしまった。

退路を絶たれると咄嗟に判断してとった義貞の回避行動は、分断しようと図る直義の思う壺だったのである。

尊氏の本隊は、義貞の本隊が移動したあとの和田岬に上陸して、正成本陣の會下山丘陵に向かった。

これよりはやく直義率いる陸上部隊のうち浜の手隊が湊川の東へ回り込み、正面を衝く大手隊と東西から、さらに山の手隊も會下山丘陵北方の鵯越えから攻め下った。

楠木正成の本陣には菊の花が流れに浮かぶ〈菊水の旗〉と〈非理法権天の旗〉が翩翻とひるがえっていた。

二万余の足利軍が七百余の楠木軍を四方から攻めた。

乱戦で直義の身にも危険が迫ったのを見た尊氏の、

「新手を入れかえせ」

の命に尊氏親衛隊の吉良、石堂、高、上杉、土岐、赤松の軍勢六千が斬り込んでいった。

尊氏の用兵は、直義にもっとも危険な合戦をさせておいて、救いの手を差し延べるのが常套手段だった。

こうすれば尊氏の救援によって勝利したことになる。

ともあれ、この乱戦は三刻（六時間）にも及んだ。

十六度出撃を繰り返した壮絶な死闘のすえ、ついに楠木軍は刀折れ矢尽きて僅か五十余人になってしまった。

いかに戦術に長け合戦の名手と謳われた正成と雖も、

新田軍と分断されたうえに少数の兵力で白兵戦に陥ってしまっては如何ともし難く、衆寡敵せずであった。

討ち死に覚悟の正成は、精魂尽き果てもはやこれまでと湊川東岸の廣嚴寺山麓（現大倉山公園）の民家に入り、念仏を十遍唱えたあとでまず従者が自刃して果てた。

正成は今生の別れにあたり生死を共にした弟正季に、

「聞けば人は今わの際に臨んでの一念によって来世の生の善悪が決まるということだが、そなたはもし生まれ変わるとするならばこの世の九界のなかでなにをのぞむか。なにに生まれ変わりたいか」

と問うた。

すると正季は、打ち笑って、

「ななたび生まれ変わっても、やはりおなじ人間に生まれて、朝敵足利を滅ぼしたいと存じまする」

そう胸を張って答えた。

それを聴いた正成は、嬉しそうに微笑むと、

「罪業深き悪念なれども、実はわしもまたおなじ思いだ。それではわしも人間に転生いたして朝敵を滅ぼし、本懐を遂げることにいたそうぞ」

嬉しそうにそう約束すると、兄弟は静かに相対して刺し違え、その場にどうと斃れた。

このとき、正季が兄正成の問いに答えた、

「ななたび生まれ変わって朝敵を討つ」

の意識が大忠臣たるの証しとなり、この〈七生報国〉の誓いがさきの太平洋戦争中おおいに持て囃された。

正成の首は京の六條河原で獄門にかけられたが、尊氏はその晒し首を早々に手許へ引き取ると、

「惜しい武将を亡くしたものよ」

目頭を押さえて沁々そう呟き、直義を呼んで、

「正成とは公私ともども久しく親しんできた古くからの馴染みのことゆえ哀れを催す。遺された妻子もせめていまいちど死顔と対面いたしたく思っているであろう」

そう思い遣って、正成の首を河内へ送り届けさせた。

いっぽう、神戸東岸の生田の森へ退いていた新田義貞の軍勢は、三方から足利軍に攻め立てられていた。

義貞は正成とちがって討ち死に覚悟ではなかったので、劣勢とみるや逸早く丹波路を目指して落ちていった。

この敗報はすでに後醍醐帝の上聞に達していた。

正成・正季兄弟が自刃して二日後の五月二十七日、後醍醐帝は敗走してきた新田義貞の軍勢に護衛されて再度東坂本へ行幸された。足利軍の侵攻を避けたのである。

結局、後醍醐帝は一年のうちに二度も比叡山へ避難することになってしまったのだが、ならば楠木正成の上奏どおり足利軍を京に誘き入れていたらあるいは戦局はかわったかも知れない。すべては後の祭りであった。

（了）

「安城市」を発展させた「明治用水」の建設を先駆けした人たち

忠内正之

JR東海の豊橋駅と名古屋駅のあいだに三河安城という駅がある。

この駅が立地する安城市一帯は、戦前から日本のデンマークと称されるほど多角経営で知られる農業の盛んな地域である。また戦後では衣浦臨海工業の発展に伴う工業都市として注目されてきた。

安城市のめざましい発展の原動力は一口に言えば、広大な平野に豊かな水利が導かれたことによるものである。

豊かな水利をもたらす「明治用水路」を極めて困難な条件下で苦労しながら建設をするという糸口を作った人たちが存在したのである。

安城附近には、碧海台地といわれる広い原野が拡がっていた。かつてここは水を引くことが困難な所であった。

台地には小松やすすきなどが生い茂っていて、田や畑はわずかに見られるだけであった。江戸時代ここに住んでいた人々は井戸を掘って水をくみ上げたり、溜池に水をためたりして田畑に水を入れていた。

箕輪村という所では、二十七ヘクタールの田畑に水をかけるために、二十ヘクタールの溜池と百三の井戸を掘っていた。それでも日照りとなると池の水が足りなくなって村人は夜通し井戸水をくみ上げねばならなかった。

この様に大変苦労して米・麦・粟・大豆・棉などの作物を作っていたが、人々はいつも水が欲しいと心から願っていた。

和泉村に大地主で酒造家の都築弥厚（一七六三―一八三三）という人がいた。弥厚は五十三才のころ安城台地に、矢作川の水を引くことができないかと考えた。

都築一族については次の様ないい伝えがあるという。

そのむかし、後醍醐天皇の命をうけて足利氏と戦った部将に九州の菊地氏がある。

この南北朝の争いは足利氏による北朝方の勝利に終ったが、敗れた菊地氏の家来のなかに、石川、樋口、都築姓の部将があった。これら三人の部将は、逃れてこの和泉の地に流れついた。石川氏はやがて徳川家（当時は松平氏）に仕え、この地の領主となった。その子孫に石川丈山がある。樋口氏は仏門に入り大成した。そして土着した都築家の子孫のひとりが弥厚で明治用水を生みだしたという。

このいい伝えについては裏付けとなる資料が無いので参考するのみにとどめたい。

その頃弥厚の近くの村に和算ができて測量の上手な、石川喜平という人がいた。協力を求めたところ喜平はよろこんで協力を約束した。

用水路の計画を進めるについては、この地区の領主が複雑に入り混んでいたため、弥厚は多くの役人に許可を得なければならなかった。

また思いがけない村人たちの反対が起こってきた。

溜池や井戸から、田に水を引いていた村人たちは「用水路を作ると水があふれて洪水になってしまう」と心配したり、「用水路ができて、小松原が田畑になると、薪集めや草かりができなくなる」等と考えたからである。そしてむしろ旗などを立てて猛烈な反対を受けたので昼は測量ができなくて、夜になってから測量することもあった。

弥厚たちは、この様に苦しみながらも五年あまりかかって、用水路の測量を終えることができた。そこで用水路を掘る計画図をもって幕府に工事の許可と資金の借り入れを願い出た。

しかし、許可が難渋してなかなか下りず、やっと計画についての許しが出た年、弥厚は長年の疲れがもとで病気になり、その上豊かであった資産もすっかり失ってしまった末に死亡してしまった。

弥厚がなくなって四十年ほど後、城ケ入村で開こんをすすめていた岡本兵松はこの台地には、どうしても用水路が必要だと考えた。そこで弥厚の計画図をもとにして、用水を開くべく県庁に願いでた。時代はすでに明治初年の頃であった。

同じころ阿弥田堂村（現豊田市）の地主伊予田与八郎は、村の田に流れ込む水を捨てるために碧海台地を掘り割って、衣ヶ浦湾へ流す排水路を造る願いを県庁に出していた。

これらの計画を知った県の役人のすすめで二人は協力して二つの計画をすすめることにした。しかし排水路はより難かしいことが分ったので、途中から用水を引く仕事だけを先にすすめることにした。用水を造る資金は二人が苦心して借り歩いた。

一、八七九年に工事は始まった。鍬で土を掘り、もっこで運び出すというように、人の力だけで行う大変な作業であった。

一、八九〇年には、中井筋、東井筋に水が流れはじめた。翌年この用水は明治用水と名づけられた。用水路の工事は、その後も続けられて三つの大きな流れが台地を通るようになった。また何本もの支流も掘られて、いまでは八千ヘクタールの田がこの用水のめぐみを受けている。

明治用水ができて、溜池や荒れ地は田に変り耕地がふえた。そして以前のような水不足による苦労や日照りの害はなくなり、農業の盛んな土地として発展することとなった。

明治用水の水が利用できる様になると、さらに多くの土地が開かれて新しい村ができた。しかし土地がやせていたので、藁灰や堆肥を海部郡や岡崎市から運ぶこともあった。またれんげ草を育ててこやしにすることも盛んに行なわれた。

明治のなかば過ぎ頃になると、農事試験所が安城におかれ、稲の品種改良をしたり、肥料の使い方などの指導を行った。

また、進んだ農業をする人を育てる農林学校が創立されたのもこの頃である。

やがて各地に農会や産業組合ができて、にわとり、かいこ、野菜、果物などの品質を高める技術指導がなされ、共同して東京などへ送りだす様になった。

昭和の初めになると、にわとり、乳牛、豚など、家畜を飼う農業が盛んとなった。

この安城の農業の仕方は「多角形農業」といって全国的に知られる様になり、この地方は「日本のデンマーク」といわれるようになった。

明治用水はこのように農業の発展を促したが、更に工業用水としても利用されるに至った。

今では一日八万トンの工業用水が流れており、その殆んどは衣浦臨海工業地域に利用され工業の発展にも大いに寄与している。

このようにして、愛知県中部の矢作川より引かれた用水は、幹線八十八キロメートルに及んで安城市を中心に岡崎平野を灌漑することになり多大な富をもたらすことになった。

この成功の陰で、私財をなげうって倒産したり、生命を狙われるような激しい反対にあって辛酸をなめた、開拓者たちの多大な貢献があったことを忘れてはならない。

都築弥厚、伊予田与八郎、岡本兵松、そしてその後の協力者であった、西沢眞蔵は夫々勅定の藍綬褒章を授けられ、その功績と善行を表彰された。

また彼等は明治十三年に創建された明治川神社の祭神として合祀されて用水の守り神となったのである。

近代日本は農業立国と富国強兵によって発展してきた。戦後は更に産業立国を加えて国力の充実が図られてきた。

日本の各地には他にも多くの知られざる先覚者や開拓者が存在して貧困から人々を救いひいては近代社会が形成できたものと思う。

現在の日本は内外の諸問題に阻(はば)まれて未曽有の難関にさしかかっている。進むべき方向は定まったとしても推進力が覚束ない。

この時にあたり先人達が示した、強烈な「利他」の精神や粘り強い努力や工夫に大いに学ぶべきである。

二宮金次郎翁はこれらの人達のピークに立つ一人と思うが、一般に知られてない人達と功績について更にクローズアップしたいものと考える。

終

短歌

行雲流水(三十四)

石黒修身

近詠二十首

芥川賞

創設の精神(こころ)活きるか芥川賞七十七(しち)年(ねん)の時空を越えて

これがまあ受賞者なのか田中氏の奇矯な風姿言動を見る

石原氏選者を辞せり「やってられない」の科白残して

若き日は発表待ちしこの賞に興味薄れて寂しくもあり

雪祭り

吾が知る六十年前の雪祭り公園に並ぶ雪像まばら
年を経て盛り来たりし雪祭りいま故郷のメインイベント
雪祭りこの雪像を造りたる匠の人らを知りたしと思う
雪像が春風吹きて融けてゆくこの寂しさは薄命の美学

歌舞伎

伝統の古典芸能歌舞伎には庶民に根付く喜怒哀楽が
六代目勘九郎なる襲名の口上ひびく演舞場にて
源平の戦に絡む武士の歌はいくつか語り継がれり
「一の谷軍記」ものでは敦盛がそして忠度無常哀切
敦盛と忠度ともに歌われし「青葉の笛」に漂う哀感

一陣の風も幽かに花道を滑るがごとく渡る役者は

身辺・日常

旅路での「タリン」の街を想い出す大関「把瑠都」の優勝を見て
ローソクの本数足らず吾が齢蝋の数字でハッピーバースデー
皆既終え一隅光る「生光」は復興の途諭すが如く
世代間格差の開く短歌界先達が嘆く素人の時代
小鳥には前世があると伝承いう窓辺の囀り誰の転生か
雨の日は終日籠り座蒲団に物書きならぬ居職の如く

歌舞伎の中の和歌——余聞
源平合戦と武士の歌

石黒修身

勿論、本説は平家物語であるが、歌舞伎は江戸時代に並木宗輔により書かれたもので、結末などは可成り脚色された筋書きになっている。

従って、こゝでは本説である平家物語（平曲）の筋書で話を進める。薩摩守忠度は、輩下の武者ら六騎を従え、五条の三位藤原俊成の宿所を訪ねたが、門戸は閉じられ、忠度が名乗ると、落人が帰り来たと宿所は身構えるが、忠度は大声で「他意はなく俊成に頼みがあるので、門は開かずとも際まで寄って聞いて欲しい」旨伝え、俊成は門を開きしばし対面した。

忠度の依頼は、自からの命運はすでに盡きたが、最後に師俊成が撰進するであろう勅撰集に生涯の名譽のために、一首たりとも入集の恩顧を願うとして、自作の百首余を記した一巻を俊成に差し出したと言う。

（一）

筆者は歌舞伎に詳しい訳ではない。寧ろ興味を持ったのは最近で、いわば晩学である。

従って歌舞伎を論ずることは出来ないし、またその意思もない。

この古典芸能に語られる数少ない和歌と、それに類する詩歌に出会ったのを奇貨として、いそいそとこの散文を認めている。

（二）

「一谷嫩軍記」は文楽と歌舞伎の演目として歌舞伎通には衆知のところである。

筆者はこの舞台を三月国立劇場で観た。これは平忠度が平家敗勢の都落ちに際し、和歌の師である藤原俊成を訪ねるくだりである。

俊成は、涙ながらにこれを受け取り、忠度らの去るのを見送ったとある。

その後世が平静となり、俊成は「千載集」を撰出するが、その際忠度作の「故郷の花」と題した一首を入れた。

- さざ波や志賀の都は荒れにしを昔ながらの山桜かな

これは既に朝敵となった平家一門の故に「読人知らず」としての入集であった。

忠度は、都落ちの後、一谷の戦いで、源氏の岡部六弥太に組み敷かれ、首を切られたが、あっぱれ平家の公達の名はと、箙を探したところ次の一首が出て来たと言う。

- ゆきくれて木のしたかげを宿とせば花やこよひのあるじならまし

これは前もって覚悟のほどを詠み、箙の中に潜めておいた歌であったのだろう。

武士の歌としては、この時代の少し後に実朝のそれがあるが、筆者は源平合戦のような戦場での起き臥しを詠んだ歌に惹かれる。

生死のはざまで、敵を慮り乍ら武士の面目を貫く生きざまに、哀切と無常観を感じるからであろうか。

忠度の作ではないが、同時代の作として千載集に収められている平家武士の歌を二首挙げる

- いかにせむ御垣が原に摘む芹のねのみ泣けども知る人ぞなき

読み人知らず（忠度の兄の経盛の作らしいと言われている）。

- かくばかり憂き世の末にいかにして春は桜のなほ匂ふらん

読み人知らず

「千載集は平家の歌人たちの天皇の治めるこの国の歴史や文化に対する思いを掬い取ろうとした」（渡部泰明・東大教授）。

（三）

舞台を換える。明治期の尋常小学校唱歌「青葉の笛」を見たい。

一番は、「一の谷の戦やぶれ　討たれし平家の公達あわれ　あかつき寒を須磨の嵐に　聞こえしはこれか青葉の笛」

これは平敦盛（清盛の弟経盛の末子）が、源氏の武将熊谷直実に討たれたくだりが哀切極まる読み口で唱われたものである。

二番は、「更くる夜半に　門をたたき　わが師に托せし　言の葉あわれ　いまわの際まで　持ちし箙に残れるは　花や今宵のうた」

一、二番とも前述の歌舞伎「一谷嫩軍記」の演目であるが、明治期以降小学唱歌として唱われて来た所以は、国民的共感をもつ筋書きからも理解出来る。

筆者は歌舞伎における役者の役廻り、系譜、更には作者による脚色等には触れない。

あくまでも史実に近いと思われる筋立てを追いこの時代の武士の生きざまと心情に近づこうとしたのがこの小論である。

余聞としては聊か長くなったが、今後も古典芸能に係る詩歌があれば採り上げてみたい。

（完）

詠み継がれる短歌

韓国の歌人（うたびと）——母から娘へ

石黒修身

（一）

筆者は、さきに「韓国の歌人—孫戸妍」の表題で小論を「まんじ一〇〇号記念—平成一八年五月」に載せている。これは、本稿で謂う「母」である孫戸妍の韓国唯一の歌人で、その経歴が日本に深い関わりのある人物としての評伝である。

孫さんは、六十余年の生涯を朝鮮半島の歴史に翻弄され乍ら、日本でそして韓国で短歌を詠み続けて来た。

筆者が孫さんの存在を知ったのは、「まんじ」主宰の三戸岡道夫氏が、孫さんと旧知で日本留学中の同級生である、同人の勝山道子さんから受け取った孫さんの歌集「無窮花（むくげ）」を筆者にお送り下さったことによる。

この歌人とその作品につき評論にまとめてみては如何かとのお勧めであった。

他方、筆者が文芸の面で知遇を得た、ドキュメンタリー作家の北出明氏が「風雪の歌人孫戸妍の半世紀」を上梓した。この著書の反響は大きく、二〇〇三年孫さん他界後もドキュメンタリー映画の試写会や偲ぶ会が東京で催されている。

このあたりの事情を背景にまとめたのが冒頭に記した拙作である。

（二）

本稿で謂う「娘」は孫さんの長女である「李承信（イスンシン）」のことである。

李さんは、韓国で詩人、随筆家、翻訳家として活躍しており、傍ら「孫戸妍短歌研究所」理事長として母の顕彰と自からの創作の拠りどころとしている。

李さんは、二〇一一年九月に「花だけの春などあろう

はずもなし――短歌で綴る日本人への手紙」と題する著書を韓国で出版した。

これは自作の詩一九二篇を日本語の短歌に訳し、韓国語と日本語の対訳形式で記されている。この著書が今回も勝山さんと三戸岡氏を経て筆者のもとに届いた。

本書の出版に先立ち李さんは、日本で三月十一日に東北地方を襲った未曽有の災害を悲しみ、日本に対する労りの詩（短歌）八十五首を詠み、そのことが被災直後に朝日新聞と韓国の中央日報に同時に紹介され反響を呼んだ。

これらの短歌は後日著書に収められたが、全作品の中から十首を挙げる。

- 花だけの春などあろうはずもなし春の来たらぬ冬もまたなし
- この廃墟にもう花などと思いしが君に心あり花は咲くなり
- 痛がるな人生というその傷を人類が君に癒されている
- 今日吾は宮城（みやぎ）の君に思い馳せ空で悲しむ母をも思う
- 荒涼の家族と家が消えた場に静かな涙で立ちつくす君
- 大難に謙虚に並ぶその列に切実な祈り我らへの教示
- 日本の配慮と忍耐危機の中さらに際立つ精神の美
- 怖きもの見える津波より怖きものこの世を打ち消す心の津波
- 優しくてものくれたがる日本の友達（チング）今は私が与うべきとき
- 孤独なる短歌の道をゆきし母その一行詩に感激せし君

李さんが、母孫戸妍の日本における師としてまた「天皇の文学の師」として尊敬する中西進（奈良万葉文化館長）は、歌集から後記の二首を引用し「隣国が蒙った災害であるにもかかわらず、こうして悲しみを詠む彼女に私は深く感動し、その愛に尊敬の念を強く抱いた。国境をこえて心を結ばせる詩の力を大きく感じた。日本人として私は李承信さんに言おう〝ありがとう〟」と結んでいる。

- 母逝きて初めてこぼれ出た真情心通う路一行の詩
- どこへ行くどこへ逃げ出すこの星は津波に地震地雷に戦争

（二）

筆者が興味を持つのは、韓国語で書かれた短詩が、詩人とその知人たちにより日本の短歌に翻訳されたことである。

韓国語は筆者には理解の外であるが、作品は何れも短詩であり、テーマらしき語句を先頭に三行の短文が綴られていて、意訳を含め短歌の三十一文字の定形と韻律に合せたものと理解する。

短歌は、文語と口語を併用しており、やゝ説明調で硬さを感じさせるが、事実と正面から向き合っており具体的で分り易い。

短歌に訳す苦労が見えがくれする反面、作者の主張が、詠もうとする趣旨が強く伝わってくる。

この点につき、まんじ同人で韓国慶尚大学の客員教授をされ、同国の言語と文化に通じている新井宏氏は次のような感想を寄せて呉れた。

「全体を通し複数の人の翻訳と思うが、日本語への誤訳は気付かなかった。対訳は原詩に忠実であろうとする余りか、やゝ理屈っぽく硬い感じのものもあったが、一方に別の詩と云っても良い程洗練された〝日本の短歌〟となっているものも多くあった。とくに震災関連のものは韓国語の詩としても良いと思えるものも多くあった」

（四）

李承信さんとは、母孫戸妍の出版記念会で目に留めたが、会話を交すことはなかった。その時は母が主役であったため目立つことは無かったが、妙齢の美しい婦人との印象であった。

本稿は、三・一一の被災に寄せられた李さんの短歌とその背景についての説明が多くなり、標題に掲げた本来的なテーマから離れた憾みはあるものの、一連の短歌と周辺の解説を通じ〝母から娘へ〟の主旨はある程度貫けたものと思い御理解を請う次第である。

（完）

短歌　四十首

曽根竣作

蛍雪時代

縄文の丘はろばろと洋(なだ)とほく帰りの船の真帆を迎えつ

らんかんを掠めて早きつばくろよややに遅れし南への旅

霧もやふ引地川べり二つ三つ塑像のごとくゆりかもめ佇つ

欧文社の「蛍雪時代」憶い出ず　祖国敗戦の坂下るころ

野良猫の夕餌(ゆふじ)ねらひて急降下嘴太(はしぶと)は澱(よど)める空気切り裂く

艀(かへ)りたる濡れ羽つやめき水辺なる黒き揚羽のひと生(よ)始まる

年老いし海陬(かいすう)のいとここの春も椎茸一はこ送り呉れたり

流れゆく綿ぐもの縁(ふち)きらめかせ盈月澄みて草生(くさふ)をわたる

ケータイの着音ぶるると耳を刺すま昼車中のまどろみの中

すず風にさすらふ朱夏の黄蝶あり配流(はいる)の島へ雁の渡る日

遁走曲(フーガ)

流れ来る流氷いくへに軋みつつ北限にはやも春の近づく

白堊なる塀に日暮れの影さして湖水のみぎは波打ちやまず

謂れなく心いぶせく浅橋の波にきてきの遁走曲(フーガ)聴くなり

いちりんの牡丹(ぼうたん)揺れてこともなし胡賓(とびん)の如くに昼寝より覚む

雲の峰いくへたたなふ早春の光りのなかに街衢はしづもる

浅春の日差しつめたく大楠の葉うらきららと風にかがよふ

みなとの灯水にきらめき波止過ぐる水夫の帽の黒く光りて

サンバイザーま深に冠りすれ違ふ女人ひそかに何処目指すや

三コーナー過ぎし辺りで拍車入れ馬群追ひ抜き「皇帝」となる

岡部騎手と人馬一体の勇姿忘れずシンボリルドルフ遂に昇天

小諸の遊子

「泉州」を営業したるは何時の日か今西湘に身躯やしなふ

風聞の奥にひそけくわだかまる汝の黙秘を証すすべなし

日差し温き街の一角たむろせる「真昼の決闘」思はする群れ

イスラムの断食の日よ頭を下げて大男の列ひざまづくなり

宗教は一のかけはし右手に剣ひだりの手にはコーランかかぐ

ビンラディンの死に湧き立てり誅殺をかへりみせざる国柄いとふ

許されて触るる手首の痣のあと蝶の形があすをうかがふ

久に違ひし旧友〝年をとったなあ〟、同じことをば敵も思ひつ

東郷元帥剪定のさま詠ひたる九十五さいの入選歌あり

雲白きはたなかの道落葉まふ小諸の遊子春惜しみけり

梟雄死す

赤だすきかけし征旅もはるかなりいまとりどりの欅がゆれる

緩びきしわが頬うつす水槽に闘魚きらりと反転したり

リビアとふ遠き国など知らざれど四十数年なる独裁を終ふ

朝刊の冷えびえとして一代の梟雄カダフィのリンチを告ぐる

〝アラブの春〟何処まで続くイラン、イエメンの民衆の熱気ここに極まる

凍てし空にとほくまたたく夕星に語りかけなむけふの怯懦よ

さらさらと落葉掃く音かへりみて自が薄倖のとし月思ふ

鰡炒る背にあはあはと斜光さしひととせの〆誰にか告げむ

円かなる胸ふくらませ着水す雪嶺を越え白鳥しづかに

北投の温泉に遊びかの日ありき刎頸の友逝きていくとせ

鯨游海

漢詩

潮騒錄（六八）

寄大和撫子國民榮譽賞

平成廿三年八月

西走東奔幾往還
左遷右轉未過關
遂令女王流紅淚
一念通巖動泰山

押韻・還關山

〈大和撫子の国民栄誉賞に寄す〉

西走東奔　幾往還
左遷右転するも　未だ関を過ぎらず
遂に女王を令て　紅涙を流さしめ
一念巌も通して　泰山を動かしむ

〔注　解〕

日本女子サッカー悲願の世界選手権優勝は、東日本大震災と福島原発事故とに沈滞するこの国の人々にとって、如何ばかり勇気と希望を与えたことであろうか。

女王＝新女王日本とも旧女王米国とも、何れにも解釈可能。故に紅涙は(新)なら歓喜の涙で(旧)なら悔し涙となる。

決勝戦は延長戦となり尚2対2で決着がつかず、最後にいわゆるPK戦で勝利するという薄氷を踏む激闘となった。まさに撫子大和の一念が山を動かしたのだ。

紅涙＝女性の流す涙の形容。

令＝使役の再読文字。使教と同じ。令AB＝Aを令てBせしむ。なお使は仄字で令教は平字。

一念通巌＝一念いわおも通す。一念をこめてやれば何事でも成就する喩え。漢代の李広将軍が草中の虎を射たところ実は石であった。李は再び石を射たが再び突きさることは無かった（史記・李将軍傳）＝石に立つ矢。

泰山＝中国一の名山。立派な物の代名詞。泰山北斗。

☆巌くだき山も動かす一矢かな
　暗き世に咲くなでしこの花

新宰相野田佳彦誕生戯作

平成廿三年九月

歴代何爲悉闇愚
驛頭朝立在田夫
自稱臣是泥鰌使
鼓腹民歌不識吾

押韻・愚 夫 吾

〈新宰相野田佳彦誕生に戯れに作る〉

歴代何ん為れぞ　悉く暗愚なるや
駅頭に朝立ちする　田夫あり
自から称す「臣は是泥鰌使いなり
鼓腹の民をして吾（野田）を識らずと歌わしめん」

〔注　解〕

何爲＝どうしてか。なぜ。
悉＝ことごとく。すべて。悉皆。
田夫＝田舎者。農夫。やぼな奴。

転句は杜甫の詩「飲中八仙歌」の内の李白を詠んだ詩の最終句「自稱臣是酒中仙」を意識して引用した。

泥鰌＝どぜう。野田は自分と内閣を「金魚ではなく泥鰌」と喩えた。

鼓腹民＝「鼓腹撃壌」の故事。十八史略「有老人含哺鼓腹撃壌而歌」即ち「腹つづみを打ち、大地をたたいて歌うこと＝太古堯帝の統治した太平の世を楽しむさま」。

堯帝がおしのびで町へ出ると聞こえてきた唄があった。

日出而作
日入而息
鑿井而飲
畊田而食
帝力何有於我哉

日出でて作り、
日入りて息う。
井を鑿って飲み、
田を畊して食らう。
帝力我に於いて何か有らんや。

この詩、結局は堯帝の善政を讃美したものである。

堯が「天子さまのお力なんぞ、あってもなくても関係ない。帝の名前も顔も知ったことか」と聞いて、「やれやれ。天下は太平なのだ」と安心したという。

腹つづみを鼓つとは、満腹しているからで即ち食料が豊かだからこそだ。

なお転句の使は、ここでは結句にも繋がり「使役」としても用いている。いわば漢詩の「掛け詞」ともいえる。

〔口語訳〕

一体、前任の総理五人はどうしてこうも皆暗愚なのか（一年余で失脚し五年間で五人の総理とは呆れて了う）。ところで、いつも駅頭に朝立ちして演説しているヤボな男が居るのをご存じか。

男は称っている「臣は即ち泥鰌使いであります。また鼓腹の民をして『あんたが誰だか知るものか』と歌わせたいものです」と。

☆敷島の大和八洲の山里に
　たなびく炊煙今こそあらめ

寄永田俊一先生著信託之勸奨

平成廿三年十月

有信立是孔丘途
季布侯嬴二諾無
信託史應人理歷
見信被託蓋誰愉

押韻・途 無 愉

〈永田俊一先生の著さる「信託のすすめ」に寄す〉

「信有らば立つ」は是れ　孔丘の途なり
季布も侯嬴も　二諾なけん
信託史は応に　人理の歴なるべし
信じられ託さるるは　蓋ぞ誰か愉ばざる

〔注　解〕

有信立＝無信不立（論語）と同じ。政治の要諦は民との信頼にこそある。孔子の説く仁義禮智信（五常）の信。

季布＝漢初の侠士。「得黄金百斤不如得季布一諾」季布の一諾を得るのは黄金百斤を得るよりも難かしい。その代り一諾を得た以上は絶対に守るという信頼がある。

侯嬴＝魏の食客。主君信陵君との約束を死を賭し果たした人。魏徴・述懐「季布無二諾　侯嬴重一言　人生感意氣　功名誰復論」とある。

人理＝人の踏み行うべき道。見被は共に受身を現わす。

蓋＝何不。ここは反語の二重否定で強い肯定となる。

〔口語訳〕

「信なくんば立たず」とは孔子の説く途であり、あの季布も侯嬴も死を賭して約束＝信を果たしたではないか。

信託の歴史は人理＝人の踏み行うべき道の歴史でもあった。信とは何物にも替え難い価値なのである。故に人に信じられ託される事こそ万人の愉悦である筈だ。

永田俊一氏は三戸岡道夫先生の知友。一九四四年新潟県出身。大蔵省、日銀政策委員、日銀理事を経て元信託協会副会長、元預金保険機構理事長等。

《漢詩の流れ57・清その六》趙翼

趙翼（一七二七～一八一四）、字は耘松、号は甌北。江蘇省陽湖（今の武進県）の人。進士。

中書舎人として乾隆帝に仕え、塞外にも勤務し文章を作った。史学に詳しく詩人としても袁枚、蔣士銓と並び「江左の大家」といわれた。

論　詩・二首連作其一

李杜文章萬口傳　李杜の文章　万口伝う
至今已覺不新鮮　今に至って已に新鮮ならざるを覚ゆ
江山代有才人出　江山代々　才人の出づるあり
各領風騷數百年　各々風騒を領すること　数百年

李杜の詩は万人が最高だと言い伝えられてきたが、今日ではもはや全て新鮮だとは言い難い。

広い我が清国には各時代それぞれに優秀な詩人が現われ、数百年来独自の詩風を維持して来たのだ。

（風騒＝詩経の國風と屈原の離騒。詩や文学を指す）

論　詩・二首連作其二

隻眼須憑自主張　隻眼すべからく自らの主張に憑るべし
紛紛藝苑説雌黄　紛々たる芸苑　雌黄を説く
矮人看戯何曾見　矮人　戯を看るに何ぞ曽つて見ん
都是隨人説短長　都て是れ　人に隨って短長を説く

詩を論じるには一隻眼を具えて独自の主張を持つべきである。然るに文壇ではやたらに人の作品の欠点を挙げつらっている。

それは恰も小人が芝居見物しているようだ。何ひとつ自分の眼では見れなくて他人の尻馬に乗ってああだこうだと悪口を云い合っている。

（雌黄＝抹消すること。原意は黄色の顔料のことで、消しゴムの役目を果たした。詩文の文句の誤りを訂正したことから）

アフリカの彫刻に魅せられて

勝山道子

国際婦人教育振興会　社団法人は（以下国婦振）は研究事業は（文部省委嘱事業として「開発と女性」のネットワーキングを各自治体支部の協力のもとに国際交流の実践を生かしている。発展途上国と呼ばれる国々は世界の国の80％に及び、人口は全人口の3/4になっている。これらの人々の貧困や地球環境の飢餓を解決することなしに人類社会の平和共存を達成することは出来ない。一九四七年人権宣言に始まり、国連婦人の一〇年を契機に「女子差別撤廃条約」に至るまですべて国連では人権の観点が強く示されています。一九八五年には「二〇〇〇年にむけてナイロビ将来戦略」が合意されました。国婦振が行います、世界の女性とのネットワークを求めて、海外への女性指導者派遣の実施、女性と開発の視点に立つことが大切だと思います。

この年の海外派遣は中国とイタリヤが研修地と決りました。イタリヤ四名と決りました。中国も四名計八名が選ばれた。

イタリヤの人選東京三多摩勝山二十三区徳光茨城渡辺、新潟、岩淵と決り十一月八日出発し十二月二十日に帰国の四十五日

訪問地ローマ　ミラノ　ボローニャ等に又近隣都市訪問となっています。

一、女性の地位向上の為の教育
一、政治に対する状況
一、幼児教育　〇才から
一、老後問題

等の問題の研究地にそれ〳〵が参加し責任ある報告書が出来る様最初から研修の後ホテルでまとめ上げていった。実は文部省の日程表によると、最後十八日間はローマで然も同じホテルで報告のまとめをして帰国後の資料

とするとあるがこの十八日間通訳がない事になる。事業研修としてイタリヤ語の学習がなく挨拶と単語位では…私は或る程度自費でもと思い友人にローマ在住の知己を探している間ローマに二十年近くいる芸術家と結婚し子供も二人いる方が北海道旭川の医師の姉と云う事で早速紹介してローマと連絡をとり何か安心した。時に、つくば博が行われ、私達がイタリヤに行く前九月の開会式近く、新聞でイタリヤの文部大臣がつくば博見学に来日するとあり、早速国婦振に申し入れ、文部大臣は女性で尚の事、「開発と女性」の問題でイタリヤの文部大臣にお会いして私達のイタリヤでの国際化の趣旨をお話してと思い「国婦振」に依頼したが日程が短かいので面会は無理と断られた。私はイタリヤ大使館のポストに「英文で「私達がイタリヤへ国婦振から調査研究で出発するので来日された文部大臣にお会いしたいと簡単な英文の御手紙を大使館のポストに入れたところが早速電話で「もう明日帰国するので「九時三十分までに大使館へ来る様に」との連絡をいたゞき、私は早速三人に連絡し大使館へ翌日集合した。大使館ロビーで、体格のよい文部大臣は眞赤な麻のワンピースでにこやかに迎えて下さいました。「あなた達の訪問先に手配をしておきます」と簡単な挨拶だったが、成田空港への出発前の貴重な時間「イタリヤで待っている」そこで私の友人が文部大臣にお会い出来るとは何と素敵な事、ブローチ日本のおみやげに……」お渡し出来和やかな一コマ、イタリヤ行きも前途が明るく、後半の通訳の小野女史との連絡もとれた。而し四十五日の留守は役職の事、主婦的雑事は娘に頼むとしても、準備する事は始めて丈に大変な事だった。

事前研修が国立婦人教育会館で行われた。宿泊するホテルの暮しぶり、二人一組だが、朝から晩まで、夫婦以上の暮しになるので、研修では先に使用した者は洗面所でもバスでも後をタオルで拭い水滴を残さない事と実にこまやかな指導、旅行中他人の荷物は持たぬこと!! こうした事業研修で四人が何とかまとまって研修の旅が出来た。

ローマに着いてホテルへ小野女史が尋ねて下さった。地味な方だが丁寧に対応し夫は

今日は美術学校で明晩まいります

と云う事で簡単な紹介と当方の担当等で別れた。翌日、アリトラオレ氏が同伴で来られ、アリはセネガル語とイタリヤ語しか出来ぬ黒人のアリに始めて接する外三人は一寸とまどったが私は幸国際ソロプテミストの団体でホームステイの事で印度、モンゴール、ケニヤの方々を宿泊のボランティアで馴れていたのでアリの様子で彼の人柄がわかり、ホテルばかりでなく、「私の家にも来て下さい」

「セネガル食でも召し上って下さい」

皆もそのやさしさにつられ、早速伺う位にわずかの間に

親しく予定の入らない間にアリ・トラオ家を訪問することにした。

帰りぎわ小野夫人が「主人の履歴です」と渡された。久子夫人に云わせると、日本人の人種差別には泣かされた。セネガル国の方と云う丈で「エッ黒人」と云うのはいゝ方で「土人と結婚したの」には泣かされた。

早速ローマ郊外のこぢんまりした家で隣が倉庫の様な建物が、アリの彫刻の仕事場でブロンズの作品が、並べてあった。

丁度アリ氏がさかんにキッチンを出たり入ったりオーブンで何か作っている様で、忙しそうに動く姿を見てやさしい夫ぶりに私達も安心して食事を楽しみ、話題に花を咲かせ、「家具は全部、椅子からテーブル、ローマで有名な泥棒市で買った」と笑わせ、すっかり和やかな雰囲気に包まれ、珍らしいセネガル料理をいたゞきまるで息子の家に来た様だと皆で笑う程やさしさに包まれた。

而しイタリヤでも、黒人の留学生には監視がきびしく推薦で来ているトラオレでも美術大学の欠席は許されなかったと云ふ。

久子女史の話で生活費の一部は日本の父からの送金で、日本には帰らぬ様に云われましたと云い何か寂しさを感じつゝも、度々のお会いに私はこの夫婦を、ブロンズと共に日本に紹介したいと改めて彼の育ち、履歴を見直し自信をもった。

ホテルで小野女史から渡された、アリトラオレの履歴書、推薦文を皆で丁寧に見て、私達は改めて彼の偉大さに感動し、小野女史も彫刻の勉強の為ローマに来て彼の人柄にふれ結婚に踏み切ったと思う。

数々の彫刻の作品の価値を認められ、何とセネガル大統領サンゴルの奨学金でイタリヤローマに留学した。度々セネガルでは国立芸術学院彫刻科教授も勤めており幼い時からダガールで就学して家族も兄はセネガルペンクラブの書記長を勤め文化大臣と深い親交のあるまさにエリートと云われる。それで私は小野女史の家系は日本ではエリートに属す両親とも医学博士、姉も妹も医師として働き殊に母親の父は私立大学の創立者でもある。アリ・トラオレがセネガル国の上層階級ならば小野家も日本ではまさに劣らぬ、上層になり御両親のもっと深い理解をして久子女史の立場を考えると共にぜひアフリカの芸術を日本に紹介したいと強く考え行動したい。

アリ・トラオレ　履歴

一九四六年　五月九日

セネガル共和国　ダガール市　生れる

一九六二年

セネガル国立芸術学院　演劇科入学

一九六六年

ダガール市で行われた第一回黒人芸術祭にて劇―ラ・ディオールに出演またジョセフィンベーカーと共に劇

パリの二つの空出演
一九六七年
パンアフリカン芸術祭　アルジェリア現代美術展（アルジェリア・ダニエルソラノ展　セネガル共和国ダガール市）
一九七六年
セネガル現代美術展一〇年展（ストックホルム　セネガル週間　セネガル美術展（ラバ）
一九七一年　サンゴール　セネガル大統領の奨学金によりイタリヤローマ美術学院　彫刻科に留学
一九七二年　C―V―S国際コンクールにて彫刻部門第一位授賞
一九七三年　セネガル現代美術展　リエージ　現代美術館（イタリヤ共和国リエジ市セネガル美術展パエビヌオービ画廊　イタリヤ共和国ローマ市）
一九七五年　ローマ美術学院彫刻家卒業
今日のセネガル美術展（イタリヤ共和国ローマ市）ブラスキ宮殿　セネガル、イタリヤ両政府主催
一九七六年　セネガル国立芸術学院彫刻科教授となる
一九七九年サンゴールセネガル大統領の奨学金により彫刻技術の研究のため再びイタリアに留学する
一九八四年コントロポスティヌオボレリアインテルナツィオナーレ画廊（イタリア共和国ローマ市）フランス語圏アフリカ代表としてカナダケベック市で行われた、国際彫刻シンポジウムランデニウーインテルブンナルに参加　ケベック市サン・シヤン・ポルーデッサジャン＝ポルト・ジョリにモニュメント設置　デッサンされた彫刻展ウニタフェステバル（イタリア共和国ローマ市）
一九八五年現代イタリヤ美術界の最も新しい世代展エンリコ・クリスポルティ企画（イタリア共和国シィエナ市）ペルナンブルゴ　現代美術館展示（ブラジルペルナンブルゴ）
一九八六年モニュメント太陽の広場（イタリア共和国トゥホロ市）

推薦文

彫刻家アリ・トラオレは一九七一年　セネガル大統領で彼のよき理解者でもある、レオポール　セタール　サンゴールの奨学金を受け、ローマ美術学院に留学し、一九七五年　ウンベルトマストロヤン彫刻教室を卒業して以来イタリアに在住し、また正にイタリアに在住している仲間や多くの国際的にもトラオレは現在一番高いレベルに於ける若いセネガル彫刻界の正式な代表者と云へよう。

彼は彫刻の中で、自国の伝統的芸術と普辺的で原型的な価値、彼のトーテム呪術的であり宗教的で原型的な性格と西洋の実証的ソフニステリテックなテクノロジー文化

の結合を試みている。ブロンズ作品を主としているとはいえ、トラオレは他の多くの素材も手がけている。木鉄、そして最近では石も。正にこの最後の素材、ウンブリアの砂岩―カペルジャ郊外、ラジメール湖畔トウオーロ市に建設された太陽の広場のため巨大な円柱彫刻（四五〇メートル×八〇）の主役である。

この機会にトラオレは古代ローマとカルタージネの古代戦場でありローマ軍の全滅した当時のすべての悪霊をその具体的な形象により拭いさらうとする意図と合せ持った力強く厳格なトーテム柱を企画した。

確かにセネガル文化大臣マヒリ・ガサマルがトラオレの仕事を新らしいアフリカ美術界の模範と目し在ローマ大使のセネガル・アンリーサンゴール氏と共に彼の積極的な後援者であることもうなづけよう。

実際トラオレの作品はすでにイタリア国内に於て、公共の場にピエトロ・カジエラ、コスタンティーノ、ニヴォーラジョー・ティルソン、吾妻建次郎等他の名声ある彫刻家と共に永久設置されたのみでなく、これにより普遍的な趣旨に於て、ピカソやモティリアーニに始まり今日にいたるまでの西洋の現代美術が、特にアフリカのプリミティブアートに対し大きな借りがある記憶に対し更に独創的な新らしいページを加えたことになろう。

しかしながらこれらの事はトラオレにおいて民族芸術の範中にとどまっているわけではない。むしろ彼は黒人アフリカのマリのドコン族等古い部族の假面の文化人類学的な価値、精神的知的価値の学習を霊威として生かし仕事をしていると言えよう。

それゆえにトラオレの仕事において、この様な激しい表現豊かで強く人を引きつけずにおかない。サルトルが一九四〇年代後半に意図した（ネグリティユート）の強い性格は異なる形象的効果に落ち危険をはるかに越えているむしろ彼の作品は我々ヨーロッパ文化にアリ・トラオレの様に現地の作家でありながらすでに国際的脚光を浴び創造性と自己意識をしっかりもって製作を続けている作家の作品を通しアフリカ文化の独創性的で直接な、いわゆる単に智識人的にとゞまることのない洞察への新らしい道程を示しているといえよう。

マヌエーラ・クレシェンティ

Manuera Crescemtini

多くの異なる素材の使用（正に金属仕事における説得力のある介入をさす）に対する大きな造形的注意力をもってアリ・トラオレは彼の祖国セネガルのみならず特に中央アフリカ全体に存在する深い類学的葛藤の勧告価値を現出する彫刻を製作している。それは機械技術の発達と伝統的価値の恒久性つまり、産業と情報社会を支える輸入文化と自国の先祖より伝わる民族文化との葛藤である。力強い象形感覚をもってトラオレはアニミズム的

要素、古い儀式（特に仮面）の要素と機械的要素（異質な機械を自らの日常用具のモデルによって縮少し、再適応させるための改変を表わすような、ある種の古代機械を融合させる作品）を建告している。

彼の彫刻作品の中には時としてグロテスクなものまでの極端化が認められるがこれは批判精神にもとづく強調、要するにドラマチックな表現の欲求の表象とみなすのが正当であろう。云うまでもなくこの葛藤感が彼の勧告的作品において露出し、強調され表現されている。しかしそれと同時にこれはトラオレ自身の深い苦悩の表われでもあるように云われる。つまり単なる外面的観察にとどまらず内面経験の表出であるといえよう。それのみでなくトラオレが我々の表徴的に明示している人類学的葛藤の他にもっと明確な文化的葛藤が彼を捕んでいることも見のがせないそれは何年か前ローマに於て国際アバンギャドルの探究の中で形式的造形のアフリカ芸術家として、彼の伝統的造形の特色から来る豊かな表現力と力強さを持って参加する時に感じる、借り物でない近代化への模索であろう。

彼のそれは伝統主義や、リバイバルではなしに現代性に満ちあふれた探究である。

アフリカの芸術家にとっては、二十世紀の初め頃より西洋の前衛芸術達で特にピカソによって試みられ、かなり通俗化した〈アフリカ美術からの示唆の使用〉ものを越えて自己の造形伝統との関係の再発見へ到達する必要がある。それゆえに実際にこの問題は複雑な様相を示している。西洋の芸術家にとってアフリカ美術の使用はしばしば不当な横領であり、実質的には形象上の解決策であったのに対し、当然アフリカの芸術家達には実際にトラオレにおいて生じるように（自己の造形伝統の典型的な結果である）象徴的魔術をすべて適切に読みとることが可能である。

しかし正にそれゆえに、自己の本質を再発見するためには、アフリカの芸術家はこの通俗的な「アフリカ様式」の特に所謂ピカソ様式の消耗と対決せざるを得ないのである。

従って彼の戦は単純で不必要な自己の歴史的過去の「リバイバル」に対する戦であると同時に、西洋において行なわれた総合的な「アフリカ様式」の消費に対する戦でもある。これらの問題は今日アフリカの芸術家達に新らたに重要な難題を提出しているがトラオレの様によりすぐれた芸術家達はこの難題に独自で独創的な造型的探究の域においても、またそれと同時に（トラオレ自身が特に最近の作品において熱烈に試みているように）黒人アフリカが現在民族学的にも社会的にも生きている、自己の本質の探求と再認識のドラマに関する特有の社会的内容をも理解する能力の切迫した必要性という域においても果敢に取り組んでいる。

アフリカの芸術家にとって、今日の自己本質の探求は、従って、また大きな賠償作業でもあると云えよう。そしてトラオレは、これを大いに自覚してこの意義における仕事をしているのである。

エンリーコクリスポルティ
Enrico・Crispolti

ブロンズの作品の展示、セレモニーのプログラムを考え東京と北海道に決め、成可公共施設の使える様交渉を始めた。

この事は小野久子女史の御両親にも伝え快諾を受る事が出来た。

一九八六年十二月二十三日

貴殿より外務大臣宛の一九八六年十月二十四日付テレクス第五〇一四九号（勝山女史と会見したことご報告申し上げます。その折アリ・トラオレ・ディオップ氏の作品展開催の企画を文化省が後援することも話しました。さらにＦＥＳＰＡＣ一九八八年にむけての協力も女史と国際婦人教育振興会に要請しました。具体的には我が国の音楽団体が使う楽器と、音響装置を集めてもらう様に依頼しました。セネガル美術品製作所の展覧会計画についての提案も行いました。

以上は極めて重要な案件なのですので貴殿からも働きかけるようお願い申し上げます。

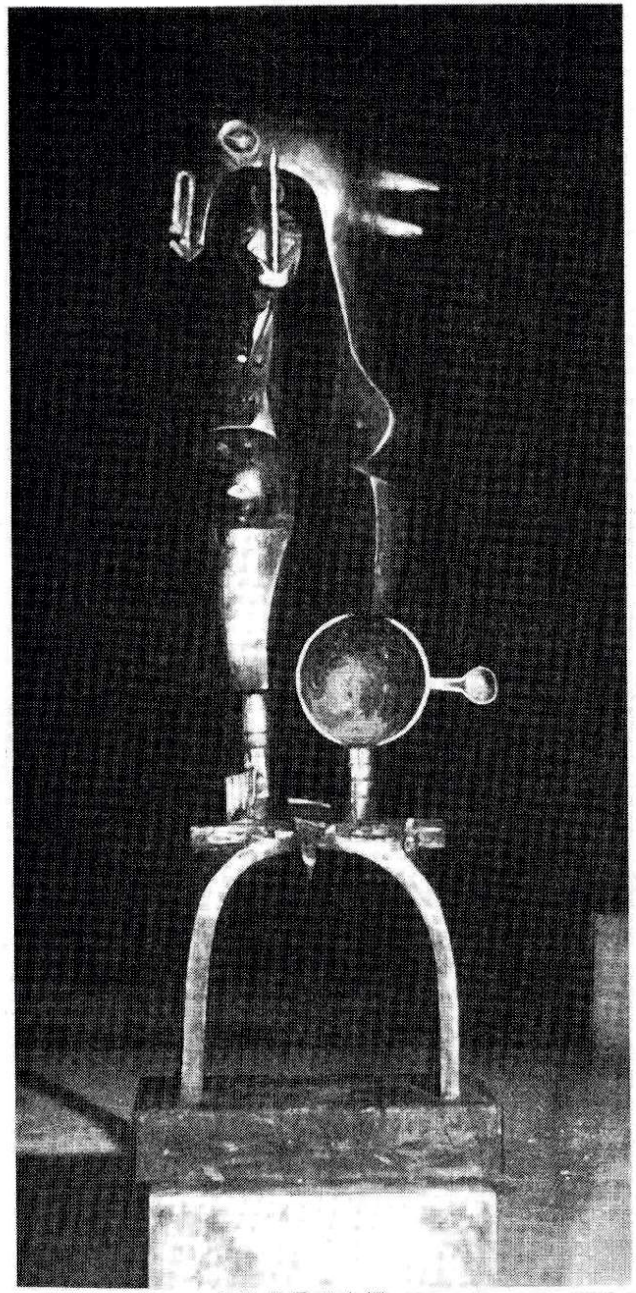
文化大臣マヒリガサマ　ダガール

一九八六年十二月十三日

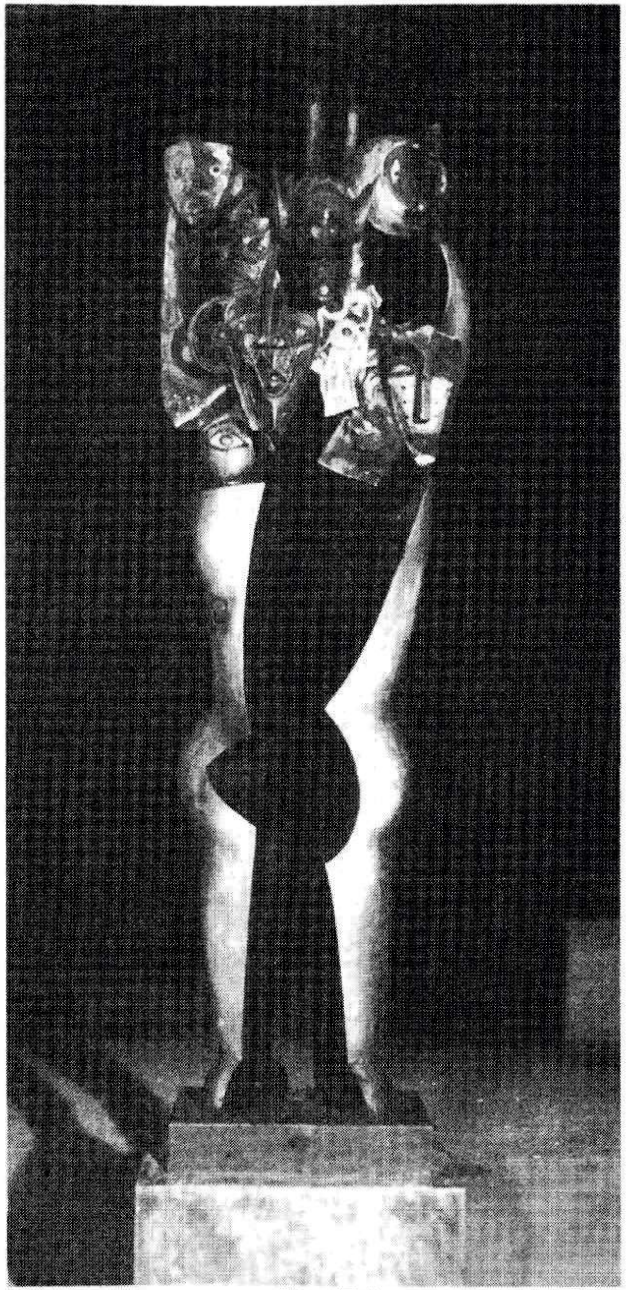
以上の文書を受取った私はトラックが北海道の旭川、稚内、札幌をまわっている間に楽器を集め重たいピアノ等以外は私宅まで宅配し、東京近辺でも楽器を集め、アリ・トラオレのブロンズをローマから船便で横浜まで運んだ帰りの船便で、楽器を運ぶ事が出来た。

楽器と云っても中味は笛、タンバリン、卓上ピアノ、ハーモニカ、アップライトのピアノ二台たちまちトラック二台分になり、セネガルに送る事が出来、文化大臣、マヒリ・ガサマに喜ばれた。思いがけない交流になった。

その前国際ソロプチミストは十年にわたり井戸を掘る基金を送っている。



夕日を見る夫婦　254cm×98cm×65cm(296kg)



黒い仮面　260cm×97cm×73cm(420kg)

音の世界から平和の語らい、楽しみながら文化のかおりをなどの言葉からアフリカ諸国でもこどもの文化活動に力を入れています。セネガル国では「こども音楽フェスティバル」を1988年400ケ所で行います。文化大臣は日本のみなさんに呼びかけています。

あなたのいらなくなった楽器を下さい。



ピアノ，ギター，笛やステレオカセットなど……

主催　国際ソロプチミスト稲城
セネガル共和国文化省
在日セネガル共和国大使館

連絡先　〒206 東京都稲城市東長沼183
（ハガキで申込みのこと）　勝山道子
（☎ 0423－77－7430）

期限　1987年12月末

草取り

横山正義

「老子」曰く第三十七章の一
道常無為　而無不為
「道は何らなさないでいて、しかも全てをなしている」
訳　蜂屋邦夫

私の母の子供時代、大正の始め遠州の片田舎のお話です。母は小学二年から、学校から帰ってくると、畑、田、屋敷などの「草を取れ」と祖母から言われたということです。「勉強がある」と言うと、祖母は「草を取りながら勉強せよ」と言う。今では児童虐待かもしれない。しかし、草を取らないと祖母は「エンピツもノート、消しゴムも買ってくれない」と言うので、母は「しぶしぶ草を取り始めた」と言う。

母は「草をとれば、奇麗になり爽快感もあるし、工夫すれば土の上に文字を書き、勉強することもできた」と言う。母は生涯を通じて、テレビ、ラジオなど、娯楽には興味示しませんでした。母は「振り返れば、苦しく哀しいことばかり思い出すが、草を取ると作物の成育具合、自然のエネルギー、様々なことがわかり、明日に希望が沸き大変に楽しい」と言うのです。二十八歳で夫に死別し、苦労の人生でしたが、本人は明るく元気に生涯を送りました。そして、母は「子供の頃、草取りを強制されたことを感謝する」と晩年に言っています。自宅から三百メートル程離れた小高い岡の上に、神社があります。

母は晴れた日には、手押し車に杖を立て、押しながら坂をのぼり広い神社の境内に入ると、地面に、杖で1間四方ぐらいの四角を描きます。そして誰に頼まれたのではありませんが、中の草を奇麗にとります。「ご苦労様」と声をかけると、「これが楽しみだ、孫が可愛いいよ」と言います。しかし、年を重ねると、描く面積が小さくなりました。最後は一尺四方程になりました。母は腰が

曲がり、頸椎が固まって手足が動かなくなり、草が取れなくなるまで草を取り続けました。田舎では、草を取る女性は多く見うけられます。

道即ち人間の一生で、様々な不幸、災難、自分に不都合の事などに出くわしても、逃がれようとせず、なんらなさないで、それはそれとして、日々仕事を続けていれば、それは生活に何ら差し支えはなく、生きていけると教えていると思います。

中日新聞朝刊平成二四年一月六日、本の広告欄に「苦しまない生き方、責めず、比べず、思い出さず」浜松医科大学名誉教授高田明和著コスモ21、がありました。読んだわけではありませんが、過去を振り返り自分を責めないようにしよう、他人と比べないようにしよう、不都合を思い出さないようにと試みればまさに、葛藤となり煩悩となります。ただ目の前の草をとるのです。祖母は母に生き方を教えたのでしょう。それが田舎の女性の生き方であったのかもしれません。あるいは、人類が作物を作るようになった、弥生時代からの女性の生き方かもしれません。

国であれば、為政者にとって都合の悪いデモが起きたと仮定します。武力弾圧すれば内乱になり、収束が不可能になります。しかし老子は「状況を把握し、改善していけば平和が保たれる」と言っていると思います。

最近、スケートで浅田真央選手が母の急死で、ロシアの大会は急遽棄権したにも関わらず、十日後の日本の大会では、笑顔で優勝しましたことが報道されました。苦しみ、哀しみがあっても何ら試合に影響がなく、ベスト結果が出せる。やはり母親が生き方を教えたのでしょう。有って無い、為さずに為す、深い意味の言葉です。「ただ目の前のやるべきことをやる、母であれば草取りをしていれば、哀しみや苦を人間の意識のなかから消え去る」これを老子は『無』と表現したのではないかと思います。

「老子」曰く第三十七章の二
欲以静天下将自定
「欲望を持たずに平静であるならば、世の中はおのずと安定するであろう」訳　蜂屋邦夫

老子は「人間本来もっている、向上したい、努力したいという摂理に従えば、全く意識のなかに、労苦を意識することなく、すべて滞りなく行われていく」と言っています。そして私利私欲とは無縁で、「無欲であれば世の中は安定すると」言っています。それは三戸岡道夫先生の発表された、徳川慶喜の大政奉還、辞官納地の無血革命が該当すると思います。「戦闘倒幕派の江戸を火の海にする、日本中に血の雨が降る戦い」などを回避したのである。徳川家の歴史と将軍の権力闘争のなか育まれた、柔軟性ある政治力でこそできた事でしょう。現在アラブの国々の権力闘争をみる時、その政治力の差を痛感します。

「老子」曰く第一章
道化道、非道常道。
「これが道ですと示せるような道は、恒常の道ではない」訳　蜂屋邦夫

老子は「これ以上、文字の表現では伝え切れない、自らの責任で自然の摂理に従い、天の道を捜す以外ない、ご理解下さい」の声がするような気がします。孔子は論語で挫折したら先輩に問えと言っています。老子が自力で、孔子は他力です。両方とも生きている上に大切で車の両輪です。道を捜し努力奮闘する、人間の尊厳であり評価される。

「老子」曰く第二章
天下皆知美之為美、斯悪已。皆知善之為善、斯不善已。
「世の中の人々は、みな美しいものは美しいと思っているが、実はそれは醜いものにほかならない。皆善いものは善いと思っているが、実はそれは善くないものにほかならない」訳　蜂屋邦夫

「老子」曰く第四十二章
道生一、一生二、二生三、三生万物。万物負陰而抱陽、沖気以為和。
「無という道は有という一を生みだし、一は天地という二を生みだし、二は陰陽の気が加わって三を生みだし、三は万物を生みだす。万物は陰の気と陽の気を内にいだき持ち、それらの気を交流させることに調和を保っている」訳　蜂屋邦夫

この章で、湯川秀樹博士はヒントを得て、中間子理論に至ったという。そして日本初のノーベル賞受賞の栄誉に輝きました。

「老子」曰く第五十一章
道生之徳畜之　物形之、勢成之。
「道が万物を生み出し、徳がそれらを養いそだてる。物としての形体が与えられ、なにかの働きを持つものとして完成する。」訳　蜂屋邦夫

能力があって、名誉・地位・権力・金などを得る人。与えられた環境のなかで、努力し働く人。草取りの老婆。宇宙の歴史、人類の歴史からすれば、老子は「天の道」では皆かけがいのない貴重な人生を送ってると言っています。

蜂の巣を取るなど趣味は豊富です。道具の手入れは徹底して、いきとどいて長く使用し「与えられた環境の中で野菜作り、掃除、家の修理など工夫し生活することが一番楽しい」といいます。自然の中で暮らしていると、「草花、鳥の声、川のせせらぎなどすばらしい」とも言います。

地域社会でも活躍し、元気一杯です。片方では、大量生産、大量消費も大切ですが、様々な人生があるように思います。日本人はこれから、「成熟した文化を楽しむ」と言われます。老子は生き方のヒントを暗示したのでしょう。

「老子」曰く第六十三章

報怨以徳

「怨みには徳をもって報いる」訳　蜂屋邦夫

中国のリーダー蒋介石の引用した言葉として有名です。日本が起こした、日中戦争の際、日本軍が中国人一千万人の犠牲者を出したにもかかわらず「怨みには徳をもって報いる」と日本人兵士に危害を加えることなく帰還させたのである。

「老子」曰く第八十一章

聖人不積　既以為人己油愈有　聖人之道為而不争

二宮尊徳の祖父は働き者で農地を拡大する。しかし、後継者が育たないので、養子を迎え、農地維持を図るが、農地を拡大してあるので、雇人で農地の維持管理をすることになる。それが失敗し、没落し挫折を経験した。その主従関係に尊徳は理想を「大学」「論語」に道を求めたのではないだろうか。そして「報徳の教え」を養い育てたのでしょう。

「老子」曰く第五十九章

治人事天莫若嗇

「人々を治め、天に使えるには、吝嗇に勝るものはない」訳　蜂屋邦夫

吝嗇とは物惜しみし、溜め込むことではなく、元来は穀物を取り入れ、収穫したものを大切に使用するということで、有効活用することです。新たな年を迎え、資源、エネルギー、金融にしても、創意工夫をして、有効活用を求められる時代となってきました。

私の知人、A氏は子育てを終わり、田舎暮らしを始めました。「都会では収入がないと生活できないが、二か月間全くお金を使わなかった、はじめて電気料金を払った」というのです。食料はすべて近所の人達との、物々交換で、燃料は山から切り出してきた薪で、水道は井戸、薬は薬草の知識が豊富で薬草です。湖や河で魚を穫る、「聖人はなにもためこまない。なにもかも人々に施しつくしながら、自分はますます充実する。なにもかも人々に与えつくしながら、自分はますます豊かになる。天の道は恵みを与えるだけで損なうことはなく、聖人の道は何かを為して争うことはない」

二宮尊徳は無欲で蓄財することは無かった。しかし「報徳の教え」を人々に施しつくし財政再建しながら、自分はますます充実し、豊かになったのである。無欲どころか大欲だったのである。尊徳はライバル豊田正作なる人物が出てきた時争い、誰かがなんとかしてくれるのではないかという「甘え」がでて一旦退くが、老子は「道即ち使命感を持って弱くなりきってことに当たれ」という。尊徳は座禅で悟り復帰し財政再建に成功する。

老子の訳者は「自己流の訳は解釈の狭さを免れない」と指摘していますが、読むと老子には深い意味があるように思い、三戸岡道夫先生に「エッセイになるでは」のお励ましを頂き、全くの無教養な輩が勝手に自己流で私見を含ませ、独断と正に偏見で書いてみましたが、老子の意とするところが表現できたか疑問です。ただただ老子は何を語ろうとしているのか、推理するのが読む楽しみです。この文章を発表する機会を与えて下さり、原稿のまとめ方のご指導を頂いた三戸岡道夫先生と、作文の添削をして下さった「製本工房ＯＲＩＧＡＮＥ」代表・折金紀男先生に感謝します。

参考文献『老　子』　岩波文庫　蜂屋邦夫
訳注青三三―二百五―一
『道教の本』学研
『老子荘子』を読む(上)ＮＨＫ宗教の時間
二千十年四～九月
日本放送出版協会　蜂屋邦夫
『二宮金次郎の一生』　栄光出版社
三戸岡道夫

詩

石野茂子

涅槃図

二月は　お釈迦様がお亡くなりになった月だから
曹洞宗の寺には　本堂に涅槃図が掛けてあると聞いて　市内の寺を歩いた　市内一という　寺の涅槃図を正座して見上げた　釈迦を囲むように弟子等が死を悼んでいる　下方には白象はじめ獅子鳳凰と多くの動物達が悲しみにくれている

次の日　姉から悲痛な声で電話があった
義兄の訃報である　葬儀はよりによって
涅槃図を見上げた寺であった　席は涅槃図の前である
大勢の僧侶による　厳粛な葬儀が始まった

祭りが好きだった義兄　毎年　祭り囃子の中を
三人で歩いた　やがて　本堂いっぱいに祭り囃子が聞えてきた
私の幼年が笛を吹き　姉は太鼓を叩いている
満開の沙羅双樹の白い花びらが舞い降り
義兄は豆絞りの手拭いを被り　器用に手踊りを
踊っていた

思わず大声で　お義兄さんと　叫んでしまった

定年

桜花爛漫の　柔らかな春の陽ざしの中を
卒業し　就職する

給料を頂くということに憧れて
予想もしなかった男性の職場で
毎日コピー取りとお茶汲み
叱られるのは数少ない女性ばかり
余りに不合理の日々に裏庭に出ると
白木蓮の大木が満開であった
天に溶け込むほどの白さに
元気が湧いてくる
偉くなって見返せば良い
男性に負けるものか

一切上司に反論せず
どんな些細なことも工夫しアイデアを出し
採られなくても花咲く春を信じ
辛抱し暖めて　翌年を待つ
いつしか会議を企画・運営し

観客を動員して万雷の喝采を頂く
待遇改善が成され駆け上がる階段を
振り向けば男性ばかりで
紅梅の強い香りが通り抜ける

海外派遣要員となり
発展途上国のアラビア語の中で
孤独と隣り合わせながら
宝石を散りばめた
地中海の夜景に酔いしれ
大聖堂から注ぐステンドグラスの
陽光に照らされた赤い花々
に明日を見いだす
いつか来る定年という
人生のとてつもない高い壁の前で
がむしゃらに走り終えて
安堵のため息をつくのだろうか

「残って下さい」
思いがけない言葉に
定年とは

路面に引かれた一本の線を
またぎながら昨日今日明日の
慣れた日常を繰り返すことではないのか

指

アルバムから滑り落ちた
小さな紙切れ

母の日サービス
指圧百回します

子供の細い指は背骨に食い込み
ストレスの窪みを刺激して
いつしか眠りを誘った

粘土細工が好きだった子
大学の陶芸クラブで岩のような硬い土を
耳たぶまでの感触にして窯に入れるという

五月の風に乗って届いたコーヒーカップ
幼いころ飽きずに摘んだ
山茶花の花模様が受皿に咲いている

黄ばんだ紙切れを皿に添えると
精巧な細工の向こうで
娘の幼年は小麦色の指で
私の背を揉み始めている

日本三大七不思議

新潟県・越後七不思議　長野県・信州七不思議　静岡県・遠州七不思議

遠州七不思議第一話「佐夜（さよ）の中山夜泣き石」

石野茂子

むかし、むかし、今の掛川市日坂（にっさか）という所にお石さんという若い女の人が一人で住んでおりました。女の主人は、長い間仕事が無く、二人は貧しい暮らしをしていました。しかし暮らしは貧しくともいつか侍になる日を夢みて、剣術の稽古と畑仕事に明け暮れておりました。

ある日、都から知らせがあり、この主人の夢が叶いお城勤めをすることとなりました。女は八か月の身重で、とても都まで旅をすることが出来ませんでした。そこで主人は、都での暮らし向きが整い次第迎えに来ると約束をして出かけました。しかし、一か月が過ぎても一向に連絡がなく、だんだん食べるものも少なくなってしまいました。既にお腹も大きくなって、畑仕事もできません。そしてとうとう食べ物が無くなってしまったある日、家宝の名刀・赤玉丸を持ち出し食べ物に変えようとしました。この刀を、着物で包み込み大きなお腹を抱えて峠までやってきました。既に峠は、西に陽が傾きあたりは暗くなりかけていました。

気味の悪い鳥の声があたりにこだましていました。その時突然、

「やい女、その大事そうに抱えている物を置いてゆけ」

と、身体の大きな山賊・轟右衛門が両手を広げて行く手を、さえぎりました。

「私は貧しい暮らしをしている者です。どうか見逃して下さい」

と言って後戻りをしようとすると、いきなり女から刀を奪いとるやいなや、切りつけました。女が切られたとき、子供を産み落としてしまいました。山賊は、刀を持ってそのまま逃げ去りました。女は何とかこの子を助けたいと、薄れ行く意識の中で手を動かすと大きな丸石がありました。

「石よお願いだから、この子を助けてちょうだい」

おります。やがて、音八にもその日がやってきます。住職さんは、母親のことを大切にしていた父親のこと、可哀そうな死に方をした母親のこと、山賊のこと、丸石が泣いて音八を助けたことを寺の本堂で座って話しました。話を一生懸命聞いていた音八が、

「住職さん、今日まで私を育ててくれて本当にありがとうございました。私も村の人たちが、峠の丸石のキズを指差して、刀が当たった跡だと話しているのを知っています。一番残念なのは母です。住職さんどうか私を都の刀研師に奉公に行かさせて下さい。必ず母の仇を討って、刀を持ち帰ります」

住職さんは、音八の決心のかたさに驚きながら都へ行くことを承知しました。

さて、都に出て十年の月日がたちました。

ある寒い冬の日、店を閉めようとすると、年老いた男が刀を研ぎにきました。立派な刀でした。音八は研いでいて思わず

「惜しいですね。この刀の先が欠けていて」

「ああ、それは二十年ほど前に、険しい峠道で腹の大きな女を切った時、そばにあった丸石に当たったキズさ」

その言葉を聞いた時、音八は片時も忘れられない母のことを思い、更にその時の状況を確かめました。

「そなたこそ母の仇、私はその時生まれた赤ん坊です」

といって母の仇をとり、刀を持ちかえり久延寺に納めま

すると突然丸石が、

「おぎゃーおぎゃー」

と大きな声で泣き出しました。

その頃、夕方のお経を唱えていた久延寺の住職さんは、確かに赤子の泣き声がしたはずだと驚いて峠の方へ駆け出しました。峠の大きな丸石の所までくると、泣き声が止まりました。そこには絶命した女と、かすかに動く赤ん坊がいました。

「はて、あの大きな赤ん坊の泣き声は何だったのか。まさかこの石が泣いたのではあるまいな」

住職さんは、村人に手伝ってもらって荷車でこの親子を寺まで運び、母親を手厚く葬りました。住職さんはこの男の子に音八と名付けました。音八は、村人に見守られながら育ちました。住職さんは、音八に峠の茶屋で売っているみずあめをお湯でといて飲ませました。

麦芽で作られたこのあめは、成長にかかせない栄養が含まれているのです。いまも峠の茶屋で売られています。

音八は、村中の人気者で誰からも好かれていました。何不自由なく村の子供たちと遊んで、いつしか音八は、十歳になっていました。

あるとき音八は、なぜ自分には両親がいないのか住職さんにたずねました。住職さんはいつかは音八に本当の事を言わなければならないと思っておりました。

すでに村の子供らもそうですが、江戸や都に奉公に出てした。

今も、その刀は寺に残され、毎年四月、子育観世音菩薩のお祭りが行われています。

*

「佐夜の中山夜泣き石」は、江戸時代の戯作者、滝沢馬琴が東海道を旅した際に、佐夜の中山にあるいくつかの伝説を創作小説にまとめ「石言遺響」という本を世に出しました。その中に書かれている夜泣き石については、街道の真ん中にあった丸石を見て書いた創作であり、芝居や浄瑠璃として興行され歌われて、興味深く人びとの間に広まっていきました。東海道の三大難所とされる神奈川県の箱根峠、三重県の鈴鹿峠そして静岡県の日坂峠、伝説の舞台はこの日坂峠で展開されました。

日坂峠は、掛川市の東端に位置する山里です。標高二三五メートルの丘陵地帯にあり、旧東海道日坂の宿から東へ二キロから二・五キロほどの峠路です。この土地は、南と北に山が連なり、その合間の狭い峡谷の中間に山があることから、古くにはさや（峡谷）の中山とよばれ、また、中山がながやま（長山）といわれたのが、この地名の起こりとされています。その後地名は転変してさよの中山となり、小夜（さよ）佐野（さや）佐益（さや）佐夜などとよばれ、現在は佐夜の中山が正しい呼称となっています。また、この地の地籍名称は、掛川市佐夜鹿となっています。これは、かってこの付近は野生の鹿がたくさん住んでいた山里で、江戸時代後期には、佐夜鹿村とか大鹿村とか呼ばれていたのでこの名称が地籍名称となりました。

たびねする　さよの中山　さよ中に
鹿ぞ鳴くなる　妻や恋しき　　為仲

という歌がありますが、現在掛川市内にあるスポーツ施設(株)ヤマハリゾート「つま恋」は地名の発祥の歌とされています。また見返り山ともいわれ月の名勝地で田毎の月・石山寺の月・佐夜の中山の月は、月見の日本三景の一つに数えられています。佐夜の中山は、日坂より歩いて約五十分、菊川の里からは約二十分の険しい道程の坂道を登りきった所にあります。この坂道の最大勾配は、約二十パーセントともいわれていますが、現在では絶好のハイキングコースとなっており、昔の難所も今ではすっかりレクレーションの場になった感があります。

昔の峠茶屋は今でも「扇屋」という屋号で子育て飴が売られており、その前には円筒形の歌碑があります。

年たけて　また越ゆべしと　おもひきや
　命なりけり　佐夜の中山　　西行法師

西行法師は六十九歳の時、生涯再び佐夜の中山峠を越え

ることが出来、その時の感慨を詠まれました。その南側一帯が公園として整備され、またこの地に別の伝説が残されており、遺跡も数多く残されています。

蛇身鳥退治

弘安元年（西暦一二七七年）の頃、この佐夜の中山に松村平内左衛門という猟師が住んでいました。平内左衛門は子供の頃から狩りが大好きで毎日のように山野を駆け巡り、手当たり次第獣や鳥等を残忍極まりない方法で射殺して過ごしていました。

冬のある日、平内左衛門は雪空を見ながら、また今日も大きな獲物を射落とすぞとばかり、山の中へ獲物を探し求めました。そして、昼近くに岩の間に大きな黒い影を見つけました。熊のようです。しかし、何か異様な感じでしたが一層の狂喜心が湧き起こり、高鳴る胸を押さえながら、獲物を弓矢で射殺してしまいました。しかし、確かに命中したのですが獲物が苦しむ様子がないので不思議に思って近づいてみると、何と熊の皮を被った子供が絶命していました。よくみるとその子供は平内左衛門の一人息子の八太郎でした。

八太郎は、自分が生まれ育った佐夜の中山の、とりわけ動物達が大好きでした。しかし、父親が残忍な方法で鳥や獣を射落とすのを見て、とても心を痛め、父親にお願いだから殺生をやめてくれるように、優しい心をもってくれるように何度も何度も頼むのですが父親は聞き入れようとはしませんでした。思い余った八太郎は、ある決心をしました。雪の朝早く、佐夜の中山の山中に熊の皮を身に付けて、父親のやって来るのを今か今かと待っていたのでした。

この事を知って驚いたのは、夫から話を聞いた妻でした。我が子の惨い死と夫の不甲斐な仕打ちに深く嘆き悲しみ、眠りもせず、食をとらず、ただ毎日泣きわめき放心しているばかりでした。遂に、狂人となり山中で迷走しながら大狂声を発して狂乱死してしまいました。やがて、妻の霊魂は世にも恐ろしい大怪鳥となって現れ出て来ました。

その姿は、頭が鶏で胴体は大蛇、目は鈴で尾は孔雀の形をし、両翼は異常に大きく一本一本が刀のように強く、嘴と脚の爪は太く長く鋭く尖っていました。

「キキキッ」と異様な鳴き声を連発しながら空を乱舞し、大地を狂走し夜な夜な人里に出没して、人を襲い牛馬を殺し、家屋を荒らし回って里人を恐怖のどん底に陥れてしまいました。この大怪鳥を蛇身鳥といい、妻の霊の乗り移りと恐れられ、遂には里を往来する人も途絶えてしまいました。この恐怖の噂は、たちまち世間に広く伝えられて行きました。

蛇身鳥の噂は遠く都にも伝わり、やがて時の後宇多天皇のお耳にも達しました。天皇は深くこの出来事を心配

され、里人が前のように安心して暮らすことが出来るように、そして旅人の安全を守るために怪鳥を退治することを決断されました。

常日頃から信頼の厚く弓矢の名人として名高い、三条三位藤原良政卿が選ばれ天皇より、「佐夜の中山山中に怪鳥が出没して、里人や旅人を悩ますと聞いている。直ちに行って退治せよ」との勅命を下されました。若い良政卿は、血気して勇み直ちに蛇身鳥を退治することを決心しました。

良政卿は武芸に優れた方で、常日頃から観世音菩薩を深く信仰していましたので、蛇身鳥退治の悲願成就を掛けて毎日数回の読経を続けていました。そして、家臣の中でも屈強な侍である、橘主計之助を筆頭にその弟の主税をはじめ数百騎の軍勢で遠江の国を目指しました。佐夜の中山の山頂にあった末広荘（現在の扇屋）に本陣をはって蛇身鳥退治の機会を狙うことになりました。

それからの良政卿は、部下とともに山野を駆け巡り何時、何処からともなく現れるという蛇身鳥を一生懸命調べました。ある時、山野を駆け巡っていた良政卿は、清滝（現在の海老名の滝）のほとりにさしかかりました。どこからともなく琵琶の調べが聞えて来るので音色に惹かれ近づいてゆくと二人の美しい姫君が琵琶を奏でていました。良政卿は、時の経つのも忘れて聞き入っていました。それから良政卿自身も滝の近くにある古い庵に住む、中国から渡来した空道仙人の下に山野探索の傍ら、時間を見つけては琵琶を奏でに通い始めました。美しい娘二人は、この地の豪族である愛宕宗仲の娘、月小夜姫と白菊姫でした。姉妹も、この庵に琵琶の稽古に通っていたのです。このようなことから良政卿は二人の美しい姉妹を知ることが出来て特に姉の月小夜姫に惹かれて行きました。この頃より良政卿は空道仙人の古庵に留まって八か月もの長きに亘り、毎日蛇身鳥退治の方法を考え、その成功を夢見て苦闘を重ねていました。また、常日頃深く信仰している観世音菩薩への読経礼拝を欠かさず、蛇身鳥退治のチャンスを今か今かと粘り強く待ち続けました。

そして、とうとう年も明けた二月八日厳寒の真夜中に良政卿以下従者が待ち望んだ蛇身鳥との決闘の日が来たのです。蛇身鳥は、腹の底に響き渡る程の気味の悪い鳴き声を発しながら、闇の中を狂ったように、従者達をめがけて羽ばたき回り、人の顔に覆い被さるように自由自在に舞ってきます。身の丈、二メートルもある大怪鳥で暗闇の中を声恐ろしく、響き渡りながらその正体はどこにあるのか見当もつかず従者達は、あせっておりました。良政卿は、一心不乱に観世音菩薩を念じ、するどく尖った毒矢をつがえ機会を待っておりました。するとその時、一瞬満月のような明かりが当たりを照らしました。その時、くっきりと大怪鳥、蛇身鳥が姿を現したのです。そ

の好機を逃さず良政卿は力いっぱい蛇身鳥をめがけて矢を放ちました。やがて、天地をとどろかすような響きと共に遂に蛇身鳥は地上に討ち落とされました。この長く苦しい蛇身鳥との闘いも終わりを告げ、良政卿は観世音菩薩のおかげと読経をあげ、怪鳥を退治出来たことに感謝してふもとの里に戻って来ました。良政卿は、蛇身鳥退治の報告を天皇に申し上げるため都に戻る事になり、月小夜姫とのお別れに自分が最も信仰していた観世音菩薩を形見として月小夜姫に残して行きました。

その後、縁あって月小夜姫は良政卿の住む都の菊丸殿に住む事になりました。月小夜姫に小石姫と香樹丸の二児が生まれました。しかし、山で育った月小夜姫に都の生活が合わず二人の子供を連れて、橘主計之助、弟の主税、乳人、従者達をお伴にして都を去り、佐夜の中山に戻りました。良政卿は、月小夜姫の生活の安泰を図るため、橘主計之助に命じ景色の良い菊水の滝の上に祠を建立させ、その中に観世音菩薩像を安置させ、月小夜姫一家の無事を守護しました。

*

江戸時代の戯作者、滝沢馬琴はこの佐夜の中山に残された遺跡、伝説から夜泣き石の創作を書き上げたのではないでしょうか。山賊に臨月の腹を切られた女、お石さんと小石姫、八太郎と音八、山賊・轟右衛門と平内左衛門、今も峠の寺に残されている子育て観世音菩薩像と名刀赤玉丸。

多くの諸説を伴い、今も佐夜の中山峠には、夜泣き石が、道行くハイキング客の喧騒をよそに静かに鎮座しています。

目耕録（その七）

――山下惣一著『農から見た日本』を読む（清流出版、二〇〇四年）――

目耕：目で紙田を耕す。読書することを譬えて言う（世説新語）。

山本鎭雄

五年目の野菜作り

東京の多摩に住み、本読みと物書きで過ごし、週一回――農繁期は一泊二日、農閑期は日帰り――、山梨県にある妻の実家の畑で野良仕事をして、早くも五年目が終わる。野良仕事は相変わらず、素人の域を出ず、しかも一人でするので、十分に手間とひまをかけることが出来ない。種を蒔いても水まきや草取りに手が回らず、中耕、土寄せ、間引き、追肥、誘引という作業も手抜きした。夏には雑草が生い茂り、手を焼いている。

今年の春と夏は例によって猛暑だったが、適度に雨に恵まれたためか、近年になく茄子と胡瓜の生りは良かった。畑で胡瓜をもぎ、塩をふって齧ると、香りとうま味があって、最高に甘かった。小玉スイカの出来も良く、中玉ほどに大きくなった。真夏の畑で水分を補給しようとして、熟したスイカに塩をふって齧り付くと、甘みとうま味、香魚に似た特有の香りがした。まさに「旬産旬消」だ。

例年になく、根菜類のジャガイモと里芋の生りは良かったが、さつま芋は葉が茂り過ぎて、蔓呆けしたためか、収穫した芋は小さくくびれ、不揃で、すぐに腐ってしまった。豊作の里芋は春の食用と、五月に蒔く種芋用に分け、穴を掘って埋けた。ジャガイモは肥料袋に入れて小屋に収納し、食用と春になって植える種芋用として保存した。年を越した種芋のジャガイモは植えると、疫病が

発生し易い。それとは別に、農協から購入した消毒済みの種芋の男爵芋を植えることにしている。厳寒の今、春の到来が待ち遠しい。

植物の強靭な生命力

これまでモロヘイヤの種を露地に直に蒔いてきたが、今年は種を蒔き、発芽させ、苗を定植した。その日は炎暑だったので、果たして根付くかどうか心配だった。そこで、根元にたっぷり水を撒いたが、葉が萎れ、一本の分枝は黒ずんで枯れた。私の心配は的中したように思えて慌てた。さらに水を撒くと、葉先から水滴がぽたぽたと落ちてきた。懸命に生きようとするモロヘイヤの強靭な生命力に感動した。ズブの素人の私は野菜の栄養成長と生殖成長の生命力に助けられて、なんとか収穫することが出来るのだと、改めて自然の営みに感銘した。

ところが、露地に直にタネ（地下茎）を植えて失敗したのが、生姜だった。生姜は芽出しが遅く、その周囲に雑草がどんどん生え出した。鎌で雑草に隠れた生姜の小さな芽を欠くことを怖れて、雑草の茂るままにした。生姜のために撒いた肥料は雑草のこやしとなり、雑草が蔓延した。芽の出ない生姜もあり、収穫した生姜も生りが悪かった。雑草の強靭な生命力にも畏れ入った。

野菜作りのテキストを見ると、種を蒔き、芽出しさせてから定植することは、野菜作りの基本なのだと改めて認識した。白菜、キャベツ、ブロッコリーなどの多くの野菜はしっかりした苗に育て、畑に定植する。こんなことに気づかなかったのは、あまりにも迂闊だった。だが、素人の私には新鮮な経験だった。

体力的に衰えを感じたが……

年々、体力の衰えを感じた。五年目はとくにひどくなって、動作は緩慢となり、鍬で土を耕すと、すぐに息が切れた。腰は痛み、足がもつれ、指が攣れた。持病の脊柱管狭窄症が悪化したのか心配になった。それでも野良仕事を止める気にはなれない。自然の営みを観察し、体感することは此の上ない喜びだ。

くたびれたら、丸椅子に座り、お茶を飲みながら、近くにせまる四季折々の山々の景色を満喫することは最高に快適だ。だが、すでに詩脈が衰え、俳句を作る気力は衰えてしまった。

野菜よりも雑草の生命力の方が強靭だろう。真夏に耕耘機で除草し、「やれやれ」と安心しても、雑草は二週間後には確実に生えてくる。言うまでもなく、夏の野良仕事は雑草との戦いだ。しかも畑の小石は拾っても拾っても、取り尽くせない。大根の根が土の中の小石に当たり、根元は二股、三股にひねくれていた。

真っ白な大根の根元は妙にエロチックだった。

晴耕雨読の喜怒哀楽

本誌に「目耕録」と題し、その時々に作家・研究者の作品をアトランダムに取り上げ、私の野良仕事の体験と観察を引き合いに出して書き綴ってきた。本号では専業農家として奮闘し、憤慨した六八歳の山下惣一著『農から見た日本』（二〇〇四年）を取りあげる。

惣一は一九三六年、玄海灘辺境の佐賀県唐津市（現）で中規模の自作農の長男として生まれた。新制中学校の卒業後、大学入学資格検定（大検）を目指したが、父に反対されて断念し、しかも二度も家出を繰り返し、ついに二〇歳で家業を継ぐことを決意した。父に徹底的に鍛えられ、みかん、コメ、葉タバコの栽培を始めた。

惣一はみかんの専業農家を目指して、山地を開墾しみかんの苗木を植樹した。そのかたわら、文学作品を耽読し、その後は自らの「農」の体験を小説や雑誌に発表し、『海鳴り』（一九七〇年）で日本農民文学賞『減反神社』（一九七九年）で地上文学賞を受賞し、農民作家として認められた。「農」の現場から盛んに雑誌や新聞に寄稿し、講演会や対談では専業農家の喜怒哀楽を発言した。

行動派作家の告発

「農」、つまり農業、農村、農民の視点から戦後日本の高度成長期とそれ以降の「農業の切り捨て」と「農業叩き」の農政と世論に抗して、農林業の衰退、農山村の荒廃、農家の断絶という過酷な現状を告発する著作や随想を続々と発表した。惣一は講演やシンポジウムでは苦悩する農民の一人として苦境におかれた農業の現状を率直に発言し、対話した。

その間、惣一は自ら設立に関与したアジア農民交流センターの代表としてタイ、ブラジル、オーストラリア、ニュージーランド、メキシコ、中国、韓国など世界各地の農業と農村を視察し、現地の農民と率直に意見を交換し、日本の農民の視点から大いに発言し、ルポルタージュを発表した。このように、惣一は行動派の農民作家であり、しかも農政や農協にたいしても無頼漢もどきに酷評する評論家である。

惣一は、世界旅行の当初は日本に農産物を輸出している外国の農業の現状、農業経営者、自作農、農業労働者の生活と考え方に関心があったが、後半は「日本の農業はどうなるのか、どうすればいいのか？」が中心課題になった。その結果、平和と安心・安全な国民生活は自作農の存在と食糧自給率の維持・向上であると確信した。

日本農業の有利な条件

世界の農村を視察した結果、惣一は日本農業の有利な条件が生産者の近くに多くの消費者がいることと確信した。石塚左玄の弟子たちが提唱した「身土不二」に感銘を受けた。それは、人間の「身（体）」と「土」は二つ

ではなく、一体だという意味で、「人間は足で歩ける身近なところで作られたものを食べ、生活するのが良い」という思想である。

惣一は「身土不二」の思想を探究し、それを実行すべく、地元の農水産物を地元の消費者が買う「地産地消」「地域自給」のシステム、日本で初めて農協に農産物の直売所を立ち上げ、婦人部会は農産物の加工品を作り、販売することにした。

その後、六八歳の専業農家の惣一はこれまで発表した著作や記録を集大成し、本書の副題のように、農民作家として「遺書」（二〇〇四年）を公刊した。ところが、出版記念会で出席者から一斉に「これで、長生きするんだよなあ」と声が掛かった。惣一はその後も長生きして健筆を揮い、国民皆農を勧める『農業に勝ち負けはいらない』（二〇〇七年）、子供向けに『惣一じいちゃんの知っているかい？農業のこと』（二〇〇九年）などを刊行している。

みかん専業農家の顛末

山下惣一の父・武雄は三三年間、葉たばこ栽培を続けたが、「臨時葉たばこ生産調整奨励金」（一九八二年）の交付を受け、葉たばこの耕作を一時中止した。すでに触れたように、惣一はみかんに夢と未来を託し、新妻とともに雑木林を伐採し、傾斜地を開墾し、みかんの苗木を植えた。その六年後、みかんを収穫・出荷するようになった。

ところが、一九七二年以降、みかんは消費量が低迷し、生産過剰となって価格が大暴落した。しかも一九八八年、日米農産物交渉で牛肉とオレンジの輸入自由化が決着し、自由化対策として「かんきつ園地再編対策事業」（一九九〇年）が実施された。惣一は補助金の交付を受け、跡継ぎの息子に傾斜地の八反歩のみかんの木を伐採させた。その時「自分の人生を伐った」と感じた。惣一はみかん栽培にかけた夢を失うのはあまりにも無残だった。だが、すでに平坦地を基盤整備し、軽トラックが入る五反の（五〇アール）の平坦地に新種のみかんの木を植えていた。

出稼ぎ労働の悲哀

戦後の経済の高度成長の時代、国民所得が増加し、産業規模が拡大したが、工業と農業の生産性の不均衡、その従事者の生活と所得水準の格差が顕在化した。さらに、コメなどの主要農産物の生産量と消費量が乖離したため、農家の若年層を始め基幹労働力も農外に大量流出した。

惣一自身は親戚や友人から「百姓などアホらしくてやれん。トンネル工事で一日働くと、コメ一俵（玄米六〇

キロ分）が稼げるぞ」と盛んに誘われた。農家の存続を願う五十八歳の父・武雄は「お前は百姓にはまれ」と言って、一九六七年から、秋から春までの半年間、関西方面の宅地造成地に出稼ぎに出た。

武雄は五年間で出稼ぎを止め、山に弁当を持参し、雑木林を伐採して焼却し、そのあとに杉や檜の苗木を植えた。武雄は一年間に一反（一〇アール）以上を植えたが、脳溢血で倒れた妻の看病に疲れ、体調を崩して入院した。退院すると、葉たばこの選別中に脳梗塞で倒れ、その三日後に六八歳で亡くなった。山下家の養子となり、家の再興を使命と考え、農業を天職と信じ、長男の惣一に農家を継がせ、作業中に倒れた。父の死について、惣一は「この国の百姓衆の絶滅を象徴している」と思われたと言う。

減反政策の衝撃

稲作農家に最大のショックを与えたのがコメの生産調整、減反政策の実施である（一九七〇年）。戦後、農業の生産基盤が整備され、農業技術も向上した。ところが、コメの消費量が減少したにもかかわらず、稲作農家はコメの「増産、増量」に励み、コメは供給過剰になった。食糧管理制度のもとで政府の買い入れ価格と消費者の売り渡し価格の間で「逆ざや」が生じ、政府の在庫米が急増した。その結果、食管特別会計は巨額な累積赤字をかかるようになった。

そこで、政府はコメの減反政策、水田を転作し、水田の耕作面積の一割を休耕とし、減反面積を地方公共団体に配分し、市町村は各農家の耕作面積を割り出し、休耕面積を通知した。農家が減反面積を拒否すると、他の農家の割当てが増加する連帯責任制とした。生産単位全体が拒否すると、同じ市町村の生産単位の減反面積が増加する。そのため、農民や単位農協の間で相互に厳しく監視し合うようになった。

大半の米作農家がこの未曾有の減反政策を受け入れたのは、その当初の奨励金の交付と、食糧管理制度の存続、さらに水田を耕作するには農水路が共同使用で、各農家はいわば稲作共同体で「農村の和」を尊重せざるをえなかった。

惣一は減反政策に疑問をいだいたが、山間棚田を休耕とし、一割減反二割増収を目指した。ところが、若い農家の嫁たちは農協のカウンターで「よかったねぇ」と言い合っていた。軽トラも入らない山奥の田んぼを休耕にしたために、重労働から解放されると大いに喜んだ。減反政策に疑問をもつ惣一は複雑な思いで若い嫁たちの会話を聞いた。

致命的な「農業叩き」

一九八〇年代、「日本のコメは高い」「農家は国家に寄

生するダニだ」「過保護が農家の自立を阻んでいる」「宅地・住宅難のために、都市農業を安楽死させろ」という「農業叩き」が盛んに起こった。惣一はコメの減反政策に衝撃を受けたが、衝撃の第二波がこの「農業叩き」である。

この「農業叩き」を増長させたのは、農協（その政治組織の農政協議会）は田植えが終わると、全国各地の農民を東京の米価大会に動員し、はちまきを締め、筵旗を掲げて圧力をかけ、生産者米価値上げの「米価闘争」を年中行事のように繰り返した。この「農協の夏祭り」をマスメディアは一斉に報道した。経済大国でありながら、働き蜂で兎小屋に住み、通勤地獄に苦しむ都市サラリーマンは「農業叩き」に共感した。

さらにバブル絶頂期に、中曽根政府は前川レポート（一九八六年）で日本経済の外需依存型から内需主導型への転換を提唱した。農業分野では「農家の選択的拡大」「市場メカニズムの活用」「安い農産物輸入の促進」などの「農業叩き」に終始した。惣一は政府こそが「農業叩き」の黒幕と断定した。テレビで発言する軽薄な政府の御用学者やジャーナリストに抗弁した惣一は、ただ切歯扼腕した。

食と農をめぐって

ズブの素人の私は野良仕事で収穫した野菜を多摩の自宅に持ち帰り、新鮮な野菜を賞味した。まさに「産地直送」である。農薬を散布しないことにしているため、小松菜、ほうれん草、青梗菜などの葉菜類は確実に食害され、スーパーマーケットで売られている見栄えの良い野菜ではない。スーパーで買って、食べたことがあるが、旨くて甘みのある野菜を食べたことはめったにない。

近くの農協の直売所に出荷せず、ただ自給用に野菜を作っているのだから、見栄えの良さにはあまり頓着しないことにしている。葉菜類が虫に食害されても、湯掻いたり、油で炒めると、まったく気にならない。私は農薬を散布し、害虫が死ぬ野菜を食べる方が不安だと考えている。

都市暮らしに終始した私の自給用の野菜作りは、自然と大地への回帰を経験させてくれた。しかも「農」と密接に関係する「食」、つまり食品の安全性と食生活の重要性、飽食と崩食の時代における「食育」が大切だと自覚するようになった。そこで、その手がかりとして、春から近くの公民館のサークル「男の料理教室」に通うことにした。ただ単に、料理法を学ぶのではなく、改めて料理を通して「農」のあり方を探究したいと考えている。

（二〇一二年二月末、擱筆）

二八に帰るすべもなし（八）

―愛する北国のひとに寄せて―

伊治哲

流

昭和二五年の春、修平に大学受験のときがきた。

修平は、なに臆することもなく東大を受験し、そしてあっけなく落ちた。なぜ落ちたのか、未だに腑に落ちない。

もっとも受験などというものは、余程の致命傷でもない限り、自負のほうが強いのが当たりまえだが、それにしても向う傷を恐れなさ過ぎた報いといわれても致しかたなかった。

この二五年は旧制の国立大学最後の入試であった。高校、専門学校はもちろん、外地からの引き揚げ学生、旧軍関係の残党など通常に倍する志願者が、一挙に大学の門にひしめくことが予想された。

このため、文部省は、この年だけの扱いとして、東京・京都が一次、北海道・東北・名古屋・大阪・九州は二次として、一次の不合格者を二次で救おうという入試方法をとった。

修平は、まさかの不合格通知を受けた。すぐに一年浪人して再挑戦することを企てたが、一年遅れるうえに新制大学四年間の就学は、生家の家計が許すはずがなかった。両親、祖母、弟妹たち、そして心待ちにしてくれた澤村の家族にどうして顔向けができようか。その不甲斐なさに、修平は生涯初めての挫折感に陥った。

修平は、東京からの帰り道というだけの理由で安易に選んだことを悔みつつ、二次入試の名古屋大学法学部を受験した。幸か不幸かこちらの方は難なくパスした。しかし、修平になんの感慨も湧かなかった。

その挫折感を救ってくれたのは、あのタエであった。

「舘さん、なにをくよくよしてるの？　東大も名大も

同じ〝角帽〟でしょ？　だったら、東大生の倍、勉強すればいいじゃないの。そのうえ、金沢へは名古屋の方が近いしね。休みになったら必ず遊びにきてね」

と全く無邪気である。しかしこのときばかりは、家庭教師がまるで逆転してしまった。修平は完全に脱帽した。そして、いくらか元気をとり戻すことができた。

四月、いよいよ名古屋の地を踏んだ。鶴舞公園に接する大学病院の給水塔に登って見た。その頂上から見たこの街は、空襲の傷跡が痛々しく残り、見わたす限りのだだっ広い焼け野が原が広がる砂漠のような街であった。

これほどの大都市ではないが、百万石の伝統文化の重みをもち、浅野川、犀川の二つの清流と、兼六園の豊かな青松に囲まれた第二の故郷、金沢の街が一層懐かしく修平の心によみがえってきた。

修平の心の空洞を埋めたのは、同じ運命を背負って、名古屋で落ち合ったオチムシャたちであった。集団で都落ちしたとでもいえそうな五高卒の三人組は、同期の中でも格別に頭角をあらわしていた。給水塔で遭遇した大阪高校の怪男児と修平を含めた五人は、新進気鋭の長谷川正安助教授が主宰する憲法ゼミに入ることを申し合わせた。

十人そこそこのゼミ生は、名古屋城内の兵舎を改造した味気ない教室から脱け出して、多少の緑が残り、その名も〝観月宿舎〟と呼んで自慢する長谷川さん――〝先生〟ではなく〝長谷川さん〟と呼んだ。兄貴分のような存在であったし、この大学では、だれかれ構わず〝さん〟づけであった――の自宅に押しかけた。肩を寄せ合うように車座になって、半分勉強、半分遊びのゼミ生活は、高等学校の寮生活を思い出させて何倍も楽しかった。政治学科、法律学科を合わせても一学年百人という超小世帯の学部環境が、思いもかけぬ寺子屋教育を生み出したのだった。修平たちは、貧しい中にも大きな喜びを享受することができた。

一方で学部は、弱体な教授陣を補強するため、他大学の権威ある教授による集中講義を始めた。東大の我妻栄（民法）、石井照久（商法）、団藤重光（刑法・刑訴法）、田中二郎（行政法）、九大の山中康夫（民法）など、その道の著名教授が入れ替わり立ち替わり教壇に立った。

団藤教授など「こんな少人数の学生への講義は初めて。君たちは幸せだ。自由に質疑や議論ができるし、とても充実感がある。私なんか、牧野英一先生に教わったが、早く行かないと座席がなくて聴講もできないし、あんなに大勢では講義に血が通わなくてね」と冗談を洩らすほど自由であった。居ながらにして渇望した碩学の謦咳に接しえたことは、修平たちにとって不幸中の幸いであった。

た。

こうして、在学三年の間、勉強はともかく、教師、学友のありのままの人柄に触れ、互いに刺激しあうことができた。当時予想したとおり、長谷川ゼミの学友の多くは、卒業後各地の大学に招聘されて、今、学究の道を進んでいる。

修平は、春夏の休みごとに金沢を訪ね、四人の家族との再会を楽しんだ。とりわけ、二人の姉妹の成長には目を見張らされた。修平の大学三年の間に、姉のチエは一年遅れで東京女子大に入り、妹のタエは姉の後を追って金城女学院高校へ進学した。タエは昔の希望どおり、〝ドレメ〟を目指していた。

修平は、チエの進学へのささやかなお祝いに、長塚節の「土」の文庫本を贈った。暫くたって、チエは「この本は、なにを言っているのか、全く分らない。面白くないから途中で投げ出してしまった」と言ってきた。当然である。「土」を推薦した夏目漱石でさえ「面白いから読めというのではない。苦しいから読めというのだ」といっている。修平自身もこれほど読みづらい小説は読んだことがなかった記憶がある。

長塚節は、茨城県の鬼怒川に面した農村に生れついた極貧の百姓の生活を、あるがままに、抑揚も叙情もなく、ひたすら冷徹に書き綴っている。しかも、この地方のひどい方言と訛りを、なんの装飾もなく、ふんだんに使い込んでいるのだからなおさらである。

じつは、修平がチエに「土」を薦めたのにはわけがあった。

一年半の澤村家の生活を経験して、その世間離れした豊かさや優雅さに、手のとどかぬ憧れを感じたのは事実であった。しかしその羨望の裏で、ひどい嫉みを感じたのも事実であった。民主化しつつある戦後の社会に、なぜこれほどの貧富の差が生まれるのか：・と。実の親も及ばぬ温情を受けておきながら、このようなことを考えるのは不実の極みであるが、修平の生い立ちや丹波の山国の現実に引き比べると、どうしても否定できない実感であった。

父がよく言っていた。「一流ホテルで高級なフランス料理を食べることもできれば、糞尿の入った肥え桶を天秤棒で担ぐこともできる人間になれ」と。多分負け惜しみの愚痴だったのかもしれないが、人間の品格論からいえば決して間違っているとはいえない。父がいう、世の中の天と地、そして人間としての巾の広さを、小説の文字の上だけでもチエに知ってほしいと思ったのである。しかし、二十にとどかないチエが「土」を投げ出したのも所詮無理からぬことであった。

チエはほとんど毎日のように手紙を寄越した。あの引っ込み思案のチエからは想像できないほどの変わりよう

であった。それは修平が大学を卒業して実社会に出てからも続いた。

修平は大学を卒業したその日からでも実収入を得る必要があった。主な学友が研究室に残るのを横目で見ながら、共栄銀行への就職の道を選んだ。これ以上親に負担をかけることはできなかったし、むしろ僅かでも親に恩返しをしなければならないと思ったからである。

共栄銀行が他の財閥系の銀行とは違って、中小企業や庶民との繋がりが強い、戦後創設の新しい銀行というふれこみも修平の気持を誘った。ということもあったが、戦後の復興特需をもたらした朝鮮戦争が休戦間近であったこの時期、またもや厳しい就職難に見舞われたからでもあった。就職希望は二社まで、しかも二社のうち早く内定した方を優先するという措置に、修平は否応もなく決断を迫られたと言ってよい。狭い範囲の中での選択の自由のない、半ば強制の結果を甘受せざるをえなかったのである。

修平のような戦前派の世代は、過去の軍籍という亡霊につきまとわれ、さらに新旧学制改革の谷間と、経済の極端な好、不況という混乱に、最後まで翻弄されつづけた唯一の世代であったといえるだろう。

とはいえ、門閥も学閥もなく、すべて白紙で公平に評価される共栄銀行を選んだことは、修平のその後にとって望外の幸せであったことは冒頭に述べた。

最初の配属は名古屋郊外の一宮支店であった。

就職後半年が経った昭和二八年秋のある土曜日の午後、修平は東京へ向かう特急「つばめ」の車中にあった。東京女子大のチエに会いに行くためである。

女に会いに行くために長旅に出るなど、生まれて初めてのことである。それどころか、ついこの間まで考えたこともない行動であった。そのためか、心はなんとなく落ち着かず、そわそわと宙に浮いていた。熱海を通過するころ、宵闇にとざされた海の上に、ぽっかりと浮かんだ大きな満月を仰ぎ見た。

〈とうとうここまできてしまった〉

修平の心は益々動揺した。

夜も遅く、汽車は東京駅に滑り込んだ。新橋あたりから窓を開けてチエを探し求めていた修平の目に、ホームの端で手を振っているチエの姿が飛び込んできた。ホームに降り立った修平も、本当に来るのかと半信半疑だったであろうチエも、何年振りかの再会に言葉が出なかった。修平は、チエがこの二、三年の間にすっかり大人びたことに驚いて、口を噤んでしまったのだ。

中央線に乗り換えて荻窪に向かった。修平にはどこを歩いているのか見当もつかなかったが、どうやら大学の

校門近くの学生宿に向かっているようであった。六畳一間に手あぶりの小さな火鉢を置いただけの、見るからに寒々しい部屋に通された。その間「元気だった?」「はい、元気でした」の二言、三言しか言葉を交していなかった。火鉢を真ん中に対座して改めて挨拶をした。

「ご両親はお変わりなく元気? タエちゃんは?」

「おかげさまで。でも、両親はここのところ体がよくないみたいです」

「どうしたの? 病気なの?」

チエはちょっと寂しげな顔つきで口を閉ざした。

しばらく沈黙が続いた。

火鉢の中の火箸がなにかのはずみで灰の中に倒れた。それを拾おうとして二人の手が火鉢の中で絡んだ。咄嗟に、互いの手を引っ込めて

「ごめんなさい」

と苦笑いした。

あとから考えると、その時のあの一瞬の挙措が、行く行く二人の運命を遠ざける結果になったように思われてしかたがない。

学生寮の門限があるからとチエが座を立とうとした。修平は

「今度は『土』のように読みづらくないから」

と、用意した国木田独歩の「武蔵野」を手渡し、

「あす、できれば玉川上水あたりを歩いて見たいな」

と呟いた。チエは一瞬ほほ笑んで、

「ごあんないします。おにぎりを作ってくるわ」

と、元気に言った。

上水といっても、修平が想像していたような大きな用水路ではなかった。修平の郷里でいえば、田圃に水を引くための溝を少し広げて、小さな堤で囲った巾二メートル足らずの水路であった。こんなところで、「太宰」はよく入水自殺ができたものだな、と不思議に思ったが、口には出さなかった。しばらく散策したあと、堤に座って食べたおにぎりはチエの気持がこもっていてとても美味しかったことを覚えている。

北国では、女子が上級学校を出ると直ぐにお嫁にいくことが慣わしになっているとチエがもらした。暗に修平の反応を窺っているようであった。しかし、修平には、結婚はまだ夢のような遠い先の話で、現実の問題として実感することさえできなかった。

それよりもなによりも、澤村家の生活環境と修平の育ちの間には、越えることのできない隔たりがありすぎた。まして長塚節の「土」のような世界をチエに覗かせることは到底できなかった。チエに対するほのかな親愛感よりも、修平の自らに対するコンプレックスの方がはるかに勝っていた。修平はチエを、将来自らの伴侶として位置づけることがどうしてもできなかったのである。

〝武蔵野への小さな旅〟が終って、修平とチエとの間の文通も、少しずつ間遠いものになっていった。

タエも、二人の間をそれと察してか、兄妹のような親近感から少しずつ遠ざかるようになっていった。

チエから結婚の挨拶状がとどいたのは、チエが女子大を卒業して間もなくのころであったろうか。

恋に恋をしたほろ苦い青春の一頁はこのようにして終った。

一方で、金沢での一年半、実の親のような恩愛を注いでくれた澤村の両親には、万分の一の恩返しもできなかった。そのことが修平の胸に刺のようにひっかかって長い間抜けることがないまま時が過ぎていった。

就職後十五年余りも経ってやっと仕事に余裕ができたころ、開学八十周年を祝う四高同窓会を機会に、久しぶりに金沢を訪れることができた。

なにをおいてもまず「茶畑二の小路五三番地」に車を走らせた。市電こそ街から姿を消していたが、昔のままの金沢がそこにあった。しかし目を見張ったのは犀川大橋を渡ってからであった。やたら大きな道路が走り、街区が整然と作られている。わずかに記憶に残っていたちょうの大木が覆う寺の山門を見つけ、その前で車を降りた。遠い昔の記憶をたよりに「茶畑」の表札を探した。しかし、どこをどのように探してもこの所番地は見つからなかった。

昔の細い小路が消えて新しい舗装路に変わっていた。どの住まいにも「寺町五丁目」の表札ばかりが目につく。見事な松の枝ぶりが覆う重々しい門構えの邸などどこにも見当らない。最近建てられたと思われる瀟洒な住宅ばかりが軒を連ねていた。住宅地が途切れたところでは、巾五、六十メートルもあろうかと思われる一直線の国道工事が始まっていた。

それとおぼしき辺りの住まいの老人に聞いてみた。

「昔、この辺りに『澤村』というおうちがあったのをご存知ないでしょうか?」

暫く首をかしげていた老女は、とぎれとぎれに教えてくれた。

「そういえば、もう少し先へ行った辺りに『澤村』という立派な家がありました。でも、ご主人が早く亡くなったあと、奥さんも入院なさったりして、ご家族の方もそれぞれ東京の方へ移っていかれたと聞いています。なんだか急にご不幸に見舞われたようで。……お気の毒に……」

修平は、驚愕のあまり礼を言うことも忘れて、指差された方角へ急いで足を向けた。

〈そんなことはありえない。年はとったかもしれないが、澤村の両親は、昔のように仲よく、わたしを待っていてくれているはずだ……〉

〈おじさんが亡くなるなんて……おじさん自身が医者なんだ……。そんなことは考えられない……〉

〈チエちゃんは、結婚してどこに住んでいるんだ……〉

〈タエちゃんは、どうしてるんだ……。幸せな家庭をもってるんだろうな?〉

まるで、二十年近く前の四高生に帰ったようなつもりでその辺りをさ迷い歩いたが、なにひとつ修平に応えてくれるものはなかった。

つづく

社告(内規)

☆同人参加へのお誘い

私達は広く同士の参加を歓迎致します。

「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行しております。

同人は同人費として月額二、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆維持会会員へのお誘い

本誌愛読者のうち、一部有志の方々が、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数ヶ月分をまとめて前納して頂いております。

季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行い、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティーへのご案内などを差し上げ交流を行っております。

＊同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。

郵便振替口座　〇〇二七〇―〇―六四五九二

加入者名　まんじ

イドと超自我の谷間で（四）

・・・ある女の数奇な生涯・・・

鍋屋次郎

兎に角戸籍謄本と住民票だけは用意して、アメリカに行く行かないを決める前に海保純に会うことだと腹を決めた。

一月末にはすずらん美容院を退職するアヤは、今まで自分を指名してくれたすべてのお客には既に手紙をだし、驚いて電話や手紙をくれた人たちには退職理由を「自分の今後を考えて」と説明していた。

アヤの後任はどうなっているのか分からないが、牧章輔は了承し、月末の夕方は章輔も美容院に来る、と言っていた。

二月三日、アヤは海保純を訪ね、一月末ですずらん美容院を退職したことの報告とアメリカ行きの打ち合わせというより、アメリカ軍からの海保純招聘理由について

「先生、聞こえています」
「一緒に行くの？行かないの？どっち？」
の海保純の声にようやく我に返ったアヤは
「先生、あまりにも突然で、アメリカ行きなんて考えたこともない私が。でも先生、声を掛けてくださって嬉しい」
「じゃ、行くのね。アメリカ軍の招きで行くのでパスポートは要らなくて、戸籍謄本と住民票が必要なんだって。その用意が出来たら家に来なさい。いろいろと打ち合わせをするから。じゃあね」
と一方的に電話は切れた。

アメリカ行きなんてアヤは考えたこともないし、思ったこともない。アルファベットのスペルさえ分からない自分が、海保純の秘書として行っても、むしろ抱っこにおんぶでお荷物になるだけではないか。

聞きたかった。
「先生、先生はどうしてアメリカ軍とM工科大学から招待されたのですか」
と聞くと、海保は
「よく分からないけど幽体の戦略的利用が出来るか、と言うことを私とチベットのウコン師に聞きたいらしいの」
「ユ・ウ・タ・イ・ってなんですか」
「そう。貴女には分からないわね。人間には幽体離脱現象というのがあるの。一般的には主に臨死状態の人に現れる現象で、体はベッドの上に寝ているが、魂というかそのようなものが肉体から離れて天井から自分の体を眺めたり、または外に浮遊して出かけたり、そしてまた元の体の中に入って、その見たことはその人が目覚めたとき記憶に残っているというような現象なの」
首をかしげているアヤを見て
「そうね、人間の体は物体としての肉体と、魂ではないけど魂のような幽体の二つから成り立っている、と考えられるのね。幽霊のことは知っているでしょ。どうも幽霊ともつながっているみたいなの。M工科大学でいろいろと研究しているらしいけど、現段階ではよくわからない、ということなの。なぜ私の所に話が飛び込んできたかというと、貴女の前で京子さんや貴女のお母さんとお話ししたでしょ。その時の私は、私の中の幽体が京子さんや貴女のお母さんとお話ししているのね。どうもそうとしか考えられないの」
海保純は不思議そうな顔をしたアヤを見て、続けて
「だけどね、アヤさん、今の段階では科学的な解明はできていないの。自分で自分の体から抜け出て幽体になってみようと思ってもどうしたらできるのかが分からない。私の考えでは、霊界にいる人からこちらに何か信号が来て、それで私の体の中にある幽体が霊界の人、つまり京子さんや貴女のお母さんと話が出来るのではないかと思うの」
「その幽霊のようなものをアメリカ軍は何に利用しようと思っているのですか」
のアヤの問いに
『そこなのよ。アメリカ軍の人は「心配しなくていい。心霊現象について貴女の考えを率直に話してください」とだけ言っているけど、アメリカ軍はM工科大研究室と霊界現象を戦略的に使えないかと考えているみたい。つまり霊界での霊つまり幽体の移動はどんなに距離があっても瞬時に行くことが出来て、壁もすり抜けてゆくと考えられているので、使えるとしたら戦略的には魅力があるでしょうね」
ここまで言ったとき、隣室から付け人が
「先生、お電話です」
と呼びに来た。

暫くして戻ってきた海保純は
「アヤさん、明後日の夕方時間ある？　私たちがアメリカ滞在中面倒を見てくれる陸軍中佐でロバートという人が来るというの。日本人通訳と一緒に。だから貴女も会っておいた方が何かと便利よ。そうだ、貴女は和服を着てらっしゃい。外国の人と会うのは第一印象が大事。敗戦国なんて言う惨めな思いは捨てて、大和撫子の美しさを見せてあげましょう」
「先生、時間はありますが、外国の人と会うのは初めてで、何も言えませんよ」
「何もしゃべれとは言っていないでしょう。通訳がついているのだから大丈夫」

その後しばらく雑談の後、アヤは海保純の家を出て大磯駅から東海道線に乗って大船で乗り換えるときに買い物を思い出して駅の外に出た。

駅前マーケットで買い物をして出てくると、日本人男性と外国人女性が路上でチラシを配っている。日本人男性がアヤにチラシを渡しながら、不思議そうにアヤを見つめた。

アヤが渡されたチラシを見ると、キリスト教の案内チラシで、男性の顔を見るとどこかで会ったような気がした。アヤの頭の中で、その顔とキリスト教が結びついた瞬間、アヤは
「貴方は満州から引き揚げのとき、船でご一緒した・・・方ではありませんか？確か牧師さん？」
その男性はアヤの顔を見ていて
「あ！　ひやひやしながら乗っていた船の・・・・・・」
続けて
「田中です。覚えていますか？　もう昭和二十九年だから、九年も前のことですね。僕は松竹キネマ通りに行く途中のキリスト教会の牧師をやっています」
そこへ年齢は三十半ばくらいの小太りの、色の白い女性がやってきて、田中に
「この方，どなたですか？」
とアヤの顔を見ながら尋ねた。
「この女性はね、日本の敗戦で満州から引き揚げのとき、現地の人たちが船で送ってくれたときご一緒した方でね」
ここまで言ってからアヤを見て
「すみません、お名前はなんて言いましたか」
と聞いた。アヤは
「小林アヤです。そう、覚えていないですよね」
と微笑みながら言った。するとその女性はゆっくりした日本語で
「わたし、宣教師でキャサリンといいます。田中牧師と一緒にキリスト教会で働いています」

と言ってから田中の方に
「先生、教会にご案内してお話しなさったら？」
「そうだね。小林さん、時間があったらその後のお話をうかがえますか。教会はここから歩いて十五分くらいです。教会には、今の時間では家内と子どもがいるだけですからご遠慮なく」

田中とキャサリンが残ったチラシと、電柱から剥がしたポスターを持って、アヤと二人で歩き出した。

教会建物内部には礼拝堂、サイドルーム、事務室があり、別棟で牧師館と宣教師館がある。
田中牧師夫人が茶菓を持ってきて
「今、主人から聞きましたが、本当に不思議な出会いでしたね。神様のお導きでしょうね」
と言いながら田中の隣の椅子に座った。

アヤはその後美容学校に行き美容師の職を得て、御縁のあった美容院で先月まで働いていたこと、田中は、この教会はメソジスト系の教会で、牧師が急逝して後任を頼まれて昨年からここで牧師をしている、などをお互いに話し終わってから、キャサリンがアヤに教会案内を渡しながら、日曜日に教会に来るように誘った。

帰宅したアヤは、海保純の積極的なアメリカ行きの誘いに無理やり乗せられたような思いはあったが、自分自身としても、これをチャンスととらえて、「洋髪」の本場を見て研究したいという思いは募ってきた。
すずらん美容院で厚遇を得ていたので、つましく生活すれば一年や二年の生活費の余裕はある。
問題は言葉と文字と生活習慣であり、アルファベットも書けない自分に、アメリカ行きの資格があるのだろうか、などと考えると、消極的になってゆく自分を感じていた。

寝る前に、教会でキャサリンが渡してくれた教会案内を何気なく見ていると
「中学一年生バイブルクラス　毎週土曜日　午後三時から五時まで。聖書を学びながら英語の基礎と発音修得。教師　アメリカ人キャサリン宣教師　受講料無料」
と書かれており、更に
「英語の発音、アクセントはアメリカ人から学ぼう。バイブルクラスでは、アメリカ人が一般家庭の生活を披露しながら、生きた生活英語も教えます」
と書いた文字がアヤの目にとまった。

翌朝、アヤは教会の週報に目を通し、今日は何も集会予定がないことを確認して教会に出かけた。

教会の入り口に立ったアヤをキャサリンが見つけ、田中牧師を呼んできて、教会のサイドルームに招き入れた。サイドルームと言っても三十人程度の小集会は十分可能の広さで、窓から陽が入り明るい。

田中牧師とキャサリンはアヤの来訪目的が分からずアヤが何か言い出すのを待っていた。やがてアヤは

「突然の訪問でごめんなさい。私でも中学一年生のバイブルクラスに入れますか？」

との質問に驚いた田中牧師は

「え！貴女が。何か理由があるのですか」

の驚きの声に、アヤは自分が小学校を出ただけで、アルファベットの書き方も知らず、読み方も知らない。そこへ海保純の秘書という形で五月二十日から十日間アメリカに行くこととなったこと。ただし、自分の目的はパーマネントとかいわば洋髪の本場で、どのような髪型をどのようにして整髪し、今後日本の女性にどのような髪型が必要になってゆくか、特に洋装と髪型のバランスなどを見て勉強して来たいのです。ですから片言でいいですから話ができるようになりたいのです」

そこまで言うと、田中牧師はアヤの言葉を遮ってキャサリンと何か話し始めた。日本語の会話の中に英語が入っているのでアヤには分からない。キャサリンとの話が終わると

「アヤさんには驚いた。すごいバイタリティーだね。分かりました。こうしましょう」

といって立ち上がって事務室に向かった。謄写版印刷したプリントと本を持ってきた。

「アヤさん、これがアルファベットの大文字と小文字。先ずはこれを見ないで書けるようになりなさい。読み方はカタカナで書いてあります。それと、これは中学一年生の英語の教科書。これを二週間で全部書き写しながら覚えなさい。イラストも入っているから、文字はそんなに多くはないよ。それが終わったら、二月二〇日から五月十日まで毎週水曜日から月曜日まで、朝七時から夕七時までキャサリンと生活を共にしなさい。そのときの十二時間は日本語を使うことは禁止です。いいですか。トイレに行くのも、シャワーを浴びるのも、お腹が空いても、全部英語ですよ。それから日曜日は教会の大人の礼拝に出るのですよ。キリスト教のことはだんだん分かってきます。それからこの英和辞典、中学一年生向きでやさしいから、これを本屋さんで買いなさい。発音記号は最初からは読むのは無理だから、この辞書はカタカナと発音記号と両方書いてあります。キャサリンから言葉の発音を覚えなさい。言っておくけど日本人の発音は真似しないように」

と田中牧師が言い終わると、キャサリンが立ち上がって

「アヤさん、一緒に頑張ろう」

と握手を求めてきた。

アヤにはそれがどの程度大変なのか、果たして自分に出来るのか、全く考える余裕もなく、その日帰宅してすぐアルファベットの書き方から練習した。

翌日海保純から

「ロバートが来るから、いつもの江の島ホテルロビーに午後二時までに来て。和服でね」

と電話がかかってきた。

アヤはせっかちな海保純の性格を考え、一時半にはホテルロビーについた。ロビーの右側のティラウンジを見ると外国人と日本人の二人が人待ち顔でロビーに入ってくる人を眺めている。アヤは「そうかな」と思ったが海保純の来るのを待った。

それから五分もたたないうちに海保純と娘の和子がやってきて、その二人と挨拶が始まり、賑やかな声がラウンジに響いた。

海保純はアヤを見つけて、こちらに来るようにと手招きしてアヤを自分の隣に座らせた。

和子が二人に英語でアヤを紹介した。ロバートが通訳に何か言っている。通訳は

「アヤさん、ロバートが貴女の和服姿はとても美しい。ニューヨークでも和服を着てください。ニューヨーク五番街に大きなヘヤースタジオがあって、そこはヘヤーファッション誌も出版しているので紹介してくれると言っています」

と言った。海保純が

「アヤさん、ヘアースタジオは美容院と思って。ヘヤーファッション誌は、ヘヤースタイルの写真入り雑誌なの。是非紹介してもらいましょう」

といって、ロバートに

「早速お気遣いいただいてアヤも大変喜んでいます」

と言いながら、アヤにロバートと握手するように奨め、アヤは和服の袖を抑えながら見るからにぎこちない握手をした。

それからの暫くの歓談の中で、五月二十日はロバートが海保邸まで車で迎えに来て厚木飛行場に行くことなど、全ての予定が確認された。

帰り、ロバートは和服の袖に触れたり、何度もアヤと握手してアヤから離れがたい様子だった。

アヤの英語の猛勉が始まり、約束通り中学一年の英語の教科書は一回どころか既に三回書き写し、かなりの部分は暗記できていた。

キャサリンとの週六日の十二時間生活で、日常の生活

上の単語は数少ないながらなんとか覚えた。問題はそれを書けるようにすることだった。アヤの発音は単語スペルの一字一字の文字にこだわることのない、いわば「外人並み発音」で田中牧師を唸らせていた。

五月二十日、予定通り午前八時に海保邸にロバートが迎えに来た。アヤは約束通り和服で行くことにした。海保邸の玄関を出たところで、アヤがロバートに「ミスターロバート、グッ、モーニン、サンキュー」と言って握手を求めたので、ロバートはもとより海保純も娘の和子も驚いて

「アヤさん、誰に英語ならったの？　発音もアクセントも外人並み。あ！びっくりした」

とアヤを見つめた。

通訳の運転で助手席にいるロバートは、車中アヤに何かと話しかけてきた。アヤは「スロー」と注文を付けてゆっくりと話させ、分からない単語は聞き返すと、隣の和子が教えてくれるので、何とか会話は成立していた。

飛行機の中では、海保純と和子から、どこで誰に英語を習ったのか、なぜ私たちに言わなかったのかと散々責められた。すべてを話すと

「そのような習い方がベストね。流石、アヤ！」

と褒めてくれた。

ロバートは、ニューヨーク五番街のヘヤースタジオに三日間の予約をとってくれてあり、それ以外の一日は日帰りでナイヤガラの滝を見に行くこととしていた。

アメリカ軍とM工科大霊媒研究チームが海保純に質問するときに、アヤも秘書の一人として和子と同席した。専門用語を和子が何度も聞き返すことが多く、また、翻訳の言葉を見つけることにも苦労していた。M工科大研究員は、再三専門用語からやさしい言葉に言い換えてくれた。

ニューヨーク五番街のヘヤースタジオは、日本でいうところの「美容室」で理美容機器を備えた個室を幾部屋も持ち、順番を待つサロン風の部屋には、まだ日本では珍しいカラー印刷の豪華なスタイル誌が並んでいた。アヤはそこに釘づけになっていた。

ナイヤガラの滝も見て、あっという間に日本へ帰る日になり、ロバートが飛行場まで送ってくれた。飛行機の中で、海保純は

『アメリカ軍付属研究機関とM工科大研究室は、共同で霊媒世界を人間が自由にコントロールすることができないかを研究しているが、私は「できない」と断言してきた。霊媒世界を軍事的に使おうなんて考えること自体がとんでもないことだ』

と、和子とアヤに説明してくれた。

アヤが約二週間ぶりに自宅に戻ると、郵便受けに松尾からの手紙が入っていた。何事かと開けてみると

「加賀大造氏が生きている。詳しく話したいので六月の第一日曜日の五日午前十時に、前に会っていた藤沢の喫茶店に行く」

とのみ書かれていた。アヤは

「軍が死亡を確認したのに生きている筈がない」

とその手紙を心の中で否定したが、

「もしもそれが本当だったら」

という不安に他のことは考えられなくなった。アメリカでヘヤーファッションを見てきた楽しさも頭から消え去ってしまった。

六月五日、喫茶店で松尾は大造の生存を否定するアヤに

「俺もそんなことがあるわけはない、と思ったが、加賀大造の甥が俺を調べて自宅へやってきたのだ。社長は今、社長の実兄のところにいるそうだ。満鮮国境でゲリラに攻撃されて、全員殺されたと報じられた。しかし、社長は肩と足を撃たれて気絶していたのを、現地の人に助けられたそうだ」

アヤはそこまで聞いて

「侵略した日本人を助けてくれる人がよく居たわね」

『そこが不思議な御縁なのだな。社長たちが襲撃された場所がシナ人の楊周鵬という人の屋敷の近くで、その楊さんはその地域で尊敬されている仁徳のある人だそうだ。その人は、目の前で苦しんでいる人は敵兵でも助けなさい、と言っていたので、使用人たちが、まだ息があって苦しんでいた社長をお屋敷に担ぎ込んだそうだ。楊さんは社長を見たとたんに「この人は奥の客間にお連れして助けてあげなさい」と命じたので、楊さんの下男、下女など使用人からは手厚く看護されたそうだ。日本兵と一緒にいた日本人を匿って看護するということは、現地人感情では許されないことでもあることから、奥の客間に匿ったものだと思うが、戦争がはじまったころ、楊さんが東京に来ていてスパイ容疑で陸軍憲兵に捕まったとき、社長は予てから楊さんの人柄を知っていた知人に頼まれて陸軍に手をまわして、自分が身元引受人になって釈放してもらい、帰国させたことがあったそうだ。そのことから楊さんは社長を命の恩人と思っているわけだ。長い話だが、社長の甥はそういっていた』

松尾はコップの水を口にした後、続けて

「それで、自分が持っていた資産を、甥に協力してもらって調べた結果、全て京子さんが相続して、あまり日が

経たないうちにその全てを売却している。京子さんを捜したが全く分からず、手がかりもない。それで、八方手を尽くして俺を探しあて、甥がやってきたという次第。俺もびっくりしたよ」

アヤは

「ところで社長さんは今どこにいるの？」

「社長のお兄さんの所にいるそうだよ。房総の茂原だそうだ」

松尾は続けて

「社長は、京子さんが一人で相続登記と売却手続きができるわけがない。専門家か、場合によるとアヤが一緒ではないか、と言ってアヤに会いたい、と言っているそうだよ。アヤなら手続きが出来るだけの知恵がある。俺が教えた、と言っているそうだ」

ここまで言って、冷めてしまったコーヒーを口にした。

松尾はアヤを見つめて

「アヤは京子さんと一緒に相続と売却を行ったのか。社長はアヤならできる、と言っているそうだ」

とアヤの目を覗き込むように顔を近づけてきた。アヤは顔をそらして

「前にも何度も言ったでしょ。お嬢様には一度も会っていないって。会わないうちに締め出されたのよ。何度言ったら信用してくれるの」

「近く社長に会いに行く。社長は俺よりもアヤに会いたいらしい。俺は勤めがあるから日曜日しか行けない。今度の日曜日に行こうと思うので一緒にきてくれ。詳しい行き先は社長の甥に連絡して確認しておく。それと東京駅の出発時刻も改めて連絡する。ところで電話はどこにすればいい？」

「わたしは目下失業中。キリスト教会のお手伝いと、霊能者海保純の小間使いで何とか食べているの。どこか美容院に勤めるつもりだけど。電話はないから急ぐときは電報を頂戴」

それからしばらく社長の話題が続いた。松尾の話は甥から聞いた話として

「社長は右片足と左腕が不自由で、右腕で杖をつきながらゆっくりしか歩けない。その不自由な体で、甥に助けられながら自分の財産を調べたが、家屋敷は勿論のこと、京子お嬢さんに内緒の貸金庫に入れておいた貯金まで全て相続して、その上で払い戻しされていたそうだ。貸金庫も既に解約されて中の物は持ち去られ、いわば一文無しになってしまった。そこで田舎で実父の跡を継いでいる兄を頼って暮らしている。死亡届が出ていた戸籍は回復させたと言っている。しかし、戸籍上死亡している間の相続は法律的には無効にはできないらしい。例え無効にしたところで京子お嬢さんが見つからなければどうしようもない」

ということだった。

その夜、アヤは一睡もできなかった。死んだはずの加賀大造が生きていて自分に会いたいと言っている。自分は全財産を大造に引き渡すべきか、会って今まで通りの嘘を吐き通すか、会わないで逃げ回るか、しかし逃げ回れば疑われて追っかけてくるだろう。ということは財産を引き渡すか、今まで通り五代や松尾に言っていた通り言い続けるか、のどちらかしかない。

今朝まであげていた三本のお線香と三杯のコップ水は、京子と母の二人分にして、自分の選ぶ道を教えて欲しいと祈った。

アヤの頭の中は、加賀大造に「すべて自分がやって持っている」と言った場合、その動機は「京子が相続すべき財産を守るため」と言っても、京子はいない。一部とはいえ鎌倉の住居購入とアヤの生活と理美容学校のために使っている。今も残っている多額の預金の名義も、金塊を入れている貸金庫の名義も全てアヤ名義になっている。せめて名義が京子になっていれば言い逃れはできる。多少の金額は使っていても、むしろ、よく守っていてくれた、と言われるだろう。しかし現状では主家の全財産を、敗戦のどさくさに紛れて全てを我が物にしている、この上もない不届きな、強欲な女としか考えないだろう。更にその手段は、京子の着物を着て京子になりすまして、銀行も、登記担当者も、印鑑証明書も、実印の使用も全て騙して実行している。それらの行為は悪意の意思を証明しているようなものだ。これ以上の悪人はいないだろう。

そして、その財産の正当な権利者が現れても、今まで通り「知りません」で通し続けることは、まさにこれも悪意極まりない詐欺を証明することになる。全財産の乗っ取り意思を証拠づけることにしかならない。

五代と松尾には、京子が勝手にやって、自分は京子に会うこともできず、軽井沢で締め出されている。被害者だ。ということにしている。それを崩すことはできない。

でも、京子お嬢様は現状を許して認めてくれている。これを話すとすれば、日本への引き揚げのときからすべてを話さなければならないし、そうなると死んでしまっている京子お嬢様への相続は、アヤが京子お嬢様になりすまして全てを乗っ取る手段として行ったのだと言われても、そうではないという証拠はどこにもない。

このまま自殺することすら頭に浮かんだ。

翌日、海保純から海保邸に来るように電話があったが、体調を理由に断った。また、アメリカのロバートから発

行されたばかりの、きれいなカラー刷りのヘヤーファッション誌が送られてきた。ロバートが「送るよ」といった言葉を、海保純と和子が冷やかすほど喜んで楽しみにしていたアヤだったが、封を開けたままで見てもいなかった。

二日目も一睡もできず、頭の中で昨晩と同じ問答を繰り返していた。窓の外が白み始め三日目の朝を迎えた。

アヤは海保先生にお願いして、京子お嬢様が、父、加賀大造氏が生きていたことを知っているかどうか聞いてもらうことで、何か京子お嬢様が教えてくれるのではないか、と思った。

しかし、そうした場合、本当の所持権利者が現れたのに、素直に返さないアヤを海保先生はどのように見るだろうか。軽蔑して会ってもくれなくなるのではないか。それよりも「なぜ返さないのか」と怒鳴られるかもしれない。

松尾と約束した六月十二日の日曜日はあと二日。その日の正午過ぎに電報が来た。

「六ガツ十二ヒ、アサ七ジ、トウキョウエキキタグチチユウオウカイサツデマツ、マツオ」

続く

歴史的景観の保存について（Ⅱ）

―旧日光街道・越谷宿の場合　ある金物店について―

漆原直子

前回は、『旧日光街道・越谷宿を考える会』の活動面について述べたが、今回は、ある金物店の概要について触れてみたい。

その前に、『越ヶ谷宿』について簡単であるが説明したい。まず、〝越ヶ谷〟という地名の由来は、「越（腰）の谷」の意で、「こし」は「山地や丘陵地の麓付近」の意、「谷」は「低地」の意で、「大宮台地の麓にある低地」を指す地名であると推測される。「越谷」の地名は、1954年、合併により越谷町が成立した際に、合併前の越ヶ谷町と区別するために「ヶ」を取って「越谷町」としたことに由来する。（前号では『越谷宿』と標記していたが、正しくは『越ヶ谷宿』であり、今後「ヶ」の入った方をつかうこととする。）

〝越ヶ谷〟は武蔵国埼玉郡に属し、律令制時代の条里制から中世の荘園が展開され、元々人が集まって集落が形成されていた所に、慶長7年（1602）に奥州街道にも伝馬制（二里から三里おきに宿駅を設置する）が敷かれたことで、公用荷人運輸の中継所として宿場が設けられた。徳川家康は江戸・日本橋を起点とした五街道の整備を計画し、日光街道は日光を終点として、奥州街道の宇都宮を分岐として東海道の次に1636年に開通した。江戸幕府の新田開発もあって、〝越ヶ谷宿〟は埼玉県下の旧日光街道の宿場の中では、最も栄えたまちとなった。越ヶ谷は全国的にも米どころとされ、「武州越ヶ谷米」として全国生産量の上位を占めていた。

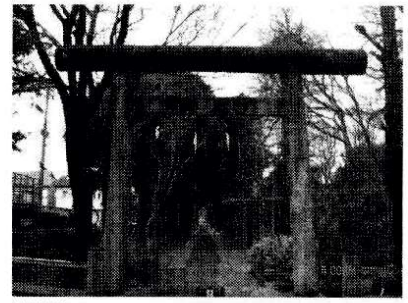
①お店の信仰について

私の伯母が嫁いだ金物店は、初代は千疋村（現越谷市東町）の出身で、〝木下半助〟と言い、江戸期に越ヶ谷宿へ移り住んできた。明治期になり、越ヶ谷町は二度の大

火に遭い、そのため、防火対策として「蔵」を建てる商家が増えた。今でもその界隈では、同じ町内に火事が起きると、実害は無くても『近火見舞い』としてささやかな品物を贈り合う習慣がある。私は初め、そのような〝因習〟があることに驚いたが、大火の歴史があったことを知ると、その意味が分かるような気がした。

先先先代（伯母の舅の父）〝木下半助〟が現在のお店の基礎を築いたのだが、過去帳を見ると3～4人の〝木下半助〟がいて、その名が家号となっていた。その〝木下半助〟は、信心深く、蔵にはたくさんの「火除」「盗難除け」等の札を蔵の中の壁に貼った。そのお札の中には、煤や埃等で真っ黒になって、何のお札だったのか分からない物もある。また、家の敷地の奥の庭に宮大工に社の建立を頼み、『伏見稲荷』を京都伏見から勧請して祀った。その他さらに、伊勢講、大山講、戸隠講に入り、講元となって毎年お参りをしていたという。その他、自分の出身地である越谷市の千疋村にある伊南理神社に石灯籠を寄進したり、氏子として久伊豆神社に石の鳥居【写真①】と燈籠一対【写真②】を寄進している。またさらに、戸隠神社の宿坊に記念の石碑を建立し、成田山新勝寺にも燈籠を寄進している。

【写真①：昭和九年寄進】



【写真②：昭和拾二年寄進】

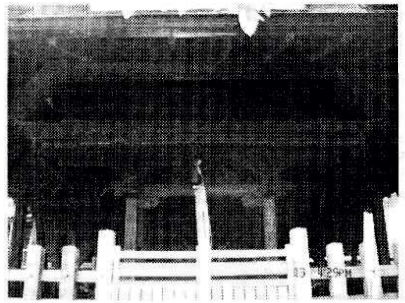


越谷の久伊豆神社は旧社格は郷社で、祭神は大国主命・言代主命の二柱を主祭神とし、高照姫命・溝咋姫命・天穂日命の五柱を奉斎している。社伝によると、平安末期の創建で、鎌倉時代の武蔵七党、野与党や私市党の崇敬を受け、江戸時代の徳川将軍家の信仰も厚かったとされる。久伊豆神社は埼玉県下の北限は行田市、南限は八潮市の間の元荒川沿いにのみ分布している。それは、元荒川の東（下総国葛飾郡）は香取神社が、綾瀬川（武蔵国埼玉郡）・入間川水系（武蔵国足立郡）に氷川神社が帯状に分布しているちょうど中間にあって、特殊な位置を占めている。久伊豆神社の総社は、加須市（旧騎西町　平成22年3月合併）にある式内社で旧社格は県社の『玉敷神社』とされている。玉敷神社は社伝によると、大宝3年（703年）、東山道鎮撫使・多次比真人三宅麿によって創建されたとあるが、一説には、成務天皇6年（136年）、武蔵国造・兄多毛比命の創建ともいわれる。延喜式神名帳では「武蔵国埼玉郡玉敷神社」と記載され、江戸時代までは『久伊豆大明神』と称されていた。主祭神は大己貴命（大国主命）である。『吾妻鏡』にも、「武蔵国大河土御厨久伊豆宮」という記録が残されている。

ちなみに、越ヶ谷の久伊豆神社の境内には、国学者平田篤胤の仮寓跡（越谷宿の豆腐屋の娘を後妻にしてしばらく住んでいたという）と、樹齢200年の藤があり、開花期は見事である。

次に〝講〟についてであるが、〝講〟とは、同一の信仰を持つ人々による結社のことである。まるで秘密結社のようであるが、江戸時代には、寺社参詣を目的とした『代参講』が盛んに行われた。初めは山岳信仰から、立山などの修験者が霊山への登山を勧めて全国を廻り、各地に参拝講が作られた。越谷等、埼玉東南部（武蔵国東部）では、一番多いのが榛名講で、次いで大山講、板倉講の順で多いとされる。主に雨乞い、嵐除け、雹除け等の農業に関わる信仰である。

敷地内にある『伏見稲荷』は大事に信仰しており、伯母は今でも、お揚げのお供えを欠かさない。【写真上】



京都の伏見稲荷は、秦氏により711年に創建され、宇迦之御魂大神を主祭神として五穀豊穣、商売繁盛などにご利益があるとされている。が、沢史生氏は「稲荷（＝稲生）」というとらえ方を、「鋳土」「鋳成り」として、産鉄との関係性を指摘している。稲作という農耕の発展に、鉄器との関係は不可欠である。私は、日本の歴史観は、稲作の文化からのみとらえようとする傾向が強いが、それを支えてきたであろう産鉄・製鉄・金属史の視点をもっと取り入れて、歴史の読み直しをすべきであると思う。

②扱っている商品について

お店で扱ってきた商品は主に農具、藍釜や大工道具で、現信濃町の『信州鎌』と新潟県三条市の『三条鎌』の特約店となっている。鎌や包丁等の刃物は、近郊の農家の人達から、木下商店の刃物は切れがいいとして、今でも買いに来る人たちがいる。また、鋤や鍬の刃の研ぎを依頼して来る人もいて、隣の市の鍛冶屋にさらに依頼して

いる。かつては、越谷市内にも鍛冶屋がいたが、今では廃業され、頼める所がなくなってしまった。

信濃町は長野県の北部にあり、野尻湖を抱えており、『信州鎌』は、その技法が長野県信濃町の指定文化財となっている。町のホームページの案内には、以下のような説明文を掲載している。

信州鎌は長野県北部の北国街道沿いを中心に生産されている薄刃の片刃草刈鎌で、古間の問屋が全国に広く流通させたことから古間鎌とも呼ばれています。信州鎌の特徴は芝付（しばつけ）といって鎌身とコミ（柄をはめ込む部分）に角度がつけられていて、刈った草が手元に寄ってくるようになっていること、片刃型のために薄くて軽量で、よく切れることです。江戸時代の文化文政のころ（19世紀前半）にはその形ができあがっていたといわれていますが、現在もその技術は引き継がれ、十数件の鍛冶屋さんによって生産されています。

また、三条は新潟県三条市で、新潟県の中央部にあり「金物の町三条」と宣伝している。三条金物卸商協同組合のホームページによると、次のような説明文がある。

三条の金物販売は家釘（和釘）にはじまり現在では当地と近郊から生産される商品は多種多様にわたっています。それにプラスして他産地からの商品も供給されており、新旧を問わず金物関連の商品では「三条に頼めば無い商品は無い」とまでも金物業界では言われております。取扱商品は、大工道具、刃物、工具をはじめ金属加工製品、木製品、プラスチック製品、電動工具等々数万アイテムを組合事業所266社の金物卸問屋で取り扱っております。また、その事業所は全国的に出向いており世界の国々とも取引を致しております。

藍釜は鉄製で、直径、深さとも約1・5m近くあり、まさに石川五衛門が釜ゆでされた釜か、〝地獄の釜〟かと思えるような代物であるが、それが3つお店にある。かつては町中に染物屋が何軒かあったので、その大釜仕を入れていたが、数十年前から売れなくなった。時々、大釜を探しに来る人がいるが、かつて出入りができていた隣の空き地に、他所の家が建ったがために通れなくなり、店の戸口を破壊しなければ外へは出せず、売るに売れない状況になっている。

大工道具は実に様々な種類、サイズも豊富で、建築関係の人が見ると一様に驚かれる。私は全くの門外漢なので見てもよくわからないが、平成19年に、NHKの取材を2回受けたことがあり、その時の説明では2万点もの商品があると紹介されている。

1回目は、『ひるどき日本列島』で、ちょうど旧日光街道を南下しながら旧宿場町を辿る企画で、越谷では他にも数件取材されていた。何に使われていたのかと思う

様な変わった道具や、庭等を紹介された。

2回目は『生活ほっとモーニング』で、慶応大学教授の金子勝氏がコメンテーターで出演していた。今でも昔ながらの商売を続けながら、かなりの年商を上げている小さなお店として紹介された。ただの売らんかな主義ではなく、お客さんのニーズに合わせて商品をそろえて売るというスタンスが評価されていた。テレビに出たおかげで、しばらくの間は日本全国から品物の注文が入り、一時うれしい悲鳴を上げていた。注文者の近所のお店でも売っているだろうと思われるような品物まで注文してきたという。一番珍しがられたのが、「手ちょうず」で、以前はブリキ製の物であったのが、プラスチック製に代わっているものの、何個も注文が入ったという。伯母もお店に無い物は、問屋に頼んで探してもらって、仕入れたりしていた。お客さんもただ注文するだけではなく、テレビを見ての感想や、自分の住んでいる地域の特産物を送ってくれる等、付加価値のある〝商い〟となっていた。

最近2月17日にやはりNHKの『関東1都6県』という番組で、越谷市在住の画家の方がずっと旧日光街道の宿場町の古民家を描いてきて、その作品の一つに伯母のお店があり、描いた絵を画家の方から直接プレゼントされる様子が取材され、放映された。私と友人達の分の絵も含まれていて、非常に有り難いと思った。その画家の方は、旧日光街道沿いでは越谷が一番宿場町としての町並みが残されていると、話されていたという。

以上、断片的な雑駁な内容になってしまったが、江戸期から続いてきた金物店をご紹介させて頂いた。まだまだ、知りえてないこともあると思うので、また、追々調べて行きたいと思う。

【参考文献・サイト】

- 『関東平野における三峰信仰の展開
—武蔵国東部を中心に—』
『教育学部紀要』文教大学教育学部第三九章
2005年　三木一彦　著
- 『日光街道越ヶ谷宿の町並形成と境界構造』明治大学科学技術研究所紀要　2000年　松本勝邦／古川和典
- 『東日本の山岳集団と講集団』　西海賢二　著
- 『鬼の日本史（下巻）』　沢　史生　著
- 玉敷神社、久伊豆神社、伏見稲荷大社ホームページ
- 越谷市観光協会ホームページ
- 信濃町、三条市ホームページ
- ウィキペディア「越ヶ谷宿」、「講」

（司馬雑感　二十九）

湖西のみちから叡山へ

山田嘉久

一　日本人はどこから来たか

司馬遼太郎にとって後半世のライフワークとなった「街道をゆく」シリーズの第一巻「湖西のみち」（昭和四十六年）は次の文章で始まっている。

〈「近江」

というこのあわあわとした国名を口ずさむだけでも、私には詩がはじまっているほど、この国が好きである。〉

そして司馬がこの旅の第一のテーマにしたのが「日本人はどこから来たか」であった。

なぜなら近江は大津を中心にして、古代の日本の成り立ちと朝鮮半島との繋がりを思索するに打ってつけの場所だったからである。

司馬は遥かな原始時代の日本民族に触れぬほうが利口であろうと断りながら（なぜなら考古学と文化人類学がいかに進もうとも明快な解答は得られないだろうから）、日本人の血液のなかの有力な部分が、朝鮮半島を南下して大量に滴り落ちてきたことは紛れもない事実であることを指摘している。

そして此の事は、近江を走る車の窓のそとに無数に存在しているというのだ。

その代表的なものが近江（滋賀県）日野町にある「鬼室集斯の墓」であるという。

鬼室集斯―百済滅亡後に渡来した百済人。今から千三百年前、近江朝廷が大津に遷都した頃、百済国から多くの人が渡来してきたが、その中で優れた文化人であった鬼室集斯という高官の墓碑が本殿裏に祀られていたことから、この神社が鬼室神社と名付けられている。

毎年、命日の日には祭礼がおこなわれるという。

「日本書記」によれば天智四年（六六五）二月、男女七百余名が近江国蒲生郡に移住したと言われる。司馬は鬼室集斯らが蒲生郡一帯に住んだときには、すでにこのあたりは出雲族の鴨族がいて弥生式農業を営んでいたに違いないと推論している。

天智朝廷では百済から逃げてきた集斯をいきなり「学識頭」に任じた。この国ではすでに日本という国号を号していたとはいえ、未だ国家制度は整わず「倭」という部族連合国家から脱けきっていなかった。それが白村江の戦い（六六三年）で大唐帝国に惨敗した結果、強力な統一国家の確立が求められていた。そのためには官僚養成のために必要な大学の設立が必要となる。その日本最初の大学のトップが百済人の集斯であったことに司馬は注目している。

白村江の戦いで唐、新羅連合軍に対して、日本に援軍を乞うて来たのは集斯の父鬼室福信だった。彼は当時、日本にいた百済王子豊璋を迎えて百済独立運動を企てたわけである。

なお、司馬がこの墓を詣でたのは「湖西のみち」を書き終えた直後の昭和四十七年であるので、鬼室氏のことは「街道をゆく」①（湖西のみち）ではなく、次巻②（韓のくに紀行）のエピローグにもってきている。

そして「韓のくに」でも司馬は「日本人の祖形」を韓国に求めているのである。

なお司馬が「韓のくに紀行」を書いてから十五年経った昭和末期に著した「耽羅紀行」では、前記鬼室氏始め帰来人が使っていた漢字の音じ方は漢音ではなく呉音だったというのは興味深い。百済人は中国長江下流の六朝（りくちょう）の人々と付き合っていたから、すべて呉音だというのである。だから日本でも百済から暦やその他の漢籍がもたらされたが、例えば「正月」は（しょうがつ）であり、（漢音せいげつ）とは言わない。その後、持統天皇の養老年間に漢音（長安音）の普及がはかられたが、徹底されなかった。そのため今日でも呉音、漢音の併用（混在）となってしまっていると司馬は云う。たとえば「大正（たいしょう）」の（たい）は漢音、（しょう）は呉音という具合に全く筋が通らないとも云う。

さて我々が集斯の墓に詣でたのは平成二十三年春。司馬が訪れた時にはなかった「交流館」（蒲生郡日野町と姉妹都市の百済の首都だった扶余郡恩山面との）が建てられていた。

（蒲生郡日野町はまた、戦国の武将蒲生氏郷の生まれ故郷としても知られている。）

二　信長の逃げ帰った道（朽木（くつき）街道）

元亀元年（一五七〇）四月、織田信長は度重なる上洛命令を無視する越前の朝倉義景を討伐するため盟友の徳川家康の軍勢とともに越前への進軍を開始した。織田徳川連合軍は朝倉氏の諸城を次々と攻略していくが、金ケ崎に進軍したところで、北近江の盟友であった浅井氏に背後を突かれる。（金ケ崎の戦い）

挟撃される形となり窮地に追い込まれた信長であったが、殿(しんがり)を務めた池田勝正、明智光秀、木下秀吉などの働きもあり、なんとか京に逃げることができた。信長が京に帰還したとき、従う者は僅か一〇名ほどであったという。

司馬の初期作品「国盗り物語」によれば、この時、やはり九死に一生を得た徳川家康は、その一代記「東照軍鑑」には次のように書かれているという。

「信長一生の難儀たりしに、家康公の御加勢を被返候て、秀吉が勢に御加り、御一戦の刻、御自身御鉄砲を取らせて朝倉勢を御防ぎあそばる」

大将みずから鉄砲をとるということはこの当時の慣習にはないとも司馬はいう。それほど敵の追撃が激しかったのだろう。

こういう状況に置かれた場合、信長のような「蒸発」を遂げる放れ業をできる歴史上の人物は信長以外にはいないだろうと司馬はいう。信長については桶狭間の奇襲や長篠の戦いなどが強調されるが、この天才の凄みはむしろ朽木街道を疾風のごとく退却したことであったというのである。この場合、たとえば上杉謙信なら乱離骨灰になるまで戦うだろうし、楠木正成ならゲリラ戦で特攻突撃するかもしれなし、西郷隆盛なら詩をのこして自刃するかもしれないとの比喩は面白い。

「朽木越え以外にはありえません」と信長にすすめたのは、戦国きっての悪党といわれた松永久秀（弾正）であったという。朽木領主朽木元綱と弾正は旧知の間柄だった。朽木氏は鎌倉時代からの名主で、その後明治まで六五〇年も続いた。

琵琶湖の西、今津に宿をとった我々は翌日、安曇川をさかのぼって深い山中に入って行く。周囲を標高五百―九百(一ル)(メト)の山々に囲まれた朽木谷の盆地が朽木市場である。此処は昔から京と日本海側の玄関口である小浜を最短に結んだ朽木街道（別名鯖街道）の宿場町であり、朽木氏の陣屋もあった。

朽木氏の檀那寺であった興聖(こうしょうじ)寺は僧道元が近江守護佐々木信綱の勧めで建立したのが始まりといわれているが、江戸時代に大火にあったため朽木氏ゆかりの秀隣寺のあった現在地に移ってきたという。本堂内には本尊釈迦如来像（国の指定文化財）が置かれているが、敷地内には同じく国指定文化財の旧秀隣寺庭園が所在している。

司馬は此処が足利十二代将軍義晴（一五一一―五〇）の流寓地であったことに注目している。

彼の時代は幕府などあってなきがごとく、義晴も管領の細川氏に圧迫されため殆ど身一つで京を逃げ出し身を潜めたのが朽木谷の興聖寺だった。

このとき義晴が憂さ晴らしに作ったのがこの枯山水の庭園である。

司馬はいう。〈足利義晴という歴史上無名にちかい室町将軍がこの地上に残した痕跡というのは何もない。あるとすればこの庭だけなのだが、しかしはかないことに庭の名は伝わっていないのである。〉

庭からは眼下に安曇川一帯を俯瞰できた。庭園には、屈曲した汀線をもつ池があり、滝を落としていた。

三　一乗寺周辺の散策

朽木街道（鯖街道）を南下して京都府に入った我々は三千院で昼食をとった。此処は天台五門跡の一つ。

最澄が比叡山に根本中堂を建てたときに、東塔南谷の大木の下に構えた円融坊が起こりだという。その後、応仁の乱後に現在地に落ち着いた。

境内の庭園内にある阿弥陀堂で国宝の阿弥陀三尊像を見学することができた。

更に南下して、江戸時代初期に造営された旧跡、史跡が多く残っている一乗寺周辺を散策したが、一乗寺といえば、あの宮本武蔵が吉岡一門と決闘したといわれる一乗寺下り松を思い出したが、たしかにそれらしい松の傍に「宮本、吉岡決闘之地」と刻した石碑が建っていた。しかしこの松は四代目で初代の古株は、この地から少し離れた八大神社の境内にあるという。

その八大神社のすぐ横に詩仙堂がある。

徳川家の家臣であった石川丈山が隠居のため造営した山荘で、現在は禅宗の寺院となっている。建物に入ると堂の名前の由来となった「詩仙の間」があった。丈山はまた作庭の名手だったといわれただけに、白砂が敷かれた回遊式庭園は見事だった。

丈山が詩仙堂に住んだのが寛永十三年（一六三六）だが、その二十年後に同じ一乗寺村に曼殊院が建てられた。もとは最澄の開創により西塔北谷にあったが、明暦二年（一六五六）に良尚法親王（天台宗座主）が住んだ場所である。

良尚の父は桂離宮を造営した八条宮智仁親王であるので曼殊院の大書院は桂離宮の御殿と共通したデザイン感覚が見られるという。

庫裡に額あり、「媚竈(びそう)」とある。

（カマドに媚びよ）カマドで働く人々を大切にせよというのが表面的な意味であろうが、関東（幕府）に媚びざるをえなかった良尚その人が自虐的に云い現わしたと解釈されている。この文字を理解できた文化人は近くに住む詩仙堂の丈山ぐらいのものだったであろうと司馬は書いている。また同じ一乗寺村に二人の教養人が住んでいたのも不思議な気がすると記している。

書院前には小堀遠州ゆかりの枯山水の庭園があり、茶室も遠州が設計されたと伝えられる。収蔵されている書画の中には幽霊の掛け軸もあった。

修学院離宮（後水尾天皇を慰めるために徳川家光の援助で造営された離宮）の前を通って赤山禅院にゆく。

仁和四年（八八八）、比叡山延暦寺の別院として慈覚

大師円仁により創建された。本尊の赤山明神は円仁が中国の赤山にある泰山府君を勧請したもの。

円仁は最澄の弟子で唐より帰国後、旅行記を書いた。それが有名な「入唐求法巡礼行記」で玄奘三蔵の「大唐西域記」、マルコ、ポーロの「東方見聞録」とともに三大旅行記と云われるが、これを世に広めたのはライシャワー教授の英訳文「世界史上の円仁―唐代中国への旅」以降のことだと司馬は説明している。

赤山禅寺は御所から東北に位置し、鬼門に当たることから、古来方避け、厄除けの祈願所として信仰を集めてきた。本殿に「皇城表鬼門」と大書され、赤ら顔の陶製の猿像が御所の方を向いていた。

また、赤山明神の祭日に当たる五日に当院に参詣して掛け取りに回ると、よく集金できるといわれ、商人の信仰も厚く、このことから「五日払い」といわれる商慣習ができたと伝えられている。

四　叡山の諸道

最終日は終日、比叡山を歩いた。今年は丁度、法然八百年回忌、親鸞七百五十年回忌が盛大に行われていた。

（年末、上野の国立博物館で「法然と親鸞　ゆかりの名宝」展を観た。京都知恩院からの国宝「阿弥陀二十五菩薩来迎図」は死期迫る人を阿弥陀如来が迎えに来る様を描いて圧巻だった。）

叡山の山中には天台宗総本山の延暦寺の諸堂が点在する。

午前中は東塔にある根本中堂、大講堂などを見学。午後は東塔より歩いて三十分の釈迦堂などのある西塔を、更にその奥四キロ離れた横川中堂や元三大師堂などのある横川地区まで足を延ばした。

1　最澄のこと

司馬遼太郎は新聞記者時代、宗教担当だっただけに宗教に対する関心は人一倍強い。

そのため宗教に関するエッセイを数多く書いているが、どうも奈良仏教や鎌倉仏教よりも最澄（天台宗）や空海（真言宗）などの平安仏教が好きなようだ。

空海については「空海の風景」で、動的な空海の一生を見事に描いたが、最澄についてはなにも書いていない。このことをもって最澄よりも空海に関心があったと即断はできない。却ってその逆だと思っている。司馬は「風雲児」空海よりも、学究的でつつましやかな静的な最澄に強く魅かれたと思えてならない。

たとえば最澄の肖像画を見て

〈最澄は、残されている日本人の肖像のなかで最もいい貌をしている一人ではあるまいか。〉

〈三日月がたの眉が美しく、頬がゆたかだが、唇許のつつましやかさでひきしめられている。〉

と書き、それは最澄の書にも相通じるという。

たしかに叡山「国宝館」で観た最澄自筆の「天台法華経年分学生式」（「照千一隅、これ即ち国宝なり」で有名）は最澄の性格そのものの几帳面な書体だった。

その書体は正岡子規のそれに似ていると司馬はいう。書体だけでなく子規と最澄には似たところが多いともいう。

〈どちらも物事の創始者でありながら政治性をもたなかったこと、自分の人生の主題について電流に打たれつづけるような生き方でみじかく生き、しかもその果実を得ることなく死に、世俗的には門流のひとびとが栄えたこと〉などを挙げているがどうだろうか。

私は、司馬がこの文（叡山の諸道）を書いている時期は、丁度、彼が「子規全集」の編集に関わっていた時期と一致していることに気がついた。

空海は真言密教を完成させた天才的宗教家であるに対して、一方の最澄は叡山に籠った孤高の学者というイメージが強い。司馬は〈かれには（最澄のこと）、物事の創始者によくある怪物めいたところもなければ、教祖じみたいかがわしさもない〉と暗に空海を批判しているのである。

ところで司馬の初期歴史小説「峠」の主人公は北越戦争の指導者となった越後長岡藩の家老河井継之助だが、司馬は継之助の口を借りて伝教大師最澄をこう批判した。

「一隅を照らす人間を愛した、尻の穴の小さな小器量者だ」と。

「照千一隅、これ即ち国宝なり」の一句をとらえて「最澄は〈一隅を照らす〉者をよしとする小人物」と評したわけだ。この継之助の批判は天台宗関連の人たちに思わぬ衝撃をもたらした。（NHKの大河ドラマ「峠」でこの場面が原作どおり放映されると、NHK側に抗議が殺到したという。）

結局、この論争はその後二〇年も続いた。その結果、現在では「一隅を照らす」（照于一隅）ではなく「一隅を守り、千里を照らす」（照千一隅）の新解釈に落ち着いた。司馬の影響のいかに大きいか、改めて思い知らせた事件だった。司馬の論法が、あの最澄をも走らすことにもなった。

その最澄は天平神護二年（七六六）、叡山の斜面が見える琵琶湖畔で生まれた。

彼は渡来系の氏族であるという。彼が生きていた時代には畿内に住む日本人の約三割が「諸蕃」（外国系）であったことを考えれば、べつに奇とするにあたいしないとも司馬は書いている。

叡山は滋賀県と京都府にまたがっている。

司馬は近江（滋賀県）側から見た叡山をなだらかなビロードのスカートにたとえているが、京都側から見た叡山はけわしく、樹木もすくないために、裏という印象が強いと印象を述べている。

従って叡山の表玄関は近江側の「坂本」ということに

なる。叡山には昔から「論湿寒貧」という言葉があるそうで、中年を過ぎた僧には叡山の山の上で住むことは「湿」と「寒」のために健康によくなかった。そのため天台座主の許可を得て、ふもとの坂本に住む僧も多かった。座主自身も代々、坂本に住んだ。そのため最澄の生まれた湖西の坂本が叡山の首都のようになった。

2　東塔、西塔そして横川

広大な比叡山は昔から「三塔十六谷三千坊」といわれた。三塔とは東塔、西塔そして横川であり、それぞれ深い谷によって囲まれている。それら全体をまとめて比叡山延暦寺といわれる。

此処には鎌倉時代に一宗のそれぞれの開祖となった法然、親鸞、栄西、道元、日蓮なども学んだ。そのため「日本仏教の母山」とも言われるが、司馬も

〈叡山は総合大学というべきものであったろう〉

と書いている。

その一方で「加茂川の水、双六の賽、山法師。これぞ朕が心にままならぬもの」と白河法皇を悩ましたように、叡山は最澄が理想とした「悟りを開く場所」とはかけ離れた存在になってゆく。ついには政治にも介入するようにもなり、それが元亀二年（一五七一）の悲劇にも繋がってゆく。

叡山の中でも特に根本中堂は東塔の中心であるだけでなく延暦寺の総本堂である。前身は最澄が創建した一乗止観院であるが、現在の建物は織田信長の比叡山焼き討ち後、寛永十九年（一六四二）に徳川家光により再建されたものだという。

本尊薬師如来像の前には「不滅の法灯」がある。

最澄が点じて以来千二百年にわたり灯され続けている叡山のシンボル的存在。この法灯も信長により焼き討ちされたものの、幸いに奥州の立石寺に分灯されていたので、それを叡山に戻して伝統を守ることができたとの案内僧の説明だった。

東塔ではこのほか、天台宗の僧侶が受戒する戒壇院、前記各宗派創設者たちの等身大の木像が安置されている大講堂などを見学した。

その後、西塔では「弁慶のにない堂」と呼ばれる常行堂、法華堂や開祖である伝教大師最澄の廟所の浄土院など。この地区でも信長の焼き討ち事件は色濃く跡を残している。

釈迦堂は焼き討ち後の文禄四年（一五九五）、秀吉により近江の円城寺（三井寺）の金堂が移築されたものだし、瑠璃堂は叡山唯一の焼き討ちを免れた建物である。

広大な叡山中を歩いてみて、改めてこの日本最初の「ジェノサイド」（集団大虐殺）のすごさを実感した。

元亀二年（一五七一）、信長は叡山に立て籠もる僧のみならず行者も学生も堂衆も、稚児にいたるまで数千人を皆殺しにした。彼は中世的権威の象徴であった叡山を、

火と血をもって葬ったのである。

執行官の光秀は当然、反対したし、信長の忠実な部下だった秀吉すらこのときばかりは職務をいい加減にしたといわれる。そのため秀吉の担当した叡山北部では例外的に助かった者もいたという伝承がある。

西塔から北東四キロにある横川地区は最澄の弟子である慈覚大師円仁により開かれた。その中心は横川中堂。此処も信長の焼き討ちと雷火で二度消失した。

元三大師堂は比叡山中興の祖、元三大師良源の住居跡である。

天台宗で死後の称号である「大師」は開祖最澄の伝教大師、弟子円仁の慈覚大師を含めて六名いるそうだが（なお真言宗では弘法大師空海を含めて七名）、叡山にのぼる人の間では単に「お大師さん」といえば、この元三大師のことを指すそうだ。それは天台宗では最澄も円仁も（空海のように）後利益の対象として拝まれることはないが、この十八代座主良源だけは、その例外とされたからだろうと司馬は書いている。

その一例として良源と「ある武将」との伝承話を取り上げている。

信長の焼き討ちの際、良源の本尊を背負って逃げた僧は当然、殺されることを覚悟していたが、この方面を担当した武将が話のわかる男で、意外にも見逃してくれた。その代わり本尊を拝ませてくれという。僧はやむなく応じると武将は丁重に拝礼した。その武将が羽柴筑前守秀吉だった。

その後のこの武将の出世ぶりをみれば霊験あらたかだというのである。その故事から、現在は「おみくじ大師」として庶民に親しまれている。



性と化粧（四）

鈴木守

第三節　性本能と生殖

前号までに、先進国社会と未開社会における現在から過去の性関連の化粧資料を蒐集してきたが、この後、性と化粧の話を取り纏めるに当たって、性本能と生殖の関係について認識しておくことが必要であろう。

一般的に言って、「性行為は種属維持のために、基本的に備えられた性本能に基づくものであり、植物は繁殖期になると色鮮やかな花を咲かせて昆虫を誘って受粉し、動物の世界では、雌は発情期になると独特の臭いを発し、それを嗅ぎつけた雄が興奮して雌を追い回して交尾する」ことは誰もが知っているところである。

しかし、ヒトでは発情期が消え、一年中、性交可能となった。ところが、「ヒトは性本能に基づいて性行為を営むのではなく、何らかの刺激や動機付けによって欲情し、性交を可能にして子孫を残すのであり、その動機付けとして快楽を発明発展させてきた」という考えが登場したり、「ヒトは生まれながらにしてインポであり、性行為を可能にするため、様々な幻想を必要とする」という意見も提出されている。

一方、フロイトは「幼児には、〝肛門性愛〟や〝糞尿愛好〟といった嗜好があり、この嗜好は性的な意味合いを帯びたものであり、四足歩行獣の名残りである」と示唆している。では、四足歩行動物の代表として、進化系統上ヒトと最も近縁とされているサルの社会の性を垣間見ることにしよう。

チンパンジー雌の発情期は、比較的長く二週間前後で、この間、臀部（でんぶ）にある性皮は腫れてピンク色になり、乱婚的な配偶形態をとるので、次々と雄を取り替えて交尾する。ニホンザルは性周期はヒトと同じ二八日間隔であり、

インセスト・タブー（近親相姦の忌避）も成立している。ゴリラは雌雄とも性交時に声を出すが、ニホンザルでは雌だけである。性交所要時間はゴリラでは一時間に及び、スラスト（腰の運動）の回数は三〇〇回だそうである。ゴリラには性交の体位が五種類あるが、チンパンジーなどでは二種類、ニホンザルの性交は一種類の体位である。かような事実をみると、ヒトの性交様式の基本は、サルが培った方式を伝承していると言わざるを得ない。

人類の話に戻る。性を形容する言葉は猥褻を初め、卑猥、淫靡、助平、変態、エッチなど数多くある。何故、性を卑しめる風潮が生じたのか？

この疑問を解くために性に関する歴史を調べると、先ず民族発祥の物語・神話では、性を賛美しており、卑下する対象ではなかった。例を挙げると、インドのシバ神、ギリシャのゼウス神、日本の岐美二神などは神の名において、民族の弥栄を願って精力絶倫の働きをしている。而も、古代文明社会では、性の快楽は恥ずべきことでも隠すべきことでもなく、その快楽を突き詰めることは神聖なる行為であると考えていた。性行為は神との合一の体験であり、精神と肉体の融合という極めて象徴性の高い営みとされていた。

こうした性愛の典型は古代ヒンズー文化に認められ、ヒンズー寺院には様々な交合の彫刻があり、神殿や伽藍建築に人間や神、象の姿をした神などが様々な体位で交接したり、フェラチオをする姿が彫られている。男女の交合は世界の初めの神々の行為の再現として神聖視され、セックスを完璧に行えば行うほど神に近着くことになったのである。

ところが、秩序を重んじる宗教が誕生すると、禁欲を旨とする教義が成立し、宗教者の妻帯まで禁じたのである。要するに性の否定である。例えば、孔子は「男女七歳にして席を同じうせず」と説いて性の芽を摘もうとしたし、キリスト教徒は『聖母マリアの処女懐胎』と称し、イエス様をクローン人間にしてしまった。かような生物学的に不可能なことが起るはずがないのに、現在でも敬虔な信者はそれを信じ込んでいるようだ。

かように戒律的な宗教の成立に伴い、宗教者が性を嫌悪したため、性を忌避する概念が生まれたのであろう。一例として、一九世紀ビクトリア朝の道徳観をみると、性に関する事柄を下品で野蛮と考え、性を忌避する風潮が主流となったため、肉体的な性まで貶める結果を導いたのである。

このような動向は美術品の中にも認められ、中世の絵画彫刻には裸像が少なく、裸女を扱ったルネッサンス以降の絵画彫刻で陰毛を施した作品は希少であった。当時の芸術家たちは陰毛を淫毛と思っていたのだろうか？。だが、このような芸術的傾向は、芸術家の意図というよりも宗教的倫理観によって制約された結果であろう。

それでも、二〇世紀に近着くに連れて性に対する束縛が緩くなり始め、泰西名画にも陰毛や腋毛が見られるようになった。一般社会でも、性を抑圧してきた道徳観念が崩れ始め、性を巡る禁忌が少しずつ緩み、庶民感覚にも性の解放が兆し始めた。

にも拘らず、二一世紀の今日に至っても未だに、前出のように性を卑下する言葉が氾濫しており、中には公序良俗を建て前にして、性をタブー視する石頭も残存している。だが、このような輩も、子孫を残す上で必要不可欠な性を〝嫌らしい〟と言っても、〝嫌なもの〟と表現できないでいる。ということは、彼らも心底では性を認めている証左である。では、自分はどうかと言うと、性を嫌らしいと思わないが、猥褻物陳列罪を侵す勇気はないし、性の話をする時は性に関する俗語を極力避けて、自分なりの公序良俗を保っているつもりである。

先述した性行為に必要な〝刺激〟や〝動機付け〟及至〝幻想〟に話を戻す。これらの言葉は、要するに性的興奮を導く感覚刺激を表現したのであろう。感覚刺激について例を挙げると、愛の囁きを聞く聴覚、唇を合わせた時の味わいを感じる味覚、香りを嗅ぎ分ける嗅覚、触れ合いを感じる触覚、相手を見詰める視覚が性的興奮を起こさせる〝刺激〟であり、〝動機付け〟である。これらの感覚器が捉えた情報は感覚神経を介して神経中枢に伝達、集約されて所謂〝幻想〟が誘導されて性的興奮が生じ、性行為に必要な夫々の運動器官に命令を神経伝達し、交合の実態が現出するのである。

さて、第二節までに述べた資料を振り返って性に関する化粧を大別すると、性行為に直結する化粧、陰部清浄の化粧、性と毛髪化粧、ならびに性的興奮を誘導する化粧に分けられるので、第四節以降はこの分類に従って、性に関わる化粧について考察を加えながら纏めることにする。

第四節　性行為に直結する化粧

この節では、性行為に使われた乳液、纏足および去勢について述べるが、去勢は睾丸を摘出した不能者であるから逆説的な意味でこの節で扱う。

一　性行為に使われた乳液

既に述べたように、夜のお勤めで乳液を唾替わりに使用し、ペニスを腫れ上がらせた患者についての実話である。この話を聞いて、「乳液を潤滑剤とする愛用者は意外に多いかも知れないし、このような目的ならばクリームや油剤も利用できるだろう。油剤は古代エジプトでも化粧料に使われていたので、古代エジプト人もこの代用法を考えついたのではなかろうか」などと妄想を逞しくした。

二　纏足

纏足は広義の化粧に属し、この風習は一昔前の中国で行われていた。纏足の女性は。股間の筋肉が発達して性交に際して特別な機能を発揮するようである。日下翠の書（金瓶梅、中公新書、一九九六）は、「纏足を施すと、性的な快楽に都合がよいとの説もあり、これは、不健康な人工美、人工的な性器をもった女性を生み出す化粧風習」と著している。纏足は一〇世紀五代南唐の頃、後宮女性の逃亡を防ぐために始まったという。

三　去勢

中国には、纏足と並んで想像を絶する過酷な化粧・去勢があった。去勢も広義の化粧に嵌め込まれている。去勢というのは、睾丸を摘出して性的不能者にするのだが、この歴史は古く、前一一世紀に周礼の宮刑として始められ、後には後宮に奉仕する役人に任用され、官宦の制度となった。官宦といえば、水滸伝の悪役・高求の名を思い起こす人が多いのではなかろうか。そのほか、明国の英雄・鄭和も官宦であった。

第五節　陰部の保健衛生

現代先進国社会では、陰部に直接接触する化粧料として、洗浄剤や浴用剤が使われている。これらの製品は皮膚の清浄を含めて、保健衛生的見地で使われ、陰部の衛生に資するところ大であって、清浄や浴用の基本は水浴にあることはいうまでもない。

このような建て前は別としても、我々は男女を問わず、入浴時に股間や腋窩を洗浄し、清拭する。にも拘らず、性器の衛生に関わる文献や絵画は意外に少なく、第三節までに示した資料の中で、それに該当する証拠としては、江戸時代の浮世絵に「妓楼の内湯で局部を洗い、股間を拭っている遊女」が描かれ、今一つ川柳の〝ばれ句〟に「陰部を洗っている女性」が詠まれ、これらを除くと、洋の東西を問わず、陰部清浄を具体的に示す資料はなかった。

したがって、性に関する化粧成立の傍証を探す目的で性的内容の有無に拘らず、水浴を中心に、水浴に随伴する化粧料、用具、用品について、既報『化粧のルーツを訪ねて（一五）』および『同（補遺）』の内容に、新たに入手した資料を添えて概述する。

一　水浴風習の歩み

江戸時代の浮世絵には、湯上がりの艶めかしい姿が描かれ、式亭三馬の『浮世風呂』から風呂の存在を察知できる。町中には湯屋があり、庶民はそこで汗を流した。中世や平安時代には、風呂や湯屋の記載を目にしなかったが、後述する洗浄料や洗浄具が認められた。『日本書

紀』には、大和朝から飛鳥朝の頃の天皇が有馬や道後、牟婁（白浜）の温泉に行幸したと著され、『魏志倭人伝』に三世紀頃の倭人の澡浴が記されていた。

中国では『長恨歌』に楊貴妃の温浴が謳われており、前一八世紀頃の殷王契の母、簡狄の水浴が知られている。暑い国インドでは、ヒンズー教徒が聖なる川ガンガーで沐浴し、水浴の風習は紀元前後のグプタ朝、クシャン朝、マウルヤ朝のみならず、インダス文明期のモヘンジョダロには公衆浴場（前二五〇〇前後）さえ設けられていた。

ヨーロッパへ行くと、泰西名画には、水浴びや入浴の様が描かれていた。ローマの暴君ネロ（三七～六八）の妃・ポッペアがミルク風呂を創始し、市民たちはカラカラ浴場で湯浴みした。ギリシャ神話では、出産の守護女神アルテミスの沐浴を語っており、エジプトでは、美容やスキンケアの第一歩は水浴であるとし、ナトロンの水に浸ったことが知られている。

石器時代には、水浴に関係する資料は皆無だったが、サルの水浴や温浴が知られているので、最初の人類、猿人について考察した結果、「直立二足歩行に基いて体温調節の必要から生理的な水浴が始められ、遅くても三〇〇万年前前後には、水浴の効用を察知し、意図的な水浴を行うようになり、この水浴が人類初の化粧行為として登場した」という仮説を導いたことは既に述べた通りである。したがって、化粧行為としての水浴は、猿人の時代に始められた可能性が大である。

二　水浴に関係する化粧料

洗浄料と浴用剤は水浴の時用いる化粧料である。江戸時代には、洗浄料として、既に糠、麩（ふすま）、小豆などの豆類の粉、滑石が使われており、家康の遺品の中に〝しゃぼん〟があった。中世から平安時代にかけても豆類の粉が洗浄料として利用されていた。わが国の歴史においては、「仏教伝来の時、澡豆（そうず）がもたらされた」と言われている。しかしながら、朝鮮や中国の資料の名を見いだすことができなかった。

水浴が盛んだったオリエント社会へ赴くと、インドでは、マウルヤ朝の頃には、賦香した籾殻粉や粘土で体を洗浄し、インダス文明のモヘンジョダロの公衆浴場跡から磨き砂が発見され、エジプトの新王国時代ではクレンザーやクレンジングクリームが開発されており、前三五〇〇年頃のシュメール人は石鹸を発見していた。

浴用剤の例を挙げると、わが国における端午の節句の菖蒲（しょうぶ）湯や冬至の柚子（ゆず）湯は浴用剤入り温浴であり、浴用剤の走りは、温泉水を乾固した〝湯の華〟であるとされている。また、インドにおいては、マウルヤ朝の頃、沐浴の際、鰐の歯や布に浴用剤あるいは賦香した粘土を付けて体を洗い、インダス文明（前二五〇〇～前一五〇〇）のモヘンジョダロの公衆浴場跡から磨き砂などが発見されている。

三　水浴を支える用具・用品

江戸時代の清浄用具に、行水用の盥、垢擦りに軽石があった。室町・鎌倉、平安の各時代には、洗浄料の容器や盥があり、清拭用の畳紙もあった。

インドでは、マウルヤ朝の頃、沐浴の際、鰐の歯や布に磨き粉を付けて体を洗い、インダス文明（前二五〇〇～前一五〇〇）のモヘンジョダロの公衆浴場跡から磨き砂、肌掻き用の鑢（やすり）や青銅鏡、剃刀が発見されている。

かように、水浴の歴史は猿人の時代まで遡る可能性はあるが、水浴の確かな証拠でさえ、前二〇〇〇年前後のインダス文明の時代までしか遡れなかった。ましてや、下腹部を意識的に洗浄するようになったかどうかは、江戸時代以前になると、洋の東西を問わず、推理するための傍証さえ目にすることができなかった。

（次号に続く）

サルの歴史

鈴木守

『化粧のルーツを訪ねて』の資料を調べていると、「チンパンジーは石でヤシの実を割って食べる」とあった。このことは取りも直さず、「チンパンジーは石器を使っていることになる」と咄嗟に考え、「化粧動作の原形はサルの時代に培われたのではないか。兎に角、資料だけは集めてみよう」と思い立った。その要点を『まんじ、一一八号、猿の遺産』の項に纏めておいた。今回は、化粧との関係は二の次ぎにして、『サルの発生と進化』に焦点を合わせて話を進める。

一　サルの発生

ヒトの先祖・サルの最初は、食虫性の哺乳類から派生した原猿であり、ジネズミのような形をしていたと推測されている。原猿の発祥年代は不明だが、北米の六、七千万年前の地層から最古の化石が出土。この時代は中生代白亜期の終り頃で、ジュラ紀として知られ、大型爬虫類・恐竜が我が世の春を謳歌していた。だが、六千五百万年前頃に忽然姿を消した。恐竜滅亡の原因は、「メキシコ・ユカタン半島に巨大な隕石が落下したことによる」という説が確からしい。

この当時の北米大陸はヨーロッパ大陸と地続きであり、四千五百万年前頃に両大陸は離れ、ヨーロッパ大陸はアジア大陸に接近、ユーラシア大陸となって、アフリカ大陸と地峡で繋がった。続いて四千万年前頃には、アフリカ大陸はユーラシアと離れ、南米大陸と接するようになった。

この間に原猿は、地続きになった頃に各大陸に拡散した。森に住む原猿の食性をみると、森林の下層で毛虫や蟻の幼虫を餌とする種属、甲虫や蛾を捕食する動きが敏捷な種類のほかに、虫取り競争の敗者は森の上層で葉っぱを主食とした。この植物食に移った原猿は食糧が豊富にあったため、体が大きくなり、真猿に進化したという。

各大陸に拡散した原猿のうち、北米とヨーロッパでは気温低下によって滅びたが、気温低下の影響を免れてアジア、アフリカ、南米に拡散した原猿は、四千万年前以降には真猿へ進化した。マダガスカル島の原猿はキツネザルやアイアイとして現在も健在である。南米で進化した真猿はオマキザルやキヌザルの広鼻猿類であり、アフリカとアジアに居を構えた真猿は狭鼻猿類のオナガザルやニホンザルなどである。

狭鼻猿類の中から、類人猿が現われ始めたのが三千二百万年前頃であり、一、二千万年前には類人猿の全盛時代になったのだが、一千七百万年前頃にアフリカ大陸がユーラシア大陸と激突して地続きになった。この衝撃で、東アフリカでは造山活動が活発になり、大地溝帯が成立した。

この地殻変動で偏西風が遮られた地帯では、降雨量が減り疎林化が進みサバンナ化した。それまで食糧豊富な熱帯雨林地帯で生活していた類人猿は、食を求めてサバンナの地に下り立って直立二足歩行を完成させ、ヒト科動物への道を歩むことになった。

なお、類人猿はヒト上科に属し、現在、テナガザル、オランウータン、ゴリラ、チンパンジー、ボノボが知られており、人類はチンパンジーと共通の祖から派生した。

二　サルの進化

ヒトの祖・サルも種保存のための性本能と個体維持を目的とした食本能を備えていたことは言わずもがなである。

北米大陸で最古の霊長類・原猿が出現して以来、サルは樹上で生活した。サルが生息した熱帯雨林地帯の樹木は高さ四〇メートルに及び、密林は上層部、中層部、下層部と林床部から成り、サルたちは種属間の争いを避けるため、夫々の層ごとにニッチが決まっていた。ところが、人間はこのような叡智を忘れてしまい、テリトリーを巡って国家、民族、宗教などの紛争が絶え間なく続いている。就中、かって〝中華〟を誇っていた大国中国の昨今の動きには目を覆めたくなる。人類進化ではなく退化の典型である。

それはそれとして、樹上生活は不連続な立体空間を移動するので、それに適した構造と機能を確保しなければならなかった。その結果得られた化粧行為に必要な形質については、既に述べたので割愛し、色彩感覚に関する最近の研究結果を補足し、そのほかの進化の形跡を書き記すことにする。

色彩感覚について従来は「哺乳類で色を感じるのは霊長類だけで、多くの哺乳類はモノクロの世界で生活している」と言われていたが、最近の研究結果では「殆どの哺乳動物は眼球に赤と青を感じる二種のセンサー（錐体）があり、牛や犬は色を感じない訳ではない」とし、「サ

ルとヒトの錐体は三種で赤と青、緑を感じるので色彩をより鮮やかに把握でき、空間を飛翔する鳥や昆虫には紫外線を感じる錐体があり、色彩感受性が最も高い」という。

その他の進化の跡を辿ると、チンパンジーは石でヤシの実を割って食べ、棒の先端を歯で噛んで掃くようにして蟻を捕食するなど道具を使うことが知られている。また、チンパンジーが獣を捕食することも観察されている。ところが、チンパンジーが蟻を食べ、肉食するのは食物としてよりも嗜好に基づくといわれているので、嗜好のような人間臭さもチンパンジーが身につけているのである。

その上、チンパンジーは学習次第で数字を色や形で表すことが出来るようになるので、チンパンジーの知的水準は可成り高度であることが証明された。

性との関連では、ニホンザルにはヒトと同じ二八日間隔の性週期があり、インセスト・タブー（近親相姦の忌避）も成立している。また、性交時、ゴリラは雌雄とも声を出すが、ニホンザルでは雌だけである。ゴリラの性交所要時間は一時間に及び、スラスト（腰の運動）の回数は三〇〇回だそうである。性交の体位はゴリラで五種類、チンパンジーなどでは二種類、ニホンザルの性交は一種類の体位である。

性交ではないが、ボノボは群れの和を保つため、性器を使って親愛の情を示す。雄同士が擦れ違うと、互いのペニスを戦わせて挨拶にし、雌のボノボは緊張状態に陥ると、抱き合い性器を擦り合わせて蟠り（わだかま）を払拭するそうである。猿学者たちは前者をチャンバラ、後者をホカホカと呼んでいる。チンパンジーも擦れ違う時は挨拶するといわれているので、礼儀作法の形は違うにしても、挨拶の行為は、チンパンジーと人類共通の祖から受け継いだ社会的動態であろうか。

引用文献

今西錦司他、人類の誕生、河出書房新社、一九八九

河合雅雄、サルからヒトへの物語、小学館、一九九二

ファッキーニ、人類の起源、同朋舎出版、一九九三

葉山杉夫、ヒトの誕生、ＰＨＰ研究所、一九九九

松沢哲郎、進化の隣人、ヒトとチンパンジー、岩波新書、二〇〇二

動物に見える色、朝日新聞日刊、二〇一一年、七月九日

陰翳の美学（その九）

外山知

第三章　美を構成する要素

九、磨くこと

1．創造への過程

私達は芸道の感性に触れ、思惟する以前に「玉磨かざれば器を成さず」と「礼記・学記」にある。

これは芸道のみならず、人間世界においても、すぐれた才能を持っているが、修養を積まなければ立派な人物になることは出来ないということである。

広く磨くことに使用され、創造への過程で「切磋琢磨」の熟語を喚起する。

およそ、磨くことの意味は、練磨に使用されることがある。これは例えば武芸における百戦練磨の語が、これである。

さらに製図する場面でも、一本の線の持つ意味も磨くという意味からすれば、実に尊い線である。単純と思われる線にも種々様々な線質を持つ。

それによって物体の持つ意味付が、あるいは支配する線質になるのかも知れない。

そんな意からすれば貴重な線質で、場合によっては掛替えのない物となろう。製図家の腕も、まさに、このような領域にまで高められることがあるのである。

これは美学で、単純な何の変哲もない線とは、雲泥の差を持ち得るものと言ってよい。

その貴重な線質の上に幾何学的な線分構成もされるし、立体空間を綾なす芸術的な模様も、構成される。また建築、設計図も施される。

かゝる要素から一本の持つ線質が、過大評価の対象ともなり得ることの重要さを、噛み締めなくてはならないと思う。理路整然とした一枚の図面の持つ意味も、底し

れない、芸術的な奥の奥をのぞかせるのである。

一般的に無造作に解しがちなものにも、場合によっては一塊の宝石にも等しい物をも、宿すことを思わす。

設計士の引く線質にも、より高い価値を育くむ、過程を見のがすことの出来ない貴重な手法として、取扱いに注意する必要がある。

かくして創造、創作過程の持つ意味は、実に計りがたいものを持つ。意識が不可欠で、どこにもあり得る線質とは、自ずと差位を持つことを、今改めて知ることが出来る。

一芸に秀い出たものの持つ過程を知る働きは、何物にも替えがたい美技を持つ。そこから創作意欲も湧き、土台の基礎構築が出来上がって行く。

この基礎的な要素がなくしては、砂上の楼閣と言えよう。たとえ意図したものが出来上がったとしても、それは、やがて崩れ去る結果となることは必定である。

基礎力こそかゝせない存在であるのは、物事にたずさわる者の必携なものである。

だからこそ一本の線質に命をかける設計士の心意気は、或る意味からすればそれに全生命をかける、雄揮な魂を見得ると言って、過言ではなかろう。

私達は出来上った図面、青写真に、もちろん芸術性を感ずるも、一本の線質に注ぐ心血などわかるすべもない。

なんとなれば製作過程にタッチせず、一本の線質に傾むける情熱のすべてを、掘り起こして検索する領域を、直ちには探究し得ない。

勿論分解し、分析する過程に、最初の輝く線質に遭遇することが可能と思はれる。たゞその後の線質の組込みがあって、頭書の一線を見る時、あの高貴な目移りは見られ得ない。

たゞ組込の一線、一線にその積上げは、建築効果を現すことが必要と言えよう。これも能面打ちの技法と寸分変りなく、形成過程に入魂する。

いわゆる磨く作用が施されて、より深き巧みの技に入って行く。線質の磨き、これがプロセスとなって構成過程を展開して行く。

その過程には厳しさ激しさが脈打ち、何回となく線質に対処する。これで次の過程まで進み得る段階に、とめどない心血が注がれて行く。

それは巧みの技士の専心にかゝわる所、これなくして次へのステップは、如何なることがあろうと進めない。

創作への厳しさが、浮上してくる。これが芸術美を支えるものとなって、生き蘇がえる。今日ではソフトウェアーの領域となって、その過程を育くむ。

ＩＴを作動させる脳の英知は忘れ得ずして取り組む。この技工こそ美であり、人知の研鑽なくして果せない。

かくして心血を注いで完成の領域に達する、本来の設計図は見事な物である。これに従って巧みの技が寸分

くるいもなく、素材をけずり磨をかけて行くことになる。

頭領は設計図に忠実に職人を動かし、職人もまた頭領の示唆を受けて、自分に可能な限りの技で答える。寸分違える箇所があれば、遣り直しに意図を発揮させる。

互いの職分を尊重しながらも、常に芸術を意図し、設計士の離った図面にかよわせ、高きを求めて腕をふるわす。

これには設計士と頭領の、意気かよう所作があってこそ、本来の目的達成に向い育くまれる。

これは芸術で心と心を交よわす技があってこそ、寸分違わない芸術作品を生むことになる。

およそ人間のなす技にも限界がある。その限界に飽く無きほど挑む意志力は、弛みなく磨く技士の効果による所が、深ければ深い程、芸術品に限りなく近づいて行く。

汲めども盡きぬ泉、これが、人知を動かすことになろう。磨くことは一見たやすい事のように思えるが、その過程には想像を絶するような激しさのせめぎ合いがある。

職人同士、自己との戦いが効果となって現われる。二十世紀から今世紀にかけて、素材にもよるが、インテリアデザイナーの領域にも及ぶ。

たしかに従来の感覚とは違った志向を、この世界の製作に生かすようになった。

単なる住から装飾を生活の中に捉り入れ、芸術美を楽しむ効果を狙っている。更には地震対策も考え、実用的である。緊急対応、外壁塗装施工、コンピューターによる耐震診断等々、素材もハイブリッド・シリコン、セラミックなど価値的に高い。

効果的な設計も、変化と住いの調和を取り入れるようになった。それも付け添えておきたい。

また磨くことに由来する新しい手法として、今後の住宅開発に使えるように、巧みの技が生かされつゝある。

2．構想を練ること。

創造への過程で、磨くという一連の行為には、芸術美を捉り囲む関連を持つ行為である。磨きあげる線質に純粋性を持つことは勿論で、その線質にかける設計士の意気込も、純粋性のステップと言える。

すなわち構想を練ること、この思惟的な行為こそ、磨くという作用の最大の力点と言ってよい。

如何に構想立案すべきか、過去の経験的イメージーが、あれか、これかと求められるのも、この段階かと思われる。

思惟的な知る作用の過程は、構想立案に不可欠で、構想を練り上げる感覚の経験に、基づいた思考が要求される。

過去の幾多の経験に現在えた知識を、いろいろ組合せ

ながら、新しい心の内容にまとめ上げて行く。
その活動は過去の連想から派生した想像、推理、思考工夫等を持って、現在決断し、判断する過程に所謂、構想を育くむ。
前頭連合野の働きと繰り返しは、まさにソフトウェアー構成の、練り磨く領域と見てよい。ゲーテの「ファウスト」の最初の「天上の序曲」に、「人間は努力する限り迷うものだ」と言っている。
人間が思考する限り迷いの連続、間違の反復で、この精神的な活動があって、より可能性が開かれてくる。
私達は思考内容を、言葉や表情や動作によって表現している。その中、言葉によって表現する手段を、文字により書くことで、置きかえられる。
知識の作用は、機械文明の広がりと共に、書く手間をはぶかせた。すなわち、通信手段に置きかえることになった。
すなわち思考能力のより確実さを確認するステップで、踏みにじってもいると言える。
即ち、次の思考への踏み台にすることが、甚だ危い情況に、追い込まれているとも言える。
書く能力は思考の高揚をうながすもので、構想を操る過程に不可欠な存在である。その事を改めて問い正す必要性に、迫られているとも言える。
文章を書くことの領域で、構想を練り磨くとは、たとえ瑣末な論が多様化する中で、添削、推論は不可欠なことである。
一編の詩文構成にも、この過程こそ、文を練る上での、欠くことの出来ないせめぎ合いと言ってよい。
これあって効果的な論攷を、得る事が出来る。すっきりとした論理はこの添削の繰り返しによって、琢磨され立派な芸術も生れる。
作詩家の織なす草稿を拝見するに、実に見事な添削がなされ、不要な論は省かれ必要な論が書き添えてある。
これあって洗練された完成度の高い文章を得る。
およそ構想を練る構想立案に心酔した文芸史上の作家、作品に目を馳せると、西洋の流れを汲む浪漫主義、自然主義、反自然主義、プロレタリア文学が散見する。
中でも明治二十年代後半から大正末年を主流にひときわ注目を引く、芸術至上主義、耽美主義が、文壇に少なからず影響を及ぼした。
すなわち前者は「人生のための芸術」に対して、後者の「芸術の為の芸術」は思想性も付して、美の享受、形成に最高の価値をおく耽美主義が、十九世紀後半フランス、イギリスで顕著だった。
我国でも耽美派の活躍で脚光を浴びた、「パンの会」に集まった、永井荷風、谷崎潤一郎等が繊細な技を披露し、文壇に光彩を放った。
また新感覚派の横光利一や川端康成など、大正末から

昭和初年にかけて一風を画した。
さらに「人生に相渉るとは何の謂れぞ」と北村透谷が評論面でも、山路愛山との論争で、人間の永遠の生命にかゝわるものと主張した。
なお徳田秋声、相馬御風に師事し「奇蹟」に参加した葛西善蔵は苛酷なまでに、全人格を実生活で、貧窮と一家離散に追い込んだ。
すなわち自己犠牲によって、自虚的な私小説「哀しき父」短編がある。貧困で妻子を田舎に帰し、結核に侵されながら文学に打込む、破滅的な生活の中で文学に精進した。
また「子をつれて」は、大正七年家賃不払いで家を追われた作家が、二人の子を連れてさまよう。作者の悲惨な実生活を短編の中に、詩情と飄逸味をもつ作風として鳴らした。晩年の湖畔手記（文書）など、彼の思潮をうかがい知る。
さらに芸術至上主義で、忘れ得ない存在となった。新現実主義（大正三以降刊行）の第三・四次「新思潮」に集った芥川竜之介、菊池寛、久米正雄、山本有三、豊島与志雄等の文学傾向であった。
彼等は新思潮派、新理知派、新技巧派とも呼ばれ、広義には「奇蹟」に集まった新浪漫派の人々をも含み、大正末期に美を求める耽美主義など、個性的角度から現実を認識しようとしたのが新現実主義であった。
代表的な芥川の作風に触れてみたい。即ち俊秀な知才に富む彼の作品は、古典説話の人物に近代的な分析と解釈を施した短編である。
作品「鼻」は、「今昔物語集」、「宇治拾遺物語」に取材し、愚かな自尊心と傍観者の利己主義を、心理の揺れに摘出した作と言えよう。
洗練された感覚と知性で、虚構を築く巧妙さは、新理知派の名をほしいまゝに顕現し得た。
さらに「地獄変」で、堀川の大殿に地獄変の屏風絵を命ぜられた絵師良秀は、自分の愛娘が焚殺される様を筆にした。即ち人間性を捨ててまで、芸術美の完成を求める。
芸術至上主義を主張した作品で、同種の「戯作三昧」「奉教人の死」などがある。いずれも短編構成になる作風で、当時文壇の主流をなしたことは、周知のことであった。
構想立案についても基本的には、文の構想意図は踏まえて、その上に時代思潮に乗ってその美を顕現させた。
いわゆる「意識の流れ」即ち人の心理の動きを、川の流れにたとえた技法で、作中人物の切れ目なく続く心理を描写に生かした。
これはジェームス・ショイスの「ユリシーズ」などに注目し、広く用いられる様になった。
芸術至上主義及び耽美派にしても、発想としては根源

的要素を作品の底流にもち、人間心理の歩みをたくみに、それぞれの主義、主張の中に色濃く表現に生かし、構想を練り行く所に、作風にも独自性をかもすことになる。

そして大正末の文壇に、大きく貢献した事は論をまたない。前述もしたが作風の心象表象の現れで、美を如何に位置付けて行くか。

また美の享受を創造に求めて行くかによって、或は感覚手法にも変化をもたらし、構想力の基礎的要因をなすにいたった。

ある者は芸術至上主義に走り、ある者は唯美主義、神秘主義に、後にはデカタンスなど、さまざまな傾向を示すに及んだ。

ただ感覚、記憶などが心の中に再生される時、如何なる意識と結びつくかによって、基本的な構成要素を育くんだ。

勿論作家の意志表象は本人を取りまく環境、時代感覚、思潮の底流、社会的要因など、さまざまな要因が肉付けられる。

構想立案、練成に影響することは論攷を支えるものとして、不可欠な要因になることは論をまたない。

かくして心情発生が、構想の基盤作りに少なからず影響し育って行くことは、前述でも論攷し来た。

構想を練る段階では、意識に浮んだ姿の表現描写に、普遍妥当で正しい推理の形式や、類似点に基づいて他の事をおしはかる方式によって、筋道を立てて述べる文章を、鍛り上げて行く過程に、種々の資料背景が生かされる。

やがてそれが定着の運びに至る琢磨が、文章論に連なることを忘れてはならない。

この過程が厳しければ厳しい程、錬成効果は大きく作品形成に大きく貢献する。

かくて構想を練ることこそ、作品に挑む過程で不可欠なものである。それは翳の存在であり、文芸的な美学の構想の一ステップと言ってもよい。

「構想を練る」ことで、明治末から大正末期に至る文壇の中で、注目を浴びた作家の背景を考察して来た。

3．錬磨することは感情の発露か

私達が常に思うことは、感情、感覚の誘発によって、すべてを形而上学的な知の働きまた、或る事象を契機として形而下学、科学的な分野にも分け入って行くことは、心理の知の働きで捉え論述したことを思い起す。

ただこゝで錬磨することは感情の発露かと問いかけに対して、今までの思考過程でその働きは当然理解出来よう。

すなわち前頭分野の脳細胞が錬磨に対する感情を刺激し、感覚作用を誘発する要因を命令する。

機能に従って「錬磨」を、意識として私達に要求する。私達はその感情を肯定して心理的な作用を共有し、事象に対処して行く。

私達はその感覚を行動に移し、錬磨する働きを繰り返す。こゝに磨きをかける作用を繰り返すことになる。

私達の感情が意図した領域に向かって働く作用、これは知の働きの作用の一つとして、心的な活動をうながす。

錬磨する作用は感覚感情の発露によって極めて初歩的な段階から、より高次の過程へと現れる。

およそ磨くという事に遭遇する先に、1・2の項で述べた知の作用過程を踏まえて、それと呼応する過程で捉えて行けば、理解はより可能となろう。

単純な知の働き過程が、踏み込む意識に連なると、複雑化した思考の働き作用に写って行く。

高度な判断の知の働きは錬磨の密度も高く、単純から複雑へと意識も変貌して来る。

またそれに耐え得る思考の知る働きも可能で、磨けば磨く程効果を示し得る。従って私達が単純な判断で錬磨することは、感情の発露が誘因することで、もちろん一次的な思考ですら肯定される。

たゞこれを論理的に論証して行くことは、単純な知の働きから複雑な知の働きへと、弁証法的な論証を通して高揚させる。

そこに意識作用もより深く、いわゆる錬磨されて行くことになる。

知の働き作用の過程の深まりは錬磨を錬磨する過程に、たゞ形而上的な知る働きから、場合によっては、形而下学で扱う光ファイバーの領域まで突き上げて行く。

これはテクノロジーの発展と共に、今まで感覚的な分野に終始していたものに、広がりを持ち与えられた知の働きの作用も、またテクノロジー化して行く。

感性的な知の働きが感覚を離れて、サイエンスの領域で花を咲きそめた。ルネッサンス期、人類の英知が生み出した自然科学的な知の働き即ち、地球から大宇宙へと、はてしなく継続する過程に、ミクロの世界が、無限大の彼方へと錬磨されて行く。

こゝは人間の小さな感情の発露が、織りなす綾と言ってよい。感情にひらめきを与え、錬磨の継続化をうながすのは、人間の脳細胞の働きである。

これによって予期し得ないものまで形成して行く、感情、感覚の力は偉大である。勿論積上げられた思考の連鎖は、新しい物質を形成させる。

その過程には涙ぐましい努力があってこそ、それを踏えて開花の方向性が導かれる。

限られた感情、感覚のステップは、それは小さい思考能力かも知れない。その発露は輝きをもつ錬磨とも結びつく。

「小なるが故によく大を制す」の諺もある。翳の世界

が深ければ深い程、限りなく光り輝く。美学が顕現することも形成され行くものから、察知出来よう。

人は感情によって支えられ、小さな感情の世界がより大きな輝きの世界へと転化されて行く所に、人間のたくましさも存在する。

或る面に於いては、錬磨の限りない成形は、小さな成果を可能な限り形而上的な知の働きを離れて、形而下学的な知の働きへと組替えられて行く。

「錬磨することは感情の発露か」確かに小さな感情にその方向付けをする物は、翳の力である。錬磨する作用が加わってこそ可能だ。

脳細胞を刺激するのもこうした思惟あってこそ、美の創造を可能にして行く。「玉磨かざれば器をなさず。」

磨くと言うことは、本質的には表象部分を覆っているものを排除して、より確執に迫ってゆく過程である。錬磨する作用は、私達の小さな感情が磨くという行為を誘発する。

もちろん心的な行為を命令する脳の前頭葉の働きで、磨くという諸動作をかもし出す。

およそ人間でなくては出来ない行為で、その反復行為の現れこそ、創作に欠かせない存在である。

一つの小さな感覚、感情が、ミクロの世界を動かすことも可能となろう。感性的な知の働きは、錬磨誘発の一ステップと言ってよい。

私達の日常にこのような小さな感覚、感情のステップは、多々存在しよう。その小さなステップの集合体はやがて、錬磨の反復となって創作に発展し、一つの美学形成となって現れる。

日々の作動がまた新鮮さを加え、新たな感情を生む。次々ととめどなく生成発展する過程は、歴史をきざみ、新な形成物を育くむ。

悠久の流れの中で繰返えされる、錬磨の作用は、人知の介在する限り極められ、それがまた新しい美学形成にも連なる。

そういう意味からすれば、感情の発露は錬磨することによって生起するとも言える。

4．個と他のせめぎ合い

かゝる個体が幾多の存在となって、日常茶飯事の事ともなれば、互に個と個のせめぎ合いとなって、切磋琢磨することにより増大化を極めることになる。

勿論、量、質、規模の拡大化はもとより、ミクロの世界、前人未踏の地への踏査に至るまで、美を求めてのせめぎ合いは、悠久な空間と時間を越え続けられる。

これは陰翳の美学についても言えることである。

より深き翳の美学は、それだけ美を琢磨する過程を持つ。勿論個体、個体のぶつかりあい、そこには互いの競

争もかもし出されるであろう。

美を競うことも芸術創造には欠かせない。それが人間であっても美は競い合うことによって、その高さを保つことが可能である。

他から見られることを意識すればする程、そのせめぎ合いは強く現れるものと見てよい。たしかに美を意識するとしないとでは、大きな異装を持つことは必定である。

マスコミの発達マスメディアは、ＩＴ・ＴＶの画像に写る美的要素は、いやおうなしに茶の間でも見られる。

メークもさることながら意識すれば、どこまでも美の追求を可能にする。即ちメークアップも多種類のメーク材質を並べ、互いに効果的な方法も演ぜられて、可能な限りの美を求めあう。

スクリーンに登場する女優、タレントなどを司会する放送人は、いずれもせめぎ会いは勿論のこと、琢磨がなされるのは当然としても、一般主婦層にも、そのようなせめぎ会いが浸透しつゝ進展している。

やはり人間である以上他者よりも、より美しいこと、感覚、感性美は、やはり内面に持ち続けるのが、人の世の定めと言えよう。

「金剛石も磨かずば、玉も光りも添はざらむ、人も学びて後にこそ、まことの徳は現わるれ」明治天皇、皇后、昭憲皇太后の御歌にある。

磨くことは、常に意識をそちらに向けることによって、絶え間なくより美しい容姿を保つことが、可能視される。

これは、心理的な郷愁かもしれない。個の自覚、発見は近世に於ける「我の自覚史」にもあるが、ルネッサンス期に個の自覚発展は急速に発達を見せた。

レオナル・ド・ダ・ヴィンチ、ミケランジェロ、ラファエロなどによる自我の開発は、中世のキリスト教的な世界観による。

即ち、スコラ哲学から人間性の解放へと、ルネッサンス的な思考が、あらゆる分野にまたがって叫ばれた。

愛と自由の世界観の拡大化はやがて、地理上の諸発展へと新大陸発見、ダヴィンチによるヘリコプター工作機械、船の設計図など、万能に才をふるったようだ。

さらにコペルニクス的転回で、いわゆる地動説を数学的に証明し、近世の思想科学に革命を与えた。

またガリレオ・ガリレイは自作の望遠鏡で天体観測を行い、カトリック的な宇宙観に反論するなど、新しい世界を発見した。

個と個のせめぎ合いの中で、ギリシアの昔に立返って新しい世界観をうち立てるなど、ルネッサンスに貢献をなした。

これらを中心とした科学的物の見方などの新思惟が、やがて宗教革命を引き起こした。人間性の解放を契機に全ての面に活動するなど面目を一新した。

勿論その背景には個と個のせめぎ合いが、原動力をな

したことは論をまたない。

ドイツのルター、カルヴァンを中心にアン・ブーリンなど、革命に新、旧対立抗争となって、数十万あるいは百万単位の人々が処刑されたとも言はれた。

北欧のスコットランド、イングランド、ノルウェー、スウェーデン、デンマーク、プロイセン、神聖ローマ等の各王国に対し、南欧のフランス、スペイン王国、ナポリ王国、共和国等々、更にはオスマン帝国と新旧の宗教分布も、十六世紀六〇年代に入って鮮明化した。

それ等がやがてイエズス会の活動と、海外へのキリスト教の急速な拡大となった。その足掛となっていったのは、神と人間とを仲介する教会の位置付け、即ちカトリック教会を通じて広められていった。

これらは、ルネッサンス期から十六世紀にかけては、新旧のせめぎ合いの中で展開された。それが又、美意識拡大にも広がって行ったことは周知の通りである。

こうして美の発見の論理が、イギリス、フランス、スペインの絶対主義国家に、ゆだねられていった。

5. 美の発見の論理

およそ十六世紀後半のヨーロッパは、王国の権力支配下の中でも、英国は勿論のこと、仏でブルボン朝の王家断絶後、アンリ四世は絶対主義の基礎を確立するため、一五九八年ナントの勅令を発令し、旧教の正統制を再確認した。

個人の内心の問題には国権といえども立ち入らない。これによって新教徒も救われる王権確立を築き、ルイ十三世の三部会の召集停止、三十年戦争に介入した。

ルイ十四世の一六八五年勅令廃止まで、絶対主義国家は隆盛を極めた。重商主義、王権神授説、王権の象徴としてヴェルサイユ宮殿造営と、ひた走りに走った。

絶対主義最盛期の下、積極的な侵略戦争へと、さらにスペインの王家断絶にともなう継承戦争をめぐって、ルイ十四世の孫フェリベ五世の王位承認をさせると、太陽王にふさわしく絶大な権力をふるった。

ルイ十五世、そしてルイ十六世、一七八九年フランス革命の国王処刑と動く中で、ルイ十四世の地元、美の発見は絶大な権力のもと、ヴェルサイユに集まった。

太陽の王を象徴する壮大な庭園八キロに及ぶ道筋に、芸術的な設備構想を実現させた。

中央集権化された権力の中枢で、ヨーロッパの他の宮廷の模範として、政治的な意図もあってのことだった。

即ち十三世紀の狩猟目的の館から、宮殿も祝祭を意図した増改築で、戦勝した国王の権威の象徴として、壮麗な宮殿に変貌して行く。

それは太陽神であり芸術を司る神アポロンに喩え、壮麗な宮殿の体裁を整え、美の粋を集めていった。

一六六四、一六六八、一六七四の前後三回にまたがって祝祭をなし、そのつど増改築を行った。

十三世の狩猟目的の館から政治権勢の城へと変貌するプランの立案を、ニコラ、コーグに命じ、ウィコント城建設工事に携わった。そして芸術家集団を意のまゝに操ることになった。

即ち絶大な政治的権力の所有者である。同時に、太陽アポロンの神を崇拝する芸術家でもあった。

その事がベルサイユ宮殿に百花繚乱を顕現した。十三世の旧城を取り囲むように煉瓦と石の様式から、白と黒の大理石へと、素材も変貌した。

北の翼様に大王の間、南の翼様に王姫のアパルトマンをと、設計にも重厚な抑揚が生み出された。

折も折、スペイン王フェリベ四世の娘である、王妃マリー・テレースの相続権を理由に、ルイ十四世の始めたフランドル戦争に大勝した。

スペインは一六六八、五、二、アーヘン条約で、ベルギー南部のリールを含む十二の要塞とともに、十四世に譲ることになった。

この背景を契機に、類いまれな鏡の間、十四世の寝室、礼拝堂と、美の粋を収攬させ得た。即ちヴェルサイユ宮殿も時代と共に変化する、主人公の意のまゝ変貌して行く。

ともかく、バロックからロココ、そして古典主義へ、イタリア的なグラン・マニエールから、オランダ的なプチ・ジャンルへ、十七世紀から十八世紀へと移行していった。

即ち十五世紀による装飾美術に打込んだ。いわゆる、ロカイユ装飾様式が装飾の美学を白と金のロカイユ化粧仕上げによって比類ないものにした。

十八世紀のヴェルサイユの装飾の豪華さを印象付けたのも、主君の意図の表れであった。

たゞ十五世治世の終わり数年は、新古典主義に向けての大掛りな造営が相次いだ、その最初の時期でもあった。

北翼棟の端に建てられた王室オペラ劇場、私用アパルトマンに建てられた王の図書室、建築家のガブリエルと名称し、このように新しい翼棟にも古代の偉大な模範を冠した。

同時に異国の狩猟趣味が、アジアの中国、日本に向けられた。大理石の中庭と鹿の中庭に面した位置に、小部屋を建築させた。

さらに大アパルトマンや儀典から離れて、自分の趣味に適し、安楽を求めた。この小部屋の装飾に、東洋趣味の絵画、陶磁器など、色彩鮮やかな趣をこらした。

これが後に我国の新宿御苑となり、赤坂の迎賓館となって、ヴェルサイユ宮殿技芸学校の教授達の手になった。

それは共通の芸術の美学を想起させることにもなった。そしてルイ十六世とマリー・アントワネットの即位後も、この伝統が途絶えることはなく、流行に敏感で公

孤立した生活は一七八九、十月、突如フランス革命によって、破滅の運命にさらされた。

長々と美の発見の論理をヴェルサイユ庭園と宮殿の装飾を中心に、ブルボン朝の絶対主義国家の下、ルイ十二、十四世から十六世に至る国王の権力拡大と絶対君主制の下、世界に誇る美の論理を完成させた。

それも盛者必衰の理のためしならではと思う。美の論理をもとめて、ヴェルサイユ宮殿の美学は、そのまゝ我国の明治三十年代後半にまで及んだ。

即ち、明治三十九年一九〇六年完成の新宿御苑、明治四十二年一九〇九完成の赤坂離宮、迎賓館は、ヴェルサイユ園芸学校教授、アンリ・マルティネによって設計完成させられた。

今も厳然として、その偉容をときめかしているのも、かの設計教授による。それ故にあのヴェルサイユの壮大美麗な、建築装飾様式そっくりに内装の美、王権の偉容と、十八世紀末の貴婦人の部屋などを、そのまゝ再構築した。

ネオ・バロック様式の荘重な外観に、豪華絢爛な内装と、その「和」と「洋」の絶妙な組合は、西洋建築美を執拗に求めていた。明治の建築家の集大成であったと言ってよい。

赤い絨毯の階段を上りつめると大ホールが、格調高い美の世界を顕現し、人目を誘導してくれる。

務に追われることのない私生活を切望し楽しんだ。

なお自分達のアパルトマンを、「古代回帰」という趣味に従って再改装させた。十六世は小さな村落アモーを備えた。

プチ・トリアノンの庭、王妃の黄金の間、午睡の小部屋、ルイ十六世の衣装部屋などを、建築家リシャール、ミク、木彫家ジュール、コーグ、ルソなどに託した。

小建築アパルトマントと共に肖像画家のデュブレシ一七七〇―一七八五まで、ルイ十六世及び王姫マリー・アントワネットの肖像画を、地上の神である姿とした。

即ち神聖化した肖像性に美の深淵をのぞかせ、芸術家の意慾をかきたてた。

中でも王姫自から注文によるハープにより添うポーズの肖像画は、ゴーティエ＝ダゴライによる描写で、鏡の間で披露され後に、母国オーストリアに贈られる事となった。

かくてルイ十六世というより王妃、マリー・アントワネットの美貌と東洋アジアの趣味が生かされ、芸術家達によって美の発見の論理は、このヴェルサイユ宮で閉じられた。

しかも洗練された世界の中で黄金の美の論理は燦然と輝やくが、王達はパリで起こる不平や訴えの声から隔離された。別世界で美に酔いしれていて、知るよしもなかった。

赤の絨毯に映ゆる内装飾も手すりの色調で、装飾用の五装固定用の燈台が対をなしている。五基左右シャンデリア風の相対の照明装飾は、各五基の相対する中間壁面に、五色調のキャンドルが五基と光彩を放っている。

輝く大ホールの偉容は招待客を鑑賞の坩堝へと追いやることも必定である。感嘆の溜息をもらす程の、気品を備えている。

大ホールに接続して、朝日の間、羽衣の間、そして玄関階上に朝日の間と対象して採鸞の間と、本館2Fに配置され、中央階段の大ホールと共に一際驚嘆させられるのは花鳥の間である。

明治の頃は饗宴の間と呼ばれていた。シオジ材の壁に欅材の床、天上には三十六枚の花弁鳥獣の油絵が描かれ、三基のシャンデリアが燦然と輝いている。

公式の晩餐会が催されるこの大食堂は、アンリー二世様式の装飾がいかにも重厚だ。なお壁面にずらりと並んだ七宝焼は、いずれも長径五〇糎、短径三八・六糎の楕円形をしている。

唐草模様の木制の額に入れられ三〇点が飾られている。「花鳥の間」の名にふさわしく、すべて鳥と極物がモチーフになっている。

迎賓館開設に際して東京芸大グループが超音波洗浄器で汚れを取り除いたので、製作当時の色調や明暗が鮮やかに蘇って、今日にもその偉容を誇っている。

七宝は、金属の下地にガラス質の釉薬を焼き付けた美的工芸で、日本で七宝と呼ばれた。

中国では琺瑯と言っていたそうだ。日本では実用品として鉄にガラスを焼き付たもので、七宝釉薬を作ることから始まる。

主原料は珪石、鉛丹、硝石などを混合して、坩堝に入れ一二〇〇度以上に加熱、ガラス化する。溶けているうちに、水中に投入すると砕けて小塊となる。それを粉砕して釉薬にする。

この粉末状の釉薬を水洗し、金属上にのせ焼成（加熱、溶解）して付着させる。この施釉、焼成作業をくり返し、最後に研磨して仕上げる。

なお花鳥の間の七宝焼は有無線七宝という技法が使われている。即ち有線七宝と無線七宝の組み合わされた技法で、施釉、焼成作業の前に銀線を使用する。しなやかで色調にも変化をもたらす。芸術的な技法の高さを知る。

即ち線質の強弱、柔硬、色調のぼかしの技法など釉薬の使用に微妙な技巧を添えることによって、伝統的な日本画の風雅さを七宝に移しかえることを可能にした。

当時の代表的画家、渡辺省亭によって、繊細な内的感情が吐露された構図と、涛川惣助による釉薬を絵の具のように使いこなすことによって、喜怒哀楽の感情をも七宝に再現しえた。

十六世紀アンリー二世様式に国際的にも評価の高かっ

た七宝の美が、迎賓館の花鳥の間に採用されたのは、ヴェルサイユ宮殿を装うものとして、当時最高の美をもたらすものであった。同時に貴賓客の耳目を驚嘆させずにはおかなかった事と言ってよい。

6．美的感受性は先験的か。

壮大な美学の前に圧倒し、人間の内的な感情論に及ぶは、或意味からすれば極小なものかも知れない。この極小なものが実は壮大なものを育くむ力たり得るかも知れない。

一滴の滴がもっているエネルギーは、地球はおろか宇宙空間に横たわる惑星をも、支配するものに及ぶかも知れない。

また人知の偉大な働きにふれ得ることになるかに思う。未知を思惟すれば、その無限大の彼方に美的な感受性を発想するかも、その様な数々の未知なものを共有する英知を持つ。

私達が美しいと感ずる働きは、心理的な感情、情緒、知覚の働きで美と感ずる物に対象する。

即ち美的感受性は人間の本来持つ特性と言ってもよい。脳の前頭葉のもつ細胞が、美的な感受性として作用して始めて感覚的な反能を起す。

美しいと感ずる働きは、経験的な働きが生み出すもの

て、普通の知の働きとは異なる天才的な領域にまで昇りつめることは、必定と言って過言ではなかろう。

従って先天的な経験の知の働きが皆無だった場合、後天的な経験努力によっての積重ねが、将来どの程度まで伸びるかは、少なくとも、前者の場合異なった現れ方となって表象されると思われる。

もっとも「例外のなき法則はない」ということで、異例がないこともない。

たゞどこまでも例外的な存在だろう。これには異常な努力が顕現されて、はじめて頂上に達し得ると思う。

もっともいかに先天的、先験的な才を持っていても、それを磨かないでいたり、アプリオリな存在は死滅に等しい。生れつきもった天賦の才能に磨をかけたなら稀小な価値意識が感性を高め、まれに見る存在を構築することが可能と思われる。

いやこのような事例は各分野においても様々に見られる。生後三才程の小児が、驚異のヴァイオリンの名手として、周囲を驚嘆させてもいる。

驚くべき数理能力をもっているのも見かけられる。前述した先験的な知の働きに加えて、生後の環境論が、プラスされてこそ習練されえる。

結果的に功を奏することになる。よく天分の才とか言われるのは、かゝる諸行のこと、解してよい。

世の中に人知の及ばない事も予見すると言われる。ま

である。勿論後天的なものが多く、日常経験したすべての事象が集約されて、美意識を感ずることゝなる。

即ち美的経験の知の作用の働きによることが、すべてを支配すると解してもよい。

そこには感受性は日常経験によって積重ねられた物が、より美しい感性を生み、知覚判断の材料ともなって、高い感情論も生れるであろう。

従って人知の後天的な作用が生み出したもので、感覚的な作用もより高いものへと導入されて行くことも、経験から感じ取れるのではなかろうか。

それに対してカントの先天的な形式、即ち先験的な感性は、時空間によるものである。

同じ受容性にしても、後天的な内容、即ち感覚とは、論理的な知の働きにおいても異なる。

アプリオリな領域と目され、人は生れた時からその性質を持っているものと区別される。

私達の多くは後天的世界から誘発されたもので、それが支配的である。

たゞ先天的なものがあるとするならば、人は生前に母親の体内で名曲を聞き、それに反応し、好環境の中に胎教を受けて、時空間を育ったとする。

これは先験的な美的の感受性を受けて来たと言ってもよい。

これが生後になって後天的な経験の知の働きを媒介し

さにかゝる事例をさすかと思われる。

従って或る意味からすれば美的な感受性は、先験的な時空によるかも知れない。たゞその人生の大半は後天的な経験による感覚に委ねられると見てよい。

美的な感受性は先験的かと論究されるが、前述のケスタなど、必ずしも否定され得ないと思う。

たゞ私達の意識は生後成長過程をたどり、脳の発達もなされ、前頭前野も確固たるものになって来る。

従って感受性も経験的な知の働きに託され錬磨、努力によって美的な感性をより確実な物に形成して行くことが、基礎的素因をなすと見てよい。

人がこの形成過程に如何に参与し、如何に形成して行くか、これが根本命題といってよい。

たゞ感性の知の働き能力（受容性）について、カントの言及する先天的な形式である時、空間が全然無いとは言えない。

従って私達が美を意識する時に、勿論後天的経験による感覚を働かせることは論をまたない。

しかし先天的な時空の存在を無視することも出来ない。前述の過程においても明確といえる。たしかに先験的な知の働きは、経験知識の対象そのものではなく、私達が対象を知る働きの仕方に、関係するものを呼ぶ。

前述したが母親の胎内での胎児の成長過程には、主に音感の反応が、先験性を持つ。母体の鼓動は勿論のこと、

体外での音の響にも反応を知ることが大きい。

そんなケスタから胎児教育も盛んに試みられている。美的感覚性の内音の感覚が、先験的に吸い捉られる。

これは医師による聴診器、触打診によって明らかで先験的な感性把握に、大きな手掛りをしている。

こんな研究分野にも、すくなからず先験的な知の働きがあって、その捉え方が種々の実験的な試みによって、行なわれている。

音響の反応から常に、胎内での母親の鼓動を直接受容している。音感には少なくとも敏感に反応する。

これは生後まもない赤子に母親の胎内にいた時の鼓動を聴かせると、反応するのも胎内での音感に、少なからず感ずる働きが、強いと言ってよい。

音感に対する反応は、まさに先験的な領域をもつことが実証される。従って美的感受性は、ことに音に対しては敏感な働きをもち、先験たり得ると言ってよい。これは医学的にも実証されている。

人類はかくて音感に対して、その高低、強弱（音色までは聴きわけられないにしても）は、先験的な感覚として持ち反応する。

従ってこの期の胎児教育は、生活の発達過程に大きく左右する事が、確証される。

ある医師によると、生後、幼児教育は三才までに或る程度の成長基盤を根底にもち、後の進歩発展に寄与することが、大であることは医学的に証明され、三才以後の幼児教育、環境に大きく影響する。

これは脳細胞の発達と共に大きな変化を及す感覚、知覚は訓練によって迅速に進歩する。さればこそ後天的経験によって、これからの人間成長のエネルギーとなって躍動する。即ち環境形成によって大きく発達過程をたどる。

幼児教育の占める割合は大きい。美は聴覚から色彩感覚へ言語、音声へと迅速に伸張して行く過程は大きい。

私達の美的感受性は、カントの論攷する先験的なアプリオリ（先天的）は、空間、時間の受容に負う所が大きいと言ってよい。

7．美的共感は人間性をうるおすか。

今美的な共感について、他人と同じような感情（考え）を得ることは、心情的な共感を覚ることで、これは個々によって美意識、共感も異なる。

たゞ同じ美意識の共通因子を共に持つことは、より深い知の働きの過程において、共通な心情を共有することになる。

これは私達が個々に感ずる美的なものに対して、共通項、即ち大きな主題のもとに統括され、それ自体、独立した内容を持った一纏（ひとまと）まりの心情として、持ち得る。

美学形成過程に於いて重要な存在と言えよう。

心情意識の分析は、美の統合であり、美本来の素因で、心の働きをもつ。

たゞ美意識の変化、逆意識、即ち意識のずれによっても、個々の美は各々異なって来る。そのずれこそ個性美をかもし出す。いわゆる根本心情で、千変万化する美意識をもつ。

私達が美を共有することは、心情の細かな心的な作用の一つであって、掛け替えのない存在と言っても過言ではない。

かゝる心的な作用も、かくの如く類を呼び、個々の心情集約にも効果をはたし得る。たしかに美的な共感はこのような意味から、人間性の昂揚に役立てる所が大きい。

私達が美を感ずる、同じ美でも、美意識の上では常に異なる存在である。それを共有し、共通の知識を得る所に、共感の心理的な働きもなされる。

美、非美の論理を止揚する弁証法的な思惟も、心情昂揚のステップと言ってよい。

私達は美的な感情を潤すものを心情として持つ。美しいものを愛し、例へば野に咲ける白百合の美をギリシアの詩人は、「ソロモンの栄華は野に咲ける白百合にしかず。」と、その美を汲めども尽きない美として賞揚している。

美、非美である物も、千差万別であるが、その中で共有出来る美は、私達にとって前記に昂揚した白百合の美である。人間性にも引用される程高いものである。

その美を共感出来るのは、人間性を潤すものとして高く評価してよいと思う。美は根源的には人間の愛の感情である。

古来から美を愛でるものとして私達は、常に意識の内に持っていた。これが生活の智恵となった時、より美しいものをこよなく愛する。

自然についても言えることで、限られた人間性の感性の中にあって、その広がりは常に意識の中によみがえってくる。

美意識を常に磨く過程にも感覚的な感情の発露として顕現される。かゝる美的共有は私達が生きる限り持つものであって、人類共有の財産でもある。

美的共感を共有出来る人は、ある面からすれば、大多数の人に共感し得るかも知れない。

逆に美意識の相違によって共感出来得ないものを持つかも知れない。それ程に感性の受容性は多岐にまたがる。

それが先験性と後天的な知識、判断にいたっては、まったく異なった知の働きを示す。

人間は先験的に異存しながらも、なお後天的な感情を経験的に知識して、共感を共有し得る。

たしかにカントの先験的な知の働きも捨て難く、それによって人智の及ばない領域に思いを馳せる。

として捉り上げられる。

単に美である存在としての印象も、感覚をともなって、非心理的な方向、即ち生理的で、客観的な非個性的な方向性をたどる。

フランスの印象主義的な方向性も、たしかに絵画、彫刻の面で一つの示唆を受ける。これは学的な形式としてデカルト以来、フランスの唯物論的な思惟が見られる。

私達は常に外界の刺激にさらされ時として、反応要素も異なるが、美的な存在に直面することは確かである。かゝる心的な要因は気持ちの刺激によって絶えず変化する。感情の生起によって美意識発見の契機となって、美の知識作用が、美学を惹起することにもなる。

私達が意識すると否とにかゝわらず、外界の刺激は常に変遷する。それを統括する体系的なものが学的な形成である。

生活環境、社会、時代の変化もまた、その流れの中にあって変遷するのは当然と言える。このように千変万化してやまない環境世界も一つの美学と言ってよい。

限りない変化過程にあって歴史を作って行く、これは思潮を問わず小さな刺激に反応する気持であっても、蓄積すれば偉大な体系を育みえる。

かくて時の流れ、永遠の歩みの中で浮沈隆盛を繰り返して行く。これもまた美学生成であり、陰翳の美学を回顧するのに、十分な資料として顕現する。

たしかに生後の急速に伸張しようとする諸感覚器を、誘発する鍵といえるかも知れない。

成長と共に共感を共有しえる経験的な知の働きは、人間性に潤いを持たせ、共感の度合をより深く適確に捉え、潤すものと言える。

8．感情は美学構成の因子か。

およそ感情は外界の刺激に応じて、絶えず変化する。快、不快、喜び、怒り、悲しみなどの気持で、感性、即ち感受性とも響きあう。

ある刺激になんらかの印象を感じ取る。その人の直観的な心の働きとして、心理的な欲求とか、情緒等とも呼応する。

感覚となると印象面で心理的というよりも、生理的な性格を帯びる。ともかく感性面で感受性、受容性と共に直観的な能力を持ち、美的な作用形成にも要素を作りえる。

美的な作用は私達の心の働きが、美しいと感ずる気持の現れで、場合によっては感情移入（対象や他人のうちに自己の感情を投射し、それを対象固有のものとみなす構え）の形をとる場合すら心理作用として感じられる。

いずれも美的な作用形式には、私達の心の働きが作用し、美的な存在を可能にし、学的な構成もまとまった形

一つの感情の生起はそれが部分的であれ、限られた領域で大きな存在として再生され、場合によっては歴史を動かす程のものとなり得る。

感情は人がいる限り外界に対して思いを馳せ刺激に対応する所に、新しい心的な情況をかもし出す。

新しい気持生成の連鎖こそ、美意識の継承となって次の新感情を育くみ、美の連鎖が人を動かす。

勿論ヴント的な心理学の分析から感情を一つの気持として、美学形成過程を科学的に実証しようとする方向を示した。

一八七九、ヴントは意識の基本的な要素は感覚と感情にあると、外界の刺激に応じて変化する気持を分析的、科学的に実証する手法でとらえた。

かくてドイツの心理学者ヴントの手法を、そのまゝかりるならば、現に十九世紀末には感情は美学構成の因子であるとの、コンセプトも可能視された。

そして実験心理学的な分析手法も手伝って、新しい諸発見が定説を生む要因となったことは論をまたない。

なお心理学的にも感情と情緒は印象を感じ捉る。その人の直観的な心の働きで、特有な情趣を生み出す。繊細な気持（感情）の表現であって心の細かい分析過程に現れる現象と見てよい。

従って前述の美学構成の要因も、人の心の現われで微妙な差違をもつ。捉え方としては同列な要素としてコンセプトしてよい。

いずれも人の心因性のもつ繊細な感情の現れであって、美学構成の要素であると判断してさしつかえなかろう。

人は常に外界の刺激を受けてときめきを感ずる。その瞬間にこそ美意識を感じ、感受性即ち感性を通して、知の働きの能力を持つことになる。

勿論、悟性的な知の働きとは、意志（自発性）、知性として区別される。美意識発見の要因は、前述する心の働きによって微妙に変化する過程に、美学形成の素因をコンセプトしてよい。

つゞく

口紅（その六）

池莉　原作
山本勉訳

〈登場人物〉
趙家の人々
・趙耀根（小説の主人公、江暁歌と結婚）
・趙耀虎（趙耀根の弟）
・趙耀珍（趙耀根の妹）
・趙耀根の母親
江家の人々
・江暁歌（小説の主人公、趙耀根と結婚）
・江暁鴎（江暁歌の弟）
・江暁暢（江暁歌の妹）
・沈鳳宜（江暁歌の母親）
・江暁歌の父親
・田曼（江暁歌の実母）
趙耀根と江暁歌の娘
・嘉児
趙耀根と江暁歌の友人
・寧岸
趙耀根の会社の同僚
・張喜
趙耀根の会社の上司
・李主任
・張書紀
江暁歌の会社の同僚
・羅桂香

第九章　二人の妹

（一）

早朝の浜江公園、江暁歌はここで英語を勉強していた。江暁歌は子供を生んだら、社会人大学を受験するつもりだった。彼女は社会人大学の入学試験のための勉強をしていたのだ。

寧岸は勿論、江暁歌が毎日明け方来て、英語を勉強していることを知っていた。彼女は、家で勉強すると家族に迷惑がかかると思って浜江公園に来ていた。趙家の人達は朝が遅い。

寧岸の職場は、浜江公園の近くだったので、江暁歌に用があるときは便利だ。

「暁歌、僕を助けてくれよ」

「あなを助けるって何のこと。そんなに深刻なことがあるの？」

「勿論、僕のプライベートなことなんだけど。実は、君に二人を説得してもらいたいんだ」

「私に、あなたに代わって二人を説得させようって言うの。あなたのように弁の立つ人が能力を惜しんでどうするの」

「僕が雄弁だって？僕は彼女たちの前で、筋道を立てて話をするなんて出来ないよ」

江暁歌は、

「江暁暢と趙耀珍だからでしょう」

と言って笑った。

江暁歌に看破され、寧岸は思わず感嘆してため息をついた。江暁歌は何でもお見通しだった。江暁歌は既に人の妻となり、母親でもある。江暁歌のことをこれ以上考えても仕方がない。彼は自分の感情を抑えて洗いざらいぶちまけるしかなかった。

「僕は思慮に欠けていたよ。暁暢は偉い剣幕で、僕に趙耀珍との関係をはっきりするように迫ったんだ。僕は暫く冷静さを失い、彼女に腕を捕まれたんだ。でも、二三度彼女と会ったけど、これ以上深入りしても無駄なことがわかったんだ」

深入りしたくないのなら、できるだけ早く別れた方がよかった。しかし、付き合ったり別れたりというような曖昧なことは許されなかった。

寧岸が、この恋愛ゲームから手を引く気配を感じると、江暁暢はヒステリックになり、首を吊るか、さもなければ川に身を投げる勢いだった。それに、押しかけ女房のように絶えず寧岸の学校に出没し、みんなの前で求愛の情をあらわした。

寧岸はついに耐えきれなくなったが、趙耀根のように「消え失せろ」なんて言うことも出来ず、女の子を傷つける勇気もなく、はっきり断るすべもなく、お茶を濁すより他なかった。その結果、情況は次第にまずくなって行った。

江暁歌は、

「暁暢はあなたを愛しているのよ」

と言った。寧岸は、

「でも、僕は彼女のやり方に耐えられないんだ」

と答えた。

「それに趙耀珍がいる。彼女は最近しきりと僕にラブ

レターをよこすんだ。僕は昨日、彼女から最後通牒をもらったよ。もし今週中に返事をしなかったら、仏門に入って出家するしかないと言っていたんだ。僕はどうしたらいいと思う。二人とも君の妹だ。僕の代わりに彼女達を訪ねてなだめてくれよ」

江暁歌は、

「あなた、本当に女の子にもてるわね」

と言った。

「冗談じゃないよ。苦しくて仕方ないんだ。彼女達は親友の妹だし、上手く付き合っていかなきゃならないんだ」

「あなたは、彼女達を一人も好きになれないの？」

「僕は、彼女達に相応しい男じゃないんだ」

「嘘言わないでよ。暁暢とうまくいってほしいわ。あなた達、似合いのカップルよ」

「君に本当のことを言おう。暁暢の器量は申し分ないよ。でも、横柄でペチャクチャ喋るし、どんなことにも口を突っ込みたがるんだ。彼女は、結構自分の意見を通そうとするし、一日中僕の耳元でがやがや言うし、僕の目の前で教師面して知識をひけらかすんだ。これでうまくいくって言うのかい？考えてみろよ」

江暁歌は頷いて理解を示してくれた。

「それなら、私が暁暢と話をするわ。でも、耀珍と話をするのは忍びないわ。だって、あなたを尊敬しているんですもの」

「でも、僕は耀珍に対して、恋愛感情なんてないんだ。なぜ彼女が僕に、こんな思いを寄せているのかわからないよ」

「それはそうよ。あなたが彼女のことをずっと思いやっているからよ」

「男の人が女の人を思いやるのは、誰もが持っている情って言うもんだよ」

「でも、今の社会で、どれだけの男の人が人の情けをわかり、実際に情けをかけているかしらね。こんな風だから、耀珍があなたに対して感情を抱くのは当然だわ。それに、耀珍はきっと将来素晴らしい奥さんになるわよ」

「僕も、そのことは疑わないよ。耀珍は善良でやさしい女の子だし、余分なことは言わないし従順この上ないよ。でも、結婚は結局愛情の上に成り立っているんだ。彼女と僕の間にはこの感情がないんだ」

「わかったわ。及ばずながら、私が彼女達と話をしてみるわ。でも、あなたも自分のことしっかり考えてね。もう若くないのよ。高望みなんかしない方がいいわ」

「僕に忠告なんかするのはやめてくれないか。君は、僕がどんな人を奥さんにしたいのかわかっているじゃないか。でも、・・・」

江暁歌は、慌てて寧岸の視線を避けて、手に持っていた『許国璋の英語』を彼の懐に差し込んだ。

「ねえ、練習するのを見てくれないかしら」

（二）

江暁歌と寧岸が浜江公園で話をしている様子を、丁度自転車に乗って通りかかった買物帰りの趙耀根に見られてしまった。趙耀根は、平素から一人前の男を自負していたので、彼らによからぬことを抱くはずもなかった。それに、朝っぱらから、白昼堂々と話をしている。しかし、彼の心には、一筋の暗い影が走った。その影を払い落とそうとしても、どうしても拭えなかった。

趙耀根が、買って来た朝食をどすんと、テーブルの上に落としたので、ゆりかごの中でぐっすり眠っていた嘉児が、驚いて目を覚まし泣き出した。

趙耀根は、

「お母さん、嘉児をあやしてくれないか」

と声を荒げて言った。母親は、

「嘉児、お前のお母さんは大したもんだよ。明け方に公園に行って勉強しているんだからね。大橋ブランドのシャツを作っている人が英語なんか勉強して、いったい何になるのかね。彼女に中国語で話しかけてもろくに返事もしないんだよ」

と嘉児をあやしながら言った。

「皮肉はやめてくれよ」

「お前は、嘉児が泣いているのが聞こえないのかい。お母さんに構ってほしいのよ。暁歌は、英語を勉強したいと思えば勉強するし、大学を受験したいと思えば受験するんだ。このことはお前に相談しないだろう？彼女は鼻にかけているんだよ。お前が監獄に入っているときは、暁歌は確かに苦労したと思うよ。彼女の家族も精一杯尽くしてくれたよ。それにお前の職場の上司を説き伏せてくれたんだ。要するに、私達家族に手柄を立てたんだ。だから、今じゃ彼女の言うことを聞かなきゃならないんだ。でもね耀根、それはよくないことだよ。私達趙家は、これまで男が一家の主なんだ。お前は、彼女に好き放題にさせちゃいけないよ」

母親の話は、趙耀根の痛いところをついたので、彼は怒って煙草に火をつけた。

江暁歌が英語の本を抱えて帰ってきた。趙耀根はじっと彼女を見つめ、悪意を秘めて尋ねた。

「英語の勉強はどうだった？」

「とっても楽しかったわ。昔、私達は中学校で英語を勉強したわ。今、英語の力を取り戻すのは意外と簡単よ」

「どうやって勉強するんだ。ひとりで長江に向かって声を出して読むのかい」

彼は、特別、「ひとり」の三文字を強調したが、江暁歌は特に身に覚えのないと言う顔をしていた。

「ラジオ講座に就いて声を出して読むのよ」

「勉強したら、外国に行って仕事をするのかい？それとも海外の服をデザインするつもりかい？」
江暁歌はこれでやっと合点がいった。
「あなた、私に皮肉を言っているのね」
「君はやっとわかったのか。英語を放送大学で勉強して何になるって言うんだ。卒業証書が札になるって言うのか、それとも、飯のかわりに食べられるとでも考えているのか」
「あなたはどうして目の前のものしか見ないの？私達は若いうちに多くのことを学んでおかないと、いざと言うときに間に合わないわ。それに人としての修練も、文化知識によって高めるべきだわ」
「立派な言い訳言うけど、どうせ人に言えない目的があるんだろう」
「耀根、あなた、どうかしているわ」
「この俺がどうかしているって言うのかい？今朝、嘉児が泣きわめいて、おっぱいをほしがっていたんだ。お袋と耀珍が随分と苦労して、やっと嘉児をあやして、ミルクを飲ませたら、吐いて服が汚れ、まだ着替えも済んでいないんだ。僕は日曜日にぐっすり寝たいんだけど眠れやしない。君が勉強したいのはわかるけど、それよりどうやって生活していくかを勉強してほしいよ。高望みすることは誤りだし、不誠実は許されるべきことじゃないよ」
趙耀根の話は、江暁歌の警戒心を高ぶらせた。彼女は、趙耀根が言った『不誠実』の意味がわかっていた。しかし今、彼女は彼と言い争う気持ちもなく、それに争うすべもなかった。彼女は、心にやましいことがないことを貫けばいいと思った。江暁歌は、姑の手から娘を抱きかかえて言った。
「私が、嘉児をお風呂に入れます」
趙耀根は、また煙草に火をつけて、暗い眼差しで妻を見ていた。
趙耀珍は不憫に思って、わざと大声で言った。
「姉さん、手伝うわ」
彼女はやかんを提げて、台所に行ってお湯を汲んだ。母親は、丁度台所で忙しく立ち働いていて、趙耀珍のやっていることが気に入らなくて、容赦なく言った。
「子供が毎日お風呂に入る必要があるのかい」
江暁歌は、
「小さな子供は、毎日お風呂に入ると身体にいいし、病気にもならないわ」
と言った。
「馬鹿をいい、お前達は何時お風呂に入ったって言うんだね。大きくなって、病気がちとでも言うのかね」
「昔と違います。今は科学を重視して子供を育てています」
「人類の歴史が始まって以来、子供はこうして育ててきたんだ。ちゃんと育てればそれが科学だよ」
「姉さんと悶着を起こすのはやめて頂戴。何がおもしろいって言うの」
趙耀珍は水を汲んで、そっぽを向いてさっさと行ってしまい、母親をほったらかした。
趙耀根は、煙草を吸い終わると、気持ちも少し冷静になった。彼はいつものように平静になって、江暁歌のそばに来て言った。
「僕が手伝うよ」
そして妹にも声をかけた。
「お前は忙しいんだろう。自分のことをやれよ」
江暁歌も、これ以上趙耀根と言い争うことをやめて、優しい笑顔を見せた。江暁歌は、趙耀根が、監獄で苦しい目に遭ったので、精一杯のことをして、彼の心の傷を癒してあげなければいけないと思った。
趙耀根は、
「暁歌、君は嘉児をしっかり育ててほしい、それに、年寄りの面倒も見てくれないか。僕は今の職場で行き詰まっている。一生懸命頑張るから僕を信じてほしい」
と江暁歌に言った。
「勿論よ。私はあなたを信じているわ。でも、・・」
江暁歌は少し躊躇したが、本音がぽろっと出てしまった。
「私は全てあなたに頼ることは出来ないわ。私だって努力しなければならないわ。ひとりの人間が自分の目標を持つことは、意味があることだし、価値のある生き方のような気がするわ」
江暁歌の話は、趙耀根の平静になった心をまた揺れ動かした。しかし、彼は出来るだけ辛抱強く言った。
「君の言っていることは勿論正論だよ。でも、人の価値観はそれぞれさ。僕は君を愛している。君も僕を愛している。僕達は二人で可愛い娘を育てているし、将来、ひょっとしたら可愛い息子が授かるかもしれない。僕達は年寄りに幸せに暮らしてほしいし、衣食にも困らないようにさせたい。僕は外で一生懸命働き、君は家事をしっかり切り盛りしてほしいんだ。まさか、君は家事をやれないっていうんじゃないよね」
「長々と話してくれたけど、結局あなたは、私を家にいさせたいんだわ。でも私にはできないわ」
激しい怒りが、趙耀根の心の中に、まためらめらと燃え上がってきた。
「暁歌、君は昔はこんなじゃなかった」
「私はずっとこうしてきたわ。ただ、あなたがわかっていないだけよ。私はこの苦難に満ちた日々を経験して、人間は平凡に甘んじてはいけないことをとっても実感したわ。そうでないとみんな寄ってたかってあなたをいじめてしまうわ、なのにあなたは少しも歯向かう力がないじゃないの。弱肉強食、これは世界人類の普遍的な法則

よ。私達はこの法則に適応する術を身につけなければならないわ」

「君にとってそんなに重大な問題かい」

「誰にとっても重大なことよ。昔は、私はあなたに守られて暮らすつもりだったわ。あなたがいれば、風雨にさらされることなんてないと思っていたわ。でも、現実は厳しかったわ。そのことを私に教え諭してくれたの。良い男に嫁いで万事うまくいくと思っちゃいけないんだわって」

「誰が君をいじめているんだ。いじめようとたくらんでいるのか、教えてくれ」

「具体的なものなんてあるはずないじゃない。今までの暮らしの中で、生活そのものが私達をいじめてきたのよ」

趙耀根は、思わず彼女を蔑んで笑った。

「暫く君に会わないうちに、全く変わってしまったとしか言いようがないね」

彼は言い終わると、妻と娘を置き去りにして、振り返らず出て行った。

この時、江暁歌は、趙耀根という男を全く理解していなかったことに気づいた。結婚前に夢中になったのは彼の外見にすぎず、彼の心の中までは知り得なかった。結婚は、彼女にこの男と喜びや憂いを分かち合い、離れられない間柄にしたと同時に、彼女に彼の心の奥底にあるものをそっと覗かせた。彼らが、共に彼らの両親との闘争に明け暮れる中、彼女は、自分が彼の唯一の存在であると思っていた。江暁歌は、趙耀根が彼女と二人の世界を築き、子供が生まれれば、自分たち三人が固い絆で結ばれると思っていた。彼女は、彼が趙家や母親の立場に終始立つとは思ってもいなかった。さらに彼は、絶対的な男尊女卑で、彼にとっては、彼女はただの嫁に過ぎず、彼に代わって子供を産み育て、家事を切り盛りする女だった。彼女が、自分の理想ややりたいことをすべきではなく、それを家庭生活に持ち込むことはもってのほかだった。彼にとっては、彼女が仕事に行くことも目障りで、家にいて夫を助け、子供を教育するだけの彼に付き従う嫁でありさえすればよかった。

しかし、江暁歌は子供の頃から大志を抱いており、人生、生きていて大成してこそ、生きていたかいがあると思っていた。これは、趙耀根が彼女に望んでいることと全く違っていた。

彼女は、二人の間の矛盾は、取り繕うことが出来ない問題にまで発展したと悟った。

江暁歌は、彼女の前途が苦難に満ち結婚生活も荊を踏むようであると予感した。彼女は覚悟していた。彼女は、夫や子供といても孤独感を感じ怖れた。彼女の将来は何に直面するのかわからなかった。

(三)

江暁歌は、寧岸の頼みに応じたために、妹と趙耀珍の二人に振り回されることになった。実際こんな難しい問題に首を突っ込むべきではなかった。しかも、軽々しく安請け合いすべきではなかったのだ。こんなややこしい問題を二つも抱え込むなんて、彼女は、暫くこのことにかかりっきりになった。

趙耀珍の頑な態度は想像を絶した。

趙耀珍は寧岸から妹みたいだと思われていたので、寧岸を好きになることは、恥ずべき事だと江暁歌に言われた。趙耀珍は江暁歌がとても良い人で、ずっと江暁歌を助けようと奔走してきたが、これにより、今まで江暁歌にしてきたことは徒労だったと思った。

江暁歌が、趙耀珍に、寧岸につきまとってはいけないと言っていたが、これは、江暁歌が江暁暢を寧岸に嫁がせるための裏工作だと、趙耀珍は言い切った。実際、江暁暢は江暁歌の実の妹だった。

この趙耀珍よりもっとやっかいだったのは江暁暢で、言いたい放題だった。江暁暢は寧岸と数回デートをしただけで、寧岸が彼女を深く愛していると勘違いした。江暁暢は、江暁歌が、自分と寧岸との間に入って邪魔をしていると思った。

江暁暢は、江暁歌が、夫と子供がいる分際で、何の理由があって寧岸を欲深く奪い取ろうとしているのかと江暁歌を罵り、趙耀珍を寧岸に押しつけて、姑や夫の歓心を得ようとしていると言い張った。そして、江暁歌の不道徳と厚かましさを罵り、姉の顔に爪を立てて心の恨みを晴らしてやりたいと思った。

江暁歌は、続けざまに失敗を重ね自信を失った。それに加えて、趙耀根の仕事は不振で、顔つきは日に日に陰険で残酷になり、横暴になっていった。意見の食い違いが生じ、言い争いも絶えず、彼らの未来予想図に暗雲が垂れ込めた。

(四)

江暁歌と姑の矛盾は、とうとう大爆発を起こした。江暁歌は、自分のことは、「忍」の一字をもって我慢が出来たが、娘のことについてはそうはできなかった。

ある日の食卓での出来事である。江暁歌は、嘉児の食事には野菜をすり潰して入れるべきであると主張した。

母親は、料理が盛ったどんぶりの中から、ひと箸、菜っ葉をつまんで口の中に入れて、かみ砕いて、

「何が野菜のすり潰しなんだね」

と言った。

「耀根達は、小さい頃から、私に口の中に入れた野菜を食べていたんだよ」

母親は、クチャクチャと咀嚼した白菜をスプーンの中にはき出して、嘉児の口まで持って行って食べさせようとした。

江暁歌は、姑の手を押しのけて言った。

「お母さん、こんなことしちゃだめ、不衛生だわ」

母親は突如顔色を変えて、ガチャンとスプーンを放り投げた。

「よこしまなことして、いったいなんだい」

趙耀根は、

「暁歌、もう少し気楽に考えられないのかい」

と不満げに言った。江暁歌は、

「いくら何でも、生まれて数ヶ月の子供に、こんな風にして食べさせるなんて出来ないわ」

と言った。

母親は涙と鼻水が入り混じった顔を江暁歌に向けて、

「私はいったい何なんだい。こうして人に馬鹿にされるなんて。自分の孫におかずを食べさせることさえも出来ないのかい。私は生きている価値なんてないよ」

と言った。

趙耀根は、江暁歌の手の中から娘を抱き取って、妻に目配せしながら、娘を母親の懐に押し込んだ。

「お母さん、暁歌のような考えじゃダメだ。嘉児はお母さんの孫娘ですよ。お母さんが食べさせたいように食べされれば良いんです」

江暁歌は憤慨して立ち上がって、

「耀根、ごめんなさい。でも、私はこんな不衛生な食べさせ方許せないんです」

と言った。趙耀根は、

「暁歌、そんなに大きな口を叩くことないだろう。こうしてお母さんに食べさせてもらうこと自体、別に大したことじゃないさ」

と顔色を変えて言った。江暁歌は少しも譲らなかった。

「何故、悪い衛生習慣をあくまでも守り通さなければならないのですか？これが他のことと何の関係があるの。嘉児の健康のために家族は相談し話し合うべきよ。耀根、私はどんなことでもあなたの言うことを聞いてきたわ。でも、嘉児のことでは妥協できないわ」

江暁歌は娘を抱きかかえて、自分の部屋に閉じこもってしまった。

母親は、

「耀根、これが生きるの死ぬのって、慌てふためいて玄関をくぐってきた嫁かね」

と敵意を抱いて言った。

趙耀根は怒って、掌で目の前のご飯茶碗をたたき割った。

母親はベットに横たわり、

「この役立たず女」

と大声で空泣きして、繰り返し繰り返し叫んだ。

趙耀根は、

「お母さん、落ち着いてください。僕がお母さんに代わって、江暁歌を懲らしめてやります」

と母親のこめかみをもみながら、なだめて言った。

「耀根、お前は、暁歌が年寄りの面倒を見ると言ったことがあるよね」

趙耀根は、

「お母さん、安心してください。僕は暁歌に、年寄りの面倒をよく見る親孝行の妻になるようにしつけておきますから」

と言った。

「この女に教えても無駄だよ。私は、五十数年生きてきたけど、こんな女見たことがないよ。この女はうわべは従順だが、実際は難しい女で、とても横暴で我慢がならないよ」

妻と犬猿の仲の母親を見て、趙耀根は、暁歌がほんとうにわからずやで、家のことを考えず、彼の目の前の困難な境遇を思いやらない女だと思った。

趙耀根の心の中に、江暁歌に対して次第に不満と憎しみが生まれて来た。

（五）

校庭を見渡すと、緑色が幾重にも重なり合う中に赤い校舎が見え、互いにコントラストをなしている。趙耀根の心の中は知らず知らずため息が漏れた。ここはさすがに別天地だ。砂埃がもうもうと立ちこめ、騒々しく落ち着かない埠頭と全く別世界だ。彼は、寧岸がこのように静かな生活をしていることがとても羨ましく、憧れの気持を込めて言った。

「君の処に来て、暫くのんびりさせてもらって、僕はとても満足しているよ。君が毎日、この公園のようなところで生活して、どんな気持でいるのか、ほんとうにわからないよ」

「感覚なんてないさ。便所に暫くしゃがんでいると、その臭さを感じなくなるようなものさ」

「腹が減って死にそうな人の前で、茶碗の飯がまずくて、豚や犬にだけえさをやるのは嘘偽りだ」

寧岸は、笑いながら聞いていた。

「耀根、言えよ。何があったんだ」

趙耀根には多くの友人がいる。しかし、ほんとうに、彼と腹蔵なく何でも話し合える友人は、実は寧岸一人だけだった。

趙耀根がわざわざ学校に来たのは、寧岸と話をして気晴らしがしたかったからだ。

「箸で取り分けることができないような些細な事だが、イライラしているんだ。嘉児のことさ。ご飯を食べさせたり、風呂に入れたり、全てのこまごまとした生活のた

めに、暁歌と母親が気まずくなっているんだ。お互いに嫌っていてやりきれないんだ」

「僕は結婚していないし、身を以て体験していないけれど、僕も、姑と嫁の関係が最も頭を悩ませる問題であることを知っているよ」

「君は、暁歌のことをどんな人だと思っている？彼女は個性が強すぎるんじゃないか」

「彼女は個性的だ。でも、別に個性が強いとは言えないと思うな」

「結婚して、僕はやっとわかったよ。女房はあまり個性が強すぎない方が良いって言うことがね」

「耀根、僕は君に忠告しなきゃいけないよ。今、君の立場はなかなか難しいよ。君は用心深くことを進めるべきだよ。僕は、君が頼りがいのある親孝行息子であることをわかっているけれど、君も公平であるべきだよ。君は、暁歌の教養や生活習慣を理解し、彼女の立場を考えなくちゃいけない。君のために、恥を忍んで重荷を背負い、随分と努めているんだ」

「問題は、僕が訳がわからなくなっていることだ。もともと、僕は彼女のことをよく理解していると思っていたが、実はあんまり彼女のことをわかっていないことに気がついたんだ。寧岸、本当のことを言ってくれ。江暁歌のような女は、女房にふさわしいんだろうか」

「それは、君自身が考えるべきことだよ」

「でも、君に判断してほしいんだ」

「僕は、彼女が女房としてふさわしいかどうかわからないけど、素晴らしい女性だと思うよ」

耀根は寧岸を見ていて、寧岸の公明正大な様子は、かえって彼に自分の了見が狭いことを感じさせた。彼は二の句が継げず、空に向かってため息をついた。

耀根は、

「寧岸、以前君に話をしたことがある深圳のことを憶えているかい」

と言った。

「勿論、憶えているさ」

「僕は深圳に行こうと思っているんだ。僕は今、家の外も中もうまくいっていないんだ。だから世間を見てみたいんだ」

「君の公職、勤続年数、それに労働者保護、福利などなど、一切合切捨てるつもりか」

「要らないさ。ほしくないんだ。悩みを吹き飛ばして前進あるのみさ」

「暁歌や嘉児は、いったいどうするんだ」

「彼女達は、勿論お母さんと同居させるさ」

「君は、彼女達に君のお母さんと同居させるのかい」

「そうさ、彼女達に好きなようにさせるしかない。見えなければ嫌な思いもしないよ。みんな家族さ。仲が悪くても、暮らさなくてはならないんだ。僕が金持ちになったら、家を買って別々に暮らせば良いんだ」

寧岸は心の中では納得できなかったが、顔には出さなかった。

「こんな大胆な行動、君は真剣に考えるべきだよ。暁歌には相談したのかい」

「女と何が相談できるんだ。女って言う奴は、夫がいつも側にいて守ってくれることを望んでいるんだ」

「君達は、他の夫婦と違うじゃないか。君達は苦労を共にした夫婦じゃないか。こんな大きな事を、暁歌と相談しないって法はないだろう」

趙耀根は、ようやく胸に手を当てて自問してみた。

（僕達は、他の夫婦と違うんだろうか）

第十章　深圳

（一）

江暁鴎（江暁歌の弟）は趙耀根を連れて、岸辺に停泊している大小様々の船舶の間を通り抜け、一艘の小さなモーターボートの前まで来た。彼はモーターボートに飛び乗ると、

「耀根兄貴、乗ろうぜ」

と声を掛けた。

趙耀根もモーターボートに飛び移った。

「これはいったいどういうことだい」

江暁鴎はモーターボートのロープを解いた。

「耀根兄貴の憂さ晴らしに僕が借りたのさ」

「お前って良い奴だな」

趙耀根は感動した。

話をしている間に、江暁鴎はモーターボートのエンジンをかけていた。モーターボートはゆっくり、大小様々の船舶が入り交じってできた通り道をすり抜けて、広々とした長江に出て行った。長江に出ると、江暁鴎は、まるで弦から放たれた矢のように急にスピードを上げた。

趙耀根と江暁鴎は、身体をシャンとして、モーターボートの上に立った。激しく強い風が彼らの髪をたくし上げ、服が風の中でヒューヒューと音を立てた。岸辺の景色は移り変わり、暫くすると、彼らは長江大橋をくぐり抜け、水も空も広々として果てしないところに向かって走って行った。

趙耀根の鬱積していた気持は知らぬうちに晴れ、彼は一艘の客船に向かって手を高く上げて大声で叫んだ。

「おーい」

乗客達も彼に手を振って応えた。

江暁鴎は、船の舵を趙耀根の手に渡した。

「耀根兄貴、さあ握って」

趙耀根はこれまでモーターボートを操縦したことはな

かったけれども、少しもためらわずに船の舵を握ると、船体が秧歌踊り（注17）を始めたが、直ぐに船体は元どおりに落ち着いた。趙耀根は目を前方にやった。モーターボートは追い風に乗って、波を蹴散らして驀進し、何とも言えない愉快な気持になった。波しぶきは彼の顔に飛び散り、心にすがすがしさをもたらした。

（注17中国北方の農村で広く行われる、銅鑼や太鼓に合わせて歌いながら踊る民間舞踊で、節句や祝い事のときに行う。）

趙耀根は手の中に握りしめたものが運命の舵であり、彼自身の手が運命を握っていた。自由自在思いのままに行きたいところに行くことができる、何ものにもとらわれない自分の存在を突然感じた。彼は自分の人生の舵を取る感覚をもう二度と忘れまいと思った。そして、もう他人に自分の運命の舵を操作させまいと誓った。

彼は、

「暁鴎、俺はもう決めたぞ。まだ深圳に行く条件は整っていないし、リスクも大きいけど、俺は深圳に行くつもりだ」

と大声で叫んだ。

「兄貴、最高だぜ。この偉大なる決定に感激さ。僕も一緒に連れて行ってくれよ」

「いいとも、お前がいれば百人力さ。でも、暁鴎、もし俺が失敗したらどうするんだ」

「どんなことがあってもへいちゃらさ。生きている間に、やり甲斐のあることを一回できればそれで十分さ」

「お前って良い奴だな。気迫に溢れているぜ」

江暁鴎の勇気が、趙耀根に最後の決心をさせた。

（二）

「ダメよ」

沈鳳宜（江暁歌の母）はテーブルを叩いて言った。

「あなたは、この地位が、私達が多くの人に頼んでやっと手に入れたのだということがわからないの。そんなに簡単に職を捨てられないわ。そんなことできっこないでしょう。人の一生で最も大切なことは、良い仕事を探す事よ。あなたはいま水夫よ。将来、三等航海士、二等航海士と、ひたすら上り詰めていけば、最後には、あなたのお父さんのようにきっと船長になれるわ。そうなれば立派よ。私達は船舶運輸事業でご飯が食べられるのよ。それに、私達はあなたの手伝いができるわ」

江暁鴎は、

「僕はお母さん達に助けてもらう必要はないよ。僕は自分の力で生きていくよ。僕はまだ若いからまっしぐらに進んでいくんだ」

と言った。

「自分の才能に頼ってご飯を食べていくのは間違いじゃないわ。でも、必ずしも深圳に行かなければならないとは限らないわ。あなたのような若者は、深圳で頼るものがないわ。それなのに、何に頼って生活していくって言うの」

「僕は深圳で暮らすために行くんじゃないんだ。あくまで金儲けに行くんだ。今、国は経済体制の改革を進めている。僕達の前をとっくに歩いている人がいるよ。もし、僕がここでぐずぐずしていたら、何のチャンスもなくなってしまう」

江暁暢（江暁歌の妹）は、

「尊敬するわ。私もあなた達と一緒に金儲けに行くわ。良いかしら」

と言った。沈鳳宜は、

「馬鹿言うんじゃありません」

と怒った。

「暁鴎が行って、私がなぜ行っちゃいけないの」

沈鳳宜は、

「暁鴎も行ってはいけないし、すべてはお父さんに聞いてからよ」

と答えた。江暁鴎は、

「待てないよ。一刻を争うんだ。お母さんは時間の重要性がわからないんですか？僕はもう待てないんだ。それに、僕はひとりで行かないよ。耀根兄貴は計画も綿密だしね。どっちにしても兄貴について行くよ。もしダメなら直ぐに帰ってくるから」

と焦って言った。沈鳳宜は、

「暁歌もあなた達の計画に賛成しているの」

と訊いた。

「わからないよ。僕は聞き忘れたよ。でも兄貴ら夫婦はいつも気持が一つだから」

「寧岸は？寧岸は行くの？」

「彼は行かないよ」

江暁暢が、

「寧岸が行かなきゃ、私も行かないわ」

と口を挟んで来た。沈鳳宜は、

「やはり寧岸は落ち着いているわね。行き過ぎや過ちもないし、いつも用意周到だわ。日中趙耀根について、喪中の犬のようにびくびくしているあんた達とは違うわ。こんなこと言って悪かったけど、適当な言葉が見つからないのよ」

と言った。

「寧岸は、本当に重用されているわよ。現地の工場に派遣されて幹部になるらしいわ。彼は勿論、今の生活を捨てるわけがないけどね」

「要するに、ふと何かひらめいただけで、結果を考えないでむやみにやると、将来きっと後悔するわよ」

「僕は、絶対後悔しないよ」

江暁暢は、
「その調子！」
と掌を叩いた。
「気迫に溢れているわ」
子供のどんな困難にも屈しない姿を目の当たりにして、沈鳳宜はただただため息をつくだけだった。

（二）

長江沿いの草地に座り陽光を浴びている江暁歌を見て、趙耀根は落ち着きを覚えた。
家の雰囲気は確かにある種の毒素を含んでいた。いつも二人をいらだたせ、口論する雰囲気を醸し出す。しかし、光り輝く美しい太陽の差し込む屋外に一旦出れば、思いがけない良い感情が生まれる。趙耀根は、久しく江暁歌の顔を注意深く見つめたことはなかった。
かつてふくよかだった赤く艶やかな顔は、照りつける日差しの中で、蒼白くやつれたようにみえた。趙耀根の心に愛し哀れむ気持がにわかに生まれ、自分が妻に沢山の借りを作っていると思った。彼が妻ににっこり笑うと、妻も顔中愛想を崩して笑った。しかし、趙耀根が遠く深圳に赴くことは動かし得ない事実だった。今日彼は、江暁歌にこのことを告げなければならなかった。
「暁歌、君に相談したいことがあるんだけど」
「丁度良かったわ。私もあなたに良い知らせをしたいの」
「君が先に言えよ」
「いいわ、私が先に話をするわね。放送大学に合格したのよ。私、ダメだと思っていたわ。でも、合格できただけじゃなくて、試験の点もよかったのよ」
趙耀根の良い気分は一気に失せてしまった。この女は本当に強情で幼いと思った。子供まで生まれたのに、何が大学だ。しかし彼は、
「よかったなあ、おめでとう。どうして試験を受けに行ったことを僕に知らせてくれなかったんだい」
と嬉しさを装って言った。
「だって私が勉強するのよく思っていないんでしょう。だから、あなたに不愉快な思いさせたくなかったからよ。それにちょっと試しに受けてみただけなの。乳飲み子を育てているし、仕事もしなくちゃならないし、復習できなかったから、間違いなく不合格だと思っていたわ」
趙耀根は皮肉たっぷりに言った。
「君は本当にたいしたものだよ」
「私、わりと自信になったと思うわ。私の勉強のやり方はそう悪くなかったみたい。私の職場も私をとっても支持してくれているわ。私が放送大学で勉強することに賛同してくれているわ。毎週三日授業を受けても、きちんとお給料を支払ってくれるわ。彼らは私に感動してくれたわ。羅桂香（会社の同僚）も受験したけどダメだったの。彼女は次回再チャレンジするつもりよ」
「君達の放送大学ボケはロマンチックで、とりとめもないことを空想することなんだ」
江暁歌は、これでやっと趙耀根の不満がわかった。
「そんなこと言うくらいだから、本当は私がやっていること支持してくれないのね。あなたのほんとうの気持は、私に一日中家事をさせたいんでしょう」
「僕はそんな意味で言ったんじゃないよ。でも、家事をやらなきゃいけない人も必要なんだ。僕の母親は、一生家事を切り盛りして一家を支えてきたんだ。母親は偉大だよ」
「そのことについては、私がとやかく言うことではないわ。私が実際にどんな才能があるのか証明するためだけじゃなくて、私が自立して、仕事も一際優れていれば、あなたを助けることもできるわ。それに、自分の努力次第で職場の住宅を分けてもらえることができるのよ」
「住宅は僕が提供しなければならないものだ。暁歌、君はなぜ仕事を分担しなければならないか、まだわかっていないな。僕が君のためにどんな良い知らせを持ってきたのか、君はわかっているのか。僕は休職して給料を停めてもらう手続きをするつもりさ。そして深圳に飛び込んでいくんだ。僕は一生の間に、君に何としても広々とした住宅に住んでもらいたいんだ」
江暁歌は、暫くぽかんとしてしまった。そして、突然涙ぐんで言った。
「わかったわ。耀根、あなた、とうとう元気になったのね。とっても嬉しいわ」
「僕は、地道に三年間頑張って、大金持ちになるんだ」
「素晴らしいわ。あなたを応援するわ」
「有り難う。暁歌、君は子供につきっきりだったり、年寄りの面倒を見たり、勉強したり、疲れてしまうんじゃないのか。僕が出世してから勉強しても遅くないと思うんだけど」
「暫く勉強しなくても良いわ。一緒に深圳にまっしぐらよ」
趙耀根は、意外な展開に驚いた。
「君も、行きたいのか」
「まさか、私は行っちゃいけないの。私達は苦労を共にし、互いに力を合わせて難関を切り抜けるって言ったわよね」
趙耀根は考え込みながらつぶやいた。
「それじゃ、嘉児はどうするんだ」
「嘉児も連れて行くわ。家政婦に嘉児の面倒を見てもらうのよ」
「ダメだ、嘉児は小さすぎる。彼女には落ち着いた生活が必要なんだ。深圳行きは僕が腹を決めて計画したことだ。見知らぬ土地で、住む家も仕事もなく、身よりも

ないんだ。僕は後ろを振り返ることができないんだ。それに、今の政府の政策はいいけど、これから先どうなるかわからないんだ。僕達は全ての金を持ち出して深圳行きに賭けることができないんだ。少しはゆとりがないとね。僕と君のどちらかは、僕たちの最低限度の生活の保障のために、今の職業に留まっていないといけない。君は技術員で工場の中堅だ。毎年模範社員として選ばれて上司の信任を得ているし、公職を失うことができないんだ」

江暁歌は随分と時間を費やした末、やっと、趙耀根が深圳行きをとっくに計画していることがわかった。趙耀根がもう一度お互いに別れて暮らした方が良いと言っていることを信じる勇気がなかった。しかし、夫の発奮のために、夫が監獄の暗い影を払拭して、前に進んでいくために、夫を支持することにした。それに夫と別れたくないという素振りを、みじんも見せなかった。

彼女は、冷静に話した。

「いいわ。あなたの言うとおりにするわ。あなたが思う存分心ゆくまでやって元気になってくれればそれでいいの」

趙耀根は、江暁歌が本当に変わったと思った。江暁歌は、意外にも精神的に強い女になっていた。趙耀根はハンカチを用意して、江暁歌のために涙を拭うつもりだったが、江暁歌は泣かなかった。趙耀根が監獄から出た後、このゴタゴタの生活に直面しようとしているのに、意外にも一言も辛いという言葉を吐かなかった。趙耀根は、そんな彼女に感動した。

まもなく妻子と別れることを考えると、どうしても悲しみがこみ上げてくる。彼は、

「僕たちが結婚してから今日まで、僕はほとんど君に良い暮らしをさせてあげることが出来なかった。僕は今日長江に誓うよ。必ず事業を成功させ、君に中国で最高の暮らしをさせてみせるよ」

と江暁歌に言った。

「耀根、私はあなたを信じているわ。あなたはきっと事業をやり遂げることができるわ」

「最近、家の中は目茶苦茶さ。お母さんも君に辛く当たるし、不当な待遇を受けている。僕達の将来のために、どんなことがあっても永遠に君の好意を無にしないよ」

江暁歌は感動し、夫の黒々とした顔をしっかり見て、彼の胸に身を任せた。

(四)

趙耀根が遂に深圳に出発するときがやってきた。嘉児はぐっすり眠っている。江暁歌は黙々と明かりの下で、趙耀根のために旅支度をしている。

趙耀根はずっと彼の母親や弟妹達と一緒にいた。隣の

部屋からひそひそと話をするのが聞こえてくる。江暁歌は夫の肩にもたれて最後の夜を過ごしたかった。そして夫と思う存分語りたかった。嘉児の養育について、弟や妹のことについて、自分の勉強について、如何にして姑と向き合うかについて、彼と相談しなければならなかった。しかし、趙耀根は一晩中隣の部屋にいて、母親は息子の手をずっと握って離さなかった。彼らは深圳行ったら気をつけるように繰り返し趙耀根に注意し、一緒に昔話に興じていた。趙耀根は、部屋に戻るのを忘れてしまった。江暁歌は夫に何も話をすることができなかった。

江暁歌は、どんなにか彼らが恋愛をしていた頃の日々を懐かしく思ったことだろう。あの頃は、お互いに何でも話し合えた。少しも心にしまっておかないで、相手に自分の全てを伝え、相手に自分の気持を十分に知らせることができたのか、それだけを気に掛けていた。彼らは心と心が通じ合っていて、太陽の光はあまねく彼らを照らし、一かけらの暗い影もなかった。あの頃は、今日のようになるとは思ってもみなかった。今ではお互いに信用することはなく、真実を語ることもなく、実際冷め切ったような状態に置かれていた。

彼女は、どんなにかこの状態に終止符を打ちたかったことだろう。

夜が明けようとする頃、趙耀根はやっと母親や弟妹達との話を終え、足音をしのばせて彼らの小さな部屋に戻ってきた。彼は、彼の荷物がもう既にきちんとまとめられているのを見た。

江暁歌も既に寝入っていた。彼は妻の傍らに座って彼女の顔を見つめ、深い自責の念にかられた。彼は妻が自分と話をしたかったのをわかっていた。彼も実際に彼女と話をしたかった。しかし、何を話したら良かったんだろうか？それぞれが自分の考えに固執して、また口論になってしまうんじゃないんだろうかと思った。今日は絶対に口論をする日じゃないんだ。彼は引き出しを開けてアルバムを取り出し、彼ら一家三人の写真を一枚切り取り、自分の持っている財布の中にしまい込んだ。

彼は明かりを消してベットの端で寝入った。

江暁歌のしっかり閉じた目から涙が溢れ出した。

(つづく)

透明な時間（八）

宅見勝弘

【前号までのあらすじ】

草食系銀行といわれた東城銀行と肉食系銀行といわれた西都銀行が合併して、東西銀行が誕生した。

もと東城の赤坂支店で西都出身の熊本支店長が殺された。現場は金庫室で、三つの扉に五つの鍵がかけられた密室であった。（金庫室の格子扉がシリンダー錠で、同じく耐火扉がダイアル錠とシリンダー錠で、支店の通用口が数字錠とシリンダー錠で鍵がかけられていた。三つの鍵は死体の手に握られていた）融資係の竹森が支店長の死体と一緒に金庫室に閉じ込められていた。

死体のポケットには持井建設の融資のメモが入っていた。メモの資金の流れは不正な融資をうたがわせる内容であった。そのメモには竹森の指紋がのこっていたが、竹森はおぼえていなかった。

七

熊本支店長が殺された日の業務報告書には、「異常なし」として鳥居副支店長が本部へ報告した。職場で人が死んで異常なし、とはおかしいようであるが、副支店長らしい判断であった。

副支店長の理屈では、業務上の異常とは現金が足りなかったり、貸出先の倒産により損害をこうむったりした場合であり、個人的な事情は業務報告でない。あとで対応の責任をとらされないように証拠を残さない仕事術である。

支店長の死亡を本部へ報告するのに長期不在報告書を提出した。管理職が三日をこえて自宅をはなれるときの報告書である。

「支店長がやむをえない事情でいなくなる。代行者として副支店長の自分がふさわしい」そのような報告をしていた。

それはまったく無視された。すぐ人事異動が発表され、月曜日の開店まえには新支店長が着任した。

後任としてきた跡出支店長は、支店部の部長であった。部長といっても正式には部付（つき・づけ）部長という肩書きである。

支店部に五十名ほどの銀行員がいるが、平行員や課長などは一人もいないで、全員が部長である。一人の支店部長と五十名ほどの部付部長とだけがいる。

支店部は、合併により廃止した支店の支店長の受け皿として新しく作った部である。

東西銀行は合併で誕生すると、拙速主義をモットーにかかげた。完璧でなくてもいいので、とにかく急いでやれ、という方針である。

朝礼の際には、行員の全員で「拙速主義でいこう」と合唱させられたのである。ＡＴＭコーナーにいる預金者に丸聞こえである。「セッソクって何ですか」と訳もわからず合唱している人もいた。

合併と同時に営業エリアの重なる店舗を一気に統合と廃止をした。もともと関西の駅前には東城銀行と西都銀行の支店が隣どうしに多くあったのである。その結果、廃止した店の支店長が行き場をうしない、大量発生したのである。

無くなった店舗の支店長を支店付支店長という肩書で残す案もあったが、さすがに実現されなかった。そこで支店部という部署を新規に作り、もと支店長を異動させたのである。

支店だけでなく本部でも人事部や総務部など各部で一気に統合して部長と部付部長とが誕生した。

支店部は東城銀行本店の地下五階の物置を改装した、かび臭い部屋に作られた。そこに五十名の部長たちが朝から夕方まで閉じ込められて、支店の運営についてレポートを延々と書かされている。

支店長大虐殺と呼ばれていた人事異動である。実際に、支店部に異動になって、うつ病になって出勤しなくなったり、辞めたりした部付部長も多かった。

跡出支店長は東城銀行の出身であった。いくら現場を無視する人事部でも、西都出身の支店長が殺されたことで、後任に同じ西都出身者をすえる勇気はなかったようであった。ターミネーターといわれた人事部は君子豹変や朝令暮改をモットーとしていた。

支店部にくる前に跡出支店長は京都支店にいた。京都支店は東城が西都に吸収されたのであった。

「支店部ではもっとも長くいて、『ぶぶづけちょう』と呼ばれていました」

着任のあいさつで跡出支店長はみずからを面白おかし

く語った。あだ名は京都のぶぶづけ（お茶漬け）からとったものである。京都では早く帰って欲しい客にはお茶漬けをすすめる。支店部でも早く去って欲しいという願いがあったのだと語った。

東城の支店の規模ではベストテンの京都支店長をしていた跡出支店長には次のポストにふさわしいものが無く、長いあいだ転出できないでいた。

「支店部は刑務所みたいなものでした。こんどの人事は、しおづけのぶぶづけを上手くはめたようですね」

苦労人の支店長は笑顔をたやさず、ユーモアを交えて話した。

跡出支店長は東城銀行の中で最も土下座がうまいと有名であった。どんなに怒り狂った相手に対しても、土下座で相手の怒りをやわらげることができた。

東城銀行では保身のためにはどんなことでもする支店長が大半であったが、頭を下げるのが苦手な者が多かった。

東城マンは妙にプライドが高く偉そうにしているとして、エリートくさい・秀才ぼけ等と評されたこともある。特に地位が上がるとその傾向が強いと言われていた。

地位が上がるにつれて、上体がのけぞる角度が大きくなった。役員になると平行棒の下をのけぞってくぐるリンボーダンスをしているようである。

昇進するにつれて頭も腰も低くなったという跡出支店長は、東城銀行の中では他に類をみないタイプの支店長であった。

平行員の竹森に対しても跡出支店長は深々とお辞儀をした。支店長が顔を上げるまで、竹森は三度も頭を上げては下げなおした。

跡出支店長は仏様と呼ばれ、赤坂の支店長は鬼から仏にかわったといわれた。「人事部には殺されそうな支店長のランキング表があって、最も殺されそうな支店長から、最も殺されなさそうな支店長に替えた」と言う者がいた。

東西銀行では支店長を戦場の指揮官にたとえられたが、「銃弾は前からでなく、後ろからくる」とも言われている。支店一揆で部下が反旗をひるがえして、支店長職を失う例もあった。

生前の熊本支店長は「俺がいなかったら、赤坂支店はつぶれるぞ」と豪語していた。しかし、本人が死んでも何ごともなかったようにいつもと変わらず過ぎていった。

副支店長の報告通りのまさに業務は異常なしで、日常と変わらなかった。

むしろ熊本支店長がいる方が異常ありといえた。警察官が事件現場を捜査し、マスコミ関係者が殺到し、本部行員も支店にきて、雑然としていた。しかし、熊本支店長ひとりがいるよりもずっと平和で静かであった。

跡出支店長の仕事ぶりで赤坂支店の行員が助けられた。交渉なかばである案件について、着任してすぐに決

済したのである。

「俺だったら、こんな融資しないけどなあ。まあ、組織で仕事しているんだから、しょうがないなあ」

笑いながら跡出支店長は、交渉中の融資取引について熊本支店長が進めたそのままの条件で承認していった。

もし融資先が倒産したら、責任を負うのは融資をすすめた前任の支店長でなく、決裁した跡出支店長になる。東西銀行では、引き継ぎ案件という言い訳は許されない。

守屋支店長が着任したとき、その前の仕かかりの案件を全て否決したのであった。決裁者として自分の責任が問われるのをおそれてである。

取引先に融資を約束していた案件があったが、守屋支店長にかわり、融資をことわった。相手の会社は資金繰りがつかず、倒産したのであった。担当者には「本部の方針がかわりました」と言わせていた。

「もし、将軍の後が仏様でなく殿様であったら、俺は自殺していたかもしれないな」

通算で四人の支店長に仕えていた大口取引先の担当者は胸をなでおろした。担当者として支店長と取引先との板ばさみになっていた。

守屋支店長はよく約束をくつがえすので、「殿ご乱心」と周りでは失笑を買うことも多かった。しかし、取引先とその担当者にとっては命を削られる思いだった。

職場に戻った竹森が最初にしたのは、持井建設の破産にともなう手続きである。竹森が復帰して、持井建設の損失額を報告したとき、業務報告書の異常なしでなくなり、損失九千五百万円見込みと書かれた。

「九千五百万の融資ですが、一千万円が水ましされたかもしれません。破産管財人に事情を説明して調べようと思います」

警察に見せられた熊本支店長のメモの話を竹森は半谷課長を通じて跡出支店長に報告した。

「よけいなことは止めておけ」

副支店長が止めたが、跡出支店長は竹森に調べるようにと指示を出した。

「くさったものは洗いだして、きれいにしよう」

持井建設から紹介されて、下山工事の借入れを打診されたのが、この融資の始まりである。二年つづけて赤字の下山工事にじかに融資することはできないので、持井建設の孫請け会社に対する支払い資金として融資をした。

融資方法はとくに規則に違反するものでない。間接的に下山工事への貸すかたちになると半谷課長が反対したが、いつもの通り熊本支店長が押し切った。

契約書のコピーも保存して、九千五百万円ということを確認しているが、今となっては信用ができない。

実際の金額が九千五百万円か八千五百万円か確認するために、持井建設の破産管財人と竹森は会うことにした。

さいわいなことに下山工事の破産管財人も同じ弁護士

が務めていた。今回の場合、二つの会社の資本関係は無かったが、実質的にグループ会社と判断されたようで同じ弁護士が選任された。

もし、別の弁護士が破産管財人となっていれば、事実関係は分からなかったかもしれなかった。

弁護士事務所は赤坂支店の真向かいにあった。入居者すべてが弁護士事務所である赤坂法曹ビルの一室である。

竹森は電話で約束を取り付けて、半谷課長と一緒に訪問した。

破産管財人が教えてくれた内容で、持井建設と下山工事の資金の流れが判明した。

持井建設から東西銀行青山支店の下山工事の普通預金に九千五百万円が振り込んでいる。これは稟議書に振込依頼書のコピーを付けており、既に分かっていたことである。

偽装工作をするのであれば、本当は東西銀行の口座を使うのは避けたかったかもしれない。しかし、東西銀行の他店に口座があるのに、別の銀行へ振り込むのは不自然であるので、そうしたのであろう。

下山工事は東西銀行青山支店から現金一千万円を引き出していた。そのことも竹森は銀行のオンラインで調べていた。

その現金を下山工事は大進銀行青山支店のみずからの普通預金に入金していた事実が弁護士の説明によりわかった。その支店から大進銀行赤坂支店の持井建設の普通預金に一千万円を振り込んでいたのである。

東西銀行が下山工事に融資している訳でないので、全てを弁護士が明らかにしたのでなかった。破産管財人として下山工事の秘密を守るため、具体的な銀行名と支店名までは教えてくれなかった。

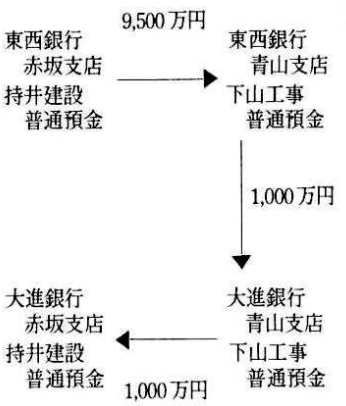
借入れ申し込みの際に受け取った下山工事の決算書のコピーがあったので、竹森は銀行や支店が特定できた。

これで持井建設が下山工事への支払い八千五百万円を九千五百万円に偽装工作したことは明らかになった。

「やはり、将軍が入れ知恵したのだろう」

この偽装工作を熊本支店長が気付かなかったとは考えにくかった。むしろ、支店長の方から指示したから、このような迂回した工作を持井建設と下山工事がしたと考えられた。

資金の流れ図



ノンキャリで首が長持ちする方法

終末編

中山喬央（たかひろ）

業務渉外部

筆者が昭和四九年十月、渉外役として配属された業部渉外部は、同年五月それまでの業務部渉外課が部に昇格したもので、渉外第一課、渉外第二課、公務課に分かれ、既に渉外役としては官庁担当の方がおられたので、小生の守備範囲は公益法人すなわち社団・財団・宗教法人・学校法人等で、それらとの取引拡充というのが与えられた役割であった。

等々力支店を去る際、隣接するSA尾山台の支店長にも挨拶に訪問した。お互いに忌憚の無い意見を交換できる間柄となっており、彼は公務部勤務の経験を持っていたから「中山さん。今度のところは長くなりますよ。本人が持っている人脈を活用して大口取引先がとれるかどうかと言うのが評価の分かれ目になるポストです」と教えてくれた。

事実彼の言う通り、それから平成六年二月、満六十歳の誕生日に定年退職するまでの約二十年間、様々な方々の御世話になりながら、この分野のうち特に学校法人を担当する本部機構に奉職する事となったのである。

最初の一年間、担当した既存取引先すべてを訪問した結果、二年目には学校法人に専念したいと部長に意見具申した。

理由は協和の前身が貯蓄銀行で、都銀の中では個人取引に強い特色を持っているが、入学金・授業料等の取り扱い機能を持っている学校法人との取引は相対的に弱く、その拡充は個人取引先層を強化する上からも有益であり且つ急務であると判断した事と、更に毎年三月末決算日に保有資金量が最大となる学校法人との取引推進は、業績に反映するところも大であると考えたからである。

部長もそれを認めてくださり、T大卒のパートナーも配属されて、学校法人担当がスタートした。時を同じくして宗教法人の専任担当者も配属された。

その際担当先を渉外一課で決めていただいたが、パートナーには既存有力取引先の大半が割り当てられ、小生には、これから開拓深耕すべき先が割り振られた。これが永続して学校法人を担当していく上での大きなプラスになった。

先ず、学校法人を代表する、凛としたお三方の美女の話からスタートする。

その中で一番若い方がK義塾のI塾長令夫人である。この方とはご主人様が勲一等の叙勲を受けられた際、頭取のお祝い品をご自宅に持参した際ご挨拶した。

今一人は日本を代表する財閥本家を出自に持つ某学園理事長である。

最後の方は名門女子大学法人の経営者で、その一族は人口に膾炙されている。この方が天寿を全うされた際、青山葬儀所の葬儀には、あらゆる階層の方々が参列され、その数は優に一万人を超え途切れることがなかった。

その方を引き継いだI理事長が、当行創立者O元頭取に御世話になったことがあるといって、何かと当行に便宜を図ってくださったのである。その学校法人の財務責任者は主力取引行の出身者であったが、私学経営全般につき相談を受け、それに的確に対応したことを高く評価してくださり且つ理事長とO元頭取との関係も知っていただいたので、最終的には文部省の経常費補助金の振込銀行にも指定してくださった。

この学園の取引店、K支店には歴代人格者が支店長に就任されたが、丁度この経常費補助金指定替えが起こった時の方は、清廉潔白を絵に描いたような人物で、よく学園に訪問して下さっていたから、この事もO元頭取と理事長の間の人脈を生かすうえでの大きな要因となった。

話を元に戻し、当初どういう方法で学校法人の開拓深耕に着手したかを述べる。

最初は首都圏で大口取引が期待できる先、医科歯科系大学がターゲットであった。

そのなかに名門G医科大学があった。この大学は財閥系銀行二行が主要取引行で、メインのM行から、財務課長として常時出向者が派遣されていた。

訪問を開始してから未だ日も浅い頃、その課長から

「おたくは青戸に店がありますね。うちは青戸に病院があり、その取引をTK行の現地の店に依頼していたのですが、大学本部の取引が同じTK行さんでも、合併した元の銀行が違っていたから発生したのでしょう。先月末の預金を、無理して本部の取引店が獲ってしまったので、出先の店から集金サービスを止めるという申し出があり、現地の病院が困っているのです。私達も反省し、協和さんには新橋支店がありますから、その店にも安定性預金取引を含め、それ相応の本部取引をしますので、何とか青戸支店に話をしていただき、集金サービスを含む病院との一行取引をお願いできないでしょうか。」

という提案を受けた。即、部に帰り、部長に報告その了解をとった後、新橋支店と青戸支店に連絡、新橋支店では快諾してくれたが、集金が条件となった青戸支店では、話し合いが必要となった。

しかしその地域での中核病院との独占取引は、同病院の様々な付属取引、すなわち医師・看護婦の個人取引獲得のみならず、店周における当行知名度アップと、当行顧客サービスにも大きく貢献するものであるとの見地から了解してもらうことができた。

そこで大学を訪問、課長に、お申し出通りの条件で取引させていただきたい、と報告した。課長も大変喜び財務担当I理事にも挨拶して欲しいということで面談した。

その際の財務理事の発言にこちらが驚いた。

同氏はT海上から同大学の経営陣に加わったのであるが、長野中学の二年先輩が当行S会長で、T海上時代大変御世話になったことがあり、今回の件でT財務課長から相談を受けた際、協和だったらということで、即ゴーサインを出したとのことであった。

このG医科大学は、バブル期にも一切資金運用に手を染めなかった稀有の大学であり、本邦医学界でもその地位が高く評価されている大学である。その後、取引は順調に発展し、小生が定年退職後、融資行になったとの嬉しい便りを聞いた。

この大学との取引が順調に展開したのには今一つ好運があった。丁度その頃、小生が本郷支店在任中お仕えしたI支店長が出向先より戻られて、暫く渉外役として同席された事がある。その際、「最近G医科大学との取引が出来たそうだね。実はその大学の幹部職員に旧制中学の同級生がいるんだよ。私の名前を出して一回行ってみてごらん」と教えていただいた。この人脈も本当に生きたものであった。生え抜きの幹部職員I氏は筆者に協和との取引の全面的支援を約束し、何かと相談にのっていただきながら、同大学各種取引の拡充に取り組むことが出来たのである。

ここで渉外部の存在が、取引推進の「障害」になった事例を紹介する。部長の存在である。

有力大学法人の経営者とか、本省のエリート官僚には、都銀の部長程度の肩書きは全く通用しない。

先ずこれを思い知らされたのが、ある特殊法人の融資担当理事との間での出来事だった。

その融資担当理事が在籍したのは、昭和四五年に私立

大学等の経常費補助金の制度が創設されると共に「私立学校振興会」を発展的に解消して設立された「日本私学振興財団」であった。

同氏は文部省・審議官の経歴を持つ人物であったが、気さくな人柄で、最初御目にかかった際、偶然にも小学校が、筆者の先輩だったことが分り、お前の仕事は大変だけど、小学校の先輩として面倒をみてやるぞと言われた間柄となった。

折りしも時期を同じくして訪問を開始していたT女子医大の財務部長から、当財団からの融資再開を依頼する為に、大学経営者を挨拶に融資担当理事の下へ連れていきたいが、紹介していただけないだろうか、という申し出を受けた。そこで融資担当理事に会って了解をとったところで、こういう事をやりますよ。と部長に報告した。

ところが部長は、その場所に自分を入れろと小生に指示、折り返して融資担当理事に、その旨伝えたところ、お前の上司だろうと、いやだよ。この話しはなかった事にしてくれ。ということになった。

この事は何を意味するかといえば、筆者に交渉事の成否の基本は、人間同士相互の信頼関係が基本となることを、小学校の先輩として教えてくださったのである。

これに気がついたので、それから後は、自分自身を通じて協和銀行を理解していただくように努め、信頼を得た上で取引交渉を展開するようになっていった。後日談となるが、この女子医大は、別ルートで融資担当理事と経営者の会談を実現されるのであるが、財務部長は筆者と融資担当理事との人脈を充分に理解し、それからは当行との取引拡充について何かと配慮していただけるようになったのである。これには勿論取引店S支店S支店長の理解と支援があった。また当該財団融資担当理事との交流はその後も長く続き、文部省筋からの情報入手に大きく寄与する事となった。

今一つの実例を紹介する。某学園は東京都と埼玉県にキャンパスを有し、メインはF銀行であったが、神奈川県に新キャンパスを設置し情報学部・国際学部を新設する計画を進めていた。その新キャンパス設置に関し、情報提供等、各種相談に乗ったことを高く評価した先方事務局長から、お宅との取引シェアを高めたいので、できれば役員に、理事長を表敬訪問していただけないだろうかという提案を受けた。先方の理事長は、教育界の大物で、何かあると私学界を代表してNHKのニュース番組に登場する方である。そこで経歴を教えてもらったところ某代表取締役旧制中学の先輩にあたり、尚且つ独身寮の寮長を両者共に務めていたことが判明した。そこでこれでいこうと部長に相談したところ大喜びで、お前はいいよとお供を許されず部長は代表取締役と支店長の三人で訪問した。ところが挨拶も早々、旧制中学先輩としての立場から園に衣着せぬ一方的な発言を理事長から代表

取締役が受け、たまりかねた部長が、先方幹部のみが知っている学部新設上の必須案件につき、理事長の了解なしで事務局長から教えて貰っていた事を知りながら、理事長に向って発言し、理事長がこれに激怒して事務局長をその場で叱りつけるという事態になり、ほうほうの態で帰行する事となったのである。

面目を失した苦労人の先方の事務局長からは、それでも筆者に事態の収拾を図ろうと相談があり、理事長の怒りを静め取引を存続する為に、今度の休日は理事長が伊豆高原の別荘にいるので、小生が支店長と共に挨拶に訪問すると言う事になり、アドレスを教えていただいた。

東京は夏の暑い日であったが、伊豆高原の理事長別宅では、心地よい風が絶えず部屋の中を流れていた。兎にも角にも、部屋の中には入れていただいたのである。しかし二時間位在宅して結論が出ないまま帰京せざるを得なくなった。そして支店長と品川で別れる際、若し自分が貴方だったら、「来週再訪しますよ」といった。

支店長はそれを実行した。理事長からは、「俺の学校がお宅と取引を止めると、お前の責任になるのだな」といわれたという報告を受けた。先方事務局長のとりなしと、支店長の再訪までした努力が実を結んで、これで取引が継続できると確信した。その支店長はその後、当行経営陣に入った。

新キャンパスの取引は、当行がメイン取引行となった。当学園理事長も心の中では後輩である当行代表取締役の表敬訪問を喜んだのではないかと考える。何故ならば新キャンパス完成後、お祝に現地に訪問したところ上機嫌で会ってくださったのである。更に財務担当の方々との心の通い路は、その後も長く続く事となる。

この相次ぐ出来事は等々力支店を去る際、SAの尾山台支店長にアドバイスを受けた時の事を思い出させた。

彼が「独自の人脈を創り」といったことである。それは先方は交渉相手として、自分が信頼できる人物にのみ心を許す。それは銀行を選ぶものではなく、ましてや相手の肩書きによって左右されるものでもないということである。勿論当行の経営陣、支店長クラスでも人柄によって私学経営者を心服させ、その後の取引に大いに役立った例はあった。しかしそれは稀有のことで、成功事例として紹介する案件を除けば体験したのは五指に満たない。

ここで私学経営が当時どういう事態に直面し、私学の経営者、幹部職員達が、それに対してどのように対応しようと考えていたか、また本当に欲しがっていた情報とは何なのか、につき簡単に述べる。

私学経営を存続させる基本は、その私学に入学したいと考える良質な生徒・学生をコンスタントに確保することである。そこで大学経営者にとって問題になるのは、先ず十八歳人口の動向である。それは三年前の中学校卒

業者数より算出され、加えて高校新規卒業者の大学・短大進学志願率、合格率等が問題となる。

筆者が業務渉外部で学校法人の専任となった当時は、十八歳人口が一五〇万人時代で、それから十七年後の平成四年二〇五万人のピークに向って右肩上がりが予想されている時期であった。加えて志願率も上昇傾向にあり、私学経営には追い風が吹いていた。

その一方で私学間の競争が激化し、時代のニーズに適応できない私学は応募者の質が低下したり、無くなってしまって、廃校になる怖れも充分認識されていた。

私学存続の条件を列挙する。

① 建学の精神が確立し、それが広く社会に認められていること。

② 優秀な教授陣を擁し相互の切磋琢磨がなされ、時代にマッチしたカリキュラム構成による講義内容が充実していること。

③ 手腕のある役員で理事会が占められ、必要な教育水準を保持するに足る、財務体質を継続的に維持出来ていること。

④ 良質な職員により学内の維持管理が行なわれ、勉学の環境保持、学生の生活相談、就職・進路指導等が充分対応出来るようになっていること。

⑤ 同窓会組織が確立し、学校の経営陣、教授陣との相互の連帯感を有しながら、優秀な応募者の募集に貢献していること。

⑥ キャンパスは通学が便利で、且つ学生受け入れの魅力に満ちていること。

⑦ 学園周辺住民との結び付きが強く、相互発展のコンセンサスが出来ていること。

等である。

今度は学校会計のポイントを述べる。

装置産業である電力・鉄鋼と同様、貸借対照表の表示は固定資産・固定負債が上欄にくる。企業の「資本金」に該当するものとして「基本金」がある。この「基本金」は学校法人を経営していく上で必須の固定資産と流動資産の合計である。損益は消費収支計算書として表示される。帰属収入が学校法人の負債にならない収入のことで、この帰属収入から消費支出を差引き、それに減価償却を加算したものが、その学校法人の蓄積能力、言葉を変えれば返済能力となる。

次は監督官庁筋からの支援内容である。

最も主要な経常費補助金は、大学・短大は私学振興財団を通じ、高校・中学は各都道府県・学事課より交付される。

それ以外にも教育研究装置整備補助とか、科学研究費補助金等の制度がった。

その一方で、大学の将来を左右する新学部増設については、その財源に付き、基準があり、私学として、それ

に従わなければ、他の条件がクリアできても認められることはなかった。

今話をした全ての事柄は、刻々と指導方針が変化していくので、私学経営者は、監督官庁である文部省の特に若手官僚の考え方、他大学、場合によっては世界一流大学の経営方針等の情報を渇望していた。

又財務担当責任者としては、より具体的な自分の大学に当てはまる適切な情報とアドバイスを求めていたのである。

話を戻す。我国で最大の私学はN大である。そのスケールは東大を除いた東京五大学のトータルに匹敵すると言われていた。当行にも卒業生は在籍し、本部に有力者がいた。しかしその取引内容は、点的なもので、一部学部の預託金が預入されている程度のものであった。

その一方で当行本部有力者から紹介された先方の幹部職員は何れも優秀な方々で、継続訪問して徐々に人脈を築き上げていけば、経常取引行参入のチャンスは来ると思い、訪問を開始した。やがて主力M銀行が取引する三大純預金法人が、このN大とC競馬会それにS学会であることが判明し、経常取引行として参入できた場合のメリットが最大の先であると確信して、継続訪問先とした。

それから暫くたった後、日本歯科医師会会長を務める、副総長・財務担当理事のK氏に会うことができたが、同氏からは、「経常取引行新規参入は難しいよ。君、内には出納取扱銀行制度があることを知っているか」と尋ねられた。その時「今の六行に経常取引銀行を定めたその制度の事はよく知っていますよ。そしてそれを提案した○行が、六行の中に入ったんでしょう。しかし日本国憲法だって、永久不変のものではないでしょう。ですから貴学のその制度も情勢の変化により、当然変えられるべき時がくると思っています」と答弁した。その理事は「君面白い事をいうね」と好意的に受け取ってくれた。

しかし事は簡単に運ばなかった。動き始めたのは、それから十年位経ってからである。

交渉開始当時、筆者の年齢は四十を過ぎたばかりの時であったから、一番うまの合った交渉相手も同年齢で肩書きは課長補佐程度だった。それが十年経つと課長から経理長という文字通り中堅幹部となり発言権も学内で増大してくる。いよいよ出納取扱銀行制度を見直しても良いのではないか、入学志望者・在校生の便宜を考えれば、事務負担は増大しても、父兄との取引を数多有する銀行は取引に入れるべきではなかろうか、一方事務電算処理の進行により、増大する事務処理も対応可能となりつつあるという客観情勢もプラスした。そして本部をはじめとした各学部の新規取引が定期預金の預入により相次いで関係各店長の協力を得ながら、開始されるようになったのである。

ある学部の取引が成立した時だった。財務の責任者か

ら学部長に挨拶して欲しいといわれ、秘書を通じて学部長室に入った。その時のことである。初対面のK学部長が文字通り親しそうに、君の銀行の頭取は、こういう男だろうといってY頭取の事を、話してきたのである。そして面食らっている筆者に、五高同期生で良く知っている間柄なんだよ。君のとこと取引ができて本当に良かったと思っているとおっしゃってくださった。

運の良い事は続くもので、それから日ならずして、同氏が副総長に栄進された。すかさず頭取名のお祝い品をお届けしたいと申請書を秘書室宛提出し、そこに同氏はY頭取五高同期生と付記したのである。

即、O本部長のところにY頭取から話がきて、N大の取引支援に何時でも協力するよとの御話をいただいた。

当時のN大M財務部長は、熊本県菊池郡の出身者でK学部長とは入魂の間柄だったから、大変喜び、その人脈は使えるよ。自分が出納銀行制度改正の案を出す際、お宅の名前を入れて出しても、これで経営から反対されることはなくなった。どんどん人脈の強化を進めて欲しいと発言してくれた。

それから間もなく先方はK副総長とO学部事務局長、こちらはY頭取とO本部長の四人で懇親会が開催され、経常取引行参入交渉がクライマックスを迎えることとなる。その後は文字通りO本部長の指示のもと、関係各店長の協力を得ながら交渉が展開され、目出度く出納取扱銀行、すなわち経常取引行に参入することができたのである。

余談になるが、とある休日、N大の行事があり、それにもO本部長は参加してくださり、N大幹部に挨拶をして頂いて帰路につく際、これからどうするの、と聞かれたので、御世話になった元浜松支店Y支店長が今杏林大学病院に入院中なのでこれからお見舞いに行きます。と答えたら、何と自分も新入行員で入行した店の支店長として大変御世話になった間柄だから一緒に行くよとおっしゃられ同行してくださった。

O本部長の見舞いを受けた際の、Y支店長の驚きと喜びの表情を忘れることは出来ない。

取引成立後、N大経営陣と当行経営陣の懇親会があり、その際秘書室長の命により、筆者も同席することとなった。両者顔合わせの冒頭に、N大S理事長がK副総長に向って、この方が君自慢のお友達かといってY会長を指し、これ以上はない、なごやかな雰囲気の中で懇親会を開く事ができたのである。

そして同席された先方の財務部長からは、君たいしたものだね。お宅との懇親会には総長と理事長が一緒に出席しているよ。他行はどちらか一人なんだよ。と教えていただいた。この方はその後財務担当理事に昇進されたが、退職時に退職金全額を、当行の自宅最寄店に預入して下さった。

N大との経常取引行参入が、筆者として携わった三番目で最後の大仕事となった。

この後も八年間にわたり銀行に勤めさせていただくのであるが、この間、大蔵省主計局、文部省、通産省、各都県の学事課等で絶えず新規の情報入手に努めながら、それらを利用するのにふさわしい私学の経営者、財務責任者等に内容を伝えたから、訪問を待たれる存在となった。役員でも面会するにはアポ必要な人物が、秘書に筆者が訪問したら会議中でも待たせておけ、と指示してくださるようになったのである。これは効率的な外訪活動をするうえでの大きなプラスとなった。こちらの都合に先方が合わせてくださるのであるから、より効率的に多数の私学経営陣、財務責任者等との交流ができるようになったのである。その一方で人事権を持つ上司との関係が深まれば、機会をみて銀行取引の起案者は、当行との取引を増やしてくださる。その事前情報が入れば、すかさず取引店支店長に連絡、帯同訪問して経営陣に挨拶していただき、その結果が取引増強に繋がったことにした。

更に財務バランスを先方が提示しての経営分析要請、理事、財務責任者の派遣依頼、大学所有遊休不動産の活用、学校会計の電算処理支援要請等様々な話が持ち込まれるようになり、その実現には影武者として努め、すべて取引店支店長の実績とした。

これは営業店が努力をし、その成果が本部で認められた先ということにした方が、その取引先との絆がより深まり取引推進上有益と判断したからである。

話しを戻す。京王線に仙川という駅がある。この駅の風景には特色がある。それは名門女子大学・女子高校への下車駅で、駅を降り、調布に向って左側はS女子大学への通学路でブランド品を身につけた華やかな一群、右側はT学園へと通学する清楚な女子大生・女子高生と明瞭に区分けができる。

このT学園の南方には先に述べたG医科大学の病院があり、そこの事務長に人脈のあるI氏が就任したので、C支店支店長の了解を得た上で、早速新規開拓先として共に訪問を開始した。

或る日Y本部長から呼び出しを受け、お嬢さんがT学園女子高校に入ったが、校納金取扱銀行に名前が無い。どうなっているのかという質問を受けた。

実情を説明し、C支店共々交渉を強化した。Y本部長のバックアップもあって、目出度くその次の年度から取扱行に参入することができた。

その後先方のC理事長とO事務局長が、突然本部に来られた事があり、即秘書室に連絡してY頭取に会っていただいた。

C理事長は退職後、T文庫の研究員となられ、同じ様

に、考古学の学生となった小生に興味を寄せられお会いし情報交換した事がある。また聡明なO事務局長は、H大学のゼミが、小生が青山南寮の仲間だったY氏と同じで、最近のH大関係者の会合でも、この話がでたという連絡を受けている。

ここで一つエピソードを挿入してM君の配慮に対する謝辞としたい。

M君というのは、本郷支店に新任代理として赴任した際、新入行員として入行したM氏のことである。

同氏の実力は、その後遺憾なく発揮され、経営よりの信頼も極めて厚く順調に栄進の路を辿っていた。彼がK支店の支店長をしている際、そこには有力な深耕すべき私学があり、よく帯同訪問するようになった。

訪問途中の車中で、彼が突然いった。

「店にはK電子という当行主力取引先企業があり、いま上場準備に入っている。そこには既に総務部長としてS氏が入っているが、経理部長として上場を成遂げる能力のある人材を求めている。貴方を推薦したいが気持はどうか。既に入社しているS氏も貴方なら大歓迎するといっている。失礼だが年収は今の倍にはなるよ」

その企業と、そのポストについては、偶然京橋・本郷と連続して上司となったY先輩が勤めていたことがあって良く聞かされており、旧協和がメイン取引をしている

優良中堅企業として鳴り響いていた先であった。今後上場する際の金庫番となれば、成功した場合の収入面と権力は見返りが大きく、皆が渇望するポストであり、彼のことだから、すべて根回しを済ませたうえでの話だということは即座に理解できた。しかし、その気がないことを伝えお断りした。何故ならばその時、学校法人関係者に数多の人脈が出来ており、その方々の期待を裏切ることができなかったからである。定年退職後、明治大学の学生をしている時、彼が経営している会社を訪問、在職中、最高の就職先を斡旋していただいた好意が嬉しかったと挨拶した。

平成三年四月一日、協和埼玉銀行が発足した。

合併後、訪問先の五割が、旧埼玉銀行の取引先となり様々な経営相談に預ることになる。

この中で一番印象に残る出来事は、大学設立を目論む某私学の理事長から、大学用の校地としての借り入れ申し込みがあった案件を、文部省の設置基準に適応しなくなると言って断ったことである。この回答を一番喜んでくれたのが、理事長夫人の弟さんで、一部上場企業の財務責任者から、当学園総務部長としてスカウトされ、大学設立の責任者を兼ねていた人物であった。

彼は理事長発案の、銀行借り入れによる用地取得では大学設置基準に違反することを知っていた。それを主力取引行学校法人担当者のアドバイスとして理事長に伝え

ることにより、自分が表に出ることなく理事長の考えを変更させることが出来たのである。

後日談がある。この時期は、土地価格が未だ高い時期であった。結果として当学園が大学用用地を購入した際は、用地価格が大幅に下落し、大学設置資金はすべて自己資金で賄うことができ、目出度く大学設置の認可を得たのである。旧埼玉銀行の担当者からも、これら一連の動きを「合併効果」といって喜んでもらった。

文を閉じるに当り、畑違いではあるが、大変意義深い仕事に関与させて貰った事を述べる。

それは関西にあるR大学での「銀行業務論」講座開設である。これは偶然双方のニーズがあったのを、上手くドッキングせただけの話である。

I元頭取は大変な学識を持っておられたが、秘書室を通じて、講義が出来る大学はないだろうかという調査依頼があった。時を同じゅうしてR大学取引店H支店長からR大学より学生募集の目玉として、銀行業務に関する正式講座を開きたいが、貴行に検討してみては貰えないだろうかという申し入れがあったという話を受けた。

H支店K支店長は、新入行支店の仲間で共に独身時代を過ごした阿吽の呼吸を分かち合える間柄だったから、彼には大阪総務室の根回しを依頼し、筆者は本部内での事務局となって実現の為の足固めを図った。

結果としてI元頭取のリーダーシップの許、R大学が文部省に正式に申請して認可をとり、4単位20コマの講座としてスタートする事となった。

その最初の講義にI元頭取が現地を訪れられた際、先方は学長以下最高メンバーで応対してくださったのであるが、特にI元頭取が喜ばれたのは、一般に公開されていない国宝「飛雲閣」の特別参観であった。

この際予期せざる嬉しい仕事ができた。何と講義をされる20名の方々の講義内容をテープ起しして講義録を作り、講師になられた方々に順々に説明してまわるという役目である。勿論テープ起しした内容は、先ず講義をされた方のところ持参し、お許しをいただいたうえで印刷製本するのであるが、これが大変良い勉強の機会を与えてくれる事となった。ただI元頭取の分だけは畏れ多いということで、ご本人ではなく八重洲通支店の仲間だった企画畑のK氏にみて貰い、その了解を貰った上で印刷に回すこととした。勿論これは部長のお許しを頂いた上での行動である。

その時講義録作成にあたり本当にお世話になったのは、関係会社ワープロ担当の二人の女性である。切羽詰って持ち込んだ原稿を、優先して処理していただき、どうやら次期講師への説明に間に合わせる事が出来た。定年退職の際、本当に御世話様になりましたと挨拶にいっ

たところ、思いがけずお二人から花束をいただいてびっくりした。

本部の地下にある図書倉庫の存在も始めて知った。そこで専門書をひもどかないと原稿が書けないのである。しかし蔵書の水準が高く集中しないと、とても理解できない。最近機会があって早稲田大学商学部大学院生専用図書室に入る機会を得たが、咄嗟に懐かしく思い出したのが、同水準の本部地下にあった図書室の事であった。

余談になるがN大学本部で要職につかれていた方は、シェークスピアの研究家でもあった。ある時、シェークスピアは金貸しをしていなかっただろうかという質問を受けたが、この図書室のことを思い出し、参考文献を見つけ出して該当部分をコピーして持参し、その可能性はありますよ。と答えた事も良き思い出である。

この銀行業務論講座の開設は、都市銀行パブリシティの走りとなるものであり、特に私学間で、当行の存在価値を認めさせる大きな要因となった。これが前述の様々な相談案件の持ち込みに繋がり、また銀行側の立場、すなわち収益なくして企業の存続はありえず、サービスの提供もできないとする銀行側の言い分を認めさせる一因となる。

もともと私学との取引は手間はかかるが、年間収入の大半が二月・三月に集中し、それを一年かけて消費していくという事で、流動性預金の歩留まりが高く、そこから多額の資金運用収益があがるので全体として採算が取れていたのであるが、この時期からは、ボリュウムではなく収益の維持向上へと取引推進の梶を切り替える事となって行く。

また派遣講師に対してR大学は教授会で、I元頭取には客員教授、其の他の方々は非常勤講師の資格を正式に与えてくださった。この方々の中から、退職後、ご自分の人脈を活用してN大学の客員教授に就任された方が出る。

埼玉銀行との合併後初の新年度資格発表があった時、同じく学校法人を担当していた、一歳年長のC大卒O氏から、よかったね、といわれた。同氏と同じになり、約二十年ぶりに元に戻ったのである。

今を去る十八年前、平成六年二月末、丁度六十歳となり、四二年間、一度も肩を叩かなかった銀行を退職した。辞令には他の方々の「願いにより職を解く」ではなく筆者のみが「定年により職を解く」と記されていた。

追伸 ―サウダージ― より その七

松下壽男

こでまりというのは

「こでまりさんって」いうのは
女房があなたにつけたあだ名です
「今時めずらしいむすめさん」と
不思議な縁を自慢します

「いい娘だろう、そうだろう」
お前より私にとっていい娘だと
ちょっといばって
安心しながら言うのです

「おまえみたいで」「まあ、かわいそう」
私と一緒になる前は
頑なで意地っ張りだったから

女房を花で呼んだりしなかった
でも確かにあなたは見合いの頃の女房に似て
遅咲きの蕾のようです

日本近代文学点描　その八

松下壽男

文化の重層性とプロレタリア文学

♡其處へ先刻の御殿女中風の女が、コーヒーを持って現れた。丁重で、謙遜で、それで白歯を見せない女中は、すっかり買ひ馴されてゐた—。萩村達が、灌木の間から出て来た。

—おい萩村、コーヒー飲めよ。

高木が怒鳴った。女中は一人一人に、銀製の水注しみたいな格好したやつで、注いで廻った。

—澤山だ—、モウ昨日から五十杯も呑んだぜ。

萩村は、づけづけ云って、腰掛に割込みながら、透明なガラス見たいに底を見せない女中を睨みつけた。

—萩村君、あまり睨むなよ—薙刀持って来られるぜ!

高木が茶化したので、流石に女中も失笑した。女中、書生までが、大和講談社式に造作されてゐた。

徳永直が、昭和四年に、戦旗社の日本プロレタリア作家叢書の一冊として出版した「太陽のない街」は、挿絵入り並装本三一一頁。価は、労働者を自認する人々でもぎりぎり手が出せる一円でした。

貧しさに目覚めたからプロレタリアなのではなく、プロレタリア運動に目覚めないから貧しいのである。そのような主張のもとに、プロレタリア作家は、労働運動の志気を鼓舞するという明確な目的を持ってペンを執ります。すなわちアジテーション（扇動）です。そして社会や人間関係を、ブルジョア階級とプロレタリア階級の闘争という紋切型で描き出すのです。

闘争という紋切り型で描く点では敵国と自国との戦争を描く場合とよく似ています。とはいえ、多くの場合、戦争が兵士の人間性の否定の上に成り立つ異文化との戦いであるのに対して、ストライキなどの労働争議は、日常の文化に生きる労働者の人間性の回復を求めて戦われるのです。たとえアジテーションを目的としていても、人間性の回復を求めて生きる人々の内面や行動を描くプロレタリア文学は確かに文化の自覚であり文学なのです。

プロレタリア作家は、人間疎外の根底に階級対立があると考えます。既成のどんな文化に属していようとも、階級に目覚めなければ人間性の回復はありえないという強い信念を持っています。ゆえに、たとえ気高く見えても、階級の自覚がなければ偽善者だと考えるのです。しかも階級意識は文化を越えて通底しているので、国や職種の異なる労働者同士の連帯が可能になると確信しているのです。

その確信に支えられた彼らの眼差は、日常の細部までも紋切型の分析を施して行くのです。

とはいえ、その徹底した分析は、彼らの意に反して、階級の持つ通底性よりもむしろ文化の持つ重層性を明らさまにするのです。

冒頭に掲げた、社長邸での徹夜交渉のコーヒーブレイクの場面。そこには萩村ら労働者側代表団を接待する女中の描写をとおして、プロレタリア作家の目が捕らえた文化の重層性が見事に描き出されているのです。

立ち居振る舞いが御殿女中風というブルジョア文化に造作された女中は、同時に使用人であり労働者です。ですからプロレタリア同士として透明なガラスのように人間性の底を見せるべきなのかもしれません。しかし彼女は、たとえ睨みつけられても底を見せません。しかしながら、高木の会心のユーモア（茶化し）によって、その女中も庶民としての人間性を露にし失笑してしまうのです。

とはいえ彼女は、その出来事をきっかけに階級意識に目覚めるということもなく、大和講談社式に日常の仕事を続けます。そのような彼女は、偽善者なのでしょうか。

否、私は矛盾する思いが折り重なって底が見えない重層性こそは、心にとって本質的な真実ではないかと考えます。そして当然人間性にとっても本質的な事柄でしょう。

その一つの例として夏目漱石が明治四二年に朝日新聞に連載し、後に単行本「四篇」に収めた「満韓ところ〴〵」の、日露戦争時の旅順砲台の攻防戦のエピソードを紹介します。

「其時両軍の兵士は、此暗い中で、僅の仕切りを界に、たゞ一尺程の距離を取って戦をした。仕切は土嚢を積んで作ったとかA君から聴いた様に覚えてゐる。上から頭を出せばすぐ撃たれるから身体を隠して乱射したさうだ。それに疲れると鉄砲をやめて、両側で話を遣った事もあると言った。酒があるなら呉れと強請ったり、死体の収容をやるから少し待てと頼んだり、あんまり下らんから、もう喧嘩は已めにしやうと相談したり、色々の事を言ひ合ったと言ふ話である」

殺し合う心の深層に解り合う心があるのです。漱石は、戦争の悲しい本質を見抜いた気がして、新聞に載せたのでしょう。極限状況においてさえ現われる重層構造は、心の

本質であり、その表現形である文化の本質でもあるのです。そして人間性の回復の姿でしょう。

しかしながら、それでも国家間の戦争は、どちらかが戦えなくなるまで続くのです。

それは労働争議も同じです。人間性の回復のために人間性を否定して戦い続けなければならないという事態が生じるのです。

そのさびしい事態を、宮沢賢治は、「オッペルと象」（昭和元年）に童話という形で浮き彫りにしたのでした。酷使される白象を解放しに来た仲間の象たちは、老獪なオッペルを踏みつぶすのです。それは白象の祈りとは裏腹の結末でした。

そして「太陽のない街」も、東京の下町でプロレタリアとしてしたたかに生きる庶民をまるで映画のようなテンポで活写していきながら、主人公の高枝が社長の孫を毒殺するに及んで、大団円となるのです。題名が象徴するような絶望的な結末です。が、それでも争議は終わることを知らないのです。

おそらくは検閲によって頁の数よりも多い伏せ字（××）を施されたその本は、どれほどの読者を扇動できたことでしょう。

私は、この作品に感動を覚えながらも、扇動されることはありませんでした。それでも私は、自分自身を、読みが浅いとも、偽善者だとも思いません。

私は、文学の力とは睨むことよりもむしろ茶化すこと（会心のユーモアを発すること）を選んで人間性を露にさせる力だと考えます。心の重層性を露にするのは文学ですが、重層構造の一方を強要して行動を起させようとしても、それはできることではありません。人の心の重層性は、到底、扇動に乗るほどには、透明なガラスみたいに底を見せるものではないのですから。

とはいえ人の心の底にあるはずの階級意識は、透明なガラスみたいに見通し合えるに違いないという通底性への確信がプロレタリア文学を支えていたのでしょう。その確信のもとに文化をブルジョア的、プロレタリア的と紋切型に切り分けて、文学を闘争のアジテーションの道具にしようとしたプロレタリア文学は、図らずも通底性への確信をもてない読者に対しても、文化のもつ底なしの重層構造を目覚させる力を持っていたのです。

「太陽のない街」は、文化を支える出版業界の労働争議を描いています。しかし争議には、作家も読者も編集者も登場しません。描かれているのは、社長たちと無数の植字工や、印刷工、製本工等の男女です。プロレタリア文学が成立するほどすそ野を広げた日本の近代文化は、工業化された産業によって支えられていたのです。そのことを自覚させる「太陽のない街」は、その意味でも重要な文学だと思われます。

編集後記

2位でなく1位にこだわらなければ駄目なのかということが一時、話題となりました。それを独自性を保つ為と読みかえれば、その必要性は一目瞭然です。これを最近、天皇陛下の心臓手術を執刀された天野篤氏の、自身の手術に対する自負心から上司と対立して病院を辞めざるを得なかった経歴と照らし合わせて考えてみると一層明白となります。

世界で通用する新理論・新技術とか、オンリーワンの商品を生み出す為には、すべてのものに好奇心を持ち、見て触れて感じたその上で、既存のものは全て未完成であり、改善改良の余地があるものであるという考えに基き、より整合性を求め、より便利なものを飽くまでも追求していくのだという探究心の涵養がなければなりません。

その一方で、現在の日本を含めた世界各国の情勢は、ギリシャ・ローマに始まり、多くの国々が崩壊したのと同じ様に、欲望の肥大化により退廃への道を歩み続けているように思えてなりません。人気取りの福祉や減税競争は、人類の自立精神の喪失に寄与するのみです。

豊かさの代償が資源枯渇と環境破壊、使い捨て様式の生活を産み、判断力の衰弱が、権利のみを主張して悪平等のみを良しとするような風潮をもたらしている事は、人間社会の崩壊を招くだけです。

今こそ『まんじ』に集う我等は歴史に学んでエゴを自制する、自立精神の真価を発揮すべき時だと愚考します。

良書を楽しみ、先人の智慧や歴史を勉強しながら、真の教養、大局観、歴史観を持ち、もののあわれ、惻隠、懐かしさなどの情緒が満ち溢れた社会の再構築にチャレンジしたいと思料します。

（T・N）

まんじ第124号

平成24年5月1日発行（非売）

発行人　三戸岡　道　夫（みとおか　みちお）
編集長　中　山　喬　央（なかやま　たかひろ）
事務局長　鍋　屋　次　郎（なべや　じろう）

（事務局）　〒223-0056　横浜市港北区新吉田東五丁目76-35　太田善朗方
TEL・FAX 045（544）5947
（郵便振替口座）　No.00270-0-64592　加入者名　ま　ん　じ
（印刷製本）　日東印刷株式会社
〒142-0054　東京都品川区西中延2-15-16

表紙の絵について
「暗雲を昇り天珠（てんじゅ）をとる」　　田寺（たでら）怜葦（れい）画

まんじ

No.125

2012.8.1

まんじ第百二十五号　目次

「茶道史」勉強ノート（一）……忠内正之…4
長崎・西坂・雨の佳人……太田精一…13
私の「三都物語」……新井宏…19
関東管領始末記⑦　覇権奪取……千坂精一…28
わが愛誦歌（十五）……曽根竣作…39
短歌　三十首……曽根竣作…45
短歌　行雲流水（三十五）……石黒修身…49
城崎温泉にて……石黒修身…53
漢詩　潮騒録（六九）《漢詩の流れ58》……鯨游海…56
アフリカの彫刻に魅せられて（二）……勝山道子…60
詩　バラが呼んだ　畑　語りべ……石野茂子…70
遠州七不思議第二話「無間の鐘」……石野茂子…74
アメリカ雑記帳（一）……三戸岡道夫…77
花の金次郎……三戸岡道夫…91
先見の明（一）―韮山代官江川太朗左衛門の偉業と世界遺産への道―……堀内永人…95

館林・トレジャーガーデン……吉田忠雄…103
目耕録（その八）……山本鎭雄…105
二八に帰るすべもなし（九）……伊治哲…113
イドと超自我の谷間で（五）―ある女の不思議な生涯―……鍋屋次郎…120
『鬼の館』と『鬼の交流博物館』……漆原直子…131
（司馬雑感三十）「阿波紀行」をゆく……山田嘉久…135
性と化粧（五）……鈴木守…142
人類の仲間（一）……鈴木守…151
陰翳の美学（その十）……外山知…157
口紅（その七）……池原莉作…178
透明な時間（九）……山本勉訳…178
還暦からの考古学（二十四）……宅見勝弘…200
追伸　―サウダージーより―　その八……中山喬央…206
日本近代文学点描　その九……松下壽男…221
編集後記……松下壽男…222
表紙……編集……田寺怜葦子…224

「茶道史」勉強ノート（一）

忠内正之

そのためどうしても自家所有の茶道具の自慢ばなしに偏りがちとなってきたのだが、この頃になって他人様に誇れる程の自慢品が底をつきかけ、とうとう材料不足になって立往生しかかってきた。

三戸岡先生はこの窮状を察せられたのであろうか、先頃より私に対して「茶碗や茶入の紹介ばかりでなく、茶道本来のテーマ、すなわち茶道の歴史等を書いて見たらどうか？」との示唆があり、貴重な古い資料までいただいた。

渡りに舟と喜んで見たが、考えてみると何しろテーマが大き過ぎて手も足も出ない。いたずらに無為無策のうちに月日が流れていくばかりである。

かくてはならじと心を入れ替えて、このテーマに打ちこむことにした。

まずは資料集めから始めたが、膨大な量と内容になり

はじめに

私が三戸岡先生のおすすめで〝まんじ〟の同人に加えて頂いてから早くも丁度八年となる。その間、時には休みたいなと思うことも再三あったが毎号出稿させてもらった。

拙い内容文章ではあるが休みなくきたことで三戸岡先生のご好意に対して些かのお返しが出来たかなと感謝すると共に、年老いてからの良い勉強をさせてもらったと喜んでいる次第である。

さて、美術骨董品を主としたテーマで今日迄原稿紙のマスを埋めてきた。時としてテーマを外して故郷自慢の物語りやら身辺雑事に及ぶこともあったが、結局、骨董品から茶道具への話の展開に至っている。

私共夫婦はふたりとも茶道趣味の世界にはまりこんで身動きできない状態の中にある。

理解消化が難かしい。頭脳も固まっている故もあるに違いない。もとより未熟且つ不勉強の身であれば難渋するは当然とはいえ、単なる趣味に遊ぶ者と本気の世界との差の大きさを痛感した。

勉強しながら取り掛かることにしたがうまくまとめられるか自信がない。また新味は出せないと思う。そこで標題は茶道史勉強ノートとさせて頂く。お許しを願う次第である。

識者の言葉によると

いまお茶の世界を見渡したとき、残念なのはバランスの取れたお茶をする人があまり多くないと言う。お茶を習う＝点前の稽古、である現在、点前や作法にばかり詳しくて、道具や歴史のことはあまり知らないタイプ。

あるいは古美術や茶道具がもともと好きで、道具いじりに熱中し、「我々は数寄者だから点前はいいです」と開き直るタイプ。この両極端があって「どちらも」という人は極めて珍しいとのことである。

お茶との関わり方は各人それぞれであるから各人の判断に任せるしかないが、点前や作法は、本来、道具や空間を使いこなすために、またその時限り集まった他人同志がスムーズに、そして深くコミュニケートするための手段や技術であって、それ自体がお茶の目的になるわけではない。

コミュニケーションといっても、メールや携帯のやりとりとは全く違うレベルで複数の人間がシンクロすることを目指すのは、目標として非常に遠く、成就の難しいことである。したがって手っ取り早く手段としての点前や作法を目的化してしまったのが現代の「稽古茶」である。

一方で、道具に淫するだけで数寄者を気取る「道具茶」もお茶というソフトウェアーに対する敬意が足りない。点前は貴重な道具をより深く味わい、楽しむための方法論でもある。

道具と点前、どちらも修めた上で点前が道具が、というこだわりから解放され、その真ん中に「人」ありきの、風通しのいいお茶を楽しんでもらいたい。と述べている。（千宗屋宗匠）

この文章を読んで私は鉄槌をくだされた程のショックを受けた。若い時からの骨董狂いから転じて茶道具の愛好家となり、妻の茶道の関わりからほんの少々茶道にふれているだけで所謂「道具茶」の足許にようやく近づいた程度の愚かな自分の未熟さを知るに至ったのである。

三戸岡先生は私の弱点を見抜いて、今更「お点前を習え」とはおっしゃらないまでも、「オーソドックな茶道研究に進め」と親しく示唆をいただいたものと認識して心を新たにして取り組むことに定めた。

前おきはこの程度にして本題にすすむ。

茶の歴史を極めて簡潔にまとめた文章がある。「お茶を飲むという、今では極めて日常的な習慣は、茶の原産地である中国に始まり、奈良時代に日本に伝えられたようだ。さらに鎌倉時代になると、中国で禅を学んだ僧侶たちが、「抹茶」を飲む習慣と道具を持ち帰った。

それが日本の風土と美意識のなかで、「茶の湯」に変化し、さらに「わび茶」へと昇華し、多様な展開を見せながら現代に伝えられている。」（茶の湯をまなぶ本より）

『中国の茶』

喫茶の始まり

お茶の木は印度のアッサム地方や中国の雲南省、四川省あたりが原産地であったとされる。これらの茶樹を加工して飲むことは四川省あたりで始まったようである。紀元前後に書かれたという中国の「僮約」（奴隷売買の契約書）には、すでに「茶を烹る」「武都で茶を買う」などの語があらわれており、葉茶を団子状に固めた「餅茶」が販売されていたことが推測される。

茶を飲む風習は唐の時代（六一八―九〇七）には大流行したようで、都の長安では喫茶店が繁盛し、寺院では坐禅の合間に茶を飲むことも行われるようになっていたという。

唐文化が盛んであった頃の文人陸羽は七六〇年頃世界で初めての茶書である「茶経」を書きあらわした。

「茶経」全三巻は具体的な茶の製法や用具、茶の歴史、茶器、茶の点て方、飲み方、産地にいたるまで整然と記し、更に「茶は行い精れ倹徳の人に宜しいといった精神面にまで及んでいる。（その様な立派な人物は中国では孔子以外に見当らないと思うので少しオーバーな表現かと考えられるのだが。）

陸羽はまた茶の薬効についても触れているが、そこは医食同源のお国柄でもあり、額面通りに受け取ることはできない。むしろ「茶経」に記されているのは、「薬品」から自立した、豊かな趣味の体系をもつ「嗜好品」としての茶であり、更に「茶経」を潤色した書物等が刊行されたため「是において、茶道大いに行われた」と言われる。これが「茶道」という語の初出で、唐時代の茶は既にただの飲料でも薬品でもない、文化としての飲み物となっていたのであろう。

茶の発展をになった唐代の貴族や官僚、文人たちは、

茶を飲んで詩を詠んだり、書を書いたりした訳であるが、何が彼等を茶に向わせたのかといえば、やはり精神の高揚をもたらす、カフェインによる覚醒作用にあったはずである。

茶席の代表的な禅語（茶と禅の関係については後に述べる）の中に〝喫茶去〟という言葉がある。現代では一般化して〝お茶を召し上がれ〟という程の意味に使われているが、本来は修道僧たちに向って〝お茶でも飲んで目を覚まして来なさい〟という叱咤激励の言葉であったらしい。

中国の宋（九六〇―一二七九）の時代になると茶は酒や塩と共に専売制となり、また国外への大規模な輸出も始まった。茶は税収源、また外貨獲得のための貴重な輸出品として国の財政を支えていたのである。

一方現在茶の湯で用いる「抹茶」という形のお茶が完成されたのもこの時代だったようで、茶碗の中に直接お茶の粉を入れ、湯を注いでかき混ぜて飲むという、今日の薄茶によく似た抹茶法という飲み方が普及していた。「茶筅」の語が初めて登場するのも北宋の皇帝徽宗が著わした「大観茶論」という茶書の中である。

『日本の茶』

こうして唐で大流行中の茶に触れたのが、天台宗を開創した最澄（七六七―八二二）、眞言宗の空海（七七四―八三五）や永忠（七四二―八一六）をはじめとする遣唐使たちであり、彼らや渡来人たちが持ち帰った茶から日本の茶の歴史が始まった。「正倉院文書」に「茶はニガナ」についての記述があるところから、お茶はまず貴重な薬として天皇に献上されたと考えられる。「日本後紀」にある弘仁六年（八一五）四月二十二日条、嵯峨天皇の韓崎（唐崎）行幸の記事では、

> 廿二日近江国韓崎に幸す。便ち崇福寺を過ぐ。大僧都永忠、護命法師等、衆僧を率い、門外に迎え奉る。皇帝輿を降り、堂に上り、仏を礼す。更に梵釈寺を過ぐ。
> 輿を停めて詩を賦す。皇太弟および群臣、和し奉るもの衆し。大僧都永忠、手自ら茶を煎じて奉御す。御被を施さる。

とあり、これが日本の正史上茶に触れられた最初の記述であり、唐から帰朝した永忠が嵯峨天皇に滋賀里の梵釈寺で茶を献じたと伝えている。

最澄らによって比叡山の麓に最初の茶園が拓かれて以降は、貴族や僧侶らによる茶の飲用は徐々に広がり、日常化していった。宮中では季節ごとの読経や法会などの

際に僧たちの疲れを癒すための甘葛や厚朴、生姜などを加えた茶をふるまう「引茶」が行われていたこと、さらに密教儀礼の中でもお茶が供えられていたことがわかっている。しかしまだ上流階級の間での飲物であり一般へ普及するには至っていなかった。

宋がモンゴル（元―一二七一―一三六八）の侵攻を受けて滅亡すると、弾圧を恐れた中国人禅僧が多数日本へ亡命してきた。この時、喫茶の習慣から寺の制度、儀礼にいたるまで、あらゆるものが本場そのままに移植された。

禅宗のお寺は「禅苑清規」（唐代に定められた禅院の儀礼としての作法書）によって、禅僧の生活のリズムが律されている。この決まりに従って朝食のあとに「茶礼」という、お茶を飲みながら日常と自分をちょっと切離し、今日一日を点検するための時間を持つ習慣が定着していった。

当時の寺は最先端の学問が集積された大学の様な研究機関であるのと同時に中国からの直輸入された文化に触れられる場所でもあったから、武士や貴族、知識人が頻繁に出入していた。そこで日・中の禅僧たちがきらびやかな中国の文物で飾り立てた部屋の中でお茶を飲んでいる様子が彼等には憧れになったのであろう。そのため上流階級の間でも、書院に「唐物」と呼ばれる中国の陶磁器や書画を並べ、そこで茶を飲むことが広まっていった。

このような唐物趣味の流行と共に、日本でもお茶の栽培が盛んになっていく。よく挙げられるのは、建久二年（一、一九一）に宋から帰国した留学僧の栄西が、持ち帰った茶の種を雲仙寺（佐賀県）近くに蒔いて茶園を作り、またその一部を京都・栂尾の高山寺に住した弟子明恵に贈ったというエピソードがある。

栄西本人はむしろ顕密僧として活動しており、栄西が著わした日本で最初の茶に関する書、「喫茶養生記」でも、密教的な立場から、茶の薬効について解説している。

明恵のお膝元である栂尾で茶の木が栽培されていたのは事実であるが、それが栄西からもたらされたものかどうか解らないし、栂尾をはじめ仁和寺、醍醐、宇治、葉室、般若寺、神尾寺などが続く茶の産地として認められる過程を見る限り、茶産地に縁の深い寺のすべてが密教寺院であることからも、この時代までのお茶は禅宗よりは、眞言や天台・律宗の寺と深く結びついていたことがわかる。

そしてこの時期から、武家や僧侶、そして一般民衆の間にも喫茶の習慣が普及していくのである。

鎌倉時代から室町時代にかけての茶

鎌倉時代から室町時代にかけての喫茶の主要な舞台はまだ茶室や茶店ではなかった。

没落していく公家に代り勢力を得た、武家や守護大名たちが、鎌倉時代末期から熱中するようになったのは茶寄合とも呼ばれた闘茶の会であった。

これは複数のお茶を飲み比べて産地を当てるゲームの様なものであるが、主催者はお茶の本場である中国スタイルで会場を飾り立て、客をもてなした。のみならず闘茶の勝負には香木や小袖、砂金、刀剣や甲冑などの貴品が賭けられたといい、上流階級による豪奢なギャンブルという側面もあったようである。

一方ギャンブル抜きの会合として先の「禅苑清規」に含まれる茶礼をスタイルとした茶会も催されるようになり、主催者は喫茶のための楼閣を建て、酒宴の後に、椅子に座って喫茶する中国風の茶礼で客をもてなしたといわれる。これをいわゆる茶の湯の萌芽と見る考えもあるようだ。

延元元年＝建武三年（一、三三六）足利尊氏が室町幕府を開く際に、施政方針を示した「建武式目」の第二条で「群飲佚遊を制せらるべき事」として、荒淫、博奕と共に、賭けを伴う連歌会と茶寄合を戒めなくてはならなかったほど、当時の闘茶への熱狂には甚だしいものがあった。闘茶の熱狂と共に、唐物好きも盛り上って、武家の邸では会所と呼ばれる広間に唐物を飾って客をもてなしたが、唐物唐絵の収集にもっとも熱心だったのは歴代の室町将軍であり、六代将軍義教の邸に後花園天皇が行幸した折には、二十八の部屋に千点以上もの道具を飾りつけたと伝えられている。

天皇に対する特別な儀礼だったとしても、この極端なまでの飾りぶりは後の世の「わびさび」の茶の湯とは正反対のように見える。しかし貴重な舶来の道具を効果的に飾る必要に迫られて、床の間（書院、押板床、違棚からなる）が生み出され、室内も板の間に畳が敷き詰められるようになっていった。こうして確立された新しい生活空間を基準に、中国風の禅林茶礼とは異なる、書院を舞台とした日本式の茶礼が考案されて来たのである。

書院での寄合茶が出来たのは十五世紀半ばのことであるが、やがて応仁の乱（一四六七―一四七七）の勃発により、洛中は焼亡し、その荒廃の凄まじさを「応仁記」は「仏法王法トモニ破滅シ、諸宗皆悉ク絶エハテタルヲ感歎ニタエズ」と記している。王朝以来の建造物や道具類の多くが灰燼と帰してしまっては、もはや蒐集した唐物の数を競うような茶の湯を楽しむことはできなかった。戦乱の世をはかなむ厭世的な空気が人々に漂っていたが、お茶そのものに対する欲求はどこかに残っていたらしく、方丈（一丈四方―四畳半）の座敷に唐物だけで

なく和もの（国産品）の道具もとり入れ、限られた人数の客を心からもてなすという、後のわび茶のスタイルがついに生れてきたのである。

大乱を止められなかった、八代将軍義政が、混乱と荒廃から目を背けて東山に隠棲した東山殿（現慈照寺）の書斎・同仁斎は、まさにその萌芽である。

わび茶の始まり

十五世紀の後半にいたり更に茶は大きな展開をとげる。唐物の美術工芸品の鑑賞と喫茶が結びついたそれまでの形から精神性を前面に押し出した茶の湯が芽生え始めたからである。「わび茶」の誕生である。

わび茶の創始者とされるのが珠光であるが珠光についての史料は少なく伝承によれば経歴は次のようである。

珠光は奈良の人で初め称名寺に入り、上洛して能阿弥に茶を学び、その紹介によって足利義政に茶の湯の指南をした。同時に大徳寺の一休宗純に参禅し、印可の証（悟りの証明）として宋代の禅僧「圓悟克勤」の墨跡を与えられ、茶禅一味の境地を開いたとも伝えられる。

この時期に活躍した能楽師の金春禅鳳は、珠光が「月も雲間のなきはいやにて候（雲ひとつない空の月は好みでない）」と言っていたことを書き留めていたし、茶の湯について「伊勢・備前の焼物でも、工夫をこらして使えば唐物茶道具にも勝るものだ」と述べている（「禅鳳雑談」）。禅鳳自身、唐物の茶道具も見事だが、日本の伊勢や備前のような粗末な焼物でも使い方によっては心に沁み入るものだと考えていたのである。

わび茶の精神の萌芽は、珠光の弟子である古市澄胤に宛てたとされる手紙によくあらわれている。珠光は「冷え枯れる」精神が必要だと述べ、さらに和物茶道具と唐物茶道具を融合させて一体となった茶の湯を行うべきであるとしていた。

珠光は、唐物の青磁茶碗のなかでも褐色に発色した茶碗に粗末な美を見出し愛用した。この手の茶碗は「珠光青磁」と呼ばれている。

珠光の茶の湯の後継者として古市澄胤、村田宗珠、鳥居引拙、大富善好、十四屋宗伍らがいる。ほかにも堺の茶人竹蔵屋紹滴は「花の上手」として知られ、京都粟田口の善法は、珠光に「日頃煮炊きに使う燗鍋を茶道具にして茶の湯をするような、胸中の清らかな者」と誉められた人物であった。

珠光によって扉が開かれたわび茶をさらに進めたのは、武野紹鷗であった。のちに利休の弟子山上宗二が記した茶の湯伝書「山上宗二記」には「珠光の弟子である引拙の時代までは珠光の風情であった。紹鷗の時代に

なってすべてが改まった」とある。

紹鷗は堺の人、大黒庵、一閑の号もある。二十四歳の時、和歌を志して上洛。三年後の大永八年（一五二八）には公家で当代随一の歌学の大家三条西実隆に師事することになる。

武野紹鷗の茶会が記録にとどめられている。天文十八年（一五四九）の茶会を見ると、床には唐物の茄子茶入と天目が飾られ、唐物の蕪無花入に椿が入れられていた。茶入は有名人が代々所持したことでひときわ評価の高い茶入でのちに「紹鷗茄子」と呼ばれるものであった。その意味では、紹鷗の茶とは、格調高く由緒正しい「名物」茶道具を中心にした茶であったと言えよう。

一方で「現在の幾千万の茶道具はすべて紹鷗が見出された」と宗二記にあるように紹鷗は新たな茶道具を作り出していた。「紹鷗袋棚」や「釣瓶水差」「竹蓋置」などが代表的なものである。

紹鷗最後の茶会と思われる天文二十四年（一五五五）には藤原定家の色紙を掛物として使っている。「天の原ふりさけみれば春日なる……」の唐に滞留中に没した阿倍仲麻呂が故国を偲んで作った歌である。

それまでの茶会の掛物は唐物の墨跡や絵画が中心で、和歌などが使われることは皆無であったから茶会全体が和風化をとげるきっかけとなったと言える。

この頃、京都大徳寺の一休宗純・養叟宗頤らが新興の都市堺に禅宗を布教し、のちに古嶽宗旦は堺に南宗庵を開いた。その法を嗣いで南宗庵に入った大林宗套は、弘治三年（一五五五）、三好長慶が寺観を一新して創建した南宗寺の開山となった禅僧である。

大林宗套には千宗易（利休）をはじめ、武野紹鷗、今井宗久ら多くの茶人が帰依したため、茶の湯と禅を、更に堺衆と大徳寺を強く結びつけた。茶の湯では新興宗派である禅宗が勝ったのである。

この時期に新たな茶の湯の記録があらわれることになった。茶会の客や道具などを記した「茶会記」である。茶会記には、自分が主催した茶会の記録である「自会記」と、他の主催者に招かれた茶会の記録「他会記」がある。もっとも早く書き始められたのは「松屋会記」である。奈良の塗師松屋久政によって天文二年（一五三三）に書き始められ、その子の久好、孫の久重によって慶安三年（一六五〇）まで書き継がれた松屋三代の茶会記で、千利休の茶会なども収録されている。

ついで堺の豪商天王子屋（津田氏）による天王子会記が書き始められる。天文十七年（一五四八）から断続的に元和二年（一六一六）まで津田宗達、宗及、宗凡の三代にわたって書き継がれている。津田宗及は織田信長や豊臣秀吉の政商的な存在であったこともあり、政権内の

茶に関する記録が詳しい。

さらに博多の豪商神谷宗湛（かみやそうたん）による天正十四年（一五八六）から慶長十八年（一六一三）の茶会記「宗湛日記」、信長と秀吉に仕えた堺の豪商、今井宗久の茶会記なども残り、この四種をまとめて古茶会記と呼んでいる。

続

長崎・西坂・雨の佳人

太田精一

玄関先に置いてあった傘を差し、下駄をつっかけて宿舎を出た。

西坂の米穀商梶家の前を通りかかると、店先にうら若い美人が、ぼんやりと外を眺めていた。

年の頃十五、六。初々しいその顔になぜか憂いの影が潜んでいる。

娘にしては、落ち着いている。さりとて梶家の若奥様でもなさそうである。

海舟は、その女に一目で魅かれ、われを忘れて雨の中に立っていた。

女の名は、玖磨と言い、通称お久さんと呼ばれていた。

玖磨は、天保十三年（一八四二）梶家の長女として生まれた。丈夫な子に育つようにとの願いを込めて動物の名前を借りたが、熊ではあまりにも可哀そうだというので、黒色の美石を磨くという意味で、玖磨とした。

雨だれの音が激しくなった。

本蓮寺境内の紫陽花が雨に濡れ、ひときわ美しく咲いている。

（この雨は止みそうにない）

勝麟太郎（海舟）は、本蓮寺大乗院の宿舎で、雨の滴に洗われ、活きづく紫陽花を眺めていた。

長崎は、すでに梅雨入りしている。

勝海舟が、安政二年（一八五五）十月末に、長崎海軍伝習所の伝習生として、長崎に着任してから、半年余りが過ぎていた。

（長崎は、雨の多い処と聞いていたが、なるほどその通りだ。日がな一日、雨を見ているだけではつまらない。雨の中だが、この界隈をぶらぶらしてみるとするか）

三十四歳の海舟にとって、部屋に閉じこもり雨の一日を過ごすことは、苦痛であった。

だが、彼女は、その呼び名に似ず、可愛らしく美しい娘に育った。

梶家では、玖磨の初潮があった頃から、呼び名を娘らしくお久とし、近所でもお久さんで通っていた。

十四歳で親戚筋の小谷野家に嫁に行ったが、すぐ夫に死なれ、未亡人となって梶家に戻って来た。だが、小谷野の姓を名乗ったままでいた。

したがって彼女の名は、正式には、小谷野玖磨である。

(あれが美人で評判の梶の玖磨殿か、呼び名に似ず愛らしい顔をしている)

海舟は、江戸に残して来た妻民子のことをすっかり忘れて、何としても彼女を自分の女にしたいと思った。

そこで海舟は、一計を案じた。

(まずあの娘の気を引いて俺の存在を印象づけ、それから好意を持つように仕向けることにしよう)

そう考えた海舟は、翌日すぐ実行に取りかかった。

その日も雨である。

海舟は、傘も差さずに雨の中を小走りに歩き、わざと引きちぎった下駄の鼻緒を手に持ち、ぶらぶらとさせながら、梶家の軒下に立った。

降りしきる雨を恨めしそうに眺め、ため息をついて、いかにも困った顔をして見せた。店先にお久の居ることは、先刻承知の上である。

「お武家様、先ほどから見ていますとお困りのご様子。どうぞ中にお入りくださいませ」

お久は、海舟を店の中に入れ、鼻緒をすげ替え、傘を貸してくれた。

「御親切に有難う。造作をおかけする。雨の中、ちょうど困っていたところだったので助かる。今日も一日止みそうにもないな」

「お武家様は、江戸からいらした御奉行所のお役人様ですか」

「左様、役人と言えばまあそんなところだ。去年十月末に、海軍伝習所に来たばかりで、長崎は不案内である故、こうして町の様子など見て回っているところであった」

「長崎は、雨の多い処です。ことにこの季節は、いつも傘のご用意が必要かと存じます」

「左様しかと承った。本降りになって出て行く何とかという川柳があるが、これじゃあ洒落にもなりゃしない。ところで、名をお聞かせ願いたい。だが、今会ったばかりの男に名前を教えるなんて良家のお嬢さんのすることじゃあない、と思ったら言わなくてもいいよ。いずれ調べれば分かることだ」

「まあ、お役人様から取り調べを受けているみたい。でも、どうせ分かることですし、何もお咎めを受けているわけでもないので言います。お久と呼ばれています」

「呼ばれているとは、どういうことかね。名を聞かれた

ら何のなにがしです。と答えるのが、普通じゃないのかね」

「はい、その通りですけれども、私には、本名と呼び名の二つがあるものですから、呼び名でお教えしました。本名は、玖磨と申します」

お久は、少し顔を赤らめて、恥じらいを隠すようにして答えた。

その仕草から可憐な優しさが感じられる。が、どことなく色気が漂っている。

海舟は、ますますお久に魅かれた。

海舟は、傘を返した後も、しばしば梶家に立ち寄り、お久の気を引くように努めた。

ついにその想いを遂げる日が来た。

その日は、おくんちの「庭見せ」の日であった。

おくんちは、長崎最大の祭りで、十月初旬の三日間行われる。この季節になると長崎の町全体が浮き立ち、町民は仕事を放り出して、祭りに夢中になる。

祭りには、各町内から踊りが奉納されるが、すべての町内が一度に参加することが出来ないので、年毎に踊町を決め、交代で奉納することになっている。

諏訪神社から出た御神輿(おみこし)が、大波止の御旅所(おたびしょ)に到着して還御(かんぎょ)する三日の間、奉納踊りは続けられ、見物人に披露される。

「庭見せ」は、通常踊町が、家ごとに家紋入りの幔幕を張り、戸障子を外してお祝いの品々を飾り立て、見物人は、これを自由に見て回るのである。いわばおくんちの前夜祭のようなもので、おくんちの始まる四日前に設定される。

「庭見せ」は、振る舞い酒も出され、町民にとって最も華やぐ時でもあった。

梶家は、その年、踊町に当っていて、「庭見せ」をしていた。

海舟は、梶家の「庭見せ」に来て酒食を振る舞われるうちに深酔いし、同家で一夜を過ごすことになった。

お久は、離れの部屋に床を延べ、そこに寝かせようとした。海舟はふらつく足で布団に倒れこみ、酔い覚めの水を求めた。

お久が、水差しを枕元に置こうとした時、海舟は、その手を引き寄せ、お久を抱いた。

お久は、一瞬ためらった。が、海舟の腕の中で、抵抗しようとする思いが消えて行く自分を感じていた。

その夜、海舟とお久は、一つになった。

梶家でも、幕臣で海軍伝習所の生徒監である海舟の身分に不満はなく、お久は、出戻りでもあったことから、娘さえよければということになって、海舟との関係を認めた。

いつしか近所の人々もお久を海舟の妻として見るよう

になっていたのである。

お久は、海軍伝習生の間では評判の美人で、誰が彼女を口説き落とすか、関心の的であった。それを海舟が見事口説き落としたのである。多くの伝習生が海舟を羨んだ。

からかい半分に海舟の恋路を邪魔する者も現れた。

「勝さん。たまにはわれわれと一緒に丸山で、パッと遊びませんか。丸山にはいい女がいますよ」

丸山は、長崎一の遊郭で、海外でも知られるほどの歓楽地である。

海舟はその手に乗らなかった。

「俺はいい。皆若いのだから楽しんできな」

伝習所取締役は、伝習生が丸山遊郭に遊びに行くことに、快く思はなかった。ところが、生徒監の海舟は、寛大であった。海舟も時折丸山に足を運んだからである。

とはいえ、お久と懇ろになってからの海舟の丸山通いはぴたりと止まった。それだけ、お久を愛おしく思っていたのである。

黒船の来航後、海軍力の不足を痛感した幕府は、オランダから教官を招き、長崎海軍伝習所を創設した。造船、航海術を学ぶための幕府機関であったが、後に日本近代化の黎明期に活躍した多くの逸材を輩出している。

設立当初の伝習生は、幕臣七十人、薩摩藩士十六人、熊本藩士五人、福岡藩士二十八人、長州藩士十五人、佐賀藩士四十八人、津藩士十二人、福山藩士四人など各藩から募り、総勢二百名を数えた。

中でも、五代才助《友厚》（後の大阪商工会議所初代会頭）。川村与十郎《純義》（海軍大将、海軍卿）。佐野栄寿左衛門（日本赤十字社の創立者）。中牟田倉之助（初代海軍軍令部長）。榎本釜次郎《武揚》（海軍卿）。などは明治新政府成立後も大活躍している。

安政四年（一八五七）幕府は、築地に軍艦教授所を創設した。後に軍艦操練所となる。海舟は、この教授所に着任する予定となっていた。

ところが、長崎のオランダ人教官が帰国交代することになったため、熟練した生徒が一名、残ることとなった。伝習所取締役永井岩之丞は、その白羽の矢を海舟に立てた。

残留要請を受けた海舟の心境は、複雑に揺れた。

幕臣である以上、幕府軍艦教授所の教授として出世街道をまっしぐらに進みたい。だが、愛しいお久にも未練が残る。結局永井岩之丞の勧めに従って長崎に残る決意を固めたのである。

海舟は、永井の勧めがお久の願いを慮った粋な配慮であることを感じていた。

お久は、今や海舟がなくてはならない人となっていた。

一日も長く一緒に過ごしたかった。だが、いずれは、別れの日が来ることは分かっていた。

それから一年余り、海舟は、伝習所の生徒監として、伝習生の指導に当たる傍ら、お久との楽しい日々を過ごした。恐らく海舟にとって、人生で最も充実した楽しい日々であったに違いない。

だが、海舟は、その平穏な生活をいつまでも続けるわけにはいかなかった。

時代は、彼を必要とし、江戸での活躍の舞台が用意されていたのである。

安政六年（一八五九）一月五日、海舟は朝陽丸で、長崎を後に江戸に向かった。

その後、咸臨丸で日本人初の太平洋横断を成し遂げ、文久二年（一八六二）には、軍艦奉行並となって、元治元年（一八六四）に再び長崎を訪れている。

その時には、お久の家の近くの筑後町の福済寺に滞在した。

六年ぶりの再会であった。

お久は、すでに二十三歳の女盛りとなっていた。二月二十三日から四月四日までの短い滞在ではあったが、海舟はお久を心から愛し、掌中の玉のように扱った。

限られた時間しか一緒にいることが出来ない。そのことを知っている二人には、一日一日が瞬く間に過ぎて行った。

海舟とお久は、命の炎が燃えつくすほど愛し合った。

別れの時が来た。お久は、海舟の胸に顔を埋め、その鼓動を聞きながら、再び会える日が来ることをひたすら願った。

一年後の元治二年（一八六五）一月、海舟は、お久が男の子を生み梅太郎と名付けたことを知らされた。

同年四月七日に慶応と年号が改まり、攘夷、開国、勤皇、佐幕を巡って国論が分かれた。海舟もその渦中にあって、長崎にも行くことが出来なかった。

だが、お久が無事男の子を産み落としたことを知らされると、よほど嬉しかったのか、その喜びを日記に記している。

慶応二年正月二十八日、お久は、二十六歳の若さでこの世を去った。

あまりにもはかない一生であった。お久の命は海舟との短い暮らしの中で、燃え尽きてしまったのである。梅太郎というたった一つの愛の証を残して旅立ったのだ。

海舟は、梶家より送られた手紙の上に顔を伏せ慟哭した。薄幸なお久を悼んですぐに弔辞を書き送っている。

「お久は、生まれつき美人で、貞節であった。田舎育ちであったが、心も行いも優れていた。学問はなかったが、和歌をたしなんでいた。みんな聞いてくれ、悲しんでく

れ二十六歳の若さで旅立ってしまったのだ」

幕末動乱の中で、徳川家の存続をかけて奔走している最中であったにもかかわらず、最愛の女(ひと)を喪った悲しみを伝えずにはいられなかったのだ。

海舟には、正妻民子の他にお久を含め四人の愛人がいた。それぞれの愛人に子供を産ませ、男四人、女五人総勢九人の子供がいる。その中で何故か、お久だけに弔辞を送っている。

忘れ形見の梅太郎は、お久の妹おミ祢に育てられた。

長崎の大商人小曾根乾堂が、後見人となり、その子の面倒を見ていた。

海舟は、明治六年四月、お久の他界後、初めて長崎を訪れた。わずか四日間の短い滞在であったが、お久の眠る筑後町聖無動寺の墓に参っている。

墓石に刻まれた「容誉智顔麗光大姉」の戒名に手を当て、その一字一字を確かめるようにまさぐりながら、在りし日のお久の面影を偲んだ。

すると、お久を見初めたあの雨の西坂、梶家の店先が、脳裏に浮かんで来た。

憂いを含んだお久の美しい顔に、儚さと薄命の影を感じていたことを海舟は、想い出すのであった。

「姉は、若くして旅立ちましたが、不幸ではなかったと思います。勝様と過ごした三年余の年月は、姉にとってすべてでした。寿命を、その短い間に使い切ってしまったのですから。人は、与えられた命をどう生きたかで、幸、不幸が決まるものだと思います」

海舟をお久の墓に案内した妹のおミ祢は、姉の墓前で呟いた。

その言葉を聞いた海舟は、少しばかり自責の念が和らいだような気がした。

この時、海舟は、梅太郎との親子の対面をし、後見人の小曾根乾堂と梅太郎を氷川町の屋敷に引き取る話をした。

乾堂は、梅太郎、祖母のエイ、叔母のおミ祢を伴って、明治六年七月、海舟邸を訪れた。海舟邸に引き渡された梅太郎は、すでに八歳になっていた。

明治三十二年一月二十一日、勝海舟は、七十七歳の天寿を全うした。

海舟は、意識の薄れて行く中で、長崎から迎えに来たと囁くお久の声を耳にしながら、静かに息を引き取った。

(完)

私の「三都物語」

新井宏

「アンダルシア」という地名には、母の胎内で聞いたような懐かしい響きがある。

スペインにもアンダルシアにも、まったく接点のなかった母が、胎児に語りかけることなど有り得ないのに、なぜかこの拘念は強まるばかりで、いつの間にか、アンダルシアの他に、ヴェネツィアやイスタンブールが加わり、エキゾチックな憧れの「三都」ができあがった。いずれの都も東西文化の融合地という共通点を持つ。

だから、私はアンダルシア→ヴェネツィア→イスタンブールと逆のコースをたどって、シルクロードの歴史に関心を持ち、それから、日本の白鳳文化・飛鳥文化や古墳文化の世界に入ったのである。

それゆえに、夫婦の海外旅行は、ヨーロッパ中心部はそこそこにして、ポルトガル、スペイン、エジプト、シチリア、マルタ、南イタリア、ヴェネツィア、オーストリア、チェコ、スロバキア、ハンガリー、ブルガリア、ルーマニア、トルコなど、ヨーロッパとビザンチン・イスラムの接点ばかりを回っている。

アンダルシアとイスタンブールは駆け足ながら二回訪れたが、ヴェネツィアはなかなか機会がなく、念願が叶ったのはやっと三年前である。だから、私の「三都物語」は、そのヴェネツィアから始める。

一、ヴェネツィア

もう三十年以上も前になるが、会社創立五十周年記念に、塩野七生の『海の都の物語』を下敷きとして書いた論文が最優秀賞となり金杯をもらった。

人口わずか十万人の通商都市国家ヴェネツィア共和国が地中海に覇を唱え続けた千年の歴史……。それは決して強大国が強大国として存在し続けた歴史ではない。むしろ弱小国としてのヴェネツィアが強大国のトルコやフランス、ハプスブルグ家に対して、弱小国に徹しきった

ことにより守り抜いた地位である。

その間、ウェネチア共和国は徹底して独裁を排除する仕組みを維持し続けていた。

しかし独裁を排除して、元首ドージェの力を削いでしまっては元も子もない。そのため元首ドージェの任期は、他の役職がほとんど一年以内なのに、特別に終身制であった。終身制の弊害を、良く承知してはいたが、元首に力を集中しなければ、国の発展などありえない。

その微妙なバランスを維持するため、ヴェネツィアは、元首ドージェの職務を監視する組織を強化し、ドージェが死亡した後には、生前の職務評価を行い、不正や財産も調べた。もちろんドージェによる後継者の指名は禁止され、新たな元首ドージェの選出には複雑怪奇な制度を採った。

とにかく、奇想天外な制度なのである。しかし、要約して言えば、籤と推挙の繰り返しを通じて、「四十一人」を選出して、そのメンバーの互選によって元首ドージェを選ぶ間接制選挙なのである。

選出のプロセスはこんな風である。

まず三十人の委員が「籤」により千五百人弱の大評議会議員(貴族のこと)の中から選ばれる。籤による選出であるからどんな人物が紛れ込むか判らないが心配いらない。それは、この三十人をさらに籤で九人に絞り、この九人が四十人を選び、この四十人も籤で十二人に減らされ、更にその十二人が二十五人の委員を選び、その二十五人も籤で九人となり、九人が四十五人を定め、四十五人は十一人に絞られ、その十一人が、実際にドージェを決める四十一人を選任するのである。

何を言っているのかさっぱり判らない制度であるが、この籤と推薦の繰り返しのなかで、最終的に選ばれる者が「ひとかどの人物」で構成されることには納得が行くであろう。

この複雑怪奇で巧妙な制度によって、有力家門といえどもドージェの位を自由にすることは難しく、ましてや、ポピュリズムに乗って、強気で短慮な人物を選んで通商国家としての柔軟性を失い、国を危うくするようなことも防げた。

政治のように、利害をバランスよく調整することが最大の眼目である場合、反対派が正義を掲げポピュリズムに乗って、一気に台頭することは、むしろ危険である。幼稚な正義感だけでは、複雑に絡み合った利害の調整など手に負えないことは、今の民主党が如実に示している。だから、直接選挙制は民主政治の理想とされながら、衆愚政治に陥る危険性と表裏の関係にある。思慮ある国民なら、ヴェネツィアほどの間接制とまでは行かなくとも、ポピュリズムに振り回されない制度を研究してみなければなるまい。

それを具体的に示しているのがヴェネツィアの歴史なので、『海の都の物語』をはじめとして関連の歴史書をしばしば乱読していた。

だから、わずか巾が三キロメートル、長さにしても七キロメートルしかないこの小さな島の地図や歴史がすっかり頭に入ってしまった。いや、少なくとも主観的にはそんな気分になっていた。そのためか、憧れのヴェネツィアの路地に迷い込んでも、それほどの感興を催さない。

それでも、島々を結ぶ連絡船に乗って、潟内に敷かれた迷路のような水路を行き来すると、海の要塞ヴェネツィアを十分に体得できる。潟の地理を知らない外国勢が浅瀬に乗り上げて、自滅してしまったのも無理がない。そんなことを思いながら、潟の外郭を形成しているリド島に渡って昼からワインを飲み悦に入った。

ぜひ見たいと思っていたのが、サン・マルコ寺院の屋根の上にある青銅製の四頭の馬である。どこを旅行しても、金属製の遺物を見て回るのを趣味としているが、この青銅馬は逸品中の逸品で、類例としては始皇帝の銅車馬坑から出た精細なつくりの四頭の馬しかない。しかも始皇帝の馬車は実物の二分の一なのにサン・マルコの馬は等身大で、体積・重量では一桁も大きい。

初めはローマのネロ皇帝の凱旋門上を飾っていたらしいが、遷都と共にイスタンブールの競技場に移されていたもので、一二〇四年の第四回十字軍でヴェネツィアが戦利品として持ち帰ったものである。

さて、その第四回十字軍である。

ローマ法王インノケンティウス三世の呼びかけで始まった第四回十字軍は、もともとはシリアやパレスチナを支配するアイユーブ朝の本拠地カイロを攻撃する予定で、海路輸送をヴェネツィアに依頼していた。ところが、十字軍参加者は一万人ほどで予定の半数にも満たず、約束の費用、すなわちフランス国王の年収の二倍にも相当する八万五千マルクを、とてもヴェネツィアに支払える状況ではなかった。

そこで、ヴェネツィア共和国の元首ドージェのエンリコ・ダンドロは大芝居を打つ。自国の貿易路の確保と拡大のため、ヴェネツィアも十字軍に参加して、キリスト教国の東ローマ帝国を攻略すると言う奇策を提示したのである。この時、東ローマ帝国は内紛状態にあり、十字軍の力を利用すれば、ギリシャ正教の東ローマ教会を抑え、ローマ教会と統合させて、イスラムに対抗できるとの建前であった。

たとえ建前がそうであったとしても、れっきとしたキリスト教国の東ローマ帝国を襲うという背教的な行為はキリスト教界から一斉に非難された。しかし、ヴェネツィアは現実的な利益を優先し悪びれることがなかった。

その結果、イスタンブール(本来はコンスタンティノープルと記すべき場合もあるが以下イスタンブールで通す)は、ヴェネツィアの海側からの果敢な攻撃と、帝国

内の内紛によって、むしろ優勢な兵力を抱えながら、皇帝が逃げだしてしまい、新皇帝を選んで和解してしまう。これが第一次攻城戦の結果であった。

自らも戦闘に参加した老齢のダンドロの目標は達成されたかに見えた。しかし、東ローマ側の教会、すなわちギリシャ教会がローマ教会にすんなりと統合されるはずがないし、新皇帝も約束の契約金を支払えない。その上、反十字軍側の勢力が強くなり、新皇帝を殺害するに及んで、第二次攻城戦が始まった。

経過は第一次の時と似ていて、金角湾側の城壁の一部を破られたイスタンブール側は、今度も皇帝や大司教が逃げ出してしまった。そのため、本格的な市街戦をするつもりで城内に乱入した十字軍は抵抗らしい抵抗も受けずに、城内を簡単に制圧した。そして十字軍の慣習によって、三日間の略奪が許された。

それはキリスト教徒に対しても、対イスラム十字軍の時と何らかわるところのない略奪・暴行・強姦・殺戮であった。異なっていたのは、イスタンブールが比喩するもののないほどの富を持っていたことである。

かくして、東ローマ帝国はいったん滅び、フランス人による「ラテン帝国」が成立する。

勝利したヴェネツィアは、賢くもラテン帝国の経営には深く関与せず、通商路の確保と拡大で十分すぎる成果を得て満足して、通商国家としての基礎を固めた。

しかし、ラテン帝国は諸侯の寄合い所帯であり、周辺国との関係もうまく維持できず、自壊に向う。それでも何とか半世紀ほど政権を維持していたが、その海軍が出動している留守を東ローマ亡命政権に襲われて、一二六一年には滅亡させられてしまう。

もしかしたら、十字軍が、純粋に宗教心に基づく行為だったと思っているのは、現代人の一部だけかも知れない。十字軍の実態を知れば、この悪名高い第四回十字軍のように、一時的な勝利を得ても、結局はイスラムと対峙する地域のキリスト教国家の力を大きく削いでしまう結果をもたらしている。本当に勝利したのはヴェネツィアだけだった。

東ローマ帝国を回復した亡命政権ではあるが、もともと弱体であった。昔日の面影はなく、ますます弱体化し、帝国とは名ばかりの小国に転落してしまう。

かくして、一四五三年にはオスマン帝国メフメト二世のイスタンブール攻撃によって東ローマ帝国は千百年の歴史を閉じてしまい、その結果として、東ヨーロッパの大部分がイスラム支配下に入ってしまうのである。

朝日うけ　豪華客船　潟に入る
近よるなかれ　浅瀬の要塞

二、アンダルシア

アンダルシアの場合も、もう三十年以上前になるが、イベリア半島最南端のアルヘシラスに、ステンレス鋼の工場を訪れたことがある。その頃、海外に出ることなどあまりなかったのに、偶然とは言え、アンダルシアをこの眼で実見できたのである。胎内の懐かしい響きがよみがえってきた。

アンダルシアには、コルドバ、セビーリャ、カディス、アルヘシラス、マラガ、グラナダなどの著名な観光地があるが、出張途中のこととて、とにかくアルヘシラスからマラガ、グラナダを二日間で走り抜けた。

しかし、響きの柔らかいアンダルシアという語感とは異なり、万年雪を頂くシエラ・ネバダ山脈の麓に広がるアンダルシアは、強い日差し、鉄分を含んだ赤土の台地、乾燥地に育つオリーブの木、そして道行く人の貧しさに彩られ、荒涼としか云いようのないものであった。

そもそも、アンダルシアの語源はバンダルの発音に由来するという。ゲルマン民族大移動の先陣を切って、イベリア半島からアフリカまで駆け抜けたバンダル族はバーバリアン(野蛮人)の代名詞となっているように、麗しきアンダルシアのイメージを損ねる。

しかもナスル朝グラナダ王国の都グラナダのアルハンブラ宮殿には、入場時間に遅れてしまう失態もあって、代わりにグラナダで最も古いアルバイシン地区を見て回る始末であった。

しかし、それがいつしか、忘れがたい光景と化して、妻と共に十年前に再訪する。今度はツアーに参加したので、アンダルシアだけでも七日間の比較的ゆったりした日程であった。

セビリアではコリア・デル・リオという田舎町まで足を伸ばし、支倉常長の銅像を見て、コリアの名称からの連想として、文禄慶長の役で、奴隷として売られた朝鮮人に想いをはせた。町にはヤポン姓を名乗る人たちが八百人もいると言い、最近になって、DNA鑑定をして日本人の後裔であるか否かを調べるプロジェクトが進んでいるという。

もちろん、今度こそのアルハンブラ宮殿であった。しかし、これも予習が過ぎていて、新しい感激は少ない。それでも水路を引き噴水を配した小作りで瀟洒な宮殿は、日本人の感覚には良く合う。砂漠の民が築いた楽園を想う。

十三世紀に入ってレコンキスタ(国土回復運動)が進む中で、グラナダを都とするナスル朝だけが最後のイスラム王朝として生き残っていた。しかし、カスティリャ女王イサベル一世とアラゴン王フェルナンド二世の結婚により、実質的に両国が統合されると、もはや運命は決まってしまう。

ナスル朝は、一四九二年にはグラナダを明け渡し、スペイン両王の王国によるイベリア半島の統一が達成される。この年、イサベル女王の援助を得たコロンブスが新大陸を発見する。

アルハンブラ宮殿にとって幸いだったのは、その強固な城砦が攻撃に十年間も持ちこたえたことで、降伏に際してカトリック側から「寺院や施設を存続させて宗教の自由を認める」という譲歩を引出したことである。その結果の無血開城により、現在でも多くの建築や文化が残り、イスラム王朝最期の栄華を偲べる。この地を気にいったイサベル女王は、自身の遺言により、アルハンブラ宮殿に眠る。

この両王のもとで始まったスペイン王国は、やがて娘のファナ(後に発狂してファナ狂女王と呼ばれる)がハップスブルグ家のフィリップと結婚して、後のカール五世(カルロス一世)を生み、大航海時代の大帝国に発展する。

もっとも、アルハンブラ宮殿は『リップ・バン・ウインクル』の著書もあるアメリカ公使館の書記官アービングが『アルハンブラ物語』を書いた一八三二年には、かなり荒れ果てていたという。幻想的な物語を織りまぜて、詩情ゆたかに綴られたこの物語によって、アルハンブラ宮殿は世界に知られ、荒廃から救われたとも云われている。

そこには小泉八雲の「怪談」のような話も登場するが、あるいは八雲がアービングから影響を受けていたのかもしれない。

そんなことなら誰でも想像しそうなことであるが、小泉八雲の評伝を見ても出てこない。そうなると少し拘る。そして、小泉八雲の「幽霊」の奥註に「怪談其他数多の同氏が著書はヲシントン、アービングの如き流暢なる英文を以てよく我國の人情風俗を書き表はしたるものにして泰西の読書社會は雙手を擧げて氏の著作を歡迎し氏を以て世界第一流の文學家となすに至れり」とあるのを知った。

『アルハンブラ物語』と同じようにフランシスコ・タルレガが一八九三年に作曲した『アルハンブラの思い出』というギター曲もアルハンブラの詩情を高めたのは疑いない。

『禁じられた遊び』と共に有名なこのギター曲を、小学校五年生になる孫がもう奏でる。そう言えば、夫婦でアンダルシアに遊んだ頃、妻はまだ見ぬ孫を勝手に女の子だと決めて、可愛い女児服を買っていたのを思い出す。

調べてみると『アルハンブラの思い出』は、長らくラジオのバックグランドミュージックとして用いられていたと言う。あるいは、それを胎内で聞いたと美しく誤解したのかも知れない。

落日を　アンダルシアの　地平線
支えきれずに　赤く燃ゆ

三、　イスタンブール

今、中国を抜いて世界で最も経済成長率の高いトルコを十五日間のツアーで訪れたのは五年前である。その三年前にもブルガリア・ルーマニアの十五日ツアーの行きと帰りにイスタンブールに立ち寄っているので、本の知識と土地勘や方角感は、ある程度一致している。

メフメット二世が金角湾の鉄鎖による封鎖を突破するため、「船山を登り」侵入した経路なども、地形を見てガラタ塔の背後だと納得する。

歴史的なことは言わなくても、ヨーロッパとアジアの境はイスタンブールのボスフォラス海峡である。トルコは経済的にはEU加盟国の資格を十分に満たす優等生でありながら、ヨーロッパ側はトルコを排除したがっている。イスラムに対する違和感がそうさせているのであろうが、歴史的には、アジアへの恐怖感も引きずっているのであろう。

コンスタンティヌス帝が三三〇年にこの都市を新しいローマの首都と定めてから、一四五三年にオスマントルコによって滅ぼされるまで、東ローマ帝国は形式的にはローマ帝国の継承者であり続けた。三九五年に東西ローマに分裂して、いったん西ローマ帝国が成立しても四七六年に滅びてしまったので、唯一のローマ帝国は、結局、ローマの地とは無関係にイスタンブールに都を置いていたのである。

東ローマ帝国の文化を一般的にはビザンチン文化という。

ラテン文化に加えギリシャ文化を色濃く継承し、蛮族に蹂躙された西ヨーロッパに較べたら遥かに洗練された文化を花開かせていた。地域的には、アンダルシア、シチリア、イタリア、ギリシャ、ブルガリア、ルーマニア、ロシアの文化の基層をなし、その後、イスラム文化を重畳させて、西ヨーロッパ文化を遥かに凌駕する文化の遺産を伝え、後には西ヨーロッパに多大な影響を与えている。ルネッサンスもその流れの一環である。

ヨーロッパの周辺地域を歩くと、ビザンチン文化やイスラム文化を色濃く残しているところばかりである。イスタンブールはもとより、ヴェネツィアもアンダルシアもその重要な役割を担った地であった。

東ローマ帝国の最盛期は皇帝ユスティニアヌスの六世紀中頃である。四十一・五メートルの高さを誇る聖堂アヤ・ソフィヤや地下宮殿ともいうべき巨大な地下貯水も彼の手によって作られ、帝国の版図もこの頃に最大となった。

ユスティニアヌス帝が強大な権力を握ったのは、「二

身で細面、眼が大きく、知的な印象はあるが、私の基準では美人の範疇には入らない。むしろ、付き従う侍女の中に美人が目立つ。

ところで、このモザイク画がイスタンブールにあると思ったら間違である。実は、ヴェネツィアのやや南、アドリア海に面したラベンナの聖堂サン・ビターレの壁画なのである。

ラベンナはかつて西ローマ帝国の都であったが、この頃、東ローマ帝国の支配下に復していた。しかも、この聖堂がつくられたのが、ユスティニアヌス帝の在位中であるから、皇后テオドラのモザイク画が残っていたとしても何の不思議もない。それにもかかわらず、驚きを感じるのは、私の勉強不足に過ぎないとしても、北イタリアまでビザンチン文化が支配していたことの意外性によるのであろう。サン・ビターレ聖堂はビザンチン建築の代表作なのだそうである。

さて、ここで、ちょっとイスタンブールの地形を眺めてみよう。

イスタンブールは南東側と北側をマルマラ海と金角湾に囲まれ、南西側だけに陸地が続く。そのため、地上側にだけ頑強な城壁を築けば難攻不落の要塞となる。事実、帝国の初期にテオドシウス帝が築いた大城壁は良く機能し、第四回十字軍の時こそ、城内の内紛で落城したものの、それまで外敵をことごとく除けてきた。

カの乱」を皇后テオドラの叱咤激励によって鎮圧したからである。戦車レースを巡る小暴動の裁定不満を契機に、皇帝罷免を要求する大暴動が発生した。なにやら現代のサッカー暴動に似るが、それが権力闘争と結びつくと、大きなエネルギーとなる。

皇帝は帝都から脱出することを考えた。しかし、ここで皇后テオドラは「帝衣は最高の死装束である」といって徹底抗戦を主張して、暴徒を三万人も殺害して鎮圧した。

当然のことであるが、テオドラは女帝と言われるほどの権力を持つ。もともとは、淫らなショーへ出演し娼婦まがいのことをして生計を立てていたというが、ユスティニアヌスが一目惚れして、周囲の反対を押し切って結婚してしまう。

なぜか権力者は娼婦まがいの女を皇后にする。ロシアの皇帝ピョートル一世の皇后となったエカチェリーナも、ルイ十五世の公妾デュ・バリー夫人も娼婦の出である。ナポレオンの皇后ジョセフィーヌさえ、いわば高級娼婦であった。

さて、ユスティニアヌスが一目惚れして、周囲の大反対を押し切り正式な皇后として迎えたテオドラはさぞかし美人であったろう。そのモザイク画が残っているのである。

侍女たちに囲まれて中央にすくっと立つテオドラは長

しかし、ついに最後の時がやってくる。日の出の勢いのオスマントルコ・メフメット二世がイスタンブールを彼の都として望んだのである。

その頃、東ローマ帝国とは名ばかりで、実質的に小国に転落していたイスタンブール側はキリスト教国からの外国人を加えても七千人の兵力にすぎなかった。それに対して、メフメット二世は十万余を投入し、一四五三年の四月初めから攻城を開始した。

しかし海という天然防壁と強固な大城壁に守られたイスタンブールは一ヶ月以上たっても、なかなか落ちない。結局は、メフメット二世が準備した秘密兵器ウルバン砲が大城壁に穴を開けたのを契機として、城内は略奪と殺戮の場となり落城した。いつもの風景である。

ところが、イスタンブールを自己の都として望んだメフメット二世が正式に入城すると秩序が直ちに回復される。イスラム法にしたがって、市民達は身柄を保証され、ここにオスマントルコの都の大規模な建設が始まり、イスタンブールは再び、東西交易の大センターとなるのである。

余談になるが、ウルバン砲（メフメット二世砲とも言う）というのは、ハンガリー人のウルバンが設計したものであるが、その同型が英国のウールウィッチ博物館に残っている。長さ五メートル、重さ十九トン、口径六十四センチの鋳銅砲で、五百キログラムの石弾を一マイル

も飛ばせたという。戦艦大和の主砲口径が四十四センチであったことと比較してみると如何に巨砲であったか良くわかる。メフメット二世はこの砲を大城壁の正門ロマヌス門の前に備え付け、非効率的ながら根気よく砲撃して、遂に穴を開けるのに成功したのである。

この砲撃を契機として、ヨーロッパで大砲の時代が始まる。

古都守る　金角湾の　鉄鎖避け
オスマン艦隊　ガラタの丘ゆく

関東管領始末記⑦

覇権奪取

千坂精一

一

足利尊氏は、湊川で楠木正成を斃したものの、新田義貞を討ち漏らしたことが残念でならなかった。

（間髪を容れず京へ攻め上らねば悔いを千載にのこす）

そう決断した尊氏は、直ちに進撃を開始させた。

余勢を駆った軍団は疲労の色も見せず京へ攻め入った。

尊氏の命を受けた直義がすかさず西坂本攻撃に向かったが、比叡山と琵琶湖に挟まれた狭い地形なので大軍は容易に動きがとれず、押したり押されたりの混戦のなかで後醍醐帝の重臣千種忠顕が雲母坂で戦死した。

千種忠顕は後醍醐帝の隠岐配流に従い、脱出成功の手柄により重用されていたのだが、公家の身で武事を好み先頭に立って活躍をつづけていてついに命運尽きた。

直義の坂本攻めが埒の明かぬのに痺れを切らした尊氏は、ついに持明院統の光厳上皇を奉じて入京した。

光厳上皇は、後醍醐帝が叡山の麓東坂本へ退去のとき持明院統の後伏見法皇と光厳上皇を人質にとって同行させたが、光厳上皇は途中北白川のあたりで急病と称して離脱し、法勝寺に入って休息したあと尊氏のいる東寺（京都市南区九條町）に逃れてきていた。

尊氏が坂本攻撃を繰り返せば、間隙を狙って新田義貞も京へ攻め込んできたが敗れて坂本へ引き返していた。

その京での激闘の最中に、隠岐島に配流されていた後醍醐帝を伯耆國船上山に迎えて倒幕の兵を挙げた豪族名和長年が、三條のあたりで敗死してしまった。

戦乱の治まらぬなか、尊氏は光厳上皇に弟君豊仁親王の即位を奏請し、神器なく践祚して光明帝となった。

決着がつかぬまま四箇月が経ったころ、尊氏はひそかに後醍醐帝の許に使者を送り、申し入れを伝えさせた。

「さきに近臣の讒言によって勅勘を蒙りましたおり、私は出家して無罪を認めていただきそのうえで死のうと思ったのでございますが、義貞、義助らが帝のお怒りを口実に日ごろの鬱憤を晴らそうとしましたのでやむを得ず兵を挙げ、かかる天下の大乱に及んだのでございます。しかし、これはまったく帝に対し奉って叛逆を企てたのではございません。ただ義貞の一類を滅ぼして今後の讒臣を懲らしめようと思っただけのことでございます。もし私の誠意をお認めいただけるのでしたら讒言を蒙ったことをお憐れみあってなにとぞ都にお帰り下さいますようにに。お供の公家や降参する者については罪の軽重を問わずすべて本官、本領に復し、天下の政を公家にお任せいたしましょう。なお、これらの申し入れについてお疑いを晴らすために別に一紙をご覧に入れます」

そう言上して、起請文を帝の側近浄土寺の忠圓僧正に差し出した。

後醍醐帝はこれを見て、

「起請文まで差し出すからにはよもや偽りはあるまい」

そう判断すると、重臣たちには相談せずに一存で、

「都へ帰る」

ことを尊氏の使者に直接即答した。

帰ってきた使者から後醍醐帝の勅答を聴いた尊氏は、

「帝は思慮深い御方だが案外簡単に欺くことができた」

そう言って北叟笑んだ。

尊氏はさっそく、帝側の然るべき大名たちに伝手を求めて密書を送り、味方になるよう誘い込んだ。

このようにして後醍醐帝帰京計画は密かに進行した。

尊氏に降参した者は今路や西坂本へ行って待機した。

そのなかには新田一族の江田行義、大館氏明もいた。

彼らは一方の大将であったから当然義貞と死生をともにすべき筈であるにも拘らず降参側にまわり、十月九日の明け方義貞に無断で帝の御座す山上へ登っていった。

その動きをまったく知らぬ義貞の許へ洞院實世から、

「只今主上が京へお帰りになるといって供する者たちをお召しになっておられまするが、ご存知でござるか」

そう問い合わせる使者がやってきた。

面談した義貞は、平然として、

「そんなはずはござらぬ。お聞き違いでござろう」

自信満々に答えて一笑に付した。

帝が無断で行動するはずがないという自負があった。

再三足利尊氏、直義兄弟に敗れてはいるが、楠木正成亡きあと帝が頼みにしているのは自分だけだという思い上がりが、義貞の判断を屢々誤らせていた。

義貞の傍らに控えていた側近の堀口貞満が、

（そういえば）

不審の廉ありと思案をめぐらし、義貞に、

「この明け方、江田、大館両名が用もないのに根本中堂へ行くといって山を登って行きましたのは怪しゅうございまする。それがしが様子を見てまいりましょう」

そう言うと郎党に着せる鎧を摑んで肩に懸け、馬を飛ばして後醍醐帝の許に馳せつけた。

山上近くで馬を降りてあたりを見渡すと、公家たちが出発準備に慌ただしく、すでに引き出された帝の輿のまえに女官や近臣たちが跪き、出発直前の様相であった。

貞満は形振り構わず鳳輦の輿の轅に取り縋ると、御簾の前に平伏して、

「都へお帰りになるとの噂を耳にいたしましたが、主人義貞は知らぬと申しますので、聞き違いかと思っておりましたが、この御様子ではやはりまことでござりましたな。義貞にどのような不義があってこれまでの忠節を見限られ、大逆無道の尊氏にお心を移されたのでござりまするか。義貞は不肖の身ながら綸旨を奉じて鎌倉幕府を滅ぼし、隠岐から帝をお救い申し上げました。その後尊氏が叛逆いたしましてからは死を賭して戦うこと数知れず、一族百三十二人、郎従八千余人を喪いました。さりながら、都での数度の戦いにわが軍が敗れましたのはわが主人が合戦下手なのではござりませぬ、おそれながら、帝の御徳に欠けるところがおありなのか、味方に馳せ参じる者が少なかったからではござりますまいか。ともあれ、当家長年の忠節を捨てて京へお帰り召されるのでしたら義貞はじめ一族五十余人の首を刎ね胸を割いてからにしていただきとうござりまする」

そう訴えた。怒りに震え涙ながらに道理を説く貞満の言葉に、後醍醐帝はたじろいで誤りを悔いる様子を見せ、供奉の人々もみなその言い分をもっともと思い、貞満の主人を思う忠義に感じて頭を垂れてしまった。

そこへ義貞、義顕父子と弟脇屋義助が三千余騎を引き連れて馳せつけ、心中の怒りを抑えて冷静を装い礼儀正しく居並んだので、後醍醐帝も顔を和げて義貞を宥め、

「貞満の怒りももっともだがそなたを見捨てるわけではない。天運いまだ至らず兵も疲れているゆえ尊氏といったん和睦して時を待とうといたしたまでじゃ。このことを内々知らせておきたかったのじゃがそなたが都へ戻るのはよくなかろうと考えあとで話そうと思ったのじゃ。そなたは譲位する恒良と尊良も奉じて同志のいる越前國へ下り、兵力を養って大軍をおこし再起を図ってくれ」

そう涙ながらに説得した。

涙に咽ぶ帝の言葉に、義貞は従うほかはなかった。

尊良親王が鎌倉幕府によって土佐（高知県）に流されたとき、十歳未満だった恒良親王は流罪を免れていた。

尊良の生母は側室藤原爲子だが、恒良の生母は後醍醐帝の寵を一身にあつめた才女の側室阿野廉子であった。

さっそく恒良親王に受禅の儀式がおこなわれ、翌十日に義貞は両親王を奉じて北陸路を目指し落ちていった。

これが後醍醐帝と新田義貞との永久の別れであった。

つまり後醍醐帝は、ここにいたって足利尊氏に心を移し、忠勤を励んできた新田義貞を見限ったのである。

義貞とその一統が立ち去ったあと、山を下った後醍醐帝の一行が法勝寺の近くまできたとき、五百騎を率いて迎えに出ていた足利直義が三種の神器の引渡しを要請したので、予て用意しておいた贋物を手渡した。

恒良親王への譲位も義貞を宥めるための手段だった。

後醍醐帝は、新田義貞と足利直義を欺いたのだ。

難を逃れられて吻とした後醍醐帝だったが、つぎに待ち構えていたのは足利尊氏の非情な処置であった。

御所に迎えられるのではなく、隣接する御苑のなかの古い御殿花山院に押し込められてしまったのである。

四門を閉じ、警固の武士がつくという幽閉同然のはからいで、身の回りの世話も准后阿野廉子とその侍女二、三名に限られ、隠岐での流人生活と同様であった。

供奉の公家は官職を解かれ、武士のなかには斬罪に処された者もあって、まさに敗者の処刑であった。

後醍醐帝は、まんまと尊氏に謀られたのである。

恒良親王を奉じた義貞の軍勢は尊良親王とともに琵琶湖西岸を北上して海津から近道の西近江街道を経て敦賀（福井県）を目指そうとしたが、足利方の越前守護斯波高経の軍勢が塞いでいるのでやむなく北岸の塩津濱へ出て北國街道を行く迂回路を辿り、栃ノ木峠から木ノ目峠をまわってようやく越前國金ヶ崎城（敦賀市金ヶ崎町）に到着したが、途中山路の深雪に凍死者が続出した。

尊氏は幽閉した後醍醐帝に太上天皇の尊号を贈った。

ここで尊氏は後醍醐帝が光明帝に譲位したかたちをとることによって、両統迭立を復活させたのである。

こうしておいて尊氏は、光明帝の宣旨を受けて鎌倉ではなく京で幕府をひらくと、建武式目を定めた。

そのあと尊氏は後醍醐帝の皇子成良親王の立太子礼を執行した。大覺寺統後醍醐帝から皇位継承した持明院統光明帝のあとは大覺寺統成良親王の継承が筋であった。

だが後醍醐先帝は裏切った尊氏を信用せず、十二月二十一日に側近刑部大輔景繁の手引で密かに神器を携えると夜陰に紛れて花山院を脱出して吉野に逃れた。

ここに、世はまさに両統分裂して一天二君となり、朝廷も京と吉野の二箇所になったことから、両所の位置をとってのちに〈南北朝時代〉といわれることになる。

二

後醍醐帝が神器を携え密かに花山院を脱出して吉野へ逃れたとの報は、吹雪と寒気の道中を克服してようやく敦賀に到着し気比彌三郎大夫率いる三百騎に迎えられて金ヶ崎城に入った新田義貞の許にも届いたが、足利方の斯波高経、高師泰、今川頼貞、細川頼春らの軍勢に遠巻きされていて呼応するのは不可能な状態であった。

義貞は足利軍に包囲されるまえに兵力の分散を考えて嫡男義顕を北国勢二千余騎とともに越後國へ、弟義助を千余騎とともに杣山城（南条郡南越前町）へ配置した。

分散によって兵力は弱体化するが、そのかわり籠城軍と呼応して包囲軍を挟撃できる利点があった。

義助は越後國へ行く義顕と同行して杣山に向かった。

城に近い鯖並の宿（南条郡南越前町）で地元の豪族瓜生保、重、照兄弟が歓迎してくれたので心強く思ったが、ほどなく足利方に寝返られ追い出されてしまった。

義助と義顕はやむなく金ヶ崎へ引き返し、夜陰に紛れて包囲網を掻い潜り無事に城へ入ることができた。

包囲軍の弛緩を知った尊氏は烈火の如く怒り、大軍を繰り出して海陸双方から総攻撃をかけさせた。

金ヶ崎城は敦賀湾に突き出した岬に築かれていて、三方は海で背後は急峻な山という地形に恵まれていた。

攻め倦む足利軍に嫌気がさした瓜生兄弟が杣山城に帰ってしまったという報が届いて城兵たちに一縷の望みが出たものの、食糧が乏しく深刻な状態になっていた。

ついに部将たちの愛馬まで殺して飢えを凌ぐというところまできていて、あと十日も持ち堪えられるかという不安に追い込まれていたのである。

（このままでは自滅する）

義貞は、座して死を待つより密かに城を脱出して杣山に行き、瓜生兄弟の協力を得て軍勢を集め、背後から足利軍を攻撃して活路を開こうと考えた。

ことは急を要する。三月五日の夜半、義貞は弟義助と僅かな人数で海側から城を脱出して杣山に向かった。

だが、義貞が恃む瓜生兄弟はこのときすでに足利軍の高師泰勢に攻められ、敗れ去ってしまっていた。

「馬が見えないのは、食べてしまったに違いない」

そう察知した尊氏は、翌六日に総攻撃を命じた。

ここ十日ほど満足に食べていない城兵たちは、太刀も振るえず弓もろくに引けない有様だったから堪らない。

城に残っていた由良具滋、長濱顕寛の両将は、父と叔父の留守をまもる新田義顕のところへやってきて、

「敵はすでに一の木戸を破り二の木戸まで迫っておりますが、兵士は疲労困憊していて防げずもはや絶望でございます。急ぎ東宮（恒良親王）を小舟にお乗せしてどこぞの海辺なりとお逃がし申し上げましょう。残った方々はひとつ所に集まってご自害なさるべきと存じます。そのあいだわたくしたちが攻め口へ行って防戦いたしまする。見苦しいものはみな片付けて海へお棄て下さい」

そう言い終えると二人は立ち上がったが、飢えのため満足に歩くこともできない状態だった。そこで二の木戸の脇に射殺されている戦死者たちの股の肉を切りとらせて両将はじめ二十余人に与えてひと口ずつ食べさせた。

それでどうやら戦えるといった有様であった。

もう一人の部将河野備後守も搦手から攻めてくる足利

軍を防いで半刻（一時間）ばかり戦ったが、ついに力尽きて部下の三十二人とともに切腹して果てた。

こうなると、もうどう踏ん張っても望みはなかった。

義顕は城に残っている尊良親王の許に行き、

「戦いは最早これまでござります。われらは名を惜しむ武家生まれゆえここで自害いたしますが、宮は敵陣に行かれてもよもや亡き者にされる虞はござりますまいゆえこのままここにおいでなされますように」

そう告げると、尊良親王は爽やかな笑顔をみせて、

「帝が都へお戻りになったとき、わたしを総大将にそなたたちをわが股肱の臣となるようにと定められた。なのにそなたたちがいなくてなんの総大将たり得よう。わたしもここで自害しあの世で怨みを晴らそうと思う。そもそも自害とはどのようにいたすものか。作法を教えよ」

思い掛けない親王の言葉に、義顕は涙を抑えて、

「自害とは、このようにいたすものでございます」

しずかに答えながら刀を抜いて逆手に持ち、左の脇腹に突き立てると右脇の肋骨二、三本にかけてぐいと掻き切り、その刀を抜くと親王の前に置いて息絶えた。

尊良親王がその刀を手にとろうとしたが柄に付着した血糊で滑って握れないので、衣の袖に巻きつけて白い肌を晒すと、胸の辺りに突き立てて義顕の枕辺に斃れた。

後醍醐帝の第一皇子はこのとき二十七歳であった。

そのころ由良具滋、長濱顕寛の両将も城門を開いて戦い、喉が渇けば己れの疵から流れ出る血を啜り、戦死者の肉を食べて力をつけるという凄惨な地獄絵であった。

その様子が兵士たちには未練がましく見えるらしく、

「大将は思い切りよく自害して果てるものですぞ」

見兼ねてそう迫ったが、由良も長濱も承知せず、

「おなじ死ぬなら、敵の大将と差し違えて死ぬのだ」

そう言い張って攻撃の手を止めず討ち死にして果てた。

まことに酸鼻をきわめた金ヶ崎の籠城戦であった。

このとき、小舟で城を脱出した恒良親王も足利軍に捕えられて都へ送られ、直義に毒殺されてしまった。

しかし、これで新田軍は潰滅したわけではなかった。

弟義助とともに瓜生兄弟斃れたあとの杣山城に身を潜めていた義貞は、足利軍に敗れて諸々に隠れていた将士を集めて立て直しを図りその数三千余騎にまでなった。

尊氏は越前守護の斯波高經、家兼兄弟に北陸勢を預けて越前國府武生（越前市）の府中城に向かわせた。

それから数箇月のあいだ小競り合いがつづいたが、無勢の新田軍の遊撃戦の繰り返しで決着がつかなかった。

そうこうするうちに新田軍に加勢する者が出てきた。

なかでも平泉寺（勝山市）の衆徒たちは三嶺（鯖江市）に城を構えて義貞に束ねる部将を求めてきたので、義貞は弟義助に数百騎をつけて向かわせた。

こうして勢力を盛り返してきた新田義貞は、北陸地方

の征服を目指して健闘をつづけながら延暦寺とも連絡をとって京へ進攻する機会を窺っていた。

これらのことは奥羽鎮撫に当たっている靈山城（福島県伊達市）の北畠顯家にも報らされたので、顯家は、（後れてはならじ）

急拠兵を集めて進撃を開始し、白川の関（同県白河市）から一路西上して八月十一日に鎌倉に到着した。

鎌倉をあずかっていたのは尊氏の嫡男義詮であった。十一歳の義詮は健気にも徹底抗戦を主張したが、（衆寡敵せず）

を理由に部将たちは鎌倉を明け渡してしまった。

勢いに乗じた顯家は、鎌倉に留まることなく、正月二日に京を目指して進撃を開始した。

顯家は、北近江から越前へ行き新田義貞軍と合流して京へ攻め込もうと考えていたのだが、義貞に戦功を奪われはしないかという疑念が生じて単独で京へ向かった。

ところがそれが裏目に出て、美濃國に入った途端伊吹山麓の青野原（関ヶ原）で桃井直常らの軍勢と出会って敗北を喫し、京へ行けずに伊勢國を迂回して奈良へ入ったのだがここでも高師直の軍勢と戦って河内國に敗走、奉戴していた義良親王は帝の御座す吉野へ逃れた。

その後、北畠顯家は摂津國天王寺で細川頼氏軍を破ったものの阿倍野で敗れ、さらに堺浦石津で高師直軍と激突して潰滅し討ち死にした。僅か二十一歳であった。

二

北畠顯家の戦死を知らぬ新田義貞は、杣山城にあって北陸統一を目指し懸命に活躍していた。尊良親王を金ヶ崎城で見殺しにしたことは万死に値する呵責であった。

名誉挽回を図る義貞は、斯波高經の籠もる足羽城（福井市足羽）攻略にかかったが、なかなか手強かった。

義貞は先祖伝来の根拠地越後國から呼応した大軍が越中、加賀を抜け破竹の勢いで国境まできているとの報に勇躍出陣したのだが、足羽城は容易に陥ちなかった。

そんなところへ、吉野から後醍醐帝の勅書が届いた。

「八幡山の籠城軍が救援を求めてきている。北国平定を一時差し置いて、急遽都へ攻め上るように」

それは後醍醐帝直筆の緊急指令であった。

八幡山というのは石清水八幡宮のある山ということであろう。その山は男山といい標高一四二・五メートルの小高い丘の頂上にある八幡宮を利用して男山城とした。

北畠顯家が奈良般若坂で敗れたとき、摂津國へ向かう顯家とわかれて北上した弟顯信軍と、新田義貞の二男義興軍が布陣していたが、高師直軍に攻められていた。

義貞は、当面の敵斯波高經が気掛かりだったので、三千余騎を手許に残し、越後軍を加えた二万余騎を弟義助に預けていそぎ京へ先発させた。

義助率いる新田軍が敦賀まできたとき、高師直が男山城を火攻めしたという噂が飛び込んできた。

源氏の守護神である石清水八幡宮を、高師直が焼き討ちしようとは、信じられぬことであった。

これは短期決戦を挑む師直の先制攻撃だったのだが、主家の守護神を焼き払うことなど信じられぬ義助は、真偽を確かめねばならぬと進軍を停止させてしまった。

兄義貞が勾當内侍に心を奪われて西国へ敗走する尊氏への追撃がおくれて勝機を逸したのと事情は違え、状況を把握してからとした逡巡が戦機を逃してしまった。

義貞はやむなく義助軍を引き返させると、越前を平定してから京へ上ろうと考え、斯波高經討伐に集中した。

足羽城ひとつに手を焼いているのは、堅固だというだけではなくこの城を中心にして近くに点在する七つの城が連繋して陽動作戦をとっているからであった。

なかでも藤島城（福井市藤島町）が手強かった。

斯波高經が藤島荘を平泉寺へ寄進して衆徒を抱き込み、新田方から寝返らせて藤島城に立て籠もらせていた。

その僧兵五百余人は支城ながら手強く抵抗した。

義貞は、平泉寺の末寺燈明寺の門前に陣取って藤島城攻めを遠望していたが、撥ね返される様子をみて埒が明かぬと判断してか、鎧を着替えて馬に乗ると僅か五十余騎を率いただけで間道の畔を通って藤島城に向かった。

この僅かな動きが義貞の命運を決定づけてしまった。

そのとき、運悪く足利方の細川出羽守と鹿草彦太郎の率いる三百余騎が城攻めの新田軍を追い払うべく間道の畔を迂回してきたのと正面から出会ってしまったのだ。

細川方は徒歩で楯を持った兵が多かったので、義貞を見るなり深田の中に飛び込み楯を並べて身を防ぎながら猛然と矢を射かけてきた。ところが義貞のほうは射手が一人もおらず楯も持っていない。やむなく兵士が義貞の前に立ち塞がってわが身を犠牲にする有様であった。

義貞に従っていた中野藤内左衛門が頻りに目配せして、

「千鈞の弩は、鼷鼠のために機を発せずと申しますぞ」

大将たる者つまらない敵にかかずらうべきではない、ことを警告したが、義貞は聞き入れずに、

「兵士を喪って自分だけ免れるのは本意ではない」

そう言うなり敵中に駆け込もうと駿馬に一鞭当てた。

義貞の愛馬は幅一、二丈（三～六メートル）の堀も容易に跳躍できる駿馬であったが、すでに五本ほどの矢を受けて弱っていたので小溝ひとつ越えられず、屏風倒しに燈明寺畷の泥田のなかに転げ落ちてしまった。

義貞は左足が馬の下敷になってしまって起き上がろうと碗いているところへ白羽の矢が飛んできて眉間の真中を射抜かれた。急所を射られて眼も眩み朦朧となった。

いまはこれまでと覚悟した義貞は太刀を抜いて右手に持ち直すとみずから頸を掻き切って深田の泥の中に隠し、その上に俯伏して最期を遂げた。ときに建武五年・延元三年（一三三八）閏七月二日、三十八歳であった。

後日談だが、義貞がみずからの手で深田の中へ隠した頸は結局探し出されて都へ送られ、獄門にかけられた。

そのとき、土塀のかげで泣きくずれている女がいた。義貞が心を奪われ離れ難かったあの勾當内侍であった。

内侍は北陸在陣の義貞からの迎えの使者に伴れられて杣山城へ逢いに行ったが、義貞は足羽城攻めに向かったとのことだったので、あとを追って浅津（福井市）の橋まできたとき出会った部将から義貞の戦死を告げられた。

泣く泣く京へ帰った内侍は、御室の仁和寺（右京区）付近の荒屋にひっそり棲んでいたのだが、義貞の晒頸と対面した獄門の傍で出会った僧に導かれて道場へ行き髪をおろして出家すると、洛西嵯峨の奥の浄土宗の尼寺往生院（現在は祇王寺）で仏道修行に明け暮れたという。

ところがこれにはもうひとつ別の話がのこっている。

義貞の戦死を知って涙ながらに京へ引き返す途中、九月九日夜北陸へ出陣して行く義貞と別れた思い出の地今堅田で琵琶湖に入水自殺してあとを追ったというのだ。

琵琶湖大橋西詰付近の湖畔に内侍の墓があるという。

四

新田義貞を斃した足利尊氏は、ひと月後の八月十一日に北朝の光明帝から待望の征夷大将軍に任ぜられた。

三年まえ、北條高時の遺児時行が蜂起して鎌倉を占拠した中先代の乱のとき、征討を命ぜられた尊氏が護良親王のあと成良親王が任じられている征夷大将軍を熱望したが後醍醐帝に征東将軍ではぐらかされてしまった。

遡って、源頼朝も平氏を斃して政権奪取したとき征夷大将軍を切望したが、二條、六條、高倉、安徳、後鳥羽帝の五代に亘り三十年院政を布いて君臨してきた後白河法皇に抑えられて法皇の生涯ついに与えられなかった。

後白河法皇も後醍醐帝も天皇親政を志していたのだから、武家に政権を与えるはずはなかったのである。

だから、頼朝が征夷大将軍になったのは建久三年（一一九二）三月十三日に後白河法皇が六十六歳で歿してから四箇月後の七月十二日であり、尊氏はついに後醍醐帝からは与えられず、光明帝からであったのだ。

それはさておき――。

北畠顕家、新田義貞の股肱の臣を喪い大打撃を受けた後醍醐帝は、地方を固めて頽勢挽回を画策した。

顕家の弟顕信を鎮守府将軍に任じて義良親王を奉戴、顕信の父親房と結城宗廣を副えて陸奥國へ下す。

宗良親王を遠江國に下す。

懐良親王を四國に下して、のちに九洲を統轄させる。

方針を定めて、まず地方からの再生を目論んだ。

そして九月、義良、宗良親王、北畠親房、顕信、結城宗廣の一行は伊勢國大湊を船出して東国へ向かった。

ところが、遠洲灘で暴風雨に遭って四散してしまい、

義良親王、顕信、宗廣は伊勢國へもどされてしまったが、宗良親王は遠江國に着いて井伊氏の居城井伊谷城（浜松市北区引佐町井伊谷）に入り、北畠親房も常陸國に着いて阿波崎城（稲敷市阿波崎）に入った。

親房はその後足利軍に阿波崎城や支城の神宮寺城（稲敷市阿波）を攻められ、陸奥國白川城（白河市）の結城親朝に救援を頼んだがすぐさま応じてはくれなかった。

親朝は宗廣の子であるが日和見を決め込んでいた。

年が明けると吉野朝廷に動きが出た。

三月、義良親王が吉野に帰り、皇太子になった。

六月、後醍醐帝は伊豫國（愛媛県）から九洲を目指す懐良親王に綸旨を下し、九洲全域の経営を委ねた。

その二箇月後の八月九日、後醍醐帝は風邪を拗らせたかのような症状で床に就いたが、祈禱も薬石も効果がなく、死期が迫ったかに見えたので、側近の忠雲僧正が枕辺に寄って涙を抑えながら、

「神路山の花ふたたび開く春を待ち、石清水の流れ澄むべきときあらば、仏神、三宝の加護によってきっとご快癒なされることと思っておりましたが、ご容態がお変わりになったと典薬頭も申しております。もはやいまとなっては天子の位をお棄てになり、仏道に帰依なさるお覚悟をおきめ下さい。最期の一念によって来世において生まれるところも変わると經文にもございます。のちのちのことでお気がかりのことはすべてお言い遺しになり、そのうえで極楽に生まれ変わられることだけをお念じなされますように」

言上した。

話を聴いた後醍醐帝は息も絶え絶えに僧正に伝えた。

「妻子も珍宝も王位もあの世まではついてゆかぬとは如来の教えであり、朕もそう思っておる。だから秦の穆公のように家臣を殉死させたり、始皇帝のように財宝を墓に埋めようなどとは思っていない。だが生まれ変わり死に変わってゆくのちのちまでも朕の妄念となるのは朝敵を悉く滅ぼして四海を太平にしようという思いだ。朕がこの世を去ったあとは義良を天子の位につけ賢臣たちが相談してこれを補佐し、義貞、義助の忠功を賞してその子孫に不義の行いなければ股肱の臣として天下を平げよ。このことを思うがゆえに朕の骨は吉野山の苔の下に埋もれようとも魂魄は常に北方の都の空を睨んでいようと思う。もしこの命令に背けば君もよき後継ぎの君ではなく、臣もまた忠義の臣ではない」

これが後醍醐帝の遺言となった。

そして、後醍醐帝の譲位により十二歳の皇太子義良親王が受禅した翌日、すなわち暦應二年・延元四年（一三三九）八月十六日丑の刻（午前二時）に崩御された。

左手に法華経五の巻、右手に剣を握っていたという。

文保二年（一三一八）二月二十六日、花園帝の譲位により受禅して在位二十年。倒幕と王政復古に執念を燃や

して闘いつづけた帝であった。

遺体は、遺言どおり法体にせず、藏王堂の東北の林の奥に円丘を高く築いて、北向きに葬った。

「天子は南面す」

の仕来りから歴代の天皇は南向きに葬られていたから異常であったが、死してなお現世への執着を露にして、

「魂は常に北方の都の空を睨んでいる」

遺言どおりの埋葬であった。

後醍醐帝の遺言により受禅した義良親王が忌日明けの十月五日に即位して後村上帝となった。

吉野に籠もった人達は落ち延びようとしたところを吉水法印宗信に諫められて思い止まったものの、勢力衰退は明らかで独り北陸路の脇屋義助だけが奮闘していた。

この年の秋、足利軍の高師泰、師冬勢に攻められた北畠親房は、小田城（つくば市筑波）に退いて南朝が正統である由を述べた『神皇正統記』を執筆した。

（了）

わが愛誦歌（十五）

――昭和から平成へ――

曽根竣作

○意に添はぬ辞令一枚　宣戦の布告を受けるごとく掌にしつ

外塚喬

『天空』（平・9）所収。一般的に考えると、辞令を交付される時は栄進又は栄転のときであろうかと思われるが、この場合は違うようだ。「宣戦の布告」をつき付けられたと思う程であると言う。

外塚は、若くして『形成』の木俣修に師事し、作風の上でも木俣の現実的、人間主義的な傾向を色濃く継承しているといっていい。

外塚の父も木俣修に習ったと言うから親子二代にわたっての師事、こういう経歴とほこりが、彼の短歌への熱い思いを持続させているのであろう。

といって彼の作品はロマンティックに歌い上げるものではない。生活を、生き方を、社会を淡々と叙べる。アウフヘーベンではなくむしろ掲出歌のように歌いさげる傾向が、一つの特徴である。

●冷奴ひとりにひとつわたる頃死者のはなしが生者にうつる

近詠の中にある一首、特別な場面は選ばれない。日々のちょっとした哀歓を三十一音にのせてゆくようである。そこにペーソスがうまれ、いかにも中年の生活という気配が滲んでくるし、ただよってくる。

内面に滾るものを抱えながらも、ものに拘らない、恬淡とした姿勢を頑固として貫く。短歌というものはこうでなければならないといった頑固さが、逆にユーモアにもなる。

現在、『形成』を離れ『朔風』という結社を率いているが、どこか反骨精神が覗くのも外塚短歌を買いたいと

思ふ論点である。日常の具体をつき抜けた抽象的な認識や感覚がしばしば現れる。表現は平易でわかりやすく、感情や感慨など自身をストレートにあらわすことを恐れない。その根底には生来の浪漫主義も明らかである。〈水紋のやうにひろがるその声はわがししむらに入りて息づく〉〈弾力のなき舗装路によこたはる影ふめば影の悲鳴が聞こゆ〉〈身をこがす火洒こそよけれ過去といふ過去が清算されてゆくんだ〉。

○からすうりのレースの花がしゆつとひらき　こんなにしづか地上の時間　　日高　堯子

『玉虫草子』（平・10）所収。からすうりの花は八、九月の夕方にひらく。白い星形であるが、一時間ほどの間に、その星形にたたまれていた繊細な糸状の部分がひらききると、まさに真っ白なレースのベールが開いたようになる。夕光に甘い匂いを放って怪しく光り、夜明けにはしぼんでしまう。いわゆる一夜花である。

そんな花のエロスの時間のしづけさを、作者はこよなき「地上の時間」として発見し、ひそやかに、しかし全身でやわらかく感応している。この束の間の奇蹟のような時間―。命のエロスを作者と花は交換しあっているかのようであるが、下句の「こんなしづかな地上の時間」という優しいつぶやきからは、人の世を少し遠ざかる喜びと孤独がともどもにこぼれる。

自然の豊かさや、生の豊穣さをうたひ上げる一方で、日高堯子の作品にはどこか崩壊感覚のようなものがひそんでいる。衰退への視線といっていいかも知れない。

●ふくふくと桃がならびぬ　をとめからおうなまでたった百年の夢

特別な感慨や理念ではないかもしれない一首。しかし、ここにたっぷりとした情感がただよってくるのはなぜだろうか。「ふくふくと」というオノマトペ。桃という果実のそれはむっくりした形象だけではない。「モモ」という音も大事な要素であろう。さらに、三句目からのひらがな表記の役割も見逃してはなるまい。そういうものが一緒になって、一首の豊かさを作っていると思われる。これが歌のうまさかも知れない。

また、日高堯子は歌書を数冊発表しているが文章の書ける女流歌人はそれほどいない。彼女の魅力のひとつであろう。

〈白藤のなだれ落ちたる無人駅駅舎のほとりに父が待ちをり〉〈処刑具に菫の花が彫りてありしロンドンの曇る秋の日に見し〉〈時間ふと薄わらひすることありてわれは川底の小石をひろふ〉〈敗戦日　空また晴れて日晒しの青姦のやうな日本も見ゆ〉。最後の歌は、日本とアメリカの微妙な安全保障を衝いており、考えさせられる。

○晴れ上がる銀河宇宙のさびしさはたましいを掛けておく釘がない

○休日のしずかな窓に浮き雲のピザがいちまい配達される　　杉崎　恒夫

『パン屋のパンセ』（平・22）所収。これは杉崎氏の遺歌集である。それ以前に、第一歌集『食卓の音楽』が上梓されている。

大正8年に静岡県熱海市の造園業の家に生まれ、幼小の頃より虚弱体質で、周囲から早世するのではと心配されていたようである。従って本人自身も学生時代に肺結核になり、サナトリウムで療養し、好きな学業を断念せざるを得なかった。その後、六十五才まで東京天文台（現・国立天文台）で働き、定年後埼玉県に越して来る。

杉崎恒夫の歌は、むつかしいことは言わず、ひとつの窓、フレームを作るところから始まる。雑多な混沌を片寄せて、まず何もない空間をこしらえる。きれいになった場所にモノを置く。そのモノはちゃんとしたモノとして見え、意味をクリアに発信する。

第一歌集『食卓の音楽』を一読した時、その年令に似合ず若々しい発想と、巧みな言い回しに少なからず驚いた次第である。第二歌集『パン屋のパンセ』を取り寄せ、引続きその巧みさに感心した有様である。

井辻朱美率いる結社「かばん」に所属していたが、結社内でもみんなに注目を集めていたと聞く。

〈どんな小糠雨よりうつくしい朝のセロリーに振りかける塩〉〈音荒く雨ふる夜明け胸という一まいの野を展げていたり〉

「胸という一まいの野を展げていたり」とは、なんと美しい詩句であろうか。死後、ひとは皆そういう存在になるのではないか。

〈駅前にたつ青年が匕首のごとく繰り出すティッシュペーパー〉〈十月のきれいな雲で埋めていくカレンダーの真っ白い日々〉〈仰向けに逝きたる蝉よ仕立てのよい秋のベストをきっちり着けて〉〈ゆびというさびしきものをしまいおく革手袋のなかの薄明〉〈不安なる眠りの沖につなぎおく美しき空母われにあるなり〉。

○硝子片、海松布、貝殻、しづかなる北鮮兵士　海は打ちあぐ　　渡　英子

『みづを搬ぶ』（平・14）所収。作られたのは平成十一年頃という。高野公彦著の「わが秀歌鑑賞」（平・24）に採られている。

本歌集には、夫々栞が付いており、古橋信孝、高野公彦・小池光の三人が短いエッセイを寄せている。それだけにこの掲出歌の意味するものが、普通ではない、何かしら一つの魅力を内蔵しているように見えるのである。

古橋は、「硝子片、海松布、貝殻、しづかなる北鮮兵士」を海が打ち上げる、と解釈し、高野は「硝子片、海松布、貝殻（などの、静かな北鮮兵士）を海が打ち上げ

る、と解釈している。歌の読みとしては「硝子片、海松布、貝殻、北鮮兵士」の四つがやって来るという古橋説の方が面白い——というか歌を豊かにする読みである。何せ最貧国である北鮮の有様を、こう巧みに表現し得たところに歌の眼目はある。

渡英子は、歌人としては遅咲きである。現在、結社「短歌人会」に所属、平成十二年に「アクトレス」により第十一回歌壇賞を受賞したのがそのデビューである。子育てに手がかからなくなったから、何かやってみたい。そういう女性の短歌界への参入によって、歌壇の厚みが増しているところもある。おそらく渡英子はその中の代表選手なのではないか。聴講生として「万葉集」を大学院で学んだり、カルチャーセンターで短歌をおそわったという経歴が、作品にもさまざまな影響を与えているのだろう。

●世界史は大航海時代にさしかかりまだ首すぢの細き少年

遅く始めているから、相聞歌はない。すでに子どもも「大航海時代」を学んでいる。つまり青年期を迎えようとしているという喩がひそんでいる。また、夫の赴任地だった機会をとらえた沖縄の文化や歴史を背景にした歌集に結実する。〈白鳥が郵便受にねむりをり　こんなにとほい南島に来て〉〈月光さへ来ぬ海軍壕の暗がりに靈力かすかなる英霊がゐる〉〈ああ空に客人のやうな月がゐて念仏踊を舞ふ影を照らせり〉〈星条旗のTシャツさはに売られゐる中世のなき国のあかるさ〉。

○アステカの王の悔しみ告げにくる使者ならめ今年最初の燕

三井　修

『アステカの王』（平・10）所収。アステカは、13—16世紀に栄えたメキシコの王国、およびその王国を建設したアメリカン—インディアンの部族のこと。大ピラミッドや独特の絵文字による文明で知られる。一五一九年スペイン人コルテによって滅ぼされる。

掲出歌の「使者ならめは「使者であるであろう」、否「使者にちがいない」という意味である。飽くまで作者の憶測であるが、一羽の燕に化託したロマンがそこに窺える。

三井修は、東京外語大アラビア語科出身で、商社勤めの体験もあって、中東にかかわる作品が多い。宗教が複雑にからみ、日本人にはなかなか見えてこない政治状況、現代資本主義の象徴のような石油。非常なる貧富の差。砂漠と超文明化された都会、さらに吹き荒ぶ砂嵐など、どれをとって見ても中東は過酷である。単なる事実の報告になり兼ねないところで三井修は挑戦したのである。

ビジネスマンとしての忙しい日々、砂漠に沈む夕日をみながらの望郷の思い、元々日本海側の能登半島や金沢で育ったというから、その環境の落差は私たちの想像を

超えている。堪えながらの作歌、それだけでもすごい。

三十歳過ぎてからの短歌の出発であったが、引用歌は必ずしも中東関係ではないが、海外詠として旅行者の歌である。

研究職を経て、いまでも中東関係の仕事に従事しているようだが、近年の作品は、次第に北陸という故郷が大きなテーマとなっている。父、母を思い出す年令になったせいかもしれない。

〈時空ゆく旅の途中の一房の葡萄が夕べわが卓にある〉〈いつかわが柩となるべき幹などもこの月光に照らされいるべし〉〈冬の硝子砂に撃たれて震えおり　遠く兵士の行進する午後〉〈タルト生地まだ熱すぎる黒ぐすり載せる前にまたイラクの死者たち〉〈手榴弾作動の仕方も知らぬまま生きて初秋の海鞘を食みおり〉。

○雲雀料理の後にはどうぞ空の青映しだしたる水を一杯

尾崎まゆみ

『微熱海域』（平・5）所収。雲雀料理と言うものがあるかどうか、分らないがその下に続く「空の青映しだしたる」で一首が洒落た作品になった。

尾崎まゆみは、早大文科卒、在学中は近代詩を専攻した。中学生の頃から萩原朔太郎に親しんで来たと言うが、実作だけでなくこう言った近代詩への蓄積が作品に反映しているのはいうまでもない。

昭和六十二年、塚本邦雄に師事、「玲瓏」十月号より参加現在、選者、編集委員を兼ねる。平成三年、「微熱海域」三十首にて短歌研究新人賞を受賞している。

塚本邦雄が亡くなってから五、六年が経つが、不思議と塚本臭がない。短歌はどこか泥くささがある。生活実感や、自然をていねいに切り取るスタイルに重心が置かれやすい。尾崎まゆみは、そういうところから切れている。機知に富んでおり、時代や風俗、あるいは近現代文学をとりいれ、かろやかに疾走する。文語と口語が、違和感なく溶け込んでいる。リズミカルでもある。

●ゆるやかに鷺夕焼に締められて匂ふくれなゐいろの輪廓

夕景の鷺の飛ぶ姿勢を眺めて、これだけのものが掴みとれようか。才気が行間から漂ってくるのは作者の特徴であろう。

〈缶ビール泡ふつと吹き哀愁のにがみを今日のよろこびとなす〉〈しあはせの幾通りもの壊し方描きつつ風辛夷を散らす〉〈ぬばたまの小倉鍛冶町一丁目鈴のさやふる音へ還らな〉〈地はうめきたいのだらうか真夜中になゐ来たりまた嗚呼といふ声〉〈カフェモカの甘さに潤み組みかへる左膝ひそやかに軋めり〉〈桜鯛きのこ添へなるこの星の恵みじんわり食みて忘るる〉。

なゐは地震のこと。

参考文献
現代歌人二五〇人（牧羊社）
現代名歌鑑賞事典（桜楓社）
現代短歌の鑑賞事典（東京堂出版）
現代の歌人140（新書館）
わが秀歌鑑賞（角川学芸出版）

短歌　三十首

曽根竣作

月夜茸

森ふかく闇にいつ点光りつつ月夜茸言ふ過去世（かこぜ）の知己ら

落葉つむ楢の疎林を歩一歩うつろふ季（とき）をかみしめありく

冬蝶のまがき越えゆく浅春の陽の矢いくすぢ天よりそそぐ

ことさらに年頭所感なきままにこよみは早も大寒に入る

吐き出されし人群れ黒く帯なして冬の高架を急ぎて渡る

冬晴の果はいづこぞ鳴きわたる帰雁(きがん)の列の点と消えつつ

との曇る空にひとすぢきらめきて遠いかづちが空気ふるはす

向日葵の種子ほろほろと掌(て)より落つ処女地ならざるわが庭すみに

青黒くふゆ波寄する北埠頭かぜすさびつつ船体ゆらす

さんま漁吃水深くかへり来て処理する男ら笑顔のあらず

昭和裏史

雪を載せし貨車長々と通り過ぐ陽差しかたぶく踏切にゐて

雑木々のなかに二つ三つ陽をあつめ烏瓜光(て)る峡を灯して

自己陶酔止めんとすれど深々となほ抜け得ざる峡にとどまる

青空のひとところ彩(いろ)ふ寒緋ざくら沖縄ははや春待つ日和

昨日より六度下りてベスト羽織り夕べの岸にかもめ見に行く

甘辛き海軍カレー食べしあと昭和裏史読む背もうす寒く

人気(ひとけ)なきプラットホームの片隅で夕日撃つ姿勢(なり)バンと小さく

デル・デス・デム独語覚えし蒼白きノートにポタリと鮮血の落つ

〝クロル〟とふドイツ語教師痩身にて襟に黒々とナチのマークす

長編のなかばいくらか飽きて来ぬ明窓浄机(めいさうじやうき)を信じをれども

百合峠

桜咲く頃ほひ近く吉野の夜　〈前登志夫〉なる盗っ人華やぐ

盗っ人のごとく村に近づくさくら咲く百合峠なる幻の道

満開のさくらの下に眩みをり生死いづれがわれに近きか

巻きのぼる非常階段炎立ち　バベルの塔の如きをめざす

鼻まがり先を争ひひしめきて同じ川をばけ小も遡上す

網の目の首都の地下鉄乗りつぎて春の短日昏れゆく早し

古井戸のポンプを押せばほとばしる飛沫透りて雁の声聞く

との曇るみな月の空渺々と相輪かすむ龍口寺のあさ

その上に殺されしとふ元の死者悼みて常立寺の梅は満開

〝男たちへ〟五十四章読みつげり塩野七生の愉快な一連

（注）前登志夫…吉野で山村生活を送った歌人。「夕闇にまぎれて村に近づけば盗賊のごとくわれは華やぐ」の著名歌あり。

鼻まがり…鮭の異称

短歌

行雲流水（三十五）

石黒修身

近詠三十首

桜・城崎温泉他　二十四年五月

大阪は造幣局の通り抜け多種の桜が妍を競えり

暮れなずむ造幣局の桜みちぼんぼりの灯に花びら映える

大阪を離れ特急「こうのとり」城崎はいま桜爛漫

城崎は「西村屋」にて足を留め桜吹雪の川べり歩む

いにしえゆ但馬の湯とて城崎は文人墨客幽栖の郷

その時期に「直哉」が逗留りし「三木屋」なる古き湯宿の風情ゆかしく

浴客が外湯を巡るしきたりが今も残れる城崎温泉

何となく寂れゆく気配この温泉町を愛づると宿のアンケートに書く

内外に海を分ちて松並木青青と続く「天橋立」

三景のひとつとされるこの砂嘴は神の造りし天かける橋

札幌にて　二十四年六月

「家ごとにリラの花咲く札幌の―」吉井勇の詠みし季節に

街中に新緑繁る札幌の爽やかな風リラの花冷え

青春の我が身を打ちし「アンビシャス」いま老いてその像を仰ぐ

若き日のエルムの杜の起き臥しよいま老いて佇つ大樹の下に

伝統は百年を経て歌われる「都ぞ弥生」北の自然を

ウィーン少年合唱団　二十四年六月

ウィーンから日本巡業なすと言う少年の合唱聴くオペラシティで

ソプラノとアルトの調和少年の合唱まさに天使の声か

丈高き十四才か幼なきは十才の男児らのハーモニー清し

髪黒く「母国は日本」と言う男児ありその名は「ＫＥＮＳＩ」出自は如何に

少年ら日本の歌巧みなりカーテンコールに聴衆は沸く

日常・身辺

アポリアであってはならぬ原発の需要とリスクの調和は如何に

「チェルノ」も「スリーマイル」も廃炉には二世にわたると識りて怯めり

放射線汚染の瓦れきは究極の行きどころなし灰となるとも

風薫る鎌倉山の「櫺亭」ゆ相模灘越え白き富士見ゆ

「平穏の日々を消光してます」と友の便りに頷ずきて居り

吾もまた「残照の日々を消光」と無事の便りを友に返せり

出てこない固有名詞に苛立ちて妻と交せり「あれがこれが」と

心臓の不全を識りて治療中八十路を前に残生を顧慮(おも)う

心臓の薬の禁忌に納豆が好物につきいつ時怯む

エンディングノートに記せり「尊厳死」己が残生計れぬまゝに

城崎温泉にて

石黒修身

(一)

二十四年四月、桜の名所として名高い、大阪造幣局の通り抜けを見に行った。

大阪城公園の近くに宿をとり、地下鉄と環状線で久し振りの大阪をひと廻りするなどして半日を遊んだ。

大阪を離れ、次は桜前線を意識した訳ではないが、未だ見ぬ城崎温泉に足が向った。

大阪からは、JR特急「こうのとり」で停車駅のある城崎温泉に着く。

(二)

城崎町は、二〇〇五年に行われた、周辺の小さな市町村の合併で豊岡市の一部となっているが、所謂市街地とはほど遠い、ゆったりとした昔ながらの温泉街であった。

筆者は、街のほゞ中央にある「西村屋」という温泉旅館に泊った。宿の前を流れる大谿(おおたに)川の両岸の桜が満開で、計らずも大阪に続きもう一度花見の風情を味わうことになった。

観光案内めくが、城崎温泉は四季折々の自然に恵まれた風景と無色透明ないで湯が調和した街で、古来文人墨客が多数来遊している。

(三)

城崎温泉には文学碑が多くある。観光協会が出している案内によれば、文学碑とそれに準ずるものは三十余を数えるとあるが、筆者が自分の足で確めたもの数件を関心の赴くままに記してみたい。

(1) 志賀直哉

短篇「城崎にて」が著名である。大正二年直哉三十才の折、東京で電車にはねられ、治療退院後当地に来て、

三週間程「三木屋」という湯宿に滞在した。
彼の当時の人生観や死生観を映した内容と言われている。また長編「暗夜行路」にも街の情況を書いた一節がある。
文学碑の建立を嫌った彼の唯一の自筆文学碑が昭和三十九年に文芸会館前に建てられた。彼の城崎への特段の愛着を示すものであろう。

(2) 吉井勇

筆者が愛惜をもつ歌人の一人であるが、勇がこの地に足を留めたことは知らなかった。
当地を代表する古い「まんだら湯」を詠んでいる。さすらいの途次昭和八年「ゆとりや旅館」に泊まる。
「曼陀湯の名さえかしこしありがたき佛の慈悲に浴むとおもへば」。他に一首を挙げる。
「城崎の湯に浴むときはうつし世の愁ひかなしみすべて忘するる」。

(3) 与謝野寛、晶子

昭和五年二人は山陰地方を旅し城崎温泉に泊まる。外湯「一の湯」に二人の自筆の歌碑がある。
「ひと夜のみねて城の崎の湯の香にも清くほのかに染むこころかな」　寛
「日没を円山川に見てもなお夜明めきたり城の崎くれば」　晶子

(4) 島崎藤村

藤村は、昭和二年大阪朝日新聞の依頼で、城崎から津和野までの紀行文「山陰土産」を連載している。
JR城崎温泉駅の前に藤村碑があり、「山陰土産・大阪より城崎へ――と刻まれている。

(5) 吉田兼好

「花のさかり但馬の湯より帰る道にて雨にあひて」の詞書きで次の歌碑が大師山ロープウエー山上駅の北側に建っている。
「しほらしよ山わけ衣春雨に雫も花も匂ふたもとは」

(6) 司馬遼太郎

「わが城崎」という随筆によれば、司馬は当地に三度来ている。彼独特の風土性探究と、作品に出る人物の資料を集めるためだと思う。
例えば、「竜馬がゆく」の長州藩士桂小五郎の現地での行動を把握するためのように。
小五郎が匿われていた「松本屋」(現在はつたや旅館)前には、小五郎のことを簡潔に記した自筆の碑がある。

(7) 柳田国男

明治四十七年の紀行文「北国紀行」によれば、四・五日間にわたり、志賀直哉と同じ「三木屋」に逗留し、数軒の湯を巡っている。
「三木屋という昔風の湯宿あり、庭古く相対して山あり」と記している。

(8) 有島武郎

大正十二年四月、鳥取での講演をすませ砂丘を見た後城崎に寄り、「油筒屋」に二日宿泊した。歌碑は温泉寺薬師堂前にある。
「浜城の遠き砂丘の中にして侘しき我を見出でつるかな」と詠んでいるが、彼は帰京して一ヵ月後に軽井沢で情死する。鳥取と城崎滞在中に死を決意していたのかも知れないと言われている。
他に中世、近世の文学として、例えば和歌では藤原兼輔(古今集収)、沢庵和尚、俳句では松尾芭蕉、宗祇法師、紀行文では横井金谷など文人の足跡は枚挙にいとまがないが、知識と見識のない筆者には記述を憚られる。
因みに現存する身近かな歌人、俳人の作品を挙げてみよう。馬場あき子
「来日山雪靄たててはれゆけばああふるさとの春の存在」
「円山川霧立ちわたり水鴨らの声に恋ふるとふるさとと呼ぶ」
稲畑汀子
「城崎に来て春少しあともどり」
「春寒の寝る前に又温泉に入りて」

(完)

漢詩

潮騒錄（六九）

鯨游海

根菜類をいう。転じて「庶民の粗末な食事」を指す。
書名は宋の汪信民の「人よく菜根を咬み得ば則ち百事成す可し（人能咬得菜根　則百事可做）」に由来する。咬めば咬むほど本質が見えてくるとする味わい深い書で論語と併せ岩波文庫のロングセラーという。
譚＝談。夭夭＝生き〳〵と美しい。瑞々しい。黄梁＝粟。もち米。玉蜀黍。南京＝南瓜の俗語。「いも（たこ）なんきん」と語呂が良いので用いた。觴＝杯。故＝旧い。
杜甫に「贈衛八處士」と題する古詩がある。安祿山の乱に巻き込まれた失意の杜甫が図らずも旧友の家を訪ね歓待される絶唱である。一読すると不思議な共感を呼ぶ詩なので少し長いが左記する。衛八＝衛家の八番目に生まれた男子をいう（排行）。名前ではない。

贈衛八處士
人生不相見　人生　相見ず（再会は難かしい）
動如參與商　動もすれば　参と商の如し

菜根譚　　平成廿三年十一月

被贈夭夭秋菜根
黄梁青韭芋南京
十觴累憶故知意
相和相通衛八魂

押韻・根　京　魂

〈菜根譚〉
贈らる　夭夭たる秋の菜根
黄梁　青韭　芋　南京…
十觴累ねて憶ふは　故知の意の
相和し相通ず　衛八の魂に

〔注　解〕
菜根譚＝著者は明の洪自誠。明代末期に隠退して道を楽しんだ人。書名の割に彼の経歴は詳かではない。
菜根とは文字通り野菜と大根や人参等々、根を食する

今夕復何夕
共此燈燭光
少壯能幾時
鬢髪各已蒼
訪舊半爲鬼
驚呼熱中腸
焉知二十載
重上君子堂
昔別君未婚
兒女忽成行
怡然敬父執
問我來何處
問答未及已
兒女羅酒漿
夜雨剪春韭
新炊間黄粱
主稱會面難
一擧累十觴
十觴亦不醉
感子故意長
明日隔山嶽
世事兩茫茫

今夕は復た何たる夕ぞ
此の灯燭の光を共にす
少壮　よく幾時ぞ
鬢髪おのおの已に蒼し
旧を訪へば半ばは鬼と為る（亡くなる）
驚呼熱中腸
焉ぞ知らん二十載
重ねて君子の堂に上らんとは（堂＝座敷）
昔別れし時君未だ婚せざるに
児女忽ち行を成せり
怡然として父の執を敬まひ（怡＝喜楽）
我に問ふ「何処より来たる」と
問答未だ已むに及ばざるに
児女酒漿を羅ぬ
夜雨に春韭を剪り（韭＝にら）
新炊黄粱を間ふ（玉蜀黍か粟か）
主は称す「会面は難し」と
一挙　十觴を累ぬ（觴＝杯）
十觴も亦酔はず
子が故意の長きに感ず（長＝篤）
明日　山岳を隔てなば
世事　両つながら茫々たらん

この詩から13字を拙詩14ヶ所に用いた。「贈、黄梁、韭、十觴、累、故、知、意、相、衛八」元より杜甫「贈衛八處士」の詩を連想して戴きたいからである。処士とは在野の士。官職に無い有資格者。

〔拙詩「菜根譚」の口語訳〕
旧友から手作りの瑞々しい秋野菜を贈られた。
黄色の玉蜀黍、青々とした韭、更には芋や南京……
これを肴に觴を累ねていると、旧友の厚い意が
あの杜甫の詩に登場する「衛八処士」の篤い魂とあい和しあい通じるのを憶ったことである。

☆手作りの秋菜根は美味かりき
衛八の煮る春韭に似て

無　題　　平成廿三年十二月

難堪堪盡幾星巡
難忍忍來塗炭民
何事梟雄唐突去
只祈後繼喩信人

押韻・巡　民　人

〈無　題〉
堪へ難きを堪へ尽くし　幾星巡りしか

忍び難きを忍び来たる　塗炭の民は
何事ぞ梟雄　唐突に去り
只ら祈るは　後継の信に喩る人たるを

〔注　解〕

堪へ難きを堪へ忍び難きを忍び＝安岡正篤・終戦の詔書「朕深ク世界ノ大勢ト帝國ノ現狀トニ鑑ミ非常ノ措置ヲ以テ時局ヲ收拾セムト欲シ茲ニ忠良ナル爾臣民ニ告ク朕ハ帝國政府ヲシテ米英支蘇四國ニ對シ其ノ共同宣言ヲ受諾スル旨通告セシメタリ……朕ハ時運ノ趨ク所堪へ難キヲ堪へ忍難キヲ忍ヒ以テ萬世ノ爲ニ太平ヲ開カムト欲ス……」難堪而堪難忍而忍以欲爲萬世開太平。

星＝ここでは年月の意。星霜。

塗炭＝泥を塗ることと炭の火で焼くこと。泥に塗れ火で焼かれるような非常な苦しみの境遇に在ること。

梟雄＝邪悪な心を持つ指導者。残忍な独裁者。

唐突＝突然。忽ち。

喩る＝よく理解する。～に明るい。論語・理仁篇「子曰、君子喩於義、小人喩於利」

☆ひたすらに唯ひたすらに祈るのみ
　義に喩る人国を継げやと

述　懐

平成廿四年一月

遊史群賢相集春
擔輿命下壯心新
苟無獨斷與偏見
何得年年後續人

押韻・春　新　人

〈述　懐〉

史に遊ぶ群賢　相集ふ春
担輿の命下って　壮心新たにす
苟も独断と偏見の　無かりせば
何ぞ得んや年々　後続の人を

〔注　解〕

史遊會＝歴史を楽しみ研究する会。

群賢＝王羲之・蘭亭の会「老少咸集まり群賢ことごとく至る」より。優れた会員が参集するようす。

擔輿＝輿を担ぐ。ここでは幹事に就くこと。

壯心＝曹操・歩出夏門行「…老驥伏櫪　志在千里　烈士暮年　壮心不已」より。人生晩年のやらんかなの気概が横溢すること。苟も＝かりそめにも。かりにも。万一。

獨斷と偏見＝史遊会の伝統的信条。全会員のモットー。

☆いやしくも独断偏見なかりせば
　骨なき史論何か楽しき

《漢詩の流れ58・清その七》

黄景仁（一七四九～一七八三）、字は仲則。陽湖（江蘇省武進県）の人。科挙には合格しなかったが、天才詩人としての名は高い。大官の幕客となって各地を転々とし、貧と病の中で三十四才で没した。

雑　感

仙佛茫茫兩未成　仙仏茫々として　両ながら未だ成らず
只知獨夜不平鳴　只だ知る独夜　不平の鳴るを
風蓬飄盡悲歌氣　風蓬　飄えし尽くす　悲歌の気
泥絮沾來薄倖名　泥絮　沾し来たる　薄倖の名
十有九人堪白眼　十に九人　白眼に堪ふる有るも
百無一用是書生　百に一用無きは　是れ書生
莫因詩卷愁成讖　詩巻に因って讖を成すを愁ふる事莫れ
春鳥秋蟲自作聲　春鳥秋虫　自ら声を作す

（道教も仏教も茫漠として私には未だ理解出来ない。只だはっきりしているのは夜中独り身に響く不平の声。風にまろぶ蓬のように悲しい歌を唄う気持ちを吹き飛ばされてしまい、泥まみれの綿くず同然徒らに薄倖詩人の名を負った。世間十人中九人は気に入らぬ輩ばかりだ。もっとも我もまた百に一つも物の役に立たぬ書生だが。泣き言の詩を作っていると讖を成して不幸に逢うと心配してくれる向きもあるけれど、春の鳥や秋の虫だってやっぱり悲しい声で鳴くばかりだ）

アフリカの彫刻に魅せられて（二）

勝山道子

イタリヤ調査研究に派遣された、国際婦人教育振興会員四名、勝山、徳光、渡辺、岩渕は、四十五日の間残る十八日はローマで同じホテルに滞在し、帰国後の国立婦人教育会館に於て、中国派遣団と共に報告会があり又、調査研究の資料を作る事になっている。然しローマ近郊の調査も加える為、先ずローマ市役所を尋ねた。市役所の前で車に寝泊りして「住宅を寄こせ」と三日もストライキをしている若い夫婦がいた。

郊外の農家を紹介してもらい訪問する事が出来世代同居の家庭で八十才の祖母にあたる人が、家の者が食事をした食器を洗う専門で洗う流しを専属していた。然しイタリヤ人らしくイヤリングをしている処が若々しい。父親は息子と共に畠で耕運機を使い広い土地を耕していた。主婦は母屋のとなりの小屋で、生ハム、又パン焼をしている様だった。

長男の嫁らしき若い妻はカウチで子供をあやしながら坐っていて何とものどかな風景に私達も邪魔にならぬ様辞した。軽い言葉のやりとりは通訳のいないローマでは小野久子さんに殆ど世話になった。

ローマでも一番大きい老人ホームの訪問で、感じた事は動ける人は仕事をする。洋服屋をやっていた人は仕立をやりながら小さい乍、仕立台等が用意され注文をとっていた。

クリーニング屋の方はアイロンかけ、たゝむ仕事を忙しそうにやり明るく働いていてたゞ百才のおばあさんはさすがベットに横になっている位でこの様な大がゝりは少く、気のあった老婦人が五・六人で一軒の家に住み、助けあいながら暮し介護人が一人常住する様な小規模的な老後施策の方向で進めている様であった。

少年院の訪問はやはり郊外でイタリヤらしく明るく開放的な施設を見学明るさにこちらも感じた。

フィレンツエ市の美術館の見学もさすがなる程と圧倒される美しい絵画、そして街全体が同色の瓦（カワラ）の屋根、美的感覚の最たるものであった。こゝでの通訳は小野女史の都合もあり日本から画家として留学している方に説明を受け、美術に対する感性を高められた。

ナポリでは市役所訪問だったがハイジャックに合い市役所に入れないと思ったが私が国際ソロプチミストのバッチをしている事で世界組織の会員とわかり「プレーゴー」で入所出来、海の見える美しい役所に感動した事も記憶に残る。

ボロニヤでは世界で最初と云われる医学の臨床教室が残され、街全体が歴史ある教室と云うか学校で日本人の留学生にも会えた。

又イタリヤの文部大臣のコメントのお蔭で、四十年の創立記念日を迎える婦人団体の役員にもお会い出来式典の準備をしている処であった。初代会長のマスクをブローチにして当日創立記念日を祝すと云う。

ミラノ市は日本でも有名なファッションの街、と云われる。大がかりでなく、小じんまりしてお店の特色を生かし、例えば黄、グリーンと云う風であった。

こうして電車、バス、列車を利用して近隣都市をまわったが帰り必ずと云ってよい程に、トラオレが美術学校帰りにあわせ、迎に来ている。この誠実さに打たれ、何とか日本に帰ったら先ずすべてイタリヤの研修成果を終らせ、何としてもアリトラオレ彫刻展を、稲城を中心とし五ヶ所位と北海道も同様手配して成功させたいと胸いっぱいであった。

それにはこの研修を終らせて先ず在日セネガル大使との交流、アフリカ協会の応援、指導等を考えローマを十二月に去り年内にこの研修のまとめ発表は終った。

稲城に帰った私はアリトラオレの彫刻展の出来る処から始めた。

一九八七年

一、稲城中央文化センター

形式としては

日時一九八七年七月四日（土）午後二時

テープカット市長　セネガル大使　会長

司会　開会の辞　主催者挨拶　来賓挨拶

謝辞　閉会の辞　彫刻展にいたるまで各地大体同様な形式で行う

二、くにたち市　くにたち画廊　岳

三、武蔵野興業　ホール　東京都新宿

四、至誠学園　ホール　東京都立川市

北海道

一、旭川市文化会館

二、稚内市中央文化センター

三、苫小牧市　サンプラザ画廊

四、札幌市アートプラザ画廊

右の各々の会場はソロプチミストの会員の外奉仕団体のボランティアにより運営された。殊に稚内市に於ては稚内市をあげ、アリトラオレ一家を招待、市内観光等の栄に俗し、ブロンズも、稚内中央文化センターに「アフリカ」駅にも一基建てる事になり、寒い稚内とアフリカの友好関係が出来た。

各会場共、三百人以上の見学者又マスコミもＮＨＫ、朝日新聞読売新聞、毎日新聞、各北海道の地域に取り上げられよい結果となり、殊に稚内市の作品のブロンズ「母のなげき」はアリトラオレの代表作でもあり、アフリカを最も表現する作品でもあるのが設立された。北海道は小野久子夫人の妹女医が旭川市にいられる事もあり、ソロプチミストの協力もあり成功出来た。

東京周辺四都市、北海道、四都市に於ては大体よい方向にアフリカを理解すると共に、芸術を結びつける高度な理解も出来た様だ。後は大きいイベントを一つ計画したい。それには在日セネガル大使との交流を計ると共にアフリカ協会の協力も得たいと思い早速セネガル大使に稲城の街に招待しようと「ソロプチミスト稲城の声で、会員の旧家森家の日本家屋、畳の座敷、床の間、そして料理は日本古来のけんちん汁、野菜の煮物、天ぷら等で御招待し、会員全員との会食で通訳も仲間入りをし楽しいひと、きを過した。後日の御礼で親交を暖めた。



稚内市長
浜森御夫妻

アリトラオレ
家族

AMBASSADE DU SENEGAL
AU JAPON

アラジ・アマドゥ・ティアム
セネガル大使

L'Ambassadeur

大使館：東京都目黒区青葉台1－3－4
TEL：3464－8451

拝啓

ソロプチミストのクラブのお名前で、１９９２年８月１８日火曜日、稲城市で私を迎えるためになさって下さった暖かいおもてなしに、私がどんなに感激したか申し上げたいと存じます。

心から私は感動致しました。また、光栄にも私が日本で代表を務めております国の国民、私の存在を通して、全てのアフリカ人を象徴することとなった、セネガル国民に対して自発的に、真に開かれた心でなされた、そのおもてなしの人間味溢れる暖かさに深く感激いたしました。

繰り返し私の感謝の念を述べさせて頂たく、また私にお話し頂いたプログラムの計画準備のために稲城市、市周辺地域にもまた何度も足を運ばせて頂たいと存じます。

敬白

AMBASSADE DU SENEGAL TOKYO

セネガル共和国大使
アラジ・アマドゥ・ティアム

一大イベントは東京都知事鈴木俊一はＴＡＭＡらいふ21多摩東京移管百周年事業としてＴＡＭＡらいふ21自主企画として一九九三年五月二十二日～八月一日まで行う。

多摩地区とは

八王子市　立川市　武蔵野市　三鷹市　青梅市　府中市　昭島市　調布市　町田市　小金井市　小平市　日野市　東村山市　国分寺市　国立市　福生市　狛江市　東大和市　清瀬市　東久留米市　武蔵村山市　瑞穂町　日ノ出町　檜原村　奥多摩町　の以上が、東京府に移管されて、百年目の歴史的節目を迎えます。ＴＡＭＡらいふ21の事業が文字通り三六五万人のまちづくり運動として多摩地区の新時代を切り拓いていくことを期待しているといわれています。

市民、大学、企業等が市町村が東京都に連携してこれからの一〇〇年を展望した、まちづくり運動を展開するのであります。

国際ソロプチミスト稲城は早速、ＴＡＭＡ国際文化フェスティバル実行委員会を組織し山田郁子委員長とし趣意書を配布すると共に募金活動も始めました。

八月一日のイベントは会場としては稲城市綜合体育館をメインとし屋外も利用しアフリカの十三ヶ国の参加に加え、世界モダンスチャンピオン　マーカスヒルトンカレン夫妻

日本民踊団は調布、府中、稲城　百名づつ

アフリカ音楽と舞踊　児童による舞踊

その他アフリカの生活展　バザー、食品の販売等、アフリカの衣裳、玩具

多摩の風景パネル等、リハーサル、セットと準備を行い、殊に体育館の中庭にはアフリカを代表するアリトラオレの彫刻が五月に、ブロンズ三体が除幕されて注目を引いていた。八月一日（日）は朝からジリ〳〵と照る熱い日でもう午前八時前後ぞく〳〵とバザーの品物、又屋外でのアフリカのスナックの即売、日用品と持ち込まれ開会式までには二階の階段席までいっぱいの人、殊にスーダン大使の日本語の挨拶には感激した。青年会議所のジュース何と二千四百本が売り切れる程の熱気大成功。

幼児のダンスにも拍手がわき、多摩警察の報告によると一八〇〇人の入場者と云う。又来賓にはそれぞれ稲城市長より記念品が贈られた。後先になりましたが経費については要望書に、募金しましたが意外に多く事務局に振り込まれ、最終的に五百万円となり、当初東京都に参百万円と予定して申請したので、計八百万円となりました。半金の四百万円の出費はアリトラオレのブロンズの移動に使い他はマーカスヒルトンカレン夫妻、アフリカ音楽と舞踊等に支出し、よい成果を挙げる事が出来、アフリカ諸国のバザー、販売のすべては出店者の利益とし、明

趣意書

明けましておめでとうございます。

本年は、多摩地区が神奈川県から東京府に移管されて、百年目の歴史的な節目を迎えます。TAMAらいふ21(多摩東京移管百周年記念事業）は、東京移管 100年にあたり、市民・大学・企業等が市町村、東京都と連携し、これからの 100年を展望したまちづくり運動を展開し、「21世紀の新しい多摩づくり」を先導するものであります。鈴木知事も、TAMAらいふ21 事業が文字どおり 365万人のまちづくり運動として多摩地域の新時代を切り拓いていこくとを期待しているといわれます。

これに応えて、多摩地区にある国際ソロプチミスト（稲城・武蔵野・八王子・立川・昭島・くにたち・東京西・町田・多摩・青梅・日野・東京府中）が中心となって、他の奉仕団体（ﾛｰﾀﾘｰ ・ﾗｲｵﾝｽﾞ ・青年会議所・芸術文化団体等）に呼びかけ、TAMAらいふ21 自主企画TAMA国際文化ﾌｪｽﾃｨﾊﾞﾙ 実行委員会を組織いたしました。

このイベントは、稲城市総合体育館においてアフリカを中心とする「文化紹介パネル展」「音楽とダンス」「食と生活・衣の展示」「彫刻の屋外展示」「日本の民謡」「郷土芸能」「クラシックダンス」等国際文流による『ゆとりとうるおいのある多摩文化』を創造することを目的として実施します。この趣旨に御賛同いただきたく、御協賛下さいますよう御願い申し上げます。

記

実　施　日　　平成５年８月１日（日曜日）

募金期間　　平成５年１月～７月まで

募　金　額　　１口　１万円以上

（御協賛いただきました方は、プログラムに掲載いたします）

平成５年１月吉日

TAMAらいふ21 自主企画TAMA国際文化ﾌｪｽﾃｨﾊﾞﾙ 実行委員会

実行委員長　　山田　　郁子

事務所　稲城市東長沼183 番地　TEL　0423 ~77~7430

FAX　0423 ~77~5696

勝山　道子方

るく、八月一日のイベントは終る事が出来ました。
アフリカの彫刻の成功と、小野久子さんの様々なコメント御両親のセネガル大使との交流も出来た事も幸だった。

祝出版

政治のニュースが世界で一番
スッキリわかる本

瀧澤　中著

日本文芸社　本体 1,400円

政治のことがよくわからないすべての人へ—

様

TAMAらいふ 21自主企画
TAMA国際文化フェスティバル 実行委員会
実行委員長　山田　郁子

明けましておめでとうございます。
平成5年の年明けに、TAMAらいふ21の事業も明るくスタートいたしました。
さて、昨年12月 2日、TAMAらいふ 21協会より、私どもが提出いたしました8月1日実施の稲城市総合体育館で行われるアフリカを中心とする、TAMA国際文化フェスティバルが認可されました。
今般、下記の要領でお集まりいただき、現場を見学していただき実施に向けての計画を立案したいと思います。

記

日　時　1993年 1月20日（水曜日）　午前10時～12時

場　所　稲城市総合体育館

内　容　10:00　稲城市長　石川　良一　あいさつ

TAMA らいふ 21の対応について　稲城市企画課長　甘利　健一

10:30 ～11:00　会場見学
11:00 ～12:00　8月 1日の実施にあたって
12:00 ～12:30　昼食・解散

電車で御来場の方は、稲城駅（京王相模原線）下車・ 9時20分～ 9時50分まで車が出迎えます。

TAMA国際文化フェスティバル

アフリカ音楽と舞踊

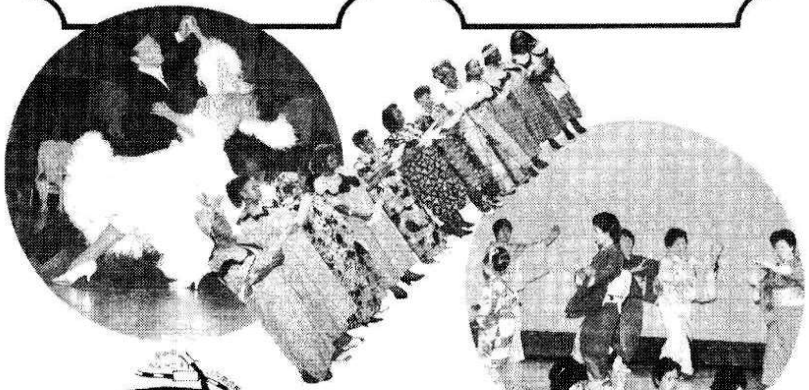
世界プロモダンダンスチャンピオン
マーカス・ヒルトン，カレン夫妻

日本民踊団（園田デキシーバンド）

展　示

屋　外　セネガル作家
　　ブロンズ

屋　内　アフリカ生活展
　　多摩の風景
　　木彫





送迎バスあり
AM9:00～
京王線稲城駅より

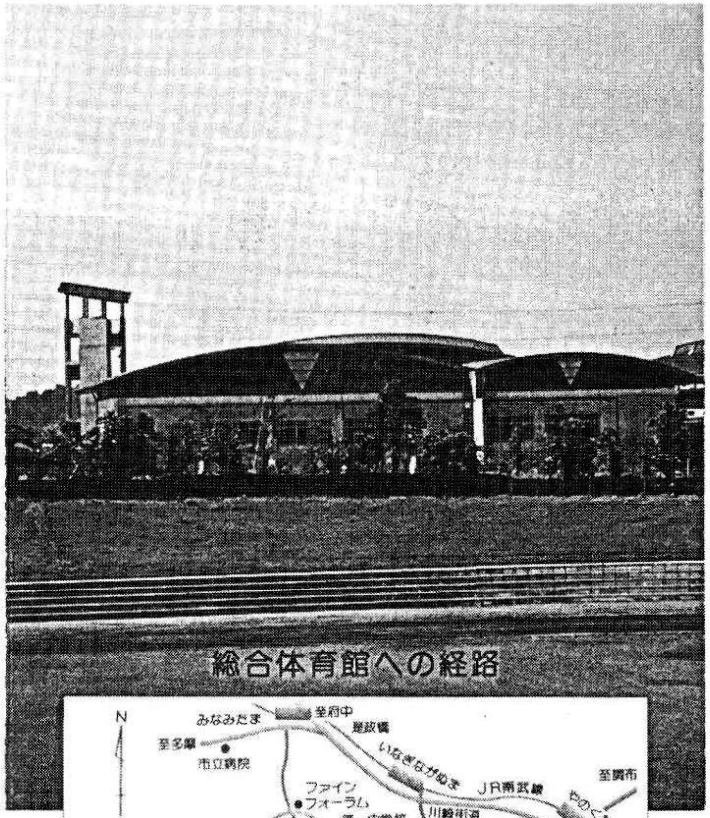
1993年 **8月1日**(日)
AM10:00～

会場：稲城市総合体育館
主催：TAMAらいふ21自主企画
TAMA国際文化フェスティバル
実行委員会

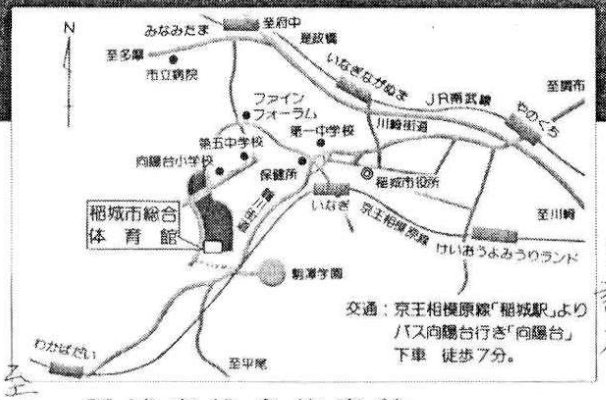
TAMAらいふ21
多摩新時代の創造

事務所　〒206 東京都稲城市東長沼183　TEL 0423-77-7430
FAX 0423-77-5696

チケット御持参下さい



総合体育館への経路



稲城市総合体育館
東京都稲城市坂浜4017番地
TEL　0423（31）7151
FAX　0423（31）7181

詩

石野茂子

バラが呼んだ

娘はそこにバラを植えた
バラは更に生長して
大きな生垣になり　花束にして
多くの人に喜ばれた
しかしある日　姑が娘に言った
割烹の奥さんに言われたが
店舗の入り口に棘のあるものを
植えるものではないと
しかし娘は同時に
母の言葉を思い出した
棘があるから魔よけになると
娘にとって姑の存在は　絶対であった
木を切るという姑に従い

もう三十年も前のこと
嫁ぐ娘のために
母は娘が大事に育てていた
真っ赤なバラの苗木を持たせた
店舗の脇に僅かばかりの
植え込みがあり

ある日　仕事から帰ると
バラの生垣は跡形も無かった
その夜は満月であった
子供を抱きながら　月を見上げ嗚咽した

あれから三十年
子供の成長だけを楽しみに過ごして来た
ある朝　夫が言った
以前近所に住んでいた人が立ち寄って
花束でもらったバラを
挿し木にしたところ根ずいて
今満開だよって

思わず庭に出て叫んだ
あの日のバラよ　生きていたのかと

畑

電話の音も　ざわめく人の声も
日常の家事も　すべて闇に預け
畑に向かう

一面の霧にぼんやり浮かび上がる
山あいの台地
墨絵の世界に朝陽が射し込むと
露を含んだじゃがいもの花は
一斉にきらめく
さやえんどうの露は　畝に転がり
里芋の露は葉の中で振り子のように揺れる

日が昇ると　いつしか露は消え去り
ひばりが中空でさえずり始める
きじが早足で畑を駆け抜け
むくどりが虫を探しに降りてくる
ひたすら雑草との闘いの中で
鍬を振るい汗をぬぐう

その時こそ
悲しみに心塞ぎ　苦しみに心痛むとき
遠い記憶の中から母の笑顔を連れ戻し
ゆるぎない愛を昇華させる
癒しのひとときとなる

真赤な夕陽に別れを告げ
闇の中から　再び日常を呼び醒ます

語りべ

風が谷間を揺さぶるように
通りぬける過疎の村
椿藪と呼ばれるほどの原っぱに
一軒残された駄菓子屋
店先の縁台に
どこからともなく人が集まり
毎日とめどない話で盛り上がっている
中でもひときわ高齢の男が
戦前の朝鮮での
優雅な暮らしぶりを
言葉たくみにおもしろおかしく
話していた　それは
朝日が昇るから
夕陽が山の端にかかる頃まで
何日も続いた
若かりし頃　朝鮮に渡り
事業で大成功を収め
敗戦を迎えて命からがら内地に戻った
男の苦労話は深い顔のしわに
刻みこまれていた
皆を魅了する語りは
飽きることなく
永遠に続くかと思われた

寒の明けの昼下がり
ひときわ紅梅の強い匂いがして
語りの最中に

男は苦しい顔をしてその場にうずくまった
突然の出来事に
女衆は絶叫し
足元に咲く水仙の群落は
素っ気ない顔で天を仰いでいる
男の突然の死は寂しく
縁台に集う衆から言葉はなかった

誰か朝鮮のその後を語らないのか
椿の花は　満開だというのに

遠州七不思議第二話「無間の鐘」

石野茂子

（その一）

掛川市の北東部に粟ケ岳という山があり、別名を無間山とも呼ばれています。聖武天皇の、天平年中（七二九～七四九年）のことです。粟ケ岳のふもとに菊川の里という村がありました。その村を、菊川という川が流れており、滝には仙人が住んでいました。名前を弘道仙人といい、とても信心深い仙人でした。仙人は信仰している不動明王に誓いをたてて、鐘をつくって供えようと思い立ちました。そこで、小さな釣鐘をつくり、粟ケ岳の頂上の古い松の枝につるしました。そして、

「この鐘の音によって、世の中が平和で人々が幸せに暮らせますように」

と願いをこめました。

それからこの鐘は「無間の鐘」と呼ばれ、鐘の音は遠州各地へ広く鳴りわたりました。村人たちは、その音色を聞くたびに心安らぎ日々の喜びを感じていました。しかし、いつのまにかこんなうわさが流れるようになりました。粟ケ岳の釣鐘を、

一度つくと、災難がまぬがれる。
二度つくと、病難をとりのぞく。
三度つくと、家が栄える。
四度つくと、運が開けて出世する。
五度つくと、子孫まで栄える。
六度つくと、武運長久となる。
七度つくと、末永く長者になれる。

うわさを聞いた人たちは鐘をつこうと、山へ登りはじめました。粟ケ岳への道は狭くてけわしく、足をすべらせて谷底に落ち大けがをしたり、死ぬ人さえありました。そのうちに、

「地獄へ落ちる鐘」

といわれ、恐れられるようになりました。小鮒川のほとりに、とても欲張りの長者が住んでいました。あまり欲が深いので人びとに荒石長者と呼ばれていました。長者も末永く長者でいられるようにと、鐘をつきに粟ケ岳にのぼりました。やっとの思いで頂上に着くと、松の枝にさがった鐘を思いきりつきました。その勢いで足元がくるい、岩山をすべって、そのまま地獄の底へと落ちていったのでした。地獄の中でも最も厳しいとされる無間地獄へ落ち、哀れな最後をとげました。

時が流れ、天禄2年（九七一年）のことです。頂上の観音寺の和尚さんは、鐘を見て嘆きました。

「罪深い人がこの鐘をついて不幸を招いているとはいえ、弘道仙人の意に反しておる。この鐘があるために多くの人びとをまどわし、罪をつくっている」

そして釣鐘をはずして、頂上にある深い井戸の底へ埋めてしまいました。それ以来水が出なくなり、「無間の井戸」と呼ばれるようになりました。

（その二）

歌舞伎「ひらがな盛衰記」に「無間の鐘」の一幕があります。一一八四年　都の治安を乱す木曽義仲追討すべしと、鎌倉の頼朝に後白河法皇より院宣が下ります。頼朝は弟の義経を大将とする討伐軍を京都へ発向させます。梶原源太景季二十二歳は、頼朝から与えられた名馬に乗って尾張国（現・愛知県）より宇治橋へ攻め寄せます。正月二十日（旧暦）のことです。谷の氷が融けだし、宇治川は大変な流れです。義経は、迂回するか、水足が納まるのを待つか、配下の武将達に意見を求めました。彼等の覚悟を見ようとしたのでした。畠山重忠は、

「宇治川は、琵琶湖から流れる大河です。いくら待っても水足が納まることはなく、また、敵に引き上げられた橋を再びかけるのも現実的ではありません。まず私が馬を踏み入れ、水深を確かめてみましょう」

畠山重忠が一族を集めて馬を整えていると、平等院の方から二騎の武者が物凄い勢いで競いながら走って来ました。梶原源太景季と佐々木四郎高綱です。以前から何かとお互いを意識し張り合っていた二人です。今回もどちらが宇治川の先陣に乗り込むか必死でした。まず梶原が、次に佐々木が僅差で続いておりました。後ろから佐々木が声を掛けました。

「梶原殿、馬の腹帯（はらび・鞍と馬の胴体を固定する帯）が解けております」それを聞いた梶原が腹帯を調べていると、スッと佐々木が馳せ抜き宇治川へ乗り込みました。「騙された」と思った梶原は急ぎ後ろを追いかけましたが、はるか下流に流されてしまいました。宇治川の先陣争いは、謀られた形で佐々木にもっていかれ、頼朝の不興を買い、世を偲ぶ生活を送るようになりました。影季は頼朝から拝領していた鎧を三百両のカタに質入れ、また妻の千鳥は梅が枝の名で神崎の遊郭に入ることになってしまいました。影季が一の谷の出陣を願っていましたが手元不具合な状態でした。傾城に身を落とした

梅が枝が、夫の窮地を救うお金を得ようと、わが身をかえりみず、無間の鐘になぞらえて手水鉢を一心に叩きました。

梅が枝の手水鉢
叩いてお金が出るならば
若しも御金が出た時は・・・

（その三）

むかし、この栗ケ嶽の近くに川井成信という殿様がいました。そしてその近くには大沢兵庫という武士が住んでいました。二人は仲が悪く何かといえば喧嘩ばかりしていました。ある日のこと、川井成信が幕を張って山の上で花見の酒を呑んでいると、来合わせた大沢兵庫が「何だろう」と幕の中を覗いてみました。川井成信は、大沢とわかると

「誰だ、覗くのは。きっと乞食だろう。魚の骨でもくれてやれ」

と言ったので大喧嘩になりました。大沢兵庫は、

「おれが貧乏だからバカにする。この無間の鐘をついて金持ちになってやるぞ」

と無間の鐘をつこうとしてついに山のお寺や松の木を焼いて、自分も、また川井成信も焼け死んでしまいました。それから後、この無間の鐘は悪い鐘と思われるようになりました。

粟ケ岳（あわがたけ・あわんたけ。別名無間山）は、静岡県掛川市と島田市に跨る標高五三二mの山です。山頂には阿波々神社があり、遠州七不思議の無間の鐘の伝承を今に伝える無間の井戸があります。今でこそ一帯は、桜の名所・絶景の眺望のハイキングコースとなっており、徒歩で散策する観光客も多く、サイクリングやバイクツーリングで訪れる人々も目立って来ました。しかし、千年程前では、どれだけ険しく原生林に覆われ断崖絶壁部分も多いなか、先を争って鐘をつこうとして、多くの命が落とされました。人びとのあからさまな欲望が、まず人よりも先に頂上へたどり着こうとして急ぎました。そのほとんどが、頂上までたどり着けなく、途中で足を滑らせ転落しました。このお話を読むたびに思い起こすのは、「地獄・極楽はこの世にあり」「地獄・極楽は心にあり」という生きている者への戒めの諺です。己の物事に対する善悪の意識を、日常の生活の中で常に問いかけたいと思いました。

アメリカ雑記帳（一）

三戸岡道夫

（前がき）

私は協和銀行に在職中、昭和四十一年（一九六六）四月から七月まで、四カ月間、アメリカ銀行のトレーニー（研修生）として、アメリカでの生活を送った。その時の諸印象を「アメリカ雑記帳」と題して書きとめ、その一部は協和銀行の行内誌「協和」に掲載されたが、今回その全部を復元した。すなわち四十五年前の記録である。

なお、アメリカ銀行の本店はサンフランシスコにあるので、最初の三カ月はサンフランシスコで、最後の一カ月はニューヨークで研修を受けた。

プロローグ

昭和四十年（一九六五）の暮に、アメリカ銀行トレーニーの内示を受けたので、アメリカのことについて関心を持っていろいろ勉強し、また昭和四十一年（一九六六）三月三十一日から、サンフランシスコに来ていろいろ具体的な事柄を経験したが、その結果、アメリカというものは一つの概念では捉えられないものだ、ということがわかった。これまでに、

アメリカ人とはこういう人間だ、
アメリカの生活とはこういうものだ、
アメリカでの仕事はこうやるのだ、
アメリカの国土はこうなっている、
アメリカの若者たちはこうなのだ、

などと、いろいろ読んだり、聞きかじったりして、私は私なりのアメリカに対する一つのイメージを持っていた。しかし、それがあまり真実に近くない、ということがわかったのである。すなわちアメリカとは、私が今まで考えていたものより、ずっとバラバラなもののように思われるのである。

渡米に先だち私は、英会話のレッスンのために、昭和四十一年一月から三月まで、日米会話学院に通ったが、

その間にアメリカについての予備知識を得ておく必要があると思い、二日ばかりかけて、神田の書店を隅から隅まで歩きまわった。そしてアメリカと名のつく本を片っぱしから買い集め、風呂敷に二包みばかり、二、三十冊の本を買って、片っぱしから読みあさった。

旅行案内書あり、留学生の体験談あり、経済の本あり、アメリカの銀行に関する本、ルポルタージュ、小説……。しかし、そうしたものを一冊でも多く読めば読むほど、それまでに持っていたアメリカに対する概念が次々に粉砕されて、最後に残ったものは、粉砕された無数の概念のかけらであった。結局、バラバラのものを寄せ集めたものが、アメリカというものではないかと思われるのであった。

そしてこのことは、サンフランシスコに来てから、その感をいっそう強くした。

そのため私は早急なアメリカに対する結論を出すことをやめて、私が自分自身で体験したことを、少しでも多く積み重ねていこうと思った。結論を急ぐと、自分のわずかな体験を、すぐ一般論に押しひろげてしまって、「アメリカとはこういうものだ」という独善的な一般論を作り上げてしまうからである。私が日本にいた時に得た、アメリカに対する知識の中には、そうした部分を誇張したものが多かったように思われる。

そのため私は、できるだけアメリカの普通の姿を、よく見たいと思っている。同じ人間の住む世界であるから、日本もアメリカも、そんなに極端に違っているはずはないのである。それを「アメリカと日本は違っていなくてはならない」という眼で見ると、ちょっと変っていることや、ちょっと珍らしいことを誇張して、「アメリカではすべてこうである」という誤った一般論に陥ってしまう危険がある。そうした意味で、私は、サンフランシスコ、ニューヨーク、ならびに適宜旅行したりした間に感じたことを、単に一つの体験、雑記帳として、記しておきたいと思うのである。

したがってこの「アメリカ雑記帳」は、決してアメリカ一般論ではない。しかし決して嘘ではない。たとえそれがアメリカの例外的なことであったとしても、私が実際体験したことであるからである。

第一章　アメリカ社会スケッチ

一、飛行機

アメリカ銀行のトレーニーとして、昭和四十一年三月三十一日に飛行機に乗ろうとしている矢先に、東京湾に飛行機が墜落したり、羽田飛行場で飛行機が炎上したり、またまた富士山に飛行機が墜落したり、連日の事故にすっかり驚いてしまった。これでは、

「墜落した後は、航空会社が気をつけるから、かえって大丈夫ですよ」

などという、なぐさめの言葉を呑気な気持で聞いているわけにも、いかなくなってきた。

日頃、無神論者をもって任じている私も、なんとなく不安になって、日米会話学院の卒業旅行で箱根に行った時など、いつものこけし人形の代りに、箱根神社の交通安全のお守りを買ってきたりする有様であった。

郷里の方でも心配して、霊験あらたかな神社に大枚を投じて、おはらいを受け、交通安全の大きなお守りをもらって、東京にまで届けに来るという騒ぎ。

しかし人間の気持というものは、大変おかしなもので、そんなある日、日置人事部長から、

「あなた達は、非常に幸運に恵まれている人たちだから、あのようなことが決して起るはずがないから、元気で行って来て下さい」

と、甚だ奇妙にして、ありがたい、なぐさめの言葉をいただいた時、不思議に私の心から不安がすっと消えて、平静な気持に戻った。どうも人事部長というものは、神様以上の魔力を持っているらしい。

二、シスコ最初の日

サンフランシスコに着いた最初の日、昼食を食べに、ホテルからダウンタウンの方へ坂道を降りていった。

どこがいいのか全くわからないので、とあるコーヒーショップに入った。

こちらのコーヒーショップというのは、食事をする店で、日本で言えばやすい大衆食堂のようなもの。アメリカ人は味のうすいコーヒーを食事のときに、日本のお茶がわりに飲む、それでコーヒーショップという名前が出たのであろう。日本のように、ムードを楽しむ喫茶店はほとんど無い。

サンドイッチとコーヒーを注文した。肥ったおばさんがコーヒーを、大きなコップにどっさり注いでくれた。そしてコーヒーがなくなると、「ノー、サンキュー」と言わない限り、いくらでもその大きなコップに、次々とコーヒーを注いでくれた。

そのコーヒーショップのおばさんに、郵便局の場所を教えてもらって、外へ出た。

空はかねて話に聞いていた通り、真青な無限の湖のように、どこまでも晴れあがっていた。それはあたかも宇宙における雲の存在を忘れたかのように。

しばらく歩くと、美しい樹木に囲まれたユニオンスクエアに出た。そのユニオンスクエアに面した、白く美しいメーシー百貨店の地下に、小型の郵便局があった。そこで切手や封筒、絵葉書などをどっさり、アメリカに来て最初の買物をした。

それから、明日の朝、出勤しなければならないアメリカ銀行の建物を見ておこうと思って、モンゴメリー通りの方へ歩いていった。

街路には花売りの屋台店が、あたかもサンフランシスコの街路に咲いた大輪の花束のように、あちらこちらに咲きこぼれていた。

三、坂道

サンフランシスコには坂道が多い。

緑の丘の麓からその頂にかけて、無数の白壁の家が、ちょうど落花を散り敷いたように、密集して這い上がっているさまは、まことに美しい。

私の居るアンソニアというホテルは、ポスト通りと、ジョーンズ通りの交叉点から二軒目にあって、五階の通りに面した私の部屋からは、ちょうどその交叉点が右下に見下された。たくさんの人や車がその交叉点でいったん立止まり、赤と青との信号によって次々と整理されながら通っていくのが、映画の遠景のように見えた。

細くて、急な、曲った、そして多少陰気な日本によくある坂道も私は好きだが、このサンフランシスコの坂道のように、どこまでも広くて、まっすぐで、その両側をびっしりと高い純白な建物の行列で飾った坂道を、上っていくのも好きである。ふと見上げると、街路につき出したアパートの白い窓には、真赤な花の植木鉢が並んでいたり、胸をつくような坂道の歩道を、老人が犬をつれてゆっくり歩いていたりする。

私はこうした坂道が好きなので、私のホテルの近くの坂道は、わざとバスに乗らないで、歩いて銀行へ通っている。

四、バスの中のおばさん

ある日曜日、バスに乗ってサクラメントへ行った。

バスの中では、一人の中年のおばさんの横に座った。ちょっと見た瞬間、眼つきの鋭いあまり人相のよくないように思われたが、

「ここに腰掛けてもいいでしょうか」

と聞いたときに、私の方にちらっと見せた笑顔が、とても人の好さそうな印象を与えた。やはり生活の疲れが人相を多少変えたのかもしれない。そんな感じのおばさんだった。

彼女は私の横で、むやみに煙草を吸っていた。

バスは広い野原や、丘の間の道を、ひたすらサクラメントに向って走った。ちょうど小さい町が窓ごしに見えてきたとき、

「あの町はなんという名前ですか」

と私は聞いてみた。彼女は私の知らない町の名前を口ばやに言った。

それは私にはよく聞き取れなかったが、それを機会に私たちはいろいろ話し始めた。

彼女も私たちと同じように、サクラメントへおばさんを訪ねていくところであった。なにか非常に教育に熱心で、さかんに日本の学校のことについて質問を受けた。

私が地図を鞄から出すと、今バスはこの辺を走っているのだろうと、地図を拡げて教えてくれた。

どのくらい、そのおばさんと話していたであろうか。ちょっと話がとぎれたとき、彼女はバスの最後部にあるトイレに行き、その帰りに、ずっと後に座っていた私の友人の席と入れ代って、その友人が私の隣の席に移ってきた。

「あのおばさんが代ってくれたんだ」

と友人は言った。おばさんのそんな小さな好意は、私の胸を打った。

本当を言えば、私は英会話のレッスンにもなるし、そのおばさんともう少し長く話していたかったのだが…、しかしこのおばさんの好意は素直に受けとるべきであろう。

(あのおばさんは、私の友人と席を代わるために、わざわざトイレに行ったのかもしれない)

私はバスに揺られながら、ふとそんなことを考えてみた。

バスがサクラメントに着くと、

「サンキュー、グット、バイ」

私たちはそう言ってバスを降り、おばさんと別れた。

彼女の人相の悪い顔は、一瞬、再びあの人のよさそうな笑顔に輝き、バスはみどりの並木が眼にしみるように濃い、サクラメントの街の中へ消えていった。

五、笑顔

日本人はむやみに笑う、日本人の笑いは謎である。外国人の前であまり笑うものではない……、日本にいたとき、そう私はよく言われた。しかし決してそんなことはない。笑顔は万国共通の親愛の表情である。

外国人も我々日本人と同じ人間なのである。親しい者には微笑をもって接する。これはアメリカ人でも変わらない。微笑で接すれば、微笑が返ってくる。こちらが悪意を持てば、相手も悪意を持つ。

私がトレーニーを受けていた銀行の支店に、ある中年の女性がいた。なかなかこわいおばさんで、ツンツンしていて、言葉や動作も荒々しい。銀行の中で、彼女の笑顔を見たことがない。私はそのおばさんに近づくことに、多少たじろぎを感じた。その支店の中で、私がまだ話をしたことのないのは、彼女だけになってしまった。

ある日私は、日本から送ってもらった桃太郎の貯金箱

瞬間、私は老婆の顔に大きく笑って、
「グッド、モーニング」
すると老婆の顔は花びらのように崩れた。
「私はいま貸金庫の勉強をしているのです。あなたの金庫を見せてくださいませんか」
老婆は笑顔で、私にはよくわからない早口の言葉で、なにか喋り出した。
そして用事が終って帰る時にも、奥の方に座っていた私の方へ手を振って、笑顔でドアの外へ消えていった。

六、街角の新聞

サンフランシスコには、新聞の売店というものがない。街の十字路に、プラスチックのカバーをかけた、あるいはカバーなしで、新聞を入れたケースがいくつも置いてある。新聞をほしい人は十セントお金をその箱に入れ、自由に持っていくわけである。「雨がほとんど降らないサンフランシスコ」という気象条件が生み出した、一種独特の販売方法であろう。
だがもう一つ、その背景には、そうして置いておいても、金を払わないで新聞を持っていく者がほとんどいないという、公衆道徳というか、人間に対する善意が裏づけになっているのは、勿論のことである。もっとも、金を払わない者がほとんど居ないかどうか、調査したわけではないが、しかしそうした販売方法で採算がとれているということが、一応その裏付けになっている。
私はある時、こんな光景にぶつかった。人通りのない、とある町角。新聞販売ケースの横に、大きな紙屑入れが並んでいた。一人の男がその紙屑入れの中を、まだ読めそうな新聞がないかと、ガサガサやって探していた。日本でも時々地下鉄や電車の駅の構内で見掛ける風景で、これはどこでも同じらしい。
だがその男は、もし無料で持っていこうと思えばすぐ持っていける、横の販売ケースの新聞の方は、振りむきもしなかった。

七、砂漠

私は砂漠が好きである。これまで砂漠へ行くことに憧れていたが、その機会がなかった。
無限の砂と、無限の太陽の光のほかは、何もないということは、なにか非常にすばらしいことのように思われる。それは輝やかしい生命の象徴ではあるまいか。
だから飛行機でグランドキャニオンへ行って、帰ってくる間、私はずっと飛行機の窓から、飽くことなく、眼下にひろがる砂漠ばかりを見つめていた。ちょうど幼い子供が汽車の窓の外の景色に、頬を赤らめて興奮するように。
だからグランドキャニオンの東端に立ち、東の空の彼方に無限につづくアリゾナの砂漠のひろがりを眺めたときの感慨は、ひとしお深かった。
グランドキャニオンで買ってきた大型絵葉書の中に、私の好きなものが一枚ある。それはアリゾナの砂漠の中で、盛装した男のインディアンが、一人で立っている構図である。
インディアンは、赤と黒褐色と白の鳥の羽で、全身をあたかも極楽鳥のように飾り、精悍な眼ざしで、真青な空の下に無限にひろがる砂漠の彼方を、見つめていた。砂と光のほかは何も無い砂漠の中で息づいている、まったく文明の世界から取り残されたその若いインディアンの生命力は、なにか甘美な宇宙の悲劇というようなものを、私に感じさせた。
どこまで突進していっても、まったく何も手応えがない、砂漠という真空の宇宙の中で、自分の生命力のためにだけ生きているインディアンの生命力。その無目的の生命。それはあたかも人間世界とはまったく関係のない深山に生い茂った、たくましい植物の生命力のように、純粋で、透明で、無意味で、ロマンティックな悲愴なものに思われる。これこそまさしく、宇宙における人間の存在意義そのものではあるまいか。

八、果実

カリフォルニア州は果実が豊富で、新鮮なので、果物と生野菜が好きな私には、はなはだ有難い。

サンフランシスコの食料品店の店先には、オレンジ、レモン、バナナ、リンゴ、ナシ、グレープフルーツ、いちご、ぶどう、トマト、西瓜などが、街頭の光をその一点に集めて、つややかに、華麗な色彩をうず高く積み上げている。

私は銀行からの帰り道、紙袋いっぱい果物を買って帰り、ホテルの部屋の棚の上に並べては、片はしから食べている。紙袋いっぱいの果物を片手に、適当なその重みをたのしみながら、夕暮の坂道をゆっくり登ってくる気持は、まことに心豊かに感ぜられる。

そして温かな部屋の中を、新鮮な果実のかおりで一杯にしながら食べるオレンジの味は、さながらカリフォルニア全州に降り注いだ光の凝集を、一度に口の中でたのしんでいるかのような感じである。

私は最近、果物のすばらしい食べ方を発見した。それは発見したというよりも、日本を出発する前に、アメリカ銀行のトレーニーとして先輩の後藤茂さんから聞いてきた方法であるが、それを実際にためしてみたのである。

その方法は簡単で、サンフランシスコの空気はとても冷いので、窓の外に果物を出しておいて、冷やして食べるという方法である。

部屋の中は、夜間は暖房で温められているので、棚の上に果物を並べておくと痛みが早いし、また、生あたたかい果物はおいしくない。

私の部屋の窓の外には幸い非常階段があるので、果物を買ってくると窓をあけて、その非常階段の上に果物を一列に並べて置くのである。窓外の夜間の冷い空気は果物を芯まで冷やし、しかも昼間はそこは日陰になっているので、果物は湖水のような冷ややかな空気で常に洗われている。夕方、食事の後や、風呂から出たあと、窓をあけ、果物を取る手に触れる、ひやっとした果物の肌のなめらかさは格別である。

そして、私の五階の部屋の窓から、ダウンタウンにきらめくネオンの灯を遠望しながら食べる、オレンジやバナナの味は、歯にしみ通るほど冷くて、すばらしい。

また、ロスアンゼルスに旅行したとき、私たちの乗った観光バスは、ファーマーズ・マーケットという大きな市場にとまって、そこで昼食をとった。高い時計台が中央にある広いマーケットの中には、あらゆる種類の果物、野菜が、洗いあげられ、磨きあげられ、整然と、うず高く、赤に、黄に、白に、緑に、その密集のつややかな色彩を競いあっていた。

マーケットの真中には、野天の食堂があって、私たちは直線のように降り注ぐ太陽の光の下で、ふんだんに野

菜を盛った野菜サラダを食べ、新鮮なパイナップルジュースを飲み、また皮をむいてそのまま、アイスキャンデーのように棒にさした、生のパイナップルを食べたが、その味の新鮮さは、口がしびれるほどであった。

九、言葉

私たち日本人がアメリカに来る場合（もちろんアメリカに限らないが）、ことさらアメリカに対する修身教育をさせられ、それがあたかも事実であるが如くに、正直者の多い日本人は錯覚してうろたえ、自分の不完全さ、知識の不足をなげき、アメリカという幻影に過大な憧れとおののきを感じ、日本の物好きな一部の完全主義者たちの手によって、殊更にコンプレックスの権化にまで仕立て上げられてから、始めて渡米する……、少しオーバーな表現をすれば、日本にはいささかこのような傾向があるのではないかと思われる。

たとえば、よい一例が言葉である。

（私たち日本人の発音はアメリカでは通じない）

と、わざとコンプレックス養成所に入ったようなレッスンを受けるものだから、普通に喋れば咽喉もうるおってなめからな発音が出来るのに、喋らない先からもう咽喉の奥がカラカラになってしまって、声も出ない。声が出なければ、発音のしようもない。

しかし実際にやってみて、日本人の発音が通用しないということは絶対にない。ただ時々、多少わかりにくいという程度のことである。

よく英会話の本などを読むと、「ライス（Ｒｉｃｅ）」（米）と言ったら、「ライス（Ｌｉｃｅ）」（しらみ）と間違えられたとか、卵「ｅｇｇ」の発音が通じなくて、鳥の飛ぶまねをしたら、にわとりの肉を持ってきたとか、はなはだ大げさな話が書いてある。だから、それを本当だと思った日本人は、いまだに、幕末に勝海舟が太平洋を横断した時のような悲愴感におそわれて、太平洋を飛行機で渡るのであるが、こうした話は、多分に林家三平あたりの考え出した英語落語くさいのである。

ちょっと考えてみても、レストランへ行って、「米」と「しらみ」を聞きまちがえるとしたら、聞きまちがえる方が、よほど頭がどうかしている。

日本人の英語がわかりにくいといえば、人種の万国博のようなアメリカでは、それ以上にわかりにくい英語が、ゴロゴロころがっている。

だがさらに皮肉なことには、一般に外国からアメリカに来ている外国人の発音のほうが、比較的にわかりやすいということは、どうしたことであろうか。結局彼等も比較的スタンダードな英語を勉強して、アメリカに渡ってくるからであろう。

そうしてみると、一番だらしのない英語（米語というべきか）を喋っているのは、アメリカ生れのアメリカ人に多い、ということになるのではなかろうか。

ちなみに、二十歳前後のアメリカ生まれの若い男女が互に喋っているのが、最もわかりにくい。彼等はいわゆる自然発生的に米語しか喋らないし、またそれだけしか知らないからである。彼等が喋っているところを見ると、さながら、密林の中で半裸体の黒人が、わけのわからないことを熱心に喋っている姿と、まったく同じであるように思われて仕方がない。

彼等の発音に比すれば、テレビの言葉や、たとえ性能の悪いスピーカーから流れ出てくる声でも、観光バスのガイドの声の方が、わかりやすい。こうした意味で言語学上よりみれば、アメリカの言葉はまさしく退歩にむかっていると、私には思えるのである。

アメリカにおける言葉というものは、まさしくこのようなものであるから、我々日本人の発音を少しも恥かしいと思う必要はないわけである。アメリカ人でも、わかり易いきれいな発音をする人は、比較的教養のある人、特にその中でも多くの外国人と接している人達であり、それに加えて老婦人である。もっとも老婦人の話し方は、ゆっくりしていてソフトなので判りやすいのか、それともすでに頭脳が退化して、比較的単純なことしか話さなくなっているので、判りやすいと思われるのか、その辺のことはもう少し研究してみないとわからない。

とくにアメリカ人の中で、国際性を持たないアメリカ人の発音は、手に負えない。もちろん聞いていれば自然にわかってくるが、我々日本人が、「このような喋り方が出来なければ落第だ」などと思う必要は、さらさらないわけである。

さて、発音のことであるが、三カ月、日米会話学院に通って、そこで何回注意されても少しも直らなかった私の発音が、実際アメリカに来て、そうした発音では通らないということを身をもって体験してみると、不思議なことに、いつのまにか次第にその発音が直っていることには、自分ながら感心している次第である。

たとえば、私が桃太郎の貯金箱について銀行で説明するとき、

「桃太郎は果物（フルーツ）の桃から生まれた少年である」

とやった。しかしフルーツがよくわからないらしい。それで急いで下唇をかんで「フルーツ」とやり直したら、すぐわかった。

この時から私の「f」の発音は、無意識に、あるいは意識的に、学校で教わったように、下唇を歯でかむようになっていた。

またある時、サンフランシスコの空港までバスに乗り、

バスの運転手が、

「どの飛行機に乗るのか」

と聞く。私は、

「ウエスタン」

と言ったが、どうもうまく通じないらしい。そこで章魚（たこ）のように唇をとがらして、

「ウエスタン」

と言ったら、バスはウエスタン・エアラインの前でぴたりと止った。

また同じwの発音でも、海水パンツを買いに行ったとき、「スイム」（ｓｗｉｍ）と言ったが、売子は首をかしげている。私の頭には瞬間、ウエスタンのことが頭にひらめいて、そこでふたたび章魚（たこ）のように唇をつき出したら、売子は色鮮やかな海水パンツを、次から次へと出してくれた。

よく考えてみれば、ただ「ウ」と言ったのでは、「u」であるのか、「w」であるのか、その区別がつかないので、これは当り前のことである。

この時以来私は、アメリカに来てから自分の顔が次第に章魚（たこ）に似てきはしまいかと、時々鏡に顔を写しては、心配しながら眺めている。

それから米語は「エ」を一般に強調する。たとえば「熱い」（ｈｏｔ）は、我々の感じでは「ホット」であるが、アメリカでは「ハァット」である。帽子（ｈａｔ）の「ハァット」に近い。では、帽子はなんと発音するのかといえば、「ア」の音をもう少し長くのばして、「ハァーット」と強調する感じである。

数字の「六」も、「シックス」より「セックス」に近い。それでは本当の「SEX」は何と発音するのであろうか。「セェーックス」であろうか。この発音は残念ながら、アメリカに来てからまだ一度も聞く機会がないので、わからない。

銀行も「バンク」ではなく、「ベェーンク」であり、「コーヒー」も「カフィ」である。とにかく馬鹿みたいに口を思いきり横にひろげれば、まちがいない。

十、名前

（アメリカへ行ったら、相手の名前をよく覚えなければいけない）

と言われてきたが、実際その通りで、アメリカ人はよく私の名前を呼んでくれる。私も相手の名前を一生懸命覚えようとするのだが、なかなか難しい。そこで会う人ごとに名前をサインしてもらって、道を歩きながら、英語の単語を暗記するように、繰り返し練習している。

私の名前は、こちらでは

「ミスターオヌキ」

である。何回言っても「オオヌキ」とは発音してくれ

ない。仕方がないから、今では「オヌキ」で満足している。

しかし暫くすると「オヌキ」は、いわゆるファーストネイムの「ミツオ」になってくる。これは大体正しく発音してくれる。しかし一般に社会生活の中で、いわゆるファーストネイムを呼ぶ習慣のない日本社会の中で育ち、「ミツオ」などという呼び方は、昔、親から呼ばれてこの方、長年ご無沙汰の私に、突如異郷の空の下で、いとも簡単に「ミツオ」という言葉が外国人の口から飛び出すのを聞く気持は、なんとも奇妙な感じである。

銀行の中で、十八か十九の女の子が、突然、

「ミツオ」

と呼びかけて話しかけてくるのを聞くと、なにか全身がむずがゆくなってくる。

しかし女の子に呼びかけられるのは、まだいい。もう六十に近い、でっぷり肥った研修主任の、ミスター・エンライトが、

「ミツオ」

と話しかけてくるのに接すると、

(いま私は精神病院にでも入れられているのではなかろうか)

といった錯覚におそわれる。

嘘だと思うなら、ちなみに私が業務部の部屋の中で、川上部長から、

「ミツオ」

と呼ばれている姿を想像してもらったら、一気にこの疑問は解決されるであろう。

十一、理髪店

アメリカでは何処に行っても不愉快なのは、理髪店である。値段が高くて、下手で、不潔である。

日本の理髪店では、整髪、洗髪、ひげ剃りとやって、四~五百円。時間も一時間ぐらいかけ、タオルは七~八本を使う、というのが普通である。しかしアメリカではヘアカットだけで、安くても二ドル、それにチップが二十五セント取られるから、ヘアカットだけで八百十円というわけである(この時点の円ドル換算レートは三百六十円である)。

ヘアカットだけであるから、時間も十分か十二、三分で、すむわけである。これに洗髪とひげ剃りを加えたら、それこそ眼玉のとび出るくらいの料金となるのであろう。

したがって私は理髪店に入ると、値段が高くならないように、

「ヘヤカット、オンリー」

と、はっきり、わかるように注文することにしている。しかし、そのヘヤカットにしても、不器用なアメリカ人

にはハサミがうまく使えず、バリカンでザーザー切るだけである。ちょうど植木の茂みを、植木バサミで刈るのと変らない。

それからタオルは絶対使わない。ヘヤカットの後は、襟足ぐらいはちょっと剃ってはくれるが、その跡もタオルでなく、トイレットペーパーのような紙で、ぐるぐるっと拭くだけなので、気持が悪いことこの上ない。

さらに驚くのは、その拭いて半分濡れたペーパーを、また私の首に巻きつけて、布をかけ、最後の仕上げのバリカンを入れるのだから、その無神経さには卒倒するばかりである。

いくら人件費が高いとはいえ、理髪店に行ってもこの程度の取扱いしか受けられないアメリカ人は、かわいそうである。日本ならば、理髪店を出ればさっぱりして、青空の下にとび出すような爽快感を感ずるのに、アメリカでは一目散にホテルに帰って、自分で頭から首筋をごしごし洗って、すーっとする、という次第なのである。

十二、トイレのこと

日本にも公衆トイレというものは案外少いが、アメリカではこの種のものは、ほとんど皆無といっていい。あるとすれば、公園の中に、時にぽつんとあるくらいで、街の中ではまったく見掛けない。

国が違えば風俗習慣が異るのも当然であるが、アメリカで驚くのは、大用のトイレに、扉のないものが時々あることである。もちろん、ホテルとか空港のトイレにはそうしたものはないが、公園の中とか、バスの停留所の中には、こうしたものが時々ある。

中で腰掛けて大の用を足している姿が、外から丸見えなのである。そんな場面を眼の当りにすると、眼にした人の方が、面喰ってしまう。しかし、誰から見られていようと、本人の方は悠然と用を足しているのだから、大したものである。

また扉のあるトイレの場合は、扉に鍵がかかっていて、十セントとか、十五セント、お金を入れないと、扉が開かないものがある。有料トイレである。だから、つねに小銭を持っていないと、トイレにも行けないことになる。たとえ百ドル、二百ドル持っていようが、十セント貨幣がないと、トイレの入口では立往生である。

誰かが書いたアメリカ見聞記の中に、悪質な連中が数人いて、最初の一人だけが金を払い、あとは一人が出るときに扉を押さえていて、次の一人が入り、かくして次々にバトンタッチしていけば、数人が十セントで用を足せる……、というような記事があったことを、ふと思い出した。

私はそのような光景にはお眼にかからなかったが、扉の下は少し隙間があいているので、十セント払わずに、

その扉の下のすき間から這いくぐって中に入り、用を足している人を見たことはある。やはりアメリカにも、いろいろな人間がいるものである。

日本でも、銀座を歩く人を尾行調査すると、四十パーセントから五十パーセントの人間が、銀座四丁目の三越のトイレに入るということであった。時に貴婦人然と着飾った女性が、三越デパートにハイヒールの足音高くかけ入り、トイレに突進したが、「只今清掃中」の札が立っていて、顔面蒼白になり、下腹部を押さえて卒倒した……、というような三文週刊誌の記事を読んだ記憶があるが、大体日本では、デパートのトイレが実質的に公衆トイレの役目を果しているのである。

しかしアメリカのデパートには、どの階にもそのようなトイレはない。私もサンフランシスコのマーケット通りにあるデパートに入り、トイレを探してみたが、なかなか見つからない。仕方なく、行きつけのレストランに入り、用だけを足して、そのまま出てきたことがあった。

そのため最近では利口になって、トイレを使いたいときには、ホテルに入るのが一番いいということがわかった。しかも一流ホテルほどいいのである。小さなホテルには、ロビーから直接入れる一般用のトイレがないことがある。しかし大きいホテルなら大丈夫である。

ホテルなのだから、正面から正々堂々と入っていけばよい。誰からも文句は言われない。しかし正面の入口に、赤や金ピカの服装のボーイが立っている大ホテルの重いドアを押して、トイレだけを使って帰ってくるのも、多少勇気が要ることである。

ニューヨークに着くと、ブロードウェイの道の真中に、小さな汚い石の家が、ぽつんぽつんと建っているが眼についた。私は瞬間、パリのかたつむりと称する公衆トイレを思い出し、「さすがニューヨークだ、ちゃんと公衆トイレが揃っているな」と感心した。しかし翌朝、それは地下鉄の駅であることがわかった。

また日本の場合は、大きいビルに入れば、どこにも廊下から直接入れるトイレがある。しかしアメリカの場合には、そうしたビルのトイレには鍵がかかっていて、そのビルの中に勤めている人だけが鍵を持っていて、使用でき、他の者は使用できないようになっている。合理的といえば合理的であるが、はなはだ非人情である。

大きいビルからも、デパートからも締め出され、公衆トイレもないアメリカ人は、一体どこで用を足しているのかと、他人事ながら心配になった。

（つづく）

花の金次郎

三戸岡道夫

花の金次郎とは、神奈川県南足柄市の古屋富雄のことである。

南足柄市は、二宮金次郎の生れた小田原市栢山の西に、隣接する市である。その中間に酒匂川が流れているが、その昔二宮金次郎は南足柄市で採った薪を背負って小田原まで売りに行っており、地域としては一帯の生活環境で、報徳思想が行き渡り、豊かな田園が美しく拡っている。

その南足柄市に、平成に入って大きな特色が生れた。それは花である。豊かな田園の中に、美しい花々がいちめんに咲く、花の市になったのである。

そして、それを推進しているのが、

「あしがら花紀行」や、

「あしがらフラワー・ユートピア」

という運動であり、それを提案し、推進のリーダーとなっているのが、古屋富雄である。古屋富雄を、と名づけるゆえんである。

その花の金次郎、古屋富雄の活躍について触れてみよう。

古屋富雄は昭和五十二年、神奈川県立農業大学を卒業すると、昭和五十七年に南足柄市役所に入所した。市役所に入ったのは、自分の生れた南足柄市に、なにか役に立つ仕事がしたいという、報徳の精神が心底にあったからである。そのためには、南足柄市を全体的な視点から捉えられる市役所がよいと思ったのである。

（なにか南足柄市に役に立つことはないか。南足柄市のイメージアップをはかる方法はないか）

市役所の仕事をしながら、古屋富雄はいつもそのことを考えていた。二宮金次郎が活躍した時代から、すでに百三十年以上たっている。時代は変っている。二宮金次郎のやった以上の新しいことが、何かある

筈である。
すると古屋富雄の眼に、花がとまったのである。南足柄市には至るところに、四季折々の美しい花が咲いている。
（これだ！）
と古屋富雄の頭にひらめいた。
（花で南足柄市を盛り上げ、繁栄させるのだ）
古屋富雄はアイデアマンである。たちまち頭の中に、「南足柄市花いっぱい運動」のイメージが拡ってきた。
古屋富雄はアイデアマンであると同時に、実践家である。この点も二宮金次郎に似ている。いい考えが浮かぶと、すぐ実行する。
こうして平成七年に、
（あしがら花紀行）
という運動を提案し、古屋富雄が中心になって活動を開始した。
「地域経済を活性化したい」という思いが、「あしがら花紀行」としてスタートしたのである。花紀行の狙いは、
（四季を通して、南足柄市に花で人を呼ぼう。そして自慢の産物を売ろう）
という、都市交流型の経済圏作りである。
たちまち多くの賛成者が集まり、現在は古屋富雄の仲間三人と、二十の民間団体で、ほぼ一千人の人間がこの運動を行っている。
運動が始まると、南足柄市内には、農道一キロメートルにわたって水芙蓉が植えられたり、あしがら桜の並木道が誕生したり、ハナアオイが農道に咲くなど、四季折々の花が至るところに咲くようになった。また球根や苗などを、自分たちの手で育て、農家に提供したりもした。
こうして「あしがら花紀行」はスタートして十六年たったわけで、現在の南足柄市は、春は、あしがら桜、菜の花、野藤、れんげ、夏はあじさい、花あおい、秋は酔芙蓉、彼岸花、ざる菊、冬はナバナと、四季おりおりの花が、市内の公園や農道のわきに、咲き乱れている。
そして花の時期に祭りを開くと、箱根に向かう多くの人たちが立ち寄ってくれたり、また「花紀行のうわさ」を聞いて、わざわざ南足柄市の花を見に東京、横浜方面などから来る客なども多く、年間十七万人もの行楽客が集まるまでに成長したのである。
そのような中で、平成十五年に新しい動きが加わった。
それは南足柄市から東京都羽村市へ、酔芙蓉の増殖用の苗が提供されたのがきっかけになって、

（花による、南足柄市と他の市との交流）
が始ったのである。
他の市町村へ、花や、花木の苗などを無償で提供し、地域全体が同じ季節に同じ花の咲く、「花の理想郷」をスローガンに活動が展開されたのである。
この活動は好評で、その後交流する市の数は増えつづけ、この交流を、
（フラワー・フレンドリー・シティ）
と名づけた。市町村の交流を、まず花で始めるという、肩ひじの張らない取り組みである。そのために古屋富雄は、各市への連絡や、講演会に駆けめぐり、席のあたたまる暇のない忙しさである。
南足柄市の花いっぱい運動は、全国的な拡がりを見せているのである。
こうして「あしがら花紀行」運動が市内に行き渡り、他市との提携という拡がりを見せると、次のステップが待っていた。
これまでの「あしがら花紀行」は民間ボランティアが中心になって活動していたのであるが、平成十九年になると、南足柄市がこれを「市民農業者制度」として、市の行政事業の中に組み入れたのである。すなわち、私的なものから、公的なものへと格上げされたのである。
そのために平成二十年四月、沢長生市長が、産業建設部に
「花紀行推進担当課」
を新設し、その初代課長に古屋富雄が任命されたのである。これまで民間ベースだった花運動が、ついに公のベースになったのである。
「花紀行推進課」などという名前の課が、他の市にあるであろうか。恐らく、無いであろう。あるのは、日本全国でも、南足柄市だけではあるまいか。そして古屋富雄はその課長なのである。
（これでいっそう動きやすくなった）
古屋富雄は欣喜雀躍した。
古屋富雄のスローガンは、農地の社会化である。たんに花を植え、花を咲かせ、人々を喜ばせるだけではなく、それによって農地の活性化をはかり、農業を振興することである。すなわち花によって、二宮金次郎の狙ったものを、現代に生かすことである。
これまでは花を植えるのは、公園とか農道とかの公有地であったが、今度は遊休農地にも花を植えるようにして、花紀行を面的に拡大した。
遊休農地に花を植えれば、面として花畑がいっそう拡がり、同時にそれによって遊休農地の荒廃を防ぎ、復活が図られる。
そしてまた遊休農地の花は、たんに花だけに止っ

ておらず、花が美しい野菜とか、また若い女性の好む野菜とか、珍しい新種の野菜の発明へと、進んでいくのであった。

たとえば生で食べられる、白くて柔らかで甘いトオモロコシや、白菜、しかも夏でなく秋深い十一月にとれるトオモロコシと白菜は、その典型的な一例であろう。

この平成二十年から始った公の花の事業を、古屋富雄は、

（フラワー・ユートピア）

と名づけた。

そしてフラワー・ユートピアは、花だけでなく、花をきっかけにして市民の農業参加を推進することも始めた。すなわちレクリエーション農園とか、市民も三年やれば農業者になれる、いわゆる市民農業などを始めたのである。

こうなると南足柄市への観光客もますます多くなり、ざる菊などの花が見頃の十一月十八日には、自治会のレクリエーション部などの協力を得て、花見の客に、豚汁や焼き鳥などの模擬店や、野菜や、ミカン、柿、キウイなどの販売も行っている。その日は千人を超える客が集まり、農産物や模擬店の品物を完売した。

今後は「あしがら花紀行」と「フラワー・ユートピア」による、双璧の花のエリア作りを足柄地域全体に展開させて、それによって東京、横浜などの都市住民との交流による、年間四百万～五百万人の都市交流型経済圏を誕生させるのが、花の金次郎、古屋富雄の夢である。

先見の明（一）

―韮山代官江川太郎左衛門の偉業と世界遺産への道―

堀内永人

目次

第一章　青春の鼓動
一、生い立ち
二、江川家のルーツを探る
三、日本にせまる欧米諸国
四、父英毅の薫陶を受けて成長する
五、江戸の撃剣館道場で剣道を修業する

第二章　名代官
一、兄秀虎の死により、江川家の後継者となる
二、母から「忍」の大切さを教わる
三、伊豆、駿河、相模、武蔵、甲斐の天領八万石を支配する伊豆韮山代官となる
四、二宮尊徳から報徳を学び、質素倹約と綱紀粛正を実践する
五、農民から「世直し江川大明神」と敬われる
六、種痘をわが子に治験して、天然痘から領民を救う

第三章　欧米諸国の脅威
一、洋学者との交流
二、外国船打払い令とモリソン号事件を批判する
三、東京湾の海防
四、「妖怪」鳥居耀蔵との攻防

第四章　洋学の弾圧
一、国際情勢を学ぶ
二、鳥居耀蔵の小笠原無人島渡航計画のでっち上げで苦戦する
三、蛮社の獄始まる

四、洋学者渡辺崋山、高野長英ら逮捕される
五、洋学者、相次いで自殺する

第五章　国防と現代教育の先駆者
一、大砲の実弾訓練を見学する
二、日本近代砲術の祖、高島秋帆との出会い
三、冤罪で逮捕された高島秋帆をささえる
四、首席老中水野忠邦、天保の改革に失敗する
五、江戸町奉行鳥居耀蔵失脚し、四国丸亀に追放される
六、私塾韮山塾を創設する
七、日本で初めて携行食糧としてパン食を導入

第六章　近代兵制と品川の御台場築造
一、海防論者、兵法学者佐久間象山、韮山塾に入門する
二、我が国で初めて「捧ゲ銃」「前へ進メ」の洋式号令を採用する
三、長州藩では「奇兵隊」が、韮山代官所では「農兵隊」が創設される
四、東京湾の砲台、品川御台場を築造する

第七章　反射炉の築造
一、ペリー提督の来航とアメリカ帰りのジョン万次郎の登用
二、伊豆戸田におけるロシア海軍プチャーチン提督の大型洋式船建造を支援
三、大砲鋳造のため、伊豆の韮山に反射炉を築造する
四、反射炉の築造が一時中断される
五、江川太郎左衛門の遺業は継承されて反射炉が完成、大砲が鋳造される
六、韮山反射炉と世界文化遺産登録へのあゆみ

あとがき

第一章　青春の鼓動

一、生い立ち

（一）

この物語は、今から約二〇〇年前、江戸時代末期に、新しい欧米流の軍事家として活躍した、伊豆国田方郡韮山村（現在の静岡県伊豆の国市韮山）の世襲代官江川太郎左衛門（名を英龍、号を坦庵）（一八〇一―一八五五）の物語である。

江川太郎左衛門は、享和元年（一八〇一）五月十三日、伊豆国田方郡の江川家韮山邸において、三十五代当主江川英毅（韮山代官）久子夫妻の次男として誕生した。

太郎左衛門は、後年、江戸幕府の韮山代官となり、世界的な文化遺産「韮山反射炉」や、東京湾品川沖の砲台「品川御台場」を築造したことで有名な人物である。

この韮山反射炉は、大砲を製造するために築造された施設であるが、実際に大砲を鋳造した反射炉として、世界で唯一現存する貴重な文化遺産である。

なお、太郎左衛門は、幼名を「芳次郎」といったが、「芳次郎」は、太郎左衛門が十九歳になった文政二年（一八一九）に、十二代将軍徳川家慶の次男「嘉千代」（母は側室お久の方）が生まれると、「嘉」と「芳」の訓読み（国音、漢字の日本流の読み方）が同じということで、将軍家に対して失礼になる（不敬に当たる）として、「芳次郎」を「邦次郎」と改名した。

（現代の感覚からは、他人の子どもと名前の読み方が同じということで、名を変更するなどちょっと考えられないことである。なんとも義理がたいことである）

（なお、将軍家慶の次男「嘉千代」は、生まれた翌年の一九二〇年に死亡している）

邦次郎は、天保六年（一八三五）五月四日、父英毅の後を受け継ぎ、家督を相続して韮山代官に就任、通称の「太郎左衛門」を襲名、名前を「英龍」、号（現代のペンネーム）を「坦庵」と称するようになった。

（なお、号の「坦庵」を、「たんあん」と呼ぶ人もいるが、近時は「たんなん」と呼ぶことが一般的であるので、この物語でも「たんなん」と呼ぶことにする）

なお、江川家では、天文六年（一五三七）に二十六代江川英元が、通称「太郎左衛門」と名乗り、以降代々「太郎左衛門」の名を世襲していたが、江川家の中でも、この物語の主人公英龍（号は坦庵）がもっとも有名であったので、普通、「太郎左衛門」といえば、三十六代の当主であるこの物語の主人公「英龍（坦庵）」を指していることが多い。

したがって、この物語でも、単に「江川太郎左衛門」、または「太郎左衛門」と書いてあるときは、江川家三十六代の「英龍（坦庵）」を指している。ご了解いただきたい。

（二）

では、物語を太郎左衛門の父親、韮山代官江川英毅（江川家三十五代当主、世襲代官としては七代目）の時代《享和元（一八〇一）年》に戻そう。

江戸は本所（現在の墨田区）の韮山代官江戸役所に滞在していた英毅は、第二子誕生の知らせをうけると、

早速、幕府勘定奉行へその旨を届けて、伊豆の韮山邸に帰ってきた。

英毅は、屋敷に着き、玄関に上がると、

「おー、いま帰ったぞ！　お久は元気か・・・・・」

と、大声で帰宅を告げ、妻に対するいたわりの声をかけた。いつもなら、そのまま自室である書院に入るのであるが、今日は、満面に笑みを浮かべ、両手を身体の前に出して、手を打ち、小躍りするように、妻久子（旗本安藤家の息女）の産室に大股で入っていった。

「お久！　でかしたぞ・・・・　倉次郎（長男英虎）に続いて男子が生まれ、これで江川家も安泰である。いや、いや、まことにめでたい、めでたい・・・・」

と、にこにこ顔で喜びを全身にあらわし、妻久子の手を、両手でぎゅっと包み込んだ。

「それにしても、この子はずいぶんと髪の毛が黒くてたくさん生えている。それに、まだ目も見えないだろうが、なにやら大きな目をしてわしを見ているようだ・・・・」

英毅は、なにか不思議なものでも見るように、小さな二つのこぶしを上に突き上げ、赤い顔して元気よく泣いているわが子をじっと見た。

「お久、ことによったら、この子は、将来、世のため、人のためになる大物になるやも知れぬぞ・・・・・　さて、どのように磨けばよいだろうか、よほど心して育てねばな・・・・・」

と、学問好きで吉凶を占う易学にも心得のある英毅は、喜び半分、不安半分で、ちょっと複雑な気持ちであった。

やがて英毅の予想は見事に的中し、「芳次郎」（太郎左衛門の幼名）と名付けられたこの男の子は、八代目の韮山代官に就任すると、次第に大物ぶりを発揮するのである。

「栴檀は双葉より芳し」

（大成する人は、幼少のときから並はずれて優れている）

の、たとえのように、太郎左衛門（幼名は芳次郎）は、出生時より普通の赤子と違っていたのである。

太郎左衛門が六歳になったある夏の日、韮山江川邸の広い庭先に、家臣の子弟などが大勢集まって、蝉取りをして遊んでいた。その庭へ、子牛ほどもある大きな黒い犬が入ってきた。

その黒犬は、「ウシ」と呼び名がついた狂暴な犬である。もともとは猟犬であったが、猟師のいうことをきかないので捨てられ、今は野良犬になった犬である。

この犬が、江川邸の門番の監視をくぐり抜けて、邸内に入り込んできたのである。

ウシは、口を大きく開け、真っ赤な草履のような大きな舌を出して、

（ハァーハァー）

と、荒息を吐きながら、蝉取りに夢中になっている子

どもたちの方へ向かって襲いかかってきた。

ウシが襲ってきたことを気付いた子どもたちは、

「キャー・・・・・」

「逃げろ・・・・・」

と、てんでに木に登ったり、大きな庭石に飛び移ったりして難を逃れようとした。

太郎左衛門少年も大急ぎで、すぐ近くの物置小屋に飛び込んで、あわてて木戸を閉めようとした。

そしてウシの方を見ると、おみよという六歳になる家臣の娘が、ウシの勢いに恐れをなし、恐怖のあまり顔を真っ青にして、金縛りになって立ちすくんでいた。

太郎左衛門少年は、いったんは物置小屋に逃げ込んだが、おみよの危機を知り、とっさに、

（おみよを助けなければ・・・・）

と思い、蝉取り竿を手にしたまま、おみよに駆け寄ろうとした。

一方、狂ったように吠えたてるウシは、たった独り残された、赤い花模様の着物を着たおみよにおどりかかった。

「くそ、ウシなんかに負けるもんか・・・・」

太郎左衛門少年は、子どもながら家臣の娘を助けなければと、脱兎の勢いでおみよのところに駆けつけた。

二人の距離は、三十メートルほどもあっただろうか、それを三段跳びのような超飛躍で走り寄ったのである。

信じられないような脚のバネである。

どこにそんな力が隠されていたのか？

（後年になり、太郎左衛門は、一日に二十里（≪約八十キロメートル≫）歩いたということであるから、子どものときから脚力には自信があったようである。そのうえ、火事場の馬鹿力ではないが、おみよを助けたい一心で、潜在能力が発揮されたのであろう）

ウシはおみよを押し倒し、おみよの喉元に噛みつこうとした一瞬、

「畜生！くたばれ・・・・」

と、手にした竹竿の先を、ウシの大きな、まっ黒な頭めがけて、叩きつけるように振り下ろした。

するとウシは、

「キャン、キャン・・・・」

と、悲鳴をあげたかと思うと、突然、苦しげに口を半開きにして舌をだらりと出し、頭を斜めにして、左回りにくるくると狂ったように廻り出したのではないか・・・・・。

（よし、今だ・・・・）

この期を逃してはと太郎左衛門少年は、腰に差した木刀を抜くと（武士の子は、武士の子の証しとして刀の代わりに木刀を差していた）、剣術の稽古で習ったとおり、八分の力を両腕に込めて、ウシの大きなからだを目がけて、頭も砕けろとばかりに、

「エイ！」
と振り下ろした。
木刀とはいえ、うるし塗りで、真鍮のたががはめてある重量ものである。
（ガツッ）
と音がして、振り下ろした木刀が見事にウシの頭に炸裂した。
さしもの獰猛なウシもたまらず、
「キャーン・・・・」
と一声悲鳴をあげると、尻尾を後ろ脚の間に巻き込んで、通用門から邸の外に逃げていってしまった。
太郎左衛門少年は、無我夢中とはいえ、獰猛な巨犬のウシを追出し、おみよを無事助けることができたので、子どもながらも、家臣を護るべき責任を果たしたような気がして、ホッとした。
太郎左衛門少年は、木刀を腰に戻すのも忘れて、
「おみよ、大事なかったか・・・・・」
「おみよ、大丈夫か・・・・・、けがはないか」
と、二度三度、声をかけながら、おみよに駆け寄り、彼女の顔を覗き込んだ。
幸い、おみよも、両手で顔を覆って、ウシの攻撃から身を護ったため、右腕を噛まれていたが、さして深い傷でもなく、安堵の胸をなでおろした。
おみよは、太郎左衛門少年の、自分の身を犠牲にしてやがてキッと顔をあげ、
「それが・・・・、父上、違うんです。おみよを襲ったウシの次の攻撃目標は、わたくしだったんです。わたくしは、ウシの目を見てそれが分かったんです。大きな黒い目でわたくしをにらみ、からだをかがめ、すぐにも飛びかかってきそうだったんです」
「さようか、それでどうした」
「あの大きなウシが飛びかかってきたら、わたくしはいっぺんに押し倒され、喉笛を噛み切られてしまいます。ですからわたくしは、怖かったのです。怖さのあまり、狂ったようにぐるぐると回りだしたのです。竹竿の先は折れてしまって、使い物にならなくなったので、やむを得ず、腰の刀（木刀のこと）を抜いて斬りつけたところ、ウシの頭に当たり、ウシが逃げ出したのです」
太郎左衛門少年の目は、少し恥ずかしげであった。
の活躍で、ことなきを得たのである。
そして、それぞれ安全地帯に逃げていた子どもたちも、おみよのところに寄ってきて、口々に、
「おみよちゃん、よかったね・・・・」
「おみよちゃん、怖かっただろうね・・・・」
と、助かった喜びと、なぐさめの声をかけてきた。
この太郎左衛門少年の武勇伝は、代官所内は勿論、韮山村をはじめ、隣村へアッという間に伝わっていった。
「おい、若が、ウシをやっつけたんだって・・・・」
「子どもながら、さすが若さまだ、度胸がある・・・・」
と、太郎左衛門少年が獰猛な巨犬、ウシを撃退した話は、尾鰭に尾鰭がついて、韮山代官所管内の村々に伝播していったのである。

やがてこの話が、江戸詰の父、三十五代江川英毅韮山代官の耳にも入った。その日から一か月後に、韮山代官所江戸役所から韮山へ帰ってきた英毅は、
「太郎左衛門、これに参れ・・・・」
と、わが次男を自室の書院に呼び、
「そちは、自分の二倍もある大きな黒犬、ウシとやらを、蝉取り竿と木刀で追い払ったそうだが、その度胸と剣技はみごとであった」
そう褒めてから、わが子の反応をうかがった。
太郎左衛門少年は、しばらくもじもじとしていたが、
「いやいや、噂と話の内容が違うのう・・・・　わたしも噂の内容を少々疑っていたのじゃ。わたしは、太郎左衛門の剣術や槍術の腕前が、それほどにあがったとは思っていなかったからのう・・・・」
英毅は、嘘いつわりのない正直な太郎左衛門少年の話を聞き、その正直さ、素直さがかえって嬉しかった。

（二）

少年時代の太郎左衛門は、決して神童でもなく、天才少年でもなく、ごく普通の腕白少年であったのである。
ただ、三つ違いの兄倉次郎のきびきびした日頃の行動に感化され、韮山代官の子として、世間から後ろ指を差されることのないようにしなくては、という気概が、からだ全体にゆきわたっていたことは確かであった。
腕白で、少々あわて者のところがある太郎左衛門少年は、十二歳頃から乗馬の稽古を始めていた。が、ある日、愛馬にまたがり馬の稽古をしていると、道路の曲がり角で、大きな藁束を背負った農民と鉢合わせした。すると、馬が大きな藁束に驚き、
（ヒヒーン）
といななき、後ろ足で高々と立ち上がったため、太郎左衛門少年は、不覚にも、ぶざまな格好で馬から転げ落ちてしまった。

身のこなしが敏捷な少年といえども、二メートル余の高さから振り落とされたので、右腕を痛めてしまった。

母親の久子は、けがの手当てをしながら、

「一度や二度落馬したくらいでなんです・・・・・　三度自分の肘を折るほどでなければ、良い医師になれない、という教えもあります。引き続いて明日も稽古をするのです」

と、中国の古いことば紹介しながら、さらに修業するよう励ました。

また、あるとき、母久子が、縁側で爪を切っていると、太郎左衛門少年が、その切り取って散らばっている爪を拾い集めているので、不審に思った母が、

「なぜそのようなことをするのですか・・・・」

と、訊ねると、

「爪といえどもからだの一部であります。母上のからだの一部である爪が、お女中さんたちに踏まれるのは、もったいのうございます」

と、答えたそうである。太郎左衛門は、このように奥ゆかしい少年でもあったのである。

また、太郎左衛門少年は、六歳から、道徳の教科書ともいわれる『論語』を始め、『大学』、『中庸』、『孟子』など儒学の書物を学び、人の上に立つべき者の心得を学んでいた。が、少年時代は、兄倉次郎の陰に隠れて、あまり目立たない、ごく普通の少年であった。

少年時代の太郎左衛門については、父英毅直々の教育があり、また、日々、母久子が、やさしい中にもきびしく躾を指導した。

この両親の愛情に応えるように、太郎左衛門少年も親をうやまい慕い、目上の人に対する礼節を身に付け、次第に成長していくのであった。

つづく

館林ザ・トレジャーガーデン

吉田忠雄

私の故郷は足利である。現在は越谷に住んでいる。ときどき何かの行事で足利に行き一泊する。その折には帰りに東武線の茂林寺駅で途中下車し、館林ザ・トレジャーガーデンに寄る。ここは、以前は野鳥の森自然公園と呼ばれていた。ピンクの芝桜を中心とした花園である。草花の好きな人には一見に値する場所である。

茂林寺駅を出て駅前の道を右に行く。3叉路に出たら、左折する。少し歩くと左側に茂林寺入り口と書いた道案内板がある。そこを左折する。分福茶釜で有名な茂林寺の山門を左に見て土産物屋が両側に並ぶ道を進むと、ホタルの里と呼ばれる茂林寺沼湿原にでる。このなかに設けられた遊歩道を進み茂林寺川を渡ると、ザ・トレジャーガーデンの下に沿った道にでる。この道を進むとガーデンの入り口に達する。

ここで入場券をもとめ、ザ・トレジャーガーデンに入る。まずはお目当ての芝桜のガーデンに行く。私が行ったのは4月の初めから5月の半ばにかけてであった。4月の初めには芝桜はほんの一部の白芝桜だけが咲いていた。4月半ばから5月にかけては赤、白、ピンクの芝桜が広い丘一面に咲き誇り壮観であった。ここでは、芝桜の周囲をゆっくり歩いたり、設置されている椅子に座ったりして心行くまで鑑賞した。

芝桜を堪能した後は、その他の花のガーデンを見る。芝桜のガーデンの西端から北に行くと、ポピーの花壇がある。芝桜とは印象が異なり気分が転換する。さらに北に行くと、青のガーデンがあり、ネモヒラなどの青い花々が多数美しく咲き誇っていた。

来た道を戻り、さらに芝桜のガーデンの西端をかすめてビバーナムの小道をいくとローズガーデンに至る。水辺のローズガーデンは円池を中心にしたばらの花壇であ

る。この水辺のローズガーデンからこの公園の入り口に向かってロングボーダーガーデンが一直線に伸びており、各種のばらが咲いていた。

ロングボーダーガーデンの中にはテラスインザガーデンがある。私はここで一休みして、紅茶を飲む。ここの飲食のサービスは私の知り合いのニューミヤコホテルが経営しており、時にはここにくることのあるホテルの若社長と逢い言葉を交わす。

時間がちょうどよい時には、茂林寺駅への帰り道にある川魚料理屋により、鯉の刺身をはじめとした川魚料理を食べる。またイナゴの佃煮を買って帰ることもある。ただしこれは家内には歓迎されない。

目耕録（その八）

――小島麗逸著『新山村事情』を読む（日本評論社、一九七九年）――

目耕：目で紙田を耕す。読書することを譬えて言う（世説新語）。

山本鎭雄

六年目の最悪のスタート

退職を契機に、一人で山梨県東部にある妻の実家の畑で野菜作りを始めた。今年で五年目の冬を迎えたが、異常に寒かった。昨秋、春菊、ほうれん草、小松菜、チンゲンサイなどの古い種を畑に厚く蒔いた。豊作の里芋の収穫と保存に手が取られ、葉菜類の間引きや水撒き、追肥や除草を省いてしまった。春菊はこの厳しい寒さに耐えられず、黄色い花が咲く前に枯れた。春になったら、ここにどんな野菜を作ろうかと楽しみにしながら、耕耘機で春菊の枯れ葉を掘り返した。

冬の露地ものの小松菜、ほうれん草、チンゲンサイは霜にあたると糖度や甘みが増し、最高に美味い。収穫を楽しみにしていた。ところが、獰猛な鵯（ひよどり）の大群が飛来したらしく、葉っぱは芯を残して、きれいに食害された。早速、防鳥テープを張りめぐらしたが、後の祭りだった。周囲の畑の葉菜類も鵯の餌食になったようだ。

カキ菜は冬から春にかけて葉菜類の端境期の貴重なビタミン源だが、それもまた盛大に食害された。鵯はとくにキャベツが好物らしい。外側の葉、結球した部分はもとより芯まで食害された。早速、根を掘り出し、食い残した葉を土に埋めた。良く見ると、冬越しのエンドウの葉も僅かに食害されたらしい。すでに立てた支柱に防鳥テープを張りめぐらしたが、どれだけ効果があるのか定かではない。

昨秋、収穫した大根が食べ切れなかったので、土に埋めて保存した。ところが、あとで掘り返すと、上部は腐っていた。丸型の聖護院大根は畑にそのままにして土をたっぷりとかけておいたが、やはり上部は腐り、下部を使ってブリと煮て、ブリ大根としゃれてみたが、大根は固くてあまり美味くなかった。

真冬、人参の葉も枯れた。そこで、人参を掘ったが、成熟していなかった。それは大失敗だった。東京郊外の自宅の近くの畑では三月になって、再び緑葉が小さく生えると同時に根の部分も成長したようだ。三月末が最後の収穫期だった。

旬の野菜と季節感

春撒きとは別に、夏蒔きの人参は葉が枯れても冬を越させ、三月末まで収穫出来る。愛用の電子辞書に収録されている『ホトトギス俳句季題便覧』（三省堂）で「人参」の項目を見たら、「冬十二月」（旧暦）、「冬、霜の降りる前後に採る」と記述されていた。素人の私は初めて知ったことだが、玄人には人参は冬から二月にかけて、収穫するのが極く当たり前のようだ。

五月になり、これから隠元豆の種を蒔こうと考えている。さきの『ホトトギス……』によれば、隠元豆の季語は「秋八月」となっている。隠元豆は一年間に三度も収穫できるので「サンドマメ」（『広辞苑』）と言われ、春二回はともかく、七月に種を蒔くと、秋の九・十月に収穫することが出来る。旧暦で言えば、「秋八月」の「季語」は間違いではないが、春蒔きには触れず、「季語」は実情に即していない。

本来、どの野菜・果物・魚介類には最も美味しいという「旬」の時期がある。夏蒔きの人参は、むしろ「冬十二月」以降に収穫したのが最も美味く、人参は三月末まで収穫することが出来る。野菜・果物・魚介類は一年中スーパーの店頭に並び、とくに野菜は季節感を喪失してしまった。もはや季節感なき野菜だが、今日の俳人たちは伝統を尊重するそうだが、実情に即して「季語」を大胆に再検討する必要性を感じないのだろうか。「季語」は絵空事にしか思えない。

三月、畑に蒔くジャガイモの種芋の準備や土作り、畝作り、植えつけの時期が気になる。ジャガイモは三月に種芋を蒔くと、六月に収穫できて長期間保存し、食用出来るという大変有り難い根菜類である。昨年六月の梅雨時の晴れ間に収穫したジャガイモは豊作だった。紙袋に入れ、畑の小屋に収納し、その都度、取り出して食べたが、春になってもかなり残った。その残った丈夫そうな芋を選び、芽を欠き、適当な大きさに切って種芋として植えたが、北海道産の種芋よりもあまり芽立ちは良くない。

ジャガイモの植えつけで大儀なのが、かまぼこ状に土

を盛り、中央部を掘り、そこに種芋、元肥、水を撒いて鍬で土を被せる。ところが、足と腰が痛み出し、動作は緩慢となり、しかも息切れして長くは続けられない。休み休み作業をすることにしてきた。

そこで、今年は耕耘機にプラスチック製の培土機という簡単なアタッチメントを取り付け、溝を掘った。ところが、その培土機はめったに使わなかったので、力任せに、ただがむしゃらに操作した。それが応えたのか、帰りの農道を歩いていると、足や腰が痛み、歩行が困難となり、ゆるい坂道を上るのも辛かった。

昔、当地の主要産物は陸稲、養蚕、雑穀に加え、小麦だった。小麦粉に少量の塩を加え、丹念に練って作る。この手製のうどんを「おごちそう」することが、来客にたいする最高の振る舞いだった。かつては里芋の裏作に小麦の種を蒔いたが、麦作りは五五年代以降には急速に衰退した。そのため、周囲の畑で小麦・大麦を見かけることはない。

私は食用でも、まして飼料用でもなく、燕麦の種を畑の周囲に蒔くことにしている。麦の葉や茎が風に揺れ、青々とした光景を見ていると、心が清々しくなる。しかも、麦わらを胡瓜や茄子の根元、ねぎの苗の根元に置くと、水分の蒸発を防ぐことになる。さらにスイカやカボチャの下に敷くことにしている。

今年は四月上・中旬までは寒く、しかも雨が降り、本格的に一泊二日の野良仕事に出掛けたのは四月下旬だった。小松菜は黄色い花が咲き、ほうれん草は大きくなり過ぎた。かき菜はつぼみがつき、ポキポキと折って収穫した。ねぎはねぎ坊主をつけていたが、葉はまだ柔らかったのでそれも収穫した。三月に植えたジャガイモはぼつぼつと芽を出していた。定植した玉ねぎはまばらに生え、葉はエンピツの芯ほどにしか生長していない。今年もまた失敗した。

山狭村の梁川

山梨県は甲府（盆地）を中心に「国中」、桂川沿いで昔の南・北都留郡の「郡内」、さらに富士川の上流沿いの「河内」に大別される。私が野菜作りに通う大月市梁川町は「郡内」の東部にあって、河岸段丘のわずかな平坦地に家と畑が混在し、急峻な桂川沿いに南北に山々が迫る山村である。野菜作りでくたびれると、小椅子に座って桂川沿いの山々と森林を眺め、ポットに用意したお茶を飲み、疲労を癒すことにしている。

梁川はＪＲ中央線と国道二〇号線が二段の河岸段丘の上段を貫通し、そのため東京の八王子、立川は優に通勤圏である。なかには都心まで通勤するサラリーマンもいる。高度成長期には農家の後継ぎ層もまた中学・高校を卒業すると、当時の郵便局、国鉄、あるいは消防署などの現業部門の職員として通勤しながら、土日や非番の休

みに先祖伝来の農地の耕作の手伝いをした。

今や、彼らは農家の跡を継ぎ、老齢年金の受給者として暮らし、趣味と健康を兼ねて自給用に野菜を作っている。もっとも基礎年金だけの受給者は、生活費の足しに白菜、里芋、山芋などを軽自動車で農協の直売所に出荷している。

農家の跡を継いだ現役のサラリーマン氏を畑で見かけるが、農耕用トラクターを運転し、畑を耕し、同時に除草を済ませ、種を蒔くか、苗を植えてさっさと引き上げる。畑仕事は職場の仕事で手が回らないようだ。その息子や娘が畑仕事を手伝う光景はほとんど見かけることはない。学習塾やおけいこ事に通うのに多忙なのであろうか。

中学校はすでに廃校となった。年度末に政府から補助金が交付されると、校舎・体育館・プールは解体され、桜の老木も生木を剥ぐように倒木された。跡地の利用計画もなく、砂が撒かれ、広い空き地の一角で午前と午後に数名の退職高齢者がゲートボールに興じている。それはそれで結構なことだ。村人には余計なことだが、村おこしのために、国道に面した旧中学校の空き地を道の駅にして、農産物の直売所を開設したらと考えたことがあるが、村人にはそんな気力と気運はさらさらない。

小学校は生徒数が減少し始めた三十数年前、全村を上げて大騒動の結果、広い校地を取得して小学校を開設した。ところが、少子化のためにその小学校も廃校となり、体育館は毎週一回「若い女衆（おんなしゅう）」のバレーボールの夜間練習場として使用され、広い運動場はたまに周辺の子供の野球チームの試合場に利用されている。

私は野良仕事をしながら、小学校の昼休み開始時の教員や小学生の校内放送、下校時には文部省唱歌『故郷』の「兎追いしかの山、小鮒釣りしかの川」のチャイム、さらに熊除けの鈴か、チャリン、チャリンと鳴らして元気に集団下校する小学生たちを見聞きした。今や、それはただ懐かしい記憶の世界となってしまった。

渓谷も田園も無（あ）れなんとする

昨年の晩秋、野良仕事が早く終了したので、上段の河岸段丘を下り、桂川と月屋根沢が合流する渓谷を散策した。そこは三島由紀夫の晩年の小説『奔馬』（『豊饒の海』第二部）に登場し、晩秋の風景は極めて幻想的に描写されていた。ところが、桂川は昨秋の大豪雨で二メートル以上も増水したらしく、枯れ枝と枯れ草が散在し、ビニールがひらひらと枯れ枝に引っかかり、見るも無残な光景だった。

そこは、六月に鮎釣りが解禁されると、釣り人が殺到する渓流釣りの人気のスポットだった。友釣りと言って、おとりの鮎を泳がせ、鮎の縄張り性を利用したユニークな魚釣りである。それにはまると、鮎釣りは大変面白い。ところが、早朝、太平洋沿岸に生息する海鵜（うみう）が相模川と桂川を目印に大挙して飛来し、鮎を大量に補食した。そのため鮎の魚影も、釣り人もほとんど見かけなくなった。この格好の釣り場の荒廃はこの山村の現在を象徴しているように見える。

一九五〇年代、農林省による食糧増産と自立農家育成のために土地基盤整備事業が実施された。河岸段丘の下段の梁川町綱の上は耕地を分合・交換し、方形の水田に整理・造成し、灌排水路と農道を整備し、桂川の水をポンプで揚水した。完成時、三町歩の水田に十六戸の農家が米作りをした。現在はわずか二戸のみで、三町歩の三分の一は耕作放棄地となり、ほかに畑地か林地に転用されている。

昨年、聞くところによれば、残る二戸のうち一戸は高齢化と腰痛のために、米作りを止めようと考えたが、三月の東日本大震災の報道を聞き、自給用に米作りを続けることにしたという。早朝、二戸の農家は一週間交代で稲の生長、水の管理、病虫害の被害の状況を観察し、その結果を連絡し合い、対処することにしている。ところが、一戸が米作りを止めれば、もう一戸も止めないとも限らない。

近辺の山村の考察

今後、この山村はどのように変容するのであろうか。私はただ週一回の野菜作りに多忙で、市町村史や統計上のデータを収集したり、村人に聞き書きをする時間的余裕はない。そこで、すでに古くなったが、JR中央線の梁川駅から西へ二つ目の猿橋駅から南に十キロ程の山村に定住して観察・考察した小島麗逸著『新山村事情』（日本評論社、一九七九年）を手掛かりとして、私が耕作のために通う山村について言及したい。

小島麗逸は一九三四年に長野県飯田の山村の貧しい農家に生まれ、一橋大学経済学部で第二外国語として中国語を学び、同大学卒業後、勤務したアジア経済研究所で中国経済を研究し、日本における中国経済研究の第一人者である。何故、中国経済の研究者の小島が過疎地の山村に定住したのか。率直に語っていないので、それ以上の無駄な推測は無用と考える。

一九七四年、小島は東京の団地生活を引き上げ、アジア経済研究所に通い、一家六人で山梨県大月市猿橋町朝日小沢の山村にしばらく定住した。小沢川の源流の近くで二反の畑地を借り、土日に野良仕事をしながら、五五戸の山村とその周辺を観察・記録した。山村に移住して早くも三年後に『経済セミナー』に一年間連載し、大幅に加筆修正して出版されたのが『新山村事情』である。今は、この朝日小沢の近くの地下にリニアモーターカー実験線が敷設されている。

自作小農の崩壊の爪痕

小島の記述によれば、朝日小沢の部落は

この部落は桂川に流れ込む沢（小沢川の上流）に沿って小さな田が段々に作られている。…最も広い田で五畝程度。…国道二〇号線まで五キロ、最寄りの中央線の駅（猿橋）まで約五・五キロである。海抜でいえば、おそらく五五〇メートルから六〇〇メートルであろう。東京の八王子、立川は通勤圏内である（括弧内、引用者）。

本書は十九章で構成され、前半は戦後の農地解放以降の「自作小農」の生活と農作業、共同水車小屋や精米所を始め、豆腐屋、鍛冶屋、製材所などの地域内自給経済が崩壊する過程を克明に考察・記録している。

それは高度経済成長による「都市の資本主義が自作小農を洗った爪跡」の記録である。山村の崩壊の「爪跡」は林業の衰退をはじめ、六九年の減反政策によって棚田の米作りから撤退し、さらに七三年のオイル・ショックの影響で養蚕からも撤退し、自給用野菜の栽培からも撤退した。農林業からの撤退が山村の崩壊に拍車を掛けることになった。

さらに農家は堆肥・糞尿・下肥（しもごえ）などの自給肥料を使用せず、化学肥料や油かすなどの販売肥料に依存するようになった。その結果、農家の出費が増加しただけではなく、田畑の地力が低下し、糞尿を河川に流出させるという環境問題が発生した。このように、小島は山村の現場から当時は農業経済学者が未解明の新たな問題を提起した。

食害された野菜はたしかに見かけは悪いが、私は「安心、安全」だと思っている。小松菜、ほうれん草、チンゲンサイなどの根菜類を土から引き出し、さらに食害された葉っぱと枯れた葉っぱを慎重に取り除く。見かけの良い葉っぱだけをスーパーや八百屋で買う消費者には理解出来ないだろうが、それは大変面倒な作業なのだ。

今や自給用の野菜作りは露地栽培ではなく、トンネル栽培が一般的となって、保温効果だけではなく、防虫対策にもなる。スーパーで売られている葉菜類に農薬が撒布されていないとは思わない。もっとも、農薬の撒布がすべて悪いのではなく、一定の使用基準があって、その基準から逸脱した野菜は商品市場には出回らないシステムになっているようだ。

自作小農の野菜栽培は多品種少量生産がその特徴であろう。小島の朝日小沢の観察によれば、七六歳の爺ちゃんが約三反歩の田畑を一家八人の自給用に米と野菜類を耕作し、水稲・大豆・ジャガイモなど年間五〇種の品目を栽培していた。天候の影響を受けるために、危険分散のために、同一作物で二品種以上も栽培し、優に七〇種に近い。だが、古老の自作小農の合理的な農法は伝承されず、農山村の崩壊とともに消滅するのであろう。

都市的生活様式の浸透とその帰結

小島は本書の後半、つまり一二章から一六章までの各章に「都市と農村との格差」という副題を付して考察した。高度経済成長の過程で山村における衣食住（物的生活水準）、時間感覚（田舎時間の解消）、人間と動物の交渉（小動物の飼育＝ペット化）などは都市並みになったが、所得格差構造（都市と農村の賃金差別体系）、「都市資本」による農山村の収奪など山村の変容を解明し、告発した。

この山村にも都市化、つまり都市的生活様式が浸透した。自動車、電気冷蔵庫、電気洗濯機、テレビなどの耐久消費財の普及は都市並みになった。ところが、自作小農の「生産」様式を崩壊させ、農家の主婦は村内小工場で働き、地元の土木業・建設業に日雇で働くことで山村生活を維持する生活様式が一般化した。

すでに指摘したように、この山村は東京西部の八王子・立川は通勤圏内で、JR中央線で通勤し、土日か非番の休みを畑仕事にあてることで、都市並みの「生活」状態を充足することが出来た。ところが、一部の農家は次世代の再生産の可能性を失い、高校や大学を卒業し、郡市に就職して結婚すると、通勤・通学に不便な山村を離れ、そのまま都市に定住した。

私が野菜作りのために通う山村では、最近は跡継ぎの長男は近在の教員、公務員、農協の職員などの手堅い職種に就職し、両親と同居し、退職後に先祖代々の田畑を耕作を手伝うケースと、東京圏に勤務し、結婚して、そのまま東京近郊に定住するケースが観察される。なかには、跡継ぎの長男が両親と同居し、「野良仕事は嫌いだ」と言って耕作を放棄するケースもあるが、両親の死亡後、畑は確実に耕作放棄地になる。その子供たちは畑で野良仕事を手伝い、野菜を作ることはまったくない。

二、三年、耕作しないと、雑草が蔓延し、そこで再び耕作するには一年を通して農耕用トラクターで耕し、除草しないと、種を蒔いても、苗を植えても、野菜は雑草に負けてまともに生長しない。耕作放棄地の無残な現状を目の当たりすると、野菜を栽培する意図はなくても、年に数回は、持てあました畑を農耕用トラクターで除草し、不作付け地にしている。多分、耕作者は畑を耕作するよりも、暇潰（ひまつぶ）しとトラクターの操縦に満悦しているのであろうと観察される。

私が耕作する畑の北と南の畑は耕作放棄地で、今年は私が耕作している畑の隅の北側と南側に緑色の杉菜が異常に繁茂した。今、時期的に種を蒔き、苗を植えつけることを優先しているために、これからの本格的に杉菜の除草をあれこれと思案している。

多年草の杉菜は土中に深く根を張り、横に長く延び、一本一本を根絶しないと繁茂する。だが、そんな時間的な余裕はない。密生した個所には耕耘機で除草するが、

その効果はあとになって見ないと、分からない。一本一本引き抜いて見たが、根っこはかなり深かった。杉菜はやっかいな雑草だ。不作付け地の所有者は杉菜の除草に閉口している。

終わりに

七〇年代後半、小島がしばらく定住した山村は地理的には山岳地帯で、実質的には農村の過疎地に属し、経済的には第二種兼業農家が支配的である。その当時、列島改造論と研究者の地方再生・地方重視という地方主義が横行しているにもかかわらずが、農山村の「生産論」が無視され、「生産基盤の強化」につながらないと、小島は批判した。

その結語として、戦後の農山村は「衰退の歴史を辿れば辿るほどその方策はつかめない」と経済的現状とその将来について悲観的な議論を展開した。しかし小島自身の山村生活は、決して悲観的・否定的だったのではない。経済学者として自己の経済的「直感」を確信させ、都市生活では経験できない自然と労働を一家六人で体験し、それを享受しながら、しかも山村の過去と現状を克明に解明した。

都市に生まれ、都市で暮らして退職した私自身、週一回の野良仕事とは言え、山村で自然と土地に接触して精神的な解放感を覚えた点で、おそらく小島の体験と共有出来たであろう。そして今日の超都市化社会の本読みと物書きの生活に窒息感を覚え、「農」、つまり農民、農業、農村に安らぎを覚えている。

（二〇一二年五月一〇日、擱筆）

追記

前号の目耕録（七）の末尾で、「農」と密接に関係する「食」について指摘し、その手がかりとして近くの公民館サークル「男の料理教室」に通うつもりだと書いたが、諸般の都合で取止めることにした。だが、「食」を通して「農」のあり方について考えたい。

二八に帰るすべもなし（九）

―愛する北国のひとに寄せて―

伊治哲

水

――話は、この物語を話し始めた昭和四四年の正月、雪が降った東京の夜にもどる――

それは、夕方から降りはじめた雪もようやくやんで、雪どけの水に洗われた夜の五反田駅での、ある女との偶然の出会いであった。

足元を気遣いながら一段一段と階段を降りてくる女…寒さの中で、いかにも疲れきった風情の三十代半ばの女……階段の途中で窺い見るようにツト足を止めた女……やつれてはいるが、細面な顔のどこかに昔の清純な少女の面影を残している女――それは、二十年前、兄妹のように一つ屋根の下で暮らした金沢の「タエ」ではないだろうか……ありえないこととは思いながらも、修平の心は激しく波打った。

修平はその夜、まんじりともせず、夢うつつの世界をさ迷った。

明くる朝、道端のところどころに小さな雪の塊が残ってはいたが、道路は雪解けの水に洗われ、空は嘘のように晴れ上がっている。

朝早めに五反田へ行けば、ひょっとして、あの女に会えるかもしれない、そう思うと矢も楯もたまらず山手線の電車に乗っていた。電車の中も、五反田の駅も通勤客で混みあっていた。しかし、当たりまえのことだが、万が一にも昨日の女に出くわすなどとは、修平の勝手な思い込みにすぎなかった。

夕方にも、昨夜と同じ頃を見計らって五反田駅の改札口に立った。雪に妨げられた昨日と違って、電車が着く

たびに勤めがえりのサラリーマンたちがどっと改札口から吐き出されてくる。それらの人たちを、一人ひとり見逃すまいと目をこらし続けた。しかし、これも当然ではあるが徒労にすぎなかった。

「タエ」が化身のように修平の目の前を通り過ぎてから一週間余りが経った。本当は「タエ」ではなかったのかもしれない。しかし修平は

〈あれは人違いでも化身でもない。間違いなく「タエ」自身だ〉

と思い込むようになっていた。

そんなある日の夕方、銀行での仕事が一段落した頃である。名前を名乗らない女から修平あてに電話がかかってきた。

「舘さんですか？……わたし、分りますか？……澤村多恵です」

受話器から、ちょっと甘ったれた声が修平の耳に飛び込んできた。その話し振りは二十年前と変らなかった。

「タエちゃん・・？　舘です。久しぶりだね。ご無沙汰して申し訳ない・・」

ずっと気にかけてきたのに、あまりにも突然に飛び込んできた電話の声に戸惑って、ありふれた挨拶になってしまった。どう話し掛けたらよいのか迷ってしまった自分が歯がゆかった。

……

「しばらく前の雪の夜、五反田駅ですれ違ったこと、覚えてらっしゃるでしょう？」

「覚えているよ。まさか・・と思ったんだ。金沢と五反田がどうしても結びつかなくって……。よっぽど声をかけようと思ったんだけど……」

「わたしもそうです。まさか舘さんが五反田にいらっしゃるとは思わないから……。わたし、あれから一生懸命、舘さんの勤め先を探したの。共栄銀行ということだけは分っていたから……銀行の本店にまで電話して尋ねたの。ご迷惑だった？　ごめんなさい」

二言三言、言葉を交しているうちに、二十年の空白が一度に消し飛んでいくようだった。

しかし、この電話で二十年の空白を埋めるわけにはいかない。

「できれば直接会って、その後の貴女やご家族の様子を聞きたいのだが……」

と言った。

電話の相手は

「わたしも久しぶりに舘さんの元気なお顔を見たいわ。でも、いいかしら……？　わたし、ちょっと気がひけるの……」

「なにを迷っているの？　こんな時に迷うことは全くないよ」

「そうね……昔を懐かしむだけでいいから、お会いしてお話したいわ……もし舘さんの都合さえよければ、勝手だけど、今度の土曜日、夕方六時頃に時間をあけてもらえるでしょうか？　場所は西銀座、電通通り、新橋寄りの喫茶店〝ルノアール〟で、ということにしていただけないかしら？」

修平は、日時の都合はつくし、おおよその場所の見当もついたが、なぜもっと早く会えないのかと訝った。本当は、今日これからでもタエをどこかへ誘い出せないかと思ったのだ。

タエは

「顔を合わせてびっくりしないでよ。わたし、すっかり変っちゃったの、なにもかも……。だからちょっと恥かしいの……」

と、つけ加えた。

なにを意味するのか……修平にはなんとなく推し測れるような気がした。金沢時代のあと、あの家族の身の回りに、そしてタエの身の上にも驚天動地の激変があったのではないか……そんな気がしたのだった。

やはり、タエにはタエの事情がある、もう昔のタエではないのだ……と、いっときの感情に走ることを思いとどまった。

土曜日、修平は午後の仕事を終えたあと、約束の時刻までしばらく銀行で時間をつぶすことにした。一週間くらいまえの雪の夜、山手線の開通を待って読み残した文庫本が未だそのままになっていたのだ。ページを開いてみたが、この間と同じで、目が活字を追うだけで頭はどこか違う方に向かっている。このような時、読書は無駄であった。

指定された喫茶店を探さなければならないと思い、文庫本を閉じて、そそくさと銀行をあとにした。

新橋の駅を出て、電通通りを北へ歩くと、喫茶店はすぐに見つかった。日航ホテルの筋向いの大きなビルの一階に、かなり広いスペースを占めているようだ。時間には余裕があったので中へ入って待つことにした。大きな丸テーブルに深々とした椅子、隣りのテーブルとの間隔が広く、まるでいくつもの応接セットを並べた大広間といった感じである。要談や密談にはもってこいである。

しばらくするうちに、座席が次々と埋まってきた。ところが、来客の大部分が和服やドレスに身を飾ったきらびやかな女性客である。修平には想像がついた。銀座界隈のクラブやバーのママやホステスの待ち合わせ場所なのだ。あるいは馴染み客との落ち合い場所なのかもしれない。

修平はハッと気がついた。

「タエ」は、この世界に身を沈めたのだ。この間やつれたように見えたのは、この世界で人に言えない苦労をしているからに違いない。あの純真そのものの「タエ」が、夜の銀座で鏑を削っていけるのだろうか。どのような事情があったのかは分らないが、捨て鉢にはなってほしくない、修平はそれだけを願った。

午後六時、約束の時間に「タエ」が現れた。それは、音もなく近づいてきたという感じであった。

「あら、舘さんですね……。ごめんなさい。待ちましたか？……」

五反田の駅の階段ですれ違った折と同じ顔だった。やはりやつれていた。顔色もなんとなく精気がなかった。他の女性客と違って地味な洋服を纏っているせいかもしれない。化粧もそんなにケバケバしくはなかった。修平は、ちょっと救われたような気がした。

しかし、修平は四十歳に近く、タエは三十歳台半ばに達している。互に平静を装っていても、顔に刻まれた年輪はあらそうべくもない。

一瞥して、隣りの席をすすめ

「やっと会えた、タエちゃん。いや『多恵さん』と呼ばなければいけないのかな？　もう二十年にもなるね。ふた昔ぶりだ」

タエは

「本当にお久しぶりです。舘さんはお元気で、お幸せのようでよかったわ。いい奥さまとご一緒になられたのでしょう……？　お子さんは何人？　大きくなられたのでしょうね。お幸せで羨ましいわ」

と言った。矢継ぎ早に修平の身辺を探ろうとしているかのようである。

修平には、この期に及んで自分のことなど話す余裕はなかった。なによりも澤村の家の消息が知りたかった。

「つい一年程前、同窓会で十数年ぶりに金沢へ行ったんだ。貴女の家を探して回ったが、あの辺り、すっかり変ってしまって……『茶畑』という地名すらなかったよ。もちろん澤村の家もなかった。まるで浦島太郎のような気分になって、がっくりして帰ってきたよ」

タエは話題をそらすように言った。

「金沢で、舘さんと家族みんなが、一つ屋根の下で一緒に暮らした一年あまり……あの時がわたしにとって一番楽しい時代だったわ。わたしの青春はあの頃でオワリました！……」

そして

「舘さん、わたしここで簡単にお食事をとるわ。サンドウィッチをいただくけど、舘さんはどう？」

「ボクはいいよ。水割りでももらうから。遠慮しないで食事をしなさい」

タエは

「舘さん、まだあの頃の家庭教師の口調なのね。変らないわねえ」

と初めて笑顔を見せた。

タエはサンドウィッチと飲みもの、それに修平の水割りをオーダーしてから、ポツリポツリと話し始めた。

「舘さん、もう察しがついたと思うけど、わたし、今、夜の銀座で働いてるの。小さなクラブの〝おやといママ〟といったところ。〝チイママ〟と言われてるわ……驚いたでしょう？……なぜって？　どうして東京まで出てきて、こんな世界に入ったかって、聞きたいのでしょう？

もう終った話だから、あまり口にしたくないけど……」

と言って、想像もしなかったいきさつを話してくれた。

〈わたしね……舘さんは覚えていないでしょうね……中学の頃から言っていたの。〝ドレメ〟で勉強をしてデザイナーになるんだって……。高校を出て〝ドレメ〟へ入ったんだけど、徒弟社会のような世界に嫌気がさして、途中でやめちゃったの。辛抱が足りなかったのね。

金沢へ帰ってから、なんだか目標を見失ったみたいになって、行きずりの人と衝動的に結婚したの。父母もしかたなく認めてくれたわ〉

しばらく息を継いだ。そして続けた。

〈しかし、そんな結婚が永続きするはずがないわ。一年ももたないで別れたのよ。そのころから家の中がおかしくなった。父は「そんなふしだらな子を育てた覚えはない」と言って、勘当同然になるし、母は心痛のあまり病気がちになって入院するしで、居たたまれなくなって家を飛び出してきた。裸同然だった。仕事を見つけようにもおのぼりさん同様のわたしにどうすることもできなかった。挙句の果て、このありさまよ。

この道に入ってからもう十年を超えるわ。どうにかお客さんもついて、いまのところ、生活も安定してきた〉

修平はじっと聞き入っていたが、自分とは全く無縁の世界に住むタエを前にして、二の句を継ぐことができなかった。辛うじて

「想像もできない苦労をしたんだね。お察しするよ」

と同情の言葉をかけるのが精一杯であった。

しばらく、沈黙が流れた。

タエは、夕食にと注文したサンドウィッチを半分も残して、〈ごちそうさま〉と手を合わせた。

修平は、昔、タエが「舘さんがお父さん役？」と言って四人を大笑いさせながら、「いただきます」と揃って手を合わせた下宿生活第一夜の食事時を思い出した。懐かしい。もう一度あの頃に戻れるものなら……。しかし、食事の前後に「いただきます」「ごちそうさま」と言って手を合わせることは忘れていないんだ。胸が熱くなるのを覚えた。

〈それにしても、温和でやさしく、家庭をこよなく大切にしていた、澤村の父や母が、娘が少々道を外したからといって、家庭を壊すような言動に及ぶとは到底考えられない。背後になにがあったのだろうか？〉

修平はタエの様子をみながら小さく尋ねた。

「おじさんやおばさん、そしてチエちゃんは？」

タエはあまり触れたがらない口ぶりで、途切れ途切れに話をつないだ。

〈……本当のことを話すわ。姉は、舘さんが好きだったのよ。大学の頃、いつも舘さんの噂をしていたわ。いつだったか、舘さんが東京へわざわざ会いに来てくれると言って、とてもはしゃいでいたことがあった。だけど、そのあと舘さんの名前が全く出てこなくなったの。とっても悩んでいるようにみえた。そして、卒業後まもなく、日産製作所に勤めている方とお見合い結婚をした。しかし、こんなことを言っては恥じの上塗りになるけど、姉夫婦もあまり幸せじゃなさそう。ついこの間から、姉自身お勤めにでているようなの。三和生命の外交員をやっているわ〉

そして、少し声を落とし修平の目を見つめて言った。

「舘さん、なぜ姉と結婚してくれなかったの？　いまさら言っても、繰言になるだけだけど……」

修平は一言も答えられなかった。いや答えようがなかった。

あのとき、東京にチエを訪ねたとき、手あぶりの火箸を拾おうとして二人の手が絡んだとき、せめてチエの手を温かく包んでやるべきだった。玉川上水の堤でおにぎりを頬張りながら、チエがそれとなく結婚をほのめかしたとき、自分の正直な気持を率直に伝えるべきであった。そんな後悔だけが残った。

「結果としてボクがチエちゃんを傷つけたことになる。決してチエちゃんが嫌いだったわけじゃない。もっと自分の気持を正直に話すべきだった。申し訳なく後悔している」

と、辛うじて弁解するのが精いっぱいだった。

タエは言った。

「あら、久しぶりに会ったというのに、舘さんを恨むようなことを言っちゃいけないわね。それに、舘さんの奥さんに失礼だわ。もうとっくに過ぎ去ったことなんだから。きっと姉も忘れてるわ。わたしも忘れます。気分を害してごめんなさい」

……二人とも、目を窓の外に移して、左右に行き交う人の流れに見入っていた。そして言った。

「舘さん、一番知りたいのは父と母のことでしょう。悪いけど、はっきりとはいえません。ただ、父はしばらく前に亡くなったの。母は病気で入院しているけど、最近あまり思わしくないの。

それ以上は聞かないで。お願いだから……」

タエは、ハンカチを取り出してそっと目頭を抑えた。

修平は突然後ろから頭を殴られたような衝撃を覚えた。

一年前、金沢で道を尋ねた行きずりのおばあさんからそれらしいことを耳にしたことを思い出した。その時は、おばあさんの思い違いか、自分の聞き違いくらいにしか思っていなかった。

ところが今、娘のタエからはっきりと聞かされた。澤村の父が亡くなった。なにが原因で亡くなったのかは言ってくれない。澤村の母は病気で入院中だ。どこが悪くて、どこの病院なのかも教えてくれない。よほどの事情があるとしか考えられなかった。

たった一年余りにすぎなかったが、澤村の父母には、実の親さえも及ばぬ恩義を受けた。今こうして曲がりなりにも元気で働いておれるのは、澤村の両親のおかげだ。ひと目でも顔を見てお礼を言わなければならなかった。ところが、父はもうこの世にいない。母は病院だ。

修平は、これまで前だけを向いて、後ろを振り返ってこなかったことを、今さらのように悔んだ。万分の一の恩返しさえできなかった自らの不徳を、両親、そしてチエやタエに詫びなければならないと思った。

なぜか涙も出なかった。

つづく

イドと超自我の谷間で（五）

・・・ある女の不思議な生涯・・・

鍋屋次郎

アヤは明日社長に会ったとき、自分はどのような態度をすればよいか考えていたが、最初は自然体で挨拶して、それから社長が何を考えているかを判断しながら、いままで松尾に話している通り話すこととした。しかし内心は、思ってもいなかった社長との面談に不安は高まっていた。

東京駅北口中央改札で松尾と一緒になり、千葉経由で茂原に向かった。車中、松尾は

「アヤ、元気がないな。少し痩せたか」

と心配そうにアヤを見た。

「うん、何でもないの。食あたりで二日間絶食していたから、それが原因よ」

「何食べた？」

「お魚が古かったみたい」

「ところで向こうに着くのは昼ころだから、茂原駅近くに食堂でもあればいいけど、ないかもしれない。千葉駅で弁当を買って行こう。もう食べられるか」

「うん、大丈夫。お弁当を買いましょう」

車中も表面的には普通の態度をしているが，アヤの心中は、社長から

「アヤ、京子と組んで全財産の相続手続きをした後、全てを売り払ったな。京子一人でできる仕事ではない。俺がお前に教えた手続きだ。お前ならできる。出来たはずだ。京子はどこにいる。知っているだろう。早く言え！」

このように居丈高に責められたらどうしよう。

今まで松尾たちに言っていた通りに今日のところは話すしかない。人の道として資産の全てを社長に返す時には、日を改めて会って、謝罪して話すとしよう。場合によっては法律的に罰せられるかもわからない。いや、必ず罰せられるだろう。すべてが「なりすまし」だから。兎に角、社長に会ってから考えよう。

そのように覚悟したアヤは、その後は車窓から景色を眺めたり、微睡（まどろ）んでいるうちに千葉駅に着いた。弁当を買って房総西線に乗り換え、茂原に着いたのは午前十一時半。駅のベンチでお弁当を食べ終わって、駅員に行き先の住所の書いたメモを見せながら行き方を聞いた。バスと歩きで一時間はかかる。

途中の道はデコボコの道で、たまに車がすれ違うと砂塵が舞い上がる。小高い山を背にした加賀家に着いたのは午後一時半。家の構えはいかにも豪農風で、屋敷の中にはいくつもの白壁の土蔵が見えた。

門から入って玄関に行く途中に、社長の甥がこちらを見つけて出てきた。

甥の後について庭伝いに屋敷裏側の小さな離れに案内された。

甥は

「叔父さん、お客さんだよ」

と声を掛けたが応答はない。

再度甥が声を掛けて庭に面した障子を開けると

「なに、お客？　来る人なんかあるわけがない」

の声の方を見ると、四畳半一部屋の中に敷いてある布団の上に座っている社長が、松尾とアヤを見つめた。無精ひげを生やし、痩せて目元は落ち窪み、着ているものは上も下も古びた野良着と思われるシャツとズボン。ズボンは丈が短く脛が出ている。足元は素足。右足は曲げられないのか伸ばしている。

上り口には磨り減った下駄と、杖に使うのか長さ一メートルくらいの竹が横になっているのが目に入った。

松尾が

「何年振りでしょうか。番頭の松尾です。お久しぶりです。こちらにいるのは女中のアヤです」

挨拶しても社長は驚きもせず、喜びも見せず、全くの無表情のまま二人を見つめている。

「アヤでございます」

と挨拶しても表情は変わらず、一言も発しない。

甥が

「叔父さん、ゆっくりと昔話でもしてください」

と言って母屋の方に戻って行った。

暫く三人は互いに見つめたままの無言の時が過ぎて行った。漸く社長が

「松尾君、アヤさん、本来なら二人が来てくれたのを喜んで、お礼を言わなければならない儘だが見たとおりだ。生きて帰るのではなかった」

といって俯いた。松尾が
「九死に一生を得たお話は甥の洋平さんからお聞きしました。そして社長さんが戸籍上お亡くなりになっていたことから全財産を京子お嬢様が相続されて、現在連絡が取れないことも。私たちは京子お嬢様とご一緒に日本へ帰る途中現地人に襲われて、そのとき京子お嬢様、私、アヤの三人は全く別々に連行されて、現地では二度と会えませんでした。日本へ帰ったのも全く別々で、私は日本でアヤの居所を知って訪ね、一緒にお嬢様を探しましたが今現在もわかりません」
社長は黙って聞いていたが
「その辺までは甥の洋平が松尾さんから聞いたと言って話してくれた」
一息入れてから
「見たとおりだ。三食食べて生きているだけの毎日だ。京子が引き取りに来てくれない限り、ここで死を待つのみだ。情けないがどうしようもない」
この言葉には松尾もアヤも返す言葉がなかった。
その後の社長の独り言のような話で二人が理解したことは「朝・昼・夕は一汁一菜の粗末な食事ではあるが女中が運んでくれ、屋敷の外に出ることは禁じられ、風呂は一週に一度くらい、女中が入り終わってから呼びに来るので入る程度。ラジオも新聞もない。だから今日が何日かも分からない。何のために生きているのか分からない。京子を探すこともできない」と言うことであった。
アヤはこれらの話を聞いて、以前の社長と比べることもできない今の状態を思い、時折ハンカチで目頭を押さえていた。
社長は松尾と会話をしている時でも、時々アヤに目をそそいでいた。アヤにはその眼に冷たさを感じ、内心「疑われている！」と凍りつくような思いがしていた。
暫くして社長の兄嫁がやってきて
「貴方たち、帰って頂戴。この人に余計なことは吹き込まないで。別荘や貯金をしこたま持っているというので家で面倒見たが、息子がこの人と一緒に調べた結果、全財産を娘が持ち逃げして、その娘も見つからない。この人は主人の弟だからでここに置いているが、私のとこも戦後の農地改革で田畑はとられ、年貢は入らず、主人は病弱で家にはこの人の面倒を見るだけのお金はない。ただ、昔からの家柄でもあり、世間様に対する面子から弟を放り出すわけにはいかないので、こうして面倒を見ているだけだ。さっさと帰っておくれ」
と松尾とアヤを追い返すように言った。
その間、社長は一言もなく相変わらず無表情のままだった。

松尾とアヤは無言で社長に深々と一礼して門の方へ歩き出した。アヤは一礼したとき社長の顔を見たが、目の険しさは消えていた。
二人の後を、動物でも追うように歩いている兄嫁は二人に
「もう二度と来るんじゃないよ」
の声を浴びせた。
松尾とアヤはバス停までお互いに一言も交わさなかった。言葉が見つからなかった。
茂原駅から東京駅まで、アヤは涙が止まらず、東京駅で別れるとき松尾が
「俺たちにはどうしようもないよな」
の一言が、家に帰ってもアヤの胸を突き刺していた。
アヤは翌朝まで考え続けた。
「自分は結果として社長になんという申し訳のないことをしたのだろう」
「社長があのように犬のように飼われているだけの生活から抜けさせるのにはどうしたらいいのだろう」
「社長の心身の現状から、生活の一切の面倒を見る保護者的な人間が必要だ」
「今、社長に財産を引き渡したところで、兄嫁一家に自由にされて、社長の今後の生活が良くなって行く保証は全くない」
「自分が社長を引き取ることが出来るのか。そして毎日の生活の面倒を見ることができるのか。引き取るにしてもこの家しかない」
「引き取ると言えば、あの兄嫁は社長を私に引き渡すだろう。厄介払いとして」
「しかし、社長は私を疑っている」
既に茂原を訪ねてから一週間は過ぎている。社長のアヤを見つめる鋭い目つきがアヤの脳裏から消えなかった。
いろいろと考えても結論は出ない。
夕食後も家の中であれこれ考えていたアヤは、天井や壁に押しつぶされるような圧迫感をおぼえて外へ出た。庭に出た後、月の光の中を静かな鵠沼別荘地を抜けて海岸に出た。遠くで犬が吠えている。月は冴えわたって、沖合の海は黒いが波打際は明るい。浜辺を歩いているうちに稲村ケ崎に出た。時計は既に十二時を回っていて、辺りには人の気配は全くない。
稲村ケ崎の少し高いところに立って、空と海を眺めていたとき、突然アヤの頭に「心を清め、人に仕えよ」の文字がひらめいた。三か月ほど通ったキリスト教会での中学一年生のバイブルクラスの教室、と言っても教会の

サイドルームであったが、その壁に掲げられていたキリスト教の聖句だった。

「そうだ、自分が社長に仕えることで自分の心が少しは慰められる。他人はどのように思うか知らないが、お金が続く限り社長に仕えよう」

「今の社長の置かれた状況を作り出したのは私だ。私がこのまま社長の現状を見過ごすことはできない」

どうなるか分からないが、自分が社長を引き取るべきだ。それが唯一のアヤ自身の罪滅ぼしだ。アヤ自身、心の中でそう決めたことで、頭の上に覆いかぶさっていた暗雲が少しは晴れたような気がして、今来た道を戻った。

アメリカから帰った翌日、お土産を持って三条孝子を訪ねたとき

「アヤさん、今年中には私の養女になってこの家に引っ越してきて、一緒に住んでくれるわね」

と言われて

「はい、私も三条様と親子になって一緒に暮らすことができれば、この上ない幸せだと思っています。家族のいない私には願ってもないことと感謝しています。三条様が仰っている通り、いずれ海保先生に仲立ちにしていただいてそのようにさせていただきたいと思っています」

と話し合ったことを思い出し、自分が社長を引き取れば、当然養子縁組のことは白紙に戻さなければならないだろう、と考えた。

海保純は私が社長の全財産を保管していることは知っている。引き取るにしても自分で結論を出して、全ての段取りを付けてからでなければ言えない。

アヤは翌朝早く教会に行った。湘南カルバリの丘教会と書かれた門をくぐり、礼拝堂のほうに歩くと庭を掃いていたキャサリンがアヤを見つけて

「アヤ、こんなに早くなに？田中牧師もいるからこちらへ」

と声を掛けてくれ、礼拝堂の横のサイドルームに案内された。

田中牧師はアヤを見て何かあるなと思ったのか真剣な表情で

「アヤさん、どうした？」

と声を掛けた。

アヤは元の社長である加賀大造を引き取る話をした。しかしその最大の理由の多額の財産のことは言わなかった。田中は

『いくら元の社長さんの現在の境遇が気の毒だからと言って、アヤさんがどうして引き取る決心をしたのか私には分からない。アヤさん、これは単なる綺麗ごとですることではないよ。一旦引き取ったら途中で投げ出すことができない性質のものだよ。教会で「心を清めて人に仕えよ」と教えられたから行いたい、という単純なものではないよ。それと貴女は本物のキリスト教信仰は持っていない。本物のクリスチャンが信仰に支えられて「心を清めて人に仕える」のであれば、私も、教会としても応援するけどね』

キャサリンが

「先生、そんなに一方的に話してはアヤさんが気の毒です」

と口を挟んだ。アヤは

「先生のご意見はご尤もです。私はこの八日間づうっと考えました。加賀さんのお嬢様が引き揚げ途中に私の目の前で現地人に輪姦されたうえで殺されました。御嬢さんはお母様亡き後お母様の後を継いで、加賀家の商売上現地人使用人に厳しく当たっていて、女中の私は陰でかばうことが役目で、夜間空腹の使用人におにぎりをあげたりして、お嬢様と硬軟それぞれの役割を分担していました。そのお嬢様が恨みを買って殺されたのです。ただ、お嬢様と私は現地人使用人への立場が違っていただけです。加賀さんに対してお嬢様の代わりはとても勤まりませんが、今の加賀さんの置かれた状態は気の毒で見ていられません」

ひと息ついて続けて

『先生、この八日間、私がどこかで挫折することなく加賀さんの面倒を看続けることができるのだろうか、ということを自問自答を繰り返してきました。聖書も読みました。

ローマ人への手紙十二章に「自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。これこそあなた方のなすべき礼拝です。あなた方はこの世に倣ってはなりません。むしろ、心を新たにして自分を変えていただき、何が神の御心であるか、何が善いことで神に喜ばれ、完全なことであるかをわきまえ知るようになりなさい」を何回も読んで決心しました。先生、どうか私に途中でくじけない信仰を持たせてください。そしてこれから歩いて行く道が、神様に喜ばれ祝福される道になりますように、神様のお導きが豊かにありますように祈ってください』

アヤが長い聖句を聖書も見ないで間違いなく口にしたことと、アヤの口から出る言葉に驚いた田中牧師は、キャサリンと目を見合わせた。

暫くして口を開いた田中牧師は

「アヤさん、成長しましたね。失礼しました。前言は取り消します」

「先生、私に加賀さんの生ある限りお仕えできる強い信仰を持たせてください」

「では明日から三日間、毎夜洗礼準備会を持って、次の日曜日に洗礼式を行いましょう。キャサリン、いいです

ね」
キャサリンは大きく両手を広げてアヤを抱きしめ
「良かった。おめでとう」
と言いながら涙を拭った。

そして翌日、アヤは三条孝子を訪ねた。
「私が戦前満州で軍用物資の調達をしていた方のお家に女中として勤めていたことはお話ししましたよね。その社長さんが終戦の年の一月に戦死して軍から死亡通知が来て戸籍にも死亡が記載されました。ところが現地で信望のあるシナ人資産家が、敵兵でも苦しんでいる人は自宅で助けていて、たまたま撃たれて気絶していた社長さんはそこの家で介抱されて一命が助かりました」
ここまで言ってから、過日社長を訪ねた状況を話しその上で
「私が現在あるのは社長さんが、十二歳から二十歳まで父親代わりとは申しませんが、人間としての生き方や、生活上必要なことを教えてくださったことに感謝しています。それから、満州から引き揚げるときにお嬢様から万一の時のことを考えて若干のお金も預かっています」
ひと息ついて、改めて三条孝子の顔を見つめて
「ですから、私が社長さんを引き取って、生活の面倒を看て差し上げたいと思います」
三条孝子は頷きながら
「貴女がその気持ちならそうすれば。だけどアヤさん、それは途中で投げ出すことのできないことですよ。貴女はその覚悟ができているのですね」
と言った。アヤは
「それはできています。加賀さんを引き取るとなると、三条様からの有難い養子縁組のお話はできない相談になると思いますので、私のほうからお断りしなければと思って、今日、出てきた次第です」
のアヤの言葉に三条孝子は厳しい口調で
「アヤさん、何言うの。私はずっと前から貴女を娘と思っているのよ。貴女が元の社長さんを引き取ることで養子縁組の気持ちが変わるとでも思うの？　貴女何言っているの。貴女がお世話になった元の社長さんへの恩返し、立派なことじゃないの。そう、家の離れを社長さんに使ってもらいなさい。貴女は母屋に三部屋あるからその内の一つを使うの。いいわね。変な遠慮はしないの」
と言ってアヤを見つめた。
アヤは言葉が出なかった。こんなに自分のことを実の娘同様に思ってくれている三条孝子に、感謝を通り越した思いが込み上げ、向かい合って座っている孝子の両ひざに手をかけて泣きじゃくった。
「有り難うございます。実は引き取る覚悟を決めてから、自分一人で本当にできるのだろうか、と不安に襲われていました。これで安心、というより引き取る勇気がわきました。ただ、社長さんのお体がどこまで大丈夫なのかが分かりません。引き取ってから、どこかの病院でしっかりと健康診断をしてもらおうと思っています。有り難うございます」
そこまで言って
「それから報告というかお願いというか、御了解を頂きたいことが一つあります。社長さんを引き取るにあたって、いつまでも自分の気持ちが変わらないように、というか、私が社長さんに仕え続けることができるように、キリスト教、プロテスタントですが洗礼を受けることにしました。大船の湘南カルバリの丘教会です。これも考え続けた結果で、牧師さんにも了解を得てきました」
「そうね、あなたの言うとおり精神的支柱が必要よね。信仰のことは家族でも個人の自由だから、貴女の思う通りにすれば」
「有り難うございます」
「ところでアヤさん、いつ引き取りに行くの？　貴女のお話では、暴力をふるわれていないだけで、心理的な虐待状態ね。行くなら早い方がいいわよ。だけど先方はすぐ引き渡してくれるの？　どのように言って引き取るの？引き取り理由よ」
「それは、十年近くお世話になった恩返しをしたい。私には貯金はないけど月々の収入で社長さんの食費位は何とかなります、と言おうと思います。これから手紙を出して、六月末頃引き取りに行きたいと思っています。先にお伺いしたとき、先方のご主人様、つまり社長さんのお兄様の名前は表札で確認して来ました」
「そう、お話を聞いてさすがアヤさん、と私が是非養女にと思った貴女に改めて惚れたわ。引き取ると言っても、貴女のお話では、古い野良着の上下で、ズボンは丈が短く、履物もない。房総半島の茂原からここまで連れてくるのに着るものはどうするの」
「そこなんです。今考えていることは、首回りが分からないから開襟シャツとズボン、靴下とサンダルを用意しようと思っています。着るものは買いに行ったところの店員さんの体系からサイズは判断します。それからこのことを海保先生にお話に行きたいと思います」
「男物の下着も一式用意してゆきなさい。今の季節だったらランニングシャツとステテコ、パンツでしょうね。そうそう。海保先生には早い方がいいと思うから明日でも行ってらっしゃい。先生に宜しく言ってね」

翌日海保邸を訪ねたアヤから話を一通り聞いた海保純は
「さすがアヤさん。よく決心したわね。霊界で京子さんが喜ぶわよ。でも三条さんはさすが素晴らしい方ね。そのような方の養女になれるとは、貴女も幸せ者ね」
続けて
「一寸待って。アヤさん、貴女、先方のその兄嫁という

女性、すんなりと引き渡してくれると思う？おそらく今までかかった経費を払ってから連れて行け、というに違いない。それへの対応として、病弱と言われている社長のお兄さん、つまり兄嫁のご主人に事前に丁重な手紙を出して、貴女に今までの経費の償いの力はないことを言っておきなさい。まあ、本当は必要ないけど、先方へ何か手土産でも持って行きなさい。そうね、東京三越で有名な羊羹を買って、それと鎌倉名物の日持ちのする物がいいね。田舎の人は三越のブランドに弱いから」

そこまで言って、アヤの顔を見つめ直して、机上の暦を手に取って

「六月二十日、縁結びには大安吉日よ。三条さんと家に来て、そこで養子縁組の届けを書いて藤沢市役所に提出に行きなさい。立会人が必要なら私がなるから」

六月二十日に無事養子縁組を済ませた絢（養子縁組を契機に、戸籍上はアヤであるが通称は「絢」とすることとした）は、三条家の離れを掃除し、布団など生活用品を揃え、加賀大造の兄、加賀一郎と夫人宛てに、大造を絢が引き取らせてもらう旨の丁重な手紙を書いた。その内容は、絢の月々の収入で節約すれば大造の食費くらいは捻出できるので、小学校卒業から終戦までお世話になったお礼をしたい、という主旨を書いた。差出人は勿論三条絢と書いた。

また、加賀大造宛てにも、小林アヤは養女に行って今は三条絢であること、三十日に迎えに行くこと、引き取る理由は勝手ながら過去の恩返しをさせていただきたいこと、住む場所は藤沢市で閑静なところであることなどを記載した。

迎えに行く前日の六月二十九日になっても、出した手紙への反応は全くなかった。用意した手土産と大造の衣類を持って三十日朝早く出かけた。

茂原駅からタクシーで加賀一郎家に行き、タクシーには門前で待ってもらった。

加賀家に入ると、座敷に通されて、そこには加賀一郎とその夫人、息子の洋平が座っていた。

挨拶をして、土産を渡して本題に入ったところで、夫人から

「あんた、大造の娘の京子と連絡を取っているのではないのか。全資産をお金に換えて持っているから大造を引き取ると言っているのだろう。今まで一銭も払わないで私たちに世話をさせておいて、今さら引き取ります、とは何事ですか。冗談ではないよ」

と、夫人は話しているうちに興奮した口調になっていた。絢は「京子お嬢様とは満州で生き別れになってから一度も会っていないこと。この九年間、松尾たちと京子お嬢様の行方を必死に探し、警察にもお願いして探したが分からなかったこと、などを縷々述べて、自分の美容師としての収入で大造の食べるだけのことは何とかしたいと思っている」と説明したが、夫人は全く納得しない。その後も何度か同じ説明をしたが全く聞き入れようとしなかった。

そのうち夫人は興奮して

「あんた、どれだけ稼いでいるか知らないけど、たかが女中奉公していた女が社長さんを引き取るっていうことはおかしいじゃないの。あんた、そんなにお人よしなの。それとも何か男と女の深いわけでもあるの」

と言い出した。

絢はその言葉を聞いた瞬間、自分の顔が引きつるのを感じた、一度ですんなりと行くかどうかは分からない、と言った海保純の言葉を思い出し、この家に来てもう一時間くらい経っていることから

「分かりました。そのようなお疑いがあるのでしたら、そのように疑われたまま、社長さんを引き取るわけにはゆきません。私はこれで失礼します」

と言って立ち上がろうとした。

慌てたのは息子の洋平だった。

「三条さん、ちょっと待ってください。私は貴女のいうことを信じます。松尾さんから聞いていたことと、貴女のお話は同じです。ですから私は信じます」

と言ってから夫人に向かって

「お母さんが疑うのもわかるが、三条さんのいうことは、松尾さんから聞いていることと違っていない。三条さんに失礼だよ。三条さんが帰ってしまったら、叔父さんは一生この家にいることになるよ。それでもいいの？」

「お前は騙されている。娘の京子がこの人の背後にいるに決まっている。それでなければたかが女中だった女が引き取るなんて言う訳がない。京子が後ろで操っているんだよ。今まで大造のためにいくらお金を使っていると思うか。財産調べのため東京や軽井沢へ行って泊まり込んだ経費だけでも馬鹿にならない。それに毎日の食事代も。引き取るというなら、今までのお礼をして引き取るのが常識ではないか」

と喚きだした。

「もうよしなさい。折角殊勝な申し出を頂いたのに失礼だ」

と加賀一郎が妻をたしなめた。

それから暫く会話が途切れた後、絢が

「ご主人様、洋平さん、京子お嬢様とは日本へ帰って以来一度も会っていません。連絡できなくて会えないのです。いるところが分かればとっくに行っています。まして私の背後にいる訳はないでしょう。京子お嬢様と連絡がつくのであれば、私がこのように出てくることはあり

得ません。奥様がおっしゃる今までの経費の支払いは、一介の美容師の私にはとても出来ないことです。まして男女関係まで疑われては私にも我慢の限度があります。加賀大造さんを引き取ることはやめます」

と言い終わるや否や立ち上がり、持ってきた大造の衣類などが入っている荷物を手にして玄関に向かった。

続く

『鬼の館』と『鬼の交流博物館』

漆原直子

私は今年の5月に、盛岡に用事があったついでに、北上市にある『鬼の館』に行った。JR北上線（1日7～8本しか電車が通らないローカル線である）の江釣子（えづりこ）駅から、江釣子古墳群（7世紀後半～8世紀後半の築造：蕨手刀や直刀等が出土）等を見ながら、田園の中を約3時間歩いた。地図では約1時間半位で着くはずであった。足が棒のようになり、途中で行き倒れるのではないかと思った。バスも通っていたが、1日数本しかない。バス停と次のバス停の間が約1～2分だったので、たいした距離ではないだろうと思っていたら、それが間違いであった。東京のような町中と、ここ北上市の、信号の無い田園の中をまっすぐに通る道を走る場合とでは、同じ1分間で走る距離は大きく異なる。実際に歩いてみてそれがよくわかった。ともかく次の電車やバスを利用するにしても、3時間以上は待たねばならない。戻るに戻れず、またここまで来て引き返したのでは、今までの苦労が水の泡になると思い、ただ前進するのみであった。

苦労して辿りついた『鬼の館』とは、平成6年に北上市が「鬼と平和の里づくり事業」によって創設したシンボル施設である。ここは〝岩崎鬼剣舞〟（国指定）の伝承地に当たる。この踊りは、『大宝年間（701～703）に修験山伏の元祖「役の行者小角」が苦行満願の夕暮れに踊った念仏踊り』が由来とされている。北上市は〝鬼〟は自分達の祖霊で、見守ってくれる善神という認識をもち、市民憲章に次のようにうたっている。

北上市市民憲章

あの高嶺　鬼すむ誇り

その瀬音　久遠の賛歌

この大地　燃えたついのち
ここは　北上

〝鬼〟とは先住民である〝蝦夷〟にも通じるものであり、自治体がこのように、先住民の意識を明確に宣言している所も珍しい。因みに、北上市の〝きたかみ〟は、『日本書紀』や『常陸国風土記』に記されている〝ひたかみの国（日高見国）〟に由来するという説がある。また、〝えづりこ〟は〝カムイヘチリコホ〟というアイヌ語で「神々の遊び場」の意味があるという。しかし、〝ひたかみ〟はアイヌ語語源ではなく和語であるとされている。

『鬼の館』の施設の内容は、国内外の様々な鬼の紹介と、鬼剣舞の伝承保存、地域住民の交流の場となっている。その日は日曜日だというのに、館内の見学者は私を入れて1～2名しかいなかった。経営状況はどうなのか、今後の行く末に一抹の不安を感じた。

私は、これまで、〝鬼〟関連の地名を何か所か巡ってきた。まず、先述の『鬼の館』と似たようなコンセプトを持つ、京都の福知山市の大江山の『鬼の交流博物館』に数年前に下の娘と2人で訪れたことがある。ここは市町村合併される前の大江町が創設したが、ここもその時の見学者は私たち2人だけであった。施設の内容は、国内外の鬼の紹介や大江山の鬼、酒呑童子伝承等を紹介している。元々は、大正6年から昭和48年まで稼働していた「河守鉱山」の跡地で、主に黄銅鉱・磁硫鉄鉱・クローム鉄鉱が採掘されていた。静かな緑豊かな山間にあり、ここで平安時代に源頼光や渡辺綱らにより、酒呑童子の一派が退治された場所とは想像し難かった。さらにこの博物館では、〝鬼学会〟を開催して、鬼側の視点での〝鬼〟を研究し、その存在意義の理解を深めようとしている。

大江山には、酒呑童子以前にも鬼退治伝説があり、一番古い伝承は、「丹後風土記残缺（たんごふどきざんけつ）」に収められていて、〝日子坐王〟の陸耳御笠（くがみみのみかさ）・匹女（ひきめ）を首領とする土蜘蛛の退治伝承である。〝日子坐王〟は崇神天皇の弟にあたり、四道将軍として丹波に派遣された丹波道主命の父である。次は、用明天皇の時代、河守荘三上ヶ嶽（現在の大江山）に英胡（えいこ）・軽足（かるあし）・土熊（つちぐま）という三鬼を首領とする悪鬼を、聖徳太子の異母弟にあたる「麻呂子親王」が退治したというものである。この辺りは元伊勢神社もあり、よほど重要な地域であったと思われる。大江山の山頂には、〝鬼の岩屋〟という岩窟が実際にある。そこを見に行きたかったが、時間と体力が無かった。そこに鬼どもが住んでいたということだが、自然窟なのか、鉱山の坑道跡なのかはわからない。後になって博物館の人に質問すれば良かったと後悔した。またこの博物館には、驚いたことに私の父の実家

のある宮城県村田町の鬼伝説が紹介されていた。村田町の〝姥が懐〟に羅生門の鬼を退治した渡辺綱が来たという伝承があり、町立の『村田町歴史みらい館』には、渡辺綱が退治した鬼の首と片腕のミイラとされるものが、ガラスケースに入って展示されている。私も、村田町に行った時にその実物を見たが、職員の人に、「これは何でできているのか？」と聞いてみたい衝動に駆られたが、思いとどまった。そういう皆の夢を壊すような野暮なことを聞いてはいけないと思ったからである。この村田町には、さらにヤマトタケル伝承をもつ白鳥神社もある。

この他に、福島県の安達太良山の麓、安達が原の鬼婆伝承の「黒塚」（鬼婆の墓）と「岩屋」（鬼婆の住処）を見に行った。「黒塚」のすぐ隣に、天台宗真弓山観世寺がある。「岩屋」はそのお寺の敷地内にあり、ドルメンのように巨石が林立したものである。周辺には他には巨石が無く、縄文時代の頃からの巨石信仰の名残ではないかとも思えた。また、〝安達が原〟は〝安達太良山〟の〝原〟という地形を現わしている言葉だと思うが、〝だたら〟という言葉は、たたら製鉄を連想させる。この辺り一帯は火山地帯でもあり、多くの鉱物資源が採れたのではないか。真弓山観世寺の発行による『奥州安達ヶ原黒塚縁起』によると、726年の頃、紀州熊野の僧・東光坊祐慶が鬼婆を退治したとされる。この頃の奥州は724年に多賀城が築城されている。岩手県の室根町には716年に紀州熊野から勧請されたとする熊野神社がある。（多賀城以前に熊野神社を蝦夷の地に勧請できたのか、私は疑問に思う）東光坊の〝東光〟は、別所地名の近くにあるとされている〝東光寺〟との関連を思わせる。

また、鬼伝承として最も有名な、『桃太郎の鬼退治』の吉備にも行き、吉備路をずっとサイクリングで巡った。鬼とされた百済からきた王子の〝温羅〟は古代山城である〝鬼ケ城〟に住み、桃太郎とされる吉備津彦により滅ぼされた。その戦いの跡として、〝鬼ケ城〟あたりから流れる川が、〝温羅〟の血が流れたとする『血吸川』、そしてその川と足守川が合流して少しの所の鯉に化けた温羅が『鯉喰神社』、二者が放った矢がぶつかり合ったとされる場所が『矢喰神社』とされる。血吸川は鉄分が含まれる製鉄地域で、鯉喰神社は弥生の墳丘墓の上に建てられている。また、弥生の最大の墳丘墓とされる楯築遺跡がある。ここが、卑弥呼の墓ではないかと考える人もいるようだが、ご神体とされる『孤帯文石』があり、大量の辰砂が埋納されている他には類を見ない謎の多い遺跡である。時間と体力が無くて〝鬼の城〟までは登れなかったが、かなり見晴らしの良い山頂に位置している。吉備は古代からの一大製鉄地帯であり、鍛冶・製鉄に関する遺跡が多く発掘されている。

鬼伝承のある地域には、鉱物資源の採掘地帯があり、産金や産鉄、精錬鍛冶等に従事する人々がいた。特にたたら製鉄の場合、『片目の魚・片葉の葦』伝説のある所は、〝片目・片足〟といった。今でいえば、職業病と言える障害を負った人達が住んでいたと思われる。『一つ目の鬼』や『一本足のたたら』という妖怪は、そういう人たちを鬼や妖怪に見立てて差別視をしている。またその逆に、それらの地域は、貴重な資源もあるので、他人に知られたくないため、自ら人を近付けないようにするために、恐ろしい所であると吹聴したかもしれない。そして隠れ里としてひっそり黙々とその仕事に従事していた。別所地名と関連あるとされている、俘囚である蝦夷に従事させたかもしれない。ただ、これらは正史には書けない何かがあった。その代わりに、隠喩（メタファー）としての鬼伝承が生まれた。日本に限らず、世界各地の神話や伝承、説話に何らかのストレートには語れない何かを託し、それでも人に伝えたいと思う所から派生したものだと思う。その話の裏には何が隠されているのかを考えることで、本当の歴史が見えてくるのではないか・・・。

私が、鬼伝承に興味を持ったきっかけは、家族で群馬県の鬼石町に旅行した時である。たまたま、『群馬歴史散歩』という郷土史の本を買い、その中の「鬼石という名の由来について」という一文を読み、日本史の影の部分、表には出ない部分があることをひも解いていく糸口が見つかったと思った。以前より森浩一氏や網野善彦氏の本を読んだり、講演を聞いて、常日頃「日本の歴史の読み直し」の重要性を感じていた。学校で習うまたは通説とされている歴史は、閉塞的で展望が持てないと常々感じていた。その中で、金属史、金属民俗学の視点を得て、〝目から鱗〟であった。その後、その関連の本を読み漁り、その中でとても参考になったのが、沢史生氏や柴田弘武氏、谷川健一氏という方々の一連の著作物である。考古学が骨なら、こうした方々の視点は血や肉である。歴史の解明には、骨だけではなく、肉付けも必要である。その時にどんな視点に立ってどのように肉付けをするかによって、出来上がる像はかなり違ってくるのだと思う。これからも、〝鬼〟関連の地名や伝承のある所を訪れるとともに、日本の歴史を見直し続けたいと思う。

【参考文献】
・『鬼の館』　常設展示録　北上市立鬼の館
・『鬼力話伝　45』『鬼力話伝　其の弐』
日本の鬼の交流博物館　編
・『群馬歴史散歩　第162号　特集…鬼石町』
群馬歴史散歩の会　事務局

（司馬雑感　三十）

「阿波紀行」をゆく

山田嘉久

一　淡路、阿波へのみち

その昔、京をはじめ本州から淡路、阿波に通じる官道は七道の一つ「南海道」であった。紀伊国加太港から海路で洲本に上陸して淡路国に入り、その後福良港から再び海路で阿波国鳴門撫養港で四国に上陸するコースである。

司馬遼太郎も1988年（昭和63年）、「阿波紀行」を書くにあたっては、同じコース―大坂の深日港からフェリーで洲本へ渡り、淡路島から大鳴門橋を経由して四国入りをしている。

私が昭和39年（東京オリンピックの年）、最初に鳴門を訪ねたのもこのコースであったが、今回（平成24年）は明石から「明石海峡大橋」で淡路島に渡り、淡路島を縦断して「大鳴門橋」を経由して鳴門に入った。

因みに「街道をゆく」シリーズ初期に書かれた「明石海峡と淡路みち」（昭和48年）では、〈日本の島々のなかの海峡では、壇ノ浦と明石海峡が好きである〉という司馬は今回の我々と同じ明石コースであった。勿論、世界最長のつり橋である「明石海峡大橋」はまだ出来ていないので（1988年完成）、播淡汽船という〈明治くさい名前〉の船で淡路島入りをしている。

なお、司馬が最初に淡路島に渡ったのは昭和10年ころ、小学校の修学旅行で、当時、天保山といわれた大阪の港から関西汽船で洲本に着いたという。

二　徳島の藍と阿波おどり

徳島という地名は初代藩主蜂須賀家政（小六の子）がつけたという。

彼が秀吉から阿波一国をもらったとき、老臣たちは要害の地を薦めたが、彼は頑としてこの地に固執した。これからは軍事より経済だという理由づけは、なにかしらその主君秀吉が最初の城持ちとなったとき、小谷よりも

長浜を選んだのに似ている。

その徳島は家政が城地を猪山に定め町づくりを進めたことに始まる。そのため徳島城は当初「猪山城」といわれたが、その後「渭山城」に改めた。

渭とは唐の首都長安郊外を流れている川の名。その渭水のあたりの小さな町が渭城である。その名にあやかったという。

その名のついた老舗料亭「渭水苑」で我々は昼食をとった。

家政は寛永15年（1638）に没するまで約50年間の長きにわたって藩政に関わった人物であるが、その徳島を日本全体にその名をとどろかせるようになったのは、何といっても藍の栽培によってであった。

この着眼はやはり家政に帰すべきだと司馬は云う。

〈江戸時代、阿波は、藍の生産と販売を、ほとんど一手でひきうけていた。〉

そして司馬は代表的な藍師田中家住宅（国重文）を訪問しているが、そこで藍師が雇う水師のことについて多くを語っている。水師が発酵する藍の状況を見極め、あと何回水を打つかを決めることで藍の出来も違ってくる。そんな純粋のマニュファクチャーであった彼らは、武士連中と違って日常生活に儀礼も気遣いも必要なかった。そのことが阿波に必要以上の敬語を生じなかったことにまで話が及ぶのである。（敬語の少ないことは同じ南海道の紀伊も同じと司馬は考える）

我々は市内にある藍染資料館「藍の館」を見学した。

此処は大藍商であった旧奥村家屋敷13棟を当主から藍住町が寄付を受け開館したもの。さすが大藍商であっただけに優雅で手の込んだ建築物となっている。

そもそも藍づくりは戦国時代に武士の鎧下を藍で染めるようになってから、藍の需要は飛躍的に高まった。天正13年（1585）、蜂須賀家政が藩主となってからは、前述の通り藍の生産を奨励したので徳島の藍作りは隆盛を極めた。

その作付面積は寛政2年（1790）には6，500町歩に及ぶと云う記録も残っているという。藍のおかげで徳島藩は表高こそ25万7千石だが、実質45万石とも云われた。

藍作りは明治以降も盛んで北海道から九州まで栽培され、明治36年には最高の生産規模を示した。特に徳島県は全国の過半数の生産量であった。

従って当時の徳島の人口は全国の上位を占めている。現在では他の四国の県庁所在地松山、高松、高知の後塵を拝しているが、当時は他を大きく引き離していることでもわかる。

しかし明治30年代にインド藍が輸入され日本藍を圧倒し、更にドイツから化学染料の人造藍が入ってくると没落の一途をたどった。「ジャパン、ブルー」と謳われ、

江戸期から最高の品質を誇った阿波の藍産業は完全に廃れた。

今はその藍畑もなく、「藍住町」や「藍畑」といった地名のみが残っているだけである。

一方、阿波名物の「阿波おどり」について。

「阿波の殿様蜂須賀公が、今に残せし阿波おどり」と唄われているが、司馬は藍はたしかに家政が残したが、阿波おどりはそうではないだろうと考えている。

家政以前の室町期からこの踊りは盛んであったからだという。その当時、京で流行った「フリュウ」（風流）という華麗な集団おどりが阿波おどりの祖形となったと書く。

京と阿波は最も密接な交流があった。南北朝時代から阿波の守護は細川氏であったが、その細川氏は常に京にいる。そのため阿波侍は始終、京と阿波の間を往復したため、自然、京文化が阿波に入ってきたのは当然であった。その一つが阿波踊りだというのである。

司馬はある有名料亭で阿波踊りをやってもらっている。

〈日本女性の振りのなかで、もっとも色っぽいのではないか。芸事好きの阿波人の大発明といっていい。〉と書いている。

我々も泊まった鳴門のホテルで夕食後、余興として阿波踊りを見学したが、たしかに司馬も書いているように〈他の府県がうらやましがって、西洋風のパレードをやったり、民謡と日本舞踊の街頭進出を試みたりしているが、洗練度がちがう。歴史は、真似られないものなのである。〉

三　うだつの町―脇町

〈阿波のよさは、ひょっとすると脇町に尽きるのではないか〉

吉野川を西に遡ると脇町（現在は美馬市脇町）に入る。此処は豊臣時代、蜂須賀家政の筆頭家老稲田氏の城下町。家老とはいえ稲田家は1万石（後に1万4千石）の大録であったので、脇町を大名なみの城下町とした。町づくりにあたって信長の楽市楽座方式をとり、町に来て商業を営む者には諸税も諸役も免除した。

そのため呉服商はじめ種々な商人が集まったが、中でも目立ったのは豪商としての藍商たった。江戸中期からは一世一代の夢をかけ藍に湧き繭に栄えた商いの町となった。吉野川の水運に恵まれ、その積み出し港として栄え、一時は百を超える藍商人が栄華を極めたと云う。現在も「船着場公園」として残っている。

彼らは家運の隆盛を顕示する象徴として、競って家々に「うだつ」を造った。

「うだつ」とは、そもそもは隣家との境界に取りつけら

れた土造りの防火壁のことだが、これを造るには相当の費用がかかったため、裕福な家しか設けることができなかった。したがって「うだつが上がる」ということは富の象徴であり、脇町に残る「うだつの町並み」は当時の繁栄を物語っているわけである。

そのうだつの建物が白壁塗と土蔵造りと相まって、見事な町並みを形成していた。（重要伝統的建造物群保存地区）

司馬が注目したのは「うだつ」のほか各家の入り口の戸だった。

〈格子組になっているだけでなく、内部が見えないようにするため格子組の裏側にもう一枚の板戸が裏打ちされていることだった。〉

その代表的な商家のうち、司馬は国見家を見学している。

国見家は寛政10年（1798）建造とあるが、司馬によれば〈本居宣長が「古事記伝」を完成、高田屋嘉平衛が択捉島航海の航法を開発〉した頃だとの解説は時代背景が分かって理解しやすい。

同じように田村家は蚕の繭で儲けた商家で宝永8年（1711）建造。新井白石の全盛期だと説く。

また将棋指し小野五平の生家平田家にも話が及ぶ。彼が将棋の改革に乗り出した行動は柔道の嘉納治五郎や俳句短歌の正岡子規と同じ改革だったと書いている。

町並みのほぼ中央にある吉田家は寛政4年（1792）に創業した藍商の屋敷跡で美馬市指定文化財との標識があった。

司馬は更に脇町図書館を訪ね、町並みと調和している様式に感心をしているが、私はその横にある公衆トイレを使っただけだった。そのかわり我々が見学したのは町並みの外れにある「脇町劇場オデオン座」だった。

昭和初期、歌舞伎や浪曲を興行する芝居小屋として建てられ戦後は映画館として親しまれたという。山田洋次監督の「虹をかける男」の舞台になったとは始めて知った。

四　祖谷（いや）のかづら橋

前日の夕刻、阿波（徳島県）から土佐（高知県）に入った我々は高知はりまや橋近くのホテルに宿を取った。

翌日は桂浜に出て坂本竜馬像や県立坂本竜馬記念館を見学したが、折からの「春の嵐」で暴風並みの大雨となった。

桂浜には「竜馬がゆく」以来、何度も来ているので早々に引き揚げ、再び阿波に引き返した。

しかし予定していた四国山脈越えの大歩危、小歩危の舟遊びが中止となったのは残念だったが、昼近くようやく小止みになったので、その奥の秘境祖谷まで足を延ばした。

祖谷は平家村といわれてきた。

都落ちした平家は、その後讃岐屋島の合戦で敗れて平国盛（教盛の第2子）の一隊が吉野川をさかのぼり此処に土着したという。南北時代には南朝に味方し北朝を擁する阿波の守護細川氏に対抗した。また豊臣政権下では阿波に入部した蜂須賀家政に対して彼らは激しく抵抗した。蜂須賀家の代官を殺し、山岳ゲリラを展開したのである。

祖谷のホテルで郷土料理の「猪鍋」を食した後、あたり一面を深い森に包まれた祖谷川に架かっている吊橋「祖谷のかづら橋」も渡ってみた。

材料のかづら（葛）は高地に自生する白口葛という植物のつるで頑丈そうだったが、折からの大雨で水嵩が増したためスリル満点だった。

司馬は〈須田画伯とともにかづら橋をゆらゆらと一往復してみた〉と書いているが、高所恐怖症の司馬がそんな余裕があったのかとほほえましかった。

吉野川も池田町あたりから急に川幅も広くなる。

関東の利根川（坂東太郎）、九州の筑後川（筑紫次郎）と並んで、「四国三郎」といわれるだけにその風格は堂々たるものだった。

池田町は交通の要衝で高知県、愛媛県、徳島県の道路の結び目となっているが、何よりもこの町を全国区にしたのは高校野球での県立池田高校の活躍であろう。

野球に極めて疎い司馬さえも、この話題を取り上げている。司馬は蔦監督を取り上げるほか、この高校の校長先生が定年退職後、タクシーの運転手になったことに興味を示している。この旅行で是非お会いしたい人物だったが、惜しいことに亡くなられたことを聞いて〈気落ちした〉と書いている。

三好市はその名の通り、室町時代、京を実質支配した三好氏の根拠地である。応仁の乱以後、下剋上の波に乗って主家の細川氏を乗っ取り京にのぼって中央の支配者となった。

司馬は歴代の三好氏の中でも特に「日本の副王」と呼ばれた長慶入道について語っている。長慶はひとに愛想がよく、不必要に武装を誇示しなかったが合戦が上手だった。それ以上に連歌が巧みだったから京都の受けもよかったという。

五　お遍路さんと阿波人形浄瑠璃

「阿波紀行」では、空海によって開かれた四国八十八カ所も第一番札所の霊山寺に〈詣ったきり〉だった。空海に特別な思いも持つ司馬にしては不思議なくらいである。

我々も最終日に霊山寺に詣でたが、鳴門から西へ10

キロほどの板東の街外れにある。仁王門を入ると左に鐘楼、正面に本堂、右に大師堂などがあった。

境内には白装束に身を包んだ巡礼者が、グループごとに般若心経を唱えていた。白装束に「同行二人」と書かれた人もいた。独りで巡礼して歩いていても、常に弘法大師が横にいて一緒に歩いているとの意は最初の四国旅行の時に知った。

〈この土地には、遍路という客人（まろうど）を大切にする伝統があったのである。〉

お遍路さんについて、司馬は〈おこりはよくわからない〉としながら、おそらく平安時代、貴族のあいだで流行した熊野詣でにつづいて興った信仰の形だろうとしている。ただ四国の方が庶民的であるが当初はお遍路さん風の信仰ではなく、山林の修行者の修行の場だったという。

司馬は霊山寺参詣の折に、急に高群逸枝のことを思い出している。彼女はひとり熊本を出て遍路をした。その時の寄稿文「娘巡礼記」を司馬はこの旅行の前に改めて読んだそうだが、なぜ彼女が遍路にでたのか、あるいは恋の清算だったのかよく分からなかった。

〈ともかくも私には、遍路がわかりにくい。〉

阿波の民族芸能である「阿波人形浄瑠璃」は県立阿波十郎兵衛屋敷跡で鑑賞した。人形浄瑠璃は義太夫節による三人遣いの人形芝居だが、人形を扱う黒子がすべて老年の女性であるには驚いた。

十郎兵衛は「傾城阿波の鳴門」の主人公のモデルと云われる。

資料館では十郎兵衛の遺品や人形浄瑠璃で使われる木偶人形や衣装などが展示されていた。

この人形芝居は慶長初期（16世紀末）、淡路で生まれたとされるが、蜂須賀家政によって奨励され、明治中期に最盛期を迎えた。このことは不思議に徳島の藍産業の隆盛と一致する。しかし違う点は藍産業は完全に廃れたのに対して、浄瑠璃は今も伝統芸能として生き残っていることである。

六　鳴門の渦潮

我々は最終日、鳴門の海辺に建つ「大塚国際美術館」（大塚製薬のオーナー大塚正士が私財を投じて建設した陶板名画美術館）を見学した後、最後の目的は音にきく「鳴門の渦潮」を見ることだった。

夕刻4時過ぎの観潮船に乗って船上から楽しんだ。私個人にとっても約50年前、渦潮を見る目的で来た旅行を風邪のため途中で止むなく引き返したことがあるだけに楽しみにしてきた。

鳴門海峡をはさんで分かれる紀伊水道と瀬戸内海の干満潮水がゆきあって巨大な渦（最大15m）ができる。

渦が巻いている時間は数秒から数十秒、渦は出来ては消え、消えては新たな渦が発生するというのを繰り返していたのは見事だった。

司馬は「阿波紀行」では、旅行の一番先に「鳴門の渦潮」を見ているが、その見かたは変わっている。

〈淡路島から鳴門に入る大鳴門橋上で、車を降りて歩いた。渦の上を歩いていると、気球の上から下をみているような感覚がある。橋そのものが、抽象絵画のなかにまぎれこんだようである〉

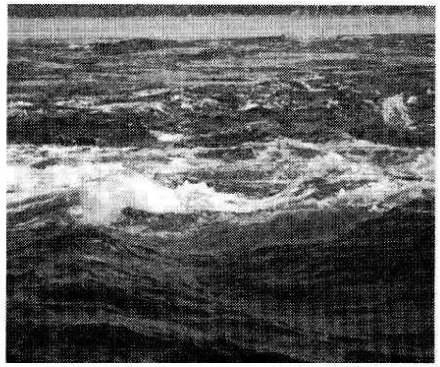
夕方の汐時、橋のワイヤーが降り注ぐ光の線のようにみえた。そしてこのことから米映画「ソフィーの選択」を連想するのはさすがである。原作はウイリアム、スタイロンの同名の小説。この映画の最終場面―ブルックリン橋の描写にそっくりだというのである。

さらに長篇「胡蝶の夢」の主人公関寛斎にまで話が及ぶ。彼が長い間、住んでいた徳島から未知の北海道陸別の地に向かう時の感慨を詠んだ和歌

「世の中をわたりくらべて今ぞ知る阿波の鳴門は浪風ぞなき」を思い出すのである。

「浪風ぞなき」阿波なら、このまま平穏に老後を過ごせるのに、使命感の強い寛斎は、頼まれもしないのに72歳の老躯をひっさげて、北海道の地に赴くのである。

司馬は寛斎の生きざまに共鳴したらしく「阿波紀行」だけでなく、「北海道の諸道」でも彼の陸別での生活ぶりを克明に描いている。



鳴門の渦潮

性と化粧（五）

鈴木守

第五節　性と毛の化粧

性との関係で注目すべき毛は、陰毛と腋毛（脇毛）である。この両者は副腎皮質由来の男性ホルモン（アンドロステロン）の作用によって思春期に発毛し、二次性徴とされており、両者併せて〝性毛〟と呼ばれているので、性との関連では、『本誌、一二二号、坊主の坊主頭』で既述したように、僧侶の剃髪は〝無髪の髪化粧〟であり、性毛の除去も〝無毛の毛髪化粧〟といえる。また、性毛を梳き、剃刀を当てて形を整える化粧や毛を染める化粧も想定されるので、陰毛除去、陰部整毛、腋窩脱毛ならびに陰部染毛の化粧について、『本誌一二二と一二三号、第二節・歴史的にみた性と化粧』で述べた資料を中心に纏めることにする。

一　女性陰部除毛の化粧

ヨーロッパ各地に後期旧石器時代の裸女像が幾つか残され、中でもオーストリアの『ビレンドルフの石のビーナス』は妊婦姿で全身を赤く着色され、髪はアフロヘアで、無毛の股間には刻みが施されている。

新石器時代には、エジプトなど古代文明が発展した各地に裸女像があり、像の多くは下腹部に逆三角形が刻まれているが、ギリシャのテッサリアに残された女神像は、下腹部が無毛で玉門を備え、しかも女神は脚を持ち上げて開脚し、玉門を曝している。

『ビレンドルフの石のビーナス』についてである。「果たして、この像は当時のビレンドルフの女性を模して造られたものだろうか」。ビレンドルフの住民は衣服を纏っており、アフロヘアではなかったはずである。この

の疑問を解く鍵として、コードウェルの説が参考になる。彼女は『化粧の心理学、週刊粧業、一九八八』の中で、「出アフリカを遂げた人類は、赤いスーツ（魔除けの赭土）を纏って北上した」と述べていた。この説を採用すると、「ビレンドルフの住民は、語り継がれてきた、出アフリカ当時の祖先の姿を『石のビーナス』に造像し、豊穣と子孫繁栄を祈願した」と推論できた。

古代ギリシャでは、前五世紀後半以降、愛と美の女神アフロディテの裸身が造像され、ヘレニズム期には『ミロのビーナス』が造られた。これらのアフロディテ像には、下腹部を隠した像と無毛の陰部を露出した像の両様があり、いずれも優れた美術品である。

かような女体美創造の根底に、旧石器時代に造られた母体崇拝のビーナス像があったのではなかろうか。信仰の対象は美的存在に転化し易いので、「旧石器時代の造像の伝統が、テッサリアの女神像を経て、古代ギリシャに受け継がれた」ように思えてならない。

古代ローマ後期から中世にかけて、美術品における裸女像の影が薄くなったが、ルネッサンス期に入ると、絵画に裸女像が復活した。裸女像空白期は、キリスト教がローマ帝国の国教となり、ルネッサンス期に宗教改革が叫ばれるようになった史実と時代的に一致するので、裸婦像の低迷は宗教的な枷を考えるべきであろう。中世社会では宗教者にとって、陰部は恥部であり、陰毛は淫毛であって、彼らは公序良俗を害するとして、絵画彫刻に裸女の姿を表現することを忌避し、更には禁止したに違いない。芸術家にとってキリスト教会はスポンサーだったので、彼らの意に反することはできなかったであろう。

ルネッサンス期に入って、宗教的呪縛が緩和されると、ボッティチェルリは『ビーナスの誕生』、ティチアーノは『人間の堕落』で、それぞれビーナスとイブの裸体を描いたが、下腹部は隠していた。一方、ミケランジェロは『楽園追放』で、イブの股間を隠すことなく描いたが、陰毛は描写しなかった。

その後、一六世紀後半までは、裸女の主役はアフロディテやイブのような架空の女性だったが、一七世紀以降には、成熟した女体美を求めて生身の女性裸身を描き、女体美の対象が広げられた。例えば、ルーベンスは王妃マリー・ド・メディティスの裸身を画面に写し、多くの画家が無毛の裸女を描いていた。

かような無毛女性のパレードを眺めているうちに、「ヨーロッパ社会には、陰部脱毛の風習があったのではないか」と思いつつ、美術全集の頁をめくると、一九世紀末に至ってゴーギャンがタヒチやジャワの婦人像の股間に陰毛を登場させ、二〇世紀にはデルボーが白人女性の陰毛を描いていた。陰部脱毛風習の否定である。

ところが、コーソン著の『メークアップの歴史、ポーラ文化研究所、一九八六』に目を通すと、「一八世紀初期の頃、卵殻粉や猫の糞を使って脱毛し、猫の糞は濃い酢に溶かして使用した」と叙述されていた。酢を加えた猫の糞には、活性化された蛋白分解酵素ペプシンが残っていると思われるので、荒唐無稽な脱毛剤とは思えない。

このような脱毛剤使用の現実をみると、絵画に見られる陰部脱毛の存在を否定できなくなり、これらの資料を綜合して「陰毛除去の化粧がヨーロッパ社会に広く普及したのではなく、特殊な職業の女性、あるいは陰毛削除を美的に感じた一部女性が、脱毛剤で陰毛を取り除いていた」と解釈した。

次に、アジア社会では、インド・オリッサ州のコンド族は豊穣と子授けの神として、ピルム・ピンスと呼ばれる男女神を祠り、男根と女陰を備えていたが、陰毛はなかった。

わが国に移ると、江ノ島には裸弁天が鎮座している。司馬遼太郎の『街道をゆく・三浦半島記、朝日新聞社、一九九七』には、「裸形で琵琶を弾く形の弁財天は古くから伝わっており、少女の形をし性器まで備えている。鎌倉のリアリズムの行き着く果てかと思えるが、時代はよくわかっていない」とある。

裸弁天の股間は岩で隠されているが、それを拝観した我が友は、「童女の姿のため陰毛はないが、却って性器を印象付けている」という。

その後、江戸時代のバレ句に、「女房の毛は十六で生えたまま」と「毛切れ以降お妾へ斗りいらっしゃり」がある。前の句は陰毛除去の風習が不在だったことを暗示し、後の句は奥方との房事で毛切れした殿が妾通いすることを詠んだものであり、お妾さんは下草刈りを殿から要請されたのであろう。

現代では、美術品に裸女が描かれるようになったが、陰毛の有無は区々であった。また、陰部無毛症の女性をパイパンとか瓦筒（かわらけ）と蔑称し、そのうえ、彼女たちは義毛を使わざるを得ない境遇におかれているので、社会一般に陰部無毛を忌避していることは明らかである。したがって、このような社会環境下では陰部脱毛の風習が育つはずもない。

二　男性陰部除毛の化粧

ギニアやカメルーンの原始社会には、男根を備えた木製裸像が残されている。造像の時代は不明だが、祖先崇拝の像であり、陰部は無毛であった。

古代ギリシャには、ミュロンの『円盤を投げる人』など男性裸像が多数見られたが、前六世紀の作品には陰毛

がなく、陰部除毛の風習を思わせた。だが、前五世紀の彫像や前六世紀の絵には、陰毛のある男性が登場しているので、陰毛除去の風習があったのではなく、前六世紀頃には、彫像に陰毛を刻む技術が未だ育っていなかったのだろう。

男性陰部剃毛の具体例を示すと、前出コーソンの『メークアップの歴史』には、「マウルヤ朝期の若い男性が顎鬚を整え、胸毛を剃ったうえ、股間を剃毛した」と記されていた。彼らは成人表示の化粧を施したのであろう。わが国でも嘗て、適齢期になった少年少女がそれぞれ、一剃刀で前髪を落として男になり、二剃刀で眉を剃って女になったので、これらの化粧は性毛と無関係であっても、性関連の毛髪化粧といえる。

最近、エチオピアの裸族スルマ族の男性が陰部を剃毛し、泥でボディペイントしている写真が週刊朝日（〇九・一〇・九版）に掲載された。その解説には、「彼らはハレの日に男らしさを誇示する目的で陰毛を剃り、ペニスの先端まで泥化粧を施す」とあった。写真ではあるが、始めて見る実在の陰部剃毛像であった。

前項で述べた女性陰部脱毛と併せて、陰部除毛と性器強調の化粧について所感を述べることにする。

頭の中に思い描いた偶像の歴史を披瀝すると、人類の故地アフリカで、祖先崇拝の信仰が発祥した。彼らは木で造った偶像を崇拝した。だが、木像は既に消滅して、現在では見ることはできないが、その風習は女性と男性に対する二通りの文化を生み出した。

一つは出アフリカを果たし、ヨーロッパに進出した祖先は、子孫繁栄を願って妊婦の像を石で造り、母体信仰を始めた。この像が現在最古の石のビーナス像である。次いで新石器時代には、テッサリアの女神像に見られるような性器信仰の道を開いた。

テッサリアはオリンポス山麓にあり、古代ギリシャ時代になると、信仰の対象が美的存在に転化し、美と愛の女神アフロディテの裸像を造り初め、この流れが敷衍してヨーロッパ社会では、陰部無毛の女体を美の象徴として絵画彫刻に表現した。

他方、アフリカなどの原始社会に残されている、男根をつけた陰部無毛の祖先像から想像すると、原初の祖先像は陰部無毛ではあるが、部族の長らしく立派な男根を備えていた。男らしさの象徴である。この流れが廃れることなく続き、古代インドの若人（わこうど）は胸毛を模様状に整え、陰毛を剃って次代を担う男を演出し、アフリカでは、男らしさを誇示するために、陰部を剃毛し、泥のボディペイントをペニスの先まで塗る化粧が連綿と続き、現代のスルマ族男性に引き継がれた。

次ぎに、性器強調の化粧について触れる。我が友は「江ノ島の裸弁天像が無毛なるが故に、却って性器を印象付けている」という。

彼の印象からすると、性毛除去は性器強調の一手段であろう。スルマ族男性も剃毛してペニスを誇示しており、テッサリアの女神像やビレンドルフのビーナス像も、無毛なため、谷間のスリットが印象付けられ、陰部除毛は〝性器強調の化粧〟の一端を担っていることは明らかである。

最後に、陰毛の有無について触れると、新石器時代の裸像は下腹部にデルタを刻むのみで、陰毛らしい陰毛が刻まれた像は古代ギリシャ以降に見られるようなったので、石器時代の無毛の彫像は、下腹部陰毛の風習を模したものではなく、陰毛を刻む技術が不在だったことに基づくであろう。

三　下腹部整毛と染毛による化粧

髪を染めた後は必ず形を整えるので、下腹部についても、染毛と整毛の両者を併せて検討する。

わが国の江戸時代には、水商売上がりの嬶（かかあ）殿を詠んだバレ句に、「あの嬶開へ毛抜きを当てた奴」があった。開は女陰であり、当時、毛抜きを使ってヘアを整えるのは遊女の嗜みだったそうである。

下腹部剃毛の例は、既報のように古代エジプトのメンカウラー王妃座像などには、シースルーの衣装の下に整った形のデルタが透けて見えた。しかし、資料がモノクロ写真のため、染毛については不明だが、既にエジプトでは剃刀、毛抜きだけでなく脱毛剤が使われていたので、陰部整毛は可能であった。

話は変わるが、古代エジプト人は頭髪だけでなく髭鬚も紅花やヘンナで染めていた。就中、ヘンナは防臭にも使い、ナイル上流のヌビア人は黒い肌にヘンナを塗り赤銅色にしたといわれている。このようなことから推察すると、初期王朝時代の上エジプトでは陰部の消臭を兼ねて、ヘンナで陰毛を赤く染め始めていたかも知れない。

下腹部整毛と染毛について考察を進めると、新石器時代のエジプトには、下腹部にデルタを配し股間に刻みを印した女身像があった。この時代には既に櫛が使われていたので、恐らく、下毛を梳いて虱を取り除き始めていたかも知れない。また、前述したように、出アフリカを果たした祖先の人たちは、赭土を全身に塗って北上したとされているので、ヌビア人は赭土の代わりに、ヘンナで彩色した可能性が高い。

このような経緯を考慮すると、古代エジプトでは下腹部の毛を梳き、ヘンナで染めるようになったと推察される。メンカウラー王妃像などに見られるように、豊満な

肉体をシースルーの衣装で包み、形よく整えた陰毛を赤く染めて下腹部を誇示するのが、当時のファッションだったとも想像され、化粧進化論的にいえば、「虱取りの実用目的で始まった陰部彩色と整毛は、美を演出する化粧へと変身した」ことになる。

四　腋窩脱毛の化粧

腋毛の存在価値だが、腋毛を除いても日常生活に支障を来すことはない。にも拘わらず、退化せずに残っているのは、何故だろうか不思議である。皮膚科学書にも生理的意義は記されていない。精々、その役割は二次性徴ということくらいしか思い出せない。大人になったシグナルは他にも色々あるので、大した役割とは思えない。だから女性たちは飾りにもならない無用の長物と思っているのだろう。現今では腋毛を惜しげもなく取っ払い、〝無毛の毛髪化粧〟を施して街中を闊歩している。

ところで、わが国では戦時中は当然のことながら戦後間もない頃まで、腋毛除去の風習はなかった。だが、戦後十年も経たないうちに、電車の中で吊り革を掴んでいる女性の腋窩に黒いものが失せてしまった。欧米文化模倣の結果であろうか。しかし、ロンドンに長らく在住していた女性が「あちらの人は日本人のように脇毛を気にしていない」と言っていたから、アメリカ風習の伝播であろうか。当時はアメリカ文化渇迎の時代であった。

それはそれとして、腋毛不在の光景が当たり前になってくると、腋毛を覗かせている女性をダサく感じるようになった。一方、前出のシルバーナ・マンガーノの腋窩にちらついていた腋毛は、ダサイというよりも野性的なエロを感じさせたのである。

かように、腋毛にはグロテスクに見える一面もあるが、性毛といわれるだけあって、男性にとっては時と場合によって、エロティックな存在に変身するのである。では、女性にとって自分の腋毛がエロなのか、グロなのか、それとも恥毛なのか、どのように認識しているのか知る由もなかったので、美容学校で皮膚科学の講義をしている時、生徒さんたちに聞いてみると、「みんな取ってるじゃん、くっつけていちゃ格好悪いもん。エチケットよねえ」と宣った。

次いで、腋窩脱毛の過去を探ることにする。だが、日本には資料の欠片（かけら）もなかったし、欧米の文書も見つからなかったので、泰西名画に目を移すと、二〇世紀前半にマチスが描いたオダリスクは、腋窩無毛と有毛の両様があった。オダリスクはトルコ宮廷ハレムの女の呼称である。

絵画では、腕を挙げた姿態でないと描写できないため、

腋窩を描いた作品は少なかったが、一六世紀にはジョルジョーネが『森の妖精』で無毛の腋窩を描いていた。

したがって、腋窩除毛風習の実在を願いつつ時代を逆行したが、古代のアフロディテ像は腋窩を隠しており、腋毛を示す資料には巡り合えなかった。しかし、マチスの絵に加えて前述した一八世紀の脱毛剤の例もあるので、風習化するなど普及していなかったにしても、一部女性の間で腋窩除毛が始められていたと見るべきであろう。

五　頭髪化粧とその用品用具

この項では、性に関係する毛髪化粧の傍証を求めて、古代以前の毛髪化粧全般の風習や用品用具の資料を探すことにする。

日本では、平安時代に毛抜き、櫛、髪の艶出しに使う澤と整髪料の美男葛、奈良時代以前にも蘭澤と櫛が使われ、縄文時代五千年前頃の櫛もあった。

中国では、春秋戦国時代に澤が、龍山。迎韶の時代にも櫛が使われており、インドには、マウルヤ朝時の毛抜き、インダス文明の時代の剃刀があった。

地中海地域では、前二世紀以降のローマに染毛剤、脱毛剤、毛抜きがあり、前五世紀頃のギリシャ人は髪を香油で整え、脱毛剤や染毛剤を使用していた。また、中近東では、前七世紀頃から染毛剤が使用され、シュメールでは毛抜き、近東イェリコでは前五千年頃に櫛を使用していた。

六　総　括

一項から五項までに述べた資料の中には、確定的な証拠が少なかったので、実証と傍証を絡め合わせ、且つまた想像を重ねながら、陰部除毛、陰部整毛と染毛、ならびに腋窩脱毛の化粧について総括する。

①陰部除毛：　人類の故地アフリカで、祖先崇拝の信仰が発祥し、陰部無毛の祖先像を祠ったことに端を発し、母体信仰や性器信仰の偶像を生み、古代ギリシャ時代に美の女神アフロディテの裸像が造られた。

この流れに沿ってヨーロッパ社会では、美術家たちが美の象徴として裸女像を創作し始めた。これらの作品は屡々陰毛を削除していたが、女性の陰毛除去は風習として定着していたとは思えず、一部女性が陰部脱毛を試みていたのではなかろうか。

他方、祖先崇拝に基づく陰部無毛の男性像の伝統は連綿と維持され、現在でも、スルマ族男性は陰部剃毛の習俗を保っており、古代インドでは、成人表示と思われる陰部剃毛の化粧を分化させた。

②下腹部整毛：　わが国の江戸時代、毛抜きで陰毛を

整えるのが遊女の嗜みとされており、エジプトのメンカウラー王妃像などに下腹部に整えられたデルタが認められた。時代は離れているが、これら両時代には、整髪に使う用具・用品が揃っていたので、この風習は確実に行われていたと判断される。

なお、整髪に用いられる櫛は、新石器時代・五千年前頃の各地の遺跡で発見されている。したがって、人類は五千年前頃には整髪していたのだから、下腹部を整毛していたとしても不思議ではない。

また、下腹部整毛は整髪用具があれば、容易に行えるので、伝統的な風習を考えるよりも、職業的な必要性とか個人的な嗜好によって各地で自然発生的に、しかも密やかに行われていたに違いない。

③陰毛彩色：　陰毛彩色の直接的な証拠は得られなかったが、前二世紀頃以降のローマ、前五世紀頃のギリシャ、前七世紀以降の中近東で染毛剤を使用していた。

古代エジプト人は頭髪だけでなく、髭も紅花やヘンナで染めていたので、「豊満な肉体をシースルーのガウンで包み、形よく整えた陰毛を赤く彩るのが、古代エジプト婦人のファッションだった」という想像も成り立つであろう。

④腋窩脱毛：　現代文明社会の女性の殆どは腋毛を除いている。わが国では戦後間もなく、腋窩から毛が消え失せてしまった。

欧米文化圏では一八世紀頃までに、風習といえる程敷衍していなかっただろうが、腋窩を脱毛する試みが始まっていたに違いない。

⑤性に関する毛髪化粧の発祥：　この化粧の歴史を権威づけるため、屋上屋を重ねるような、且、屁理屈のような理屈を並べたてルーツ探しに勤しむことにしよう。

初期原人使用の剥片石器で紐切断を試みた結果、見事に切断できたそうである。この石器を改良した後期旧石器時代を代表する石刃石器ならば毛髪をも切断できる可能性が高く、除毛化粧の発祥を考えたくなる。

石刃石器は中期旧石器時代を担ったネアンデルタール人や古代型サピエンスの頃に開発されている。また、この時代七万七千年前頃の首飾り用ビーズが出土しているので、この時代の人類には、既に美意識が誕生していたことが窺われる。

これらの傍証を加えて考察を進めると、石刃石器による剪毛が可能ならば、下腹部の除毛と整毛ならびに腋窩除毛の可能性が開け、美意識の誕生という観点から性毛の染色と陰部除毛が取り上げられるので、古代型サピエ

ンスの時代には、ネックレスをつけ、整えた陰毛を染めて身体装飾としたのではなかったか。だとすると古代エジプトの貴婦人たちの陰部染毛が確定できるのではないかと思いつつ、飽くまでも想像だが、性に関わる毛髪化粧の開始は、ネアンデルタール人や古代型サピエンスの時代まで遡る可能性を考えたのである。想像は自由であるが、最早、誇大妄想の世界に入り込んでしまったようである。

（次号に続く）

社告（内規）

☆同人参加へのお誘い

私達は広く同士の参加を歓迎致します。

「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行しております。

同人は同人費として月額二、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆維持会会員へのお誘い

本誌愛読者のうち、一部有志の方々が、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数ヶ月分をまとめて前納して頂いております。

季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行い、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティーへのご案内などを差し上げ交流を行っております。

＊同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。

郵便振替口座　〇〇二七〇―〇―六四五九二一

加入者名　まんじ

人類の仲間（一）

鈴木守

一八五六年、ドイツ・ネアンデルタール渓谷で現代人とは異なった骨格の人骨が発見され、これが人類の仲間の第一号となったネアンデルタール人である。続いて一八六八年にフランス・クロマニヨンでクロマニヨン人の化石、一八九二年にジャワ・トリニールでピテカントロプス・エレクタス（ジャワ原人）が出土。一九二四年に南アフリカでアウストラロピテクス・アフリカヌスが発掘され、これらの人類を夫々、旧人、新人、原人、猿人と称するようになった。

それ以後、二〇世紀後半から新たな仲間が次々に発見され、現在に至る間に人類の仲間は、亜種を含めて二三種に上る。しかし、現在生き残っているのは、現代人ホモ・サピエンスのみであり、他は既に滅亡した古人類である。

第一節　ヒトとは何か

一　ヒトの定義

ヒトは生物学的分類では、霊長目のヒト科動物・ホミニドであり、〝ヒトとは何か〟について、パスカルは『瞑想録』に〝人間は考える葦〟と定義し、また、モリスは〝裸の猿〟と表現した。

ほかに他の動物との違いから、〝火を使う動物〟、〝道具を作る動物〟と定義したり、〝ヒトは文化を持つ動物〟や〝心の動物〟という人もいる。

これらの見方は、ヒトを人間とみるか、人類とするかで定義に差が生じる。これらの見方の問題は扨置いて、現代社会では〝ヒトは直立二足歩行可能な動物〟という生物学的な考え方で定義されている。

チンパンジーやゴリラも直立し二本足で歩くが、長距

離歩行に際しては、前肢も使って前傾姿勢でナックル歩行といわれる四足歩行をしている。ヒトの場合、前傾することなく下肢二本で歩行し、むしろ長時間の四足歩行は困難である。

二　骨格構造の進化

ヒトと四足獣の身体を比べると、体幹が地表に対して前者は垂直、後者は水平である。要するに、縦位置か横位置かが体型上最も相異している点である。

獣の骨格構造は、前肢と後肢を柱として、その間を結ぶ脊柱（背骨）が梁となって体幹を宙吊りにした構造であり、四肢が体躯の荷重を支えながら四足歩行している。一方、詳しくは後述するとして、ヒトでは身体が縦位置になるため、体躯の荷重を骨盤が受け、下肢がそれを支えて二足歩行している。サルは四足獣からヒトへ進化する過程にある故、サルの動態と骨格構造について述べる。

サルは樹上生活を始めると、木登りしたり、木と木の間を腕渡りするようになって、日常的に立体的運動を繰り返しているうちに、体躯は必然的に重力方向に向けて縦位置をとるようになった。

サルが類人猿まで進化すると、直立したり、地上に下り立って二足歩行さえできるようになった。しかし、長距離の二足歩行までは到達できず、長距離歩行の場合は、前肢の指を折り曲げて拳様にして地につけて体重を支えながら、前傾姿勢で四足歩行した。したがって、類人猿は完全な直立二足歩行ができないので、人類の仲間から除外されている。なお、類人猿のこの歩行形式をナックル歩行と称している。

次ぎに、類人猿の骨格構造に触れる。チンパンジーの骨格を例に挙げると、脊柱から大腿骨までの骨格は、頭頂から踵を結ぶ中心線よりも背部側に大きく彎曲している。ために、四足で荷重を支えながらナックル歩行するのである。ヒトの場合、直立二足歩行を可能にしたのは、体幹の荷重を骨盤が支え、中心線に沿って脊柱から骨盤、大腿骨を経て脛骨に至る骨格が緩いS字状を描く弾力構造を獲得したことに基づく。

因みに、猿回しのサルは、調教によって訓練開始から二週間目には四・五分程度の直立が可能となり、更に二足歩行の訓練をすると、二・三粁から五粁程度は歩けるようになる。調教によって直立二足歩行が可能になったサルの脊柱は、ヒトの骨格に似た緩いS字状の彎曲が認められ、猿回しの芸ができるようになる。

第二節　人類の発祥

一　歴史的にみた人類発祥説

古代の人たちも、己の出生や御先祖に関心があったのだろう。天地創造、国造り、民族の発祥などを、世界各

地の神話や伝説、民話の中で語っている。

日本神話とギリシャ神話では、人間の姿は現れないが、高天原やオリンポス山頂に擬人化した神々が屯（たむろ）しており、彼らはカオスの世界から湧き出た最初の神から、有性生殖や無性生殖によって出生したのである。

人類発祥を直接示している物語を挙げると、中国では女神・女媧が黄土を捏ねて人間を造り、『旧約聖書』では、神エホバが最初に土でアダムを、次いでアダムの肋骨からイブを造ったという。これらの話では、神の形に象って人間を造ったとされている。

人類発祥の地アフリカの民話では、民族や部族ごとに異なるが、最初の人類は「天から降りてきた」とか「神が泥を捏ねて造った」と語られ、天孫降臨や女媧伝説の原形を思わせた。そのほか「地下から出てきた」、「植物の中から現れた」などがあり、ナイル上流スーダンでは、「最初の男は牛の姿で天から降りて来て、鰐の姿の最初の女と結婚した」と語っている。この昔話は、牛とか鰐とかは別として、「人類は動物から分化した」という現代人の常識の先駆けであった。

近世の頃までのヨーロッパ社会では、旧約聖書のアダムとイブが最初の人間であると信じられて来たが、この伝統ある迷信を打破する契機をもたらしたのが進化論で著名なダーウィンであった。彼は一八七一年に、『人間の由来』の中で「人類の祖先は、旧大陸に住む狭鼻猿類の祖先の中にいたであろう。また人類が初めて生まれた所は、恐らくアフリカであろう」と予言していた。だが、彼の説は、旧約聖書を信奉する当時の教会勢力からの猛反発を受ける羽目に陥った。その後の生物学の進歩によって、ダーウィン説が支持されるようになり、現在では、余程の石頭あるいは無知蒙昧の人でない限り、アダムとイブが人類の起源だと言う人はいないであろう。

ネアンデルタール人の発見以降、二〇世紀初頭の頃に、ジャワ原人と北京原人が知られるようになり、その当時は『人類アジア発祥説』が唱えられた。だが、一九二四年に南アフリカで猿人第一号の化石が発掘されるに及んで『アジア起源説』は崩れ去った。

二　現代における人類発祥説

二〇世紀後半以降、アフリカ大地溝帯を中心に猿人の化石が次々と発見されたため、人類発祥の経緯について、イブ・コパンは「サルがヒトに進化する契機になったのは、一千七百万年前頃のアフリカ大陸とユーラシア大陸の衝突であった。この衝突で東アフリカに大地溝帯が成立し、造山活動によって気象条件が大きく変化した。それまで東アフリカも熱帯雨林に覆われ、大型類人猿たちは密林を生活圏としていたが、降雨量の大幅な減少によって疎林化が始まり、ヒトの祖先となった類人猿は食物を求めて地上に下り立ち、直立二足歩行で移動するよう

になった」という説を唱えた。

この人類発祥説は、ミュージカル映画『ウエスト・サイド物語』に因んで『イースト・サイド物語』と呼ばれ、多くの人の支持を得ていた。ところが、二一世紀に入って〇二年に、アフリカ・チャド湖付近で七〇〇〜六〇〇万年前のサヘラントロプス・チャデンシスが発見された。この発見によって、人類発祥の時代は八〇〇〜七〇〇万年前まで遡る可能性があり、イースト・サイド物語は一場の夢となるかも知れない。

しかし、サヘラントロプスが出土したチャドのトロスメナラは、チャド湖に繋がるバハーエルガザルワジに面している。ワジはアフリカやアラブの乾燥地帯に見られる枯れ川の呼称である。現在、ワジになっている地域の七〇〇万年前は密林は兎も角、水流や川辺林があったと思われる。このような条件を前提にして、人類の故地について個人的な考えを述べることにする。

ユーラシア大陸との衝突がチャド周辺の地形にどのような影響を与えたか知る由もないが、「七〇〇万年前以前には、サハラ南部地方の降雨量が減り、トロスメナラの熱帯雨林が疎林化し、そこに生息していた大型類人猿は残された川辺林を根城に食物を求めて地上に降り立ち二足歩行を始めた」という推論が成立するであろう。コパンの『イースト・サイド物語』を『サハラ・サウス物語』に変えただけの話である。

今後の問題だが、ケニアでは六〇〇万年前のオロリンが知られているので、大地溝帯周辺でオロリンより古い猿人化石が発見される可能性は十分にある。もし、サヘラントロプスより古ければ、イースト・サイド物語が復活し、同時期の化石ならば、人類発祥の多地域進化説が提唱されるだろう。

第三節　猿人たち

猿人は、類人猿から進化した最初の人類であり、後述するホモ属以前の人類である。彼らは直立二足歩行していたが、人類進化の指標となる脳容量は五〇〇ml程度で、類人猿と変わらなかった。

猿人が世に知られるようになったのは、一九二四年にダートが南アフリカ・タウングスで『タウングス・ボーイ』の愛称を持つ猿人少年の頭蓋骨を発見したことによる。このボーイの脳容量は原人より小さく、類人猿並みだったため、『アフリカに住む南の猿、即ちアウストラロピテクス・アフリカヌス』と命名された。その後、ロバート・ブルームらがボーイによく似た頭骨を発見し、更に下顎と足の骨片を見つけ、二足歩行が証明され、アウストラロピテクス・アフリカヌスがヒト科動物であることが確定された。その後、数多の猿人の化石が発掘され、現在では一四種の猿人が知られている。

初期猿人は別として、小柄で骨組みが華奢な華奢型猿人と骨組みが頑丈で大臼歯が大きい頑丈型猿人に大別され、前者をアウストラロテクス、後者をパラントロプスと呼ぶ。

一　初期猿人

人類発祥の時代は確定されていないが、現在最古の人類は、チャド出土の七〇〇〜六〇〇万年前のサヘラントロプス・チャデンシスで、この名の由来はサハラ砂漠南部の『サヘル』と『チャド』に基づく。

次いで、六〇〇万年前頃のオロリン・ツゲネンシスの化石が〇一年にケニアで出土し、『オロリン』はケニア現地語の『初めての人』、『ツゲネン』は発見地の地名。発見者たちは、現代人を含むホモ属に至る直系の祖先であるとしている。

五七七〜五五〇万年前に、アルディピテクス・ラミダス・カダバがエチオピアの湿潤な森林地帯で生息していた。四四〇万年前頃のエチオピアに、アルディピテクス・ラミダスが現れた。その化石を発見した諏訪元は「果実や葉や昆虫を食べる雑食性で手は膝小僧に届き、全身は粗毛で覆われていた」と想定しているので、彼らは地上生活だけでなく、樹上で過ごすことも多かったのだろう。ということは当時のエチオピアには、密林がかなり残っていたと推察される。なお、ラミダスとカダバは亜種関係にあった。

二　華奢型猿人・アウストラロピテクス

前出ラミダスを祖とするかも知れない、華奢型猿人が四〇〇万年前頃に登場した。四〇〇〜三五〇万年前のアナメンシスである。この当時の人類は、熱帯森林の果実を主とした食性だったといわれ、まだ完全には草原に適応しておらず樹上生活にも親しんでいたようである。

三五〇万年前頃に、華奢型のバリエルガリザとアファレンシス、ならびに華奢型とは別種のケニアントロプス・プラティオプスが誕生した。これらの猿人はアナメンシス系列が想定されており、アファレンシスは二九〇万年前頃まで存続していた。なお、ケニアントロプスはホモ・ルドルフェンシスの祖形とする説がある。

タンザニア・ラエトリには、三五〇万年前のアファレンシス親子三人の足跡が化石として残されている。この化石は溶岩が軟らかなうちに、その上を歩いた跡である。足跡には土踏まずが認められ、直立二足歩行を示す直接的な証拠であり、それに加えて、地上を長距離歩行することが可能になり、且また、家族単位で行動していたことが窺える。

次いで、三〇〇万〜二五〇万年前頃、タウングス・ボーイなどのアフリカヌスが現れ、更に二五〇万年前頃にアファレンシスから派生したと思われる、ガルヒの化石

が出土。そこには死肉を石器で処理した形跡が残されており、石器使用と肉食を示す最古の証拠である。この証拠に加えて、ガルヒ直後の頃にホモ属が出現し、ガルヒ以後の華奢型猿人が発見されていなかったので、ガルヒは猿人とホモ属の間を結ぶ存在として注目されていた。

なお、最近一〇年に、南アフリカの洞窟で一九〇万年前頃の華奢型セディパが発見された。だが、セディパとホモ属の関係を示唆する文献を目にしたことはない。

三　頑丈型猿人・パラントロプス

頑丈型パラントロプスの系列では、二五〇万年前以前にアファレンシスから分化したとされる頑丈型エチオピクスが東アフリカで誕生し、次いでボイセイ（二五〇～一〇〇万前）とロブストス（二〇〇～一〇〇万前）の化石が出土。この両者はエチオピクスを祖とする可能性が高い。なお、猿人たちの食性は、華奢型が概して軟らかな植物性食物を摂っていたが、頑丈型は根茎や硬い葉などを食物としていたと想定されている。

小　括

現在知られている猿人の種類は、初期のサヘラントロプス、オロリン、アルディピテクス二種、ケニアントロプス、華奢型六種と頑丈型三種、計十四種で、七〇〇万年前頃のサヘラントロプスから一〇〇万年前頃のロブストスまでの五、六百万年前までの間は、猿人の世界であった。これらの猿人のうち、ホモ属との類縁がいわれている二系列がある。一つはオロリン→アナメンシス→アファレンシス→ガルヒ→ホモ属。他はアナメンシス→ケニアントロプス→ホモ・ルドルフェンシスである。

（次号に続く）

陰翳の美学（その十）

外山知

第三章　美を構成する要素

九、磨くこと

9、美的認識と創造性

前述した感情、感覚、情緒の心象表現が、時によって、意識の上でイメージを誘発して、美学構成の先駆けとなり、創造性を育成した。

今、美的な知の働きと思惟について、創造をめぐらして見たい。

私達は美的な知の働き作用が、如何にして生成されて来たかを、洋の東西に関係なく、歴史的な変遷過程の中で、省察を試みてきた。

同じ形而上の領域にあっても、思惟性を帯びると、思考の能力をはっきりと現す。即ち、論理の組立てと創造性は、並行してなされる行程と見てよい。

美意識発生のメカニズムは人の心の働きが、直観の響きによって、前述のような過程を行い進行する。

美意識の確立によって人の思惟的な行為が、その下界に及ぼす知識、判断力は他との比較によって現われる。

Aなるものが、BとまたCの他との間で、どのように知の働き作用をするか。

勿論前述の感性的な知の働きもさることながら、他との比較判断によって思惟の過程が、介入すると論理的な思惟を帯びる。

AがBあるいは、B′またC、その他と如何に知識の作用をするか問題となる。

勿論この過程には判断する思惟素材も異なるが、それを構成しようとする知識の作用にも影響してくる。

テーマとして取り上げる美的な知識が、如何なるものかによって、捉え方にも変位を見せる。元々、美的な

知識のスタートに於いて、その思惟性を考えるべきであろう。

思惟する主体者も客体者に対して、かゝる論理を再考すべきで、問題点も解明される。たゞ美的な知識は後まで知の働き作用をする。

即ち美的な知の働きを意識し、これは美しいと直観的に美を判断する。美意識を燃やす知性は、すでに思惟を助成させる働きを持つ。

たとえ素朴であっても、それはそれで立派な論理を踏む思考の能力でもある。自発性をもつコンセプトと言ってよい。

美の知の働き過程は、この様に複雑さを極めるが、目的を持って意識し思惟する段階においては、もはや高次の段階的な思惟と考えてよい。

こゝに於いては前記に示したように、他との比較校合に於いて、美的な判断の働きが、より顕著なものになって行く。即ち形而上的な美意識と言ってよい。

形而上的な美意識は換言すれば、美的な知の働きで思惟を発したものである。美的な物事の本質を十分に理解し、その物と他の物とをはっきり見分ける心の働きと見てよい。

かゝる美的な知識があってこそ、創造性が育くまれる。たゞ単なる無目的な創造性は価値意識が弱くレベルも低い。

即ち価値意識につらぬかれたものこそ、論攷の対象としてよい。創造性と言っても美意識を含む創造性であって、これは物事を見極める過程に、心の働きとして捉らえられるもので短絡なものではない。

かりに思慮のない単なる推測的なものでなく、論理的に裏付けられたものであってこそ、真の創造性であり得る。即ち磨き抜かれた美的な知識があって、創造も可能なものである。

論理に裏打ちされた価値意識をもったものこそ、対象として捉り上げられる。これには経験論的な思惟が、勿論、必須となろう。

この経験論的な思惟の積重ねによって、より美しい輝ける創造性を得ることが、可能であろう。

陰翳の美学にもかゝる論理があって、初めて構築されるものと論究してよい。

美的な知識も創造性も、主体性に立脚した思惟の作用で、それには、客体的な要素も介入するであろう。

時には主客合一の世界にあって、知識創造もされよう。然し主導的な役割は、主体性にもとずくものが多い。

主体の動作が客体を及ぶことによって、より普遍的な価値意識も創造と結びつく。本来美的な知識作用は、個体の主体的な動作の誘発によって生起する。

それが新しいものを送り出す、創造性を可能にする。

従って美的な知識作用は、同時に創造性と直結し、美的な開花をうながす。また大きな知識作用とも結びつく、相関関係を樹立する論を交わせば、美的な知の働きと創造性は、美的な知の働き、即ち創造性であり、創造性の根源は美的な知の働きでもある。

両者合一の境地をはぐくむものとして、把握してよい。

10、美への意欲とその論理

知の働き作用と創造性をめぐって論攷を重ねて来たが、今また私達にとって美への意欲は人生であり、人が生きて行くことは、美への探究でもある。人が意欲的に生きようとすれば、そこに美なるものを求める意志力が、介入して来る。

美、非美なるものによって人間の生き方も変転する。人が意欲的に生きようとすれば、そこに真の論理が顕現化する。

限ぎられた人生の中にあって汲めども盡きないものは、美なるものを求めてやまない意志力である。

この意志力欠如は、人の価値意識に言及せざるを得ない。美を喪失することは人間性の否定であり、主体性の喪失でもある。自己喪失と言ってもよい。

ただ生きる状況は心臓の鼓動にすぎない。生きる死屍として、人間活動をほとんどしてない。このようなものに等しい人間の否定は、すべての者の消滅で、勿論細胞の死滅を意味する。

人間が生きて行く上に人間性の活動は、ほかならぬ美への意欲あって、はじめて可能な存在といってよい。

即ち生きる事は美への意欲であり、意欲なくしては生と言えない。従って生きようと欲することは、美への執着限りない欲望であり、愛着でもあり得る。

人が美を欲することは、生への欲求と解してよい。生きる限りこの論理は消える事がない。最も基本的なものと解してよい。様々な論理を画くことが不可欠である。

生か死か相反する論理の中、生は、限りなく広大な意欲に包まれ、人間存在を可能にしている。細胞の生きる限り、新しい美を創造して行く。

美の発見は、人間存在の限りである。限りなく続くこの論理は、死と共に消滅する。ただ人類が生きている限り、生の輪廻は繰り返され、生へのサイクルは、次々と享受され育まれる。

その意味から栄枯盛衰は、永劫の輪廻の中に介在し、新しい美を育てる。美の創造は意欲を燃やす、人間論理の永続と見てよい。

古来から美の歴史が、とだえる事なく享受され、発見されて栄枯を誇る。これが人間の歴史でもあり、同時に美の歴史とも言える。

時の流れそれは美の創造、意欲への流れでもある。刻一刻時は彫まれ流れ行く。一刻一刻の流れの中に、一つ

一〇、美の連鎖

1、永劫回帰の美

永劫回帰　Enige Wieder-Kantt　フリードリッヒ・ニーチェが「ツアラトゥストラはこう語った。」の中で述べた思想で、非常に長い年月時間は円環をなし、一切の事物がそのまゝ無限に繰り返される。

同じものが再び帰り来ることをさす。仏教でも輪廻転生、生物が生まれては死に、また他の世界に生まれ迷うことを、いつまでも繰り返す。即ち、生れ変る事と輪廻している。

ニーチェは「これが生だったのか、よしさらば、もう一度！」と生の肯定を意味する。従って神、道徳、彼岸的なものを一切否定した。

ニーチェにとっては最高の肯定説と解してよい。この思惟は自然のサイクルの所で、美もまた蘇みがえることを述べた。

永劫回帰を自覚し、自分のこの同じ生が無限回繰り返されようとする。運命愛これは一つの肯定的な美でもある。

この運命愛を、意欲的に生き続ける美の論理と、対比して思惟すれば、美の連鎖への前提とも考えられる。

一八八三年にはやニーチェがツアラトゥストラで語っ

一つの美も発見され隆盛発展し、やがて衰亡し行く過程をたどる。

この流れは人間にとって一つの意欲であり、美への限りない意欲の連鎖と言ってよい。人の意欲はかくの如く、限りない連鎖の過程の中に生き続け発展する。すべては感情、感覚に包まれて生成する。

たゞこの論理隆盛の過程にも自ずと、隆々発展のテンポもあれば、また衰弱し美の意欲すら消滅しかねない時もある。人の生きる限りに於いて、かゝる過程に身を置くこともあり得る。

たゞそんな中にあっても生きる炎を失なってしまわない限り、また復活の活路を蘇みがえらせ、生成の高次へと希望をつないで行く。

よしんば身体的不況の脱出は、生生流転の中にも、大きなうねりを伴なって生起する。

芳わしい保ちの新芽が、生成過程と同じく大きく生成し、やがて大樹となり隆盛を極める。長い歴史の流れの中で、老木となって消えて行く。

そしてその地下から恵ぐみの新芽へと、自然のサイクルの中に意欲的に、生き続けるのが美であり愛である。

人間は常にその論理の中で、変化発展の過程をたどる。すべては無であり空であると、仏教的な世界観を引用するならば、解する事も出来る。

ているが、これもまた生の円環として永遠に繰り返えされる、運命愛であり、美の連鎖にほかならない。

時と永遠については極く短かい時、瞬間の捉らえ方もあるし、一刻が永遠に連なる存在をも示唆され得る。

限りない永遠の中における、瞬時の時も存在する。輝く瞬間美もあれば非美もある。たゞそれが永遠の時の中で、連鎖の美を形成する事になれば、永劫回帰説も美の論理として受けとめられる。

客観的な美意識もこの意味で、瞬間美は同時に永遠の美として回帰する。いわゆる、輪廻転生も仏教論理として受け取ってよい。

永遠の時間は円環をする。これは無限に繰返されるものとして、自からの意志に介在する。生即ち運命愛に帰結する。

これは美であり愛でもある。ニーチェはすべてを即ち神をも否定する。この永劫回帰を肯定し、これによって救われようとする。

永遠の時間の中で、自分のこの同じ生が無限にくり返されることを意識し、これを肯定的に受けとめることを、生の美学といってよい。

この美は前に述べた如く、愛でもあることを肯定する。ニーチェ的な永劫回帰に見る美は、かくの如く無限にくり返され形成される。

美の連鎖とは、まさにこの事と推察される。前述した永劫回帰の宿命からの救いは、自からの運命として引き受け愛することで、人間的な生の究極における決断でもある。

即ち運命愛によって旧い価値体系は、「力への意志」新しい価値体系へと蘇がえってくる。

即ちニーチェは、これに芸術の生命感情の高揚を見ようとした。

ニーチェと共に狭義の「生の哲学」を標榜して登場したディルタイにおいても、芸術の典型的な創造に、人間的な生の本質を認める志向が顕著だった。

また人間的な生の体験、追体験の表現理解を解釈学に求めた。かくて芸術的な想像力（構想力）を「生の哲学」で捉り上げていたことも、美を解し感ずることに、迷っていたわけではなかった。

Lebens Philosophia　において、美の創造が解かれていたことなど、生体験の表現に芸術を、すなわち美的な感受性を垣間見ることが可能であった。

そのことを考えて改めて、「力への意志」を感ぜざるを得なかった。ニーチェ的な永劫回帰説は、芸術分野を解く美であり、人間愛でもある。

たゞそれが永遠の美の連鎖であり、愛でもあるといえる。

2、人間的な美は、精神のエネルギーか

永劫回帰説も美であり愛であると、それを育くむ人間的な美は、精神活動のエネルギーである。との仮説に立って、美を思惟して見たい。

凡そある物質を生みだすには、人及び人間社会の生産的エネルギーを必要とする。これには経験を経験する過程も必要であるし、経験を育み形成する力も必要になる。

これは過去から現在そして未来に向けても言えることで、幾多の経験の集積がもたらされ、それを利用し積上げて行く過程が、人類史上にも永続性となって働きかけ、形成へのプロセスを磨いて来た。

その先人の磨いて来た感覚的な知覚これは、事物発生のメカニズムでもあり基礎過程でもあった。輝く力は事物発生の源泉であり、時として美的な現象発生のリズムでもありえた。

もちろんこの形成過程にはそれを生み出すエネルギーが、介在し得たことも考察対象として、過去の生成過程を辿って見れば、具現化する。

パスカルのパンセではないが、私達は非常に微弱な貧しい個体かも知れない。しかし無限大の彼方を夢見、それに到達すべきエネルギーを燃やし続けて来た。

その結果融合する成果を治め得たことも、その成果を後ずける史的世界も持って来た。

いや今後もそれを持続ける力、エネルギーを持つまでになって来ている。

一適の水が光となって未来を照す、これは人類史上にも輝ける成果である。人はそれを芸術と呼ぶだろう。

人智の到達する過程はそれが微弱であれ、永続性を刻む過程に見出される。これを踏台として飛躍の道をたどることは、精神的なエネルギーの形式がいかに不可欠であるか、論をまたない。

精神的なエネルギーこれは、人間的な歩みが心的な働きにより、精神面を支配している。

すなわち神経細胞の営みは、勿論心理的な働き知覚作用が、脳細胞に影響して、エネルギー発生を神経系統に命令し、その作用が手足に働きを指示する。

この過程は一見簡単なようで複雑な思惟過程が、内在することは論をまたない。

未知な人間的働きによって、エネルギーが発信し、美的な価値意識に影響し、美の創造を誘発する。何と不可思議な過程であろうか。単純に見れば、至極当然な事と言えるかも知れない。

これが大宇宙探査にもなり得る、美的効果と言っても過言ではない。人知の及ぶ限りの精神的エネルギーは、こうして進展する。

それは人知の及ぶ限り、美であり愛である。先程、仮空説を立案したが、これは論攷過程において、既に人類

史上で実験実証されてきた、一つ一つのステップでもある。

そうであるならば論証上では、仮説は前提の命題となって、経験的な実証過程の中で、本命題（定説）を育くむ論理的な過程を、定立させることになる。

従って仮説を実証させる人類史の過程の中で、人間的な美は精神のエネルギーによって、（三段論法アリストテレスが理論化した推論の形式、大前提と小前提という二個の命題から必然的に第三の命題（結論）が帰結する形式）、生成、形成、発展の過程をたどる物として可能視される。

もはや仮説的な命題定立は、この段階では本命題となって定立する。人間の生み出す美は、可能な限りの精神的エネルギーによって、確立されるべきものである。

即ち人智の及ぶ限りにおいて、このエネルギーは、他のすべての物を育くむ原動力となって、生成の過程を助けるべく働く。

各種のエネルギーは、事物形式の原動力をなして、未開分野にも精神的な支配を及ぼして行く。

思えば人知によって開拓されたこの分野にも、今や人知を離れて、とてつもない領域に独り歩きしないとも限らない。

将来は人によって開発されたこのエネルギーも、管理問題で頭をなやます結果を、招来しないとも限らない。

考えて見れば人によって開発されたものによって、かえって管理されなければならない状況が、足下にやって来ている事も、対処しなければならない。

人間によって育くまれた愛、即ち美は、人間の生命力の生み出すエネルギーによって、生成される。

前述の論証を集約して、気がねすることのないものと解してよい。

3、美意識は人を作るか

美の連鎖を大前提として、小前提をかゝげ論攷して来たが、単純な問題意識と解すれば、確に単純すぎるものと解される。

美意識が人間形成になす役割は、至極当然と言える。古来日本人の美意識を解するに、「もののあはれ」と言う典型的な事物の本質を捉える、思考形式をもってほめあげて来た。

源氏物語にまた平安時代の貴族社会における理念として、目に触れ耳に聞く物事につけて感じられた。しみじみとした情趣を感覚、感情の世界をもって称え、感性の世界を表出し得た。

そして美意識の連動が言葉の面にも及んだことは論をまたない。

ただもののあはれの、ものが何をさすかは論議の対象

として、種々な説が繰り広げられている。

本居宣長は、モノを持って「広くいう時に添えることばとした。「源氏物語玉の小櫛」、また和辻哲郎はこれに反して「意味と物とのすべてを含んだ」一般に限定せられない「もの」をさす。

また「日本精神史研究」に本来「ものの」は形式名詞もの十格助詞の」で逆接条件を示すもので、接続は活用語の連体形につく。

古くは土佐日記「かぢとりも、もののあはれも知らで」(船頭もしみじみとした人間らしい情愛もわからないで)、おのれし酒をくらひつれば云々、

また徒然草一九「もののあはれは秋こそまされ」と人ごとに言うめれどとある。用例によっても理解出来る。

ただもので何をさすかの論点は分析してゆけばゆく程、およそ日本人殊に、平安朝の美意識から離れて行く感が、それとなく感ぜられる。

即ち論理の綾として現代人の考えることであって、それをとやかく批評することで、かえって中世の雅な原点を、見失なって行くのではなかろうか。

むしろもののあはれという表現性は意を求めた方が、しみじみとした情感を誘うものとして高く評価してよい。

「あはれ」は本来心の底からの感動を示す言葉として、愛情、美意識、悲哀感などが重なりあったものとして、単純な喜怒哀楽より複雑な情緒的な反応を、表す物と解される。

そんなことから「あはれ」は感覚的、知的な興味を示す「をかし」と対照的に表現される。

広い内容のものとして捉えたい。たゞ「あはれ」には反省的、静観的な性格がたゞよふ。前述した悲哀に自然と人生を、かいま見る時、人の運命のはかなさに思いを馳せる。

しみじみとした情感がたゞよう。これは停めがたいものとして、体験感情となって私をゆさぶる。

四季の移り変りはどんなことがあっても、変ることなくやって来る。また男女の愛はどんなに愛しあっていても、いつかは必ず生別か死別かは別として、別れなければならない。

その切なさ哀感もまた必然的なもの、宿命、道理の情趣、哀愁となって「もののあはれ」さを誘う。

人生を四季に例えても、青春、朱夏、白秋、黄昏と、それぞれの四季を彩る。

「あはれ」さことに、その期に滲透して行って見れば情趣、哀愁は必然的な理法、宿命、道理などから「もののあはれ」さを誘発する。

いわば連鎖反応を引き起こす切っ掛けともなり得ると思う。前述の男、女の中の比喩として照応して得たのも、かつての王朝貴族の季節に人事を交よわせた知性の鋭さ

と、美意識の洗練さは雅の中に育くまれた。

歌など拾遺にも詠みつがれ、愛誦されたことが如実に描かれたものが、源氏物語であったことは論をまたない。

帚木の巻。雨夜の品定めの前の、佐馬の頭の良妻難の説の所で、「ことが中になのめなるまじき人のうしろみの方はもののあはれ知りすぐし、はかなきついでのなさけあり、……」

(女の仕事の中でもゆるがせには出来ない。夫の世話をするという方面からいうと、美的な情緒を感じたり、ちょっとした折の風雅を解し、……云々)と良妻の条件としては必要はないものを上げる。

所が家事一点ばりでも困ると解し、結婚した女性について語る部分で、本居宣長の源氏物語観から前述したように「広く文芸の本質はこの用語にあると解した。

自然や人生の観照によって得た優美、繊細な美的理念を演繹したものと解される。

以後純粋な感動として生まれた「あはれ」が独立した文学用語となって、平安時代文学の代表的な美的理念となっていった。

源氏物語を「あはれ」の文学と総称するのもその現れといってよい。物語の各巻々にも「あはれ」という語彙で使用し、自然と心の中に涌き出る、しみじみとした感情、情趣、また人間らしい情愛、雅びの綾としての理念を顕現し得た。

式部の繊細さに心を討たれることしばし、この雅こそ人を作る美意識といってよいと思う。

物語の文体も情意と論理性を見事に融合させ、情理を尽している事も忘れ得ない。美意識の形成に奥深さを感ぜずにはやまない。

4、美的な志向は創造性を育むか

美的な物が、究極的に創造性を目ざしていることになるのか。私達が美的なものに接した時起る感性は、その美を讃え愛でるめあてとなって現れる過程に、創造性が宿ることを覚える。

たびたび引用するが、野に咲ける白百合の花を愛でる事は、その究極の美を保存し、永く愛玩しようとする。

しかし生ある物は、必ず滅する時が来る。その時究極の美を、永遠に残そうと試行する。それは創造性をめぐらして、その美を作ることに意を尽くす。

古来から幾多の名工を育くんだのも、その為と見てよい。人は究極の美を求め、試行錯誤する。作りなしては新たな物に、挑戦する。

その創造過程こそ美の志向と見てよい。美への志向は右記のように試行錯誤の過程に於いて目的として捉えられる。

美意識によせる私達の感受性こそ志向であって、そこ

から創造性、創作も生れる。

ただ一概に美的な志向と言うが、それは単なる志向と有目的な志向とは、自ずと差違がある。

いや、差違どころか創造性への意欲に足掛りを、持ち得るかどうかにも直結する。

従って私達が自然に対して持つ美意識も、本来の志向意識をもつか否かによって、創造性にも影響することは論をまたない。

美的志向がさわやかであっても、時としてそれが感情の奥底まで浸透する過程にあれば、その美への志向感情は本物といってよい。

また知の働きの中によっても、種々の志向状況が見られる。意識の現れが、今の感覚もあれば、かつてのルネッサンス的な志向もある。

それはそれで志向過程に大きく左右され、意識の中も変化し美への志向も自ずと変転する。

限られた基本的な区分、種類の中で志向を燃焼させるには、その志向や角度によって異なる意識がうかがえる。

思潮の変化の中にあって、様々な志向様式は変化し、種々な志向性を持つのは当然といってよい。

人間文化の多様化も、またその一つといって過言ではなかろう。今こそ意識の多様化する時代にあって、志向性も千変万化するのは、当然な理法であろう。

社会の変化、文化の進化は人の意識をも変える。美への志向も思惟も、変化せざるを得ない。

それにともなって創造性も変化するのは、もちろんのことである。さまざまな意識・論理をもった思惟性が、美への知識、また方角性をも変えることは、否定出来ない。

私達は今の現段階にあって、未来志向の手掛かりを持つことも、場合によっては可能といってもよい。

たしかに変質はしても、物の持つ性質は変わらない。美への志向は人の感情、感性の意識にもとずいて、対処される。

千変万化する意識も、美への創造も、また志向する知の働きによって、根本的には質的な変化もありえる。

たゞ志向する意識は、そこに現われる限り、創造性を助長する。私達は物を見る時に意識し、また無意識に観察することがある。

意識しての観察の場合は、志向をともなうが、無意識に見ている場合には、特別な志向性もなくたゞ意識もぼやける。何か別の物に注意がそゝがれることが多々ある。幻覚症状もまた、その一つと言ってよい。

無意識に捉える時、捉え所が分散化して、中核がぼやけて志向性もそれてしまう。美意識どころか、有目的な意識に変質してしまい、性質の思惟も不能となってしまう。

かゝる状況においては、美的な志向性はおろか、本来

の目的思惟は為さない。感覚、感性も意識のない状況と等しく、無目的にたゞよう。

意識を目ざめさせ物の本質が何で、どのような過程を経て、有意識の状況に私を置くかに、対処される。

こゝに至って、本来のアイデンティティーを感じ、対象物もながめ得るし、創造性をも持ち得ることになる。

したがって私達の意識の目ざめこそ、美的な志向性が働き、究極的に創作性を創造する働きに、かえて行くことになる。

単なる無目的性では志向も働かず、ある喚起によって機能を呼び覚すことが、自覚される。

この心理的な機能の目ざめこそ、本来の美的な志向を働かせ得る。そこに創造性も象徴化されることになる。

これも美の連鎖の働きの一つと解してよい。

5、美は美を生むか

これも美の連鎖と関係する提起で、およそ美の発生は、その感覚的な知覚の働き作用によって、美意識をはっきりと現し示す。

論理的には美は非美なる要素があって、美を保つことは、論理的な構成から、既存の英知といってよい。

私達が日常生活に手にし、視、聴覚によって捉らえられる。美それは、私達の意識の中に介在し普遍化する。

美を美として認める感覚的な知覚は、それ自体美意識の顕在化である。私達は美を求め、美をこよなく愛でる習慣が、古代社会に既に芽ばえ、文字生成の頃から意識された。

記紀文学から記紀歌謡へ、美の伝播は、やがて万葉集一期から四期まで多くの名歌人、読み人知らずの歌まで、その形成過程は、意志伝達から美を通して愛への、贈答となった。

国家社会の生成の舞台となったのは、貴族社会であった。そうして統一国家の形成は、天皇を中心としたシステムへと、古今、後撰、拾遺と三代集から八代集へ、やがては十三代集、二十一代集へと大きく和歌の世界に、その生成を見た。

一方、物語文学も竹取物語、愛を綴る伊勢物語へと、雅の愛を象徴する。美学も風雅を宿すものとして、前に論攷して来た。

心の雅をかもすことばの美術は、それを演出する舞台背景、貴族の愛した書院建築、また茶の湯を汲みかわした茶道芸術、また逝く秋を惜しむ京の和菓子の美を、小倉百人一首と如何に結びつけるか。

歌の心を和菓子に、通わし呼び覚ます。日本美学の色調に、如何に生かすか。この巧な技など、まさに美は美を呼ぶものとして、古来からの伝統的美意識を今に伝える。

その色調の豊かさから、歌の心に心酔して行く美は、美を育くむ要素といってもよい。

嵐山を大堰川に浮かべ、その錦繍の綾を舟べりに浮かべ、山形由己女史のフルートの奏楽美も、また美は美を育くむといってよい。

古来から幾多の四季の美は人の心を取らえ「春は花。夏ほととぎす。秋は月。冬雪冴えて涼しかりけり。」道元禅師の四季を讃えた美は、それぞれに生きる美に、人間的な愛着を感じる美意識の顕現が、また色調豊かな人の心に、美学を感じさせる。

日本に生きた美は、美を呼ぶものとして、その連鎖にも関係してくる。もちろん世界的な芸術の粋を、その地方地方に発見し感動を換ぶられる。

またその偉大さに驚嘆もさせられる。日本文化を生んだ美の伝統は、世界にこの環境美と人文化の織なす境地こそ、本来のものといってよい。

もちろん、スケールこそ違え各国にも、その雄大な美的な対象物は、現存する。また古くから伝統的な美意識に育くまれた遺産は、多きにまたがる。

その文化、文明も時めきの中に、栄枯盛衰を重ねていった。それは世界歴史の中に燦然と輝き、その遺跡を発見し得る。勿論それぞれの掛け替えのない世界観もあろう。スケールこそ小なるものと言えども、その美は不滅さを改めて知ることが、可能である。

ブルノー・タウトが桂離宮を賛美し愛でた。これは日本だけでなく東洋、いや世界に誇る美と解してよい。

書院式建築様式、また雁行様式の構造など、それを包む庭園の美、まさに美術の粋を行く。

古書院、中書院、楽器の間、新御殿が雁行的に続いている。前述した書院造に茶室様式をとり入れた数寄屋造の建物は八条宮智仁親王「桂宮」が建立した。

宮家の邸宅として当時の貴族階級の宴席を作らしたり、管弦の御遊など美飾の限りを盡くした。風情が池水に映えた中島に、また松金亭など四つの茶屋が、耳目を聳動させたことゝ思う。

寛永期の文化はこのように建築、絵画、工芸の世界で文化の花を咲かせ、美は美を生んでいったことは、論をまたない。

権現造りの日光東照宮、修学院離宮、紫衣事件で退位した御水尾上皇が営んだ上、中、下の三つの御茶屋からなる。

庭園は比叡山を借景に、遠く瀬戸内海を視野に入れた雄大な庭園も、江戸時代の名園として今に残る。

この期に、如何に茶道の美をたしなまれたかは、この足跡によっても雄大、かつ繊細な美が人の心を捉えてやまない。

延暦寺の根本中堂、清水寺本堂等々にも管見することが、吝かではない。幕政の安定によって、都市三都の発

達は人口の集中化、江戸、大阪、京都を見るに至った。

経済の発達と都市を結ぶ道路（陸路と海路）の発達によって、生活にゆとりが出来た。

町人文化の発達にともなって、都市集中型の文化、元禄文化の中で学問研究が、儒学者、朱子学派を中心とした、折衷学派、考証学派などが栄えた。

すなわち、個々の科学、本草学（博物学）、農学、数学、暦学、医学、国文学、歴史学と西洋の学問にもふれて発達した。

それが芸術の世界にも寛永、元禄、化政と演劇の流れ歌舞伎にも人形浄瑠璃、義太夫節、唄浄瑠璃と発展した。

この世界にも演舞を通しての美学の流派を生み、美の連鎖を見ることが出来た。

元禄の文化で美術、工芸の面を前にも論攷の対象として取り上げた。尾形光琳の燕子花図屏風、紅白梅図、屏風は国宝として今日にも鑑賞され、菱川師宣の見返り美人図は、浮世絵の一枚摺り版画で、絵画史上画期的な価値を得た。

工芸部門で宮崎友禅の「友禅染の小袖」も、華やかな模様で流行した。尾形光琳の「八橋蒔絵螺鈿硯箱」。野々村仁清の「色絵月梅文茶壺」。など、今日でも国宝として元禄の華美に、耳目が注がれる。

元禄期の華やかで豊かな作風も、化政期には世相を反映した。

浮世絵の葛飾北斉、鈴木春信。文化人画の池大雅、谷文晁、渡辺崋山。写生画の円山応挙、洋風画の平賀源内など、時代背景に美意識を感ずることが出来るのも、一興に価する。

かくして美は美を生む論理も、歴史を意識して見れば、相関関係の下に育くまれる、物と言ってよい。

6、美は人間の本能によるか

このテーマも美の連鎖の一翼といってよい。心的な要因の一つで、私達の心内の働きが、性質、能力となって育くまれる。

度々引用するが、胎児の時、音の感覚を感知し得るという。母体で鼓動をはっきりと捉え得る。これは胎児教育が叫ばれる中で、例えば純粋音楽のモーツァルトなど、よい環境を整えることで、効果的なメローデーと言ってよい。

最早や出産以前にかゝる教育が、影響を与えている事など、今日の心理学的な領域では、早く取らえられている。従って、いわゆる経験豊かな人間の出産を待わびている。

母親としては出産以前の段階で、その責任は重大なものと言える。よく子育てが大変という言葉を耳にするが、人間性をもつ人格を、育て上げねばならない。そこから

すれば、愚痴かも知れない。

かゝる領域で母親にかせられる責任は、重大で、その子の一生を左右することにもなる。生命の誕生は、厳粛な神秘的な作用で、自然科学的では、細胞分裂によって結合された、一つの生命体といってよい。

古来から神託による精神的なもの、すなわち形而上学的なものとして尊重されてきた。

その生命体の誕生後、各種の細胞機能が発達過程をたどり、人格形成をなすまでに成長して行く。

この間環境の子と呼ばれるが、幾多の内面的な細胞機能の発達と共に、成長のメカニズムを、成長のエネルギーに変えて、伸張して行く。

その成長過程は幼児から子供へと、意識環境への適応もそれぞれ発達する中で、物音、光、色、即ち視覚、聴覚、味覚、触覚などの発達過程で、自分により感じやすい物に反応して、おしゃぶり、やがて粗朴な言語感覚が、周囲に対応出来るように成長をたどる。

そんな中にあって性質能力となって形成されて行く。

母親の保育に支えられて、安心と共に素朴な意識する力、能力として美を感ずるようになって行く。

もっとも美的な感情は、胎児の音を感ずる本能は、徐々に光、色、音を覚知する能力によって、美しい物質に反応する。

経験を積重ね、繰返すことによって、素朴な感情を持つようになって行く。これは幼児から言語感覚を覚える過程に、自我意識も整ってくる。

そこに反抗期を経験する。AよりもBをより好む。これは自分の好きな物より、美しいものに手が出る。

すなわち美意識によって色どられる事となる。そして集団生活に適合性を見つけだして、成長のメカニズムは、より発展過程をたどる。

こゝまで成長すれば、美的な感覚もはっきりとしたものになる。好き嫌いの意識に色どられた美を、物にたとえて表現が可能となる。

即ち美は人間の本能の表現傾向をになってくる。やがて人格形成期に入り、学童前の後期、そして児童から生徒へ前期中学期、克己による自我への覚醒期。後期自我の発達は心理的にも、自己を知る働きえと発達する。

美は自己の本能である物として、その飛躍が、青年前期には自意識がより強く、本来の自我の自覚を感ずるようになる。美、愛の知識も明確化してくる。

もちろん肯定的な知の働きだけでなく、自己否定も時に現れる。かなり人間形成が環境論と共に確実化してくる。

すなわち、思惟作用も確立化してくる。やがて青年後期は理想論ばかりでなく、現実の生活に対応する。いわゆる生活設計を企てることになる。

そして壮年期の充実過程へと進展する。かくて人間の

成長期にそれなりの特性をもつが、美はそれぞれの本能によって育成され形成されて行く。

幼時の美に対する憧れは、本能的に開発をたどり成長と共に、美の本質を求めるようになる。

感性的な響もともなって感情、感覚も支えとなり、美学構成の要因となって、体系化する。

従って美は人間的本能によって開発され、より豊かに構成されて行く。

7、美の根源は何によるか

人間による美の発見は、美を美と感ずる心、本性によって作られる作用と解される。人が美しいと感ずる働きは、自然環境に対した場合に見られる。

自然を人間環境に捉り入れ、変化させ人工美を生み出すことも可能である。即ち人が対象物に対して、美しいと意識する働きが、美の開発にも連動して行く。

本来、美なる物への知の働く過程が、意識することで、内在的なもの（心の働き）を作用させる。

医学的には脳細胞のうち大脳半球と、小脳とを除いた部分で、脳幹は延髄、中脳、間脳などに支えられて、下垂体という内分泌の機能に近く、同様な機能をもつ。

脳幹の内分泌、自律神経の中枢で大脳を働かせ、スイッチのような役をしている。

また細胞を連結している網様体によって眠ったり醒めたり、気を失ったり、気がついたりする働きをする。

即ち意識、一、自分のしていることや、周囲のことなどに気づいている心の状態。また、二、対象を対象として捉える。心の働きなど心的な作用によって、美なる物への知の働き過程が覚醒される。

さらに哲学、心理学において分析される。三、思考の対象となる意識の内容、思想など、社会的、歴史的な影響を受けて形成される。

心の内容、精神作用すべての経験や現象なども、この脳幹の働きによって形成される。

人間の意識構造の一端に踏み入ったが、私達の心の働きを司さどる、内面的機能にふれ得たことは、美の根源を知るのに重要な研究分野といってよい。

さらに意識の心理学的な研究では、一九世紀末ブントによって、科学的な心理学で直接経験すなわち、意識現象をその研究対象とした。

またゲシュタルト心理学では、事象の実験、現象学的な分析から、行動の客観的な研究を強調する。行動主義の心理学は、無意識の世界を重視する。

フロイトの精神分析学などが、相次いで生れた。かゝる学的な内容も、意識の働きにおいて自覚されないまま潜んでいるもの。また行動や考えに影響をおよぼしているものなど、二面性も論ぜられる。

一般的には体験していることに、自分が気付いている場合に、限定して用いられている。たゞ自覚のない場合でも、意識の可能性の程度によって、心理的に前意識、無意識などとも呼ばれる。

必要に応じて意識にのぼる可能性を、持つものを、前意識の状態にあるとも、いっている。

いずれも我々の精神作用の現れが、複雑、多様化して、脳幹の働きによって、意識となって作用することは、まぎれもない事である。

かくて美の根源も実は、我々の心の働き意識によって、誘発される前提に立って、論理を推論してよいと思う。

日常性に使用する文字の発生と、その美について前述によって考察して見たい。

およそ文字を意識して見る時、その発生は、自然世界から素材したと思われる。形象文学に由来する。現在知り得る漢字の最も古い形は、絵画的な要素を多分に残している。

その数はおよそ三千と言われるが、読解されているものは、半数とされている。

中国殷代占いに使用された、亀甲、牛骨の上に彫った文字、亀甲、獣骨文字と呼ばれる。殷の都の跡から発掘され、内容が卜占に関するものから殷墟卜辞、また卜辞とも呼ばれている。

亀甲、獣骨で占うことは、新石器時代（竜山文化）以降で文字化したのは、殷代とされている。

細かくは盤庚から殷末まで、二万数十年を五期の時代に分けて、研究が進められている。

内容は祭祀、軍事、天象、農耕、猟料、王宮安否など、記るされたものから、殷王朝の歴史的な実証も確固たるものとなっている。

政治、社会、経済など明らかになる。同時に伝説の域を脱した、中国最古の王朝が、明確化した。

後に鐘鼎文へ、周代BC三七四、石鼓文、唐の始めに陝西省の田野から発見された。中国最古の刻石で大篆の典型、BC二一九、泰山刻石になると小篆と呼ばれている。

荘重な書体、篆書体の簡略化にともなって、BC3秦時代から表面化した。隷書体は秦当初の公式文字として、始皇帝の李斯に命じ、文字の整理統一を、篆書に隷属する書体とした。

終筆部の液状の波磔のない古隷から、八分装飾的な用筆も使用された。前漢、後漢に木簡においても、使用が見られた。

隷書は漢代に完成されたと言ってよい。「乙瑛碑」153、礼器碑156、曹全碑185など完成の域を閲みした。

以後有名な書家が相続いで現れ、楷書、行書、草書へと芸術作品を生むに至った。思えば中国三千年の軌跡は、たゆまぬ努力の結晶として開花したと言える。

文字の美にもそれを育くむ、感性的な意識の積重ねがあって、今日の芸術美を鑑賞することが出来た。

中国から我国にも文化の移入があって、線の芸術を平安の雅に、垣間見る事が出来た。

やはり文字の美学もその根源は、前述の医学的、哲学、心理学的な解明もあって、感性的な美のより深淵さを、極め盡くすことが可能であった、ことを添えおく。

なお前記したが、人が対象物に対して、美しいと意識する働きを、茂木健一郎博士はクオリア quolia（ラテン語）質感である。と主観的な体験を説く。

神経細胞ニューロンのシナプスが、複雑に結合して、複雑なシステムの性質を形成する、脳内現象を説く。そして意識とは、クオリアのかたまりであるとしている。

どうやら美の根源も、博士の論ずるクオリアによるのかも知れない。

また脳内の認知のプロセスに於いて、博士は、「あるもの」が「あるもの」である。ことが成り立つためには、クオリアが精神活動によって、生成されなければならない。と力説されている。

まさに美が美であるための根源に、かゝるクオリアの生成が、不可欠な作用をなすと見てよい。

8、人は価値意識に生きる

前に意識細胞の働きはクオリアによると、茂木博士はその根源を論理に生かしている。生成を支える脳のしくみは、あらゆる部位でそのシナプス結合を介して、構成される。

即ち神経細胞の活動が同時に、複数のコンテクスト（文章の前後の脈絡・文脈）を担うという状態が、常に滲んでいると、論述されている。

人類史上長い年月にまたがって、脳の進化の過程にクオリアの生成が、AよりもB、またCとより高い価値を求めて、生成発展をとげてきた。それは確かだと思う。

価値意識に芽生え、その中でより普遍的なものを求めて、生きるのが人である。

個々の人間が集まって社会組織を作り、その組織体の中で少しでも価値ある物を求め、それを発展させるのが、人類の英知である。

長い歴史の中では、時に社会、国会、宗教観によって思想、感情も激化し、血で血を洗う戦闘も、繰りかえして来た。

そんな中でも新しい平和、人類愛の叫びが台頭し、新価値を育くんで来た。

崩壊した旧価値を求めてのルネッサンスも、新価値意識を育くむ流れとなって、人類は動いて来た。

また今後もこの過程が、繰り返えされて次の躍動に連なって行く。科学的な英知も人類平和共存のため、人間の幸福のために使用される。

その共存の倫理から時によって統制し、平和目的の方

向へと進路変更も、各国間で協議されている。
そして平和目的利用の先鞭を、条約によって制御しようとする。その方向付けさえ、行なわれている。
人が生きるために、よりよい環境作りに、また心の支えとなるべく、相互理解に新しいアイデアの投入、これは価値意識のクオリアと言ってよい。それは人間を生かす道かとも思う。
人は限られた時間と空間に生きる。有限な時間は時を越えて永続する。その流れの中に新しい価値意識は芽ぶく。
より人類社会の構成に一翼を担っている。人が生きる限り欲望を持ち、古い価値意識は、次々と新しいものに塗り替えられて行くのが、人間の欲望を満す意識でもある。
古い欲望は新しい欲望へと、即ち古い価値意識は新しいものえと進展する。これが人間社会の基本でもある。
人が意識のクオリアを持つとき、その細胞意識はより複雑に、シナプス（神経細胞と他の神経細胞の接合部）結合を可能な限り行う。
即ち価値意識の方向性へと意識を向け、統合性を助長する。今、AとBいずれを選択するか。選択の価値意識に出会った時、脳細胞の中ではシナプス双方が、共にそのような性質を持つ。
その関係の物が、互いに結合し合って、意識の方向付けを、より強固なものにして行く。その過程に方向付けが、他のシナプスをも巻込んで増大して行く。
かくてAよりもBをと選択することになる。さらにBならばC、或はCの方をと、より普遍的な価値意識を望む。
情欲、感性的な響きとも相俟って、より新しい方向性へと、かり立てられて行く。
これが人間のもつ価値意識で、より効果的な生活基準に立ちながらも、なお新しきものへと前進して行くのが、人の生くべき姿だと思う。
もちろん科学的な形而下学に実証性をもつ上で、パトス的な領域は忘れ得ない。精神的な面は、容易に脳細胞を刺激して、我々の行動、アクションを起こさせる。
その時、脳細胞に反映されるものは、現実に視覚を通して視神経を動かすものもあれば、かつて見た落日の夕陽の光景も、幻覚となって蘇がえってくる物もある。
それは現実の夕陽と対比して、イメージとして蘇がえってくるものである。またそれは価値意識の素材として、捉り入れることも可能だ。
人はこのように種々なイメージを、選択意識に反映することが可能となる。より奥深き領域をも、捉り持つことが出来る。
精神面の働きは、他の動物では出来かねる。いやごく初歩的な意識の知の働きはあっても人間的な働きかけは

出来得ない。
たゞ時に人間同志の価値意識が、場合によっては、反発しあうこともあり得る。
価値意識の優劣が相異し、同じ方向性を示しながらも、目的意識によるボタンの掛け違えによって、同目的達成が相入れない、価値観を生む。
この上ない悲惨な状態に追い込まれる事もある。拡大化すれば戦争をもって、解決を強いられることもある。
人類の生存の歴史を振り返って、考察すれば明らかだ。たゞ不幸にして、人を破滅にまで追い込む前に、再び価値意識に戻って、その方向性を考えなおすことは、人類の英知を踏みあやまらない限り、出来るはずである。
かゝる意味で人は、価値意識に生きる存在と言ってよい。

9、窮極の美は愛か

古代ギリシアの昔から美と愛は、論理探究の糸口として叫ばれ、論争の的となって現在に至った。この窮極の問題は、今に説き及んでいる。
即ち、古代ギリシア人の愛でるものは、美であり愛であった。私達は確かに自然世界に横たわる、宝石の原石を磨くことによって、ダイヤモンドの彩光を美しいと感じ、意識して愛でる。
原石はさほどでもないが、磨くこと加工することによって、奇しくも光沢を生む。
磨き上げられたものを、より美しく引き立てようと人は、或はイヤリングに、また装飾品として身辺を飾って来た。
今もその傾向は消えることなく、美への愛着を持ち続けてきた。それは歴史を繙けば、人類史上かゝる意識は、例えば王宮の遺跡、装飾、建築様式に生きて光り輝いている。
ベルサイユ宮殿に、燦然と輝くルイ十四世の権力意識も、さることながら洋の東西を問わず、かゝる人知は、いずれにも存在する。
我国にも古くマルコ・ポーロによって、世界に紹介された黄金の国ジパングなど、また平泉の金色堂、京都の金閣寺、日光東照宮等、それにふさわしい黄金が、眼に焼き付いて離れない。
燦たる光彩は、今に私達の眼識を温めている。これは美であり、愛の極地といってよい。
たゞ世の移り変りによって、価値観も多様化する。今までの一様な価値観で、美の象徴とあつかって来た物も、今や鑑賞の観点によって、様々な意志表示がなされよう。
栄枯盛衰世の常ならず、の例えもさることながら、歴史の一頁に埋没してしまうこともあろう。
たとえ美、非美の論理は変われども、永遠の美、また

愛は、変ることなく輝き続けるのが、美学を愛する人の思いと言ってよい。

古代ギリシア的な美は、その背景には愛をともなった。たしかに古代ギリシア哲学思潮に遡って、ギリシア神話に見る美、愛の形が源をなした。

美の理想的な原型も、神話の主神ゼウスの子アポロンとディオニソスであった。前者は音楽、弓術、医術、予言、牧畜の神として、光を与えた。ギリシア語でボィボス（輝く）と形容された。

ギリシアにとって、最高の知性、文化の神とたゝえられた。また律法、道徳、宗教の守護神と仰がれ、月桂冠をかぶり、弓や七絃琴をもつ美貌の青年と想像された。

後に太陽神ヘリオスと同一視された。後世のニーチェは造型芸術（彫刻）のシンボルとして、知的で調和的な性格を持つものとしている。

後者ディオニソスは、ギリシアの北方トラキア、マケドニアから移入された神である。「ホメロス」では、葡萄作りの神とされ、ヘシオドス以来ゼウスの子とされるようになっている。

特に女性的熱狂的な崇拝の対象となって、生殖、葡萄栽培、酒の神で、バッカスとも呼ばれた。

野性的な神々を従者として従え、葡萄や藤つるを杖に巻きつけ、ひげをたくわえた壮者を思わす神であったとされる。

後世ニーチェは非道型的な芸術（音楽）の根本衝動のシンボルとして、激情的、破壊的性格をもつ、神とたゝえている。それぞれ、ギリシア神話の神々を引用してきた。

哲学以前に神話的なスタイルによって、人々は情熱的な感化を受けた。後にパトスからロゴスへと、タレース、ソクラテス、プラトン、アリストテレスと、知的世界への開眼がなされた。

美的世界から愛へと、一歩一歩体系化をたどるに至った。古代ギリシアの思想体系も、このようなバックボーンに色彩られ、素朴ではあるが育っていった。

アリストテレス的な自然哲学も、知的な逍遙を通して体系化して行った。たゞマケドニア大王の死後に、キリスト教支配へと、中世のスコラ哲学、即ち神の信仰に結びつく宗教的、精神的な愛を求めていった。

アウグスティヌスによる中世の新しい文化の先駆として、真の幸福は何か。生きる事への愛を認め、その体験にもとずいて、「告白」を現した。

その章句に「主よ、あなたは私をあなたにむけて創られた。私の魂はあなたの中に憩うまで、安らかではない。」即ち人間の真の幸福は神を愛することにある。

彼の哲学の対象は神と魂で、神は我々の魂に内在する。総ての人間行為の原動力が、愛であることを説いた。従って中世的な世界観は後にスコラ哲学の体系を育む。

やがてローマ世界は、東ローマ帝国の滅亡と共に、イタリア北部、フローレンス、ジェノアでルネッサンスの花を咲きそめた。

古代ギリシアに還れと近世初頭の文芸復興が、華々しく展開された。あらゆる世界観は美を象徴する者として、中世のアウグスティヌスの神への愛、即ち凡ての人間的美は、その根源には愛を持った。

近世初頭に見るルネッサンスの絵画は、燦然と光を放った。後のカントを中心としたドイツ観念論の美学へと、大きく展開されて行くことになる。

「窮極の美は愛か」と前提を投げかけ、古代ギリシアの神話の世界から、ルネッサンス期にまたがる西欧文化に着目して、そのテーマをかいまみて来た。

その道程から美の窮極を愛にもとめた、精神的なエネルギーは、今私達が管見する姿を西欧に於いて、早や見極めていたことに驚嘆させられる。

長い歴史の中で、かゝる美学も表現化したことは、文化遺産に対する賛美といってよい。

勿論、美は人間に形而上的、精神的なエネルギーを神に託した。精神的な支柱は、愛の極地でもあったことを、忘れ得ないと思う。

つゞく

口紅（その七）

池莉　原作
山本勉　訳

〈登場人物〉
（趙家の人々）
趙耀根（小説の主人公、江暁歌と結婚）
趙耀虎（趙耀根の弟）
趙耀珍（趙耀根の妹）
趙耀根の母親
（江家の人々）
江暁歌（小説の主人公、趙耀根と結婚）
江暁鴎（江暁歌の弟）
江暁暢（江暁歌の妹）
沈鳳宜（江暁歌の母親）
江暁歌の父親
田曼（江暁歌の実母）
（趙耀根と江暁歌の友人）
寧岸
（趙耀根の会社の同僚）
張喜
（趙耀根の会社の上司）
李主任
張書記
（江暁歌の会社の同僚）
羅桂香
（趙耀根と江暁歌の娘）
嘉児
（寧岸が配属された紅光工場の従業員）
呉文彗（後に寧岸と結婚）

第十一章　小さな独身寮

（一）

部屋のドアを押し開くと、江暁歌は驚いた。

一日、仕事で留守にしていただけなのに、部屋の様子が様変わりしていたのだ。彼らの大きなベットと嘉児の小さなベットはなくなっていて、真新しい家具が設えてあった。江暁歌は我が目を疑った。手を伸ばして家具に触れてみて、やっとこれが真実であることがわかった。

江暁歌は腹を立てて、イライラしながら、

「お母さん、いったいどういうこと」

と尋ねた。姑は、

「ああ」

と生返事をした。

「あなたに言うのを忘れていたわ。耀虎が、まもなく結婚するでしょう。だから、彼のために家具を設えたのよ。この部屋は、彼のためにきれいさっぱりして、新婚夫婦の寝室にするより仕方がなかったんだよ」

「それじゃ、私と嘉児はどこに住んだらいいの」

「安心して。用意してあるわよ。あんた達は、屋根裏へ移って。私と耀珍が一階の新婚夫婦の寝室の隣で、重なりあって寝るから」

「嘉児は、まだ二歳にならないわ。彼女が屋根裏部屋へはい上がって、転んでもしたら心配だわ。それに、屋根裏部屋はドアもないわ。嘉児が夜トイレに起きて、万が一足を滑らせて落ちたらどうするんですか」

「この家の大人は、嘉児の面倒を見きれないとでもいうの。落ちるわけがないよ。私達のような人間は、猫の額のような家に住むしかないんでね。あんた達が結婚したときには、私は部屋から追い出されたんだ。今度は耀虎が結婚するんだから、あんた達が部屋を出るのが順序というものさ。あんた達は、屋根裏部屋に住まわせてやっているんだから、優遇したんだよ。耀珍は簡易ベットに寝ているんだ。夜寝て朝起きるときには、ベットをたたまなくちゃならないんだよ」

「私には他意はありません。ただ、耀根が家に住んでいた時に、耀虎は花嫁の家で暮らすってお母さんは言ってたわ。もし、早く知らせてくれていたら、耀根は嘉児のために手立てを考えていたわ。それに私だって何か方法を考えたわ。でもこんな突然じゃどうすることもできないわ」

「もし、耀根が家にいたら、今回の件はいい加減にできなかっただろうよ。耀根が一番大切に思っていたのは弟と妹だよ。弟と妹のためなら、自分がどうなっても、どんなことも厭わないんだ。私達が小っさな奥の間に住んでいるんだから、耀根は文句の言いようもないんだ」

江暁歌は次第にがっかりして、もうこれ以上、姑と言い争う気がなくなってしまった。彼女は口をつぐんで、屋根裏部屋に上がった。屋根裏部屋のベットの上には、嘉児の衣類が雑然と積まれていた。彼女が苦心して捜し集めた書籍も、至る所に散乱していた。彼女は本を整理していたが、沢山の本がなくなっているのに気がつき、姑に尋ねた。

「お母さん、本が数冊見あたらないの。知らないかし

ら」

「ああ、古本で売っちまったよ」

江暁歌は、怒りを抑えきれなくなって、

「何ですって」

と叫んだ。

「こんなに沢山の古本を家に置いておくと、場所を取ってしまうんで、私と耀珍で片付けたんだ。お前が授業で使う本は取っておいたよ」

「私の本は売りたくありません。お母さん、わからないのですか」

「わからないね。私は、何もわからないんだ。猫の額のような家に三世代で暮らさなきゃならないことがわかっているだけさ。お前が何の役にも立たない本を残しておきたいのならば、頭を使って他の場所を探しておけば良かったじゃないか」

「お母さん、これは私達に出ていけっていうことなの」

「私はそんなこと言っていないよ。お前が言い出したんじゃないか」

趙耀珍は、兄嫁に文句の一つも言いたかったけれど、今回ばかりは母親を容認できなかった。

「お母さん、お母さんは、いったいどうしたいの」

「私が何をしたいかって。お前の義姉がつまらない本を売っちゃいけないって、私を責めるんだよ」

「私が、何時お母さんを責めたって言うのですか」

「毒づくのが好きだね。お前の言っている言葉は暴言さ」

「お母さんが言っていることは、全く筋が通っていません。お母さんが私を追い出したいなら、はっきり言ってください」

「お前がこの家に住めないって言うのなら、出て行けばいいじゃないか。いずれにせよ、私はいつも、お前にビクビクしているんだ。私は最初から、お前にこの家に来てくれって頼んだ訳じゃないよ。お前の方からこの家の門をくぐって来たじゃないか」

趙耀珍は、

「お母さん、兄さんが出発したばかりなんだから、こんなこと言っちゃダメじゃない」

と言った。

「もともと、この結婚には賛成じゃなかったんだ。昔から言うじゃないか。身内でなけりゃ玄関をくぐらせないってね。案の定、お前の兄さんが結婚してから、我が家は災難続きだ。一日だって良い日がありゃしない」

江暁歌は、悲しみと憤りがいっぺんに押し寄せてきて、家を出て行くことを決意した。彼女は、散乱した書籍の中から数冊の最も大切な本を選んで鞄に詰め、彼女と嘉児の衣類を梱包して手に提げて、嘉児を抱きかかえて、ひと言も告げずに家を出た。

趙家の母親は江暁歌をじろりと見て、

「出て行きたけりゃ、出て行くがいいさ。でも、孫娘は置いておいき」

と言った。

江暁歌は冷ややかに姑を横目で見ると、娘を連れて趙家の玄関を跨いで出て行った。

趙家の母親は、江暁歌の後ろ姿にひと声浴びせた。

「やれやれ、とうとうこの家に住めなくなったかい。江暁歌、よく憶えておき。これはお前の方で出て行ったことだ。後で耀根の前でデマをとばして、ゴタゴタを起こさないでおくれ」

趙耀珍は躊躇していて、義姉の手を引っ張って引き留めたかったが、どうしても、母親とケンカをする気にはなれなかった。自分が一番好きだった小さな姪の遠ざかっていく二つの瞳を見つめながら、趙耀珍は、

「嘉児」

と叫ぶと、堪え切れず涙が溢れ出した。

(二)

路地を通って大通りに出ると、江暁歌はやっと、自分が実際に行くところがないことに気がついた。彼女が唯一行けるところは、彼女の実家だったが、それは一番行きたくないところでもあった。

実家に行ったのは、嘉児を生んだ後に嘉児を連れて里帰りした時で、祖父母に何度か会ったことがあるだけだった。それに、父親がいるときを見つけて行くだけだった。たとえ彼女が実家に行ったとしても、ご飯を食べないし、ちょっといて直ぐに帰ってくるだけで、一晩中居るなどということはなかった。彼女は、始めから、もうこの家に帰らないと心に誓っていた。行ったとしても、お客さんとして行くようなものだった。今突如として誓いを破って再び帰り、嫁ぎ先に追い返されたならば、彼女の自尊心は耐えられるものではなかった。

彼女は嘉児を連れて大通りを行ったり来たりするしかなかった。彼女はルンペンが羨ましかった。彼らはその場で寝そべって、大きな口を開けて残飯を食べることができたが、彼女にはそんなことはできなかった。彼女は疲れていても、腹が空いていても、体面を保たなければならなかった。彼女は取るものも取らずに家を飛びだして来たので、ポケットにはお金もなかった。だから嘉児が泣いたり騒いだりして、お腹が空いた、ものが食べたいと言っても、言葉巧みに彼女をあやすしかなかった。しかし、言葉だけでは飢えを満たすことはできなく、嘉児は泣きじゃくるばかりで、遂には、彼女の肩に被さってうとうとと寝入ってしまった。彼女は本当に疲れ切って、嘉児を抱いて大通りの緑地帯に入り、石のベンチを捜して腰掛けた。彼女は全身がだるくなり、くたくたに疲れ果ててしまった。

嘉児は眠りながら、時折泣きじゃくった。明月が空に昇ると、情趣に満ちた大通りの緑地帯は、恋人達が愛をささやく場となった。彼女は空腹でお腹がぐうぐう鳴った。木犀の木の後ろに隠れた一組のカップルが、彼女が座っているこの石のベンチを欲しそうにずっと眺めていた。彼らは、彼女がこんなにも長く座り続けているとは思ってもみなかっただろうし、もしかしたら、夜が明けてしまうのではないかと思っていたのだ。

嘉児は突然驚いてぶるっと身震いすると眠りから覚めて、無意識のうちに母親にしがみつき、哀願するように言った。

「お母さん、何か食べたいよう。お腹がペコペコだよ」

彼女は気持ちが高ぶってきて立ち上がった。彼女はもうプライドなんてどうでも良いと思った。

「嘉児、おばあちゃんの家に行こう」

江暁歌は実家の玄関のドアを叩いた。暫くすると玄関のドアが開き、温かな明かりが漏れてきて、江暁暢の顔が見えた。

江暁歌親子を見て、江暁暢（江暁歌の妹）はとっても驚いた。

「まあ姉さん、こんなに遅くどうして帰ってきたの」

江暁歌は、何も言わずに真っ直ぐ部屋に入っていった。

嘉児は江暁暢に急に飛びついた。

「おばちゃん、嘉児は、腹ぺこだよ」

「嘉児、夕ご飯食べてないの。お母さん、早く来て。姉さんと嘉児が来たわよ」

沈鳳宜は、部屋の入口に現れた江暁歌を見ると、彼女の心の中が直ぐにわかった。しかし、彼女は顔色一つ変えずただ心を込めて、

「おいで。おばあちゃんに抱っこさせて」

と嘉児に言った。

嘉児は、おばあちゃんの懐に飛び込んでいった。

「お母さんが嘉児にご飯をくれないんだ。お腹がペコペコだよ」

「よしよし、おばあちゃんが嘉児に美味しいものを作ってあげるよ。先ず、おばさんにビスケットを食べさせてもらいましょう。いいでしょう」

「あなたにウイスキーボンボンを食べさせてあげるわ」

「やった！」

と嘉児は大喜びした。

江暁歌は、

「私は、麺を茹でるわ」

と言ってちょっと腰をかがめると、台所に入っていった。

沈鳳宜と江暁暢も続けて台所に行った。江暁暢は堪え切れずに、

「姉さん、あいつらの家の死に損ないが、姉さんを追い出したの？」

と江暁歌に訊いた。

江暁歌は江暁暢の質問には答えず、大急ぎでガツガツと食べ物をかきこむ嘉児をチラッと見た。嘉児はまだ涙をためていたが、顔には既に食べ物にありついた後の満足な笑みが浮かんでいた。江暁歌は本当は大声で叫びたかった。しかし、江暁歌は母親や妹の前で泣くことができなかった。

江暁暢は、

「全く話にならないわね。趙耀根を監獄から救い出して、彼らの家のために孫を産み、テレビまで見れるようになったのも、姉さんのお陰じゃないかしら。それなのに、世の中には恥知らずな奴がいたもんね。本当にぞっとするわ。私が、彼らの所に行って来ます。それに趙耀根に電報も打ちます」

と言った。江暁歌は、

「暁暢、絶対に、耀根を驚かしちゃだめ。彼は深圳で事業を始めているの。今とっても苦しいのよ。もうこれ以上彼に負担をかけられないわ」

と慌てて言った。

「何が負担よ。一人の男が女房子供のために、なぜできないの。それに、趙家のような小市民には、私達のことをバカにできないってことを、少し思い知らせてやらなきゃね。本当に人をなめてかかっているわ」

「暁暢、私のこと構わないでちょうだい」

「そんなことできないわ。私達が手放したら、あなたと嘉児は落ちぶれて、路頭に迷ってしまうわ。私達があなたの面倒を見たら、彼のお母さんは、あなた達を奪っていったと、何時か言うにちがいないわ。だからあなた達がこんな情況に陥ったことを、趙耀根にはっきり言うべきよ」

沈鳳宜は、

「暁暢の言うこともわかるわ。あなたと嘉児は、ここに住んで良いのよ。でも、耀根は保守的だわ。私達が彼に今回のことをきちんと説明しておかないと、あなた達の夫婦関係に溝が入るわ。それを心配しているのよ。それに、あの母親は先手を打って、自分こそ被害者だと言い張って、責任をあなたになすりつけるかもしれないわ。だから、今回の事実を耀根に理解させて、誰が正しくて、誰が間違っているのかを、彼にわからせなくてはいけないわ」

と言った。

「ダメよ、耀根に知らせないで。私はよくよく考えたの。私も長いことこの家に暮らすことはできないわ。私は嫁いでいった人間であることを、わかっているつもりよ」

沈鳳宜は直ぐに反応して、

「暁歌、あなたは、私の気持ちを誤解しないでね。ここはあなたの家よ。いつまでも居ていいのよ。あなたと

嘉児は、まずご飯を食べてちょうだい。私は休む支度をしておくわね。丁度暁鴎の部屋が空いているから、そこで休むといいわ」

と言った。

沈鳳宜が、自分と娘の世話をしてくれているのを見て、江暁歌は感動した。母親が自分に対して、申し訳ない気持ちを抱いていることがわかっていた。ただ、母親は、親というプライドから、江暁歌に自分の気持ちを素直に伝えられなかった。

彼女は、母親のことを理解してあげることができると思った。江暁歌は、今行き場を失い、母親が予想したとおりになったので、母親は自分のことをなじるにちがいないと思っていた。彼女が実家に戻った時も、母親に何か責められるのではないかと、心の準備をしていた。しかし、母親は何も言わなかった。ただゆったりとしてほほえみを浮かべて、母親としての責任を果たしていたのだ。

しかしこの母親の寛容さが、江暁歌の気持ちを逆に苦しめた。

（二）

寧岸（趙耀根の友人）は知らせを聞くと、直ぐに趙家に駆けつけて母親に掛け合った。

「お母さん、僕は彼に代わって、彼の奥さんと子どもの面倒見ると約束したんです。僕は将来、彼に顔向けができなくなってしまいます」

「あなたは耀根に言っておやりよ。彼女はぷんぷん怒って出て行ってしまったと。母親の私はもうお手上げさ。私は嫁にひざまずくことなんてできやしないよ」

「耀虎は、趙家で新婚生活を送らないと言ったじゃないですか」

「ここで生活しなければいったい何処で生活するんだい。私のような寡婦がやっとの思いで苦労して息子を育ててきたんだ。よもやあの子を入り婿にし、他人の家に入らせるなんてことはできやしない。この家は猫の額ほどの屋敷だけれど、嫁を迎え入れなきゃいけないんだ。家は休むためにあるんだ。土地が大きかろうが、小さかろうが、眠ってしまえば何もわからないよ。自分の家なら何処で寝ようが同じことさ」

趙家の母親は、

「嘉児は何か辛い思いをしているんじゃないんだろね。嘉児はやっぱり、他人の家に行ったんじゃなくて、嘉児のおばあちゃんの家に行ったんだ」

と続けて言った。寧岸は、

「江暁歌は、実家に帰ったとは限らないと思うよ」

と答えた。母親は、

「それなら、彼女は苦しい目に遭わなければならないね。彼女のような人は、苦労した経験もないし、考えを変えられないんだ。その時になって困り果て、物事の道理がわかって自分の否を認めれば、家に帰ってくることを歓迎するよ」

と言った。

寧岸には、趙家の母親は、自分の論理を自分で納得しているだけだということがわかっていた。

趙耀根は、深圳で事業を始めて、素手で立ち向かい苦労しているので、助けるのもままならない。それに、江暁歌は絶対に趙家の母親に頭を下げなかった。どうやら、江暁歌親子の面倒を見る責任が、自分の肩に重くのしかかってきたようだと、寧岸は思った。

寧岸は、苦笑いするだけだった。彼は、趙耀根、江暁歌夫婦に縁があったのだ。

誰もがみな、趙家の母親は口からの出任せで、江家に行くはずなどないと思っていた。

かつて彼女は、言ったことを実行したことなどなかった。しかし、孫娘のことを思うや否や、趙耀珍に付き添わせて、江家を訪ねた。

趙耀珍達を見ると、嘉児は嬉しくなって、

「おばちゃん、おばあちゃん」

と叫んだ。

江暁暢（江暁歌の妹）は勢いよく立ち上がると、彼女達を名指しして、

「何処から逃げてきた乞食なのよ。嘉児、早くこっちへおいで」

と言った。

「おばさん、あの人達は、私のおばあちゃんと、おばさんだよ」

「何が、おばあちゃんと、おばちゃんよ。私は知らないわ。早く戻っておいで。悪い人にさらわれちゃうから気をつけて！」

趙耀珍は、

「江暁暢、あんた、何ていうわからず屋なの。私の母親が孫娘に会いに来たのよ。あんたに何の関係があるっていうの」

と怒って言った。

江暁暢は駆けていって、嘉児を抱き上げると、

「いったい、誰が分からず屋だっていうのよ。嘉児を追い出して、それで江暁歌に顔向けができるって言うの。バカ言って！」

と言った。

江暁歌は声を聞いて飛び出してきた。そして姑と小姑を見ると思わず目を見張った。

嘉児は、

「おばちゃんが、『おばあちゃんとおばさんは、乞食をしているんだ』って言ってるよ。おばちゃんが、おばあちゃんとおばさんを私に会わせてくれないの」

と言った。趙耀珍は、
「義姉さん」
と叫んだ。江暁歌は情にほだされて、
「お母さん、趙耀珍、さあ、入って」
と言った。
江暁暢は玄関に立ちふさがり、
「ダメよ。先ずあなた方は、私の姉さんに謝りなさいよ。それから、迎えに来たのか、嘉児に会いに来たのか、はっきり言いなさいよ」
と言った。
趙耀珍と趙家の母親は一時口もきけなくなり、どう答えればよいのかわからず、決まりが悪そうだった。
「あなた方は、ただ、嘉児に会いに来ただけなんでしょう。そうなのよね。はっきり言うわ。そんなことできるわけないでしょう」
江暁歌は、
「趙耀珍達に入ってもらってからにしましょう」
と言った。江暁暢は、
「何が入ってもらってからよ。もう話すことなんてないわ。あの人達は今更姉さん達を迎えに来て、連れて帰るって言うんじゃないでしょうね。ここは私の家よ。私は彼女達を歓迎しないわ」
と言った。
彼女は、嘉児を抱いたかと思うと、身を翻して奥に入り、玄関戸をぴしゃっと閉めた。
しばらく経って、玄関で物音がしなくなったので、趙耀珍と趙家の母親が既に帰ったものと思った。江暁歌は、
「彼女達は、いずれにしても私の姑と小姑なのよ。訪ねてきたからには、どうしてこんな真似ができるかしら、できないわ」
「私は、姉さんのうっぷん晴らしをしてあげたのに、姉さんからとがめられるなんて心外だわ」
「私はあなたをとがめてなんかいないわ。私は、人として申し訳ないと思っただけよ」
「人として済まないのは、当然彼女達だわ。私は彼女達を見ると腹が立つのよ。趙耀珍は、まだ寧岸を追いかけているわ。私は彼女達に、我が家の敷居を跨がせたくないの。我が家に黒い煙と有毒な空気が蔓延してしまうわ」
「そんなこと言ってはダメよ。私は彼女達を入れさせたわ。あなたは何故立ちはだかったの」
「姉さん、今ここは私の家よ。姉さんの家は趙耀根のところよ。あなたの戸籍は我が家の戸籍帳簿に載ってないわ。あなたはお客さんに過ぎないのよ。彼女達を入れるも入れないのも私の勝手よ」
「暁暢、あなたって、どうしてこんなに横暴なの」
「ほらほら、他人になめられて、かえって当たり散らして。全く訳がわからないわ」

もともと、江暁歌は長く実家に居るつもりはなく、こうして実家に来てみても、少しの逃げ場もなかった。それに彼女は、二つの家庭をゴタゴタに巻き込むわけにはいかなかった。
もし、羅桂香（江暁歌の会社の同僚）がいなかったら、江暁歌は、本当に、路頭に迷うところだった。

（四）

羅桂香は、職場の独身寮に小さな部屋を借りていて、もうすぐ結婚するので、そこで暮らすことになっていた。しかし、江暁歌の苦労がわかっていたので、羅桂香は不満も言わずに江暁歌を自分の独身寮の部屋に引っ越しさせた。
彼女は江暁歌を安心させてこう言ってくれた。彼女は人民解放軍の兵士と結婚するので、人民解放軍の部隊に行って式を挙げることになる。その後、一人で戻ってきて引き続き実家に住めば、食べたり飲んだりしてもお金を使う必要もない。彼女がこう話してくれるのを聞いて、江暁歌は彼女の厚意を受けた。江暁歌はこの時既に行き場を失い、身を寄せる所がなかったので、活路を見つけることができたことは運が良かった。
江暁歌は、この小さな独身寮に住み着いた。廊下は、彼女の厨房で、ここにガスコンロを置いて、娘のために牛乳を沸かしてご飯を作った。ガスコンロは青色のかすかな炎が揺れ、彼女に生きる喜びを感じさせた。こうして家庭のもめ事から逃れることが出来、娘と一緒に二人きりで暮らせることも、彼女に心地よい安堵感を持たせた。彼女が牛乳の入った鍋をコンロにかけると、牛乳は直ぐに沸いた。彼女は煮立った牛乳をほ乳瓶に入れて、それを冷たい水の中に入れて暫く冷やした。それから、娘の口にほ乳瓶を押し込んで飲ませた。そして、うどんを煮ながらお化粧をし、身支度をしてきばき部屋を片付けた。
彼女は、慌ただしかったが、楽しくもあり、なんと鼻歌が出た。
嘉児は、新しい環境に新鮮さを覚え、嬉しくてあちこち見回した。嘉児は、生まれつき愉快で朗らかな子どもだった。羅桂香は、苦境に立たされた江暁歌に、精神的に大きな安らぎをもたらした。

第十二章　呉文彗

（一）

寧岸は、ショルダーバックの中から一山の本を取り出して、江暁歌の小さなテーブルの上に置いた。
「君の本は、沢山売り払われてしまったそうじゃない

か。本当に惜しいことをしたな。僕がまた買ったからね。主な本は放送大学に入学して使用するものだよ。数冊の有名な文学作品は君のお気に入りのものだ。君に約束した本だよ。僕から君へのプレゼントだ。放送大学合格おめでとう」

「こんなに沢山の本を買って、どのくらいのお金がかかったのかしら」

「お金のことは言うなよ。いいだろう。これから先、もし僕が困難に直面したら、君が僕を助けてくれればそれでいいんだ」

「あなたは前途洋々よ。私の助けなんて要らないわ。でも、私はいつの日かあなたの力になりたいわ」

「道は険しいが、前途は希望に満ちているよ。君が困難を耐え忍び、耀根も何かやってくれるんじゃないかと信じているよ。僕達はグラスを挙げ、喜びを分かち合うその日が来ることを信じているよ」

「寧岸、有り難う。あなたのプレゼントしてくれた本と励ましに感謝するわ」

寧岸は手を後ろに組みながら、小さな部屋を眺めていた。小さな部屋は粗末であったけれど、江暁歌はぬくもりのある部屋にしつらえた。彼は嘉児の色鮮やかな小さな玩具に触れて感動して言った。

「君は本当に素晴らしいよ。もし耀根が君の一生懸命頑張っている姿を見たら、彼はどう思うだろうか」

「寧岸、趙家と江家が仲違いすることは良いことではないわ。絶対耀根に知らせないでね」

「わかったよ。でも所詮隠しきれないよ」

「隠せるだけ隠すわ。本当に隠せなくなったら、その時また考えるわ」

「わかった。隠そう。でも、どうしてこんなに事が大きくなったのに、真っ先に僕に知らせてくれなかったんだい」

「あなたは、既に知っていたんじゃないの」

「もし、暁暢が教えてくれなければ、きっと僕は蚊帳の外に置かれていたよ」

「家庭のゴタゴタや、もめ事は、はっきりさせることは出来ないわ。私だから対応できるのよ。私は友達に心配かけたくないわ。だって、あなたに随分と借りがあるんですもの」

寧岸は押し黙ってしまった。彼は年を取るにつれて、その見方が変わっていくことに気づいた。例えば友人である。昔は腹蔵なく何でも話し合えたし、自分のことのように相手のことを思った。いったいいつからこんな風に考えるようになってしまったのだろうか。今では、お互いに助け合っていても、訳もなく申し訳ないという思いが生まれ、疎外感を感じるようになった。よくよく考えてみれば悲しいことだ。

黙ったまま差し向かいに座っていたので、寧岸はとても重苦しく感じて、

「君に良い知らせがあるんだ。僕は既に紅光工場長に就任したよ」

と少し話題を変えた。江暁歌は、

「本当に工場長になったの？工場の雰囲気はどう？」

と彼のために喜んで言った。

「結構いいよ。民政局の上司が、僕を工場長として着任させてくれたんだ。ここの工場は、身体障害者の福利工場で、聾唖者が多数を占めているんだ。ここは局内の先進工場で、環境もとても良いよ。そうだ、この工場に呉文彗という女の子がいるんだ」

「女の子？」

「そうだよ。呉文彗、とても良い名前だ。彼女は、質素な子だけど、びっくりするほど綺麗で、映画にでも出演したら、きっと引っ張りだこだよ。でも、天の神様は一人に二物を与えなかったんだ。彼女を口のきけない子にさせてしまったんだ。でも仕事を通して、この少女がとても物静かで美しいことに気づいたよ。君の家の江暁暢は素晴らしい人だけど、おしゃべりが過ぎるよ」

「呉文彗はあなたの心を動かすことができそうね」

「彼女は僕をお気に入りのようなんだ。でも、僕が工場長なので、ご機嫌を取っているのかもしれない」

「違うわ。私は彼女に会ったことがないけれど、きっと違うわ。私の直感は間違いないわ」

「そうかなあ。そうかもしれないけど、僕は運が悪いんだ。僕が好きな人は、僕と夫婦になることができないのに、僕のことを好きな人は口がきけない人だ。僕はもう若くないんだ。恋愛をするのも疲れたし、上司も僕を呼びつけて、結婚するように何度もすすめたんだ。これ以上結婚しないと事業に影響があるってね。みんなの目には、僕は普通の人に見えないんだ」

「あなたも所帯を持たないとね。江暁暢は綺麗だけれど、あなたと縁がなかったわ。趙耀珍は善良でやさしくて賢いけど、縁がなかったわ。どうやら、美しくて賢い呉文彗とあなたは縁があったみたいね」

「君がそんな風に言うと、本当のように思えてきたよ。残念なのは、呉文彗は会話ができないことだ。でも僕は、彼女が会話ができないことが、別段問題があるとは思えないんだ。彼女の聴力は正常だし、目で会話をすることができる。ただ、他人はどんなふうに僕を見るだろうか」

「あなたが本当に呉文彗が好きなら、他人がどう思おうと関係ないじゃない」

「確かにそうだ。一人の人間が誰のために生きるかだ。自分の愛する人のためにさ。暁歌、いつ、君は呉文彗に会ってくれるんだい。どう感じるか見てほしいんだ」

江暁歌は頷いて、

「いいわ」

と言った。

「そうよ、知らず知らずのうちにね」
「耀根の身体には、確かにある種の英雄の気概が備わっているんだ」
寧岸はそう言い、さらに、
「僕は彼にはかなわないよ。本当に太刀打ちできないよ」
と感心してため息をついた。
(そうだったわ。江暁歌は思った。彼女が苦境に立ったときに、趙耀根はいつも彼女の側にいなかった。寧岸はいつだって側にいてくれる。でも何故かいつも趙耀根のことが気にかかる。これが愛というものかもしれない。)

(二)

趙家の母親は、
「耀珍、暁歌のところに行ってきてちょうだい」
と頼んだ。
「もうすぐ日が暮れるわ。何しに行くの」
「あなたの兄さんから、手紙が届いているか見に行ってくるんだよ」
「いちいち兄さんから手紙が届いているかって訊くなんて、どうかしているわ。何か知らせがあれば、兄嫁が知らせに来るはずだわ」
「暁歌が知らせに来るって？彼女はひどく私らを憎んでいるんだよ。今彼女は、工場の中に住んでいて、母娘は一つの部屋に住んでいるんだ。幼稚園もあるし食堂もあるし、とっても便利だ。どうやら、最初から段取りをつけて、出て行くつもりだったようだね。でも、私達が追い出したと言い張るだろうよ。その時になったら、耀根の目の前で泣きながら、窮状を訴えるに決まっているさ。私はここ二、三日瞼がぴくぴくしているんだけど、耀根が事故でも起こしているんじゃないかと心配しているんだ」
「安心して。兄さんは大丈夫よ。でも、兄嫁のところに行ってきても良いわよ。私は嘉児に会いたいから」
「私だって会いたいさ。嘉児が可愛い口を開くと、ほろりと来ちまうんだよ。良い案配に、嘉児は母さんに似ていないよ。でも、嘉児に会いたくなったらどうしよう。子供を奪ってくることもできないしね」
すると趙耀虎は、
「奪うまでさ。僕に任せてくれ」
と言った。趙耀珍は、
「あなたは口を挟まないで」
と言った。趙家の母親は、
「この改革開放の世の中で、もし人を奪い取ることができればね。私はただ孫娘がほしいだけなんだよ」
と貪欲な気持ち丸出しで言った。

(三)

江暁歌の日常品の中では、石炭が最も大切だった。石炭がなければ、炊事をすることも出来ない。しかし、石炭の供給は逼迫していた。たとえ石炭の配給切符を使って買いに行けたとしても、長い行列に並ばなければならない上、自分で家まで運んでこなければならなかった。これは、身体も弱く三輪車を運転できない江暁歌にとっては耐え難かった。そのことを寧岸はわかっていて、江暁歌のために石炭の発給切符を借りただけではなく、三輪車も借りて、江暁歌と一緒に石炭を買いに行った。
寧岸と江暁歌は仕事を終えた後、練炭工場に行き、長い間列に並んだ。機械が練炭を作り出し、それを一つ一つ人々に売っていくのを、為す術もなく見ていた。そして、空が暗くなる頃になって、やっと三輪車一台分の練炭を手に入れた。江暁歌は、こうなるのを心得ていて、嘉児を羅桂香に預けて、面倒を見てもらっていた。
寧岸が三輪車をこぐと、江暁歌が傍らで推したが、寧岸の運転が上手くなかったので、今にもひっくり返りそうだった。そのため石炭の固まりは地面に落ちて粉々に砕けた。寧岸は大急ぎで三輪車から降り、両手で砕け散った石炭を一掴み一掴みすくい、江暁歌が手を伸ばして手伝おうとすると、その手を遮った。
寧岸は、

「女がこんな事しちゃいけない。手が汚れてしまう。一生元の手に戻らないぞ」
と言った。江暁歌は、
「私も石炭を拾うわ。急いで、拾いましょう」
と手を伸ばしながら、かたくなに言った。
粉々になった石炭を拾うのは容易でなく、三輪車をこいで家に帰った二人は、全身汗びっしょりで、顔も両手も真っ黒になってしまった。
寧岸は、
「どうやら、僕のようなものが肉体労働するのはだめだ」
と嘲り笑った。江暁歌は、
「そうよ。私達は労農兵達から多くを学ぶべきよ。でも、あなたのお陰で、無事石炭を家まで運べたわ。私一人だったらもっと惨めよ」
と言った。寧岸は、
「生活するってこういうことなんだ」
と言った。
彼は、幾つか石炭を積み重ねて、上の階に運んだ。
「さあ、休まず石炭を運ぼう」
寧岸は、一生懸命石炭を運んだ。沢山の汗が目に流れ込んでも、それを構っていられなかった。
江暁歌は自分のハンカチを取り出し、手を伸ばして寧岸のメガネを外し、彼のために目と額の上の汗をぬぐった。
寧岸は、
「今日、呉文彗も来たかったんだ。でも、彼女を来させなかったよ。それに僕は本当に役立たずだし、力仕事は全くだめだ」
と言って笑った。江暁歌は、
「近いうちに連れてくればいいわ。私は彼女と話がしたいわ」
と言った。寧岸は、
「僕は君のことを彼女に話をしたよ。彼女はとても同情していたよ。どうしても君と嘉児に会わせたいんだ」
と言った。江暁歌は、
「私と寧岸が、心を込めて歓待したいと彼女に伝えてね」
と言った。
その時趙耀珍（趙耀根の妹）は、大橋服飾工場の独身寮の庭の、大きな木の木陰に立っていた。彼女は、寧岸と江暁歌がとても親密な様子を目の当たりにしてしまった。彼女は唇を噛みしめて、何ともいえない切なさと重苦しさが交錯し、心は煮えたぎり、沸き立つようであった。彼女は突き進んでいって問い詰めたかったし、彼らに唾を吐きかけて恥辱を受けさせたかったが、思いとどまった。というのも、彼女の母親が江暁歌親子を追い出したのだし、その親子を寧岸が助けないわけがなかったからだ。
寧岸を思い続けていた純朴な紡績工場の娘、趙耀珍は、悲しみに暮れてそっとその場を離れた。

（四）

趙耀根は、家に宛てて手紙を書かなかったが、江暁鴎（江暁歌の弟）はこっそり書いていた。江暁鴎は遂に我慢できなくなり、家に助けを求めてきた。
母親の沈鳳宜は知らぬ間に、江暁鴎から来た手紙を読み出した。
「『お母さん、僕たち失敗してしまったんだ。びた一文なく、スッカラカンで、最近は、一日三食を一食に減らし、数日したら、街へ出て乞食をしなければならないよ・・』ほらご覧よ」
沈鳳宜は、息子からの手紙を持った手を震わせながら、江暁暢へ向かって、
「お前の弟はこんなに落ちぶれて、惨めになってしまったわ。私の話を聞かないばっかりに、ほらこんな結果になったじゃないか。幸いにも、お前は行かなくてよかったよ。趙耀根は町のチンピラだったから、彼についていったらどんな結果になったと思う？お前達は、暁鴎が聡明だと褒めていたじゃないの。なのに、彼はどうしてこんなに落ちぶれてしまったのかしら。暁鴎はお前達の実の弟よ。お前は、暁鴎を助けなければならないわ。今大急ぎで、彼を救い出す方法を考えなければいけないわ」
と言った。江暁暢は、
「私は何も彼を助けないって言ってるんじゃないわ。でもちょっとだけ嘲笑っちゃいけないかしらね」
と言った。沈鳳宜は、
「お前は、彼のために送金するか電報を打つかして、とにかく帰ってくるように言ったら」
と言った。江暁暢は、
「彼は趙耀根と生活を共にしているので、乞食をしていて帰ってくることができないのよ。送金すれば、彼らはきっと山分けするでしょうね。そうなったら、私達のお金は焼け石に水だわ」
と言った。
「電報を打って私が危篤だって言うのよ」
「狼が来たなんて言うペテンをしちゃいけないわ。万が一お母さんが危篤になったら、彼は帰ってこないわよ。それに彼が私達の電報を信じるってお母さんは思っているの？彼はお金が必要なのよ。そうだ、そうだわ。私達は暁鴎にお金を送りましょう。趙耀根には、趙家からお金を送らせましょう。そうすれば山分けしても、私達は損をすることもないわ。そうしましょう。私は趙家に交渉に行ってくるわ」
「それじゃ、急いで行きなさい。どんなことがあって

も、暁鴎を飢え死にさせてはいけないわ」
「これは、お母さん達が暁鴎をこれまで甘やかしてきた結果じゃない」
江暁暢は趙家にやってきた。しかし彼女はドアにもたれかかって、横柄な態度で両手を組んだまま、決して中に入っていこうとしなかった。
趙耀珍（趙耀根の妹）は、
「ごめんなさい。ここにはあなたのお姉さんはいないわ。探すところを間違えたようね」
と言った。江暁暢は、
「私は江暁歌を捜していないわ。私は趙耀根のことで来たのよ。勿論、あなた達は彼の状況を知っていると思うけど、それじゃ、私は帰るわ。でも、・・・・」
と言った。すると趙耀根の母親は、
「暁暢、暁暢、早く入って座って頂戴。趙耀珍はあなたより年下で、ひどく物わかりが悪いのよ。早く、耀根に何があったのか私に知らせておくれ」
と直ぐに満面に作り笑いを浮かべて言った。
江暁暢は動ぜずに、玄関をくぐって座った。
「耀珍、私にお茶を一杯入れてくれない」
母親は趙耀珍をじろりと見た。趙耀珍は、仕方なくふくれっ面をしてお茶を入れた。
母親は、
「耀根がいったいどうしたんだい？」
と江暁暢に急いで訊いた。
「あんた達は本当に知らないの？」
「何を知ってるって言うんだい。耀根から、先月手紙が来て、何もかもうまくいっていると言ってたよ」
「それじゃ、あなた達に本当のことを言うわ。彼は何もかもうまくいっていないわ。それにとっても悪い情況よ」
母親は既に震えていた。
「暁暢、いったいどうしたっていうんだい？」
趙耀虎は、
「暁暢、はっきり言わなきゃだめじゃないか。暁暢、お前の仕草は、まるで映画の中の女スパイだ」
と言った。
母親は趙耀虎を叩いた。
江暁暢は、江暁鴎から来た手紙を趙耀虎の目の前に差し出すと、
「読みなさいよ」
と言った。
趙家の母親は、江暁鴎から来た手紙を聞き終えた。そして、江家では江暁鴎に送金し、趙家でも趙耀根に送金するように江暁暢が言っているのを聞いて慌てだし、顔色が変わりドギマギした。
母親は、趙耀虎に自転車に乗せてもらい、息もつかず

に、江暁歌の宿舎へ駆けつけた。
母親は宿舎へ着くと、直ぐに部屋にドカッと腰を下ろして、嘉児のことも尋ねる暇もなく江暁歌へ話し始めた。
「お前は、お前の母さんが暁鴎の手紙を受け取ったのを知っているかい？耀根達が飢え死にしそうだと言ってきたよ」
「本当ですか。どうしよう、お母さん、どうしてこの手紙のことを知ったのですか」
「江暁暢が私達に手紙を見せに来たんだよ。暁暢の考えは、私達に耀根にお金を送金しろってことだけど。でも、耀虎は結婚したばかりだし、お金はすっかり使い果たしてしまったし、何処からお金を出せっていうのかね」
江暁歌は直ぐに、姑のもくろみがわかった。彼女は直ぐに答えた。
「わかったわ。心配しないで。お金は私が送ります」
姑（趙耀根の母親）は、
「私は本当に苦しいんだよ。でなけりゃ、私は絶対に耀根のことを放っておくことはできないさ」
と言った。江暁歌は、
「わかっています。大丈夫です。耀根は私の夫です。私が彼の面倒を見るのは当然です」
と答えた。
趙家の母親は、これでやっと安心して嘉児を抱き上げた。

（五）

本当は、江暁歌の財布には少しのお金も残っていなかった。江暁歌は随分とためらっていたが、寧岸を訪ねていくことを決心した。紅光工場長の執務室を訪ねると、丁度、寧岸と呉文彗が一緒にいた。呉文彗は予想に違わず、並外れて清新優美な女性で、江暁歌の目は輝いた。でも江暁歌は、呉文彗と話をする余裕がなかった。彼女は、そそくさと呉文彗に軽く会釈した。
寧岸は、ハアハア息を切らせている江暁歌を見て、彼女の状況が良くないことがわかった。
「事故でもあったのか？」
江暁歌は、母親のところから受け取った江暁鴎の手紙を、直ぐに寧岸に渡した。
寧岸は急いで手紙を読み終えると、
「暁歌、君は焦ってはダメだ。僕はここで耀根達の後方支援をするよ。彼はどのくらいお金が必要だと言ってきたんだ」
と自信ありげに言った。
「深圳っていうところは、お金がなくちゃどうしようもないところだわ。私達は彼らのために、何百何千元ものお金を工面しなければいけないわ」

「わかった。千元送金しよう。僕に考えがある。君は帰って、先ず嘉児の面倒をしっかり見るんだ。僕は明日の午前中に君を訪ねる。君と一緒に彼らのためにお金を送ろう」

江暁歌は帰らざるをえなかった。呉文彗は、彼女が帰って行くのを目で見送ると、振り返って寧岸に手振り身振りで知らせた。

寧岸は、あらまし手話は理解できていた。

「君は、僕が友人のために大きな犠牲を払うことを賛成してくれると言ったよね」

呉文彗は、続けざまに頷き、あか抜けた顔は、恥ずかしさのあまり紅くなった。

実は、寧岸にも千元の金はなかった。八十年代の一千元は、庶民にとって巨額であった。寧岸は自分の事務所の引き出しを開けて、鞄を探し、ありったけのお金を机の上に積み上げたが、どうみても百元にもならなかった。それに積み立て預金の通帳には、三百元あるだけである。彼はすぐさま、数本の電話をかけて人を訪ねたが、遠回しに断られ、一銭のお金も借りられなかった。彼はもともと、このような大金を工面することが容易でないことはわかっていたが、こんなに大変だとは思いもよらず、手の打ちようがなかった。彼はドッと椅子に座ると、心配して眉を顰めた。

呉文彗が入ってきた。寧岸は大急ぎで机の紙幣を新聞で覆い隠した。呉文彗は、肉そばと饅頭を運んできた。寧岸は、これで初めて晩ご飯を食べていなかったことを思い出し、

「文彗、ありがとう」

と思わずやさしく言葉をかけた。

呉文彗は、寧岸の机の上にある紙幣に気がついていた。しかし、彼女は知らないふりをして、寧岸に温かいうちにご飯を食べるよう促した。

寧岸が大きな口を開けて食べ始めるのを待って、彼女はやっと、身振り手振りで話し始め、

(お金は彼女が何とか工面する)

と言った。

彼女が身振り手振りで話すのを見ていて、寧岸は頭を横に振って笑った。彼女が何か名案があるとは、信じられなかった。しかし、呉文彗は、彼にお金を持っていると言った。

彼女の通帳には五百元あった。彼女は更に、両親から二百元借りることができたが、そのお金は将来婚礼に使う嫁入り道具のお金であった。しめて七百元あった。寧岸が三百元出せば丁度千元になり、問題は解決できた。

しかし、寧岸は大きく頭を横に振った。

「文彗、僕は心から君の心遣いに感謝するよ。でもやはり、君のお金を借りることは出来ないんだ。今回の状況は君もわかっていると思う。耀根達は遠く深圳にいる。それに苦難に満ちた事業を行っている。このお金を貸して、いつ返ってくるのか見当もつかない。永久に返ってこないかもしれない。僕は君に、こんなに大きな犠牲を払わせることはできない」

呉文彗は、

「それじゃ、なぜこのようにして彼らを助けなければならないの」

と手振り身振りで訊ねた。

「なぜなら、僕と耀根は小さい頃からの掛け替えのない親友なんだ。彼は僕を随分と助けてくれた。僕達が知識青年だった頃、ある時、僕は農薬の中毒になってもう少しで死ぬところだったんだ。その時耀根が僕を背負って、一気に千里の道を駆けてくれたお陰で、今日こうして命があるんだ。こんな友達だから、彼のためにお金を返すだの、返さないだの、という問題じゃないんだ。それに、江暁歌は、趙耀根の妻である上に、僕の親友なんだ。彼女はとっても聡明で善良で、志は趙耀根より高いのに、彼女の境遇はとっても不幸なんだ。だから、僕はどんなことをしても、全力を尽くして彼らを助けなければならないんだ」

それを聞いて呉文彗はとても感動し、

「あなたはとても崇高な人柄だわ」

と言った。

「僕がこうするのは当然なんだ。崇高なんてとんでもない」

呉文彗は、続けて身振り手振りで、

「友達になるのはどの位付き合っているかじゃないわ。縁があれば友達になれる」

と言った。

彼女も江暁歌と趙耀根が好きで、更に寧岸を敬服していると言ってくれた。

寧岸は窓を開けて月を眺めながら、心が激しく波を打った。呉文彗の美徳は彼の心を深く揺さぶった。彼は突然身体の向きを変えて、呉文彗の手を握りしめ自分の懐に抱き寄せた。

呉文彗は、びっくりした小さな動物のように彼を見ていたが、顔に笑みが溢れていた。

(十八)

寧岸と江暁歌は、約束通り郵便局の入口で待ち合わせた。寧岸は、江暁歌にひと束の紙幣を渡した。

「ここにきっかり一千元ある。早く耀根に送金してやってくれ」

呉文彗は、手でそっと、寧岸の服の裾を引っ張った。

「暁歌、呉文彗が、耀根達に心配かけないように、君に絶対にお金の出処を話しちゃいけないと言っている」

江暁歌は感激して、呉文彗をじっと見つめた。そして

彼女の微笑みが、このように人を感動させるのだと思った。江暁歌は、

「文彗、あなたとこうしてご縁をいただいてとても幸せです。私は、あなたの私心のない気持ちに敬服しています。私はあなたの言うように、どのようにしてお金を工面したのか、耀根達に言わないようにします。けれども、私はいつまでも、あなたと寧岸が全てを投げ打って助けてくれたことを忘れません。私はあなた方に報いなければなりません。神様に、あなた方のためにそのような日が来ることを願っています」

と呉文彗の手を握りしめて言った。

しかし呉文彗は、思いっきり頭を真横に振った。

寧岸は、

「暁歌、君は、そんなにかしこまることはないよ。僕たちは当たり前のことをしたまでだ。ほら、文彗も恥ずかしがっているじゃないか」

と言った。江暁歌は、

「文彗、あなたは知らないでしょうけど、私達夫婦は寧岸に沢山の借りがあるわ」

と言った。呉文彗が、

「私達親友なんですもの。そんなこと言いっこなしよ」

と身振り手振りで言った。

江暁歌は、嘉児を一時実家に預けていたので、趙耀根と江暁鴎に送金した後で、嘉児を連れに行った。

沈鳳宜は、

「私がお前にあげた百元を暁鴎達に送金させるようにしていたけれど、どうして持って行くのを忘れたの」

と江暁歌に訊ねた。江暁歌は

「忘れていないわ。このお金は、家に置いて使ってください。私は既に送金したわ。暁鴎はほどなく食べ物にありつけるわ」

と言った。江暁暢が、

「どのくらい、送金したの」

と訊ねた。

「一千元よ」

「一千元！そんなに沢山のお金を借りることができたの？私は姉さんの友達を何人も知っているけど、どうせ貧乏な職工の羅桂香かなんかじゃない？そうだわ、寧岸がいたわ。彼だったら、一切を顧みないで、姉さんを助けるわね」

「わかったわ。このことは、あなたとは関係がないわ。根掘り葉掘り訊かないで頂戴」

「誰が私と関係ないですって。寧岸が嫌いと言わない限り、彼はやっぱり私のボーイフレンドよ」

「暁暢、あなたはなぜ彼にしつこくつきまといたがるの。寧岸と私達との関係は、一日、二日の付き合いじゃないのよ。これからだって付き合っていくのよ。あなたはもっと広い心を持たなければいけないわ」

「私に広い心を待てって言うの？。何よ、姉さんは嘉児がいるじゃない。その上なぜ、私のボーイフレンドを奪い去らなきゃならないのよ。姉さんは、なぜ多くの男達に愛してもらいたいの。姉さんは、今まで寧岸と結婚もしないで、惑わせたじゃないの。姉さんは寧岸を傷つけたじゃないの。恥ずべき事よ」

「暁暢、黙りなさい。あなたは、寧岸があなたのことを本当に怖がっているのがわからないの？このことと、私と何の関係があるって言うの。寧岸にはもう既にガールフレンドがいるのよ。結婚の準備をしているのよ。あなたに言っておくわ。彼のガールフレンドはとっても綺麗で可愛いわ」

江暁暢はあっけにとられて、突然大声で泣き叫んだ。

「とっても綺麗だって、嘘よ。この嘘つき」

(七)

紅光工場の工場長の事務所で、今まで自分の口から女の子を拒絶したことがなかった寧岸が、江暁暢に、「拒絶」の二文字を言い出した。これは寧岸が、彼女から離れていくことを示していた。

寧岸は済まない気持ちはあったが江暁暢の態度は横柄だった。

しかし、江暁暢は、

「あなたがどんなに口先だけのうまい話を並べたか、私もあなたのガールフレンドを見てみたいわ」

と諦めきれずに言った。寧岸は、

「飲んだら」

と言ってお茶をすすめた。

江暁暢は突然、茶碗をフロアーに払い落とした。

「今日は、彼女に会うまで帰らないわ」

寧岸は、

「わかったよ。それなら僕が出て行くさ」

と言わざるをえなかった。

呉文彗が、急に事務所の入口に現れた。彼女は静かにそこに立って江暁暢と向かい合った。江暁暢は呉文彗を見て、彼女の人を驚嘆させるような美しさに嫉妬の炎を燃え上がらせた。

寧岸は、慌てて彼女を守ろうとしたが、呉文彗は、逆ににっこり微笑んだ。

(つづく)

透明な時間（九）

宅見勝弘

【前号までのあらすじ】

草食系銀行といわれた東城銀行と肉食系銀行といわれた西都銀行が合併して、東西銀行が生まれた。

もと東城の赤坂支店で西都出身の熊本支店長が殺された。現場は金庫室で、三つの扉に五つの鍵がかけられた密室であった。（金庫室の格子扉がシリンダー錠で、耐火扉がダイアル錠とシリンダー錠で、支店の通用口が数字錠とシリンダー錠で鍵がかけられていた。三つの鍵は死体の手に握られていた）融資係の竹森が支店長の死体と一緒に金庫室に閉じ込められていた。

死体のポケットには持井建設の融資の資金の流れのメモが入っていた。竹森の指紋がのこっていたが、竹森はおぼえていなかった。

その後、持井建設の破産管財人に竹森がたしかめると、支店長が一千万円を不正融資していたような資金の流れがみつかった。

八

月曜日の朝、竹森は鍵当番なので、いつもより早く八時ちょうどに出勤した。けがも治っていないので、本当は鍵当番をだれかと替わって欲しかった。

そのような融通がまったくできないのが、東西銀行である。ひとつでも例外を認めると、不正が発生するという考えであった。

鍵当番は金曜日の夜から次の金曜日の朝までの一週間の交代になっている。係長以上と役付きでない男性行員との二名が担当するルールである。

まだ係長になる年でない竹森は、取引先課の穴吹係長と組になっていた。本来であれば、係長以上が鍵の開け閉めをする決まりになっている。もう一人は不測の場合にそなえて鍵を持っているだけである。

役のある者が出勤できなくなったとき、他の役つきの人が来るのを待って開けてもらうのが原則である。役のない行員がみずから鍵をつかうことはない。

穴吹係長はいつでも鍵当番を果たしたふりをしていて、組になった行員に全てをさせている。鍵の開け閉めという、くだらない雑用はスピード出世している自分がする仕事でないという態度である。

営業成績など自分の出世に関係する仕事だけしかしないというポリシーを穴吹係長は持っている。それは東西銀行の行員に多い性格である。

しかし、かれの営業成績は全国の中で最下位である。むしろ取引先とトラブルが多いので、存在しないほうがましである。

それでも東西銀行でもっとも早く係長に昇格しているから、赤坂支店の七不思議とされていた。穴吹の父親が東西グループの証券会社の社長のため、係長に昇格させざるをえなかったことが後でわかった。

証券会社の名前には東西が入っていない。東西グループの子会社の名前は必ずしも東西とついていなかった。

むしろ西東〇〇という社名が多かったのである。合併時に、東が西より上なのはけしからんという西都ＯＢのクレーマーが多かったためである。

それだけでなく、子会社の規模が極端にちがうと、もっと変な名前になっている。

カード会社の名前は東城西カードである。東城のカード会社の方が独自のカードを発行しており、規模が大きかったために、そのような会社名になった。

西都銀行の子会社の方が強い会社は、西上東下不動産などのような変な名前になっている。

証券会社の場合は、特にいびつである。

西都銀行は子会社に近畿証券と大阪証券を合併させて、近畿大阪西都証券をつくっていた。

おなじように東城銀行は子会社に京輪証券と埼玉証券を合併させて、東城京輪埼玉証券をもっていた。

銀行合併にあわせ、証券会社も合併した。財務省の横やりで他のつぶれそうな証券会社をドサクサまぎれで合併することになった。

いろんな証券会社を合併して、『近畿大阪西都あけぼのファイナンシャルＵＦＯ・ＵＳＪプレジデントじゅげむじゅげむ東城京輪埼玉証券』ができた。

ながい社名なので、初めと終わりの文字だけを残して、『近玉証券』と名をかえた。

経営力はないが発言力だけある社長が、東西の名前をつけることに反対した。元社長だけの会議で苦しまぎれのネーミングをして、変な語感の名前になってしまった。

この証券会社のために東西銀行グループもキンタマグループと呼ばれている。

その近玉証券の社長の息子が穴吹係長である。かれは

名前にはKの字は入らないのにK係長と呼ばれている。
キンタマ係長と竹森は思っていたが、そうでなく寄生虫のKらしい。父親の影響力がなくなれば、銀行から駆除されることになるという話である。
ぐうたらな穴吹係長が月曜日の朝に来ているはずもなく、竹森は一人で通用口の鍵を開けることにした。
事件があってから、通用口も金庫室も、三つのシリンダー錠・ダイアル錠・数字錠をすべて取り替えている。まったく同じ型式の錠で替えているので、見た目では気づかないほどである。
通用口に着くと、四けたの暗証番号を押し、数字錠を開けた。左手で鍵を挿しこみ、時計まわりに回そうとしたが、少しも動かない。
「回らないな。金曜に閉め忘れたかな」
竹森はふたたび強くひねったが、無理であった。金曜日に支店を出る際、シリンダー錠を掛け忘れたと考えた。
穴吹係長が珍しく遅くまでいて、鍵を閉めていた。係長は普段から鍵を閉めることをしないので、掛け方を知らなかったと竹森は思った。
シリンダー錠を掛け忘れた場合でも暗証番号を知らなければ、第三者が入ることはできない。かりに暗証番号を知っていても、警備会社のセキュリティ装置のセットをしている。
店内で動くものがあればセキュリティ機能が働き、警備会社にアラームが鳴る。換気扇の隙間風で一枚の紙が舞っただけで、警備会社に通報が行ったことある。
シリンダー錠を掛け忘れていても、第三者が進入することができない。
事件のときも熊本支店長が出勤してから、殺されるまでの時間が短い。事前に犯人が先に進入して待ち伏せしたことを警察でも疑ったようである。
犯行日のセキュリティ装置の記録では、そのような形跡は見つからなかった。事前に待ち伏せなどというのは、不可能である。
支店そのものが完全な密室の中で殺人事件が起きたことをあらためて実感した。支店の密室の中には竹森以外に犯行時に誰もいないことになる。
支店の密室の中に金庫室の密室があり、殺された支店長と自分だけがいたのである。
しかし、金庫室は外から鍵をかけることが竹森自身にはできないということになるので、金庫室の密室のおかげで犯人でないことを証明していることになる。
竹森はシリンダー錠をそのままにして、ドアを開けようとした。またドアが動かなかったが、こんどは数字錠が開いている十秒が過ぎていたためと思った。
再び暗証番号を押してノブを回したが、今度も開こうとしなかった。
とまどっている竹森の背後から奥田係長の声がした。

「Kがさぼると思って、早く来たよ」
奥田係長も穴吹係長と同期の取引先係である。
「本当はヒラの僕が開けるのは、駄目なのですが。K係長が来ないので、開けようとしたところです」
竹森は奥田がきたので、安心した。
「どうせ奴は自分が開けたことするだろ。トラブルがあったら君に責任をなすりつけるつもりなんだ。今週は僕が鍵をかりて開けるよ」
奥田係長は営業成績もよいだけでなく、気配りができる。奥田の父親は住宅部品メーカーを経営していている。
もと東城には取引先の社長の息子が多いが、ごくまれに奥田のような仕事のできる人も居る。
「鍵が動かなくて」
竹森は奥田に鍵を差し出した。
「この鍵はふつうと逆方向に回すんだよ」
奥田は鍵を挿しこむと、反時計まわりに回し、ドアを開けた。竹森は鍵穴の位置を確かめた。
通用口のシリンダー錠は、時計で三時か九時のところで、鍵を挿し抜きする。
鍵を回すのは、上半分の一八〇度である。鍵穴は外からみてドアの右側で、蝶番（ちょうつがい）が左側に着いている。
開けた後の鍵穴の位置が九時になっていた。開ける前は鍵穴の先が三時を指していた。
三時のところにあるのに、時計まわりに回そうとしても動かないのは当然であった。自分の勘違いであり、シリンダー錠の鍵は間違いなく掛かっていたのであった。
一般的に、シリンダー錠は時計まわりに回して開ける構造になっている。
鍵が壊れた場合、閉めた状態よりも開いた状態の方で壊れた方がよい。
右利きが多いので、時計まわりの方で力が入る。右利きだと時計まわりで百八十度まで回せるが、反対だと九十度しか回せない。
もっとも竹森は左利きなので、反対である。
「時計と反対で開く鍵もあるのですね」
竹森は尋ねながら、奥田の後に入った。内側からノブを引いてドアを閉めた。
「少ないけどね。例えば、自動車のドアも運転席側の方は時計と逆方向で開くよ。助手席ドアは時計まわりだけど」
奥田は答えながら、セキュリティのセットを解除していた。ドアを開けて十秒以内にセキュリティを解除すれば、警備会社へ通報はいかない。
「鍵・つまみ・かんぬきが中で組み合わさっていることを考えたら、この方向に回すのがシンプルな仕組みなんだろうね」
奥田の説明を聞いて、竹森はサムターン（つまみ）の位置を確認した。サムターンはちょうど鍵穴と裏表の関

係で連動しており、先端が三時の方向を指していた。
鍵穴とサムターンとデッドボルト（閂＝かんぬき）が連動している。そのため、表の鍵を開けるときに一般の鍵と異なり、反時計まわりになっているようであった。
奥田はドアを少し開けた状態で、鍵を外から挿した。そのままサムターンを二往復ひねってみせた。サムターンに合わせて、デッドボルトと鍵が一つの玩具のように動いている。
「親父の会社でも同じタイプの鍵を作っているよ。ドアが右ひらきか左ひらきで鍵の回転方向が違うんだ。これと同じ鍵でも外からみて左についていれば、時計まわりで開けるよ」
奥田は鍵を抜いて、竹森に返した。
サムターンを見ながら、鍵の構造が密室工作に何らかの関係があるかもしれないと竹森は考えた。
数字錠は出るときに関係ないので、シリンダー錠だけ工作すれば、支店の密室はできあがる。
サムターン回しという泥棒の手口がある。サムターン回しとは、外から扉か壁をやぶって、隙間から道具を挿しこんで、つまみを回すことである。
事件の後で警察も調べたが、工作した跡は残っていなかった。雅子たち三人が同時に入っており、何か細工していれば気付きそうである。
そこまで考えて、竹森はひらめいたことがあった。
（サムターンが駄目でも、この鍵は営業室のハンドルで遠隔操作ができる）
竹森は営業室へ行って、ハンドルの状態を確認した。
ハンドルとは、電気のブレーカーのような形状のものである。通用口の外を映すモニターの下に着いている。
遠隔操作で鍵の開け閉めを行うしくみになっている。上むきで鍵を開け、下むきで鍵を閉める。
シリンダー錠の鍵とサムターンとハンドルの三つの操作が連動している。
本来は行員がモニターで来店者を確認して、ハンドルを上むきに上げて鍵が開ける。しかし、ふだんはハンドルを直接に上げ下げすることはしていない。
基本的にシリンダー錠の操作に従って、勝手に動いているだけである。最初の人が出勤してから、最後に帰るまでハンドルを上げたままの状態にしている。
ハンドルの横にはボタンがあるが、これは数字錠の遠隔操作のためのものである。ボタンを押すと、十秒間だけ数字錠が開いた状態になる。
ボタンを押して数字錠を開けることも、あまり多くはない。赤坂支店の銀行員であれば、暗証番号を知っているので、自由に外から入ることができる。
銀行員でない第三者であれば、支店の中を勝手に入らせる訳にいかない。モニターで対応した銀行員が通用口まで行ってドアを開けるので、ボタンを使わない。

例外は、現金輸送のときである。現金輸送車が来る前に電話があり、庶務行員が支店の外で待つ。
輸送車が着くと、現金を営業室に運ぶのに警備員を支店内に導く。
その時は暗証番号を押さずにインターホンで呼んで、中から開けてもらうのである。警備員に暗証番号を見られるのを防ぐためである。
他にも銀行員以外の人がいる場合は、のぞき見防止のため、銀行員みずから暗証番号を押さないようにして、中から開けてもらうようにしている。
竹森はハンドルが気になっていたので、いくどかモニターの前に行った。昼すぎにモニターの前に来たとき、インターホンから呼び出し声が聞こえた。
「現金輸送ですので、開けて下さい」
モニターに庶務行員の顔が見えた。竹森は数字錠を開けるボタンを押した。
「いま開けました」
竹森は答えたが、再びインターホンから声が聞こえた。
「閉まったままですよ。もう一度お願いします」
竹森は注意して見ると、ハンドルが下を向いており、シリンダー錠が掛かった状態になっていた。ハンドルを気にして見に来たのに、竹森は気づかなかった。
本来であれば、営業時間中はシリンダー錠が常に開いている。数字錠だけで閉めているはずである。
シリンダー錠まで閉めていると、支店の行員が外から戻るたびに中から遠隔操作で開けてもらわないといけない。わずらわしさを避けるため、営業中はシリンダー錠を開けて、数字錠だけ閉めるのである。
誰かがハンドルを誤って下ろしたようであった。新しくパートの行員が入った時など、たまに間違えることがある。
営業時間中はハンドルを動かすことないので、ずっと上げている状態と竹森自身も思い込んでいた。先入観で気づかなかったのだろうと自分を納得させた。
竹森はハンドルを上げてシリンダー錠を開け、ふたたび数字錠のボタンを押した。
「失礼しました。今度は大丈夫です」
モニター画面には、警備員たちが通用口を入る様子が映っていた。
（犯人は鍵やサムターンを使わなかったかもしれない）
ハンドルはシリンダー錠の状態やサムターンの動きと連動している。
外からシリンダー錠の鍵で回さなくても、サムターンをひねらなくてもよい。ハンドルさえ上下させれば、サムターンも自動的に動き、シリンダー錠の鍵がかかるのである。
（犯人はハンドルを利用して密室を作ったのでないか）
密室の謎ときに少し近づいていると竹森は感じた。

還暦からの考古学（二十四）

桜井茶臼山・壱与・磐余王朝（その5）

中山喬央

まえおき

まんじ120号～124号まで五回にわたり「ノンキャリで首が長持ちする方法」を掲載いたしましたが、これからは博多湾沿岸地域で発生した鏡の大量埋葬が畿内に移った背景を考察し、そこから浮かび上がる様々な考え方に基づき、副題である桜井茶臼山・壱与・磐余王朝の成立に迫ります。

あらまし

119号では二世紀末～三世紀半ばにかけての西日本と朝鮮半島・中国大陸との関係について考えましたが、今回は鏡の一括大量埋葬が畿内に移った理由、埋葬の意義の移り変わり、大和天神山古墳と近隣に所在する黒塚古墳との前後関係等を、大和天神山古墳埋納鏡二三面、須玖岡本遺跡出土鏡、及び椿井大塚山古墳出土鏡の鉛同位体比分析等から、原材料供給鉱山を判定することにより再検討してみます。

更にこの結果を基にして該期の日本列島と朝鮮半島・中国大陸との関係を思料します。

掲載は三回程度に分けて行なう予定です。

大和天神山古墳

この古墳は奈良県天理市柳本町1893番地、崇神天皇山辺道匂岡上陵（行燈山古墳）の西方、伊射奈岐神社境内東辺に位置する全長113mの前方後円墳で、墳丘の西半分は戦時中、海軍予科練基地の一環として、格納施設設営のため削り取られておりましたが、東側が残存し、全体の構成を想定できたものであります。

古墳の特色は、埋葬人骨の痕跡がなく、竪穴式石室内に落ちこんだ石を抜き取ってみると下方にむいていた部分に真紅の朱と緑青のついた粘土部分が腐着しているものがあらわれ、陥入していた石室内の石を除去したところ、見事な朱があらわれ、その下に鏡鑑が表面を上にして棺側の上面に、八面ずつ左右に、二面ずつ南北に、更に木口外南に一面、北に二面合計二三面併置されていた事です。

更に棺外北部よりは鉄剣・鉄鏃、棺外南部から鉄刀が検出されております。そして当初伊射奈岐神社境内古墳の名前で呼ばれておりましたが、この神社が他より移建されたものであった為、古く呼ばれたことがある、天神山の名をとって、天神山古墳と呼ぶようになりました。

古墳は木櫃内に朱・鏡・剣を埋葬し、木櫃外遺物をあわせても、装身具類・石製品の出土が全くみられない特殊な組合せと配置をもった、研究価値の極めて高い古墳でありました。

ここで古墳全体の年代考察につき紹介します。

大和盆地はいうまでもなく、日本列島における大型前方後円墳発生の地で、それが纒向古墳群の箸墓古墳で始まることは、人口に膾炙されております。

『前方後円墳集成』「近畿編」1990年の111頁表1大和の古墳編年表によりますと、箸墓古墳に続くのが大和古墳群の西殿塚古墳、柳本古墳群で多数の三角縁神獣鏡が出土した黒塚古墳と、桜井南部に立地する桜井茶臼山古墳で、箸墓が1期であるのに対し、これらを2期としております。続く3期には柳本古墳群の行燈山古墳（崇神天皇陵）、渋谷向山古墳（景行天皇陵）と桜井南部のメスリ山古墳及び、盆地北部の佐紀古墳群で五社神（神功皇后陵）・宝来山（垂仁天皇陵）・佐紀陵山（日葉酢媛陵）、盆地東部で東大寺山古墳、盆地西部・馬見古墳群で新山・佐味田宝塚のような特色を持つ古墳が輩出しております。

ここでこれら古墳の時代区分はどのように行なわれているのか検討してみます。

①盛土の外形

前方後円墳と円墳および方墳に大別できます。更に前方後円墳には前方後方墳と双方中円墳という特殊なものがあります。又前方後円墳と円墳の中間形式として帆立貝式古墳があり、実例は少ないのですが円墳と方墳とを組み合わせた上円下方墳もあります。

このうち前方後円墳と円墳は古墳時代前期の初めから後期までありますが、双方中円墳は前期末のみ、前方後方墳と帆立貝式古墳は中期に多く、方墳は前期末ないし中期にあらわれ、後期には特殊な発達を遂げるようになります。

②埋葬の方法

土中に坑を掘る場合と、地表に棺を置いて土で覆う場合があります。何れの場合も、棺を置いてから種々の施

設でこれを覆う方法と、先に施設を作っておいて、その中に棺を入れる方法があります。これらは材料によって木槨、塼槨、石室などと呼びます。また構造によって竪穴と横穴に分かれます。日本列島では竪穴式の場合は棺を置いてから施設を作る場合が多く、横穴式の場合は石室を作ってから棺を入れるのですが、大体この二つに分かれます。尚竪穴式は当初から用いられる方法で横穴式は中期以降の方式です。

前期は割竹形木棺を粘土床に載せ、竪穴式石室で覆う方法が主流で、後に竪穴式石室を省略して棺を粘土で巻く方法や、木棺を割竹形石棺や舟形石棺に変える方法が出現します。これが中期の初め頃で、中期の代表的石棺である組合式長持形石棺に移ります。これと並行して家形石棺とか、組合式木棺も一部に使用されました。北九州の一部では中期には横穴式石室の使用が始まりますが、後期に入りますと畿内でも使用されるようになり、やがて主流となります。この横穴式石室の場合、棺としては櫃形木棺の他、家形石棺を使用するのが特徴ですが、石室が先に作られているので、棺を用いないで遺骸を直接安置したり、追葬する事も行なわれるようになります。後期後半には陶棺も使用され、後期末になりますと夾紵棺や漆塗木棺を棺台の上に安置する方法が出現します。

③副葬品

前期は棺内には装身具を主とした最少限度のものを入れ、副葬品の大部分は棺の外に置かれました。それが割竹形木棺の場合には、次第に棺の中に入れる副葬品の割合が増加し、棺外には、あまり重要ではないものとか、儀礼的なものが主になります。また石棺の外側に副葬品用の小室を設けるものも出てきます。

この様に墳形、埋葬施設、副葬品等で前後関係を考え、考古学でいう相対年代を決定していきます。

しかしこれには様々な意見があります。というのは学者、研究者毎に年代を決定する焦点の当て方が異なるからです。

では本題の大和天神山古墳の年代は、どのように考えられるのでしょうか。先ず前述の『前方後円墳集成』では、第2部地域の概要112頁で

「[柳本古墳群]行燈山古墳のある丘陵の張出し上にのる柳本支群、シュクン谷を挟んで南側の渋谷支群、西方の石名塚古墳を擁する石名塚支群の3支群に分かれる。柳本支群は大型前方後円墳による累世的造営が想定できる。鍵穴形周溝・バチ形前方部を持つ黒塚古墳が2期、半鍵穴形半盾形周溝を持ち、円筒埴輪（Ⅱ式相当）・形象埴輪による埴輪囲繞が想定でき、また大型仿製鏡作成時期と同時期に造られたと思われる銅板を出土した行燈山古墳が3期前半、続いて櫛山古墳が4期にあると思わ

れる。大和天神山古墳、アンド山古墳、南アンド山古墳は上の3基と主軸を異にし、段築が不明瞭で周濠・埴輪を持たない。墳形は行燈山古墳に相似で、従来指摘のように行燈山古墳に付随して造営された前方後円墳と考えたい」

次に奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第22冊『大和天神山古墳』53～54頁で、合掌形天井部の古墳として次のように記載されています。

「谷口古墳は副葬遺物に古い時期のものが認められるが、その墳丘に埴輪を有し2つの内部構造主体の竪穴式石室に長持形組合式石棺を有するところから、中期の古墳といえるものであり、丹田古墳は墳丘、石室の規模が判明するのみで、その推定時期を詳らかにすることはできないが、おそらく中期初頭ごろのものと思われるし、メスリ山古墳は、副室を設けるという特種埋葬の点からみて、単に埋葬施設をなしたのとは異なる複雑性から中期初頭と推定できるものであり、天神山・小泉大塚両古墳とは、横断面が合掌形をなすが、時期的にまた性格的に区分すべきものと考えられるので、ここで対象とするのは天神山・小泉大塚両古墳と、椿井大塚山古墳・備前車塚古墳との4古墳となる。～この天神山・小泉大塚古墳などの石室構造は略式化されたものということができないものであり、椿井大塚山古墳の営造年代と大差ない時期において、この横断面が合掌形となる特種な石室構築が行なわれ始めたと考えられるのである。

だが天神山古墳が陪塚とし、陪塚を多く営造したのは中期とみられることからすれば、なお多くの問題を残しているのである。すなわち陪塚とすれば、副室とは墳丘を設けないこと以外では相通ずるところがあって、メスリ山古墳などの時期から、この種の構築が副室的に使用する石室の技術として生じたともいえるのである。しかし小泉大塚古墳においては陪塚とも副室ともいえないものであって、内部構造の中心となるものであり、天神山古墳、メスリ山古墳などの営まれた時期に、内部構造の中心として、副室構築方法をまねて築造され始めたものということができ、また副葬遺物からみても、天神山古墳よりも古い時期とするものがないことから、いえるのではないかと思う。

すなわち横断面が合掌形となる竪穴式石室の構築は、天神山古墳が陪塚とみるかみないかによって、副室的用途の石室構築によって始められ、これが内部主体の中心となっていったとするか、椿井大塚山古墳などのように板石と塊石とを混用する時期から天井に巨大な扁平石を横架せず、構築されはじめたものともみられるのであり、今後も考究すべき竪穴式石室の一様式といえるのではないかと思われる」

今度は『黒塚古墳』調査概報の記事を紹介します。

56～57頁で、河上邦彦は

「一方、天神山古墳は竪穴式石室の床面が全く盗掘されていない状況で発掘され、鏡23面、鉄刀、剣、鉄鏃、工具類、および41kgもの朱等の副葬品があった。特に23面の銅鏡のうち、方格規矩鏡6面、内行花文鏡4面、画文帯神獣鏡4面、画像鏡2面、獣形鏡3面等、後漢鏡を10数面をも含むが、三角縁神獣鏡を全く含まない点が注目されている。報告では崇神陵の陪塚とし、副葬品だけを埋納したと考えられている。そしてその築造年代も四世紀後半と推定している。ただこの見解に対して私は若干の疑問があるが、とにかく重要な発掘資料である」

一方樋口隆康は79～81頁、Ⅸ黒塚古墳出土の鏡の意義のなかで

「～いま30面以上出土している7例をあげると、最も多いのは福岡県前原市平原古墳が39面、京都府山城町椿井大塚山古墳約37面、奈良県河合町佐味田宝塚古墳36面、福岡県前原市三雲南小路一号甕棺35面、奈良県広陵町新山古墳と天理市黒塚古墳が34面、福岡県春日町須玖岡本甕棺32面である。そのうち平原古墳は四神鏡が32面あり、他は大型内行花文鏡で、天理市下池山古墳と同じ類の仿製鏡である。特に福岡では弥生時代の甕棺が多く、いずれも舶載の前漢鏡である。この頃から大量の鏡を一度に輸入するということが行なわれていたわけであり、黒塚古墳も椿井大塚山古墳も、その傾向に添ったものといえよう。その出土地が福岡と奈良に集中していることも注目され、異なる時代の中心域であったことが推される。～これを三角縁神獣鏡全体で見ても、8～9割が同型鏡である。同型鏡は戦国鏡から唐鏡まで存在するが、同じグループの鏡で、これほど同型鏡が多いのは三角縁神獣鏡以外には見られない。同型鏡は同時に同じ種類の鏡を多数作れるという利点がある。同型鏡が多いということは、この類の鏡の需要が特に高かったために大量生産されたということである。

このことは、邪馬台国の女王卑弥呼が魏王から銅鏡百面を賜ったという魏書東夷伝の記事と合致する。そのため卑弥呼のもらった銅鏡百面が、どれかという点に興味が集中し、それが三角縁神獣鏡であったかという議論が世の関心を高めている。しかし、魏書の記事は当時の日本の世相を反映しているだけであって、当時日本には卑弥呼のもらった百面の鏡しかなかったかというと、決してそうではない。中国製の神獣鏡が大量に流行していたことを暗示しているのである。

次に舶載の三角縁神獣鏡の出土地をみると、370数面が西は宮崎県から東は群馬県までに分布しているが、そのうち多く出した県を挙げると、奈良県80面、京都府56面、兵庫県39面、福岡県28面、大阪府22面、岡山県20面となり、奈良県を中心とした関西地区が圧倒的に多く、地方では福岡と岡山に小核のあったことが推される。これから邪馬台国は大和なりとは言えないが、初期の大

和政権が最も愛好した鏡と言うことは可能であろう。

そこで、なぜ三角縁神獣鏡が日本でもてはやされたか、それを解明する必要がある。それは当時、神仙思想が日本でもてはやされたことに原因がある。神仙思想は難しい説明はさておき、要は不老長寿の願いである。それが当時、大和政権を中心とする日本国家を統治する首長達の秩序維持の基本思想にマッチしたのではないかと思われる。三角縁神獣鏡は画文帯神獣鏡と共に、その神仙思想をデザインしたものであり、当時の日本の指導者層にもてはやされたのであろう」

一方、82～84頁の「あとがき」で河上邦彦は次のように述べています。

「～黒塚古墳は柳本古墳群での資料を得ようとして実施したが、当初の目的の一つであった墳形については本来の墳丘裾や表面は全く残されていなかった。～しかし、隣接した天神山古墳でも葺石が存在しないとされていたものが、最近その存在が確かとなっているし～ほとんど消えているが、木棺についてはその分析からクワ属の巨木を使用していたことが判明した。通常高野槇（コウヤマキ）を使用している場合が大半であり、この種の樹種を使っていた背景には、大きな意味があるようである。

石室の床面は盗掘の痕跡がなく、副葬品がすべて残されていた。全長130mの前方後円墳の副葬品がすべて残されていたことの学術的価値は極めて高い。

棺内副葬品は画文帯神獣鏡1面と若干の刀剣類および朱の固まりのみで、それら以外のすべて木棺と石室壁体との隙間に置かれていた。また、三角縁神獣鏡はいずれも木棺側に鏡面を向け、西棺側に17面、東棺側に15面、棺北小口に1面を、棺の北半部をコの字形に取り囲むように配列していた。前期古墳の豊富な副葬品の内容と、副葬時の配列方法が具体的に判明する貴重な資料である。この出土状況から、昭和27年の京都府椿井大塚山古墳の鏡の配置状況がほぼ事実であったことを裏付けるとともに、鏡の多数埋納が単に副葬品を石室に入れるというものではないことを示した。今ここで詳しい論を避けるが、鏡は葬具として埋納されたのではないと私は考えている。

出土遺物のうち、鉄製品については未だそのほとんどが錆落としなどが終っていないのでその数量等も確定しないが、前期古墳に特有の素環頭太刀二口の存在を確認した。また異形の鉄器も2個あることも確認した。これはこれまで発見されたことのない鉄器で、現物、X線写真の観察からリボンのようなものを結び付けていたことが判り、一種の吹き流しのようなものではなかったかと思っている。～

今回の発掘で大きな注目を浴びたのは、大量の三角縁神獣鏡が出土したからである。私は、大和古墳群には三角縁神獣鏡がないのではないか。または存在してもその

数は多くないのではないかと考えたことがある。しかし黒塚古墳はその考えを打破するとともに椿井大塚山古墳に似た状況の古墳が大和の中心に存在することを証明した。その結果、小林行雄による椿井大塚山古墳の被葬者が鏡の配布者であるという説は否定されるだろう。しかしながら三角縁神獣鏡は中国鏡であるか否かについての問題については、現状で解決すべき材料は見つかっていない。

今回の黒塚古墳の調査による最大の成果は、学術調査で前期前半の竪穴式石室の床面がほぼ当初のままに残されていたということである。そしてこの成果は黒塚古墳に最も近い前方後円墳の天神山古墳と合わせて考えるとその学術的な資料価値は倍増する。天神山古墳でも黒塚古墳と同じように地震があっても石室が崩壊し、その結果、床面を全面的に保護し23面の鏡を含む多数の副葬品が残されていたからだ。

今ここで詳しくは述べないが、私見では天神山古墳は二つの点で報告書とは解釈が異なる。一つは年代である。天神山古墳には23面のうち、数面の明らかな仿製鏡が存在しているので昭和35年当時の解釈であった仿製鏡は新しいということから当古墳の年代を前期後半に比定しているが、最近では仿製鏡は必ずしも年代が新しいとはいえないという見解から、私は前期前半、それも最も古い一群の古墳ではないかと考えている。また報告書では、当古墳が人体埋葬が考えられないという状況から、副葬品だけを入れた陪塚と考えている。石室の規模のうちで陪塚とすれば、崇神陵の陪塚であるが、崇神陵の年代と天神山古墳が一致しない点、また前期前半～中頃の時期に陪塚を持つ古墳が未見である点などから、天神山古墳陪塚でなく独立した100m級の古墳であると考えている。

こうした点を受けて考えると、天神山古墳は竪穴式石室に使用されたのが春日山の石材だという点も、石室構造そして床構造からも黒塚古墳より古くなる可能性がある。つまり天神山古墳の鏡群が後漢鏡タイプのものばかりである点、黒塚古墳では三国時代のタイプのものであることはこの編年が正しいことを示しているのではないか。つまり、天神山古墳の時期には、まだ三角縁神獣鏡がなかった時期かもしれない。ちなみに使用石材、石室構造、床構造、副葬品等総合的判断からみた調査古墳の相対編年は、中山大塚古墳（天神山古墳を含む）→黒塚古墳→下池山古墳となると私は考えている。」

このように、年代について河上邦彦と他の三者、すなわち樋口隆康と二つの文献の見解との間に大きな違いがあります。

次に大和天神山古墳出土鏡二三面の鉛同位体比による、原材料鉱石使用鉱山の判定を行ないます。

鉛同位体比とは

鉛には質量数204、206、207、208の安定同位体が存在します。

自然界に存在する鉛同位体の比率は、地球生成時の鉛同位体に238U→206Pb、235U→207Pb、232Th→208Pbの改変生成物が加わったもので、鉛鉱床生成年代や地質環境により差が生じます。

鉛同位体比は先ず地球年代学の分野で採択されます。それは生成年代を表すとされる206/204・207/204、208/204の原子比で表示されました。

ところが1965年、米国コーニングガラス博物館のブリルがヨーロッパ各地で出土している青銅製品の原材料鉱石供給鉱山の同定をしようと思い立ち、ローマ時代に採掘された英国・ギリシャ・スペインの鉛鉱山鉱石と、ヨーロッパ各地で出土した青銅製品双方の鉛同位体比測定を行い、成分を表示すると考えられる207/206と208/206の両座標軸を用いて、鉱石の産地同定を行ないました。

この後者の成分を表示すると考えられている座標軸を用いて日本列島・朝鮮半島・中国大陸各鉱山の鉛鉱石から、日本列島で出土した青銅製品の鉱石供給鉱山の同定を行っているのが現在の我国考古学会の現状であります。

しかしこの同定には大きな欠陥があると考えています。その一つは、自分達の判定に資する指数しか採用していないことです。地球年代学の立場から数多の指数が公表されているにもかかわらず、その指数を、殆ど検討材料に入れていないことです。また都合の悪い指数は適当な理由をつけて排除してしまっていることです。

二番目は中国大陸・朝鮮半島・日本列島における当時の国際情勢であるとか戦乱、それによる人の大量移動、及び交易、更に鉱石から製品にいたる様々な過程等についても検討不足であるように思われることです。

更に三番目の日本考古学会見解は全く筆者が受け入れる事が出来ないものです。それは、彼等の考え方が人種差別を容認するコッシナ理論に基づいているのではないかということです。

と言いますのは、世界各国で共通している考え方を、日本列島にだけ、当てはめていないという事です。言葉を変えれば、自虐史観に拠る、日本列島に在住していた我々の先祖のみが劣等人種であったということを立証したいという全くおかしな考え方です。

具体的に申しますと、中国大陸でも朝鮮半島でも搬入品で無いと思われる青銅製品・鉄製品が出土すれば、現地で採掘された鉱石からの鍛造・鋳造が始まったとし、考古学的に検証できる遺跡の年代とは現在、数百年のタイムラグがあるにも拘らず、それを認めているのに、そして、これはユーラシア大陸全域で共通した見解なのですが、日本列島だけが、銅鐸を始めとする独自の金属製品とか鉱滓の検出が発表されているにも拘らず、それら

の事実を全く判断材料に加えていないと言う事です。これは戦後樹立された彼等の歴史観を押し付けているように思えてなりません。そしてこの考え方が、黒塚古墳と大和天神山古墳の相対年代問題の対立とも密接に結び付いているように思えるのです。

そこで鉛同位体比の新しい方法による該期の日本列島鉱山開発状況を浮かび上がらせる事ができれば、それは当時の社会とか、大陸・半島との関係につき、その見方を大きく変える事になるのではないかと考えました。

またそれが副題の説明そのものに繋がると考えて本稿はスタートします。

従来の我国考古学会の見解が正しいのか、筆者の考え方にも一理があると認めていただけるかは、読者諸賢のご判断にお任せします。

話しは変ります。鉛同位体比の分析により青銅製品原材料使用鉱山を同定するのに、これは鉛鉱石であって、銅鉱石ではないから意味の無い事だという意見もよく耳にします。しかし当初ブリルが行なった判断、すなわち鉛鉱石による青銅製品の銅供給鉱山の判定が有効であるということは、銅と鉛という金属の親縁性を、全世界の学者の大半が認めたから、これが世界各地で採用されるようになったのだと考えております。

文系の分野に絶対ということが存在しない事は分ります。前提条件が変われば見方を変えなければなりません。それが学問の進歩というものだと考えます。同様に理系の世界にも絶対ということはありえないと思います。

よく理系の見解は絶対だというような事をいう人がおりますが、これは全て「まゆつばもの」だと、先ず疑わなければならないと考えています。

そして自分の所属する大学・研究所・学会等のボス的存在の人達の意見を無批判で信じたら、そこで自分の思考はストップし、学術論争で必ず敗北することを各人が銘記すべきです。

ノーベル賞理論に裏付けされたとされていた金融経済理論も、リーマンショックで崩壊しました。全世界の産業界をリードしたGMの挫折、イーストマン・コダック社の会社更生法申請は、他人事ではないのです。

これらを踏まえて、相対的にみて現時点で最も効果があると思われる測定法、日本列島における金属文化発生のメカニズムを解明するための最良の手段、それが鉛同位体比による青銅製品原材料鉱石供給鉱山判定だと考えます。勿論これには様々な客観的事実を加味しなければなりませんが。

検討手法

今回の検討指数は204で206・207・208を除したもの

と、206で207・208を除した五つの指数で行なっています。論文発表が三つの指数で行なわれている場合には、他の二つの指数を算出して加え、更に発表桁数が異なるものも、全て小数点以下の数字桁数が同一になるよう算出し、それぞれの指数の差の和を計算し、五つの合計相違数100未満のものを完全な一致、相違指数が100～199のものを一致としています。

大和天神山古墳出土鏡鉛同位体比検討結果

1、流雲文縁方格規矩鏡

鉛同位体比指数

206/204—17.854・207/204—15.563・208/204—38.484・207/206—0.8717・208/206—2.1555。

53神岡・茂住を三分の二、J—6太良・秋田を三分の一混合した

17.859・15.576・38.473・0.8723・2.1544と相違指数5・13・11・6・11合計46と完全に一致し神岡茂住鉱山と秋田県太良鉱山の鉱石が使用されていることが判明しました（以後冒頭の鉛同位体比指数及び206/204・207/204・208/204・207/206・208/206は省略）。

2、画文帯神獣鏡

18.310・15.708・38.987・0.8579・2.1293

51中竜福井の

18.309・15.658・38.995・0.8552・2.1298と相違指数1・50・8・27・5合計91で完全に一致、福井県中竜鉱山の鉱石使用です。

3、内行花文鏡

18.499・15.704・38.931・0.8489・2.1045

GJ—11倉谷石三と52滋賀政所を等分に混合した18.508・15.668・38.963・0.8466・2.1053と相違指数9・36・32・23・8合計108で一致し、石川県倉谷鉱山と滋賀県政所鉱山の鉱石使用です。

4、内行花文鏡

18.240・15.686・38.804・0.8600・2.1274

GJ—19対州長崎と53神岡茂住を等分に混合した18.244・15.630・38.816・0.8568・2.1277と相違指数4・56・12・32・3合計107で一致するので、長崎県対州鉱山と神岡茂住鉱山の鉱石が使用されていると判断しました。

5、三角縁変形神獣鏡

18.261・15.668・38.801・0.8580・2.1248

52滋賀政所、53神岡茂住を等分に混合した18.281・15.646・38.806・0.8560・2.1230と相違指数20・22・5・20・18合計85で完全に一致し、滋賀県政所鉱山と神岡茂住鉱山の鉱石が使用されていたことが認められます。

6、画文帯神獣鏡

18.171・15.625・38.642・0.8599・2.1266

GJ—14神岡円山の
18.146・15.609・38.644・0.8602・2.1296と相違指数25・16・2・3・30合計76で完全に一致します。従って神岡円山鉱山の鉱石使用ということになります。

7、獣形鏡
18.044・15.603・38.574・0.8647・2.1378
55神岡茂住の
18.024・15.587・38.584・0.8648・2.1407と相違指数20・16・10・1・29合計76で完全に一致し、神岡茂住鉱山の鉱石使用となります。

8、流雲文縁方格規矩鏡
18.017・15.579・38.510・0.8647・2.1374
55神岡茂住を九割、69久根本山を一割の混合比率とした
18.016・15.574・38.494・0.8645・2.1367と相違指数1・5・16・2・7合計31と見事に一致し、神岡茂住鉱山の鉱石に静岡県久根鉱山の鉱石を一割混合した鉱石使用ということになります。

9、流雲文縁方格規矩鏡
17.695・15.501・38.267・0.8760・2.1626
212香寄山東を半分、53神岡茂住を四分の一、43尾小屋石川を四分の一の比率で混合した
17.697・15.520・38187・0.8782・2.1597と相違指数2・19・80・22・29合計152で一致します。従って中国山東省香寄鉱山の鉱石半分に、神岡茂住鉱山と、石川県尾小屋鉱山の鉱石が25%ずつ使用されていたということになります。

10、画像鏡
18.373・15.681・38.782・0.8535・2.1108
55生野兵庫の18.375・15.627・38.787・0.8504・2.1109と相違指数2・54・5・31・1合計93で完全に一致します。従って兵庫県生野鉱山の鉱石使用ということになります。

11、画像鏡
18.229・15.708・38.775・0.8617・2.1271
53神岡茂住を六割、52政所滋賀を四割混合した
18.227・15.635・38.765・0.8579・2.1270と、相違指数2・73・10・38・1合計124で一致し、
また53神岡茂住を53%、72対州長崎を47%混合した
18.230・15.626・38.780・0.8573・2.1274とも相違指数1・82・5・44・3合計135で一致します。
従って神岡茂住鉱山の鉱石を中心として、滋賀県政所鉱山の鉱石が使用されたのか、あるいは長崎県対州鉱山の鉱石が使用されたのか、あるいはこの三者が何れも使われていたのかという事になります。

12、画文帯神獣鏡
18.141・15.623・38.561・0.8612・2.1256
これは48神岡円山の

18.132・15.593・38.567・0.8600・2.1270と相違指数9・30・6・12・14合計71で完全に一致し、神岡円山鉱山の鉱石使用ということになります。

13、獣形鏡
18.112・15.627・38.662・0.8628・2.1346
これは47神岡円山を八割、53神岡茂住を二割混合した
18.113・15.603・38.620・0.8614・2.1322と相違指数1・24・42・14・24合計105で一致するので、神岡円山鉱山と、神岡茂住鉱山の鉱石が使用されていたことになります。

14、画文帯神獣鏡
18.576・15.676・38.997・0.8439・2.0993
これは42倉谷石川を65%、43尾小屋石川を35%混合した
18.567・15.644・39.021・0.8426・2.1017と相違指数9・32・24・13・24合計102で一致し、従って石川県の倉谷鉱山と、尾小屋鉱山の鉱石使用ということになります。

15、三角縁変形神獣鏡
18.004・15.572・38.442・0.8649・2.1352
これは55神岡茂住を七割、GJ—13神岡栃洞を二割、69久根本山を一割混合した
18.043・15.569・38.467・0.8629・2.1319と相違指数39・3・25・20・33合計120と一致し、神岡茂住鉱山、神岡栃洞鉱山と静岡県久根鉱山の鉱石が使用されていた事となります。

16、波文縁方格規矩鏡
17.792・15.545・38.424・0.8737・2.1596
これは53神岡茂住を54%、J—6太良秋田を46%混合した
17.801・15.570・38.425・0.8748・2.1588と相違指数9・25・1・11・8合計54と完全に一致し、神岡茂住鉱山と秋田県太良鉱山の鉱石使用ということになります。

17、内行花文鏡
18.141・15.614・38.599・0.8607・21277
これは48円山神岡の
18.132・15.593・38.567・0.8600・21270と相違指数9・21・32・7・7合計76と完全に一致するので、神岡円山鉱山の鉱石使用ということになります。

18、獣形鏡
18.199・15.644・38.671・0.8596・2.1249
これは53神岡茂住と61生野兵庫を等分に混合した
18.191・15.602・38.656・0.8578・2.1252と相違指数8・42・15・18・3合計86と完全に一致するので、神岡茂住鉱山と、兵庫県生野鉱山の鉱石使用ということになります。

19、波文縁方格規矩鏡
17.844・15.565・38.502・0.8723・2.1577

これは53神岡茂住を三分の二、J—6太良秋田を三分の一混合した
17.859・15.576・38.473・0.8723・2.1544と相違指数
15・11・29・0・33合計88と完全に一致するので、神岡茂住鉱山と秋田県太良鉱山の鉱石が使用されているということになります。

20、内行花文鏡
18.603・15.718・38.996・0.8449・2.0962
これは222漂塘江西を61％、224水口山湖南を39％混合した
18.620・15.723・38.952・0.8444・2.0920と相違指数
17・5・44・5・42合計113で一致するので、中国大陸江西省漂塘鉱山と、同じく中国大陸湖南省水口山鉱山の鉱石使用ということになります。

21、流雲文縁方格規矩鏡
18.110・15.618・38.636・0.8624・2.1334
これは47神岡円山を八割、53神岡茂住を二割混合した
18.113・15.603・38.620・0.8614・2.1322と相違指数
3・15・16・10・12合計56と完全に一致するので神岡円山鉱山の鉱石と同じく神岡茂住鉱山の鉱石使用ということになります。

22、半三角縁人物鳥獣文鏡
17.972・15.587・38.505・0.8673・2.1425
これは53神岡茂住九割、70大井静岡を一割混合した
17.957・15.571・38.465・0.8672・2.1420と相違指数
15・16・40・1・5合計77と完全に一致するので神岡茂住鉱山と静岡県大井鉱山の鉱石が使用されていたことになります。

23、獣帯鏡
18.193・15.606・38.511・0.8578・2.1168
これは50神岡栃洞の
18.182・15.580・38.509・0.8569・2.1180と相違指数
11・26・2・9・12合計60と完全に一致するので、神岡栃洞鉱山の鉱石使用と言う事になります。

この項のまとめ

先ず相違指数から説明します。

事柄の起きる確からしさを数量的に表したものを確率といいます。そしてそれは乗数で算出されます。すなわち百分の一と百分の一の確率のものが同時に発生する確率は万分の一といった具合です。

今回採択したものは、五つの数字の相違数の和によるものです。それぞれ小数点以下三桁のものが三つ、四桁のものが二つあります。従って分母の小数点以下の桁数は十七ということになります。これは10京という天文学的数字です。

その一方で分子の五つの数字の和が99迄のものを完全

に一致、100～199の間のものを一致と見なした訳ですが、これについては異論があるかもしれません。すなわち分母が乗数で計算される以上、当然分子も乗数で算出すべきであるとう考え方です。これには一理あります。しかしもう一度分母の数字を考えてみましょう。また乗数にした場合、全体の判断に支障を及ぼすようなことになるのでしょうか。

その数字を算出してみましょう。皆様お気付きの通り、一番簡単な方法で計算してみますと、仮に二つの数字の和が9の場合、一番大きな乗数となるのは4と5を掛けた20で以下6と3を掛けた18、7と2を掛けた14、8と1を掛けた8となります。零が入りますと乗数は全て零となってしまいます。従って外しました。更に19を同じ様に考えて見ましょう。10と9を掛けた90が最高の数値で以下11と8を掛けた88、12と7を掛けた84と数値は次第に下がり、最後は1と18を掛けた18となることは自明の理です。

これと同じ事で99までの五つの分子の乗数は95～3,040,000、100～199までの五つの分子の乗数は195～99,840,000となります。

一見するととても大きな数字のように思えますが分子の桁数を思い出して下さい。小数点以下17桁なのです。従って分母分子共に6桁ずつ切り落とせば、最大の数値でも、11桁すなわち一千億分の三・〇四と、一千億分の九九・八四ということになりますので、簡便法として有効ではないかと考えた次第です。

またここで強調したいことは、これは従来の判定基準である206で207と208を除したものだけよりは、桁数が九つ（10億倍）精度が高く、また204で206、207、208を除したものよりも桁数で八つ（一億倍）精度が高いということになり、現時点で考えられる青銅製品供給鉱山判定に最も効果的なものだと考えます。

この方法による分析の結果、今まで見えなかったものが見えてまいりました。大和天神山古墳が形成された時期には、日本列島における銅鉱山の開発が岐阜県飛騨地方の神岡鉱山グループを中心として進み、これに加えて、北は秋田県、東は静岡県、周辺は北陸・滋賀・兵庫、西は対馬にいたる鉱山開発が行われていた事を浮かび上がらせたのです。

更に二三面のうち二二面までが、日本列島産の銅鉱石を使用した仿製鏡であり、舶載鏡は20内行花文鏡の一面のみという結果です。これは日本列島産の銅が中国大陸・朝鮮半島に輸出され、そこで作られた鏡を輸入したとするよりは、日本列島に青銅工人が渡来し、彼等が列島産の鉱石を使用して鋳造したと考える方が、はるかに整合性があると考えたからです。これは従来の舶載鏡が

大半であるという考え方に修正を迫るものとなりました。

また山東省香寄鉱山の鉱石が半分使用されていた9流雲文縁方格規矩鏡は、中国大陸から渡来した青銅工人が、持参した現地の鉱石に、日本列島で産出された鉱石を混合したものと見るのが一番辻褄が合うと考えます。これは後漢の光武帝に奴国が朝貢したAD57年以降は、様々な事情による金属工人の渡来が一段と活発になり、日本列島の弥生時代中期以降の文化形成に大きな役割を果たすようになったその一環だと考えることができます。

次号は須玖岡本遺跡出土鏡、最終は椿井大塚山出土鏡の鉛同位体比による原材料供給鉱山の解明を行いその上で副題の結論に迫りたいと思います。

参考文献

橿原考古学研究所編『大和天神山古墳』古代学研究会、1963年

奈良県立橿原考古学研究所編『黒塚古墳調査概報』学生社、1999年

近藤義郎他『前方後円墳集成・近畿編』山川出版社、1990年

佐々木昭・佐藤和郎・GLカミング「日本列島の鉱床鉛同位体比」『鉱山地質』32日本鉱山地質学会、1982年

馬淵久夫・平尾良光「鉛同位体比法による漢式鏡の研究」『MUSEUM』370、東京国立博物館美術誌1月号、1982年

馬淵久夫・平尾良光「東アジア鉛鉱石の鉛同位体比」『考古学雑誌』73―2日本考古学会、1987年

山崎一雄他「鉛同位体比測定による日本及び中国出土の考古遺物の産地の研究」『考古学・美術史の自然科学的研究』日本学術振興会、1980年

追伸 ―サウダージ― より その八

松下壽男

わたしは間違ったことはしていない

「私は間違ったことはしていなかった、
私は理解されていた、
私は嫌われてはいなかった。」
心の中で繰り返す日々

私は間違ったことはしていない
私は理解されている
私は嫌われてはいない
ならばどうして繰り返す

もしも間違いをしていれば
たとえ理解されなくても
嫌われても悔やまなかった

私は間違ったことはしていなかった
私は理解されていた
なのになぜ嫌われた

日本近代文学点描　その九

松下壽男

弱い心を　投げあげろ
噛みすてた青くさい核を放るやうに
ゆさぶれ　ゆさぶれ

ひとよ
いろいろなものがやさしく見いるので
唇を噛んで　私は憤ることが出来ないやうだ

東京帝国大学工学部に通う学生でありながら、小住宅や芸術家コロニーの設計で辰野金吾賞を何度も受賞した新進気鋭の建築家の立原道造は、卒業記念に一冊の詩集を出版しました。

ソナチネの楽譜のような大判で薄いその詩集「萱草に寄す（わすれぐさによす）」に収められた十篇は、全てがソネットという西洋の短詩の一形式で綴られています。四・四・三・三の四連十四行で構成されるペトラルカ

和魂洋才と文化のグローカル

♡　わかれる晝に

ゆさぶれ　青い梢を
もぎとれ　青い木の實を
ひとよ　晝はとほく澄みわたるので
私のかへつて行く故里（ふるさと）が　どこかにとほくあるようだ

何もみな　うつとりと今は親切にしてくれる
追憶よりも淡く　すこしもちがはない静かさで
單調な　浮雲と風のもつれあひも
きのふの私のうたつてゐたままに

のソネットは、確固とした形式性の中に起承転結の叙事性と序破急の叙情性とを備えています。

彼は、このコンパクトな形式の中に、内在律が躍動する若々しい口語を注入して、近代的な日本の詩情を歌い上げました。実際、すぐに曲がつけられて、上野音楽学校で歌われてもいるのです。

構成と主題と機能とが見事に調和した彼の詩作には、建築の才能と共通したものを感じることができます。彼の設計が風や光との共存を求めた小建築において輝きを増すように、彼の詩作はソネットという軽やかな形式との共生によって言葉をもたないゆらぎまでも結晶させて歌うのです。

それらはちょうど林の梢から風のそよぎが落としていった「青い木の實」のような作品群です。

そして彼の詩と建築とに霊感を与える場所が、軽井沢の別荘地でした。

バカンスの風習に慣れ親しんだ西洋人たちが避暑地として選んだその土地は、中山道という日本の古道の宿場の一つでもありました。今日流に言えば、グローバルとローカルとが交差するグローカルな文化を、かりそめにも醸し出すことのできた奇跡の土地でした。

立原道造は、毎年その土地へ出向き、先輩の堀辰雄らと創造的な夏を過ごしては、「私のかへって行く故里が、どこかにとほくあるようだ」という思いを募らせながら、生まれ故郷の東京日本橋へと帰って行ったのでしょう。

もちろんグローカルな彼の文化を育む、この居心地のよい特別な場所のほかに、彼の帰って行くべき心の故郷などないことは、わかっているのです。

しかし別荘を本宅とは呼べないように、避暑地を故郷と名乗ることができない憤りは、どうしようもないのです。

詩句が織りなす物語では、エリーザベトという名に象徴された「ひと」への恋の終焉として描かれている憤り。

とはいえ背後の詩人の魂には、詩歌や建築という形式性の強い領域においてさえ飾らぬ姿で和魂洋才を成し遂げた日本の近代文化の到達点が持つ危うさへの憤りが、潜んでいるように私には感じられます。

もし和魂洋才の行き着く先の情感が、「私のかへって行く故里が、どこかにとほくあるようだ」という憤りだとしたら。

しかも、和魂洋才の調和によって「いろいろなものがやさしく見いるので」それゆえ「唇を噛んで　私は憤ることが出来ないやうだ」という情況を来すのだとしたら。

そして、憤りがいよいよ臨界に達しているとしたら。

もし彼が生き長らえたとしたら、どんな建築を設計し、どんな詩を書くことでしょう。

この詩集の二年後、立原道造は二十四才で病死します。その一九三九年、ヨーロッパでは第二次大戦が勃発し、日本の文化は国粋主義の道をひた走り始めるのです。

編集後記

「科学の進歩を妨げるものは素人の無理解ではなく、むしろ科学者自身が科学の使命と本質を忘れてしまっていることによるのだ」という言葉を聞いたことがあります。

その一方で世の中では似た物同士を結び付けて、タテ割にする手法がとられています。これは組織運営の為にはとても便利ですが、反面最先端の学術研究には大変な障害をもたらすことがあります。

何故ならば、最先端の研究それ自体が“未知の智”を求めての森羅万象を尋ね歩かなければならないものだからです。

遺伝法則の発見者メンデルは物理教師で、救急車のサイレンの甲高い音が、すれ違った瞬間低くなる「ドップラー効果」の発見者でもありました。

しかし彼は生物学の分野で、エンドウマメの交配実験を行い、物理学の切れ味を生かした遺伝法則論文を発表します。その内容は統計解析によるデータ間の相関に着目した、従来“暗黙知”だった「遺伝」を理路整然とした“形式知”に改めたものでした。

しかし彼の論文は当時全く顧みられず、発表してから35年、彼の死後16年経って漸く認められる事となりました。それはタテワリ社会を墨守しようとした、学会長老の石頭が障害となったからです。

われわれ「まんじ集団」には、そのような弊害は一切ありません。様々な分野の第一線で活躍された方々の忌憚のない意見交換と斬新な所見発表の場として、これからも歩み続けたいと思います。

（T・N）

まんじ第125号

平成24年8月1日発行（非売）

発行人　三戸岡　道　夫（みとおか　みちお）
編集長　中　山　喬　央（なかやま　たかひろ）
事務局長　鍋　屋　次　郎（なべや　じろう）

（事務局）　〒223-0056　横浜市港北区新吉田東五丁目76-35　太田善朗方
TEL・FAX 045（544）5947
（郵便振替口座）　No.00270-0-64592　加入者名　ま　ん　じ
（印刷製本）　日東印刷株式会社
〒142-0054　東京都品川区西中延2-15-16

表紙の絵について
「暗雲を昇り天珠をとる」　　田寺怜葦画

まんじ

No.126

2012.11.1

まんじ第百二十六号　目次

金と穀物の価格比から世界を覗く……新井　宏…4
関東管領始末記⑧　兄弟相剋……千坂精一…12
「茶道史」勉強ノート（二）……忠内正之…23
短歌　三十首……曽根竣作…34
短歌　行雲流水（三十六）……石黒修身…38
漢詩　潮騒録（七十）《漢詩の流れ59》……鯨游海…41
詩　一〇〇〇の瞳……石野茂子…44
創作童話　大きな木……石野茂子…46
遠州七不思議「三度栗」……石野茂子…48
アメリカ雑記帳（二）……三戸岡道夫…51
先見の明（二）―韮山代官江川太朗左衛門の遺業と世界遺産への道―……堀内永人…67
中国の良き師良き友……吉田忠雄…89
目耕録（その九）……山本鎭雄…96
二八に帰るすべもなし（十）……伊治哲…104
イドと超自我の谷間で（六）―ある女の不思議な生涯―……鍋屋次郎…109
日本最古の鉄製口琴……漆原直子…121
「房総東往還道を歩く」余滴……山田嘉久…126
性と化粧（六）……鈴木守…135
人類の仲間（二）……鈴木守…140
無為、不言教……横山正義…147
内田の国の物語①……横山正義…152
陰翳の美学（その十一）……外山知…168
口紅（その八）……池莉原作　山本勉訳…188
透明な時間（十）……宅見勝弘…215
還暦からの考古学（二十五）……中山喬央…221
追伸　―サウダージーより―　その九……松下壽男…231
日本近代文学点描　その十……松下壽男…232
編集後記……編集子…234
表紙……田寺怜葦…234

金と穀物の価格比から世界を覗く

新井　宏

近年、金価格が暴騰している。一時は、トロイ・オンス(三一・一グラム)あたり二千ドルの声も聞かれるほどの加熱ぶりであったが、現在は千六百ドル近辺に落ち着いているようだ。それでもグラムあたり四千円以上である。

ところで、前から気になっていたことがある。穀物の値段と金の値段を歴史的に比較して見ると、地域や時代に関係なく、ほぼ同一の比率を保っているのである。

まず、直近の日本を見てみよう。

金一グラムで四千円であるから、「こしひかり」でも十キロ買える。自主流通米なら銘柄によっては十五キロは買えるだろう。かつて、人ひとりの年間米消費量は一石、すなわち百五十キロと言っていたから、金十グラムあれば年間のお米をまかなえるわけである。

それでは、江戸時代はどうであったろうか。

おおよそ一両一石が米相場であったから、ここでも金一グラムで米十五キロを買えたことになる。もっとも一両小判に含まれる金の含有量は時期によって異なり、六グラムから十五グラムまで変動していたので、刻々の米相場と対比しないと正しい結果にはならないが、小判の平均的な金含有量を十グラムとし一石を百五十キロとすれば、金一グラムで米十五キロ買えることになり、現在と全く同じである。

かくして、金一グラムから米を何キロ買えたかムキになって調べて見たのが次の資料である。金も米も価格変動の激しい商品で、しかも中世以前についてはほとんど史料がないので、どれだけの信頼性があるか判らないが、主な事例を示す。

天平年間(七六〇年頃)	米　八キロ
奈良平安(延喜式の頃)	米　九キロ
平安(一〇八五年頃)	米一二キロ
平安(一一五二年頃)	米一〇キロ
鎌倉(一二九八年頃)	米一二キロ
室町(一四五〇年頃)	米二〇キロ
戦国(一五八〇年頃)	米一二キロ
江戸(一六一六年頃)	米二五キロ
江戸(一六八〇年頃)	米一二キロ
江戸(一七三六年頃)	米一三キロ
江戸(一七七〇年頃)	米一七キロ
明治(一八九〇年頃)	米一五キロ
戦前(一九四〇年頃)	米一五キロ
現在(二〇一二年)	米一二キロ

それでは、中世以前の中国ではどうであったであろうか。史料の乏しい中で、やっと見つけたのが次のデータである。

前漢	米　六キロ
唐(八三〇年頃)	米一〇キロ
北宋(一〇七〇年頃)	米二〇キロ
南宋(一二〇〇年頃)	米一五キロ

ここまで調べたらヨーロッパも気になる。ただしヨーロッパではお米の資料がないので、小麦で示すと次のようになっている。

ローマ(前七三年頃)	小麦二五キロ
ローマ(　七九年頃)	小麦二八キロ
ローマ(三〇一年頃)	小麦二二キロ
エジプト(十一世紀)	小麦二三キロ

小麦の価値は現在でもお米の半額なので、それを考慮すると良く合っていると言えよう。もっとも、中・近世の英国やフランスの例では、次のように金一グラムで買える小麦の量は日本のお米に近い。それだけ、ヨーロッパでは食料が割高であったということであろうか。統計の良く整っている近代米国の小麦と米のデータも併せて示す。

英国(一四七〇年頃)	小麦一七キロ
仏国(一五四〇年頃)	小麦一四キロ
英国(一五六〇年頃)	小麦一二キロ
仏国(一六〇〇年頃)	小麦一〇キロ
英国(一六四〇年頃)	小麦一一キロ
英国(一七九〇年頃)	小麦一〇キロ
米国(一八〇〇年頃)	小麦一〇キロ
米国(一八五〇年頃)	小麦一五キロ
米国(一九〇〇年頃)	小麦二五キロ　米一五キロ
米国(一九三〇年頃)	小麦二〇キロ　米一五キロ
米国(一九六〇年頃)	小麦一六キロ　米一〇キロ

ところで、冒頭で現在の金価格(グラム当たり四千円)なら金一グラムで米十五キロは買えると言ったが、そこには若干トリックがある。

異常に高騰した現在の金価格と、国際的に異常高の日本の米価を比較しても無意味との異論もあろう。気が引けるので、金価格上昇が一服していた二〇〇一～五年の期間の米価について、カルフォルニア米と国内米を対象として計算してみた。

二〇〇一～〇五年　加州米二八キロ　国産米　五キロ

大差のある結果であるが、いずれはこれらの中間値に落ち着くと考えれば、冒頭に提示したことも、それほど誤ってはいない。

誰もが知っているように、通貨インフレは借金棒引きの特効薬で、国王や政府の債務に対しては特に有効であった。だから、各国とも米国のように「ドル鉱山」でドル札を大量生産する誘惑に逆らえなくなり、後で深刻な後遺症を招いている。それを防止するために、供給が限られた金や銀を基本通貨として使ってきたのが人類の知恵である。

それでは、歴史上、金や銀を主要な通貨として使用してきた地域や時代にあっては、通貨インフレは無かったのであろうか。

もちろん、そんなことはない。たしかに金貨や銀貨は減価しなかったが、それらと関係つけられた計数通貨や日常の補助通貨は、劣価に劣価を重ねていたのである。

まずは、ローマ時代の通貨を見てみよう。

ポエニ戦争の前の紀元前三世紀にはアス青銅貨の重さが三二二グラムあったが、紀元前後には十一グラムまで軽くなっている。当然アスを単位とする通貨体系ではポエニ戦争の時にひどいインフレがあった。

そのため、紀元前十九年にアウグスツス帝はアウレウス金貨(金七・八グラム)とデナリウス銀貨(銀三・九グラム)をベースとした貨幣制度を整備し、アウレウス金貨はデナリウス銀貨の二十五枚に相当するとした。金銀比価は十二・五である。

ところがデナリウス銀貨は三世紀に入るとデナリウスと言う計数単位の名称に変わってしまい、その結果アウレウス金貨は五十デナリウスと等しくなり、更には三世紀末から四世紀初にかけて、アウレウス金貨一枚が六百デナリウスから二四〇〇デナリウスへと百倍にも達する急速なインフレが昂進するのである。しかも、その間に基準のアウレウス金貨の金純分も七・八グラムから五・四グラムへと切り下げられている。

その後、東ローマ帝国の時代に入って、コンスタンチヌス帝はソリドス金貨(金四・五グラム)・シリカ銀貨(銀

二・三グラム)・フォリス青銅貨の貨幣制度を制定する。

この時、ソリドス金貨一枚がフォリス青銅貨百二十枚に相当していたが、五世紀末には四百枚に変わっている。それでも東ローマ帝国では、貨幣制度が安定していて、ソリドス金貨の純分は十一世紀に入るまでまったく変わらなかった。こんなことを知ると、ビザンチン経済の穏やかさというよりも停滞を感じる。

一方、中世フランスでは、ローマの重量単位であるリブラ(三二八グラム)に由来するリーブルの銀の重さを通貨単位として使っていたが、十世紀には銀純分二四〇グラム相当となり、以降、十二世紀には銀純分で一五〇グラム、十五世紀には二五グラム、十七世紀には十グラム、そしてリーブルがフランと名称を変えるフランス革命後には四・五グラムとなってしまう。

同じようなことが中世イギリスでも起った。イギリスではリブラの名称をポンドと言い、一ポンドが二十シリング、一シリングが十二ペニー、すなわち一ポンドが二百四十ペニーとなる制度を当初から採っていた。現在、通貨単位のポンドを£と書くのはリブラの名残である。

ここまではフランスと同じであるが、異なっていたのは補助通貨のペニーにも小粒の銀貨を採用していたことである。当初のポンドはローマのリブラと同じく三三〇グラムほどの銀だったので、一ペニーの銀は一・四グラムほどになる。しかし、補助貨幣とは言っても銀を介してポンドに直結していたので、やたらに減価することはなく、十六世紀までに一ペニーが銀〇・五グラムまで減価したものの、それ以降は完全に安定していた。補助通貨が銀に裏付けられた制度はインフレに強かったのである。

それでは日本ではどうであったろうか。

良く知られているように、日本の通貨制度は和同開珎や本朝十二銭のように、補助通貨的な銅銭から始まる。当然、インフレの歴史となる。

和銅元年(七〇八)に発行された和同開珎には銅銭の他に銀銭もあった。しかし、銀銭と銅銭の交換比率は四倍から二十五倍まで諸説あって良く判っていない。確かな事は、当時の銀と銅の価格比は百倍だったので、いずれにしても銅銭には極めて高い価値が与えられていたことである。いわば和同開珎の銅銭は金属価値とは無関係な紙幣のような通貨であった。狙いは律令政府の差益取りである。

このことは、当然私鋳銭を生むと同時に、和同開珎銭の劣価すなわちインフレをもたらし、ついには銅地金の価格まで価値を落とし、差益を生まなくなってしまう。

困った律令政府は、天平宝字四年(七六〇)に和同開珎と全く同じ形状の万年通宝を発行し、これを和同開珎の

十枚と同じと定める。そればかりではない。続く天平神護元年(七六五)にも神功開宝を発行し、これもまた万年通宝の十枚と同じとしたのである。これでは神功通宝一枚が和同開珎百枚に相当することになる。

このような通貨政策を実施するために、律令政府はあらかじめ奇策を準備していた。聖武天皇の発願で天平十七年(七四五)、東大寺に四百トンの重量を持つ大仏を造り始め、市中の銅を完全に集めて銅価を高めたのである。現代で言う買いオペレーションである。

その結果であろうが、「国銅尽くして」しまい、平安時代の銅価は国際価格の五倍に跳ね上がり、奈良時代に盛んであった金銅仏が全く造られなくなってしまった。平安仏に木彫の傑作が多いのはそんな事情からなのである。

このような経過で、日本最初の通貨制度は完全に崩壊してしまった。

その後、平清盛が南宋との貿易で大量の銅銭を輸入し、渡来銭を決済手段とし、出挙制のように貸出しては利子をつけて返させる方法で絶大な富と権力を手中にした。

しかし、限られた渡来銭の供給では米価の相対的な下落をもたらしてしまい、荘園貴族や武士層からの反発によって平家は滅ぼされてしまった。その後、大量の宋銭は鎌倉大仏の鋳造に使われてしまっている。

補足すれば、宋銭を大量に輸入できたのは、北宋末から南宋にかけて、中国では激しいインフレが生じ、銭の銅価格の方が、表示価格よりも高くなり流通しなくなっていたのを、銅が異常高の日本が、よろこんで奥州金と交換したからである。日本で銭をつくるよりも圧倒的に割安だったのである。

銭の制度が完全に復活するのは、金銀本位通貨の整った江戸時代に入ってからである。この頃、日本は安価な硫化銅鉱の精錬に成功して、世界的な銅産出国に躍進していた。

江戸時代は、鎖国という為替管理下で、金(両)と銀(匁)に基礎を置く制度を採ったので、物価は比較的に安定していた。それでも、当初十五グラムの金であった慶長小判は、百年後の宝永小判では八グラム、二百年後の天保小判では六・四グラムとなり、更にペリー来航後にはついに万延小判で一・九グラムまで軽量化してしまう。

もちろん中国もインフレの歴史であるが、後漢以降は銅銭と紙幣が通貨の主流となり、表現や説明が煩わしいのでもう止める。

それに替って、近代以降、貿易決済安定化のため導入された金本位制あるいは銀本位制のもとでインフレ防止がどのように行われたかを見てみよう。

その成功例は英国のポンドである。一八一六年に金本位制を導入してから第一次世界大戦直前の一九一四年までポンド紙幣は金約八グラムといつでも交換できたのである。しかもこの制度の始まる百年以上まえから、ポンド貨は八グラムの金と等しかった。産業革命後の英国の力を如実に示している。

それに匹敵するのはもちろん米国のドルである。

米国が正式に金本位制を採るのは一八七三年であるが、それ以前の一八〇六年にメキシコ・ドル貨(銀二四グラム)を準法定通貨として使用していた。その後、金本位制の下で、金十五グラムのイーグル金貨を十ドルとし、金との兌換ができるドル紙幣を発行し、いわゆるニクソン・ショックの一九七一年まで金本位制を維持したのである。この間に第一次と第二次世界大戦を挟んでいるのに、トロイ・オンスあたりの金価格は二〇・六七ドル(ドルの金純分一・五グラム)から一九三四年に三五ドル(ドルの金純分〇・八九グラム)に変わっただけで、二百年間も安定していた。

それに対して、ニクソンがドル紙幣と金との兌換を停止してから今日までの四十二年間には、トロイ・オンスあたりの金価格は千六百ドル(ドルの金純分〇・〇一七グラム)まで約五十倍に高騰するのである。

それではニクソン・ショックによって金本位制が終焉してから何が変わったのであろうか。

まず、全世界の国民総生産の合計をドル評価で計算すると、三兆ドルから七〇兆ドルまで実に二十三倍にもなっている。この間の人口増加は三十七億人から七十億人へ二倍、穀物生産は十一億トンから二十四億トンへ二倍強、原油の産出量も日量五千万バーレルから八千万バーレルと二倍弱である。鉄や銅の生産も総じて二、三倍であり、基礎産業の実生産は二、三倍に過ぎないのである。しかもその中には、中国などの躍進という枠外の部分も含まれている。

それでは何が、世界の総生産を押し上げているのであろうか。もちろん通貨インフレ効果が大きいが、そればかりではない。内容的に見れば総生産を押し上げているのは「実生産」のインフレというよりは、「虚経済」の部分なのである。

それは、米国の国民総生産を見るとよく判る。一九七〇年に約一兆ドルであった国民総生産が二〇一〇年には約十五兆ドルに大膨張しているが、その内の実経済とも言うべき製造部門は〇・三二兆ドルから二・七兆ドルへと二兆ドル強しか増えていない。大部分がサービス部門で増えたのであり、〇・五五兆ドルであったのが十兆余ドルまで、十兆ドルも膨れあがっているのである。

サービス部門と言えば、動けなくなった老人にせっせと医療費をつぎ込んで、長生きさせても実績となる。国民総生産の十倍にも達する金融資産が暴れ回ってもサー

ビス部門を押し上げる。それをサポートしている財源が、米国の国際収支の累積赤字(八兆ドル)と、連邦政府の財政赤字(十二兆ドル)と言うのが、構図であろうか。いずれにしても金本位制の下では、こんな芸当ができるはずがない。

したがって、虚は虚であり、こんなマルチ商法的な経済は微細な水漏れでも破綻に向って突き進む。それを防止するために世界中の知恵を集めているのが、ギリシャ問題に象徴されるユーロ危機なのであろう。

国際収支の万年赤字国である米国通貨が崩壊せずに、総合的にはドルよりもましなユーロが先に崩壊することなどおかしな話である。しかし、現実は「ドル本位制」であり、虚の経済を駆け回っている血液は「ドル」であり、どこの銀行が失血死しても、連鎖的な崩壊を起こしてしまう。だからドルが異常に高い。

昨年八月、米国議会が債務上限の引き上げに反対したため、連邦政府は国債発行ができず、米国債のデホルトが現実味を帯びた事があった。誰もが米国がそんな危険な行為を起こすはずがないとタカをくくっていたようであるが、私はぜひ一回デホルトを行ってほしいと思っていた。

虚の経済には甚大な影響をもたらすに違いないが、実経済はたくましく蘇る。

米国が、経済を活性化し、生活水準を向上させるためと称して、いくら赤字国債を発行し、資金をつぎ込んでも、そのほとんどが虚の経済に回ってしまうのであれば、結局は破綻に至る。

地震もカタストロフィーも巨大なエネルギーが蓄えられる前に起きた方が被害が少ない。

いまなら、まだデホルトしても被害は少ない。歴史上には、戦争というカタストロフィーがいくらでも例があり、天文学的なハイパーインフレを経験した国も沢山ある。要は、金持ちのお金が大幅に減価し、借金が棒引きされるだけである。

すなわち、乱暴に言えば、インフレで通貨価値が半減すると言うことは、全ての物価や人件費や国民総生産などが倍になる一方で、プラスであれマイナスであれ金融資産の評価額はそのままの数字で残るということである。だから政府の巨額の借金も国民総生産に占める割合でみれば半減し、金持ちの金融資産も半減するのである。

ただし、デホルトする前には、薩摩藩の前例を学ばなければなるまい。薩摩藩は五百万両の借金を抱え、その金利だけでも藩の収入を上回っていたのを、天保六年(一八三五)に「元金だけの二百五十年分割払い」という凄まじい条件で踏み倒した。学ぶべきは、借金踏み倒しの前に、形振りかまわず借りまくって当座の生活資金を準備

しておくことである。怖いのは、デホルトの翌日から誰もお金を貸してくれなくなることである。お金がなくては、その日から食事もできない。

米国はいずれデホルトするに決まっている。巨額の借金を抱えながら、最強の軍事力を持つ米国が、デホルトしても滅び去ることはない。だからこそ、米国は周到に準備した上で、デホルトを行うに違いない。むしろ危ないのは、巨額の債権を持つ日本や中国なのではなかろうか。

だから、デホルト後の世界の中心も米国である。しかし、「ドル印刷機」だけは止めなければならない。それは結局、金本位制に復帰することである。しかし、膨れあがった世界経済に対して金の総額はあまりにも少な過ぎる。金価格を今の十倍くらいにしなければ、バランスが取れない。それを予測して走っている国もあることを忘れてはなるまい。

近年のリーマン・ショックやEUのギリシャ、ポルトガル、スペイン、イタリア問題などを見ていると、結局は「金本位制」を放棄してしまった人間のうぬぼれを感じてしまう。

いま日本では、消費税を上げて少しでも財政赤字を減らさねばという「幼稚な正論」に対して、そんなことをしたら経済が死んでしまうと増税に反対する「無責任な暴論」が続いている。

増税なしに、財政赤字を解消することなど、できるはずがないのに、まともな学者まで消費税反対をまことしやかに唱えているのを見ると腹立たしい。

しかし、全世界が金本位制から離脱して、成長を先取りしてしまった以上、借金のつけを払うためには、「幼稚な正論」などでは対応できるはずがなく、結局は「無責任な暴論」すなわちインフレによって借金を棒引きにするしかないのである。

それにしても、生活に欠くことのできない「お米」と、装飾用以外にたいした利用価値のない「金」が、いつの時代、どの地域でも同価値を示していたというのは、経済学の問題ではなく、哲学の課題である。

現代社会は、虚の指標である「金」が暴騰していると見れば実に分り易い。

ドイツの哲学者ヘーゲルの言葉に、次のような警句がある。

「歴史から学ぶことができるただ一つのことは、人間は歴史から何も学ばないということだ」。

関東管領始末記⑧

兄弟相剋

千坂精一

一

鎌倉幕府の滅亡から後醍醐帝の崩御まで僅か六年、そのあいだに足利尊氏は光明帝を立ててみずからは征夷大将軍となり、京東洞院の自邸に幕府をひらいた。

弟直義が副将軍になったのだが、尊氏の執事高師直がそのまま将軍家の執事となって鎌倉幕府の執権北條得宗家の内管領同様将軍への上申や命令はすべて執事経由とする権力を握り、弟師泰を侍所別當に据えて武士団を統制させることによって恐いものなしとなり、勝手気儘な振る舞いが多くなっていって、それを快よく思わぬ直義とのあいだに溝ができていった。

不安定ながらもいちおう幕府の体裁は整ったのであるが、しかし、吉野朝の抵抗はまだ鎮まっていなかった。鎮守府将軍の春日顯信が父北畠親房と海路鹿島灘に上陸して小田城（つくば市）に入ったとの報らせに師直の従弟高師冬が駒館（下妻市）を攻略したが、春日顯信に奪回されて師冬は古河城（古河市）まで退却した。

信濃國（長野県）に潜伏していた北條時行が大徳寺城で挙兵したが、小笠原貞宗がこれを攻略した。

また、遠江國井伊谷城を攻められて大平城（浜松市）に退いた宗良親王を仁木義長が攻めて安倍城（静岡市）に逐い、さらに越後國に追放した。

ひとり北陸路で抵抗をつづける新田義貞の弟脇屋義助を、斯波高經らの幕府軍が攻め立ててついに掃討した。

こうして吉野朝側の鎮圧がすすんで幕府の権威が高まってゆくと、要職のあいだに驕りが蔓延していった。

派手好みの風俗を好む婆娑羅大名の佐々木高氏（道譽）は、ある日鷹狩りの帰途東山の妙法院を通り掛かったときに境内の紅葉があまりに見事だったので供侍にひと枝折らせたところ、宿直の荒法師に見咎められて枝を取り上げられ殴打されて門外に放り出されてしまった。

腹に据え兼ねた高氏は、その夜手勢三百を引き連れて妙法院を焼き打ち重宝を奪う乱暴をはたらいた。

妙法院は比叡山延暦寺の一院であった。

怒った延暦寺は神輿を担ぎ出して幕府に強訴した。

延暦寺は延暦七年（七八八）に最澄が建立したとき唯一元号を寺号に使用することを許された格式ある寺であって、たとえ幕府であっても訴えを退けることはできず、直義は高氏父子を上總國（千葉県）へ流罪に処した。

だが、じつは高氏父子は配所ではなく伊吹山（米原市）の居城へ帰ったのであった。

そのことは尊氏自身承知していた。佐々木高氏が流罪を甘んじて受けたのは将軍尊氏の顔を立てるための演技にすぎなかったのである。

なかでももっとも悪行のひどいのは高師直であった。

金ヶ崎城、青野原、奈良、堺浦など諸戦の勝利に驕って奢侈を極め、女色に溺れる有様であった。

師直は、上洛してきた出雲守護鹽冶判官高貞に同行した絶世の美人の内室に一目惚れして執拗に迫ったので、困り果てた高貞は突然内室を伴れて帰国してしまった。

この高貞の行動を、恋の怨みで怒り心頭に発した師直は、私的感情を公的法度に擦り替えて、

「鹽冶高貞出奔」

と断定して追討に向かわせた。これを知った高貞は居城の大廻城（出雲市上塩冶町）で自害してしまった。

この話は歌舞伎の『假名手本忠臣藏』に出てくる。

この芝居は寛延元年（一七四八）八月に大坂竹本座で初演されたとあるから赤穂浪士吉良邸討入りの四十六年後であるが、幕府の干渉があって実名で上演できないため、『太平記』の世界に仮託して書かれた作品である。

したがって登場人物を室町時代に置き換えて淺野内匠頭長矩を鹽冶判官高貞に、吉良上野介義央を高師直に、大石内藏助を大星由良介にしたことは周知の事実である。

人は競争相手を斃して頂点に立ち権力の座を掴むと箍が緩んで横暴になり、傍若無人な振る舞いが多くなっていってやがては制裁を受け失脚してしまうものらしい。

驕る平家を撃破して都落ちさせた功により征夷大将軍に任じられた信濃國木曽の源義仲がそうであった。

高師直・師泰兄弟もやがてその轍を踏むことになる。

それはさておき――。

佐々木高氏事件のとき幕府に対して毅然とした態度をとった延暦寺は、朝廷への応対も我意を押し通した。

夢窓疎石（國師）の勧めで後醍醐帝の怨霊を鎮めるため、離宮のあった亀山院の仙洞（御所）だった嵯峨の亀山院の跡に一寺を建立して靈亀山暦應資聖寺としたが、

元号を寺号にしたことで延暦寺の強硬な反対に遭って、光厳院はやむなく寺号だけを天龍寺と改めた。

そんな悶着ぐらいで洛中はいちおう治まっていたが、地方では相変わらず吉野朝方との抗争がつづいていた。

常陸國を掃討中の高師直の従弟師冬に北畠親房らを匿っていた小田城の小田治久が内通したため、親房は關宗祐を頼って關城（筑西市）に、春日顯時は宗良親王の第一皇子興良親王を奉じて大寶城（下妻市）に移った。

このころ幕府は、武藏守護高師冬と上野、相模守護上杉憲顯に成良親王を奉じた副将軍足利直義とともに鎌倉にいる尊氏の嫡男義詮を補佐する関東執事を命じた。

このころから上杉一族が台頭してくる。

高師冬が常陸國の吉野朝勢力撲滅に奔走しているところから、直義はもう一人の執事上杉憲顯に越後國で蜂起した新田一族の残党討伐を命じた。

憲顯は、白井城（渋川市）において上野國の経営を委せている家宰で守護代の長尾景忠とともに出陣した。

長尾氏は坂東平氏鎌倉権五郎景正の裔で、治承四年（一一八〇）源頼朝蹶起のとき同族大庭景親とともに戦って敗れ、三浦義澄預けとなって被官したが、その三浦氏が寶治元年（一二四七）六月執権北條時頼によって一族滅亡したとき長尾景茂も自害して所領を没収された。

その後長尾氏は歴史の表舞台から消えていたが、浪々の身であった景爲が上杉憲顯に拾われて執事になった。

景爲は嫡男景忠とともに新田の残党狩りに出陣した。

小田治久の寝返りで小田城を逐われ關城と大寶城にわかれてしまった北畠親房、春日顯時父子は、高師冬軍と小笠原貞宗軍に遠巻きされていて陸路で連絡がとれぬため、夜陰に舟で鬼怒川を往来して安否を確かめ合った。

孤立しながらも情報を交換し合って耐えた父子であったが、やがて舟も通えなくなり、小舟で一人二人の行き来になってしまい、なんとも心細い限りであった。

そんなところへ、吉野朝軍が一縷の希望を抱いていた新田義貞の弟脇屋義助が伊豫國（愛媛県）で病に罹り三十六年の生涯を閉じた、という報らせが届いて落胆させられたが、それでも両城は勇を鼓して守りつづけた。

小笠原軍を退けて關城の關宗祐軍と合流した大寶城の春日顯時は、結城城（結城市）の結城直朝を討ったので、白河城（白河市）の結城親朝は尊氏に通じた。

こうした足掻きが却って情況を悪化させてしまい、ついに關、大寶両城は陥落して北畠親房は吉野へ逃れた。

高師冬が常陸戦線を終結させて帰ってくると、越後國の新田残党を討伐した上杉憲顯も相次いで帰ってきた。

のちに、上杉憲顯は越後守護をも兼ねることになる。

二

尊氏、直義兄弟は夢窓疎石に勧められて元弘以来の戦死者の霊を弔う追善と国家安穏の祈禱場として全国六十六箇国と二島に設置した寺を光厳院に奏請し、院宣によって寺号を安國寺、塔を利生塔と名付けた。

そのあとで光厳院は、天龍寺の供養に臨幸しようとしたが、延暦寺衆徒が反対して強訴に及んだので中止し、半月後に尊氏、直義らが臨席した翌日臨幸した。

話は遡るが、在位十四年で譲位のあと堀河、鳥羽、崇徳帝の三代に亘り四十三年間初の院政を布いた白河院は〈治天の君〉とよばれた専制君主であったが、その白河院にして意の儘にならぬものが三つあると嘆かせたのが、賀茂川の水と、双六の賽と、山法師なのだが、その山法師こそ比叡山延暦寺の衆徒であったのだ。

その延暦寺衆徒の強訴によって白河院の近臣や地方長官（守）などが流罪になっている。

つまり、延暦寺は藤原家による摂関政治のむかしから天下を睥睨する顕然たる勢力を保持していたのである。

幕府と延暦寺が揉めているあいだに、貞和三年、正平二年（一三四七）七月、二十二歳に成人した楠木正成の遺子正行が挙兵し、北畠親房、四條隆資らと連絡をとって河内國東條城（富田林市龍泉）に本営をおいた。

そして、正行はすぐさま行動を起こし、和泉國の和田氏らの軍とともに紀伊國に入ると隅田城を急襲した。

この報が四囲に伝わると、紀伊、熊野、和泉、攝津など近隣諸国の吉野朝方豪族たちが呼応して蹶起し、八尾城（八尾市）などを攻め陥とした。

幕府は慌てて河内、和泉守護の細川顯氏を差し向けたが、藤井寺付近で楠木軍に奇襲され敗れてしまった。

幕府はあらためて細川顯氏に山名時氏を副えて再出陣させたが、またも住吉や天王寺付近で敗れてしまった。

このとき、退却する幕府軍が渡邊橋で押し合い圧し合いになって川に落ち多くの溺死者が出たが、情ある武将の正行が救出を命じて引き上げさせると傷の手当をしてやり、小袖や物具まで与えて送り返してやった。

その恩情に感じ入った五百余名は以後楠木軍に加わって正行に尽くし、ともに戦死した者が多かったという。

たびかさなる敗報に慌てた尊氏、直義は、高師直を大将に弟師泰を副将にして東海、東山、両国の兵八万を動員して一挙に楠木勢を潰滅すべく、十二月十四日に師泰が先発隊として淀に出陣、翌日師直が八幡に着陣した。

この大軍の南下をきいた正行は、三千の兵ではとても勝ち目がないから父正成が用いた遊撃戦法よりほかにないと断固決意し、弟正時と一族郎党百四十三人を引き連れて二十七日に吉野に参上して軍議を申し入れた。

だが、正行の秘策は北畠親房や洞院實世に反対されて容れられなかった。父正成のときとおなじであった。

正行は、父正成同様討ち死にを覚悟して四條隆資を通じて後村上帝に今上の御暇乞いを願い出て許された。

強硬派の洞院實世に、帝のご意志は、

「なにを躊躇いたしておる。断固出撃せよ」

であると告げられていたのだが直々のお詞は違った。
後村上帝は正行に対して、
「正行。朕はそなたたちを股肱の臣と恃みおるぞ。こたびの合戦は慎重に行動して生命を全うするように」
そう仰せられたのだ。
正行は感涙に咽び、遙かに竜顔を拝すると再び平伏した。
そして、これが最後の参内だと心に決めて退出した。
正行は正時、和田兄弟をはじめ一族郎党百四十三人を前にして、
「今度の戦は一足を退かず一所にて討ち死にいたそう」
そう誓い合うと、打ち揃って後醍醐先帝の御廟塔尾陵（奈良県吉野郡吉野町吉野山）に詣でて暇乞いをし、近くにある先帝木像安置の如意輪堂に立ち寄り縁に上がって祈願したあと、壁板を過去帳がわりにして鏃で銘々の姓名を書き連ね、最後に正行が辞世の歌として、

返らじとかねて思へば梓弓
なき数にいる名をぞとどむる

と書きとどめた。
さらに、逆修のためぞといわれてそれぞれが鬢髪を切って仏殿に投げ入れると、その日のうちに高師直・師泰の幕府軍が布陣している摂津國（大阪府）へ向かった。
というのだが、後醍醐先帝の木像安置の御堂の壁板に連名や辞世の歌などの落書きや、鬢髪を投げ入れることなどできるはずはなく、『太平記』の創作であろう。
なお、辞世の歌のほうは扉に書かれたものが遺っているというのだが、はたして正行の直筆であろうか。
それはともかくとして――。
翌貞和四年、正平三年（一三四八）正月二日、吉野朝側は高師直・師泰兄弟の大軍を迎え撃つために四條隆資を総大将にして北河内の要衝飯盛山（大阪府大東市北條）と四條畷（大阪府四條畷市南野）を防衛線に考えた。
この日、幕府側は高師泰二万騎が淀を出発して正行軍より早く生駒、飯盛の両高地に着陣し、翌三日に高師直六万騎が八幡を出発して四條（四条畷市）に着陣した。
吉野参内で遅れをとってしまった正行は、生駒山の西麓往生院（東大阪市六万寺町）に布陣したが、衆寡敵せずで所詮かなわぬところから師直の首級だけを狙った。
だが、いざ戦端が開かれてみるとはじめから守勢に立たされてしまって思うにまかせず、それでも一瞬の隙を衝いて本陣まで肉迫できた好機に師直を討ち取ったのだがそれは師直ではなく身代わりになった上山六郎左衛門だったので、結局は討ち漏らしてしまった。
幕府軍は兵力において格段に優勢であり、しかも逸早く有利な高地に布陣して待機していたのであるから、遅れたために平地に布陣せざるを得なくなった正行軍ははじめから不利な戦いを強いられてしまったのである。
「大軍を破るには一気に雌雄を決する突撃戦しかない」
正行は互角に戦えると自負した秘策を北畠親房と洞院

實世に拒まれたのでやむなく無策の突撃を繰り返した。
馬は矢を受けて倒れてしまい、全員徒歩で一団となって突撃して行ったが、隙間なく並んだ射手の矢衾を受けてつぎつぎに斃れ、弟正時も眉間と喉笛を射られた。
正行も左右の膝口三箇所と右の頬先、左の眼尻に矢を受けた。
「もはやわがこと終われり。敵の手にかかるまいぞ」
そう叫ぶと弟正時を伴って近くの松原に入り、刺し違えて自刃した。このとき正行は、二十三歳であった。
最後まで残った家臣三十余名も全員切腹して果てた。
四條畷の楠木軍は僅か一日で玉砕してしまったのだ。
この正行の死も、父正成と同様戦術を受け入れられずに負け戦を承知で死に急いでしまった感は否めない。
この合戦で主力を失った吉野朝側は、余勢を駆る高師直に吉野行宮と藏王堂を焼き払われてしまい、後村上帝は吉野の奥賀名生（五條市西吉野町）に落ち延びた。
このとき、正行の末弟正儀は留守軍を率いて赤坂城に近い兄正行が挙兵した東條城にいた。この城は嶽山山頂にあったので嶽山城ともまた龍泉寺城ともいった。
十四日、高師泰軍が攻めてきた。
地の利を得ている正儀軍は、小勢であちこちに出没して遊撃戦を繰り返し、幕府軍を翻弄して疲れさせた。
狭隘な山地戦では大軍をもっての力づくでは埒が明かぬと見た師直は、師泰に東條城攻めを一時中止させた。
その後の楠木正儀については、直義と吉野朝の和議を斡旋したり、吉野朝と幕府の和議を計って失敗したり、幕府側に降って吉野朝の行宮河内國天野山金剛寺（大阪府河内長野市天野町）を攻めたり、再び吉野朝に帰参したりしているが、そのあとは杳として消息を絶ってしまっている。謎の多い行動を繰り返した人物である。

二

足利尊氏を天下人にした最大の功労者と自負している高師直は、直義の後塵を拝することを潔しとせず悶々としていたが、楠木正成の遺子正行・正時兄弟を斃したことで名声が高まりますます高慢と専横が募っていった。
吉野の行宮を焼き払ったことはあきらかに師直の暴虐であったが、その行為を咎められることはなかった。
副将軍直義は、官僚派の上杉重能や畠山直宗からたびたび武断派高一族の横暴を聴いていて心よく思っていなかったところへ、信頼する一条堀川の大休寺住職妙吉からの讒言もあって高兄弟打倒にかたむいていった。
貞和五年、正平四年（一三四九）四月、養子の直冬を長門探題（山口県）として備後國鞆（福山市鞆町）へ赴任させた。中国地方のおさえに先手を打ったのである。
直冬は尊氏の最初の子であったが、若いころ越前局という女性と一夜の契りで産まれた子だったため半信半疑で認知しなかったのを直義が尊氏を説得して渋々認めさ

せたもののなお疎外しつづけたので不憫に思った直義が自分に子のないところから養子にして救ったのである。

この年、直義と高兄弟の不和が表面化してきた。

直義は師直誅殺を企てたが事前に漏れてしまい、師直に先手を打たれて屋敷を囲まれる事態が起きてしまった。

尊氏は、騒擾を起こした張本人師直の執事職を罷免して、甥の師世（師泰の子）を任命した。

両成敗でも承服できぬのに一方的に処罰されたことで肚の虫がおさまらぬ師直は、怨みを晴らすべく直義襲撃を謀ったがこれまた事前に漏れてしまい、直義は三條坊門の自邸から東洞院の尊氏邸に避難してしまった。

このころの密議はほとんどが事前に漏れている。逸早く相手方に注進して手柄にする者が多かったのだ。

師直は直義を追って尊氏邸を包囲した。

尊氏は主人に矢を向ける師直に激怒したが、不意のことで手勢が揃わず、討って出ることができなかった。

師直のほうも尊氏に謀叛するつもりはなく、直義を懲らしめ側近の上杉重能、畠山直宗と禅僧妙吉の捕縛が目的だったので、双方動けず対峙したままであった。

業を煮やした尊氏は兵を集めて師直を斃そうと図ったが、直義に宥められて双方の仲介役をかって出た。

直義は、身を退くことで対立をおさめようとして、副将軍の地位を尊氏の嫡男義詮に譲ることとした。

だが、師直は三人の引き渡しをも要求してきた。

直義は、三人を流罪にして逃れさせようとした。

結局、直義・師直和睦の条件は、直義引退のほか、

○上杉重能、畠山直宗を越前へ流罪。

○師直がふたたび執事に返り咲く。

の二条件でけりがついた。

このとき、僧妙吉はすでに逐電してしまっていた。

越前國江守荘（福井市）へ流された上杉重能と畠山直宗だったが、師直の執念は物凄く、上杉重能は刺客によって誅殺され、畠山直宗は自害して果てた。

この騒動のあと尊氏は二男基氏を鎌倉公方に任じて下向させ、師直の従弟師冬を執事に命ずると鎌倉にいる嫡男義詮を京に呼び戻して直義のあとの副将軍に据えた。

無役となった直義は、引退して同族細川顕氏の屋敷に移り、剃髪して出家すると慧源と号した。

ここまで粛清した師直だったがまだ一人残っていた。

直義の養子になった尊氏の庶子直冬である。

直義を排斥したことで叛旗を翻すかも知れなかった。

師直は、備後近国の地頭たちに直冬討伐を命じた。

長門探題といっても小兵力しか持たぬ直冬は、ひとたまりもなく鞆を逐われて肥後国（熊本県）へ落ちた。

ここで直冬は少貳頼尚に支えられ、婿に迎えられて後ろ盾を得たことで、強大な勢力になっていく。

そして、ほどなく尊氏・師直打倒の兵を挙げた。

直冬の父尊氏と高師直に対する竹篦返しである。

その報が京に届くと、尊氏は師直に、

「誰を差し向けたらよいか」

相談した。師直は、

「ここは諸将への見せしめのためご自身のご出馬がよろしかろうと存じます。それがしも御供仕りまする」

師直は自分に向けられた矛先を逸らせて、尊氏・直冬父子の抗争に擦り替えようと謀ったのである。

三

観應元年、正平五年（一三五〇）十月二十八日、尊氏は高師直らの直冬追討軍を率いて京を出発していった。

このころ直義は、密かに細川顕氏の屋敷を出て大和國（奈良県）の越智伊賀守を頼って身を寄せていたが、師直の不在を知って京を奪取しようにもここは吉野朝の勢力範囲にあるので迂闊に動きがとれなかった。

直義は越智の警護で同族畠山國清の河内國石川城（大阪府南河内郡河南町）に入り、越智の仲介で近くの東條城にいる楠木正儀の斡旋を受けて吉野朝に降った。

このとき吉野朝側では直義の帰順に異議が沸騰した。

側近の北畠親房が、

「これを逆手にとって幕府の内部攪乱を狙えばよい」

そう建議して許された。なかなかの謀臣である。

親房は、さっそく直義に、後村上帝の、

〈尊氏討伐の綸旨〉

を与えた。

この報が京に届くと、果たして幕府内は大混乱に陥った。

直義の挙兵に応じたのは畠山國清、細川顕氏、石塔頼房、桃井直常らの直義党をはじめ、吉野朝側の和田、楠木の一族らが馳せ参じた。

遠く関東でも鎌倉の関東執事上杉憲顕が上野國（群馬県）へもどって居城の平井城（藤岡市）で兵を挙げ、三男能憲も常陸國（茨城県）で挙兵した。

もう一人の関東執事高師冬が尊氏の二男鎌倉公方足利基氏を奉じて上杉憲顕攻めに向かったが、甲斐國（山梨県）で須澤城（南アルプス市）の上杉憲将（憲顕嫡男）に行く手を阻まれ、乱戦のなかで公方の近臣に基氏を奪われてしまい、合戦にも敗れて自害してしまった。

直義は、石川城の畠山國清とともに摂津國天王寺（大阪市）にすすみ、ここに多くの直義党が集結した。

尊氏が出陣したあとの留守居をしていた嫡男義詮は、京へ進攻してくる直義軍を迎え撃つ術もないままに光厳院と光明帝を置き去りにして急報を受けて摂津國瀬河あたりまで引き返してきているはずの尊氏の許へ奔った。

明けて正月七日、直義軍は八幡に入った。石清水八幡宮のあることで八幡といった男山城のことである。

尊氏軍が京に入ったところを直義に呼応した越中守護

の桃井直常軍が比叡山麓の東坂本から攻め込んだ。
高師直・師泰軍が迎え撃って有利に戦ったが、翌日直義に応じた小笠原政長、山名時氏らの加勢で敗れ、尊氏・義詮らは丹波路をとって播磨國（兵庫県）へ逃れた。
この間に上杉能憲が関東の兵を率いて西上し、東北では吉良貞家が直義に応じ陸奥國岩切城（仙台市）の畠山高國・國氏父子を攻略して高國を討ち死にさせた。
尊氏は攝津國打出濱（神戸市）でも敗北を喫したので、
「わが命運も今宵限り、面々覚悟せよ」
そう言って自害を決意した。
高師直・師泰兄弟も尊氏に倣い鎧、直垂をとって最後の酒宴になったところへ饗庭命鶴丸が駆け付けてきて、
「和睦です。もう合戦はありません。早まり召されるな」
そう叫ぶと、昨夜密かに畠山國清の陣に忍び入って直義のほうも和睦を希んでいること、師直兄弟を誅殺とまでは考えていないことを聞きつけたと言うのである。
それを聴いた尊氏は直義の本営八幡に使者を送った。
こうして師直兄弟を出家させることで和議が整った。
師直は猶子にした従弟の師冬を頼みにしていたのだが、上杉憲顕討伐に出陣した途次甲斐國で憲顕の嫡男憲将に阻まれ自害したことを知って落胆していたところへ、このたびの敗戦和議の恥辱が重なり完全に意気阻喪してしまっていたので未練はさらさらなく、承諾すると弟師泰とともに髪を剃って出家し、道常、通勝となった。

菩提心ではなく、只管生きたい二人の様子に人々は、
「出家の功徳は大きいから後世の罪は免れるだろうが、今生の命は助かるまいよ」
そう言って嘲笑した。
二月二十六日、尊氏率いる軍団は春雨煙るなかを直義の待つ都へ向かってすすんでいった。
同道する師直・師泰兄弟は雨をさいわい蓮の葉を笠代わりにしてすっぽり冠り、法衣の袖で顔を隠して僧侶のなかに紛れ込み、それでもなお不安は拭い切れずに尊氏のそばを離れないようにぴったりと馬をつけて進んだ。
「お屋形様のそばを離れたら殺される」
そう一途に思い込み尊氏の後に確り従いてきた師直・師泰であったが、その甲斐もなく途中百騎、五十騎と待ち受けている上杉、畠山の軍勢に目敏く見つけられて尊氏との間に割込まれ、だんだん引き離されてしまった。
現在の兵庫県西宮市と尼崎市の境を流れる武庫川のあたりまでできたときには、尊氏と師直のあいだは川を隔て山を挟んで五十町ほども離れてしまっていた。
師直が天下の執事だったころにはどんな大名高家もその笑顔を見れば多額の禄を得て大身に出世したように喜び、すこしでも不機嫌な顔を見ると薪を背負って火の燃え盛る野原を行くような気がして恐れ戦いたものだった。
まして将軍と並んで馬を進めているときなど誰が間に

割って入り、師直の先に立つことができたであろう。
なのにいまは、無名の武士らに将軍との間を隔てられ、先を行く馬の蹄に溜り水を跳ねかけられて衣服も泥塗れになる始末にて、わが身の不運が胸に応え、おりからの春雨が惨めさに涙するように師直の袖を濡らした。
師直兄弟が武庫川を渡り、堤の上を過ぎようとしたとき、三浦八郎左衛門の従者二人が走り寄ってきて、
「そこの出家、顔を隠しているのは何者だ。笠をとれ」
そう声をかけると、師直たちの冠っている蓮の葉の笠を引き千切って捨てたので師直の顔が半分ほど見えた。
「おお、願ってもないさいわいじゃ」
馬上の三浦は喜び長刀で胴を真二つにと右肩先から左脇へ斬り下げた。師直があっと叫ぶところをすかさず二度まで斬りつけて馬から落とすと三浦も素早く飛び降りて首を掻き切り、長刀の先に刺して高々と差し上げた。
師泰は慌てて逃げるところを吉江小四郎に槍で突き刺され、刀を抜く間もなく吉江の従者に首を取られた。
このとき師直の手勢は抵抗せずに四散してしまった。
師直・師泰兄弟の呆気ない惨めな最期であった。
上杉能憲と畠山直泰は、見事父親の仇を討った。

四

尊氏は攝津から、直義は八幡から、そして尊氏の嫡男義詮は丹波からそれぞれ帰洛して一堂に会した。
高師直・師泰兄弟が討たれた翌日のことであった。
師直兄弟によって仲を裂かれていた尊氏・直義であったから、因が絶たれ和議が整ったからにはめでたしめでたしになるはずなのであるがそうはいかず、直義党の上杉、石塔、桃井らと尊氏党の仁木、細川、土岐、佐々木らとのあいだの蟠りが溶解せず咥み合いがつづいた。
そのうちにどうしたことか、尊氏党の諸将がまるで示し合わせたようにそれぞれの領国へ下りはじめた。仁木頼章が攝津、弟義長が伊勢、細川頼春が讃岐、佐々木高氏（道誉）が近江、赤松則祐が播磨の国々へである。
直義は、いかに兄弟宥和したとはいえ、尊氏があまりにも無防備な解隊をしてしまったことを訝しんだ。
はたして尊氏は、まもなく佐々木高氏討伐だといって近江國石山寺（大津市）へ出陣して行くと、つづいて嫡男義詮が赤松則祐を討伐に播磨國へ出陣していった。
帰国させた諸将をすぐに討つというのはおかしい。
「これはわれらを挟撃するための擬装ではないか」
そう悟った直義は、素早く京を脱出して大原路から若狭國に至り斯波高経の金が崎城（敦賀市）に入った。
報らせを受けて京へ戻った尊氏は、細川顕氏を金が崎城へ遣わして和議を申し入れたが、直義は信用せず、却って細川顕氏を掌中に取り込み寝返らせてしまった。
尊氏と直義は互いに和睦しようと考えて近江國興福寺で会談したが、一抹の不安が払拭できずに不調に終わっ

てしまい、このことが決定的な破局を迎えてしまう。

腹背に敵の不利を悟った尊氏は、臆面もなく吉野朝に和議を申し入れて降った。幕府の将軍が吉野朝を正統と認めたことで崇行帝と皇太弟の直仁親王は廃された。

こうしておいて尊氏は、吉野朝後村上帝から、

〈足利直義追討〉

の綸旨を受けると、大軍を率いて関東へ出陣した。駿河國の薩埵峠、蒲原、伊豆國府、相模國の足柄峠と勝ち進んで鎌倉に入った尊氏は直義に降服を求めた。

いまはこれまでと和議に応じた直義だったが、牢屋のような廃屋へ閉じ込められて見張りをつけられる有様で、なんとも惨めで歎かわしい限りであった。

直義はそれから一箇月半後の観應三年、正平七年（一三五二）二月二十六日に病死した。四十六歳であった。

死因は黄疸と発表されたが、実は毒殺だったという。毒鳥の羽を酒に浸す鴆毒を盛られたのだと噂された。

奇しくもこの日は、一年まえに攝津國武庫川堤で斬殺された高師直・師泰兄弟の詳月命日であった。

関東執事上杉憲顯は所領没収越後國へ蟄居となった。

（了）

「茶道史」勉強ノート（二）

忠内正之

信長・秀吉と利休の茶の湯

織田信長と茶の湯

永禄十一年（一五六八）九月、足利義昭を奉じて上洛した織田信長は、義昭を将軍職に就任させ、みずから畿内の制圧に乗り出した。そして山城・攝津・和泉などを支配下に治めると「名物」茶道具を強制的に買収する、いわゆる「名物狩り」を行った。

永禄十二年（一五六九）に京都上京の豪商大文字屋が所持する「初花」肩衝茶入、祐乗坊の「富士」茄子茶入、池上如慶の「蕪無」花入、江村栄紀の「桃底」花入など六点を召し上げたという。

さらに翌年には堺で、天王寺屋津田宗及の菓子の絵、油屋常祐の「柑子口」花入など四点を上納させた。

このほか、今井宗久から松島の茶壺と紹鷗茄子茶入、松永弾正久秀から「つくも茄子」の茶入、大坂本願寺から白天目（茶碗）などの献上を受けている。また越前の朝倉氏を滅亡させた際にも、牧谿の「洞庭秋月」「遠浦帰帆」の絵を入手した。信長はこれらの名物道具を用い茶会を行っている。

天正元年（一五七三）十一月、京都の妙覚寺で塩屋宗悦・松江隆仙・津田宗及の堺衆三名を招き、床には牧谿の洞庭秋月の絵を掛け、台子と白天目の茶碗を使用した。茶会の後には牧谿の「遠浦帰帆」が別に持ち出され、披露されている。この牧谿の二点の絵は、足利将軍家に伝わったもので、このことは信長は名物を収集する際、足利将軍家を意識していたことを示すものと考えられる。

また堺衆を代表する商人たちを名物道具でもてなすことで、支配関係をより強固なものにするとともに、戦利品まで使用してみずからの力を誇示しようとしたものといえよう。

信長は翌年三月二十八日に、天下にその名を知られた正倉院の名香「蘭奢待」を奈良多聞山城で切り取った。四月三日には京都の相国寺でにわかに茶会を開き、香炉持ちとして知られていた津田宗及と千宗易（利休）の二名だけに「蘭奢待」一包みを与えている。足利義政以来初となる「蘭奢待」切りとりも京都や堺で行った「名物狩り」の一環と考えられる。

信長は茶会や名物道具をたいへん有効的に使っていた。それは功績のあった配下の武将たちに名物道具を下賜するとともに、茶会を行なうことに許可制をとっていたことである。のちに豊臣秀吉はこのことを「御茶湯御政道」と呼んでいる。秀吉は天正九年（一五八一）に信長から八種の茶道具を与えられ、茶会を行うことを許可されたが、この際の感激を「御茶湯御政道」だとしても、自分にとって茶の湯をすることを許可されたことは後世忘れがたい喜びだと述べている。

このように名物道具を収集し「御茶湯御政道」で茶の湯を中央政治に結びつけた信長であったが、収集した名物道具は室町将軍家にゆかりのあるもの、珠光以来のわび茶の世界で新たに名物とされたものが多い。つまり信長は、伝統的な名物を中心として収集した茶であったといえよう。

また信長は専門の茶頭とはしながったが、今井宗久・津田宗及・千宗易といった堺衆をみずからの茶会に奉仕させている。

これら三名はのちに天下三宗匠と呼ばれることとなる。これも堺の茶の湯における位置とその経済力を計算に入れたものと考えられる。

豊臣秀吉と茶の湯

天正十年（一五八二）六月、本能寺の変により織田信長は滅び、山崎の合戦・賤ヶ岳の合戦などをへて信長の後継者になったのは、豊臣（羽柴）秀吉であった。秀吉は信長配下の頃から茶の湯に親しみ、信長から茶会を行なうことを許可されてからは、信長の茶頭であった津田宗及が、秀吉の茶会の茶頭をするようになった。茶頭とは亭主に代わって茶会の運営・進行に携わる人のことである。

天正十一年（一五八三）九月、秀吉は新築なった大阪城で「御道具そろえ」を行い、松井友閑、千宗易、津田宗及など五名と、それぞれ持参の名物道具を展観して茶会を行った。この時の出品は約四十点、うち秀吉の所持道具は、「四十石」の茶壺・「初花」肩衝茶入など十六点であった。いまだ名物道具の多くは信長の配下だった宗易・宗及ら茶人の手元にあり、しかも秀吉は彼等の名

物道具を召し上げることはなかった。

天正十三年（一五八五）三月、秀吉は京都大徳寺で大茶の湯を催した。参会者は秀吉の家臣たちに京、大阪、堺の茶人百五十ほどで、秀吉は総見院（信長の菩提寺として秀吉が創建した）をはじめとして、三席分の茶道具およそ二十五種をすべて持出し、みずから点前を披露した。最終的な参会者は二百人あまりだったという。

この茶会の特徴は、これまでと違い大人数を招いて行ったことと、場所を大徳寺のように比較的人の集まりやすい所に設定したことであろう。秀吉は茶会の客をさらに拡大しようとしたのである。

同年十月七日、秀吉は茶会の場を正親町天皇の御所（禁中）に移し、天皇や親王、公家を客に迎えた。これは秀吉の関白任官への返礼が名目であった。

秀吉は御所に参内、小御所の菊見の間に天皇以下六人を招いて茶を点てている。この日新たに「利休」という居士号を勅許された千宗易は、端の座敷で公家や門跡に台子を用いて茶をすすめた。

天皇が公式に茶の湯の席に入ったのは、これが初めてで、茶の湯が公家の世界にも広がるもとになった。なお翌年の禁中茶会には、秀吉が作らせた組み立て式の黄金の茶室が持ち込まれている。

天正十五年（一五八七）十月一日、京都の北野神社でかつての大徳寺茶会を上まわる規模の茶会が秀吉により行われた。北野大茶の湯である。

北野神社の拝殿中央には黄金の茶室が据えられ、南側に作られた四つの茶室では、秀吉・利休・津田宗及・今井宗久がそれぞれ秀吉所持の名物道具で参加者に茶を点てた。おおよそ五十種ほどの名物が飾られた。この茶会には、秀吉が集めた名物道具を「茶の湯執心の者」に見せるという目的があったようで、秀吉が天下人として茶の湯の保護者たらんことを誇示する意図がうかがえる。

千利休の茶の湯

信長の支配下にあった堺は、本能寺の変後、そのまま豊臣秀吉にひき継がれた。秀吉は、多くの堺衆を茶頭にしてみずからの茶の湯にかかわらせていった。

なかでも千利休とその弟子山上宗二は、茶道史上に大きな足跡を残した。

利休は大永三年（一五七五）堺に生まれた。北向道陳などに茶の湯を学ぶ一方、南宗寺の大林宗套に参禅し、千宗易として茶の湯界に頭角をあらわしていく。また津田宗及の父である宗達とも茶の交わりをもち、天王寺家グループの一角に位置した。

そして天正三年（一五七五）頃、宗及との関係により

信長に茶頭として仕えることになる。信長の歿後も秀吉の茶頭となり、先に述べた大徳寺大茶の湯・禁中茶会・北野大茶の湯など秀吉主催の茶の湯イベントを仕切った茶頭の一人とした活躍した。

秀吉の弟、豊臣秀長が天正十四年（一五八六）に大坂城中で、豊後の大名大友宗麟に述べたという「内々の儀は宗易（利休）、公儀の事は宰相存じ候（内向きの事は宗易が、公の事は秀長がわかっています）」言葉は、秀吉政権内部での利休の立場をはっきり示している。

つれて秀吉の周囲の武将たちも積極的に茶の湯を習い、競って利休に弟子入りするようになったのである。

秀吉の利休への傾斜は年を追うごとに深まり、政治的にも重きをなすようになっていったが、天正十九年（一五九一）蜜月関係にあったはずの利休は突然秀吉の怒りを買い切腹を命じられてしまった。

利休が寄進した京都・大徳寺山門の上層に利休の立像が置かれ、その下を通行する勅使や秀吉を踏みつけることになるのが不敬だということ。また茶道具の売買で私腹を肥やした。というのが直接的な理由であった。背景をめぐって様々な仮説が出されているが、真相はいまだ明らかにされていない。

ともあれ、六十一歳で秀吉の茶頭になってからの約十年間、「天下一の宗匠」として、利休が茶の湯に与えた影響は極めて大きなものであった。

利休は茶の湯を「わび」に徹したもっとも簡略を形にしようとしていた。その初めは茶室の変革である。四畳半・三畳台目の茶室が大半を占めていたのに対し、天正十年頃、二畳敷の茶室を造りだしたのである。現代、京都府大山崎町にある妙喜庵の茶室「待庵」である。待庵は二畳という極小の空間に、隅を壁土で塗りこめた「室床」や「躙口」など、のちの草庵茶室の基調となる要素が付け加えられている。

また、天正十四年（一五八六）の茶会には「宗易形の茶碗」が出現しており（松屋会記）、これが利休が長次郎（楽初代）に作らせた楽茶碗であったと考えられている。

最晩年の天正十八年（一五九〇）には竹の花入が茶会に登場し、竹中節茶杓（竹製の茶杓で、中程に節の盛り上がりのあるもの。利休による茶杓の基本形とされる）や与次郎作の釜などが利休道具として定着する。さらに、往古の禅僧ではなく現在生きている人物の書を茶室の掛物として使用した。それは利休の参禅の師である大徳寺の古渓宗陳の墨跡である。ここに禅の精神を中心に置こうとした利休の茶が体現されているといえよう。

利休の弟子山上宗二（一五四四―一五九〇）は織田信長時代から堺の茶人として認められていたが、秀吉政権になって茶頭の一人として活躍した。しかし秀吉の勘気

をこうむり、高野山、小田原と諸国を流転し、秀吉の北条攻めの際、小田原で歿した。

宗二が残した伝書「山上宗二記」は、利休の茶の内容が随所に記されている貴重なものである。そのなかで「（利休の茶は）普通の人間には無用なものである。利休は名人であるが故に、（山を谷、西を東）というように常識を打ち破り革新的な茶の湯であった」と書き、利休の茶の湯が常人の認識しえないところ迄到達しつつあったことを述べていることは注目すべきである。

信長は、こうした利休の進取性を多少理解しつつあったが本能寺の変で早くも歿してしまった。一方秀吉はあくまでも権力者として覇王の茶の湯にこだわった。

伝統を重んじつつも新しい時代と社会に自分の夢を託そうとした利休と、あくまでもおのれの権力に固執する秀吉との熾烈な相剋があったのである。しかし秀吉と利休の存在によって茶の湯は日本の文化として定着することになるのである。

大名茶道の始め――江戸前期

利休亡き後、茶の湯の世界は変革期を迎える。茶の湯が文化として定着し、趣味と教養の世界に立ち戻りはじめたといってもよい。

この時期は利休の茶の湯を学んだ人々が自分の茶の湯を主張して本格的な活動をはじめた時期にもあたっている。利休の嗣子千少庵、細川三斎、織田信長の弟有楽、古田織部、上田宗箇などであった。

少庵は利休の切腹後、会津の蒲生氏郷に預けられて数年を過ごしたが、文禄の末年（一五九五）に許されて帰京、嗣子宗旦とともに利休の茶の湯の再興をめざして活動を開始していた。

ここで千利休を巡る茶道系図の流れを見てみたい。

（芳賀幸四郎先生の「千利休」より）

千利休　豊臣秀吉　豊臣秀長　古田織部　織田有楽斎
細川忠興　藪内紹智　南坊宗啓　三好実休
荒木村重　千道安　千少庵　木下勝俊
蒲生氏郷　桑山重晴　瀬田正忠　芝山堅物
山右近　山上宗二　富田左近　金森長近
牧村兵部　住吉家宗無　万代屋宗安
千紹二　重宗甫　針屋宗和　久田宗栄

そしてこの利休の弟子たちの中から、次のような流れがさらに生じている。

古田織部から　徳川秀忠　小堀政一（遠州）　慈胤法親王　近衛家熙
千道安（紗安）から　金森可重　金森宗和　桑山貞晴　片桐貞昌（石州）

千少庵（宗淳）から　千宗旦　千宗佐　千宗室　千宗守
藤村庸軒　杉木普斎　山田宗偏

流儀の呼称は次の通りである。

古田織部　織部流
織田有楽斎　有楽流
細川忠興　三斎流
藪内紹智　藪内流
小堀政一　遠州流
千道安の流れである　片桐貞昌　石州流
千少庵から流れる　千宗佐　表千家　不審庵
千宗室　裏千家　今日庵
千宗守　武者小路千家　官休庵
藤村庸軒　庸軒流
杉木普斎　普斎流
山田宗偏　宗偏流
久田宗栄　久田流

千利休の直弟子で次の七人を利休七哲と呼んでいる。（後世の史家によって変動もある）

古田織部　細川忠興　蒲生氏郷　瀬田正忠　芝山堅物
高山右近　牧村兵部

（この七哲の中で、最後まで利休に対し身の危険を顧りみず好意を示し続けたのは、古田織部・細川忠興・蒲生氏郷の三人であった）

利休歿後の茶の湯は何人かの人物によりリードされた。その中には古田織部や細川三斎など、のちに「利休七哲」と呼ばれた人々がいる。

これらの人々を見ると武家の名前が多いことから、利休の茶が、大名や武家たちが行った大名茶のなかで大いに評価されたものと考えられる。

次に利休以後の茶道の流れについて述べてみたい。

古田織部の茶の湯

利休の没後に茶の湯の第一人者とされたのは、秀吉に仕える武将であった古田織部（一五四三―一六一五）であった。古田家は父重定の代から信長に仕える武家であり、織部は美濃で生まれた。若い頃は佐助名のり、のち景安、さらに重然と改めている。信長没後は秀吉に仕え、天正十三年（一五八五）に織部正に叙せられ、以後古田織部と通称されるようになる。また大徳寺の春屋宗園（一五二九―一六一一）に参禅し、金甫の号を与えられた。

若い頃から茶の湯をよくし、利休との交渉は本能寺の変があった天正十年ごろからと推察される。利休の死まで親しい交流が続き、利休が蟄居を命じられて堺へ送られた時には、細川忠興（三斎）とともに淀の泊で密かに見送っていた。

武将として信長・秀吉の多くの戦いに加わり、山城国西岡に三万五千石を領した。秀吉の没後、慶長三年（一五五八）に家督を子に譲ったが、関ヶ原の戦いでは東軍に加わり、その功績により家康から大和国に七千石を与えられている。二代将軍秀忠に招かれて江戸で茶の指南を行ない、天下一の茶の宗匠とされるようになった。

しかし慶長二十年の大坂夏の陣のさい、家康・秀忠が京都から大阪に向ったあと、豊臣方と呼応して京都を焼き払い二条城を奪取する陰謀を企てたとされ、豊臣氏滅亡後に織部とその子息たちは切腹を命じられて断絶した。ただし、この陰謀の真偽についてはよくわかっていない。現実性にも乏しく、少くとも織部自身がかかわっていないものと推測されている。

織部自身は元来ハト派だったといわれ、その交友関係からして、彼の存在があくまでも豊臣方を根絶やしせんとする家康の気がかりとなり、「疑わしきは排除する」という方針の犠牲になったものだろうと筆者は推察する。

それにしても、宗二（一五九〇）、利休（一五九一）、織部（一六一五）といずれもが時の権勢によって死罪となっているのは考えさせられる。茶の湯の殉教者たちとでもいうべきであろうか？

利休の歿後織部は秀吉の意向に基づき、武家茶道の確立に力を入れ大名茶人としての高い評価を受けるに至った。

織部は利休の茶風を変革し、独自の好みを打ち立てた。即ち、利休によって完成された中世風の侘びた茶事を、武家好みの多様多彩な作意に基づき、近世風の華やかなものに改めたといえる。

動的な美、豪壮な美、華麗な美の表現は時代の進行に即応するものでもあった。

織部好みの茶室としては猿面茶室・八窓庵・安楽庵・燕庵などが有名で茶器には沓形茶碗、餓鬼腹茶入、織部形伊賀水指などがある。また会席道具にも形状・色彩・文様ともに斬新・大胆な技巧がなされた。陶器が織部の好みによって美濃で焼かれて、それが後世織部焼で知られる。

織部には多くの門弟が居たが、本阿弥光悦・小堀遠州の二人は名高い。

なお、織部の相弟子として細川三斎が存在するが、三斎は織部と対照的に利休の教えを実直に守り通したことで有名である。後に三斎流茶道の開祖ともなった。

京都の商人と茶の湯

京都の大文字屋は戦国時代から続く京都屈指の豪商で、中国宋代の禅僧虚堂智愚の墨跡を持ち伝えた家であ

った。虚堂の法脈は大徳寺の開山宗峰妙超に伝わったので茶の湯に関わりの深い禅僧である。

この虚堂の墨跡は大文字屋四代宗味の時に切り裂かれ、以後「破れ虚堂」と称され、それまで以上に有名となった。現在東京国立博物館に収蔵され時たま展示される。

宗味の時代は江戸幕府の組織もまだ未熟だったから、幕府も大名家も経済力のある商人達の助けを借りる必要があった。

茶屋・後藤・亀屋・本阿弥・雁金屋等などがその代表的な存在であり、大文字屋も同じく諸大名と関わりが深く、幕府や筑前黒田家や薩摩の島津家に出入りしていたが、そのあいだをとりもったのが茶の湯であった。

千少庵・宗旦の茶の湯

利休の子少庵は、秀吉から千家再興が許されたあと、本法寺門前の屋敷に「不審菴」「残月亭」などの茶室を設け、利休から伝わる茶法を守ることに努力した。

少庵の長男宗旦は、当初大徳寺の春屋宗園のもとで禅僧としての修行に励んでいたが、利休歿後の文禄年間（一五九二―九六）に千家に復帰し、茶人としての道を歩み出す。

寛永年間（一六二四―四四）には大徳寺の玉舟宗播、鹿苑寺の鳳林承章、近衛尚嗣、片桐石州らと多彩な交流をくりひろげ、慶安年間（一六四八―五二）には後水尾院の東福門院へ、自作の竹花入を献上している。宗旦の茶室としては、裏千家の一畳台目「今日庵」や、四畳半の「又隠」など、わびの厳しさを表わしたものが残されている。

千家流の茶の湯については後の稿で述べる予定である。

金森宗和の茶の湯

金森宗和（一五八四―一六五六）は飛騨高山の領主、金森可重の子として天正十二年に生まれた。名は重近、初め豊臣秀吉に仕えて従五位下飛騨守に叙任された。のち徳川氏に属したが、所領のことで不平を抱いたので、慶長十九年父の怒りに触れて勘当され、母と共に京都に隠棲し、茶の宗匠として生活を送った。

大徳寺の紹印伝双に参禅して宗和と号した。近衛応山、一条昭良、鹿苑寺鳳林承章、小堀遠州、片桐石州らと親交し、これらの人々を介して禁中に出入した。茶風は侘び（乞食）宗旦と対称して、俗に姫宗和と呼ばれ、優麗で上品な好みで、禁中・公家の茶に大きく影響した。

また野々村仁清（生歿年未詳）を指導して御室で優美な焼物を作らせ、茶の湯の世界に大きな影響を与えた。

小堀遠州の茶の湯

京都伏見奉行・遠江守小堀政一（一五七九―一六四七）は近江小堀村の出である。父は浅井長政に属した武将であったが、のち豊臣秀長、秀吉に仕えて大和で一万五千石、さらに徳川家康に仕えて備中高梁城（岡山県高梁市）を預けられたという。幼時から父に茶の湯を学んでいたといわれる。

一六〇四年（慶長九年）、父の跡を継いで徳川家康に仕え、幕府の官僚として活動をはじめる。作事奉行としての活動が多く、伏見城、大坂城、二条城、江戸城、水口城（甲賀市）、仙洞御所などの作事に活躍した。

一方、茶の湯は古田織部に学んだ。織部を通じて利休の茶の湯を学んだと言ってよい。たゞ利休と出合ったのはたった一度だけであったので、その茶は織部の影響を強く受けたものであった。

織部は秀吉の希望もあって大名相応の茶の湯を作り上げようとしていたので遠州が学んだ茶の湯とは、すでに大名風に変化を遂げつつあった織部の茶であり、後に遠州が新たに大名風の茶を作り上げる素地ともなった。

遠州が本格的に茶の湯をはじめたのは寛永年間（一六二四―四四）に入ってからである。京都伏見奉行に任ぜられ、新奉行所が完成した直後のことであった。

現在、遠州が主となった茶会はおよそ四百会が知られるが、茶会の記録が多くなってくるのはこの時期からのことである。

これら遠州の茶会記に見られる特徴的な点の一つは「小間」に並んで「鎖の間」と呼ばれる数寄の広間を併用した茶会が多いことである。たとえば正保年間（一六四四―四八）の茶会を取り上げて見る。「小間」での茶が終った後に「鎖の間」に移って会が続けられている。「鎖の間」の床には三幅対と香炉、違棚には巻物や香合、印籠、さらに付書院には文房具などが飾り付けられていた。まさに美術品の鑑賞と喫茶が混じり合った新たな形式の茶会であった。

さらに、ここで使われる道具類の中には、後に「中興名物」と呼ばれるようになる。新たに遠州によって見出されたものが多く含まれていた。春屋宗園や江月宗玩など大徳寺僧による墨跡や藤原定家の色紙、遠州の好みによって焼かれた瀬戸や、高取、膳所などの陶磁器、祥瑞、染付など中国への注文品などであった。

遠州の茶会への出席者が大名や僧侶、上層の町人で占められたことは遠州が作り上げようとしたのは武家のための茶の湯であったことを示している。

遠州の茶の湯の到達点の一つは一六三六年（寛永十三年）の、三代将軍家光への献茶であった。遠州が作り上げた新たな形式の茶の湯が将軍により公認されたことによって、遠州による茶は後に諸大名の間に伝わり、大名

茶道の形式となったのである。

遠州の茶の湯は「きれいさび」という言葉で表現される。その茶風は華やかな中にもわびのある風情を基準としたもので「小堀遠州書捨文」には王朝的な古典の教養をもった遠州の美意識があらわれている。

「遠州蔵帳」のなかの歌銘をもつ茶入・茶碗・茶杓などは優美なものであり、さらにその好みの茶器を焼かせた七窯（志戸呂・膳所・上野・高取・朝日・古曽部・赤膚。異説もあり）、その他伊賀、信楽、丹波の作品からも遠州の茶を感じとることができるのである。

遠州は大名茶人として大成したばかりでなく、作事における実績や代官奉行としての立場からも重要な役割を果たした。

正保四年（一六四七）二月に伏見屋敷で死去した、六十九歳であった。

宮廷・公家の茶の湯

豊臣秀吉の禁中茶会によって宮中に持ち込まれた茶の湯であったが、それはなかなか定着しなかった。

御水尾院の時代になると独自の茶の湯サロンが形成された。御水尾院は近衛家を継いだ弟の信尋（応山）らの公家たちと茶会を催し、修学院離宮内に築かせた窯では好みの茶陶を作らせている。同じく弟の梶井門跡常修院宮慈胤法親王は独自の宮廷様の茶法を編みだし、その後の宮廷の茶に大きな影響をあたえた。

また御水尾院の子である後西天皇も自作の茶杓、花入や茶会記を残している。

宮廷とかかわりの深かった茶人に、既求した武家を捨てて京都に隠棲していた金森宗和がいる。優美な道具を好み、とくに京都で色絵陶器を完成させた野々村仁清を指導したことでも知られている。

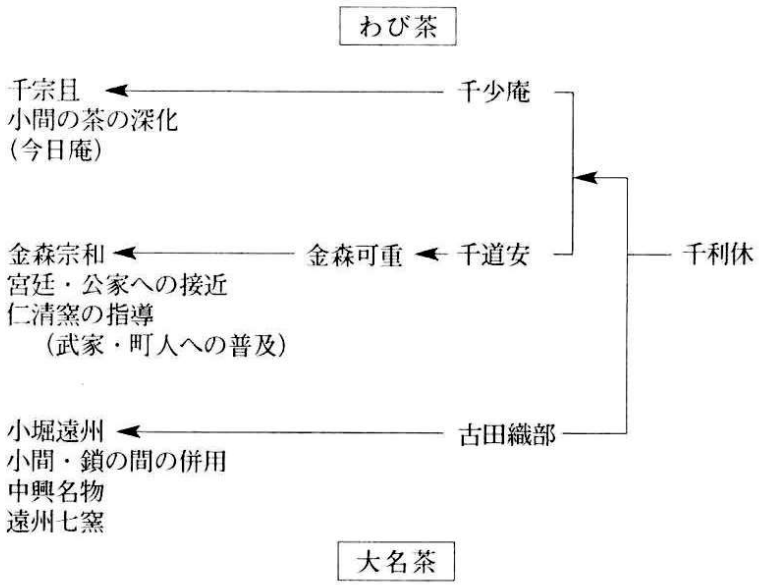
江戸時代を通じて茶の湯に親しむ公家は多かったが、なかでも異彩を放つ人物として予楽院近衛家熙（一六六七―一七三六）がいる。

多彩な客を招いての三百回を超える茶会の記録を残し、茶の湯についての学究的ともいえる考察を「槐記」（近衛家出入りの小児科医であった山科道安による聞書）にとどめている。

続く

参考

『わび茶と大名茶の系譜』



短歌　三十首

曽根竣作

戦後風景

あぢさゐの藍濃きうへを喪のいろの揚羽二つが風に絡まる

為すべきを為さず歳月流れゆきめぐりしづかに初秋をむかふ

帆船の白きふなべり夕づきて宴のあとのさざ波かへす

強いられて戦闘帽を冠りたる若き日の無惨いまにし思へば

戦闘帽何か哀れむ戦後かやわが青春はここに焉れり

いわし雲一刷け浮かび闇市をさまよひ歩きし戦後も杳し

平らかに鳩ら歩めるフェンス内地位協定のいつ迄つづく

新橋の駅にたたずむ街娼の隻脚もあり　はたして生くるや

派手な服にばさらの髪をなびかせて〝GI〟とつるみし大和撫子

〝GI〟とふ言葉知る人少なきや　アメリカ兵の別称なりき

白き大輪

誰がおきしかポストの上の種子蒔けば薔薇の白き大輪ひらく

上下して白き日傘のわたりゆく垣のあぢさゐ彩重きかな

海峡のせまきを女のみどとし白鳥の群れ風にさからふ

ぬばたまのはね一葉を落としたる鴉頭上を高鳴きて去る

浮上する闘魚の唇のするどさよ獲物はいつも水上にゐる

雨あとの私鉄沿線しづまりて限界集落秋の日かへす

丘のなだりの木犀百花咲き乱る無人の駅に滑り込みたり

川の面をきらりと光り柳の芽ただ万葉の裳裾と揺れて

トンネルを抜ければ一望さがみ洋藍瑞々とせり上りくる

『夜と霧』、アウシュビッツの残酷のあとに彼らは宴せしとふ

　恙あらずや

朝の陽にかがよひ揺るる胡蝶蘭賜びし人らのかんばせ杳か

立秋に色あらばわれは茶褐色野分のあとの流れに似たり

白き砂上海星うごめく秋ちかく〈氷〉の旗にざんざ雨降る

百日紅の粒花しらじら零れつつあなたうっすら鰯雲浮く

ゆったりとユトリロの絵の模糊としてきのふの少女遠去かりゆく

煙突のけむりもくもく流れつつ海市のうかぶ夕べの湾かな

手を挙げて山下り来し楚囚の日忘れんとしてここに生あり

まだ啼かぬ鈴虫の子をいただきぬ代赭の土にひっそりとせり

窓近く涼しき棚にかごを置きすず虫の秋ひそかに待たん

台北県、淡水鎮の北新路、恙あらずや級友の周君

　海市・・・蜃気楼のこと

短歌

行雲流水（三十六）

石黒修身

近詠二十首

ロンドン五輪

ささやかなナショナリズムか五輪の場一喜一憂この昂（たかぶ）りは

八時間時差のもたらす寝不足を楽しみて居り老いの目こすり

五輪にて敗れた選手の「四年間この日のために」は聞くのも辛い

お家芸潰（つい）える裡に新興の種目が勝ちて目を瞠（みは）りたり

愚かなるナショナリズムか五輪での勝負に絡め示威する隣国

政治・社会

ビンテージ「夕張メロン」は騰（たか）けれど町の復興その後を知らず

政局と五輪のニュース交（まじ）るなか「津島恵子」の訃報がよぎる

ポピリズムこの病弊はいつの代もどこの国でも無くならぬもの

反日が「愛国無罪」になると云う彼の国民の無恥を怖れる

隣国の元首が突如「竹島」へ愚かなるかなこのパホーマンス

改選で弊履の如く廃される党首はあわれ党略のため

「トラフ」とう地震予測の計数は天の啓示か悪魔の声か

日常・身辺

夏風邪をひきてうつうつ日を過ごす非生産なる吾ここに居て

身のまわり耳とおき人増えておりつい声高になる吾を懼れる

耳とおくなりし友との語らいは寄り添うように酒酌むときも

稲妻を曳てき雷雨の去りし後涼気微かな夜半となりぬ

炎暑去り九月となれば鰯雲ひぐらしの声とみに小さく

大漁か否かは知らず北海の秋刀魚を焼きて旬を味わう

姿良き鮎の香りは急流に生いし苔から来るものと識る

夏休み小旅行せし男孫らから預かりしもの犬・兜虫・亀なり

漢詩

潮騒錄（七十）

鯨游海

聽詩吟

平成廿四年七月

朗朗誰吟落日調
啾啾切切轉蕭蕭
非經非呪非鳴咽
嫋嫋天聲化玉簫

押韻・調蕭簫

〈詩吟を聴く〉

朗々と誰か吟ずる　落日の調べを
啾々　切々　転た蕭々
経に非ず呪に非ず　嗚咽にも非ず
嫋々たる天声　玉簫と化せり

〔注　解〕

漢詩の楽しみ方には五つのアプローチがある。①古今東西の名句を味読し観賞すること、②書の道、③詩吟の道。更に病膏盲に入ると④従来に無い新解釈を考え論証せんとすること、⑤自作すること、等である。

さて私の友人に詩吟の名手が複数おられ折りに触れ吟じてくれるが、これが実に巧い。餘韻嫋々、音吐朗々、ときに高くときに低く、或は強く或は弱く……。いつもながら聞き惚れて陶然となる。

朗朗＝音声が明瞭でよく通る状態。はっきりよく透る。
啾啾＝鳥、虫などの寂し気な鳴き声。亡霊の泣き声。
切切＝ひそひそと囁くさま。悲しく寂し気なさま。
蕭蕭＝もの淋しいさま。荊軻・易水歌「風蕭蕭兮易水寒　壮士一去復不還」。李白・別友人「蕭蕭班馬鳴」。
嫋嫋＝音声が長くか細く続くさま。しなやかなさま。

一句中に「重言」を五ヶ、計十字も多用した珍らしい詩。また転句の三ヶの非も異例。

☆草木枯れ兵士語らず馬啼かず
ただ立ち竦む落日の丘

釜鎮魯西亞大統領　　平成廿四年三月

素衣黑帶雪原雄
俊逸飄如無敵熊
四島返還眞實現
和親俠氣永稱功

押韻・雄熊功

〔口語訳〕

親日派のプーチン大統領は素衣黒帯の柔道家でもある。この雪原の雄者は抜群の才能を有し、また予期せざる行動力、決断力を持つ。恰も無敵の白熊の如くである。この際本当に四島の返還が実現したならば、私たち日本人は彼の和親の俠気に感銘し、永久に彼の功を称えることであろう。

☆どさくさに銃で奪ひし四つの島
いざ返さんか吾は黒帯

橋下徹浪花京兆尹　　平成廿四年三月

深謀遠慮似南洲
清濁併呑疑海舟
救國義人亡國輩
永田町外獨悠悠

押韻・洲舟悠

〈釜鎮魯西亞大統領〉

素衣黒帯の　雪原の雄
俊逸　飄として無敵の熊の如し
四島返還　眞に実現らば
和親の俠氣に　永えに功を称えん

〔注　解〕

黒帯＝柔道の有段者は黒い帯を着用する。プーチン大統領は柔道を愛好する有段者。また親日家で知られる。

俊逸＝抜きん出た才能を持つこと。杜甫・春日憶李白「白也詩無敵　飄然思不群　清新庾開府　俊逸鮑參軍」とあり。この句より五文字を借用した。

俠氣＝おとこ気。弱きを助け強きをくじく心意気。

第二次大戦終了間際、日ソ中立条約を一方的に破棄して侵攻、占領された北方四島。国後、択捉、歯舞、色丹。

一九九三年エリツィン大統領が「四島の帰属問題を法と正義に則って解決する」と宣言した。プーチンも大統領選挙の直前「北方領土問題を解決したい」と述べた。

〈橋下徹浪花京兆尹〉

深謀遠慮は　南洲に似たり
清濁併呑は　海舟かと疑ごう
救国の義人か　亡国の輩か

永田町外獨悠悠

〔注　解〕

深謀遠慮＝遠い先のこと迄考え深い計画を巡らすこと。南洲＝西郷隆盛の号。薩摩藩士。維新の功労者。

清濁併呑＝度量が大きく包容力のある喩え。海舟＝勝安芳の号。幕臣。維新の功労者。

永田町＝政界（国会議事堂の所在地より）

義人＝正義漢。自分の利害を考えず他人の苦しみを救う人。

京兆尹＝都の長官。ここでは大阪市長。京兆は土地が広く（京）人口が多い（兆）所で首都を指す。尹は長官。

〔口語訳〕

橋下徹大阪市長の「深謀遠慮」（思慮深さ）は幕末維新期に大活躍した西郷隆盛にそっくりだ。

また彼の「清濁併呑」（大きな度量と包容力）は同じく新時代を拓いた幕臣勝海舟の再現かと疑う程だ。

はたして彼は救国の義人＝日本の救世主であろうか、はたまた彼は国を亡ぼす売国奴に過ぎないのか。

中央政界から遠く離れた大阪に在って、今の所独り悠々と独自の政治を行っている。将来中央に出て活躍する救国の志士であって欲しいのだが……。

☆青海原身を尽くしてぞ漕ぎゆかん
浪速の海嘯行く方知らずも

《漢詩の流れ59・清》黄景仁②

乾隆三十六年（一七七一）二十二歳、貧窮の中で職を求め郷里を出奔する際に作った。

別老母（老母に別る）

搴帷拜母河梁去　帷をかかげて母を拝し河梁に去る。
白髪愁看淚眼枯　白髪　愁えて看る　涙眼枯るを。
慘慘柴門風雪夜　惨々たる柴門　風雪の夜
此時有子不如無　この時　子有るは　無きに如かず。

河梁＝地名。送別の地を指す代名詞のように用いる。漢の李陵が匈奴の地で蘇武に贈った詩に「手を携えて河梁に上る」とある所から引用されるようになった。

途中遘病頗劇愴然作詩（途中病に遘って頗る劇し。愴然として詩を作る）

搖曳身随百丈牽　搖曳して身に随う百丈の牽
短檠孤照病無眠　短檠　孤り照らし　病んで眠り無し。
去家已過三千里　家を去って　已に過ぐ三千里
堕地今將二十年　地に堕ちて　今将に二十年ならんとす。
事有難言天似海　事には言い難き有り　天は海に似たり、
魂應盡化月如烟　魂は応に尽く化すべし　月は煙の如し。
調糜量水人誰在　糜を調え　水を量る　人誰か在らん、
況値傾囊無一錢　況んや嚢を傾くるも一銭無きに値うをや。

短檠＝燭台。盡化＝消え去る。尾聯の訳＝水を量って糜を調理してくれる者はいない。まして無一文の身には。

詩

石野茂子

一〇〇〇の瞳

人の魂は四次元の世界で
下界を指差し
あの夫婦のもとに生まれたいと願う
その夫婦の魂がいいよと答えると
神はその子が三次元の世界で
どのような使命をもって生きるのか
お手紙を持たせる
そして　コップの忘却の水を飲んで
人として三次元のこの世に生まれて来る
その生命の尊厳こそ「報徳訓」の説く
祖先　夫婦　子供　子孫の
命の連鎖である
「父母もその父母も我が身なり
　我を愛せよ　我を敬せよ」
皆さん　今を一生懸命生きて下さい
一〇〇〇の瞳は微かにうなずいた
以徳報徳の聖地　報徳学園
報徳の風は
確実に子供等の心に吹いている

机

若い女性等は
ディズニーのキャラクターの絵柄
デスクマットの下で
それぞれの
人生に関わった紙片は
机の主の顔を
毎日見上げながら
己の位置の確かさをキープしている
私の机
何も無い
ひたすら仕事をする場所
私の所有物ではない
仕事をさせていただくという
机という名の借り物
そういえば
子供も主人も
私の所有物ではない
神様からの借り物

流行漫画の主人公の横顔
仕事仲間との写真
観光地のしおり
花や風景写真
郵便番号一覧表
男性職員は
踏まれても根強く忍んで道草の
やがて花咲く春は来るなり
また大きい樹には深い根がある
様々な人間力の格言
外国産バイクカタログ
年配の男性は
得意先の電話番号
特徴のある名刺
孫の写真
上司が掲載された新聞記事

創作童話

石野茂子

大きな木

光陽の里が雑木林のころ、東西に抜ける林道がありました。山道ながら往来は多く、時には遠方を行き交う旅の人達もいました。大きな木の下でよく暑さや疲れを癒し、再び出立して行きました。そんな雑木林のなかでも、とりわけ目立った大きな木が三本ありました。桐の木と楠木と名も無い大きな木でした。中でもいばっているのが桐の木のきり子でした。

「私はスタイルもいいし、初夏から巾広の柔らかい緑の葉が茂り、木と葉のバランスも見事だわ。そして、薄紫色の可憐な花が咲き甘い香りが漂うと、往来の旅人達は、綺麗だ、綺麗だと言って見惚れるわ。そして秋になって実が実るころ、薄茶色の真綿で包んだような実が生るの。すると、華道家達が争って採りにくるわ」

と、それはそれは、誇らしげに他の木々に自慢するのでした。

すると、楠木のくす雄が、

「僕は、子供達が木登りをするので、くすぐったくてしようがないや。それにね、いろいろな鳥がやってきて葉の中で羽を休めて行くよ。不如帰、百舌、あっそうだリスも来るよ。長雨が続くとね、みんな葉の中で雨宿りをして、いろいろな話をしてくれて毎日がとても楽しいよ」

と、さわやかな声で話しました。

「でく男君は？」

ときり子が大きな木に聞きました。

「ぼっぼっ僕は何もないなあ」

と、小声でもじもじしながら、大きな木が呟きました。

「そうね、でく男君は何のとりえもないわね。ただ、大きいだけで。だからでくの坊って呼ばれるんだわ」

と言って、きり子は高笑いをしました。

ある朝、でく男は眠い目をこすりながら目をを開けました。何か大きな音と悲鳴のような声が聞こえてきたからです。

「キャー助けて」

「痛い！痛い！何をするんだよ！」

きり子とくす雄の声です。みると、大きな重機できり子とくす雄の大木を切っているのでした。桐の木を切っている職人等の親方が根本を手でたたきながら、

「これは上等の桐の木だぞ。今どきこんな桐の大木があったんだなあ。箪笥にして三棹分だな」

親方は満足そうに、職人等に声を掛けました。

楠の木を切っている職人等の親方も、木の回りを回りながら見上げていました。

「この木も好い木だぞ。いろんな家具が出来るぞ」

親方達の口々に褒めあう声を聞いていて、きり子は頭にきていました。

「冗談じゃないわ、私の命がこれで終わるなんて。私もっと楽しみたいわよ」

すると、くす雄も、

「僕だってまだまだこの雑木林に生きている動物や鳥たちと遊びたいよ。僕がいなくなったら、みんな困るだろう？」

両側から、木を切る音ときり子とくす雄の絶叫を聞いていてでく男は何も出来ず、困った困ったとブツブツ言いながら、この雑木林から友達がいなくなる寂しさにうつむいていました。そのうち木は切り倒され、夕暮れが迫るころ辺りは静かになりました。でく男は、毎日さんざん嫌味を聞かされていた友達がいなくなり寂しくていつのまにかぐっすり眠りこんでしまいました。

翌朝、体中がくすぐったくてでく男は目を醒ましました。あろうことか沢山の鳥がでく男の木に止まり、木にいる害虫をつついたりして休んでいました。そのうち枝をかけめぐるようにリスがやってきました。

でく男は沢山の友達が出来た事が嬉しくて、風が吹くたび木を大きく揺らしました。

遠州七不思議「三度栗」

石野茂子

延歴十年（七九一年）頃、一人の旅の僧が諸国を歩き飢饉に苦しむ村々を多く通り過ぎながら、遠州三沢の村までやって来ました。昼日なか、秋の陽が照りつけるなか蝉の鳴き声もなくなり、かすかに虫の声が聞こえて来ました。僧は昨日から何も食べておらず、かといってこの飢饉のなか食のようなものはなく、前方のお堂の日陰に身を寄せようとやってきました。長旅でふらつく足を地につけ腰を下ろしました。しばらくして一陣の風が過ぎ去りフッと我にかえると、村の子供たちが僧の周りを囲み心配そうに見守っていました。僧が子供たちに気づき見ると、どの子も手に持っているものをかわるがわる口に運んでおりました。なおも良く見ると、子供たちは栗を食べていたのです。飢饉ゆえ、稗・粟もなく栗を食用にしていたのです。思わず僧は、

「私は旅のもの、昨日から何も食べておらず、私にも一つ分けて下さらんか」

「いいよ」

と子供たちは口々に言って、ほこりだらけの身なりの貧しい僧に快く栗を差し出しました。僧は手に余る焼き栗を、一つ一つ丁寧にむきながらおいしそうに頬張りました。すっかり元気を取り戻した僧は、子供たちに諸国を巡って来た話をしながら、子供たちの痩せた身なりを見ておりました。どの子も目をキラキラさせて、僧の話をじっと聞いておりました。日が暮れぬうちにと僧は旅立つ前に、子供たちに言いました。

「皆が手に持っている残りの栗は、晩飯の代わりの栗だろう。今日は、私が皆の分までいただいてしまい本当にありがとう。お礼に、来年からこの村の栗を三度実らせよう」

というなり、僧は手に持っている錫丈で地面をトントンと突きました。そしてそのまま、日が沈む山の方へ去って行きました。一人の少年が家に帰り、その日僧に出会った出来事を一部始終親に語りました。

「そんな馬鹿な！一年に三度、栗の実が生るもんか。そんな乞食坊主のいうことなんか」

「うそじゃないよ　オラが差し出した栗を手の上で大事そうに食べてくれたんだ。絶対うそじゃないよ」

・・・　・・・　・・・

それから一年後、三沢の山全体に大きな栗のイガが実っていました。村の全員で下草を刈っていると、少年の父親が、

「何てことだ！」

と大声を張り上げました。

皆が少年の父親の元に駆け寄ると、父親が指差す栗のイガの下に沢山の黄色の花穂が付いていました。皆が他の栗の木も見ると、どの栗のイガの下にも沢山の花穂がついていました。そして二番目の栗が実る頃には三番目の花穂が沢山ついていました。師走に入る頃、三番目の栗の実の収穫が終わり、村の衆全員が朽ちたお堂の前に集まっていました。少年の父親は首の手ぬぐいを外しながら、

「なあみんな、去年うちの小僧から旅の僧に栗をやったところ、来年からこの村の栗を三度生らす話を聞いた時には、そんな馬鹿なと小僧を一喝してしまったがこうして例年の三倍も収穫出来て本当に有り難いなあ旅の衆の話だと遠くの方の村では今年も飢饉で餓死者が出たと聞いたが、この分だとこの栗は、村の衆で分けても十分保存できるなあ」

すると、中でも長老の村人が、

「それにしても、そんな身なりの坊様に子供たちが良く栗を差し出したなあ。きっとお坊様はうれしかったんだなあ。この村を助けてくれたその僧は、きっとお弘法様に違いないぞ」

「お弘法様が？」

すると少年の父親が、

「お弘法様の話しはワシも聞いたことがあるぞ。どうだい皆の衆、お弘法様が休まれたこのお堂を皆で建て替えて弘法堂を作り、末永く三度栗を実らせてもらうようにお祀りをしないか」村の衆は全員が賛成して、お堂造りを始めました。その鎚音は村中に響き渡り、正月が過ぎ、ひばりのさえずりが聞える五月過ぎまで続きました。そして、ようやく最初の栗の花が咲く六月末にはお堂が完成しました。女衆は粟餅を作り、男衆は峠から海沿いに行き、濁酒や沢山の野菜や魚を、子供たちは山で木の実を集めて来ました。

そして、少年の父親は、山に行き中でも一番威勢の良い栗の木をお堂の横へ移植しました。栗の木に御幣を付けて、いよいよお堂の完成祝いが始まりました。村の若い衆の元気な掛け声でお祝いは最高潮に達して行きました。少年は、御幣の付いた栗の木を見ながら一年前にこ

のお堂で出会った偉い旅の僧が、約束を果たしてくれたことがうれしくてたまりませんでした。

それから毎年三度栗が生り、弘法堂は老人の憩いの場所や部落の集会所、子供たちの遊び場となりました。

アメリカ雑記帳（二）

三戸岡道夫

第一章　アメリカ社会スケッチ（つづき）

十三　グレイ・ハウンドのストライキ

ある土曜日と日曜日を使って、私は友達と一緒に、グレイ・ハウンド（バス会社）の周遊券を買い、サンフランシスコからリノとタホ湖へ、小旅行に出掛けた。金曜日の午後のバスでリノに行き、土曜日にタホ湖へ行き、土曜日の夜リノに泊った。

ところが日曜日の朝起き、さて帰ろうと、十時すぎにリノのグレイ・ハウンドの駅に行くと、驚いた。駅の入口はひっそりしている。ドアの前に老人が一人立っていて、なにか小声で私達にぶつぶつ言った。言っていることはよく判らないが、

「ストライキ」

という言葉が耳に入ってきた。

入口のドアに近寄ってみると、「注意」と書いた紙が貼ってあって、

（今日午前八時から午後八時までストライキ）

ということであった。

さあ大変。

車を持たない私達の足は奪われてしまった。周遊券を売っておいて、ストとは何事だーと、怒ってみても始まらない。まず頭に浮かんだのは他のバスへ乗りかえることで、駅前でうろうろしていると、一人の老婆が、

「その角を曲ると他のバスがある」

と教えてくれた。とにかくそれに乗るより仕方がない。教えられたとおりに行ってみると、なるほどコンチネンタルというバスがあった。しかしグレイ・ハウンドのストの影響で、すでに黒山の人だかりと行列。

時間表を見ると、サンフランシスコ行きのバスは、午前十一時五分と午後六時三十分の二本しかない。臨時のバスでも出るのかと聞いてみたが、そんなバスは出ないという。グレイ・ハウンドのストライキなど、私達コン

チネンタルとはなんら関係ないといわんばかりである。
急いで十一時五分の乗車券を買おうとしたら、もう満員だから午後六時三十分のバスしかないという。だがこれから午後の六時半まで、八時間も並んで待っているわけにもいかない。
そこで汽車で帰るということも考えられた。昨日街の中を散歩したときに見た汽車の駅で時刻表を調べてみたが、しかしこれもサンフランシスコ行きの汽車は午前四時と午後六時の二本しかない。その上、アメリカでは汽車はすでに古代の遺物と化していて、走るのがバスより遅いから、これではバスの方がまだましである。
こうなると残された手は飛行機しかない。たしかユナイテッド・エアラインがシスコまで飛んでいるはずである。時間表を調べてみると一時間半おきぐらいに、適当な時間で飛んでいた。しめた——ということで飛行機に頭をきりかえたが、さて一体、飛行場がどこにあるのやら、ユナイテッドの事務所がどこにあるのやら、まだ買える切符があるのやら無いのやら、さっぱりわからない。
そこでまず電話ボックスにとびこんで電話帳を拡げ、ユナイテッドの事務所を探しあて電話をかけてみると、今日は日曜日なので事務所は休みだという。用事があるなら、直接空港へ行けという。
十二時に、空港行きのバスが○○ホテルの前から出る、という情報が手に入った。

そこで空港へ行く前にグレイ・ハウンドの切符の拂戻しを受けておこうと、再びグレイ・ハウンドの事務所に行き拂戻しの請求をすると、非組合員の、差しあたり支店長とか営業部長とかそういう人だろう、二人ばかりの人間が窓口に坐っていて、
「コンチネンタルの方に連絡がついているから拂戻す必要はない。そちらへ行け」
という。冗談じゃない。横つらを一つひっぱたいてやりたくなった。私の顔は瞬間真赤になって、
「コンチネンタルは満員だ。乗れない。飛行機で帰るんだから、拂戻せ」
と叫んだ。やっと拂戻しの手續に入ったが、またその途中で、
「飛行機の切符は予約ずみか」
と聞く。
「まだだ」
と言うと、
「予約が確定してからの方がよくはないか」
と言う。そう言われてみれば、ここで拂戻しを受ければ、最後の手段を自ら放棄してしまうことになり、
「切符はサンフランシスコでも拂戻せるね」
と念を押して、ここでの拂戻しは断念した。
私達はまだ朝食をとっていなかったので、空腹でふらふらだった。とにかく朝食をとって空港に向おうと、周

遊券に指定されたホテルを探したが、その場所がさっぱりわからない。四ッ角に立ってキョロキョロ周囲を見渡していたら、彼方の街頭にめざすホテルの看板が見えた。しかし入ってみると中は満員。入口で待っている人も大勢いる。これではとても十二時の空港行きのバスに間にあわない。他のコーヒーショップででも簡単にすます以外はないだろうと、そこを飛び出して探したが、いざ探すとなると、いつもはやたらと眼につくコーヒーショップが一軒もない。いらいらしながら街頭を行ったり来たり……。やっとコーヒーという看板が眼について、朝食にありついた。
さて、やっと朝食が終って空港へ——というわけであるが、まあ待てよ、空港へ行っても必ずしも切符があるとは限らない。無駄骨を折らぬようにと、一度空港へ電話してみたらと氣がついて、コーヒーショップから空港のユナイテッド・エアラインへ電話してみると、今日の切符はもう一枚もないという。絶望。いささか、やけくそになってきた。残る方法は汽車だ。汽車なら満員で乗れないということはないだろう……。
実をいうと私達は古代の遺物と化したアメリカの汽車に、記念に一度乗ってみたいとかねがね憧れていたのである。しかしその余りの非近代性——即ち一日に一本しか出ないとか、非常に悪い時間にしか走っていないとか、非常に時間がかかる——のために、いまだ実現しないで

いる。しかし幸か不幸か、ひょんなことからその機会がやってきたというわけである。
私達は汽車の駅まで行った。
汽車の駅には客は一人もいなかった。建物は、日本の明治・大正時代の映画でしかお目にかかれない新橋ステーションよりまだ古い感じである。さて駅員に聞いてみると、
「午後六時に汽車は出て、サンフランシスコに着くのは午前三時である」
という。これには驚いた。バスでも五時間でサンフランシスコに着くのに、どうして汽車で九時間もかかるのか。さらに駅員は、
「それでもお前達は本当に汽車に乗るつもりか……」
と聞いてきた。午前三時ときいて、いささか私達の気持はぐらついてきた。そして切符を買おうとポケットから出したお金を引っこめた。仕方がないからもう一晩泊ることにしようか……と、私達は絶望を通りこして、いささか大声で笑い出したくなった。
「飛行機で行った方がいいよ」
と駅員が忠告してくれた。
「飛行機はもう満員だ……」
「飛行機にはユナイテッドとウエスタンの両方があるよ……」
このときウエスタンという駅員の言葉を私達が聞きの

がさなかったことは、私達に幸運だった。私達はサンフランシスコへはユナイテッド航空しかないと思いこんでいたからである。汽車の駅から空港のウエスタン・エアラインに電話をしてみると、奇蹟的にも二時二十五分発の切符があったのである。感激のあまり電話ですぐに予約を申込んだ。

時計をみると十二時四分前。空港行きのバスが発車してしまう——。私達は旅行鞄を空中に蝶の羽のように舞い上らせながら、オリンピックの短距離選手のように○○ホテルに向って走った。

空港行きのバスはもうホテルの前にきていた。私達が乗り終った瞬間に扉はしまって、バスは発車した。

飛行機は、定刻の二時二十五分に、リノ飛行場から快晴の空へ舞いあがった。それまで私達がいらいらと走り廻っていたリノの街はみるみるうちに緑に包まれて眼下に小さくなり、すぐ前方にはいちめんに雪で覆われた山脈が現われた。その山脈を越すと、昨日訪れた群青のタホ湖の真上に飛行機は一気にさしかかった。眼下は純白に輝いた雲の破片が、純白の笹舟のように急速に流れていった。

こうして私達は午後の三時には無事サンフランシスコ空港に到着したのである。そして空港からの帰りにグレイ・ハウンドの駅に寄り、ひっそりと一つだけ開いている窓口で、人品いやしからぬ経営者の手から、切符の払戻しの手続を受けたのである。

十四　私の部屋

五階にある私の部屋は北向きではあるが、道路に面していて、廣い窓からはいつも快晴の青いサンフランシスコの空が見える。部屋の中は白い壁が清潔で、机やスタンドもちょっとしゃれた型のものがおかれ、少々車の音でやかましいが、まあ快適な部屋である。

しかし入居して二、三日たつうちに、どうもすこしこの眞白な部屋——壁も眞白、天井も眞白、ドアも、窓も、棚も、ロッカーも、トイレも、バスも眞白——あまり純白の中に埋ってしまって、まるで宇宙ロケットの中にいるような殺風景さにかられてきた。

そこでなにか壁に貼るものはないかと、トランクの底をひっくり返してみたが、なにもない。やっと日本空港の飛行機の中でもらった扇と、パンフレットの中に北斉の浮世絵があったので、それをセロテープで壁に貼ってみた。しかしその位ではとても追いつかない。

ある日、道をぶらぶら歩いていると、都はるみの「涙の連絡船」の歌がきこえてきた。おやと思ってふり返えると、日本人向けのお土産物の店で、店の中に日本製のカレンダーが掛っていた。

「部屋の壁に貼りたいから、このカレンダーを賣ってほしい」

と言うと

「賣物ではありませんが、あまったのがあるからあげましょう」

と、日本製の大型のカレンダーをもらってきた。

ホテルに帰ってひろげてみると、岩下志麻とか吉永小百合といった映画女優が晴着に身を装い、日本庭園の前に立ったり、秋の京都の紅葉を背景にしたりした極彩色俗悪なものであったが、何もないよりはましだということで、六枚の大型カレンダーを所かまわずべたべたと貼りつけたら、それでもぱっと部屋の感じが明るく変ってきた。

「これはなか〳〵いいぞ」

と思うと、次にはなにか花でもほしい。

街に出れば花はいくらも賣っている。赤とピンクのカーネーションを買ってきたが、さて花瓶がない。仕方がないので、さして飲みたくもないセブンアップを買ってきて空瓶を作り、その空瓶と、洗面所にあったコップの二つに、カーネーションを投入れた。

こうして俗悪な私の部屋の装飾の原型が出来上ったわけであるが、その後も逐次映画雑誌を買ってきて映画スターの写眞をべたべた壁に貼ったり、花は高価につくのでホンコンフラワーを買ってきて飾ったり、絵葉書を貼ったり、天井からアメリカ人へお土産にと日本から持ってきた赤い灯燈を吊下げたりして、さながら東京の場末の安キャバレーのような部屋が出来上った。しかし私の部屋を訪れた人々は、口々に、

「きれいですね」

とお世辞を言ってくれる。

こうして作り上げた部屋の雰囲気に私は一応満足しており、その中でトランジスターラヂオから流れてくるジャズでも聞いていれば、なかなかいい気分である。

十五　新聞

アメリカの新聞は、厚さばかりがむやみと厚い。新聞配達は大変なことだろう。もっともアメリカの新聞配達は日本の新聞少年のように、肩から新聞の束を吊下げて夜明けの道を走る、というスタイルではない。

ウィークデイは街頭で買うと、十セント、日曜日は二十五セントである。ちなみに今日買ってきた日曜版をみると一五六ページある。しかし広告ばかりがむやみに多く、新聞の広告規制によると全紙面の七五パーセントまで広告でよいということだから、広告の多量さはおして知るべしで、まさに広告を買っている感じである。この新聞を見て私は友人と

「もっと広告の分量や記事の内容を厳選して、日本の新聞のようにうすくしたらどうだろう」

と話したのだが、原因は広告収入ということもさることながら、なんでも分量が多くないと氣がすまない、「質より量主義」のアメリカ人氣質には、厚い新聞でないと氣に入らないのではなかろうか——という結論に達したのであった。

十六　チップについて

アメリカに来て、やはり一番氣になるのはチップである。自動車の運転手や理髪店でチップを払うのはまったく意味がないと思うが、しかし最近、キャフテリアやレストラン、またホテルの食堂などでチップを払うのは、大いに有意義であると思うようになった。というのはウエイトレス達はチップをもらう自分の受持のテーブルがきまっている。そのために実にテキパキとよくサービスをし、自分の受持のテーブルからは用件を積極的に聞いて歩き、頼んだ用件は素早くしてくれる。もしそうしなければ、チップの額に影響するからである。

従ってアメリカのレストランでは、日本のレストランのようなサービス低下はない。最近の日本のレストランでは、誰に注文を頼んだらよいのかさっぱり判らず、テーブルの間を歩いているウエイトレスを掴まえるのに一苦労する。いや最近の日本は人手不足とか言って、質の悪いウエイトレスがカウンターの前にたむろして、お客の方は少しも見ずに、互に雑談に花を咲かせているのが多い。手を上げたくらいではわからない。そうかと言って大きな声で叫ぶわけにもいかない。氣の弱い者は彼女達がまったく偶然に近くを通りすぎるまで、じっと待っていなくてはならない。やっと身近かに来たウエイトレスに声をかけると、まるで囚人でも見るような凄い眼でにらまれ、それでも用件を聞いてくれればまだいいが、たいていは、

「ちょっとお待ちください」

そのままスーッと通りすぎて、そのままである。勿論いつまで待っても彼女は来ないのである。日本のレストランで「ちょっとお待ちください」というのは、私は知りませんよ、ということであるらしい。

しかしアメリカのレストランでは一割のチップのおかげでそういうことはない。だから一割のチップを払うのは少しも惜しくないという感じである。人手不足、労働力が高い、というアメリカにおいて、仕事の上ではるかに日本人よりもアメリカ人の方がサービスがよく、またよく働く。一体これはどうしたことであろうか。

デパートについてもそうである。日本のデパートでは、エレベーターの横にファッションモデルよろしく、用もない女の子を立たせたり、また客に尻を向けながら紙包みを作ることにばかり専念して、客が声をかけても振りむきもしない。しかしアメリカでは品物は殆んど袋にさっと入れるだけで、客との応接がもっとスムーズである。どうせ家に帰ればすぐ破いてしまう包装紙を、日本のデパートのように時間をかけて丁寧に包装する必要はないのである。

十七　キャフテリア

サンフランシスコにはセルフサービスのキャフテリアが多い。キャフテリアというのは日本ではあまり使われない言葉であるが、食堂に上、中、下、の順序をつければ、レストラン、キャフテリア、コーヒーショップ、というような順序になるのではないかと思われる。

セルフサービスのキャフテリアは甚だ便利で都合がよい。店の中には、ずらりと順序よく、サラダ、肉、魚、フルーツ、コーヒー、ミルク、野菜など、様々の料理が並んでいる。

まづ入口で、うず高く積まれているお盆をとり、その上に紙ナプキンと、スプーン、フォーク、ナイフをのせる。そしておもむろに行列の後に並んで、料理の載っているヒナ段の前を歩き、自分の好きなものを勝手にどんどんお盆の上にのせていく。料理のヒナ段が終る所に会計係のおばさんが坐っていて、そのお盆の上の品物を素早く勘定し

「ワン、サーティ、セブン（一ドル三十七セント）」

などと言う。そこで金を払い、お盆を持って空いたテーブルに行って食べるのである。

その後はコーヒーや水をゆっくり飲みながら、友人といつまで話をしていても、また一人で煙草をのんでくつろいでいても自由である。

私はいつもこのキャフテリアを喫茶店代りに使っている。広くて、席は沢山あるから、いくらランチタイムでも混んで席がない、ということはない。またすべて自分でやるのであるから、日本のようにサービスの悪さの見本のようなウエイトレスが、呼べど答えず、探せど見えず、ということもない。どんどんスムースに食事が出来る。ザルそば一杯たのんで三十分も待つ、というようなことは決してない。欲しければ自分が行って取ってくればいいからである。

十八　紙屑

道路に紙屑や煙草の吸がらが散らかっているのは日本だけで、

（アメリカには紙屑一つ落ちてない、街路に煙草の吸がら一本でも落そうものなら、すぐポリスマンが走ってきて、眼の玉が飛び出るような罰金をとられる）

とよく言われるが、それは誇張された嘘である。

もちろんサンフランシスコの街の中には、そのように

きれいな場所もあり、たとえばユニオン・スクエアから金融の中心モンゴメリー通りあたりにかけての一角や、高級住宅地などは、きれいである。しかしそれは東京の銀座や丸の内、田園調布の高級住宅地に紙屑が落ちていないのと同じことで、なにもアメリカに限ったことではない。

サンフランシスコの街にも紙屑や煙草の吸がらは至るところに落ちており、とくに黒人の多いフィルモアー通りなどの街路の汚なさは眼をおおうばかりである。東京にもこんなに汚い所はない。アメリカで最も美しい街といわれるサンフランシスコでさえこうであるから、他の街はおして知るべしというべきか。よく外国心酔者が自分の行った外国を讃美するあまり、どこどこには蝿が一匹もいないとか、どこどこの国には紙屑ひとつ落ちていない——などと放言し、それが日本における一つの伝説的概念になってしまっていることがあるが、そうした偏見からそろそろ脱する必要があるのではなかろうか。

十九　サンフランシスコのバス

サンフランシスコは地下鉄も電車もなく、街の中心のマーケット通りにストリート・カーが走っているだけであるから、通勤はこのストリート・カーによるか、自分の車かバスによるほかはない。もっとも坂の多い所をケーブルカーが走っているが、これは博物館に保存すべきものを、アメリカ人のいたずら好きの氣持が「動く有形文化財」として走らせているのであるから、たいした輸送力にはならない。

私も毎朝ポスト通りから坂道を下ってミッション通りまで十五分ばかり歩き、それからバスに乗る。

ある朝、すこし遅くなって急いで歩いていくと、ちょうど交叉点の手前で私の乗るバスといっしょになった。バスの停留場は交叉点を渡った向う側である。信号が青になると私は急いで走っていったが、もちろんバスの方が早い。私が停留場に着いた時は、バスはすでに動きはじめていた。私がバスに沿って走っているのを見た乗客の誰かが、運転手になにか言ったらしかった。運転手がちらっと私の方を振りむくのが見えた。バスがすっと止って、扉が開いた。

私は息せき切ってバスにとび乗り、料金入れにジャラジャラと音を立ててお金を入れ、思わず運転手に、

「サンキュー」

という言葉が口から飛び出た。

こんなところが、規則正しいが、しかし一面融通のきくアメリカ人のほほえましい面であると思う。アメリカ人は、きめられた最低の規則はきちんと守るが、しかしその中で自分に任せられた責任の範囲内では、善意にみちた、ほほえましい好意を示してくれることが多い。

二十　笑顔

サンフランシスコには、日本人が大勢居るから、日本語を聞くのに不自由はしないが、しかしアメリカ人が片言に日本語を喋るのもなかなか愛嬌のあるものである（日本語というよりも日本語の単語といった方が適当かもしれない）。

私の居るアンソニアというホテルの掃除夫は、毎朝私に逢うと、私への好意で、

「オハヨウ」

と尻上りの口調で必ず言う。それに対して私は、

「サンキュー、グット・モーニング」

と答える。サンキューは、私に日本語で言ってくれたお礼の意味である。

メイシー百貨店でバイタリスを買ったら、日本の岩国に半年ばかり居たことのある女店員が居て、私に出す釣銭を、一生懸命、

「イチ、ニイ、サン、シイ」

と数えてくれた。

近所の食料品屋のおじさんは、何回も私が果物を買ううちに親しくなって、最近は「サンキュー」が「アリガトウ」に変った。「アリガトウ」になってから、私達は以前よりもまして親密な微笑を交わすようになった。

ロスアンゼルスに行ってある百貨店を歩いていたら、そのデパートのマネージャーのような人が突然、

「イカガデスカ」

と私達に話しかけた。なかなか商賣氣のある応待ぶりだと思った。あるいはよほど私が英語のわからない人間に見えたのかもしれない。

アメリカ銀行の図書館に居たら、机の上に置いてある三省堂のコンサイスを見て、

「これは非常に懐しい辞書です」

と非常に上手な日本語で話しかけてきたアメリカ人が居た。日本に数年居て、やはりこれと同じ辞書を使って、一生懸命日本語を勉強したのだと言っていた。

二十一　ハンド・ドライヤー

アメリカへ来てハンカチの洗濯が大変だろうと思っていたら、あまりそうでないので助かっている。というのは、どこのトイレにも手ふき紙がおいてあるし、また最近はハンド・ドライヤーというのがふえている。それはボタンを押すと一分ぐらい熱風が吹き出てきて、その前に手をあてて手を乾かすという奴である。理髪店で使っているドライヤーを壁にとりつけたものと思えばよい。

しかしよく見るとそれには

HAND AND FACE DRYER（手と顔の乾燥器）

と書いてあることに最近氣がついた。洗面所で洗った

顔もこのドライヤーで乾かすというわけである。濡れた顔をこのドライヤーの前につき出して、顔が乾くまでじっとしている人間——想像してみるだけでも甚だ愉快である。一度そのような場面を見てみたいものだと思って注意して見ているのだが、まだこのドライヤーで顔を乾かしている人にお目にかかったことはない。さすがのアメリカ人も、このドライヤーで顔を乾かすことには、まだなじめないらしい。

二十二　アメリカの乞食

アメリカの乞食はきれいな服装をしていると聞いていたが、幸運にも（あるいは不運にもと言うべきかもしれないが）サンフランシスコでその乞食に逢った。

ある日私は銀行を終ってから、一度ゆっくり街並を歩いてみようと思い、一時間ばかり歩いてアンソニアまで帰ってきたことがあった。商店街の中はともかくとして、そんなに遠い距離を歩いている人などは殆んどなく、私はいつの間にか高速度道路との交叉点にさしかかり、高速度道路の眞下の道路の眞中に、島のようになっている一時停止場で、車の流れ去るのを待っていた。

するとその同じ停止場に一人の労働者風の男が立っていた。瞬間私の頭の中には変な予感がひらめいて過ぎた。そう言えば、あまり人通りのないこの道を、この男は私の少し後からずっと歩いてきたように思う。案の定、その男は私の方へ寄ってきた。

「二十五セント私にめぐんでくれないか」

私はわざとたどたどしい英語の単語を羅列して、

「私は英語がわからない」

と言った。すると男は人さし指で腹を指さして「ハングリー」と言い、次にその指で唇を指さして「イート」と言い、私の方へ手を差出した。私はそれでもとぼけて首をかしげていると、男はボールペンを洋服のポケットから取出して（アメリカの乞食はボールペンを持っている——なんてことを書くと、これがアメリカの乞食に対する一つの一般的伝説になる危険があるのだが）、私が手に持っている買物の包紙に、

「二十五セント」

と書き、再び私の方に手を出した。とにかくしつっこい。私が少し歩き出せば、ぴたりとついてくる。まだ車の流れはとまらないので、私はそのコンクリートの島から逃げ出せない。そこまでしつっこくされては、かなわない。

車の流れ以外に周囲に人間は全く居ないし、「私はまったく金を持っていない」などと言えば、ポケットに手をつっこまれて乱暴をされかねない。私は二十五セント貨をつまみ出して男に渡した。

その時交通信号が赤から青に変った。金をもらえばもう私に用はない。「サンキュー」という言葉を残すと、男は足早やに道路を渡って行った。

私はその後姿を眺めながら、アメリカで乞食の存在を自ら立証した満足感と、しかしそれには二十五セントの代償は高すぎたかもしれない——などと考えながら歩いた。そしてホテルに帰って友人にこの話をし、

「バスに乗らずに十五セント節約できたと思ったら、二十五セント損をした」、

と大笑いをした。

二十三　カストロ・ストリートにある家

サンフランシスコの街の中心を走っているマーケット・ストリートは、ツインピークにぶつかると、トンネルとなって南へ抜ける。そのトンネルの入口に、アメリカ銀行のカストロマーケット支店は、ツインピークを背にして建っている。

ツインピークの山頂から見下した絵葉書がある。マーケット通りを中心に左右に拡ったダウンタウンや、その彼方にベイ・ブリッヂやオークランドが写っているが、その絵葉書の一番下端の中央に、このアメリカ銀行カストロ・マーケット支店が写っている。

ある晝休み、その左手の高い丘に伸びる坂道を、散歩に登ってみた。道の両側の商店街はいつのまにか住宅街に変り、坂の頂に近い急な坂道にさしかかると、両側には、同じような形式の、だがその細部は様々なる色彩と意匠をこらした住宅が、三階建ての高さで並んでいた。

坂道の上には、快晴の空からおびただしい光がこぼれ落ち、光は洪水のように街路のすみずみにまで満ち溢れ、眞夏の太陽の明るさに輝いていた。

坂を登るにつれ、頭上の空はその全容を現して輝き、眼下にはダウンタウンの建物の群が、せり上りの舞台のように大きく見えてきた。

坂道を登り切ると右側に、美しい花で掩われた急な崖が現われ、崖の高みには、数軒の家が全身に光を受けて、大空に飛びたつ寸前の鳥のように建っていた。崖は赤や黄や白と様々の花の密集で掩われ、その崖を背にして立つと、花いきれで息苦しくなるほどであった。

その中の一軒に、道路から門まで、茶色の煉瓦の階段が幾折れにも曲ってつづいている家があった。それはいかにも美しく、のどかな、たのしい風景で、私はその階段を登ってみたいという欲求にかられた。その上に登ったら、眼下に拡るダウンタウンの光景が一段とよく見えるだろう……。

そう思うと私はタバコに火をつけて、白い煙を明るい空氣の中にまき散らしながら、ゆっくり階段を登っていった。

家のウインドは全部閉っていて、果して人が住んでい

るのかどうかわからなかった。そういえば庭の花の手入れは行き届いておらず、花は生命力の赴くままに、荒れた風情で咲き乱れていた。しかしまた考えようによっては、こんなに沢山の花が咲いているということは、矢張り人が住んでいる証拠のようにも思われた。しかしどこまで階段を登っていっても、人の姿は現われなかった。

階段の頂上に立った私は、反対側の家の屋根ごしに、サンフランシスコのダウンタウンの街並を一望に見下すことができた。

その家の庭は、木立に囲まれてひっそりとしていた。荒れているというほどではないが、手入れの行き届かない庭は、みどりの芝生が静寂に輝いてた。それは光と色彩の、音のない世界だった。

庭の垣根ごしには隣家の庭が少し見え、そこで半裸体の少年と少女がホースで庭に水をまいていた。

その生き生きとした光景と対照的だけに、この人氣のない庭はかえって人氣の無さが強調され、光だけが芝生の上に乱舞していた。ひょっとするとここは人の棲み家ではなくて、芝生の精が住むために建てられた家なのかもしれない……。

私はしばらくその人氣のない庭の中にとどまって、芝生に集る光の束を見つめていたい誘惑にかられたが、無断で他人の庭に入ることはさすがに躊躇された。私は他日、またこの庭を訪れることを望みながら、煉瓦の曲りくねった急勾配の階段を、ゆっくりと降りて帰った。

二十四　ラシャン・ヒル

サンフランシスコの北端に近く位置を占めるコイト・タワーの丘にのぼって、南を見下すと、ラシャン・ヒルを蛇行して登っている坂道が眞正面に見える。この坂は、サンフランシスコの最も美しい人工の坂道の一つである。

急な勾配の坂道は、自動車も通行するため、左右に何曲りにも曲って上下しており、その間を美しい花園がびっしりと埋めつくしている。サンフランシスコの絵葉書の代表的な構図になっているこの坂道は、さながら花弁で全身を装った蛇が坂をかけ上っているが如くである。

ある晴れた日曜日、私達はこの坂道を見に行った。カメラを持って坂の下に立っていると、一台の車が通り、窓の中から話しかけてきた。車の中には一人の老婦人がおり、

「ここの道を入るともっとよく見えるわよ」

と言って、車は細い道の中へ入っていった。私達もその道に入っていくと、そこは高台になっていて、老婦人の家の庭であった。

高台の庭からはサンフランシスコ湾が美しく見渡せた。車から降りた老婦人は近寄ってきて

「私の家の屋上から見ると、もっとよい景色だよ、屋上に上って見ますか……」

と言って、屋上に案内してくれた。

家の入口で彼女は私達に、

「バンザイ、バンザイ」

と言って入口の一角を指さした。何だろうと思ってよく見ると、そこに松の盆栽が置いてあった。「ボンサイ」を彼女が発音すると「バンザイ」となるのであった。

四階建ての家の屋上に上ると、さすがに素晴らしい眺めだった。彼女はそうした見晴らしのよい家に住んでいることが、かなり自慢のようであった。

彼女は屋上から見えるあちこちの眺めを私達に説明しながら、

「日本へも三週間旅行したことがある」

と言った。そして屋上にも三鉢ばかり並んでいる盆栽を指さして、またさかんに、

「バンザイ、バンザイ」

と話しかけてくれた。

二十五　カルフォルニヤの農場

南北に長いカルフォルニヤ州の、東側のネバタ高原と、海岸を走る丘陵に挟まれた、南北に長いカルフォルニヤ州の広大な農業地域を、私はゆくりなくも、ヨセミテ国立公園へ行くバスの窓から満喫して眺めた。

アメリカに来て、こうした風景に接することを、私は長いあいだ待ちこがれていた。ハイウエイを時速百キロ以上で走っても走っても、その両側に現れては次々に後に消え去っていく広大な田園風景は、まさにすばらしかった。

一面にひろがる黄金色の麦畑、緑色の湖水が現れたのかと錯覚する広大な果樹園の密集、ゆるやかな起伏の牧場に群る牛の群、そして、その中に、濃緑の木立と、燃えあがるような花で囲まれて点在する農家、そしてそれらを、さらに押しつつんで拡っていく野原……、これこそ、さすがアメリカならではの光景と、私は眼をみはった。

とくにマーセッドからヨセミテ公園の入口までのハイウエイの両側にひろがる果樹園、牧場、麦畑のひろがりは、すばらしかった。バスが黄金の麦畑の中をまっしぐらに走るのは、さながら麦畑という砂漠を無限に走るかのようだった。

二十六　ニューヨークの公園

ニューヨークは古くて、すすけた汚い街である。ただ建物が高いということ以外に、まったく能がない。ことに汚いのは公園である。

ニューヨークにはセントラルパークをはじめ、ワシントン広場、ウエスト・リバーサイドなど、方々に緑地地帯がある。しかしこれらはまったく手入れの行き届かない芝生と、紙屑と、煙草の吸がら、アイスクリームのから、ストローの巻紙、鳩や犬の糞の散乱、それに黒人と、浮浪者と、若干の子供と、汚い大勢の老人たちのたまり場である。

緑地地帯にはどこにも多くのベンチが置いてあるが、いつ行ってもそのベンチには、大勢のあまり風采のよくない老人がびっしり腰を下している。それは木陰で余生をたのしんでいるといったようなものではなく、ある者は汚らしく話し合い、ある者はすでに何もなすことがなくて茫然と生きる望をすててそこに坐り、あたかも生ける屍のごとく、人生の最後のゴミだめといった感じである。

すでに子供たちは大きくなって独立し、家庭を追い出されて行き場所を失った老人たちは、都会の安ホテル、安アパートに住みつき、昼間はなすこともないので、こうして公園のベンチにただ黙って坐っているのであろうか。現代アメリカ版「うば捨て山」といった感じが、ニューヨークの公園である。

ニューヨーク以外でも、フィラデルフィヤの独立記念館の裏手にある公園に足をふみ入れた時なども、ベンチはすべて老人で占められ、さながら黄泉の国に来たのではなかろうかと、錯覚したほどであった。

ニューヨークではさらにその上に、失業者のような人たちも坐っていた。汚い黒人も坐っている。ワシントン広場では、終戦直後の東京の上野公園を思い出したくらいである。

私がニューヨークでアパートを借りている、リバーサイド・ドライブ地域も、その例外ではない。とくにそこはハレムにも近く、黒人はこの辺にも進出してきているので、ハドソン川岸の緑に囲まれたウエストリバー・サイドも、荒れ放題なのである。ハドソン川に面したこの緑地帯は、昔は高級住宅地であったが、黒人の進出によって次第に荒れはじめ、今は黒人と低級労働者と、老人の住みついた地域になってしまっている。

商店街なども汚れていて、紙屑が道路に、トラックからぶちまけたように散らばっている。キャフテリアに入れば、老人や身なりの芳しからぬ人間が、がつがつと食べていた。

こんな点はリバーサイドにも反映していて、昼間は、黒人やいろいろな人たちが、木陰や草の上に半ば裸でねころんだり、何かを食べている、異様な雰囲気である。それが夕方となると、がらりとこの人種が老人へと入れ代わるのである。

夕方のリバーサイドのベンチは、周囲の安ホテル、安アパートから出てきた老人たちが、蠅のようにベンチに

群って、じっと坐っているのである。

黒人問題と老人問題、これはアメリカの二大問題のように思われる。ベトナム戦争に投入する金があったら、こんな老人たちに少しでも手をさしのべて、老人天国でも目ざすべきではなかろうか。

二十七　ネクタイ

アメリカ人の色彩感覚はまったく異常である。美的感覚が欠如しているところから出発している、としか思えない。

とくにネクタイの色彩配合の感覚は最悪であり、それは色盲というよりも、人間の色彩感覚より別の範疇に属するとしか言いようがない。

たとえば爬虫類の色彩感覚とか、河馬の色彩感覚とか、そういった分類範疇に属するものと解釈しなければ、まったく理解できない。

あるデパートにあまりにひどい柄のネクタイがあり、それを一人の黒人が眺めていた。が、さすがにその黒人ですらも見るに見かねて、私の方をふりむいて、

にやっ

と笑って立ち去ったことがあった。

アメリカ人が軽蔑している黒人からさえも、軽蔑されるようなネクタイを、平気でしめて歩いているアメリカ人は、無神経というか、無邪気というか、人間の系列以外の色彩感覚とでも説明する以外に、まったく説明のしようがないと思われる。

二十八　地下鉄

ニューヨークの地下鉄はもの凄い。屠殺場行きの豚を大量に運ぶのにちょうどよいとでもいえば、あるいはぴったりするかもしれない。

ブロードウエイの道路の真中に、これ以上汚い建物はないだろうというような建物が建っている。私は最初公衆便所かなと思ったが、それが地下鉄の駅であった。

駅の入口は牢獄の入口のような頑丈な鉄格子がはりめぐらされ、中へ入るには、江戸時代の伝馬所の牢屋の入口をくぐる感じも、かくやと想像されるものだった。

中はうす暗くて、まっ黒にすすけ、鉄骨がむやみに乱立し、日本の鉄道では貨物運送場以外には、こんな風景は見られない。

走ってくる電車は、日本の鉄道の貨物車そっくりで、車の中には夏でも熱風が吹きまくり、車から降りて地上に出ると、ほっとする有様であった。

二十九　交通道徳

ニューヨークの交通信号は目茶苦茶で、ほとんど守ら

れていない。だから、
（交通信号を守ること）
が、なんだか、
（交通道徳に違反している）
ような気分になってしまうのである。
だからニューヨークでは、私は交通信号を無視することと、煙草の吸がらをすてることに、道徳的罪悪感を感じないように、一生懸命努力している。
またアメリカ人は大人も子供も、道を歩きながら、アイスクリームやアイスシャーベット、ポップコーンなどを、ペロペロ食べながら歩いており、
（日本人は汽車の中でよくものを食べる国民だ）
などと、夢にも彼等の口から言えた道理ではないのである。
とにかく交通道徳に関する限り、日本の方がアメリカよりも、数段紳士の国であることはまちがいない。
（つづく）

先見の明（二）

―韮山代官江川太郎左衛門の遺業と世界遺産への道―

堀内永人

二、江川家のルーツを探る

（一）

江川家は、この物語の主人公江川太郎左衛門英龍（号を坦庵）で、三十六代目、かつ、五千石相当の領地を有する世襲代官ということであるから、それだけで古い家柄、かつ、名門であることが推察できる。

仮に当主（その家のあるじ）としての平均年数が二十年としても、二十年の三十六代で七二〇年続いたことになるが、江川家のルーツを探ると、現在の静岡県伊豆の国市韮山に住居を構えてから、九〇〇年、その昔の大和国に勢力を張っていた時代（八代、宇野姓）を含めれば、一〇〇〇年になろう。

すなわち、源頼朝が、治承四年（一一八〇）六月に伊豆で挙兵したとき頃は、すでに江川家九代親信、十代治信の父子の代で、父子ともども頼朝に従軍して活躍、その功績で伊豆国江川の庄一円を賜わり、現在地に定着したといわれている。

だが、江川家は、源頼朝の時代の、そのまたずーと昔から伊豆に住居を構えていたわけではない。

江川家は、清和源氏の初代源満仲（九一二―九九七）の次男頼親が始祖（初代）で、二代頼房の頃には、近畿地方の大和国宇野庄（現、奈良県五条市）に住み、そこから伊豆へ移住したと伝えられている。

（清和源氏は、五十六代清和天皇《在位八五八―八七六》の皇孫源経基の長男源満仲が興した源氏の一族）

「江川」の名字（姓）も、のちになって改姓したもので、伊豆に移住した頃は、まだ「宇野」を名乗っていた。

江川家が、大和国から伊豆国に移住したのは、保元元年（一一五六）七月に起こった内乱「保元の乱」が原因である。

保元の乱とは、朝廷内の権力争いで、鳥羽法皇（七十四代天皇）の圧力で、近衛天皇（七十六代）に天皇位を譲った（譲位した）崇徳上皇（七十五代天皇）は、近衛天皇が若死にすると、自分の長男重仁親王に天皇の位を継がせようとした。が、鳥羽法皇は崇徳上皇の弟の後白河を天皇にした。

このため、崇徳対後白河の兄弟が天皇位をめぐって争い、この皇室の争いに、摂関家（摂政と関白になれる家柄）と武士が加わり、三者が三つ巴になって争ったわが国最大級の内乱である。

この内乱は、

①崇徳上皇（兄）側に、公卿の藤原頼長と、武士の源為義、平忠正らが、

②後白河天皇（弟）側には、公卿の藤原忠通、武士の源為義の長男源義朝と平忠正の甥平清盛らが、

それぞれ味方した。

（余談ではあるが、皮肉にもこの内乱が、平清盛を太政大臣に押し上げて、武士の政界進出のきっかけになったといわれている）

江川家六代親治（この頃は宇野姓）は、この保元の乱で崇徳上皇側に味方して戦い、後白河天皇側の平清盛軍に敗れて戦死した。その後、七代有治、八代俊治を経て、九代親信のときに伊豆に移住したのである。

この頃の伊豆半島は、京都から遠く離れた不便な地方ということで、房総半島とともに流刑地（刑罰として流される遠隔地）とされていた。

したがって、江川家九代親信は、伊豆に移住したといわれているが、保元の乱と、のちの平治の乱の勝者である平清盛から追われて、伊豆に逃避してきたのかも知れない。

九代親信が伊豆移住のときに、のちに「金谷十三軒」と呼ばれるようになる十三騎の一族郎党も付き従って伊豆に移住している。

（二）

保元の乱から三年後の平治元年（一一五九）十二月に、またもや内乱「平治の乱」が起こった。

平治の乱は、保元の乱の勝者である公卿の藤原信頼と武士の源義朝が、今まで味方であった平清盛を討とうとして起した戦いである。

この内乱で、平清盛が勝ち、平家軍に敗れた藤原信頼は斬罪、源義朝は尾張で暗殺された。また公卿の藤原通憲（信西）は、清盛に与したが、義朝に攻められて自殺する。

公卿の藤原通憲（信西）は、保元の乱では、平清盛と共に勝組である後白河天皇側に味方した。官位は、小納言とあまり高くはなかったが、博学

多才で、黒衣の宰相と呼ばれ、後白河天皇の側近として活躍、剃髪して信西と称した。

平治の乱ののち、平清盛により、敗者、源義朝の三男源頼朝（一一四七年生まれ、十四歳）は、伊豆国韮山村蛭ケ小島に流され、また、義朝の九男源義経（この頃は牛若丸、一一五九年生まれ、一歳）は、鞍馬寺に預けられた。この兄弟の話は、読者のよく知るところである。

平治の乱から、雌伏二十年、三十四歳になった源頼朝は、伊豆の豪族北条時政らの援けを得て、遂に立ちあがった。すなわち、治承四年（一一八〇）八月十七日の「頼朝の旗揚げ」である。

しかし頼朝は、初戦でこそ、平家側の伊豆目代、山木兼隆判官を討ったものの、相模国の石橋山の合戦（現神奈川県小田原市）で、三千騎の大庭景親軍に敗れて房総半島に逃走。

幸い、上総国の平広常二万騎の応援を得て勢いを盛り返し、関東を手中に収め、四万騎の軍勢を従えて鎌倉に入り、ここに本拠を構えた。

江川家（まだこの頃はまだ宇野姓）十代親信、十一代治信父子は、この頼朝の旗揚げに参戦して功績を上げ、伊豆の江川庄一円を与えられ、その後の江川家の基ができあがった。

江川家（この頃も宇野姓）では、二十代英房が室町幕府二代将軍足利義詮（在職一三五八―一三六七）に仕えて戦死している。

《江川に改姓》

二十一代英信のときに、「宇野」から「江川」に改姓した。

「湖や、海が陸地に入り込んだところを入江といい、川の入江を江川という」（広辞苑）

江川家（改姓までは宇野姓）は、狩野川の中州の一つの蛭ケ小島周辺に住んでおり、この辺一帯の中州を「江川」と呼んでいたので、源頼朝の旗揚げにあやかって、「宇野」を「江川」に改姓したのであろうか……。

（三）

文治二年（一一八五）、源頼朝が、鎌倉に幕府を開いてから、鎌倉幕府は、二五〇年続くが、この鎌倉幕府も廃れて、足利尊氏が興した室町幕府にバトンタッチされる。

やがて室町幕府も衰え、関東地方は、関東公方、関東管領、伊豆（堀越）公方などと支配者が次々と代わり、住民はその圧政に苦しめられていた。

室町幕府末期、伊豆地方の支配者堀越公方の足利政知

は、延徳三年（一四九一）四月に没し、政権を子の足利茶々丸が相続した。

この頃、戦国時代の幕を開けた風雲児、北条早雲（一四三二―一五一九、この当時は、まだ、伊勢新九郎長氏と名乗っていた）が、堀越公方の足利茶々丸を倒し、韮山城を築城して伊豆一円を平定し、足利茶々丸の権力で押さえつけた悪政を改め、善政を施したので、住民に大いに慕われた。

早雲の人気が高まると、いままで足利茶々丸に従っていた伊豆半島各地の豪族は、早雲が、口伊豆の龍城山に韮山城を築くと、さっそく韮山城に参上して、臣下の礼をとり、早雲のご機嫌を伺った。

韮山城に最も近い江川家二十三代当主の江川英住は、早雲に味方して堀越公方軍と戦い、さらに、早雲の韮山城築城にも協力した。

延徳三年（一四九一）九月十日朝の十時、英住は、早雲の戦勝に祝詞を述べるため、長男英盛をともなって韮山城に参上した。

江川英住、英盛父子が、韮山城に参上すると、城の大広間には、早雲の盟友である大道寺太郎、荒木兵庫、山中才四郎、佐竹兵衛、荒川又次郎、鳥羽十蔵の六人衆を始め、早雲のために一身を捧げて戦った家臣が、綺羅星のごとく並んでいた。

英住、英盛父子が大広間の下段の間に威儀を正して控えると、すぐに早雲が姿を現わし、正面上段の間に着座した。すると、中段の間の左側に控えていた荒木兵庫が、

「江川殿、そこは遠すぎます。こちらへ参られよ」

と声をかけ、英住、英盛父子は、兵庫の招きに応じて、

「恐れ入ります。では、お言葉にしたがいまして……」

と、礼を述べ、中段の間近くまでひざまずいたままで進み（膝行し）、平伏して敬意を表した。

「この度は、伊豆一国をご平定下され、まことにおめでとうございます。住民一同ことのほか殿様のうるわしきご政道に感激いたしております」

と、祝詞を述べると、早雲は、

「いやいや、この度の勝ち戦は、口伊豆は申すに及ばず、中伊豆、奥伊豆の土豪、地侍の皆さんが、一族郎党を率いてわたしにお味方して下さったから、なし得たものでござる。特に、ここ地元の韮山において、江川殿の格別なるご支援があったればこそで、いやまことに江川殿のお働きに感謝いたしております」

と、丁重な返礼があった。江川父子は、

「これは身に余るありがたきおことばを賜わり、恐縮いたします」

と、顔を紅潮させて頭を下げた。

すると、中段の間、早雲の右側に座っていた副将格の大道寺太郎が膝を進め、

「この度の江川殿のお働きは見事というほかなきものでござるが、それにもまして、江川殿のご領内の民政の素晴らしさに感服いたします。ぜひ殿よりも格別なるおことば、おはからいを拙者からもお願い申しあげる次第でございます」

と、江川家の対足利堀越御所攻めの戦いは勿論のこと、戦以外の民政についての功績を言上すると、

「堀越御所攻め以外の格別のお働きとは、何であろうかな……、くわしく話してくれ」

と、早雲は、江川家の民政について、大いに興味を持った。

「殿もご承知のとおり、足利の堀越公方の民政は、まことに凄まじいもので、四公六民であった年貢を、五公五民、六公四民、七公三民と引き上げ、さらに、再検地を実施して荒れ地を田畑とみなして年貢を増やしたり、母屋、納屋、倉などの棟数に課税する棟別銭、家屋敷の面積に応じて課税する住居税、窓の数にたいする窓銭、夫役のかわりに納める夫銭などを増額、はては、婚礼、出産、長寿に課税する祝銭を取り立てるなど、領民は重税に泣き、村から逃散する者も出る始末でした」

「足利茶々丸のやりそうなことじゃな」

と、早雲は、相槌を打った。

「それだけではありません。男子は、十五歳になると夫役を課されて徴発されたり、あるいは、夫役を恐れて山谷に隠れたため、村は、働き手を失って老人と女子供ばかりになってしまいました。そのため、田畑は荒れ放題、ろくな食事もなく、疫病がはやって、病人のいない家はありませんでした」

と、大道寺太郎が堀越公方の悪政を説明すると、

「それでは、農民が困ったであろう。それでどうなったのか……」

早雲は、眉を曇らせた。

「そのような事情を知った江川殿は、金谷十三軒の郎党を始め、領内の農家の支援を得て、男手や働き手のない家や、病人のいる家の農作業を行い、病人を看病するなど、困っている農家を救ったのであります」

と、江川家の善政を説明した。

「いやいや、それだけではございません。江川家の領地（本領）以外の村々も援けたのであります。これは、誰にでもできることではありません。どこへ行きましても、江川殿の評判は、とてもよろしゅうございます」

という大道寺の説明で、早雲は、

「江川殿の民政は、さすがでござるな……。それでは江川殿のお働きを賞する意味もあって、江川殿の旧所領は、そのままとして、今まで通り、伊豆の管理をしていただこうではないか。兵庫それでよいな……」

と、新しい領地の区分にくわしい荒木兵庫に声をかけた。

「さようでございます。殿の申される通り、江川殿の旧

領は、そのまま江川殿がご支配されるのが、一番よろしいかと存じます」

と、応えた荒木兵庫は、すぐに下段の間に控えている江川父子の方を向いて、

「江川殿、これで江川家の旧所領も、従来通りと決まりました。ご同慶にたえません。これからもわが主、北条早雲をご支援下され」

と、江川家の旧領安堵を明確にした。

それから四年後の明応四年（一四九五）、小田原城主になった早雲は、相模、伊豆、武蔵、上総、安房、上野の六カ国、二八〇万石を領有する大大名となるのであるが、伊豆地方の豪族である江川家も、北条早雲と主従の関係を結び、引き続き、早雲の伊豆地方の平安に尽力したのである。

江川家の旧領安堵の話が一段落すると、荒木兵庫は、

「ところで、本日は、江川殿が、我が殿の戦勝を祝って、家伝の秘酒をご持参くだされた由にてございますが、殿にはそれなる秘酒をお召し上がりなさいますか……」

と、江川家伝来の醸造法による銘酒を披露すると、早雲は、

「それはありがたい。わたしは、ことのほか酒が好きでしてな……。さっそくこの席にて祝宴をいたそうではないか。のう皆の者……」

と、たいそうご機嫌になり、小姓に祝宴の支度を命じた。江川英住は、

「実は、わが江川家には、昔から酒の醸造についてやかましくいわれてきましたが、これなる倅、英盛のすぐ下の弟に正秀と申すものがおりますが、これがなかなかに酒の醸造にくわしく、また、よく研究もしておりますので、その倅が造りましたものを、手土産としてお持ちいたしました。お召し上がり下さればありがたき幸せにござります」

と、遠慮しつつ秘酒の説明をした。

江川英住が、早雲に秘伝の銘酒を献上したときよりさらにその昔、十五代英治（当時は「江川」でなく、「宇野」と称していた）が、自家醸造の銘酒（うまい酒）を鎌倉幕府の執権北条時頼（のちに出家して最明寺殿）（一二二七～一二六三）に献上したといわれているほど、江川家の酒造の歴史は古かった。

一説によれば、江川家では、酒を醸造販売して財をなしたといわれているが、かつては、味噌、醤油などの調味料、たくわんなどの漬物や干し魚などの保存食、酒（濁り酒＝どぶろく）や甘酒などの嗜好品は、どこの家庭でも自家製であった。

したがって、江川家でも、他の家庭と同様に、当然のこととして酒を製造していたと思われる。

また、この当時、地方の有力者（資産家）の多くは、醸造業を兼業し、手広く商売をしていたので、伊豆地方の有力者であり、地主でもあった江川家も、他の有力者と同様に、醸造業を営んだのであろう。

特に、二十三代江川英住の次男正秀は醸造法について研究し、醸造した秘酒は特に美味で、江川家が酒造に力をいれたのは、この頃からと思われる。

早雲は、江川家家伝の秘酒のいわれを聞いてたいそう喜び、江川英住、英盛父子を歓待した。

このとき、英住が献上した秘酒が、あまりにも美味であったので、早雲は、江川家家伝の秘酒がたいそう気に入り、

「江川殿、この酒は、まことに美味である。なんという名前の酒でござるか……」

と、酒の銘柄を質問した。

「今日持参いたしました酒は、我が家で造りましたもので、特に名前など付けておりません」

と、英住は、恐縮しながら、英盛と顔を見合わせて答えた。

「それはなんともったいない。このように旨い酒に名前がなくては、商うのに困るであろう。それではわたしが名前を付けようではないか……。いかがかな」

と、右手に盃を持ち、左手をあごにあてたまま、しばらく考えていたが、

「そうだ、江川家で醸造する銘酒であるから、『江川酒』ではどうであろうか……。そうだ、それがよい、それがよい。江川殿、いかがかな……」

と、独り悦に入っていた。

「『江川酒』でござりますか……。大変ありがたきことでござります。さっそく家で待っている倅、正秀に聞かせてやります」

と、英住は喜色満面で、早雲にお礼を申し上げた。

これが、『江川酒』命名のいわれである。

（四）

北条早雲は、相模国小田原（現神奈川県小田原市）に城を築いて居城とし、関東に覇を唱えた。北条氏は、早雲以下、氏綱、氏康、氏政、氏直と五代九十五年間続いたが、天正十八年（一五九〇）の豊臣秀吉の小田原攻めに敗れて姿を消した。

後世の歴史家は、頼朝の妻、北条政子の父親である北条時政以下、鎌倉幕府の執権である北条氏と区別するため、早雲以下の北条氏を「後北条」と呼んでいる。

後北条氏と江川家の関係を考察すると、北条早雲に臣下の礼をとった江川家は、二十六代英元が、早雲の長子

で、二代目氏綱の関東制圧の戦いに活躍して、その功績により五千石の所領（知行）を賜わった。

そして、英元が通り名（通称）を「太郎左衛門」として以来、代々の江川家当主は「太郎左衛門」を世襲することになる。

しかし、この小説では、混乱を避けるため、物語のはじめに述べたように、特に説明がないかぎり、「太郎左衛門」と書いてあるときは、この物語の主人公、三十六代英龍（号を坦庵）のことを指している。

江川家二十七代英吉は、豊臣秀吉の小田原攻めに対して、北条氏の一族で、韮山城の城主である北条氏規を援けて奮戦した。が、戦い北条軍に利あらず、三万五千騎の精鋭を擁する豊臣軍に敗れてしまった。

江川英吉が奮戦した北条方対豊臣方による韮山城の攻防を、少し見てみよう。

豊臣方による韮山城の攻撃は、天正十八年（一五九〇）三月二十八日未明、山中城（現静岡県三島市山中新田）の攻撃前に開始された。

韮山城は、南に天狗峰を背負い、西に狩野川を控え、本丸を真ん中にして、北に二の丸と三の丸を配し、人望ある北条氏規が三千六百余人の将兵をもって守っていた。

豊臣方にとってこの城は、山中城とともに、小田原攻めの前に攻め落とさなければならない障害であり、豊臣方は、織田信雄以下四万四千の大軍で、これを攻め寄せた。

兵員数を誇る豊臣軍は、同二十九日正午に一斉に城内突入を敢行したが、江川英吉らの堅い守りにはばまれて退却を余儀なくされていた。

寄せ手の総大将である豊臣秀吉は、韮山城の攻略は容易でないと見て、秀吉が得意とする持久戦に持ち込んだ。

同年四月五日から蜂須賀家政、福島正則ら一万九千余の兵が城を取り囲み、長柵をめぐらして外部との交通を遮断、兵糧攻めを始めた。

攻める豊臣方、守る北条方、小競り合いはあったものの決着がつかず、二ヶ月間の攻防が続き、六月末にようやく開城となった。

韮山城が三か月間も持ち堪えたことは、山中城がわずか一日で落城したことに比べて、極めて対照的である。

山中城落城に続いて韮山城が落城すると、北条氏五代目氏直は、難攻不落の名城を誇る小田原城に立てこもったが、小田原城西南の石垣山（笠懸山とも）に一夜城を築いた秀吉方十四万余騎の大軍に抗し得ず、天正十八年（一五九〇）七月五日、無条件降伏して半年余に及ぶ小田原攻めも終焉した。

江川家は、豊臣秀吉の小田原攻めの時点では、北条氏

と主従の関係にあったが、一説によれば、二十八代英長が縁あって、ひそかに徳川家康と連絡をとり、家康の便宜を図っていたともいわれている。

このため、北条氏の家臣から、

「江川英長は徳川に寝返った」

と卑怯者呼ばりされたこともあった。が、戦国の乱世を生きていくために、世の流れに従うことは、あながち卑怯者とばかりはいえない。

たとえば、徳川家康は、娘の督姫を北条氏直に嫁がせるという政略結婚で、北条氏と姻族関係をもち、さらに北条氏と不戦の密約も取り交わしてあった。それにもかかわらず、秀吉の勢いには勝てず、ついに北条氏と決別、秀吉に味方して小田原攻めの先鋒を務めたといういきさつがある。強者に従う例話である。

秀吉の側近である千利休は、秀吉に命ぜられて、小田原攻めに加わったが、小田原城が落城して京都へ帰る途中、伊豆韮山の江川屋敷を訪れている。

その折に、千利休が江川邸の邸内に自生している「韮山竹」を使って、「円城寺」（現存している）などの花筒（花器）を作ったのも、このときのことである。

秀吉の小田原攻めの後、江川家は、二十八代英長の働きもあって、五千石の領地は従来通りであったが、北条氏旧家臣のねたみもあって、従来からの五千石は、代官所預かりとなり、

「物成米十分の一」（領地内の生産高の十分の一）

すなわち、領地内の年貢米の中から、十分の一相当を江川家の俸禄（給与）にすることになってしまった。

後年、この「物成米十分の一」の減俸が、江川家の財政に大きな危機をもたらすことになる。

さらに時が移って、徳川と豊臣が戦った大坂の陣では、二十七代江川英吉、二十八代江川英長の父子は、家康の命令で大坂の陣に参戦した。

その折に、江川父子は、「江川酒」を船便で大坂まで運んで家康に献上したところ、秀忠と一緒に江川酒を飲んだ家康は、あまりにも美味であったため、たいそう上機嫌となり、

「江川殿、今後この酒にこの紋を使ったらいかがかな……」

といって、『井桁に十六花弁の菊』の紋を江川父子に賜わったといわれている。

江川家では、従来、『五三の桐に二ツ引』の紋か、または『井桁に三ツ鱗の紋』を使用していたが、以後、『井桁に十六花弁の菊』の紋に改めたということである。

江川家と家康との関係で、興味を引く話がある。

家康は、秀吉の小田原攻めの先鋒を命ぜられて東進中

に三島へ宿泊した。

三島には、箱根峠に向かって登り坂になる手前を、右に千五百メートルほど入ったところに竹倉という湯治場（温泉に入って病気を治療するところ）がある。

竹倉温泉は、低温度ではあるが、赤湯と呼ばれるように、温泉には鉄分が多く含まれ、湯冷めしないので、神経痛やリュウマチなどの痛みに効果があった。

竹倉が温泉場として世に知られるようになったのは、昭和十年頃であるが、昔から隠れた湯治場として、近在の農民の憩いの場であった。

家康は、小田原攻めの前に、英気を養うために、この竹倉の湯治場に宿泊したのである。

このとき、接待に出た名主の娘をたいそう気に入り、小田原攻めの戦が終わったあと、家康は、駿府に呼びよせて側室にした。

この婦人が、家康の十男で紀州徳川家の始祖頼宣と、同じく家康の十一男で水戸徳川家の始祖頼房の生母「お万の方（養珠院）」である。

お万の方が、家康のお側にあがるときに、伊豆の名門江川家の養女となったといういきさつがある。

一説によれば、お万の方は、上総国大多喜城主正木邦時の娘で、伊豆国河津笹原城主蔭山勘解由の養女といわれ、お万の方を「蔭山殿」ともいうのは、蔭山勘解由の養女であったからだという。が、それでは、お万の方と江川家との説明がつかない。したがって、お万の方は、江川家の養女という説が正しいと思われる。

こうした縁で、江川家は紀州藩および水戸藩と、公私にわたって関係が続くのである。

なお、お万の方のお墓は、三島市玉沢の名刹妙法華寺にあり、妙法華寺はお万の方の建立になる。

（五）

徳川の治世となって、江戸の文化も爛熟期に入り、世は挙げて泰平を満喫、人口の増加と共にインフレが進行した。すると、当然のこととして幕府を始め、大名も、旗本も、武士も、農民、町人も財政家計がひっ迫し、借金する以外に方法がなくなってきた。

一方、江川家では、徳川政権が樹立し、世の中が泰平になった頃に、家伝の秘酒「江川酒」の醸造販売をやめてしまった。

家康が幕府を開き、やがて幕藩体制が行われると、「武士は商いを愛さず」という思想が広まり、経済（商業）を卑しみ、武士は政治をするもので清廉潔白、商いして金銭を稼ぐのは町人の仕事という誤った考え方ができてしまった。

そのため、格式高い江川家は、酒を売ることにためらいが生じて、家伝の秘酒「江川酒」の醸造販売をやめたのではなかろうか。

江川家は、酒造による収入がなくなり、二十九代英政、三十代英利、三十一代英暉の代には、物成米十分の一（年貢の十分の一）の俸禄（計算上では五百俵）では、膨らんだ韮山代官所の総経費および江川家の生活費が賄えず、幕府からの貸米（借入金）に頼ってやりくりする状況となっていた。

そのうえ、代官所管理の天領（幕府の直轄領地）が旗本の領地になって代官所の管理下から離れたり、また、農作物の不作が続いて、江川家の領地から生産される物成米（年貢のこと）が減少するなど、韮山代官所および江川家の収入は、減少するばかりであった。

ちなみに、新韮山代官の役料（本給と職務手当などの給与）は、一五〇俵四人扶持（一五〇石と平均賃金四人分）であったから、仕事の大きさ、重さから見れば、かなりの安い給与といえる。

一俵が五六キロ、一〇キロ当たり五〇〇〇円で計算すると、百五十俵で四百二十万円。一人扶持を、一人一日、玄米で五合の割合で計算すると、年額十三万円。四人扶持で五十二万円。合計約五百万円弱の計算となる。

その結果、三十一代英暉のころは、幕府への借入金の利息支払いも滞るようになり、困ったあげく、幕府にお願いして、物成米十分の一の代わりとして、伊豆、相模、武蔵の十万石支配の代官になり、元禄六年（一六九三）に百五十俵の俸禄（職務手当）の支給を受けて経費をねん出するという状態であった。

三十一代英暉が、代官に就任してひとまず江川家の財政も、最悪の状態を脱したかと思ったところ、英暉の長男、三十二代英勝は、過去にあった借入金の利息延滞の罪をきびしくとがめられ、窮地に追い込まれた。

この利息延滞の罪も、英勝の精勤により幕府から寛大な処置を得たが、悪いときには、悪いことが重なるもので、享保八年（一七二三）十一月、花水橋（現神奈川県平塚市）と、戸塚街道（現横浜市戸塚区）などの改修、修繕に使用する相模国中原（現神奈川県平塚市中原）の材木について、韮山代官所の役人が不正を働いたという嫌疑を受けた。

幕府の若年寄の面々は、老中より、

「この度の水路および道路改修工事について、韮山代官江川英勝殿について、資材の調達にからみ、横流しと贈収賄が露見したが、いかがしたものであろうか……」

と諮問され、早速御用部屋にて協議した結果、三十二代英勝は、監督者責任を問われて代官を罷免（免職）、かつ、将軍拝謁停止の処分を受けた。

そのあと英勝は、不遇にも、勘定奉行の配下に降格されたが、幕府の冷遇にもめげず、くさらず、あきらめず、まごころこめて、あたえられた職務を精勤したので、

その功によって罪を許されることになった。

三十二代英勝は、江川家歴代当主のなかでも、傑出した人物で、江川家中興の祖ともいわれている。

英勝は、江川家の財政再建のために、鎌倉時代から所有している山林原野などを開墾し、そこから生産された「作徳米」（余剰米）を借入金の元利金に充当するなど、幕府からの貸米（借入金）の返済に努力した。

さらに、穀類の増産に励み、従来からの作徳米（余剰米）と併せて、毎年二〇〇俵余を江川家の収入として経費に組み入れることができた。

英勝の嗣子（後継ぎ）、三十三代英彰は、父英勝と同様に、勘定奉行の配下であったが、寛延三年（一七五〇）五月に代官に復職、常陸（現茨城県の大部分）と下総（現千葉県の一部）の天領（幕府直轄地）四万石（のちに六万石に増額）を管理することになった。

さらに五年後の宝暦五年（一七五五）下野（現栃木県）と、陸奥（現青森県）の天領六万石を、さらに三年後の宝暦八年（一七五八）には、伊豆諸島を含む伊豆（現静岡県の一部）と相模（現神奈川県の一部）、および甲斐（現山梨県）の六万石を管理する代官を命ぜられて、よくやくかつての韮山代官江川家の体面を保つことができるようになったのである。

英彰の長子、三十四代英征は、代官としては、きわめて平凡な人物であったが、風雅を好む多芸多能の粋人で、自身は、詩人や歌人、画家、書家や、さらには遊芸を職業とする芸人など数多の文人墨客と広く交友する人であった。

しかし、代官所の仕事は部下任せであったため、いったん回復した財政もたちまち困窮し、遂に赤字が千両（現在の五億円くらいか）になってしまった。

この頃が、江川家の最大ピンチであった。

この借財は、三十五代英毅の代になっても返済できず、遂に、譜代の家臣、望月直好の忠死事件が発生する。

望月直好の忠死事件とは、先に述べた紀州藩の始祖徳川頼宣の生母お万の方が江川家の養女であった縁で、紀州藩から江川家の赤字千両を借りようと、望月直好が紀州藩に出向き、自分の命と引き換えに千両を借り入れたという事件。

三十五代英毅は、寛政四年（一七九二）五月から、天保五年（一八三四）三月に没するまでの四十二年間、職務と家政に精励し、名代官と呼ばれた。

英毅の後継が、この物語の主人公、三十六代江川太郎左衛門英龍である。

以後、三十七代英敏、三十八代英武、三十九代英文、四十代英晴と続いている。

江川家のルーツを分かりやすくするため、初代からの系譜を記しておく。

1頼親（源満仲の次男）—2頼房—3頼俊—4頼治—5頼弘—6親治—7有治—8俊治—9親信—10治信—11行治—12定治—13国治—14仲治—15英治—16英親—17英友—18友治—19国頼—20英房—21英信—22久朝—23英住—24英盛—25英景—26英元—27英吉—28英長—29英政—30英利—31英晴—32英勝—33英彰—34英征—35英毅—36英龍—37英敏—38英武—39英文—40英晴

＊系譜は、仲田正之著、『江川坦庵』吉川弘文館、二〇〇〇年、二頁—四頁、および二四八頁を参考にした。

三、日本にせまる欧米諸国

（一）

江川家三十六代の太郎左衛門が生まれた頃は、イギリス、フランス、アメリカなど欧米列強国の植民地政策が盛んな時代であった。

一方、鎖国政策をとっていた江戸幕府にとっても、外国の動静は大いに気になるところであり、幕閣でも、国際的な視野から世界各国の動向に意を払い、かつ、国際知識を持つ大名や旗本も、欧米列強国の侵略を警戒し始めていた。

後年、太郎左衛門が、海防上、東京湾の品川沖に御台場を築き、さらに韮山反射炉を築造するが、それに至るまでの経緯を理解するうえで、当時の国内外の情勢を述べておく。

まず国外に目を向けると、

一、スペイン、ポルトガル

① スペインでは、C・コロンブス（イタリア人）によるアメリカ大陸発見（一四九八年に南アメリカ発見、一五〇二年に中央アメリカに到達）

② ポルトガルでは、F・マゼラン（ポルトガル人）の地球一周（一五二〇年）の快挙

がなされるなど、アジアやアメリカ大陸への新航路が開かれ、また、インドをはじめとする東洋貿易やアメリカ大陸への進出が活発になってきた。

さらに、欧米各国では、アフリカの黒人奴隷を使って大規模な鉱山や、農園の経営が始まっていた。

スペインとポルトガルが海外に進出すると同時に、キリスト教（カトリック教）の宣教師が世界各地にでかけて布教につとめた。この布教がスペインなどの植民地政策や、貿易におおいに役立った。

後年、江戸幕府が、キリスト教を禁止したのも、このキリスト教の布教と植民地政策の関係を重視したからであった。

二、イギリス、オランダ、フランス

また、スペインのカトリック教を信仰する旧教徒に対して、新教徒の多いオランダは、毛織物を中心に商工業が発達したが、当時オランダを支配していたスペインが、重税をかけて新教徒をおさえた。

このスペインの政策に耐えられなくなったオランダ人は、軍隊をつくってスペイン軍と戦い、十六世紀末に独立してオランダ共和国をつくった。

この頃、スペインと海外進出で競いあっていたイギリスは、オランダをたすけてスペインと戦っていた。

フランスは、フランス革命を経て共和国となり、イギリスとともにインド地方に進出したが、イギリスとの競争に敗れると、今度はインドシナ（ベトナム、ラオス、カンボジア）へ進出した。

三、欧米列強国の植民地政策

① 一五八八年

イギリスは、一三〇隻の大艦隊を擁するスペインの無敵艦隊を撃破して、大英帝国の世界進出となった。

② 一六〇〇年

イギリスの国王は、大商人によって設立された「東インド会社」を支援してアジアへ進出し、さらに、北アメリカにも植民地をつくった。

③ 一六〇二年

オランダも、イギリスにならって東インド会社をつくり、ジャワのジャカルタを根拠地として、東南アジアの各地に進出した。

④ 一六四二年

イギリスでは、十七世紀の中期に、チャールズ一世の気ままな専制政治に耐えられなくなった議会がこれに反抗し、清教徒を中心とした議会軍が王室軍を破って共和制を樹立した清教徒（ピューリタン）革命（一六四二年～）がおこった。

⑤ 一六八八年

イギリスでは、ジェームズ二世の専断に議会が立ち上がって名誉革命が発生、立憲政治の基礎ができていった。

（この革命が、「名誉革命」と呼ばれるは、ジェームズ二世が国外に逃亡して、流血の惨事が起こらなかったからである）

⑥ 一七七六年

イギリスの植民地であったアメリカが独立して「アメリカ合衆国」が成立した。

⑦ 一七八九年

フランス革命がおこって、フランス王国の絶対王政が倒れ、「自由、平等、博愛」の精神によりフランス共和国が誕生した。

⑧ 一八〇一年

フランス皇帝ナポレオン一世が政権をにぎり、フランス革命（一七八九―九九）以来、敵対関係にあったローマ教皇と和睦して、三年後の一八〇四年に帝位についている。

⑨ 一八一二年

ロシアは、モスクワへ遠征してきたフランスのナポレオン皇帝を破り、アジアにも進出を始めた。

このような経緯をたどりながら、ヨーロッパ各国は、次第に封建社会から近代市民社会へ移っていった。

⑩ 一八四〇年

イギリスは、東アジアへの進出を狙って、インドを根拠地にして中国（清国）へ進出し、阿片戦争（一八四〇―一八四二）を仕掛けた。

阿片戦争は、圧倒的に有利な武器を持つイギリスが勝ち、その結果、敗者の中国（清国）は、一八四二年に、イギリスに対して、賠償金を支払い、香港を譲り、上海などの五港を開き、租界の権利を認めさせられ、関税率決定権をイギリスに委ね、さらに、イギリス人は罪を犯しても、中国の法律では罰せられないという「治外法権」を認めるなど、不平等な南京条約を締結させられた。

さらに、中国（清国）は、アメリカ、フランスなどの列強国とも、不平等条約を締結せざるを得なかった。

これら、イギリス、フランス、オランダなどの西ヨーロッパ諸国が、中国（清国）の次に狙いを定めたのが、マルコ・ポーロの「東方見聞録」で黄金の国「ジパング」として紹介されたわが国日本であった。

特に、ロシアは、東方見聞録に書かれてある黄金の国「ジパング」（日本）に強い関心を持ち、日本との接触のきっかけを探していた。

また、幕府が、欧米列強国の中で、最も恐れ、警戒していた国もロシアであった。

（二）

次に、目を国内に転じてみる。

一、日本に来た最初のヨーロッパ人と鉄砲の伝来

ヨーロッパ人で、日本に最初にやってきたは、天文十二年（一五四三）、に暴風にあって九州南方の種子島に流されてきたポルトガル人である。

このときポルトガル人が鉄砲を伝えて以来、この新しい武器が戦争に使われて、弓矢を主とした戦争が一変した。

日本では、これらの外国人を「南蛮人」、この商船を「南蛮船」と呼び、大名や商人は、鉄砲や火薬を買い取って利益を上げると同時に、軍備も拡充した。

鉄砲伝来から六年後、スペインのイエズス会宣教師、フランシスコ・ザビエルが日本にやってきて、二年間鹿

児島、平戸、京都、山口、大分などで、キリスト教を広めた。

二、鎖国政策

江戸幕府は、寛永一〇年（一六三三）以来、キリスト教を禁止するために、外国との通商や交易、海外渡航、在外邦人の帰国を禁止する『鎖国』政策をとってきた。

オランダが、

（スペインやポルトガルは貿易やキリスト教の布教以外に、領土的な野心がある）

と、幕府に吹き込んだことも、鎖国政策決定に大きく影響した。

このオランダの中傷をまともにとった幕府は、外国との交渉をオランダ一国に限定し、長崎の出島にオランダ人を収容して、日本唯一の貿易港としたのである。

三、幕府の財政改革

① 物価の高騰と良貨の駆逐

話が少し脱線するが、現在、わたしたちは、企業の大きさや内容を、資本金や売上高、利益の多寡（数字の多い少ない）で判断しているが、かつて武家社会では、特に江戸時代の大名は、加賀前田家百万石、尾張徳川家六十一万九千石というように、領内の米（玄米）の平均的な収穫高を基準として序列が決められていた。

このように、江戸時代の始めは、米が経済の中心であったが、平和な時代が続き、米経済中心から、いろいろな物が生産流通する商品経済に変わり、大名以下武士の生活が贅沢になるにつれて、幕府も藩も経費がかさみ、財政が苦しくなって商人から借金するようになってきた。

その結果、幕府は、金貨や銀貨の質を悪くして流通量を増やして支出をまかなった。

いわゆる、

『悪貨は良貨を駆逐する（粗悪な貨幣が流通すると良質な貨幣は市場から姿を消す）』

のたとえ（グレシャムの法則）のように、一両が実質一両以下の価値しかなくなり、物価はあがり、インフレとなってますます生活が苦しくなってしまった。

また、諸藩では、その藩内でしか通用しない紙幣「藩札」を発行したり、大商人から借金したりしてやりくりしたが、藩札は金貨や銀貨のような価値がないため、物価の高騰をきたし、インフレを招いた。

② 正徳の治

宝永六年（一七〇九～）、徳川第六代将軍家宣の顧問である新井白石は、貨幣の質を向上させたり、長崎の貿易を制限して銀貨の流出を防いだりして、「正徳の治」といわれる財政の立て直しをおこなった。

③ 吉宗の享保の改革

享保一年（一七一六～）、第八代将軍吉宗は、享保の改革をおこなって、質素倹約、新田開発など産業の開発に努め、財政の立て直しを図った。

④ 寛政の改革

天明七年（一七八七）、老中松平定信（第八代将軍吉宗の孫で白河藩主）が、寛政の改革をおこない、

⑤ 天保の改革

天保十二年（一八四一）には、老中水野忠邦（浜松藩主）が、天保の改革をおこなった。

いずれもあまり効果はあがらなかった。

このように、幕府も諸藩も財政が行き詰まり、その立てなおしに苦しんでいるときに、ロシアやイギリスなどの船が、日本近海に現れるようになってきた。

四、外国との通商

① 最初に通商交渉を求めたロシア

日本が鎖国をはじめた後、最初に通商を求めて日本にやってきたのがロシアである。

安永七年（一七七八）、ロシア船が、北海道の厚岸（太平洋沿岸釧路市の東、厚岸郡厚岸町）にあらわれて通商を求めたが、松前藩はこれを断った。

さらに、寛政四年（一七九二）にロシア使節ラックスマンが、漂流民大黒屋光太夫をともなって、根室に来航して通商を求めた。

しかし、幕府は長崎が唯一の貿易港であることを理由にこれを拒否。その後もしばしば北海道にあらわれて、松前藩と紛争をおこすようになってきた。

この頃の日本人の対露感情は、「ロシア恐るべし」というなみなみならぬ恐怖感に襲われ、ただひたすらに接触を拒みとおしていたのではなかったろうか。

② 太郎左衛門の生まれた時代

この物語の主人公江川太郎左衛門が生まれた享和元年（一八〇一）という年は、間宮林蔵の樺太探検の七年前である。

この享和元年には、伊能忠敬が、幕府の許可を得て、日本全国の沿岸測量を始めた年であり、また、出羽国村山郡（現在の山形県中央部）に数万規模の百姓一揆が起きており、国内に不穏な雰囲気が漂い始めていた。

太郎左衛門の生まれた時代は、朝廷も幕府も、公卿も武士も町民も、すなわち日本国中、二〇〇年余にわたる徳川政権のもとに泰平の夢をむさぼっていたが、世界の情勢は、大きく変わりつつあったのである。

四、父英毅の薫陶を受けて成長する

一、祖父の三十四代英征

「江川家のルーツ」の項で述べたように、太郎左衛門の

祖父三十四代英征は、上品で清潔な人格者であったが、徳川政権二〇〇年の泰平に馴れ、代官所の仕事は部下任せで、自身は、多芸多能の粋人として、詩人、歌人、画家、書家、芸人など数多の文人墨客と交友した人で、やもすれば、経済観念に欠けるところがあったため、借財ができてしまった。

このため、英征の後を継いだ三十五代英毅は、先代の残した借財の返済に苦労した。

家臣望月直好の忠死事件のあったのも、この頃（太郎左衛門英龍三歳のときの頃）のことである。

英征は、幕府の代官という高級官僚には珍しい粋人で、代官職はあまり熱心であったとは言い難い。が、幅広い交友関係とともに、文人としての能力は、非凡なものがあった。

この物語の主人公江川太郎左衛門（英征から二代後）の多芸多才は、この祖父英征の影響もあったものと思われる。

二、父の三十五代英毅

三十五代英毅は、明和）七年（一七七〇）二月三日に生まれ、天保五年（一八三四）三月二十七日に死去。享年六十五歳（数え年）。

① 将軍へ拝謁

幼名を金次郎といい、寛政元年（一七八九）八月、部屋住みのときに、十二代将軍徳川家斉に初めて拝謁。

② 代官見習

翌年（寛政二年）十二月に、将軍護衛役の「小十人組」に配属されて、百俵十人扶持の給与（石高に直せば一〇〇石と十人分、現在の約九〇〇万円の年俸）を支給され、代官見習いとなった。

③ 父英征の死

その翌年（寛政三年）八月に、父英征が死去。

④ 代官職を世襲

英毅は、父の喪が明けた寛政四年（一七九二）五月に、二十三歳で韮山代官となり、天保五年（一八三四）三月に没するまでの四十三年間代官職を務める。

⑤ 法衣（「ほうい」ともいう）に列せられる

英毅は、その間、文政九年（一八二六）十二月に、代官職精勤により表彰されて法衣（将軍に拝謁するときに着用する狩衣、転じて将軍に拝謁できる身分）の位に昇進した。

⑥ 財政再建の諸施策

英毅は、また、計数に明るい理財家で、父英征の放漫経営によりできた千両余の借財を返済するために、新田開発、荒田の開墾、植林、河川や道路橋梁の改修改築などを行った。

⑦ 殖産振興と質素倹約

英毅は、さらに、幕府の支援を受けて、支配地内の多摩川、相模川、酒匂川、道志川、狩野川、奥津川などに稚鮎を放流して農民に鮎漁を奨励して現金収入の道を教えるなど殖産振興を進め、質素倹約を実行して財政再建に尽くし、家政にも精励するなどの諸施策を実行して、名代官と呼ばれた。幕府は、この功績に対して金三枚の褒賞金を与えている。

⑧ 代官職の職務手当

英毅は、数々の施策を実施した功績を認められ、十余回の表彰を受けた、また、支配地も伊豆、駿河、相模、武蔵、甲斐、支配高約七万石となり、支配地が増加するにともない、代官職の石高（職務手当）も、一五〇俵から三〇〇俵と増額し、さらに晩年には、五〇〇俵になるなど優遇されたが、それだけ功績があったからである。

⑨ 風貌

英毅の風貌は、筋肉質の長身で、面長。眉が秀でたいわゆる美男子であったといわれている。太郎左衛門の自画像は、父英毅似と思われる。

⑩ 交友関係

英毅は、先代の三十四代英征の幅広い交友関係もあってか、友人知人も多岐にわたり、それらの人々が、次男である太郎左衛門に影響を与えている。

なかでも、絵画の谷文晁（一七六三―一八四〇）は、韮山の江川邸に逗留して太郎左衛門に手ほどきしたといわれている。

さらに、伊能忠敬、間宮林蔵とも交際し、林子平著の『海国兵談』を読み、国内外の情勢に目を向けていた。

英毅の多彩な交友関係により身に付けた行政能力、国防思想、特に海防思想が、太郎左衛門に引き継がれたのである。

三、後継者の教育

太郎左衛門には、兄の英虎（倉次郎）、太郎左衛門（英龍）、弟の昌之助、妹三人の兄弟妹があったが、弟昌之助と妹一人が幼くして死亡したので、成人したのは、男子二人、女子二人の兄妹であった。

父である江川家三十五代当主の英毅は、自身の研鑽にもきびしい態度で臨んだが、後継者（世襲代官）の教育にもきびしかった。

① 兄の英虎（倉次郎）

兄の英虎（倉次郎）は、太郎左衛門より三歳年上で、寛政十年（一七九八）に生まれた。成長するにともない、江川家の後継者として、弟の太郎左衛門とは別格の教育を受けて成長した。

兄弟でありながら、別格の取り扱いをされたのは、家

族制度がきびしかった江戸時代には、嫡子である長男と部屋住みである次男以下との身分、権力の差が、現代の我々が想像できないほど、たとえば、父と子、否々、殿さまと家臣くらいの違いがあったからである。

いいかえれば、それほど嫡子である長男には重い責任が課され、次男以下は、のんびりと、気ままであった。

② 太郎左衛門（邦次郎、英龍）

江川太郎左衛門は、この物語の冒頭で述べたように、享和元年（一八〇一）に韮山代官江川英毅の次男として生まれた。

太郎左衛門は、次男なるがゆえに、江川家の当主、すなわち、世襲代官の後継ぎである兄の英虎とは違って、世の中の動きとは無関係な部屋住みの腕白な少年時代を過ごしていた。

そもそも「部屋住み」とは、家督を相続しない間の身分や次男以下で、分家独立しないまま、親や長兄のところで居候している者を指してそのように呼んでいた。

太郎左衛門が次男であったことについて、曾孫で、東京大学名誉教授の江川滉二氏は、

「先見の明があった。もともと二男で、代官職の訓練をやる必要が無かったため、幅広い才能を自由に伸ばせたのでは。長生きすれば、幕末の世でさらに活躍できたはず」

と語っている。（『龍城物語―韮高躍動の百二十五年』、平成十一年八月十八日、静岡県立韮山高等学校同窓会発行、四一頁）

このように、太郎左衛門は次男であるがゆえに、才能を自由に伸ばすことができたというが、どうしてだろうか？　少し説明しよう。

現在、わたしたちは、親が死亡すると、ごく当たり前のように、兄弟姉妹が親の財産を同じ割合で相続している。いわゆる均分相続という制度である。

ところが、戦前（第二次世界大戦以前）の民法では、家制度、戸主制度があり、長男が家督相続といって、家の跡目（家族を統括し扶養する義務）を受け継ぐことになっており、特に、江戸時代の武家社会では、世継の長男にすべての権利義務が継承されて、次男以下の「部屋住み」は、わずかな財産分けをしてもらって独立するか、長男の厄介になって一生を終るしかなかった。

見かたを変えれば、次男以下は、家を守り、両親を見取とり、家族を扶養する義務がないだけ気楽な日々を送れるわけで、このような気軽な部屋住みの身分ではあったが、

『部屋住み三年は山伏の峰入り』

家督を相続する前（部屋住み）の三年間は、山伏が修業のために吉野の大峰山に入る時期と同じように、大切な修業の期間であるという意味（小学館の『ことわざ大事典』より）。

と、いうことばのとおり、本当は、この部屋住みのときの修業が非常に大切であった。

太郎左衛門は、曾孫江川滉二氏が語っているように、気楽な部屋住み時代に、いろいろな分野の人物と交友し、おおいに英気を養い、学問を学び、武芸に励んだことが、その後の人生に大きく影響したのである。

蘭癖家といわれて気味悪がれ、嫌われた外国の学問（洋学、特に蘭学＝オランダ語）好きな人たちとの交わりもこの頃であった。

なかでも、オランダ医官シーボルトの通訳で、太郎左衛門の蘭学の師でもある幡崎鼎の影響は大きかった。

そのほか、幕府勘定吟味役川路聖謨、寄合松下内記、使番松平伊勢守、幕府儒官古賀侗庵、田原藩家老渡辺崋山、蘭方医高野長英、同じく岸和田出身の蘭方医小関三英などとの交流が深かった。

物語を元に戻そう。

普通、身内、特に親がわが子を教えるときは、ともすれば甘くなり勝ちであり、また、子供もわがままが出て勉学を手抜きするものである。

ところが、英毅は違った。

英毅は、常に子供たちをきびしく指導していたが、特に、部屋住みである太郎左衛門に対しては、幼き頃より、学問や武道を身に付けることは、自分自身のためであると繰り返して教え、

「よいかな、学問は小さな時にしっかりと学べば、やがてその学問が役立つときがくる。さらに、学んだ学問が、必ず身を守ってくれる。

決して、おろそかにするではないぞ。

昔中国に、

少年老い易く学成り難し
一寸の光陰軽んずべからず
未だ覚めず池塘春草の夢
階前の梧葉既に秋声

という詩がある。これは、

いま、お前は子供だと思っているが、すぐに成長して大人になってしまう。

ところが学問は、なかなか難しく、身につかないものだ。

だから、少しの暇も惜しんで、学問に精を出さなくてはならない池のほとりの春草のような夢は、いつまでも覚めないでいるが、外を見れば、階段の前の桐の葉は枯れて、すでに秋風の音がしている。

それなのに、いつまでも春の気分でいるようでは駄目だ。

という意味である。学問は、子供のときにしっかり学びなさいという教えであって、学問を学ぶ者は、誰でも最初に教えられる大事な教訓である」

といって、朱子学の祖で、中国南宋の学者、朱熹の詩を聞かせるなど、自ら太郎左衛門をきびしく鍛えた。

「ハイ、父上。一所懸命に学びます。よろしくお願いします」

と、父から渡された書物を、書見台の上に広げ、真剣なまなざしで学んだものである。

それから、太郎左衛門の本格的な修業が始まった。

また、江川家三十五代当主である英毅は、長男の英虎（倉次郎）が死亡し、葬儀などすべての法事が済んだある日、次男である太郎左衛門を自室に呼んで、

「そちの兄英虎が死んだがゆえに、すみやかに、わが江川家の後継者を幕府に届けなければならないが……」

と、家督相続の話を、それとなく持ちかけた。

「はい、兄上亡きあと、江川家の男子は、わたし一人でありますので、そのことについて内々で覚悟しております……」

と、太郎左衛門は、覚悟のほどを示した。

「よって、早急にそちを嫡子として幕府にお届けし、お許しをいただくようにするつもりである」

「はい……」

「ついては、そちも、いままでのような気楽な部屋住みの身とは違う。しっかりと、修業して立派な後継者になって欲しい」

英毅は、嫡子の英虎が死亡して気落ちしたが、いつまでも悲しんでばかりはいられない、と次男の太郎左衛門に、江川家の後継者としての心構えを諭すのであった。

さらに

「よいか太郎左衛門、この江川家は、清和源氏につながる由緒ある家柄である。決しておろそかにできない。お前も、神に誓ってご先祖さまの名を汚さないように、世のため、人のために尽くす人になるのだ、よいな」

と諭した。

すると、太郎左衛門は、

「ハイ、私は父上に教えていただき、世のため人のためになるように、しっかり学びます。よろしくお願いします」

と、固くそう誓って学問の習得に努力した。この努力が、そののち洋学に取組み、数々の偉業を成し遂げた基礎となっていたのである。

つづく

中国の良き師良き友

吉田忠雄

1．はじめに

私は縁あって何人かの中国人と知り合いになりました。彼らは私の良き師良き友です。忘れないうちに書き残しておこうと思います。

2．中国人との個人的接触

私が中国人とはじめて言葉を交えたのは、大学を卒業して2年目の1957年のことです。当時私が勤めていた火薬製造工場に台湾から一人の技術者が見学に訪れました。工場の技師長・吉川英吉氏が「吉田君、御客様にこのプラントの説明をしなさい」といいました。私は片言の英語で説明しました。この人は流暢な英語で、しかもやさしい英語で質問してくれました。この中国人は、何と紳士的で、学識があり、英語がうまいのだろうと思いました。

次に中国人と会話をしたのは、1973年イギリスのエクセター大学に留学していたときでした。当時中国は文化大革命の最後のころで、その中核をなす紅衛兵の一団がイギリスを訪問し、エクセター大学にも来ました。同じ東洋人ですので、私も興味を持ち、その中の一人を招待しました。一人で来るのは具合が悪いらしく、二人でやってきました。彼らは理想に燃えて、中国の現在と未来を語りました。私よりましな英語を話しました。資質に恵まれた少年たちでした。しかしそれから数年を経ずして文化大革命は失敗に終わりました。

次に中国人に会い、親しく話を交わしたのは、1979年のスエーデンにおける火薬の安定性シンポジウムのときでした。この学会は3年に1度開かれますが、このとき私は1人で日本人としてははじめて参加しました。ここで、中国西安近代化学研究所の張明南教授と連れの

助教授と会いました。張先生は流暢な英語を話す紳士でした。学会の合間に張先生とはいろいろなことを話しました。学者として最も長く話をした最初の中国人です。

3．中国との交流の始まり

私と中国との実質的な交流の始まりは、1980年9月に須藤秀治中央大学名誉教授夫妻と北京工業学院（現在の北京理工大学）を訪問したときです。ちょうど文化大革命が終わって間もない時で、私たちは熱烈歓迎を受けました。私たちは、北京工業学院の隣にある友誼賓館の離れに泊り、私は、ニトロ化反応、火薬、安全、大気環境問題の話をしました。中国全土からその方面の先生方が集まり、私の講義を熱心に聴いてくれました。

私の講義の通訳は于永忠先生がしてくださいました。豊かな学識を持ち、日本語をよく理解しておられる方でした。恐らく私の日本語の講義より中国語に翻訳された于先生の講義のほうが良かったのではないかと思います。わずか1週間の講義でしたが、須藤先生と私は北京工業学院から顧問教授の称号をいただきました。これはそれまでの須藤先生の貢献のおかげです。

北京工業学院は須藤先生と交代で北京市内観光と近郊の観光を用意してくれました。万里の長城、明の十三陵、故宮博物館、天檀、頤和園などです。雄大さに圧倒されました。観光案内と通訳は西安化学研究所の毛鳳忠さんです。このときの縁で、毛さんの娘さんと息子さんが日本に留学してきました。彼らのその後はあとから述べます。北京工業学院では、先にスエーデンの学会でお会いした張明南先生と助教授の先生にお会いしました。張先生は西安近代化学研究所の所長であると同時に北京工業学院の兼任教授でもあったことがわかりました。

北京工業学院では私たちのために9月12日に頤和園のレストランで歓迎の宴を開いてくれました。この日は私の50歳の誕生日でもありましたので、学科主任の陳活生先生は私のために素晴らしい詩を作って贈ってくださいました。一生の宝にしてあります。

陳先生の詩：

「好夢令」

鮮花、友誼、美酒、
歓慶五旬大寿。
欣逢華中遊、
意義更添一籌。
挙杯恭賀、
友誼天長地久。

吉田忠雄先生来我院講学期間、
適途五十寿長、詩作〝好夢令〟
詞一首相贈以資慶賀。

陳活生
一九八〇年九月十二日
於北京

もうひとり黄先生も親切に世話をしてくれました。陳先生と黄先生のお宅に招待され、家族の皆さんともお会いすることができました。中国人も日本人も親切な人は同じだと思いました。

私は最初の北京訪問で何人かの重要な日本人に会いました。最初の方は国語学者の金田一春彦先生です。友誼賓館でお会いしました。先生は一〇〇人の門下生を連れて中国人の日本語教育のために北京に来ておられました。

次にお会いしたのは山本さんご夫妻です。山本さんは鉱山技術者として終戦直前に中国に渡られ、戦後も中国復興のために尽くされました。しかし文化大革命のときには投獄されました。ですが、獄中の生活は厳しいものではなかったようです。また山本さんは真に中国の人々を愛した方です。文化大革命の直後に「北京三十五年」（岩波文庫、1980）を書かれました。戦中、戦後の中国の様子が率直に活写されています。山本さんを紹介してくれたのは、以前仕事でお世話になった小笠原さんです。当時小笠原さんはＴＢＳの北京特派員でした。

北京には栄宝斎という有名な書画骨董店があります。ここにもつれていってもらいました。一枚300円の有名な中国人画家の描いたきれいな花の版画を何枚か買いました。ここでは当時の公明党委員長に会いました。当時の公明党は日中交流で重要な役割を担っておりました。

4．台湾との交流

1982年に台湾の国立技術研究所の邱博士が東大の私の研究室を訪れました。火薬の技術指導の依頼です。私は、「技術者を派遣すれば要望にこたえましょう」と答えました。陳さんと林さんの2名の青年が派遣されてきました。それに先立って、私は彼らの世話をしてもらう研究室技官の伊藤さんと博士大学院生の大内君を伴って、台湾の視察に行きました。はじめてみる台湾は私にとって驚きの連続でした。お会いする多くの人は日本語が話せます。礼儀作法は昔の日本のように正しいのにも驚きました。若者は親の前では小さくなっていました。トロコ渓谷は私が今までに見た奇景の最たるものでした。

張さん、林さんは半年の留学で帰りました。その後邱博士と研究所長の呉博士がたびたび来日され、私は関係各所を案内して中華民国火薬学会設立のお手伝いをしました。その功が認められ、中華民国火薬学会の名誉会員

北京工業学院化工系

に推されました。また台湾の研究所で爆発事故があり、この原因調査と安全対策のお手伝いをしました。そんな関係で台湾を何回か訪れました。食事がうまかったことが印象的です。

1987年には台湾出身の黄東栄さんが東大吉田研究室の博士コースに入学してきました。そして独創的な研究成果をあげ博士号をとられるとともに吉田研究室と台湾ならびに中国との交流の手助けをしてくれました。

5. 南京理工大学との本格的交流

1987年に華東工学院（現在の南京理工大学）の劉栄海先生が于永忠先生の紹介で国費留学してこられました。先生は1年の留学後帰国されましたが、東京大学の吉田研究室と華東工学院の間を取り持ってくれました。最初の事業として吉田研究室と華東工学院共催で「日中火薬技術と安全セミナー」を計画しました。

そしてその準備として私は私の研究室の田村助教授と細谷火工の細谷常務（現会長）と共に1989年3月末に華東工学院を訪れました。その時私たちは上海空港で劉先生の出迎えを受け、夜遅く汽車で南京につきました。南京駅には呂春緒先生が出迎えてくれました。呂先生と私の付き合いの始めです。呂先生にはその後東京大学で火薬化学の講演をしていただきました。呂先生は南京理工大学の副学長を務められ、火薬研究所を設立され、現在は中国における火薬学と火薬工業技術の第一人者です。

このときは、次に行うセミナーの打ち合わせをしました。その帰りに敦煌遺跡を見学し、北京工業学院で于先生とその学生の周興喜君に会ってきました。周君は吉田研究室に留学予定の人ですので一度会っておこうと思ったからです。そしてみんなで天安門の前で記念撮影をしました。このときは、この天安門広場で2ヶ月後にかの有名な天安門事件が起こるとは夢にも思いませんでした。

天安門事件のために私たちが計画した日中セミナーは難航しました。日本の会社の人たちは、事実上天安門事件後の中国への渡航ができなくなったからです。やむを得ず規模を縮小して、吉田研究室のメンバーと細谷火工の細谷政夫会長、細谷一夫社長および細谷文夫常務で出かけていき、「日中セミナー」を行いました。しかし、このことによって吉田研究室と南京理工大学の結びつきは強くなりました。この会議の後、私と細谷火工の幹部は片道4時間かけて中国の花火工場の視察に行ってきました。

1990年には北京から周興喜さん、南京から呉建洲さんが留学してきました。この時には蔵持科学器械製作所の蔵持勇社長に大変お世話になりました。二人の下宿のお世話をいただき、奥様にはいろいろの心使いをいただきました。そのうちにこの二人の奥さんも来日しました。蔵持社長は75歳でなくなられましたが、その甥の別会社蔵持の蔵持進社長と親しくなりました。これが縁で、毛鳳忠さんの娘英さんと息子偉さんを蔵持に採用してもらいました。蔵持進社長は残念ながらなくなりましたが、毛英さんは蔵持で日中の通訳として活躍し、日本の永住権を取りました。毛偉さんは中国の蘇州に設立された蔵持電子公司で活躍しています。

周さんは1年半後に北京に帰り、北京工業学院で学位を取りました。私はそのとき中国に行き、学位審査の副査を勤めました。呉さんは、1991年3月に私が東大を定年で辞め、法政大学に転職するにあたり、いろいろと手助けをしてくれました。そしてその年の9月に東大の博士コースの試験に見事合格しました。その学位論文には火薬学会論文賞が与えられ、現在ダイセル化学工業に奥さんと共に勤めています。呉さんはインフレータ関係の特許をたくさん出し、関係業界で有名です。

1992年1月には、ある爆発事故の原因調査実験のために関係のある会社の人々と共に華東工学院に行きました。全てが予想通りには行きませんでしたが、貴重な実験結果を得ました。中国側では邱副院長と劉先生が纏め役をしてくださいましたが、来日予定の彭金華博士と於玉華博士がよく実験を手伝い、通訳をしてくれました。

1992年に彭金華さんが法政大学の私の研究室に留学してきました。秘書兼共同研究者として大活躍してくれました。大学の近所のアパートに住んでもらいましたが、料理が上手で時々手製の中国料理をご馳走になりました。翌年には科学技術庁の外国人科学技術研究員（STA）に採用され、奥さんとお子さんを呼び寄せて1年間高給で消防研究所に勤めた後南京理工大学に戻りました。その後南京理工大学化工学院の副院長を経て院長に栄進し、二度の国際会議の事務局長をしています。彭金華さんはその間カナダにも留学しています。

1993年には、於玉華さんが留学してきました。日本語が上手で口八丁手八丁の人です。協同研究者として、また私の私設秘書として大いに助けてもらいました。呉さんと同様に1年後には消防研究所に移り、その後は徳島の大塚化学（株）に勤めました。私は大塚化学と協同で自動車用エアバッグの新しいガス発生剤の研究をしていましたので、於さんとは一緒に実験研究をしました。於玉華さんはその後蘇州大塚化学の謹事長となり蘇州の工場で活躍しています。

1994年には、広西大学から劉雄民博士がやってきました。劉さんは、於さん及び呉さんと華東工学院の寄宿舎で同室だったそうです。3人3様の性格で、劉さんは社交性のある学者肌、於さんは社交性の高い技術者、呉さんは積極性の有るまじめな技術者でした。劉さんも吉田研究室に1年、消防研究所に1年勤務し、故郷に帰

り、広西大学の教授になりました。そんな縁で、私は広西大学を訪問し、2年間広西大学の客員教授にしていただきました。劉さんはその後東京大学および産業総合技術研究所に留学しています。

1995年には、丁大玉博士が来日しました。丁さんはまじめな技術者ですが、年齢超過で科学技術庁のSTAには採用されませんでした。その代わり私の研究室に2年いて、私と共著で「化学物質の安全技術」を書きました。その後は日本工機という会社に勤めましたが、その後足利工業大学の「花火大学院」の専任教員として採用され今日に至っております。丁さんは、花火関係の多数の研究論文を書きました。

1997年には、北京理工大学出身の陳建林博士がきました。陳さんは学者肌の人ですが社交性もあります。1997年は私にとっては忙しい年でした。動燃の東海事業所で火災・爆発事故があり、その原因調査を行いました。また、第23回国際火工品セミナーをつくばで主催しました。陳さんはこれらの遂行に大いに力になってくれました。陳さんは、1年後に丁さんと同じ日本工機に就職しました。その後日本工機は日本油脂という会社に合併され、陳さんはオートリブ日油というインフレータの会社に勤めて活躍しています。

1998年には、法政大学と上海交通大学との日中環境シンポジウムで清成忠男法政大学総長らと共に上海を訪れ、新しい友人を得ました。残念ながら、私は翌年から足利に勤務することになり、この交友関係は発展しませんでした。1999年には、第26回国際火工品セミナー参加のため南京理工大学に行きました。懐かしい方々から熱烈歓迎を受けました。

私と中国との関係は1980年から始まりました。最初に北京を訪問したときは、30年前の日本に戻ったような気がしました。北京市内の道路は古い自転車でいっぱいでした。しかし、先生方の御宅に招待されますと、こざっぱりしていて私の団地生活よりましな気がしました。それから5年おきに中国を訪問しますと、古い自転車は新しくなり、自動車が増え、人々の着ているものも昔の人民服から新しい流行の服に変わってきました。1999年に上海に行ったときには、ホテルの窓から見た上海の遠景は高層建築で埋め尽くされているのには驚きました。

6. 瀏陽の花火会社訪問

足利工業大学は日本の火薬研究と教育の拠点を残すために、2000年4月に「花火大学院」を開設しました。その学生募集と中国の花火事情視察のために、私と丁先生と毛鳳忠さん3人で2005年5月1日から5日まで中国湖南省瀏陽市を訪問しました。この訪問に際しては毛偉さんが訪問先を調べて選んでくれました。

最初に訪問したのは、瀏陽新華意芸術焔火有限公司です。ここでは、張紹年社長、陳佳課長と欧陽衛国煙火専門学校元校長と会いました。いろいろ有益な話を聞かしてもらいました。陳佳課長は、長沙空港への出迎え、煙火検査所への案内および長沙空港への見送りすべてやってくれました。

次に訪問したのは、国家級焔花爆竹検測重点実験室（瀏陽）・湘南出入境検験検疫局烟花爆竹検測中心（以後煙火試験所と略称する）です。ここでは、譚愛喜部長が案内してくれました。譚部長とは、2004年に日本で開かれた第9回国際花火シンポジウムでお会いしていました。瀏陽の煙火試験所の設備は充実していていました。

次に訪問したのは、金生花炮集団のMGF. CO., LTD.です。ここの張斌社長に会いました。金生花炮集団は1500人の従業員を持ち、8つの工場を持つ世界有数の花火会社です。

長利出口花炮廠では曾副工場長と数名の副工場長と会って説明を聞き、工場見学をしました。最後に慶典烟花有限公司に何継榮社長を訪ね、懇談しました。そして工場を見学させてもらいました。以上の訪問で中国が世界の花火の約90%を生産し、花火の領域では独占的な地位を築いていることを知りました。

7. 中国系の日本花火史の研究者

最近、中国系の花火歴史研究者に会いました。この人は、オーストラリア・シドニーのMacquarie大学の博士課程に在籍するDamien Liu-Brennan さんです。彼のお母さんはアイルランド人ですが、お父さんとお祖父さんは中国人で、ともにお医者さんです。Damien さんは日本の花火の歴史を博士論文のテーマとしています。私は日本で彼と会い、その後文通をしています。彼は、花火研究者としての私にとって貴重な学友です。

8. おわりに

中国の良き師良き友を紹介しました。平成20年12月5日から8日まで家内とともに南京と蘇州に行ってきました。南京は、呉建州さんと周興喜さんの世話による私にゆかりのある中国人の皆様の招待です。南京の行事は呂春緒先生と彭金華先生が面倒を見てくれました。懐かしい皆さんと合うことができうれしい思いをかみしめました。

蘇州は毛偉さんによる観光案内です。お父さんの毛鳳忠さんも西安から出てきて付き合ってくれました。私の中国交流28年を飾る記念すべき中国訪問となりました。

目耕録（その九）

――内山節著『里の在処』を読む（新潮社、二〇〇一年）――

目耕：目で紙田を耕す。読書することを譬えて言う（世説新語）。

山本鎭雄

蒔かぬ種は生えぬ

退職を契機に、山梨県東部の妻の畑に通い（週一回、一泊二日）、野菜作りを始めて六年目を迎えた。三月上旬に恒例のジャガイモの種芋を植えた。毎年、この作業が終わると、この山村に本格的な春の到来を感じる。ところが、三月中旬、咳をすると、唾液に鮮紅血が混じり、喀血した。近くの診療所でレントゲン写真を撮り、呼吸器に影が見えると診断され、紹介状を書いて貰った。早速、近くのＫｙ大学付属病院で受診した。

大学病院の呼吸器科で紹介状とレントゲン写真を提出し、来院の理由と症状を用紙に書かされた。外来患者の緊急治療室があったにもかかわらず、長い間、待合室で待たされた。その間、何度も咳が出て、トイレに駆け込み、喀血した。やっと呼び出され、レントゲン検査の結果、医師から緊急入院を指示された。入院した病棟は二十四時間監視体制の集中治療室だった。

感染症の肺結核を疑われたらしいが、数回の血痰検査の結果、肺結核の疑いは晴れた。高血圧気味の私は、入院中の血液検査で血圧は低下し、しかも貧血と診断された。医師から因果関係を明らかにしてもらえなかった。病院のトイレで大量に吐血したことがその原因ではないかと思っている。

二十四時間の止血剤と鎮咳剤の点滴治療で、次第に症状は消えた。気管支鏡の検査を受けた。ところが、症状の決定的な原因、つまり「蒔かれた種」は未解明のまま経過観察となった。退院後、血液検査とレントゲン検査のために通院した。呼吸器に爆弾をかかえ、中途半端な身となった。

思わぬ入院騒ぎと雨降りのために、野菜作りを本格的に再開したのが、四月下旬だった。順序として雑草を根絶するか、種を蒔き、苗を植えるか、判断に迷った。そこで、文字通り「蒔かぬ種は生えぬ」と考え、畑の中和剤として苦土石灰と有機肥料を時間をおいて撒いた。それぞれ耕耘機で耕し、畝を作ったあと、無事、春夏野菜の種を蒔き、苗を植えた。

ジャガイモ奮闘記

種を撒き、苗を植えながら、冬越しのえんどうと空豆を収穫した。結構、あとかたづけに時間がかかった。また季節はずれの大型台風が襲来して、いんげん豆やかぼちゃに立てた支柱が倒れ、補修した。イチゴには手が回らず、カラスに食われたらしい。トンネル栽培のキャベツとスティックブロッコリーを収穫した。これもあとかたづけに手間取り、なかなか草取りに手が回らず、雑草が茂り始めてイライラした。

ジャガイモの種芋を植えた後、鋤で中耕し、肥料を施し、鍬で土寄せをする。六月になって男爵は白色、メークインは淡黄色、今年初めて植えたピルカは淡紫色の小さな花が咲いた。六月の梅雨の晴れ間に収穫した村人は「収穫は平年並みだ」、「べと病が入って、収量が落ちた」と、ジャガイモの収穫がしきりと村人の話題になった。ジャガイモの収穫を終えると、夏の本格的な到来を感じる。

ジャガイモは、米に次ぐ第二の主食といわれ、一年を通して食べることが出来、また食べ切れなかったら、来年三月に丈夫そうな芋を選んで、種芋として植えることも出来る。そんな訳で、大変結構な野菜だが、それは、あくまでも健康なジャガイモが収穫出来た場合である。疫病に侵されると、保存したジャガイモは腐り、早く見つけないと、病原菌は拡がる。管理に大変手間がかかる根菜類だと分かった。

ジャガイモの病気は疫病が代表的で、べと病は野菜作りのテキストには書かれていない。他に瘡痂病が良く知られている。土壌は雨で酸性になるので、土壌調整のために石灰資材を撒く。ところが、ジャガイモは弱酸性の土壌を好むため、石灰資材を撒かないが、土壌に石灰が残留していると、瘡痂病が発生し易い。ジャガイモの表皮に粒状のぶつぶつが出来るのが、その特徴である。初めて撒いたピルカに瘡痂病の症状が出た。

六月始め、ジャガイモの葉が青々としていた。さぐり掘りをしたが、まだ十分に生長していなかった。指で叩くと、新ジャガのコンコンという初々しい乾いた感触が

した。本格的に掘り出すには、まだ早いなと判断した。ときおり雨が降り、私は自宅で本読みと物書きで過ごした。二週間後に畑へ行くと、男爵とメークインの葉が消え、茎はすべて枯れていた。

隣の畑の人から「そこのジャガイモの畑で腐った臭いがした。べと病が入ったらしい」と教えられた。ジャガイモを掘り出すと、僅かだが、いつものように腐ったジャガイモが出てきた。それを取り除き、天日で乾かし、ダンボールに入れ、畑小屋に保存した。当初、蔓延した病原菌でジャガイモの全滅を心配したが、私の心配は取り越し苦労に終わり、平年並みの収穫だった。

ところが、一週間後、保存したジャガイモを点検したところ、腐ったジャガイモがいくつか見つかった。今後とも定期的に点検しないと、病原菌がダンボールのジャガイモに蔓延するに違いない。猛暑日が続くと、病原菌はますます活発に活動するだろう。年間を通して食べることが出来るはずのジャガイモは、今回は大変厄介な根菜類になった。

ジャガイモの保存と管理に頭を悩まされた。その時、集落の農協委員から「ジャガイモ、どうする」と声をかけられた。早くも来年の北海道産の種芋の予約だった。五キロ、十キロが販売単位だった。翌年六月、平年並みに収穫できれば、五倍近く収穫出来る。そこで、男爵芋五キロを注文することにした。少量のメークインやキタアカリの種芋なら、自宅の近くのホームセンターで買えば良いと判断したからだ。

炎天下の戦い

里芋や生姜の発芽は遅く、草取りを先送りしたため、生長した雑草に埋没してしまった。ミニ耕耘機はあくまでも耕作のための動力機だが、畑仕事では邪道なことを承知して、耕耘機を動かして雑草を刈った。運転を一時停止し、ローラーに絡んだ雑草を取り除いた。それは完璧な除草ではなく、取り残した雑草もある。さらに小鎌で根絶したはずの雑草が雨で根付き、憎々しくも蘇生した。

かつては村人は畑に除草剤を撒布することに抵抗を感じなかった。すでに田や畑の禁止農薬に指定され、撒布には慎重になった。ベトナム戦争でアメリカ軍が化学兵器として使用したダイオキシンを含む枯葉剤は、人体へ異常な影響を与えた。そこで、日本では除草剤は禁止農薬と指定されたのであろうか。

私が耕す畑の両隣の畑は耕作放棄地で、除草剤を撒布し、雑草を枯らしている。除草剤は一時的に効果があるが、耕作放棄地の場合、しばらくして雑草はたくましく生い茂る。撒布する当人には除草剤が禁止農薬という認識は毛頭なさそうだった。はた迷惑とはこのことだが、多少の迷惑を承知しても、村人は「言挙げする」（言葉に出して言い立てる）ことはしない。私もまた近所付き合いの慣習に従い、両隣の畑の除草剤撒布にあえて文句を言わなかった。

種を蒔いた後、畝間や条間を管理機や除草車で中耕するのが効率的だ。小規模の耕地の場合、中耕は除草を兼ね、鋤で作物の間を軽く掘り返す。その後、追肥し、鍬で土寄せをする。そうしたところ、私は息が切れ、腰が痛み出し、手足がしびれ、ついにギブアップした。

根を張るイネ科のオヒシバやメヒシバ、乾燥に強く、しぶとくはびこるスベリヒユ、多年生植物の杉菜などは小鎌で一草一草根を刈り取り、文字通り根絶するしかない。里芋は肥料を撒いて、かまぼこ状に土を盛り、黒マルチで覆い、穴を開けて、そこに種芋を植える。そうすれば、除草を必要としない。ところが、この里芋は水っぽくて美味くないというベテランの村人がいた。私は種芋を四作植えたが、試しに、そのうちの一作に黒マルチを掛けなかった。

ところが、その一作に雑草が生い茂り、里芋の葉と茎はその影に隠れてしまった。雑草を刈ったところ、やはり里芋の葉と茎の生長は弱弱しかった。早速、肥料を撒き、土寄せをした。うっとうしい雑草をきれいに除去したことで、気分は清々した。炎天下で雑草との戦いはまだまだ続く。

小椅子に座って

昨年の夏、私は昼間の畑で軽い熱中症状を経験した。身体がだるくなり、冷ましたお茶を飲んだところ、尿意をもようした。そこで、畑の隅で四・五匹の蟻めがけて放尿をした。蟻は一目散に逃げ出した。蟻が一匹も戻って来ないので、「しめた」と思った。尿中に糖が含まれていないようだ。だが、喜んではいられない。畑小屋に入り、またお茶を飲んで、身体を横にした。

草取りにギブアップした私は、近くの村人に草取りを頼んだ。当地では畑仕事も「山仕事」と言う。かつては薪炭林や造成林の「日傭取（ひようとり）」（稼ぎ仕事）を、そのように言った。「山仕事」は田や畑の「賃稼ぎ」を言い、昨今ではそれを引き受ける村人は唯一人になった。二百坪の畑の草取りに三日間半もかかった。

その時、「やれやれ」と思ったが、早くも一週間後には雑草が芽を出した。今年の夏は体調に注意して草取りに専念し、「山仕事」を頼まないことにしたいと思っていたら、妻が畑の一部を小鎌で一草一草根から取り除いてくれた。まだまだ雑草は、畑のあちらこちらにはびこっている。雑草が種を付けないうちに完全に除草することが勝敗の分かれ目だ。

畑に雑草を生えさせないように、梅雨の前から除草に励み、雑草の芽が出たら、除草を兼ねて耕耘機で耕すことがプロの耕作者の当然の作業だろう。私は週一回の畑

仕事だから、毎日のようにミニ耕耘機を動かすことが出来ない。草払機と耕耘機で除草した後、動作は緩慢だが、腰に負担がかからないように、小椅子に座り、小鎌で除草することにしている。一畝でも草取りを終え、タオルで汗を拭きながら、腰を延ばすと、清風を感じて爽やかな気分になる。

すべて山里の釣りに始まる

本号では内山節著『里の在処』（新潮社、二〇〇一年）を取り上げる。一九五〇年、東京の世田谷で生まれた内山節は、東京都立新宿高校を卒業した。二十歳の頃、山里で川釣りを趣味にした内山は、たまたま群馬県南西端の山村・上野村の神流川で山女や岩魚の釣りをした。この上野村は一九八五年に日航機が御巣鷹山に墜落した山村として知られるようになった。

内山が好んだ釣りは、人里離れた源流近くの渓流の釣りではなく、畑、家、集落、山林の近くで、そこで働く村人の人影が見える川釣り、「山里の釣り」だった。上野村の釣り場に毎週のように出かけ、近くの鉱泉旅館を常宿とし、常連の釣り人や近くの村人と懇意になり、村人の好意で狭い畑を借り、野菜作りもした。

内山の『「里」という思想』（新潮選書、二〇〇五年）の紹介によれば、専攻は哲学、立教大学大学院教授（特別任用教員）である。「現在、東京と群馬の山村に暮らす」と紹介されている。内山は存在論、労働論、自然哲学、時間論、貨幣論、森林論、時評論など多方面の著書があって、行動派のユニークな「哲学者」として知られている。

内山は上野村では昼間は畑で野菜を作り、夕方になると川釣りをした。村人に誘われ、春は山菜採り、秋は松茸狩りをした。都市生まれの内山は、山村への憧憬が募り、この山里を「魂が帰りたがっている里」と自覚するようになった。そこで、民家を購入したいと、知り合の村人に話しを持ちかけた。空家を貸したいと言う旧村人はいたが、売りたいという旧村人はなかなか現れなかった。

上野村に二十五年余り通い、内山の念願が叶い、空家を売りたいという旧村人の意向が伝えられ、親切な村人の仲介で直ちに購入した。内山は空家をリフォームし、五右衛門風呂を修理し、切り出した薪で風呂を沸かして入浴した。五畝の畑を借りて野菜を作り、荒れた林をチェンソーで伐採して整備した。親戚のように集落の村人たちと交流を深め、山村暮らしを満喫した。

内山は『里の在処』を単行本として出版する際、序章と終章を新たに書き加えた。序章はのちに触れることにして、終章では「山里文化祭・おてんまの会」のメンバーの一人として参加し、そこに集った村人のそれぞれの特技を生かし、「伝統的な文化を継承しながら、現在の村の文化を再創造しつづけることである。そのためにはたえずつくりかえも必要になるだろう」（二一二頁）と考えた。

群馬県主催の「国民文化祭」の一環として、上野村は同村の「おてんまの会」と隣村の中里村の「山里の会」が共同で「山里文化祭」（二〇〇一年は四月から八月まで）を開催した。内山は森づくりフォーラムのメンバーとともに、上野村と中里村を繋ぐ中世の古道を復元し、標識を立て、歩けるように整備した。将来、藤岡まで古道を復元したいと言う。

魂が帰りたがる里

『山里の在処』は、一九九八年一月から九九年十一月まで、冬春夏秋と季節ごとに断続的に『新潮45』に連載された後、単行本として出版された。第一章「冬の陽ざし」で、内山が冬に購入した民家や集落の様子、周囲の景観、さらに売買交渉や名義変更の経緯、山村生活の冬の準備、新年会での挨拶（村入り）、集落水道の加入など自らの体験と観察を克明に記録している。

都会暮らしの私は、清澄な空気と爽快な清風と桂川のせせらぎ、夜空の月光が杲々と光を放ち、宵の明星をはじめ、北斗七星などなど満天を飾る星空を堪能した。だが、私にはこの山村を「忘れがたき故郷」「思いいずる故郷」（『故郷』）という、異郷にあって離れた故郷を懐かしむようなノスタルジーはまったくない。そして都市と比較して、山村が「後進地」だと考えたこともない。

小学生の頃、夏休みの前と後で「田舎」が格好の話題だった。当時、都会っ子には自然の豊かな「田舎」は憧れの場所だった。私は相模川の近くに母の実家の専業農家があって、夏休みに出かけ、いとこや遊び仲間と小川の小魚釣り、林の虫取り、相模川の水遊び、跡継ぎの年長の従兄弟が相模川で地方競馬に出走させる愛馬の体躯を洗っている光景などは、夏休みの絵日記の格好な題材だった。

子供の頃、大人から「里帰り」という言葉を良く聞いた。失職したり、家出・離婚したりすると、今日のように都市の簡単旅館に泊ったり、ホームレスで暮らすのではなく、ひとまず実家の里に帰って一時同居し、あれこれと再起のために算段した。私の父と母は「おじさん」「おばさん」と言われ、頼りに来た親類筋と話し、再起の目処が立つまでしばらく同居させた。

内山は「〈田舎に帰る〉というときの〈田舎〉は、自分の魂が帰りたがっている場所」（八頁）だそうだが、私の子供の頃、「田舎」はあくまでも再起のために帰る場所だと思った。私は夏休みに「田舎に行く」のが楽しみだった。のちに、跡継ぎの従兄弟が法事の時、「都会の子が遊びに来ている。それが我が家の自慢だった」と話してくれた。

ここ五年間、妻の実家の山村に通っている。「帰りた

がる魂」に促され、週一回、野菜作りに出かけたのではない。私の野菜作りは趣味と健康が目的で、本読みと物書きで鈍った身体にたいする自分流のエクササイズで、精神的な疲労感を癒すための野外作業である。しかも、とりたての野菜はそれぞれ特有の香りがして味わいがある。体力が衰え、身体に痛みを覚えても、野菜作りは止められない。

都市は「ふるさと」か

私は「都市化」とは、都市地域における都市的生活様式の深化と農山村地域における浸透と考えている。農山村における生活は耐久消費財の普及、モータリゼーションとマスメディアによる交通通信手段など都市的生活様式とほとんど変わらない。

しかし、私が通う山村では保育所の廃止、小・中学校の廃校、診療所の閉院、農協支所の閉鎖、かつての雑貨屋や駄菓子屋や美容院もシャッターを閉め、さらにスーパーもなければ、コンビニもない。当たり前の都市的生活からすれば、確かに不便極まりない。それが当たり前の生活であれば、工夫次第で日常生活でとくに困ることはない。現代社会は「全般的都市化の時代」で、農山村地域はそれを構成するセクターと考える。

私は内山と同じように、東京という日本の中央都市に生まれて育った。私はのちに仙台と広島で地方都市の生活を経験し、東京に舞い戻ってきた。私が生活したそれぞれの都市は、我が人生においてただ通過するだけのプラットホームではない。私はこれらの都市は我が魂のふるさとであって、意義ある愛着の場所だと考えている。とは言え、いずれかの都市を「魂が帰りたがる里」と思い、そこへ帰ることは、現実的に不可能である。

内山は東京の世田谷の住宅地に生まれた。子供の頃、近くには農家があり、小川や雑木林や草原で無心に遊んだ。だが、内山にとってそこは武蔵野の原風景を失い、「武蔵野の残像」だったと言う。だが、新都市住民にとって、望郷の思いとは別に、緑地化された公園は子どもにとって安全な遊び場であり、ヤングママや高齢者にとって格好の憩いの場であろう。

東京の世田谷と群馬県の山村の上野村の二地域居住の内山にとって、世田谷の生家は上野村に非知性的な精神の「魂」を発見するための場所に過ぎなかったようだ。内山は『里の在処』の「序章」で「私はたまたま世田谷の住宅地に生まれたのだ。農民の子でもない。家業があるわけでもない」と書いているが、サラリーマンの子であれば、しごく当然のことだ。

そして、「どの土地にも根をもたない人間として、ふらふらと未来を歩いていくことを義務づけられている」(八頁)と書いている。全般的都市化の時代、農民の子であれ、家業のある跡継ぎであれ、ましてサラリーマンの子は自ら職業を選択し、学校で勉強し、職業訓練を受け、「ふらふらと未来を歩いていく」のではなく、逞しく生きて行くこと以外にない。

内山は、すでに触れたように、二十歳の頃は、上野村に毎週のように山里の釣りに通い、鉱泉旅館を常宿し、借りた畑を耕し、村人と交流を深めた。そこで、内山は山村の純朴な観察と深甚な考察によって、自然哲学を独自に研究し、その代表作『自然と人間の哲学』(岩波書店、一九八八年)を上梓した。それは、当時の一定の権威をもって展開されたエンゲルス流の自然哲学—自然弁証法とはまったく異なる。

終わりに

こうして、内山は都市の印刷・出版業に依拠して執筆し、刊行した。さらに全国の森林研究会に出講し、後年は東京の都心の大学で職を得て、生計を確保した。神流川で「山里釣り」に没頭した二十歳の頃、内山は自ら根無し草として「ふらふらと未来を歩いていくこと」に不安な心情をいだきながら、当時以後の「向都離村」の時代に逆行し、精神的・非知性的に都市の生活と決別したのであろう。

内山が執筆と講演、さらに大学の給与によって生計を維持することが出来なかったら、ただの山里釣り好きの趣味人に過ぎず、この上野村に自らの「魂が帰りたがっている場所」を発見しても、叶わぬ夢に終わったであろう。

ところが、内山は自らの山村の体験と思索をもとに、行き詰まった近代の社会と文明を根底から批判した。その集大成が信濃毎日新聞に長期に連載し(二〇〇七年一月から二〇〇八年十二月)、それを単行本として出版した『清浄なる精神』(信濃毎日新聞社、二〇〇九年)であろう。

予定した紙数をすでにオーバーした。内山の一貫した主張は、一言でいえば、世界史の転換期の現在、「人間の文明を絶対視した近代の思想と決別する必要性に迫られている」(三五一頁)ということである。このような認識はポスト・モダン(脱近代)の思想であろう。モダンは「未完の容器」(ハーバーマス)と言われているように終焉したのであろうか。そして、前近代に媒介し、果たして近代を超えることが出来るのであろうか。

二八に帰るすべもなし（十）

―愛する北国のひとに寄せて―

伊治　哲

空（くう）

往時茫々として、時だけが駆け抜けていく。
タエと五反田で再会してから十年が経った。

修平は、これまで果たしてこなかった澤村の父母への報恩の気持を、せめてチエやタエ、二人の娘たちに、なんとしても伝えなければならないと悩みつづけた。

姉のチエは十分に幸せではないとタエは言うが、もちろん家庭をもち、子ども達もすでに成人している。チエ自身も、生命保険の外交員として経済的な自立に挑んでいるようなのだ。

妹のタエは、不幸な過去を抱えつつも、今は銀座のクラブに職をえて、とりあえずは安定しているといえる。

いずれにしても二人とも修平の手のとどかないところにいってしまって、修平の出番はなかった。また、修平自身も、銀行勤務という職業柄、タエの世界に深入りすることは避けなければならなかった。

それでも、タエとの電話や手紙のやりとりで互いの動静はつかむようにした。一年に一度、まるで七夕のように一緒に食事をする時間ももつようになった。その頃には、タエの誘いにのって姉のチエも顔を見せるようになった。

チエは、はじめのころ修平に再会することを躊躇したようだが、もう一人前の大人同士、互いに触れるべきこと、触れるべきでないことの分別はわきまえていた。二、三度顔を合わせるうちに、距離をおきながらも笑って話し合えるようになった。

逆に、修平は言葉の端々に若い日の思い出がよみがえって、時おり考え込んでしまうことが多かった。

そのころ、タエの念願がかなって、ようやく一軒の小さなスナックをもつことができたと伝えてきた。夢だった銀座でのオーナーにくらべるといささか不本意ではあったが、渋谷道玄坂の裏道を入り込んだビルの一室に小さなスナックを開いたという。「檸檬（れもん）」と名づけた。

不本意とはいえ、オーナーはオーナーである。タエは、「わたしの身の丈にあってるわ」と言って喜んだ。マスターと呼ぶ初老の男以外に、ホステスのたぐいはいっさい雇わなかった。

持ち前の、多少甘ったれた人懐っこさが受けたのか、客の入りは予想を上回ったようだ。銀座以来の馴染み客のほかに、在京する金沢の高校のクラスメートが累を呼んで応援をしてくれているとも聞いた。

修平は、オープンのおり、ささやかな花束を贈っただけで、依然店には寄りつかなかった。タエも誘おうとはしなかった。

しかし、相手がそれほど頼りにしていないとしても、姉妹二人を黙って見過ごしてしまうわけにはいかなかった。

思い悩んだ末、姉のチエには、彼女の生保営業を少しでも応援するつもりで、相応の生命保険を契約した。修平からの思いがけない申し出であったからか、チエは、会社の上司を同行して挨拶に訪れ、金沢以来ともいえる久しぶりの嬉しさを表してくれた。昔ほどではないにしても、チエとの間隔が狭まって、修平は、ほんの少しではあるが肩の荷が軽くなったように思った。

平成に入って間もなく、修平は銀行を退職し、第二の職場の研究所に移った。

そんなある日の夕方、思い切って「檸檬」を訪ねた。時間が早かったせいか、店には客はいなかった。マスターが独り、ワイングラスを磨いているところだった。思ったより広めの空間にテーブルと椅子が無造作に並んでいる。スナックというより、素朴な居酒屋を思わせる佇まいに、修平は却って安らぎを感じた。

所在なく、修平はカウンターに座り込んだ。目の前のマスターは

「ママはもうすぐ来ます」

と言って黙り込んだ。あまり客あしらいに慣れていない素振りに、修平はなんとなく不安を感じた。

「アラッ、舘さんじゃないの・・・」

ほどなく、〝ママ〟と呼ばれるタエがいつもの甲高い声をあげて現れた。

「いつ来てくれるかって、待っていたのよ」

「ようやく銀行から解放されてね。今度は系列の研究所に勤めることになったんだ。これからたまには遊びに来れるよ。もっとも懐が許す範囲で、だが」

タエは、風呂敷の中でうごめくなにものかをあやしながら

「それはおめでとうございました。そして、長い間大変ご苦労さまでした。まずはゆっくり体を休めてくださいね。これからちょくちょく飲みに来てくれると嬉しいわ。でも、無理をしない程度にしてくださいね。奥さまに睨まれると怖いから・・・」

と言って、カラカラと笑った。そして

「ちょうどよかったわ。舘さんにお願いがあるの。ウチの犬が三匹も子どもを産んだの。そのうちの一匹をもらってくれない？　ペギニーズという犬種なの。かわいいわよ」

と言って、風呂敷包みから十センチに満たない子犬をのぞかせた。

茶褐色の産毛に包まれ、体の割に大きな眼を飛び出させて、クンクンと鼻をならせていた。タエの言うとおり実に可愛かった。

内心、こんなことで金沢時代の罪滅ぼしの一端でも果たせるのかなと思いながら、喜んで引き受けることにした。

もっとも、その夜、前触れもなしに子犬を持ち帰ったことで妻とひと波乱があった。しかしそのうちに、なにも事情を知らない子犬の愛らしさの方が勝っていった。「ジロー」と名づけて家族皆なで可愛がった。しかし修平は、犬の素姓について、家族にはとうとう触れずじまいであった。

時は容赦なく流れ、修平が古稀を迎えたころ、四高開学百十五年記念祭をもって同窓会を閉幕するという。

これを機に、金沢大学が〝北の都会〟なる寮歌愛好会をつくり、四高寮歌のすべてを引継ぐ。記念祭当日、金沢音楽堂で金沢大学管弦楽団が全寮歌を演奏し、同窓生が現役学生とともに高唱乱舞するという催しの檄が飛んだ。

秋たけなわの十一月始め、修平は妻を同伴して金沢駅に降り立った。駅頭には至るところに〝祝、四高開学百十五年祭〟〝歓迎、四高同窓生〟〝お帰りなさい！四高生〟などの立て看板が立ち並び、いやがうえにもお祭り気分を煽り立てている。

いささか商業主義の臭いが垣間見えたが、それでも半世紀も昔に姿を消した四高の余韻が、忘れ去られることもなく、二十一世紀の金沢に今も息づいていることを思

い、修平は青春の三年（みとせ）をここに学んだことの喜びに胸が高鳴るのを禁じえなかった。

修平は早々と音楽堂の寮歌大合唱の渦のなかに飛び込んだ。久しぶりに見る昔の学友の顔、顔、顔が、感激と興奮の坩堝のなかにあった。修平七十年の人生がこの一瞬に凝縮されているとさえ思えた。

しかし、多くの時間をこの寮歌祭に割くわけにいかなかった。

このたびの金沢行では、なにをおいてもまず、澤村家の墓所に詣でなければならなかったのだ。

修平はこの数年間、昔の澤村家周辺の寺院に片端から電話を入れ、菩提寺の有無を探してきた。どの寺もこちらの願いを聞いて、丁寧に過去帳を調べてくれた。今回の四高記念祭の直前になって、ようやくその所在をつきとめることができた。どうしても詳らかにしてくれないチエとタエの姉妹には、すべてを秘した上での墓参であった。

それは野町二丁目にある「本浄寺」という寺であった。犀川大橋を渡って西へ入ったところ、奇しくも室生犀星記念館の間近であった。

あらかじめ電話で事情を伝えてあったので、住職は丁重に応対してくれた。心ばかりの供養料を供え、墓地へ案内を請うた。

さぞやひときわ目立つ墓標に、修平が慕う澤村康氏は眠っているのだろうと思ったのだが、案に相違して二尺に満たない小さな、そして粗末な墓石が墓地の片隅にひっそりと静まっていた。

苔むす墓碑の表面に、かすかに「釋憲悟」という法名が読みとれた。裏面には、「俗名・澤村康・昭和四十三年九月二十六日歿」とある。

修平は、その小さな墓碑を抱くようにとりすがった。墓碑を覆う苔の湿った冷たさが修平の身にじわりと伝わってきた。

〈澤村の父がなにかを訴えているのかもしれない〉

そう思いながら、用意した線香に火を灯し、うろ覚えの般若心経を唱えて墓前に手を合わせた。それは、遠い昔につながる永い合掌であった。

五十年も前、縁もゆかりもない一介の学生を、家族と同然に温かく迎え入れてくれた澤村の父の温和でやさしい面影が、五十年後の今、再び修平に生き生きとよみがえってきた。修平の心のなかで、父はずっと生きつづけてきたのだ。

修平の目に熱いものが滲んだ。同行した妻も、詳しい事情はわからぬままに墓前に額づいて手を合わせた。

時ならぬ秋雨が墓石を濡らし始めたのを機に、後ろ髪をひかれる思いで墓前を辞した。

山門をくぐる折、墓碑銘に「昭和四十三年九月二十六日歿」とあったことに修平は改めて気がついた。

三十年ほども前、雪に降り込められて濡れそぼった五反田駅の階段で、タエと二十年ぶりに擦れちがったのは、たしか、昭和四十四年の初めであった。考えてみれば、没後半年もたっていなかったのだ。

あの時は、あまりに不思議なタエとの邂逅に、互に目を合わせたままで言葉をかけることもできなかったが、今にして思えば澤村の父が二人を引き合わせたのかもしれない。

澤村の父は、娘の不行跡に心にもない厳しい叱責を浴びせてしまったものの、自らの早世後、血を分けた娘の行く末を案じて、舘修平にその後を見守ってほしいと願ったのではないだろうか・・・。

そう考えなければ、あの雪の夜の偶然を納得するわけにはいかないと修平は思った。

それにしても、あの平和で豊かだった往時の澤村の家族は、いったいどうしてこんな落魄の淵に沈んでしまったのだろうか。

父は亡く、母は病み、二人の娘はそれぞれに不運な宿命を背負って生きていかざるをえない・・・そんな姿を、あの当時の「金沢市茶畑二の小路五十三番地」から、仮にも思い描くことができたであろうか。

栄枯盛衰、会者定離というが、こればかりはあまりにも冷酷な運命の仕業というほかはない。しかも、たった二十年余にも満たない時の流れのなかでの、人の世の移り変わりなのだ・・・。

修平は、叶わなくなった若き日の夢を再び追うこともないだろうと息を呑んだ。

山門をくぐった修平と妻は、秋雨のなかを、一つ傘に身を寄せ合いながら、小さな声で口ずさんだ。それは、過ぎ去った青春への挽歌でもあった・・・。

〝北の都に秋たけて　吾ら二十（はたち）の夢数ふ
男女（おとこおみな）の棲む国に　二人に帰るすべもなし〟

おわり

（二〇一二年、亡き澤村康氏の命日、九月二六日に筆を擱く）

イドと超自我の谷間で（六）

・・・ある女の不思議な生涯・・・

鍋屋次郎

絢が荷物を持って玄関に向かって足早に歩き出すと、一郎と洋平は立ち上がって絢を追いかけるように玄関に向かった。絢が玄関土間に降りようと自分の履物に目をやった瞬間、勢いよく玄関の戸が開いて女性が入ってきた。

「三条さん、ちょっと待ってください」

の声に絢が見つめると

「女中のヨネと申します。お願いですからお帰りになる前に加賀大造さんに会ってください。ご案内します」

その声と表情は真剣そのもので、絢はヨネを見つめて立ち止まった。

「大造さんは貴女の手紙を何度も繰り返し読んで涙を流していました。昨夜はお風呂にも入り、髭も剃って、今日貴女が来るのを待っていました」

ヨネがここまで言ったとき、奥から

「ヨネ、女中の分際で何を言うか、黙んなさい」

の声が飛んできたがヨネは

「私は今日で女中をやめました。今はもう女中ではありません」

「何を勝手なことを言うの。炊事、洗濯、掃除は誰がやるのか」

「この家の主婦がやればいいでしょ」

と言って絢の持っている荷物を奪うように自分の手に持って、もう片方の手を絢の左腕にかけて

「さあ、大造さんの所に行きましょう」

と促して玄関を出た。

ヨネに引っ張られるように歩いて行く間、絢の頭の中は「冷遇されている社長をここに残しては帰れない。社長の様子を見てから、その状況によってはお徳の反対を

押し切って連れ帰ろう」と考えた。絢の胸中には、本来であれば社長が所有する筈の全財産を自分が持っていることの後ろめたさがあった。誰にも言えない、そして絢自身にはそれをどのように処理すべきか、現時点では見当もつかない苦しさがあった。

庭を回って離れに行くと大造が座ったまま頭を下げた。

ヨネは

『三条さん、大造さんは大変喜んでお待ちかねだったのですよ。私が「着てゆくお洋服はどうしましょう。お金を持っていないから買いにもゆけないし、御主人のお洋服とズボンをお借りしましょうか」と言いますと「大丈夫、絢さんなら下着まできちんと用意してくるよ。昔からそういう人だから」と貴女を信じ切って安心して待っていたのですよ』

絢はこの言葉を聞いて、こんなに自分を信じて待っていてくれた社長をここに置いたまま帰るわけにはいかないと覚悟を決め

「社長さん、お迎えに上がりました。お召し物を着替えてください」

と言いながらヨネに着替えを促した。荷物を開けたヨネは嬉々として

「大造さん、三条さんは大造さんが言っていた通り何も

かも用意してきてくれましたね。良かった」

と言いながら大造の着替えを手伝った。

いつの間に来たのか、庭に立ってそれを見ていたお徳は

「ちょっと、あんたたち、着替えなど手回しが良すぎるんじゃないの。おヨネ、前もって打ち合わせをしていたね」

「奥さん、三条さんの連絡場所もわからなくてどうやって打ち合わせができるのですか。いい加減なことは言わないでください。これは全て三条さんのご厚意なのですよ。以前一度来ているので、このくらいのことはお分かりになっているのですね」

とお徳の言葉を一蹴した。

一郎と洋平は庭に立ったままこの様子を眺めている。大造が着替え終わったとき、一郎は離れに上がり大造の手を取って

「大造、済まない。許してくれ」

といって目を拭った。

「兄さん、いいんだよ。お世話になりました。自分は絢さんの所に行きます」

と言いながら一郎の手を握り返した。そしてヨネの前に行き

「おヨネさん、貴女がいてくれてどれだけ助かったか。また心強かった。本当に有り難う」

と頭を下げた。

そこへお徳が近づいてきてヨネに

「勝手に女中を辞めるのは許さないよ」

とヨネを睨みつけると

「私の荷物は一昨日買い物に行ったついでに運送屋さんに頼んできました。もう、家に着いているでしょう。ここには持って帰るものは何もありません。今日、大造さんが出るとき一緒に出てゆきます。今月の給金は要りません」

といって一郎の側に行き

「永年お世話になりました。ご主人様には私の気持ちは分かっていただけるものと思います。どうかこれからもお体に気を付けてお過ごしください」

と挨拶して、庭に下りて新しい草履を履いた大造を支えるようにして門に向かった。

大造とヨネが門を出ると、待っていたタクシーの運転手が後部座席のドアを開けた。大造が乗り込んだ後、絢が

「おヨネさん、どこまで帰るのですか」

と聞くと

「はい、茂原駅からバスで帰ります」

の答えに

「じゃあ茂原駅までご一緒しましょう。前に乗ってください」

「いいんですか。助かります」

と言って助手席に乗り込んだ。

絢は車の所まで見送りに来ている一郎と洋平に挨拶して、大造の隣に座った。お徳は門の外には出てこなかった。

茂原駅までの時間、絢はタクシーの中でおヨネさんから今までの大造の生活状態をいろいろと聞くことができた。

茂原駅でおヨネさんと別れるとき、住所を書いたメモを渡して

「日帰りもできるところですから、お遊びに来てください」

と挨拶して別れた。

茂原駅を午後四時十五分発の千葉行きに乗ってから、これから住むところの説明を簡単にしながら、大造を観察していたが、疲れている様子を見て

「少しお休みください。千葉駅に着いたら起こしますから」

と言って絢自身も目を閉じた。

しかし、絢の胸中は複雑だった。本来加賀大造の所有すべき全資産を絢が持っている。それもその気になれば絢の意向次第でいかようにも自由に処分できる状態で。終戦の年の一月に関東軍から加賀大造の戦死通知が来た。その段階で一人娘京子が全財産の書類を保管した。京子と共に帰国途中、京子は京子を恨む現地人に殺された。京子が車から引っ張り出されるときに、全財産の書類が入った包みを預かった絢は、それを持って帰国した。ところが得体の分からない男が「加賀大造に金を貸している。場合によれば財産を差し押さえる」と言ってきたことから、財産を守らなければの一念で後先考えることなく、戸籍上は死んでいる大造の全財産を、戸籍上は生きている京子に相続し、別荘不動産は管理が不可能のため、全てを換金した。絢が死んでいる京子になりすまして。現在では貸金庫内の金塊も預金も全て「小林アヤ」名義で保管している。ただし、美容学校の費用や小さいながらも購入した住居費はその中から使っているが、保管している総額からすれば使った金額は微々たる金額に過ぎない。しかし大造に全てを返すべきだと思うと、自分自身どうしていいか分からない。そこから絢の思考は先に進まない。

疲れたのか軽い寝息が聞こえる大造を眺めながら、これからのことを考えていた。

やがて千葉駅につき、東京行きに乗り換えた。夜も七時になるので東京駅で駅弁を買って二人で食べた。そこから藤沢駅までは、絢が帰国してから美容師になったこと、三条家の養女になったこと、大造が住むところは鵠沼別荘地の三条家の離れであることなどを話しながらそっと様子を見ていると、大造の右手は自由に動くが、左腕を伸ばしたり上にあげるのが不自由そうだった。

藤沢駅でタクシーに乗り家に着いた。タクシーの止まる音で分かったのか孝子が迎えに出てきた。

三人が母屋に入り、大造の不自由な左足を考えて、孝子は座敷でなく、キッチンの食卓用テーブルに大造を案内した。

そこで絢がそれぞれを紹介すると、大造は初対面の挨拶のあと、再び深々と頭を下げて

「お願いがあります。今これから私を社長さんと呼ぶのはやめてください。加賀、または大造と呼んでください」

と言って絢を見つめた。絢は

「わかりました。ではお母さん、加賀さんと呼ばせて頂きましょうか」

と言ってから、暫く歓談した後絢が大造を離れに案内した。

離れにも座卓と籐椅子が用意され、大造にすれば何年も寝たことがないような立派な寝具と寝間着、枕元の水差しをみて

「絢さん、有り難う。天国みたいだ」

の声に、絢は

「どうぞごゆっくりお休みください。洗面はこの廊下の突き当りで、タオル、歯ブラシ、髭剃り用の剃刀なども用意してあります。明日朝、朝食のお知らせに参りますのでそれまではごゆっくりしていてください。ラジオもご自由にお使いください。では、おやすみなさい」

絢が母屋に戻ると孝子が郵便物を持ってきた。ロバートからのファッション誌が二冊届いている。孝子が

「アメリカの人から送ってくるの？」

と不思議そうに尋ねるので、5月初めのアメリカ・ニューヨークでの経緯を話した。

翌朝、朝食後に絢は

「加賀さん、貴方用の新聞を取りたいと思いますが、何新聞がよろしいでしょうか」

と聞くと

「こちらでとっている新聞は何新聞ですか」

「毎朝新聞です」

「それを空いているとき読ませていただければ結構です」

「でも、戦後の日本経済がどうなっていて、これからどうなるのかなどをお読みになりたいのではないですか。日本でも満州でも経済新聞をお読みになっていましたよね」

大造は絢を見つめて、大きく息を吸ってから

「絢さん、有り難うございます。お言葉に甘えます」

朝食後に、孝子から

「絢さん、加賀さんはこのままでは一日中退屈しますよ。これから近くの散歩コースを考えて加賀さんをご案内したら？　そして藤沢駅前までの電車の行き方もご案内して、駅前商店街なども自由にお歩きができるようになさったら」

の意見で、絢は午前中大造を案内して出かけた。

正午に帰宅すると、食卓の上にお寿司が三人前並んでいる。絢は孝子を見ると

「絢さん、昨夜は歓迎会などできなかったでしょ。これは私の歓迎のしるし。加賀さん、どうぞ召し上がれ」

の声に、大造は十年以上も口にしていなかった寿司を見て

「三条さん、昨晩から夢を見続けているようです」

と声を潤ませた。

食事後の団欒のひとときが終わったとき電話が鳴った。孝子が出たが話が通じない。

「絢さん、何か英語みたいな言葉で、アヤとかロバート

とか言っているのだけれど、誰からの電話でしょうね」
と受話器を持ったまま絢に言った。
絢は
「お母さん。アメリカのロバートよ」
というが早いか孝子から受話器を受け取って
「ロバート、私絢よ。お元気？　ファッション誌を毎月有り難う。今アメリカから？」
「今月の二十日、日本に来るの？是非会いたい」
「何？帝国ホテルで。オーケーよ
などと英語で話しだしたので、孝子も大造もビックリ。

電話が終わってにこにこしている絢から、英語を習った経緯を聞いた二人は、絢の行動力に感心した。

その直後にまた電話が鳴って、孝子が出ると今度は海保純。孝子は六月二十日の養子縁組のお礼や、加賀大造を昨日迎え入れたことなどを簡単に報告して、受話器を絢に渡した。海保純は
「絢さん、加賀さんの件では忙しかったわね。でも落ち着いた様子で良かった。ところで七月二十三日、私の家に松梅映画の女優達、星影瞳、藤奈々子、高嶺静子たちが集まるの。それで貴女にお願いは、ロバートから送ってきているファッション誌を持って来てほしいの」
「先生、私はいいけど、そこで私は何をするのですか」
「貴女はそのファッション誌を説明して、この程度なら貴女にでもできる、と言ってくれればいいの」
「まだやったことがないのに、そんなこと言えません」
『アメリカでロバートが「アヤならできる」と言っていたのを覚えていないの。いい？貴女は自信を持つの。ところでロバートは？何か連絡ある？』
「今電話があったの、今月二十日に日本へ来るので、帝国ホテルで会うことにしたの」
「貴女一人で」
「今電話があったばかりなのでそこまでは考えていません」
「そうね、絢さん、では二十日に会ったとき二十三日、ロバートに都合を付けさせて、一緒に家に来て頂戴。約束よ」
「先生、まだロバートの予定を聞いていないので分かりませんが、できるだけ説得します」
「じゃあね、三条さんに宜しくね」

電話が終わってから、孝子と大造の二人に電話の概要を話すと孝子は
「絢さん、貴女がすごく忙しくなるような気がするわ」
と言って大造を見たが、大造には絢にとって何か晴れやかなことと思ったらしく、微笑みながら絢を眩しそうに眺めていた。

暫くして、大造は経済新聞を手にして離れに戻って行った。絢は孝子に
「お母さん、ご相談があるのですが、加賀さんも多少のお小遣いが必要だと思うのです。読みたい本も買いたいでしょうし。それで私の方から毎月五千円を自由に使ってくださいとお渡ししようと思います。よろしいでしょうか。それと加賀さんの食事代もお母様にお渡ししなくては。金額を仰って下さい」
「そう、お小遣いは必要ね。食費のことはまた相談しましょう」

大造は一人で散歩に出かけることが多くなった。ある日散歩から帰ってから絢に
「絢さん、私も毎日プラプラしているのも、本意ではありません。何か働きたいと思っています。そこで、この体と年齢ではどこかに勤めることは不可能でしょう。それで、藤沢駅の近くに「簿記専門学校」があって、そこに「税理士コース」というのがありました。戦前ですが商業専門学校へ通っていましたので、過去の学びを活かして税理士の資格を取って、税理士事務所を開こうと思います。これが入学願書で、費用は年間三万円程度です。二年でとれるか三年でとれるか分かりませんが、行きたいと思います。学資は税理士開業後出世払いでお返ししますので、貸していただけないでしょうか」
と話しがあり、前向きな話しでもあるので孝子に話して、早速大造に入学手続きを取ってもらった。

大造が簿記専門学校へ通いだして一週間程度たってから、おヨネさんから、今度の日曜日に藤沢に来る、という葉書が来た。
それを絢から聞いた大造は嬉しそうに
「七年間、あの家で私の助けとなってくれた。私が我慢できたのも、今、絢さんにこうしてお世話になっていられるのも、あの人のお蔭だ。来たらよくお礼を言いたい」
と大喜びで、絢にもその喜びは伝わってきた。

次の日曜日、随分早く茂原を出たのか、午前十時半にやってきた。藤沢駅からはタクシーに乗ってきたという。昼食まで母屋で四人で過ごしていたが、昼食後二人は離れに行き、やがて大造は毎日の散歩コースにヨネを連れて行った。この住まいと家族同様な待遇、それと税理士資格取得を目指した大造の前向きな生活にヨネは涙を流して感謝し喜んだ。東京駅からの房総本線の最終時間に間に合うギリギリの藤沢発夕七時の東海道線に乗ることとし、四人で夕食も一緒にした。

その翌々日、七月二十日午前十一時、久しぶりに和服を着た絢は、帝国ホテル正面入り口近くでロバートを待

っていた。
やがて満面に笑みを浮かべたロバートが駆け寄ってきて、絢の両肩を優しく抱いた。
「絢さん、会いたかった。お久しぶり」
「ロバート、私もよ」
絢の片言の英語も分かって、ロバートは予約してあるランチルームに絢を案内した。
ランチの間中、ロバートは絢の「美容室開業」の予定や今後の絢の計画を知りたがっていた。
そこで絢は海保純の所に日本の有名女優が集まって、ロバートが絢に送ってくれているファッション誌を見せることと、海保純がその席にロバートが来ることを強く望んでいることを話した。
ロバートは手帳を出して見ていたが
「絢さん、ちょっと電話をしてくる」
と言って立ち上がり公衆電話に向かった。戻ってきて
「絢さん、二十三日大丈夫行けるよ。韓国行き打ち合わせを一日のばしてもらったから」
と嬉しそうに話した。
既に時計は午後二時を指している。立ち上がってランチルームをでて、赤絨毯の廊下を曲がったところで、瞬間的に前後に人影がないことを確認したロバートは、絢の頬と唇に軽く口づけした。
絢は驚いたが微笑み返すとロバートは手を強く握って、二十三日の藤沢駅での待ち合わせ時間を確認して別れた。

家に戻ると、孝子が
「海保先生から電話で、戻ってきたら電話を欲しいと言っていたよ」
と告げられ、電話をすると
『絢さん、驚かないでね。今「白衣の使者」っていう映画、どこの映画館も満員でしょ。それでね、主演女優の白樺夕湖も二十三日に来ることになったの』
「え！白樺夕湖が！」
の絢の声に孝子もびっくりして受話器の所へやってきた。電話の向こうでは
「それで絢さん、ロバートは来てくれるの？」
「はい、会議の予定が入っていたのを延ばしてきてくれることになりました。藤沢駅で十時半に待ち合わせしましたので、十一時少し過ぎにはお伺いします」

電話を終えると、孝子が
「白樺夕湖って、白衣の使者の映画の中で、一面白樺樹林に囲まれた山の静かな湖のほとりを、月光の中を白衣の姿で一人散歩するシーン、良かったわねぇ。私もしてみたい」
「あれ、お母さま、映画見たのですか」

「そうよ、大船キネマでやっていたでしょ。私だってそのくらいはね」
「あー驚いた。お母様にそんなところがあるなんて」

このような話を孝子としたのは初めてだった。

七月二十三日、絢とロバートが海保邸の広間に入ってゆくと、四人の大女優に囲まれた海保純が立ち上がって
「皆さん、紹介するはね。こちらが美容師の三条絢さん。こちらがアメリカ軍将校のロバートよ。よろしくね」
と紹介してくれた。絢もロバートも自分の名前を言っただけで用意された席に座った。
大女優たちの紹介は不要だった。絢にも直ぐ分ったし、ロバートには映画の広告チラシが用意されていた。

昼食は大磯の料亭からケータリング・サービスで「京懐石料理」が持ち込まれ、大女優達もヘルシーなメニューに満足し、昼食が終わると海保純が
「絢さん、ヘヤーファッションの雑誌持ってきたでしょ。ちょっとここへ来て皆さんに説明しなさいよ」
と言われて、絢はテーブルの上に六冊並べて説明を始めた。本は当時としては日本では珍しいオールカラーのファッション誌、説明書きは英語だが、髪型と衣装の組み合わせというか、そのようなことを目的として掲載されていることを説明した。
白樺夕湖が
「絢さんでしたね。どうやってこのファッション誌を毎月入手しているの？　ニューヨークから送ってもらっているの」
と質問したので、海保純は五月にアメリカに行き、ロバートの紹介でニューヨーク五番街の「ヘアーファッション・スタジオ」を見学し、その後ロバートが毎月二冊を絢のところに送ってきていることなどを話した。
その後の話題は、日本でも「着るものとヘヤースタイルの調和」を研究しなければならない、などと話しは尽きなかった。

四人の女優達は海保純に霊視をしてもらうために一人ずつ別室に行った。一人十五分程度だったが、四人とも部屋に戻ってきたときはやや上気していた。
最初に行った星影瞳が部屋に戻ってきて絢の横に座ると
「絢さん、ロバートとはどういう関係？」
とニコニコしながら質問してきた。居合わせた白樺夕湖も
「聞きたいわね。こんな立派なファッション誌を毎月二冊も送ってくれるなんて。ね、絢さん」
と、絢とロバートに言った。

絢はロバートを見ながら
「どんな関係って言われても、海保先生に紹介されたお友達ですよ」
と答えたが、にこにこして聞いている星影瞳は信じられないといった表情でロバートに
「ロバート、絢さんとはお友達？」
と聞いたがロバートは日本語が理解できなくて首をかしげて絢に救援を頼んでいる。絢がロバートに
「貴女と私はお友達」
というと
「そう、オ・ト・モ・ダ・チ」
と片言の日本語で答えた。白樺夕湖が
「絢さん、誘導回答はだめよ」
と大笑いになった。

午後四時半になると、女優たちの付け人がハイヤーで迎えに来たので、そこで散会となった。

驚いたのは二週間後の芸能新聞「銀幕事情」に『世界的霊能者海保純、銀幕の大女優達と「衣装とヘヤースタイル研究会」発足か』の見出しで過日の海保邸でのことが大きく報じられ、その中で

「英語ペラペラの和装美人美容師、三条絢がニューヨーク五番街のヘヤースタジオで学んだ経験を、銀幕の女王たちと一緒に、日本の女性の更なる美を追求する「衣装とヘヤースタイルの調和」研究会を発足する。今でもアメリカで有名なファッション誌を毎月二冊送ってもらって研究に余念がない」
と、もう決まったことのような記事が掲載された。
そして更に
「和装美人美容師　三条絢は霊能者海保純と親しい交友があり、藤沢鵠沼別荘地に居住している」
と、当日女優たちが理解した範囲内で絢のことを紹介していた。

その日の夜、絢が孝子と大造に、芸能新聞を見ながら海保邸でのことを話すと、大造は、絢が大造の知っている絢とは別人で、大造の全く知らない別世界に行ってしまったように感じていた。

翌日、海保純からの電話で
「絢さん、もう加賀大造さんのことは、ヨネさんが頻繁に来てくれているのなら、日常的なことはヨネさんにお願いして、貴女は美容院を開業することを考えなさい。明日、その筋の人が開業候補地情報を持ってくるから、午後一時半に家に来なさい。予定ある？来られるはね」

と恰も命令口調の電話があった。孝子に相談すると
「海保先生は貴女に夢を託しているんじゃないの。立派な女優達を背後に並べて、貴女に成功させたいのよ。きっと。兎に角先生の言うとおりお伺いして話を聞くことね」

翌日指定された時間に海保邸に行くと
「絢さん、この方ね、湘南地域の不動産情報に詳しい藍澤さんという方なの。紹介するわ」
と言われ、受け取った名刺を見ると「(株)湘南情報社社長　藍澤三郎」と書かれ、人柄に品格を感じさせる紳士だった。
海保純は絢と藍澤社長の二人に
「絢さんが美容院を開業するのに場所はどの辺がいいかしらね。駅から近くて裏通り。車が入って駐車場もある。有名女優がお忍びで出入りできる。建物の中は一般の人の美容室とビップ用の個室美容室もあるといいね。それと待合室はサロン風にして」
そこまで言うと絢が
「先生、そのようなデラックスな美容院なんて。私には贅沢ですよ」
『絢さん、ここは考えなさい。大女優を巻き込んでの「衣装とヘアーの組み合わせ研究の美容院」として、日本一のネームバリューを目指すのよ』

これを聞いた藍澤社長は
「海保先生の狙いは分かりました。一週間時間をください。ご希望に沿えるかどうか分かりませんが情報を集めます」

藍澤社長が帰ってから絢は
「先生、美容院の開業には室内の設備などの資金は大体幾らぐらい必要かは分かるのですが、土地と建物にどのくらいのお金が必要なのか、私には見当がつかなくて不安です」
「絢さん、藍澤社長の持ってくる情報で考えましょう。あまり心配しないで」
と言ってから
「ご飯食べて行かない？いまお蕎麦をとるから」
と付け人を呼んで出前を頼んだ。そして
「私が霊視で感じたことだけどね、加賀大造さんは税理士で生活できるようになると思うの。それで大造さんはヨネさんの親切が忘れられなくて、ヨネさんと結婚するのではないかと思うの。ただし税理士で収入があるようになってから」
絢はそこまでは考えていなかったが、毎週のように嬉しそうにやってくるヨネと、それを待っている大造の姿を思い返し
「先生、私は気が付かなかったけど、そうなるといいで

すね」
「そうでしょ。絢さん」
そこまで話したところへ付け人が部屋に入ってきて
「先生、芸能新聞の内田という記者がお目にかかりたい、と言ってきていますが、どうなさいますか」
と言って名刺を渡した。
名刺を見ながらしばらく考えていた海保純は、絢の顔を見てから
「そう、丁度いいわ。絢さんと一緒に会いましょう」

続く

社告(内規)

☆同人参加へのお誘い
私達は広く同士の参加を歓迎致します。
「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行しております。
同人は同人費として月額二、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆維持会会員へのお誘い
本誌愛読者のうち、一部有志の方々が、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数ヶ月分をまとめて前納して頂いております。
季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行い、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティーへのご案内などを差し上げ交流を行っております。
＊同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。
郵便振替口座　〇〇二七〇―〇―六四五九二
加入者名　まんじ

日本最古の鉄製口琴

漆原直子

「口琴」をご存じだろうか？口にあてて、〝びょんびょん　びょーん〟と鳴らすもので、アイヌ民族のムックリが良く知られている。私はこの音色が好きである。

2～3年前に、埼玉県さいたま市にある「埼玉県立歴史と民俗の博物館」にて、たたら研究会が開催されたので、一般参加した。講演会とフィールドワークで、埼玉県内の製鉄遺跡をバスで見学した。埼玉県も思いのほか製鉄関連の遺跡が多い。その時、ついでに会場となった同博物館を見学した。この博物館は大宮氷川神社と隣接している。そこには、すぐ近くにある平安期の氷川神社東遺跡から出土した二個の鉄製の口琴が陳列されていた。日本最古の金属口琴とされ、他に例の無い珍しい遺物で、誰が何のために用いたかはわからないとされる。その鉄製口琴の形状は、音叉の中央にもう1本棒がついているような形をしている。

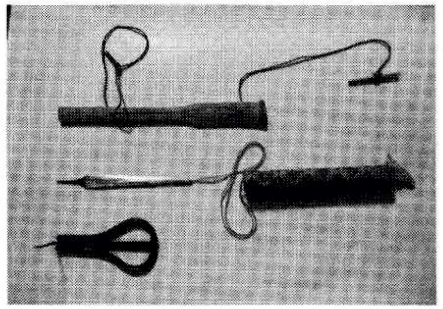
この氷川神社東遺跡についてであるが、大宮台地の東縁部に位置し、総柱建物跡四棟、掘立柱建物跡三八棟、小鍛冶・鋳造関連遺構四棟五軒、竪穴住居跡三六軒が発掘されている。氷川神社に隣接している事から、神社に伴う仏教施設との関連性や、武蔵国足立郡の郡衙があったとも考えられている。二個の鉄製口琴が、延喜通宝(初鋳九〇七年)と共に、総柱建物跡から出土している。また、小金銅仏、浄瓶・三足盤等を埋納した遺構がたくさん発見されている。その他、銅鈴2点、鉄斧1点、鉄鎌2点、鉄鏃3点、紡錘車2点、鉄飾鋲1点、U字形鍬先1点、墨書土器8点、線刻土器1点などがある。口琴は、二つとも12㎝位の長さである。出土した時、始めは錆で形状がよくわからず、釘か鍵の類かと思われたそうである。

私がそれを見て真っ先に思い浮かべたのは、『蝦夷』と

の関係である。日本列島に住む民族で口琴を用いるのはアイヌ民族である。アイヌ民族の口琴は『ムックリ』と言って、竹製である。素材は異なるが、『蝦夷』には口琴を用いる文化があったのではないか。日本古来の楽器（シルクロード由来の物もあるが）が使われているとされる雅楽の中には、口琴は含まれていない。『ムックリ』は近世後半の蝦夷地（現在の北海道）や東北の一部（津軽、磐城など）でアイヌ民族が用いていた。江戸時代に、江戸で口琴が流行したことがあったそうである。文政年間（1823年頃）には江戸で「琵琶笛（びやぼん、びわぼん）」という鉄製口琴が大流行し、お上から禁止となった記録がある。いわき市にある飯野八幡神社（1063年に源頼義が奥州合戦（前九年の役）出征の時、京都石清水八幡宮を必勝祈願のため勧請。）では、お祭りにて売られ、鳴らされたという記録が残されているという。

この日本最古の鉄製口琴は、誰が何のために使い、どこからもたらされたのであろうか？

インターネットや文献を色々調べると、口琴を用いていたのは陰陽師や巫女ではないかという見解があった。しかし、もしそうだとすると、陰陽師は京都にたくさんいるというイメージがあるが、この鉄製口琴も京都で平安時代以前の遺跡からたくさん出土していてもよいのではないか？ましてや〝最古の口琴〟など、京都や九州から出土していてもよいのに、現時点では、なぜか武蔵国足立郡からしか発見されていない。北海道白老ポロトコタンの資料館には、かなり古い金属製口琴が収蔵されているが年代は不明である。口琴はユーラシア大陸とメラネシア全域に広く分布していて、アフリカとオーストラリア、中南米には無い。英語では、「Ｊｅｗｓ Ｈｅｒｐ」と言う。ユダヤ教徒のハザール人がヨーロッパに広めたと言う説から、ユダヤを意味する「Ｊｅｗのハープ」と呼ばれるようになったなど、名前の由来については諸説がある。いずれにせよ、私が思うには、北方文化とともに大陸から日本に伝来したものではないか。ひょっとしたら、出土数の少ないことから、平安期に頻繁に使者を送ってきた渤海国からの伝来品とも考えられないだろうか？



上の写真は筆者が所有している口琴である。音は、ベトナムの口琴が一番音を出し易く、アイヌのムックリが一番音を出すのが難しい。（我演奏不能）

上：アイヌ民族（ムックリ）（竹製　長さ約17㎝）
中：ベトナム製（真鍮　長さ約10㎝）
下：ハンガリー製（鉄　長さ約7㎝）

大宮の氷川神社についてであるが、式内社（名神大社）で、創建は5世紀中ごろ、出雲から移住してきた人々によって祀られたとされる。氷川神社の「氷川」は、出雲の「簸川」（現在の斐伊川）から由来するとされる。祭神はスサノオノミコト、クシナダヒメ、オオナムチノミコトで、他に門客人神社とされる「荒脛巾（あらはばき）神社」を祀る。この荒脛巾神の方が先住者であるのに、後から来た出雲系の神に主権を奪われたので、主客転倒の形で、〝門客人〟として祀られてしまった。また、氷川神社は関東地方、特に旧武蔵国足立郡を中心とした現埼玉県・東京都の荒川流域数多く分布している。その数約260社に及ぶという。

この氷川神社がある武蔵国足立郡は、現在の埼玉県鴻巣市から東京都足立区までの地域で、概ね荒川の左岸（東側）、元荒川と綾瀬川の右岸（西側）にあたる。その群衙は、さいたま市の「大久保領家遺跡」と先に述べた「氷川神社東遺跡」にあったと推定されている。〝足立〟という地名は、「足立」の由来は、もと万葉仮名で「阿太知」だったものを諸国郡郷名善好字令により置き換えたとみられるほか、日本武尊（または坂上田村麻呂）が立てるようになったという伝説や、葦がたくさん生えている所という意味の「葦立ち」の転じたものとする説もある。

さらにこの足立郡には、江戸時代中期の菊岡沾涼（1680―1747）が編纂した『諸国里人談』によると、『黒塚の鬼婆』伝説があり、奥州安達が原の鬼婆の伝説は元々は奥州ではなく、ここ武蔵国の足立郡（今の大宮周辺）であったとする。江戸時代の武蔵国の地誌『新編武蔵風土記稿』（1804年から1829年昌平坂学問所地理局により編纂された武蔵国の地誌）には、祐慶が東国足立ヶ原（あだちがはら）で黒塚の悪鬼を呪伏して東光坊と号したとあり、東光寺（現・さいたま市）の撞鐘の銘文にも、かつて足立郡にあった黒塚という古墳で、人々を悩ませていた妖怪を祐慶が法力で伏したとある。現在、さいたま市大宮区宮町（大宮駅東口約1㎞）には、開基が平安末期の曹洞宗大宮山東光寺がある。そのお寺の（HP）ホームページの由緒沿革を見ると、

「寺伝によると、もと大宮黒塚にあり、武蔵坊弁慶の師匠、山城国京都鞍馬寺の東光坊阿闍梨宥慶法印が黒塚の鬼婆々を法力をもって退散させ、鬼婆々に殺された人々を葬る為に、この地に庵を結び天台宗寺院として開創されたのに始まる。鎌倉時代梁室元棟禅師が開山となり曹洞宗に改宗、江戸時代中仙道開設と共に現在地に移転して今日に至る。」

とある。

この説明文にもあるように、東光寺は元々、現在地より北東約1㎞先の高台にある真言宗智山派大宮山黒塚大里院（大宮区堀の内　氷川神社の近く）にあったとされる。その黒

ていたことも考えられる。

古代史研究家の柴田弘武氏によると、そうした蝦夷が移配された場所が〝別所〟であり、製鉄等の金属精錬に従事させられたとされる。〝別所〟という地名は、北海道と北東北以外、本州・四国・九州各地に見られる。その近辺には『東光寺』というお寺があること、また製鉄・鍛冶等金属生産に関連があるととれるような地名や遺跡が残されているとされる。ここ大宮氷川神社周辺にも、『東光寺』がある上、左記のような『別所』地名がある。

・さいたま市北区別所町（隣の奈良町の旧町名は鍛冶村近くに鴨川、加茂宮地名有り。産鉄族の賀茂族と関連があるか・・・）

・さいたま市西区指扇領別所（金井地名や金山神社有り）

・さいたま市浦和区別所（弥生時代後期から古墳時代前期の集落跡の別所遺跡有り。）

私は、十分な根拠を得ているわけではないが、氷川神社東遺跡出土の日本列島最古の鉄製口琴は『蝦夷』が作り、使用した。さらにその蝦夷は、その近くにある『別所』に俘囚として住まわされていた人々かもしれない、という仮説を立てたい。また、渤海等の大陸からの使者がもたらした物という仮説も考えられるが、それはまた別の機会に改めて検討したい。今後さらに、蝦夷と鉄製

塚にかつて鬼婆が住み、人を襲うので僧宥慶により退治されたとされる。先述した『諸国里人談』には、このことについて以下のように書かれている。

「黒塚は、武蔵国足立郡大宮駅の森の中にあり。又、奥州安達郡にもあり。しかれども、東光坊悪鬼退散の地は、武蔵足立郡を本所と云へり。即ち、東光坊開基の寺東光寺と云ふあり（今は曹洞宗）。紀州那智の記録にも、武蔵国足立郡の悪鬼退散とありて、奥州のことは見えずとなり。」

＊『日本伝説叢書　北武蔵の巻』　藤澤衛彦編著
大正六年発行　1978年（復刻版）初版より引用

〝鬼〟伝承のある地域は、鍛冶・鉄製等金属関連の地名や遺跡があることが多い。鬼婆伝説が、安達郡と足立郡のどちらが本家本元かは色々な理由付けができるかもしれないが、いずれにせよ、安達郡と足立郡は何らかの繋がりがあり、〝足立〟と〝安達〟との間を行き来する人々によって、同じような伝承がもたらされたことは確かであると思う。仏教の布教活動は〝征夷〟と共に、それを補完するものとして、常に西から東へ、南から北へと伝播していったと思われる。その逆に、東から西へ、北から南への伝播があるとすると、仏教に帰依した〝俘囚〟としての蝦夷が、各地に移配され、伝承をもたらしたのではないか。または蝦夷ではない人々も伝承の担い手になっ口琴との関係をさらに探求したいと思う。また、できれば、口琴の演奏もできるようになりたいとも思うのである。

【参考文献・サイト】

・特別展図録『誕生　武蔵武士』
　編集・発行　埼玉県立歴史と民俗の博物館
・日本傳説叢書（復刻版）『北武蔵の巻』
　藤澤衛彦　編著　大正六年発行　すばる書房
・「全国『別所』地名事典　上
　鉄と俘囚の民俗誌―蝦夷「征伐」の真相」
　柴田弘武　著　彩流社刊
・『日本の古代遺跡　31　埼玉』森浩一企画　保育社刊
・埼玉県HP　文化財
・サイト「見沼の歴史」
・サイト　妖怪伝説の旅in埼玉
・サイト　ウイキペディア『口琴』『足立郡』『黒塚』

「房総東往還道を歩く」余滴

山田嘉久

一　下総から上総へ

1　千葉氏発祥の地―大椎城址（千葉市緑区土気）

千葉市の南部土気にある大椎城は平安時代中期の武将平忠常（九七五―一〇三一）が築いたと伝えられる。

忠常は平高望の曾孫であり、上総大椎、下総大友、下総千葉に居館を構え、両総に広大な私営田を所有するもっとも有力な武士団の棟梁であったが、「長元の乱」（一〇二八―三〇）を起こしたことで知られる。

大椎城はその後、忠常の末孫千葉常兼の居城となったが、常兼の死後、その子常重が大治元年（一一二六）、猪鼻城（千葉市中央区猪鼻）に移るまで千葉氏の拠点となった。

また大椎城と北に向かい合った比高三〇mほどの台地の突端部にある立山城址は大椎城の出城の一つであったと思われる。

なお、石橋山の合戦（一一八〇）で敗れて房総に逃げた源頼朝に加勢して、鎌倉幕府創立に功績あり、「千葉氏中興の祖」といわれた千葉常胤は常重の子に当る。

常胤は頼朝から「師父」と呼ばれるほどの深い信頼を得たことにより、千葉氏は房総平氏の代表的存在となった。

以後、千葉氏は四百年以上、下総の地に君臨したが、秀吉の小田原攻め（一五九〇）により、北条氏とともに滅亡した。

（千葉常胤については拙稿「まんじ」九十七号参照）

（なお中世千葉と全く関係ないが、両城址の近くにバブル期に有名となった高級住宅地（通称チバヒルズ）がある。かつては一戸最低五億円から最高一五億円で売り出された豪邸地だが、今では全くの「夢のあと」、殆ど[illegible]が上物だけが残ったゴーストタウン街となっている。）

2　房総の戦国武将　酒井氏（千葉市土気）

戦国期、土気城主となった酒井定隆については出自もはっきりしていない。

新田氏の後裔、酒井六郎貞信の子とも、また足利満隆の孫とも言われている。彼は大望を抱いて、平山、藤代、竹内の三人の家臣を従がえて、鎌倉に下り永享の乱（一四三八）で自殺した足利持氏の遺子で鎌倉公方になった足利成氏に仕えたが、康正元年（一四五五）、関東管領上杉派の同盟軍との戦いに敗れて、下総古河に逃れた成氏に従い古河に赴いた。

その後、文明年間（一四六九―八七）に古河城を去って、成氏の幕下としてともに戦った里見義実を頼って安房に向かった。

既に書いた（七里法華）記載の日泰上人との奇遇はこの品川からの船中のことである。

文明一〇年（一四七八）の境根原の戦い（千葉孝胤対扇谷上杉氏の家宰太田道灌）、翌年十一年の臼井の戦い（千葉孝胤対道灌の弟図書助資忠）の戦功により長享二年（一四八八）に土気古城（千葉市緑区土気）を再興して移った。

その後、土気城は酒井氏五代、約百年の居城となった。

その頃の房総は既述の通り、幾度となく関東制覇を狙う後北条と、関東統一を望む足利義明を盟主に迎えた房総諸豪の二つの勢力が対峙した。酒井氏は里見氏とともに、後北条と対立してきたが、四代城主の胤治のとき、寝返って後北条の支配下に入った。

天正十八年（一五九〇）、秀吉の小田原攻めにより小田原城が落城すると、土気城も明け渡した。これにより土気城は滅び、排城となった。

なお、土気城の一角に善勝寺がある。もとは真言宗であったが、酒井定隆の改宗令（七里法華）により日蓮宗になった。家康に降って旗本となった酒井氏の五代康治の子重治などの墓がある。

それ以前、後北条の支配下に入った酒井胤治によって攻められ落城したのが本納城（茂原市本納）である。

本納城は戦国時代の武将黒熊大膳亮影吉の居城であり、室町末期、亨録二年（一五二九）に構築されたと伝えられる。

永禄七年（一五六四）、国府台合戦ののち、房州里見勢から離反した土気城主酒井胤治の軍勢に急襲され、落城。城主影吉は切腹したと伝えられる。

本納城も土気城と同様、小田原落城後、徳川幕下の旗本知行地となり廃城となった。

本納城は蓮福寺（日蓮宗）の裏山にあり、この寺の境内には樹齢約四百年、幹周り四mもある大銀杏が残っている。本納城の本丸にあたると考えられる標高六十mの本城山の山頂に城址跡の碑が立っている。

この地からは南に広がる南総の展望は素晴らしい。

3　宮谷県庁跡（大網白里町宮谷）

JR大網駅から北に一，五キロに小さな日蓮宗の寺（本国寺、この寺も文明三年（一四七一）までは真言宗）がある。此処が明治に入ってからの最初の県庁所在地であることを知っている人は千葉県人でも少ないであろう。

江戸幕府の最後の将軍一五代徳川慶喜は慶応三年（一八六七）十月十四日、天皇に大政を奉還、同年十二月九日、王政復古の号令が発せられた。

それより前、同年正月、京都の鳥羽伏見で幕府軍と討幕軍が衝突（戊申戦争）、江戸城は討幕軍（東征軍）によって四月十一日無血開城された。

これと前後して房総の地も戊辰戦争に巻き込まれ、佐幕派の脱走兵はそれぞれ房総各地に散って各藩に東征軍との対抗を説いたが、大勢は維新政府による房総の統一支配へと着実に進んでいた。

当時、房総には徳川の譜代藩が十六藩（請西藩のみは最後まで新政府に反抗したため取り潰し）のほか、明治元年七月から九月にかけて駿河、遠江から移された七藩の計二十三藩で合計七十万の所領があった。

他方、没収した旧幕府、旗本領のうち、安房、上総および下総に同年七月、それぞれ知県事（二名）が任命された。

結局、房総は旧藩主の支配と新知県事の支配と二分されて明治維新はスタートしたことになる。

ついで明治二年に入ると、下総の大部分は葛飾県が、安房、上総（下総の一部を含む）は宮谷県がそれぞれ設置された。宮谷県庁は前記の通り上総国山辺郡宮谷（みやざく、現大網白里町）の本国寺にあったが、宮谷県は区域が広いため常陸の竜ケ崎に出張所も設けられた。

明治四年七月には廃藩置県が行われて、藩は県と名を改め、旧藩主であった知藩事は免官され、政府の任命される県知事に統一された。同年十一月、全国的に府県の統廃合が行われ、房総では安房、上総両国全域が木更津県、東総三郡を除く下総九郡が印旛県、そして東総三郡と常陸の一部が新治県とされた。

その後、明治六年六月、木更津県と印旛県が合併して千葉県が誕生、県庁は両県の中央に位置する千葉村に設置され現在に至っている。千葉村は当時人口数千人の寒村に過ぎなかった。

（なお、新治県は同年八月に廃止され、利根川以北の地が茨城県に、以南の三郡が千葉県に統合され、ほぼ現在の県域になった。）

4　ヤマトタケル伝説と房総―橘神社（茂原市本納）

本納城址の手前に弟橘媛を祭神とする橘神社がある。この神社は「延喜式」にも載る古社で、上総二ノ宮として土地の信仰を集めている。

弟橘媛は云わずと知れたヤマトタケルの后だが、ヤマトタケル伝説は日本最古の歴史書「古事記」や奈良時代に成立した歴史書「日本書紀」に描かれている。（日本書記では「日本武尊」、古事記では「倭建命」）

それらによるとヤマトタケルは第十二代景行天皇の子として誕生したが、幼名を小碓命と云った。武勇に秀でていたが、気性が激しく兄を殺害してしまったので父からは疎んじられていた。父は彼を遠ざけるために、各地を平定するよう命じ、彼の戦いの人生が始まる。

そのためヤマトタケル伝説は全国各地に残っているが、特に房総地区では五十五件に及ぶといわれる。

房総では東征平定の戦いに向かう際、走水の海（横須賀市）の神が波を起こして彼の船は進退窮まった。そこで后の弟橘媛が自ら命に替わって入水すると、波はおのずから凪いた。彼は姫のことを思い何時までもその場所を立ち去らなかった。そのためこの地を「君去らず」きさらず（木更津）と呼んだと伝わる。

また姫の亡骸は漂着しなかったが、かわりに衣類の袖が漂着した。そのため、この浜を袖ヶ浦（現袖ヶ浦市）と呼んだ。

茂原市にある橘神社は姫の櫛を納めて、橘の木を植えて祀ったのに始ると伝えられている。（姫の櫛の流れ着いた場所としては、このほか内房の富津、木更津、君津各地に存在する。）

ヤマトタケルは「記紀」が創造した軍事的英雄だが、その伝承が生まれた背景には、ヤマト王権が東へ東へと支配領域を拡大した事実だろう。

5　真忠組騒動（茂原市近辺）

幕末、上総地区を舞台に「攘夷」を旗印に決起した集団があった。その名を真忠組という。楠音次郎、三浦帯刀を首領とした真忠組は当初、九十九里町の大村旅館に投宿、「真忠組義士旅館」の大看板を掲げた。

「我らは報国赤心の義士である。横浜に討ち入り異人の毛唐どもを壊滅し、貧民を救う世直しをやる」とブチあげた。それには武器も金も要る。彼らは茂原近在の資産家―高橋家や千葉家などに押し入り、金品を強要した。

真忠組の不思議さは押し入りで集めた軍資金や兵糧を村々の窮民に分け与えていることである。窮民に金品を分与するということは、この時代の他の攘夷派集団には全く見られない行為だったことから最近では「真忠組には革命性と人民性があった」との評価がある

報国赤心の義士の呼びかけを行ったので、日増しに浪人の数は増え、最盛期には百九十六人にも達した。そのため九十九里の大村旅館のほか、茂原妙光寺（藻原寺）や八日市場福善寺に分宿するまでになった。

これを取締る幕府側は主力の関東取締出役のほか地元の一宮藩や多古藩からも出兵を命じ、更に万一を考えて大藩佐倉藩にも出兵を依頼した。

しかし結末は全くあっけなかった。橘以下八名が討ち死、三浦のほか主だったものは捕縛され、斬首獄門に付された。

ともあれ、二百年余も銃火剣戟の響きを聞くこともなかったこの地方では驚天動地の大騒動だった。

斬首獄門を見物に行った者も多く、また討伐のかわら版まで出回った。

現在、九十九里町作田川河口付近の道路沿いに「真忠組の碑」がひっそりと建っている。

6「茂原」の語源となった藻原寺（茂原市茂原）

本納から茂原市街に入るとすぐに藻原寺（日蓮宗）がある。

寺号の藻原が茂原の語源となったほどの名刹で、別名「東身延」ともいわれる。

創建は建治二年（一二七六）。茂原の領主斉藤兼綱は日蓮聖人がこの地に滞在した折に入信して、邸内に堂宇を建て、常楽山妙光寺と称したのに始る。

龍宮城を思わせる高さ二四mの多宝塔式山門が目を引く。

弘安五年（一二八二）病のため常陸で保養することになった日蓮は、愛馬栗鹿毛を「もばらのとの」（藻原殿）に預けた。この藻原殿と呼ばれた人物が斉藤兼綱なのかわからないが、日蓮に信頼された人物が茂原にいたことは間違いない。

また、この寺には「北条氏綱制札」がある。

永正一六年（一五一九）に早雲の子氏綱が発給した制札で、このほか三点の北条氏の制札が伝わることから、中世末期、この地は北条氏と里見氏の激戦地であったことを示している。

なお「藻原」の語源を更に遡れば古代の宝亀十一年（七八〇）となる。これより数年前に上総介に任ぜられた藤原黒麻呂が、この地に開拓した牧「藻原荘」がその由来とされている。

この時代、国司が私有地を持つことは禁じられていたが、牧と墓地だけは例外的であった。そこで黒麻呂の子春継はこの地を牧として更に開墾した後、その子孫が墓地として興福寺（奈良）に施入（献上）した歴史を持つ。

7　房総の大津波

藻原寺の隣には、同じ日蓮宗の鷲山寺（じゅせんじ）がある。

元禄十六年（一七〇三）十一月二十二日夜、丑の刻（午前二時頃）、安房の東南海底を震源地とする大地震が起こった。いわゆる元禄地震である。推定マグニチュード八、二。震源地は房総半島南端の野島崎付近。大正十二年（一九二三）の関東大地震よりも地殻変動は大きく、房総半島南部は四―五メートル隆起したと考えられている。（隆起した土地（千倉町千田地区）は地震後、住民

に均等に分け与えられた）

沖合の小島だった野島岬も地続きの岬に変貌したという。

そして翌未明、二次災害として大津波が来襲した。この地震と津波は房総各地に大被害をもたらした。

特に津波による犠牲者は房総の海岸一帯に数千名といわれる。

鷲山寺は九十九里南部に多くの信徒を持つゆえか、元禄津波の供養塔が建立されている。死者数の合計は二千百五十四名と記されている。

このほか九十九里浜一帯にはこの地震に係わる供養等が多く見られる。九十九里町「溺鬼塔」、大網白里町「津波塚」、白子町「つなしろ様」、長生村「津波塚」、一宮町「浪切地蔵」など。

また房総半島の南端にある威徳院（南房総市和田）への階段脇には「元禄十六年発未十一月二十三日夜（不明）津波（不明）」と判読できる文字が刻みこまれている。津波到達地点碑と考えられる。

この年の旧暦二月には赤穂浪士四十六名の切腹があり、その浪士たちの恨みで起こった地震と大津波であるとの風評が専らだった。

房総出身の新井白石はその著「折りたく柴の記」で地震の体験談を記している。

近世の房総半島は「元禄の大津波」以外でも、たびたび地震や津波に襲われた。慶長九年（一六〇四）、延宝五年（一六七七）、安政元年（一八五四）など。

そのためか、津波多発の房総南部の海岸沿いの集落の電柱にはすべて「此処は海抜〇メーター」の表示が目につく。

今度の「東日本大地震」でも九十九里浜の一宮川では東北地区ほどではないまでも津波が発生している。

なお、藻原寺の裏には茂原公園が広がり、此処には江戸時代の儒者東条一堂や石井、ランシング協定で知られた石井菊次郎らの顕彰碑がたち並んでいる。

（東条一堂については拙稿「まんじ」九十五号参照）

また茂原は七夕まつりで有名。平成二十一年の五十五回記念では三日間で八十六万人の来場者を集めた。

8　旧茂原航空基地跡―掩体壕（茂原市東郷）

戦時中の昭和十八年（一九四三）から茂原航空基地の建設が始った。サイパン島陥落後、本土への空襲が激化し本土決戦が必死となっていたので、大本営は米軍の上陸予定地として九十九里浜を想定。こうして茂原航空基地（海軍252航空隊）は本土防衛拠点としての役割を担うことになる。

丁度、この年に旧制長生中学に入学した私は、この基地造成に頻繁に動員された。

九十九里沖から来襲する敵グラマン機から我がゼロ戦機や爆撃機を守るために作られた有蓋掩体の施設が「掩体壕」と呼ばれ、戦時中は十六基を数えたようだが、十一基が現存しているのは全国でも珍しいという。うち一基を市が買い上げ「特別戦時遺跡」として大切に保存されている。

滑走路に並べられたゼロ戦機を空襲時には掩体壕に運ぶ仕事も我々は手伝った。今、考えると非常に危険な仕事だったが、少年たちにとっては、毎日の飛行場での草刈やモッコ担きの単調な作業に比べると数等スリルのある仕事だったので、喜んで参加したものだ。

市保存の掩体壕脇に設けられた説明板には、当時の人手不足から長生中学生や近所の人たちを動員して作ったと書いてあった。

往時茫々、当時の思い出が甦った。

また、滑走路の跡は現三井化学千葉工場の東側道路で一〇〇〇メートル道路と呼ばれている。

掩体壕は太平洋戦争末期には日本一円に（特に東日本に）作られたが、県内では房総南端の館山市内にもある。館山には今でも多くの戦時遺産が残されているが、特に「赤山地下壕跡」は合計一、六キロに及ぶ長大な防空壕で館山海軍航空隊に使用されたもので、現在でも公開されている。

また近くの海岸は終戦直後、米占領軍の上陸地点として知られている。昭和二〇年（一九四五）九月二日、東京湾上の戦艦ミズーリ号において降伏文書調印式が行われたが、早くもその翌日の三日午前九時二十分には、カニンガム准将に率いられた米陸軍第八軍第十一軍団の三千五百名が上陸用舟艇を使って「館空」水上班滑走台に無血上陸した。

今でも当時のコンクリート製滑走台跡が残っている。

（注　「館空」とは館山海軍航空隊の略称。横須賀、佐世保、霞ヶ浦、呉に次いで全国五番目の海軍航空隊として誕生した。）

9　上総一宮としての玉前神社（一宮町）

上総一宮町の中心にある玉前神社（祭神玉依姫命）は「延喜式」式内社で、上総国一宮として古来より地域の信仰を集めてきた。（因みに下総国の一宮は香取神宮、常陸国の一宮は鹿島神宮である。）

「吾妻鏡」等によれば、源頼朝の崇敬も篤かった古社である。またこの当時、上総国を支配した上総介平広常（彼の居城は一宮町と睦沢町の町境にある高藤山城址とされている）の信仰も篤かった。広常は前述の千葉介平常胤と房総を二分していたが、常胤が頼朝から最も信頼されたのに反して、広常は謀反の企てがあると頼朝から疑心を懐かれ、謀殺された。

しかし彼が玉前神社に奉納した鎧甲により、頼朝の武運長久祈願が証明され、頼朝は広常の忠誠を知り、謀殺したことを悔いたといわれている。

広常の弟である金田頼次は上総の地に復したが、その金田氏も十六世紀末にはその姿を消した。

なお、いすみ市大原の布施地域にも広常居城や墓所があるとの言い伝えが残されているが定かではない。

しかし広常の治世の広さをうかがうことはできる。

社殿（県文化）は貞享四年（一六八七）に建てられたもの。秋の例大祭には神楽（県民俗）が奉納され、有名な「一宮はだか祭り」の神事も行われる。九十九里の海岸線を七キロにわたって、疾走するさまは壮観である。

玉前神社に隣接して天台宗総五山の一つである観明寺がある。

近くの東漸寺には皇女和宮が嫁入り時に使用したという駕籠が保存されている。一宮城主加納久宣が若年寄として、輿入れ行列の先導役を受け持ったことの因縁によるものといわれるが、実物はあの篤姫のものと比べてなんと貧弱なことか。

観明寺、東漸寺に隣接して一宮城址がある。

一宮城は天然の地形を利用した標高約三十ｍの台地上にある要害の山城である。

築城時期は南北朝時代から十六世紀とされるが、詳細は不明。戦国時代には正木一族、江戸時代には加納藩（一万三千石）の陣屋として用いられた。

加納家は江戸中期、享保年間に将軍吉宗に仕え、一宮の領主となった加納久通から、幕末最後の城主加納久宣まで約百五十年にわたって一宮周辺を治めた。その久宣の墓も城址内にある。久宣は維新後、子爵、貴族院議員、鹿児島県知事などを勤めた。

また、その子久朗は昭和二十年代、千葉県知事ともなっている。

10　「風船爆弾」の発射基地（旧一宮藩台場跡）

風船爆弾をご存じだろうか。太平洋戦争時、我が軍が米本土攻撃用に開発した兵器である。直径一〇メートルの和紙製の気球にこんにゃくの汁を何度も塗布して機密性を高め、気球内に水素ガスを充填、時限性の爆弾と焼夷弾を吊して、ジェット気流に乗せて飛ばすと云う、なんともチャチな兵器である。

その発射基地が勿来（福島県）、大津（茨城県）と共に一宮藩台場跡であった。これらの基地から発射された風船爆弾九千発のうち一割ほどが米本土に到達したという。

此の爆弾によりオレゴン州住民六名が爆死した。

太平洋戦争中、米本土における唯一の犠牲者であり、今でも現地にはその記念日が建っていると云う。

被害こそ笑い話ほどの軽微なものであったが、米政府

が受けたショックは相当なものであったらしく、そのうち風船爆弾に日本兵が搭乗して米本土に進入するのではないかとの危惧が米軍部内にもあったという。

そのため米政府はその発見、発射基地の特定に躍起となった。その基地が意外な所から発覚する。

風船爆弾の表面に前記の一宮玉前神社のお札が貼られていたことである。

そのために一宮は戦争末期には米軍艦載機の執拗な攻撃を受けることになった。

11　坂東三十二番札所の清水寺（いすみ市岬町）

社伝によれば京都の清水寺と同じく平安時代初期に坂上田村麻呂によって創建されたという。その後、慈覚大師円仁が来山して諸堂を建立、寺観を整えた。

奥院に安置された木造十一面観音立像（県文化）は鎌倉後期のものと推察されるとの住職の話だった。

また芭蕉の句碑もあった。

「木枯らしに　岩吹き尖る　杉間哉」

これは芭蕉が三州（愛知県）で詠んだ名句だが、芭蕉がこの夷隅地方に来たという記録はない。この句碑は文政九年（一八二六）、この地の俳人里丸翁が芭蕉百三十三回遠忌を記念して建立したものであるという。

芭蕉の句碑については、数ヶ月前に訪ねた前記玉前神社（一宮町）の社殿にもあったことを思い出した。

同じ岬町にある天神社には葛飾北斎の高弟魚屋北渓の書いた絵馬がある。江戸の呉服商伊勢屋の店頭風景を描いた珍しいもの。同じ絵馬では近くの滝口神社には弘化三年（一八六四）「当村網　若者中」によって奉納された地曳網を描いた絵馬がある。

地曳網では九十九里のそれが有名だが、江戸末期から明治にかけては南総四ヶ浦（和泉浦、江場土浦、日在浦、塩田浦）の地曳網は九十九里をしのぐものがあったという。

その地曳網や「大原裸祭り」で有名な大原の海を小高い丘にある小浜城跡から眺めた。

この古城は戦国時代、大原漁港を出入りする船と内海を監視する海城であった。

毎年九月二十三、二十四日の二日間にわたって行われる勇壮な「大原裸祭り」は、近くにある大原八幡神社にある祭りの風景を描いた絵馬が文久四年（一八六四）に奉納されたことから、古く江戸時代から行われた行事であることが分かる。

「大原裸祭り」は一宮町玉前神社の「裸まつり」（正式名「上総十二社祭り」（県民俗））とともに外房を代表する「海の祭り」となっている。

海中に神輿を担ぎ入れ、怒涛の中でもみあうさまは勇壮豪快である。（以下、次号）

性と化粧（六）

鈴木　守

第六節　嗅覚刺激により性的興奮を誘導する化粧

本節以降は、五感を刺激することによって性的興奮を導く化粧を扱うので、外部刺激を感知する知覚神経について、予じめ述べておく。

一　知覚神経の概要

〝ゴカン〟には〝五感〟と〝五官〟がある。五感は外部刺激を感受する受信装置で、刺激の種類ごとに、視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚である。このうち、味覚が性的興奮を誘導するか否かは極めて微妙であるが、他四者は明らかに性的興奮をもたらしている。

五官は受信装置が設置されている器官、目、耳、鼻、舌、皮膚である。五官のうち化粧と最も関係の深い皮膚には、外部刺激の種類によって触覚、圧覚、温覚、冷覚、痛覚を支配する五種類の知覚神経が配備され、その神経末端を夫々、触点、圧点、温点、冷点、痛点といい、それらを総称して知覚点と名付けている。これらの知覚点が直接の受信器となって、受信された刺激情報は知覚神経によって神経中枢に向けて送信され、刺激を知覚することになる。

かように、われわれが外部刺激を刺激として感じるシステムは五官、五感、皮膚の五覚で構成される。〝五〟に拘ると、酒は甘・酸・辛・苦・渋の〝五味〟が渾然一体となって旨味を醸しているという。

二　性と〝におい〟

嗅覚を刺激する本体は〝におい〟である。〝におい〟は〝臭い〟ならびに〝匂い〟と表記され、前者は専ら悪臭を指し、後者は芳香を意味し、〝香り〟とも言う。したがって、この後、悪臭を臭い、芳香を匂いあるいは香りとし、両者を併せた嗅覚刺激を〝におい〟で著す。

既述第二節『歴史的にみた性と化粧』（本誌、一二二号、二〇一一）では、性と匂いに関する具体的に事例を示すことができなかったので、「性愛の表現に香り化粧を施した」と示唆するに止めたが、その後、『鈴木隆、匂いのエロティシズム、集英新書、二〇〇二』を入手したので、急遽、この書を参考にして、本節を纏めることにした。

早速、彼の書を引用すると、「嗅覚についてであるが、人類の嗅覚は他の動物に比べて退化しているといわれている。その原因をフロイトは、『四足歩行する動物では、鼻の位置が低いので、糞尿臭や異性の性器が発する臭いを常に嗅ぐことができるが、ヒトが直立二足歩行するようになると、鼻が上方に移動したため、陰部の臭いを嗅ぐことが少なく、かっては魅力だったそれらの臭いを忌まわしく感じるようになった』と述べているが、四足歩行獣の名残りとして、幼児には肛門性愛や糞尿愛好のような嗜好が認められる」と記してあった。

三　臭いと消臭剤

第一節『性と化粧の実態』（本誌、一二一号、二〇一一）において、「デオドラント・スプレーによって陰部に凍傷を生じた」ことを既に紹介した。デオドラント（防臭剤）は、体臭防止製品であるが、この例のように陰部消臭に使用する人もいるので、性に直接関与する化粧料である。体臭防止とは別に、口臭を防ぐ化粧料としては歯磨があるが、性との関係は思いつかない。

ところが、江戸時代には性と直接関係する口臭防止用の丸剤があった。その例を挙げると、『池波正太郎、おとこの秘図、新潮文庫、一九八三』に、「お梶どのは、紅や白粉をつけなんだが、肌身の隅々までよう手入れしてあってな。京の女は、閨房の女体の魅力を高めるために、香料を使うのじゃ。京の町の女房が、みな、お梶のように自分の躰の手入れを行っているのではない。男を相手に生業にしている女たちである。お梶は島原通いをした亡夫に閨の技を植え付けられたのである」と主人公の台詞が著されていた。また、「情事の最中の女の口臭は、一種独特のもので、これを防ぐ手段に〝金盞丸〟という丸薬があって、それを口中に含むと口臭は全く消えて花の香りが口中に漂う」と続けていた。金盞丸なるものは、現在の仁丹の前身のようなものであり、口臭防臭剤として情事の際に使っていた。

かように、江戸時代には既に、少なくても遊里・島原では情事の際、香料や芳香性の丸薬が使われていたのであるから、江戸・吉原の太夫たちも使っていたであろう。

防臭剤が話題となったので、体臭の原因となる汗について述べておく。汗にはエクリン汗とアポクリン汗があり、夫々エクリン汗腺（小汗腺）とアポクリン汗腺（大汗腺）から分泌される。前者は人類発祥後に発達した器官であり、皮膚のほぼ全面に分布する。後者は哺乳動物より受け継いだ形質であって、腋窩、乳暈、臍窩、陰部に局在しており、いずれも性と関連する部位である。

エクリン汗の成分は尿に類似しているが、アポクリン汗は濃いミルク状を呈し、有臭成分を含み、これが体臭の主因となる。腋窩のアポクリン汗は細菌で分解され、異様な臭気を放つ汗臭症、ワキガを導くことがある。また、エクリン汗は子供の頃から分泌されるが、アポクリン汗の分泌は思春期に至って始まるので、二次性徴の一つとみられている。

このように体臭発生の機序は性的色彩が強いので、消臭剤デオドラントは性関与の化粧料の一面を有している。しかし、アポクリン汗腺の分布は、日本人より外人の方が多いので、デオドラントは白人社会で発展し、日本人の利用は少ない。

四　性と香り―香料史を振り返って―

若かりし頃のことである。クラブへ飲みに行った。ハレム・ノクターンの曲が流れていた。隣に座っていたグラマラスな美女から、「踊りません」と誘いの声をかけられ、フロアで踊った。彼女は香水タブーの香りを蠱惑的に漂わせていた。この時のタブーは、嗅覚刺激による性的興奮を誘導する香り化粧の典型であった。

かように性的興奮を起こさせる手段として、香りを利用するケースは数多くあるはずだが、化粧の歴史を著した文献の中に、性と関係する香り化粧の記録は希である。希な資料を思い出すがままに拾うと、前出の池波正太郎の書に「遊里・島原では情事の際、香料を使い、芳香性の丸薬で口臭を防いだ」と記されていた。別書に「クレオパトラは香料を巧みに使用した」と著しており、美貌の彼女は女の武器を最大限活用するため、顔を彩り、香りを添え、色香によってシーザーを堪能させ、アントニウスを虜にして、エジプト国家の維持を計ったことは、夙に有名である。では、乏しい資料を補足するべく、既述の香料史を復習うことにする。

石器時代には、香料に関する資料はなかった。その最初の証拠は、シュメールの化粧を著した成書に「前三〇

性と香り化粧の起源については、前出・鈴木隆の書に詳しい。それに松山俊太郎の著作『古代インド人のよそおい、化粧文化、五～一三号、一九八一～八五』を交えて考察することにしよう。

古代ヒンズー寺院、特にコナクラの太陽神殿やラクシュマナ寺院には、神聖な神殿や伽藍建築に人間や神々が様々な体位で交接している姿が刻まれた、彫刻やレリーフが列をなしている。その行列に圧倒されるが、古代インド人たちは、男女の交合は世界の初めの神々の行為の再現として神聖視され、セックスを完璧に行えば行うほど神に近付くと信じていたのである。

一方、古代インド社会では、香料の起源は媚薬であり、媚薬はかっては多くの文化で神聖なものとして扱われ、セックスを通じて精神と肉体の融合を計り、神聖な領域に近づこうと考えていたようである。

それを裏打ちするように、カーマ・シャーストラなどの性愛の経典に。性器の大きさによって、女性を牝鹿女、牝馬女、牝象女に分類し、彼女たち夫々の愛液臭と体臭が一覧されている。愛液臭といえば、タブーの香りは、麝香鹿の性腺分泌物、即ち愛液臭の匂い麝香（ムスク）に基づく。前述クラブの美女が漂わせていたタブーの蠱惑的な香りを思い浮かべ乍ら、「性愛文化が発達したインドでは、ムスクを巧みに利用して、腋臭や陰部の愛液

○○年頃のウルの港に香料香木が陸揚げされた」という記述であった。古代社会には香水はなかったが、エジプト、中近東諸国ならびにギリシャ・ローマでは香油、香粉あるいは焚香の形で香料を使用していた。

高温多湿の気象環境下にあった、インドは香樹香草の産地であり、細菌の繁殖も盛んであった。香料には殺菌作用があるので、古代インド人の生活には香料は必需品であり、彼らの化粧風習では、香油、香粉は元より洗浄料やメーキャップ料なども賦香し、口臭を消すのに香樹香草を用い、香樹香草を浸した浴槽で沐浴した。わが国の柚湯や菖蒲湯はその流れを汲んだものであろうか。

日本の香料史では、「香料は仏教公伝の時、伝来した」と言われ、それ以降、『記紀』や『万葉集』に香料名が登場し、古代から近世に至る間の著述の中に薫香や香料の名が残されていた。

これらの叙述から想像を逞しくすると、平安時代の后妃たちは、香を焚きしめて、帝の御来臨を待ち望んだであろうし、江戸の大奥でも上様お成りの際は、憩いの間に香を燻らせて、閨房の雰囲気を整えたはずである。だが、かような禁裏や大奥の秘事は秘史として〝艸〟と秘められている。

五　性と香り化粧の起源―考察

さて、性に関わる香り化粧のルーツであるが、鈴木隆の書には、「その起源はヒンズー文化、即ちグプタ朝初期の頃」と著されている。だが、前述の性愛の経典カーマ・シャーストラは更に古い時代の書であり、また、香料との関連は別として、インダス文明（前二五〇〇年前後）の遺跡から性器崇拝を思わせる像が出土している。

更に、「多くの古代文明では、セックスは神聖な行為と見做されていた」との記述もあるので、既述の香料史と擦り合わせてみると、古代インド以前のメソポタミアやエジプトでは、香油が盛んに使われており、「前三〇〇〇年頃のウルの港に香料香木を陸揚げされた」と記されているので、「性と関連する香り化粧の歴史は、古代文明曙光の時代まで遡る」可能性が暗示される。

（次号に続く）

臭を芳香の領域に高めたのではなかろうか」という幻想が頭の中を過ぎったのである。

人類の仲間（二）

鈴木守

第四節　原人の誕生

生物分類学では、脳容積七百ml以上の人類をホモ属あるいはヒト属に位置付けている。現在、ホモ属には種の単位で六種類が知られている。六種のうち、脳容積が一千ml以上の人類をホモ・サピエンス種に分類している。この節で扱う原人というのは、二〇万年前頃に現れたサピエンス種を除いた、早期ホモ属人類五種についてである。この五種を一括して、かつては『原人ホモ・エレクタス』と称していた。なお、第四節では、ホモ属の人類に関しては、属名を省いて種名だけで表記する。例えば、ホモ・エレクタスを単に『エレクタス』で表す。

一　原人の種類

ホモ属は二五〇万年前から二〇〇万年前頃の間に、猿人ガルヒから進化したとされているが、他にケニアントロプス・プラティオプスを祖とする説もある。

ホモ属が猿人から分化した当時、二〇〇万年前頃から七〇万年前頃まで氷河期が続き、地球全体が寒冷化したため、厳しくなった生活環境を克服する必要性に迫られた結果、人類進化が促進されて原人が誕生した。

初期原人として、二五〇万年前頃に『ルドルフェンシス』、二〇〇万年前頃に『ハビリス』と『エルガステル』が相次いで発祥し、前二者は一五〇万年前、後者は一〇〇万年前頃まで生息した。この当時は、セディパ、ボイセイ、ロブストスなどの猿人が生存しており、タンザニア・オルドワイ渓谷には、原人ハビリスと猿人ボイセイが共存していた。

第三間氷期が始まる一五〇万年前頃に、一部原人は北上して出アフリカを果たした。その一つは、エルガステルが南欧に進出し、七〇万年前頃のイタリアとか四〇万年前頃のニース近郊に『イゼルニア原人』や『テラ・アマータ原人』が生活していた。

エルガステルから派生した別の一派・エレクタスは東アジアに拡散し、中でも七〇万年前の『ジャワ原人、ピテカントロプス・エレクタス』と四六万～二三万年前の『北京原人、シナントロプス・ペキネンシス』の名がよく知られているが、八〇万年前の藍田（らんでん）原人が中国で確認されている。なお、『ホモ・エレクタス』の名称は、原人で最初に発見されたジャワ原人ピテカントロプス・エレクタスの由緒ある名前を残すために、東アジアに進出した原人グループの呼称に採用された。

それでは、北京原人の流れが日本にまで及んでいたであろうか？日本は酸性土壌が多く人骨が残り難いため、古い化石は少ない。最も古い確かな人骨は一八〇〇〇年前の沖縄・港川人の化石であり、日本には旧石器時代は存在しなかったと思われていたが、四六年に群馬県岩宿で旧石器時代の石器が出土し、旧石器時代の石器が脚光を浴びるようになった。

ところで、九三年に何と北京原人より古い「六〇万年前の前期旧石器時代の石器が宮城県上高森遺跡で出土」という報道があったが、その後、発見者の作為が露見、一場の夢と化した。この事件により石器の真偽が見直され、日本最古の石器は九万年前の岩手県遠野市金取遺跡の出土品とされていたが、〇九年に出雲市砂原遺跡から一二万年前の中期旧石器時代型の石器が発見され、これが現在、国内最古の石器である。

一二万年前には、未だ現代型サピエンスは東アジアに進出していないし、この型の石器は、古代型サピエンスやネアンデルタール人が汎用した石器だが、彼らは東アジアに足跡を残していないので、砂原遺跡の人類は原人の可能性が高い。この年代になれば、原人が中期旧石器型石器を使い始めていたのであろうか。

近年、九三年に五番目の原人、七八万年前頃の『アンテセソール』がスペインで発掘された。前出のイゼルニア原人やテラ・アマータ原人より古い時代に、エルガステルとは別種の原人が南欧に進出していたのである。なお、アンテセソールはエルガステルから発生したとされているので、アフリカ産なのか、南欧で分化したのかは不明である。

二　原人の進化と生活・文化

人類進化による顕著な進歩の跡としては、猿人の時代における直立二足歩行の完成、それと原人以降の脳の発達を挙げることができる。このような進化が人類の生活や文化にどのような影響を与えたのだろうか？

① 幼形進化と一夫一婦制：人類の直立姿勢が完成

するにつれて、上体の重量を支える必要から骨盤が発達して産道が狭まったうえ、脳の発達に伴って新生児の頭蓋が拡大したため、無事な出産が困難になってきた。その困難を乗り切るには、頭蓋が大きくなる以前の未熟児の段階で出産することが種の維持に不可欠な条件となり、早産の系統が生き残る幼形進化をもたらした。

その結果、幼児期と学習の期間が長くなり、育児のために、一夫一婦制になったと想像されている。子供の世話をするには、強い家族の絆が必要であった。やがて子供が両親に依存する期間が次第に長くなり、より深い絆を持った家庭生活をつくる必要が生じ、各家族ごとに安定した住居を構える必要が増したといわれている。

② 皮膚付属器官の変化：皮膚付属器官は皮膚を本家とすると分家のような存在であり、毛、汗腺、皮脂腺および爪がそれに該当する。原人の皮膚付属器官については「殆ど無傷のまま全体骨格が発掘された、一六〇万年前のエルガステル少年ツルカナ・ボーイは乾燥性熱帯気候のサバンナに適した体型を持ち、現代人的な無毛性と発汗による体温調節機能を備えていた」と推測されていることを参考にして、初期原人の頃までに到達した形質進化の様相について考察する。

二足歩行はエネルギー高消費の運動であり、エネルギー消費によって上昇した体温を下げる必要から、全身の汗腺が発達して発汗による放熱を可能にし、更に体温発散を阻害する毛を退化させ、初期エルガステルの頃までに、無毛性と発汗による体温調節機能を整えたと想定される。このような形質の変化を化粧品との関連で捉えると、特に体毛退化に基づいて、日焼け止め対策が始まった可能性を思考するのである。

他の皮膚付属器官について、著者らの実験結果では、有毛のマウスの皮脂腺は単葉で皮脂分泌は少なく、体毛が退化したヘアレスマウスでは複葉の皮脂腺を有し皮脂分泌が盛んになる。したがって、人類でも体毛が退化するにつれて、皮脂分泌が促進されることを示唆しており、遅くてもツルカナ・ボーイが生存していた一六〇万年前頃には、現代人と同程度の皮脂分泌を可能にしたと推定される。また、樹上生活から地上生活に変わったことによって、鈎爪から平爪へ進化したことは、前節で述べた通りである。

③ 火の使用：原人が発生して間もない二〇〇万年前頃から氷河期に入り、寒冷化した環境を凌ぐ対策の一つに火の使用があった。その他、捕食獣防御や夜間の照明にも利用したり、肉を焙ることも覚えたであろう。

火の使用に関する最古の証拠は、一五〇万～一〇〇万年前のケニア・シェソワンジャ遺跡と南アフリカ・スワルトクランス遺跡で人為的な焼土が認められており、これらはエルガステルの遺跡とされている。しかし、当時の原人は火の使用者であったが、火の製作者ではなかったと考えられている。

それはそれとして、火の利用は人類史上最高の進歩であり、火を使用したエルガステルが最後まで生き残り、次世代のサピエンス種の祖になり得たのではなかろうか。

その後、二足歩行を完成させて長距離歩行が可能となった原人の一派・エルガステルは石器と火を携えてより寒い地域へ向かって北上し、一四〇万～一二〇万年前頃には、ユーラシアの各地に拡散した。中国に到達した北京原人や南欧に進出したテラ・アマータ原人の火使用の形跡が認められている。

④ 化粧の証拠：前出テラ・アマータ原人は狩猟の成功と無事を祈願して赭土で身体彩色したとされている。したがって、四〇万年前には呪術的な赤化粧を施していたのである。赭土使用の歴史を遡ると、七三万年前頃のイタリア・イゼルニア遺跡には、住いの出入口に魔除け目的の赤く彩った石が配置されており、更に古く一五〇万年前のエチオピア・ガデブ遺跡には、使途不明の赭土使用の跡が認められた。テラ・アマータ原人やイゼルニア原人の例からみて、化粧用か否かは別として、ガデブ原人も護符として赭土を使用したに違いない。

テラ・アマータより時代が下がると、二〇万年前頃のイギリス・スウォングストリームには、中央に形よく貝殻を配した石器が残されており、美意識の萌芽を思わせ、美を演出する化粧の発生を予感させる事跡である。

⑤ 原始社会システムの発祥：「原人は猛獣との戦いや厳しい自然環境の変化に対処するため、恐らく血縁関係で結ばれた二・三十人くらいの小集団・ヘルドを形成しており、長がヘルドを統卒していたであろう」と推論されている。この推論におけるヘルド形成は、原始的な社会システム構築を思わせる。

第五節　古代型サピエンスの発生

ホモ・サピエンスといえば、一般的には現代人や現生人類を指しているが、生物分類学では、属名、種名、亜種名を連ねて、ホモ・サピエンス・サピエンスと称している。分類学においては、脳容積が七〇〇ml以上をホモ属とし、ホモ属中一〇〇〇ml以上をサピエンス種としており、更に体型などの形質の相違によって亜種に区分されている。

現在知られているサピエンス種の亜種はハイデルベルゲンシス、ネアンデルタレンシス、イダルツ及びサピエンスの四種類である。亜種サピエンスは現生人類であり、

現代型サピエンスとも呼ばれている。

この節では、次節で述べる現代型サピエンスに対応させて、それ以前のサピエンス、即ちハイデルベルゲンシス、ネアンデルタレンシス、イダルツの三亜種を統括した名称を古代型サピエンスとして記載する。なお、亜種を単独で扱う場合は、属名ホモと種名サピエンスを省略し、例えば〝ホモ・サピエンス・ネアンデルタレンシス〟を亜種名の〝ネアンデルタレンシス〟と表記する。

一　サピエンス化した人類

サピエンス種誕生について、「アフリカにて、ホモ・エルガステルの一部がサピエンス化した」とする説と「ホモ・アンテセソールを介して生じた」という説がある。両説の真偽は定かでないが、アンテセソールもエルガステル由来であるから、エルガステルがサピエンス種の祖であることは間違いないところである。

① ハイデルベルゲンシス：　ハイデルベルゲンシスに関する標本は、猿人や原人に比べて質的に劣り、量的に少ない。この亜種の最初の発見は、〇七年ドイツ・マウエル出土の所謂、ハイデルベルグ人下顎骨であり、この発見に基づいて、亜種ハイデルベルゲンシスの名が定められた。

この亜種の遺骨は、アフリカ、ヨーロッパ、西アジアで出土しており、その最も古い例は、七六年にエチオピアで発掘された五〇万～二〇万年前の頭蓋化石である。だが、九八年発表の論文に、ハイデルベルゲンシスを思わせる一〇〇万年前頃の成人人骨がエリトリアで出土したと報告され、これが確定すれば、前出のアンテセソール介在説は成立し難く、ハイデルベルゲンシスはエルガステルから直接発祥したことになる。

② ネアンデルタレンシス：　一八五六年にドイツ・ネアンデル渓谷で化石人骨が出土。これにネアンデルタール人の名が与えられ、化石人類発見の第一号となった。その後、クロマニヨン人、ハイデルベルグ人、原人、猿人などが発見されて「化石人類学がスタートした」という由緒ある人類の仲間である。

ネアンデルタレンシスの歴史を辿ると、寒冷地のヨーロッパへ進出したハイデルベルゲンシスが寒冷気候に適した形質を獲得して、三〇万年前頃にネアンデルタレンシスとなり、リス氷期やビュルム氷期の厳しい寒さを克服し、生き長らえた最後の古人類であり、三万年前頃、南スペイン・マラガ近郊サファラヤ洞窟を最後に消息を絶ってしまった。

ネアンデルタレンシスの最も古い証拠は三〇万年前頃のスペインに見られ、彼らの脳容積は一五〇〇mlを越えるものも現れた。骨格は極めて頑丈で筋肉もよく発達し、

アメリカの古人類学者トリンカウスの言を借りると、「彼らは現代のオリンピック選手顔負けの頑丈で逞しい肉体だった」そうである。

このように極めて頑健な肉体を誇っていたネアンデルタレンシスが、三万年前頃に何故滅び去ったのか？。この疑問について、彼らは現代型サピエンスと中東やヨーロッパの地で同地共存していた形跡があるので、現代型サピエンスに滅ぼされたとか、混血したという説が唱えられたが、それらの説に対し否定的な意見が多く、現在では「寒冷気候など特殊な環境に余りにも適応し過ぎたため、後氷期へ向かって温暖化が進み、新たな生活環境に適応できなかった結果であろう」と説明されている。

遊び心で想像すると、「寒冷気候に適応した彼らは中東から東へ進み、カシミールを越えてヒマラヤ山中に居を構え、高地寒冷気候に適応したホモ・サピエンスの亜種〝雪男イェティ〟に変異したのではないか。雪男こそネアンデルタレンシスの末裔である」と。

③ イダルツ：　正真正銘のホモ・サピエンス亜種の話である。〇三年にエチオピアで、ほぼ完全な頭骨化石が発見された。脳容積は一四五〇mlであり、一六～一五万年前にハイデルベルゲンシスから分岐した亜種と判定され、イダルツと命名された。イダルツは現地語で〝長老〟の意味で、ハイデルベルゲンシスと現代人を結ぶ祖型が示唆される。

二　古代型サピエンスの生活と文化

古代型サピエンスは、主として中期旧石器時代の人たちである。原人からサピエンス化した彼らはヘルドを構成して狩猟を生業としていた。狩猟に際して動物の皮や木の枝でカムフラージュしたり、猟の安全や豊猟を願って呪術的な儀式を行ったと推察されている。居住方式は地域によって異なり、東ヨーロッパや東アフリカでは野営し、西ヨーロッパや西アジアの住民は洞窟の入口や岩陰に宿っていたようである。

初期ハイデルベルゲンシスは、原人が開発した握斧石器を継承しており、後にネアンデルタレンシスと共に、剥片石器を中心とする中期旧石器時代の担い手となった。恐らく、剥片石器はハイデルベルゲンシスの考案であり、彼らから派生したネアンデルタレンシスがその技術を受け継いだと考えられる。

ネアンデルタレンシスの文化として特筆したいのは、彼らの死者に対する哀悼の心である。彼らが残した遺跡、一〇万年前のムスティエ洞窟などには埋葬した形跡があり、六万年前のシャニダール洞窟には花を手向けた跡が残されていた。四・五万年前頃になると家族の墓地を作

り始めた。これらの形跡から察するに、ネアンデルタレンシスの時代には、既に死者を悼む心が芽生えていたと思わざるを得ない。現在知られている最古の埋葬例は三〇万年前に遡る。

古代型サピエンスは原人よりも生活が豊かになったためか、毛皮の衣服を纏い、岩絵具や赭土で身体を彩るようになった。なお、最近、発見されたイダルツに関する生活・文化に関する資料は未見である。

（次号に続く）

無為、不言教

横山正義

第一章　五十歳の花嫁

昭和二十三年の真冬、二月のことです。私は小学四年生でした。村境の橋まで、祖父のところに嫁いで来る祖母を迎えに行きました。祖父は当時、すでに六十歳を越していました。空は黒い雪雲がうねりを巻いて寒空で、時雨が吹雪いていました。

祖母はその頃、五十歳前後でした。なにか無の背景から飛び出して来るように、私を見つけると、右こぶしを上げて合図し、威勢よくモンペ姿で足早に、私の方に近づいて来ました。

私は「どこから来ただ」と尋ねました。

祖母は「東京から」と返事しました。

当時、田舎でも米はすべて供出し、食糧難で、まだ戦争の傷あとが残り人々の心が荒んでいました。家族になってから、慣れない農作業に身を粉にして働き、辛いことも沢山あったと思いますが、愚痴を言うこともなく、近所の人にも誰にも慈悲を持って接しました。小麦やサツマイモを乾燥し、粉にして、スイトンの料理を作ったり生活を工夫し、米が余ると近所の人に無料で分けていました。そして祖父が脳梗塞に倒れると懸命に長年月にわたり介護をしてくれました。二十数年働き続け、私の子供に「坊やが大きくなるまで生きたい」と。祖母は言ってそれから十カ月後に亡くなりました。

私は家族から苦境にたった時の生き方を学び、現在、生きていられると思って感謝しています。

老子曰く第六十七章

「我有三宝、持而保之　一日慈、二日倹、三日不敢為天下先。倹故能勇、倹故能廣、不敢為天下先、故能成器長」。

世の中の人々は、みな、私は大人物のようだが愚かに

みえる、という。そもそも愚かであるからこそ、おおきくありうるのだ。もし賢ければ、とっくにこざかしい者になっていただろうよ。

私には三つ宝があり、しっかりと保持している。第一は慈悲、第二は倹約、第三は世の中の人々の先頭には立たないから万人の長になりうるのだ。

もし今、慈悲を捨てて勇敢であろうとし、倹約をすてひろくしようとし、人の後になることを捨てて先頭に立とうとすれば、死んでしまうであろう。慈悲によって戦えば勝、慈悲によって守れば堅固である。天が人を救おうとすれば、慈悲深い人を守るのだ。

第二章　ブラジルにロマンを求めて六十五年

橋本梧郎先生は、私の住む静岡県菊川市出身の植物学者です。大正二年（一九一三）に生まれ、植物研究のためブラジルに渡ったが、平成十一年に吉川英治賞受賞のため、帰国した時、四月十四日に菊川市の岳洋中学校講堂において、「ブラジルにロマンを求めて六十五年」という講演を行いました。

先生が「植物に名前がある」ことに感動し、ブラジルに渡るのには葛藤があったと思いますが、「大疑あれば大悟あり」で、現在、ブラジルの植物の薬効は世界中から注目されています。石田梅岩が「大疑あれば大悟有り」を実感するのは五十歳を過ぎてからですが、橋本先生は若くして、体験されています。小柄ですが、峻厳で大きな声で話をされる、豪快な、お人柄とお見受けいたしました。

今日は立秋で先生が植物採取をされた、痩せた荒地に沢山の山百合が咲いています。自然の摂理、花が咲くということは良くみると、みずみずしく力強いエネルギーの表現です。人間も同じと思います。

講演は大変興味ある話でしたので、次に内容を記します。

私（橋本梧郎）は大正二年、一九一三年生まれで現在、八十六歳です。生まれた所は小笠町猿渡（現菊川市）で、二十一歳まで生活しました。私の生まれた家は経済的には、金持ちではなく、中流の家庭で、小学校を卒業すると掛川中学に進学しました。中学生の頃より、植物に興味をもち、あなた方は考えないかもしれませんが「植物に名前がある」ことに私は感動しました。学校で植物学を学び、生き物・岩石等の学問に興味をもって、受け入れることができました。「わずらわしい」と思ってはダメです。先生に植物採取の方法を学び、山野を歩き、植物の名前を覚えていきました。最初は近隣の野山から小笠山、静岡県、愛知県、そして山梨県すべての植物を調査し、次にどうしても、「世界の植物を調べたい」と思うようになりました。

当時、自由に行けたのはブラジルだけでした。地球儀で見ると、地球の裏がわで、なお詳しく調べると、アマゾン川があり、気温が摂氏二十五～三十度で湿度が高く、植物の種類が多いことが分かりました。日本の植物は五千種、ブラジルでは四万種です。此処に行こうと、私は固く、決意しました。昭和五年、飛行機はないので、船で行くしか無く、四十三日を要して着きました。私は運が良いほうで、天候異変などで二ヶ月掛かる人もありました。

ブラジルはコロンブスによって一四九二年に　発見され、航海技術の進歩とともに、移り住む人が増え、一五〇〇年が建国で、来年、建国五百年です。そのほかにも南アメリカには幾つかの国があります。

六十四年まえ、日本は貧しかったので、困った人は「外国で働け」と、国で奨励し、ブラジル移民というものがありました。明治四十一年に移民が始まり、六月十八日を移民の日としています。移民はポルトガル語を覚えなければならず、大変な苦労がありました。日本では一五四三年ごろ、鹿児島にポルトガル人が来て、そして、長崎ではポルトガル語が使われていました。ブラジルの社会情勢、人々は金、銀、銅の出る山を探ったり、農家ではサトウキビを作り、奴隷を使って、黒人をアフリカから三百万人入れ、奴隷制度が長く続いていました。アメリカに南北戦争が起こり、人をこき使うことは憚られるようになり、そして西暦一七六五年、自由の国・奴隷廃止となりました。アメリカに遅れること十年、ブラジルでは一七七八年に奴隷解放により、黒人は自由の身となりました。農園主は働き手がなくなり困ってしまい、イタリア人が一八〇八年に黒人に代わり入植し、続いて日本人が入植しました。

日本人はブラジルで、一獲千金を夢見、故郷に錦を飾る志を抱き、入植したが実際は奴隷でした。コーヒー園は金になると言って、働き、早朝から夜遅くまで働き、農業の経験のない人達が血と汗で、過酷な労働に耐え抜いたのです。ブラジルの仕事は三人で組まないと出来ないような仕事でした。皮肉なことに、そしてその子孫が日本に来て、現在、働いているのです。現在、菊川市小笠地区のブラジル人人口は静岡県内で二番目の割合です。

現在、ブラジルのサンパウロ人口は千二百万人で、北京に次いで、世界第二番目の大都市です。当初、私は二年間学校の生徒を教えたが、日本人教育は大変で、日本人の植民地は奥地の僻地で、ヘビが多く二百五十種のうち、五十四種が毒蛇です。全長十米ほどの蛇が子牛を丸呑みにしているのを見たこともありました。奥地は簡単な雨・露を凌ぐ家で、そこにベッドを置いて寝起きするという生活でしたので、家の中にガラガラヘビがトグロを巻き、首を持ち上げおり、人が来ると、ガラガラと音

を出すような状態で、血清注射もあるが、命を落とす人も多くさんいました。私が起きると、ベッドの下に蛇がトグロを巻いていて、危うく咬まれるところでした。私は子供の頃から、蛇を持つことに抵抗感はありませんが、夜蛇に咬まれないように、灯りで歩き光りをできるだけとることが大切でした。

今でもインデアンが居ます。インデアンはモンゴル人で、シベリアから北米を通り三万年ほど前に住み着きました。アンデス山脈を渡って、あとでマゼラン海峡まで着くのに、九千年ぐらいの歳月を掛けています。ヨーロッパ人が入る以前、インデアンは約三百万人であったが、ヨーロッパ人との戦いに破れ、現在は二十七～三十万人です。

私は薬草の研究のため、インデアンの人たちの仲に立ち入り、研究しました。アマゾン川の上流に道はないので、植物の研究をするには船で入るしかありませんでした。ブラジルには解らない、新しい植物が沢山あります。私は研究を続けて今日まで来たわけですが、私の前にも先輩が来て研究しています。それはダーウインです。ダーウインは二十二才の時ブラジルに来ましたが、私は二十一歳の時ブラジルに行きました。最初、私はダーウインの研究をしましたが、その後、自分なりの研究を進め、植物の名を調べ、同じ種でも、変異した物は全て採集し十万点ほどの標本を採集しました。

この私の業績が評価され、このたび吉川英治賞を受賞するという栄誉に輝き、大変嬉しく思う次第です。

現在はブラジルに住んでいますが、偲べば郷里は懐かしいものです。

老子曰く第四十三章

「天下之至柔、馳騁天下之至堅。無有入無間。
我是以知無為之有益。不言之教、無為之教、天下希及之」。

世の中でもっとも柔らかいものが、世の中でもっとも堅いものを突き動かす。形の無いものが、隙間の無いところに入っていく。

私は、このことから、無為が有益であることを知った。不言の教えと、無為の益とは、世の中でそれに匹敵するものは、ほとんどない。

この章が老子の教えの基になり、無為之有益。不言之教、これを基に、環境、状況、時の変化に合わせ、主旨、要点を書いたものが老子経だと思います。橋本梧郎先生が「植物に名前がある」に感動した事と、同じ境地かと思います。橋本先生は小笠双松学舎橋本崔堂舎主のご子息で、学問を尊ぶ環境があったのは想像されます。しかし父が援助したとか、なにか指導したと言うことはなかったのではないか。無為、不言教です。

老子は「言葉の先になにがあるか」考えよといっているのです。

双松学舎は橋本崔堂先生が地方道徳の衰微を憂い、明治二十四年一月に創建した学舎で、報徳の教義を遵守し、私の記憶では昭和三十年頃まで開校していました。当地の村のリーダーは当校出身が主流でした。小笠郡棚草村猿渡（現菊川市猿渡）

内田の国の物語り①

横山正義

私は「老子」という目を通して、文を書くことをテーマとしていますので、忠快と熊谷直実という対照的な生き方をした二人を取り上げてみたいと思います。

第一章タンスの中

昨年、ブータンのワンチュク国王が来日され、国民総幸福度をめざすという話をされ、話題となりました。その時ブータンの特集がテレビで放映されました。一場面に田舎の風景が出、それは山間に谷から水が流れ、それが平野になり、稲穂がたわわに実る田園風景でした。住民はこの光景は蛇だというのです。

私の住む近くに、同じような風景があり、平尾という場所です。山あいに迫（恒常的でなく時々水が流れる谷）があり、そして田が開け、大口という地名があり、まさに蛇です。稲作文化とともに、蛇信仰は始まったのでしょう。

まえがき

私の住む菊川市内田（静岡県）は田園風景の広がる豊かな地で、鎌倉時代、国の中央との関係がありました。

青蓮院の荘園となったことが法然、親鸞などにつながり、文化的に大きいと思います。当時、内田に関係あった人物として、慈円、皇円、法然、親鸞、感西などがいます。

鎌倉時代、承久の乱で、弓馬の術などとともに、兵糧米が大量に必要となったので注目されたのでしょう。突如として、関口隆吉を輩出したわけではありません。縄文時代からの積み重ねであります。江戸時代に入ってからも、内田は三河武士旗本井上志摩守宗三郎の領地でした。陣屋跡に入居したのが、同じ三河武士の関口隆吉です。明治時代、近代化の発展に伴い、新たに誕生してきた、産業労働者の教育に尽くし、アジアの欧米列強の植民地支配に抵抗した松本君平の活躍があります。

よう。稲にとって水は大変貴重なものですが、蛇は夏に田の水のあるところに生息する変温動物で、水の在る所で蛇は体温維持のために体を冷やしています。蛇はまた米を食べる鼠を獲るので、崇められます。当地で言われる「虎、馬の借金、卯、辰は騰がらず巳年に返す」といいます。虎年から馬年までの九年間の借金を卯年も辰年もダメだが巳年なら返せるというのです。神社の占め縄、正月の家庭の注連縄飾り、注連縄を擬して、大根を飾ったりするのも、皆、蛇を擬しているのです。案山子や、無縁仏を祀る農家で玄関に飾る笠に、箕なども蛇をかたどったものです。そのほかに出雲大社のご神体は蛇です。

ブータンでも同じように蛇信仰が伺えます。

神は蛇巳だといいます。

私は子供の頃、寝ていると鼠に足をかまれたりし、そしてそれを蛇が鼠を追って来るので蛇が棚から落ちて寝床まできました。親はそれでも蛇を傷めてはいけない、家の守り神様だからというのです。

中国の神に、人類の始祖となった人頭蛇身の神・伏義と女媧があります。

カンボジャではクメール王朝の最後の王妃が蛇に変身し、アンコールワットの宮殿から消えていき、廃墟になったといいます。

第四章熊谷直実は大蛇のお話です。

内田が大陸の稲作文明と何等かの関わりあったのでしょう。

奈良文化の発祥「唐古遺跡」と同じ「鹿城卿」と内田は称していました。古代、韓子とは、祖先が弥生文化すなわち稲作文化を伝達した朝鮮人と縄文文化の日本人との子をいうのです。

弥生文化だけではなく、我々の中学時代（昭和二十五年）、夏休みの宿題の展示会があると、村内の耳川遺跡から出土した縄文遺物が展示されていました。弥生文化に引き継いだのでしょう。

平安時代も終わりに近くなり、作物を作るようになれば、人々が裕福になり、平和な世が訪れると考えますが、逆の世になり、人々は殺しあうようになりました。関東平野で農地の開発が牛馬の利用とともに進み、強力な武士団が興りました。領地を守る争い、支配者、被支配者の争いが起こるようになりました。

このような時代、平尾にある八幡神社のお話です。

菊川市内田平尾に平尾八幡神社と云うお宮がありますが、そこの神主をされた家に九十歳ほどで、若い頃、先生をされた栗田とし先生という、老婆が住んでいました。十五年（平成十年）ほど前、先生が「八幡神社の歴史に興味があればお話をする」と言われましたのでお宅に尋ねました。平尾八幡神社が南むきで、対面で北向きの家屋で、暖といえば、西日が老松の間から、わずかに、曇りガラスに光を落とす冬の寒い日でした。高台であるの

で、からっ風が小笠山から直接吹き付け、雪に覆われた富士山の方向に、吹き抜けるのでことさら寒さを感じました。

先生をされていた若い頃、回顧話などに花が咲き、「私は人の手紙をみれば人が分かる、私は子供の頃、先生が黒板に書いた字、伸ばすところ、抑えるところなどが今でも、脳裏に浮かぶ、しかし授業に意識の流れていなかった人はそれが出来ていない、だから分かる、だがそういう人は概して若いとき、酷使されるので短命だ。成長してから必要に迫られ書く字は我流になるが、そういう人は長命だ」というのです。静岡女子師範時代に先生を教えた教授がその後御茶ノ水女子大の教授を勤め晩年、「生涯教え子で一番優秀だったのはとしさんだった」と回顧したという。

帰りの最後に、「私はここに嫁いできて七十年ほどになるが、父からも夫からもこのタンスを開けてはいけないと云われて、未だに開けたことがない」と言われました。「本居宣長の手紙など中身の無い、封筒に宛名だけがあり、そのほかにも、歴史学の資料に貸してくれと依頼され、貸すと一度も返ってきたものはない」と嘆きました。

ご主人は東京で都立高校の教員をされて、疎開されていましたがすでに三十年ほど前に他界されていました。数年後、老婆の先生も他界され、後継者もなくなり、後継者は途絶え、八百年の歴史は空き家になり、現在、人手に渡りました。

後継者の訃報に接し、私も先生のお宅に行くと、親戚縁者、近所の人たちで葬儀の準備がすすめられ、例のタンスは処分されるところでしたので、親戚から鍵を借りて開けてみると資料がありましたので、それを参考に物語を、今から書いてみようと思います。老いた先生がなにを私に託したのか、私は資料を発表する義務のようにに感じました。先生は「日中の架け橋と言われた」松本亀次郎の姪であり、松本亀次郎は正月を掛川市土方の自宅で過ごすことを習いとし、小学生の頃、とし先生と従兄弟（後の国立大教授）と二人、成績表をもって伺うと「先生の言うことを良く聞き勉強するように」と励まされ、お小使いをくれたそうです。四代前の先祖は栗田土満であります。土満は賀茂真淵、本居宣長の弟子で国学者・平尾八幡神社神主でした。

タンスの中には、栗田土満の従五位下の賞状と京都御所の配置図、平尾八幡神社の近代江戸時代の配置図、幕末に王政復古の運動を展開した、赤心隊を支援した際の寄付金五両の領収書、そのほか多数の文献等がありました。

一、八幡神社由緒

私はこのタンスの中の資料を参考に内田の国の物語りを書いてみようと思います。

八幡信仰の始まりは宇佐八幡宮で養老二年（八一九）であった。柿木庄司という豪族が住んで居て近隣を統治しており、柿木長者と云われていたという。

柿木長者とは誰であったのか。柿木とは伊豆・狩野城のある所です。城主として、茂光（板橋の戦いで戦死）、親光（奥州征伐で戦死）、宗茂などであるが、狩野宗茂が歴史の流れから可能性が高い。すると狩野宗茂と内田宗茂は同一人物か。女子が一人あり、清華家末葉より粟田大蔵信麿という人を養子とし、この信麿という人が天朝に奏請し勅許を得て、河内源氏の発祥の地・河内の国・壺井八幡をこの地に勧請し奉ったという。当時、信麿とは誰か。藤原師信の子孫で大蔵卿藤原長成という人がありました。令室は常盤御前で源義朝と結婚し義経などを儲け、義朝死後、平清盛の女となり、廊の御方を産み、後に長成の令室となり、そして、能成を産みました。能成は成長し、侍従の役職につきましたが、源頼朝が討った弟・義経と異父兄弟になるので訝り、解任してしまいました。長成の孫子が信麿です。

平安時代の末期、内田は青蓮院常寿領で、荘園でした。門主は慈円で、武士の台頭とともに、日本中におびただしい死者が出る世のなかになり、慈円は平和のために、公武一体による国の統治を模索していました。

主旨に添い、伊豆の武士団・狩野宗茂（南家）の女子と、藤原長成（北家）の孫・信麿との、養子縁組を整えました。

源平の戦いで、追い詰められた平家一門は壇ノ浦で海水自殺を試みましたが、平敦盛の子・慈円の愛弟子・忠快は助けだされ、三島小河卿に流配され、狩野宗茂配下にありました。

慈円の縁で、藤原信麿は忠快の弟子となり、良信と名乗りました。良信は祖父の官命に因んで、大蔵卿僧正とは呼ばれていたという。

信麿の創建と云われる、平尾八幡神社と、大蔵寺が現存します。大蔵寺は大蔵卿僧正からの命名と伝えられます。

良信は源頼朝が父義朝を慰霊のために創建した、勝長寿院を中心に祈祷僧として、承久の乱（千二百二十一）より約三十年間、大活躍します。この間、多くの弟子を育て、建長四年（千二百四十九）四月二十三日滅します。

青蓮院は門跡寺院で京都市・粟田にあり、粟田は京都東山大谷の一部で東海道五十三次の最後、粟田口です。資料からして平尾八幡神社前方は青蓮院の荘官屋敷であったのでしょう。七百石であり、これは平尾村の石高です。

良信の墓碑は現在、大谷（粟田）惣右衛門家経塚に祀られ、高台で東に牧の原の地平線の上に富士山、北に秋

葉山系、西に小笠山系、南に遠州灘の地平線が見え、風光明媚です。

大谷家は後代によれば「京都から来た、この地を治めていた、大正時代一家離散に至り、沢山の古文書を焼却した」という、惣領家でした。

良い水が出る井戸のある三反部ほどの惣右衛門屋敷があり、トンロンバタという燈篭があったという場所が現在残されています。

二、内田の領家、青蓮院常寿領について

青蓮院は天台宗総本山比叡山延暦寺の三門跡のひとつとして古くより知られています。日本天台宗の祖・最澄(伝教大師)が比叡山を開くにあたり、やま上に僧侶の宿坊を幾つも作ったが、そのひとつの青蓮坊が青蓮院の起源です。

伝教大師から円仁(慈覚大師)、安恵、相応など延暦寺の法統を継いだ著名な僧侶の住居となり、東塔の主流でした。その第十二代藤原師実の子・行玄代大僧正に、鳥羽法皇が御帰依になって第七皇子をその弟子とされ、院の御所に準じて京都に殿舎を造営して青蓮院と改称せしめられたのが門跡寺院としての青蓮院の始まりである。

すなわち行玄は門跡寺としての第一世、その皇子が第二世門主後白河法皇の令弟・覚快法親王です。行玄以降明治にいたるまで、門主は皇族であるか五摂家の子弟に限られていました。

当院は平安時代の末から鎌倉時代に及ぶ第三世門主慈円・(関白藤原兼実の弟)の時に最も栄えました。慈円は天台座主を四度にわたり勤めて、その宗風は日本仏教会を風靡し、皇室の尊信きわめて篤く、勅旨による修法をはじめ仏事につくした功績は数限りない。また日本人初めての歴史哲学者として不朽の名著「愚管抄」を残し、新古今時代の国民的歌人として、「拾玉集」を我々に示しています。

台蜜の巨匠である反面、浄土宗の祖・法然、真宗の祖・親鸞を庇護し、法然の寂後時を経て、その門弟源智(平重盛の孫)が創建した勢至堂は、慈円が法然に与えた院内一房の跡で、これが知恩院の起源となりました。道徳の人・平重盛は法然に帰依していました。

慈円は内田にある応声教院を法然に与え、法然に帰依していた清華家大炊御門経宗に周囲を荘園とし、経済的援助するようにしたのです。

法然が応声教院護国本寺と改め、浄土宗最初の道場としました。

経宗の子・太政大臣頼実は荘園を引き継ぎました。現在、内田に御門、頼実、と云う集落が今も残っています。頼実の令室は平忠時の女子で源義経令室は姉妹です。摂政・藤原師家の令室も姉妹で甥・承澄は忠快の弟子で良信とともに双璧の弟子といわれていました。

平忠時の姉妹・時子は平清盛令室(二位の尼・安徳天皇の祖母)壇ノ浦で「七歳の天皇」と海の中にも浄土がありますと海中に身を沈めた人物。同じく平忠時の姉妹・滋子は後白河天皇令室です。

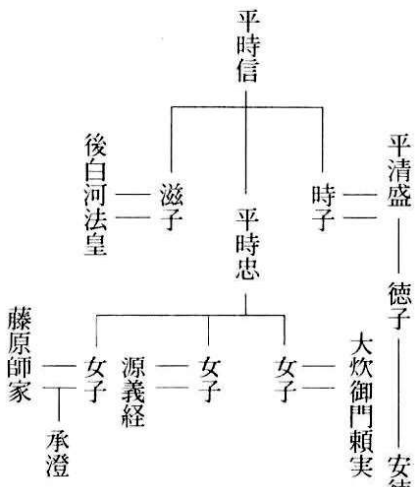
親鸞は九歳の時に慈円について青蓮院で得度し、寂後院内の大谷(現在の知恩院の北門の傍の崇泰院の地)に墓と影堂が営まれたのが本願寺の起こりです。それ故本願寺の法主は明治までは青蓮院で得度しなければ公に認められず、また当院の脇侍門跡として門跡を号することが許されました。

応声教院の由緒によれば、親鸞も内田に来て、当院を訪れたという。ゆかりの寺として耳川村本楽寺があります。現在、相良・大澤寺が由来の寺として歴史を伝えています。

慈円は後鳥羽上皇から託された朝仁親王(入道道覚親王後鳥羽上皇皇子)を所謂瀉瓶の弟子としてすべてを譲る考えであったが、承久の乱が起こって鎌倉幕府に阻まれ、寂後二十数年して、道覚親王は衆望をになって、第六世門主となられた。慈円は公武一体論者であったので、後鳥羽上皇が鎌倉幕府混乱に乗じて、幕府を撃つ考えに反対であったが、上皇は「のろし」を上げてしまいました。

爾来青蓮院は入道親王入寺の寺であることを誇りとして明治にいたった。現在、十一宮家の一つで、東伏見慈晃門主です。「青蓮院由緒」より

系図一



三、狩野宗茂

狩野宗茂は源頼朝主催の十万騎参加の富士のまき狩で、北条時政とともに仕切り役を勤めました。そこで起

こるのが曽我兄弟による工藤祐経の仇討ちでした。兄弟は祐経を討ったあと、兄十郎祐成は仁田四郎忠常に討たれ、弟五郎時致は源頼朝を襲撃し、頼朝と同衾していた、現在で言えばニューハーフ御所五郎丸に取り押さえられてしまいました。曽我兄弟は北条時政の烏帽子児でもあり、これを見て狩野宗茂は北条時政の並々ならぬ野心を知りました。北条氏の平和主義です。自ら、質素倹約、身奇麗にして、少しでも争いを起こす気配の在る者は、肉親であろうとも、いかなる策略謀略を用いても、抹殺し、平和を保つのです。それが百三十年の平和を保つのです。

これを知り狩野宗茂は狩野城・柿木を後代（宗時）に譲り、青蓮院、慈円の領土、内田に来る決心をしたのではなかろうか。現に和田の乱以前に阿静坊安念事件（北条氏を討つ相談をしていると風評を故意に流された事件、狩野氏も参加）という事件があり、狩野氏は挑発されていました。しかし狩野氏は挑発に乗らず、和田の乱には参加しませんでした。

狩野宗茂は平重衡の預かり役として工藤祐経と伴に、活躍するのは「東鏡」、「平家物語」に語られています。当時、工藤祐経は源頼朝に次ぐ地位でした。工藤祐経が伊豆武士団と反目する根拠は、工藤祐継に祐経の母が嫁ぐ時の連れ子で、伊豆武士団と縁がないからです。この富士のまき狩りには掛川市・上内田（相良氏）の四郎宗頼が参加しています。

四、平尾八幡神社地図近代の地図（八幡神社宮司栗田たかし記・とし夫）

栗田信麿の創建したものとして現存する、八幡神社、大蔵寺があり、そのほかに次のような建物を栗田信麿（良信）が建立しました。内山真竜が江戸時代末にこの地を訪れ、遠江風土記に一構ありと記しています。

平尾八幡神社の前方を姑藪城（高貴な人の住むところの意味）と言い、城内の建物として次の物がありました。

＊九重屋敷（行玄、覚快、慈円、道覚、忠快等が訪れた場所であろう。）
＊神僧屋敷（栗田信麿（良信）の屋敷か）
＊僧　屋　敷（青蓮院学掌の荘官屋敷か）
＊奈良都蹟（栗田氏が活躍した奈良時代）
＊南園堂蹟（栗田氏が活躍した奈良時代）
＊大明宮蹟（栗田出の栗田真人が則天武后に招かれた旧唐書にある）
＊唐国長安蹟、興慶宮祉跡、皇城祉跡（栗田真人が遣唐使として、訪れた）
＊渤海国蹟（栗田一族遣渤海大使小野田守関連か）
＊仏陀国蹟（栗田一族遣新羅大使小野毛人関連か）

栗田一族には他に、小野妹子、柿本人麻呂、小野道風、小野の小町などがいます。現在、京都青蓮院入り口に、奈良朝で活躍した栗田臣の発祥の地という石碑があります。青蓮院裏が守護神栗田神社で牛頭天王を祀っています。

＊補陀落浄土（現在現存）

狩野氏は伊豆・熊野という修験者を擁していました。修験者は山伏であり、山師であり、土肥金山を開拓しました。その経済力が絵師の集団、狩野派を生んだといいます。狩野氏が内田に来ると、遠江・熊野がこの地に発展していきました。承久の乱で活躍し、認められ、新恩給与の場所として、石見の国、二箇所に領土を得ました。伯耆大山は熊野、吉野と並ぶ三大聖地で石見銀山にも、修験者の活躍があったのでしょう、大内氏の領国として、経済力で雪舟を育てました。

①増光寺阿弥陀堂（耳側村飛び地熊野本宮）
②観音堂（熊野那智大社）
③薬師堂（熊野速玉神社新宮）
④若一王子権現（熊野青岸渡寺）
⑤経塚（熊野那智飛龍権現脇にあり）現在は粟田氏ゆかりの大谷（粟田）惣右衛門子孫墓地となり、良信は此処に奉られています。

＊柿木神社（伊豆狩野城跡で祭られている神社と同じ、現在跡地のみ）
＊関八州蹟（承久の乱の際、陣を張った跡か）
＊甲　州　蹟（右同じ）
＊江　戸　蹟（右同じ）
＊小田原蹟（右同じ、小田原高田在住武蔵七党の関連の陣か。
高田太郎、同中八太郎、同四郎は「和田の乱」に参戦し捕虜になっているからです、弓騎馬戦の技術を持ち込んだ人たちではなかろうか）

五、後の世に建立された建築物

（室町時代）
＊山香郡秋葉蹟（元この地が秋葉寺の領地であったことがあった）

（戦国時代）
＊天方一族蹟（武田氏家臣秋山信友伯耆守がこの地に陣を張ったのに伴なって徳川方についた久野宗能を攻めた同志ではないか、信友は徳川家康と高天神の戦い不戦で甲州・秋山村に帰ってしまい家康から評価されました。その跡に陣を張ったのが栗田氏です。）

（江戸時代）

＊丹波篠蹟（江戸時代旗本井上志摩守宗三郎の内田、常陸とともに領地）
＊紀州屋敷蹟（江戸時代、遠州は紀州の殿様、徳川宣頼の領地であった）
＊井上志摩守宗三郎陣屋（江戸時代平尾村領地、三河武士）
（井上志摩守陣屋跡に入居したのが関口隆吉初代県知事です）
＊その他（桜番場、下馬、馬捨など）

六、栗田家

江戸時代、栗田先生の栗田氏は、高天神の戦いで信州・戸隠神社、善光寺の別当であったが、武田方につき、徳川と戦い、戦功を認められたことが、甲陽軍艦に記載されています。最終的には武田氏は徳川に負けましたが、栗田氏は信州にもどり、別当に復職しました。一部の人が内田に来て、栗田家と栗田家は婚姻により引き継がれました。

家康は戦いをしても、統治能力の或る人は採用し、三十石与えたのです。しかし見張り役が住むような屋敷、紀州屋敷蹟があります。そして後代、栗田土満の活躍となります。著書の「神代記葦牙」は現代でも、日本書紀の訳の根幹であるという。「うひ山ふみ・鈴の屋答門録」岩波文庫の本居宣長との問答は有名です。弟子として、石川依平、袴田勝彦、本間清行、佐倉真国、高岡貞基、桜井礎信海、横山清風、岡本千春、白松真道、栗田真菅、中山吉植、小国重年、斉藤春雄、竹内そへ子、大庭延香、村松真舟、森直里、森直樹、森貞温、武藤杉麿等があります。

七、書籍としてタンスにあった書

＊中国典籍—老子経、王註老子道徳経、評註老子道徳経、論語略解
＊神道—神名記（文亀三年）、八幡宮本記（元禄二年）
＊仏教—禁秘抄（順徳天皇著慶安五年）、装束図式（元亀二年）
＊地誌—平安京城古図
＊風俗習俗—神代記葦牙（栗田土満）神皇正統記（北畠親房）
＊言語—和名類聚鈔、出雲国造神寿（本居宣長）
＊日本文学—新撰万葉集（契沖）古事記（度会延佳）古事記伝（本居宣長）
など他多数がありました。

八、地名、神社名

①内田の地名として次のようなものがあります。
＊喜蔵が谷（承久の乱で活躍の恩給の地）
＊源八（承久の乱で活躍の恩給の地）
＊金糞（熔鉱炉跡）耳川村清水ガ谷と平尾にあり。
＊御門（大炊御門頼実太政大臣の荘園）頼実の女子は影明門治院（麗子・土御門天皇后）
＊頼実（大炊御門頼実太政大臣の荘園、青蓮院第一世行玄は大叔父）
＊元屋敷（従来から住んでいる地元住民の屋敷か）
＊本屋敷（柿木の長者屋敷か）
＊大屋敷（国指定文化財）
＊政所（青蓮院地頭政所）

②神社仏閣としてつぎのようなものがあります。
＊八幡神社　栗田信麿（良信）鎌倉時代建立
＊大蔵寺　同
＊牛頭天王（古川神社）古来中国では神農で医学の祖、薬王にして、農業や商業の祖神。人身牛首で生まれた。インドでは祇園精舎の守護神。青蓮院の守護神。東京八王子・地名にもなっている、牛頭天王の子供が八王子で八雲八幡神社には八幡神社、八王子、横山神社などが祭られています。古川神社　には脇宮として、水神社すなわち安徳天皇が祀られています。
＊応声教院　斉衡二年（西暦八五五）慈覚大師が創建

第二章承久記

源実朝が公暁によって殺害されると、鎌倉幕府の弱体化を読み、後鳥羽上皇は守護地頭の制度放棄を迫りました。鎌倉幕府はこれを拒否したので、幕府執権北条義時の追討宣旨を発しました。これに対し鎌倉幕府尼将軍北条政子はこれを受けて立ち、承久の乱の始まりです。狩野内田氏も鎌倉武士として、たちあがりました。承久の乱で、寝返りを恐れた、鎌倉幕府北条政子は父子の参戦を禁じました。片方人質にとり、殺すぞということです。

狩野入道として参戦しましたので、子はしていません。参戦した内田四郎は和田の乱に参戦し捕らえられ捕虜になり、小田原高田をところ払いとなった高田四郎ではなかろうか。三浦義村、北条時房、北条時頼など旧知で話があいます。高田四郎が関東の弓馬の術を内田武士団に導入し、強力な武士団を形成していました。小田原高田のあと地は狩野氏が引き継ぎました。高田氏は内田宗茂が引き受け、菊川内田に高田という集落を作りそこに住まわせました。小田原高田の両隣は曽我兄弟の曽我氏と二ノ宮氏で狩野氏一族の女子の嫁ぎ先です。

承久記に次の活躍が記されています。

「承久記」に高重討ち死にのこと（尾張守護小野盛綱

の一族・筑井太郎高重）が書かれています。

東海の先陣相模守・時房の軍勢が、遠州の橋本（新井）に着いた時、遠江国の住人内田四郎が、「十九騎の軍勢が高志山に入っている」と申し上げれば、「先陣を越えて高志山に入ったのはどのような者たちか」、と時房が尋ねると、内田四郎は「三浦義村（駿河守）殿は『敵は大勢のなかに紛れて、通り過ぎてしまうこともあるであろう』とおっしゃっていました。」と申しあげた。

時房（相模守）が、「そういうこともあるであろう。それでは、その軍勢を追いかけて、敵か見方か尋ね、敵ならば討て」と仰せられた。

内田四郎、六郎、新野右馬充をはじめとして、六十騎あまりの軍勢が追いかけた。十九騎の軍勢は高志山を過ぎて宮地山へ入り、音羽川の畔に降りて来て、今は追い手も来ないだろうと、馬の足を冷やして休ませ、十九人は片方の丘で扇を開き扇いで休んでいたところ、内田の軍勢が迫ってきて、谷を隔てて控えた。使者を使わせて聞いた。「先陣を乗り越えて通ってきたのはどのような者たちか、敵か見方か賜ろう。時頼の使いとして遠江国住人内田が来た」といえば、「まことか、こちらは下総守の縁者で三浦筑井四郎太郎と云う者だ。関東に用事があって下ってきたが、都に異変事があったと聞いて、大勢にまぎれて京に上がろうと思って通り過ぎようとしたが見つけられしまった。力およばず運も窮まった。ただ一人も不名誉な死に方はしないので、各々こちらに攻めてまいれ」と申すので、内田の者ども六十騎にて押し寄せた。筑井四郎は、とある小屋に走り行って四方の垣根を切って押し立て、六人が立てこもった。矢束を解いて広げて、続けざまに討ってくる。内田の者ども、谷を隔てて、対戦したが、射落とされる者もあり、目の前に疵を受ける者、命を落とす者、多数あった。

そのうち矢が少なくなり、射尽くしてしまった。「どうしようもない到底、戦って勝てる相手ではない。そうむやみと殺生の罪を作っても仕方がない、いざ、観念しよう」と、筑井は後見の安房郡司と刺し違えて果てた。残る四人もおとなしく刺し違えて果てた。

残った十三騎の軍勢は急斜面を降りて東海道の本道へ出ようとしたので、敵に「怖気いたのか」と言葉を掛けられ、

「主の死んだ場所で死ぬ覚悟、逃げるわけではない。戦いをしようとして引き立てた馬なれば」と、馬にうちのり、十三騎、轡を並べて大勢の中に叫び入って戦う、しかし一気に四、五騎が押し寄せてくるので大勢に無勢、勝てるわけもなく、皆討ち取られてしまった。十九騎の首を本野が原に掛けた。次の日、そこを時頼が通られこれを見て、

「十九騎と聞いたが、一人も逃げなかったのか。立派な者達よ。重要な合戦で惜しい者達を失ったものよ」

と褒め称え、南無阿弥陀仏と唱えて通っていった。

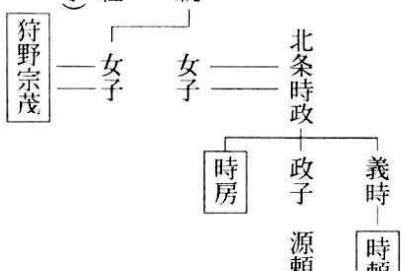
狩野内田氏はこの活躍が認められ、現在の島根県浜田市内田、益田市内田、大分県日出町広瀬の三箇所に領地を取得します。益田に行った内田氏の子孫曰く、後の世、江戸時代に我々は工藤祐経の子孫だと称しています。狩野宗茂の令室と工藤祐経の令室は、工藤祐親の女子で姉妹であり、平重衡の接待役が東鏡では工藤祐経で平家物語では狩野宗茂であり、大変、近い人物です。

内田宗茂の子・致（宗）直の令室が工藤祐経の女子とすれば、すべて合います、系図にはありませんが、可能性はあります。

鎌倉幕府では工藤祐経は頼朝に次ぐ、ナンバー2であり、頼朝の信頼が厚く、その上美貌容姿端麗の、京の文化を身につけた教養人です。狩野氏は工藤一族であります。

現在、愛知県音羽町役場の裏に筑井太郎重高の五輪の塔が奉られています。

系図二



第三章　忠快

慈円の弟子で忠快とはどのような人物であったか。源平の戦いで、壇ノ浦で入水自殺し、海から助け上げられ人生を全うした平家の人物です。

平清盛の弟・教盛の子で、姉は平家物語・鹿谷の陰謀に参加した、藤原成親の子成経の令室です。兄は源義経と壇ノ浦でわたりあった人物・平教経です。源平合戦壇ノ浦で入水自殺したが、源氏により海から救い出され、流罪となり、伊豆国小河郷で狩野宗茂の管理下に四年ほど置かれたのです。その間、徳望の篤い忠快は、頼朝を

はじめ鎌倉有力者の帰依を受けるようになり、北条時政の孫の病気を祈祷により快癒に導いたりしました。

「忠快の斬首」を命じた頼朝が、大日如来の夢告によって処刑が中止された。

「忠快の持仏である地蔵の異変が自らの霊夢」と合致したことに源頼朝が感涙、鎌倉に留まるように要請したものの、老母を案ずる忠快の希望をいれ、種々の引きでものを送って、帰郷させたといいます。さまざまな好意に満ちた伝承があります。

これは平家として破格の待遇です。頼朝は自らが生かされたために、平家を滅亡に追いやったことに、慄き、平家一族を殺害し、なお北条時政に命じ、京都で孫子の代七十人まで平家狩りが行われ、赤子を殺害された母が悲しみのあまり、投身自殺したなどと伝えられる中です。これは慈円の愛弟子だったということが、猜疑心の強い頼朝に信頼感を与えたのでしょう。

京都にもどった忠快は、横河に草庵をむすび、内田応声教院の開祖円仁の古風・台蜜を慕い、修行に専心したという。建久六年（一一九五）頼朝が東大寺の供養に列席の際、関東下向する時に忠快も加えたいと慈円に申し出、実現したとのことです。源頼朝は摂政関白兼実の弟・慈円とは、胸襟を開いて語り合うなかであり、忠快はその愛弟子で信頼は厚かったのです。慈円は公武一体による政治しか世の安定はないと、判断していたのです。

伝記が消失したので、識者の想像ですが、晩年、忠快は千日の間に如法経百部の書写が終了すると、経巻を箱に納め、壇ノ浦に向かう旅だった。はじめに彼は六波羅（平家一門の公邸）、池殿（平頼盛邸）、小松殿（平重盛邸）、門脇町（敦盛邸忠快の我が家跡）など、西八条のゆかりの地を訪ね、そして鹿ケ谷、寂光院を訪ね、従姉妹で安徳天皇の母・建礼門院徳子を偲び、一の谷の戦場では若くして熊谷直実に殺害されたいとこの敦盛、父・知盛を助けようと討たれた従兄弟の知章、兄・道盛などが瞼に浮かんだ。

壇ノ浦の戦いでは、安徳天皇、平時子、父・敦盛、叔父・経盛、知盛、教経、資盛の、活躍や死に様がよみがえった。供養のため、念仏、読経、回向をしました。やがて忠快は気持ちを静め、戦没した平家一門の人々の冥福を祈ったという。

慈円は武士の世とともに、各地で人が親戚縁者の肉親など関係なく、殺しあうようになりなんとか、平和の世と死者の慰霊を願っていました。そして大繊法院が創られ、忠快は慈円の弟子として、太繊法院に入り、平家物語作成の情報提供者になりました。怨念を超えた生き方と思います。

「老子」曰く第七十三章

なにごとにも進んで果敢に行動する者は殺される。なにごとにもぐずぐずと尻込みする者は生かされる。此の両者の生き方には、利益があったり、損害があったり。天がなにを嫌うのか、誰にその訳がわかろうか。そういうわけで、聖人でさえ、自然の道理を知ることはむずかしいとしたのだ。

「両者の社会への利害からみれば、天、聖人でも判断はできない。しかし、後者は優秀である。次のような生き方ができるのである。まさに忠快の生き方である」

天の道は、争わずして而も善く勝ち、云わずして而も応じ、招かずして而も自ずから来たり、はてしもなく大きいのにうまく計画されている。天の法網は広々と大きく、目は荒いが、なにごとも見逃すことはない。

第四章熊谷直実

熊谷直実について、醍醐本「法然上人伝記」の中に次のように書いてあります。

法然上人が、あるとき、こう話された。この頃のひとは、仏法の深さのほども分からないで、生死などたやすく解説できるなどと言う。私の師匠に肥後阿闍梨（皇円のこと）といわれる方がいる。知恵深遠の人である。これほどの人でも、つくずくと身のほどを顧みられてこう云われた。

「自分は今生においては生死を解脱することはできない。もし生まれ変わったとしても、次の世では仏法のことを忘れてしまうといわれる。それならば、一番長命だといわれている大蛇になって、弥勒仏がこの世に出られるまで待つことにしよう。しかし、それも大海に住んでいては、いつ途中で死んでしまうかも知れないので、遠江笠原庄の内にある桜が池に住みたいものだ」と。一日、風も無いのに桜が池が大荒れに荒れた。その日がちょうど阿闍梨のなくなられた日であった。阿闍梨は知恵深遠であったがために、解脱の難しさを知り、道心堅固であったがために、弥勒の世に会いたいと願われ、このような大蛇の身になられてしまった。浄土の法門をもう少し早くお示しすることができたならば、こうはなさらなかったであろうに、残念でならない。

これは法然上人がむずかしい天台教学と易行の浄土教を説いたもので、これらの話を聞いた熊谷直実は西暦一二〇五年関東下向の際、桜が池畔に草庵をむすび、皇円を供養し、そして法然の師・慈円の荘園でもあり、法然ゆかりの内田・応声教院に寄ったという。

応声教院は浄土宗である。最初、天台宗天学院といい斎衡二年（八五五）天台座主円仁が文徳天皇の勅願で創建したものです。

熊谷直実はもともと平家で、平次郎太夫直貞が武蔵国

熊谷という方は、情けあり、血もあり涙もある方であろう」と、現在わが子を討たれながら、敵を思う直実に対して、お礼を申したという。

一一九〇年、敦盛七回忌に高野山を訪ねた。

一一九二年、久下直光と境界のことで争い逐電する。

一一九三年、法然の門に入る。五十三歳

一一九四年、敦盛の妻玉琴と子に会い、一の谷を訪ねた。五十四歳

一一九五年、鎌倉で平家、肉親の怨霊に病む頼朝と浄土の法門について語り合う。

一二〇五年、関東下向の際、直実は桜が池畔で庵を結び、皇円を供養した。そして慈円の領地であり、法然ゆかりの応声教院に立ち寄り、直実が、手を洗うために松に、法然に頂いた袈裟を掛けたという。六十五歳

熊谷直実の生涯で、気のつくのは、武士の宿命とは云え、若い時代に恩恵を受けた人と戦ったということである。幼児の時、命乞いをし、助けられた、平経盛と源平の戦いで源氏の武将として、戦い、そして、論功賞のため、その子・敦盛を殺害し、経盛も壇ノ浦で海中自殺に追い込むのです。育ての叔父・久下直光の代官として、京都勤めをしながら、そこをさないことから退任し、

熊谷に流刑される。是より氏を熊谷と号す。直貞の子・太郎直正も伴に配流された。その後、熊谷直正は平忠盛によって殺害されました。時に、熊谷直実二歳で京都に捨ておかれた。母は成木太夫久下権守が妹であったので、権主が養育するが、後に殺すという約束をした。直実母方の叔父、いずれも平家の一族であったので、平清盛の弟・経盛に侘びをいれ直実を助けました。乳母の懐で武蔵熊谷に赴き、舎兄直光の下で成長しました。

一一五九年、平治の乱では源義平の元にあって、平重盛を攻めた。

一一六七年、久下直光の代官として京都大番を務め、傍輩の無礼に憤慨して、務めを辞め、平清盛の四男の平知盛の下で勤める。

一一八〇年、石橋山の戦いでは平家として頼朝を攻める。後に頼朝に従う。日立金砂城に佐竹秀義を攻め、勲功を立てる。

一一八四年、一の谷の戦いで十六歳の平敦盛を討つ。四四歳

敦盛の首と遺品に一文をそえて命の恩人で父親・平經盛に送る。

平経盛より返書来る、敦盛は両眼を閉じ、口は結び、今にも物を言わん風情でしたから、「これはよくよく納得、得心のうえにて首を討たれたものであろう。してみると平知盛の下に勤める。後に、育ての親・久下直光とは領地の境で争い、源平の戦いでは平知盛と戦い、壇ノ浦で、死に追いやるのです。

当時、下級地頭として、生きていくためには止むを得ない生き方であったが、人間としては悩むものがあったのでしょう。敦盛慰霊をしたり、出家をしたり、極楽には九つの階級があり、その上の最上段「上品上生」の願いを起こしたりしているからです。死さえも予告日を計画したのです。

直実の庶子実影は愛知県豊川に土着し、豊川、天竜川畔に勢力をのばし、子孫は現在でも、政治家、学者、医者などとして、近隣の尊敬をうけているという。

熊谷直実は生きるためには止むを得ないとは云え、なにか晩年、自分の生き方に後ろめたさを意識するようになり、「南無阿弥陀仏」と唱えれば、極楽浄土に行けると云う、法然上人の「浄土宗」に帰依し、法然上人の門下に入道となるのだが、日常生活で極楽浄土実感が体感できなかったのでしょう。死後に極楽浄土の最高位につくことを模索したりします。

老子の主張「無為自然」にして、「南無阿弥陀仏」と唱えれば、法然の世界が体感できるのでしょう。しかし秀才であるとともに、努力家で文武両道の熊谷直実でも、何時も極楽浄土にいるような状態にあることを、模索し、それが実感として体験できなかったのでしょう。地球だって宇宙の一部で、地震も津波もあり、人間に都合良く、できているわけではありません。人間の脳だって、常に時間、環境とともに揺れ動き、苦も楽、不安な状態も浮いたり消えたりするもので、いつも楽しいことだけが脳に浮かぶことはありません。老子の思想、中国の哲学、無為自然ということが、中国の歴史から科学性がよみとれます。

陰翳の美学（その十一）

外山知

第三章　美を構成する要素

十一、美の根源

1．美的センス

私達が常に物事に対処する時、その微妙な感じを知る心の働き方によって、大きく異なる。いわゆるセンスがあるかないかで、物事に対処する方法も、自ずとことなってくる。

センスは磨くことによって、高濃度に対処出来る。たとえば芸術創造においても、価値的の高低は、自ずから顕現する。

私達は日常生活において、種々な試行錯誤を通して、その道のセンスが磨かれる。また日常性に、感情的なときめきを感ずる。そのときめきこそ、センスのきっかけとなる。

一つのステップが、たとえ小さな時の木であっても、それを切っ掛けにして、他の物と結びついて連鎖がふくらみ、互いに依存しあい成長するのである。

その過程で、センスは他のセンスと結びあって、より高度のセンスへと駆け上がって行く。

いわゆる、センスの集合体というか、結合する形となって、より新しく斬新なセンスが生まれる。そこには今まで味わったこともない、新しいセンスのほとばしりが形成されて行く。

美それも古い形から、新鮮な美へと変わっていく。美的センスは、そこに生かされ躍動して来る。

人間はより新しいものに憧れ、感動を得る。新規なものは、以前の物よりよい。人は古きものを踏み越えて、新しきものを、今までとは違った方式で、次々と創造していく。

もちろん、従来の物の改造型もあろう。しかしそこには想像もしえない機種も台頭して来て、人々を驚嘆させる。

これはセンスの改変、あるいは改革といっても、過言ではなかろう。こうして過去の歴史を振り返って、新しい頁を造りなして行く。

これには人類の盛んな英知が、翳となって光を生み出すのである。たしかにこのセンスは、何物にもかえがたい尊い存在となって、漸次連鎖を生むことになる。

それが突発的なものであったにせよ、意図的なものであったにせよ、新しいセンスとして、物事を育くんで行く。これは私達の英知がそうさせるわけで、その対象が美であれば美的なセンスとなる。

目的によって分化した働きをなす美的センスは、すべての物に必備なものとなる。新鮮な物に共通して言えること、それが芸術分野にしても、他の生活分野にしても、センスに生きる。

すなわち、知的生活が人間生活を躍動させるのである。センスの働きによって、生きるすべを感じる。

センスの必要性を生活の中に見出す術ことこそ、心的な状況、精神的な感性度の高い生き方に、由来すると思われる。

すなわち、センスを磨いた高濃度の心的な状況は、人を前向きの志向にする。自分の前に道がある。その道に挑戦する意志力、忍耐力が、一つのステップをなす。

そのきっかけは様々であるにしても、一歩また一歩が功を奏することになろう。その人の持つ力が左右することになろう。

人は気力に生きる。精神的な思惟、形而上的な世界観を構築するエネルギーが、センスを生む起りとなろう。

そのエネルギーは、翳の世界に躍動している心の働きに、光をあてることによって、輝きを得る。

それがセンスと呼ばれる知の働きで、感覚的に情緒性を持つものも、総合態としてセンスへの導入を志向する。

もちろん、環境論の中にセンスが、新鮮さを蘇らすか、これも一理を得る。そればかりではない。一つ一つのステップがエネルギーを持って、センス的な方向を示唆する。

そこには未知なものを予見する、方向性を志向する。新鮮なものは、古き感覚性を乗り越えて、新しきを創造する。

心理的な働きがプラス志向をうながすか、マイナス思考を示唆するかは、その時の環境による。

美的センスは前述したように、人が関係するすべてに共通するものとして、美を蘇らす要素をもつと言ってよい。

従ってそのエネルギーこそ、美的センスの根拠と言ってもよい。私達が普通美的センスと言う場合は、芸術の

領域で光をなす物と、単純に思いがちな物とでは、定かでない。

私達が物事の微妙な感じを知る心の動き、すなわち感覚が、基礎要因となり、新しい物を生み出す切っ掛けとなる。

その能力が美を生成する過程に、心の内的な感覚を蘇らす、美的な作用が現れる。従って美的センスは、心の悟りの総括と言ってもよい。

2．美と愛と

以上のべたように、センスにも、感性的な知の働きを得る。美は非美と相対するもので、純粋な美も人の意識の中に現れる。

すなわち情的美も、知的美も、内在する。人は、その美を創造する時、美しいと感ずる知性が働く。そして、人は何かを得ようと生きる。

その生き方を、自分で感知するところに、美が美を呼び、輝かしい事にもなる。たゞ意識的な感性にあって、上記のような知性も働く。

美しいと感ずる情趣や情緒もないところは、無盲目的な判断すらあり得ない。たゞ時の流れに流され、意欲的な生活すらない。

美を美として感覚することもなく、無目的な時の流れが、あるばかりだ。人が人として生きる限り、様々な感情も持つであろう。

また自然とのかゝわりにおいて、様々な事象、変化も体験するであろう。その体験の中に生き、好感を呼ぶものもあり得よう。

その好感を少しでも伸長して行くところに、人は美なるものを発見する。それを生活の場に導入し、そこに潤いを感じ、好ましいものとして、喜んで受け入れることが出来る。

そこに愛着を感ずるようにもなる。かゝるところに美の潤い、すなわち、生きていることの楽しさを、しみじみと感じさせるような、精神的な充足感、ゆとりを感ずる。

そんなところに美を愛する感覚も育まれ、美的な知の働きは愛を育む。

愛Eros.ラテン語ではCäritäsは、美の所産といえよう。Cäritäs.は、優美な感性的な経験から育まれる。

人が自然世界及び対象物すべてにわたって、人知れず感動を催す時、美は愛であり、愛は美である。

その相互作用は人の感性的な知によって、育まれる。人の接し方によって優美なもの、上品で奥ゆかしい、美しさを持つ。

その対象に対して、慈しむ感情を持つことは、Eros.でありCäritäs.でもある。情が情を呼び、自分の分身として愛を感ずることに及ぶ。

美的な愛は感性の及ぶ所、感覚、感情によって情緒性を育む。

すなわち、美は愛を含有することによって、翳の部分がより深淵化して、内在的な美を顕現する。

こゝに於いては美は単なる平凡な美ではなく、内的な存在として、愛をもふまえての論理となろう。

かくて美は愛ありての美であり、美的な知の働きも、内面に秘めたものの存在として、より重層的な働きを内に含み持つ。

私達は美的な愛を、散りゆく桜花に見る。なんの惜しげもなく、ただ無心に散りゆく姿は、哀傷さえ感ずる。

たゞ無心に散りゆく姿を見て、情感を内に覚え、人が桜花に変って、その優美な姿に魂、精神を注入する。

情は愛を呼び、愛は美を呼ぶ。自然美、桜花を人格として眺める時、様々な美と愛が生まれる。時としてこのような形で、美を愛でる。

これは人が自然美に感情移入する事によって、捉え得る。先の美的センスと同様に、先入観が支配する。すなわち、美は愛であり、愛は美である。

この境地こそ感性的な意識、すなわち、形而上学的な感覚を招きよせる。

私達が美を意識する時、それが自然であれ、人間であれ、愛でる心の働きを意識した時、すでに芽生える。

愛でる働きこそ、美の原点と言ってよい。感覚的にときめく働きは、介在する美即愛が、表面的に浮上する形となって、人の脳細胞を支配する。

前頭前野の働きによって、直ちに美意識を誘発する。脳の指令が直ちに、人間の感覚分野に影響し、美しいと判断力を伴って自立する。

こゝにも美を引き立てる翳の要素、すなわち、愛が存在することは、忘れ得ないこととして存立する。

3．愛は美を育むか。

先に美即愛と論述したが、逆に愛即美とも言える。物事に対処して愛する感情は、自然と誘発するものではない。

何かのきっかけによって、発生するものの、それは先程も論述したように、心のときめきを感ずる諸作があって、初めて起り得るものである。

それは視、聴、覚などの感覚器の働きによって、外界の刺激に反能することから、生ずるものである。愛する心の働きは、たえず外界の刺激に反能して、それを受け留め、安らぎを与える。

それは愛であり美でもあり得る。たゞ愛の作用は何物かに接しふれることによって、反射神経的に起こり得る動作である。

従って美的な要素要因を起こし得る。物事が脳内神経を、作動するまでに高まって来る。その過程に愛の作用が、もたらされる。

ヘーゲルの弁証法論理に見る正反合の止揚は、より高い段階へと昇華する。すなわち、純粋なものに高められて行く。止揚された愛は、次の美を生む準備を、内に秘めている。

愛即美の論理は、この論法によって愛でる感覚は、より高い美を意識しての、愛でる作用である。ただ悟性的な知にかたよった働き・作用でなく、深くは感性の誘発する感覚が、知覚より優る。

すなわち、感覚がより情緒性を育んで、愛の高まりに至る過程に、周辺の環境が作用する。環境や刺激によって、限りなく愛の感性をときめかす。

こんな過程にも愛は意識すると、しないとにかゝわらず、より美しき美をもとめる。

これは前頭前野の脳細胞が働き、いやおうなしの作用を育む。すなわち愛でる感覚は限りなく膨らみを持ち、美なる範疇（述語の意）にも影響を及ぼす。

愛即美の理念をともなって、形而上的世界へと押し広がっていく。従って愛でる心の顕現は美を深化させ、愛する心が美を育む。

愛は美の奥義にわけ入っていく、限りない連鎖思考を繰りかえす、切っ掛けともなる。心の豊かさは愛であり、美でもある。

心の豊かさを培うには、生活基盤にゆとりある生活が必備で、こゝからすべてが育まれる。

愛と美もまた、同様な発生ルートと解してよい。世の中にこの「愛と美」がなかったら、自然世界また人間世界に対処する、直接経験も間接経験も異なっていたであろう。

かくして人知は美であり愛である。その環境に身を置くことを謳歌すべきである。

4．珠玉の美

前章で美即愛、愛即美について触れて来たが、次に珠玉の美とは何かを、考察して見たい。

凡そ美についての感覚は、古典的な美意識もあれば、現代の前衛的美意識もある。

すなわち、従来の美である所から脱け出し、むしろそれを壊し破格の美を求める。いわゆる非美の本質をとらえる思考の形成も肯定する所に、美本来の底知れないものを見得る。

美の見方、鑑賞の仕方も、それぞれ異なる視点の相違によって生ずる。感情、感性によって、もたらされるものと見てよい。

ことに昨今、美に対する価値意識も異なり、多角的に

見て、美なる物を、必ずしも取り入れない場合もある。

ただ誰が見ても好評を得る物は、それがクラシックな美であれ、アバンギャルドの美であり、共感を呼ぶものに違いない。

共通の美と言えるかどうかは別として、心のときめきを覚える美は、部類に入れてよい。人それぞれの生き方の違い、感受性の違いは、知の働きの面にも当然と思う。

たゞ価値意識を誘うには、それなりの心に感動を与えて深く浸透し、これだと思う領域こそ真の美、絶対美と言っても過言ではない。

凡そこの世の中に、絶対なるものは無い、と言われるかも知れない。たとえ相対的なものであっても、限りなく究極な美に近い物、これは美の働きとしてよい。

即ち、珠玉の美の判断もまさに、この領域と言ってよい。美しい玉、粒は、小さくとも、尊ぶべき価値のある物に用いられる。

価値観の多様化も叫ばれて久しいが、純粋なものに連なる美は、それだけの価値をもつ。

美意識もかって以上に高い水準を保つ今、判断力も美なりに高きにあることは勿論だ。珠玉の美もまた同様な状況から、多きに誇るようになって来ている。

かっては価値意識を伴っても、今程巾広いジャンルはなく、ごく限られた部門でしか珠玉の美、即ち心を揺さぶるような作品はなかった。

時は移り世は変化しようとも、人の心を打ち感動を揺さぶる名作は、珠玉の美に入れてよい。

感動は感動を呼び、情的環境が作品に乗り移ると言うか、一種の霊感とも言える状況を顕現させる。精神面の働きは、まさに芸術の奥義と言っても過言ではない。

芸術美の粋と言われる至芸の美を生みだす基盤は、日頃の研磨をおいて、他にあり得ない。

匠（たくみ）の技と言われるものも、それに心粋して行く所を知らず、意自（おのず）から現れる領域といってよい。

珠玉の美作など、そうたやすいものではない。命をかけての名作と言われるのも、そのことであろう。輝ける技は心酔計り難く、一日千秋の思いである。

芸術の至芸の美は、まさにその事に尽きると言ってもよい。私をむなしうして、陰翳を見る。見えるものは心眼、これこそが至芸の美であり、それを支える。

それは前述の愛の軌跡と言ってよい。言うは安く行うは難し。至芸の極これあって、何時の日か光を見る。

「至芸万般、極限に至るを知らず。今日的至芸は何ぞ。曰く計り難し」

人は至芸に至り尽くことを夢みて、日々研磨するが、その「前述は道遠く思いを雁山の夕べの雲に馳せる」の心境である。玉磨かざれば器をなさず、である。

玉は小さな立体で美しく高貴で、装飾品となるものである。大部分は鉱物質だが、真珠のような動物質、琥珀

のように植物質の物もある。研磨することによって光沢を発する。

「金剛石も磨かずば、玉も光りも添わざらむ。人も磨かば後にこそ、誠の徳は現るれ」

昭憲皇太后の御歌である。磨くと言うことは、切磋琢磨の故事にもあるごとく、すべてに共通するものとして、研磨の必要性を感ずる。

それが珠玉であって見れば、なおさらのこと、不断の錬磨こそ、至芸を生み出す物として、対処すべきと思う。

凡そ芸能万般について、この作品こそと思われるものを分析して見ると、そこに時空を越えた人間技を、神々しく感ずるのである。

俗人を越えた聖なるものを宿すとも言える。その過程での錬磨は、精進潔斎して精魂を打込む。

例えば天下の名刀を鍛え上げるに当っては、百戦錬磨の精進があってこそ、至芸の名刀を生むことが出来る。

刀鍛冶の精魂を尽くしての芸術品は、一代で一振製作出来るか、否かの名刀で、これは天下無双の名刀と言ってよい。刀鍛冶が全魂を注入しての作品、まさに至芸の作と言ってよい。

即ち世に珠玉の美刀とは、これをおいて他にないと見てよい。昔から銘入りの名刀は、これを満すと解してよい。

名刀に例示したが、珠玉の美はその例にもれず、他の芸道に於いても言えることである。はげしい努力錬磨あってこそ、成果たり得るのである。

文筆に於いても一文に向け、不用な筆の削り込み、とぎすまされた文章は、名刀を生む技と同様である。

そこには、掛けがえのない存在として、栄えある作品を後世に連ね、名文と共に幾多の作品の頂点に立つ。私達の心に響く名品として残る。

掛けがえのない存在となる輝ける光の部は、その内に秘める翳の部があっての効果であり、余分な文は削り去り、骨格だけを、清粋なものとして残すのである。

すなわち削り去りしものを翳の部とし、残り得た光の部分（清粋）こそ、至芸の極である。

5.「月日は百代の過客」

芭蕉「奥の細道」の冒頭の文」引用した。実は中国の古典籍「古文真宝後集」に李白の「春夜宴桃李園の序」に「夫レ天地ハ万物ノ逆旅光陰ハ百代ノ過客ナリ、而シテ浮世ハ夢ノゴトシ、歓ヲ為スコト幾何ゾ」による。

月日は永遠にわたる旅人であるの意で、万物の逆旅と百代の過客と相対する。

時と永遠は住家と旅人を抱擁し、親愛の情を現す。

すなわち永遠の時の中にさすらう旅人の感慨、これは言葉の綾だけでなく、美学の一端を担う物と解してよい。

芭蕉が俳文、奥の細道の冒頭になぜ、この李白の詩文を引用したのか。みちのくの旅は未知の旅であり、旅先で屍を晒すことになるかも知れない。

時あたかも桃李ノ園に侍るの季を、一にすることもあって、有無を言わせない。

この詩文を引用し、自分もまた、この心境に身を置く者として、冒頭にかゝげたのは必定のことと思う。

この冒頭で芭蕉は自分の心境を李白にかよわせ、時と永遠の中に、自分の置かれた位置付けを、俳文に託したのであろう。

俳諧の境地に新境地を切り開こうとする、芭蕉の劃期的手法であったと思う。

旅立ちによせる心境を名文に、自分もまた旅を通して、わび・さびの境地を自意識の中に、俳諧の理念として捉えている。

わび侘びるの連用形の名詞用法で、さび寂びるの連用形の名詞用法として用いている。俳諧だけではないが、古びたものに感じられる落ち着いた趣きは、芭蕉の美的理念とされた。

因にわびの理念から、日本の中世及び近世の風土にかけ、和歌・連歌、俳諧、茶道に使用された、わびしい趣きを感知した。

即ち物事に不自由で思いわずらう姿が、生活・芸術面についても否定的なもので、中世の和歌・連歌に草庵のわび住いが象徴された。

貧窮孤独の中に諦観、達観する気持で、俗世を超越した所に、風雅の精神を生みだす風情を導入した。

西行の山家集に、

「わび人の涙に似たる桜かな風身にしめば、まずこぼれつゝ」

これを見てもわび住いの中に、また旅に歌境を切り開いて行く姿を、伺い知ることが出来る。

茶道の面では実践体験を通して、利休によって侘茶を理念として、素朴簡素の中に深い至高の美を感ずる、象徴的なものへ深化させていった。

近世になって俳諧の世界に、西行同様に身をわぶ句を投げかけている。俳諧一葉集に、

「月をわび、身をわび、拙(つたな)きをわびて、」云々とある。後に「さび」と共に閑寂、枯淡の美の理念を生むに至った。

寂もまた閑寂な中に深い味をもつ美的理念の一つで、古くは平安末の藤原俊成が、歌合の判詞にこの語を用い、歌姿や詞を評した。

室町には連歌師心敬は、歌道と伝道を統合深化させ、修行に生かし文芸の最高の理念として、「寂」を考えた。

茶道では利休によって寂茶の精神を、近世に至って芭蕉によって俳諧に導入し、俳諧の美の理念として確立させた。

去来抄に「さびは句の色なりに云々」と、「さび」は表面的な閑寂でなく、作者の心が作品の上に色調となって現れるものである。

人生の内面的な心情を、より本質的に感じとることの出来る境地こそ、俳諧の理念である。時と永遠の時空と旅人の交錯する所に、この境地も顕現される。

その意味で冒頭の論理は、以後の旅に、明けの旅、暮れの旅を通して、この理念に磨きが掛けられたことを、付言しておく。

冒頭に全神経を注ぎ、旅立の決意をあらためて感じさせる芭蕉にとっては、美学の一端にふれる為、引用したと思われる。

芭蕉自身は薫風俳諧の弟子に対して、句に漢詩等、ふまえていないと言っているが、やはり俳諧理念にもかゝげたように、精神的志向は漢詩の心に重みを持たせている。

すなわち、内面的な心情において、他と異なるものを持つ。外面的、表現面、重視の句を対比した時に、明らかな相違をもつ事を知る。それは句ならずとも俳文に於ても、明らかである。

芭蕉をしてみちのくの旅に駆り立てたものは、先人西行法師を師表とすることも、あったであろう。

旅を通して自分の心を磨こうとする心情は後人にも理解出来る。そんな意味からも、芭蕉が冒頭に李白の詩歌を掲げたことは、美学を象徴するものとして、さすが芭蕉と思わせる。

俳文中、奥州白河の関を越え心にやすらぎを覚える。これは古来からみちのくの旅に憧れた歌人墨客も、この白河の関を越すか、越せなかったかを、道中記に記している。

当時は勿論徒歩であったから、難渋は如何ばかりか。足の弱い修行旅人達が、力盡きて目的を達せなかったのも、多きに上ったことであろう。

それは芭蕉にとっても同じことで、如何に健脚とはいえ、旅先で屍をさらす不安は、つきまとったであろう。行く先々で視野に入るものも、生きるすべを誘ってくれるよすがであった。

たゞ馬や籠なども、旅先での心を慰してくれる乗物であったに違いない。

紙子一衣に身を包み、見知らぬ旅先での恢恢、自然美と共に旅程を、妨害する風雨にも、心しなければならなかったであろう。

そんな意でみちのくの白河を越え、ほっとしたのが、仙台である。松島の句に「松島や、あゝ松島や松島や」と心安らぐ風情は、松島雄島での一休憩に、身も心も和ませてくれた事だろう。

旅にあける日々にも、こうした心の安らぎは、芭蕉ならずも、旅の客人にとっては、何物にも変え難い存在であったに違いない。

江戸深川を出立してから、多くの感慨が去来して、しばしの旅の憩いであったに違いない。これから前後に思いをはせ、山寺、最上川を下り、やがて象潟に足を踏入れることになる。

その胸中も如何ばかりか。旅の心中はさぞかしと、思いを新たに、出合いの自然美、他の客人に旅の心中を語りあう。

心のふれ合いも、また李白の詩を思い浮べ、旅先での感慨に心を熱くする。

たゞ感動だけの道行ではなく、「わびさびの境地」を通して、思惟・思索に連ねて行く俳人芭蕉の人間性に、その面影を見ることが出来る。

私達はかゝる難渋に満ちた旅を、想像することは出来ない。科学物質文明の恩恵は、かっての先駆者の「時と永遠」の美学とは違った味を得る。

今日的な視点に立って、「月日は百代の過客」を思う時、美学の象徴もまた異った感覚を覚える。

たゞ機械文明、テクノロジーに左右する響きは、感性優位なものとして、同じ形而上的な思惟にも悟性に彩られた感覚、感情と、感性とに心情を吐露する。

かっての美学とは自ずと差異を生ずる。今二十一世紀の現在点に立って、李白の詩を引用した芭蕉の面影を追う時、時には情報過多に苦しめられ、そのスピードに圧倒される。

また時には、俳諧の理念でさえ、遠い彼方へ忘却の縁となり得るであろうことをも感ずる。

時と永遠の一偶に介在する私達は、今一度「古典に帰れ」と言う、美意識に情熱を傾けるべき時と思う。

6．旅は美の再生か

芭蕉の旅立ちは、李白の「月日は百代の過客云々」の心情を交すものを秘め、野辺に屍を晒す悲愴感を持っての、出立であった。

先輩歌人、西行法師を初めとして、多くの文人墨客も、また旅を通してより深い境地を求め、漂泊の日々を生活に生きた。

その中に美を求めた人々は、修行僧のみならず、芸道に志すものの定めと解してよい。

美は愛を生み、愛はまた美を希求する。それは美の再生、新生と言ってもよい。

これを実現させたのは、古都鎌倉の建長寺や円覚寺であった。禅の研究は、多くの学者文人墨客を集め、丁度ルネッサンス期にイタリアの都市フローレンスへ、東ローマ帝国の滅亡と共に多くの学者達が集まり、文芸復興をなしたのと、同様な土壌が認められる。

古都京都のみならず、鎌倉五山文学の花も咲きそめに

一役を担ったことは、歴史を繙くまでもない。

古くからこうしたことは、主として学僧を通して行なわれ、禅の研究に一つの美的感覚をそえるに至った。

その指導者は鈴木大拙師を始め文人墨客の思惟があったればこそ、北鎌倉を母体として、美の再生が育まれたと解してよい。

旅は人生と言われるが、毎日の生活から離れて他の土地で、非日常的な生活を送り迎える、これが旅でもある。

またそこでの場に美的発見、再生が保たれても不思議ではない。

美、それは人の憧れである。非日常的な環境の中に生起する現象の中で、美は美を呼びその行為は、時として愛の感覚とも結ばれる。

限りなく人の成長へと、展開して行く。その過程の中で種々の経験が営まれ、美的な発見もその経験に、裏付けられて再生される。

私達は生活経験を通して美の発見、知の働き、再生を繰り返しながら前進する。

人間は誰しも生活経験の中で、より美しく、愛らしさを求め生きている。

たとえ千変万化の日常の中でも、人は常時豊かさを求める。その豊かさを象徴するものは、美であり、愛であるとも言える。

こうして美の再生、新生は、旅の非日常的な中に、顕現される。普段は何も思わず、何も見ないものが、生活経験を異にすることによって、現われ発見される。

旅によって新しい環境を導入するのである。すなわち、経験的な技術を捉り入れ、非日常的な経験を、新鮮な物造りへの転換とする。

私達は旅に出掛けることによって、そのような論理を踏み越えて、感性的な美を経験の中に発見する。それは日常性の脱皮をすることによって、効果的な再生をするのである。

美はより高い段階に到達することによって、次への飛躍化がなされる。すなわち、感性的な美から悟性的美へと、展開されていく。

環境を新たにすれば、そこには新鮮なものを発見する。これは美への挑戦である。まして傍観的な意識でなく、意慾的な意識で環境を変化させて行くことが、新しい美を派生させる。

人は環境の子と言われるが、環境の美化は、旅に明け旅に暮れる日々を通して、未知な環境美も、その行動と共に深まって行く。

従って古人が旅によって自己を磨くのは、環境の構造を築きあげて行くのと同時に、旅は死をも意味したのである。

未知の世界への決心は、如何ばかりかと思う。

漂泊の旅も、それなりに紙子一衣に身をまとい出立すること、別離をなす所など、感泣に涙すら誘う記もある。

これは芭蕉ならずも、誰しも味わうべき所である。出立の悲愴観もまた、かくべつな物と思われる。

それをも押して敢行するは、超人的な世界観に憧れ、居ても立っても居られない心情で、すべてを超越しての気持が支配するからであった。

およそ今日では考えられない、思惟的な世界観であった。目的達成の為にはどんな事でもと、旅立ちした。その思いは偉大なものへの挑戦であったであろう。

この気持にかり立てた彼の心境は、察するに余りある。

漂泊の思い捨て難く、旅先での感懐を記す中で、美の再生を試みていった。俳文の美学と言ってよい。

7．旅は永遠の栖

前述で美の再生に、今また永遠の栖と、旅がそのまゝ栖であり、美であると言っている。

冒頭にも「月日は百代の過客」と李白の詩文を引用し、更に「舟の上に生涯をうかべ馬の口とらえて」、すなわち船頭、馬方は、日々旅にして旅を栖とす。

生涯旅路にある人々を指し、自分もまた同様に、旅を永遠の栖とする者である。そうした意識を持っての旅立ちである。

すなわち、旅と栖を重ね合せ、漂泊の思いを旅に寄せている。無目的な旅をも意味し、無我の境地で出発する。

これは芭蕉の敬慕した古人たち、西行は河内弘用寺に、宗祇は箱根湯本に、李白は涛陽（安徽省）に、杜甫は洞庭湖畔に客死した。

自分もまた、旅の途上で死去するかも知れない。そんな意をも含む、心境であったのかも知れない。

ともかく旅に出て心を洗い、わび、さびを磨こう。とする刹那の気持も去来したかも知れない。いや自分の感情をコントロールすべき術もなかったであろう。

何はさておき衝動にかられ、発作的に行動する心の動きで、あったと見てよい。いずれも、その心情の発露の顕現であったと解してよい。

逆旅など気にとめることなく、たゞひたすら、旅立ちに全神経を集中させた。

従って旅は永遠の栖という気持を、旅先での感慨に賭け、俳文に深さを、わび、さびの理念を深化させることに意を注いだ。

表現力の凝縮や適格性は、感性を通して錬磨され、漢籍にも精通していた。それは細かな描写のバックボーンをなしている。

これは美学であり、繊細な美意識に裏付けられている。芭蕉が芭蕉俳諧を樹立する経緯といってよい。

後の「芳野紀行」渥美半島の保美から元禄三年四月入

庵「卯月の初、いとかりそめに入しやまの、やがて出じとさへ、おもひそみぬ」

固い決意を書きながら、その年の八月の終り頃には山を下っている。

幻住庵記の終りに「かくいへばとて、ひたぶるに閑寂を好み、山野に跡をかくさむとにはあらず」と、また、「嵯峨日記」元禄四年四月十八日、去来の楽柿舎に入る。「独住ほどおもしろきはなし」と言うも淋しさに「うき我をさびしがらせよ、かんこどう」の句によって、独居の淋しさを慰め、「うき我」と世を憂しと観じているが、独居に人恋しさの心情が漲っている。

心中に友人、弟子達の気持を思いやっている。前記したように各作品の端々を通して、繊細な美意識が宿っていることが伺い知れる。

旅にあけ旅に暮れる日々を通して、わび、さびの深まりが察知される。各俳文に心血を捧げる気魂は、蕉風俳諧樹立のモチーフとなった、と言っても過言ではない。

わび、さびの境地が、芭蕉の美の理念として、その表現の中に生き蘇って来るのは、心した漢籍の教養をうちに秘めた、表現性に裏打ちされている。

芭蕉の美学はその作風にも現れている。奥の細道後の幻住庵記は、初稿から成稿まで五年という長い年月を、費やしていずれも死後に弟子達の手によって、世に示された。

また「一つ家に遊女もねたり萩と月」という句もあるように、市振遊女と同宿したこともある。紀行文の花とも、連句でいう恋の座とも、いわれている。

ともあれ、わび、さびを求めての、旅に見る栖の粗末さは勿論の事、野晒しとなって散見されるかも知れない境地に、身をやつした。

芭蕉が行く先々で人情にふれ、歴史を懐古し、旅情の慰を得たのは、これもまた旅の美かと思いを馳せ、心細い心境に鞭うちしも漫ろなる状況か。

時にひ弱になりながらも、この旅にかける情熱が、自分は俳諧に身をいやす心象が先走って、旅を続けえた心境を察するに、余りあることと思う。精神的な思惟にも、美学の一端を垣間見ることが出来る。

8．生活体験即美

旅の体験が即美である風情を、知の働きの一隅に留置きたい。旅先での未知の領域は、すべてのものが新鮮な感覚となって蘇ったことと思う。

曽良の随行日記にも、その事は限りなく鮮明で、ふとした体験が新鮮な情感を誘発し、感性を刺激している。

これは今日私達が、未知の所での印象を、日覚めさすのと同じで、元禄の頃の旅は、死をも惹起しかねない状況でもあった。

幻住庵記によせる心血の注ぎようとしては、超人的なものがあった。

巨匠師としての態度も忘れ、弟子、去来に意見を求め、凡兆の忠告を容れ、更に去来の兄の加筆まで依頼し、数回書き直した後、「猿蓑」の一文が完成した。

そのいきさつを見ても作品によせる、気持を察知することが出来る。

仔細にまたがりすぎた嫌があるが、美的表現性は魂魄をゆさぶり、これぞ芭蕉の心髄が今に蘇ってくる。

美的追求を常に意中に持って、対象を捉え行く先々で、わびの心境に身をやつし、茶を俳諧の友とした質素で落ち着いた趣きに、境涯を切り開いていったことは論をまたない。

たゞ初稿の前に旅の随行者、細道では曽良に旅のメモを取らせ、自からも感慨を懐紙に書き止めていたことは、後に素稿構成に役立ち、遠く異朝の先輩李白や杜甫の詩文の引用に、効を奏したことは言うまでもない。

後世に名文とうたわれし作品を残す、慎重さ表現力に意を注ぐのを拝見しても、推敲に推敲を重ね美学の粋をとの意は、充分伺える。

旅そのものに情熱を燃やした芭蕉も、旅にあって栖は心を癒す意味であったかもしれない。時には紙子一衣に身を包み、野宿もまた覚悟していたことで、止むを得ないことであろう。

耳目に映ずる自然世界もまた旅にして、旅の心境とも言える。

雨後の晴間の感覚、雫滴る紙子一衣、早苗取る田園の風景などのすべてが、心象に映ずるもの皆、これを美と解してよい。

当時といえども、名所・旧跡は、今程発達してないにしても、旅のよすがとする所である。古人の面影を慕って感懐にふけるのも、また美なるか。

みちのくを旅する道は、勿論細道で、農道程度のものであろう。山野に踏入って、行く先々での辛苦、如何ばかりか。

断崖岩をかむ山寺、血気盛りの若者でも急峻そゝり立つ岩壁に、一瞬の静寂を保つ蝉の声に、自然描写が一幅の山水画として蘇ってくる。

旅の美学とはいえ、徒歩にて奥羽山系を横ぎるしんどさは、計りしれない。最上川の小舟の旅、そして、「象潟の影恨むが如し」は、松島と対照しての魂魄止まるゝ所を知らず。たゞ山岳の厳峻を越えての千満寿寺、九十九島。懐旧にしばし旅の疲れを慰す。

神功皇后及び美女西施に思いを馳せる、精神的な余情の世界にしたる。

懐旧を通した体験の美と、旅を通して旅先での忘れ得ぬ妄覚の情趣にひたる思いは、蕉風の俳諧の美的形成といってよい。

旅の体験即美の感覚は、芭蕉に限らず、古人もまた同様の美学にひたったであろう。先覚者の英知は俳人芭蕉についても言える。

生活体験即美、美即体験にねざした紀行の心象が、美的形成へと狩り立てたと、呼んでよい。

時空間の美的な存在は覚醒を覚えさせ、存在が英知を引き出し、支えとなった。そしてまた、次の美的な存在を生む。これは古来からの蓄積の一端かも知れない。

美は美を呼び、また旅の喜怒哀楽もそれにともなって形成されていった、と察知してよい。

はかなさは、はかなさを呼び、強気を呼びもどして蘇る。生活の一端は限りなく続く、美の縮図と言ってよい。とめどなく流れる歳月も、旅の一隅の中に吸収され、その中で美化され、また愛されてくる。

あらゆるものが私に味方し、輝ける一石を投ずることと思う。

旅の辛苦も歓喜に変化し、愛着を感じさえする。それが芸術に生き芸道を磨く布石ともなる。考えれば考える程、その根底は根深い。

また弱音を想像すれば、どこまでも弱音を惹起する。これが人生かも知れない。先々に幸きくあれ、勇猛果敢にいどむ気魄こそ、美を呼ぶ証しとして顕現される。

旅の感慨は胸をつき、そゞろ胸間をうつことすらあるであろう。

それでも旅に鞭撻して行く先々の思いを、猛き物にかえて行くことが、真の旅を愛する者、日々旅を栖とするもののなす業といってよい。

旅を美化する経験は、心中に光を求めて歩むきざしから発生する。先行する気持を押え、はずむ気持に追い打ちをかけて行く。先々での未経験の体験、これが美へのきざはしである。

これによってまた、感情の新鮮さを呼んで敢行へとかりたてゝ行く。

このような繰返しが、生活体験に根ざす美の集積となって、偉大な理念形成の手がかりとなり去来する。

心ならずも、このような経験即美、美即経験（体験）が、蕉風俳諧のきっかけになっていった。

それは曽良の随行日記の端々に、うかがえる。

9．限りない輪廻

旅にあけ、旅に暮れる日々を通して、理念追求をなし来たった。今、仏教的な観点から、俳人芭蕉の輪廻転生について考究してみたい。

当時の文人墨客の教養人は、法師ならずも、仏心を身につけた知者であった。細道を始め、幻住庵記等で知る、芭蕉の生きる姿は、仏哲に心寄せる姿が、顕現している。

芭蕉は自分の旅の姿が、仏教哲学で知る輪廻転生であることを、心に秘めての出発で、旅の途上で野晒となって、目的達成出来得ないで、やむなきに至る場合もあった。

凡そ生きる物すべてに言えることだが、生を繰り返し繰り返して流転する、宿命を担っている。

今現世で盛者として生きても、いずれの日にか必滅する。平家物語では、諸行無常、盛者必衰の理を現している。

今自分はこうして旅路に明け暮れしているが、いつの日にか野晒となって、不帰の宿命に出逢いはないとも限らないのである。

はかない世の定め、ニーチェの永劫回帰説も、東洋的観点からすれば、仏教の輪廻転生という事で表現される。

繰り返し、繰り返し、寂滅為楽を繰り返し、永遠に時を重ねる。そんなのが、今の私達の生であり、旅である。

この輪廻の中で目的に生きるが、永遠に繰り返し消滅することで、自分をその場に住み続けようとする。

時に喜怒哀楽も、世の常として肯定しつゝも、時には逸脱もある。それが人の世の常である。限りない輪廻の中にあって無事を知り、旅を敢行出来る幸をかみしめながら、行く春を惜むの情、禁じ難さを覚える。

旅にあって夕暮れ時の一刻、敬虔な祈りを捧げたく思う心情にかられる。ミレーの晩鐘に見る風情は、芸術美を持つ者、持たざる者をとわず、その心境にひたること

が出来る。

これは人の限りない輪廻転生を思う心情の現われと見てよい。季節の移ろいを見て感じ、人の世の移ろいに感じいる心の推移である。

やがて衰滅するはかなさを知る時、思わず寂滅為楽を感ずるのは、人の常と思う。

奥の細道冒頭に、李白の詩文を感ずるのもまた、この限りない輪廻転生を思う縁と言ってよい。その意味で引用したのであろう。

「月日は百代の過客」仏教哲理を踏まえた一文の行は、永劫回帰説を、踏まえていると言える。

名文として後世に残すにたる一文と引用したのは、漢詩文に精通していた芭蕉の一面を、うかがうことが出来る。

仏教では輪廻する世界に、地獄、餓鬼、畜生、阿修羅、人、天の六道があると説く。仏教的な世界観で、前生に於ける悪行の報いで、人間以外に生まれたとされる動物も、過去の世には人であった生れ変わりかも知れない。

また未来世に私達が、それに生まれかわる私達自身の行為と、その結果である。

総体即ち業カルマ Karma によるとされた。この業は現在世の私達を越えて、延長して考えられたとされている。

従って限りない輪廻転生がもたらすとされる。仏教思

想が一般庶民の信仰対象であったかも知れない。
同じ仏教思潮に因果応報という思想があるが、これによると思われる。
永続する限りない輪廻が旅を栖とする芭蕉にも、人知れず内在していたことは、周知のことである。
野晒となって屍を去るも不憫さこの上なし、せめて薫風の、わび、さびの理念を後世に残したい由、心頭に思いを秘め、旅の、わび、さびの境地と対処したことは、論をまたない。
永遠の時という観点から、限りない輪廻が美の継続を生むに至る。これは一蕉風俳諧のみならんや。あらゆる芸道の美についても、言えること、解してよい。

10. 愛の陰翳

美即愛、愛即美について論述に及んだが、美や愛には陰翳の深さがあることを、立論したい。
凡そ美や愛を育む論を、旅情の厳しさに求めきた。そこには愛の陰翳のもたらす深淵さを垣間見た。
諸芸術の粋は、究極のもつ存在意識を持って、研究者の来訪をまっている、かのようである。
愛の陰翳は奥深くて、実情の知りがたいものに譬えられ、たとえば人生の深淵を臨むに似たり。たとえ、それが前人未踏の地であれ、完遂する意志力があれば、これは可能と断じてよい。
深く分け入りて行く勇猛心は、すべてを貫徹する。それは愛であり、美の究極なところでもあろう。
凡そ物象には陰翳がある。行く先々で辛苦をなめさせられ、意慾を低調にする。心貧弱な状況すら余儀無く強いられる。
しかし人にはその状況すら乗越える、たくましい勇猛心がある。負の論理を背負いながらも、それをプラスに変えて行く忍耐力がある。
たゞ時には人間、この貧弱な存在が、とてつもなく大きな事をしでかすこともある。弱心を翻して未知にいどむ精神こそが、陰翳の美学への第一歩と断じてよい。
人には硬軟な作用を持つ、柔軟性が内在する。時にそれをプラス志向で前進させれば、不可能を可能に転換させて行くことも出来る。
この論理で陰翳の奥義をつかむべく計らって行く道を、見い出さなければならない。
人に愛あれば、どんなに硬い岩をも溶かし得る技を構築することが出来る。陰翳には外形的なものと、また内形的な精神状況の介在する、二重分野がある。
物象の陰翳は、外形的に黒白がはっきりと見える。しかしながら表象世界に分け入って、見ていくと、更なる奥深き分野がある。
さゞ波も細部に見ていけば、光る分野と、陰宿る分野を見ることが出来る。これはごく細部にまたがっても言える。
これが大波になれば、鮮明にとらえることが可能で、物に濃淡ありや。その表現性を見るに陰翳性が、にじみ出る定かな分野がある。
やみの中にも、定かなる部分があるか。このように色彩の繊細な分野にも、何種類もの度数をもった陰翳がある。
今これを内形的に、精神分野に分け入って行くと、色の識別に似て、相似点・共通点のある二つ以上のものについて、動かし難い特徴に着目する。
個体、種類の別や、特定の性質の有無などを見分ける性状は、千変万化する精神的な内部作用にも陰翳がある。
濃い性状の印象もあれば、淡い印象のものも知の働きをする。相対的な陰翳関係もある。
医学分野で人間内部の細胞を正常細胞と、ガン細胞を見分ける、ＭＲＩの磁気による断層撮影で、どこまでが正常で、どこからが、どの程度に浸潤しているか。
陰翳の部分を取り出して療法に当るか、こゝにも科学の進展、メカニズムの驚異さを知ることが出来る。
今まで形而上分野で心理学的な実験を通して、その結果から陰翳の状況を知る程度でも、かなりの成果を得た。すなわち、人間内部の状況まで見てきた。
性質、情緒的な判断まで、実験心理分野から判断することが、可能である。またＭＲＩは勿論のこと、内視鏡検査、エコー検査までモニターを通して見る。
写真の映像を生かし治療が出来ることは、未知の分野に分け入っていく、人間英知の底知れない、科学技術の進化と見てよい。
愛の陰翳、こゝにも愛の美学を創見し得る。もともと人間本来の暖かな心情で、個人の立場や利害にとらわれず、広く身辺のものすべての存在価値を認め、最大限に尊重して行きたいと願う、精神的な気持でもある。
私達の身辺について見れば、親子の愛、即ち子が親を慕い、親が子を自己の分身として慈しむ自然の気持である。
また動植物への愛も、生存する物に捧げようとする行為も、また自然への愛もいずれも、対象世界に対する環境愛護の心構えである。
種々の相対的な世界によせ、愛する心情もかけがえの無いものと思って大切にする。
価値意識その心情にも、陰翳の美学が介在する。今まで見えなかった陰翳の浸潤が、映像となって翳の部分も鮮明に、治療に生かされることになった。
と同様に愛の美学の分野においても、その陰翳の程度を知る機器として、脳内細胞にどの程度反映されるのであろうか。
コンピューター作動によって、全面的とは言い難いが、

ある程度は捉えられるまでに、進化している。
人間代行をするロボットの働きなど、劃期的な様子も窺い知ることが出来る。
心的な内部の諸動作は、同時に外的な表象に現われ、理性の判断によって物象に対処する。
人間構造のメカニズムが、こうして対人及び自然に反映される。
そのシステムは動物の中でも、高度に発達した人間の英知によって、解明されて来たもので、高度情報社会を形成している。
人類の未発達の段階では、こうした脳細胞も未発達であったに違いない。これが進化の過程を繰返すうちに、現代人特有の情緒も得ることになったのである。
その過程には多くの挫折感も、折りなされたこと、思う。その逆境にもめげずに、進展発展化したのが、人類の今日の状況であろう。
パスカルのパンセに、人は一本の葦のように弱い者であるが、「考える葦である」とある。
思惟は私達の今を作っている。思えば偉大な人々の積み上げは、尊い経験的な思考である。人が人の心を知る。勿論、視覚を通して外部印象から内面的な精神状況まで察知する。その能力は持っても、科学的な立証を経ないにしても、外的な表象から内的な表象を推察する。
判断力は経験的な思考からもなされてきた。現在、科学する心を通して、先端テクニカル分野から立証的なデーターを、得ることが出来るようになったことは、驚異の存在である。
また光通信や胃カメラの領域で使用される、光ファイバーの太さ、〇・一ミリ程のガラス繊維によって、内部を光が通る全反射が、繰り返し行われる信号である。
光通信はほとんど減衰(げんすい)せずに、遠くまで伝わるように工夫されている。従来の銅線ケーブルより細く軽い上、約千倍の電送能力を持つ。
かゝる超能力の技術を医学領域に、即ち、人間内部の胃、腸、肺の細部の治療、例へば、胃カメラにも適用される。
今まで光の当らなかった翳の中にまで、入って行く事が可能になった。
表面に見えない翳の部のポリープ摘出手術に、効果的に導入され、この領域に画期的な治療が、ほどこされるようになった。
初期治療のファイバースコープ器械も改良され、管も細くしなやかになり、治療効果にも大きな成果をもたらしている。
かくの如く医療技術の面で従来考えられなかった事を、いとも簡単に切除する段階に入って、研究が大幅に進展している。
切除と言えば、レーザー光線のエネルギーを利用して、

切除手術を行う器具で、虫歯の治療や癌等の小さい患部を焼いたり、破壊したりするのに、利用し効果を上げている。
医療的な分野では、かなり他方面の治療に供されている。今日では、外科的手術には欠くことの出来ない、応用領域となっている。
愛の陰翳に分け入った人間内部の臓器にメスを入れること自体が、陰翳の解明に大きく貢献し、患者への愛であり、美の根源である。
なお朝日新聞、(生活欄「患者を生きる」数々の記録)に、まさに放射線治療にあって、陰翳の部分へ愛の治療を拝見し、涙した。
このように科学技術の進歩は、美(愛)の根源までその陰翳の美学を追い、人類の為に日夜研鑽している医師達に、敬意を現すと同時に他分野での貢献推進に、期待が寄せられ高まっている。
その光ファイバーも、今や「光透過ブロック」としてH18・3に東京で建材展が催され、一躍脚光を浴びるに至った。
即ち、コンクリートブロックなのに、障子のように光を通す建材を、さいたま市住田光学ガラスで開発され、秋には販売されそうだ。
映像を見ているスクリーンの役を、(ブロック塀の向こうから光がさし、行き交う人や木立の影が映る)その上時間によって、塀の印象まで変化する。
画期的なものでブロックに背面から、フラッシュを当ててアップで撮影すると、小さな光る「粒」が無数に見える、いわゆる光ファイバーの断面である。
すなわち、ブロックの厚さ方向に多数の光ファイバーを埋め込み、その断面積の合計はブロック全体の3%程だが、これが光の通路の役目をなしている。
そしてファイバー効果で、強度も、コンクリートブロックの2倍もアップしたことが、測定されている。
単なる通信技術の信号に止まらず、光ファイバーがブロック壁をスクリーン映像化したように、その影を映すまでに進展していることは、人類の英知を如実に現している。
その貢献度はメカニズムの勝利と言ってよい。

つゞく

口紅（その八）

池莉　原作
山本勉　訳

〈登場人物〉
（趙家の人々）
趙耀根（小説の主人公、江暁歌と結婚）
趙耀虎（趙耀根の弟）
趙耀珍（趙耀根の妹）
趙耀根の母親
（江家の人々）
江暁歌（小説の主人公、趙耀根と結婚）
江暁鴎（江暁歌の弟）
江暁暢（江暁歌の妹）
沈鳳宜（江暁歌の母親）
江暁歌の父親
田曼（江暁歌の実母）
（趙耀根と江暁歌の友人）
寧岸
（趙耀根の会社の同僚）
張喜
（趙耀根の会社の上司）
李主任
張書記
（江暁歌の会社の同僚）
羅桂香
（趙耀根と江暁歌の娘）
嘉児
（寧岸が配属された紅光工場の従業員）
呉文彗（後に寧岸と結婚）
（江暁鴎の恋人）
黎美娟
（趙耀根が深圳で出会った友人）
宗漢（後に江暁歌が作った会社の専務となる）

第十三章　凱旋

（一）

江暁歌は、食卓に小さな一杯の汽水肉（注18）を置いた。

（注18は、湖北省の料理で、肉や魚をしょう油等の調味料を使わずに、蒸籠で蒸して食べる。味もさっぱりしていて美味しく、その上栄養も豊富で消化もよい。胃腸の弱い人、子供または胃腸の丈夫でないお年寄りも問わず食することができる。）

これは、嘉児のために用意したもので、娘嘉児が、汽水肉を食べ、江暁歌は、焼餅（注19）をかじり、白湯を飲んでいた。

（注19は、こねて発酵させた小麦粉に、油・塩などを適宜練り込み、円形あるいは四角の平たい形にして、表面にごまを振りかけて焼きあげ作った食品。北方で主食あるいは間食として用いられる。）

江暁歌は、ひたすらお金を貯めていた。彼女は、必ず、一千元のお金を寧岸と呉文彗に返さなければならないと思った。江暁歌は、寧岸達も貧しい暮らしをしていることを知っていた。なぜなら、お金がなかったので、直ぐに結婚することができないからだ。江暁歌はこっそり銀行に口座を開き、毎月18元ずつ預け入れた。彼女は、八百屋で値切って一番安い野菜を求め、嘉児の栄養を保証する魚、肉、卵を除いて、彼女自身はできるだけ魚や肉を食べないようにした。彼女は、勤務する工場で販売している生産者価格の服を着るだけで、日用品の消費も最低限に押さえた。既に冷蔵庫やカラーテレビを購入している家庭もあったが、彼女には、15ワットの電球の照明があるだけだった。江暁歌は明らかにやつれていた。しかし、これとは逆に、嘉児はすくすくと成長していた。丈夫で顔色は紅くつやつやとし、器量も美しく、利発さと可愛らしさは増していく一方だった。

嘉児が、

「お母さん、焼餅って美味しい？」

と聞いてきた。

江暁歌はうなづいた。

「だから、お母さんは焼餅を食べているんだね。私も焼餅を食べたいな」

江暁歌は焼餅を二つに割って、嘉児に与えた。嘉児は味わってかじり始めた。

その時羅桂香が、ベーコンと干物を持ってやってきた。

嘉児は、羅桂香に気に入られようとして、

「羅おばちゃん、今日はお土産ありがとう」

と言った。羅桂香は、

「お利口さんね。私は、まだ、あなたにあげるって言ってないわ。それなのに、もう有り難うと言っているんだから」

と微笑んだ。江暁歌は、

「どうしてこんなに沢山の食べ物を届けてくれたの」

とたずねた。羅桂香は、

「これのどこが多いって言うの？多くなんかないわ。

これは姑が作ったのよ。姑は喜んで、あなた方に食べさせるように言っていたわ。嘉児のお父さんはこの春節に帰ってこないんでしょう。それなのに、少しの食糧もなくってどうするって言うのよ。お正月を迎えるのよ」

と答えた。

江暁歌は御礼を言うより他なかった。彼女は貧乏になって、その品性や考え方までも卑しくなってしまった。

しかし、必ず一生懸命勉強し、仕事をして、もし将来、苦境から脱する日が来たならば、友人達に借金を返し、一つ一つの友人達の好意に対して、恩返ししようと心に決めた。

人はついていないと、往々にして災いは重なり、雨漏りがしているのに、更に連日雨に遭うようなものだった。

(二)

江暁歌が予想できなかったことは、勤務していた服飾工場がまもなく倒産しそうだと言うことだった。平穏無事だった工場が、突然凋落の様相を呈し始めた。春節を過ぎたばかりの頃、工場は給料を支払うことが出来ないことを通達した。工場の共産党幹部は、労働者の給料の60%を製品に換算して放出し、生産者価格に準じて、更に30%値引きし、最大の優遇をしたつもりだった。江暁歌は、同僚達と憤懣やるかたなく不平をこぼしたが、この残酷な現実を受け入れざるを得なかった。彼らはめいめい金に換算して、値引きしてもらった服を受け取り、仕方なく街に出かけて、露店を開くしかなかった。

江暁歌と羅桂香は、一緒に露店を開いた。彼女達は、積み重ねた衣類を一枚一枚地面にきちんと並べた。そして、傍らに座って、頭を低くして本を読んだ。彼女の目の前を、沢山の人々が慌ただしく行き交ったが、彼女の店の前で立ち止まる人はいなかった。

彼女達は勇気がなくて、ずっと頭を上げることができず、本を置いただけで、人が声をかけるのを待っていた。

「誰が、彼女達にここで店を広げさせたんだ」

という怒鳴り声が聞こえてきた。

江暁歌は恐る恐る顔を上げ、制服を着た男が、悪霊のように彼女達を睨みつけるのを見ていた。江暁歌はとてもきまりが悪くて、改めて頭を下げた。彼女達が、声も出さないうちに、男は彼女達の店をひっくり返した。

羅桂香は怒りを覚えて飛びかかっていき、ぐいと男の袖をひっぱり、

「話があるなら、しっかり言ったら。なぜ私達の店を壊したのよ」

と大声でなじった。

男は手を振りきると、故意に羅桂香の顔を殴った。羅桂香は顔を押さえて、甲高い叫び声を上げた。

ある種の防衛本能が江暁歌の軟弱な身体の中にも満ち溢れた。彼女も突進していき、その男とつかみ合いとなり、

「あなた、なぜ、人を殴るのよ」

と問いただした。

男は、江暁歌を鷲づかみしてよろめき倒した。

「殴るのはまだましなほうさ。もうここに来ないでくれ」

江暁歌と羅桂香はポカンとして、男が去っていくのを見ていた。悲しみと憤りが同時にやって来た。

彼女達は、路上で露店を出して物を売ってはいけないことぐらいわかっていた。しかし、物を売らなければ、何に頼って生活していけばいいのだろうか。

本当に露店を出したいなら、うまくやらなければいけないと、言ってくれる人がいた。

そこで、江暁歌と羅桂香は、露天商達の一味に加わった。監視員がやってくると、仲間の露天商達とさっと路地裏に隠れ、監視員が行ってしまうと、また出てきて露店を並べた。

しかし、このような生活は単純で、残酷でもあった。昨日までは、技術員・品質検査員で、仕事着に身を包んで得意満面で出勤し、会議を開き、文献を読みあさり、毎週三回放送大学に行って勉強していた。それが今は街頭に出て、最も下賤で汚く、尊厳のない一群となり、ゴミのようにあっちへやられたりこっちへやられたりしていた。

今や江暁歌は、いかなるお金の出所も失ってしまった。しかし、彼女は子供を育てなければならなかった。お金を貯めて、お金を返さなければならなかった。それに、趙耀根のために送金し、趙耀根の母親のために家族を養わなければならなかった。毎月、仕送りを5元に減らしたが、彼女にとっては大金だった。

(お金は、何処から降ってくるのか?)

江暁歌はありったけの知恵をしぼり、売血することを思いついた。

血液バンクの入口には、売血に来る人が沢山集まっている。江暁歌は探りを入れるために、のらりくらりしながら人混みの中に入って行き、並んで待っていた。売血する人の多くは農村出身者だ。

彼らは異様な眼光で、江暁歌をじろりと見た。江暁歌は頭を下げて、必死に地面を見ていた。

ついに、江暁歌の順番が回ってきた。一本の太くでかい注射器の管が、江暁歌の静脈に突き刺さると、すぐさま血液がその中にとめどもなく流れ込んだ。

江暁歌は数枚の紙幣を受け取った。彼女は、このお札を用心深く折りたたんで、懐にしっかりしまった。そして、椅子に座って少し休んでから何とか立ち上がり、ゆっくり血液バンクを出た。

彼女は、血液バンクの入口で、寧岸と呉文彗に出くわ

した。

寧岸と呉文彗は、血液バンクの向かいのマーケットから出てきたばかりで、どうやら、新婚生活を送るための日用品を買っていたようだった。江暁歌は彼らに気づき、無意識のうちに避けようとした。しかし、真正面で出くわしたので、避けようにも避けようがなかった。そこで彼女は、直ぐに平然とした様子を装った。彼女は自己弁護のあまり、空々しいことを言った。

「こんなところであなた達に会うなんて奇遇ね。私は友達に会いに来たのよ。いつ結婚式に招待してくれるの？」

呉文彗は、江暁歌のろうのような黄色い顔をじっと見つめ、涙が溢れ出てきた。江暁歌はもう繕うのをやめて、呉文彗の肩に手を置いた。

寧岸は、

「暁歌、君はこんなまでして、僕達にお金を返しているのか。君って言う人は、どうしてこんなにまでするんだ。身体は何ものにも代え難いんだぞ。僕達の結婚が早くなるか遅くなるかは、お金の問題じゃないんだ」

と怒鳴った。

呉文彗は、強引に江暁歌を近くの食堂まで引っ張っていった。

呉文彗は、大きなどんぶりに入った排骨湯（**注20**）を江暁歌の前に置いた。

（**注20**は、ブツ切りにされたスペアリブ（豚の骨付きばら肉）を良く洗い、沸騰したお湯で湯がいて再度水で洗い、鍋に新しい水を入れ、生姜と一緒に煮て大根などを入れて作るスープ）

呉文彗は江暁歌の傍らで、江暁歌がちゃんと排骨湯を飲んでくれるか見届けていた。江暁歌はスープを飲みながら、ハラハラとどんぶりの中に涙が流れ落ちた。

江暁歌は、

「寧岸、売血したことを絶対に耀根に知らせないでね」

と言った。寧岸は頷いた。

「わかったよ。スープを飲めよ。あまり考え込むなよ」

寧岸と呉文彗は、かつてとても幸せだった江暁歌がこんなに惨めになった姿を見て、何も言い出せなかった。呉文彗の声はかすれていたので、手振り身振りで、江暁歌に排骨湯を飲ませるのが精一杯だった。

（二）

通信大学の一次試験の最中、江暁歌は試験会場で遂に倒れてしまった。

彼女がいつ倒れたのか、気に留める人もいなかった。試験の答案を提出するベルが鳴るのを待って、学生達は、次々に立ち上がって出て行った。みんなは、江暁歌がぴくりともせず、机に被さっているのにやっと気がつ

いた。

クラスメート達は、状況が尋常でないことに気づき、うろたえて叫んだ。

折良く、江暁歌の父親は家で休暇を取っていた。江暁歌が病院に搬送されて、応急手当をしているのを聞くと、あわてて病院に駆けつけた。

江暁歌は意識を取り戻していて、ベッドに起き上がっていたが、憔悴した顔は白い掛け布団よりも、更に蒼白かった。

父親は、江暁歌の疲れ切ったかすかな笑みを見て、ぐいと彼女の痩せこけた手を掴んで、喉を詰まらせすすり泣いた。

江暁歌は、

「大丈夫ってお医者さんが言ったわ」

と父親を慰めた。

「こんな様子で何が大丈夫なことあるもんか」

「本当に何でもないわ。砂糖水を飲んだら良くなったわ。私は直ぐに退院の手続きを取るわ」

丁度医者が巡回に来たので、父親は、

「病状はどうでしょうか？」

と訊ねた。

「心配要りませんよ。彼女は若いので回復も早いです。しかし、何度も低血糖の卒倒を起こすと、心臓と大脳の血管が破壊されて将来どうなるかわかりませんよ」

「娘の病状はどうして起きたのでしょうか？」

「このようなやつれ方を見ると、典型的な栄養失調ですね。ヘモグロビンはやっと7グラムで、深刻な貧血です。常日頃から栄養をとって、沢山赤みの肉や動物のレバーなどの食品を取ってください」

父親は黙り込んでしまった。医者が出て行った後で

「普段滅多に会うことができないのに、久しぶりに会ったらお前はこんなだ。お父さんは本当に心配しているよ」

とため息をついて言った。

「大丈夫よ。お医者さんが、私の回復力は、すごいっていったじゃない」

「ごまかすのはやめなさい。お前は深刻な栄養失調なんだよ。結婚した頃は元気だったのに、ここ数年で日に日に痩せていくのがわかるよ。みずみずしさも全くなくなり、げっそり痩せてしまったじゃないか。お前と趙耀根は、結婚すべきでなかったかもしれないな」

「お父さん、私、後悔していないわ」

「そうか、今更後悔しても遅いからな。でも、お前の生活がこんなに苦しくてはいけないよ。耀根と暁鴎は、今どうやって生活しているんだい」

「この数ヶ月、彼らは、うまくいっていると思うわ。手紙はよこさなかったけど、たまに公衆電話をかけてよこしたわ。彼らが出かけて一年以上、まもなく二年にな

ろうとしているのよ。春節にも帰って来ないわ。とっても忙しそうだもの」

「男たるもの、志は天下至る所にあり。この精神は称賛に値するが、同時に、女房、子どもの面倒を見るのは当たり前だよ。それに、彼の母親には常に言い聞かせておく必要がある」

「全てうまくこなしていくのは難しいわ。私は彼を責めないわ。私は彼の実家じゃなくて、外住まいしているのよ。仕事も勉強も自由にできるわ」

「お父さんは、お前の面倒をほとんどみてやれなかった。それにお前のお母さんの面倒もだ。お母さんにお前の境遇を知らせたんだが、お母さんは心のしこりが取れなかったんだ。お母さんは継母だから、どうしても世間体を気にしてしまって、子どもの頃のようには可愛がることができなくなってしまったんだ。このことはお父さんもわかっているんだ」

「お母さんは、全力を尽くしてやってくれたわ。とてもよくやってくれたのよ」

「お前って子は、やせ我慢して、いつもこうなんだから。他人にこれまでどんな要求もしたことがないだろう。でもね、お父さんは他人じゃないんだよ。お前が辛いことがあったら、お父さんに言うんだよ。この前暁鴎に送金したことで、お前のお母さんを厳しく責めたんだ。もしお父さんが家にいたら、お前を困らせるようなことはさせなかったのに。どうした、まだお金に困っているのか？」

「いいえ、困ってなんかいないわ」

父親はまた、

「お前はいつも、私に本当のことを言わないんだから」と言ってため息をついた。

父親は封筒を取り出して、江暁歌の手の中に押し込んだ。

江暁歌は、

「だめ、お父さん、お金に困っていないわ」

とお金を押し返して言った。

「お父さんの言うことを聞いて取っておけ。お前と嘉児の食事に使う以外に使うなよ。お前達親子は、絶対に栄養をしっかり取らなければいけないよ。体調を壊したら全てがだめになってしまうんだよ。わかったかい」

父親の言葉に、江暁歌は深々と頷いた。

(四)

とても、長い日々を耐え忍んできた。

公衆電話の番をしている老人が、呼んでいるのが聞こえた。

「趙家のお母さん、耀根からの電話だよ」

趙家の母親は直ぐに木製の長椅子から跳び起きると、

一目散に小走りで走って行った。そして息子を見ているような気持ちで受話器をぐいと抱え、受話器に向かって叫んだ。

「もしもし、耀根かい、息子かい」

話をしていて、彼女は悲しみのあまり、泣き声も出なかった。

しかし息子と会話を交わすうちに、耀根の母親はにこにこと嬉しそうな顔になっていった。

彼女は、受話器に向かって叫んだ。

「嘉児は元気だよ。聡明で利口になったよ。小さなお口で何でも話すことができるよ。そうだ、私はあの子達を必ず連れ戻すよ。私は何度も迎えに行ったんだけど、暁歌が承知しないんだ。暁歌は、出勤も授業を受けるのもとても便利だし、嘉児に幼稚園で教育を受けさせることができるし、いつでも自分の好きなように料理を作れるし、とか何とかいろんな理由をこじつけては、帰って来ないんだよ。お前も暁歌の怒りやすい性格を知っているだろう。みんなとうち解けられない性分なのさ。わかった、わかった。お前の友達の第一医院の王主任を訪ねるんだね。必ずそうするよ。今週の木曜日の午後行くのかい？王主任は既に二人目の子どもを産ませることができる許可証をもらったのかね？まあよかった。耀根、よし、王先生の名前を憶えたよ」

耀根の母親は、老人を手招きして、日時をメモするように頼んだ。老人は急いで紙にメモした。

母親の様子は10分ばかりの間にがらりと変わった。彼女の声はウキウキして、晴れ晴れしていた。

「このことがうまくいけば、私は暁歌のために何だってするよ。恨み言も言わない。よし絶対に秘密にするよ。その時になったらお前が言うんだ。わかったかい。お前は何時帰ってくるんだい。もうすぐ？　そうか、列車の切符を買うお金を送金しようか？　いつ、飛行機で帰ってくるって？」

彼女は、また、感極まって泣いた。そして、

「私の長男がもうすぐ飛行機に乗って帰って来るんだよ」

と老人に言った。

「飛行機でかい？そりゃあいいね。おめでとう。彼らは金を使うのがへっちゃらなんだね。彼らは一刻を争うのかねえ。時は金なりって言うからね」

彼女はとっても大きな朗報を自分の胸にしまい込み、彼女だけの秘密をひた隠しにして、泣き笑いしながら家に駆けて行った。

趙耀根がまもなく帰って来るのだ。

(五)

寧岸は魚をまな板に載せ、呉文彗に代わって江暁歌に

説明した。
「今日、文彗は誕生パーティーでどうしても来られないので、僕に武昌魚（注21）を届けさせたんだ」
（注21は、武昌名物の淡水魚、かつて毛澤東が食し絶賛したという。）
江暁歌は、
「呉文彗は、私達親子が栄養状態が悪いことを知っていて、いつも心配してくれているわ。でも、私はまだお金があるわ。お父さんがお金を少しくれたの。私は彼女に手料理でもてなしたいけど、彼女は来られないんでしょう。今日は何としても、あなた達にお金を返したいの。借金がない身軽な身体になりたいの。本当よ。お父さんが私にお金をくれたのよ」
と言った。
「わかったよ。君が返したいなら、それを咎めることはできないよ。でも、お金を返してもらうと文彗に叱られちゃうよ」
「やっていることが正しいんだから、呉文彗に叱られないわよ」
「でも、僕は君に何度も言っているけど、このお金は、僕達の結婚とは何ら関係がないんだよ」
「私が間違っていたわ。私はお金を返済することを結婚の費用と結びつけるべきではなかったわね。もう一度訊くけど、お金を返すことと結婚費用とは、何ら関係がないのよね？　いつ結婚するの？」
「もうすぐだよ」
「わかったわ。文彗が花嫁衣装を着ると、とってもきれいでしょうね。私、彼女の花嫁姿を見たいわ。待ち遠しいわ」
江暁歌はニコニコ笑いながらきびきびと肉を切り、魚をさばいた。
寧岸は感慨無量で江暁歌を見ていた。
「君がこんなに料理の腕前が上がったなんて、びっくりしたよ。昔は魚に触れる勇気もなかったのに」
「生活に感謝よ。生活していくことは、人生の最高の教えの場だわ」
江暁歌は、廊下で、てきぱきと料理を炒め、上がる蒸気は、いつもは蝋のように黄色い顔を、血色のいいつやつやした色にいぶしあげた。
丁度この時、趙家の母親と趙耀珍が突然現れた。彼女達は、江暁歌と寧岸が肩寄せ合って、せわしそうに食事を作っている姿を見て、表情がとても険しくなった。趙耀珍は慌てて顔を背けた。
江暁歌は、別に、何の言い訳もする必要はなかった。
（自分自身が、心にやましいことがなければ、それで良いんだ）
江暁歌は、
「嘉児、おばあちゃんとおばさんが来たわよ」

と余裕を持って逆に呼びかけた。
嘉児はおばさんの懐に飛び込んでいった。
趙家の母親は、
「折良く寧岸もいたんだね。耀珍に二度手間させなくて良かったよ。お前に良い知らせがあるのよ。耀根がもうすぐ帰ってくるよ」
と言った。
知らせは良い知らせだったが、趙耀根は、なぜ、妻に知らせないで、先に姑に知らせたのか。江暁歌は考えあぐんだ。しかし直ぐに、彼女は平静さを取り戻した。
「彼は、いつ帰って来るのかしら？」
趙家の母親は、
「嘉児、少ししたらおばあちゃんと家に帰ろう」
と嘉児の頭をなぜながら言った。
「いいけど、わたし、お母さんと一緒じゃなきゃ嫌だ」
「勿論、お母さんは帰って来なければいけないね。おばあちゃん達は、嘉児のお父さんが家に帰って来るのを待とうね」
話終えると、趙家の母親は江暁歌の顔色を窺った。江暁歌は俯いて口をきかなかったので、母親は寧岸に助けを求めるよりほかなかった。
「寧岸、あんたは暁歌を宥めておくれ。彼女は、あんたの言うことなら聞くんだから」
「暁歌、耀根がまもなく帰ってくるんだ。僕は、君はやはり、趙家に戻った方が良いと思うんだ」
江暁歌は寧岸をちらっと見たが、依然として黙っていた。
趙家の母親は、この時、もう既に息子の趙耀根と手はずを決めており、目的を達成させるために、母親は下手にでることも厭わなかった。
趙家の母親は、
「あんたの心がおもしろくないことはわかっているよ。でもね、目上の人の言うことは聞くものだよ。今、物事は、好転し出したんだ。耀根がまもなく帰ってくるんだ。次男の嫁はお産をして、一ヶ月休んで実家に帰っているよ。私はもう既に、耀珍にあんた達のために部屋を掃除させたよ。私も図々しかったよ。全て私が悪かったんだ。あんたに謝るよ。暁歌が喜んで帰って来てくれさえすれば、話もうまくいくんだ」
と言った。寧岸も、
「暁歌、昔は昔、今は今さ。状況は変わったんだ。お母さん自ら君達を迎えに来てくれているんだ。真心もこもっているじゃないか。君がこれ以上、強情張るのはよくないよ」
と言った。
江暁歌はこれ以上、何も言えるすべがなかった。
実際、あれこれ考える必要もなかった。
その時、趙耀根から江暁歌のところへも、電話がか

かってきたのである。
江暁歌は、夫の声を聞いた途端、不快な気持ちは何処かへ吹っ飛んでしまった。趙耀根は、なぜ先ず母親に最初に連絡を取ったのかを、注意深くそして自然に江暁歌に説明した。
趙耀根は、
「家でゴタゴタしたそうじゃないか。僕は、君達親子が外で暮らしていることを知ったので、電話でお袋を手厳しく叱ってやったよ。お袋に謝らせるよ。それに、君達に家に帰って来るように迎えに行かせるから」
と言った。江暁歌は、
「わかったわ。お母さん、来てくれたわよ。昔のことをこれ以上言ってはいけないわ。あなたは深圳に二年間も出かけて、苦労してるわ。早く家に帰って元気になってね」
と喜んで言った。趙耀根は、
「わかった。明日帰るよ。暁鴎もまもなく帰ってくるから」
と嬉しそうに言った。江暁歌は、
「嬉しいわ。あなた変わりはない？」
と言った。
「元気だ。とっても元気だとも。暁鴎は、僕の側にいるんだ。話たがっているよ」
江暁鴎は、

「暁歌姉さん、耀根兄貴は、嬉しくて失神しそうだよ」
と受話器を奪って言った。
江暁歌が受話器を置くと、やっと羅桂香が彼女をじっと見ているのを見た。
羅桂香は、飛んでいって抱き合った。
「暁歌、やっと苦労が実って、これから楽しい生活が始まるのね」
とうとう、待ちに待った素晴らしい日がやって来たのだ。江暁歌は興奮していた。

(十八)

深圳発武漢行きの乗客が、空港の出口からどっと出てきた。みんな、一目で趙耀根と江暁鴎を見つけた。この二人は、乗客の一群の中で一際目立ち、斬新な洋服と革靴を履き、スーツケースを持ち、肌は黒ずみ、髪の毛は反射して光り、金満家そのものだった。彼らはみんなに手を挙げて、凱旋の興奮と喜びに満ち溢れていた。
趙耀珍は喜びのあまり、歓喜の声を上げ、続けてみんなで叫んだ。趙耀虎は羨ましそうな顔をした。江暁歌は自分の目を信じることができなかった。この人が一年以上の長い間別れて暮らしてきた夫なんだ。
趙耀根の姿は大きく威厳もあったので、自分の夫だとはわからないほどだった。それに、江暁鴎も自分の弟だとは見分けがつかなかった。
趙耀珍は嘉児の背中を押して、お父さんの所へ駆けて行かせたが、嘉児は疑いの目で、歩み寄って来る趙耀根を見ていた。
趙耀根が、ぐいと彼の美しい娘を抱きかかえて、
「嘉児だね」
と言った。
江暁鴎は、
「おじさんと呼んでごらん。ほら、嘉児はおじさんに似てきたね」
と嘉児の顔をぐいっとつねって言った。
若い女性が、江暁鴎に口をゆがめて言った。
「厚かましいわ」
この時、みんなはやっと、彼らの周りにもう一人、若いモダンな女が立っているのに気づいた。女はとても時代にマッチした感じだった。シャツがジーパンの中にキュッと入っていて、幅広のベルト、広くて大きなサングラスをかけていた。サングラスにはシールが貼ってあった。
江暁鴎が正式にみんなに紹介した。
「こちらが、ガールフレンドの黎美娟だ」
またみんな驚き喜んだ。
寧岸もみんなに正式に呉文彗を紹介した。呉文彗の美しさに、趙耀根と江暁鴎は驚嘆した。趙耀根は寧岸の肩を叩いて言った。
「とっくに暁歌から聞いていたよ。でも、こんなに美しいとは思わなかったよ。まるで、太陽のように僕の目を照らしているよ。出会いたくても出会えないな」
寧岸は少し硬くなって笑っていたが、心中どんなに嬉しくて心地よかったか言い出せなかった。
みんな嬉しくなって、数台のタクシーに乗り込んだ。車の隊列が家に向かって走り去って行った。
数台の車は路地の入口で止まった。
趙耀根は、満面の笑みをたたえて車を出ると、夢に見た懐かしの我が家を眺めた。路地は沸き返った。どの家からも、南方から金儲けして帰郷した旅人を見に来た。
趙耀虎は爆竹を鳴らして出迎えた。趙耀珍は隣近所にキャンディーを配って歩いた。
趙家の母親は、身なりを一新して、愛想を崩し、得意満面で幸せそうに人々の祝福を受けた。ひっきりなしに腰を低くして、ペコペコした。
趙耀根は駆けて行って、
「お母さん」
と叫んだ。
親子は、直ぐに抱き合った。
趙耀根は、彼が持ち帰った大小様々の包みを全て開けて、衣類やら食料品やら飾り物やら、玩具などを取り出し、素晴らしい逸品揃いを部屋一面に並べた。

彼が、一つ取り出す毎に、みんな
「おー」
と驚嘆の声を上げた。
彼は、益々得意そうな顔を隠さなかった。彼は気前よくプレゼントを家族に分けると、皆大喜びした。
これを見ていた母親は、
「耀根、お前いったいどのくらい儲けたんだい？」
と堪えきれなくなって訊ねた。趙耀根は、
「ほんの少し、儲けただけだよ」
と笑って答えた。母親は、
「少しの財産を作るのだって大変なんだよ。生活していくのに金や物を節約して大事に使わなくちゃいけないよ」
と慈しんで言った。
「お袋、安心してくれ。あんたの息子が稼いだ金は、金を使い果たして生活しても、お袋の数生涯分はゆうにあるよ」
母親はこれを聞くと、顎の外れるほど笑い転げた。
趙耀根は、
「ここに二千元ある。どのレストランがいいか考えてくれ。僕は思う存分、二日間、客を招待してふるまいたいんだ」
と母親に札束を渡して言った。
「二千元。お神様、お前の3年分の給料だよ。こんなに沢山のお金を使って、誰にご馳走するのかい」
「僕の友人を招待するのさ。僕が深圳に行っているときに、暁歌も含めて、家族を助けてくれた仲間を招待したいんだ。それに、僕の元の職場の張書記と李主任も招待したいんだ。今日、僕があるのは、彼らのお陰だからね」
母親は一時ポカンとした。そして怒って歯ぎしりして、
「わかったよ。このお客さん達は、存分にもてなさないとね」
と言った。
江暁歌は、華やかで美しいパジャマを着ていた。趙耀根は、彼女が明かりの下を行ったり来たりしていたので、彼女のパジャマ姿を思いっきり褒めた。
「こんな高価なパジャマ、私には似合わないわ」
「着ていれば慣れてくるさ。僕が一番大変なときに、君が送金してくれた一千元のお金を受け取った。お金を儲けたら、永遠に君と僕とが力を合わせて、困難を乗り越えて行くことを願ってプレゼントをしたいと、その時思ったんだ。このパジャマは、丁度一千元だよ」
「一着、一千元？こんな高いパジャマを買って、あなた、何になるの」
「高くない、高くないってば。女性のパジャマは世界で一番大切なんだ。なぜなら最も肝心なときに使うからな」

「何馬鹿なこと言っているのよ」
「僕に教えてくれ、あの一千元はどこから、工面したんだ」
と趙耀根は、真面目になって言った。
「友達とクラスメートに頼んで借りたのよ。みんなが集めたものよ。今はもう既に、借りたお金を全て返したわ」
「君が借りてきたお金は、返済したかい？君がこんなにやつれているのも無理はないね。きっと食費を切りつめ、物を節約して貯めたんだ。暁歌、辛い目にあったんだね。僕はどうして君に報いたらいいのだろうか？」
「夫婦なんだから当然だわ」
趙耀根は、札束を取り出した。およそ、五千元から六千元あった。
「君が手元において使ってくれ、僕達を助けてくれた友人や同僚を招待して何かご馳走をしてやってほしい。それに、思う存分店をぶらついて、本や服や靴、君の好きな物を買ってくれ」
「私にこんなに沢山のお金をよこして、何を買えばいいの。使い切れないわ」
「君は、ほんとうに純朴で可愛いよ。今世界では、こんなに多くのお金を使い切れないって言う人は、君一人だけだ」
「そんなはずはないわ。耀根、あなたは随分と変わってしまったのね。全く別人になってしまったわ。まもなく二年近くになろうとしているわ。一度も会っていないんだから、あなたが何をしていたのか想像もつかないわ。とても長く苦しい生活だったのよ。それが突然ある日、一人の金持ちの横柄な夫が私の目の前に現れたのよ」
「奇跡さ、そうだろう？」
趙耀根は、
「そうさ、もし僕が、まだ昔と同じように何も変わっていないとしたら、やはり、昔の君が知っているあの趙耀根さ。僕はとっくに、深圳の街角で飢え死にしていたさ」
と得意げに笑った。

第十四章　二つの新聞記事

（一）

「あなた達は、まるで手品でもしているようだわ。あっと言う間にお金持ちになったのね」
「どうして、金持ちになれたかって？深圳には、毎日、金持ちになるための手品をしている人がいるのさ」
江暁暢（江暁歌の妹）は、
「金持ちになった秘密を教えてくれない？」
としつこく訊いた。

「ねえ、ちょっとでいいから教えてよ」
「洗いざらい、君に教えてやるよ。君が僕達をお手本にして、金持ちになることを願っているよ」
「それなら早く言ってよ。そう人をじらさないでよ」
「じゃ、かいつまんで話をするよ。最初はアルバイトをしたんだけど、時には仕事にさえもありつけない始末で、こうした苦しくて辛い経験が、僕達にある道理を導いてくれたんだ」
実際にはいたって簡単な道理だった。肉体労働に頼っていたのでは、いつまでたっても永遠に大金を稼ぐことはできない。いわゆる、頭脳労働をする者が人を治め、誰よりも抜きんでたいならば、自分の聡明な才能に頼るしかなかった。ある時、彼らは膨大な全国各地のあらゆる新聞を買って帰り、昼夜問わずに、彼らに役立つ情報を片っ端から探し、一～二本の情報をしっかり掴みさえすれば、大きな成功を収める可能性があると知った。
遂に彼らは、広州の新聞紙上で化学工場の広告を見つけた。これは大金を出して化学調合のパテントを買い求めるものだった。また、上海の新聞紙上である情報を見つけた。ある化学工学院の年配の教授は、生涯の研究成果が大きく、しかも多くの化学研究のパテントを持っていて、わが国の化学工業分野のリーダー的存在であった。しかし彼は、貧困と病苦の二重苦に悩まされ、彼の経済状況は、工学院の正門で、茶葉蛋（注22）を売っているおばあさんにも及ばなかったと言われていた。

（注22は、卵を殻のままゆでてから、殻にひびを入れて、味のしみやすいようにし、醤油・八角・茶葉を入れて煮たもの。）

霧のかかった海のように広大な文献や資料の中から、二つの情報をつなぎ合わせた。これは、彼らの半月近い労働の成果であり、この半月間生活していた地下室で食べたものと言えば、豚のモツだった。しかし、彼らが暗闇の世界を脱け出して、再び光明に巡り会った時、自分達は成功の望みがあると予感した。
「この二つの情報があったら、僕達がどうしたか考えてご覧よ」
「わからないわ。私達田舎者だから、直接結論を言ってよ」
「当時、耀根兄貴はこうして僕を試したんだ。『暁鴎、お前はどうしたらいいと思う？』僕は聡明だから、直ぐにプランを出して、建設的な意見を示したんだ。耀根兄貴の考えは、僕より更に完璧だったんだ。僕達は直ぐに行動に移した。先ず電話をして、あの化学工場へ行き、彼らの切なる願いと要求を着実に実行したんだ。その後、直ぐに上海に飛んで、あの年配の教授を捜し出したんだ。耀根兄貴と年配の教授は一通りの話し合いをして、彼と理解し合える友人となり、びた一文仲介費用を要らないことを承諾し、教授がある化学パテントを売ることを代

行したのさ。年配の教授はひどく喜び、五千元であればパテントを譲っても良いと言ったんだ。そこで、僕達は直ぐに行動を起こして、五千元を調達する方法を考えたのさ」
「五千元って少なくないわ」
「そうだ、そうなんだ。英雄も一文に泣くっていう話がある。僕達は当時、小銭にも困っている有様だったんだ。見る間に手持ちの金は、なくなってしまいそうだった。善良な人には天のご加護があるって、誰が知り得ようか。僕達は宗漢と出会ったんだ」
「宗漢って、誰なの？」
「我々、武漢の同郷人さ。当時彼は、深圳でアルバイトをしていて、大企業の社長の補佐をしていたんだ。ある日、彼と社長は、幾ばくかの金を持って仕事に行き、途中で略奪犯に出くわしたんだ。略奪犯はキラキラと光る小刀を持っていて、彼らの小型金庫をすんでの所でひったくるところだったんだ。僕と耀根兄貴が丁度通りかかり、僕達は義侠心に燃えて、勇敢にも略奪犯に挑んだんだ」
江暁歌は、
「小刀を持っていたでしょう！」
とスリリングな物語を聞いているかのように訊ねた。
「小刀を持っていて、どうしたかって？　耀根兄貴は手慣れたもんさ。突進して行って、殴るやら蹴るやら、数人の奴らを追い払ったんだ。社長は僕達に謝礼をしたいようだったが、耀根兄貴は、高尚な品格と固い節操で、敢えて受け取ろうとしなかったんだ。宗漢は、僕達が同郷人であるとわかると、こっそり僕達に注意を促し、深圳には深圳の習わしがあることを話してくれて、僕達は謝礼をもらうことが出来たんだ。僕達はパテントを買うのに五千元必要だったんだ。あの社長がお金をくれるとは思っていなかったし、それに、続けざまに、『申し訳ない、少なくて申し訳ない』と言っていた」
「本当にこの五千元でパテントを買ったの？」
「勿論さ」
「パテントがどうしてお金に替わることが出来るの？」
「簡単なことさ。僕達は飛行機で広州に急いで駆けつけ、パテントをあの化学工場に売ったんだ。契約書に著名した金額は、八万元さ。つまり、四日間で正味七万五千元稼いだことになるんだ。勿論、この四日間は緊張感があり、必死になって働いてくたくたになったよ。僕達はお金を持ってホテルに行き、部屋を取ってまるまる二日間、ぶっ倒れて眠ったよ。わかっただろう」
江暁暢は神のお告げのように聞き、口をポカンと開けたまま、暫く閉じることができなかった。
父親は、
「お前達、よくも闇取引なんてやったな。これは我々がこの一生考えても、ついぞ思いもつかなかったことな

んだ」

と言った。沈鳳宜（江暁歌の母親）は、

「闇取引なんてとても危険だったんじゃないかしら」

と言った。父親は、

「今、経済体制が改革されている。実際に、市場経済に少し戻ろうとしている」

と言った。江暁鴎は、

「どうやら、やっぱり男の方が切れるようだ。今の中国の経済体制は根本的に変わってしまったんだ。闇取引なんて言葉は死語になったのさ」

と父親に対して礼もわきまえずに言った。

（二）

趙耀根は、

「中国は、変わった」

と大勢の客を前にして話をした。

「みんな、ここも変わろうとしているんだ」

趙耀根は、客や友人に盛大なご馳走を振る舞った。寧岸と江暁歌はその場を切り盛りして手伝った。席に着いているのは、張喜の仲間や監獄時代の友人、江暁歌の同僚や友人もいる。

それに、趙耀根の曾ての職場の上司の張書記と李主任も列席している。

趙耀根は話し始めた。

「僕の会社の発展は目覚ましい。業務は多忙を極めている。今、武漢に戻って会社を経営したいと思っている。僕の家族や多くの友人が武漢にいる。僕は長きに渡ってみんなをほったらかしにしてしまう訳にはいかない。趙耀根、この私は恩を知り、人に報いようとする人間だ。僕は、僕の友人達に良い暮らしをしてもらいたいんだ。とりわけ、僕が不遇であった時に、僕を見下さないで、僕を馬鹿にしなかった人達だ」

張書記と李主任は、居ても立ってもいられなくなった。

張喜は、

「耀根兄貴、僕はなんだか神話物語を聞いているようだ。僕はこれが、中国で起こったことであることを信じる勇気がないんだ。昔は、もし上司につるし上げられれば、一生頭が上がらなかったよ。耀根はひどくつるし上げられたんだ。彼は、深圳に向けて出発する時には本当に貧しくて、懐には一銭の金もなかったし、座席にも座れない乗車切符を買って広州に着いた時には、趙耀根の姿は憐れなものだったよ。見る影もなかったんだ。しかし、いつしか二年の歳月が過ぎ、耀根兄貴は故郷に錦を飾ったんだ。以前は考えることすら憚られるような仕事を彼はやってのけたんだ。中国は本当に変わったよ。兄貴、僕達はもう、怖れるものなんて何もないんだ」

と有頂天になって言った。趙耀根は割れるような拍手

の中で、

「今僕は、張喜に僕の会社に来て仕事をすることを正式に招請する。僕は彼の給料が少なくとも現在の五倍になることを、丁重に承諾したよ。僕は張喜が僕の意見を受け入れてくれることを希望する」

と言った。張喜は、

「僕は今承諾したんだ。張書記、李主任、後で僕は辞職願を提出します」

と言った。

みんな歓呼の声を上げて、グラスを合わせた。張書記は立ち上がって、プイと立ち去った。李主任は立ち去りたかったが、また恥ずかしくもあり、萎れてしまって頭を上げる勇気がなかった。

江暁歌は心が晴れ晴れして意気揚々としていた。彼女の目は片時も趙耀根を離すことなくとらえ、この上ない誇りと最高の幸せを感じていた。

（三）

趙耀根の母親は、息子を屋根裏部屋に呼んで、こっそり一通の封筒を渡し、

「私は病院に数回足を運んで、全ての話をまとめたよ。男の子が生まれるようにする先祖伝来の秘伝の処方を手に入れたんだよ。会社に持って行ってしっかり隠しておくんだよ」

と小声で言った。趙耀根は、

「わかったよ。お母さん、苦労かけるな」

と言った。

「耀根、耀虎にも女の子が生まれたよ。本当に困ったもんだ。私は残りの人生はそう長くないから、お前が趙家のために男の子を産んでくれさえすれば、私は安心して死ねるよ。お前のお父さんも冥土で喜んでいるよ。このためなら、どんなに辛くてもどんなに嫌な思いをしても構わない。私はただ、暁歌が産んでくれるかどうかが心配なんだ」

「僕が暁歌を説得するよ。僕の話を聞かない訳にはいかないんだ。それに、僕の今の生活状況はすっかり様子が変わっている。僕は彼女に幸せになってもらいたいんだ。でも、お母さんはどんな風に彼女の世話をしていたんだい。随分と痩せこけてしまったみたいだけど」

「これは私のせいじゃないよ。暁歌は勝手に出て行ったんだからね」

「昔のことを繰り返して言うなよ。これからは、家のまかないをちゃんとしなくちゃ。彼女をもとのような健康的な体にしてくれなきゃね」

「それはお安いご用だよ。彼女が進んでもう一人産んでくれさえすれば、私自ら彼女を菩薩として崇めるよ」

趙耀根は注意深く封筒を肌着のポケットにしまい込ん

で、母親に必勝の合図をした。

（四）

趙家の母親は、大きな器にいっぱいスープを入れて、江暁歌の前まで運んで、

「暁歌、おいで。豚のスペアリブと蓮根入りのスープだよ」

とそっとささやいた。

江暁歌はこれまでこのような接し方をしてもらったことがなかったので、身に余る愛情を受け、非常に驚き喜んだ。

「やはりみんなで、飲みましょうよ」

「みんなの分はあるのよ。あなたは痩せてしまったわ。耀根が私を叱ったんだよ。お前は沢山飲んでおくれ。残してもいいんだよ」

江暁歌は、

「一緒に食べましょうよ。私はこんなふうに食べるのは慣れていないわ」

と、とがめるような眼差しで、趙耀根をチラッと見て言った。趙耀根は、

「暁歌、お母さんは昔のことを申し訳ないと思っているんだ。君がお母さんのことを責めるつもりがないのなら、沢山飲めよ。それにお母さんが君を責めるはずはないさ。耀虎は結婚することになっているんだ。部屋を譲ることは当たり前だよ。職場の宿舎に僕達は住んだことがある。宿舎の条件はなかなか良いよ」

と言った。そして趙耀根は振り返って、

「君達のところはどうなんだい？」

とまた訊ねた。江暁歌は、

「なかなか良いわ」

と答えた。嘉児は、

「お母さんの嘘つき。少しも良くないわ。窓ガラスも壊れているし、冬は凍えて死にそうだわ。幼稚園だって良くないわ。料理の中に虫は入っているし、ご飯のお代わりもないのよ。勇ちゃん（嘉児の友達）はいつも私を叩くわ。それなのにおばあちゃんは私を構ってくれないわ」

と言った。趙耀根は、

「こんなに目茶苦茶なのか」

と言った。嘉児は、

「そんなの目茶苦茶な部類に入らないわ。お母さんは、いつも腐りきったおかずを買って食べているのよ。お母さんはそれを食べて、いつも病気になっていたわ。嘉児を連れて行って遊んでくれる人なんかいないわ」

と言った。江暁歌は、

「嘉児、あなたはどうして小さなカササギのように、

カアカアと不用意に喋るの」

と大声で叱って話をやめさせた。

趙耀根と母親は少しばつが悪そうだった。趙耀根は、

「僕は本当に、君にしっかり埋め合わせをしなくちゃいけないんだ。明日僕は、君のためにスッポンのスープを買ってあげるよ」

と作り笑いを浮かべて言った。

江暁歌は、

「もう全く何てこと言うの。私が大食漢みたいじゃない」

と笑って答えた。

感情が高ぶった嘉児をようやくあやして寝かしつけ、江暁歌はやっとベットに入り、趙耀根と枕を並べた。

「君は、お袋の態度をどう思う？」

「素晴らしいわ。でも良過ぎるくらいよ。良過ぎてなんだか慣れないわ」

「時間が経てば慣れるさ。昔、僕達は貧乏人で、何もかも心配だらけだったんだ。だから、みんなの気持ちもよくなかったのさ。今、僕達は金持ちになった。何もかもうまくいっている。お母さんが君にこうして優しくしているのが僕も嬉しいんだ。ほら、君の顔色は赤くもなく艶もない。僕は、僕達が協力して趙家をもり立てていくことを望んでいるんだ。僕は武漢の会社にも、正式に看板を出したんだ。これから間違いなく、日を追って忙しくなるよ。僕の遠大な計画を遂行するためにも、君が協力してくれることを願っているよ」

「わかったわ。余計なことは言わないし、あなたにとって不利になるようなことはしないわ」

「それは有り難い。良き妻をもったよ」

静かに横になって、趙耀根は話しかけた。

「僕にはまだ、叶わぬ夢がひとつだけあるんだ。男の子がほしいんだ」

江暁歌は、

「あなたは嘉児が嫌いなの？」

と言った。

「勿論好きだよ。僕は嘉児が大好きさ。でも、僕の夢は一男一女なんだ。嘉児に弟がいれば、遊び仲間になるしいいんじゃないか」

「でもね、今わが国の人口は多すぎるわ。国が一人っ子政策を提唱しているんだから、私達もそれに習うべきよ。それに私も子供を産みたくないし、男の子を産める保証なんてないわ。もし女の子だったら、休まずに産み続けるの。耀根、私達は国の政策に背くことなんてできないわ」

趙耀根は、ポケットから二枚の紙を取り出して、江暁歌の目の前においた。

「ほらこれを見ろよ。僕達は国家の政策に背かなくてもいいし、男の子を産めるんだ。君は僕を見くびらない

でくれ。この趙耀根は、これまで準備をしないで戦に臨んだことなんてないんだ」

江暁歌は紙切れを受け取った。よく見ると、この紙は子供を産むノルマと、男の子を産む宮廷の秘方であった。江暁歌は驚いて呆然とした。

「この二枚の紙を手に入れるのは容易じゃなかったんだ。随分と沢山のお金を使ったよ」

「あなたが何を思っているのかちっともわからないわ。医者が嘉児が先天的な知的障害であることを証明したの？この紙は嘉児を呪っているわ」

「これは呪いとは言わないんだ。戦争では敵を欺いても構わないと言っているじゃないか」

「あなたが、男の子が欲しいなんて思いもよらなかったわ」

「暁歌、これまで僕は君に何も要求しなかった。僕は君に栄華を極めて一生楽しんでもらいたいんだ。ただ君に男の子を産んでもらうことを頼んでいるだけじゃないか」

彼は、

「さあ来いよ。子供を作るのに丁度良い時間だ」

と電気を消して言った。江暁歌は、

「あなたのお母さんが、私に良くしてくれるのはこのためだったのね」

と電気をつけて言った。

「年寄りが孫をほしいというのが、間違っているとでも言うのか」

「あなたはお母さんとグルになっているのね」

「そんなことあるはずないよ」

「あなたは娘に誓う勇気があるの」

「ないことはないよ。何かにつけて僕に無理矢理誓わせたいのか。君ももう小娘じゃあるまいし、そんなに形式張るなよ。いいか」

江暁歌は、

「趙耀根、あなたは、私を子供製造機とでも思っているのね。私はあなたがこんなに封建的で、愚かで無知であるなんて思わなかったわ。あなたは先ず、私が子供がほしいと思っているかどうかをどうして考えなかったの。あなたは結婚してからずっと風雨にさらされ、でこぼこ道を歩いてきたのよ。今必要なのは静養することだと考えたことはなかったの？あなたは、私が放送大学をまだ卒業していなくて、夢や社会活動をしたいと思っていることを考えたことがなかったの？まさか、私は平々凡々と一生を過ごさなければならないの？」

と憤懣やるかたなく言った。

「ごめん、謝るよ。僕は君を巻き添えにしていたよ。僕は今、倍増し償っているじゃないか。この趙耀根は、今まで恩義を忘れる人間じゃなかったし、このことは君が一番わかっているはずだ。君には夢と社会活動がある。これは良いことだ。でも、子供を産むことで君の足を引っ張ることになるのか？」

「あなたはやっぱり私をわかっていないわ。趙耀根、あなたに言っておくわ。私はもう絶対子供を産まないわ。産みたければ自分で産めばいいじゃない」

趙耀根は、

「そんな道理があるものか」

と無造作に茶碗を投げつけて言った。

「あなたこそ馬鹿げているわ。これは子供を産む産まないの問題だけじゃないわ。人生観の問題よ。あなたは終始お母さんをえこひいきして、私をおざなりにしてきたじゃない。私達の間には、根本的な矛盾が存在するのよ」

「暁歌、君はなぜ、僕の母親に難癖をつけたがるんだ。君は彼方此方で観音菩薩になって人の同情を買いたいんだ。僕と母親が君にどれだけ申し訳ないことをしたのか、みんなにそう思わせたいんだ。今僕はわかったよ。君は心の狭い女なんだとね。君はどうせ、僕の母親を恨んでいるに過ぎないんじゃないか。君はこれまでずっと母親を恨んでいたんだ。君が二人目の子供を産みたくないのも、母親が生きている間、平穏無事で暮らせないようにしたいからなんだ。母親を百年後でさえも、静かに眠らせることもないんだ。君はどうしてこんなに腹黒いんだ」

「私達は恋愛して十年、結婚して四年余りになるけど、あなたは遂に私に真の評価を下したのね。そうよ、私はとっても腹黒い人間よ。有り難う」

趙耀根は、猛然と椅子をひっくり返した。椅子の背もたれが江暁歌の目尻にぶつかり、江暁歌は目を手で覆った。

嘉児は驚いて目を覚まし、泣き喚いた。江暁歌は目尻の痛さも顧みないで嘉児を抱いた。

趙耀根は嘉児を驚づかみして奪い取り、憤懣やるかたなく、バタンと扉を閉めて出て行った。

（五）

羅桂香は、江暁歌の目尻の青紫色の鬱血した傷を見つけて、親しみを込めて訊いた。

「どうしたの」

江暁歌は、

「何でもないわ。自転車に乗って転んだのよ」

と答えた。羅桂香は、

「あなたは嘘をついているのね。顔に書いてあるわ。表情が自然じゃないもの。趙耀根があなたを虐めたのね」

と言った。

江暁歌は返す言葉がなかった。

「今晩は私の所に泊まりなさいよ。趙耀根をあっと言う目に遭わせてやったらいいのよ。彼に女を馬鹿にする

もんじゃないって教えてあげなさいよ」
江暁歌はためらった。彼女は引っ越したばかりだったので、逃げたくなかった。
「彼に妥協すべきではないわ。あなたをこんな風に殴っておいて、あなたはそれでもまだひとつ屋根の下で暮らすって言うの？あなたは生涯、彼に頭が上がらなくなるわ」
江暁歌は羅桂香の忠告を聞いて、家に帰らない決心をした。彼女は放送大学の宿題を終えて、羅桂香と工場内の改革について遅くまで話し込んでやっと寝た。
眠りにつくと嘉児の夢を見て、驚きのあまり身震いして目を覚まし、もう二度と眠れなくなってしまった。
家を出てから二日目、彼女は嘉児のことが気にかかったが、頑張って家に帰らないことにした。
三日目、趙耀珍が職場まで訪ねてきた。趙耀珍に会って、思いがけなく喜んだが、できるだけ冷淡さを装った。
「嘉児はこの二日間元気かしら？」
「元気よ。ただ、いつもお母さんは、何故家に帰ってこないのと訊くのよ。兄は、あなたがここ数日残業していると言っているわ」
羅桂香は傍らにいて、口を挟んで来た。
「私達のこのボロボロの工場が、間もなく倒産するって言うのに、何が残業よ。あなたはわからないの、それともしらばっくれているの？あなたには義姉の目尻の傷跡が見えないの？」
「まあ、本当に気がつかなかったわ。姉さんはとんだことになったわね。もう少しで目を傷つけるところだったじゃない」
羅桂香は、
「とんだことになったですって？あなたは、あなたのお兄さんに訊いてみたらどうなの？」
と言った。江暁歌は、
「いいの。何でもないわ。ちょっとした傷に過ぎないわ」
と答えた。羅桂香は、
「一人の人間が恥を忍んで重責を担うと言っても限度があるわ。暁歌、あなたはいつもこうじゃない。問題をどうやって解決するの？趙耀珍、あなたは帰って兄さんにこう言いなさいよ。彼自身が迎えに来なければ、あなたの姉さんは家に帰らないわってね」
と怒った。
「兄が姉さんを殴ったの？そんなはずがないでしょう。二人はとっても仲が良いじゃない」
江暁歌は言うに言えず、項垂れているよりほかなかった。
羅桂香は、
「あなたの兄さんて何て奴よ。少しくらいあぶく銭を儲けたからって、身の程知らずだわ。もし江暁歌が、この数年黙々と努めてこなかったら、趙耀根の今はないわ。恩知らずな奴」
と言った。江暁歌は、
「もう十分だわ。あなたは、私と彼の矛盾をわかっていないし、そんなこと言って何になるの」
と言った。羅桂香は、
「あなた達に何の矛盾があるか、私には構ったことじゃないけど、人を殴ってはいけないことだけは、私はわかっているわ。手を出して女房を殴る男なんて、どんな理由があったって許すことはできないわ」
と言った。
聞いている状況は、趙耀珍にとって予想外だった。自分に非があることがわかっているので、羅桂香の罵りを聞くしかなかった。

（十八）

趙耀珍は腹の中が煮えくり返っていた。彼女は張喜に兄の事務所へ連れて行かせた。兄の事務所は趙耀珍の目をくらませた。内装が豪華で風格のある部屋を生まれて初めて見た。趙耀根と江暁鴎が丁度、皮革のソファにもたれて、ひそひそと得体の知れない話をしているようだった。彼女が入って来るのを見ると、趙耀根は頭をもたげて厳しく問いただした。
「お前は、何をしにここへ来たんだ」
趙耀珍も、
「兄さんは良く平気で私に尋ねられるわね。兄さんは、なぜ姉さんをあんなふうに殴ったの。姉さん達の設計事務室の人が、兄さんが自分で姉さんを迎えに来させろって言っていたわ。それに、兄さんのことをさんざん罵ったわ。兄さんは恩知らずな奴と言っていたのよ。私に本当のことを教えてくれないで、姉さんに会いに行かせるなんて、面目丸つぶれよ」
と堰を切ったように話した。
自分の姉が殴られたのを聞いて、江暁鴎は頭が疑念でいっぱいになって、趙耀根を眺めた。
趙耀根はばつが悪くなり、
「暁歌はどう言っていたんだ」
と冷ややかにいうより仕方なかった。
「姉さんは何も言っていなかったわ。羅桂香も本当の話をしてくれないと愚痴をこぼしていたわ。でも、姉さんの目尻に傷ができたのは誰も知っているわ。兄さんもやり過ぎたと思うわ」
「お前も余計な世話を焼くなよ。これは僕とお前の義姉さんの問題だ。わかったよ。もう帰れ」
「嘉児がもし訊いたら、私はどう言ったらいいの？」
「嘉児のお母さんは残業だとでも言えよ」
「私は言えないわ。嘉児に嘘をつきたくないの。兄さ

んが帰ってきて嘉児に言うまで、そのままにしておくわ。いずれにしても、兄さんはみんなの怒りを買っていることを知らせておくわ。公平に見れば、姉さんはとりわけ恥を忍んで重荷も背負って来た人よ。姉さんが、兄さんのせいでとても辛い目に遭っていることがわからないんだわ。兄さんがいなかったときに、義姉さんの暮らしぶりが楽だと思っていたの？兄さんは、お母さんが姉さんに良くしてくれたと思っていたの？兄さんは、姉さんが本当に家を出て、一人で暮らしたいとでも思っているの？」

趙耀根は、

「そんなふうに言うのは、お前達が僕に本当のことを話していないからだ」

と驚いて言った。

「姉さんは、苦しい目に遭っても言わないわよ。私達は話をしたいことがあるから帰るわ。江暁鴎、あなたは姉さんに代わって公平な意見を言うべきよ。損得勘定で人を尊敬してはいけないわよ」

趙耀珍は大手を振ってさっさと立ち去った。

江暁鴎は言葉がつかえて暫く話ができなかった。

「趙耀珍は愚かだとみんなが言っているけど、少しも愚かじゃないよ。なかなか手厳しいことを言うよ」

「随分大人になったよ。でもお前が気にすることじゃないよ。僕の妹は気立てはとっても良いんだ」

「耀根兄貴、兄貴と姉さんはいったいどうなってしまったんだ」

「僕は別に下心があって、彼女を殴ったんじゃないよ。口論したときに手元が狂ったのさ。暁歌は羅桂香の宿舎に住み込んでいてて、ずっと家に帰ろうとしないんだ。こんな事許されるはずないじゃないか」

「僕が兄さん達夫婦のことで、口を出すべきじゃないけれど、でも、・・・」

江暁鴎は項垂れて何も言わなかった。彼はとてもばつが悪く、義兄と姉との板挟みになりとても辛かった。姉も義兄も江暁鴎の敬愛する人達だったので、どちらの肩を持つこともできなかった。

（七）

趙耀珍が会社に来て問いただしたにもかかわらず、趙耀根はやはり江暁歌を迎えに行かなかった。彼は内心、羅桂香の宿舎に江暁歌を暫く泊まらせたかった。逆に、江暁歌は、羅桂香の宿舎に長い間いることがよくないと思っていた。それに娘のことを気にし、夫のことを恋しがっていた。江暁歌がこんなふうに考えていたことを彼はお見通しだった。

江暁歌は、狭い宿舎で羅桂香と重なり合って暮らし苦労していた。彼は、そんな彼女の気持ちを手に取るようにわかっていた。だから彼女が、羅桂香の宿舎にいられないようになったら、彼女を迎えに行き、おとなしく彼について家に帰ってもらいたかった。

趙耀根は成熟した大人の男で、世間を知り尽くし、会社も経営していたので、単純な江暁歌をあしらうのはいともたやすかった。

二日目の夕方、趙耀根は買ったばかりの新車を運転して家に帰り、嘉児を車に乗せて羅桂香のところに駆けつけた。江暁歌は嘉児を見ると、案の定、悲しみのあまりむせび泣き、彼の誤りの言葉を聞くと、直ぐに彼を許す態度を示し、彼について帰ることを承知した。

彼は俯いて羅桂香の説教を受け入れ、彼女に女性としての虚栄心を満足させた。その後で江暁歌のために仮住まいをした礼を言い、直ぐに車を運転して妻子を連れて勝利の凱旋を果たした。

母親は既に料理を用意して、彼らの帰りを待っていた。江暁歌は家に帰ってきたが、胸中の鬱積した気持ちは決して消えるものではなかった。みんな黙々と食事をして、話をする気持ちも沸いてこなかった。耀虎夫婦も直ぐに食事が終わると自分たちの部屋に行ってしまった。

趙耀珍も食べ終わると、直ぐに嘉児をあやしてご飯を食べさせた。食卓には、江暁歌と趙耀根と母親がそれぞれのところに座り冷ややかな表情で誰も取り合おうとしなかった。

母親は、突然ご飯茶碗をテーブルにドンと置いて、

「私が長生きしているのが嫌なんだろう。楽しく暮らすのを諦めるよ。こうして私を苦しめるのは何のためなのさ？」

と言った。

江暁歌は、姑の話を聞かぬふりをして、そそくさと食事を終えると、鞄を背負って外に出て行った。趙耀根も思い切り飯茶碗をドスンとテーブルに置いた。

趙耀根は、

「江暁歌」

と遂に叫んだ。

江暁歌はこの声に、やっと足を止めて振り返って夫を見た。

「僕は君を連れて帰ってきたんだ。君はどうしてこんなふうにふくれっ面になるんだ」

「そんなことないわ。私は図書館に、授業の復習に行くのよ」

「授業の復習に行くなんて、人をごまかすようなことをするなよ。君はやはりふてくされている。何か話があるのなら率直に言えよ」

雰囲気が怪しくなってきた。

江暁歌は、

「あなたは、私に何を言いたいの」

と言った。

「僕はもう一度君に謝るよ。いいだろう。僕は故意ではなく、不注意で君に傷を負わせたんだ。君は彼方此方に言いふらして、針小棒大にする必要なんてないんだ」

「私は彼方此方告げ口なんてしていないし、些細なことを大げさにも言っていないわ」

「まだ言っていないとでも言うのか。羅桂香達が、僕に対して横暴なのはなぜなんだ。今日は、君のお父さんが電話でまるまる一時間も説教したんだ。これは僕達二人の問題だ。誰にも介入してもらいたくないんだ。僕はこれ以上、誰にも教訓じみたことを言ってもらいたくないんだ。わかったか」

「私はお父さんに言っていないし、誰にも知らせていないわ。それに、私のお父さんが説教したって何が悪いの。辛酸をなめた年配の人の話は聞くべきじゃないかしら」

「君は、僕の母親の話を聞いたのか」

「まさか、私があなたのお母さんの言うことを聞くのがこれでも足りないとでも思っているの？」

「君は子供なんてほしくないくせに、何が計画出産だよ。君はわかっているのか？お袋が僕らのためによくしてくれているんだ」

「あなたはやはり何にもわかっていないのね」

江暁歌は、

「あなたに言っておくわ。私は二度と子供を産まないわ。絶対に産むもんですか」

と興奮して言った。

（つづく）

透明な時間（十）

宅見勝弘

八（続き）

【前号までのあらすじ】

草食系銀行といわれた東城銀行と肉食系銀行といわれた西都銀行が合併して、東西銀行が生まれた。

もと東城の赤坂支店で西都出身の熊本支店長が殺された。現場は金庫室で、三つの扉に五つの鍵がかけられた密室であった。（金庫室の格子扉がシリンダー錠で、耐火扉がダイアル錠とシリンダー錠で、支店の通用口が数字錠とシリンダー錠で鍵がかけられていた。三つの鍵は死体の手に握られていた）融資係の竹森が支店長の死体と一緒に金庫室に閉じ込められていた。

死体のポケットには持井建設の融資の資金の流れのメモが入っていた。竹森の指紋がのこっていたが、竹森はおぼえていなかった。

通用口の鍵は、室内のサムターンとハンドルとが連動しており、その仕組みが密室に関係しているのでないか、と竹森は考えた。

通用口のシリンダー錠は、ふつうと逆に反時計まわりで開ける。それに対して、金庫室のシリンダー錠は、耐火扉も格子扉も時計まわりで開ける。

どちらも鍵の歯（ブレードの溝）を真上に向けて、鍵を抜き差しする。しかし、回転の角度をふくめ、方法は違っている。

耐火扉の鍵は三六〇度つまり完全に一回転まわすタイプである。格子扉の鍵は六〇度まわして、また、もとの位置にもどす往復タイプである。どちらも鍵穴から鍵を抜かないと、開け閉めは完了しない。

事件のとき内側から格子のすきまに左手を突っこんで、手首をまげて鍵を開けた。鍵穴の位置は室内からみて右の裏側にあった。

鍵穴の位置を手探りして、歯を真上（十二時）に合わ

せて鍵を差しこんだ。そして、十時のところに回した後に、また十二時にもどして抜いたのであった。

ふりかえって考えると、かなり器用なことをしたことに気付いた。自分が左利きだから、できたのである。右利きであれば、右手を格子扉のすきまに入れても、鍵穴の位置は手の甲の側になるから、無理であった。

金庫室に閉じ込められた竹森は、必死になっていた。シリンダー錠の仕組みなど分かっていなかったが、極限になると、何とか解決できるものであった。

シリンダー錠にも多くの種類があると、あらためて理解した。

密室はシリンダー錠だけでなく、通用口の数字錠（テンキー錠）と金庫室の耐火扉のダイアル錠でも閉じられている。ただし、この二つは中から外に出ることは可能である。

殺人事件がおきたために、三つのシリンダー錠と数字錠とダイアル錠はすべて取り替えられた。事件当時の鍵の仕組みが秘密でなくなり、竹森も知ることができた。

通用口の数字錠はテンキー錠ともいわれるように、0から9までの数字のボタンと「#」と「開」ボタンがついている。

ふだんの開け方は、四桁の暗証番号の数字ボタンを押した後に「開」ボタンを押すだけである。竹森の前の支店の数字錠は正しい番号と間違った番号とで異なったブザー音が鳴るが、赤坂支店の数字錠は音が鳴らない。

数字錠の暗証番号の変更方法も、竹森の知ることになった。取り替えられた新しい数字錠の暗証番号の変更方法とは違うということと、古いタイプなので、他の支店でも同タイプの数字錠はないということであった。

新しい数字錠は、数字が固定のボタンでなく、アトランダムな位置でデジタル表示されるタイプに変わった。

前の数字錠は、「#」と現在の四桁の暗証番号と「#」を押すと、設定変更のモードになる。

「開」「#」「1」で暗証番号変更になり、新しい暗証番号を求める。「開」と新しい暗証番号と「開」を二回繰り返すのである。

初めてだと複雑そうな操作だが、慣れると別に難しいものではない。

事件当時の暗証番号は「1031」であった。トーザイのゴロ合わせである。一時期は都市銀行で初めての倒産のうわさがあった時は「倒産1番」のゴロ合わせと言われた。

憶えやすいので、この暗証番号がよく使われている。

暗証番号は以前に使ったものでも登録できる。

数字錠では暗証番号は何回か前と同じ番号は使えなかった。しかし、赤坂支店の数字錠ではそのような制限はなかった。

同じ暗証番号が繰りかえし使われるのは、竹森も防犯

上よくないと感じていた。事件に巻き込まれてから、このことも妙に心にひっかかっていた。

新しく付け替えた数字錠では、過去三回と同じ暗証番号は使えない仕掛けになっている。

数字錠は中から出るのは自由であり、入るのも暗証番号を知っていれば自由である。そのように考えれば、あまり仕組みに気にする必要がなさそうであるが、どうしても気になったのである。

事件後に数字錠は取り替えられ、暗証番号も替えられた。新しい暗証番号は副支店長が決めたが、「0814」という番号である。

暗証番号はメモすることは禁止されているので、ふつうはゴロ合わせで覚えやすいようにする。自分の誕生日だそうで、誕生日プレゼントをもらいたいのか暗証番号にしたらしかった。自分の都合を最大限に優先する副支店長らしい。

金庫室のダイアル錠も取り替えられたので、事件当時のダイアル錠の開け方も竹森が知ることになった。

ダイアル錠は、郵便受けにある南京錠でなく、円盤が張りついたタイプである。ダイアル錠のことを一般には数字錠とも呼ぶこともあるが、まぎらわしいので、支店では通用口のテンキー錠だけ数字錠と呼んでいる。

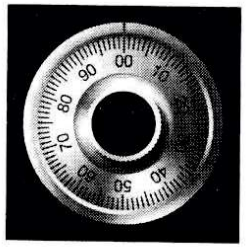
銀行の金庫室の耐火扉は、どこでもシリンダー錠とダイアル錠の二つの組み合わせである。しかし、シリンダー錠とダイアル錠とが別々についているものと、シリンダー錠の鍵穴の上にカバーがあり、そのカバーにダイアル錠がついているものがある。赤坂支店のダイアル錠はシリンダー錠とは別に独立しているものである。

金庫室のダイアル錠は00から99まで目盛のついた円盤が張りついており、その円盤をまわすタイプである。十単位で数字が書いてあり、その間に目盛がある。円盤の土台の一番上に赤い目印がついている。

最初に、時計まわりに四回転以上させて、23に合わせる。それから、反時計まわりに回して、86に三度あわせる。また、時計まわりにして、81を二度あわせる。最後に反時計まわりで37に合わせると、開く仕組みである。

よく86から81に合わせるときに、二回転させてから合わす人がいて、開かないと騒いでいた。実際は一回転と少しで、二度あわせたことになる。

竹森は錠の構造に詳しくなったが、どうやって犯人が密室を作ったのか見当がつかなかった。



九

竹森は仕事が終わった後、ひさしぶりに雅子から食事に誘われた。雅子の知り合いのレストランで、赤坂支店の他の行員に見られる心配はない。

「犯人はどうやって密室を作ったのだろう」

しばらく事件の話は避けていたが、竹森の口から疑問がもれた。

「密室の謎なんて簡単にとけるわ」

雅子は平然と言ってのけた。竹森がだまされたように言葉をつげないでいた。

「単純に考えればいいのよ。支店長の握っていた三つの鍵はサブキー（副鍵）で、メインキー（正鍵）は、通用口を鹿田係長が、耐火扉を鳥居副支店長が、格子扉を半谷課長が持ってたのよ。これで分かるわね」

「それだけでは分からないよ」

竹森は首をふった。

「この三名が共犯であったら、密室に出入りできるわ」

雅子の説明に竹森は少し拍子抜けした。

「古典的なミステリーで、容疑者の全員が犯人というのがあったわ。支店長を殺したい人なんて、赤坂支店の全員じゃないの」

あいかわらず物騒なことを雅子は言う。

「その理屈だと、発見者の君も犯人グループの一人になっちゃうよ」

「本当に私が犯人かもしれないわよ」

雅子は意味ありげにほほ笑んだ。

「実際に殺したいと思っても、実行に移す人なんて、およそ東西銀行マンにはいないよ」

もともと東西銀行員は理性的というよりも、損得勘定で動く人が多い。

東西銀行の支店では、男女とも三年平均で転勤になり、四年以上いる人はほとんどいない。合併前の東城銀行も西都銀行も長年同じ支店の業務をしていた行員の不祥事があったためである。

四月と十月が多いが、それ以外にも毎月のように転勤の辞令がある。というよりも、東と西の銀行員をかき混ぜるように異動のペースを速めている。

どんな嫌な上司でも、同時に転勤したばあいで、長くて三年の我慢である。まして、上司か自分がすでに三年ちかく職場で働いていれば、一緒にいる期間は短く、平均でも一年半の辛抱である。

もっとも、そのような人事ルールなので、殺したいほどの嫌な人間がはびこるという害がある。

「あの三人が共犯のはずはないよ」

理屈の上では三人の共犯であれば可能かもしれないが、三人の性格を知る竹森にはありえないと思った。

鳥居副支店長と半谷課長と鹿田係長は、赤坂支店で最も協調性のない三人であると、竹森は雅子に説明した。

鳥居副支店長は、鍵の管理責任者を為替課長になすりつけようと鍵の管理簿を偽装工作したように、責任転嫁のスペシャリストである。責任転嫁と他人の業績よこどりで副支店長まで出世した人物である。

本人が誰かを利用することがあっても、共同で犯行におよぶことはありえない。また、副支店長に協力しようという人物はこの世にはいないであろう。

半谷課長は、何でも反対課長と呼ばれている。ふだんから営業の融資案件にケチをつけるだけである。あげ足取りだけが天才的で、建設的な仕事は今までにやったことがない。

三人の中では最もまともである鹿田係長は、ハードルの魔術師である。陸上競技のハードル選手だったのでない。銀行のノルマぎりぎりの仕事しかしないのである。

取引先係として営業センスもある方である。キャンペーン期間中でも営業係の中で最も早く目標を達成する。

到達すると、それ以上のセールスをしない。次のキャンペーンに向けて、仕込みを行っているのでなく、ただサボっている。

支店全体の目標が未達成の時も自分の義務は果たしたと協力しない。実力を出しきっていないと言われ、本人も自分はもっと実力があると見せかけている。

そのような性格だから、優秀と評判でも取引先課長より年上で係長のままである。ノルマやキャンペーンと比較的に関係ない赤坂支店に配属された。

事件当日には支店長が出勤するので、支店の近くに待機していた。異常があって、呼ばれると直ぐに出勤した。

鹿田にとって鍵当番として最低限のハードルと判断したからで、けっして仕事熱心だからでない。

三人が組めば、どんな仕事も空中分解して、上手くいかないだろうと、竹森は雅子に説明した。

「それに、課長の格子扉の鍵は使えなかったらしいよ」

事件後の警察の調べで、新たな事実が判明した。

格子扉のシリンダー鍵であるが、半谷課長が持っている正鍵は壊れていた。自宅で日曜大工をしていて何かこじ開ける際に工具かわりに使ったらしい。少し曲がっただけであるが、使い物にならない。

半谷課長は自分が鍵の責任者でなくなるまで、黙って隠しておくつもりだったらしい。副支店長も顔負けの責任のなすりつけ計画であった。

実際に事件前も、格子扉は死体の手に握られていた副鍵の方をだましながら使い続けていたのである。

「鍵を持った三人が共犯というのは、やっぱり無理だね」

竹森はたしなめるような口調になった。

「もしかして、ちょっとでも本気で信じたの。冗談に決まってるじゃないの。でも、他にも解く方法は考えつくと思うわ」

雅子はあいかわらず平然として言った。

十

数日たってから、竹森は取引先に渡す景品を取りに地下の物品庫に行った。

地下には金庫室の他に物品庫が有る。物品庫には鍵がかかっておらず、景品や掃除道具その他の雑品を置いている。八畳ほどの広さがあり、半分が埋まっている。

竹森が扉を開けると、草津が何か振り回していた。それが金属バットであることに竹森は気付いた。

銀行に金属バットが置いているのは不自然のようだが、これには理由がある。十数年前までは防犯用に窓口の裏に備えていたのである。

その後に、銀行強盗にあっても行員は抵抗しないようにと方針が変わり、金属バットは物品庫に片付けられたのである。

物品庫は比較的に広いといえ、金属バットを振り回されると、危険である。

危ないと竹森が思わず声を出した。草津はスイングを止めて、素直に謝った。

物品庫に入ると、つい金属バットで素振りをするというのであった。本人の話では素振りをしていると、ストレス解消になるということであった。

草津は草食系でも肉食系でもなく、ロールキャベツ系と呼ばれている。つまり、外見は草食系であるが、内面は肉食系という意味である。

ほっそりとした外見の草津であるが、旧東城銀行に珍しく体育会系で、六大学の野球部のレギュラーである。

事件当時も、死んだ支店長は平気と言ったり、犯人を捜そうとしたり、と肉食系らしい豪傑な一面をみせた。

草津は独身寮の中庭によく出て、素振りをしている。素振りをしていないときには、リモコンカーで遊んでいた。野球とリモコンが趣味とは妙な組み合わせだと竹森は感じたことがある。

草津は左構えで素振りをしていた。右利きだが、右投げ左打ちである。赤坂支店でソフトボール大会をしたことを竹森は思い出した。

そのソフトボール大会で竹森と同じように左投げ左打ちの選手がいた。それは鹿田係長で、右利きだが左投げ左打ちであった。

草津がバットを振る姿を見て、竹森は事件の凶器を考えなおした。

(凶器は踏み台でなく、金属バットを使ったのでないか)

踏み台が死にいたらしめた凶器としても、その前に金属バットで襲ったのかもしれない、と思った。

かなり重い踏み台を振り回して、竹森と大柄な支店長を同時に倒すというのは、かなり無理がある。

しかし、金属バットなら体力のおとる人物でも犯行が可能である。踏み台を死体の上に載せたのは、偽装のためでないかと、竹森は考えた。

還暦からの考古学（二十五）

桜井茶臼山・壱与・磐余（いわれ）王朝（その6）

中山 喬央（たかひろ）

まえおき

最近ある経済誌にカンボジャ奥地の様子が紹介されていました。その内容は水を自由に使うことの出来る家庭と、そうでない家庭の様子です。自家用の井戸を持ってから6年経過した家庭では、2～3エーカーの畑を耕し、家畜を育て、立派な家を持っており、その家の子供達は「テレビが欲しい」「将来はエンジニアになりたい」という夢が生まれていました。井戸が提供されて1年の家庭の生活はつつましいものですが、「花壇が欲しい」「教科書が欲しい」という要望が出てきています。それに対し、いまだ井戸を持たない五人家族を1人で養い困窮している女性は、将来に対する希望も何も持っていなかった、というものです。

これを読んで思いついた事は、金属文明発生前後の日本列島の状況でした。

青銅器の導入、これにやや遅れながらも鉄器の導入が行われ、いち早く鉱石からの直接製錬が各地で開始された当時の日本列島各地の住民は、自然を利用してより豊かな暮らしを実現する為に様々な手段を開発し、その結果、灌漑稲作は短期間に北海道と沖縄を除く日本列島全土に普及、それと並行して畠の開墾による麦・稗・粟・黍等の穀物栽培も行なわれる様になり、是による顕著な人口増加がもたらされました。其の一方で生活面のゆとり向上は方形周溝墓を始めとする墳墓造成開始による祖先祭祀の顕在化、環濠を持つ集落の普及となり、更に大陸・半島との交流の深い日本海側を中心とする数多の玉造遺跡の出現へと繋がり、それらの活動を裏付けする豊富な木製品の検出等が見られる様になります。

是等を全て支えたのが金属文化の発生だったのです。

ＩＱテストの迷路問題を思い出してください。あれは入口から考えては駄目で、逆に出口から考察する問題なのです。その出口とは、前述の様々な弥生文化現象というものは全て背後に金属文化のバックアップがあったからこそ発生したという事です。そう考えるとすぐ解けます。入口から金属はどのようにして見つけ、又製錬を行ったかと難しく考えるのではなく、出口から考察しますと簡単に正解にたどりつきます。すなわちそこに金属を使った痕跡が見つかったら、例え金属が見つからなくても、鉱石から金属の鍛造・冶金・製錬は実際に行なわれていたのだとする見方です。

世界中がこういう考え方をしているなかで、いつまでたっても、日本の考古学会だけが、相も変らずヒットラーの支持したコッシナ理論、すなわち人種差別理論の渦中から脱け出せず、相も変らず従来の自虐史観を変えておりません。

今回はこの日本考古学会の定説を打破する物的証拠とする為、須玖岡本遺跡出土鏡の鉛同位体比から、前号『まんじ125号』で解説した、鉛同位体比新理論による鉱石使用鉱山の判定を行ないます。これは須玖岡本遺跡が当時の日本列島を代表する弥生遺跡であり、奴国王墓出土鏡は、それを代表する遺物と考えたからです。

須玖岡本遺跡（奴国の王都）とは

福岡県春日市に存在する弥生時代中期の代表的な遺跡です。

明治32年地元の人が家を建てる際、長さ3.3m、幅1.8m重さ4tの大石の下から甕棺が発見され、その内外から30面前後の中国鏡と思われるものや、ガラス璧、銅剣、銅鉾、銅戈及びガラス勾玉、管玉などが見つかりました。

この甕棺墓は副葬品が他の甕棺墓とは異なり、極めてレベルの高いものであると同時に、上に大石を置き、ただ一つ他の甕棺墓から離れて存在しておりましたので奴国王の墓と考えられ、時期は甕棺編年等により『まんじ』118号165頁に述べた通りBC100～BC200年（弥生時代中期後半）と考えておりますので、年代的には後漢の光武帝から金印を賜ったAD57年の王よりは、数世代以上前の王の墓であるということになります。

更に特筆すべきことは、この須玖岡本遺跡の存在した丘陵の北側の斜面から、弥生時代中期としては最高のハイテク工房が次々と見つかっていると言う事です。

先ず須玖永田（えいだ）遺跡です。

此処からは鏡の鋳型、銅を溶かした坩堝など、青銅器生産に関係する、多数の遺物が見つかりました。青銅器を鋳造した工房である掘立柱建物跡も見つかっています。これは日本列島では一番古い青銅器工房址の確認ということになります。

次いで須玖岡本遺跡・坂本地区です。

ここでは青銅器を鋳造した工房跡が幾つも見つかり、鏡や銅矛などの鋳型や坩堝の他、銅滓（どうさい）などが検出されています。

最後に須玖五反田遺跡です。

ここは日本列島で初めて弥生時代のガラス工房跡が見つかったところです。

ガラス勾玉の鋳型や、ガラスが附着した容器、玉を磨いた砥石などガラス製品の製作に使われた多数の遺物が見つかっています。

このように博多湾に注ぐ那珂川流域にあった須玖岡本遺跡は、日本列島と大陸・半島との物資の交流、情報の入手拠点として、丁度ヨーロッパ文化とアジア文化の結節点の役割を担ったトロイアのような存在で、大いに繁栄し、日本列島の中で、いち早く都市国家的なものを創り上げた場所でありました。

出土鏡鉛同位体比による原材料使用鉱山の同定

『考古学雑誌75―4』「福岡県出土青銅器の鉛同位体比」に掲載された一七面の鏡について行ないます。計算方法は下一桁四捨五入です。

38草葉文鏡1

206/204が17.698、207/206が0.8783、208/206が2.1658として発表されておりますので、

先ず17.698×0.8783=15.544―207/204

次に17.698×2.1658=38.330―208/204

を算出し更に検算を次の様に行ないます。

15.544÷17.698=0.8783

38.330÷17.698=2.1658

0.8783と2.1658が一致いたしましたのでOKです。

次にこの17.698・15.544・38.330・0.8783・2.1658の数字に近接する鉱山の鉛同位体比を探します。

201遼寧省・青城子鉱山の17.836・15.598・38.141・0.8745・2.1384と209陝西省・丹鳳鉱山17.622・15.513・38.432・0.8803・2.1809の数値の中にあることが分ります。

先ず201を40％、209を60％で計算しますと、17.708・15.547・38.316・0.8780・2.1639となり相違指数は10・3・14・3・19合計49となりました。次に201を1％づつ下げ、209を1％づつ上げて最少相違指数を算出します。結論としては201×35％、209×65％が17.697・15.543・38.330・0.8783・2.1660で相違指数は1・1・0・0・2合計4と見事に一致しました。この前後201×36、と209×64の組合せは相違指数7、201×34、209×66の組合せは相違指数15ですから、これで201×35と209×65の比率が最少相違指数であることが判明します。

更に前後を算出することは、検算機能も兼ねているということは皆様お気付きの通りです。

39草葉文鏡 2

これも38草葉文鏡1で説明した通りの方法で、五つの指数を算出すると17.678・15.525・38.291・0.8782・2.1660となります。

この数値は38鏡と相違指数が20・19・39・1・2合計81と近接し、同じく201遼寧・青城子が35％、209陝西・丹鳳が65％の比率で混合したものと相違指数が77で完全に一致しました。

この結果38草葉文鏡1と遼寧省・青城子鉱山と陝西省・丹鳳鉱山の鉱石が等しい比率で使用されている事となり、同じ工房で同一時期・同一坩堝で鋳造された可能性があります。

ちなみに201×34、209×66の組合せは相違指数82、201×36、209×64の組合せは相違指数80でした。

40草葉文鏡 3

この鏡の鉛同位体比は、17.743・15.532・38.538・0.8754・2.1720で、特に208/204の数値が前二者とはやや異なっています。

前回まんじ117号で同定を行なった際は、207/204・208/204の数値を算出せず三つの指数だけで行なった為、これは顕在化せず、前二鏡と同じく、遼寧省・青城子鉱山を三分の一と陝西省・丹鳳鉱山の鉱石を三分の二使用としたのですが、今回は五つの指数で相違指数の和をとると、343となってしまい違いが明白になりました。

そこで再検討し、特に208/204の38.538を包含する様、209陝西・丹鳳鉱山の代わりに208陝西・永豊鉱山の17.582・15.514・38.654・0.8824・2.1985を入れました。そして201遼寧・青城子を44％、208陝西・永豊を56％混合し17.694・15.551・38.428・0.8789・2.1721となったものを70％と、『地球化学』1980年9月号「我国顕生代金属鉱床鉛同位素組成特徴及其成因探討」218頁に掲載された7号遼寧鳳城青城子鉛亜鉛鉱206/204・17.86、207/204・15.55、208/204・38.58から算出した17.860・15.551・38.579・0.8707・2.1601を30％の比率で混合した17.744・15.551・38.473・0.8764・2.1685が相違指数1・19・65・10・35合計130で一致しました。

しかし201と208の混合したものと、7号の比率を変えてみても69％と31％の組合せで同じく130、68％と32％、71％と29％の組合せではそれぞれ131と、130以下の相違指数となることはありませんでした。

そこで、今度は日本列島で当時から開発されていた、53神岡・茂住（もずみ）の18.012・15.591・38.600・0.8656・2.1430とJ―6太良（だいら）・秋田の17.554・15.546・

38.220・0.8856・2.1773に着目し、結果として53神岡・茂住を57％、J―6太良・秋田を43％混合した17.815・15.572・38.437・0.8742・2.1577を69％、208永豊・陝西17.582・15.514・38.654・0.8824・2.1985を31％の割合で混合した17.743・15.554・38.504・0.8767・2.1703が相違指数0・22・34・13・17合計86で完全に一致し、中国大陸と日本列島の双方の鉱石が使用されていることが判明しました。

41草葉文鏡 4

鉛同位体比17.709・0.8779・2.1650から17.709・15.547・38.340・0.8779・2.1650と算出されます。

これは201青城子・遼寧を38％、209丹鳳・陝西を62％の割合で混合した17.703・15.545・38.321・0.8781・2.1648が相違指数6・2・19・2・2合計31で完全に一致し、遼寧・陝西両省の鉱石使用ということになります。

42草葉文鏡 5

鉛同位体比は17.703・15.545・38.343・0.8781・2.1659と算出され、これは41草葉文鏡4と相違指数6・2・3・2・9合計22と見事に一致しています。同一工房で同時期に同じ坩堝から鋳造されたものと考える事ができる数値です。

しかし相違指数は41草葉文鏡で最少となった201×38と209×62の組合せが33で最少とならず、201×35、209×65が24で最少となりました。ちなみに其の前後の201×36と209×64の組合せは相違指数25、201×34と209×66の組合せは相違指数29でした。

43草葉文鏡 6

鉛同位体比指数は17.770・15.549・38.426・0.8750・2.1624と算出されました。

この数字には既に計算した53神岡・茂住を53％、J―6太良・秋田を47％の比率で混合した17.797・15.570・38.421・0.8750・2.1591が相違指数27・21・5・0・33合計86で完全に一致しましたので、之に混合する最適の数値を持っていると考えられる、208永豊・陝西の17.582・15.514・38.654・0.8824・2.1985を選びました。結果として相違指数86のものを92％、208永豊・陝西を8％混合した17.780・15.566・38.440・0.8756・2.1623が相違指数10・17・14・6・1合計48で最少となりました。

ちなみに91％と9％のものは相違指数49、93％と7％のものは相違指数50でした。

44蟠螭文鏡

これは鉛同位体比指数が17.605・15.556・38.472・0.8836・2.1853と算出されました。結論として209丹鳳・陝西を80%、207永鳳・陝西を20%の比率で混合した17.604・15.509・38.473・0.8810・2.1854の相違指数1・47・1・26・1合計76と、同じ鉱石をそれぞれ81%と19%の比率で混合した17.605・15.509・38.471・0.8809・2.1852が相違指数0・47・1・27・1合計76で共に最少となりました。その前後は79%21%のものが相違指数82、82%18%のものは相違指数81です。

45星雲鏡

算出された、この鏡の鉛同位対比指数17.760・15.561・38.489・0.8762・2.1672は、前述の43草葉文鏡6の17.770・15.549・38.426・0.8750・2.1624と相違指数は10・12・63・12・48合計145と全体として相似します。

そこで先ず53神岡・茂住61%とJ—6太良・秋田39%の比率で混合した17.833・15.573・38.452・0.8734・2.1564に208永豊・陝西17.582・15.514・38.654・0.8824・2.1985を混合したもので、最少相違指数を求めました。

その結果は53神岡・茂住61%とJ—6太良・秋田を39%混合したものを74%に、208永豊・陝西を26%とした組合せが相違指数8・3・16・5・1合計33と最少になりました。

更に今度は53神岡・茂住とJ—6太良・秋田の混合比率を変えてみました。53神岡・茂住を59%、J—6太良・秋田を41%としたものと、53神岡・茂住を58%、J—6太良・秋田を42%としたものを74%とし、これと208永豊・陝西を26%とした組合せが、何れも相違指数23で最少となり、結果としてこれが正解となりました。

ちなみに、其の前後となる53×57とJ—6×43のもの74%と、永豊・陝西26%の組合せは相違指数26、53×60とJ—6×40を組合せたものを74%と、208永豊・陝西26%のものは相違指数28でした。

46星雲鏡

算出された鉛同位体比指数は17.863・15.562・38.573・0.8712・2.1594です。

これは209丹鳳・陝西を69%、218五部・浙江を31%混合したものと、同じく209を68%、218を32%混合したものが、それぞれ相違指数34を示し最少となりました。

ちなみに209×70と218×30の組合せは相違指数52、209×67とJ—6×40を組合せたものを74%と、208永豊・陝西26%のものは相違指数47でした。

47星雲鏡

算出された鉛同位体比指数は17.857・15.571・38.569・0.8720・2.1599です。

これは46星雲鏡と相違指数6・9・4・8・5合計32と完全に一致し、同一工房で同時期に同じ坩堝から鋳造された可能性があります。

209丹鳳・陝西を70%、218五部・浙江を30%混合したものと、相違指数が42で最少となりました。

ちなみに209×69と218×31の組合せは相違指数46、209×71と218×29の組合せは、相違指数61でした。

48重圏文鏡「明光」

算出された鉛同位体比指数は17.758・15.540・38.324・0.8751・2.1581です。

これは209丹鳳・陝西を65%、210鄧家山・甘粛を35%、及び同じ鉱石をそれぞれ64%36%の比率で混合したものが共に相違指数66で最少となりました。

ちなみに209×66と210×34の組合せは相違指数68、209×63と210×37の組合せは相違指数78となりました。

49重圏清白鏡（青白色の錆入り）

算出された鉛同位体比指数は17.775・15.564・38.481・0.8756・2.1649となりました。

これは209丹鳳・陝西78%と、214福山黄銅鉱・山東18.281・15.586・38.540・0.8526・2.1082を22%混合した17.767・15.529・38.456・0.8742・2.1649が相違指数8・35・25・14・0合計82で最少となりました。

ちなみに209×79と214×21の組合せは相違指数95、209×77と214×23の組合せは、相違指数83でした。

50連弧文清白鏡

鉛同位体比指数は17.607・15.540・38.292・0.8826・2.1748と算出されました。

これは209丹鳳・陝西を77%、217棲霞山・江蘇の17.440・15.527・37.822・0.8903・2.1687を23%混合した17.580・15.516・38.292・0.8826・2.1781が相違指数27・24・0・0・33合計84で最少となりました。

ちなみに209×76と217×24の組合せは、相違指数92、209×78と217×22の組合せは相違指数90でした。

51連弧文清白鏡「恐而」

この鏡の鉛同位対比指数は17.671・15.543・38.358・0.8796・2.1707と算出されました。

209丹鳳・陝西を24%、201青城子・遼寧を76%混合した17.673・15.533・38.362・0.8789・2.1707が相違指数2・10・4・7・0合計23で最少です。

ちなみに209×25と201×75の組合せは相違指数26、209×23と201×77の組合せは、相違指数27でした。

52日光鏡

鉛同位体比指数は17.741・15.554・38.448・0.8767・2.1672と算出されました。

先ず53神岡・茂住を50%、J—6太良・秋田を50%混合した17.783・15.569・38.410・0.8756・2.1602を70%とし、之に209丹鳳・陝西を30%混合したものが相違指数50で、それぞれを71%29%としたものと69%31%としたものの相違指数51よりも低くなりました。そこで今度は53神岡・茂住を51%とし、J—6太良・秋田を49%としたものを70%とし、209を30%としたものと混合してみました。すると相違指数が47と更に低くなりましたので、更に53神岡・茂住を52%としJ—6太良・秋田を48%のものを作りました。

之を70%、209丹鳳・陝西を30%としたものが、鉛同位体比指数17.741・15.552・38.422・0.8767・2.1659で相違指数は0・2・26・0・13合計41と最少を示しました。

ちなみに53×53とJ—6×47のものを七割、209を三割としたものの相違指数は46でした。

53昭明鏡「以」

この鏡の鉛同位体比指数は17.737・15.557・38.420・0.8771・2.1661となり、52日光鏡と相違指数4・3・28・4・11合計50と、同一工房で同一時期に同じ坩堝で鋳造された鏡といっても良い数値を示しました。

これは53神岡・茂住とJ—6太良・秋田を等分に混合したものを71%とし、之に209丹鳳・陝西を29%加えました17.736・15.553・38.416・0.8770・2.1662と相違指数1・4・4・1・1合計11で見事に一致します。

ちなみに53とJ—6×70と209×30の組合せとは相違指数14、53とJ—6×72と209×28とは相違指数12です。

更に53×49とJ—6×51のものを71%とし、209を29%とした組合せを検討してみましたが、相違指数は18でした。

54昭明鏡

この鏡の鉛同位体比指数は17.804・15.579・38.478・0.8750・2.1612と算出されました。

先ず53神岡・茂住とJ—6太良・秋田の組合せだけで検討してみました。

その結果53×54%とJ—6×46%の組合せ、及び53×55%とJ—6×45%の組合せが何れも相違指数91

を示しました。

次に之に209丹鳳・陝西の鉱石を加えてみました。

先ず53×54とJ—6×46と53×55とJ—6×45の何れかを選ばなければなりませんので、それぞれを99%とし、209を1%加えたものを算出してみました。その結果、前者の相違指数が91であったのに対し、後者が87とより低い数値を示しましたので、こちらを選択しました。

結論としては53×55とJ—6×45の組合せを94%、209を6%の比率で混合したものと、それぞれを93%と7%の比率で混合したものが共に相違指数84で最少となりました。

ちなみに其の前後となる92%と8%の組合せは相違指数86、95%と5%の組合せの相違指数は85でした。

この項のまとめ

前回『まんじ』117号では、この甕棺に関係する鏡は全て中国大陸の鉱石を使用していると説明いたしましたが、鉛同位体比新理論により、17面のうち6面に日本列島産の鉱石が使用されていた事が判明いたしました。

その内訳は使用頻度の高い順に申し上げますと、先ず209丹鳳・陝西が14回、次いで日本列島の53神岡・茂住とJ—6太良・秋田がそれぞれ6回、以下中国大陸の201青城子・遼寧が5回、208永豊・陝西が3回、218五部・浙江が2回、207永豊・陝西・210鄧家山・甘粛・214福山黄銅鉱・山東・217棲霞山・江蘇がそれぞれ1回で、中国大陸28回、日本列島12回となりました。

これは何を意味しているのでしょうか。

一つは中国大陸の鉱山開発が東は山東省・江蘇省、南は浙江省、北は遼寧省、西は甘粛省にまで及びますが、主要な原材料供給鉱山は中原の陝西省産が占めていたことを物語っています。

其の一方で日本列島の秋田県・太良(だいら)鉱山と、飛騨神岡の茂住(もずみ)鉱山の鉱石使用が判明したことは、日本列島金属文化発生の上で、極めて重要な意味を持つものだと思います。該期は既に日本列島独自の青銅製品である「銅鐸」の鋳造が開始されており、この使用鉱石鉱山同定とあいまって、より明確に日本列島産鉱石の使用開始を浮かび上がらせる事ができると愚考しております。

見方を変えますと、当時の事が記載されている中国の正史倭・日本伝で後漢の班固（32～92）『前漢書』巻28下・地理志・燕地の条にみえる「楽浪の海中倭人あり、分かれて百余国となる、歳時を以て来り献見すという」とか、同じく『前漢書』地理志・燕地に「東夷は天性柔順、三方の外に異る」とあることからも、戦乱・動乱の絶え間がなかった該期の大陸・半島から、平和で繁栄していた日本列島の玄関口・博多湾岸への金属専門工人の

渡来があり、彼等専門工人達が渡来する際、持参した中原陝西省産の銅を日本列島産のそれと合金して仿製鏡を作ったのだと考えるのが最も整合性があると考えます。

この結果は、須玖岡本遺跡周辺の金属製錬遺跡の検出と相まって、弥生中期、日本列島の玄関口となって、あたかもかのシュリーマンが憧れたトロイアの様に、大陸・半島との交流の玄関口としての役割を果たした博多湾沿岸地域には、列島各地からも様々な原材料が集合し、それらを加工した産物で、大陸・半島からの製品を輸入する一大交易地点となっていた実状を考える事ができます。

また今回、鉛同位体比新理論に基づいて、相違指数による原材料供給鉱山の同定を試みましたが、一七面の鏡全てで、100未満の完全に一致する指数を算出することが出来、尚且つ当時既に日本列島において銅鉱石を冶金・製錬して鏡を鋳造していたことを明らかにし得た事は、あわせてこの鉛同位体比新理論の有用性を実証し得たものともだと愚考してこの項を終ります。

参考文献

石原道博　中国正史日本伝（1）岩波文庫青401—1　2009年

島田貞彦「筑前須玖先史時代遺跡の研究」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』11　1930年

陳毓蔚・毛存考・朱炳泉「我国顕生代金属鉱床鉛同位素組成特徴及其成因探討」『地球化学』1980年

馬淵久夫・平尾良光「東アジア鉛鉱石の鉛同位体比」『考古学雑誌』73—2日本考古学会1987年

馬淵久夫・平尾良光「福岡県出土青銅器の鉛同位体比」『考古学雑誌』75—4日本考古学会1990年

山崎一雄・室住正世「鉛同位体比測定による日本及び中国出土の考古遺物の産地の研究」『考古学美術史の自然科学的研究』考古学と自然科学12号1979年

追伸　—サウダージ—　より　その九

松下壽男

空っ風

だれもがすぐに気がつくように
私は矛盾だらけです
自分で自分を批判して
生きていけなくしています

生きていけなくなりだすと
自分を越えた夢を見て
夢追いかけて生きていく
地に足つかないろくでなしです

毒づいてみても
所詮私もおなじ人
否定ができる訳もない

百も承知でゴリゴリ穿けた
アイデンティティのさ青の穴に
空っ風が吹き荒れる、私の心に

日本近代文学点描　その十

松下壽男

少年小説の誕生

♡兵太郎は久助君のすぐ前に立つと、何もいはないで地平線のあたりをややしばらく眺めてゐた。何ともいへないさびしさうなまなざしで。

久助君はびつくりした。久助君のまへに立つてゐるのは、兵太郎君ではない。見たこともない、さびしい顔つきの少年である。

何といふことか。兵太郎君だと思ひこんで、こんな知らない少年と、じぶんは、半日くらつてゐたのである。

久助君は世界がうらがへしになつたやうに感じた。そしてぼけんとしてゐた。

いつたい、これは誰だらう。じぶんが半日くらつてゐたこの見知らぬ少年は。……

なんだ、やはり兵太郎君ぢやないか。やつぱり相手は、ひごろの仲間の兵太郎君だつた。

さうわかつて久助君はほつとした。

だが、それからの久助君はかう思ふやうになつた。—わたしがよく知つてゐる人間でも、ときにはまるで知らない人間になつてしまふことがあるものだと。そして、わたしがよく知つてゐるのがほんとうのその人なのか、わたしの知らないのがほんとうのその人なのか、わかつたもんぢやない、と。そしてこれは、久助君にとつて、一つの新しい悲しみであつた。

新美南吉が生前自ら手にした唯一の創作童話集が、昭和十七年十月に発行された「おぢいさんのランプ」でした。そこに収められた七編の、丁度真ん中にあって、しかも最も短い「久助君のこと」は、不思議にも、物語性の最も乏しい作品なのです。

優等生の久助君が勉強を済ませて家の外へ出てみると、友達はとうに遊びに出てしまった後だった。それでたまたま出合った兵太郎と夕方まで遊んだというだけのお話なのです。そこには子供の日常の中でも最も話題にならないような半日の出来事が綴られているだけなのです。

南吉は、昭和十六年四月に、早稲田大学新聞に「童話における物語性の喪失」という評論を発表しています。そこでは、「童話はもと—それが文学などという立派な名前で呼ばれなかった時分—話であった。物語であった。」と主張しています。そして童話を正しく評価する方法は、子供の前で読み聞かせることだと考えて、「童話が物語性を再び身につけるには、少しでも話の内容なり文章なりが退屈になればすぐ聴手がごそごそしはじめるので全然作家のひとりよがりを許さない、この厳しい方法が最もよいと思う。」と締めくくっています。

なのに、どうして南吉は、彼にとって唯一無二の童話集の中心に、物語性の乏しい「久助君のこと」を据えたのでしょうか。

それは、彼が描く豊かな物語の真のテーマが、物語性の否定にあることを指し示しているからではないかと、私は考えます。

「権狐」をはじめとして、「世界がうらがえしになったように感じ」る物語が、南吉の童話には多くあります。彼の童話の物語性の豊かさは、その「感じ」のゆえにファンタジーよりもアイロニーを強く感じさせるのです。

そしてなにより「久助君のこと」は、仲間からはぐれた二人が乾草の上で半日じゃれあって過ごしたという変哲もない出来事のなかに、人間存在の不条理を「ぼけん」と浮かび上がらせて見せるのです。

それを可能にしたのは、八紘一宇などというとてつもない物語を紡ぎ出す軍国主義の世相と対峙する、冷徹な眼差しだったのかもしれません。

あるいは、人生という物語を唐突に「ぼけん」と裏返して見せるに違いない、死期を悟った彼自身の悲しみなのかもしれません。

それとも、ただ、悲しい生い立ちを背負った南吉自身の少年期の心理をありのままに描写しただけなのかもしれません。

南吉がこの作品を読み聞かせていたのなら、聴手は当時彼が勤めていた安城高等女学校の生徒たちだったと考えられます。その間彼女らがごそごそしはじめなかったのは、作品の物語性の所為でも、厳しい躾けの所為でもなかったことでしょう。それは、自我に目覚める少年に共感していたからに違いないのです。

私は、南吉自身「少年小説」と呼んでいたこれらの童話を、子供の文化の自覚を表現したものだと考えます。文化の自覚とは、自分とひととの違いの自覚でもあるのです。それは自他渾然とした夢のような幼年期からの悲しい決別にちがいないのです。

編集後記

九月二七日、日本経済新聞の「ナチスの彫像実は隕石、胸に「卍」チベットから持ち帰る」という記事に気がつきました。本誌の題名「まんじ」と関係があると思ったからです。

その内容は1930年代末にナチス・ドイツがチベットから持ち帰った彫像に付き、ドイツやオーストリアの研究チームがアメリカの学術誌に二六日「宇宙から来たブッダ」と名付けて発表したものですが、胸に仏教などで吉祥とされる「卍」が刻まれていた彫像が、モンゴルとロシアの国境付近に一万五千年前に落下したチンガ—隕石破片の片面を削り、仏教の毘沙門天やヒンズー教の神をモデルとして千年以上前に作られたものであるというものでした。

鉄は隕石により人類が其の存在に気が付いたとされ、現在世界中で最も使用されている金属です。

日本列島での近代製鉄は釜石で始まりますが、九月十八日の日本経済新聞では今井敬氏の私の履歴書で1989年に休止した釜石製鉄所最後の高炉の写真が掲載され、次いで翌十九日の同紙文化欄には「釜石掘り尽くせぬ誇り」として小原京蔵氏の記事が掲載されました。

同氏は小原家4代目の鉱山労働者で、採鉱だけでなく、坑道の枠を組む支保、削岩機の保守・修理、レールの点検・整備などを担当、鉱山のことは一人で何でも分るようになったと語っておられます。其の真実な事は、最近同氏に、坑内を案内していただき、経験者でなければこの話はとても出来ないとの感銘を受けたばかりの筆者にとっては良く分りました。

このような底辺を支えるしっかりした人材をいかに多く育てあげるかという事が、現時点での緊急の課題であるという事をあらためて再認識した次第です。（T・N）

まんじ第126号

平成24年11月1日発行（非売）

発行人　三戸岡　道　夫（みとおか　みちお）
編集長　中　山　喬　央（なかやま　たかひろ）
事務局長　鍋　屋　次　郎（なべや　じろう）

（事務局）　〒223-0056　横浜市港北区新吉田東五丁目76-35　太田善朗方
TEL・FAX 045（544）5947
（郵便振替口座）　No.00270-0-64592　加入者名　ま　ん　じ
（印刷製本）　日東印刷株式会社
〒142-0054　東京都品川区西中延2-15-16

表紙の絵について
「暗雲を昇り天珠（てんじゅ）をとる」　　田寺（たでら）怜葦（れいい）　画